
真剣でアイツに恋してる！

モーディス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣でアイツに恋してる！

【Nコード】

N8730L

【作者名】

モーデイス

【あらすじ】

クセのある連中の集まる高校、川神学園。奇人、変人、武人が集まる中で、それに輪をかけて奇抜な者達がい

文字通り最強の女子高生、川神百代。

九鬼財閥の御曹司、九鬼英雄。

葵紋病院の一人息子、葵冬馬。

そして、彼女らに一枚劣るものの、他にも大勢の個性的な生徒が川神学園には在籍していた。この物語の主人公は、そんな『一枚劣る』生徒たちの1人。

凄いけど、川神だから、目立たない！

そんな1人の少年が、一念発起して己の立場を変え、高貴なアノ子と結ばれようと画策していく物語！

第6章、スタートしました！

1 話目『凡人の初陣、の手前』（前書き）

この小説では、細かな格闘描写があったりします。実際に試したのから試していないものまでありますので、信憑性や実現性については多くを追求しないで頂けたらと思います。

また、格闘シーンでは、骨折や出血などの表現を行う場合があります。必要以上に誇張することは極力行いませんが、ご注意ください。

最後に、一人称視点なため、主人公を始めとする語り部の状況によって、一部描写が省かれている場合も出てきます。ご指摘を受け、後付けながらも可能な限り別人の視点で保管していくつもりです。そのあたりのこともご了承ください。

1 話目 『凡人の初陣、の手前』

努力も才能も、ことさら誇示する必要なし。
それは勝利の要素であり、勝利の結果じゃない。
努力も才能も、確かに勝つためには必要だ。
ただ、そんなもんだだけで勝負は決まらない。

技術。

ない奴は話にならん。

相性。

それもあるだろう。

駆け引き。

当然、重要だ。

経験。

言うまでもない。

執念。

あればあるだけいい。

こだわり。

時と場合による。

運。

そんなものは存在しない。

じゃあ、僕はどうだ？

とりあえず、こだわりはなきにしもあらず。

執念は海のように深く、経験は積んできたつもり。

駆け引きは得意でないけども、相性なんぞなんのその。

技術であるなら、でたらめなものを除けば自信は十分に過ぎる。

才能はないとは言わないが、一握りからは漏れるに違いない。

努力に関しては、時間だけなら掛けてきたつもりだ。

戦術も戦略も、個人単位で考えればまず出し抜かれない。

手持ちの札に関しても、わりと多いと自負している。

しかし、最強じゃない。

戦って戦って、遍く全ての相手に勝利すること。

これを最強と言うなら、僕は間違いなく最強じゃない。

一番でないことに甘んじていられるほど安くはないつもりだけど。

もちろん、あの『川神百代』みたいなバケモノに勝てるとも思っ
ちやいない。

でもさ、僕だって武術家の末席を汚してるんだ。

技を試したいし、その上で勝利してみたい。
日の当たる舞台上で、思う存分に力を奮ってみたい。

それに、アレだよ。

手前勝手に七面倒な屁理屈並べてみたけどさ。

結局のところ、僕だって男の子だ。

好きな女の子の前ではりきっちゃうのは、当然だろ？

だから、アレだ。

なんで僕がココに立ってんだらうか？

とか考えちゃダメだ。

最初から自発的に決闘するつもりだったし。

最終的に、やっぱり自分で決闘することを選んだんだし。

後悔先に立たずっていうんだから、やるしかないんだよ。

顔見知りだし恨みのない相手だけど、それでもやらなきゃならん。

それは相手も承知の上だし、だからこそ手抜きはしない。

余分なことを考えれば、技が鈍るに違いない。

技が鈍れば、負けるかもしれない。

それだけは避けなきゃいけない。

敗北の先にあるものなんて、汗と一緒にニガしよっぱいだけだ。

『葵くんには暴力なんて似合わないんだから!』

『あんたみたいなブサイクが行けばいいのよ!』

『どうせ大したことできねえんだからテメエが行けよ!』

なんて声援をくれた、頭悪そうな女性陣の想いに報いねば。

……アイツら、そのうち地獄見せてやる。

というか、僕はブサイクなんだろうか？

鏡と雑誌と見比べても、悪い方じゃないはずなんだけど。

上中下で分けるなら、中の中から中の上くらいだろ。

そういう作りだったはずだし、今のところ変形はしていない。

……いかななあ、やっぱり比べられると悪く見えるんだろっとなあ。

何がム力つくって、あの両性愛者よりも評判低いのが気に障る。

まあ、別にどうでもいいと言いつつおこづ。

もちろん、自分に。

さて、アレだ。

決闘開始まで、まだ10分ちよつとある。

相手に妥協してもらって、着替えの時間を頂戴しててね。

ま、せっかくだし、僕がどうして決闘する羽目になったのか。

その経緯について、少しお聞かせしようか。

今日も今日とて、いつも通りに昼休みはやってくる。

……まあ、今日のこの時間までは、いつも通りの昼休みだった。

だから、いつも通りに食堂で飯を済ませてきた。

教室にいと、どうしても他の連中が目に着くんだよね。

昼間っから寿司の出前を頼むような奴は、もういっそ昼休みだけ校外に行けよ。

去年の頭半年間そう思って、結局は口に出せずに僕が教室を出るようになった。

こういうのにすぐ慣れたあたり、負け犬根性染みついている感じだね。

まあ、そんな僕でも、5限開始前には教室にいなきゃいけない。

特に話すような友達もいないから、文庫本を読んで暇つぶしをする。

ジャンルは様々で、ライトノベルから古典文学まで、

一週間で読破しちゃうから、そこで出費がかさむのがキツイかなあ。

つと、そうだ、今日の昼休みの話だ。

いつも通り僕が本を読んでいると、教室の扉が叩きつけるように開

かれた。

窓際の僕の耳に響くくらいだから、他の人はもっと迷惑してるんじゃないかなあ。

……友達でもない連中のことなんて、どうでもいいけどさ。

「むきいいいいい！」

けたたましくて甲高い、絹を裂いたような女子の声。つまり、この声はアイツだ。

そう思つて、いつも通り無視して本を読んでいた。

相変わらず面白いなあ、『駿河御前試合』は。

好き嫌いは別として、獅子反敵つてカツコいいよね。

「おのれ……あの、あの薄汚いサルめが！」

力強く扉を開いて、騒がしくも地団太踏み踏み。

見えるようにやらんでもいいのになあ、と思いつつ。

なんとなく、その可愛らしい動作をチラ見しちゃう。

まあ、ガン見するわけにもいかないよね。

教室の隅で静かにしてる奴に見られたら、きっと気分悪いだろうし。

と、そうこうしているうちに、そいつは浅黒い肌をした奴のところへ。

まったくもって、いつも通りの展開だ。

アイツがトラブルに巻き込まれると、大抵は同じ奴のところ相談に行く。

まあ、女子に人気らしいから、仕方ないんだろうけどなあ。

「おや、どうかしたのですか？」

「聞いて欲しいのじゃ、葵君！」

そう、また葵のところだ。

悪い奴じゃないけど……僕の心のアイドルに頼られてる。それが、うらやましくて妬ましいんだよね。

こうなってくると、大抵は葵が解決しちまう。

解決できなくても、なんでかアイツの株は下がらない。僕の株なんか、上がった例がないのになあ。

いやまあ、上がったところで面倒なんだろうけどさ。

「おいおい、また賭場で負けたのか？」

「またとはなんじゃ、またとは！ 不覚を取っただけじゃ！」

ハゲ。

井上準は嫌いじゃない。

つか、2・5で数少ない、俺の想いを知ってる男だ。

ある宴で一緒になって以来、互いに妙な親近感が生まれている。

「やーい！何だかんだ言っただけでやんのー！」

「ええい、うるさいうるさいうるさいー！」

電波子ちゃん。

え〜っと……榊原、榊原小雪つつたっけ。

正直どうでもいいから、名前覚えてないんだよなあ。

同じクラスになるの2回目だけど、だからどうってこともないし。

コイツらに限らず、僕は交流のある連中がほとんどいない。

僕は、俗に言うところの『ボツチ』っていうのかなあ。

飯は1人で食っちゃうし、放課も他の人とは過ごさない。

学校終わってからも、高校の連中とは遊びに行かない。

大抵は趣味に時間を……トレーニングジムとかに時間を費やしてる。

休みの日も、トレーニングジム行ったりなんだから、気まぐれでゲ

ーセン行くくらい。

あ、ヤバ。

そついや最近、誰かと遊びに行った記憶がない。

たまくに、ジムの帰りに一緒に飯食うくらいで。

マズイよなあ、これは。

健全な高校生としては、非常にマズイ。

高校の友達1人もいないとか、冗談じゃあない。

本が友達つてもアリって言えばアリだけどさあ。

それは何か違うだろ、現役高校生諸君。

「それで、2 - Fの生徒にひと泡吹かせたいと？」

「2・Fではなく、風間ファミリー……島津にじゃ」

あ、聞き逃した。

まあ、会話の流れと『風間ファミリー』って単語から、何があったか想像はつく。

連中の誰かに、何かは知らないけどコテンパンにのされたんだろうね。

風間ファミリーの連中で、不死川を何かで負かすことができるのは、知的な分野で行けば、直江大和。

肉体的な分野なら、島津か風間か。

女もいたような気がするけど、その辺は詳しくない。

川神と椎名も名前は知っちゃいるが、細かいところまでは興味ないなあ。

「しかし、彼に勝負を仕掛けても、大和君がアドバイスしてしまえますからねえ」

「かといって、若が物理的に勝負しても勝ち目はなし。俺も今日は忙しい」

「きゃはははは！ 相談する相手、間違えたんじゃないの？」

結局あれか。

3人揃って『お断り』って言いたいのか。

ま、どうせいつもの自業自得の自爆ものだったんだろうし。

いちいち手え貸してると、クセになっちゃうしなあ。

実際、クセになってんでしょ。

1年の時から同じクラスだけど、不死川に決まった友人はいない。たまに葵たちと話すけど、それほど親しい様子でもないし。似たような家柄の九鬼とも、常日頃から話してもいない。

僕よりはポジティブだけど、不死川も友達がいなくてわけだ。

「ええい、誰かおらんのか！ あの山猿を倒せる奴は！」

山猿ねえ。

島津……ガクトくんも悪く言われたもんだ。

体格からして、せめてゴリラと呼んでやるべきだと思っただけど。

あ、言い訳がましいけど、もちろん嫌味じゃないよ？

190cm近い身長で筋肉質なんて、うらやましい限りじゃん。

まあ、どうでもいいや。

どうせ誰も、不死川の相手なんてしないだろうし。

権力持ってなかったら、ただのわがままな小娘だもんなあ。

別に仲がいいわけでもないし。

だから僕は、手を挙げてやった。
読みかけの本から目をそらさず、まるで多数決に参加しているみたいに。

どうでもいいからね。

不死川が困るうが、不死川が助かるうが。

どうでもいいから、僕が手を貸してやってもイイでしょ？

そういう風に思って、不死川の肩代わりをしてあげることにした。

そこで、一瞬どころか、数秒クラスが静まった。

しゅん、って擬音が似合いそう。

僕がクラスメイトに手を貸すのが、そんなに不思議だっていうのかなあ？

まあ、不思議だと思っても、ちょっとは遠慮しろよ。

……その、みんなで揃って、僕の行動に引いたりするの。

「おい、港。此方をからかっておるのか？」

「いや、からかってるわけでもないんだけど」

うわ睨まれた。

心のアイドルに睨まれるとか、こういうプレイだよ。

あ、そっか。

口元がニヤケてるのかなあ。

あんな顔をするってことは、きっとそくに違いない。

適当なこと言って、ごまかしてみるか。

「ほら、たまには羽目をはずしたいと思ってねえ」

は？って顔すんじゃない。

あゝあゝ、可愛い顔が台無し……いや、これはこれでいい。
脳味噌にインプットして。」

と、それはそれとして。

どうもきな臭い奴が来たと思つたら、仲村だった。

顔見知りってわけじゃないけど、よく名前は覚えてる。

去年の自己紹介の時に『趣味は読書です』って言った僕を笑ったから。」

機会があつたら捻ろうと思つてる奴の優先順位としては、学園内で
現在No.1。

そんな仲村が、わざわざ座ってる僕の前にまできて威嚇するわけだ。

「お前がやるくらいなら、俺がやってやるよ」

僕の心のアイドルを奪うつもりか！
なぐんで、そんな気がないのは分かってるよ。
もしそうだったら、ここで心を砕いとかないとね。

仲村……仲村ねえ。

うん、ケンカがそこそ強いよね。
テニス部所属で基礎体力もバツチリ。
ガクトくと勝負すれば、多分だけど、結構イイところまでいくかも。
まあ、無事じゃ済まないだろうし、最後にゃ負けるだろうけど。

でさあ。

教室のみんな、何が面白いのかな？
僕みたいな物静かな奴が、武力で決闘しようってことか。
それとも、仲村ごときが僕……俺よりも強いつて誇示してることか。
一体どっちが面白くて、あんな風にクスクス笑ってんだ？
笑ってないの、葵と井上だけじゃん。

「やめとけって。山猿にのされたら、恥ずかしくて学校来れなくなるぞ」

どの口がそんなこと言ってるのかなあ。
と思ったら、俺……僕の口だったりするミステリー！。
ダメだなあ、最近イラっとする回数が増えてきてんじゃん。
自制しなきゃ、余計なトラブルを招きかねないしね。

ほら、今みたいに、クラスメイトに胸倉掴まれちゃったりとか。
こういうトラブルは極力避けたいんだよ。

「おい、港。お前さ、なに調子に乗ってんの？」

……お、笑いがランクアップした。

これはつまり、僕の予想通りだったわけだね。

いやあ、安心した安心した。

たまには前後不覚になって無茶するのもいいかもしれないなあ。

仲村、やっぱりバカだ。

実力の知れない相手の胸倉掴む奴なんかいねえよ。

少なくとも、俺の通ってるジムにはいねえわ。

仲村は、左手で僕の胸倉を掴んでる。

イスに座っている僕の胸倉を、絞り上げるように左手で。

だから僕は、余裕を持って、本を置きながらゆっくり立ち上がる。

素早く立ち上がるうとする、きつと殴りかかってくるから。

だから、反撃しませんよ、と行動で示す。

もちろん、そんなことはない。

ブラフだよ、ブラフ。

仲村の左手は、手の甲が下を向いている。

まあ、絞り上げるみたいにして胸倉掴んでるわけだ。

結構な力が入ってて、つまり、それだけ掴んでる手に意識を集中してる。

となると、話は簡単だ。

仲村が掴んでる襟を、放されなければいい。

まあ、それも、ずっと掴ませておく必要はない。

僕が仲村を地面に叩きつけるまでの、ほんの2秒もあればいい。

仲村の左襟を、左腕の上に行くようにして右手で掴む。

僕の右腕が上、仲村の左腕が下になった。

柔道で言うところの、ケンカ四つみたいな形だね。

それで、掴んだ右手で、仲村を右側に引っ張る。

僕の方が遥かにパワーがあるし、仲村も油断してた。

おかげさまで、仲村は思わず左足に体重を乗せて踏ん張ろうとする。まあ、その踏ん張ろうとした足を、小外刈りみたいにして引っかける。

あとはもう、簡単も簡単。

一緒に横に倒れ込むみたいにして、仲村も地面に倒す。

で、地面にぶつかり慣れてない仲村の上に、すぐに馬乗りになる。

あ、馬乗りって言い方は、ちょっとカッコ悪いか。

マウントポジションだよ、マウントポジション。

とにかく、マウントポジションを素早くとって、上から見下ろした。

「で、このまま意識飛ぶまで殴られる？」

それとも、利き腕折った方が分かってくれるかなあ？」

いじわるだよ、僕。

もう分かってくれてるはずなのに。

最後まで相手の心を折りたいてるのは、性根が腐ってるのかなあ。

……まあ、腐ってるなら腐ってるでいいか。

腐ってたところで、いちいち直そうとか思わないし。

「テメエ、上取ったくらいで」

生意気なこと言うから、軽い掌打を1発。

鼻血がチョロっと出るかでないかの、それくらいの威力の。

だって、今の発言はかなりムカつくじゃん。

格闘技の素人がマウント取られたら、もう終わりなんだから。

上取ったくらいで、なんて言い方はNGだ。

だから、1発だけで止めてやらないことにした。

仲村が睨むから、もう1発。

まだ睨むから、2発目。

睨むのやめない、3発目。

手を掴もうとしたから、4発、5発、6発目。

まだ抵抗しようとするから、7、8、9、10。

11、12、13、14、15、16、17、18。

そうやって掌打を落とすうちに、嫌がって体を捻じった。

元々仰向けだったから、今はうつ伏せになっている。

ホント、仲村って無知だよ。

うつ伏せになっただくらいで、僕は攻撃を止めないし。

なにより、僕がわざわざうつ伏せになるように仕組んだんだから。

そういうわけで、掌打のカウントをリセットする。
後頭部と鼓膜に散らして、カウント再開。

1、2、3は後頭部に、4、5、6は鼓膜を狙って。

それで、ちょうど6発目で、仲村の首ががら空きになった。

そこに左腕を滑り込ませて、V字にして首をロック。

ロックしようとしたんだけど……アゴを引いて防がれそうになった。
テクニックとかじゃなくて、本能なんだろうけど。

まあ、逃がしてやるつもりは少しもない。

空いてる右腕で、仲村の鼻を下から擦り上げる。

あたりまえだけど、鼻の下から、腕を使って鼻を削ぐ感じで。
そうするとき、すつごく痛いんだよ。

痛みから逃れたくて、思わずアゴがあがっちゃうくらい。

そうやって上がったアゴの下に、僕の左腕が滑りこんでいく。

総合格闘技とかでよく見る、スリーパーホールドって技だ。

どれくらい持つか楽しみにしながら、僕はグツと力を込めた。
力を入れた直後から、カウントを開始する。

……でも、期待外れな結果だった。

カウントが2に入る直前に、仲村の全身の力が抜けた。

それはつまり、2秒もせずに仲村が落ちたってことだった。

うつぶせのまま失神した仲村の上からどいて、ゆっくり立ち上がった。
て。

クラスを見回すと、クラスメイトが誰も笑っていないのが分かった。

やっぱり、仲村が僕に無謀な勝負を挑んだのがおかしかったんだろ
うね。
だから、予想通りに仲村が負けたから、誰も笑わなくなったんだ。
興味がないんだろうね、終わったことには。

「まあ、ほら、たまには羽目外したいんだよ」

誰も僕に文句を言わない。
呆れ顔だったり、目を逸らしたり。
表情はともかく、僕の熱意が伝わってよかった。
まだ反対があるようだったら、同じこと何回もしなきゃいけないかっ
たよ。

僕に挑む奴がいる限り、何度も何度も。

とにかく、まあ、アレだ。
こうして肩慣らしも済んだところで。
この日の決闘が、僕、『ミナト港 ミチロ三千尋』の初陣だったわけだ。

1 話目 『凡人の初陣』の手前（後書き）

こんな感じの小説です。

長々と続いています。が、よろしければ是非読んでやってください。

2話目『凡人のハレ舞台』

はい、回想終了。

気を取り直して、目の前の課題に取り組みますか。

目の前の相手は、学生服を着て腕組みしてる。

身長は、190cmくらい。

体重は、まあ、軽く100kgオーバーかな。

脂肪じゃなくて、服の上から分かるくらいの筋肉質だ。

あと、顔は悪くないんだろうけど……性欲が顔に浮き出てる。

具体的には、女の子がビビりそうなくらいに。

こういうときは、同じジムに通うジム仲間として言うべきなんだろうか？

……まあ、僕の方が先に彼女ができたら、そのときには教えてあげよう。

「すまんね、ガクトくん。ちょっと手は抜けないんだよ」

「なあに、気にすんな」

空手を着て、黒帯を締めてる僕。

そんな僕を見ても、ガクトくんは余裕のある笑みを浮かべてた。空手の有段者が、手を抜かないって言ってるのに。

ガクトくんは嫌いじゃないけど、ちよつとカチンとはくる。格闘技やってる奴を、舐めてるんじゃないだろうか？

「どうせ、俺様に秒殺されるんだからな」

自信たっぷり、そんなことを言いやがった。

うん、それはつまり、舐めてるんだろうね。

……まあ、舐めてくれるなら、それはそれで結構なんだけど。それが油断になって、僕の勝率が上がるだけだから。

「正直、君の自信がうらやましいよ」

本心を隠して、それだけのことを告げた。

空手着姿の僕と、制服姿のガクトくん。

なんというか、ガクトくんのせいでちよつとしまらない。

文句言っても仕方ないけど、せめて柔道着とか着て欲しかった。つと、いけないいけない。

集中集中、クールダウンだ、クールダウン。

しかし、ガクトくんの方が体つきはイイ。

ジムに行ってる頻度の違いもあるけど、これも才能の違いかなあ。

まあ、いけるかもって思われても仕方ないよね。

身長差は10cmくらいで、体重差は最低でも20kg以上。

格闘技経験は天地の差があるけど、ガクトくんは喧嘩慣れしてる。

川神先輩とかに殴られても、ケロッとしてるのを何度も見たことがある。

手加減してもらってるんだらうけど、それでも人が吹っ飛ぶほどの攻撃だ。

それを喰らって平然としてるのは、明らかに普通の防御力じゃない。

つまり、僕のガクトくんに対する評価は。

力任せだけど、決して弱くはないタイプってことになる。

こういう奴が、僕にとっては一番戦いやすい。

アドバンテージは3つ。

恐らくは、相手の攻撃が単調なこと。

多分だけど、相手が蹴りを使ってくる確率が低いこと。

それでもって、相手が僕の持ち札を全て知らないこと。

デイスアドバンテージは4つ。

相手は打たれ強い。

相手の方がリーチが長い。

僕には、相手の戦法が分からないこと。

ガクトくんが、僕の手札を1つ……空手をやっていたと知っていること。

……まあ、勝てる。

あ、一応ルールくらいは説明しよう。

2分3ラウンドの、判定なしの時間切れ〓引き分け。
オープンフィンガーグローブの着用と、武器になる道具の使用の禁止。

目潰し、喉突き、金的蹴り、噛み付き、脊椎への攻撃の禁止。

ダウン後にカウント5で立ち上がれない、戦闘続行不可と審判が判断したら敗北。

ギブアップもありで、明らかに戦意を喪失している場合などはTK
O扱いで敗北。

以上が本決闘でのルールだ。

別に、珍しいルールでもない。

格闘系サークルの連中同士が、たま〜にこのルールでやってるし。

だから、斬新でも目新しくもなくって。

おまけにネームバリューの微妙な2人だから、観戦者の数もそこそこ。

しかし、穴のあるルールだよね。

使える技が、まだまだあるじゃん。

耳に指突っ込んだりだとか、耳を引きちぎったりとか。

ギブアップされる前に腕を折ったら、どうするつもりかなあ？
まあ、やってもよさそうな相手とやることになったら、そのときに
やればいいか。

「両者、前へ！」

この爺さん、いつも思うけど大丈夫なのかなあ。
こんなに力んで声あげると、血管がプツツといきそうな気がしてな
らんね。
いや、いかんいかん。
集中集中、勝負に集中だ。

「2・F、島津 岳人！」

「2・S、港 三千尋」

まったく、ガクトくんは元気がいい。
これから1ラウンド目で負けるっていうのに。

「では……はじめ！」

歳くっても、声が出るヤツは出るもんなんだなあ。
そんなどうでもいいことを僕が考えている中で、初陣の幕は開く。

ガクトくんは、彼の性格からは考え辛い戦法をとってきた。

待っている。

こちらから仕掛けてくるのを、待っている。

一応、ファイティングポーズっぽい構え。

顔面守ってるってことは、一撃KOを避けるため。

口では秒殺とか言ってるクセに、きっちり勝ちに来てる。

まあ、僕も似たような構えだけどね。

軽く握った両の拳を顎の近くに据えておいて、足は肩幅くらいに開いて。

右利きだから、左半身を相手に向けるようにして。

ガクトくんが正面向いて構えてるから、そういうところも違うか。

僕の構えは、簡単に言っちゃえば『オーソドックススタイル』っやツ。

キックボクシングとかの試合見ると、大体はこういう構えなんじゃないかなあ。

でも、ガクトくんがそういう構えをするってことは、誰かが知って

たんだろうね。

昔、僕がフルコンタクト空手やってたって。

僕はガクトくんに『空手をやっている』としか言っていない。

寸止め……伝統派空手かも知れないのに、どうして側頭部のガードに注意するのか？

それは、僕の空手がフルコンタクト空手だって知ったからだ。

フルコンタクト空手では、顔面への突きが禁止されている。

その代わりに、近い間合いでの攻撃やコンビネーションが発達した。発達したんだけど、世間の評価は厳しい。

『立ち技格闘技最強決定戦』みたいな奴じゃ、勝つ方が少ないし。

だからって弱いとは言わないけど、顔面の、特に直線的な攻防は不得手だ。

だから、わざわざ即頭部に注意してるんだろうなあ。

上段回し蹴りを警戒して、一撃で倒されないように。

上段前蹴りがこないって踏んでるから、ああいうガードが成立する。

僕の昔を知ってるから、そういうマネを平気で出来る。

あゝあ、忌々しい忌々しい。

人様の嫌な過去ほじくり出さないでほしいなあ。

吐き気がするほどに思い出したくないんだから。

でも、これで僕……俺の勝ちが決まった。

俺が得意だったのは、ローキックと膝と肘と突きに頼った組手。変則蹴りとかも得意だったけど、試合ではそんなに使っていない。

とにかく、まあ、今も同じ手を得意としている……とか思ってるんだろうな。

実際、そういう技の組み立て方が得意だったけどよ。

分かってるんだよ、そのガラ空きの腹が誘いだって。そのガラ空きの脚も、俺の蹴りを誘ってるんだろ？

それでもって、誘いに乗ろうが乗るまいが、手があるんだよな？

誘いに乗ったら、ほぼ同時にカウンター。

もしくは、掴んでくるだろ。

タックルっていうのもあるかもしれない。

島津も、なんだかんだいって動きが鈍くはないはず。

誘いに乗らなかつたら、それはそれで先手が取れるもんな。

先手を取ったら、上手く掴みにまで持っていくつもりだったんだろ。

中途半端な間合いに立たず、長いリーチとパワーを生かす。

結局、捕まえるって戦法を取るつもりなんだらう？

じゃあ、やっぱり俺の勝ちだ。

俺は、あからさまに姿勢を低くした。

先ほどまでの、フルコンタクト空手丸出しのスタイルから。

ほら、戸惑うだろ？

どうしていいか、考えちゃうだろ？

そう、考えてくれ。

困惑で動けない、策を練り直そうとしてしまう。
だから、俺が付け入るだけの隙ができる。

タツクル、に見えないこともない動きで島津に急接近する。
構えた時よりも更に低く、島津の膝を狙っているかのように。
間を外し、心の隙間を突き、しかも半端な速度で動いた。

ダメだろ、島津。

そんな風に、上から覆いかぶさるうとしちゃ。

確かにガブるのは有効だけど、それはタツクルに対してだ。
俺の出そうとしている技は、タツクルじゃない。
だから、ガブっても防げやしない。

俺は、向かってくる島津の両手のうち、右手を選んだ。
タツクルかと思った？

違うんだよ、島津。

初めから、スライディング気味に懐に入りたかったんだよ。

それで、俺が下、お前が上になるよな。

更に言えば、お前の右腕には、もう俺の左足がフックされてる。
あとは、ほら、そのまま引き込めば……。

「あだだだだだ！ ギブ！ ギブアップ！」

ほら、極まった。

島津が上、俺が下。

お互いうつ伏せになった状態で、俺は島津の右腕に十字固めを極めている。

『引き込み裏十字固め』って言えばいいのか？
ま、そんな感じの技が、完璧に極まった。

「そこまで！」

その声を聞いて、俺は島津の右腕への拘束を解いてやった。元から怪我させるつもりもなかったし、ちょうどいい。無理に粘ったら、そのままへし折るつもりだったからな。

「勝者、港ミチヒロ！」

爺さんが、先ほどよりも一層大きな声で宣言した。

……あ、やっぱり近くで聞くとウルセエわ。

で、試合後のみんなの反応はっていうと。

拍手、は大して起きなかった。

一昔前のゴルフの観客かよって具合だ。

まあ、全然かまわねえけどさ。

俺は……僕は、それほど人気者になろうってわけでもないし。ぼちぼち、ぼちぼち楽しい生活があればいいのさ。

それと、そこそこ遊べる敵がいればね。

今回は、ちよつと加減しすぎちゃったしなあ。

……ガクトくんには、肉でも奢って謝るところ。

と、僕の視界に飛び込んでくるバンダナ頭。

この学校でバンダナしてる奴なんて、僕は1人しか知らない。

「待て！ 今度は俺が相手だ！」

威勢良く叫んだのは、風間翔一。

風間ファミリーとか言うグループのリーダー格。

つまりは、面倒くさい相手に目を付けられたってことだ。

でも、風間も大概バカだよなあ。

手の内見せた直後に戦うわけないでしょ。

「勝ち逃げは許さねえぞ！」

なーんて言ってるけどさ。
当初の目的は果たしたし、何より勝ったんだ。
誰からも文句言われる筋合いはないし、他にも視線を感じるから。
ま、今日はこんなところだよな。
遠慮なく勝ち逃げさせてもらおう。

「はいはい、そのうち相手してあげるよ」

そうさ、今日は勝ち逃げでいい。

2-Sの体面も保たれたし、僕の株が急降下することもないだろうし。

オマケに、風間が釣れたみたいだし。

風間が釣れたってことは、風間ファミリー全体が敵に回る時が来るかもしれない。

でも、あのグループの半分は、妙なところで常識人だ。

よっぽどのがない限り、正攻法で仕返しが待ってるくらいかなあ。

……いや、ガクトくんがどうでもいいって言ったら、そこまですでもでも。

今日の僕を見て、興味を持った連中がいるんじゃないか。
異性としてではなく、対戦相手としてだけ。
それでも、願ったり叶ったりだ。

さあ、明日からどうなるかな？

少なくとも、今日よりは面白いんだろうか？

とにかくまあ、これが僕の……俺の初陣だ。

3 話目 『恋は盲目』

決闘が終わって、そんで次の日、金曜日。
今朝に至るまで、僕の身に変わったことは起こってない。
だからこそ、僕の精神的疲労が重なって、睡眠もロクに取れなかつた。

あのあと、よく考えたんだよ。
例の風間ファミリーって、仲間意識が凄く強いグループだったってことは、仲間が公衆の面前で恥をかかされたとして。
報復に来ないと言い切れないんじゃないだろうか、とかね。

そついうわけで、家に帰ったら窓ガラスや郵便受けを速攻で確認した。

玄関の扉を開くときも細心の注意を払って、部屋の中を舐めるように見回す。

かなり前に買った、盗聴器や盗撮カメラを発見する機械も使ったけど、異常ナシ。

で、寝る前に、防犯ブザーで作った自作のビービートラップを設置。目覚ましも1時間早く設定して、ランニングはいつもと違うコースを使用。

登校するときも、より早くにアパートを出て、わざわざ遠回りして。道行く人々の1人1人に警戒して、襲われてもすぐに反撃できるように身構えた。

そのせいで、学校に着くころには、僕の精神力と集中力はピークを過ぎてた。

栄養ドリンク飲んだりしてみたけど、疲れがちよつと取れただけ。夜から朝にかけて使い果たした集中力は、決して戻ってこなかった。

つまり、その点に関しては僕の見込み違いだった。

風間ファミリーの連中は、仲間意識は強くても陰険じゃないらしい。大抵のそういう連中は、分かち合った痛みを倍増させて恨みを募らせるもんだけど。

まあ、今回のことが大したことないってのもあったのか、僕の身に危険はなかった。

……今のところはって言わなきゃならないのが、僕の悲しいところだよ。

ま、ちよつと寝不足気味だけど、気にするほどでもないね。

コツチに転居してきたときは、2カ月くらいこんな感じだったんだから。

新しい環境に慣れていくことを考えたら、これくらいなんてことない。

さあ、気を取り直して、いつも通りに過ごそうじゃないか。

いつも通り一番に教室に来た僕は、いつものように復習を始める。学校が終わってから勉強する時間がないから、こうでもしないと成績が伸びない。

いや、伸びなくてもいいんだけど、維持さえままならないんだよなあ。

Sクラスに残るための最低条件は、定期テストで上位50番以上。こんな勉強法でも30番そこそこには入れるけど、勉強しなくちゃそれも無理。

世の中って、努力をしなくちゃ、結果が出ないようにできてるからね。

さ、それはさておき、時間がもつたいたいから復習を始める。

領域のところは授業で一辺通りやったから、指数対数の確認でもしておこうか。

参考書の隣に使いなれたノートを開いて、さて、最初からやっていこう。

そう思ったときに、不意に教室の扉が開かれた。

不死川だった。

この1年ちよつとの間、こんなに早く登校してきたことはないけど。間違いなく、不死川だった。

横目でチラ見してから、僕はわざと教科書に視線を落とす。

だって、なに話していいか全然わかんないし。

昨日の今日で関係が変わるなんて、ゲームや漫画じゃないんだから。そういうのに期待して、変な失敗をしたくないし。ここは無茶せず、保守的に行こうと決心する。

ぶにっとした感触のシャープペンが、僕の意識を集中させて。さあ、と意気込んで問題を解き始めるために脳味噌を動かした。

「おお、おはよう」

「……おはよ」

ダメだった。

今の一声で、僕の集中力が丸っと不死川に向いちゃった。

あー、クソ！ 思春期じゃなきゃ、もうちょっと我慢できるのに！

ていうか、不死川も『あ、奇遇だね！』みたいな雰囲気を通そうとするな。

いくら僕が思春期だからって、そんなことは通らないぞ。

昨日、そのまま着替えて帰った僕に対して、何か含みがあると見たじゃないと、朝の7時前から学校に来るとかありえない。

ってことで、不死川が何かしてくるまで行動を起こさないぞ！

今日の僕は、いつになく受動的で保守的だ！

と、不死川はわざわざ僕の前に立った。

いや、僕の前っていつても、ちょっとは距離がある。

不死川が立ってるのは教室の前の方で、僕が座ってるのは真ん中の
チヨイ後ろ。

関の並んでる感覚で考えると、だいたい3つ分くらいかなあ。
それくらい距離を作っておいて、何か言いにくそうにしている。
何か伝えたいことがあると勘ぐった僕は、不死川が何か言うのを待
つてみた。

……1分が経って、ようやく口を開く不死川。
まあ、僕が耳にした内容は、存外素直なもんだった。

「しかし、昨日は助かった。礼を言うぞ」

指をモジモジ絡ませながら、少し目をそらして言う……か。
どうやら、僕の脳髓のくすぐり方を心得ていらっしやるようだね。
その大和撫子的な外観と雰囲気から繰り出される『恥じらい』とい
う名の最終兵器。

理性には自信のある僕だけど、ただ一撃で理性にヒビが入った。
まあ、ヒビが入っただけで、暴走するほどの根性はないんだけどさ。
は、ともかくとして。

なるほど、不死川は案外律義だったわけだ。
普段から高圧的に振舞ってるもんだから、礼儀のない子だって勘違
いしてたかも。

まあ、よく考えれば不自然じゃない。
不死川家といえば、名家もいいとこの名家。
礼儀作法については細かいに違いない。
綾小路だって細かいんだから、きつとそうだ。

それでも、不死川の気遣いも身に染みてくる。

普段の様子からして、自分の手柄のように言い散らかすって線もあつたらうけど。

そんなこともせず、僕がそれなりに強かったこと理由を聞こうとすることもなく。

ただ純粹に、僕の行動に対してお礼を言ってくれた。

つてわけで、そういう律義な対応に、僕は紳士的に返そう。

「ありがたく頂戴仕ろう」

軽く混乱してるせいか、よくわからないことを言い出す僕。

……口だけ別の人間が使ってるみたいなのがする。

不死川の方に体を向けて、膝に手をつき首まで垂れてる。

『膝を地につき首を垂れる』つてわけには、ちょっとね。

そういうプレイは、もっと付き合いが深くなってからだ。

「うむ。苦しゅうない」

不死川も不死川で、なぜかノリノリでいらっしやるよ。

つていうか、不死川がちゃんと尊大な態度してるのを初めてみた気がする。

普段は、なんか気を張りすぎてて、空振りして滑ってる感じだもんなあ。

まあ、不死川じゃなくて、他の奴だったら見たことがある。

昨日は珍しく欠席してたけど、九鬼の奴がこんな感じだったっけ。

『フハハハハ！』とか、最初は上流階級のギャグかと思ってたけど。

よく考えたら、アレの姉も妹も、同じように笑ってた気がする。

まあ、九鬼はどうでもイイとして、常々思ってるんだけど。

不死川家って、御三家でも2番手だよな。

だから、やたら名家名家って騒ぎ立てるのかなあ。

そうやってないと、1番じゃないってことに対するコンプレックスが拭えないとか。

それだったら、綾小路がやたら家柄を騒ぎ立てるのも理解できる、かなあ？

綾小路家は、御三家の中じゃ不死川家に比べて貧相だし。

アレはアレで、敵に回すと面倒なくらい権威かざしてくるもんなあ。まったく、その権力を実際に行使してるのが誰なのか、考えて欲しいよね。

「冗談はここまでにしておいて……港、貴様、何故隠しておった」

何を隠してたかってのは、たぶん、僕の実力だ。

でもさ、何故って聞かれても、見せびらかす機会がなかっただけ。

もし僕にお鉢が回ってきてたら、もっと早くこうなってたのかもね。

まあ、それをいちいち説明するのも、なんか胡散臭いけど。

「面倒だったからね」

「では、何故バラした？」

「……隠すのが面倒になったからだね」

あーあ、僕も不器用な人間だよなあ。

ここで『お前が好きだから、力になりたかったんだよ』とか言えたらカッコイイのに。

そんなことが言えるんだったら、不死川もベタボレに違いない。

ただし、僕が二重で、もう少し目が大きくて……イケメンだったらね。

ま、今言ったことは、半分は本当だよ。

こんなに面白い学校に入学したんだから、そろそろ本気出そうかな……って。

だってさ、この学校のシステムや勢力が分からない内に、無茶はできないし。

下手に強そうな奴潰して、あとから仲間にはんてことも考えられるもんなあ。

実際、この学園には派閥みたいなもんがある。

部活間の繋がりはともかくとして、賭場やバイトで繋がってる奴らが多い。

徒党を組んで戦うことの有利さを認識してる奴らが、多過ぎる気がする。

まあ、例の風間ファミリってのは、昔からの付き合いらしいけど。どっちにしたって、そういうグループの力は侮れない。

だから、入学早々動けなかったって側面もある。

「ふむ、そうか」

「ああ、そつだよ」

細かいところは聞かないでくれるみたいだね。
助かるなあ、惚れ直しちゃうよ。

不死川には分かっているだろうけど、アレは柔道でもレスリングでもない技だ。

レスリングは問題外として、柔道じゃあからさまな引き込みは反則になるはず。

つまり、ああいう技を実戦で使うのは、もっと別の格闘技の経験者
ってこと。

まあ、組技なんてそんなに数がないから、分かっちゃいるんだろう
けど。

何がマズいって、コッチ来てから通い始めたジムの人に注意されて
るんだよ。

『ごちゃごちゃ人が増えるのは好きじゃないから、誰にも言うんじ
ゃない』って感じに。

今回は不可抗力だったし『言っちゃいけない』は忠実に守ってるか
らオールOK。

僕はただ、培った実力を使って勝利しただけだからね。

しかし、不死川ってさ、こういう妙なところで気が利くんだよなあ。
たぶん、一握りの人間に対してだけだ。

で、何故か不死川は、腕組みしながら物知り顔。

一体、何をおっぱじめようってんだろ？

というか、不死川も話題がないんじゃないだろうか。

今さらだけど、僕と不死川に共通の話題なんかないしなあ。

あるとすれば、組技の話題くらいなんだろうけど。

不死川がやってるのは柔道だから、細かいところで話題合わない気がするんだよなあ。

それに不死川は、組技最強説支持者ってわけでもないだろうし。

いや、僕も違うんだけどね。

「しかし、昨日の件の恩赦は、ただ礼を言うだけ不足しておる。そうじゃな？」

「え？ ……ああ、うん。そうだね」

突然、何を言い出すかと思えば。

お礼言ってくれるだけで、もう十分過ぎるんだけどなあ。

いや、わがまま言っていていいなら、礼を言う際にお願したいシチュエーションがある。

『さつきみたいにもジモジしながら』と『満面の笑みで』の2つだ。そこまで要求するには、まだまだ時間が必要だろうけど。

せめて、お互いファーストネームで呼び合えるくらいになるまでは熟成しなきゃ。

ニコニコしながら距離を詰めてくる不死川。

机3つ分が、机2つ分に。

机2つ分が、机1つ分になって。

机越しとはいっても、かつてないほどに不死川の顔が近付いてて。

キスなんて程遠い距離なのに、僕の心臓は早鐘を打ちまくる。

そんな僕のドキドキを知ってか知らずか。
『満面の笑み』で、不死川は言つてのけた。

「そういうわけで、喜べ港！ 褒美として、高貴な此方が友人となつてやるう！」

あんまり豪華な褒美に、思わずガッツポーズをとりそうになる僕。とりそうだったけど……なんとか堪えた。

よおし、ちよつと冷静になれよ、僕！

ここが男の見せどころ、簡単に事を運ぶんじゃないぞ！
ちつとばかり焦らして、不死川の焦れ顔を堪能してやる！
これが、昨日頑張った僕の報酬だろ！？
さあ、ちよつと焦らして、不死川の焦れ顔を堪能するんだ！

「そうだね、是非、お願いしようか」

僕の口は、また、僕の脳味噌を無視したことを口走った。

その後、何があったか覚えてない。
何か約束を取りつけられた気もするけど、それも覚えてない。
意識が戻った時に手を握られた感触があったけど、アレは何なんだ
ろうか？

……嘘つくなよ、分かってるんだろ。

アレは多分、不死川が俺の手を握ったんだよ！

あああああああああ！

せっかくの、一世一代のチャンス逃してんじゃねえよ、僕！

なーんてことを考えて悶々としながら。

今日一日は、虚しさ一色で終わってしまった。

もうちょっと、注意力と辛抱を備えられるようになりたいなあ。

3 話目 『恋は盲目』 (後書き)

さっそく感想をいただき、ありがとうございます！

まさか、これほど早く感想をいただけるとは思ってもおらず、もう嬉しくて嬉しくて！

この場を借りて、お礼を書かせていただきます。

さて、感想と言うのは、小説などに限らず、物を作る人々にとっての原動力です。感想の良し悪し問わず、目に触れる、知ってもらえるということは非常にうれしいことなのです。

すでに目を通してくださいました森羅さん。そして、これから目を通していただくことになるであろう皆さま。

意見、感想などあれば、どんどん送ってやってください。

4話目 『鉄人と自由人』

あの日の決闘が木曜日で、不死川と友人になったのが金曜日。トレーニング漬けの土日を挟んで、月曜日がやってきた。

季節はまだ5月の半ば。

これから蒸し暑くなっていく毎日を想像すると、それだけで気が滅入ってきそう。

夏の生まれではあるけど、蒸し暑いのが我慢できるかっていうのは別問題。

っていうか、暑いのはイイんだけど……湿気が嫌いなんだよ、湿気が。

まあ、夏は好きなんだよ。

日焼け止め塗るのが面倒だけど、ああいうカラツとした暑さは大好きだ。

ああ、待ち遠しいなあ。

早く夏が来て、ジムで思いつきり体を動かしたい……。

それに、夏休みが来れば、勉強勉強の毎日から少しは逃げだせるし。正直、そんなに勉強は好きじゃないんだよね。

でも、夏休みか。

どうせやることっていったら、トレーニングとスパリングだけなんだけなんだよなあ。

今のジムで、関節技習ったり、テイクダウンの仕方を教えたり教わ

ったり。

あとは、スポーツジムで重たいもの持ち上げて、筋力強化したり。……友達くらいは、もうちょっと作っとくんだったよ。

まあ、今年はちょっと張り合いがある。

ガクトくん相手だけど、久々に緊張感のある戦いができたし。これからも決闘の機会が増えると思うと、怠けてはられない。久々に打撃もやってみようか、とか思うくらいには。

なーんて、思いを馳せるのもここまで。

机の向かいに女の子がいるのに考え事とか、あんまり利口じゃないよね。

「しかし、学食もなかなか悪くないな」

「まあ、ここの学食は値段の割に手が込んでるからね」

今、僕は昼食を食ってる。

学食で、不死川と一緒に。

僕がトッピングなしのカレーで、不死川が月見うどん。

カレーのにおいが気にならないかなあ、とか思わないこともない。だけど、もう頼んじゃって手元にあるんだから、あとは美味しく食べるだけ。

不死川と一緒に昼飯を食べる。

夢にまで見たシチュエーションだけど、特に心踊らない。

それは別に、僕が食べてるのが不死川の手作り弁当じゃないからじゃない。

学食だから周りに人がいて、雰囲気が好きくないってわけでもない。

放課後の予定を考えて、軽く気分が悪いだけ。

だから、不死川も悪くないし、僕も悪くない。

強いて悪い奴を挙げるとするなら、それは決闘を挑んできた風間だ。

あのバカ、僕が朝一番で登校してきてるの知ってて待ち構えてやがった。

それでもって、クソでかい声で『決闘を申し込む！』だもんなあ。

しつこく教室まで付いてきやがったから、結局承諾しちゃったし。

ま、格闘戦を希望って話だから、放課後って条件付きで受けたんだよね。

風間か……どうしよっかなあ。

飛んだり跳ねたり、パンチよりも蹴りを使って戦う。

打たれ強くはないだろうけど、チヨコマカと面倒くさそう。

コイツも格闘技とかは特に習ってないらしいけど、弱いつてわけじゃない。

去年見た決闘じゃ、柔道部相手にソバット当ててたし。

ちよっとは対策練っておかないと、出会い頭にKOとかされかねない。

「カレー、好きなのか？」

「まあね」

不思議そうに見てくる不死川に、なんでもないと口にした様子で答える僕。

週3くらいで食べてないとイラついてくるくらいには好きだよ、カレー！。

カツカレーも好きだけど、学食で食べるなら唐揚げカレーだよ。入学して一週間で、日替わりトッピングカレー5種を食い尽くした。それくらいには、カレーが好きなんだよ。

なんだつたら、一週間連続カレーでも余裕だね。

……せっかく食い物の話題になったもんだから、コッチも問い返しておこう。

「不死川はさ、うどん好きなの？」

「月見うどんはな」

なるほど、月見うどんは好きなのか。

ということは、山菜うどんとかキツネうどんはそうでもないのかなあ。

……やっぱ、箸の持ち方キレイだなあ。

なんていうか、持ち方そのものの丁寧さもそうだけど、気品がある。上流階級の間人って、みんなそうなのかね。

僕なんか、右手の指を怪我しちゃってから、上手く箸が持てないもんなあ。

もともと上手じゃなかったけど、なんか親指の位置がズレてんだよね。

で、ちょっと間。

口の中に物が入ってるから、おいそれと喋れない。

お互い、相手の口の中にモノが入ってるか確認してから声をかけるタイプだし。

うん、会話にならないのも仕方ないよね。

結局、飯を食い終わって茶を口にするまで、他に会話はなかった。

なかったんだけど、ようやく食事も一段落したからか、不死川が口を開いた。

「それで港。どう捌くつもりじゃ？」

「どうしようね」

『どう』ってのは、風間との決闘の話。

僕からすれば、本当に『どうしよう』だよ。

正直、今の僕のスピードじゃ、風間に大怪我を負わせちゃうかも。

それに、風間はギブアップしないで、我慢しちゃうかもしれないし。そしたらほら、もう加減はできないからなあ。

ていうか、すぐに折れるように土日で調整しちゃったしね。

僕は今、サブミッション……ブラジリアン柔術に傾倒してる。

だからこそ、風間みたいなタイプは苦手だ。

本当だったら、蹴り足掴んでアキレス腱切ったりとか、腕取って肘折ったりとか。

そういうことはできるんだけど、やったらやったで問題になっちゃう。

ハッキリ言って、風間はそこまでする相手じゃない。

強さに関してもそうだけど、そこまでの恨みもないんだもん。

ホント、やり辛い相手だよなあ、風間って。

じゃあどうしようか。

僕の持ち札は、錆びかけた空手、ブラジリアン柔術、小西さんに習った関節技。

一番自信があるのがブラジリアン柔術で、次が関節技。

空手は、時間が経ち過ぎてるから自信がないんだけど、風間みたいなものには一番有効。

打撃は一挙動で、組技は二挙動、関節技は三挙動。

動作が1つで済む分、打撃の方が効果が出るのが早いってのは自明の理。

早さが売りの奴に当てるには、できるだけ早い攻撃を使うのがいい。相手の土俵に入るのが気に食わないけど、まあ、仕方ないさ。

最悪、相打ちにまで持ち込めば、打たれ慣れてる僕の方が有利になる。

空手の現役だった頃は、連打よりも単打の選手だった。

相手の連打を捌いて耐えて、重たい一撃をブチ込んで。ときには先手を取ってみたり、フェイント混ぜて大技決めたり。そういう選手だったから、首や腹は必要以上に鍛えてきた。まあ、連打もできたけど、僕よりできる奴の方が多かったからね。

とにかく、打たれ強さには人並み以上の自信があるんだよ。もちろん、必要以上にダメージを受けたら危ないけど。

……打撃、使おうかな。

色々思い出したら、久々に少し使いたくなってみた。どうせ、空手やってたって知ってる奴がいたみたいだし、隠してても仕方ない。

問題は練度が落ちてるってことだけど……井上に付き合ってもらおうか。

「ま、どうにかするよ」

まだ熱い茶を一息に煽って、僕はトレイを持って席を立った。

一見すると、余裕が垣間見える態度なんだけどさ。

猫舌だったの忘れてて、舌を火傷して口も開けなかっただけだったり。

あゝあ、やだやだ。

こつこつウツカリなところは直さないとなあ。

あつという間に5時間目、6時間目は終わって。
授業は歴史と現代国語だったから、無視して決闘に集中できた感じ。
集中力は十分だし、腹も決まったとくれば文句なし。

時刻は午後5時、場所は川神学園第一グラウンド。
前回の決闘で、僕の名前も広まったらしい。
空手着を着た僕を、チラチラと眺めてる連中がいる。
前回は借りモンだったけど、今回は自前の空手着。
ワッペンの付いてない、そこらへんのスポーツ用品店で買ってきた
奴。

一応、結構イイ感じのメーカーの着てんだけどね。

ガクトくんを瞬殺した僕が印象的だったのか、それとも風間が決闘
するからか。

はたまた、短い期間で格闘系の決闘が続いたからか。
今回は、外人の転校生と2-Fの川神の決闘の時の、7割くらい人
が集まってる。

「準、大丈夫ですか？」

「あゝ、なんとかな」

井上と葵……榊原はどこだろ？

とりあえず、男2人が最前列でコツチ見てた。

葵の値踏みするような目がムカツクけど、まあそれはどうでもいい。そんなことより、その隣に不死川がいるのが気に入らないなあ。

せめてハゲの隣にしてよ。

あのイケメンの隣に立たれると腹立つんだから。

それにさあ。

井上の奴、あんなに痛そうにしちゃって。

ちゃんと加減したんだから、顔に湿布なんか貼ってアピールしないで欲しいね。

たくさんの声援が飛んでくる。

風間への声援が半分、野次が半分、僕……俺への声援がちらほら。

少し視線を巡らせると、ほら、S組の連中が5人だけ。

不死川。

俺の心のアイドルにして、今や友人という間柄。

才色兼備、文武両道、ちよっぴりマヌケなところが可愛い。

凜としたよく通る声が、まあまあの音量で僕の名前を読んでくれる。

それだけで力が湧いて来るってんだから、恋心ってのは侮れんな。

井上。

ほどほどにな、なんて、どっちの心配してるのやら。

痛めつけるのをほどほどに、怪我をしないようにしろって意味のほどほどに？

どっちかは知らないけど、応援してくれてることには違いがないですよ。

じゃあ、僕は有り難く声援を受け取って、テンションと集中力を上げていくだけだ。

葵。

そんなに見たきゃ、見せてやるよ。

お前が何を考えて俺を値踏みしてるか知らんが、見せてやる。

俺の空手の技を、俺の戦い方を。

俺がどういう人間かっていうのを、ほんの一部でも感じ取って見せろ。

九鬼。

お前がどうしてここにいるかは分からんが、S組の名に傷は付けんだから、いつもみたいに余裕のある顔で、腕組みして安心して見せる。

心配しなくても、風間の顔に泥塗ってやるから楽しみに見てろ。

もっとも、お前はそれを楽しむほど小物じゃないだろうけどな。

忍足。

何すました顔でコツチ見てんだよ。

俺が実力隠してたってのが、そんなに気に食わないってか。

お前が気に食おうが食わなかるうが、そんなもん俺の知ったことか。これからお前が見ていくのが、本当の俺の実力ってだけだ。

まったく、薄情なクラスメイトを持って嬉し涙が出そうだ。
このノリで金八先生やったら、視聴率大幅ダウンは確定だな。
クラスメイトが怪我するかもしれないってんだから、心配して見に
来いってんだ。

「おいコラ！ さっきからどこ見てんだ！」

『お前の敵はこの俺だ〜！』とか叫んでる風間。
またしても学生服。
なんていうか、雰囲気大事にして欲しいんだが。
敵さんにそこまで要求するのも酷つてもんか。
ようし、ちよつと過激な発言してみようか。
こういうときはリップサービスするって相場が決まってるもんな。

「テメエの面なんざ覚えても仕方ねえだろ。今から整形してやんだ
から黙ってる」

わっと歓声が上がった、けどよ。

こんなプロレスみてえな盛り上げ方で、よく素直に喜べるな。そんなに娯楽に飢えてんのかよ。

風間は風間で、挑発に乗って何か叫んでやがる。

ルールは前回と一緒。

つまりは、総合格闘技みたいなルールってことだ。

みたい、であって、決して同じじゃない。

よくよくルールを聞いておかないと、そのうち大変なことになるってえのにな。

ま、今回も、特にルールの穴を使わないでもいいか。

正々堂々倒した方が、風間ファミリーの連中も悔しがるだろ。

「2・F、風間 翔一！」

「2・S、港 三千尋」

名乗りを上げると、一旦は静まった歓声が再び沸いた。やっぱいいな。

こつこつ風在人前で戦うのも悪くない。

人前で戦って、勝利を奪い取るのも悪くない。

「それでは……始め！」

悪くない。
本当に。

幕間『風は誰にも』（前書き）

風間視点です

幕間『風は誰にも』

ミナト ミチヒロ。

つい先週まで、そんな名前の奴がいるなんて知らなかった。

特別デカくもなけりや、スポーツをやってるわけでもない。なんか目立つこととしてた記憶もないし、いたのかどうかもわからない。

まあ、俺だっぺいちいち全員の顔は覚えてないぜ？

でも、コイツは、持つてるモンに比べて目立たなさ過ぎだった。

俺が詳しい情報を知ったのは、ファミリーの仲間から聞いたからだ。大和から聞いたのは、ずっとテストで20番前後を取ってたって話。ワン子から聞いたのは、昔は空手がスゲエ強かったって話。ガクトから聞いたのは、めちゃくちゃ握力が強いって話。とにかく、俺はそれくらいしか分からなかった。

つまり、未知の敵っぺ奴だ。

それはそれで燃えるじゃねーか！

しかし、分かんねーんだよな。

ワン子の話だと、空手の大会でも優勝するくらい強かったらしいじ

やん。

……じゃあ、なんで辞めちまったんだろ？
つまらなくなっただとか、そういうことか？

つとと、危ねえ危ねえ！

今は試合に集中しないと！

いくらそこそこ距離があるからって、油断は禁物だ。

ガクトとの決闘を見る限りじゃ、そんなに速いわけじゃない。
速いわけじゃない代わりに、タイミングを計るのが上手いんだって
な。

ガクトが油断してただけだと思ってたから、知ってよかった。

もしモモ先輩が教えてくれなかったら、同じ技を食らってたかもし
れない。

でも、もう俺は油断しない。

相手は、俺より強いガクトをぶっ倒すようなヤツだ。

大和が言ってたみたいに、慎重に戦うんだ。

さあ、どっからでもかかって……。

……は？

構えて、ない。

真っ直ぐ棒立ちになって、左手を突きだして。

人差し指を一本だけ立てて……何やってんだ？

「一撃だ。この勝負、一撃で終わらせてやる」

一撃？

俺を一撃で倒そうっていつのか？

ふざけやがって！

「キャップ！ 挑発に乗るな！」

分かってるぜ大和。

これはアイツの挑発だ。

分かりやす過ぎてムカツクが、簡単には乗らない。

いや、乗るわけにはいかねえ。

ガクトがやられてるんだ。

あの変な寝技にさえ気を付ければ。

寝技にさえ持ち込まれなきゃ、俺の方が早く攻撃できる。

テクニクがあるうが、パワーがあるうが。

そんなことが一体なんだってんだよ！

知ってるか？

風は誰にも捉えられないんだぜ！

飛び蹴りで一発！
むしろ、俺が一撃で終わらせてやる！

「っしやあああああ！」

高く高く、風を味方にして、より高く。
早く速く、風を背に受けて、より疾く。
4 m 近かった距離を一気に詰めて、俺の飛び蹴りを。
あの空手着を着た、一撃とか言った奴の顔に。

よし！当たっ

5話目『鉄のプライド』

一撃。

予告通り、一撃で済んだ。

何が『風』だ。

捉えることも出来れば、確かに攻撃を当てられる。

そんでもって、いざ当ててしまえば予想以上にモロい。

スピードは認めるけどよ、それだけじゃ勝たせねえよ。

今度からは風じゃなくて『紙切れ』って自己紹介しとけってんだ。

風間は、かなり素早く動き回るタイプ。

無駄な動きも必要な動きも含めて、ちょこまかと動き回る。

あのスピードは、確かに経験者からしても戦い辛いもんだろつよ。

定石を無視した動きと相まって、攻撃を当てるのは簡単じゃない。

でも、その半面、体が薄い。

上半身……特に、首なんか鍛えてるわけでもないんだから、狙いどころは決まってる。

腹、胸、顔のいずれかにキチンと一撃はいれば、絶対に立ちあがらせない。

それにさ、攻撃を当てるのだったって簡単じゃないってだけ。当てようと思えば、どうにでも当てられるくらいの速さだ。アレは常識の範囲内のスピードだし、俺が追えないほどでもない。ハッキリ言って、負けるような相手じゃなかった。

ま、アレだ。

鬱陶しい分析はともかく、現状が全てってことで。

地面に仰向けに倒れてるのが風間で、鼻血出しながら立ってるのが俺。

顔にもらったのは計算外だったけど、勝ちも勝ちだからな。

しっかし、かわしたと思っただけけど……少しテンポがずれてやがったか？

やっぱ、打撃の練習はやり直した方がいいな。

思い返せば、簡単な勝負だった。

挑発に乗って、大技から始めてくれたからな。

風間は、必ず大技で決めようとしてくる。

コッチは、そういう大技に絞ってカウンターで仕留める。

そういう戦法を始めから取るつもりだった。

問題は、風間が大技から攻撃に入らない場合。

コンビネーションの中に混ぜられると、ソバットや飛び蹴りも回避できないかもしれない。

いや、出来ないかもっていうか、あの感じだと出来なかった。もっとドロドロとした勝ち方しか、思い付かなかった。

実際、挑発して大技いきなり出させて、見切れてるのにバッチリ顔面にもらったじゃん。

しかも、さっきの飛び蹴り、結構しっかり顔面打ち抜いてきたからな。

少し無茶した感じだが、一撃で倒しておいて正解だった。

風間の飛び蹴りは、ジャンプして右横蹴りって形の飛び蹴りだった。まあ、ライダーキックみたいなあれを想像してくれりゃいい。

で、顔に当たる寸前……ちょっと当たりながら、俺は頭部を下げながら左に回転した。

俺の上半身は後ろ倒しになり、半分回転する頃には左足が鎌首をもたげ。

更に半回転したところには、俺のカカトは風間の顎を掠めていた。

現役時代の得意技の1つ『左後ろ回し蹴り』ってヤツだ。

思ったよりはキレが落ちてなかったから、どうにかヒットしてくれた。

……っていうか、キレ過ぎてて予想より早く足が出た。

そのまま俺の左足が、風間の体に引っ掛かって。

風間は、地面に叩きつけられた。

……ああ、そうだよ、失敗したよ。
予定通りにいけば、風間の顎を力カトで蹴り抜くはずだったんだ。
それで、蹴りを放った後に『極め』をやって、俺の勝利がコールド
される。

ホントだったら、そうなる予定だったんだけどな。

技のキレはともかく、勝負勘そのものが鈍ってるってことか。

ま、どっちにせよ、アレだ。

さっきから立ちあがろうとして手足を動かしてるけど、風間の体は
思い通りに動いてない。

多分こりゃ、脳震盪起こしてんだろうね。

つまり、

「勝者、港！」

ってわけだ。

どっ、と突然に歓声が耳に流れ込んでくる。

……集中力切れちゃったか。

6 話目 『両手に二つ褒美を』

集中力が切れると、ほら。

折れた鼻が、泣きたくなるような痛さを訴えてきた。

何度やっても、この痛みには慣れないなあ。

潰れるみたいな折れ方は初めてだけど、一応はキレイに曲がってるか？

この程度だったら、俺……僕なら、自力で治せるね。

うん、軽傷で済んでよかったよ。

と、駆け寄ってくる着物姿が、なんか女の子にあるまじき表情で迫ってくる。

そんなに心配されてもなあ……逆にコツチが申し訳なく思っちゃうよ。

お嬢様だから、こういうのは見慣れてないのかなあ。

格闘技やってりゃ、鼻折れることくらいはありそうなもんだけど。

とにかくさ、不死川。

女の子として、その、怒ったような焦ったような、そんな顔はやめようよ。

未来永劫、僕の記憶の中にその表情が残るぞ。

「おい、港！　すぐに病院に行って治療してもらえ！」

「ちょっと鼻折れだぐだいでおぼげさだつて」

「思いつきり折れとるじゃろうが！ 大げさでも何でもないわ！」

大丈夫だつて……鼻声全開だけどね。

『鼻折れたくらいで大袈裟だつて』が言えてないもんなあ。
ていうか、アレだけ鼻声だったのによく伝わったもんだ。

鼻声にしちゃ、ちょっと妙な感じもするけど。

緊張して、口が上手く回らなくなってるのかなあ。

会話くらいはいい加減慣れないと、愛想尽かされちゃうよ。

まあ今は、鼻を治しとかないとね

応急処置だけど、まずは一応の形を整えよう。

その後で、保健室なり教室なりトイレなりで、鏡を見ながら微調整。
キレイに治しとかないと、次に鼻折るまで同じ形のまんまだからなあ。

「これぐだい自分で」

と言いつつ、不死川に見えないように左手で鼻をカバー。

ついでに顔を後ろに向けると、右手の親指と人差指で鼻をサンドイッチ。

心の中で『せーの』と踏ん切りをつけ、捻り上げて鼻筋を元通りに戻した。

折れるときも痛いけど、正直、鼻を治すときも割とキツイ。

感覚としては、正しい方向に折りなおしてるようなもんだし。

……うわやだ、ちょっと涙出てきた。

でも、我慢しとかないと。

あとは、人差指突っ込んで軟骨を元の場所に戻して。

鼻の穴を元に戻しておかないと、鼻息で鼻血出しても意味ないしね。無造作に指を突っ込んで、そのままグイグイ鼻の穴の中を進行。

鼻の粘膜って敏感でさ、こっやって無理矢理突っ込むと、これがまた痛いんだ。

鼻の中の神経がゴリゴリ刺激されて、もう意識が飛びそうなくらい痛い。

あゝあゝ、鼻血ドバドバ出てきた。

うう……右手が段々ねっとりしてきて気持ち悪い！

気持ち悪いけど、早めに治した方がいいからね。

奥までちゃんと届いてから、形が崩れないようにゆっくり引き抜いて……。

よしこれで一応、応急処置は完了だ。

鼻の形が元通りになってるかチェックしなきゃね。

あ、見苦しいから鼻血拭いとこう。

ハンカチもないし……まあ、袖で拭いときゃいいか。

まだ鼻血が固まってないから、しっかり拭って……っと。

よし、これでやっと不死川の方を見れるよ。

と、いざ振り返ると、不死川は仰天。

今聞こえた唾を飲む音は、どういう理由だろ？
まさか、傷だらけの相手を見て喜ぶドSじゃないだろうね。
……それだったら、ちよつとヤダなあ。

「あのさ、不死川」

「ちよ、ちよつと待っておれ！」

あ、ダツシユで昇降口に行っちゃった。

ドSじゃなかったみたいで、心底安心した。

っていうか、よく考えりゃ、僕、右手拭いてなかったよなあ。

……うわ、改めて見ると血まみれだ。

肘のあたりまで垂れてるし、なんか所々黒っぽいし。

そりゃ不死川がビビっても仕方ないか。

「おら、コツチ向け」

「ん？」

左側に目を向けると、頬に湿布を貼ったままの井上が。

決闘前に付き合ってもらったんだよなあ、そういえば。

井上の右ストレートに合わせて、左の後ろ回し蹴り。

最初の3回はお互い慣らして、4回目にそこそ本気でやってもらったんだけど。

上手に止められなくて、そんなに力は入ってなかったけど、井上の

頬を打ち抜いちゃってね。

ま、キツチリ謝ったし、童帝様から秘蔵写真を買い取ることで許してくれた。

で、そんな井上は、怪訝そうな顔つきながらも鏡を貸してくれた。どうしてハゲに鏡がいるのか、皆目見当もつかない。

エスカレーターでミラーマンやってるわけでもないだろうし。

有り難く鏡を借りて鼻を見てみると、とりあえずほぼ元通りだった。でも、こういうときって欲目が出ちゃうんだよね。折れている鼻を再びつまんで、グイッと引っ張る。

いい機会だから、強引に鼻を高くしてみた。

……うん、イイ感じだ。

ちよっと、いや、かなり痛いけど、無料で整形できたってことで。

「おいおい、ちゃんと無傷で勝てよ。俺が顔蹴られた意味ないじゃんか」

「いや、ホント申し訳ない。思ったよりも風間が速くてね」

実は、グラウンドの砂でちよっと滑ったっていうのは内緒。

やっぱ板張りとかアスファルトじゃなきゃダメだね。

グリップが利かなさ過ぎて、技に入るまでにバランスが崩れたりしちゃう。

こういうところで戦う練習もしとかないとなあ。

「おい、港！」

と、ようやくここで不死川が帰還。

割と全力でダッシュしてくれたのか、汗かいちゃってる。なんか、かなり申し訳ないよなあ。

ちよつと鼻イツたくらいで、そんなに尽くして貰っても。それに、もう骨は元に戻しちゃったし。

僕の心情なんか露知らず。

不死川は、いきなり僕にハンカチを突き出した。

……えーつと、嗅げってこと？

いや、もしくは健闘賞とかで使用済みハンカチをくれるって話かなあ。

まあ、普通に考えれば『血を拭け』ってことなんだろうけどね。

「とりあえずハンカチでふさいでおれ！」

現在進行形で鼻血出てるもんね。

でも、女の子のハンカチを鼻血で汚すのは、ちよつとね。

抵抗感あるよ、正直。

返そうにも、鼻血ついた後だと、妙に汚くなった気がして返しにく

いし。

よし、ここは遠まわしに断ってみよう。

「ハンカチ汚れるよ？」

「気にしとる場合か！」

即答された。

じゃあ仕方ない。

内心うきうきしながら、遠慮なくハンカチを借りることにした。と、左手でハンカチを受け取った瞬間、右手を思いつきり引かれる。鼻血で染まって汚いんだけど、その辺は気にしないのかなあ。好きな子に手なんか引つ張られたせいかな、血圧上がって鼻血増えそう。

「ほれ、すぐに行くぞ！」

「……どこに？」

「いいから付いてこんか！」

不死川が引つ張っていく先は、校門。

え〜っと、鼻血は止まってないけど、止まり次第すぐに帰りたいたいだ。

だから、ほら、不死川。

猛スピードで校門の前に突っ込んできたタクシーに乗ろうなんて言わないでよ？

「早くあのタクシーに乗るのじゃ！」

「あの、荷物回収したいんだけど」

「任せておけ！」

あ、そっか。

どうにもならないってか。

じゃあ、もう勝手にしてくれ。

好きな女の子の行為を無碍にできるほど、僕はクールにはできてないんだから。

空手着姿の少年が、着物姿の美少女に引っ張られる。

どういふ構図なんだろうね、まったく。

引っ張られながら、僕はとりあえず鼻頭にハンカチを当ててみた。それで、血を付けないように匂いを嗅いでみる。

思春期の男の子なら、当然の反応だよな。

鼻血のせいで鉄っぽい臭いが充満して、ハンカチの香りはわからないはずだったけど。

なんでか、ふんわりと柔らかい、花のような香りがした。

それがちょっとおかしくて、思わず目元と口元が緩んでしまう。左手に持っていたハンカチが、妙に温かく感じられた。

不死川の女の子らしい手が、僕の右手を握って……もとい、掴んでる。

しなやかで、真っ白で、でもペンダコ出来かけてたりして。

そんな素敵な手してるのに、ゴツくて血で汚くなった手を引っ張ってくれる。

不死川の気遣いがそれだけでわかって、彼女のことをもっと愛しくなる。

こっというのが幸せって言うのかなあ？

そんなことを呑気に考えていたせいかな。

鼻の痛みなんか、とっくに消えてしまっていて。

僕の全ては、右手と左手だけになっていた。

7話目『遊びに行こう!』

あの上に僕と不死川が、どこに行ったかって？
病院だよ、病院。

あの上から色気のある展開にはならんって。

まあ、病院っていつでも葵紋じゃなくて、もう少しだけ遠いところ
だった。

ただ、不死川の息が掛ってる病院だとかで、えらく丁寧に診療を受
けてね。

保険証の確認もいらなかったみたいだし、学生保険の範囲内だそ
うだ。

で、2時間くらいしてから解放されたんだけど……この辺から記憶
があいまいなんだよ。

……荷物を受け取った辺りまでは覚えてるんだけどなあ。

汚れてないハンカチを不死川に返して、教室から回収してもらった
荷物を受け取って。

それでその後、気が付いたらアパートの中にいて。

思ったより疲れてたから、シャワー浴びてすぐに寝たけど……。
よく考えれば、また何かあったに違いない。

前回意識が飛んだのは、不死川と友人になるって約束したとき。

そのときでも、意識がなかったのはHRまでの1時間にも満たない
時間。

今回は、不死川に連れてかれた病院の位置をネットで確認したけど。
電車で帰ったにしても、最速で1時間20分はかかる道のりだった。

……一体、僕と不死川の間に何があったのか。
気にならないわけじゃないけど、何か聞くのもマズい気がした。

それがよくなかったんだ。

そんなこんなで、金曜までの時間を過ごしてしまった。

僕は気が付くべきだったのかもしれない。

不死川が妙に上機嫌だったこととか、やたら話しかけてくることとか。

その辺に気が回っていれば、もっと下準備ができたかもしれないのに。

土曜の夜。

つまるところ、昨日の夜。

お隣の小西さんとジムでトレーニングして、その帰りだった。

せっかくだからアパートの人らで焼肉食いに行こーぜってなってね。
まあ学生の身分で遠慮するのもなんだから、ご厚意に甘えておいた。

こうなると、格闘家として生計立ててる小西さんは大活躍。人一倍、この人は焼肉を食う。

もう、米もサラダも、水だつて絶対に口にしない。

肉、肉、肉、肉、肉のオンパレードで、冗談抜きで肉しか食べない。最後の方はコツチが吐きそうなくらいイイ食いっぷりをする。奢ってもらえるから、文句も何も無いけど。

で、お隣の小西さん、小西さんの隣の駒田さん。

管理人さん、カシオさん、トミコさん、僕の6人で飯を焼肉を食いに行った。

その最中に気付いたんだけど、携帯電話、忘れてたんだよね。

まあ、特にメールも電話もないか、とか思ってた。

それがちよつと、甘かつたんだろっつなあ。

家に帰ってくると、必要以上に自己主張しているケータイを見てビビった。

噂には聞いていたけど、それは僕にとって初体験だったから。

メールの蓄積や着信があったりすると、ライト部分が点滅するっていうのは本当らしい。

なんてこつた！ 都市伝説じゃなかったのか！

なぐんで、そういうボケはいいか。

友達はいないけどさ、ほら、アパートの皆さんとは電話番号とアドレス交換してるし。

さすがに携帯電話のアドレス登録件数0とか、そういうことはない。もちろん、メールだって着信だって来たことはある。……アパートの皆さんからだけだね。

とりあえずケータイを開いてみると、メールが20件。チーンメールかスパムかと思ったけど、僕のアドレスを知ってる奴が少なすぎる。でもって、流石にこういうイタズラをする人はいない。

じゃあ、何だろうつて思つてさ、メール確認したんだよ。そしたらさ……誇張表現とかじゃなく、本当に腰抜かしたよ。

メールの送信者に『不死川 心』ってあるんだもん。

いつアドレス交換したのか、全く記憶にないんだけど。とにかく急いでチェックしたら、どうやら不死川は30分前からメールを送り続けていることが判明。件名も『明日のことで』から始まり『何かあったのか!?!』なんて必死さを感じる始末。

とりあえず、最初のメールが30分くらい前で助かった。いくらメールが連発されているって状況でも、どうにか誤魔化せるでしょ。

仕方ないから、まずは状況を確認することにした。
目の前のケータイの画面が幻覚でない限りは、僕は不死川とアドレ
ス交換をしている。
しかも、何かの約束を取り付けていることが考えられるわけだ。
そんなことを考えているうちにもメールが入ってきたから、すぐに
内容を確認。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
f r o m : 不死川 心

件名: ……もしかして、忘れておるのか？

ほれ、月曜日の別れ際に約束したのであろう？

その……遊びに連れて行ってくれると！

明日10時に、商店街前に集合じゃぞ！

………すっごい説明的なメールだなあ。

まあ、お陰さまで予想がついた。

要はアレだよな？

友達と一緒に遊びに行こうって話だよな？

まさか、これをデートだと思って浮かれて、僕の記憶は飛んでい

たんだらうか。
だとしたら、恥ずかしいことこの上ない。

とりあえず『ごめん、ケータイの電源切れてた。もちろん、楽しみにしてるよ!』と送り返す。
もちろん、動悸は通常の倍以上に跳ね上がり、歯がカチカチと不協和音を奏でる。
焦点がうまく合わなくなってきたところで、早くもメールが返ってきた。

from: 不死川 心
件名: 此方もじゃ!

なに、たまには庶民の遊び場というものも良いと思っただけじゃ!
お前の手腕に期待してるからな!

うん、このメール。
『ツン』がない。
終始デレてる状態なわけか。

じゃなくて！

これはもしかして、僕が不死川と、若者らしい遊び場を回るってこと？

しかも、僕のリードで？

……ちょっとマズいなあ。

興奮が一気に冷めるくらいマズい。

僕が知ってるわけじゃないじゃん。

高校生らしい遊び場なんて、知ってるわけじゃないじゃん！
何を約束してるんだよ、月曜日の僕！

クソツ！ 落ち着け、落ち着くんだ！

こういうときは知り合いに聞くに限るだろ！

ケータイを開き、アドレス帳をオープン！

それでもって、知り合いの中で一番遊んでそうな人にコール！
頼む……出てくれっ！

そんな思いが通じたのか、なんと2コールで取ってくれた。
よし、いいぞ、落ち着いてきた。

冷静に冷静に、今の状況を客観かつ正確に伝えるんだ。

右手にボールペンを持って、いつでも聞いたことをメモできる。
僕は今、最高に完璧だ！

「ノブさん！ 大変です！」

「お？ どうしたミナト。こんな時間に珍しい。急ぎだったら、部屋に来てもいいぞ」

いつも通り、特徴のない声のノブさん。

実は、真下の部屋に住んでたりするんだけど。

週の半分くらいは、大道芸の練習とかプロレスの演技指導とかでないんだよね。

だから電話したんだけど、まあいいや。

いちいち部屋から出る時間も惜しい。

とにかく現状を伝えて、アドバイスをもらわなきゃ！

「やりました！」

「あゝ、いきなり何のカミングアウトだ？」

「じゃないです！ 違います！ やるんです！ 好きな女の子と高校生らしいことを！」

「なっ…… おま、好きな子いたのか！ ていうか、どういう状況だ！」

「明日、その子と遠出するんです！ それで、思い出を作りたくて」

「なるほど。それで、俺に電話してきたわけか」

ノブさん沈黙。

何か、僕の説明に穴があつたんだろうか。

1秒、2秒、3秒……1分は経つたかな？

いやいや、もしかしたら、まだ10秒も経ってないかもしれない。
緊張して、時間の感覚がおかしくなってきた！

なんか、毛穴から変な汗が出てきてる。

その汗も、なんか粘っこくて気持ち悪い。

手の平がちよっぴり湿ってきて、まさに手に汗握りそう。

目の前が点滅し始めた時、それを見計らったかのようなタイミングでノブさんの声が聞こえた。

「よし、そういうことなら任せろ！

この手のセッティングは、学生時代に何度も体験済みだ！」

「ありがとうございます！」

一生ついていきます、ノブさん！

「いいか、まずは……」

本当にこの格好でいいんだろうか？

下は紺のジーンズに、割とスッキリしたデザインの黒い革靴。深緑のジャケットには、胸元と肩口にポケットがついてたり。

ジャケットの中は、よくわからん英語の書いてある、黒い地味目のTシャツ。

実は、ジャケットの防刃性能は凄くて、ちょっと切られたくらいじゃ……どうでもいいか。

口臭のケアも完璧なはず。

牛乳がぶ飲みして、ブレスケアだかを2箱も煽ったんだ。今朝は歯を8回も磨き直して、モンダミンも4回使った。

これで口臭がしてたら、諦めるしかないね。

さて、今僕は何をしているかっていうと。

ジーンズの尻のポケットに長財布を突っこんだまま、僕は拳動不審に視線をめぐらせている。

不死川はどんな格好で来るんだろうか、とか思いながらウキウキしてんだ。

だって、気になるでしょ？

好きな女の子と、おそらく2人きりで遊びに出掛ける！

これでウキウキしない男は、もう枯れてるとか残念な状態に違いないね。

僕なんかウキウキし過ぎて、昨日はスクワット1500回もやっつてから寝たよ。

ついでに、朝はいつもの倍の距離をランニングしてきたくらいだしなあ。

そういえば。

昨日ノブさんから手に入れた情報は、軽く間違ってた。

よくよく確認すると、どう見てもデートスポット。

洒落つ気のあるレストランとか紹介されても、そんなところには連れてけない。

拳句、メモの最後の方に『盛り上がってきたら肩を抱く』とか書いてある。

ちなみに、一番最後には、近隣の人目につきにくいホテルの名前が4つ書かれていて。

昨日の僕は『盛り上がってきたら肩を抱く、でいいんですね！？』って聞き返してたのか。

会話の内容を知ってるのがノブさんだけだっていうのは、不幸中の幸いだね。

もしこれが学校の連中に……不死川に知れてたら、僕は建設中の娯楽施設から飛び降りる。

でもまあ、最後のレストランとホテルを省けば十分にイケそう。

若者らしい遊び場ってことだから、妥当な線突いてるのかもしれない。

ない。

あ、余計なこと考えると落ち着くかも。

よし、この調子でどうでもいいことを考えよう。

なんてことを考え始めた途端、見慣れた着物姿が。

見慣れた、着物姿が……。

ああ、そっか。

あの着物、普段着でもあつたんだね。

私服姿が見たいとか思ってたけど、仕方ないか。

この調子だと、洋服着たりすることなんかないのかも。

……不死川の洋服、見てみたいなあ。

まあ、それはそれとして、不死川もコツチに気付いたらしい。

『おーい！』なんて手を振りながら、和服に慣れた足取りでコツチに駆け寄ってきた。

なんというか、今さらだけど器用だよな。

僕があんな服装で走ったら、20mもしない内に地面に顔面スマッシュしてるよ。

「すまん、遅刻したか？」

少しだけ息も荒く、真っ白な顔を少しだけ朱に染めて不安そうに聞いてくる、その表情ときたら。

右脳が極端に活性化されて、なんかトランス状態に入りかける有様。

脳味噌の中に煩惱という煩惱が湧いては消えてを繰り返し、平常心を失いそう。

それでもわりと理性は正常だってことは、この現実をどうにか受け入れられているんだろうね。

思ったより、混乱してないのかもしれない。

「いや、勝手にちょっと早く来ただけだから、気にしなくてもいいよ」

恋する男は、1時間30分なんて一瞬で吹っ飛ぶんだよ！

「そう言ってもらえると、此方もほっとするのじゃ」

「それは何より」

その安心した顔、脳裏に焼き付けさせていただきました。まったく不死川は、いちいち僕の脳髓をくすぐる！

恋人だったら人目をはばからずに抱きしめるところだ！

「さ、それじゃあ行くかうか」

「おお、期待しておるぞ！」

そっか、そんな笑顔を向けてくれるってことは、本当に期待してくれてるんだね。

じゃ、バツチリ期待に応えないとな。

何せ今の僕は、世界で誰よりも不死川に恋してるんだ。
僕以上に不死川を好きな男なんざ、今この時点じゃ確実に存在しない。

覚悟はいいか、不死川。
恋する男の子の真剣つてもんを見せてやる！

幕間『高貴な独白』（前書き）

7話目『遊びに行こう！』に至るまでの話を、不死川心の視点で振り返っています。

幕間『高貴な独白』

港 ミナト 三千尋 ミチヒロ。

よく知っておったわ……去年の半ばからな。

誰ともしやべらず、授業が終わったらとつとつと下校。

無口で、消極的で、周囲の連中とはどこか違うところを見ているよ
うで。

なんとなく、なんとなく此方の目は、ときおり港の方を向いておっ
た。

最初に知ったのは、此方より成績が少しだけいいこと。

数学と物理と現国なんかは、葵君に並び追い抜くこともあった。

日本史、世界史、公民は苦手だったせいかな、そこで此方と成績が近
くなっておる。

たった2番だけ順位が上だったのを何度も見ては、最初は齒噛みし
ておった。

そういうときに、初めて港の顔を見た。

どういう奴が此方のすぐ前に立ち続けるのか、面を拝んでやるうと
思っ

それで、本を読んではるところで、横から少し覗き込んでやった。

凄く怖い顔をしていたのを覚えておる。

いや、なんというか、威嚇するような顔つきであったりとかではな
くてな。

その……どこも、見ておらんように見えたんじゃ。

人は誰しも、必ずどこかを見ておる。

葵君は遠い未来を、井上はそんな葵君を。

榊原は、狂ったように今を見続けて。

九鬼は全てを高いところから見据え、メイドは九鬼を中心とした世界を見ておった。

他のクラスメイトも、どこかしら見ておった。

今でも、未来でも、過去でも、好きな人でも、嫌いな奴でも、得体の知れないものでも。

港は、何も見ておらんかった。

目に移ったものをただ認識して、それを脳に溜めていく。

何の感慨もなく、何の目的もなく。

それがたまらなく怖かったのを覚えておる。

それからじゃ。

此方が、港のことをよく見るようになったのは。

横を通り過ぎたりして、此方より頭1つ分くらい身長が高いのを知った。

180cmを超えておるかどうか、というところじゃな。

体育の時間に野球をしているのを見て、体が鍛えられているのを知った。

無論、その頃は格闘技に打ち込んでおったことなど知らんかったが。

授業中に悩むと、左の頬を左手の親指で撫でるクセを知った。学食で、週に2回以上はカレーを食していることを知った。

朝は、S組の誰よりも早く登校してくることを知った。放課後は、部活もやらずに誰ともツルまず、すぐに下校すること知った。

此方とは帰り道が反対であることを知った。

好きとか、そんなんじゃないぞ？

此方の好みは、もっとスラっとして、知的で、紳士で、高貴で。まあ、S組で言えば葵君みたいなのが好みじゃ。

山猿とまでは言わんが、港は此方の趣味ではない。

ゴツくて、陰気で、無口で、よくわからなくて。

粗野でないだけマシだが、最低限のマナーたる箸の持ち方も悪い。そのような輩を、此方が好きであるはずがない。

しかし、港は此方に手を貸してくれた。

正直、葵君にまで見捨てられるとは思わなかったが……港の助力も意外じゃった。

アイツにとっても此方にとってもキツカケにしか過ぎんかったんじやろうが。

それでも、此方が港のことが気になるには十分じゃった。

恋心、ではないと思う。

母性、は大きく違う。

愛情、などは慮外。

恩義、というにはズレている。

でないなら、友情ではないかと思った。

そう、これは友情なのじゃ。

大したことではないとはいえ、此方を救ってくれた。

それを嬉しく思ったのは、友情を感じたから。

そうに、違いないのじゃ。

じゃから、此方は友人になりたかった。

昔から、不死川の家に縛られてきて、友人らしい友人がいなかったからか？

とにかく、それを伝えられずには居られなかった。

山猿を倒してくれた次の日……先々週の金曜、つまり一週間ほど前か。

此方は覚悟を極めて、いつもより2時間も早く起床し、学校へと向かった。

人がおらん通学路というのも斬新じゃったが、もっと目新しいものを見られた。

教室の扉を開けると、数学の勉強を始める港がいた。

ああ、朝勉強しておったのか。
そういう軽い気持ちで見ているときに、港の視線が此方に向いた。
まさか、向こうから見ると思わなかった。
今思えば、此方に手を貸してくれたのだから、声をかけられないのが不自然なくらいじゃ。

名家の此方に手を貸したのだから、下心があつたのではないか？
突然、そんな考えが頭の中に踊った。
此方と仲が良かったわけでもないのに手伝ったのは、そういうこと
だったのか？
思わず、そんな風に考えてしまった。

じゃが、此方とて誇り高き不死川家。
そこで引き下がるほど、安くは出来ておらんかった。
……そういう考えのせいで、友達がおらんのじゃろうがの。

でも、勇気を出して振り絞った言葉は、

「おお、おはよう」

などという、気の抜けた挨拶。
港がコツチを見てはくれたが、向こうのあいさつも『おはよ』なんて軽いもの。
此方の勇気を返せ、と言ってやりたかったわ。

まあ、キツカケができたんじゃ、許してやった。

それで、すぐに此方は礼を言った。

無論、昨日の礼じゃ。

山猿退治をしてくれた、そのときの礼。

滅多に礼を言ったりしないから、かなり緊張したのは内緒じゃ。

と、港は港で『ありがたく頂戴仕ろう』なんて時代があったマネを。そんな馬鹿馬鹿しいことをする港のおかげで、緊張が吹っ飛んだ。

「うむ。苦しゅうない」

などと、虚勢を張れる程度には。

で、港が丁度なにか考え込んでおったので、ここぞと話題を変えてみた。

港が何故、此方を助けてくれたのか……ということは聞けない。

何かとんでもない答えが返ってきたら、此方にはどうにもできない。

もし、不死川家の恩恵にあずかるうとする欲目や下心があるという

なら、此方は失望したかも知れん。

だから、此方は聞けなかった。

港が、どうして実力を隠していたかということしか。

歩き方からして、強い様子はなかった。

重心もそれほどよくはなく、歩けば頭が上下する。

少なくとも、武道に精通した者の動きからは程遠い。

それで、港が実力者であるとわからなかった。

その質問の答えは『面倒だったから』
どうして隠すのを止めたのかという質問にも『面倒だったから』
相も変わらず、本心を見せん奴じゃった。

でも、安心した。

良く考えれば、質問の答え方いかんでは、港がどうして手を貸してくれたか分かる質問。

それでもって、港の答えは、どうして此方を助けてくれたかにも通じておった。

要するに『きまぐれ』ということなんじゃろつな。

塞翁が馬、とはよくいったものよ。

安心したおかげで、気が大きくなっておったんじゃな。

此方は、物凄いことを口走った。

「褒美として、高貴な此方が友人となってやろつ！」

言ってから、心底後悔した。

どこの世界に、異性に友人になるうなどと口走る高校生がおるか。
しかも、上から目線でものをいうとは、此方は学習能力がないのか！
ろくすっぽ話したこともなく、共通の趣味もなさそうで。

『まずは友達から始めませんか？』というわけでもないだろうに。

でも、やっぱり港は縦に首を振ってくれた。

……今思い出しても、下手な笑顔じゃ。

よっぽど笑いなれておらんのじゃろうな。

思えば、此方も大概アホじゃった。

友人ができたのが嬉しすぎて、思わず両手を握ってしまった。

まあ、そこから記憶があいまいじゃが、大事なことは覚えておる。そのあと、携帯電話の番号とアドレスを交換して。

世間話のシメに、そのうち街にでも繰り出そうという話になった。

クラスメイトが何やらささやいておったが、そんなことも耳には入らん。

それくらい、此方は嬉しかった。

それで、土日挟んで月曜日。

朝から港は憂鬱そうで、気になって声をかけてみた。

曰く『風間に決闘を申し込まれて、放課後に決闘することになって
いる』と。

これは、少しばかり此方も責任を感じた。

金曜の決闘で、港が山猿を瞬殺した後のことじゃ。

お山の大将の風間が、港に決闘を申し込んでおった。

この様子じゃと、断りきれんかったんじゃろうな。

とりあえず、此方に相談できる範囲で話をしてみた。
港は多くを語らんかったが、やりにくいとだけは言っておったな。
風間のスピードは、確かに厄介じゃ。

此方よりは早くないとは思うが、油断ならん相手に間違いない。
デカイ山猿とは別次元の危なさが、風間には確かに存在してある。
なんというか……何かを引き寄せる様な資質がある。
そしてそれは、定石を覆す不可思議さも持っておる。

結局、昼食の後にハゲとなんかしておった。

つまるところ、それが港の奥の手の再確認だったわけじゃが。
できれば、友人である此方を頼って欲しかった。

でも、正直、港の勝負は少しばかり無様じゃった。
風間を『一撃で倒す』と挑発して、大技を出させて。
キツチリ顔面にもらって、強引なカウンターで倒した。
とりあえず勝ちはしたが、鼻が変な方向に曲がって鼻血が垂れ流し
で。

負けた風間の方がダメージが少ないのが、妙に癪に思った。

しかも、あのバカは！
鼻が折れたまま『ちよつと鼻折れただけでおぼげさだつて』など
と！

鼻血が口から漏れてるのに気付かん奴が、大丈夫なわけ無かろうが！

だから此方は、すぐにタクシーを手配した。
急いで病院に、此方が信頼できる病院に。

葵紋病院も悪くはないが、せつかくだから友人に恩を返しておきたい。

じゃから、此方の……不死川の息のかかっておる病院に連れて行つた。

もう鼻の形は整っておつた……いや、少し高いか？

とにかく、鼻は大丈夫そうじゃつたが、頭はわからん。

蹴りを食らつて、結構派手にのけぞっておつたしの。

あとで医者に聞いたら『受け流した』とか言っておつたらしいから、アレは間違いなく脳にきておる。

心配になった此方は、しきりに港に確認した。

大丈夫か、頭は痛くないかと。

そうしたら、なんて言つたと思つ？

『鼻が折れたくらいダメージのうちに入らないよ』じゃと。

頭の心配をしたおつたのじゃ、頭の！

まあ、お陰でかなり危ないことが分かつたんじゃが。

すぐに入院させようと思つたが、港の奴は頑なに断つて。

『ほくら、こんなに元気！』とか言つて、バク宙に失敗して頭頂部から着地。

拳句『ほらね？』とか言うもんだから、もうどうでもよくなって家に帰ってしまった。

その折なんじゃが。

『そうだ、今いいこと思いついたんだけど、日曜日遊びに行こうぜ！』などと言ってきおった。

もうテンションからおかしかつたが、此方にとつても魅力的な提案じゃった。

友人と街に遊びに出掛ける。

此方にとつて、初めての経験じゃ。

それで、つい約束を取り付けてしまった。

しかし、港の奴はというど。

金曜日になるまで、一切予定を教えるはくれなかった。

月曜日から続けているように昼食は一緒に摂るが、やはり帰りは一直線。

まさか忘れてるんじゃないかなと思うたが、それさえも聞けなんだ。

一日我慢しようと思つたが、土曜の夜には耐えられなくなった。

教えてもらったアドレスにメールを送るが、すぐに帰ってこない。

どうすればいいかわからず、混乱してメールを送り続けた。

すると、21件目のメールに返事が来た。
どうやら、覚えていたらしい。

ということは、此方に相談がなかったのは、港が計画を立てているからか。

そう解釈して送ったメールに返事は来なかったが、大丈夫と解釈した。

久々に、本当に久々に、日曜日が楽しくなりそうじゃった。

そして日曜日。

思ったより熟睡できて、此方はスッキリと目覚めることができた。
しかし、困ったことに気付いてしまった。

服装。

此方がいつも着ている着物でいいものか。
普通の高校生は、洋服を着るものじゃ。

しかし、洋服と言ってもどんなものを着ていけばいいのか。

付き人に聞いても『何を着ても似合われますよ』しか言わんし。

結局、時間ギリギリまで悩んでおいて、どっという服を着ていけばよ
いかわからず。

制服として着ているのと同じ着物を着ていくなどという、芸のない
ことをしてしまった。

待ち合わせ場所は、商店街前……北口。

日曜日のせいかわ、寂れかけた商店街にもまあまあ人がおる。

その適度な人混みから外れるように、キョロキョロと視線を巡らす
港がいた。

拳動不審じゃ、バカたれ。

なんでか口元に笑みが浮かんだが、気にしない。

車から降りると、港の所へ走って行った。

なにせ、少し遅刻しておったからの。

悠々と歩いておっつては、失礼にもほどがある。

だから、結構キツいんじゃないが、着物でダッシュした。

「すまん、遅刻したか？」

などと、息も切れ切れ言っではみるが。
遅刻してるに決まっておる。

車の中の時計が、もう待ち合わせよりも10分遅れていた。
それからどれほど時間が経っていないとはいえ、遅刻は遅刻。

だが港は、

「いや、勝手にちよっと早く来ただけだから、気にしなくてもいいよ」

と言ってくれた。

なんというか、こづいづとこるで気は利くんじゃな。

そのあと、2、3言葉を交わしているうちに、此方の呼吸も整って。
それを確認した港が、此方を促した。

「さ、それじゃあ行くかうか」

「おお、期待しておるぞ！」

思ったより大きな声になってしまった。

だが、これでいいのかもしれない。

友達と遊びに行くというのは、きつとこついつことなんじゃろつな。
期待もしておるし、心踊るのは事実だしの。

8話目『心、軽やかに』

定番と言えばゲーセンとカラオケ！

なんてアドバイスを、果たして鵜呑みにしていいものかどうか。男同士ならそれでいいだろうけど、女の子連れてくんだもんなあ。ま、代替案が存在しないから、それでいくしかなかったんだけど。とりあえず、こういう問題であんまりノブさんは頼らないことしよう。

今、僕と不死川がいるのは、七浜のゲームセンターだ。川神でもいいんだけど、最近治安が良くないっていうしさ。それに、こういうときに地元で遊んでも仕方ないような気がしてね。そういうわけで、昼間は比較的治安のいい七浜に来た。

正直、大丈夫かどうかに関してはかなり不安だったけど。どうやらゲーセンに関しては存分にお気に召してくれてるらしい。

「ぬうううう！ 全っ然取れんではないか！」

コラコラ、ボタンをガンガン叩かない。

それと、初めてで500円で取れるサイズのヌイグルミじゃないか

ら。

さつきから物欲しそうにクマのヌイグルミを見つめていた不死川。すぐに物欲に負けて、やったこともないクレーンゲームに挑戦していた。

アームの力がそんなに弱くないだけに、不死川の要領の悪さを再確認。

結構サイズのあるヌイグルミ。

大きな筐体にぎゅう詰めになってるけど、取れるようになってるのは2体だけ。

色が3種類あって、黒いのと茶色いのと、あとは白いの。いま取れる状態なのは、黒と茶色だけ。

ちなみに、不死川が狙ってるのは黒い方らしい。

「港！ お前はどうかできんのか!？」

まるで僕を睨むように、キツとした表情で声を上げる。

おお……こつという表情が自分に向いてくるとは思わなかった。

「まあ、割と得意な方だよ?」

ごめんなさい、嘘ついた。

割とどころか、すっごい得意なんだよなあ、こつという空間把握が必要なものは。

慣れてるからコツも知ってるし、このチャンスを生かしたくって仕方ない。

さつき2000円を崩して手に入れた、20枚の100円玉。

まあ、不死川が少しずらしてくれたおかげで、5000円あれば1匹は獲れる。

不死川の代わりに筐体の前に立って、僕は5連続で1000円玉を突っ込む。

説明がなかったけど、これ、200円1プレイのクレーンゲームなんだよ。

5000円で3プレイってわけだし、ここは男らしく5000円投入しとくもんさ。

左側から割り込むようにして、右手に握ってた1000円玉を5連投。不死川が息を飲む気配があったのは、気のせいじゃない。

さあ、こっからが見せどころだ……ってところで、ちよつと気付いたんだけど。

で、今さらだけど、距離近いんじゃないかなあ。

つてすると、さっき息を飲んだのは、僕との距離が近くなったから？ なーんて勘ぐってみたけど、どう見ても視線は又イグルミに縫い止められてる。

あゝ、いかんいかん、ちゃんと集中しろ。

……ええい、不死川の匂いを嗅ごうとするのは止めるんだ、僕。

集中力を全開にして、クレーンのアームと又イグルミの位置を把握する。

頭が大きいから、狙うのは首の付け根の気持ち上。

3回あれば、ポケットに引きずり落とすくらいは余裕だ。

アームを右にずらして……ここでストップ。

それであとは、これくらい前進させて……ストップ。

途中でアームを止めれる機能があるらしいけど、そんなのは使わな
い。
ぐいぐいとアームは下がって行って、ヌイグルミの首にぶつかる。
すると、圧力センサーが衝突を検知して、ゆっくりとアームが開く
で、あとは少しずつヌイグルミをポケット側にずらせば穴に落ちる
はず。

……はず、だっただけど。

何の因果か、クマのヌイグルミはエビ反り気味に持ち上げられ。
頂点に達したときの衝撃にも耐え抜き、ポケットに向かってどんど
ん進む。

で、ふらつきながらもゴールに到達して、ボスッとヌイグルミらし
い音を立てて落ちた。

それに続いて、ちょっと間の抜けたファンファーレが鳴り響く。

呆気にとられたよ。

不死川も、僕も。

慌てた様子でしゃがみこみ、不死川は慣れない手つきでヌイグルミ
を引きずりだした。

目を丸くして興奮気味で、黒いクマのヌイグルミの首があらぬ方向
に向くほど強く抱きしめている。

クソッ、ヌイグルミを抱きしめている不死川を、更にその上から抱
きしめたい！

ってダメだろ！ 落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け落ち着
け落ち着け！

「い、一回で取れるものなのか!？」

「いや、まあ……本当は何回かズラして取るつもりだったんだけどなあ」

偶然偶然、って謙虚にしちやいるんだけど。

既に不死川は、そんな僕の姿なんか目に入ってなくて。

あと2プレイ残ってて、不死川の目は既に茶色いクマに釘付けになっ
つてて。

僕の右手も、もうボタンにしっかり伸びていた。

そのときの不死川家の関係者の顔ときたら、今すぐにも電話で謝りたくなるくらい。

あの人たちも、クマのヌイグルミを回収するためだけに呼ばれる日が来るなんて思わなかったらうけど。

んで、テンションが上がったまま、不死川と僕は次々とプライズに挑戦していった。

戦果は、ストラップが6つに、手の平サイズのヌイグルミが2つとあったところ。

ストラップ取った時の不死川の喜びようといったら、今までに見たことない具合だった。

普段の意地の悪そうな笑顔も嫌いじゃないけど、ああいう笑顔も好ましい。

結局、ほとんどの景品は僕が取ったんだけど、不死川の健闘賞でことで折半したんだよね。

不死川もさ、ストラップ1個しか取ってないのに、それをわざわざ僕にくれたりなんかするんだもん。

惚れ直すよ、まったく。

と、不死川の目が別のコーナーを見ていた。

あれは、最近じゃ同伴でもないと入れなくなつた、アレだ。プリント倶楽部、俗に言う『プリクラ』という奴だ。

「ほお、プリクラか」

「ん？ 撮ってく？」

「おお……いや、止めておくのじゃ」

もし気まぐれなんてもんがあるなら、すぐにこの世から消えて欲しい。

せつかく不死川とツーショットのチャンスだったっていうのに！

少し食い下がってみようか。

そう思つて不死川を見たけど、視線が固定されてる。

これはいったいどういう……なるほど。

アレに見えるは、F組のヤマмба。

今どきの女子高生の割に GANGUO とか、ちょっと時代錯誤。

まあ、無理だなあ。

弱みとは違うけど、あの連中に妙な噂流されるのは面倒だし。

不死川が目立ってるから、誰か1人くらいは目撃したかもしれないでも、目に見える脅威を避けるくらいはするべきだ。

気付かれたら気付かれたで、ケンカ吹っ掛けてくるかもしれないしね。

「じゃあ、どっか飯でも行こうか」

「そうじゃな。時間もちょうどよい」

時計を見ると、時刻は13時20分。

そっか、電車使つて移動してるもんなあ。

そりゃ結構いい時間になるね。

「なにか希望はない？ 食事処ならそこそこあるけど」

「ふむ……七浜に旨いうどんを出す店があると聞いたが、知ってるか？」

「うん。歩いて10分くらいだし、そこにしようか」

ノブさんに確認済み。

でもって、今朝ネットで細かい場所を確認してきたから大丈夫。

休日よりも平日に込む店だし、ラストオーダーは2時。

普通に考えれば、席も空いてるだろう。

さ、気を取り直して出発だ。

プリクラだったら、また撮る機会がある……といいなあ。

ちょっと路地裏に入るんだけど。

そこは確かに、テレビや雑誌などで紹介されたこともある名店だ。

やや汚い路地裏の雰囲気とは打って変わって、店内は非常にキレイだった。

古めかしいけども、そこには十分な清潔感があった。
どういう理屈か席がガラガラだったから、奥のテーブル席で食事をすることに。

「うむ、うまい！ 本場を名乗るだけはある！」

「そうだね」

ところで、うどんを啜っても汁が飛ばないのは、一体どういう原理なんだろう。

僕も同じくらい感じで啜ってるけど、既に2回もテーブルに汁を飛ばしちゃった。

なんていうか、やっぱ器用なんだってのがよくわかるね。

お嬢様らしく仕込まれてんだろうね、礼儀作法とかそういうのは。

しかし、本当においしそうに食べるなあ。

僕は特別うどんが好きじゃなくもないけど、妙においしく感じるよ。こここのうどんがおいしいのか、不死川と食べてるからか。

こんなときに考えるのも面倒だから、どっちもっていうことにしておこう。

僕は、冷うどん（大）を1つに、とり天とナス天と半熟玉子天と、海老天むすを1つずつ。

不死川は、温うどん（中）と、しいたけ天と山菜天……我慢しきれず、海老天むすを1つ。

まあまあ金は取られてるけど、値段分の価値は十分にあるんじゃないかなあ。

僕としては、不死川が喜んでる顔で腹いっぱいになりそうだけど。

と、僕の右手のあたりを不死川がじつと見つめている。
そんなに見つめられると前後不覚に陥りそうだけど、どうして凝視
してるんだろうね。

「どうしたの？」

「そのままにしておれ。指の力を抜いておくのじゃ」

なんだ、とり天が欲しかったわけじゃないんだ。

まあ、あんだだけ汁にドップリ浸かってたらなあ。

せめてナス天だけでも分けてあげようか。

そんなことを思っていると、右手がふつと包まれた。

不死川が、僕の右手の指を、あの白い指で矯正する。

割と無理矢理に指を動かされたせいで、とり天が静かに汁の中に落
ちる。

……ああ、わかった。

箸の持ち方が悪かったんだね。

「ん？ ほれ、どうした。力を抜かんか」

「抜いてるよ」

そう、力は抜いている。

でも動かないんだよね、これ以上は。

だからほら、痛いから付け根をいじらないで！

「この指、関節がずれてんの。」

変なところにくっ付きちゃったから、箸が上手く持てなくてさ」

事実だ。

詳しくは思い出さたくないけど、とりあえず可動域が狭いというのは事実。

それ以上言わないし、それ以上聞いてこない。

だったら、それでいいじゃん。

「そうか。ならよい」

「うん、そう言ってくれと助かるよ」

そんなに気になる持ち方してたのかなあ。

それとも、指の怪我で妥協してくれる程度の見苦しさだったのかな？

どっちにしても、深入りされなくて有り難いね。

相手も気にしなけりゃ、こっちも気にして欲しくない。

無理に聞かれたって、どうせ答えやしないけど。

……とり天、ちょっと不味くなつたな。

冷めちゃったし、汁が染み込み過ぎだよ、まったく。

9 話目 『最近の若者は』（前書き）

この話には、骨折を含む残酷表現が含まれています。

私としては特別残酷に書いたつもりではありませんが、それに類する表現が苦手な方はここで戻られるか、ある程度覚悟をした上で読んでください。

話としては、戦闘が始まるところまで見れば次の話に充分つながります。

補完は行うつもりですが、次の話をスムーズに読むために戦闘がはじまる部分までは目を通していただくことをお勧めします。

9 話目 『最近の若者は』

「それで、これからどこに行くのじゃ？」

店から出て、んぐつ、と伸びをした後の不死川の第一声がコレ。

まあ、そりゃどこ行くかなんて話してないから、気になるだろうけども。

正直言えば、カラオケってのはないと思うんだよ。

僕自身、不死川とはかけ離れてそうなジャンルの歌しか知らない。

シャウトする感じの曲と、電波臭い曲と、静かすぎる曲。

どれもこれも、遊びに行った折にカラオケで歌うような曲じゃない、と思う。

それで、どうしようか……なんて思ったのも束の間。

少し焦ったけど、いいことを思い出した。

確か、日曜日はノブさんが七浜で大道芸をやる日だ。

あの花火や火薬を使ったフラッシュ芸だったら、不死川も喜ぶに違いない。

不死川が興味津々になっている間に、どうにかして次の行動を考えればいいさ。

「そうだね、大道芸でも……」

何か、コッチ見ながらニヤニヤしてる集団が。

中学生くらいの奴が3人と、外人さん？

中学生の身長が年相応で、僕より少し高いくらいの外人さんが見える。

ガラはよくなさそうだけど、まあほっとけばいいか。幸い、不死川は気付いてないみたいからね。

「大道芸？ 見るほどの奴がおるのか？」

「まあ、初めてみる芸かもね。見て損はないってところ」

そうさ、ゆっくり、不自然じゃないように距離を取ろう。

ノブさんのところまで行っちゃえば、ガラの悪い連中も減るだろうし。

そう思っただけで海浜公園に誘導しようと思っただけ……ダメだった。あゝあ、面倒くさいなあ。

ガラの悪い……もうバカでいいや。

バカな中学生くらいの奴3人と、バカな外人1人。

わざわざ早歩きしてまで追ってきたってことは、もうどうしようもないだろ。

ニヤニヤしながら、2人が僕と不死川の前に回り込む。

よくもまあ、幅5mもない道で手のかかるマネをしてくれたもんだ。

怪訝な顔をした不死川が後ろを見ると、似たような顔をした中学生と外人が1人ずつ。

身長も不死川より少し大きいくらいで、特に誰が突出してるってこ

とはない。

ガキが色気づいて、揃いも揃って金髪にしてんじゃないかと思うけど。

とりあえず便宜的に、前にいる2人をバカ1、バカ2。

後ろにいる中学生をバカ3として、外人は外人でいいか。

とりあえず、僕も不死川も体の向きを変えて、バカたちを左右に据える。

半分背中合わせみたいになってるけど、それは仕方ない。

後ろから殴りかかられたら溜まったもんじゃないしね。

「ねえ、ニイちゃん。無視しないでよ」

「へえ、可愛い彼女じゃん」

バカ1とバカ2。

コイツら、いつの不良だよ。

変なドラマかマンガの見過ぎじゃないの？

あと、不死川を舐めるように見るな。

僕だって舐めるように見たのは5回くらいしかないんだぞ！
しかも遠くから！

「うわ、釣り合ってたね〜！」

黙れバカ3。

余計な御世話だ。

百も承知だよ、そんなもん。

好きな相手とは釣り合ってなきゃいかんのか。
たかだか20年も生きてないガキが、僕に意見するな。

「オジョウサン。ボクガ、イトコロニエスコートスルヨ」

必要以上にムカツクから、片言で話すんじゃねえよ。
日本に来たかったら、もっとしつかり勉強してこい。
僕より身長があるからってイイ気になってんじやないぞ。

あと、その瞳孔の具合からして、覚醒剤とかの常習者なんだろ？
そんな奴が僕に偉そうにしようなんざ、文字通り100年早いわ。

さあ、どうしよう……いや、どうしてくれようか。

不死川との楽しい思い出を噛みしめながら眠るはずだったのに、予定が大幅に狂った。

例えコイツらを撃退したりあしらったりしても、雰囲気は元には戻らない。

じゃあ、今日はもういいや。

「ねえ、不死川。今日はお開きにしようか」

「いや……コイツらのしてから続きでいいじゃろ」

「ダメダメ、不死川にも戦わせることになるでしょ。」

男の子としちゃ、こういうときは女の子を無事に逃がすのがベストなんだよ」

僕が『ちよつとは見栄張らせておくれ』なんて付け加えたからかなあ。

不死川は、わざわざ息を大きく吸ってから、相応に大きな溜め息をついた。

「男の意地という奴か？」

「似たようなもんだよ。まあ、埋め合わせはするから、顔を立ててもらえるかな？」

「……今回だけじゃぞ」

その言葉を契機に、僕は外人に飛びかかった。

不死川もタイミングは分かったみたいで、僕の真横をすり抜けて一目散に駆ける。

外人と同じ方にいたバカも反応できず、不死川は見る間に離れていった。

よし、これで不死川はキッチリ逃げてくれたらうな。

うん、不死川を逃がせて本当によかった。

そうじゃないと、不死川に嫌われちゃうところだったよ。

さあ、こつからが本番だ。

このクソボケどもには、1人残らず地獄を見せてやらないと。まずは……面倒臭そうな外人から潰そう。

まだ間合いは遠いけど、逆にそれがいい。

もしかしたら反撃できるかもしれない、なんて考えさせることができる。

それが心の際になって、俺のタツクルが決まる確率は跳ね上がるってわけだ。

まあ、フェイントも付けるわけだし、まず間違いなく決まる。

最初の一撃は、外れても構わないつもりで出した左ジャブ……左の順突き。

ただ出すんじゃなくて、飛び込むような勢いで出すのがポイント。ステッピンをしながらのジャブだと、バランスが取れすぎる。

打撃の重心のままじゃ、タツクル決めるのは難しいからな。

それに、当たれば1発で済むから、しっかり踏み込んでおきたい。

で、予想通りというか、外人が下がって避けた。

しかも、単に下がったんじゃなくて、上手にステップしながら。

つまりコイツは、格闘技の経験があるってことだ。

でも、今のタイミングで反撃しなかったってことは、大したことないんだろうけど。

どっちにしても、先手を取って正解だった。
すばやく動き回られると、潰すのに時間がかかっちゃうもん。

飛び込みの突きのあとに、すばやく重心を落とす。

そのまま肩からぶつかると、外人の腹に飛び込んだら……ほら、
胴タツクルだ。

タツクルを切ってくる様子がないから、そのまま足を引っ掛けて。
右側に少し振り回すみたいにながら、外人からサイドポジション
をとった。

……せめてトップポジションが取りたかったけど、仕方ないか。

息苦しそうにしてる外人の上で、相手の右腕を取りながらどうする
べきか考える。

相手は全部で4人いて、コイツ以外は全員中学生だった。

しかも、特に鍛えた様子もなければ、体が大きいってこともない。
要するに、このボブとかいう外人に頼り切ってる可能性が高い。

つてことで、まずはコイツの腕でも折って、動きを封じることにし
た。

外人の顔に肘を落として、意識を顔に集中させる。

もちろん、生半可な肘じゃなくて、目の下をピンポイントで決る。
肘に感じた感触からして、骨にヒビくらいは入ってるかも。

まあ、本命はそっちじゃない。

その顔の痛みを味わってもらってる間に、ボブの右腕を両足で挟む。
噛みつかれないように、挟んだ足はボブの頭の後ろでクロスさせる。
ちよっと普通とは違うが、ブラジリアン柔術のセオリー、腕ひしぎ

固めだ。

腕絡みの方が良かったかも知れんが、やっぱり慣れた技の方が信頼できるでしょ？

ミチミチと靱帯が伸びる音。

ギシギシと関節が軋む音。

喉から漏れる、悲鳴代わりの空気の流れる音。

少しずつ連続的に響く、分厚い布を引き裂いたような音。

限界点を一気に過ぎるときに聞こえる、小気味い音と靱帯が完全に切れる音。

『ゴリッ』って鈍い音と、『ブチッ』って間の抜けた音が重なって。

文字通りに心地のいい音が、僕の全身を突き抜けた。

耳に響く叫び声と、肉を伝わる靱帯の切れた音が出す振動。

いやあ、このコラボレーションって、本当に気味がいいよね。

「ヒッ！」

バカ2が、叫び声を上げるボブを見て悲鳴をあげた。

ううむ、どうやらボブってのは、コイツらからすれば強かったらしい。

具体的にどの程度かは分からなかったけど、早めにやっといて正解だった。

こっそり人差し指も折っておいだから、心もきつと折れてるよね？

でも、僕はまだ満足してない。

僕の幸せな時間を邪魔したんだから、それなりの不利益をプレゼントしなきゃ。

因果応報って言葉の意味を、二度と忘れないように体に刻みつけてあげよう。

ようやく足が動いたのか、バカ1の後ろ姿が見えた。

……今から追うのも面倒だし、後で始末しよう。

つてことで、手近なバカ3をとらえて、顎に右掌打を打ち込んだ。ツツパリみたいにまっすぐ出すんじゃなくて、フック気味にアゴを打つ。

まあ、1発で終わらせてもつまらないから、アゴのつなぎ目を打った。

それでも脳が揺れて、足元がフラツときたらしい。

僕はとても優しいから、少し重心を下げて、斜め下から肘を叩き込んだ。

狙ったのはもちろんアゴのつなぎ目で、今度は思いっきり振り抜く。アゴの筋肉が切れる感触と、アゴが砕けた感触があった。

いやあ、やっぱ顔面に肘を入れるなら、こうでなくっちゃ

当然だけど、それだけじゃ終わらせない。

崩れ落ちるみたいにして、ストンと膝をついたバカ3。

そのバカ3が倒れないように、両耳を掴んで頭をキープして。

正面から右の膝蹴りを、死なない程度に加減して顔面に突き刺す。

そのまま膝を戻さずに、耳を手前に引っ張りながら顔に押しつける。

するとほら、イヤ感じに両耳が干切れて……汚いから捨てとこう。

さあて、残るは……よかった、バカ2がやつぱり残ってた。
分かるよ、怖かったんだよね？

僕がさつき見たときにも、足が震えてたもんね。

バカ1が逃げてくのに、あっちみたりこっちみたり、動揺してたも
んね。

優しい僕は、バカ2の方へとゆっくり歩く。

優しい笑顔を心がけて、バカ2を10年来の友人のように抱きしめ
てやる。

うんうん、震えてるね。

自分が今から何をされるのか、それが怖くて震えてるね？
震えたところでどうにもならないのに。

……でも、救いも何もないっていうのは、ちよつと虚し過ぎる気が
する。

だから、少しだけ、チャンスに見えるモノをぶら下げることにした。
もしかしたらっていう、すがりたくなるような希望を。

「そつだ、さっきの彼を呼び出してよ。ほら、逃げた奴」

「で、できないよ！ 第一、タカシくんのケータイ番号知らないし

……」

「そつか。じゃあ、君がボブくんみたいになるだけだね」

なるだけ平然とした感じで言ってみる僕。

『ヒッ!』とか言っても、許してあげない。

タカシくんだけは、色々使って探して、それから潰すことにしよう。手間が少し増えるけど、まあ、必要経費だと思えばね。

さあ、コイツはどうやって壊そうかな。

とか思っつて、眼球を指で擦ってあげようとしたところで、急に口が軽くなった。

「ごごごめんなさい! 知ってます! すぐに呼びますから、だから助けて下さい!」

可愛らしいことを言うじゃないか。

そうそう、それが中学生らしい反応だよ。

僕は、コイツを抱きしめるのをやめて、少しだけ自由にしてやった。

僕の攻撃圏内にいるうちは、もうよっぽど逃げないだろうしね。

逃げたら逃げたで、二度と逃げられないように足を折るだけだ。

「じゃあ……七浜の海沿いに貸し倉庫あるのはわかる?

その裏手に、30分後に来るように呼んでくれるかな?」

「は、はははい!」

「ほらほら、落ち着いて落ち着いて。息を整えて、現状を悟られないようにしてね」

笑顔の中に『バレたら無事には帰さない』という狂気を秘めて。

それが功を奏したのか、バカ2はなんとか震えを止め、バカ1に連絡をした。

「あ、タカシくん？ 今逃げてるよ。うん大丈夫大丈夫！

ボブちゃんとマサキは仕方ないよ。僕たちが無事だったんだからよしとしようよ。」

それでき、さっきの高校生だけさ、数集めてフクロにしちゃわない？

うん、うん、とりあえずさ、七浜に海沿いの倉庫あるじゃん？

一回そこに集合してから、とりあえずどうするか相談しようよ。

うん、じゃあ今からそっち行って先に待ってるから、すぐに来てね！」

携帯電話の通話終了ボタンを押すと、バカ2は突然息が荒くなった。それでもって、卑屈な目で僕に懇願する。

言うことを聞いたんだから、助けてくれるよね？

そんな思いが、その面から聞こえてきそうだった。

あっはっはっはっは。

バカだなあ。

許すわけないじゃん。

「ホント、バカはどこまで行ってもバカだよな」

両肘の骨が折れて、と右アキレス腱が切れて。

「バカ1……タカシだったっけ？」

とにかく、そいつは呻き声をあげながら、口の端から泡垂らしてた。正直、引っ掛かればいいな、くらいのつもりだったんだけど。

見事に引っ掛かってくれたから、必要最低限のダメージだけに留めておいたり。

「ついでだから、説教でも垂れておこう。」

「ガキだからって皆が許してくれると思うなよ、クソガキ」

まあ、聞こえちゃいないだろうけどさ。

あの後僕は、バカ2の喉に突きを入れた。

『ゲエツ！』とかいいながら喉を押さえてる所に、左膝を狙った右横蹴り。

加減はしないで、そのまま逆関節にしてあげた。

関節の痛みと構造上の問題で崩れ落ちたところで、右の爪先で腹を

蹴り上げて。
腹を抑えたから、ガラ空きの鎖骨を右足刀……足の側面の小指側で蹴り折って。

仕上げに、足首を踏み砕いて真っ直ぐ歩けないようにしてあげた。

もちろん、バカ2だけじゃ不公平だ。

ボブとバカ3も、似たような目にあわせておいた。

ボブは2度と激しい運動ができないだろうし、バカ3は2度とボールが投げられないだろうね。

まあ、アレだ。

自業自得なわけだし、これでコイツらもバカなことはしなくなるだろうし。

コイツらの悪事によって不快になった人らの弔いにもなるし。

コイツらが犯すであつたらう犯罪も未然に防げたわけだしね。
なぐんだ、イイことづくめじゃん。

そう思うと、なんか気分が良くなってくるから不思議なモンだ。

……あ、そうだ。

後始末だけ頼んでおかなきゃ。

いくらバカでも、放っておくと面倒だしね。

ってことで、携帯電話を開くと、僕はこういつとときに頼りになる相手にコールした。

相手にかかるまで待ちながら、僕は思う。

今日は散々な一日だったけど、前半は楽しかったなあ、とか。
不死川からもらったストラップ、明日から付けてってみよう、とか。
次回は不死川をどこに連れて行こうか、とか。
むしろ、今度は不死川に任せてみようか、とか。

無限に広がる未来の可能性を想像しながら、僕は小さく笑った。

1 話目 『川神ランキング』

月曜日の全校集会。

イイ歳した高校生が、わざわざグラウンドに集まってる様子は壮観だ。

いい加減1年生も分かってきたみたいで、鼓膜を痛めないようにキツチリ整列。

朝っぱらから妖怪ジジイの咆哮なんか聞いたら、1週間気分悪いしね。

しっかし、昨日は楽しかった。

ああいうことがあるなら、月1ペースくらいで七浜に行ってもいいかも。

人間を好き勝手に壊せるチャンスって、そんなないもんなあ。

あ、でも、せつかく不死川と遊びに行ったのに邪魔されたんだったつけ。

じゃあ、やっぱやめとこ。

なんていうか、こうやって無駄なことを考えてないと朝礼は長い。

中学の時もそうだったから、これはもう仕方ないことなんじゃないかなあ。

空気呼んで30秒以内に朝礼済ます校長も……いや、それならむしろ朝礼しないか。

特別な伝達事項があるならまだしも、こういう集会は定期的にやる必要はないでしょ。

いちいち全学年集めて、そんなに重要な話をするわけでもなし。こういうシステムチックじゃないところが、現代日本の美点だっていうのかな？

武士道ってのもそうだけど、そんなん守って負けたらアホだよ。

勝ってこそその武士道、勝ってこそその見栄だ。

負けの方が得るものが多いっていうなら、始めから戦わんで欲しいね。

最近じゃ、そういう風習が減ったよね。

潔さとかそういうのよりも、目先の勝利を目的にする人らが増えてきた気がする。

柔道の重量級だかの金メダリストとか、モンゴル人な横綱とか。今はもう、武士道だのって時代じゃないんだろうね。

そりゃそうだ。

負けてしまったなら、努力も才能もゴミと同じなんだから。

人生で成功したければ、負けより勝ちを増やさなきゃいけない。

知力で勝って、武力で勝って、人脈で勝って、家柄で勝って、経済力で勝って。

容姿での勝敗を決してもいいし、人気でも構わない。

1つでも勝てるものを持つてる奴がのし上がって、そうでない奴が踏み台になる。

たまには大逆転かます奴もいるけど、そんなのは滅多に見たことがない。

何度もしつこいけど、現代の武士道ってのは勝った奴の方便。節制したから勝利できた、精神的に尊くあったから勝てた。

そんなバカな話があるなら、技術磨かずに勝ってみろってんだよ。技術が拮抗したときに武士道が生きてくる、なんて言う奴もいるけどさ。

そんなにギリギリの状況でしか使えないものを磨く意味が分からないね。

心を支えるものであれば、武士道である必要なんてないのに。

何が楽しいのか、潔さを強調してさ。

武士道なんて、服従と諦念に意味づけをしただけのモンだろうが。

「……からして、腕に自信のあるものは切磋琢磨するように！」

ん？

今のフレーズ、ちょっとおかしくないかなあ。

なんで腕に自信のある連中って限定したんだろ。

いくら川神学園が武道に力入ってるからって、そればっか鼻負してるわけじゃなし。

きちんと学業にも身を入れさせてるのに、武を優先する発言をしたのはどうして？

どうにも気になった僕は、前にいるハゲの肩を人差し指でノック。

振り返らずに『何かあったか？』と聞いてくれるハゲ。

うん、あったあった。

僕が話を聞き洩らして、それが気になって仕方ないってことが。

「あのさ、もしかして特別な話があったりした？ 思い切り聞き逃したんだけど」

「それは教室で説明する。てか、担任からも話あると思っぜ」

……これ、結構ヤバいことがあったんじゃないだろうか。

まさかとは思っけど、例の件、隠ぺいに失敗したなんてことないよね。

もしそうだったら、かなり面倒なことになってそうだ。

それならそれでどうにかするつもりだけど、どこまで誤魔化せるか。不安になるくらいなら、いっそ全員の下アゴ踏み砕いておくんだっ
たなあ。

ま、不安に思っても仕方ないか。

とりあえず、マズい話だったら昼飯食いながら対策練ろう。

で、グラウンドから帰ってきて教室に。

HRが長く感じるのは、絶対にジジイのせいだろうね。
あのメリハリのない話し方で長時間立たされたら、誰だって疲れてくるよ。

そんな疲れた顔は表面に出さないようにしながら、僕は担任の話に耳を傾ける。

一体どんな話が朝礼であったのか、今までで一番知りたいたいからね。

「あゝ、おまえら。さつきも聞いたとおり……」

僕は聞いてません、なんて口が裂けても言えない。

半分が机に向かってる中でHRする担任は、割と根気強い方だと思う。

もし僕がこの担任だったら、胃炎かなんかで辞めてるね。

頭抱えちゃってるけど、それもまあ1年経つと見慣れてくるもんでこの人は普段から悩みが多いんだろうなあ、なんて邪推もしてしまったり。

そんなことはともかく。

僕は早く、今朝の校長の話の続きが聞きたかった。

教室を戻るときに聞き耳立ててみたけど、どうやら例の件は関係ないらしい。

学校全体が色めき立ってるっていうか、いい意味でざわついてたから。

体育祭が近かったけど、それにしちゃ運動苦手そうな奴らも盛り上がった。

ってことは、何か特別な催し物があるのかもしれない。

「今日から、任意参加で『校内格闘技ランキング戦』をやるそうだ。基本的には男女混合で、ルールは試合ごとに組み直し。

上位10人には毎週食券出るから、自信があれば参加してもいいんじゃないか？」

『オジさんのHRよりは面白いと思うぞ』と付け加える担任。なるほど、確かにこれは面白そうだ。

……教育委員会とか県とか、許可出してくれたのかな？

まあ、決定事項なら口出しするつもりもないけど。

そのまま静聴してみると、20位より上に勝った人間にも食券が出るのがわかった。

あと、20位以上の人間が勝負を挑まれて勝っても食券が出る。

もちろん、上位に行けばいくほど枚数は増え、5位以上は上食券が出る。

上手にやりくりすれば、食費が浮くシステムなわけだね。

まあ、こっから長つたらしい話があったんだけど。

全体のルールをまとめると、要はこつということ。

- 1．任意参加で、参加者による格闘技ランキング戦を行う。
- 2．参加者の最初の順位付けは、学園側にあるデータと決闘の結果

から判断。

3・100人以上参加者が集まった場合は、101位以下の順位はつけない。

4・6位以上の差がある者に勝負を挑む時は、学園側からの許可が必要。

5・武器の使用はルールによつては認められる。

6・20位以内の者に勝利すれば、勝者に食券が配布される。

7・ランキング15位以内は、1週間ごとに食券が配布される。

8・その時のランクに応じて、イベント戦などへの参加を要求する場合がある。

9・ランキング戦の結果を不服とし、報復などを行った者は停学とする。

10・川神百代を除いた全生徒に参加権がある。

うん、これなら参加してもいいかな。

上手くいけば、上位20位くらいには入れそう。

戦って食券もらえるってんなら、願ってもない話だし。

ルールがちよつと気になるところだけど、まあ、悪いようにはならないでしょ。

よっぽど男女間の勝負とかじゃない限りは、武器の使用もなさそうだし。

それさえなきや、僕なら充分に戦えるさ。

……不死川も参加したら、そのうち当たるんだらうけど。

「あゝ、そうそう。このランキング使って賭けことなんかすんなよ

「？」

賭けごとしろってことかい。

まあ、賭場見つけてもスルーしてる学校だからなあ。

僕も賭ける側に回って、ひと儲けするのも面白そう。

「とりあえず、参加したい奴は放課後に体育館に集合だそうだ」

なるほど、そこで一旦全員集めるってことか。

顔を覚えておけば、相手が何者かわかって対策を練れるかもしれない。

参加するんだったら、どうせ行かなきゃいけないんだろうしさ。

面白いことに首を突っ込めそうだし、多少の時間の口入は必要経費
ってことにしておこうか。

昼食が終わって、5、6限をこなして放課後。

やっぱりっていうか、不死川も参加するみたい。

昼飯のときにはもう知ってたけど、改めてこうなると不思議な感覚

になるね。

まさか、同じ土俵に立つことになると思ってもみなかった。

体育館に入るときに学年とクラスと名前を書いたから、これで判別するんだろっか。

順位を付けるって言ったけど、全員の顔と名前と実力が分かるのかな？

いちいち資料引っ張りだしたりとか、変な手間かけないよね？
どっちにしても、長引いたらかなり面倒だ。

こういう悪い予感、杞憂で済んでくれるといいけど。

体育館に集まったのは、男女合わせて80人くらい。

1学年7クラス構成で、1クラス当たり40人として、全校生徒は840人。

全体の10人に1人が参加するくらいの感じだね。

見知った顔だと……ガクトくん、風間、骨法部の部長と、同じクラス仲村。

2-Fの金髪転校生と、川神に椎名、マルギツテ。

んでもって、最近頑張ってる上級生倒してる武蔵だか武蔵野だかいう1年。

まあ、僕も含めて妥当なメンバーじゃなかろうか。

上位と下位は比べられないほど差があるけど、下は下でいい感じに強さが近そう。

どんでん返しとかがない限りは、順当な順位が付けられそうだなあ。

で、壇上にいるジジイが、騒がしい僕らを一睨み。

流石に常識のある生徒ばっかで、そこでピタッとお喋りは終わった。

「ふむ。それなりに集まったようじゃな」

何に対してそれなりなんだか。

それなりの人数が集まったって話か。

それとも、それなりの実力を持った連中が集まったってことか。

少しばかりいつもより物々しい様子で、ジジイは息を吸い込む。

マイクを使わないのは、いつものことだから気にしない。

1秒経って、例の耳をつんざく声が響き渡った。

「では、ここにいる79名の生徒により、本日より『川神ランキン
グ』を発足する！」

誰も騒がないね。

そりゃそうだ。

……半分くらいの奴、もう殺気出ちゃってるもん。

可能なら、今すぐにもやりたいて感じだ。

おゝ怖い怖い。

不安なのは、今からいきなり試合開始つての。
心構えの問題だけど、準備が全然できてない。

今の位置関係からして、ヤバそうなのはマルギツテか。
なんで僕の斜め後ろにいるんだよ、チクシヨウめ。

その気になれば、開始直後に頭力チ割られるかも知れん。

「それでは今から、ランキング開始時の順位の発表を行う！」

危な。

もし今『戦って順位を決めてもらう！』とか言われたら、ちょっとヤバかった。

「79位、たなべ田辺 けん拳！ 78位、なかむら仲村 とある透！」

あっはっは、ざまあみる仲村。

君には下っ端がお似合いだ。

まあ、仲村みたいなザコはどうでもイイとして。

僕はいつたい何位で呼ばれるんだろっ？

他の人の実力が分かんないし、30位くらいならいい方だと思っ
くか。

順位が低くても、ゆっくりジリジリ上がっていき。

……勿体ぶるみたいにコールしてくから、何かイライラしてきた。
名前が呼ばれるのが遅いつてのはいいことだけど、気分は良くない。
できれば紙かなんかに張り出して欲しいんだけど、仕方ないか。
こういう格式ばったの好きだからなあ、このジジイは。

「24位、武蔵むさし 小杉こすぎ！ 23位、島津しまづ 岳人がくと！」

まだか。

「22位、ブンカート・チョーワイクン！ 21位、戸田とだ 幸助こうすけ！」

まだか？

「20位、風間かま 翔一しょういち！ 19位、港みなと 三千尋みちひろ！」

お、よかった、やっと呼ばれた。

うーん……思ったより順位いいなあ。

ガクトくと風間を倒してるからってことなんだろうね。

「19位？ もう少し上かと思ったが、案外そうでもないんじゃない」

「格闘系の部活に入っていないし、決闘した回数も少ないしね」

なんて言ってるけど、内心ちょっと不満。

だってさ、不死川より順位が下って確定したんだよ？

僕はどっちかっていうと、好きな子は守ってあげたいタイプなのに。

その子よりも弱いなんて格付けされたら、そりゃ少しはへこむさ。

そんなことを考えてるうちに、11位で椎名が、10位で川神が呼ばれる。

ということは、不死川も10位以内が確定か。

「9位、不死川ふしかわ 心こころ！ 8位、クリステイアーネ・フリードリヒ！」

おお、いきなり9位か。

どれくらい凄いのかもわからんけど、評価されてんね。

『高貴な此方なら当然なのじゃ！』ってセリフはどうかと思うけどね。

自分の努力まで『高貴』って言葉でまとめるのは美徳じゃないぞ。

8位、7位は知らない顔。

5、4、3、2位も知らない奴ら……でもないね。

5位は、ボクシング部の3年：野村。

インターハイには興味ないみたいだったけど、それでも出てくると思わなかった。

プロ目指してるらしいから、その前哨戦みたいに思ってたのかな？

4位は、キックボクシング部の3年：向井。

僕より身長が高い上に、スピードそこそこのパワーファイター。

正直、同じ土俵で勝負したら間違っても勝てないだろうね。

3位は、ジークンドー愛好会の3年：小林。

空手部とキックボクシング部の奴と決闘したの見たけど、早い早い。傍から見てるからかもしれないけど、攻撃が全然見えなかった。

2位は、アマレス部の3年：柴田。

体操部から誘われるほど運動神経がよくて、去年インターハイで準優勝してる。

規格外の才能持ってんだらうけど、それをいちいちココで使うのか。

てことは、1位はやっぱり。

「マルギツテ・エーベルバツハ！」

ってなるわけか。

現役の軍人じゃ仕方ないか。

しかも、一般的な軍人じゃなくて特殊部隊みたいだし。

こういう常人離れた奴がランキングに参加すりゃ、そりゃ1位にもなるわ。

……学園側から、バランスーとして参加させられてるのかも知らないけど。

「ランキング戦じゃが、今日中に試合の申し込みを行ってもらおう。下位の者から順に、勝負したい相手を宇佐美先生に申告するように」

『試合の開始は明日からじゃからな』と慌てたように付け加えられた。

まあ、今からいきなりやってもいいんだけど、向こうも準備あるだろうし。

この様子から察するに、下位の相手は指名できないんだろうね。格下いたぶるの見た目も誰も面白くないし、その辺は妥当かなあ。ただ、そうなると下からの挑戦待ちの方が増えそうだ。19位つてことは、不死川とマルギツテ入れても18人にしか挑戦できない。

しかも、半分くらい女子だから、やり辛いつたらありゃしない。

……まあ、なんとか男子だけと戦えるように頑張ろう。

「さて、此方はもう帰るが……港、お前はどつする？」

「まあ、今のところ様子見したいし、僕も帰るよ」

とりあえず、対策練らなきゃいけないからね。

……しかし、面白いことになってきた。

川神先輩が出なくて安心だし、何より、強豪連中が何人か参加してるのもいい。

今の僕の実力を測るにはピッタリだし、ジムじゃ出来ない技も試せそう。

もちろん、ルールの範囲内だけどね。

「どうじゃ？ 気になる人物はいるか？」

「分かってるだけだと、上位5人は気合入れないと瞬殺されるね」

そんなことを話しながら、体育館から出ようとした時だった。

「19位の港先輩との勝負を希望します！」

女子の声だったもんだから驚いて振り返ると。

体操服にブルマって格好で、アホ毛が2本、上に向かって伸びている。

知ってる、コイツだったら知ってる。

上級生に決闘吹っ掛けまくって、1年にしてそこそこの強さを誇る奴。

胸を張って、自信に満ちた表情で、必要以上にでかい声で。

武蔵 小杉が、僕に向かって宣戦布告した。

1 話目 『川神ランキング』（後書き）

アロンさん、ご指摘いただきありがとうございます！

いやはや、キャラの名前を間違えるなど恥ずかしい限りです。

このような不手際がないように頑張らせていただきますが、気になる部分があったら、ぜひご指摘ください！

2話目『こいつは戦い方』

結局昨日は、武蔵小杉の話をしながら不死川と校門前で別れた。

なんか骨法部の部長も既に倒されてるらしくて、結構な腕前ってことはわかった。

まあ、あの部長も目立って強いわけじゃなかったから、参考にならないけど。

同じ部長だったら、柔道部の部長みたいな全日本レベルの方がずっと怖いね。

それはさておき、いつもより1時間遅れてジムに行ったら、珍しく閉まっていた。

『よその道場に行つて来るから今日はお休み。来たけりや来い』って張り紙が。

地図はあったけど、中学生に書かせた方がマシな感じの地図だった。

まあ、色々考えても仕方ないんで、同じアパートの東応大学の学生さんにスパ―して貰った。

さすが東応っていうべきか、先読みとか関節技に入るまでの過程が独特で上手い。

これで9浪したって事実がなければ、素直に尊敬したいよ。

いや、それだけ浪人しながらも目標がブレなかったっていうのは美点だけだね。

それで、晩飯作ってそれ食って、風呂入って、顔洗って、とつとと寝て。

朝走り込んで、シャワー浴びて、朝飯作ってそれ食って。

顔洗ってから制服着て、荷物確認して家を出た。

で、教室で予習しているうちにHRが始まって、その最後に呼び出された。

なんだか、武蔵との試合が今日の放課後に決まったらしい。そんで、その試合のルールに関しての説明の用紙を渡された。

初戦は風間かと思ってたけど、下位の意見が尊重されるところがあるんだろうね。

もしくは、直江大和の指示でガクトくと風間が待ったか。だとしたら、あまり手の内を見せるのは良くないかもしれない。向こうは僕がどんな格闘技をやってるかは知ってても、僕が何をしてくるかまでは知らないんだもん。

つと、そうだ。

ルールの確認しなきゃね。

場所はグラウンドで、設置されたリングで勝負。

ルールはバリートワード。

目潰し、喉突き、武器の使用以外は全て認可されてる。

あと、4点ポジション（両手両足が地面に着いた状態）の相手への打撃の禁止。

金的がアリだっというのが引っ掛かるけど、これは仕方ない。多分、こういうところでハンディキャップ付けてるんだろうし。服装自由ってのはうれしい。

洗った空手着置きっぱなしにしてるから、ソイツを使おう。ジャージなんて締まらんからね。

しかし、このルールなら充分戦える。

僕の強みが、ほぼ全開で発揮されるルールだ。

それに、相手は生意気な1年生。

加減してやる必要なんてどこにもないしね。

まあ、アレだよ。

体育会系な発想ではあるけどさ。

生意気な1年に、上級生の怖さってのを教えてやんないとなあ。

さくさくと予定が過ぎていき、あつという間に放課後。

1回戦が僕だつてことで報道部が来たりしたけど、適当に言っ
て追いついた。

今日は、管理人さんが弁当持たせてくれて助かった。

もし学食に行こうもんなら、割と本気で困まれてたかも知れない。

それはさておき。

記念すべき、川神ランキング1戦目。

それに選ばれたのを、果たして幸運と取るべきかどうか。

必要以上に人目を集めるわけだし、緊張してないなんてことはない。
井上にミット持ってもらって軽くアップしたけど、緊張はまだ消え
てなかった。

今回は、前回の決闘の比じゃないほどの人数が集まってる。学園のほとんどの人間が見てるんじゃないかな。うう。

九鬼と霧林も見れば、葵と榊原もいる。

風間ファミリーの連中もほとんどいるし、格闘系の部活・サークルの連中もいる。

報道部がカメラを構えてるのも鬱陶しいし、学園外からの接触がないのがせめてもの救いだ。

表舞台には立ちたいけど、ここまで面倒なことを考えなきゃなんないとは思わなかった。

まあ、今さら何を言っても遅いけどね。

ところで、井上の情報なんだけど、やっぱり賭けをやっているのが分かった。

細かく分かれてるみたいで、なんか『港：1分以内：20倍』とかあったらしい。

せっかくなんで『戦意喪失ってあった？』と井上に聞いてみた。で、確認してもらったら予想通りあったみたいなんだ。

『武蔵：戦意喪失』に2000円賭けておいた。倍率は30倍。

レートが落ちなきゃ、しばらく学食でトッピングカレーが食べそう。

今の僕は、前回とほぼ同じの格好。

違う点といえば、オープンフィンガーグローブを付けていないこと。それでもって、帯をちよつと緩めに絞めていることだ。

アップが終わった僕は、付き合ってくれた友人2人に向き直る。

そう、僕は伝えなきゃいけないことがある。

「不死川、井上。試合前に、友人として1つ頼みがある」

「セコンドでも頼みたいのか？ さすがにそこまではできないぞ」

「此方に頼まれても困るのじゃ。そういう知識は皆無じゃからなセコンドいらないうて。

ていうか、僕の手の内をよく知らない奴にセコンド頼む気もないよ。そういう話をしたいんじゃない、もっと大事なこと。

これから僕が試合をするにあたって、知っておいてもらわなきゃならない。

ガクトくんや、他に僅かでも交流がある人たちには、もう伝えてある。

そうしておかないと、僕はこれから安心して戦えない。

「今からリングを降りるまでの僕は、僕であって僕じゃない。

今日のリング上の僕の話は、何も見なかった、何も聞かなかったことにしてほしい」

「いいけどよ、何？ お前そんな凄いことすんの？」

「う、うむ。そのくらいなら構わんが……」

怪訝そうな顔をしないで欲しいけど、仕方ない。

いきなり無茶なことを言ったんだから、それくらいは覚悟の上。

「信じてるよ」

上手く笑えてるといいな。

いつも通り歪んだ口になっただけの時分の顔を想像して、なんだか少しだけ笑えた。

友人がそうしてくれるっていうなら、僕は信じるしかない。

それでも念押しをするのは、やはり不安があるからだろうね。

僕は一呼吸入れると、空手着のまま、緊張を残してリングに上がった。

特に気にしてなかったけど、そういうことだったか。
こついうのも、下位が上位に挑む際の特権みたいなもんなんだろう
ね。

まあ、下級生相手だし、多少のハンデはあげないと不公平か。

「時間無制限でお願いします。それと、できればギブアップはナシ
の方向で」

おおおお！ ってどよめきが。

武蔵の奴、面倒くさいことしやがって。

つまりこの勝負、基本的にはKOかTKOしかないってことか。
長期戦に持ち込んで勝とうってか。

僕の今までの2回の決闘は、両方とも20秒もかかってないわけだ。
それで、僕が長期戦が苦手って考えるのも無理はないかもね。
そうすれば、始めからスタミナ勝負に持ち込めば勝てる見込みも出
てくるだろうし。

毎朝8km走ってる人間がスタミナ不足ならだけど。

「それで構わんな、港」

「はい。どういうルールでも結構ですよ」

今度は歓声。

僕のビッグマウスは、そこまで面白いんだろうか。

それとも、試合前の熱気と興奮で頭が参ってるのか。

どちらにしても、こついうのは嫌いじゃないからいいけどね。

「学園長。少しだけお時間頂けますか？」

「うむ、よいぞ」

ジジイ、ブルマっ子相手だからって甘かないか？

薄目にしてるつもりだろうが、視線が下に行ってるのが見えてるぞ。

武蔵も気付いてるだろうけど……そうか、わざとか。

試合前からジジイに取り入って、有利なルールを組んでもらおうと思っただのか。

だとしたら、コイツは思ったより食えない奴かもしれない。

作戦通りに行くか、ちょっと不安になってきた。

でもまあ、いいチャンスが巡ってきたのも事実だ。

武蔵のおかげで、いきなり作戦を実行することができる。

本当は試合開始直後にやるつもりだったけど、手間が省けた。

試合前に時間をとるように言ったのは、武蔵の方だしね。

「ごめんなさいね、港先輩。悪いですけど、最初から本気で行かせてもらいますよ！」

すでに勝ち誇った顔でぬかす武蔵。

そついう勝気な態度は僕好みだけど、だからって心は動かない。

今から倒す相手となれば、尚のことだよ。

これから粉々にする相手のことを好きになることなんて、絶対にありえないから。

「あゝ、武蔵野」

「武蔵です、港先輩」

「……武蔵。僕も、試合前に謝っておきたいことがある」

そう、僕もココで決めなきゃならない。

ココで策を弄せば、僕の勝ちが決まったも同然だ。

少々卑怯かもしれないけど、僕は全力で戦う際には手段は選ばない。他者に非難されることであつたとしても、勝利を確実にするために加減できない。

だから、僕はやってやった。

勇気を出して、緊張を押し殺して、言つてやった。

「僕は、試合前に適度なウォームアップをしてきた。

少し激しく動いたら、すぐに汗だらけになるのは間違いない」

「それに、知つてると思うが、僕は組技を使う。

その汗だらけの手で掴まれたり、汗まみれの腕で締められたりしても許してくれ」

「さらに言うと、僕も健全な男子高校生だ。

君が、人によってはムラムラしてくるような服装をしているのはわかるね？

僕はそういう格好が嫌いなわけではないから、性的興奮を覚える

「こともある」

「僕はこの試合を組技で決着させるつもりだ。

胴タツクルを使えば君の胸元や腹に顔を近づめることになるし、片足タツクルを使えば君の太ももや下腹部や尻に頬をすりよせることになるだろう。

投げる際に、君の股ぐらに腕を突っ込むことも充分に考えられる話だ。

僕が君がガードポジションを取れば、君と僕の下腹部が隣接することになる。

オモプラッタ（足を使って腕を極める技）を極めれば、ほぼ確実に、僕の下腹部が君の顔に急接近するはずだ。

三角絞めでも同様のことが言えるだろうね。

ガードポジションって言ったら、君と僕の顔は触れ合うほどの距離になるかもね。

唇が触れてしまったり、僕の汗まみれの頬と君の頬が擦り合ってしまったとしても、

それはすべて試合中に起きたアクシデントだと割り切ってくれ。

当然だけど、僕は寝技が得意だから、君との勝負も寝技がメインとなるはずだ。

くんずほぐれつするわけだけど、その折に妙なところに触れてしまっだろう。

男同士で勝負したって起こる事が、男女でやったからって起きないわけじゃない。

そっという点も、覚悟はしておいて欲しいね。

まあ、こつというのは僕が意図してやるんじゃないから。

僕は年上よりは年下派だけど、君に悪意を持ってそういう攻撃をするつもりはないよ？

確かに僕は年下好きで貧乳趣味があるけど、決して君を性的対象としては見ない。

もう1度言おう……決して君を性的対象として見ることはない。

君の体の感触を思い出して、今晚性欲処理をするなんてことはありえないよ。

そういえば、まったく関係ない話なんだけども。

僕の部屋に置いてあるアダルトなDVDの1つに、武蔵に似た女優が出演している。

頻繁にお世話になっている気がするけど、試合には関係のないことだから。

その女優と君を重ね合わせて、君に不埒なことをするつもりは毛頭ない。

だから、安心して本気でかかってきて欲しいんだ。

君ほどの手練が本気で来るのであれば、僕も本気が出せる。

こつという試合はわくわくするんだよ。もちろん、性的な意味じゃなくね」

静まった。

今までざわついていた声が小さくなっていった、ゼロになった。

いや、冗談とかじゃなくて本当に。

『くんずほぐれつ』のあたりでギャラリーが黙っちゃった。

そのせいか、僕の声はよりハッキリと武蔵に届いたらしい。

武蔵は割と可愛らしい顔を歪めて、リング中央にいたのにジリジリ後退してる。

どうやら、やっと理解できたらしいね。

寝技使いと勝負するっていうのが、どういふことなのかを。

それで、武蔵はわかっているはずだ。

一撃で僕……俺を倒して、寝技に持ち込ませないなんてマネができないことを。

俺は素早くシャドーをする。

左ジャブ2発から、左のボディブロー。

右フックに見せかけた右肘打ちの次は、体の捻りを返して左膝。

さらに、ロー、ミドル、ハイキックのコンビネーションを出して。

最後に左の後ろ回し蹴りを決めて、腰を落とした右の中段正拳突き。

その頃にはもう、俺の体はうっすらと汗ばんでいた。

突きの形を解いて、武蔵の方に向き直る。

暑くなってきたんで帯をはずして空手着の上を脱いで、リングの下に放った。

トレーニングジムで鍛えられた筋肉の上に、僅かに乗った脂肪層。

汗が浮きつつある体に、武蔵の視線は釘付けた。

「さあ来い！ 武蔵小杉！」

パンと両手を打って、『バッチ来い！』とか『ウエルカム！』の構えになる俺。

それはあたかも、走り寄ってくる武蔵を抱きしめようとするかのような構え。

ほんのり口の端を釣り上げた顔は、武蔵からすれば不気味に違いな
い。

年下好きの貧乳趣味の、しかも汗かきやすい男に寝技で勝負させられるんだからな。

ウォームアップで息の荒い俺は、彼女にとって、さぞ恐ろしい存在に移るだろう。

浅く上下する肩が、その息遣いを雄弁に語っているのもポイントが高い。

「……そろそろ時間じゃな。宇佐美先生、ゴングじゃ！」

わざわざ長ったらしく話したかいたな。

武蔵、お前言ったよな？

ギブアップは認めないって。

そりゃ、お前のギブアップの分も入ってるんだぜ？

「ヒッ！ ちょ、ちょっと待って下さい！ 冗談、冗談ですよね先

2話目『こいつは戦い方』（後書き）

……やってしまいました。

武蔵視点で続きを書きますので、お楽しみに。

幕間『プレミアムだから』

甘かった。

私が甘かった。

正直、楽に勝てると思ってた。

オイシイ相手のはずだった。

動きそのものはそんなに早くないし、雰囲気も大したことなくて。

投げよりも手順の多い、引き込んでからの組技を使ってくる。

打撃は1拍、投げは2拍、引き込んでの極めは3拍。

元の動きが早かったとしても、3アクションの動きなら見切れる自信もあった。

171

「あの黒帯でもいただこうかしらね！ 汗臭いだろうけど！」

なんてクラスメイトと報道部に吹いてた自分を殴ってやりたい！

どうしてあのかき、余裕見せて情報集めなかったのよ！

いくらでも時間はあったのに！

私知ってたのは、大したことじゃなかった。

空手をやってて、有段者ってこと。

ブラジリアン柔術を使っらしいってこと。

それ以外の関節技もやってるってこと。

ゴリラっぽい先輩と、風間先輩を瞬殺してるってこと。

2年になるまで1度も決闘していなかったこと。

たったそれだけのことで、何が分かるはずだったんだろう。

それだけで、相手の何を知ったつもりになったんだろう。

プレミアムな新星として、この学校に君臨するつもりだった。

九鬼も、不死川も、私が下して見せるつもりだった。

それなのに、こんな路傍の石みたいなのが立ちはだかるなんて、つい1分前まで、そんなことは考えてもみなかった。

「さあ来い！ 武蔵小杉！」

何かがおかしい。

私は、川神ランキングに参加して、ランキング戦をやるはずだ。そのはずなのに、どうして足が震えてるの？

「やややだなあ、ほら、ちょっと、なんか言ってくださいよ港先輩」

冗談ですよ、ってニュアンスを込めたつもりだったけど。そんな私の意思なんか、届きようもない。

なんか『フツ、フツ！』とか猛ってるみたいだし、肩で息してるし。真っ直ぐこつちを見てるのに、焦点があってない気がする。

これ、今が夜道だったりしたら、私の貞操なくなるのが確定してるわよね？

ていうか、こんなの見たら1秒後には回れ右して逃げてる。

逃げる？

そうだ、ギブアップ！

ちよつと情けないけど、あとでリベンジすれば……。つて、ダメじゃない！

私が『ギブアップ禁止』なんて言ったんじゃない！

あああああ！

欲をかいて『じっくり刻んで余裕見せて倒そう！』なんて思うんじやなかった！

『あゝら先輩？ ギブアップはナシですよ？』なんてセリフを考えるんじゃない！

「目が怖いですから！ 本当に怖……誰か！ 誰か助けてええええええ！」

もう、思う様叫んだ。

だって、それしかないもの。

ギブアップできないんだから、試合が始まったら勝敗が決するまで終わらない。

仮に勝てたとしても、乙女として大切なものがほとんど奪われてる気がする。

私は逃げ回ってる。

ゴングが鳴って、覚悟を決めたはずなのに。

私はもう、逃げ回ってる。

あの『年下好きの貧乳マニアのブルマフェチ』から。

いやらしい笑いを口元に浮かべて、犯罪ストレスの格好で迫ってくる。

決して急がず、ゆっくりと、ゆっくりと。

まるで楽しむかのように、私をゆっくりと追い詰める。

もし相手が速かったら、とっくに捕まってるところだ。

でも、時間の問題。

何が上手いかって、駆け引きと距離の取り方が上手すぎる。

蹴りの距離に入るかと思ったら、すぐに組技の間合いに入ってきて。拳の間合いに入っていたのに、いつの間にかいなくなってる。

私が攻撃をしようとすると、タツクルする気配を見せて。

受けようとする、その心の間隙を突いて距離を詰めてくる。

開始から30秒で、私は諦めるしかなかった。

こんなレベルの相手には勝てない。

これで19位ってどういうことよ！

他の18人が、この男よりも強いってどういうの！？

こんなはずじゃなかったのに！

入学して早々に、私は1年生でトップの座に君臨した！

骨法部だかの部長だって、私は苦戦せずに倒した！

なのに、なんで！

なんでこんな、最近まで無名だった奴に！

なんで私が、ここまで追いつめられるのよ！

「ハーツハツハツハ！ 逃げてんじゃねえぞ、武蔵！」

余計なことを考えちゃダメだ。

その心の隙を突いて、必ず距離を詰めてくる。

決して走らず、それでも遅くはない。

頭をガラ空きにして、両手をへソくらしいの高さにゆったり構えてる。

右構え、左構えとランダムに組み替えて、隙も見せてくれない。

無理だ。

足を狙ったところで、それに合わせてタックルしてくる。

胸を狙っても同じことで、むしろキャッチされる可能性もある。

じゃあ、あのガラ空きの頭を狙う？

無理だ。

頭に蹴りを入れるなんて、無理に決まってるじゃない。

少しタイミングを外されるだけで回避されるし、ガードされるに決まってる。

気迫で負けてる状態で、空手の有段者に蹴りなんて当てられない。

そんなことを考えているうちに、アイツが段々距離を縮めてくる。擦り足で、構えを変えたり変えなかつたりしながら。

逃げなきゃ。

逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ、逃げなきゃ。

怖い、やだ、来ないで、追ってくる、来ないで。

気合、タツクル、横っ飛び、ギリギリ。

ロープの2本目と3本目の間、ヤダ、腰狙ってる。

コーナー、ダメ、右に逃げる。

来る、危険、走れ。

またコーナー、後ろから来る、振り返らなきゃ。

怖い、振り返らなきゃ、振り返りたくない、怖い、振り返れ！

来ない、来ない、来ない？

違う、待ってる、来てる！

すぐ後ろ、違う、確かにいる！

どこ、後ろ、右……左！

私の、左に、あの、怖い、男が。
構え、して、笑う、汗が、流れ。
緩く、重く、静か、大き、余裕。
笑う、何故、口が、歪む、笑い。

「おらおら、早く逃げないと捕まえちまうぞ?」

口では余裕を見せるけど、その構えに隙は見つからない。
今気付いたけど、投げようにも空手着の上を着てないから上手に投
げれない。

せつかくボクシング用のリングで地が固いのに、投げが使えない。
一発逆転には、投げくらいしかないのに。

「ううううううううう!」

まともに声も出ない。
舌が全然回らない。
顔が強張り、元に戻らない。

目の前の男が、怖い。

得体が知れなくて怖い。

私より大きくて怖い。
汗を掻いてて怖い。
異性だから怖い。
危なくて怖い。
怖くて怖い。
ただ怖い。
怖いの。
怖い。
怖。

もう、何も、考。

「セイツ！」

私の声が聞こえる。

私の声じゃないみたいだけど、私の声。

私は、私の意思に関係なく、アイツに突きを放った。
それじゃ当たらない。

見え見えの、全力の右ストレート。

そのまま右足を踏み出して、左のミドル。

アイツは下がって避けるけど、その目は丸い。

いいぞ、私。

そうだ、落ち着かなきゃ。

アレは、アイツの作戦なんだ。

あの卑猥な発言は、全てアイツの作戦。

だから、その作戦通りにビビってちゃいけない。

「やあああああ！」

必要以上に大きい声で、私はアイツに突進する。

勇気を振り絞って、血路を開く。

予想通りに下がったアイツに、勢いつけて飛び膝。

かわすけど、組みついてこない。

蹴りもこないし、やっぱり気後れしてる。

よし、着地したら、すぐに攻撃をつなげる。

スピードそのものは、私の方が速いはず。

だったら、連打で畳み掛けてやればいい。

さあ、そろそろ着地………しない？

天地が、ひっくり返った。

学園の校舎が見えてたのに、突然それが空になって。

受け身も間に合わずに、そのまま頭から落ちるかと思ったけど。

でも、今度は青空が校舎に変わって、私は盛大な尻餅をついた。

お尻をさすってる場合じゃない。

頭をガード、きつと蹴りが来る。

私は頭を庇いながら、横に転がって。

何かに、ぶつかった。

「あのさあ、受け身くらいは取らね？　頭打つぞ？」

「いっ」

見上げちゃダメだと思ったけど。

私は、見上げるしかなかった。

見上げた先にいるのは、やっぱりアイツ。

呆れた顔をして……申し訳なさそうな顔？

気遣うっていうか、心配してるっていうか、そういう感じの顔。

あ、ダメ。

やめて。

「やっ」

今、そういう表情をされると、気が緩む。

さっきまでのいやらしい笑いなんか全然ない。

すぐに『大丈夫か？』とか言ってきたそう。

「あつ」

落ち着け。

アレは敵だ。

アレは踏み台。

アレを倒すんだ。

「その……すまん、やり過ぎた。大丈夫か？」

「うっ」

ほら、やっぱり。

笑顔じゃないけど、こんな風に優しい顔をするから。
涙腺ゆるんで、力が抜けて。

「……うえええええん！」

私の中の、何かが壊れてしまった。

私は、記念すべき川神ランキングの第1回戦を勝利で飾ることなく、
学年のほぼ全員の前で大泣きをした上に。

戦意喪失という形で、進学して初めての敗北を喫した。

3話目『鉄は熱いうちに打て』

まあ、会場全体の雰囲気は悪かったけど。

「戦意喪失！ 勝者、港 三千尋！」

そんな声を聞きながら、僕は満足したかった。

だってさ、なかなかこういう勝ち方はできないよ？

相手にダメージを与えず、かつ、自分もノーダメージ。

心は砕けたかもしれないけど……いや、率直に言ってやり過ぎた。

もうちょっとガッツがあると思うってたけど、無茶な要求だったのか
もしれない。

勝ちも勝ちだけど、無様な勝ち方をしたと思う。

しかも、試合中に申し訳なくなつて、つい手を貸しちゃった。
テンション上げてたのに、普段通りに戻っちゃったし。

最初の方は良かったよ。
ジリジリと追い詰めて、狙ってた。
実は、ちゃんと作戦には続きがあった。

ああやって追い詰めておいて、何分も何分も攻撃を一歩的に仕掛ける。

もちろん、武蔵には当たらないけど、十分な速度の攻撃を。
そこで、武蔵にひたすら逃げさせて、時間を稼ぐ。
充分時間が経ったところで、学園長にこう言うわけだ。

「相手は攻撃してこない。これは、戦意がなくなったと見るべきだ」
ってね。

なのに武蔵が、突然反撃してきた。

吹っ切れたんだらうね、いろいろと。

見え見えの右ストレートに、大振りの左ミドル。

ダメージを与えるっていうより、ただ出してるだけの攻撃。

下手したら仲村にも負けるレベルの戦い方だね、アレは。

んで、勇猛果敢に跳び膝蹴りを出してきて。

勢い余って、勝手にすっ転びそうになってたもんだから。

それでもって、受け身も取れなさそうな感じだったから。

頭を下から支えてやって、せめて重傷にはならないように仕向けてみた。

尻から落ちたけど、大した怪我にはならなかったから問題ナシ。

それで、ちょっと思ったんだ。

年下相手に、何をそこまでムキになってたのかって。

全力で……『力を出し切る』じゃなくて、全力で。

策を用いて、相手の力を削ぎ、その上で自身の力を発揮する。

そういう意味での全力で戦って、それで勝ってどうだっていうんだろっか。

今さら、本当に今さらだけど、そんな思いが頭の中をよぎった。

で、思わず申し訳なくなつて、謝って仕切り直そうと思った。

というか、女の子と闘う可能性があるってわけで覚悟はしてたけど。

実際、女の子を泣かすつてのは、倫理うんぬんは置いといて、純粹に心苦しかった。

それで、思わず『大丈夫か?』なんて聞いてしまったわけで。

すると、武蔵は緊張が急に解けたのか。

それとも、よっぽど怖かったのか。

人目もはばからずに、座りこんで泣き出してしまった。

「あゝ、ほらほら、僕が悪かったから。とりあえずリング降りようかな？」

「ううう……」

さつきから嗚咽を漏らすばかりで、まともな返事が返ってこない。促してやらないと歩きもしないんで、しかたなく僕の方のコーナーに誘導した。

ブーイングと茶化した笑いの中、自分で泣かせた女の子を誘導する。これがなかなか、僕の精神にも堪えるわけで。

でも、勝利のためにやったことだから、恥辱は感じて後悔はしなかった。

笑いたい奴には笑わせればいいし、野次も好きなだけ飛ばさせてやればいい。

面と向かい合えば、1分後には両手足バキバキに出来る奴らばっかなんだから。

『コイツら1分で殺せるって思っとけば、人前でも緊張なんかしなくなるぞ』

確かに、師範のいうとおりだ。

1分で人間としての機能を奪えると思うと、緊張どころか興奮しそ

う。そのおかげで、コーナーにたどり着く頃には、恥辱もすっかり消えてしまった。

武蔵を先に降ろしてから、僕もコーナーを降りる。

と、かなりリングから近いところで見てくれたのか、不死川と井上が。

2人とも微妙な顔をしてるけど、約束は守ってもらわないと。

『リングの上の僕のことは忘れてくれ』って約束は、キツチリ守ってもらっさ。

と、井上が空手着と帯を投げしてきた。

そうだよな、リング上がったときはコレ着てたもんね。

受け取った空手着をとっと着て、手早く帯を締める。

よし、これで完璧。

誰かに空手着持ってかれて、上半身裸で教室に戻るってことはなくなった。

「え〜つと、港さん？」

「なんで『さん』付けすんのさ、井上？」

さっきよりも一歩引いてる。

おいおい、さっきの言葉にウソがあったの？

いや、疑っちゃいけない。

親友ってわけじゃないけど、会話のできる数少ない友人だ。

そうそう簡単に疑っちゃ、いくらなんでも失礼だよ。

そんな僕の想いとは別に、井上は苦笑い……引いてる。

理不尽なボケに精いっぱいツッコミを入れる様な、あの顔。

困るなあ、ボケたわけじゃないんだけど。

「いや〜……お前がここまで執念深いと思わなくって」

「勝つために最善の手を尽くすってのは普通のことじゃないの？」

怪訝な顔つきを意図して作って、僕は井上を見据えてみたり。文句言われる筋合いはないつもり……なんだけど。正直今は、井上の言っていることが正論だと思うね。時間が巻き戻せれば、あとは完璧だ。1時間前に戻って、作戦の立案からやり直すさ。

「港」

「どうしたの、不死川？」

深刻そうな顔つき、じゃないか。

この顔は、侮蔑とか憤怒とかの混じったアレだ。俗にいう『ゴミを見る目つき』か。

いやいや、まだ手もつないでなのに、そういうプレイは早すぎる。確かに僕はMっぽいところがあるけどさ、それとこれとは別の話だよ。

「友人として警告するぞ。で、これが最後通告じゃ」

えーっと、何でまだ睨んでんの？

ほら、勝利したことに対する祝福とかさ。

そろそろ、そういうのがあってもいいんじゃないかな？

「今日のことは、事前の約束もあるし忘れてやる。」

じゃが今後、もし、もしコレと似たようなことをしたら……」

「お前とは絶交じゃ」

気付いたら、校門の前に置かれたパイプイスに座ってた。
僕の荷物がまとめて隣においてある。

……いつの間に夜になったんだらうか。
うわぁ、月がまんまるだ。
ビリヤードの球みたい。

何やってんだろ。
絶交だつてさ、絶交。
あゝあ、やっちゃった。
冷静に考えりゃドン引きするわな。
過去を振り返った僕自身が引いてるんだもん。
そりゃ、他の人からすればコレしかリアクションないって。

……いつの間に夜になったんだっけ？
おお、月がまんまる。
卵黄みたい。

何やってんだろ。
不死川、絶交だつて。
なんであんなことしたんだろ。
いくら勝ちたいからって、限度あるだろ。

そりゃ、不死川も絶交って言っわ。

……いつの間に夜が来たんだろ。

あ、月がまんまるだ。

満月みたい。

何してんだろ。

絶交か。

絶交だって。

不死川、絶交だって。

あっはっはっはっはっは。

「あ、まだいた」

「は？」

なんか聞こえたから、そっち見てみた。

あのアホ毛には見覚えがある気がするけど、誰だろ？

不死川はお団子だったもんな、不死川じゃない。

じゃあ、いったい誰だろう？

川神学園の冬服着てるから、学生なんだろうっけど。

「港先輩、まだ沈んでるんですか？」

「ほつといて。このまま凍死するから」

そうだ、凍死しよう。

色んな人に迷惑かかるけど、もうどうでもいいや。

僕の健康な腎臓は誰にも渡さないからね。

ドナー登録なんてしてあげないんだから。

とかいいつつ死んじゃったらいいかと考える僕はツンデレか。

いや、ツンデレは不死川だ。

僕〓ツンデレ、不死川〓ツンデレだったら、僕〓不死川になる。

じゃあ、僕はツンデレじゃないのか。

「この時期じゃ一晩で凍死できないですけど、風邪くらいはひきますよ？」

「じゃあ肺炎こじらせて死ぬ」

そうだ、肺炎こじらせよう。

結構苦しいだろうけど、もうどうでもいいや。

僕の病んでる肺なんか、アンタになんか絶対あげないんだから。

とかいいつつ相手の安全を考える僕はツンデレか。

いや、ツンデレは不死川だ。

僕〓ツンデレ、不死川〓ツンデレだったら、僕〓不死川になる。

じゃあ、僕はツンデレじゃない。

「まったく……こんな人が、本当に私に勝ったのかしら？」

「は？ 勝つって、誰が誰に？」

ちよつと意識がはつきりしてきた。
見覚えのあるアホ毛が視界に入る。
そつだ、こいつは確か。

今日戦つた、武蔵小杉じゃないか。

「なんでもありませんよ」

なんでもないのに、夜の学校の前に来るもんか。
まあ、どうでもいいんだけどさ。

こついつときには、1つ言つてやらなきゃ。

「壺は買わないよ」

「壺は売ってません。ケンカも、しばらくは売りませんよ」

そついいながら、武蔵は僕の隣……敷石の上に座つた。
今の状態での渾身のボケだったんだけど、普通に返しやがったよ。
もつところ、先輩を立てて欲しいんだけどね。

と、僕はパイプイスをから降りて、荷物の上に座つた。

結構ぎつしり入っているから、割としつかりとイスの代わりになる。今さら三角座りもないだろうから、胡坐をかいてみたり。で、余ったイスを、武蔵の方に押しやってやる。

「なんですか？」

「座っていいよ」

「いいですよ、別に」

「女の子が地べたに座るのは下品だ。座ってくれ」

「……お言葉に甘えて」

そうそう、それでいいんだよ。

後輩を気遣ったんだから、先輩を立てて座るときゃいいんだ。

しばらく空を眺めていて。

ふう、と隣から溜め息が1つ。

いかんいかん、これは注意しないと。

「ねえ、武蔵。溜め息つくとき幸せが逃げるって知ってる？」

「迷信ですよ、それ」

ムスっとした顔で言うんじゃないよ、まったく。
いかなあ、最近の若いのは。

年長者の話をちゃんと聞いてくれないんだもん。

そもそも、迷信ってのは根拠のあるもんだってある。

でもって、これは根拠のある迷信だ。

それを、きっちり説明してやらなきゃならんね。

「溜め息つくとき、周りがイラつくでしょ？　で、皆イライラし始める。」

最終的にはそれで面倒事が起きたりして、最後に幸せが逃げてくんだよ」

「港先輩は今、イライラしてるんですか？」

「全然」

「じゃあいいです」

何がいいもんか。

溜め息をつくとき、幸せが1つ逃げる。

溜め息をつかなくても、幸せは確かに逃げていく。
努力の方向性を間違えるだけで、全部おかしくなっていく。

幸せになりたかったら、上に立つしかない。
なんでもいい、他人より1つでも多く上に立つんだ。
そうじゃないと、幸せが少しずつ消えていく。

……何分くらい経つたる？
星の位置がそれほど変わってないから、1時間も経ってないか。

「家、帰らないんですか？」

横目で武蔵がコツチを見てくる。
僕も横目で見ただけで、すぐに視線を空に戻した。

「さあね。帰ってどうってこともないし」

そうだなあ。

家に帰ったからって、不死川が仲直りしてくれるわけじゃないし。
それで仲が修復できるなら、帰ってもいいかも知れない。

「でも、風邪ひきますよ」

「即死じゃなきゃどうにかなるよ」

ふーん、と考える様な声。

まあ、即死じゃなくてもじわじわ死んだりもするか。

ハイスペック肺結核とかだと、薬、効かなかつたりするもんなあ。

うん、案外どうにもならないこともあるね。

死なないように気をつけよう。

「港先輩、不死川先輩のことが好きなんですか？」

「好きだよ」

いきなり何を言うかと思っただら。

好きに決まってるよ、そんなもん。

「友人として？」

「異性として」

友人として好きな連中は別にいる。

電話番号も知らんけど、中学の友人とかね。

あの時はあのとときで、それなりに楽しかったのかもしれないなあ。

面倒事もあつたけど、きつと楽しかつたんだろ。

それでも、今には勝らない。

心の底から恋した女性がいて、その女性と友人になって。

朝挨拶して、おしゃべりして、一緒に昼食を食べて、遊びに行つて。

残念だけど、その幸せには追いつかない。

振り返つてしまったのは、今はもう、不死川に絶交されたから。

こんな日々はもう、2度と巡つてこない。

「言つたんですか？ 好きだつて」

「言つてない」

「言えばいいじゃないですか」

「……無理」

はあく、とまた溜め息。

さつき注意したばかりの気がするけど、もう1回言つておこつ。

間違つた方向に進む若者を正しく導くのも、年長者の務めだ。

僕が間違つた方向に進んでたのは……今はどうでもいいか。

「いいかな、武蔵。溜め息を1つくと幸せが1つ……」

「不死川先輩ですけど、あのとき『次に同じマネしたら絶交』つて言つたんですよ？」

「は？」

僕は、初めてしっかりと武蔵の方を見た。

呆れた顔は、疲労も相まって堂に入っている。

年頃の少女らしからぬ顔も、僕の目には景色の一部としてしか映らなくて。

今の僕の脳の中には、ただ1つの命令が踊り続ける。

さっきのことを確認しろって命令が。

「は？ え、ちょ、ホントに？ 嘘じゃない？ 嘘じゃないんだね？」

「本当ですよ。本当ですから、突然立ちあがって詰め寄らないでください」

「おお、こいつはすまない」

仕方ないだろうよ。

まさか、勘違いだなんて思っていないんだもん。

いやあ、ビックリした！
そうか、勘違いか！

僕ったら、相変わらずドジっ子だなあ。
人の話をよく聞けて再三言われてきたのにね。
ま、どうでもいいよ、そんなことは。

それより、よかった、本当によかった！
次があるだなんて、本当に幸せだ！
もう同じミスは繰り返さない！
次からは、不死川の前で同じ過ちは犯さないぞ！

「ところで港先輩。ガッツポーズとつてるとこ悪いですけど」

「何？ 今すぐ帰るから手短にお願い」

こんなところにいたら風邪引いちゃうしね。
もしそうになったら、いろんな人に迷惑がかかる。

明日は小西さんとスパリングの日だし、休むことになったら勉強
が遅れる。

しかも、管理人さんにわざわざ学校へ電話してもらわなきゃならな
いし。

風邪引くなんて、どこにも利はない。
とつと帰って、シャワー浴びて暖かくして寝ないとね。

「試合開始前に私に言った煽りつて、アレ、どこまで本当なんですか？」

「……今更それ聞いてどうすんの？」

「私だって、不死川先輩が言った本当のこと教えてあげたんですから。」

他に聞くこともないですし、ギブアンドテイクだと思って答えて下さい」

また面倒なことを言い出したな、コイツは。

まあ、不死川の件については僕も礼を言わざるを得ない。頭下げる代わりだと思って、ちゃんと答えてやるつ。

「アダルトDVDと性欲処理と性の対象の件以外は全部本当だよ」

「そうですね。なら大丈夫ですね」

「は？ 何が？」

僕の質問に答えずに、武蔵はイスから立ち上がる。

手にカバンを持ってないから、わざわざ帰宅してからここに来たんだろうか？

いったい何の目的があったか知らないけど、女の子が夜道歩くのは危険だろうに。

そのまま武蔵は、足早に僕から遠ざかっていく。

と思つたら、急に何か思い出したかのように立ち止まって。
1つ深呼吸をする気配の直後、くるっとコツチに振り向いた。

「それでは、また明日」

さっき見たような、ムスツとした顔のまま。

武蔵小杉は、夜の闇の中に溶けていった。

ところで、今いつたい何時……1時？

え〜……そんな時間まで、僕はいつたい何してたんだろ？

ま、いつか。

とりあえず、飯はいいからシャワー浴びて暖かくして寝て。

明日不死川にちゃんと謝って、それで改めて許して貰おう。

3話目『鉄は熱いうちに打て』（後書き）

はい、情緒不安定な港くんでした。

対人関係となると、特に精神不安定になるわけですね。

落ち込み度合いは別として、そこそこの仲のいい人に同じことを言われれば、丸一日頭を抱えて落ち込むような子に育ってしまったんですね。

唯一の救いは、回復が早いことくらいでしょうか。

周りが見えていないことで余計なストレスをため込まないことも、救いといえば救いかもしれませんけど。

4話目『もしも明日があるならば』

朝目覚めて冷蔵庫を見ると、何も入ってなかった。

そういえば、昨日の帰りに食材を買い込む予定だったんだ。

あゝあ、卵と豚肉が安かったのに。

まあ、仕方ないさ。

スーパーのセールは諦めて、商店街の肉屋で豚肩肉でも買って帰りにした。

で、朝食の準備もできないから、ランニングの途中にコンビニに寄って。

変わり種肉まん、1リットル牛乳を1本。

昼飯は……ついでにパンでも買ってこよう。

昨日の今日だから、報道部とかの連中もうるさいだろうし。

それで、家に帰ってシャワー浴びて。

変わり種肉まんと牛乳で朝食を済ませて、僕は学校へと向かった。

……ヨーグルトまん、結構おいしかったなあ。

朝一番に教室に来るから、扉を開けても誰もいない。
そのはずなのに、僕の席には先客が座ってる。

見間違えるはずもなく、不死川だった。

ジロリ、という効果音が入ってもよさそうな視線。

顔もコツチに向けずに、横目でにらんでくる。

昨日のこともあって一瞬ひるんだんだけど……何してんの？

不死川ったらさ、僕の机で予習してるんだよ。

どういう意図があるか知らないけど、後で残り香と温もりを思う様
味わってやる！

と、そうじゃなくて。

僕はまず、どうするべきだろうか。

普通に挨拶をするだけっていうわけにはいかない。

不死川は昨日のことを確かに怒っていたから、いきなりいつも道理
とはいかない。

武蔵曰く『次に同じマネをしたら〜』ってことだけ。

いくら見逃してくれたからって、僕に対する心象が悪くなったのは否めない。

だからこそ、僕は今の状況を疑問に感じている。

アレだけのことをして許してくれたのはいいとして、どうして僕の机に座っているのか。

昨日までの不死川からは想像もつかないけど、今の不死川からは余計に想像できない。

というか、予習は自分の席でやらないと僕が嬉しくなるぞ！

「港。何か此方に言うことがあるのではないか？」

目線そのまま、カリカリとノートにシャープペンを走らせる。

ほんのり目が腫れぼったいのは、また夜更かして勉強したからかなあ。

飯時にだけど、できるだけ早く寝るように言い聞かせたつもりだったんだけどね。

まあ、どうでもよくないけど、今は先にすることがあるか。

「あ……昨日は、友人として恥をかかせて申し訳なかった」

この通り、と言わんばかりに頭を下げる僕。

腰の曲がりは見事に90度、頭のとっぺんしか見えやしない。

ここで土下座なんかしたら、むしろ安く見られちゃう。

ああいうのは『娘さんを幸せにして見せます！』で使うべきだ。

今できる誠心誠意の精一杯が、これだけ頭を下げることなんだよ。

で、謝ったのに、不死川からは反応なし。

相変わらずカリカリ鳴ってるし、不死川も何も言わない。

1分……2分……3分経つかってところで、不死川が席を立った。

何をするかは知らないけど、僕は頭を下げるしかない。

頭下げ続けているのが卑屈に見えて、見捨てられたっていう可能性に
気付いても。

ゴツ、と後頭部に衝撃。

この感触には覚えがある。

拳握って小指側を叩きつける『鉄槌』って奴だね、
けっこう力が入ってて、それでも加減がされていて。

不死川が許してくれていることに、今さらながら気がついた。

「此方は数学が苦手じゃ。そして、お前は数学が得意。

こういうときは、普通はどういうことをすべきなんじゃろうな？」

いや、敵わんね。

女性ってのは、男が思ってるより切り替えが早いらしい。

女々しいのは僕の方だったってことなのかなあ。

すました顔で、僕の席から参考書を持って移動する不死川。
自分の席に着くと、再びペンを動かかし始めた。

……なるほど、これも仕切り直しさせてくれるんだね。
また惚れちゃうよ、まったく。

不死川が去った僕の席に荷物を置いて、ノートとペンと消しゴムを用意。

それを持って行って、不死川の前の席に座る。

で、僕が言うべきであろう言葉を、やっと口にできた。

「不死川……どっかわかんないところある？」

『いつも通りにしろ』っていう、不死川の意を汲んで。

そういうわけで、今日は有頂天。

後から来た井上が『ほら、昨日の賭けの取り分』と3万を渡してくれた。

元の倍率は30倍だったけど、井上と風間が賭けてレートが落ちたらしい。

井上はともかく、風間まで武蔵の戦意喪失に賭けてると思わなかったよ。

まあ、取り分は減ったけど、今日は有頂天なんでもにかくよし。

クラスメイトが冷やかさなかったのは、まあ、僕が怖いからかなあ。誇張表現なしで『何するかわからん』人間に見えてるだろうし。

昨日のことをからかった仲村を、チヨークスリーパーで落としたのが良かったのか。

『ツレーグ腕絡み』で、仲村の背中側で右腕左腕を右足左足で口ツク。

そのまま首を締めあげて、やさしく廊下に転がしといた。

……担任のスルーの凄さは、見習うべきなのかもしれない。

まあ、そんなことがあったんだけど、とにかく朝から気分上々。

ウキウキ気分で、今日は久々にカツ丼定食でも食べようと思ったんだけど……。

2限の日本史で小テストがあったの忘れてて、ちょっと悲惨な目にあった。

『以前から日本史をキチンと学べと……』という説教を食らう。

綾小路家の権力がなきや、就職1つロクにできなかつたクズのくせに。

有頂天だから許してやるけど。

で、食堂行くと、僕の歩くところだけ人が道を開けてくれた。

うん、腫れもの扱いされてるんだろうね。

気分いいから気にしないけど。

窓際の、景色が良く見える席で飯が食える。

コレって結構貴重なことで、3年になるまではなかなか体験できな

いんだよ。

3・Sとか、上位格闘系部活動の3年が幅利かせてるからね。そういう意味じゃ、ランキング戦は千載一遇のチャンスなのかなあ。そこでキツチリ活躍すれば、学年中から一目置かれるわけだし。

不死川は山菜うどんと出来合いのサラダ。

僕は、カツ丼定食の味噌汁を、追加料金で豚汁にグレードアップ。豚が被るけど、まあ、豚肉好きだから問題ナシ。

不死川と話すことっていえば、他愛もない世間話。

野球チームがどうだの、近所の事件の犯人がどうだの。

思ったより俗っぽい会話だけど、高校生だしそんなもんだよ。

色っぽい会話は、まだまだオアズケみたいだけ。

そんな世間話の一環として、1人の人物の名前が挙がってね。

昨日のランキング戦……あまり思い出したくないけど、僕の対戦相手。

武蔵小杉についての話題。

「じゃあ、不死川が勝負したら圧勝なわけか」

「当然じゃ。あんな小娘相手に、此方が遅れをとってたまるか」

不死川も小娘だけど、その辺は好きだから聞かなかったこと。というか、武蔵と面識があるんだったら、言ってくればよかったのに。

話を聞くに別段有効な関係じゃないらしいけど、もしそうだったら

と思うと……。

いや、事前調査ってのは大切だね。

次からは、その辺を怠らないようにしましょう。

しかし、面識があるっていうけど、やっぱり普通じゃない。

なんでも、不死川が1度ケンカを吹っ掛けられて、地面に叩きつけたとか。

仕掛ける方も仕掛ける方だけど、不死川もよく返せるもんだ。

それとも、始めから不意を打たれると思っただけか。

どっちにしても、その手腕に惚れ直すだけだけだね。

「なあ、港。そんなに食って気持ち悪くならんか？」

「いや……これでも抑えてる方なんだけど。この後プロテイン飲むしさ」

「太るぞ？」

「毎日死ぬほどトレーニングしてるから大丈夫」

そんな風に言う僕を、半信半疑の目で見る不死川。

まあ、信じがたいかもしれないけど、食わないと痩せちゃうんだよ。毎日毎日、本当に死ぬほど練習してるから。

こっちで小西さんのジムに入ったとき、1カ月で5kg減ったもんなあ。

疲労とプレッシャーで、飯が全然食えなくて。

最近じゃ慣れてきたけど、もうこれでもかかってくらい食わないと痩せる。

脂肪がなくなっちゃうと持久力落ちるから、これ以上は減らしたくないし。

だから、朝でも昼でも晩でも、食えるときは思いっきり食う。栄養バランスは多少考えるけどね。

まあ、そんな話があったりして。

教室に戻って5限の授業が始まってやっと気付いたんだけど。

ランキング戦の話は、一切してなかった。

……不死川が気を使ってくれたんだろうね。

いや、好きになったのが不死川でよかった。

もし他の相手を好きになるなんてことになってたら、僕はどうなってたやら。

不死川あつての僕なんだよなあ、きっと。

「それで、今日はどうするのじゃ？ 18位がやるらしいぞ」

「誰と？」

「風間じゃ」

「じゃあいいや。多分だけど、風間が勝つから」

授業が全部終わって、みんなが思い思いに散り散りになっていく。そろそろと教室から人がいなくなる中、不死川が話しかけてきた。ランキング戦を見てこうって話なんだけど、僕としては昨日の今日だし。

試合模様は撮影されて学内ネットで見れるから、明日の現代国語の時間にも見るぞ。

……昨日の僕の試合、なかったことになったらいいんだけどね。

ま、あんなん永久保存されてもたまらんから、ちょうどよかったよ。

「それほど強いのか？」

「まあね。技が出てからが異常に速くて伸びるんだよ。

18位が誰だか知らないけど、勝てるとは思えないね」

戦ってみて、風間の怖さがわかった。

速いだけじゃなくて、伸びてくるんだよ。

跳躍も予想を上回る高さで飛距離で、蹴りも思ったより深く入り込んでくる。

だから目測を誤って……いや、僕の勘が鈍ってたのもあるんだけどさ。

風間の跳び蹴りを食らう羽目になったんだ。

もちろん、そんなもんは初見じゃ見切れない。でもって、相手は風間とは初めて戦うわけで。

よっぽどの長所や策を持ってない限り、実力差をひっくり返されて負ける。

地の力は、相手の方が強いんだろうけどね。

校門までの短い付き合いだけど、これも貴重な会話の時間。

ここでの会話があることで、この後の辛いトレーニングに耐えてる気がする。

いやまあ、当然そんなことはないんだけど、恋の力って偉大だから。僕がそれくらい、不死川を心の支えにしてるってことで。

で、校門まで来ちゃって、楽しい会話もこれでおしまい。

さあ、地獄に行つて来るかと覚悟したときだった。

「先輩」

誰だ、僕のことを先輩なんて呼ぶのは。

部活にも入っていないくて、後輩とも交流のない僕を先輩などと。

ガクトくんの知り合いのモロオカくんがチヨイスした動画を見過ぎたか。

モロオカくんの動画の通りなら、このまま学校か家でキメる流れだ

ね。

もちろん、僕はそんな妄想が現実になるとは思っていないけど。

でも、よく考えると、僕を呼んだわけじゃないのかもしれない。

声の主は明らかに女子で、とりわけ僕に縁がない人種だ。

もしかしたら不死川の知り合いかもしれない。

そうだったら、僕の他にどんな知り合いがいるのか知っておきたい。
というわけで、とりあえず声の主を確認。

「なんだ、武蔵か」

「誰かと思えば、不意打ちしたうえに此方に投げられた武蔵か」

「後輩の顔見た第一声がそれですか。」

「ていうか不死川先輩、いくらなんでもハッキリ言い過ぎです」

いや、『なんだ』でいいじゃん。

特に交流があるわけでもないし、むしろ僕に負けたんだし。

いったいどういう目的で、僕に声をかけてきたのやら。

ん？ 今、先輩って言ったんだっけか。

じゃあ、どっちに用があるかわからないんだね。

「別にいいですけどね。今日は目的があって先輩を待ってましたか
ら」

「ほお、ついに此方を倒す算段でもできたか？」

ああ、なるほど、そういう話か。
やっぱり不死川に用があるんじゃない。
武蔵だったら既知なわけだし、いちいち気にしなくてもいいか。
なんてことを考えて、僕はジムに行こうとしたんだけど。
でもやっぱり、ことの成行きが気になったりして、少し足を止めて
みたり。

「いえ、不死川先輩はいつでもいいんです」

「なっ……!!」

「今日は、港先輩に用があります」

僕の方を突然向くもんだから、ちょっとビックリ。

まさか、お礼参りとかじゃなからうか。

昨日の武蔵への所業に業を煮やした『武蔵小杉ファンクラブ』とか
が……。

いや、我ながらつまらないことを考えたもんだ。

コイツにファンクラブができる前に、不死川や川神にファンクラブ
ができるはず。

知名度や活躍から考えても、それは覆らぬと思うね。

まあ、お礼参りは冗談としても、リベンジかも知んない。

昨日僕に色々確認したのも、その準備に違いない。

性欲処理の道具にされていないと知って、気迫が戻ったのかも。

それならそれで、今度は丁重に相手してあげるだけだね。

とにかく、聞いてみるのが一番早いかな。

「用件って？ 内容によっては期待に添えないよ」

「港先輩、サブミッションと柔術を教えるジムに通ってるんですよね」

「厳密には柔術1本ね。サブミッションはノーギ（無着衣）クラスで習ってるの」

とはいっても、柔術クラスは僕も教える側なんだけど。

ブラジル人のカーロスさんが来ないと、他に柔術できる人がいなくてさ。

仕方なく、僕にお鉢が回ってきたり、サブミッションクラスに変更したり。

小西さんが、早く柔術覚えてくれるといいんだけど。

「そのあたりはどうでもいいんですけど」

どうでもいいんかい。

じゃあどうして聞いたんだよ、とは言えない。

このまま下手に返すと、話が長引いてジムに行けなさそうだ。

今日は火曜日で、小西さんのやってるサブミッションクラスがある。先週から頼みこんで『対打撃』の講習やってもらってるから、遅刻はできない。

頼んだ奴が遅刻するなんて失礼は、できるだけ避けたいからね。

さて、今のうちに逃げようか。

そう思った僕に、武蔵は聞きたくないことを言ってくれた。

というか、よくない意味で想定外な発言だった。

「港先輩の通ってるジムに、私も通わせてもらいます」

何を言い出すか、この小娘は。

「え〜つとね、武蔵。

僕はジムの責任者に『場所を口外するな』って言われてるんだけど」

「勝手について行くだけですから問題ありません」

「むやみに人を連れてくるなとも言われてるんだけど」

「港先輩の眼鏡に適ったことにしておいてください」

「遠まわしに『やめて欲しい』って言ってるんだけど」

「港先輩の希望を考慮するつもりはありません」

あゝ頭が痛え。

なんで僕……俺が、武蔵を連れてかなきゃいかんのだ。

昨日のことに負い目はあるけど、それとこれとは別問題。

小西さんには、キツく口止めされてるんだからよ。

俺……僕としては、そう簡単には招待できないわけで。さあ、どうやってつっぱねようかって考えてただけだ。

「港の通っているジムか。面白そうじゃな」

「いや、その……不死川？」

なんか不審なことを言い始める不死川。

いやいやいや、ちよつと待ってよ、お願いだから！

ねえ、ほら、あのさ、ほら、勘弁してよ！

『女2人もつれてイイ身分だな』とか言われたら、僕、その場で泣くぞ！

せつかくイイ人間関係を築いてきたのに！

お願いだから、一緒に行くとか言わないでください！

「よし、決めた！ 此方も見学していくぞ！」

……そうか、それでか。

下校時間を狙ったのは、僕と不死川が高確率で同じ場所にいるから。そこでわざわざ僕の通うジムに行くと言ったのは、不死川の気を惹くため。

不死川が興味を持てば、僕が断れないことを知っていてか。

そこに便乗すれば、不死川の心象をこれ以上悪くしたくない僕が許

可する。

そう考えて、この時間を狙ったってことか。
武蔵の奴、小細工使いやがって！

もう、諦めるしかないんだ。

だって、不死川と武蔵、もうなんか勝手に盛り上がってるし。
武蔵ならともかく、不死川を振り切るだけの根性は僕にはない。

あゝあゝ、聞こえない聞こえない！

全部で何人いるとか聞かないでくれ！

普段の練習について問い詰めないでくれ！

あゝあ、終わった。

このままいったら、ジムの皆さんにからかわれる。
からかわれるだけならいいけど……今日は事故が起こるんだろうな
あ。

勢い付きすぎて僕の肩が脱臼したりとか、熱くなりすぎて僕の膝が
折れたりだとか。

きつと、そういう事故が起こるに違いない。

せめて、祈ることだけでもやっておこう。

何に祈ったらいいかは分からないけど。

とりあえず、僕の手足が、明日も同じ方向に曲がりますように

5 話目 『小西サブミッションスクール』（前書き）

この話は、戦闘シーンが非常に長くなっています。しかもグラウンドの攻防であり、主人公の思考が長く書かれています。

そのため、ともしれば冗長になっているかもしれません。

うわ、退屈だなあと思った方は、

□

□

のような棒線を目印に読み飛ばしてください。

このような棒線が話の区切りになっていますので。

5話目『小西サブミッションスクール』

学園から最寄りの駅から電車で3本。

そこに、僕の通ってる『小西サブミッションスクール』がある。

まあ、ジムって体裁はとってるけど、趣味人の集まりみたいな気が強くて。

格闘技の試合で使えないような練習が、週5で繰り広げられてたり。集まる人たちも个性的で、小西さんを筆頭に、みんな頭のネジが飛んでてね。

この間なんか、勝手に道場破りの旅に出てった麦村さんが帰ってきたんだけど。

なんでか、そこそこ可愛い女性を連れてきて『俺の彼女!』とか言い出して。

そんな麦村さんを、みんなで仲良くランチしましたとき。

そういう馬鹿馬鹿しいことをやってるジムなわけだ。

で、入門制限をしてるのは、ウチのジムの技術を盗みに来るから。まあ、厳密には小西さんの技を盗みに来る、他所の格闘家が結構いる。

そついう連中は片っ端から関節技の餌食にしてたんだけど、小西さんも飽きてきて。

それで『むやみに人を連れてくるな』って警告をされるに至ったわけだ。

なんてことを話してるうちに、ジムに着いてしまった。
あゝあ、死んだ。

僕、もう絶対に死んだ。

ところで『小西サブミッションスクール』は、市街地から少し外れた町にある。

駅から10分で、近くにはコンビニが1軒。

まあ、けっこう好条件な場所にジムが建ってる。

プレハブの1階建てで、広さはそこそこ。

プロレスのリングとウェイトスペース作って、まだ3割くらいしか埋まってない。

広さっていう面では、かなり恵まれてるね。

中には事務所も応接室もなく、本当に鍛えるだけの場所になっている。

ジムの隅に机とソファがあるだけで、そこが応接室扱い。

貧弱な電源は、全部冷蔵庫のためだけに稼働してる。

電子レンジを持ちこんだカーロスさんがリンチされたのは記憶に新しい。

あ、辛うじて更衣室はあるか。

しかしこのジム、けっこう後ろ暗いことをしているせいかな。

通行人から見られないように、窓が道路側に存在しない。

スライドドアが1つあるだけで、道路側からじゃドアと壁しか見えない状況。

ついでに言うなら、窓そのものが全部で2つしかない。

夏は暑くて、冬は涼しいダブルソーラーサーキットが売りだったりする。

……去年の冬、麦村さんが凍死しかけた。

止まったら死ぬとか、いったいどのシベリアだよ。

とか当時は思ってたけど、一週間で慣れたね。

いや、慣れてって恐ろしい。

キレたジムの皆さんよりは、絶対に恐ろしくないけど。

「思ったより本格的じゃな」

「サブミッションのジムなのに、サンドバッグあるんですね」

たった1つしかない扉から、2人が少しだけ覗きこんで感想を呟く。武蔵の奴、呑気に言いやがって。

今から僕が両手足折られて、道場の横に転がされるかもしれないのに。

こんな特殊なことに人生かけちゃってる皆さんだから、誰も彼女いないんだ。

格闘技界に殴りこんでる小西さんでさえ、女性を連れ込んだことはない。

そんな中で、キレイどころを2人も連れてきた日にゃ……。

あゝ、ダメだ。

想像すると一歩も動けなくなる。

でも、今さら引き返せない。

始めから誤魔化せばよかったのかもしれないけど、もう遅い。

2人を扉の前からどかしきるより早く、小西さんと目があったから。無言の小西さんが、扉を開いちゃったから。

僕が扉の前にいるっていう、最悪のタイミングだったから。

「すいません、小西さん……その、後輩と同級生が付いてきちゃいました」

一応、言ってみただけさ。

死ぬ。

2秒後に死ぬ。

間違いなく死ぬ。

首の骨折られて死ぬ。

段々イメージが具体的になってくる。

いきなり殺さないで、腕を折ってからジムの中に引きずり込むんだ。それで、身動きの取れない僕を全員でリンチ。

その後に、じっくり圧力をかけられて、首の骨が折れて死ぬ。

しかも、小西さんなら即死できないように仕向けられるに違いない。苦しいまま長時間放置されて、じわじわ死んでいくのか……。

「武蔵小杉です」

「不死川心じゃ」

開け放たれた扉の前で止まっている僕の後ろから、2人が小西さんに声をかけた。

ちなみに小西さん、どういふ容姿をしてるかって言うと。身長は180cmで僕と同じ、スピード型レスラーみたいなしなやかな筋肉。

ちよつと長い髪の毛を、ワックスでバツチリ立てていて。

ツリ目がちだけど鼻は高くて、どう見てもイケメンに分類される顔。実際、アルバイトで雑誌モデルやってた時期もあるっていうしね。

このジムで一番頭おかしい人とは、誰も思わないだろうなあ。

そう、頭おかしいんだよ、小西さん。

一時期『完璧』を目指してて、辻斬りのマネをしてたらしいし。

ボクシングの日本ランカーとか、ケンカ屋を襲って。

そいつらの手なり足なりへし折ってたっていうんだよ。

本人の口から聞いた話だから本当かわからないけど、たぶん本当。

とにかく、そんな小西さんが目の前にいる。

視線の高さが一緒なのに、凄い威圧感。

わーい、これ、絶対死んだ。

ダッシュして逃げようもんなら、後ろから絞められて死ぬ。

せめて、ダッシュ逃げくらいは試すべきだろうか。

そんな風に思い始めたところで、小西さんは笑顔を見せる。

で、そんな爽やかな笑顔に似合った爽やかさで。

「おお、見学か？ いいぞ、好きなだけ見ていけ！」

信じられない、まったく信じられない。

『おら、入った入った！』っていうのは、口封じのためじゃないか。そういふ思いが抜けきらない内に、ジムの扉が閉められてしまった。

この調子だと……全員殺されるか、全員無事かの2択かなあ。
だのと思ってるうちに、小西さんが指示を飛ばす。

「おい、窓全開にしろ！ 客人だ！

本田と入江、ソファー引っ張って来い！

桑野、アイスティーとグラスとストロー持ってこい！」

……あれ？

ここまで来たら小西さんはともかく、他の皆さんも殺気がない。

先月彼女に振られた本田さんに、男子校しか進学先がなかった入江・桑野さんに至っては、去年の暮れに付き合ってた彼女を寝とられたとか。

誰もが誰も、女性を連れてきた僕を殺す動機を持っている。

僕や不死川や武蔵よりは弱いだろうけど、みんな一般人よりは強い。1人くらいは襲ってくるかと思ったら、案外そうでもないらしい。

でも、どうしてだろう。

なんか、みんなソワソワしてるんだけど。

もし不死川狙ってる人がいたら、今日のうちに不審者に襲われてもおつ。

「あの、小西さん？ 連れてきた僕が言うのもなんですけど、いいんですか？」

「お前の知り合いだろ？ ならいいよ。全然OK」

とりあえず、小西さんは問題ないらしい。

他の人らみたいに変な雰囲気もないし、含むところもなさそう。本当に僕の知人だから受け入れてくれてる感じ。

不死川と武蔵がソファアに座ってアイステイ を待つてるうちに。僕は、そのアイステイを探してる桑野さんに声をかける。

「あの、桑野さん？ 何かあつたんですか？」

「女の子連れてくるオマエには関係ないんだがな？」

入江の友人の紹介で、女子高生と合コンするんだ」

『いやあ、オマエを呼べなくて残念だ！』なんて桑野さんはおっしやった。

なるほど、これで理解できたよ。

女子高生と合コンが出来るから、多少のことは大目に見ると。

合コンで取り分が増えるから、僕がいなくなつて嬉しいと。

つまり、そういうことなんだろうね。

妙なモノを持ってないとも限らないから、僕が代わりにアイステイを注いだ。

疑われてることを知らない桑野さんは『悪いなあ！』なんて言うけるけど。

桑野さん、会つてこの方、貴方のことを一度も信用したことはありません。

しかし、緊張が解けてきて、今、やっと気が付いたんだけど。

今日は早上がりにするみたいで、他の皆さんはもう練習してたらし

い。
リングの近くを通ると、少し汗のにおいがした。
……そんなに合コンしたいんかい。

本当にこのジムでよかったのか考えつつ、僕は2人にアイステイーを運ぶ。

紅茶あるのにシロップないあたりが、執着の薄さを表しているよう
な。

仕方ないから、ストレートで飲んでもらうしかないよね。

「悪いね。紅茶とコーヒーと水しかないから」

まあ、本当にそれしかないからなあ。

紅茶なんてもんが冷蔵庫に入るようになったのも、入江が食い下が
ったから。

電源引いてる工事の間に、ちょっと離れた河原で練習したのが懐か
しい。

近所の子供たちに『うわ〜！ ホモの集団だ！』と騒がれたのは絶
対に忘れない。

警察の皆さん、事情を確認しないで強制的な任意同行を求めないで
ください。

いい加減、女性と子供たちの言うことを優先的に信じることを辞め
てください。

っと、余計な話はさておき。

「ここまで来ておいてワガママもないじゃろ」

「紅茶、好きですから」

なんてことを言っつて、謙虚にしてくれた。

いやあ、この謙虚なところも可愛らしい。

……ストローに嫉妬したことは、僕の今までの人生にないね。

と、紅茶を一口だけ飲んだ武蔵が、僕に向かって声をかけてきた。

「ところで港先輩。私は練習に参加させてもらえないんですか？」

「武蔵。先輩として忠告しておくが、本気でやめとこうね」

怖いこと言うなあ、この後輩は。

僕は慌てて視線をめぐらすけど……よかった、聞こえてない。

「え〜っと、ジャージの用意もあるんですけど」

「昨日の試合で、僕がほのめかしてたようなことをしてくるぞ、
コの人ら」

背中から肩に震えが抜けたかのように、武蔵は身を強張らせる。

うん、それでいいんだよ、それで。

僕は善意で言ってるんだ。

小西さんとはかく、ここの連中は本当に偶然を装ってやってくる。
しかも、文句を言われないうぎりぎりのラインで。

何で知ってるかって？

先々月に来た女性の入門者にやったんだよ、そういうこと。

「そういうわけで、見学したら帰ろうな。

今日の練習見ていただけなら、特になんも言わないから」

おとなしく聞いていた不死川を残して、僕は荷物を持って更衣室へ。さあて、今日は負け込むけど、それでも食い下がらなきゃ。

不死川に頑張ってるって見せて、見直してもらおうぞ〜。

それはそれとして。

更衣室の扉一枚向こうに不死川がいると思うと、ちょっと興奮してくるね。

ストレッチして、シャドーして、2年ぶりにサンドバッグ突いて。やっと体があったまってきたところで、スパリングに混じることにした。

今日は、小西さんのサブミッションクラス。

しかも、僕の要望で対打撃サブミッションを教えることになってる。

なってるんだけど……ただのフリースパーみたいだね、今日は。

不死川も武蔵も、目を丸くしちゃって。

冷たいだろうに、グラスを握りっぱなしになってる。

リングの上のスパリングに、その視線は釘付けだ。

そりゃ、小西さんは凄い。

先週の火曜日は僕も相手してもらったけど、牽制の前蹴りに合わせられた。

いくら錆びてるっていつても、下手なパンチよりは早いのに。

前蹴りを滑るように斜めに動いて回避して、軸足キヤッチされって極められた。

しかも、掴まれて、捻られて、極められる。

掴んでから極めに入るまでの時間は、1秒もかかってなかった。

この人もバケモノだ。

ただし、人間から成り上がったバケモノ。

川神百代とは違うけどバケモノには違いない。

僕にもなれるタイプのバケモノだ。

今の僕の目標、この人だしね。

ほら、今だって、入江の左フックの内側に入った。

左腕で首を抱えて、右手は入江の左手首をキヤッチ。

足を払いながら後方に倒れて、倒れたところには左肘が入江の首の後ろに。

そのまま入江の左腕をL字に絞り上げ、腕絡みを極めてしまった。

……普通、パンチに合わせてかかる技じゃないんだけどね。

ていうか、フックの内側に入ろうって発想が、常人には不可能だよ。

本田さん、桑野さんはとっくにリングから降りてる。合コンのために体力温存するつもりか。

あ、入江も降りてきた。

何が『いやあ、小西さんには敵わないっス！』だ。

お前って最初『寝技なんてボクシングの敵じゃねえし！』って言うてたよね。

で、小西さんに負けてからは『柔術なんて秒殺だよ！』って言うたよね。

2週間で全員に完璧に負けて、そっからはおとなしくなったけどさ。

ま、ともかく、僕の番ってことか。

あゝあ、気が重いなあ。

楽しみだけど、戦い方が全然違うんだもん、相性悪いし。

小西さんは典型的なスピードファイターで、パワーは僕の半分くらい。い。

力勝負をしようにも、本格的に力を入れる前にスカされるしさ。

それに、打撃は一切使わないけど、関節技がキレまくってる。

関節さえあれば、仮面ライダーに出てくる怪人だって倒せるだろうね

不死川を意識してるのがバレないように、そっちを見ずにリングイン。

今日の僕は、不死川に初めてお披露目する柔術着。

青もあるんだけど、今日は白で決めておこう。
柔道やってる不死川からすれば、そっちの方が見慣れてるだろうし。
見慣れてるってことは、それだけ僕の動きが分かりやすいってこと
で。

つまり、僕の凄さを知ってもらういい機会になるわけだ。
今まで不死川の前で、一度だって全力で戦ったことはないからね。
風間の件は……まあ、ちょっと遊び過ぎたってことにしておいて欲
しいな。

「じゃあ小西さん、よろしくお願いします」

「おう、いつでも来い！」

当面の目標は、小西さんに一矢報いること。
打撃でも関節でもいいから、この人に食らわせたい。
正直、この人以上の反応速度を持つてる人間の方が少ないだろうし。
そういう意味じゃ、本当にイイ実験台でもある。
僕の打撃や関節が、いったいどの程度のレベルに達しているかの。

小西さんは、ジリジリと間合いを詰める。

僕とは全然違う、腰の低いレスリングスタイル。

キャッチ・アズ・キャッチ・キャンなんて言われてる、ランカシャ
ースタイル。

隙あらば関節を取ってくるっていう、小西さんらしいスタイル。ハーフパンツとシャツだけだから、掴みどころが少なくてやり辛い。

僕はいつも通り、柔術スタイルで距離をとる。

両手をへソと胸の間くらいに構えて、手は軽く開いて。

腰はそれほど低くなく、ゆったりと余裕を持って両足を開いて。

左半身を晒せば、僕の習った柔術の構えになる。

嫌な話だけど、もう気後れしてる。

距離を詰めるのは小西さん、距離をとるのが僕。

気持ちの上でも負けてるし、実質、攻めてるのは小西さんだ。

僕のように粘っこくない、鋭いプレッシャーが降り注ぐ。

圧倒的な量で、圧倒的な強さで、圧倒的な鋭さで。

しかも、それがずっと覆い被さってくる。

前から来るだけじゃない、あらゆる角度から襲ってくる。

刺すなんて甘い表現じゃ足りない。

片っ端から全てが削り取られるような、そんな圧力。

僕は、左半身から右半身に変わり、小西さんの左側に回る。

すると、小西さんも僕の動きに合わせて体を動かす。

ここでもやっぱり、レベルの差がハッキリ現れた。

小西さんは、その場からほとんど動いてない。

僕が小西さんの周囲を回るように動くから、それに合わせてるだけだ。

常に僕を真正面から見据えるように、ただそうしているだけ。

僕が牽制しなきゃいけないのに、それさえもできない。

下手に動けば、即座に極められるから。

僕と小西さんの間にある緊張が、ジムの中に広がってく。そりゃそうだ。

分野は違えど、1対1で喧嘩したら僕と小西さんが1位と2位になる。

その差は天地ほどに開いてるけど、他の人らよりはずっとマシ。小西さんとともにスパーできるのが、そもそも僕だけだし。

窓を全開にしているはずのジムに、不思議な熱気がこもる。

質量を持った熱気が、意思を持った熱気が。

リングの上の熱気が、僕と小西さんの間にある熱気が。

窓を開けても抜けきらず、ジムの中に充満している。

もう、我慢できなかつた。

僕じゃなくて、小西さんが。

鋭い両足タックル。

僕ができるのは、そのタックルを受け止めることだけ……じゃない。知ってますよ、小西さん。

その両足タックルは、始めから受け止められることが前提なんですよね。

だから、ほら。

僕が受け止める力を利用して、腕を極めようとしてくる。タックルを自分から切って、回転しながら腕に飛び付く。

僕の右腕は瞬く間に真横に引っ張られて。

小西さんは、右足を僕の腹に引っ掛けて、腕を引っ張りながら回る。僕の頭を地面にぶつける様な、僕を前転させる様な腕をキヤッチしたまま、そういう方向に回転した。

僕はそれに逆らわず、小西さんの希望通り前転する。

ただし、右腕は曲げてあるから、すぐに右肘が極まることはない。その『すぐ』を使って、小西さんの希望より速く回転して。

不完全な腕のロックを外して、僕の腹にある右足を狙う。

小西さんは技の入りがけで、僕は地面に座ってるような体勢。

小西さんの反撃よりコンマ4秒くらい早く、僕はアキレス腱を狙う。

座ったまま小西さんは下がり、すぐにアキレス腱を外される。

よかった、外してくれて。

始めから、この展開を狙ってた。

流石に逃げるときは、小西さんも隙がないわけじゃない。

攻撃に比べて、防御がおざなりなんだよ。

ホント、とことん僕の逆をいくようなファイターだ。

粘りつくような攻防が苦手なところとか、ほんと好対照だよね。

せっかくのチャンスだ。

もちろん逃がさない。

小西さんの左膝を右掌で押しながら、小西さんの上を狙う。

一般的に、下がるより詰める方が速いんだ。

僕のスピードでも、小西さんをつらえられる。

左膝を抑えてた右の腕を狙ってきたが、それに合わせて右手を引く。

でも体は前進させて、こつそり右足で小西さんの左膝裏からフック。それを嫌がった小西さんが逃げようとするけど、さらに追跡。このときにはもう、右足のフックを外してる。

代わりに、地面に着いていた小西さんの左手を右手で払う。これで、小西さんはバランスを崩し、慣性で後ろに倒れ込む。

左膝は、右の内腿をなぞるように動かし、そのまま右脚を跨いで。左手を払われたばかりで上手く動かせない左足を、するりと右足で超えて。

生まれて初めて、この人相手にマウントを取った。

小西さんも驚いてるけど、僕も驚いてる。

不死川が見てるから頑張れるんだけど、これは意外だったよ。まさか、僕の地力が上がるくらい頑張ってたなんて。

ということにしておこう。

「ハハッ！ すげえ！ すげえよ港！

マウント取られるなんざ、兄貴とプロレスごっこして以来だ！」

嘘じゃないんだろうね。

この人、あんま考えないでモノ言う人だし。

ていうか、僕にマウント取られて余裕ってのが気に食わん。

さて、マウントは取った。

問題は、僕がこの先を考えていなかったことだ。

定石でいけば、軽いマウントパンチでプレッシャーかけて。

下向いたらチヨークスリーパー極めて、我慢したらそのままK.O。
腕を取られないように、細かく軽く刻み続ける。

ブラジリアン柔術的な戦い方は、そういうのが一般的だ。

隙見て『腕ひしぎ十字固め』って手もあるけど、この人相手には無理。

こと関節に関しては、このジムじゃ小西さんに通用する奴はいない。
基礎練習の時くらいだよ、関節取らせてくれるのは。

こうしている間にも、ギリギリと小西さんが動く。

僕は僕で、マウントを外さないように動きに合わせる。

頭の方にズレてコツチのミスを誘おうとする小西さん。

悪いですけど、そんな罠にかかるほど安い柔術じゃありません。

重心預け過ぎてひっくり返される真似なんか、絶対にしませんとも。

ただ、やっぱり逆転はされていた。

いつの間にか、また僕が責められている。

有利なポジションにいるはずの僕が、下にいる小西さんに。

下手を打てば、すぐに腕を取られる。

無茶をすれば、すぐに足を取られる。

小西さんの手の内を知ってるから、だからこそ動けない。

「なあ、港。こっからどうするんだ？」

マウント取って終わりじゃ、全然面白くないぞ！」

「あゝ、もう！ わかりましたよチクショウ！」

そりゃそうだ。

練習に来てるんだから『攻めない』はない。
これじゃあ、進歩するはずがない。

やぶれかぶれになりながら、僕は左の掌打を出す。

一番早く、一番軽く、すぐに戻せる一撃。

入江のジャブよりは早くないけど、麦村さんのジャブよりは早い。
防御と試合運びを重視した、倒すことを目的としない一撃。

が、取られた。

小西さんが首を右に振って掌打をかわして、僕の左手首を左手でキヤッチ。

掌は裏返されて、僕は自分の左腕の内側を見つめることに。

掌打を出した時に感じた怖気は、やっぱり間違いじゃなかった。

僕は、小西さんに軽く攻撃をして、また体勢を整えるつもりだった。
背筋を伸ばして、高いところから見下ろすような体勢に。

それを利用されたんだ。

小西さんに手を取られまいと、僕は体を持ち上げる準備をしていた。
だから、小西さんに手首を取られても、僕の背筋は伸びてしまった。
簡単に左腕を引っ張られて、左肘を伸ばされて。

その左肘の外側を圧迫するように、右腕が滑り込んできて。

小西さんの右手は、僕の左肩の付け根をしっかり掴む。

まるで、小西さんの右腕が蛇になって、僕の左腕を絞めつけている
かのよう。

寒気が背中から脳天に達するよりも早く、正面から右肘を極められた。

僕の掌はリングの地にピッタリ張り付けられて固定されてる。オマケに肘を絡むように固定されてるから、下手に前に出ると折れる。

今だって肘が張ってヤバそうなのに、コレ以上ってなると折れそう。って、小西さん、折れる折れる！

「ギブギブギブ！　すぐ放してください！　折れる！　折れますから！」

開いた右手で、僕の左手に絡んでる小西さんの右腕を叩く。

わかってくれたのか、小西さんは拘束を解いてくれた。

で、僕もマウントを解いて、立ち上がる小西さんの代わりにリングに転がる。

そんな僕を見て、小西さんは満足そうに笑った。

「なかなか面白かった！　いつもあれくらいで頼むぞ！」

「無茶言わないでくださいよ」

天井を仰いだまま、僕は小西さんに返した。クソ……いつかブツ倒す。

ブツ倒して、バケモノに成り変わってやる。

で、アンタの『サブミッション・ハンター』ってニックネームは僕のもんだ。

それまで、上から僕を見て笑ってる。

いつか下から拝ませてやる。

「あゝ、殺されるかと思った」

リングから降りてきた僕は、もう汗だくだった。

用意してたタオルで顔やら柔術着の中を拭いても、すぐに汗が湧いてくる。

時期が時期だからだけど、汗が止まらなくて仕方ない。

シャワーでも浴びればスッキリするけど、近所の銭湯行かなきゃいけないからね。

で、スパーが終わったわけだから、不死川のが気になって。

リングからちよつと離れた席に、それとなく近寄ってみた。

まあ、何だ言つて『僕の通ってるジム』なわけだしさ。

戦ってるそこ見せられたわけだし、感想も聞いておきたいところ。

「いやまあ、普段からこんなことしてんの。週5で1日4時間くら

い
」

そんな風に言ってみただけど……。
なんか、拍手されてた。

目も、入江とかのスパーの時より丸くなってて。
本当に、心底驚いてるって感じがピッタリだった。
そんなに感心してもらえて、僕も嬉しいね。

「小西殿も凄いが……どこにそんな力を隠しておった？」

さすがに、不死川にはレベルの高さが分かったらしい。

ただ、小西さんの方がずっと凄いのは分かってないんだろうか。

それとも、僕に気を遣ってくれてるのか。

前者だったら見くびるけど、後者だったら嬉しいね。

「いやほら、目立つでしょ。これくらい使えと」

「まあ、目立つな」

事実、柔術スタイル1本でも、まともな連中なら僕より強い奴の方が少ない。

ただ、僕より強い奴はたくさんいるし、学園にもそういう奴がいる。
そういう連中に目を付けられたら、注目されて面倒になる。

あんまり目立つと、いろんな諸々の関係がよろしくなくなる。

1年の時に静かだったのは、その辺の理由もあるんだよね。

それと、打撃系の連中のレベルが知りたかった。

正直言うと、かなり見くびってた。

今勝負しても、強い連中相手だったら勝ち目がない。
だからこそ、先週から対打撃を教えてもらってるんだけど。

「港先輩、ここまで強かったんですね」

勝てないわけですよ、とボソッと付け加える武蔵。
そりゃそうだ。

武蔵の動きを見るに、柔道と空手をかじってるみたいだけど。
いくら才能があっても、その程度の奴には負けない。
血の小便が漏れる様な努力もなしに、同じ舞台には立たせないさ。

「まあ、とにかく、このジムはやめときなよ。」

強くなりたければ、明日にでも小西さんの知り合いがやってる道
場教えるから」

「そこは、このジムみたいな感じなんですか？」

「いや……喉貫いたり、投げながら腕折ったりするの。」

古流武術らしくてさ、師範が女性の方だから安心していいと思
うよ?」

一瞬眉をひそめたけど、すぐに目が輝いた。

武蔵も、不死川も。

……余計なこと言ったかも知んない。

ていうか2人とも、女の子がそんなことに興味を抱かないで。
本当に『人を殺せる技』を持つてる方なんだから。

「まあ、それはまた明日ってことで、今日は解散かなあ」

僕がリングに視線を戻すと、テキパキと片付けが進んでいた。

小西さんも汗を拭いてたんだけど、入江はリングを拭いている。

いつの間にモップがけ終わったんだろ？

あと、本田さんも桑野さんも、床を掃除し終わった。

いつも掃除押し付けるクセに……よっぽど合コン行きたいんですね。

「そうだな。俺も今日は兄貴と焼肉に行くから、もう帰るか」

聞こえてたんですね、小西さん。

まあ、これで全員帰ることが決まったわけだ。

結局、不死川と武蔵も簡単に掃除を手伝って。

それぞれ別々の目的地に向かって、ジムの前で解散した。

外は真つ暗。

午後の8時ともなれば、いくらなんでも日照りはない。

街灯の明かりが所々途切れてるのが、なんとも田舎くさい。

まあ、本当の田舎ってのは、キツネに遭遇したりとか。

他にも、猛禽類がいきなり目の前に現れたりするような土地だ。

コンビニもあるわけだし、ここもまだまだ町っばい。

「じゃあ、僕、こっから逆だから」

最寄りの駅に着いてから、僕は不死川と武蔵にそう告げた。

まあ、今日一日は、総合してみればプラスが多かった気がする。

不死川に実力を見せられたし、実力が上がってるのも分かった。

腕も足も無事だったし、ジムの皆もやり過ごせた。

久々に食ったカツ鍋定食も美味しかったし……不死川と武蔵のスト

ローも手に入った。

なんだ、言うことナシじゃないか。

……いや、待てよ。

買い出し忘れてるよな？

まあ、晩飯は『梅屋』で済ますからいいとして、パンどうしょ？

昼飯のつもりで買ってつたけど、すっかり忘れてた。

まあ、梅屋で食った後に、家に帰ってから食べるか。

「そうですね。じゃあ、また明日」

「またな、港」

そうやって、駅のホームに至る前に、軽く手を振って2人と別れた。

客観的に見たら、僕って恵まれてるんだろっね。
好きな女の子と、ここまで親密になれるなんて。
まあ、こっからが本当の勝負なんだろうけどさ。
とりあえず、今の状況を言葉にするとしたら……。

『我が世の春が来た』

ってところか。

まあ、あとは冬が来ないことを祈るばかりだね。

なに、祈りは通じるぞ。

僕の手足は、今も同じ方向に曲がるんだから。

6話目『剣聖センセイション』

あのあと気付いたんだけど、シャワー浴びるの忘れてて。

汗臭いまま梅屋に行くわけにもいかず、唇を噛みながら梅屋の前を通過。

一回家に帰ってから、結局、コンビニ弁当とカップの味噌汁を買った。

あと、明日の朝食用の弁当も、味噌汁と一緒にもう1セット。

みぞれ竜田弁当は、まあまあいける感じ。

カップの味噌汁は……味が濃いし、塩分高い。

明日は倍に薄めて飲もう。

そんなどうでもいいことを考えながら歯を磨いて。

約束通り、ウチのジム以外の道場の場所を確認して。

念のために、駒田さんに何か道場はないか聞いておいて。

借りたDVD見てたら、珍しく0時を回りそうだったんで。

慌てて住所と広告をプリントアウトして、学生カバンにしまって。

明日のこともあるし、とっとと布団にもぐり込んだ。

あつという間に時間は過ぎた。

飯食って学校来て、不死川とちよこつと話して。

予習済ませて、つまらんHR聞いて。

数学と物理だけ真剣に聞いて、古典と世界史のときはランキング戦の動画見て。

それで、4限が終わって、さて食堂で飯食おう……ってのが今。

僕の目の前で旨そうな匂いをさせてるのは、恒例のトッピングカレー。

今日はレアなスコッチエッグが食えたりして、早くも幸せな気分。

カレーの種類のはやは、この学園の美点の1つだね。

ビーフ、ポーク、チキン、ベジタブルの4つからルーを選べるのもいい。

トッピングは、トンカツ、チキンカツ、唐揚げ、ハンバーグ、メンチカツ。

コロツケ、チキンソテー、ポークソテー、スコッチエッグの全9種類。

中でも、スコッチエッグは値段も高くて数が少ないから、滅多に食えない。

カレー好きの僕でさえ、これが入学してから5度目の体験。

あの卵と挽肉とカレールーと米のハーモニーといたら……。

毎日食っても、向こう半年は飽きない自信があるね。

スコッチエッグカレーが、僕の目の前に鎮座してるのに。

早く、スコッチエッグとカレーを一緒に咀嚼したいのに。

そんな思いに駆られているけど、目の前の2人を無視できない。

やまかけ定食を前にして、箸もつけずに腕を組んでいる不死川。チャーハンセットのチャーハンを、レンゲで崩すだけの武蔵。何を催促しているかは、そりゃ僕にだってわかる。

名残惜しいけど、カレーは後回し。

……本当にカレーが名残惜しいんだけどね。

こんなことなら、いつでも食えるトンカツカレーにでもしておくんだった。

「それでだね、2人とも。昨日話した道場だけど、今は入門募集を
してないらしい」

何か言いだしそうな2人を制するように、微妙な間を埋めて僕は続ける。

以外にも、不満そうな顔をしたのは武蔵だけ。

不死川からすれば、それほど執着する問題でもないのかもね。

「今朝小西さんから連絡があつて、仕事が忙しくて道場閉めてるんだって。

それでまあ、他の知り合いのツテで似たようなところを探してみ
たんだよ」

あらかじめ用意していた紙を、胸ポケットから3枚取り出した。1枚は不死川に、1枚は武蔵に、1枚は自分で内容を確認するために。

その紙を見た2人が、揃って眉をひそめる。

古流武術の道場じゃないから、ってだけじゃないだろうね。

そりゃ、僕だつて紹介されたときはアホらしいと思つたよ。

でも、駒田さんに借りたDVD見たら結構強かつたし、技自体は面白い。

面白いんだけど、名前からしてイロモノ丸出し。

「なんじゃ、この『スナイパー空手』というの？」

「え〜とね……」

渡した紙には、ネットで調べた時に出てきた広告が。

ハーフパンツに空手着の上だけを着た姿の男が、正面に空手つばい構えをしてる。

あ、訂正訂正。頭に……ハンチングをかぶってる。

で、その人の上に重なるように、細々とした文字が乗っているわけ。

その説明を読みあげると、こんな感じ。

「スナイパー空手とは、伝統派空手を進化させた新世代の空手です。相手の膝への蹴り⇨狙撃を第一の目的とし、そこで相手のバランス

スを破壊。

然る後に、バランスを崩した相手に一撃必殺たる攻撃を加える。安全で楽しいスナイパー空手の道場へ、ぜひ足を運んではいかがですか？

今なら入会費無料、さらに、入会特典で空手着や帽子も無料で提供しています」

「そのまま読み上げられても困るんですけど」

「そう言われてもなあ」

僕としても、かなり急だったしね。

駒田さんに聞いてみたら、じゃあここがいいんじゃないかって話だったし。

まあ、割としっかりしてると思うよ？

月謝も月5000円で手頃だし、週5で練習やってるし。

指導者が『あらゆるフェチを網羅している！』じゃなければなあ。

僕だって、もっと前向きな勧め方をするのにね。

「ほら、道場もそんな遠くないしさ、今日の帰りにでも行ってみなよ」

「先輩は来ないんですか？」

「行かないよ、そんなイロモノ空手の道場なんか」

というか、もう空手はいい。

楽しい思い出を上回る、胸糞悪い思い出しかないから。

あゝ、ダメだ、気をつけなきゃ。

気分悪くなると、だんだん嫌なことばっか思い出し始める。
とりあえず、適当に話題変えておこう。

この話は、一旦お終いだ。

不死川も、こっそり広告付き返してきたわけだしね。

「それよりさ、やっぱり風間が勝ったね」

「テコンドー相手に飛び後ろ回し蹴りとは、底が知れん奴じゃ」

話を聞くに、相手はサッカー部の補欠。

そんな微妙な奴のクセに、ずっとテコンドー習っていたらしい。
まあ、テコンドーの方が気合入れてたんだろうけど、結局は風間が勝った。

蹴りの専門家に蹴りで勝つとか、どこまでやってくれるのやら。
寝技と組技じゃ、絶対に負けないけどな。

しかし、これは面倒くさい。

勝負しろって意思表示なんだろう。

僕が、風間にチャレンジャーする側として。

ここで勝負を避けたら、風間から逃げたって言われるのかなあ。
アレだ……俺としては気に食わねえ。

負けてもない相手に評判落とされるなんざ、シャレにならん。
ここは1つ、風間より上の順位の奴を倒しとくか。

風間を直で倒すメリット、そんなないしな。

え〜っと、どうしてだろ？

気分転換のために話題変えたのに、墓穴掘った気がする。
むしろ、眼前の問題になった分、イライラ感が増してるような。

「あの……先輩、何を呆けてるんですか？」

「なんでもねえよ」

「は？」

「あ〜、いや、なんでもない。なんでもないよ」

駄目だ駄目だ。

最近、自制が利かなくなってきた。

もっと冷静で謙虚で、余裕があるところを見せなきゃ。

俺は……僕は、落ち着いてる方が強いんだから。

焦ったってロクなことにはならない。

慌てたその分ミスが増えるし、状況は確実に悪くなる。

状況が悪くなれば追い詰められて、大きな失敗につながる。

そう、落ち着くんだ。

「港、スプーンが前衛アートになっておるぞ」

「……最近のスプーンは脆くていけないね」

言われて手元を見たけど、本当に前衛アートになってる。いつの間に両手で握ってたんだろ。

中心部と付け根の2ヶ所でねじれたスプーンは、見事なアーチを描いてて。

アーチの外側からすくって食べないといけないのは、まあ、諦めよう。

「え？ そのまま食べるんですか？」

「そのまま何も、始めからこういう形だったよ」

そんな言い訳をして、さて、ようやく僕はスコッチエッグを切り崩して。

気分の問題で不味くなったカレーを、いつも通りに平らげた。

……スプーンの件で、学食のおばちゃんにごっぴどく叱られた。

5限は日本史、6限は自習。

数学Bの先生が、風邪をこじらせて肺炎やつたらしい。

明日から何日かは代理の先生が来るっていうから、問題ないけどね。
増田先生、普段から節制してる人だったのになあ。

で、6限もHRも流れるように終わって。

「ん？ まっすぐ帰らんのか？」

「うん。16位とランキング戦しようと思って」

16位の奴は、総合格闘技研究会の部長だ。

寝技も打撃もやるけど、若干打撃重視。

僕としては、そこそこやりやすい。

そんなレベルの打撃を食らうほど、甘くはないつもり。

いや、だから、風間は例外だっけってことにしておいてください。

「職員室で申請して、あとは許可待ちだっけ？」

「まあ、順番つかえておるから、すぐとはいかんじゃろっつが」

そんなことを話しながら、不死川と廊下に行く。

よく考えれば、いつもより話す時間が長くなるんだよなあ。そういうことなら、毎日申請に行ってもいいかもしれない。今回16位倒しちゃったら、あと10回くらいしか使えないんだけどね。

「一応聞いておくが、勝てる相手なのか？」

「遊びながら勝てると思う。試合見たことあるけど、微妙な感じだったし」

誇張とか強がりじゃなくて、本当に微妙なの。

打撃が得意って割には、僕の方がマシな突き蹴りができるし。

タツクルも遅くて強引で、テイクダウンしてからも決定力が弱い。タフはタフだけど、ただそれだけってタイプに見える。

総合格闘技でもなきや勝ち上がれないような才能しかないんだろうね。

要するに、試合の上手い人間なわけだ。

打撃と組技の使いどころと、その配分が上手い。

タフっていうのも、試合中に上手く相手のスタミナを削ってるから疲れた相手の打撃も組技も、こっちの体力が十分なら怖いもんじゃないからね。

総じて僕と似てるけど、僕とは決定的に違うところがある。

それは、積み重ねてきた努力と屈辱と苦痛の量。

厳しいトレーニングで血の小便が漏れて、クソは赤黒くなってた。

汗が出なくなるまで体を追い込んで、気を失った回数は1ケタを超えてる。

この世に生まれて17年くらいで、寿命を縮める鍛え方をしてるんだ。

死に物狂いだのガムシヤラだの、その程度に負けるつもりはない。

「我が世の春が来た！」

誰だ、いきなり大声で。

いくら年頃の女子だっていつても、うるさいのは感心しない。

人通りは少ないにしても、廊下で急に叫ぶってどういう見だよ。

そう思っつて、舌打ちを我慢しながら声の主を確かめると。

確かめると……確かめ、て………え？

「おいおいおいおいおいおいおい！」

「みみみみみつみみ！？」

おかしい、あり得ない！

ちよつとコレ、どつきりとかじゃないんだよな！？

俺のことからかって……じゃなくて！
僕のことからかって、誰かが変装してるんだよな！？

じゃないだろ、僕！

受け入れるよ！

見間違えるわけないだろ！

去年見たばかりじゃないか！

目の前にいる、この女は！

刀を持った、この女は！

「ゆきつ………黛、お前、川神学園だったのか！？」

「ミチヒロさん、どうしてここに！？」

なんでいるんだよチクシヨウが！

石川県的高校に進学するんじゃないのかよ！

黛由紀江………忘れもしない、あの日の瞬殺劇。

寝技に持ち込もうとして、一瞬で地面に叩きつけられた恐怖。
柔術のジモ出せず、峰打ちで気絶させられた屈辱。

コッチの蹴る倍以上の速度で顔面を蹴り抜かれた時の絶望感。
1つだって忘れるものか。

「港、知り合いか？」

「え？ え？ 薫さんの知り合い？」

あゝ、落ち着け僕！

とりあえず落ち着くんのだ！

その時とは同じ状況じゃないんだ、絶対大丈夫、なはず！

性格が悪い子じゃないのはわかってるんだ！

この子は……間が悪い子なんだよ！

で、結局、ランキング戦の申請忘れたままで食堂に来ちゃった。

状況は極めて単純。

僕の隣に不死川がいて、正面には大和田さんが。

不死川の正面には、薫……由紀江ちゃんが。

僕の手元には熱い梅こぶ茶、不死川は玉露の350ml缶。

由紀江ちゃんはストレートのホットティーで、大和田さんはアイスレモンティー。

4人の座る机の中央には、僕が買ってきた茶菓子が数点。甘いせんべいに、出来合いのクッキーに、カステラ菓子。誰も手を付けていないのは、遠慮が原因ってわけじゃあるまい。

ハッキリ言って、空気が悪い。

不死川は状況を静観する様子だし、由紀江ちゃんにリードは期待できない。

大和田さんも、未だにこの状況が飲み込めてないみたい。

じゃあ、仕方ない。

少しでも雰囲気のを和らげて、状況を理解してもらうためだ。切りたくもないけど、先陣は僕が切る。

「あゝ、改めて紹介しようか。

コッチは、クラスメイトの不死川心。不死川家の娘さんね。

で、コッチは黛由紀江。お袋の実家……石川県にある剣豪の道場の娘」

深いところはぼかさないとね。

由紀江ちゃん、まだ大和田さんにどこまで言ってるかわからないし。生ける伝説、黛十一段が長女、黛由紀江。

地元じゃ、勘違いしてケンカ売った奴らが軒並み倒されたりとか。僕も、爺さんの見栄で痛い目見せられたしね。

1年に2回、合計で7回も。

「えつとですね、大和田さん。」

こちら、私の実家のあたりで……顔の利く家のお孫さんです。
ミチヒロさん、あの、こちらの方は大和田さんと言いまして、その

「友人です」

出来てる子だなあ、大和田さん。

すかさず、しかしハツキリというってのはいいね。

もう少し胸が小さかったら、及第点には達してるところ。

……いや、許容範囲内だろうか。

それはともかく、性格の方がタイプから遠い。

僕の好みは、もうちょっとキツイ女性なんだよね。

もうちょっとヤンチャな気がないと、面白みに欠けるしなあ。

さつきから視線がきよるきよるしてるのは、まあ、仕方ない。

ココ最近戦ってばっかな僕に、名家の不死川心。

程度は違えども、目立つ2人が目の前にいて、片方は友達の知り合いと来た。

そりゃ、ジロジロ見たり、チラツと見たりはするよなあ。

不死川も盗み見られてるのを気付かないフリしてるし、僕も合わせとくか。

もちろん、そつちには合わせとくけどさ。

追及の手は、緩めるつもりはないぞ。

「で、黛さん。どうして川神にいらっしやるんでしょうか？」

梅ごぶ茶の缶を手の中でくるくる回しながら、由紀江ちゃんに聞いてみたり。

つか、本当に誰かの差し金とかじゃないんだろうな？

こんな展開になると思ってなかったから、未だに心の整理がつかんわ！

「ミチヒロさんこそ、愛知の高校には行かれなかったんですか？」

「川神の方が都合が良くてね」

まあ、愛知県の高校に行っても仕方なかったしなあ。

高校自体、武道系の部活動が強いところが少ないし。

なにより、空手道場ばっかだから、新しいこと学びにくいし。

……友人置いてきちゃったけど、得られるものと比べちゃったんだよね。

そついうこと考えたら、魅力的過ぎたんだよね、川神が。

「しかし、田舎の権力者の孫と剣術道場の娘では、接点がなさそうじゃが？」

「ガキの時分に、全員事故死やらかしたオジサン家族の葬式があつてね。

田舎独特のコミュニティー維持のために、黛さんのところにも声が掛ってさ。

でまあ、ショックを受けた爺さんが酒飲みまくって、世迷い事をぬかしてくれて……」

思い出して、身震いした。

今でも忘れない、あの一撃の感触。

まだ未熟だったとはいえ、僕を一撃のもとに叩き伏せた、あの投げ襟口狙って、足狙って、そっから袖狙ったのに。

フェイント全部無視して、袖を取ろうとした僕を裏投げで。

あのときに頭力チ割って出来た傷は、今でも洗髪の時に指に触れる。

コイツは、努力できて才能もあるバケモノだ

生まれながらの天才、才に驕らず努力できる性根。

常に上を見続けているのは、どういう目論見があつてのことやら。それとも、見果てぬ果てを目指せるからバケモノなのかなあ。

小西さんと違いすぎるから、よくわからんね。

「まあとにかく、全く知らない仲ではないんだよ」

クッキーを1つ、口の中に放り込みながら。

親しいわけでもないんだけどね、と付け加える。

実際、会話したことほとんどないし。

黛の妹とも話したことないから、僕自身が黛家と疎遠なだけか。

「ところで、北陸の剣豪で黛というならば、あの黛十一段の娘か？」

「はい。その黛十一段の娘です」

さすが不死川。

由紀江ちゃんへの気遣いを一撃で粉碎しちゃった。
なるほど、後輩は甘やかさない主義ってことか。

しかし、由紀江ちゃん、黙ってるつもりもないのか。

まあ、この辺で黛十一段なんて言っても、凄さ分かる奴の方が少ないし。

実家が剣術の道場っていう話の延長くらいに思ってたんだろうなあ。

で、そのまま不死川と由紀江ちゃんが盛り上がる。

おいおい、大和田さん戸惑っちゃってるよ。

キョロキョロと視線が動いて……ちょっと待て。

僕の方を向いた状態で視線を止められても困るんだけど。
でもって、また視線逸らしちゃうしなあ。

よし、少しくらい後輩に話題を提供してみるか。

「大和田さん、大和田さん。1年の武蔵ってのは知ってる？」

「あ、はい、有名人ですよね」

大和田さん。

今僕の方見て、うわって顔したよね。

ほら、あの試合、なかったことになってるんだからさ。
僕が先輩に汗だくで迫ったことなんか、もう忘れてくれ。

「武蔵だけど、どうなのかな？ その、1年生の間では」

「あまりいい評判は聞かないですね。けっこう無茶してますし」

「いや、想像がつかないなあ。僕と不死川には、それなりに謙虚な
んだけど」

「上下関係には気を遣ってるみたいですからね」

大和田さん、ここで紅茶を一口。
いいタイミングだから、僕も梅こぶ茶で喉を湿らせた。

「じゃあさ、同級生相手には傲慢だったりするの？」

「そうですね……あからさまではないですけど、態度は大きいです」

あ、でも。

なんて言ってから、大和田さんは続ける。

「港先輩との決闘があつてから、随分おとなしくなりましたよ」

「えっと、具体的にはどういう風に？」

「いつもは、こう、なんていうのかな？ 高圧的なオーラが出てたんですけど。」

そういう『私って凄いいんだぞ〜！』って雰囲気、パタツとなくなつたんです」

すり寄つてくる人も無視するようになりまし、なんて続けるわけ。

なんとなく、武蔵の人となりが分かつた気がした。

要するに、自信過剰な自信家だつたんだよなあ。

残念なことに、自信を裏付ける才能もあつたんだろうし。

何か始めたら、武蔵より早く上達する奴なんか居なかつたんだろう。

そりゃ、暴れてみたくもなるだろうね。

「は〜……よつぼど堪えたんだね」

まあ、精神的に堪えるようにはしたんだけどね。

まさか、ここまでの効果があるなんて思つてなかつた。

僕の意の及ばないところで、1年生の統治が崩壊していただなんて。

「その、悪い人じゃないとは思つんです、武蔵さん。

きつと、他の人よりも優れてなきゃいけないって思ってるんじゃないかなって」

テーブルに置いた紅茶の缶を握ったまま、大和田さんは視線を落とす。

うん、自分の意見が言いにくいタイプなんだね。

初対面の先輩相手っていうのもあるんだろうけど。

と、いきなり思い出したかのように顔を挙げる大和田さん。

不味いことは言っていないと思うんだけど、どうしたんだろ？

「あ、すみません！　なんか、偉そうなこと言って……」

「いいよいいよ。武蔵のことだからね。もっと言ってやってくれ」

そんな風に茶化しながら、カステラ菓子を一口で食べる僕。

あゝ、これマズイわ。

中はパッサパサでカチカチだし、表面の砂糖が必要以上にざらついてウザい。

僕があからさまに食ってたおかげか、大和田さんもクッキーに手を付けた。

そんなにサイズの大きくないクッキーを、チマチマと小口で食べる。なんつったつけ、犬食いは椀とか丼を於いて口を近づけて食べるヤツだし……。

まあ、後輩の気が少しでも紛れたならどうでもいいか。

……：食い終わるまで待つか。

一応、由紀江ちゃんの友人みたいだし。

少しくらい気を使ってあげても、悪い方には転がらんでしょ。

「ま、これも何かの縁だし、困ったことがあったら声かけとくれよ。薫さんの友人だってんなら、特別に力を貸しちゃうこともあるだろうしね」

「はい、頼りにさせてもらいます」

一応、アドレスと携帯の番号を書いた紙を渡しておく。
『由紀江ちゃんにも送つといておくれよ』というのも忘れない。

ま、社交辞令としちゃ無難だね。

これで、大和田さんと由紀江ちゃんはかなりの確率でアドレス交換をする。

もしかしたらもう済んでるかもしれないけど、そこは余計なお世話ってことで。

年下は放っておけないんだよね、僕。

コツチ来てから、年上で世話焼いてくれる人らがたくさんいたからね。

だから、今度は僕が年下に世話を焼く番だってことさ。

それに、どうせ由紀江ちゃんのことだから、トラブル起こすだろうし。

そうなったら、この子も反応に困るだろうから。

顔突き合わせて話した仲だし、手くらい貸して上げられるはず。

もちろん、程度と限度ってもんがあるけどね。

そのあと、不死川に僕が話を振って、結局4人で何か話した。七浜の球団の今シーズンの調子だとか、不死川の金持ちならではの面白話とか。

僕と同じアパートに住んでる人の話とか、由紀江ちゃんの住んでた田舎の話とか。

夕日が陰るまで話しこんで、今日のところはお開きになった。

由紀江ちゃんも不死川と仲良くなったみたいで、それもまあ、いいことだ。

いいことなんだけど……。

その日の夜、大和田さんから『どうしましょう？』って件名でメールが。

なんでも、由紀江ちゃんが長文もいいとこなメールを送ってきたとかで。

『2通目が遅からず来るから大丈夫』って返しといた。

僕と不死川に勝るとも劣らず、これはこれは前途多難な。

由紀江ちゃんは由紀江ちゃんで大変だろうけどさ。

僕は僕で、頑張らないとね。

急がなくてもいいから、不死川と仲良くなって。

悲願成就する日を、迎えられるように。

6 話目 『剣聖センセイション』（後書き）

まゆっち大活躍と思われた皆さま、本当にすいませんでした……。書いてる途中から、どうしても大和田さんが書きたくてなっつい……………。

幕間『卑しく気高い魂よ』

港には申し訳ないことをした。

朝から平静を装っておったが、今でも罪悪感に押しつぶされそうじゃ。

小西殿の知り合いの道場を紹介してくれるという話。

この話は、確かに魅力的じゃった。

古武道というならば、柔道に通じるところがあるかも知れん。であるなら、此方の実力を引き上げるいい機会になると思った。

だから此方は、先んじて道場主を見つけ出した。

昨日、駅で武蔵と別れた後のこと。

此方は不死川家の者を使って、その道場を調べさせた。

それで、その道場主の皆口殿に話をつけて。

此方に専属で技を教えてくれるように、約束を取り付けた。

もともと人数の多い道場ではなく、情性でやっている者が多い。

だから、そういう者を切り捨て、やる気のある者に手を貸すのは当然だと。

皆口殿はそう言ってくれたが、やはり罪悪感は拭えない。

『紹介してくれる』といった港を、裏切ったんじゃから。

昼食の時も、心がひどく痛んだ。

あのときの港の申し訳なさそうな顔は、まだ頭から離れない。

何か別の道場の紹介はしてくれたが、そのことは何も覚えておらん。それに、そんなことよりも、港がイラついてる方が気になった。

きっと此方のせいではないのじゃが、それでも、何も聞けなかった。

港が突然スプーンを曲げ出した時は驚いた。

いや、どういう握力をしておるのじゃ、とかそういうのも含めて。

何か感づかれたかと思って、思わず口を開いてしまっただくらいには。その時の此方のセリフと来たら、今思い出しても恥ずかしい。

『スプーンが前衛アートのようになっておるぞ』はないじやろ、流石に。

まあ、昼食時には、特にそのあと何もなかったから良いが。

そう、放課後じゃ。

放課後、港がランキング戦の申し込みをしに行った時。

街中に突然有名人が現れたように、港が騒ぎ出した。

何事かと思って見てみると、かわいい1年生が2人も。

ああ、そういえば年下が好きであったような、とか思ったが。

どうやら趣味嗜好とは関係ないことは、相手の態度でよく分かった。

そうでないことがわかって、此方にはそれ以上分からん。

この2人は何者で、港とどういう関係があるのか。

そうこうしているうちに、食堂にいた。

港が『とりあえず腰を落ち着けよう』といって、全員引き連れて来たわけじゃ。

そこで起きたのは、嬉しいハプニング。

まさか、そんなことになるとは、此方も思っておらんかった。

「あゝ、改めて紹介しようか。

コツチは、クラスメイトの不死川心。不死川家の娘さんね。

で、コツチは黛由紀江。お袋の実家……石川県にある剣豪の道場の娘」

なるほど、港の母の実家は石川県か。

しばし黙っておっても、色々なことが分かった。

港家は、父方に母親が嫁いでいるということ。

港の出身が、恐らく愛知県であること。

港の母方は、田舎で剣術の達人を葬式にいきなり呼べる程度の権力を持っている。

……恐らく、単なる土地持ちというレベルではあるまい。

そんなことも小耳にはさんだが、同じくらい気になることが耳に入る。

テーブルの向い側に刀を持って座っておるのが、あの黛十一段の娘。まさかとは思ったが、大体此方くらいの年齢だったはず。

真相が気になり、聞いてしまった。

もしかしたら、聞かれたくないことももしれんのに。

「ところで、北陸の剣豪で黛というならば、あの黛十一段の娘か？」

「はい。その黛十一段の娘です」

こともなげに答えてくれたが、その心情は如何なるものか。

しかし、どうあれ相手は此方に問い詰めてこない。

ならば、己が浅ましかったことなど忘れて、話を続けてしまえ。

そんなことを思った自分が、また一段と浅ましかった。

「また、何故このようなところへ？ 北陸と関東では勝手が違うじやろ？」

「勝手は違いますが、便利ですよ。お店もたくさんありますから」

上手くはぐらかされた。

聞かれたくない事情があると言うことか。

これ以上の醜態をさらすのは、此方としても避けたいところ。

じゃから、やはりすぐに話題を変える。

「それはそうと、港とはどういった付き合いがあるのじゃ？」

「え……っ」と

そういつて、黛は港の方をちらと見る。

その様子から察するに、何か本人の許可を取らねばならんことを言おうとしているのか。

じゃが、港は梅ごぶ茶の缶を握ったまま、ぼーっとしておった。黛も諦めたようで、少し考える素振りを見せてから口を開いた。

「私の祖父と港さんの祖父が知り合いで、それで、私と港さんも……」

「なるほど。つまりは、知り合いという程度の付き合いか」

『ただの知り合いっていうわりには、一緒に飯作ったりしたけどな』

何をやっておるのじゃ、黛は。

いつの間にか掌に乗っておった馬のストラップを使って、腹話術か？ やたら上手いが、腹話術と分かるレベルの声色の変わり具合。

もしかして、此方に気を遣っておるのじゃろうか。

微笑ましくなるような特技で、場を和ませようとしておるじゃろうか。

「そんな松風！ あのとときだって、一言も話してないじゃないですか！」

『そうだなー。無言で食材渡したり食器洗ったりしてたもんなー』

「あときは、胃袋が擦り潰される思いでしたよ」

『おーい、まゆっちゃん？ すぐそこに本人いるんだぜ？ 自重自重』

「はっ！ そうでした！ 私ったら、なんて失礼なことを！」

気を遣っておるわけじゃなさそうじゃ。

……腹話術、か？

いったい何故、此方を無視して馬のストラップと話しておるのじゃ？

そう思っつて、恐る恐る聞いたんじゃないかな。

いや、流石に我慢できんじゃない。

「黛。その、何をしておるのじゃ？」

「あ、いや、その、あの！ ……ま、松風！ 一ご挨拶を！」

慌ててストラップを突きだされても困る。

が、恐らくは馬のストラップ……松風か。

松風と話してみるとということなのかも知れん。

そんなことを考えているうちに、黛が腹話術を再開した。

「おつす！ オラ松風！ 世紀末じゃ黒王号とタメはってたんだぜ！」

「それはまたなんというか、ワイルドじゃな」

「ワイルド系のちよい悪で売ってっからな」

なんというか、口の悪いストラップ……腹話術じゃ。

しかし、これが恐らく黨のコミュニケーション法なのじゃろう。もしくは、精神衛生上の自己防衛か？

同族嫌悪しそうじゃが、それなら納得できる。

此方の部屋にあるぬいぐるみにも、全部名前がついておるしな。

その延長と思えば、まあ、異常というほどでもあるまい。

港の知り合いということもあるし、合わせておくか。

「コラ松風！ 不死川さんになんて言葉遣いを！」

「ああ、よい。此方は寛大じゃからな」

バツと扇を開いて、口元を隠しながら尊大に。

口元を隠すと落ち着くのは、此方だけではなからう。

言葉を発する部分を隠すと言うのは、それだけでストレス軽減になる。

特に、心を覗かれたくないときには最適じゃ。

目は口ほどにモノを言うが、人の口に戸は立たんからな。

それで、此方も少し視界の端を意識すると、港は大和田と話しておる。

此方らだけで話して、1人にしておくわけにはいかんからな。そういつところはマメなのが不思議じゃ。

「すみませんでした。私の教育が行き届いていないばかりに……」

『不死川さんYO、まゆっちを責めないでやってくれYO!』

「いや、じゃからそんな気はないと言って」

そこまで言ってから、思い立った。

家柄もよく、礼儀も正しく、容姿もよく。

少し変わってはいるが、性格も悪くはなく。

そんな子が友人であつたら、と思った。

「そうじゃな、どうしても許して欲しいと言つなら、1つ頼みを聞いてもらえんか?」

「た、頼みですか!?! わた、私にできることであればなんなりと
「!」

『安請け合いですと、明日には風呂屋の娘になつちまうぜ、まゆっち
『!』

なぜ風呂屋の娘になるのかは知らんが、そこら辺は気にせん。

今から此方の振り絞る勇気の量に比べれば、その程度は些事じゃ。

港のときは、覚悟ができていたからよかった。

しかし、今は違う。

あまりにも突飛で、あまりにも無策で、あまりにも非常識。それを心得てはいても、もうここまで来てしまった。

もう、言うしかないのじゃ。

覚悟を決めて、表情には微塵も出さず。

名家、不死川家の息女としての威厳を損なわず。

さりとして、押しつけがましくもなく。

平静を装って、さあ。

「此方と、友人になつてはくれんか？」

対する黛派というと。

「え……ええええええええ！？」

などと、目を丸くして驚いておる。

驚くという反応は想定外じゃった。

やはり、此方はそんなことを言うようには見えんのだろうか？

いや、もしかしたら、否定を含んだ驚きかも知れん。

こんな奴と友人にならなければならぬのか、という声かも知れん。

「嫌か？」

「いえ、是非！」

妙に早いな。

ここまで早いと、少々心配じゃ。

知り合いの知り合いじゃから、気を使っておるとも限らん。と思ったりもしたのじゃが。

「今日は幸運ですね、松風！ 友人が2人もできました！」

『やるねえ、まゆつち。これもう全国制覇近いぜ？』

なんて、可愛いことを言ってくれる。

松風の言葉遣いが気にならんでもないが、そこはどうでもよい。

晴れて黛と友人に成れたのじゃ、誇らしく思ってもよいじゃろう。

自発的にこういうことができるようになったのは、港以来のことじゃ。

そう、港以来の。

裏切ってしまった、港以外では初めてのことじゃ。

ああ、口元を隠しておいて本当によかった。

歯噛みしている姿を、誰にも見咎められないから。

そのあと、黛の認可を経てまゆつちと呼ぶまでに至ったが。

此方の心は晴れることはない。

もしこの後のことがなければ、港の裏切りを忘れられたのかもしれない。

でも、家に帰ってからのことを考えると、港のことも思い出さねばならない。

港が紹介してくれるはずだった方を、家に呼んでおるのじゃから。

此方が不死川の敷地内の道場に入ると、既にいた。

昨日連絡を入れて、わざわざ今日出向いてもらった。

皆口由紀殿が、タイトスカートで、紺色のスーツ姿で立っていた。脚線美が目につくが、それ以上に不可思議な空気が押し寄せてくる。それは此方が道場に踏み入った時も同じで、何も変わらない。

表情一つ、心の動き一つ、何もかもが動いていないように見える。確かにこちらを向いて、体が動いて、腰に届く長い髪の毛が揺れたのに。

まるで何も動いていないかのように、そこにただ立っている。始めからそこにそうしていたかのように、静かに立っている。

体育館くらしいの広さの道場の中央にいる皆口殿。

無論、此方が歩み寄っていく。

一歩近づいたたびに、なんとというか、むずがゆい。

今、自分が物凄く危険なものに近寄っているような気がする。

そんなことを考えてもどうにもならないのに、此方の脚は止まらない。

い。
そして、此方はいつの間にか、皆口殿と2歩の距離にまで至っていた。

「貴方が不死川心さんね」

「はい」

近くで見ても、思った通りキレイな女性じゃ。

人間離れた美しさを持った瞳、柔道着の上からでもわかる見事な体つき。

顔のパーツの1つ1つも、キツそうではあるが美しさを兼ねている。髪の毛を後ろで一本に縛っているリボンが、不格好じゃが似合ってもいる。

ポニーテールというよりは、本当にただ纏めただけのような髪形。雰囲気は……掴みどころがない。

「本日より、その技を私に教えていただきたく思います」

膝を突いて首を垂れ、指を着いて頭を下げる。
礼は尽くす。

教えを請うならば、当たり前のことじゃ。

聞けば、皆口殿は手練も手練。

指で人の腹を突き破り、受け身を取らせん投げをする。

合気の極意を持ち併せ、実戦でそれを存分に発揮できる。

此方の遙か先に行く実力の持ち主ということになる。
礼を尽くして損はない。

「いいわね。礼儀正しい子は好きよ」

『好き』などという言葉を使うのに、表情は一つも変わらない。
何を考えているのか、此方には想像もつかん。
本当に口に出したことを思っていたのかも知れんし、世辞かも知れん。

じゃが、此方のすべきことは皆口殿の心情の模索ではない
師として招いたはいいが、此方は皆口殿の実力を知らん。
なら、することは一つじゃろ？

「お褒めにあずかり光栄です」

2歩の距離を、立ち上がりながら詰める。

此方の体は、傍から見れば限界以上に伸びておるように見えるはず。
特に、相手からすれば、恐ろしく疾く距離を詰めてるように見える
はずじゃ。

以前習った『縮地法』の応用で、座した状態からの歩法。
立ち上がるという動作を必要とせず、歩と共に伸びあがる。

それによつて、相手の反応が遅れ、結果的に『縮地』となる。意識と先入観を使った技で、この『縮地』しか此方には使えんが。そんな安い縮地でも、皆口殿の虚を突くことができたらしい。

全く動じない皆口殿に、此方は大外刈りを極めにかかった。目隠しでフェイントをかけた左手を、すぐに襟の掴みに変化させる。皆口殿の左袖を右手で掴み、左の脚を前方から後方に振りぬ

此方が浮いている？

軸にしてた右足を、左足ごと払われた！？

なんという反応。

なんという速度。

なんという実力差。

受け身。

そう、受け身！

受け身を

「かつ！」

肺の中の空気が、妙な声とともに吐き出されてしまう。

そのまま肺が飛び出そうでも、現状把握くらいはできる。

此方の上には、此方に覆いかぶさるように皆口殿が。

此方の左腕を右腕で絡め取り、右腕は肘の部分を左手で握り。払った此方の左足は、右の膝の裏側に引っ掛けられ。

もの見事に、背中から落とされた。

はっ、はっ、と無様な呼吸音。

痙攣した肺が、一度に空気を吸わせない。

苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい、苦しい。

段々と吸える空気は増えるが、満足な量の空気が入ってこない。

酸素が足りず、いつたい自分が何を考えていたかも思い出せない。とにかく呼吸がしたい。

空気が欲しい、酸素がほしい、いきをすいたい、もつとたくさん。

1分ほど経って、ようやく此方の呼吸は正常になった。

それでも、体のダメージが大き過ぎて、立ち上がるための気力が萎えて。

立てないことはないのじゃが、本能が『立ちたくない』と悲鳴をあげておる。

もし立ったなら、また投げられる。

此方にはどうしようもないレベルの技で、確実なダメージを与えられる。

皆口殿は既に立って、此方を上から見据えていると言つのに。

このような屈辱的な光景に甘んじてしまう。

皆口殿に『許して貰っている』状況が、続いて欲しいと思っている。

「なかなか面白いわね、アナタ」

皆口殿は、また無表情。

此方を出迎えた時と同じ表情。

此方を地面に叩きつけた時と同じ表情。

此方のような人間を『好き』と評した時と同じ表情。

そんなときと同じ表情のまま、やはり同じようなことを言った。

「好きよ、アナタみたいな子」

「お」

皮肉の1つでも行ってやろうかと思つて開いた口は。

『お褒めにあずかり』なんて言葉も吐けない。

本当に心の底から、此方は皆口殿に楯つきたくないらしい。

だからこそ、此方は決められた。

皆口殿を師と仰ぎ、技を盗んでやろうと。

そうすれば、皆口殿の技は全て此方のもの。

この技さえあれば、川神一子くらいは簡単に捻られる。

仮にマルギツテであろうと、充分に制することができるじやろう。

此方が卑しいということが、ようやく分かった。

1時間も前には港を裏切ったことを悔いておつたのに。

今は、皆口殿の技を独り占めできることが嬉しくて仕方ない。

港の紹介など受けて、武蔵にまで皆口殿のことを知られなくてよかった。

心の底から、そう思つておる。

きつと、皆口殿との稽古が終われば、また後悔するのじゃろう。
港を裏切った事実には痛み、息が苦しくなるのじゃろう。
でも、今だけは、楽しくて嬉しくて仕方ない。
高みに登ると言うことが、これほど楽しいことだったなんて。

ああ、此方の卑しき魂よ。

ああ、此方の気高き魂よ。

早く届け、早く届け。

皆口殿の高みへと、明日にも届け、今すぐ届け。

その高みには、きつと見たこともない光景が広がっている。

川神百代やマルギツテ、小西殿や皆口殿。

そして、港が見ているのと同じ光景が広がっている。

そこにたどり着けば、きつと後ろ暗さもなくなるから。

閑話『隣の芝はアオイ』（前書き）

この話は、女性陣がまったく出てきません。

ストーリーの展開上、必ずしも必要な話でもありません。

よって、幕間でもなく閑話と題させていただいております。

『んだよ、女の子書けやゴラァ！』と思われた方は、申し訳ありませんが次回までお待ちください。

閑話『隣の芝はアオイ』

さて、翌日にランキング戦の申し込みをし損ねて、さらに次の日、木曜日。

そろそろ5月も終わって、体育大会が近付いてきた。

なんか川神戦役をF組にかまされたとかで、面倒になりそうな予感。よっぽど不死川は狙われないだろうけど、それでも心配は心配だ。今日の帰りのトレーニングジムで、ガクトくんに相談しようか。そんなことを考えながら歩いていたんだだけ。

昨日から、妙な視線を感じるんだよ。

朝から、断続的に。

教室にいるうちは大したことないんだけど、廊下を出るともう。

四方八方とは言わないけど、盗み見る様な視線がチクリと刺さる。視線を感じた方向に向き直っても、そこには誰もいなかったり。

1年らしい奴がいるときもあったけど、どうなんだろう？

視線の主が毎回違うから、何が起こってるか全く分からないんだよね。

……やだなあ、こっぴつ。

今日の食堂でも、やっぱり視線が強かった。
今度は盗み見るっていうか、針のむしろみたい。
不死川には事情を話して、別のところで食ってもらってる。
これで僕にまだ視線が集まるってことは、僕を的にしてるってことか。

まあ、そこは安心したかな。

自分の事は、後始末以外なら大抵どうにかなるしね。
僕と不死川が共有している時間を潰すとどうなるか、思い知らせてやらないとなあ。

チキンカツ定食を食いながら、4人掛けの席に1人で座る。
窓際の席何かで飯食ったら、相手が特定できなくなるもんね。
こつという風に中途半端な場所だったら、ある程度は予測を立てられる。

で、飯食ったらソイツの襟首締め上げて、そこで聞けばいいか。

と、その僕の前にドンと座る影が1つ。

久しぶりも久しぶり、1カ月ぶりくらいに顔を突き合わせる相手。
島津ガクトくんが、デカイ図体に似合ったデカイ弁当を持ってきていた。

ああ、そっぴや、お袋さんに弁当作ってもらってるんだっけ。

「よお、港」

「やあ、ガクトくん」

ちなみに、僕らは特別親しいわけじゃない。

ジムであつたらちよつと話したり、その帰りに飯食つたり。

一緒に遊びに行ったりとか、そこまで親密な仲じゃない。

それでも僕が彼を『ガクトくん』と呼ぶのは、ガクトくんの希望あつてだ。

曰く『島津よりガクトって呼ばれた方がモテる気がする』からだそ
うな。

モテない原因は、ガツついた態度と獣臭がしそうな男臭さにあると
思うんだけどね。

ガクトくんが弁当箱を開いてみると、その中身は肉々した内容。

しかも、米もたっぷり入っていて、高校生の腹にはありがたいに違
いない。

ちよつと複雑そうな顔してるのは、母親の手製だからかなあ。

そんな弁当を、My箸でつつき始めた。

僕の方も食事中だったから、食事を再開。

何か用があるかも知れないけど、食後でいいよね。

僕らはどっちも、けっこう食事に重きを置いてるわけだし。

で、僕とガクトくんが同時に食い終わった。

……. どんだけ早く食つたんだろ。

量は同じくらいだったけど、僕の方が早く箸つけてたのに。

「港、お前さ、最近誰かに見られてるだろ」

「よく知ってるね」

「俺様のダチが偶然知ってな。善意で教えに来たってわけだ」

「ありがとう。そういうのは凄い助かるよ」

なんというか、ガクトくんにしちゃ情報が早い。

アレだ、直江大和の入れ知恵があったんだろうなあ。

じゃなきゃ、わざわざ僕のことを調べるってことはないはず。

少なくとも、僕はガクトくんをそこまで親しい友人とは思っていないわけだし。

ガクトくんも同じ気持ちっていう前提で、付き合いやってるわけだからね。

しかし、今日は木曜日だ。

普段なら僕がジムに行く日で、そこで伝えれば済む話。

それをわざわざ昼の食堂で話したってことは、緊急性があるのか。

「確かお前、仲のいい1年がいるんだよな？」

「まあ、仲がいいかは知らないけど、1年の知り合いはいるね」

武蔵と、由紀江ちゃんと、大和田さんの3人。

ガクトくんが誰のことを刺してるのか知らないけど、1年の知り合いはそれだけ。

まあ、2年はそこそこ知り合いがいるけど、3年は知人ゼロ。付き合いベタな僕じゃ、学校内の情報や噂を素早く知る手立てはない。

今まではネットに感じてこなかったけど、自分が的の話になると厳しいなあ。

「その1年は、武蔵、黛、大和田って名前じゃないのか？」

「ん〜と、そうなんだけど。つまり、これはどういう状況？」

うん、全く理解できない。

僕の1年の知り合いがこの3人だと、どうして人様から注視されるんだろ。

3人以上女子の後輩がいる2年男子なんか、掃いて捨てるほどいるのに。

「この3人な、1年の中でもトップクラスのきれいどころだな。

数は結構違うが、この3人にはそれぞれのファンクラブもある」

あ〜、そうなんだ。

由紀江ちゃんはともかく、他の2人にもファンクラブがあったか。

僕の趣味から大きく外れてるけど、由紀江ちゃん可愛いことは可愛いもんね。

でも、他の2人に関しちゃ納得しかねる。

大和田さんは胸が少し大きいし、引っ込み思案な感じが強いし。

武蔵は万事中途半端で、コレっていう長所がないし。

まあ、ファンクラブが実在するらしいから、講釈垂れても意味ないか。

「つまり、そのファンクラブに嫉妬されてるってわけだ」

ガクトくん、わざわざどうも。

ファンクラブのくだりで、大体分かったけどね。

3つのファンクラブから睨まれてれば、そうなるか。

ていうか、ファンクラブってどこのマンガだよ。

冷静に考えると、やっぱりこの学園は突飛もないな。

「なるほど。それなら合点が行く気がするね」

と言っておこう。

僕がどんなに常識を解いたところで、あるもんは仕方ない。

『気』に関したって、自分の中で決着はついてる話だし。

気で超常現象がどうして起こせるかは知らないけど、まあそれも無視。

それと一緒に、ファンクラブも『そういうもんだから仕方ない』で済ませよう。

「で、どうすんだ？ なんだったら手え貸してやるぜ？」

「いやいや、独力でどうにかなるわ」

そうわ、どうにかできる。

別に、拳や蹴りや掴みが通用しないものが相手じゃないんだ。やりようなんていくらでもある。

「ガクトくん」

僕は席を立ちながら、小さく笑ってみる。

上手く笑えないから、ひきつった顔になるあの笑い。

口の端が釣り上がるだけの、笑みとはいえない笑みで。

僕は、ただ事実を口にするだけ。

「初めて関節を外される痛みに耐えられる人間って、そうはいないんだよ？」

恐らく僕を見ている、隣のテーブルの男子にも聞こえるように。

これから何を起こすかを、弾んだ口調で示唆しただけ。

「なんていうかき、君らって危機管理能力ないの？」

捕まえるのは、本当に簡単だった。

何日か動きがあるまで粘るつもりだったけど、まさか初日からとは。

面白いことに、撒いた餌に簡単に食いついた。

で、そいつらが集団だっていう前情報から、集会の可能性を考えた。僕の脅しを聞いたのが1人だとしても、全員に通達しなきゃいけない。

危険は誰にも平等に振りかかるし、それを黙っていて怪我したならばツが悪い。

普通の人間は、そういう思考に至ることの方が多い。

でもそれより、自分の意見や行動に自信が持てないんだなあ。だから、集団の意見に頼る。

皆に決めてもらえれば、自分の責任にはならないから。責任転嫁と心の安寧を同時に得るべく、集団で相談するはず。

そついう予測が、見事に的中した。

普通は男子ばかり30人も空き教室に集まらんでしょ。

で、反対側の校舎の窓から、天文部から借りた望遠鏡を使って覗いて。

一応、リーダー格というか主導者臭い奴を何人が特定して。

その中でも、とりわけ弱そうな奴を選んで捕まえた。

周囲に人がいないのを確認して、後ろから一声かける。コツチを向いた瞬間に、フック気味の掌打をかまして脳震盪起こさせて。

それで、そのまま視聴覚室に連れ込んできた。

「さて。君は、誰のファンクラブの代表者かな？」

カーテンも絞めて、視聴覚室の扉も全部閉めきつてある。

鍵もバツチリしてあるから、僕を無視して逃げることはできない。

まあ、走って逃げてもすぐに捕まえられそうな奴を選んだんだだけだね。

何より素晴らしいのが、視聴覚室は防音設備がバツチリなんだよ。

例えば、男子生徒が1人、大声で叫んだところで声は外には聞こえない。

そのことが理解できていないのか、本当に困った顔をする少年。

もしかして、逃げ切れるなんて思ってるのかな？

今の状況からして、絶対にあり得ないのに。

なんで自分が僕に捕まったのか、理解できてないんだよね。

理解できてないから、僕に会合の後から狙われて立って知らないから。

だから、下手な演技で逃げ切れると思ってるんだよね。

「ちょっと先輩、なんのことか」

「よし、それじゃあ膝からいこうか。」

あつはつはつは、痛いぞお、膝は。

肩とか肘の脱臼に比べて、膝の脱臼って滅多にやらないんだよね。
骨がズルツと滑ってさ、それで、靭帯がブチブチブチって一緒に切れるんだよね。

実は膝って簡単に壊れやすくてね、手加減したつもりでも折れたりするって知ってる？

あと、骨を元に戻すときがまた痛くてさ、我慢してても小便漏れるくらい痛いんだ。

そうだ！ 君の膝を何度も脱臼させて、何回も何回も元に戻してあげることにしたよ」

なら、こちらもブラフをかますだけ。

笑顔で、努めて笑顔で。

「じゃあ、右からいこっか？」

逃げる素振りを見せたから、腹に一発、軽い左ボディブロー。

息が詰まる程度だから、吐きもしないし気絶もしない。

少し呻いて、腹を庇うように前屈みになるだけ。

そこでカニバサミ（相手の両膝を両足で挟み込む技）で転がして、素早く膝十字に。

もちろん、ちよつと溜める。

相手が何をされるのか認識してから『いつせえのお』と煽る。

今から力入れて膝を外しますよ、と教えてあげる。

まあ、膝十字決めたら本当は折れるんだけど、多分知らないから大丈夫。

知ってても、ここまでくれば……ねえ？

「僕じゃないです！　僕は最初からの会員ってだけで、リーダーなんて全然！」

錯乱しながら、真実を話してくれた。

うん、正直な子は嫌いじゃないね。

膝十字を解くと、僕はそいつの前に立つ。

上から見下すように、こちらの優位を主張しつつ。

「なるほど。じゃあ聞くけど、僕を最近見てる奴が多いのはどうして？」

「偶然です！　ファンクラブのみんなも同じことしてるって知ったの今日で！」

「嘘じゃない？　嘘だったら、両膝壊しちゃっよ？」

「嘘じゃないです！　嘘じゃないです！」

うん、これは本当っぽい。

さっきから、暑くもないのに汗かいてるし。

精神的に不安定な状態に違いない。

こういう状態で嘘つくことも考えられるけど。

でも、メリットとデメリットが釣り合わない。

嘘をつけば両膝が壊され、つかなければ助かるかもしれない。

ここで嘘をつくメリットは、少年にはない。

だから、僕はこれを本当のことだとした前提で話を続ける。

「あゝ、それでね。君に言いたいのはそのなことじゃない」

そう、こっからが本番だ。

僕は別に、彼らを痛めつけようなんて、少ししか思っていない。

主犯格さえ分かって、同じ状況が続かなければ問題はないんだよ。全員の関節を外すなんて手間なマネ、やってる時間もないからね。

1つ咳払いをしてから、僕は少年に言っただけ。

「僕の想い人は別にいるんだ。あの3人はただの後輩だ」

「で、でも、先輩は年下趣味じゃ……」

「武蔵の戦力を削ぐための方便だって。好きな奴は、同じ学年にいるんだよ」

「え！？ そうだったんですか!?!」

そこまで驚くようなことかなあ。

不死川が好きだって、隠しちゃいるけどさ。

年下趣味がどうこうっていう話が、ここまで学園に広まっていたのか。

正直、頭痛いな。

もう少し自分の発言に気をつけないとね。

「だから、アレだ。君らがファンクラブ作るのは勝手だからさ。
頼むから、僕の生活を侵害するようなマネはよして欲しいんだよ。
大人しくしてくれれば、コッチも何か仕掛けるってことはないか
らさ」

「はい、えっと、わかりました」

怪我させられないって思って、安心したのかな。

釈然としない顔してるけど、リラックスもしてる感じ。

コッチの話に関しちゃ、まあ、理解はしてくれたんじゃないかな。
納得してくれてるかどうかは知らんけど。

もう2つ、言っておかなきゃね。

「でもね、一応僕にとってはカワイイ後輩なわけだし」

冬服の襟を、グツと左手1つで絞り上げる。

よく不良がやってるような、弱者を脅す、胸倉掴むアレ。

僕の握力とコツがあれば、少林寺の奴にだって簡単には外させない。
息が詰まるように、少し持ち上げながら。

そうしながら、僕は1つ目の脅しをかける。

「あんまり妙なことをすると、君ら、通り魔に襲われちゃうかもね」

何か言おうとしてるけど、言わせない。

是でも非でも、返事はさせない。

主導権を握り続け、一方的に蹂躪する。

それが、脅しで最も重要なことなんだから。

「で、もう一つ」

片手で握っていた襟を、両手で握りなおして。

右襟を左手で、左襟を右手で。

そのままギュッと絞れば、襟で首が閉まるように。

そういう持ち方をして、力を込める。

襟を握り直すときにも、大して呼吸できなかつたみたいだし。

苦しいよね、きつと。

もちろん、力は緩めてやらないけど。

「ファンクラブのリーダー格の名前、全部吐いちゃおっか」

予定変更して、今日は関節技のジムに行った。
予定がずれるけど、トレーニングジムはまた今度。

今日もジムに入ると、小西さんと麦村さんと入江とカーロスさんがいた。

一応、予定の上ではサブミッションクラスになってる。

そこで、関節技の基礎を教わるんだね。

まあ、ほとんど小西さんの独壇場だけだ。

僕はジムに入ってから柔術着に着替えて、ストレッチしてる入江のところに向かった。

そう、今日の僕は珍しく、入江に用事があるわけだ。

「あれ？ どうしたんすか、港さん？」

「いやあ、今日は新発見があつてさ。僕の高校に入江って1年がいるらしい」

入江。

ジムで唯一の僕の後輩。

僕より2カ月遅れでジムに入ってきた、僕の後輩。

元々ボクシングをやつてて、右目の網膜剥離でボクサーの道を断念。寝技に活路を見出して、小西サブミッションスクールに来た。

得意技は右のクロスカウンター。

そのクロスカウンターにパンチを合わせられて、網膜剥離をやつた。本当に出会いがさらに食らっただけで、顔にもらつたのは最初で最後らしい。

性格は、僕からすれば食えない奴。
立ちまわったりとか、嗅ぎまわったりとか。
そういうのが本当に上手い。
これで姑息じゃなければ、もうちょっと評価してもいい。

とにかく、入江はそんな奴。

「はあ、まあ……その、そうなんスか？」

ほら、またとぼけてる。

屈伸しながら、とぼけてる。

だから僕は、許さない。

脱臼は勘弁してやるけど、簡単には許さない。

「それだけじゃないんだよ。なんと、そいつは黛由紀江のファンク
ラブ。」

しかも、創立当初からのメンバーだって言う筋金入りって話を聞
いたんだ」

屈伸が少しだけ止まった。

でも、入江は平静を装ってストレッチを続ける。
いくら気付かないフリをしたって、コツチはわかってるっていつの
に。
ホント、こういうところも好きになれないなあ。

「でき、その入江だけど、本名は『入江^{いりえ} 明良^{あきら}』っていうらしいんだ」

だから、トドメを刺す。

僕は後輩には優しいんだ。

優しいから、これ以上シラを切らなくてもいいようにしてあげるんだ。

「お前だろ、入江」

肩を叩きながら伝えると、よくわかった。

もう入江は震えていて、軽く触れただけでもカタカタやってるのがわかるくらい。

これからどうなるか、大体の想像がついたんだろうね。

でもって、逃げられないことも分かってて、だから震えてる。

うん、入江はこうでなくっちゃ。

相手が僕だつてわかってるのに、わざわざ不快な目に合わせる。

そういうのは、入江らしくないからね。

「とりあえず、関節でも取り合いながらイロイロ聞くことにするわ」

その後、僕は入江を痛めつけてスッキリしたんだけど……。

結局、すっかり1日、不死川と大した交流がなかった。

昨日からちよっと様子がおかしかったから、色々話を聞いておきた

かった。

この間の埋め合わせで、日曜に遊びに行く約束もしたかったのに。

結局この日は、大した実りもなく終わってしまった。

あゝあ、面白くないなあ。

第7話『知るも存ぜぬ』

6月1日、月曜日。

あつという間に6月だ。

こつから湿気が増えてくると思うと、気分も軒並み下降するね。

僕の平時の気分は、その湿気だけで通常の4割減になる。

当然、無表情で我慢することはできても、普通に振舞うことは難しい。

去年まではそれでもよかつたけど、今年は不死川と親密になったわけだし。

湿気を感じたりしても、なんとか我慢しなきゃなあ。

思わずイラツとした表情なんか出すわけにはいかないからね。

さて、結局土日はジムで時間潰して、あつという間に月曜。

不死川にメールを送ることもできず、僕は金土日を過ごしたことになる。

いや、有意義なことは有意義だったんだよ。

関節技のバリエーションも増えたし、何より小技も増えたのがいい。もともと大振りとかが好きだったけど、チマチマやる方が僕は強いわけだし。

まあ、希望と現実が違うなんてことは、今に始まったことじゃない。勝てばいいんだよ、勝てば。

しかし、不死川は何をしてたんだろ？

やっぱ努力家だから、缶詰めになって勉強してるのかなあ。

それとも、優雅で可憐に休日を過ごしたんだろうか。

あ、お見合いとかだったら相手を事故に遭わせよう。

いやいや、事業に失敗して家を取り潰されてもらおうか。

どっちにしても、不死川に2度と近づけないようにしてやる。

つと、落ち着け落ち着け。

とりあえず、僕が不死川と仲良くならなきゃ意味ないんだから。

さて、朝早くに学校に行つて、いつも通り不死川と楽しく予習・復習。

今日は僕が不死川に教わるわけで、ちょっと斬新。

……古典なんて、どうやってたら現代語並みに読めるんだろうなあ。

日本史もちよつと教えてもらったけど、本当によく覚えてる。

『ものぐさ太郎』とか、普通は忘れてそうなもんでしょ。

まあ、不死川には言い辛いんだけどさ。

僕、古典は素で苦手だけど、日本史と世界史の点数はワザと下げたんだよね。

ほら、そうした方が不死川と接触する機会が増えるから。

あとは、麻呂が好きじゃないから。

手抜きしてテスト受ける理由としちゃ、充分だよな。

なんて無駄なことを考えてるのは、HRが退屈だから。

耳を向けちゃいるけど、行事報告がメインだもんなあ。

体育祭が近いぞ、なんて言われても、盛り上がる要素は少ないし。

……あ、2・Fと川神戦役やるのか。

僕も不死川も的にならないだろうから、正直どうでもいいけど。

「お前らは関係ない話かも知れんが、最近親不孝通りが騒がしいらしい。

暴力沙汰なんていうのは日常茶飯事だけど、正直、今まで以上にキナ臭い。

危ないお薬なんかも売ってたりするっていうから、軽い気持ちで足を運ぶなよ？」

いつものように、飄々とした担任のHR。

なんとまあ、下を向いている者の多いことか。

真面目に聞いているのが、僕と葵と井上と不死川と……九鬼もか。

九鬼に関しては『聞いてやってる』が正しい表現かもね。

他にも何人が聞いているっばいけど、名前わかんないからどうでもいいや。

しかし、親不孝通りか。

あそここの中華飯店で、えらくおいしいところあるんだけどなあ。この様子じゃ、滅多に食いに行けなくなったみたい。

ま、ほとぼりが冷めてから足を運べばいいしね。

そっぴや、薬がどうこうつてわりと聞くんだよね。

細かくいうなら、去年の冬くらいからボチボチ聞いたたり。

最初はよくある不良のフカシかと思ったんだけどさ。

これがまた、中毒者臭いバカを何人か見たことがある。

去年の暮れに肘を折っても向かってくるバカがいたけど、アレもそっぴだ。

顔つきと肌の具合が合致しなくて、拳句、瞳孔はかなり小さかった。まるで痛みを感じていないみたいだったし、突然襲い掛かってきたんだよね。

なんていうか、妙なことでも起きてるんだらうか？

川神に来た当初の治安レベルからは考えられないんだよなあ。

そもそも、川神院の上位クラスの連中が見まわってるのにドラッグが出回る。

それ自体が少し異常ともいえるんだけど、もっと異常なのがさ。

そのドラッグが出回り続けて、尚且つ、高校生の話題にまでのぼること。

本気で川神院が抑え込んだなら、ここまで広がったりするんだらうか？

あそこの情報量と権力と暴力は、僕が手を尽くすよりも遙かに上。不死川や綾小路と比べても遜色ないし、行動が早いのが何よりの強み。

そんな川神院が行動を起こさないはずがない。

だとしたら、なんで薬の拡散だけでも防げないんだろ？
元締め捕まえるとは言わないけど、それくらいはできそつなもんだ
けどね。

「それと、不死川。今日はお前のランキング戦があるから、あとで
廊下に来いな」

「なんじゃ、ようやく此方の出番か」

「相手は2-Fの川神だ。心してかかれよ……なんちゃって」

もちろん、こんな冗談は満場一致で無視。

無視っていつても、嘲るみたいな『フンッ』って鼻息がいくつか。
オッサンから聞ける親父ギャグなんて、そんなもんだよね。

ていうか、不死川がランキング戦やるのか。

不死川が闘うのを見るのは、これで2回目ってことになる。

1回目の決闘が圧倒的過ぎて、次が出てこなかったからね。

お陰さまで、不死川の魅力を多くの人に知られないでよかったけど。

不死川の相手、憐れんであげようかな。

どうせ開始から1分もしないで、地面やらマットに叩きつけられる
んだから。

前言撤回。

昼飯の時に不死川に聞いたら、相手は2年の川神だとか。しかも、素手限定の総合ルールだったさ。

川神一子が相手なら、不死川の相手にとって不足はない。九鬼じゃないけど、川神一子は嫌いじゃないし。

僕よりも才能はないのに、僕と同じくらい努力している。それでもって、才能の差を努力で覆せると思っている。そついう甘い考えが、まあ、嫌いじゃない。

だから『憐れんでやらない』っていうのは、嫌いだからじゃない。強者と思っっているからこそ、憐れむなんてできないんだよね。強いからこそ、尊敬する部分があるからこそその想い。

弱者で卑下すべき程度の人間なら、いくらでも憐れみをかけてあげるさ。

もちろん、嘲りながらだけどね。

あ、今はもう放課後で。

グラウンドに設置されたプロレスリングが目の前に。

で、リング袖には、桜色の着物の不死川と、夏服姿の武蔵、そして僕。

僕と武蔵は、試合前だからってことで、不死川の緊張を和らげに来てるってこと。

由紀江ちゃんは、今は風間ファミリーだからコッチには来れない。

大和田さんも、まあ、由紀江ちゃんと同じところにいるだろうし。

まあ、僕と武蔵は一応いるけど、不死川が緊張してるとは思えないね。

しつかり飯食つてたもんなあ、不死川。

月見うどんに海老天を付けるとか、結構ヘビーだろうに。

腹に蹴りとかもらって大変なことになるとか、そういうこと考えてなさそう。

あと、ブルマ姿じゃないのは残念だけど、ブルマ分は川神ので補給するからよし。

「あのさ、不死川。一応聞いておくけど、勝算はあるの？」

「もちろんじゃ。アイツには負けん」

……妙。

簡単に言っちゃうけど、本当に妙。

いつもの不死川なら、もつと『お〜ほっほっほっほっほ〜！』みたいになってる。

そのはずなのに、やたらと落ち着いて振舞ってる。

相手が何者だろうと構わないと言わんばかりに、ただそこに立っている。

なんか、似た感じの人に見覚えあるんだけど、それはどうでもいい。こついう不死川も悪くないなあ、と思ったり思わなかったり。

「でも、不死川先輩。川神先輩、結構強いつて話ですよ？」

「武器があればの話じゃ」

そんな武蔵の言葉に、不死川は平静に答えた。

不死川の言うことは正しいんだけど、やっぱり変。

言っちゃなんだけど、不死川にしては相手を冷静に見過ぎてる。

もっと増長しやすくてもっと足元をすくわれやすい。

そんな普段の不死川からは、僕じゃ想像もつかないくらい安定してる。

ちよつと不安だけど、まあいいや。

不死川が無傷で勝てばいいし、負けても無傷ならいい。

でも、もし不死川の顔と心に傷が付いたら……。

どうしようかなあ、僕。

「2・F、川神一子！」

「2・S、不死川心」

名乗りを上げるときでさえ、不死川の心の動きが見られない。緊張も高揚もなく、冷静でさえもない印象。猛々しい川神とも対照的とは言い難い。

「はじめい！」

そんな不死川に見とれている間に、開始のゴングが鳴らされる。

不死川の構えは、前回と違って存在しない。

たった1度の決闘だったけど、確か不死川は構えてた。

両足を肩幅くらいに開いて、両手を軽く前に出して。

相手を迎え撃ってやるうって気配が強い、そんな構えだった。

今回はどういう意図か、そんな構えでさえない。

ただ真っ直ぐ立って、それで相手を見ているだけ。

……なんか見たことあるぞ、この構図は。

対する川神は、これはこれで妙な構え。

なんていうか、ムエタイっぽい。

アップライトに構えられた両腕で、顔面両サイドをガード。

でも、両足はバランス良く体重が掛かって、そのせいで脇腹が甘い。

まあ、わからんでもない。

不死川が相手つてことは、警戒すべきは投げ技。

体操服でも掴まれる危険があるから、襟を守る構えは自然。

ボディの防御を捨て鉢にしているのは、誘いのつもりなのかなあ？

もしくは、当て身を使ってこないっていう自信でもあるのか。

どっちにしても、ちよっとお粗末な気がしないでもない。

あと、ついでに言うなら、不死川が相手なのに腰が高過ぎ。

川神相手なら、僕は9割勝てる。

川神も努力してるだろうけど、僕ほどじゃない。

しかも、今までの様子を見るに、僕よりも才能がない。

僕より軽く、僕より小さく、僕より非力で、僕より無能。

努力の量は分からないけど、内臓壊しても動き続けたりはしないよね。

そんな相手には、まず負けたりしない。

まず、構えが悪い。

いくつか戦法があつて、たまたまアップライトなんだろうけど。

仮にこの構えが相手なら、片手ついてスライディング気味に蹴る。

右手ついて、右足の力カトで膝を、左足の力カトで腹を狙う。

これでレバーが守れるし、下がられてもすぐに立ち上がれる。

受ければ膝を痛めつけてやればいいし、踏み込まれたら蟹挟に入る。で、足極めてギブアップ取って僕の勝ち。

僕ならこういう風に勝てるんだけど。

不死川はいつたいどうやって勝つつもりなんだろう？

そういう思ってるうちに、もう1分以上の時間が経った。

川神が焦れてるのが、不死川の周りをぐるぐると回っている。

不死川はというと、その場に止まって、でも正面だけは川神に向けてる。

まるで僕と小西さんのスパarringみたいだ。

格上が不死川で、格下が川神。

そんな様子が、僕の目にもハッキリ映る。

それでもって、焦れたのは川神だった。

重心を少し落としながらの、膝への右横蹴り。

膝を痛めつけるためなのか、膝に意識を向けるためなのか。結構な速度で横蹴りが飛ぶ。

不死川は……投げた？

は？ ちょっと待った。

横蹴りが当たりそうなところまでは見たけど、いつ投げた？

いや、落ち着け。

投げた瞬間は見えてたはずだ。

投げる前も見えてたはずだ。

全部の動作は、なんとか視界に映ってたはずだ。

ゆっくりでいい、思い出せ。

川神の左サイドに立ってて、右脚を抱え込みながら投げた。

足ごとすくうようにして、じゃない。

自分の右足で川神の右足を上に軽く蹴り上げ、そこに腕の力を足した。

持ち上げられた右足の膝のあたりに手を引っ掛け、そのまま上に降り上げる。

バランスを崩し、そこに力を上乗せして、リングの上に叩きつける。

一連の動作を、僕の目にも不確かな速度でやったってこと？

おいおい、不死川ってこんなに強かったのか？

僕の目算だと、素手の川神より2枚上手ってくらいだったはずだよなあ。

しかも、叩きつけられた川神から大きく一步離れ、間合いを取り直してる。

一気に畳み掛けず、また来るだろうチャンスを待つ。

華麗さも何もないけど、泥臭くて無様な強さがある。

ある意味で僕の戦法に近い。

それでもって、不死川らしくない。

「いった〜！」

川神も川神で凄いけどね。

あんな半端な体勢で投げられたのに、キッチリ受け身を取ってた。横受け身の要領でマットに手を叩きつけ、衝撃を緩和。これで、不死川の投げの威力を半減させてんだらうね。

でも、立ちあがりが無防備過ぎ。

不死川が顔蹴るつもりだったらどうすんだらうね。

こういう詰めのがさが、どうにもなあ。

「川神」

「なによ？」

やっぱ、今日の不死川は変だ。

いつもは『山猿』って一括りにするのに。

いったい、どういう意図でそんなことをするんだらうか。今日の不死川は、いつもと違ってちよつとミステリアス。そんなところもカワイイんだけど……しっくりこない。

「本気で来い」

冷たい視線っていうより、落ち着いた視線。

そんな視線で川神を見据えたまま、侮辱ともとれる言葉を吐く。だけど、その目には侮蔑の想いは込められていない。

ただ相手を見ているだけって感じの、人形みたいな瞳。

補足するまでもないけど、川神は既に本気。

パワーリストもパワーアングルもしていないし、服装も動きやすいものだ。

さっきの横蹴りだって、手を抜いたものには見えない。

何か策はあったにしたらって、加減した蹴りじゃなかったはず。

川神は、無言で構え直す。

肯定か否定か知らないけど、その構えはさっきとは違う。

敢えて例えるなら、ブルース・リーのよう。

いや、格闘技に詳しくなくても、一目でブルース・リーを想像するような。

軽く刻むように飛んで、両手は軽く、上段と中段を守るような構え。完全に『スピード勝負に徹する』と言わんばかりの構えだ。

今さら戦法を変えたところで、どうにもならないっていうのに。

不死川は変わらない。

変わらず、さっきと同じように真っ直ぐ立って、いない。

着物のせいで足元が見えにくいけど、右足が半歩出ている。

左半身を相手に見せる構えをしている川神とは対照的。

スピードよりも技巧で勝負しようっていう気が満々。

一歩距離を詰めた川神は、蹴りの前動作を取る。

が、すぐに足を戻し、素早く踏み込んで不死川の顔に左の突き。フリッカージャブみたいな、腕をしながら放つ突き。

下から弾くように叩きつける、倒すよりも意識させるための突き。

……ほんと、川神は本当に懲りないなあ。

今さっき、下手な牽制して失敗したばっかなのに。

不死川は、川神とそれほど変わらない速度で動く。

それなのに、川神の攻撃を完全に避けて見せる。

左のジャブの連打を、1撃目は半歩下がって避けて、2撃目は右手でいなす。

右ローキックが来るも、川神の左側に回り込んで見事に回避。

既に左の掌打が顔に伸びていたけど、それも重心を下げて回避。

ここでようやくやく、川神が完全に死に体になった。

フック気味の左掌打をかわし、その手首を右手で取る。

そして、重心の乗っていた右足の力カトあたりに、左足を滑り込ませる。

左手は捻り上げ、右腕を脇に挟み、右足を払い飛ばした。

川神は宙に浮くも、既に両手が封じられているため受け身が取れない。

なんか見たことある技だけど……やっぱり見たことがあるなあ。

そのまま素早く川神を叩きつけ、それだけで終わらせない。

叩きつけると同時に、川神の腹に膝を落とす。

重力に逆らわず、そのまま体重をかけて。

胃と、その下の内臓を圧迫するような膝。

ていうか、膝をこんな風に打ち込むと内臓破裂の危険がある。

40kgはあるだろう不死川が、思い切り体重をかけたんだから。

しかも、一点集中で。

不死川が膝をどけて立ちあがっても、川神は動かない。

上を見たまま動かなくなって……あゝ、これは気を失ってるなあ。

そりゃ、地面と膝で内臓サンドイッチされたら、気も失うか。

不死川にしちゃ、本当に容赦ない。

ギリギリ意識を残して、相手のことを見下す余裕くらいは作りそうなのに。

「勝者、不死川心！」

いつもと変わらず勝利を宣言する爺だけど。

その爺の声が、少しばかり動揺してるように聞こえたのは、多分気のせい。

不死川が勝ったことに何の感慨もいだいてなさそうなのも、きっと気のせい。

この結果に満足してるのになんか引つ掛かるのも、間違いなく気のせい。

そう、気のせいだから、気にしちゃダメだ。

不死川が勝って、めでたしめでたし。

今日は、そういう1日だった。

第7話『知るも存ぜぬ』（後書き）

急に忙しくなったので、ペース落ちてきます。

文章もダれてきている中、厚かましくは思いますが……「ご意見ご感想、お待ちしております。」

第8話『宴はこれから』

川神だけど、すぐにルー先生に運ばれてった。

そりゃまあ、あんな技食らって気を失ったわけだからね。

死んじやいないだろうけど、心臓にもダメージあるだろうから処置は早い方がいいし。

ていうか、狙って心臓止めれるとか、不死川は底が知れないなあ。でも『女は秘密が多い方が美しい』っていうから気にしない。

リングを降りてきた不死川は、ふう、と1つ息をつく。

そんな不死川を見て、ちよこつと安心。

この戦い方は不死川にとつても楽じゃなかった。

つてことは、ああいう戦い方を本来はしないってこと。

つまり、不死川らしくない戦いだっただってことだ。

ああ、本当によかった。

不死川の本質が変わったわけじゃなくて。

まあ、それくらいじゃ僕の恋心は揺らがないけどね。

不死川が変わってしまったら、その不死川にも恋をしてみせるぞ。

「お疲れさん」

「まあ、あの山猿なら、此方にかかればこんなところじゃ」

うん、そうそう、これだよこれ。

不死川はこれくらい自信過剰じゃなきゃね。

しおらしい不死川もいいかもしれないけど、それはお楽しみってことで。

それはそれとして、やらなきゃいけないこともあるし。

簡単に言っちゃえば名誉挽回のためなんだけどね。

「ねえ、不死川」

息も切らしていない不死川に、いつもの調子で声をかける。

これが割と重要で、下手にこちらの意図を悟られたらいけない。

あまり意気込むようなことじゃないからってのもあるんだけど。

それ以上に、不死川の心のハードルを下げる必要があるから。

恐らく友達づきあい慣れてないだろう不死川を、上手く誘わなきゃいけない。

で、何に誘うかって言うと。

「よかつたらさ、日曜に祝勝会でもしない？」

「祝勝会か」

オウム返しにしておいて、不死川は思案顔。

まあ、勝負が終わったばつかだもんなあ。

本当は、明日の朝くらいにサラツと提案した方がいいんだろうけど。一刻も早く伝えないと、今日にも用事が出来ちゃうかもしれない。こつというのは鮮度が命だからね。

しかし、自分で言つといてなんだけど、どこで祝勝会しようか？住んでるアパートってわけにはいかないし、また街に行くのもちよつとね。

カラオケは柄じゃないし、ファミレスつても違う気がする。

不死川の家でやらせてもらうつてわけにはいかないし。

いくら不死川がいつていつても、僕が無理。

ほら、心の準備とかね、そういうのがまだできてないっていつか。

でも、街に出る必要があるんだろうなあ。

どこか場所を借りて、そこで飲んだり食ったりしようか。

……いや、やっぱり普通に街をブラつく方が無難だ。

いくらなんでも、2人で間が持つはずがない。

「あ、いいですね！ やりましようよ！」

誰だ、僕の思考に割り込んでくるのは！

と思つて振り返ると、そこにいるのは武蔵小杉。

……ちよつと待て、今こいつ『やりましよう』つて言ったか？

僕と不死川だけで憤ましくやろうと思つてたのに、お前も来ようつてか？

前回のジムの件もそうだけど、この女、見た目より遥かに厚かましい。

しかも、今日はブルマじゃなくて制服だ。
この小娘は、なんとというか僕と波長が合っていない。
居て欲しくないときにいて、言って欲しくないことを口走る。
なんていうか、僕の前に出るときはブルマ穿いとけよボケ。
僕の青春を返せ。

「人数が多い方がいいですよ、きつと」

なんて舐めたこと言いやがって。

舐めたこと……いや、イイかも知んない。

不死川に別の友人ができれば、僕との関係が浮き彫りにできる。

付き合いの量が相対的に多い僕に、不死川が恋心を抱いてくれるかもしれない。

そんなに簡単にはいかないだろうけど、外堀埋めると思えば大事な
い。

当然、男はお断りだけど、女性だったら文句なし。

「そうだなあ、メンバー限られてくるけど、イイかも知んないね」

顎に人差し指を当てて、少し上を向いて考えてるフリ。

考えるも何も、僕にしては珍しく攻めていこうと思うわけだ。

武蔵は意外そうな顔してるけど、知ったこっちゃない。

……まさか、友達いないの看破されてるんじゃないかなろうか。

いやまあ、そんなことは別にいいんだけど、今回はちょっと困るよ
ね。

声かけられるメンバー、由紀江ちゃんと大和田さんくらいだもん。

今の会話から武蔵は来るとして……面倒だけど、1人くらい男も呼んでおこうかなあ。

恩を売ると思つて、仕方なくだけどね。

「そうじゃな。せつかくの催しじゃ、3人では盛り上がり欠けるかもしれん」

そうですか、もう武蔵は数に入っていましたか。

まあ、いいんだけど。

今回は賑やかにやらせてもらうつもりだからね。

川神に勝ったくらいでこんなことするのもなんだけど、やれるときにやつとかないと。

少しは学生らしいことしておかないと、思い出話に苦労するかも知れないし。

「それじゃあ、適当な人に声かけときますね」

「不死川はドンと構えていとくれよ。主賓なんだから」

「うむ。そうさせてもらうかの」

誰も口にしないけど、恐らく3人とも思つてるに違いない。

『こいつら友達いないから、自分が頑張らないと』って。

不死川はともかく、武蔵になんか言われる筋合いはない。

ファンクラブの話からするに、腰ぎんちゃくもいなくなつたらしいじゃないか。

ついでにいうと、あのファンクラブ非公式で、武蔵も存在を知らな

かつたつていうし。

そんな状態で、いったい誰を呼ぶつもりやら。

まあ、アレだ。

どうせ赤の他人呼んでも仕方ないし。

僕が何人が集めて、それで丁度いいでしょ。

で、色々あって、6月8日の日曜日。

特にこれって言ったことは……ああ、そういや武蔵がランキングの順位上がった。

何があつたか知らないけど、16位との試合が認められて勝つたらしい。

多分アレだ、あのヒゲに袖の下でも通したんだろうよ。

それでもしないと、前回敗北した武蔵が僕より上の16位に挑戦できるはずがない。

ていうか、16位って僕より上なんだよなあ。

女の後輩より劣るって、イメージ悪いような。

……そろそろ僕も上狙ってかないと、不死川にアピールできないしね。

まあ、そんなことはどうでもいいよ。
それよりも、今日のことには集中しなきゃ。

今日の僕の格好も、そんなに派手じゃないと思いたい。
いつもみたいに紺のジーンズに、茶色地で胸になんか英語書いてあるタンクトップ。

その上から白地の半袖ジャケット引っ掛けて、尻のポケットに長財布。

安全上の問題から爪先に鉄板の入ったブーツ履いてるけど、多分使わないだろうね。

それはそれとして、今の時刻は10時10分。
待ち合わせの時間の20分前。

ある程度の常識を持つてる奴で集まってるから、あと15分もすれば全員揃いそう。

つと、来た来た。

アレは、背格好からするに由紀江ちゃんか。

日本刀持ってないけど、あの背丈と胸は由紀江ちゃんだ。

若草色のワンピースの上に、白のレースの半袖……なのかな？
とにかく、そんな感じでスッキリした格好してる。

僕のストライクゾーンの外だけど、あのエロい体つきは目立つ。

あれで高校1年生って、未恐ろしいにもほどがあるね。
うん、やっぱり女性は貧乳に限るよ。

「お待たせしましたか？」

「いや、全然」

9時30分に来てたから、40分ちよつとしか待ってないからね。
こういうのは全然待つてないのと一緒に。

言いだしっぺなわけだし、早く来るのは当然だよ。

それに、由紀江ちゃんに声かけたのは、ちよつと後ろめたかったし。

「すまんね、せつかくの日曜日に」

「いえいえいえいえ！ 私なんかに声をかけていただきありがとうございます！
ごじますー！」

ほんと、こういう必要以上に謙虚なところは変わらんね。

たいして仲が良くもない相手に日曜日に呼び出されたっていうのに。
僕だったら、そのうち意趣返しして、すっごい忙しそうな時期に無理矢理呼び出すね。

テスト前の日曜とか、とりわけ重要なときに。

そついうことしないんだよなあ、由紀江ちゃんって。

それに、由紀江ちゃんは来れなくてもよかった。

というより、僕の誘いを断る大義名分があったわけだし。

だから、僕としては『来れたら来て欲しい』くらいのもりだった

んだけど。

……だつてさあ、由紀江ちゃん、風間ファミリーじゃん。

「あのさ、何度も聞くけど、本当に来ても大丈夫だったの？」

「はい。メールをいただいた時、大和さんが近くにいまして……あ、直江大和さんです」

『知つてつか？ あのヒョロめで頭のキレるのナイスガイだぜ〜！』

松風まで一緒になつて伝えてくれてもなあ。

事実上、情報量は変わらないんだけど。

とにかく、要するに直江の入れ知恵か。

どういう意図があるか知らないけど、直江が絡んできたなら話は早い。

アイツの名前が一番に出たつてことは、直江がファミリーの総意として許可したわけか。

まさかだけど、由紀江ちゃんを軸に僕に干渉するつもりかな？

つっても、僕と知り合いになつてもメリットがないだろうに。

ガクトくんは成り行きで付き合いがあるだけだし、由紀江ちゃんとは旧知だし。

直江みたいに、利を求めての関係じゃない。

まあ、今考えても仕方ないけどね。

「大丈夫。面識ないけど知ってるから」

「はい、私は最初お断りしようと思つたんですけど……いえ、そう

じゃないんです！」

いやいや、そこは断っていいんだよ由紀江ちゃん。

いくら旧知って言っても、そんなに仲良くないんだし。

それにさ、せつかく友達できたんだから、大切にしとかないと。

寮に住んでるんだから、尚のことね。

な〜んてことを考えながら黙してると、由紀江ちゃんは一息入れて続ける。

あ〜あ〜、ホントお人好しだよなあ。

なんていうか、強い人は余裕があつて羨ましいね。

「決してミチヒロさんの誘いが嫌だったわけではなく、その、申し訳なくて……」

「あ〜、わかるわかる。こういうときに普通は声かけないからねえ」

今の申し訳ないってのは、風間ファミリーにだね。

そりゃ、同じグループの仲間を負かした相手の祝勝会には行くとか。

普通の感性してたら、不味いつてわかるもんなあ。

でも、直江が許可したってことは、何か理由があるはずだ。

ファミリーの連中が仕方ないと思うような、そんな理由を提示しはずだ。

あ、そっか。

大和田さんにも声かけてるって知られてたのかもしれない。

由紀江ちゃんにとってファミリー外の友人らしい友人って、大和田さんくらいだろうし。

そついうことなら、ファミリーの連中が気を遣ってもおかしくない

か。

僕としては、その好意は有り難く受け取る。仲が良くないって言っても、旧知は旧知だ。

知り合いの女の子の悩み解決に手を貸してくれたなら、それは結構なことだ。

下心があるにしても、少しだったら乗ってやってもいいかもしれない。

とか思うかボケ。

個人的に直江は警戒したい相手だから、簡単には手を貸してやらない。

僕の手を借りたかったら、もっと大きな恩を売るんだね。

なんてことを考えているうちに、もう1人の影が。

あの髪形は……。

「おっと、大和田さんだ」

「ふえっ!?!」

珍しいよね、気配を読み損ねる由紀江ちゃんって。

結構広い屋敷にいる人の位置、完璧に把握できるくらいには鋭いのに。

由紀江ちゃんが僕の視線の方を見ると、確かに大和田さんが。いや、実に女の子らしい服装、なのかなあ。

「おはようございます」

「おお、おはよう。元気そうで何よりだよ」

「元気そうって……病人じゃないんですから」

朝から乾いた笑いを返してくれる大和田さん。
うん、もう気の利いた返事はしないぞ。

「おはようございます、大和田さん」

「うん、おはよ」

挨拶から始まって、女の子らしい会話が……。いや、七浜の球団の話は、別に女の子らしい会話じゃないわな。ガトリング打線の炸裂云々については僕は知らないから、若い2人に任せとこう。

さて、僕が気にするべきことは、僕の呼んだ1人の男についてだ。彼女らの中に面識のある人もいるだろうし、問題ないと思って呼んだ。

本人は大喜びだったけど、すぐには顔を出さない。なんていうか、ガツついていると思われたくないのかなあ。見栄張ったところで、どうせ態度に出るっていうのにな。

あ、武蔵が来たけど、ナチュラルに2人の会話に入っていたから割愛。

盗み聞きしてみると、武蔵と由紀江ちゃんは面識あるみたいだね。

どういつ出会いだったかは知らないけど、友人ではないんだろっなあ。

武蔵の性格じゃ、由紀江ちゃんでも持て余しそうだもん。

で、そうこうしているうちに、待ち合わせ10分前。
やっと僕以外の男が来たよ。

まあ、男は僕とコイツしかいないんだけどね。

生意気にもワックスで髪の毛いじって。

眉毛なんかもキツチリ短くして、細かいところにもまで気を配って。黒のチョッキに白のカッターを合わせてくる。

ズボンにはクリーム色の綿パンで、どっかの雑誌から拾ってきた服装みたい。

もちろん、その服装が流行に足るものかどうか僕は知らない。

知らないけど、気合が入ってるのだけはよくわかる。

「おはようございます!」

清々しいほどの笑顔で、入江明良が挨拶した。

「あ、もう1人の方って入江さんだったんですね」

「全然知らない人だったらどうしようかと思ったけど、ちょっと安心しちゃった」

……ん？

いつの間に入江は、この2人と知り合いになつたんだ？
学校が始まってから2カ月ちよつと。

わりと目立たずに過ごしてきたであろう入江を、どうして2人が知
つてんだろ。

いや、知ってるんじゃないかって『知り合い』なんだよなあ。

2人の口調からしても、簡単な会話くらいはしたことありそうだし。
まあ、その辺は、あとで入江なり由紀江ちゃんになり聞いてみるか。

「俺の方も、知ってる人ばっかでよかつたよ」

「いやあ、世間って割と狭いね」

適当にフォローを入れたところで、また会話がバラける。

女性3人は、今度は入江と僕の関係について盛り上がってる。

なまじ武蔵がジムの話を知ってるから、ちよつと盛り上がってるみ
たい。

まあ、楽しんでくれてるなら何よりだけどね。

僕に不利益な話にはならないだろうし。

あ、風間ファミリーの連中にジムのことが知れるか。

不利益になるかどうか、正直微妙なところだよなあ。

バレて困るのって、実際は小西さんくらいなもんだし。

あの連中だったら嫌がらせはしないだろうから、気にしなくてもいい
か。

「あの、港センパイ」

「ん？ 文句あるならビルの屋上からキン肉ドライバーかますよ？」

僕としては結構本気で言ってる。

キン肉ドライバーは冗談としても、両腕を固めて壁に叩きつけるくらいはする。

胸骨と肋骨がダメになるように、胸を思いっきり叩きつける。

殺しはしないけど、ボクシングどころかスポーツに困る体にしてやる。

「そんな、文句なんてあるわけないじゃないですか！」

そりゃそうだ。

ファンクラブの連中からすりゃ、喉から手が出るほど嬉しいよなあ。

つつても、コイツのことだから、ファンクラブもいずれ解体するつもりだろうね。

最後にオイシイとこ持ってこうとするだろうから、上手くいくかは知らないけど。

「それより、ホントすいません。俺……勘違いしてました」

何を勘違いしてたんだか。

お前のことだから、きつと『排除したいクズ』くらいに思ってたんだろうな。

ジムでも入江より上だし、学校でも入江より目立ってるし。

オマケに、ファンクラブ作られるような女子3人と知り合いだし。

身長も10cm差で、スピードと顔とファッションセンス以外全部

負けてるもんな。

ああ、入江だけど、顔だけはいいんだよ。

ジムじゃ、小西さんと1、2を争うイケメンだからなあ。

入門2日目で、いっぺんズタズタにしたけど。

そんな思い出話はともかく。

せっかく言いたいことがあるみたいだから、黙って聞いてあげようか。

「港センパイ、俺のこと気遣ってくれてたんすね」

「……そりゃ、カワイイ後輩だからねえ」

あっはっはっはっは。

やっぱ勘違いしてるじゃんか。

お前じゃなくて、武蔵と由紀江ちゃんと大和田さんがカワイイんだよ。

下手に接触を抑えて、無茶する奴が出てきても困るからなあ。

だからさ、お前に頑張ってもらおうと思って呼んだんだよ、入江。彼女らの身の安全の保証をしてもらうためにね。

「でも、ホントに俺が来てよかつたんすか？」

「僕1人じゃ、女性相手に間が持たないでしょ」

まあ、それも本当なんだけどね。

女の子の扱い方っていうのは、僕には全然分かんないんだよねえ。

三島さんとノブさんに聞いてはおいたけど、所詮知識は知識だし。だから、そこそこの付き合いがある入江を呼んでおいたっていうのもある。いざってときには困になるし、まさに丁度いい捨て駒だ。

そうこうしているうちに、時刻は10時28分。

入江と無駄話しながら、脳味噌使って今日の予定を確認しておく。

……まあ、無難なラインだよなあ。

今回は三島さんにも聞いたから、準備はバッチリなはず。

あ、やっと来た。

アレは不死……川？

第8話『宴はこれから』（後書き）

あと1、2話で第1章を終了します。

恋姫無双のクロスオーバーとオリキャララインな小説も同時進行しておりますので、掲載されていたら是非目を通してやってください。

第9話『宴をまたいつか』

おかしい。

僕の目と脳は正常なはずだ。

人間力測定の時も異常は見られなかったし、幻覚の類は見たこともない。

いきなり脳に異常が出たっていうのは、考えたくもないから却下。

とにかく、僕の目に映ってる女性は不死川のはずだ。

目、鼻、口、耳の形や位置からしても間違いない。

というより、僕が不死川を判別できないわけがない。

僕の過去の経験からして想像もできない姿だけど、間違いなく不死川だ。

いつもみみたいに髪は黒いんだけど、今日はおだんごじゃない。

あの艶やかな髪の毛を解いて、キレイに櫛ですいてストレートにしている。

真っ直ぐ腰まで伸びた髪の毛が、歩くたびにふわりと揺れて。

ただでさえ目を奪われるのに、陽の光を柔らかく受け止め、うっすらと輝いて見えて。

きめ細かくて白い肌とのコントラストで、髪も肌も美しさが際立っている。

しかも……しかもだ。

いつもの桜色の着物じゃなくて、洋服だ。

肘より少し先まである白いブラウス。

その胸元に、黒くて細いリボンが付いている。

そして、うつすらと透けているブラウスの下は、リボン同じ黒のキヤミソール。

透けている素材だっていうのに、いやらしさは微塵もない。

スカートは、同じく黒のレーススカート。

髪動きに一拍遅れて、スカートが小さくはためいた。

膝頭より少し下に裾があり、不死川の清楚なイメージを存分に引き出している。

なんていうか、その、カワイイ。

普段の不死川とは全然違うんだけど、カワイイ。

いつもの不死川は貴族然としているけど、今の不死川はお嬢様然として。

年相応な恰好をしてるせいか、普段よりもあどけなさが滲み出ている。

着物を着てる時はピリツとしてるんだよね、不死川って。

そついう気張りがなくなつて、近寄りにくいオーラがなくなつてる。

完全に盲点だった。

僕の精神力の大半が自制心を抑えるのに使われてロクな思考ができない。

もう何がなんだかよくわかってないんだけど、とりあえずやることはやらなきゃ。

「ぎゃあああああ！」

両目を抑えて入江が転げ回る。

手刀を横に振って『切るような目潰し』を出した僕。

不死川の姿を最初に目に収めるのは僕だ。

そもそも、入江に今の不死川の姿を見せてやるのは口惜しい。目玉を潰されなかつただけ有り難く思つて欲しいもんだよ。

『あつあつあつあつ』とか言うな、鬱陶しい。

同情買いたかつたら、もうちょっと普段から誠実に過ごせボケ。

入江の悲鳴を聞いたおかげか、他の3人も気付いたみたい。

不死川を見て怪訝そうな顔をしてから、すぐに目が丸くなる。でもって、目が丸くなつたまま固まつて、誰も動かない。

少しずつ歩み寄ってくる不死川だけが、僕の視界で動いてた。

「お……おはよう」

ちょっとモジモジしながら挨拶してくれる不死川。

すぐく……かわいらしいです……。

じゃなくて、落ち着かなきゃいけない。

こういうときは、年長者の僕が冷静にならなきゃ。

「ああ、おはよう不死川」

そう、落ち着いた様子で僕は挨拶を返す。

やっぱかわいいなあ、不死川。

僕……俺のボルテージと心拍数は急上昇。

あれだ、婚姻届と実印を準備しようじゃないか。

結婚してくれ、不死川。

「け」

……危ねえええええ！

今、俺の口がナチユラルに『結婚してくれ』って言いそうだったぞ！
何やってんだよ俺！

ここでそんなこと口走ったら、俺のキャラじゃ冗談で済まないんだぞ！

クツソ、やつちまった……。

あの声量の『け』が、この距離で不死川に聞こえなかったはずがねえ。

どうする？

どうやって、あの『け』から言葉をつなげる？

『け』から始まって、この場でいっても不自然じゃない言葉。

なおかつ、俺のイメージを極端に損なわず、場を盛り下げない言葉。
俺の豊富な語彙力と、ノブさんと三島さんの助言があれば大丈夫だ。

「結構似合ってると思うよ？ カワイイじゃん」

「そ、そうか？ 着慣れておらんから落ち着かんのじゃが……」

なんていいながら、またモジモジする不死川。

よし、どうやら間違えなかったらしいな。

この不死川の反応を見るに、機嫌も損ねちゃいないみてえだし。
ふう………まったく、出会い頭から気が抜けねえ。

「その、洋服にしたかいがあつた」

ちよつと待て、ちよつと待てよ。

どうして不死川が、少し顔を赤らめて俯き加減になつてるんだ？
俺、さつきなんて言つたっけか。

『結構似合つてると思うよ？ カワイイじゃん』だよな？

あ。

……あ。

あああああああ！！！！

何言つてんだ俺！

バカじゃねえの今すぐ死ぬよドアホ！

今死ぬ、すぐ死ぬ、早く死ぬ！

サラッと『カワイイじゃん』とか言つてんじゃねえよ！

ホンツツ……………トに死ぬ！

いや、今すぐ死ぬ！

由紀江ちゃんに頼んで首を刎ねて……………つて刀持つてねえよ！

じゃない！

落ち着け、マジに落ち着けよ俺！

落ち着け、落ち着け、呼吸を整え、気を静め、瞬き一回。

……よし、無理矢理冷静になつたフリをしたぞ。

俺……………僕、俺は、じゃなくて、僕だ、俺が、僕、僕だ。

僕が落ち着かないと、不死川にまで余計に気を遣わせる。

ここは1つ、何気ない会話の流れで言つたつて言うのを装わないと

ね。
大丈夫、僕ならできる。

「しかし、キレイどころを4人も連れてると視線が痛いね」

実際、そこらに大した人数はいないんだけどさ。

それでもまあ、その少数の視線が突き刺さってるのも確かだ。

僕の見る限り学校の連中じゃないけど、これだけ見られるとやっぱり気になる。

クソ……不死川見てる奴らの目を片っ端から潰したい。

潰したいけど、我慢だ我慢。

今はとにかく、僕の失態を隠し通さなきゃね。

「来たばっかで慌ただしいけど、早速移動しようか」

「そっ、そっじゃな」

よし、不死川も少し冷静になってくれたらしいね。

うんうん、ひとまずは安心だ。

変な空気のまま出掛けても、全然盛り上がらないだろうっからね。

「ほらほら、みんなも行くよ。入江もうすぐまってないで」

『うっ……』とか言いながら、なんとか入江も立ちあがったわけだ

し。

まだ呆然としてる1年連中を促して、とつと移動。

ていうか、入江が場所を決めたわけだから、コイツが動かないと誰も動けない。

僕は見えない位置から軽く蹴りを入れて、うずくまっていた入江を立たせる。

入江が『覚えてろよ』とか呟いてたのは、聞こえなかったことにしてやった。

確かにここは個室だ。

高校生が6人入っても問題ないような広さの。

エアコンもほどよく利いてて、湿気も少なめで過ごしやすい。割と部屋も明るくて、ドリンクなんか注文できる。

まあ、言いだしたのは僕なわけだし、僕が全員分払つといた。溜めてた仕送りを崩せば、これくらいは造作もないんだけど……ないんだけど。

金銭的なことは問題じゃなくて、この場所が問題なんだよ。

「入江」

「なんスか？」

「この状況を説明してもらおうか」

済ました顔して、大型の電子手帳みたいな道具をペンタツチする入江。

ちらと画面に視線を移してみると、流行の歌手の名前が載ってる。

あゝ……この歌手がどんな曲を歌ってるか全然わからん。

そもそも、こんな状況になるだなんて思ってもなかったんだから。

「説明も何も、高校生らしい祝勝会の場所といたらカラオケじゃないんスか？」

「テメエ、俺のレパトリーが少ないこと知ってんだろ」

「まさかですよ」

足を踏みながら睨みを利かせてるのに、珍しく少しも怯まない。いつもなら含みを持たせただけでも下に出るっていうのに。

ああ、そっか。

親しい女子がいる前で、僕が暴力を振るわないと思ってるのか。

まあ、その通りだよ。

この場で入江は殴れない。

入江のことだから、上手く言い訳して僕を一方的な悪人にするだろうから。

だから、まあ、アレだ。

入江には覚悟しておいてもらおう。

僕がこれからすることを考えれば、これくらいは安いもんだ。地獄を見る前に楽しませてあげよう。

一回持ち上げといた方が、落とした時に響くだろうしね。

「それよりほら、先輩もなんか入れて下さいよ」

『盛り下がっちゃいますよ？』なんてぬかす入江。

確かにそうだけど、僕はスローペースで歌わなきゃいけない。

コイツらと同じペースで歌っていると、すぐにネタが尽きちゃうもん。

入江は予想通り流行りの歌を網羅してる。

遊び慣れてるコイツのことだから、不思議じゃないんだけどさ。ここまでノリノリで歌われると、普段の入江とは全く別人に見える。……よく考えたら、入江がハツラツとしている姿は初めてみるかも。来週には笑ってられなくなるんだろうけどね。

由紀江ちゃんと大和田さんも同じだけど、入江よりは慣れてなさそう。

というか、由紀江ちゃん……カラオケ大丈夫だったんだ。僕は1人カラオケのお陰で歌えるけど、まさかなあ。

由紀江ちゃんまで1人カラオケってことは、その、ないよね？年頃の娘さんが単身でカラオケに入っていくとか、想像もしたくない。

で、武蔵も同じく無難な曲を幾つかチョイス。一昔前の曲があったりもするけど、違和感を覚えるほど古くもなくで。

歌声もまあまあなんだから、特にさし使えなく雰囲気には溶け込んでいた。

意外だったのは、不死川がポップスを歌っていること。

僕の予想より遥かに上手で、さっき96点を叩き出した。いや、才色兼備つてのはあるもんだね。

ココまで幅広い才に恵まれてると、思わず嫉妬しそう。そんなところも魅力的だけどね。

ちなみに僕は、歌える中でも無難なのを数点歌っただけ。

特別上手いわけじゃないけど、耳汚しにはならんレベルかなあ。

カラオケで『マリリン・マンソン』とか『MOSAIC・WAVE』はないよね、うん。

だから、僕のレパトリーは5%にまで落ち込んでるんだよ。

ああ、一応配置を説明しておくかね。

部屋の入り口近くに入江が座つてて、その右隣が僕。でもって僕の右隣に武蔵がいて、不死川、大和田さん、由紀江ちゃんの順番。

四角い机の3方を埋めてる感じで、僕の正面に大和田さんと由紀江ちゃんが来る。

不死川が良く見えないのは残念だけど、まあ、今はこれでイイ距離感で。

それよりも、僕はこの配置にささやかな悪意を感じている最中。入江が入り口前つてのは結構なこと。

何かあっても入江に対応させられるし、コイツに女性の隣はもったいない。

まあ、この配置なら対面に由紀江ちゃんと大和田さんが来るからなあ。

生き地獄を味わう前に、甘い汁を吸わせておくと思えばいいか。

大和田さんと由紀江ちゃんが隣なのも文句はない。

この2人は同じクラスだからか、割と仲がいい。

だから、隣同士にして仲を深めてもらえば幸いだ。

由紀江ちゃんは無理に呼んでるわけだし、大和田さんにも無理聞いてもらったし。

これくらいの配慮はあって然るべきだよ、うん。

問題は、僕の隣に武蔵がいることだ。

いったい何の因果か、この女はやたら僕に纏わりついてくる。

運動部の朝練より少し遅く行っているのに、何故かすれ違つようになつてきたし。

……そもそも、弓道部って朝練あつたっけか。

とにかく、いちいち僕に突っかかって来るわけだ。

しかも、どういつわけか僕に好意に近いものを抱いている雰囲気がある。

僕の勘違いならいいけど、それにしても学校で出会い過ぎている気がする。

登校の時、昼飯、帰り際。

毎度毎度じゃないけど、3日に2回は顔を突き合わせてる。

これは、どう考えてもコチラの行動を追ってるから。

そうじゃないなら、運命か何かだつていうのかなあ。

そんなもん、これっぽっちも気にしてないんだけどね。

何より、武蔵が僕にどうやって好意を抱いたのかが想像つかないけど。

まあ、そういつわけで武蔵とはやりにくい。

特に共通の話題があるわけじゃないし、僕は気の遣つた会話ができない。

聞き手に回ろうにも、こういう場じゃずっと話してるのは不自然だ。それに、不死川が僕と武蔵の間に何かあると勘違いしたら困る。

僕の悲願から遠ざかるようなマネは、出来る限り避けたいもんだからね。

幸いなのは、まだ武蔵と一言も話していないこと。そんなもって、武蔵と不死川が思ったより話しこんでいること。お陰さまで、僕は入江と適当に話してれば問題ない。不死川も楽しそうだし、まあ、当面は気にすることもないよね。

さて、これからどうしようか。

入江に任せた後のことは、全っ然考えてなかったもんなあ。飯はココでランチ食っちゃったし、夕方にはお開きになるだろうし。カラオケが盛り上がりつつあるから4時終了、7時解散で考えても、3時間は残ってしまう。有意義に使うためには、いったいどうするべきだろうか？

「そうだ、港センパイ！ アレやって下さいよ、アレ！」

「アレじゃ分からんぞ」

「またまたあ、とぼけちゃって！」

そんな舐めたことを言いながら、入江が空きビンを渡してくる。クソつまらんことをさせようとするな、クソが。さっきオレンジジュースをビンで注文したのはこのためだったか。まあ、中身入っていると飛び散るかもしれないもんなあ。

入江が僕に、もったいぶって人前でビンを渡す。

それはつまり、僕に一発芸をやらせようってことだ。
僕のできるビンを使った一発芸なんて、1つ2つしかない。
……ここでやるような芸じゃないだろうけど。

「皆さん注目！ 今から港センパイがビン切りしますよ！」

おお、という声。

へえ、という顔。

由紀江ちゃんは見たことあるもんなあ、僕のビン切り。

しかも、あのときはまだ空手やってたから、ビンの腹切ったりして
たし。

今から見ても面白いもんじゃないよなあ。

でもまあ、他の3人が期待してくれてるなら、やらないわけにはい
かないよね。

361

面倒だから、座ったまま。

右手を軽く自分の頭のとっぺんくらいの高さに挙げる。

で、意識を集中して、右手を手刀の形に構えさせる

でもって、そのまま斜めに振り下ろす。

キンツ、っという小気味のイイ金属音のような音。

その音が響くと同時に、ビンの首は見事に消失した。

飛んでくと危ないから、切ったついでにビンの首は握りこんでいる。

いやあ、周りには気を使わないと。

3人がビンを凝視する。

もちろん、そこに栓の付いたビンの首はない。

切り口は完璧で、刃物で切り落とされた部分の所在を確認するけど、当然見
いやあ、我ながらホレボレする切れ味だね。

不死川はすぐに切り落とされた部分の所在を確認するけど、当然見
当たらない。

あちこちを見回してる不死川達に、僕は握ってた右手を見せてみる。
そこには、さつき切り取ったばかりのビンの首。

それを見せると、3人とも感嘆の声を上げてくれた。
普通、ドン引きするところだけだね。

女の子にビン切り見せる男は、俗世間からすれば変態だからなあ。

残念なのは、由紀江ちゃんと入江には全部見えてたことくらい。
つたく、どういう動体視力してんだろうね。

でも、それを言ったら不死川にも少し見えてたかも。
じゃあ、どうでもいいや。

「港先輩、こんなことできたんですね」

と感心した様子で言う武蔵。

まあ、これくらいで驚かれてもなあ。

師範なんか、一本指で同じことできるんだもん。

「いや……謙遜するな、港。これは誇れるレベルだぞ」

空ビンの切り口を指でなぞりながら、不死川が驚嘆。

いやあ、ビン切りできてよかったよ。

親指怪我してから、しばらくは右手でできる技が限られてただけ

ど。

でも、こうやって役に立つことがあったなら、怪我して良かったかも。

髪の毛をおろした、洋服姿の不死川に褒められる……か。

なんていうか、これだけで祝勝会と称して集まったかいたあったってもんだ。

これが気分転換になったのか、結局フリータイム終了の7時まで歌いきった。

いやあ、こういうカラオケだったら、ぜひ次回もやりたいもんだね。できれば入江抜きで。

「それじゃあ、今日のところはこれで解散だね」

本当は夕飯も適当に食っていくべきなのかもしれないけど。時間も中途半端だし、女の子を日が落ちるまで連れまわす趣味はない。

いや……入江は何かあったはずだ。でも黙ってたつてことは、何か策があるんだろうね。

まあ、自由に動けるなんて思わないで欲しい。なんで自分が呼ばれたか、まだ分かってないらしいね。

入江は、1年生3人のファンクラブのリーダー格。

厳密には、黛由紀江ファンクラブの古参っていったところ。

そう、入江はリーダー格であつて、実質上のリーダーじゃない。

会長の類は、入江を痛めつけた次の日にシメておいてあるんだよ。

まあ、そんなことがあつたのを知ってるのは、その痛めつけられた連中だけだけど。

で、今のファンクラブを仕切ってるのは僕だ。

暴力と多少の飴で釣ってるから、無理な要求以外はどうにかなる。でもって、今回は酸っぱい飴をくれてやった。

昨今、デジカメの類は小型化してる。

腕時計に偽装されたカメラなんか、知識があつても気付けないくらい精巧だ。

それで、待ち合わせの時に写真を2枚、カラオケ出るときに何枚か入江が例の3人と世間話してる姿を収めて、データを携帯電話に入れて。

フアンクラブの全員に、場所付きで送りつけといた。

これではばらく、フアンクラブの意識は入江に行くはず。こうなれば僕も楽だし、あとで事情を教えてやればいい牽制になる。『ふざけたマネをしたら、お前らもこうなるぞ』ってね。まあ、本当に無茶しやがったら、2度と病院から出れなくしてやるう。

「私たちは服を見に行きますけど……不死川さんと武蔵さんもどうです？」

大和田さんが2人に声をかけてる。偉いなあ、大和田さん。

カワイイ上に気を遣える女の子っていうのは、そりゃモテるわな。

「それじゃあ、私は御一緒させてもらおうかしら」

「此方は遠慮しておこう。また機会があったら誘ってくれ」

武蔵は承諾したけど、不死川は断る。

まあ、そうだよなあ。

ああいう家って夜遊びには厳しそうだからね。

本当は一緒に行きたいのかもしれないけど、仕方ないさ。

そういうジレンマも含めて上流階級なわけだし。

自分を制することのできる不死川は偉いよね。

僕だったら耐えられそうにないから。

「あ、じゃあ俺も帰りますね」

「ああ、じゃあね」

入江が僕に挨拶してく。

あつはつは、覚悟しとけ入江。

帰りの電車の中とか、家に着くまでの道筋とかさ。

明日学校に行く時とか、無事で済むとイイね。

いやあ、明日からが本当に楽しみだよ。

さて、僕はどうしようか？

そのまま家に帰っても面白くないなあ。

帰りにスーパーでも寄ってって、半額の弁当でも腹に入れるか。

それとも、梅屋に行つて豚丼でも食つてこうか。

「港、少しよいか？」

と、僕の後ろから声をかけてくる不死川。

振り返ると、いつもは見ることでできない洋服姿の不死川。

外見だけでいえば、コツチの不死川の方が好きかも知れない。

貞淑な感じが際立って……学校の連中が見てないことを祈ろう。

もし見られようもんなら、本当に不死川に惚れる奴らが出てくるかもしれない。

そうしたら、ちょっと強引に計画を早めていかないかね。

「構わないけど、なあに？」

そういうと、不死川は少しモジモジ。

なんか、集合したときに洋服姿を気にしてたのと同じ反応。恥ずかしいのか、それとも不安なのか。

視線を逸らしたり戻したりしながら、1分くらい経ったろうか。

覚悟を極めたように、不死川は深呼吸。

開かれた彼女の口からは、久々に僕の意識を奪うほどの言葉だった。

「このような催しを考えてくれたことに、心から感謝する」

「ありがとう」

きつと、僕はこの笑顔を忘れないだろう。

誇張じゃなくて、今まで見た誰よりも美しい笑顔だったから。

……いや、本当によかった。
本当に、よかった。

うん、今日はコレで満足だ。
不死川の笑顔が見られたんだから。

第9話『宴をまたいつか』（後書き）

次回から、体育大会（運動会でしょうか？）に入っていきます。
相も変わらず、ご意見ご感想、誤字脱字の指摘をお待ちしております。

第1章までの、原作に出てこない登場キャラクター（前書き）

誰得？ という感じの設定です。

第1章までの、原作に出てこない登場キャラクター

小西 良徳

現在の港の師匠に当たる人物。

『サブミッション・ハンター』の異名を持ち、関節技のキレは人間離れしている。

レスリングをバックボーンに、様々な組技格闘技の技術を習得。グラウンドの攻防のみならず、スタンドレスリングのレベルも一級品である。

過去に完璧を追い求め、人外の領域に達した経験がある鬼才。

結果的には敗北を喫しているが、その敗北が新たな『完璧』を探すきっかけになる。

その答えを得るための手段として、小西サブミッションスクールを開講。

経歴を問わず、気に入った人間のみを招き入れている。

総合力が極めて高いが、その中でも特にスピードが武器。

プロボクサーのジャブを掴めるほどの動体視力と反射神経を兼ね備えている。

学習能力も高く、一度戦った相手なら大抵は軽くあしらえるほど。

逆に、変則的な戦い方をメインにしている相手は苦手。

明確な敗北も、その変則的な戦い方をする相手によるもの。

焼き肉が大好きで、三度の飯より焼き肉好き。

周りが吐きそうになっても、怒涛の勢いで食べ続ける。

入江 イリエ 明良 アキラ

港の後輩。

元々はプロボクサー志望で、動体視力や反射神経などに優れている。

左ジャブへの右のクロスカウンターが得意だったが、カウンターに失敗して網膜剥離。

失明こそしなかったものの、視力が低下したためにボクシングを断念。

やけっぱちで入った小西サブミッションスクールで、色々と思い知らされる。

港のことが好きではなく、日々報復の手段を考えている。

『男子校に進学した』と嘘をついたのも、港の弱みを握るため。

万事うまく立ち回ろうとする癖があるものの、やることなすこと中途半端。

総じて小者と評されることが多い。

第1章終了時点で港は知らないが、1-Cの生徒。

しかも、武蔵に決闘を申し込まれた経験がある。

下手に目立つと困るかもしれないと考え、敗北を認めて決闘を避けた。

とはいっても、ボクシングから長らくはなれているため、武蔵に勝てるだけの実力があつたかは微妙。

黛由紀江ファンククラブの古参。

黛に一目ぼれしたため、邪魔者をピックアップするためにファンククラブに入る。

メンバーの増員にも積極的で、ライバルを1人でも多く、キツチリと潰す予定。

ふかみち
深道 のぶひこ
信彦

通称『ノブさん』

港によくしてくれている人の筆頭。

大道芸人をやっているためか、時間には相当余裕がある。どうでもいいが、そこそこイケメン。

キックボクシングと総合格闘技の経験者。

格闘家よりもストリートファイターとしての適正が高い。

膝蹴りによる一撃必殺と、花火を使ったかく乱戦法を得意とする。

が、反面、作戦を立てることが苦手だったり、頭の周りはさして

早くない。

どうでもいいが、手先が器用。

頑張れば頑張るほど、格好つけるほどに失敗する体質。

生来の要領の悪さもあってか、ここぞというところで失敗する。

彼より優れた兄がいるが、大したコンプレックスはない模様。

どうでもいいが、彼女が中学生。

港の面倒を見てくれるのは、自分と同じ匂いを感じているから。

どうにも突き抜けたところのない港に、自分を重ねている部分がある。

が、当の港からも少し軽んじられている部分があるのを、彼はまだ知らない。

どうでもいいが、総じて微妙な人間。

麦村むぎむら

小西サブミッションスクールのキックボクサー。

距離を取って戦うタイプの選手。

既に2団体でベルトを取得したことがある程度には強い。

総合格闘家として活動するために、小西サブミッションスクールで

組技を学ぶ。

桑野くわの

小西サブミッションスクールの一員。
麦村と同じくキックボクサーだが、鳴かず飛ばずで芽が出ない。
格闘技よりも女の子と遊ぶ方が好き。

本田ほんた

小西サブミッションスクールの一員。
日本拳法の道場と並行して、ジムに組技を習いにきている。
小西を除いて、総合ルールで港より強い唯一の人物。
が、組技では港には手も足も出ないというアンバランスな強さを持つ。

カーロス・ダ・シルヴァ

小西サブミッションスクールに籍を置く、黒人系ブラジル人。ブラジリアン柔術の一派である『シルヴァ柔術』の使い手。日本語は少し怪しいが、ちゃんと意思疎通はできるレベル。ジムでは名義上『柔術基礎クラス』を担当している。が、都内のブラジル料理店で働いているため参加率が悪く、港が代役になることが多い。

柔術家としては強い方だが、いま1つパツとしないタイプ。公式戦での優勝経験は全4回で、いずれも判定勝ち。全国規模の大会では優勝経験がなく、世界大会にも出たことがない。総合格闘技で6勝1分けの好成績を残すも、地味な戦い方のせいで試合のオフアアが来ないのが悩み。

シロップのように甘いブラジルコーヒーを淹れるのが得意。ただ、激甘なため評判は悪く、周囲では港と本人しか口にできない。

川神ランキング暫定順位（前書き）

正直、このタイミングでか！という感じですが。

川神ランキングは終了していません。

作品終了まで、こまごまと続けていきます。

『イベント戦』も、なんとか遠からぬうちに書かせていただきます。

川神ランキング暫定順位

- 1位：マルギツテ・エーベルバツハ（軍隊格闘術）
- 2位：柴田 翼（アマチュアレスリング）
- 3位：小林 一郎（ジークンドー）
- 4位：向井 徹夫（キックボクシング）
- 5位：野村 大助（ボクシング）
- 6位：渡辺 雄飛（朱雀会空手）
- 7位：戸田 春也（相撲）
- 8位：クリスティアーネ・フリードリヒ（フェンシング / サバット）
- 9位：不死川 心（講道館柔道 / 七帝柔道 ?）
- 10位：川神 一子（川神流）
- 11位：椎名 京（椎名流弓術）
- 16位：武蔵 小杉（我流 / 空手 / 講道館柔道基礎） ?

18位：風間 翔一（我流）

19位：港 三千尋（シルヴァ柔術 無道会館空手）

21位：戸田 幸助（キックボクシング）

22位：ブンカート・チョーワイクン（ムエタイ）

23位：島津 岳人（我流）

77位：田辺 拳（サンボ）

79位：渡辺 透（我流）

第2章：1話目『嵐の前』

体育祭、運動会、体育大会。

名称は色々あるけど、本質は一緒。

運動能力を以ってして集団で優劣を競い、勝者を決める行事なわけだ。

今年は2 - Sも川神戦役をやるとかで、クラスもちよっぴり盛り上がってる。

去年は活躍してないから、今年は発奮しないとなあ。

なんてことを考えてた、6月9日の月曜日。

担任が『じゃあ、帰りのHRで種目決めろよ』なんて投げて教室からいなくなった。

いくらSクラスっていつても、やっぱりまとめ役はいる。

司会進行ができて、頭がそこそこ回って、信頼がある生徒。

まあ、僕はそんなに好きじゃないんだけど……。

要するに、葵冬馬が教卓の前に立っていた。

「では、今から参加する競技を決めたいと思います」

よろしいですか？ と全員に確認。

クソ面倒くさい司会進行なんかやりたい奴がいるわけもない。

誰一人として、葵に文句を言う奴はいなかった。

まあ、僕としても面倒事は引き受けてくれると楽なんだけどさ。

なんかこう、葵がイイ目立ち方していると気に食わないんだよなあ。

「それでは、まずは立候補で決めていきましょうか。

被った場合は公平にじゃんけんで、負けた方は余った競技に参加してもらいます」

ここでも文句なし。

そりゃまあ、ここで文句垂れたら下校が遅くなるしね。

誰からも文句が出ないのを確認してから、葵は黒板に競技を書いていく。

『徒競争』 『借り物競走』 『障害物走』 『400mリレー』 『スイスリレー』

『男子1500m走』 『女子800m走』 『ハンドボール投げ』 『

砲丸投げ』

『腕相撲（左の部）』 『腕相撲（右の部）』 『二人三脚』

「では、右から順に順に決めていきましょうか」

つつこまないぞ。

明らかに運動会らしからぬ競技が混じってるけど、つつこまないぞ。

この学校がおかしいのは、今さらだもん。
こんなことでくじけてたら、キリないもんね。

腕相撲（左の部）に決定しました、本当にありがとうございます。
あと、ついでに砲丸投げにもエントリーされました。

いや、砲丸投げは去年も出てるんだけどね。

1位取ったのに、競技が地味過ぎて井上くらいしか気付いてくれな
かったなあ。

あ、榊原もマシユマロくれたっけか。

あのマシユマロのしょっぱい味は、今でも忘れない。

まあ、妥当かな。

勝とうと思ったら、僕の出る競技はコレだよ。

握力3桁あるんだから、むしろこついうところで活躍しないと。

……砲丸投げよりも地味そうな競技にも出るんだけどね。

知った顔だと、井上は借り物競走とリレー。

不死川は徒競争、葵はスイスリレー。

九鬼はリレーに参加して、忍足も不死川と一緒に徒競争。

マルギツテの800m走は、見るまでもなく勝負が決まってそう。

榊原は、どういう理由か腕相撲（右の部）に出場。

仲村はリレーと1500m走と、分相応な競技に参加。

「では、この組み合わせで申請しておきます」

まあ、これでいいよ。

正直面倒だし。

それよりも、これは前座みたいなもんだ。

「さて。では、川神戦役について話し合いませんか」

教室の空気が、少しばかり張りつめる。

そりゃそうだ。

川神戦役。

全5回の勝負を繰り広げ、一度勝つごとに負けたクラスから1人引き抜ける。

最大で5人、最低でも1人の生徒がやり取りされる悪魔の儀式だ。

もしF組なんかには引きずり込まれたら、自尊心が許さないことだろう。

いくら平均値がF組より遙かに上だからって、負ける可能性はゼロじゃないんだし。

幸いなのは、僕と不死川が狙われにくいこと。

可能性が高いのは、女子からの人気の高い葵。

F組と仲のいい井上、ひそかに男子に人気な榊原。

あとは……マルギツテだね。

F組のクリスティアーネの目付け役らしいから、狙われてもおかしくない。

仮に、仮に5戦全部に負けたとしよう。

恐らく、この4人は確実に持つていかれるだろう。

1敗したとすれば、女子の意見が強ければ葵か井上、男子なら榊原。クリスティアーネが勝ちに貢献したら、マルギツテが……ってところかなあ。

とにかく、僕と不死川は安全圏なわけだ。

「ご存知の方もいるかもしれませんが、

川神戦役は5種のテーマからなる競技で優劣を競います。

残念なことに、その5種のテーマは事前公開されないのですが……。

今までの傾向を見るに、『運動神経』『可憐』『美』『知力』『武力』など

他には『遊び心』や『義侠心』『漢気』なんていう変わり種もあったようです。

それに、これらのテーマを複合した競技が行われた記録も確認さ

れていますね」

教室全体を見回しながら、言い聞かせるように語る葵。
なるほど。

それは知らなかった。

葵の奴、担任より優秀なんじゃなからうか。

しかもコイツ、ここまで入念に調べるってことは本気で勝ちに来て
るな。

多分、直江がどうしても欲しいんだらうけど。

「はいはい！ 質問しつもん！」

「はい、ユキ。どうしましたか？」

「誰かとられちゃったときって、取り返さなくてもイイの？」

「ルール上問題ありませんね。場合によっては切り捨ててもいいと
いうことです」

おっそろしいことをサラッと言いやがった。

コイツら、場合によっては助けるつもりがないらしいな。

……負けねえじゃん。

葵とかなら必死に取り返すだらうけど、僕が持ってかれたら終わる。
まずないだらうけど、戦略上抑えられる可能性はある。

そのままズルズルと切り捨てられたら……最悪だ。

自力でS組に戻れるにしても、その間は苦渋の時間が始まる。教室で不死川に会えないなんて、今じゃ想像もつかないっていうのに。

多分だけど、戦役で僕の出番はある。

この学園のことだから、かなりの確率で『武力』のテーマが出てくる。

個人戦にせよ団体戦にせよ、僕がいて不利になるってことはない。

仮に打撃オンリーのルールでも、僕なら少しは戦えるし。

それしか出番がなさそうなのが、残念と言えば残念かなあ。

「そういつわけでみなさん、一生懸命頑張りましたよね」

……ホント、頑張らないとなあ。

第2章・1話目『嵐の前』（後書き）

ちよつと急ピツチですが、川神戦役を早めに書きたいので、サクサク進んでいきます。

2話目 『命(タマ)転がし』 (前書き)

榊原小雪が、わりと頑張ります。

2話目『命(タマ)転がし』

運動会だか体育祭だか忘れたけど。
あつという間に6月27日が来た。

ダルい挨拶の後に式が終わり、午前中の競技が次々消化されて。
今はもう、楽しい楽しい昼飯の時間だ。

結果からいえば、僕に限っては、午前中の競技は圧勝だった。
腕相撲(左腕の部)とか、僕に勝てる奴の方が少ないでしょ。
まあ、相手ついていても、ほとんど余りモノの蓮っ葉だったけど。
ガクトくと被らなかつたのは、とにかく良かったね。
砲丸投げも2位だったし、言うことナシだ。

ちなみにガクト君は、腕相撲(右腕の部)に出た。
ガクトくんのパワーなら、まあ、腕相撲に出とくのが無難だけどさ。
僕らにとっては幸いだけど、ガクトくんは2回戦で敗退した。
しかも、榊原に負けて。

腕相撲トーナメント開始前に入れ知恵しといてよかったよ、うん。



無邪気な榊原。

うん、ナイスブルマ。

体操服を押し上げるふくらみも素晴らしい。

それが、榊原の無邪気な態度と相まって、アンバランスな魅力が…

…。

……じゃなくて、僕は榊原の勝率を上げた。

男女混合じゃなきゃ思いつかなかったんだけどさ。

競技開始前に、僕と榊原は同じところに集まった。

グラウンドの中央にある、学生机を2つ並べただけのフィールド。

同じフィールドが4つ用意されており、そのいずれかで戦う。

そついった方式だった。

榊原は余裕でもあるのか、葵と井上に手を振ってる。

相撲部の連中とかが右の部に集中してるのに、よくもまあ。

なんか負けるとかわいそうだったから、ここで1つ助言をしておいたわけ。

「なあ、榊原」

「ん？　なあに？」

榊原の肩を、右手の人差指で軽く叩く。

すると『ん？』とか言いながら振り返る榊原。

年頃の女の子が弾みをつけながら振り返って、下から覗き込むように男を見るな。

たわわな胸がイイ感じに揺れて、上目使いも相まって。

僕の健全な男子高校生としての三大欲求の1つを刺激してやまない。

……よし、今日は帰ったら久々に色白巨乳モノで決めよう。

「男子と当たったら、手を握りながら『えへへ　おっきいんだね』とか言っとけ」

「え？　どうして？」

今にも『なんでなんで？』とか言いそうな顔。

だから、下から覗きこまないでください。

重力に身をまかせながらも、僅かに抗う胸とかが強調されていけません。

くっ……静まれ、僕の海綿体！

『えへへ　榊原って、胸、おっきいんだね』とか考えるな！

よし、家に帰ったら、何をおいてもまず色白巨乳学生モノで決めよう。

「それだけで相手は弱くなるから」

「そうなの？　よし、試してみるね！」

なんて言いながら、スキップして自分の机に向かう榊原。

一回戦の相手は相撲部の1年。

榊原とドギマギしながら手を握るところとか、青春だよなあ。

……あ、榊原が瞬殺した。

しかもあの1年、前屈みで退場していきやがった。

『わーい、勝ったー！』なんて子供じみた喜び方と、体の成長が合
ってない。

そんなに跳び回ると、ムッチリとした太ももが強調されます。

うん、家に帰ったら、まず最初に色白巨乳学生ブルマモノで決めよ
う。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

なんてことがあって。

結果、腕相撲（右腕の部）では、榊原が優勝した。

男子連中の、あの満ち足りた顔ときたら……。

負けたのに勝ったみたいないな顔しやがって。

まあ、どうあれ榊原が勝ったんだ。

余興とはいっても、イイ景気づけになったよね。

何か余計なりビドーとかも思い出したけど、気にしないでおう。

で、他の連中の勝負も、まあまあの結果だった。

井上は借り物競争で2位。
風間と当たったのが運のツキだったね。
これは仕方ないよ、うん。

不死川も徒競争で2位。

川神一子が相手なら仕方ない。

あの体力バカ相手じゃ、負けることもあるだろうね。

忍足が別枠で1位だった。

そりゃ、あの万能メイドならなあ。

メイド服で爆走する生徒とか、夢に出てきそう。

マルギツテも1位。

こっちは川神一子を下して1位をもぎ取った。

……人間って、800mを全力疾走できる生き物だったんだね。

仲村の1500m走は見えてない。

まあ、勝ったんじゃないかなあ。

九鬼と井上と仲村の出たリレーは1位。

そりゃ、学年でも指折りで速いもんなあ、こいつら。

スイスリレーは、まあ、最下位だったけど仕方ない。

始めから勝負捨てて、運動神経ない連中を集めたわけだし。

さて、午前中の全ての競技が終わったところで。
2 - Sの陣地に集まった連中は、今までに全く張りつめていた。
思い思いに弁当食ってんだけど、全体的にピリピリしてる。

そりゃそうだよなあ。

不死川を始め、なんと4割の生徒が2 - Fに負けてたっていうし。
徒競争で負けた奴なんか、鼻で笑われたらしい。

そりゃムカツクよ。

あんな基礎能力ザコの連中に負けた上に馬鹿にされたら。

というか、正直意外だ。

僕の周りしか見てなかったけど、まさかこんなに負けてたなんて。

何だかんだ言っても、Sクラスって運動神経のイイ奴がほとんどな
んだけど。

葵の計画じゃ午前中に大勝して、その勢いで戦役も戦うはずだった
のに。

負け方が悪いんだよなあ、負け方が。

1位を取れなかった競技に限って、ギリギリでFクラスに負けてる
ことが多い。

あからさま過ぎる結果のせいで、ふてくされる奴まで出てきたらし
い。

士気が下がるのだけは、どうにかして避けたいところだったんだけ
ど。

正直、僕も気合が乗りきらない。
せつかくの機会だつていうのに、不死川のブルマ姿が拝めないなんて。

去年も着物姿だったけどさ、今年も着物つていうのはなあ。

……ちよつと期待してたのに。

ちなみに、その不死川は不機嫌極まりない。

さつきから、苛立ちを隠さずにアワビを噛みちぎってる。

参加した競技が1つだけだったし、しかも川神に負けた。

ブルマで走つとけば勝ったかもしれないけど、後の祭りだし。言い訳すると余計に惨めだから、愚痴もこぼせないしね。

「まあ、アレだよ。戦役で思い知らせてやろうよ」

そうやって声をかけても、不死川は一言も返さない。

……キツツイなあ。

初めて不死川の食事に同席したくないと思ったわ。

平静装つておきながら、細かい所作にイライラが詰まってる。

箸を置くときに勢い、重箱の中身を掴む手首の力の入り方。

食べ物を咀嚼するときの顎の動きも、いつもより少し大きい。

これは、明らかに苛立ってる人間の反応だ。

僕はつていうと、管理人さん手製の弁当を食つてるとこ。

唐揚げと豚カツと、牛肉と野菜の炒め物と米が入ってる。

2段の重箱の底が米で、上に3種類のオカズがギッシリ詰まってた。

胃袋に溜まりそうだから、消化促進剤飲みながらじゃないと食えないけど。
管理人さんって『若いうちは肉食とけ、肉!』って人だもんなあ。
この辺の食生活の隔たり方は、小西さんにちよっと似てるかも。

「港」

「なあに?」

声がトゲトゲしい。

思わず『なんででしょうか』って言いそうになるけど、なんとか頑張れた。

ここで下手に敬語なんて使ったら、かえって不死川の気を荒立てかねない。

そう思っただけで、無駄だった。

「お前は勝ったからそんなことが言えるのじゃ!

もつと……芳しくなかつた奴のことも考えんか!」

久々に見たよ、不死川が睨んでる顔。

ちよつとゾクつとしてイイ感じだけど、それどころじゃない。

このまま不死川の機嫌が戻らないと、戦役に大きく影響する。

オールマイティな不死川のことだから、戦役に出る可能性は高い。

そうなったときにこのテンションだと、空回りしかねない。

「いや、本当に面目ない。配慮が足りなかった」

「本当に分かっておるのか!？」

やっぱダメか。

なに言ったところで難癖付けるつもりなんだなあ。

いや待て。

これは何というか。

……ご褒美だろ、実は。

つまりさ、これってさ。

不死川が僕に心を許してるからじゃないの？

苛立ちをぶつけても受け止めてくれる相手だって思ってくれてるんじゃない？

あ、そう思うとテンションあがってきた。

僕に文句を垂れるのも、そういうプレイだと思えばむしろ楽しい。

なるほど、不死川に攻められるっていうのもアリだよね。

最近是不死川の傲慢さを見る回数が減ってたから、すっかり忘れてた。

よし、任せろ不死川!

この僕が、徹底的にストレスのはけ口になってあげようじゃないか!

僕にたつぷり嫌味を言ったからかなあ。

不死川の機嫌は、元通りとは言わないけど戻りつつあった。テンションはまあまあ、冷静さも足りている。

あとは時間が経てば、少しずつ戦闘モードになるに違いない。ついでに僕のボルテージもMAXに到達。

今だったら、川神百代と闘えって言われても特攻できそう。

クラスのメンバーもなかなかの具合。

九鬼は燃えてるし、霧林もそれに続いている。

葵、井上、榊原の3人も、昼休みの内にテンションを戻したみたい。マルギツテは、2-Fの方で弁当食うなんて胆力をお持ちだから大丈夫。

まあ、主力メンバーがこの調子なら、なんとか勝負ができるよね。

問題は、相手が異様に調子が整っていることだ。

まさかとは思うけど、わざと負けた競技もあるんじゃないだろうか。負けることを前提にしているから、負けても気にならない。

初めから戦役に勝負をかけて、午前中の競技に臨んだんじゃないだろうか。

もしそうだとしたら、やっぱり直江を早い段階で潰すしかない。

「第1回戦のテーマは『運動神経』で、参加人数は4人じゃ！
2回戦は『可憐』で1人、3回戦は『美』で1人、
4回戦は『知力&遊び心』で1人、5回戦の『武力&知力』じゃ
が……。」

最終戦と言うことで、5人に参加してもらおう！
一度出た選手は他の競技に参加できんから、気を付けて選ぶんじ
やぞ」

なるほど。
参加人数も決められてるのか。
てつきり、1対1の戦いが5回あるもんだと思ってた。
僕も大概だよなあ。
もうちよっと人の話を聞くようにしなきゃ。

「全ての試合はクジ引きで決定する。
それぞれのテーマにそつた競技の書いてあるクジを引く。
試合の直前に、どの競技で雌雄を決するかを発表する。
じゃから、先の競技の内容を知ることとはできんようになっておる
わけじゃ」

ふむ。

つまり、勝ちを急ぐと不利になるってことか。

勝った時点で相手のクラスから1人引き抜けるって条件からして、後出しが有利。

最終的に3勝すれば、クラスメイトも取り返せて、相手のクラスからも1人奪える。

もちろん、序盤に主力を奪われるとキツイけど。

なんてことを考えてるうちに、ジジイがクジを引き始める。ごそごそともったいぶって、そんなに楽しみかなあ。

まあ、枯れたジジイじゃ他に娯楽もないんだろうね。

このジジイの尊敬すべきところなんか、ブルマ廃止しないところくらいだし。

「さて、一回戦は……お？　おお！　『命転がし』か！」

命タマを転がすとか、どういうネーミングだよ。

やっぱコイツら、頭のネジが溶けてんじゃないかなろうか。

まあ、聞いてみればルールは簡単。

メンバーである4人のうち1人が、強化プラスチック製の命タマの中に入る。

大きさは人間1人分くらいで、大柄の生徒にはそれ用があるらしい。それぞれ手足を固定できる場所があって、そこに手を突っ込んで体を固定。

残った3人が命タマを転がして、グラウンドのトラックを1周。先にゴールした方が勝利っていうルールだ。

あと、相手チームへの妨害も許可されてる。
ただし、相手の命^{タマ}への攻撃のみで、押してる連中への攻撃はNG。
一撃でも加えた時点で失格になるそうな。
故意かどうかの判定が難しいから、攻撃が当たれば即失格。
それと、妨害する際にトラックから出て失格。
こういうルールの取り決めは、結構しっかりしてるよなあ。

2・Sからは、榊原と仲村、他2人。
命^{タマ}の中身は仲村だ。

榊原が無理に押し込んでるけど、そんなことはどうでもいい。
せいぜい苦しめボケ。

2・Fからは、なんかでつかいのと他3人。

……あのでつかいの命^{タマ}に入るのか。

サイズのいっぱいいっぱいだけ……あ、入れた。
入ったはいいけど、あの命^{タマ}って転がるのかなあ。

ま、どうでもいいか。

どうせこの勝負、榊原が出た時点で負ける要素はないんだし。

戦略は決まってる。

榊原以外の2人が命を押し、榊原が相手を妨害する。

相手の命の中身は重量級。

重いつてことは動かし辛いつてことで、妨害も簡単じゃない。

でも、命の中がいくら重いつていても、たかだか人間の重量だ。

それに、重いつてことは、初動が遅くなるってことだ。

その分動きが鈍って、スタートが遅れる。

榊原の妨害がそこに加われれば、出だしから簡単に差がつく。

こっちは運動部のエースが揃ってるんだ。

まかり間違っても、相手の命より動きが遅いつてことはない。

それに、妨害役の榊原は2・Sでも屈指の身軽さを誇る生徒。

そんな榊原を相手に、2・Fの連中が上手く立ち回れるはずがない。

まずは景気付けに軽く1勝、つてところかなあ。

「はい、はい…」

ジジイの怒声を合図に、2つの命タマが動き出す。
やっぱり、出だしが早いのはコッチ。

命タマの重さとエンジンが違う。

榊原は……なるほど。

充分に引き離してから、単騎で攻撃仕掛けるつもりか。

幸いだっただのが、相手が妨害に来なかったこと。

相手の全員に妨害されたら、流石に面倒なことになる。

仲村がそんなに重くないから、あらぬところに転がされる可能性も高かった。

相手の命タマが重いのは、そういう考え方からか。

しかし、スピードで負けてるのに勝機があると考えるのは、策があるからだろうか。

仮に勝機があったとするなら、やっぱりスタート直後。

自陣の命タマには脇目も振らず、Sクラスタマの命を攻撃する。

で、可能な限り遠くにすっ飛ばしてから、こちらも進行する。

僕の頭じゃ、こんな作戦しか思いつかない。

相手のミスを誘おうにも、このルールじゃ押し手に攻撃を加える方が難しいし。

そもそも、まともに勝負すればコッチが勝てるんだから、妨害が来るなんて保証もない。

なんてことを思っている間にも、ぐんぐん差が開いていく。

相手が慌ただしく命タマを転がしている姿は、ちよつと滑稽。

でも、何かあるんだよなあ。

あのクソ重たそうな奴が中身ってことは、絶対に何かある。

相手がコースの半分に到達する頃に、30m近くの差がついた。ここでようやく、榊原が反転して駆け出す。

改めてみると、むちゃくちゃ速いよなあ、榊原。

『きゃっほーい！』とか笑いながら突っ込んでく姿は、軽いホラーかも。

しかし、あの胸の揺れには僕も肯定的な態度を取らざるを得ない。

「え〜い！」

榊原が、勢いを付けて大きく跳躍。

うわ……すっげえ跳んでる。

そのまま命に飛び蹴りを入れ……て、ない？

あ……ありのまま、今、起こった事を話そう。

『榊原が相手の命を蹴ったと思ったら、いつの間にか押し手を蹴っていた』

な、なんでこんなことになったか理解できないけど、僕にも理解できない。

頭がどうにかなりそうだ……。

榊原が目測を誤ったとか、そんなチャチなもんじゃ断じてない。

あのバカ、ルールちゃんと聞いてなかったな！

思いつきり、相手の押し手を狙ってキレイな飛び横蹴りをかましてくれやがった。

命^{タマ}飛び越えて、命^{タマ}の後ろの相手に蹴りくねるとか器用なマネを。しかも、こっちのゴール前にヒットしたから反則負け。

……何してくれてやがるんだよ、ボケ。

仲村が酔ってダウンしてても、全っ然笑えねえよ！

しかし、よく見れば面白いことになってる。

蹴られてない2人のうちの1人が、命^{タマ}の上へばりついてた。で、命^{タマ}の転がる勢いに任せて、命^{タマ}の上から正面に滑り落ちる。これはつまり、榊原の攻撃を食らうつもりだったってことだ。

転がっている命^{タマ}に横から攻撃を加えるのは、ルール上不可能に近い。だから、わざと命^{タマ}へばりつかせて、攻撃を食らうつもりだったんだろ。

その策は見事に空振りしたんだけど……。

「Sクラスの反則により、勝者、Fクラス！」

ああ……出だし最悪だ。

割れんばかりの歓声が耳触りだしさあ。

……しかし不味いな。

序盤だし、司令塔の葵が指名される可能性が高い。

こうなると面倒だ。
特に打ち合わせをしたわけでもないから、実はここからの作戦がない。

2回戦のテーマが可憐。

どういう競技かは分からないけど、厳しい戦いになりそうだ。
でも、なんとかここで勝っておかないと、これからはもっと厳しいクソが。

僕に葵くらいの狡猾さがあれば……。

どうやら、指名する相手は決まったらしい。

不死川だと困るけど、葵でも困る。

できれば、榊原か井上あたりを指名してくれないだろうか。

マルギツテなんかは最後に使うだろうから、今指名されても取り返せばいい。

とにかく、不死川と葵だけは避けて欲しいところ。

マイクを握ったのは……直江か。

コイツが出てきたってことは、やっぱり葵か。

仕方ない。

腹あ括つて、次の勝負で力チ上げてやんよ！

Sクラス舐めんじゃねえぞ！

葵1人いなくても、これくらい盛り返してやる！

「みなと港 みちじろ三千尋を指名します」

.....
.....
.....
.....
え？

2話目『命(タマ)転がし』(後書き)

尻切れトンボな感じですが、2話目終了です。

3 話目 『みなとハード 〜Dark Deep Fantasy〜』 (前書き)

タイトルから察しがついた方は、速やかに挙手してください。

3話目 『みなとハード』 Dark Deep Fantasy

おい、ちょっと待て。
頼むから、ちょっと考えさせてくれ。

聞き間違いじゃないのは確かだけど、なんで僕が指名されたんだ？
顔も別段イイわけじゃないし、特別仲のいい相手もない。
僕のことを好きだって女子がいるわけでもなしで、利点が全くない
のに。

仮に僕を封じるにしても、4回戦辺りでやらなきゃ意味がない。

『可憐』も『美』も『遊び心』も、僕からは程遠いテーマだから。

それはガクトくんが知ってるはずだし、由紀江ちゃん伝いで直江も
知ってるはず。

なのに、どうして僕を狙ったんだろうか……。

「意外ですね。まさか、港くんから狙われるなんて」

飄々とした様子で、僕の後ろに立っていた葵が呟く。

声だけは意外そうだけど、全然焦ってる雰囲気がない。

これはどういう意味合いのことだろうか。

僕がいなくなっても構わないという意味か、これくらいは想定の内
囲内ということか。

とにかく、落ち着き過ぎちゃいないか？

なんとなか、ちよいとムカツク。

「葵。もっと深刻そうな顔してくれんか」

「そうは言われなくても……正直、あなたを取り返そうか悩んでいますので」

ハッキリ言うよなあ、コイツ。

でも、別に仲良くもないにしても、仲が悪かったわけでもなかったはずだ。

お互い接触は最低限だったし、特に僕と葵の間にイベントはなかった。

だから、僕は葵にとって『ただのクラスメイト』だったはずなんだけど……

この葵の目は、いったい何なんだろうか。

ゴキブリを見る目ってどうか、不審者を見るみたいな目で見やがって。

いったい、どういづ了見で……

「『えへへ おっきいんだね』でしたっけ？」

「すみません、僕が悪かったです」

しまった。

榊原に口止めしとくのを忘れてた。

いや、そうじゃない。

わざわざ言わないと思って、気付いたけど黙ってたんだ。

それがまさか、こんなに早く響いてくるとは。

「ユキに妙な言葉を教えて、どうするつもりだったんでしょうか？」
どうするも何も……僕なりに勝率上げようと思ったんだけど。
有無を言わさない迫力が、葵の瞳に籠っている。
そのせいで、反論するための間を外された。
まあ、伊達に大病院の息子やってるわけじゃないらしいね。
この胆力は尊敬に値するよ。
これで鍛え込んでりゃ、もっと株も上がるんだけどさ。

「……なんて、冗談ですよ」

ふっ、と緊迫した空気が緩む。
それに合わせてか、葵はいつの間にか笑顔になっていた。
あの、人を食ったような薄い笑み。
ああ、すっかり忘れてた。
こいつのこういう笑い方が好きじゃねえんだった。

「貴方は大切なクラスメイトです。必ず助け出します」

『ユキの不始末は私の不始末ですからね』なんてカッコつけやがって。

……だから好きになれねえんだよなあ。
こついう、スカした態度っていうんだろうか。
僕の嫌いなタイプだから、そのせいで無条件に好きになれない。
もうちょっと、なんとか融通が利くように努力しないとなあ。

「ごめんよ。ボクがちゃんとルール聞いてればよかったよ」

ホントそうだよ、榊原。

僕の肩を掴んで『反省！』ってやっても許さんぞ。

確かに反省してるっぽい表情だけど、事が事だしね。

許して欲しかったら、胸を押しつつ手で身長差を計れ。

でもって『あ……こんなにおっきくなっちゃったんだ』って思わせぶりなセリフを吐け。

十年來の幼馴染との身長差を気にしつつも、性には無頓着な態度を見せてみる。

もし最終的に2・Fに残留になったら、それくらいしないと許さないぞ。

「すまないと思うが、ユキを責めないでやってくれ」

「今さら責めてもどうにもならんでしょう。それよか、2・Sに早く戻らせてくれよ」

井上まで頭を下げる始末だ。

ここまで言われると、なんかコツチが悪いことしてるみたいだ。

やっぱ、ハゲだと人徳とか変わってくるんだろうか。

片手で拝む姿とか、出来そこないの坊主みたい。

まあ、その坊主に免じて、無事に帰って来れたら許してやろう。

「フハハハハハ！ 災難だったな、庶民B！」

馬鹿みたいに元気よく挨拶。

例え相手が落ち込んでいるかもしれないときでも、コイツのテンションは変わらない。

名前も覚ええないような有象無象のことを気にするほど、コイツの器は小さくない。

コイツ……九鬼英雄は、腕を組んで僕にねぎらいの言葉をかける。

今日は不死川が庶民Aだったもんなあ。

ていうか、不死川を庶民扱いできるコイツの神経が知れん。

「まあ、災難は災難だけだね。なんとかしてくれるんでしょ？」

「もちろんだ。2・S一同、貴様を取り戻すために尽力してやる」

まあ、コイツがいうなら間違いない。

忍足も動くだろうから、これで一安心。

第2と第3が『可憐』と『美』だから、どう攻略するのか見ものだね。

普段の2・Sの女子じゃ、どっちも2・Fの一部生徒に完敗してるんだもん。

で、気の利いた奴が、僕にあらかた声を掛けられたところで。

渋い顔をしてる不死川を発見した僕は、コツチから声をかける。

あんまり沈んだままだと、僕も嬉しくないしさ。

だからまあ、ちょっとくらいは見栄を張ってみたくなるわけだ。

「頼んだよ、不死川」

何を、とは言わない。

何を、とは聞かない。

そんなことは分かりきっているから、確認する必要もない。
なら、どうして不死川に確認を求めたのか？

それは簡単。

僕が不死川に求めた確認は、何をすべきかじゃない。
覚悟をすべきだと確認したんだから。

「頼まれたのじゃ！」

グツと右手でガッツポーズ。

うん、これだけのテンションを、プラスの精神状態で維持できてれば大丈夫。

次の2戦のどちらかが不死川なら、必ず勝てる。

……ってことにしておかないと、歯切れも悪いしね。

「もし此方が出るようなことになれば、全力でお前を取り戻す！」

嬉しいこといってくれるじゃないの。

今日ばかりは、いつもみたいにフラつきはしないぞ。

不死川が真剣に言ってくれたんだ。

僕も真剣に、苦渋と屈辱の時間に耐えるだけだ。

「ようこそ、2-Fへ！」

意外にも歓迎ムードだった。

なんか特等席みたいなパイプ椅子があって、『まあまあ』とか言っ
て座らされて。

あれよあれよと、僕はイスの上に収まって、女子たちから休止を受
けている。

なんていうか、これは予想外だった。

「はい、くず餅でもどうぞ」

「ああ、これはどうも……」

小笠原か。

あの菓子屋の娘さんの。

あそこの大福が好きで買いに行ったりしてたんだけど。

まさか、くず餅をこんなところで食えるとは思わなかった。

なにはともあれ、キレイどころの娘さんから皿と楊枝を渡して貰って悪い気はしない。

「いなりもどうだ？ 私のおやつでよければ分けてやるぞ！」

なんていうのは、転校生のクリスティアーネ。

やったら人懐っこそうだけど、こういう人間だったのか。

マルギツテが溺愛してるっていうから、もっと軍人氣質だと思ってた。

まあ、金髪の美人を間近で見るとのは初めてのことで。

へえ、としか思わなかったけど、キレイだって感想も浮かんできた。

「あのさ、なんか歓迎ムードが過ぎない？ まだ移籍が決まったわけじゃないんだけど」

「考え過ぎですよ！ 少なくとも今この瞬間は、貴方は私たちのクラスメイトです！」

小さい体をいっぱい使って、2・Fの委員長……甘粕が言い放つ。意外と大きい声にビックリしたけど、思いは確かに伝わってきた。

なるほど、この押しの強さは、女性として魅力的かもしれない。

井上みたいに、小さいから可愛いつていう風には思わない。

でも、魅力的な女性であることには変わりないんじゃないか、と思う。

しかし、くず餅だけどさあ。

全然噛みきれないんだけど、どういうことだろうか？

なんか、ゴムとかタオル噛んでるみたいな歯触りだし。

噛んでも噛んでも歯が通らないし、甘みが舌に伝わってこない。

オマケに、1回皿の上に置こうと思っても、くず餅が口から離れない。

妙だ。

今さらだけど、この状況そのものが妙だ。

僕は2-Fに嫌がらせをしたことがないけど、だからって好意的に接してくれるか？

仮に僕じゃなくて井上なら、こういうこともあるかも知れ……いや、あり得ない。

井上だったとしても、こんな厚遇のされ方はしないはずだ。

穏健派って主張してたあいつでさえ、2-Fじゃ邪険にされてるらしいのに。

なのに、2-Fの連中からすれば、ただのSクラスの生徒で。

風間とガクトくんを倒したことがある僕に、ここまでよくしてくれるもんだらうか？

と、手を後ろに組んだ川神が、僕を覗き込むように見ていた。

なんか、腕相撲の時の榊原みたいなポーズだ。

マネしてるんだとしたら、残念なことこの上ない。

何が足りないって、プロポーションが致命的に足りてない。

これじゃあ、いくらマネしても似ても似つかないよ、うん。

「あ！　なんか妙だって疑ってるでしょ！」

そりゃまあ、ねえ。

って言おうとしたのに、くず餅のせいで口が利けない。
モゴモゴと口と歯が動くばかり。

そうなのに、川神は納得したかのようにうなずく。

まさか、今ので分かったの？

……いや、そんなまさかだ。

読唇術をやるうにも、唇が開きっぱなし。

なんでか両腕も動かないし……僕の身に何が起きてるんだ？

「うんうん。いいのよ、疑っても」

なんて言いながら、川神は弛緩した顔つきに。
食堂で直江に飯分けてもらった時と同じ顔だ。
なんで今、こういう表情するんだ？

「だってこれ、夢だから」

「むうううづづづううううー!!?」

「いったい何があったんだ!?

右腕、左腕、右脚、左脚。

どれ1つとして四肢が動かない上に、口も動かない。

舌と唇を動かすと、どうやら猿ぐつわを咬まされている。

クソ、マジで何があったんだよ!

とりあえずガチャガチャと暴れてみる。

音と手首足首の感触からするに、皮の手枷に鎖が付いている。

しかも、鎖は太つとい奴で、無理に引きはがすのも無理っぽい。

腰が固定されてないから、全く動けないわけじゃないんだけどさあ。とにかく屈辱的な体勢に変わりはない。

「おい、よつやくお目覚めだぜ!」

童帝様!?

なんで童帝様が……って、2-Fだったか。

いや、問題はそこじゃない。
どうして僕がこんな風に拘束されてるか、そこが重要なんだ。

「お？ 案外早いな」

「だから言ったじゃねえか、コイツすっげえタフだって」

童帝様の声に誘われて、次々と男子が集まる。

風間に、ガクトくんは、命^{タマ}転がしの時のデカイの。

それに加えて、源と、師岡くん……他たくさん。

ほとんどの連中が、僕をちらっと見ただけで視線をそらす。

いや、僕に興味がないのは結構だけど、現状把握がまったくできない。

混乱してあちこちに視線を巡らす僕の猿ぐつわを、ガクトくんが外してくれた。

もちろん、すぐに抗議させてもらうさ。

いつの間に僕が拘束されてるのかとか、主にその辺のことを含めて。

まず、先に大きく一息。

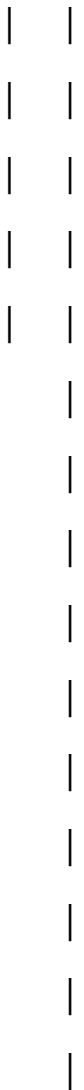
猿ぐつわのせいで、想像より息苦しい目に遭ってたからね。

で、息を吸い終わったら、吸った空気を言葉と一緒に吐き出した。

「どづいつことが説明してもらおうか」

「どづいつもどづいつも、捕虜にはふさわしい扱いだろ？」

意地の悪い笑みを漏らすガクトくん。
その顔を見て、少しずつ僕の記憶が……。



そうだ。

僕は、堂々とグラウンドを横断させられて、2・Fの陣地に行つて。そこで、先頭に立っていたガクトくんが、チカラこぶを作りながら声をかけてきて。

「よく来たな。歓迎するぜ」

「そりゃ、ど」

『どうも』を言いきる前に、腹を打たれた。
ガクトくんの拳が、僕の腹に叩きこまれてた。
咄嗟に腹筋を固めたけど……油断してたんだよ。
衝撃が内臓に響いて、少しばかり体が前傾になって。
その隙に、ガクトくん羽交い締めになされて……。

そう、ここからだ。

2-Fの男子一同による、壮絶なリンチが始まった。

っていうと言い過ぎか。

何か知らないけど、効かない攻撃を何十発も食らった。

風間や童帝様はともかく、源まで攻撃に参加してたんだ。

直江以外の全員の蹴りと拳を見舞われたんじゃないか。

それくらいの人数から、代わる代わる攻撃されただけ……。

僕は、物理的には抵抗しなかった。

相手に心底の敵意がないのは分かってたし。

何より、恐らくこれも策の一環に違いないんだ。

下手にコイツらを怪我させたりしたら、僕が退場になりかねない。

そう思って、口だけの抵抗にしておいたんだよなあ。

それに、下手に抵抗すると、僕以降の捕虜が酷い目に遭うかもしれない。なかつたわけだし。

だから、心を込めて、頭に浮かんだ口汚い言葉で罵った。

「Fuck you！」

羽交い締めになれながらも、精いっぱい抵抗。

それをあざ笑うかのように、今度は風間と誰かが僕の腕を後ろから抱える。

そうやってフリーになったガクト君が、あからさまなボディブローを放つ。

『いくぞ、いくぞ！』と、見せびらかすように振りかぶる。

でもって、大袈裟な呼び動作の割に、当たった瞬間に引いてる感じで。

なんかこう、プロレスっぽい殴り方だった。

そんな風に、2発3発と殴られて。

なぜか頬を軽くはたかれたりしながら、X字の拘束具に固定された。

で、そこからまた暴行が始まった。

効いてるかどうかもよくわからんようなエルボードロップ。

精神的なダメージ優先な平手打ち。

そんなよくわからん暴行が続く中で、男子たちが突然下がる。

あ、ここで猿ぐつわ咬まされたんだっけか。

代わりに、今度は2人の女子が寄ってきた。

1人は、クソ汚ねえ肌をして。

あゝ……ヤマンバだ。

2・Fのヤマンバが、どういうわけか僕の前に出てきて。

菓子屋の娘の小笠原も、ヤマンバについて来ていた。

どっちも、僕を値踏みするみたいな視線で見る。

ねちっこい、僕の攻撃並みにねちっこい視線だ。

そんな視線が体を2往復したあたりで、ヤマンバがニヤリと笑って

……。

「んだよ、よく見ればまあまあイイ男じゃね？」

「うーん、あと1歩ってとこかなあ。あと二重で目がもつちよつと大きければ……」

「チカリン見る目なくね？ ほら、コイツの腹とか見てみ？」

唐突に体操服の上をめくられて……。

負荷かけつつも形が崩れないように作り上げた腹筋が、白日の下にさらされる。

しかも、白日だけじゃなくて、例の2人の視線にもさらされて。

「うわ、キツチリ割れてるわね」

「ほれ、いったべ。まあまあイイ体してるって」

「さっきは『イイ男』だったじゃない」

「バカ。イイ男ってのはイイ体してるもんだっつーの」

ジュルリ、と舌舐めずりをするヤマンバ。

そうだ、ここで僕の背中にかつてない怖気が走って。

僕の意味と関係なく、体中が震え始めて。

目を閉じたくて仕方ないのに、瞬き一つもままならなくて。

「ちよつとくらいなら、味見してもOKみたいな？」

僕は意識を手放した。

| |
| |
| |
| |

「覚えてないのか？　ウチのクラスの羽黒が」

「分かったもういい黙ってくださいお願いしますから！」

うわぁ……。

なんか体中から変な汗出てきた。

毛穴の奥からこう、じくじくっって感じが。

しかも、呼吸が整わない。

よし、落ち着けよ。

落ち着いて状況を分析するんだ。

ズボンを脱がされた形跡もないし、特に股間に異常もない。

視線をずらして時計を見ると、僕が移動する前から10分しか経ってない。

時間から考えて、何もされてないと思いたいけど。
気を失う前の光景を思い出さずだけで、脂汗が止まらない。
なんでこのクラスの連中は生物兵器と一緒に生活できるんだ……！

「とにかく、お前にはSクラスから声が掛るまで捕虜をやってもら
うことになった」

その『とにかく』の間に何があったのか知らないけど、そういうこ
とらしい。

僕は2-Fのクラスメイトじゃなくて、捕虜の扱いだそうだと
とりあえず、ほんのり柔らかくて素晴らしかった夢を返せ。

「捕虜つていっても、手荒いマネはしないから安心しろ」

「このクラスの連中とは『手荒い』の定義から話し合う必要がある
そうだね」

どこの世界の定義なら、SM用のX字の十字架に張り付けるのが手
荒くないんだよ。

恐怖のあまり気を失うようなマネは、ジュネーブ条約でも禁止すべ
きだ。

……いや、多分禁止されてるよなあ。

まあ、とにかく話を戻そう。

ガクトくんが言うには、第1試合で勝った場合に引きぬく生徒の選
抜から始めたとか。

- 1：川神戦役の戦力として数えられる
- 2：比較的目立っている
- 3：その人物が捕まることが、相手を奮起させることにつながりにくい
- 4：こちらが『少し手荒な歓迎』をしても、罪悪感が芽生えない。

以上の点に合致したのが、僕だったそう。

次点の不死川は、暴行を加えるとイメージが落ちそうだって理由で却下されたらしい。

これは喜ぶべきなんだろうか。

まあ、不死川が犠牲にならなかったから良しとしよう。

ああ、それで、なんで手荒い歓迎したかっていうと。

2-Sの連中がミスする可能性を上げるためだそう。

もし負けたら、最初の1人と同じような目に遭わされる。

そういう余計なプレッシャーから生じるミスが狙いらしい。

だからって、源まで参加することはないだろうに……。

まあ、とにかく。

納得いかないことが重なりまくって、本当に納得いかないんだけど。

こうして僕は、元クラスメイトが助けてくれるまでの間。

半ば見世物に近い形で扱われることが決定した。

え、ついにやってしまいましたPart2です。

果たして港くんは、無事に生還できるのでしょうか？

……性的な意味で。

ところで、マジコISSを書かれている兵隊さんのところで、20万Hit云々の話を目にしました。

PVつてなあに？ って感じでしたが、アクセス解析から見れるんですね。

全然知らなかったんで、私も20万Hitしててプチビックリでした。

というわけで、兵隊さんにあやかり、私も何か20万Hit記念をやってみたいと思います。

何か案や希望がある場合は、ぜひ教えていただきたいです。

……私の筆力でどこまで書けるかはわかりませんが。

4話目『可憐』？』

捕虜だつていう自分の立場は、よく分かった。

元クラスメイトに見えるような位置にいるのも仕方がない。手足を拘束されて、自由を奪うつてのは当然の措置だし。

うるさいからって猿ぐつわを咬まされてるのも、まあ、妥協しようじゃないか。

この蒸し暑い中、水分補給を全くしてない。

それに、汗を拭けないからヌルヌルして気持ち悪い。

捕虜って言ったんだから、衛生面くらいは改善して欲しいもんだ。炎天下の下、太陽光を体いっぱい浴びて……熱中症になりそう。

多分、これも作戦の内なんだろうなあ。

僕を弱らせておいて、葵が使える駒を減らそうってか。

僕が動けないなら、それはそれでやりようはあると思うんだけどね。井上とマルギツテと、不死川と忍足と九鬼。

文武両道ってメンバーなら僕を除いても6人はいる。

頭脳だけに偏つてもいいなら、あと5、6人は工面が付くだろうさ。

まあ、考えても仕方がない。

僕は今、身動きどころか言葉も発せないんだし。

試合の様子でも見て、少しでも気を紛らわすことにしようか。

一応、今は2・Fの懐にいるわけだし。

目ぼしい人間のピックアップでもしてよ〜っと。

とりあえず目に着く奴は。

源、直江、ガクトくん、風間、川神、クリステイアーネ、椎名の7人。

師岡くんは、個人的に世話になったこともあるけど戦力外。

つまり、あと4種目8人枠のうち、7人が手ごわい相手になる。

可憐、美、遊び心つてのは配分が難しそう。

むしろ、最終戦の知力と武力から考えた方がいいか。

源は、種目にもよるけどオールラウンダーだね。

親不孝通りで喧嘩してるの見ただけど、パワーもそこそこ、スピードもある。

テクニクは、まあ、格闘技やってる連中とは別系統に優れてる。

喧嘩したら、ガクトくんが負けるかも知れんね。

直江は知力に偏ってる。

運動神経も悪いわけじゃないけど、常人並みか若干上くらい。

殴り合ったら10秒で倒せるだろうけど、直江の真価はそこじゃない。

アイツのことだから、僕に殴らせることさえさせなさそう。

ガクトくんは、言うまでもなく筋肉一辺倒。

喧嘩は、まあ、まかり間違っても弱くはないだろうなあ。

あの身長に、あれだけ鍛えられた筋肉を搭載してれば、間違いなく弱くはない。

馬鹿でマヌケなとこさえ考えなければ、根性もあって非常によろし

い。

風間は、武力とか知力とかそういうのとは別の場所にいる。体のバネが体操選手並みに強いし、バランス感覚も桁違い。考えるよりも本能で行動するのはガクトくんっぽいけど、結果に大きな差異がある。

野生の勘みたいなもの考えたら、きっとこの中の誰よりも優れている。

川神も似たようなもんだろうか。

行動は理性よりも本能優先で、考えるより先に体が動く。でも、行動原理には確かな理由があって、無謀な突進だけはしない。こつ言っちゃ悪いけど、半端に智能付けた猪が人間の姿を取ったみたい。

クリステイアーネの凄さは、その転校初日に見てる。

見たのは戦闘だけだけど、切り返しや反応速度が川神の2歩以上先にいる。

マルギツテが自慢するくらいだから、頭も悪くないだろうし。

こつちは、自分が猪だってわかって突っ込んでくる猪だから、結構やり辛そう。

椎名は、正直よくわからん。

行動原理からして想像がつかんけど、運動神経も頭脳も抜群。

弓兵だから近接戦闘が苦手、なんて先入観が役に立つかどうか。

なんてこと考えても、風間ファミリーの一員なんだから、要警戒ってのは変わらないけど。

つまり、バランスを考えると。

源、クリステイアーネ、椎名は間違いなさそう。
司令塔の直江も入ってくるとして、あとは風間か川神、ガクトくん
のいずれか。

あと3種目で誰かが欠けることもあるだろうし、意外な伏兵も考え
られる。

まあ、考えても無駄ってことだね。

無駄なのに考えたのは……頭がやられてきてるからだよなあ。

あつついもんなあ、ホント。

肌がジリジリしてきたし、照り返しがキツツイし。

あゝ……水が飲んでえ、汗拭きてえ、影に入りてえ、体冷やしてえ。
もう結構厳しいけど、なんとか気を逸らさないよ。

なんて考えてると、視界の隅で学園長がクジ箱に手を突っ込んで。
グルグル掻き回して、勢いよく手を引つ張り出す。
と見せかけて実はフェイントで、またグルグルと掻き回す。
肌黒いコメンテーターじゃないんだから、タメてんじゃねえよジジ
イが。

「第2種目は……むう！」『萌え萌えシチュエーション対決』じゃ！」

やっぱり脳ミソ沸いてんじゃねえか、このジジイ。
んなことでいちいち目え見開くな。

しかも、競技名から何するかが全く分かん。

学校側も、クジに混ぜて問題ない種目かどうくらい調べとけ。

「参加者は女子1名、パートナーの男子を1人。

観客が萌えるシチュエーションを、パートナーと一緒に演じてもらおう！」

萌えるシチュエーションか。

僕だったら……膝枕だろうなあ。

目覚めたら膝枕されてて、僕の寝顔を覗きこんでいた不死川と目が合う。

で、不死川はいきなり恥ずかしさに襲われて、でも僕から目が離せなくて。

しかも、膝枕してるってことを今さら思い出したりして。

『べっ、別に他意はない！ きまぐれじゃ！』なんて言ったりしてさ。

でも、膝枕を続けてくれるんだよ。

そんなシチュエーションが巡ってきたら、それだけで死んでもいいかも。

「シチュエーションは自由！ 道具も、揃えられる範囲なら何を使用してもよい。

ただし、シチュエーションを考えるための時間は1時間。

持ち時間は各自3分以内とし、それを超えた場合には自動的に敗北とする。

ちなみに、パートナーの男子は参加者に数えられんから、奮って参加するんじゃないぞ！」

へえ、2 - Sからは誰が出るんだろ。

シチュエーションって言うからには、もしかしたら不死川が……。いや、不死川が出たら困る。

僕がパートナーじゃないのに、不死川が萌え萌えシチュエーションだなんて。

仕方ないか。

ここは1つ、井上に期待しよう。

井上は、僕の気持ちを知ってるわけだしね。

聡いアイツのことだから、どうにかしてくれる……。はず。

まあ、疑っても仕方ないし、2 - Fの観察でもしようか。

コイツと言ひ、デカイのと言ひ、直江と言ひ。

『優秀』じゃなくて、個性的な連中が集まつてる。

そんなもつて、その個性的な長所で、優秀なSクラスを上回るんだろつか。

…… 1回戦の負けは、どう考えても榊原の不始末だけだね。

「可憐つて言つたらアタイだろ？」

静かにしてろヤマンバ。

人間似の動物が、人間の言葉に聞こえる音を出すな。

耳触りだから、声帯っぽい器官を動かすんじゃない。

もしヤマンバが人間で意味のある言葉を発していたとしたら。

それは、僕とヤマンバの間で『可憐』の定義が違つてるつてことだ。

まあ、分かり合いたいと思わんよ、うん。

「いや、羽黒には悪いが、むしろ自分の方が適任だ」

「ここは1つ、1番のお姉さんである私が出るべきです！」

「うん……私は次の『美』でいいか。『可憐』つていうのはイメージじゃないし」

ガヤガヤと女の塊ができる。

やれ『私の方がイイ』だの、やれ『アイツはアレがダメ』だの。

除毛をキチンとしてる私の方が可憐とか、もうその発言が可憐じゃねえつて。

というか、相手を貶めてまで残ろうとする奴が可憐なもんか。

もし猿ぐつわを咬まされてなくて、話のできる奴が相手なら言うてやりたい。

可憐ってのは、例えば由紀江ちゃんみたいな子のことだ。

おしとやかで控えめで、相手を立てることを知ってて気立てもイイ。お袋の実家で掃除の手伝いをしてる際に偶然見つけたエロ本を。

そう、エロ本を、顔を赤らめて周囲を気にしながら眺めてたのはイイ思い出。

なんか話がズレたけど、とにかく、そういうのが『可憐』って言うんだ。

おしとやか、控えめ、恥じらいの3つを兼ね備えた、三位一体の存在。

高貴、貧乳が加われば『大和撫子』へとランクアップ。

可憐の究極系が大和撫子なら、お前らが『可憐』だって道理はない！

438

「大和。私に任せて」

直江の近くで、ボソツと呟くのは弓道部の椎名。

ナイスブルマだけど……榊原には負けるな。

『ナイスブルマ×無邪気×巨乳』破壊力』

これが宇宙の摂理である限り、椎名は榊原に勝てない。

まあ、もう榊原は出れないんだけどさ。

榊原が1回戦で消費されたことが、ますます悔やまれるね。

あ、でも『貧乳×スク水×恥じらい』貫通力』も鉄板だよなあ。

「大和。私、どんなことでもするから。その代わり結婚して」

「どんなことでもするっていうのはありがたいけど、結婚はお断りです」

あゝ……このノリが普通なんだろうなあ。

直江の奴、平然と返してんだもん。

僕が同じこと不死川に言われたら、間違いなく狂喜乱舞するね。

不死川の両親を口説き落とすセリフから考え始めないとなあ。

嫁入りさせようにも、今の不死川の代には1人しか世継ぎがいないんだもん。

僕が婿入りするって形じゃないと、色々難しいだろうね。

「ダメ。せめて今夜は一緒に寝てもらおうよ」

腕に胸を押しあてながら懇願、か。

椎名め、なかなか男のツボってのを心得てるようだね。

直江との身長差を利用して、上目遣いで言ってるのも高得点。

コイツとだったら、イイ川神水が飲めそうだよ。

飲めそうだけど……普段から身近にいて欲しくないなあ。

「京。俺の言葉には『はい』だろ？」

「……はい」

しかも、直江の返しも堂に入ってる。

椎名の扱いを知り尽くしたかのような返答。

どう見ても理不尽なんだけど、椎名も命令されて嬉しそうだし。あ、でも腕は放さないんだね。

しかし、そんなこんなで軍師様の膝元で話が丸まってきたのに。女子は1番の可憐を醜く競い合って、男子も同じような話をしてる。たった1つの競技の参加者を極めるだけで、ここまで乱れるモンだろうか？

「直江。シチュエーションなら俺に任せろ」

「え？ スグルが考えるの？」

師岡くんと、さっきの二次元メガネか。

あの笑みは何なんだろ。

まさか、自分の頭の中で既にシチュエーションが出来上がってるのかなあ。

で、脳内で再生して思わずニヤけてるってこと？
だとしたら、すっげえ気持ち悪いよなあ、コイツ。

「任せろ。ありとあらゆるギャルゲーをやり尽くしたんだ。

本来は二次元じゃ及びもつかない、理想の『可憐』を演じさせてやる」

もうヤダこの連中。

2-Sがこんなんに負けて、僕がこんな風になってるだなんて。

あゝ、もう何も考えたくない。

「おい、大丈夫か？」

ポーンとしてただけど、暑さでダレてると思ったのかなあ。
源が、僕の頭に濡れタオルを引っ掛けてくれて。
オマケに、ペットボトルの口にストロー差したのを口元に寄せてくれた。

ついでに猿ぐつわも外してくれて、ちよつと楽になったかも。

まあ、礼を言うのが先かもだけど、今は水が最優先。

これでもかかってくらい勢いよく水を吸い込んで、喉から胃に流し込む。

……うん、冷え過ぎてなくて飲みやすい。

飲むだけ飲んで、ふう、と一息。

500mlの半分以上を一気に飲んだわけか。

まだちよつと喉渴いてるけど、どうにか少しは寿命が延びたね。

さあ、源に礼を言おうかって思ったんだけど。

「勘違いすんじゃないぞ。お前に倒れられると後味悪いだけだ」
なんて、機先を制された。
まあ、どっちにしても助かったんだけどね。
だから、礼の1つくらいは言い切るさ。

「いや、本当に感謝するよ。危うく熱中症やるところだったもん」
「ヤバそうになったら言えよ。ついでだから猿ぐつわも外したままにしといてやる」

お節介焼きだなあ、源って。
どうでもいいけど。

まあ、機会があったら借りを返さないこともない。
……って作戦なのかもしれない。
借りを返すのは、僕がもうちょっと目標に近づいてからでいいか。

しかし、あと40分か。
まだ日は高いし、時間もかかる。
僕の出番はまだ遠いんだし、少しでも集中力温存しとこうか。

4話目『可憐』?』（後書き）

次回、Sクラスの側の話になります。

萌え萌えシチュエーション対決に誰が抜擢されるのか？

その辺に是非ご期待ください。

幕間『ハゲの上にも3年』(前書き)

井上視点の短めの話です。

幕間『ハゲの上にも3年』

とりあえず、港に合掌。

まさか、あんな風に張り付けにされるとは思わなかった。
さすがF組、俺の予想の斜め上を突っ走る。

それはさておき、どうすっかな。

俺としては、別に港は嫌いじゃないから助けてやりたいんだが。

それとは別に、この勝負、不死川だけは使っちゃいけねえ。

そしたら……俺は港に殺されるかも知れん。

いや、本当に殺されるかどうかは別として、殺しに来るだろ。

アイツ、ヒト1人くらいなら殺しても揉み消しそうだし。

「さて、どうしましょうか？ ユキが出ればよかったですか」

さつき出ちゃったもんな。

こんな競技が来ることが分かってりゃ、ユキを温存しといたんだが
……。

残った連中でどうにか戦い抜くしかねえか。

「ネーミングはアレじゃが、可憐なら此方が……」

なんてことを考えてるうちに不穏な会話！

何やってんだよ、この！

お前が出たらイロイロ終わるんだよ！

……っか、何気にヤル気だな。

ま、友達少ねえからな、不死川は。

これだけ思われてると、逆に港が可哀そうに思えてくるぜ。

お互い憎からず思ってるのに、大事なところが擦れ違ってたんだよ。

どっちにしても、お前はココで出場させないけどな！

「いや、不死川。お前は最後に出た方がいいだろ」

「なぜじゃ井上！ わざわざ勝利を捨てると言うのか！」

どんだけ自分に自信あるんだよ！

お前が思ってるほど、お前自身は可憐じゃねーって！

……確かに毅然とはしちゃうけど、そもそもテーマに合致してねえし。

もし不死川が出場したら、また1つ負けがつく。

港の奪還どころか、2・Fの委員長が手に入る可能性もグッと下がる。

もし委員長を手に入れようと思ったら、こっから4勝したい。

港を取り返し、直江を引き入れて、最後に委員長を呼びこむ。

これくらいの手順を踏まないと、影響力の強い奴らに押されかねん。

若のこともあるから、勝つてすぐに委員長を……ってわけにはいかねえしな。

本当は全勝するのが好ましかったんだ。

そうすりゃ、直江、クリステイアーネ、委員長、椎名……あと1人。結構楽にカタがついたんだけど、結果として負けちまってるんだ。後手後手だが、あとはどうにかするだけだ。

「え〜？ よくわかんないけど、間違ってると思うよ？」

「感性のレベルで否定するのはやめるのじゃ！」

ナイス過ぎるぞユキ。

よく考えりゃ、コレ以上に的確で痛烈な表現もないな。

あ〜あ〜、不死川、涙ぐんじやってんじゃん。

本能レベルで『貴方は可憐じゃないです』って指摘されたんだから当然か。

でもまあ、事実だから同情はしないぞ。

「冬馬に井上に庶民A！ どうやら悩んでいるようだな！」

……また厄介な奴が。

お前はできるだけ腕組んで笑うだけにしとけ。

あと、なんでユキだけ数えてない……あ、ユキいない。

さっきカバン漁ってたから、ジューズでも買いに行っただら。

「我が2・Sは人材も豊富で頭を悩ますだろう。だが、そのようなことは瑣末な事だ」

そこで悩んでんじゃねえ！

誰か選べないんじゃないんで、誰『も』選べないんだよ！

マルギツテは論外、不死川は問題外、メイドも話にならん。他の女子でやれそうな奴は……やっぱりない。

麻倉が少しマシなだけで、アイツもアイツで暗いから出てくれないだろ。

「可憐といえは、あずみ以上の適任はおるまい」

はい自爆しました！

なんで三十路入ってそんな奴に任すんですか！？

そんな金色スーツ着てるから頭が参ったんですか！？

ラッキーカラーが金色とか嘘じゃねえかよ！

もう新聞紙の番組欄の下の占いは見ねえぞ！

このメイドが可憐だなんて、俺の頭でも茶が沸くわ！

……九鬼に教えてやりてえ！

このメイドの腹黒さ、汚らしい言葉使い！

タマ擦り潰すなんて言葉は、可憐な女の子は使いません！

あれだ、可憐ってのは2・Fの委員長みたいなのを言うんだよ！

小さくて可愛らしくて、小さくて一生懸命で、小さくて幼くて、小さくて誠実で！

委員長が可憐じゃないっていうなら、この世に可憐なんて存在しないね！

「任せて下さい！ この忍足あずみ、英雄様の期待に応えて見せます！」

「その心意気やよし！ 我が直々にパートナーを務めてやろう！」

「そんな……一介のメイドには勿体ない！」

あの、お2人さん？

いつからメイドが出ることに決まったんでしょうか？

若が何も言わないからって、なにを勝手に話進めちゃってるんですか？

「あずみ。何か勘違いをしているようだな」

「勘違い、ですか？」

「我は、お前だからパートナーを買って出ると言ったのだ。

お前は我が直々に従えているのだ。たかが一介のメイド如きと己を同じにするでない！」

「申し訳ありませんでした英雄様あああああ！」

忍足あずみ、謹んで英雄様のお相手をさせていただきます！」

……悪い、港。
やっぱ、お前助けるの無理だわ。

って、不死川さ、なんで九鬼に詰め寄ってくの？
ほら、こういうときは何言っても無駄なんだし、ほっとけて。
何よりお前、九鬼からすれば眼中にないのと同じだから。

「九鬼。あまり出しゃばるなよ」

そんなに高圧的で強気に振舞ってもさ。
結局、高笑いが鼻で笑うのに変わっただけじゃねえか。

「ここは此方が出るべきじゃ」

「笑止！ 庶民A……貴様の出る幕ではないわ！」

ほらな、名前も覚えてもらってない。
若の幼馴染の俺だって、名前呼んでもらうまでに時間かかったんだから。
着物着て登校してるのに、1日経ったらお前のごと忘れてるんだぜ。
いい加減学習しろって。

「此方は選民じゃ！ 不適切というなら、そのメイドの方が……」

「庶民A様。大変申し訳ありませんが、少々こちらへ」

あ、肩掴まれ……違うな。

ありゃ、肩の近くのツボ抑えて、半端にしか動けないようにしてやる。

指2本で人間操るとか、どういうメイドだよ、ホント。

そのままグイグイ引っ張ってって、校舎の壁に抑えつけて。

……何か話してるみたいだし、ちょっと盗み聞きするか。

「お前はアホか！　こういう勝負はキワドイとこまでやらないと勝てねえんだよ！」

忍足さん、あなたは勝負の趣旨を理解してないのでしょいか？

可憐だよ、可憐。

可憐ってさ、キワドイとか関係あったっけ？

「き、きわどい？」

「ああ、きわどいやツだ。そうじゃなきゃ、インパクトで相手に押し負ける。」

こういう勝負は、アタイみたいに、汚れ役も思い切りよく出来なきゃ話にならねえ」

ああ、ハイハイ、そういうことね。

確かに、第一印象が悪かったら話にならないよな。

……とか考えると思ったのか！
いったい何を思い切ってやるつもりなんだよ！
ギリギリか？ 放送コードギリギリなのか？
伝説のR-18タグが必要なことでもやるらうってのか？
色んな人に迷惑がかかるようなマネはしないよな？

「ここはアタイに任せとけ」

「大丈夫、なのか？」

「九鬼のメイド舐めんじゃねえぞ？」

ニヤリって不敵に笑っても、説得力ねえよ。

「つか、不死川も騙されてんじゃねえよ。

真剣な目えして『信じるぞ！』とか言うな。

お前が信じてるそいつは、たぶん間違ってるんだから。

……悪い、港。

やっぱ、助けるの無理っばいわ。

5 話目 『青春のリブドー』

川神学園に伝わる伝説。

卒業の日、校庭のはずれにある古い大きな樹の下。

そこで、男から告白して生まれたカップルは永遠に幸せになれる。そんな噂は毛頭信じちゃいなかったけど、そんな伝説にさえすがりたい。

今までになく早鐘を打つ心臓も、緊張で停止寸前の脳も。

強張って固くなった僕の体も、何もかもどうでもいい。

もし告白に成功して死んでしまうなら、それでも構わない。

その樹の下にいるのは、もちろん不死川だ。

高校3年間を同じクラスで過ごし、うち2年を友人として過ごした。

そして、叶うなら、これからの時間は恋人として。

そこから先は、この人生のパートナーとして共に歩んでいきたい。

卒業式の後も、不死川は着物姿だった。

ああ、そういえば、不死川は進学はしないらしい。

これからは、不死川家の1人娘として悠々自適に過ごすそうだ。

もちろん、そうであったとしても僕の想いは変わらない。

欲を言えば、キャンパスライフは不死川と一緒に良かったけど。

「港……」

「やあ、不死川」

いつも通りの不死川。
卒業式だからって、コレって感慨はないみたい。
まあ、それほど感動的な3年間でもなかったらうしね。

「どのような用件……などと聞くのは無粋じゃろうな」

「まあ、場所が場所だし、時期が時期だもんね」

照れくささを隠すために、下を向いて頭を掻いた。
今から何をするのか改めて考えると、恥ずかしくて仕方ない。

いや、わかってる。

これは、思春期特有の気の迷いの一種だ。
僕のすべきことは、今まさにこれだっていうのに。

恥ずかしがる必要なんかないのに、どうしても気恥ずかしく感じて
しまう。

何をすべきかわかってるんだから、あとはやるだけだって言うのに。

さあ、バカやってる場合じゃない。

覚悟を決めろ、腹に力を入れる、肺に空気を入れる、根性決めろ。

忘れちまえ、何もかも。

自分が何者かも、今まで何をしてきたのかも、何を感じているかも。
ただ、不死川への想いだけでいい。

それだけ残っていれば、もうそれで十分だ。

僕という存在は、今この瞬間、不死川への愛だけで構成されている。
それでいいんだ。

さあ、前を見る！

さあ、息を吸え！
さあ、口を開け！
さあ、思いをぶちまける！

「不死川、君のことが好きだ！ 君のこと以外には考えられないくらいに好きだ！

上手く言葉にはできないけど……いや、これ以上に今の感情を表せる言葉はない！

『好き』って言葉じゃ足りないくらいに、誰よりも何よりも君のことを想っている！」

全ては伝えられてない。

僕の想いは、これくらいじゃ全然足りない。

もっと、もっと相手を想っているときのための言葉があれば。

そんな言葉があっても、きっと足りない。

歯がゆいけど、僕じゃコレが精一杯なんだ。

あとは、待つだけ。

不死川の返事を待つだけ。

そう思ってたんだけど、返事はすぐに帰ってきた。

「すまん。此方にはもう、婚約者がいるのじゃ」

初耳だった。

同時に、いくつもの想いと感情が頭の中を駆け巡る。

婚約者つて、いったいどこのどいつだ？

不死川にとつて、僕はその程度の男だったのか？

僕と不死川の2年間は何だったんだ？

そんな思いが頭によぎるも、すぐに消える。

……いや、消えてない。

僕の頭の中に重く残つて、脳ミソを鉛みたい鈍重にしている。
何も考えたくないのに、ゆっくりゆっくりと噛みしめる様に頭が働
く。

「港に不死川。ここで何をしておる」

麻呂か。

邪魔だよクス。

人様が告白に失敗した直後に来んなタコ。

「おお、綾小路先生。ちょうど良かったのじゃ」

ちょうどイイ？

何が？

どうして、そんな言葉が？

「此方の婚約者となる、綾小路麻呂殿じゃ」

「なんでデメエなんだよチクシヨウがあああああ！」

麻呂を殺す。

そのために、真っ直ぐ駆け出すつもりだった。

不死川が邪魔しても、僕は止まらない。

不死川をいなし、麻呂を一撃で殺す。

マトモな殺し方なんてしてやらない。

首へし折って、そのまま頭をスイカみたいに潰してやる。

そのために、一歩踏み出そうとしたところで。

自分がX字の十字架に縛られてて、今は高2の6月で。僕は、それがようやく夢だと気付いた。

「え？ 京じゃダメ？」

なんて、直江が聞いてくる。

ああ、そっか。

そっぴゃ、椎名が次の試合に出るってとこまでは聞いたんだっけ。

直江の言葉を無視して時計を見ると、第2回戦の開始まで10分を切ってた。

じゃあ、逆算して30分近く寝たことになるのか。

……今日の僕、寝過ぎじゃないかなあ。

なんか大宇宙の意思とか、そんなんが影響してんだらうか。

「私と大和じゃ釣り合わないとしても言うのか！」

うわ、怖っ。

人殺しそっぴゃ目えしてんよ、この娘。

顔立ちキレイだから余計に怖いつて。

まあ、とりあえず、怒りを鎮めてもらおう。

聞いた話だと、直江との仲を褒めればいっつてことだから……。

「まさか。川神学園のベストカップルだと思ってるよ」

「大和。イイ人みたいだし、そろそろ放してあげたら？」

切り替え早っ！

今、絶対に殺されると思ったのに！

武器こそ構えちゃいないけど、スゲー殺気だったし。

今までの人生の中でダントツの。

でもまあ、これでわかった。

噂通り、椎名は直江にベタ惚れだ。

でもって、直江に関わることでモチベーションが大きく変化する。

良くも悪くもムラツ気のある人間なんだね。

個人的には嫌いじゃないタイプだよ。

直江がなんか言おうとしてるけど無視。

椎名のベアハッグで息できないみたいだし。

なるほど。

直江を止めたいときは、椎名を褒めればいいわけだね。

さて、グラウンドを見ると、もう面白そうな感じ。

壁こそないけど、板張りの床の部屋らしき空間が設置済み。

板の上には、机と簡単な家具が置いてある。

高そうなイスと、高そうなダンスと、高そうなベッド。
その板の隣に、扉だけがドンと置いてあるのはちょっとシユール。
まどろんでる中でヘリコプターの音がしてたけど、コレだったのか
なあ。

ちよつとイラつくのは、学園長のジジイの隣に川神百代が座ってる
こと。

どうせ『面白そうだから』とかで特等席に来たんだろうけどさ。

「では、両者準備は整ったかの？」

なんてことを、簡易テントの日陰の下でのたまうジジイ。
死んでしまえ。

もしくは、僕を日陰の下に連れて行け。

「参加者とパートナーにはピンマイクをつけてもらう。」

コイツを付けてもらわんと、何言つとるかかわらんしのお」

「全校生徒のうち500人が判定するわけだからな。」

全員が聞こえるように話そうとすると、雰囲気壊してつまらんし」

ジジイに追隨する川神百代。

あゝ、そうですか。

500人に判定してもらって、数の多かった方が勝ちってこと？
細かい説明ないけど、きつとそういうことだろうね。

「それと、演技の終了はブザー音で告げてもらう。
各クラスで1名、ブザーの係を設けておくように」

手際悪いだろ、ジジイ。

こついうのは先に言えよ、先に。

後から言ったら混乱するだろうが。

事前に打ち合わせもなかったら、失敗するかもしれねえんだからさあ。

つたく、こついうところで頭が回らねえよなあ。

「それでは、2・5から始めてもらう!」

だよね。

もしシチュエーションが被ったら、後の方が不利になるし。

まあ、後にやった方が印象が強いつてもあるから、一概には言えんか。

どっちにしたって、楽しく見させてもらうさ。

両手両足拘束されてちゃ、口くらいしか使えないんだしね。

……え？

九鬼が、机の上につく伏した？

あ、そっか。

パートナーで九鬼が出てくるのか。

じゃあ、忍足が萌え萌えシチュエーションなんてやんの？
うわあ……これは帰れないかもしれないぞ。

まあ、ごちゃごちゃ考えても仕方ないし、楽しんで見させてもらおう。

と、ティーポットと茶器をトレイに乗せたメイドが推参。
扉を3回ノックして、慣れた手つきで扉を開ける。

「英雄様、そろそろ一服入れられ……ては……」

キョトンとした様子で、伏せている九鬼を見つめる忍足。
で、すぐに合点がいったのか、少し残念そうな顔をした。
頑張り過ぎて、疲れて眠ってしまったに違いない。

それに気付いたはいいが、手元の紅茶が無駄になってしまったのを
残念に思っている。

せっかく、主のために誠心誠意を込めて準備したのに。

なんて具合の心の声が聞こえてきそう。

素直に演技上手いと思っただわ、うん。

流石、普段から九鬼と僕らに対する態度をストレスで使い分けてる

だけはある。

しかし、その表情も柔らかく変化して。

慈愛に満ちたまなざしが、暖かく九鬼に注がれていて。

トレイを邪魔にならないところに置いて、どこから取り出したのか薄手の布が。

その布は、滑らかな動きで、優しく九鬼の肩に掛けられた。

……なんていうか『これ可憐と違っただろ』って気がするの僕だけだろうか。

これって、母性の類じゃないの？

それとも、最近は母性も彼ソの仲間に入るのかなあ。

うーん、いまいち世相ってのはよくわからんね。

で、その忍足だけ。

周囲を少しばかり確認しながら、九鬼にそつと顔を近づけていく。あー、なんてありきたりなことをやるつもりなんだろ。

眠ってる思い人にキス、なんてのは使い古されてるって。

どうせ、唇が触れる寸前で目が覚めて……とかでしょ？

頭の中が10年遅れてんだよなあ、忍足は。

あ、九鬼が起きた。

もぞつと身をよじって、眠たい目を擦りながら体を起こした。

何がどうなったのか理解していないみたいだけど、己の居眠りにはすぐに気付いたらしい。

眉間を抑えながら、左右に軽く頭を振って眠気を払おうとする。

と、九鬼の肩から一枚の布が落ちる。
何の気なしに、その布を拾おうとする九鬼。

そこで、忍足と目が合った。

九鬼の睡眠の邪魔をしないでおこうと、部屋から出ようとしていたところだ。

尋常ならざる速さで移動するような女は、やっぱり可憐じゃない気がする。

まあとにかく、一抹の気まずさを感じたのか、忍足はすぐに退出しようとするけど。

「待て、あずみ」

存外厳しい口調だなあ。

こっから山場ってわけか。

まあ、短い時間なわけだし妥当なのかも。

こう言うのの類は詳しくないから、よくわからんけどね。

「いつも言っているだろう。我が眠っていたら叩き起こせと。

我は英雄だ。庶民たちを平和に導くには、眠っている時間でさえ惜しい」

また傲慢な。

テメエがいなくても世の中は平和に回るっつーの。

日本だけでも、霧夜、鉄、川神、綾小路、不死川……あとは知らないけどさ。

九鬼1つなかったくらいで、バランスが崩れてたまるかってんだ。

あと、お前らの一族にだけは絶対統治させねえから。

「しかし、英雄様」

「2度は言わん」

食い下がる忍足。

冷たく突き放すように告げる九鬼。

「英雄様、どうかご無理をなさらないでください。私は……」

両手を胸の前で組んで。

心配そう……切実そう？

そんな顔をして、九鬼を見つめる。

ただならぬ雰囲気を感じたのか、九鬼も忍足の言葉を待つ。

1拍、2拍、3拍、4拍。

5拍に至るかというところで、忍足の口が開いて。

「私は、英雄様のことが」

訴えかけるような瞳も虚しく、終了を告げるブザーが鳴った。

「おい、ジジイ。これ微妙じゃないか？」

「どちらかの肩を持つような意見を口にするでない」

ん？

あのブザーって、時間切れのブザーじゃないんだ。てっきり、マジで時間オーバーしたかと思ったよ。ルール聞いてなかったもんなあ。

しかし、ハッキリ言うのアレだ。

僕としては、萌えの要素がなかった。

ちよっと特殊なんだよなあ、主とメイドの関係って。なんていうか、僕の頭じゃ上手にイメージできない。上手にイメージできないから、感情移入できない。

感情移入できないから、萌えなんてものを感じることはない。

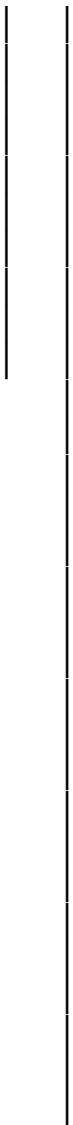
まあ、要はミスチヨイスだったって話なんだけどね。もっと見る側にとって身近なシチュエーション選べっての。

「では、次はFクラスじゃ！」

なんてジジイが宣言してから、Fクラスの連中がゴソゴソと動き出す。

まあ、コツチもコツチで楽しませてもらおう。

どうせ僕が何考えたって結果は変わらないんだし。



直江と椎名が一緒に、グラウンドをゆっくりと歩いている。

えっと、下校なのかなあ？

片手にクレープ持ったまま登校する奴なんていないし。

……下校でもないな。

学生カバン持ってないし。

えっと、制服デート？

やらんだろ、今どきの学生は。

川神の制服はデザインいい方だけど、それでも外に着てくのは抵抗感あるぞ。

いや、演技だからって言われりゃそこまでだけどさ。

「ねえ、大和」

「ん？」

声を掛けられた直江は、素直に顔を椎名の方に向ける。何が始まるかは、まあ、大体予想がつく。

「はい、あ〜ん」

ほら、予想通り。

食いかけのクレープを直江の口に押し込む椎名。

避けようとした直江が半歩遅れて、口の中にクレープが入った。

反射的に一口食ってしまつて困惑する直江。

そんな直江に、椎名が微笑みかける。

「間接キスしちゃったね」

固まつてる直江に、優しく微笑みかける椎名。

上目遣いがポイントなんではなからうか、と思う。

少し顔を赤らめて、でも嬉しそうに微笑む。

あ〜……コッチの方が夢があるなあ。

わりと想像しやすいし、学生服姿つてのも感情移入しやすくていい。そう考えると、この勝負つて時点でSクラスが不利だったんでなからうか。

「次は、普通のキスがしたいね」

そんな風に笑うけど、直江は芳しくない顔つき。

まあ、いつもの直江からすればそうだよなあ。

さつき確認したのもあるけど、直江は椎名と相思相愛じゃない。

少なくとも、同じレベルの想いが双方に存在してるわけじゃなさそう。

椎名が一方的に愛情を注いでいて、直江はそれほどの想いないみたいだし。

もしくは、そんなに踏み込んだ関係にはなりたくないんだろうか。

「なあ、京。俺は京の気持ちには」

「知ってるよ」

笑みを崩さぬままで、直江の言葉を切る椎名。

その笑顔は寂しげにも、何も気にしていないようにも見えるけど。やっぱ、どっちかかって言えば寂しそうに見えるよなあ。

「私の気持ちに、すぐに答えを出せないんだよね」

「……そうだ」

否定しない直江。

初めから相手の気持ちがわかってた椎名。

ダメだってわかってるのに、それでもアプローチする。

この2人って、本当にこういう関係なんだろうか。
噂じゃ付きあってるって話だけど、未確認情報なわけだし。
そもそも、直江本人が否定してるところを見てるから、何とも言えない。
ただ、もし本当にこんな関係なら、椎名が報われなさすぎる。
是非にかかわらず、直江は答えを出してやるべきだよ。
でないと、椎名はどこにも進めないんだから。

「もしかしたら、最後に好きになるのは京じゃないかもしれない」
「それでもいいの」

そういつて、椎名は歩調を早めて。
直江の前に回り込んで、さっきより少しだけ距離を取って。

「今、こうしていられるのが幸せだから」

本当に幸せそうに、見ほれるような笑顔で告げた。

で、両方とも終わったんだけど。

空気が微妙な感じ。

いや、微妙っていうか、またSクラスが負けそうな感じ。

そりゃ、僕だってSにいなきゃFに投票したくなるよ、うん。

あゝあ、まだ拘束されてるのか。

口こそ利けるからいいけど、それだけだもんなあ。

源からコレ以上なんかしてもらおうのも申し訳ない。

水も我慢しながら、こうやってあと何時間かやってなきゃいけないんだろうか。

最悪、このままFクラスに残留なんてのも考慮に入れなきゃなあ。

「どばっつー！」

と、頭に水が。

容赦ない。

キンキンに冷えた奴を……ペットボトルか。

ペットボトルから、なみなみと頭に注がれてる。

気持ちいいけど、それ、飲ませてくんねえかなあ。

体温の上昇よりも、喉の渇きの方が深刻なんですけど。

「榊原さあ、なんでここににいるのかな？」

「暑そうだったから冷やかしに来ました〜！」

落ち着け僕。

キレルな、キレルなよ。

コイツは『冷やしに来ました』って言おうとしたに違いない。だから、何か悪意があるわけじゃないんだから怒っちゃダメだ。汗で体操服が張り付いてイイ感じだし、むしろ得したと思うんだ。それに、水かけてもらって頭は冷えて、少しはスッキリしたんだから……。

「冷やしに来たんじゃないよ？ 『冷やかしに』来たんだよ？」

「っざけんなコラ！ コツチはいっぱいいっぱいなんだぞ！」

「わ〜い、怒った怒った〜！」

なんて言うと、そのままダッシュでどこかに行ってしまった。ていうか、よくFクラスの陣地に入って来れたな。さっきのFクラスの演技中のタイミングならともかく、今は入って来れんだろ。

源あたりが手引きしたんだろうか？

それとも、直江が許可した？

他の連中が理由もなく入れるとは思えんし……。そもそも、捕虜になってる僕と接触させる利点もないからなあ。

「おい、港……港！」

「ああ？」

と、視線をめぐらすと。

なんだ、童帝様じゃないか。

よくもまあ、又ケ又ケと。

両手足ふさがってなかったら、そのまま掴んで頭から投げ落としてるぞ。

まあ、僕も『宴』でお世話になってるから、ネタが尽きるまでは生かしてあげるけどさ。

「いやあ、お前のおかげで榊原のイイ画が取れたぜ！」

すごい笑顔。

なんていうか、童帝様の達成感を表情から読み取れるくらいイイ笑顔。

……男の満面の笑みなんて見ても嬉しくないわ。だから、見て嬉しいものを見せてもらおうか。

「なあ、童帝様」

「おいおい、ここでその名で呼ぶなよ。誰が聞いてるか分かったもんじゃないわえ」

心配しなくても、知らないのは女子くらいだよ。

男子の8割は正体知ってるんで、ご心配なく。

ていうか、学園側に監視されてるって知らないのかなあ。

監視員が宇佐美先生の時点でザルみたいなもんだけど。

「その写真、あとで焼き増しして内緒で回してくれ」

童帝様はニツと笑う。

で、親指を立ててうなずいた。

僕も僕で、親指を立ててうなずき返す。

うん、男の友情ってのは素晴らしいね。

僕と童帝様は、お得意様と問屋の関係だけど。

「さあ、集計が終わったぞ！ 全員、静粛に！」

と、童帝様が立ち去るタイミングでジジイの声が。
マイク通すと余計うるさいわボケ。

「では、結果を発表するぞ」

勿体ぶってタメるジジイ。

だから、お前にはミノさんみたいな貫禄はないっての。
少なくとも、同じベクトルの貫禄は存在してないって。

で、タメてタメて、20秒くらいタメてから。

ジジイの口が、やっと開いた。

「422対78！ 勝者、Sクラス！」

うおおおおお！ って嬉しそうな男達の咆哮が。
なんで男ばっかなんだろ？

……ああ、そっか。

嫉妬したのか。

椎名と忍足の対決を見て、よりムカついたのが直江の方だったと。
だから、忍足に票を入れる奴が多かったと。
多分、そういうことなんだろうね。

まあ、どっちでもいいさ、

これでようやく帰れるわけだしね。

Sクラスの方を見ると、葵が前に出てきていた。

うん、本当に長かったよ。

1時間とはいつても、炎天下の下だったんだから。

それに、水分もほとんど取ってないから、体も疲れてきてるし。

早急に水分とって、木陰の下で休みたいもんだ。

「直江大和君を指名します」

……やっぱり僕、葵のこと嫌い。

5話目『青春のリブドー』（後書き）

いや、青春したことないと思いき浮かばないですね、萌えるシチュエーションって。

駄文で申し訳ありませんでした。

せっかくあとがきの枠があるので、今回から『こんな音楽を聴きなから書きました』ということでも書いていこうと思います。

マキシマムザホルモン：絶望ビリー

筋肉少女帯：ハッピー・アイスクリーム

筋肉少女帯：スラッシュ禅問答

バカとテストと召喚獣：OP

バカとテストと召喚獣：ED：バカ・ゴー・ホーム

ブルーシード：OP：カルナバル・バベル

ニコニコ動画：コマンドーMAD：島まで届け蒸気の煙

ニコニコ動画：コマンドーMAD：ろけらん！

20万Hit記念『6月の梅屋にて』（前書き）

本編で空白になってる、1章から2章の間のお話です。
完全な番外編で、このSSのヒロインは出てきません。
タイトルから察していただけのかもしれませんが、その代わりに別の人物を出してみました。

20万Hit記念『6月の梅屋にて』

湿気が出始めた6月15日、第2週の日曜日。

不死川が川神相手に華麗な勝利を決めた、その次の日曜日。祝勝会なんかも開けて、個人的にはいいスタートを切れた。

今月は体育祭だか運動会だかもあるし、不死川にイイとこ見せなきゃ。

で、そんなことを考えてる僕が今いるのは。

親不孝通りって呼ばれてる、川神近郊で極めて治安の悪い場所。

たまに来るんだよね、ココ。

何がイイかってさ、武器屋があるんだもん。

いや、ゲーム脳とかオタク趣味とかじゃなくて、ホントに武器売ってんの。

扱いは美術品とかなんだろうけど、どう見ても殺傷能力のあるものを売ってる。

しかも、結構お世話になってんだよ。

防弾防刃ジャケットとか、腕に巻く防刃手甲とか。

何本か刃物も買ったことあるし、警察の目が少ないから使い勝手がいいんだよね。

でもまあ、今日はそんな用事の帰りでさ。
店主がついに刺されたとかで、店が閉まってて。
で、店が閉まってて昼飯前だったもんだから、近くの梅屋で飯を食
うことにした。

ドアを開けて、店の奥のカウンター席に陣取る。
U字になってる店員スペースの奥側ってことになるのかなあ。
トイレが入り口に近いから面倒そうだけど、どうせ食って出てくだ
けだもん。
そうじゃないと、いちいち誰かが後ろをすれ違って鬱陶しいし。
飯食っただけだから、カウンター席で十分。

「豚丼特盛り豚汁セット1つと、単品で豚丼の特盛りを1つ」
人の倍は食わないと、体が細くなっていく。
そんだけ動いてるわけだし、細マッチョだなんてモヤシになる気は
ない。

世の中、デカくて大きくて重い方が有利なのは当然の理なんだし。

漫画やゲームみたいに『細い方が強い』なんて妄想を信じたりしないんだよ、僕は。

体が大きいっていうのも、素早いとか技が優れてるってのと同じで武器の1つだ。

それに、同じ鍛えてる人間同士なら、倍も速度が変わることはないなら、パワーがある方が有利なのは間違いないんだ。

ああ、バケモノ連中は除外して欲しいなあ。

あれは人間じゃないから、数に入れちゃいけない。

気だのなんだのを軽々しく使うのは、もう人間の枠を超えてるんだもん。

枠を超えた連中はさ、ほら、枠の中とは別物なんだし。

「すみません。豚丼豚汁セットの大盛りとトロロ1つ……おい、オメエらどうする？」

「俺は豚丼豚汁セットの特盛りを1つ。あと、牛皿の大を1つだ」

「ウチも同じヤツ。あ、牛皿はいらねーや」

団体さんが入ってきた。

男2人と女の子1人の3人組。

うん、見知った顔じゃないね。

つつても、ここに見知った顔が来るとすれば担任と源くらいか。

……ああ、たまに麻呂が権力振りかざしに来るっけ。
どうでもいいけど。

「申し訳ありません。あと4人分しか豚肉が残っております……」

「はあ！？ ふざけんなよ！ せっかく食いに来たっつーのに！」

「すみません。あちらの方と今の御注文で、5人分が必要でしてうるさいなあ。

飯食う時くらいは静かにしてくれよ。

話すくらいなら勝手にすりゃいいけど、叫ばないで欲しいよ。

こういうマナーの悪い客が増えてるんだよなあ、梅屋って。

あ、そもそもこの辺の治安自体が良くないんだっつけか。

そりゃ、こういう客と遭うようなことがあってもおかしくないよね。

「おい、テメエ……テメエだよ、このウストラノッポ」

と、突然僕の後ろから声が。

声の感じからするに、さつき叫んでた女の子かなあ。

かなり長いツインテールに、なんか毛皮っぽい髪飾り。

黒と白を基調にした服で……ゴスロリをすつきりさせた感じかなあ。なんかベルトがバツテン作ってるし、そういうファッションなんだろうか。

正直、自分の服装にさえ疎いんだから、そこまで深そうなのは良く分かんないや。

「えっと、何か用かな？ 初対面だよな？」

見たことないよなあ、この子。

もしかしたらすれ違ってくるかはしてるかもだけど、それくらいですよ。

いくらなんでも、これだけキレイな子を忘れるってことはないよ、うん。

……残念なことに、コッチにガンくれてるんだけどね。

「さっきの注文、キャンセルしろ」

「なんで？」

「ウチらは3人、お前は1人。全部で4人だ。分かるよな？」

どういう計算なんだろうか。

いや、計算そのものはわかるんだけどさ。

なんでそんなことを言い出したのか理解できない。

どういっついで僕に声をかけて、こんな問答やってんだろ。

「豚肉が4人分しか余ってないんなら、1人分多く注文したテメエが諦めるのは当然だろ？」

そっか。

僕が2人分食べるから、この子が豚丼食べれなかったのか。

……ああ、さっきの問答ってこういうことか。

『私たちは3人で豚丼3つ』 『でもコイツと私たちで5人分』と。でもって『じゃあ5 - 3 = 2で、コイツが2人分頼んでるのか』って来たんだらうね。

いや、全く以つて失礼なことを考えちゃったよ。
初めからそういつてくれれば、快く譲るのに。
ま、今からでも譲るけどさ、面倒なことになりそうだし。

「まあ、確かに不自然だよな。1人で2人分食べるのって」

「だろ？ だからさ、1人分コツチに譲れよ」

なれなれしく肩を抱いてくる女の子。

おいおい、勘弁して欲しいなあ。

僕が好きな感じの貧乳じゃないか。

しかも、性格もキツめで素晴らしい。

「店員さん、すいません。豚丼の特盛り、牛丼に変えてもらっても大丈夫ですか？」

「あ、はい！ 大丈夫ですよ！」

嬉しそうな店員さん。

割引しろよボケ。

わざわざ客がクレームの対処手伝ってやったんだから。

なんてことを考えてると、さっきの女の子が。

まだ何か用があるのかと思うと、僕の腕を引っ張ってる。

「おい、コッチ来いよ」

「いや、ここで食うから……」

「いいから来いって！」

で、呼ばれたんで例の3人組の席に。

断ったら面倒なことになりそうだし、貧乳Sっ娘の誘いは断りきれない。

いや、普段だったら断れるんだけど……さっきさ、胸が当たってたんだよね。

だからまあ、ちょっとその分の支払いのつもりで。

ま、またチャンスがあるかもなんて思ってないんだからね！

で、相席する羽目になったんだけど。

さっきの女の子が僕の左、オッサンが僕の前に。

ロン毛の同じ年くらいの男が、僕の対角線上に座ってる。

「悪いねニイちゃん。連れが迷惑かけたね」

「いやまあ、別に気にすることじゃないですから」

なんて言うつ保護者臭いオッサン。

……雰囲気あるなあ。

体細いけど、ワイヤーみたいな筋肉してやがる。

しかも、飄々としてるけど隙がないね。

拳句の果てに、なんていうか空気がさ、僕の空手の師匠に似てる。笑顔で楽しく人を壊せるタイプの人間だっただろうか。

と、斜め向こうに座ってるロン毛気味の男が、ほお、と呟く。

腕に入れ墨、額にサングラスと、ロクな感じはしない。

で、そんなのが舌舐めずりをしてるところで、僕と目があったというかさ、僕がこの人の方を見て目があっただってことは。

この男は、僕のことを見て舌舐めずりしたの？

「なかなかイイ体じゃないか」

顔も悪くないしな、と付け加える。

男に褒められても嬉しくないし……寒気がする。

この視線は、同じトレーニングジムにいたモーホーと同じ視線だ。

あの舐めるような、値踏みするような、気色悪い視線。

同性愛者が全員そうだとは思わないけど、そういう連中がいたのは事実。

でもって、そういう連中に目の前の男が似てるってのも事実だ。

「なにかやってるんだろ？」

「趣味で体を鍛えてる程度ですよ」

年齢分かんないから敬語で返す。

うん、社交辞令の基本だね。

本当だったら、今すぐにも逃げ出したいんだけど。

……まあ、そういう人間相手なら僕は強い。

相手が組み伏せって不埒な行為に及ぼうとしても、大抵は僕の寝技が勝る。

体力でも僕が上回ってるはずだし、下手なことさえされなきゃどうにかなるもんだ。

もちろん、奇襲されなきゃの話だけだね。

「そうじゃない。なんの格闘技をやっているかということだ」

「あゝ……空手ですよ。空手を少し」

嘘じゃないしね。

柔術やらやってるってバレると、足がついちゃうもんなあ。

女の子はともかく、コイツとオッサンとはこれっきりにしたいもんだ。

「へえ〜。どうよ、ウチと喧嘩してみねえ？」

「いや、喧嘩だとかは苦手です」

意気揚々と言うけど、強いのかなあ、この子は。

見た感じ体付きは細いし……生傷多いね。

つまり、少なくとも今は鍛えてるってことか。

どの程度の自信があるか知らないけど、この様子じゃ、かじった位かなあ。

覚えた技を使いたくって仕方ないって感じがするもん。

「お待たせしました！ 豚丼特盛りになります！」

あ、店員さん来た。

さすが、牛丼店は早くて助かるね。

まあ、とりあえず腹あ膨らせてから、とっとと帰るとしよう。

女の子は可愛いけど、まあ、一期一会だと思ってさ。

どうせ僕は、この子に恋したりはしないんだから。

礼も言わずに食事を再開したけど、まあ、別に気にしない。
こういう奴、知り合いにいたもん。

で、一息ついたところで立ち去ろうとしたんだけど。

「まあまあニイちゃん。ちょっと話してやってくれや。

コイツら、同じ年齢の奴らとあんま会話したことがなくてね」

なんて言われたわけで。

お断りしようにも、女の子には腕を掴まれ、男はうるんだ目でコッ
チ見てる。

僕に『帰る』って選択肢は残されてないみたいだったから。

どうせすることもないしってことで、ズルズルと梅屋に残ってるん
だよ。

ちなみに、オッサンはとっとと金払って出てった。

『迷惑料』つつって奢ってもらったのは、ちょっと後ろめたい。

まあ、その迷惑料のおかげで、僕が動けないってのもあるんだけど。

席の位置関係は、さっきとほとんど一緒。

女の子が僕の隣で、ホモっぽいのが僕の向かい。

全員の前には、水が8割くらい入ったコップが置いてある。

「俺は板垣 竜兵だ。気軽に竜兵とでも呼んでくれ」

あと、タメ口でイイ。

なんて、ちよつと顔を赤らめながら言う竜兵。

頼むから、僕にそんな態度をしても無駄なので止めて下さい。
まかり間違っても、僕はソツチ系じゃないんだから。

「ウチは板垣……まあ、天って呼べよ」

板垣天ちゃんか。

女の子っぽくない名前だけど、昨今ブームを迎えてるDQNネーム
とかよりマシ。

こっちはこっちで、天真爛漫って感じだよなあ。

わりと僕の趣味に近いし、カワイイと思うよ、うん。

「僕は港 三千尋。好きに呼んでくれてイイよ」

「なら、ミチヒロと呼ばせてもらっぞ」

「なんか言いにくいから、ウチはミッチーって呼ぶぜ！」

勝手にしてくれ。

特に竜兵。

「で、ミチヒロ。お前は普段、何をしているんだ？」

「平日は学校行って、休日はゲーセン行ったり適当に過ごしてる
ね」

怖いよコイツ。

なんで『外堀から埋めよう』みたいな顔して聞くんだよ！
クツソ、肛門がキュツとしてきたじゃないか！
なんか背中に冷たいもんが通り抜けたしさあ！

「へえ！ ゲーセンだったらウチもよく行くぜ！ 平日メインだけ
ど」

「ん？ 学校帰りに行ってるんだ」

まあ、そういう学生さんも多いよね。

それくらいで不良だなんていうつもりはないよ、うん。

別にタバコと覚醒剤の類さえやってなきゃいいさ。
怖いからね、イケナイ薬って。

向精神剤とかの多量摂取も、まあ、同じように扱っけどね。

「いやいや、学校行ってねーの」

「俺もだ。そんな金はないし、興味もないからな」

「ああ、なるほど」

別に気にしない。

そういう人も、世の中結構いるもんだ。

社会に迷惑になるようなマネさえしなきゃいいよ。

個人の生き方に干渉できるほど、僕は絶対的な人間でもないんだし。
僕だって干渉されたくないところはあるんだから。

実際、金の問題だけじゃないんだろうし。だって、いくらなんでもバイトしながら夜間に通うことはできるはず。

それにさ、そんなに貧乏だったら生活保護も出るはずだもん。学校に行かない理由の1つが金銭的な問題ってだけで、それだけじゃないんだよ、きっと。

「大体さ、学校って何がおもしろいの？　ウチには全然わかんねーんだけど」

「面白くはないと思うよ？」

勉強や集団生活は、少なくとも楽しくないね。

まあ、勉強は必要なもんだけど、集団生活はなあ。

僕の最終的な身の振り先考えると、いらねえんだよね。できるに越したことはないんだろうけどさ、集団生活も。

「わっかんねーなあ。楽しくないのに何で行くんだよ？」

「ちょっと目的があってね。そのために学校行ってんの」

「ふーん」

そう、目的があるんだ。

だから僕は川神学園に通ってる。

わざわざ遠くの県から、相当の手間をかけてね。

「ミッチーさあ、さっき空手やってるって言ってたけどさ、ホントはどうなの？」

「えっと、それは強いかどうかって話？」

「そうそう。ミッチー、全然弱そうに見えねえだもん」

体はデカイもんね。

ジーンとTシャツだけだから、筋肉目立つし。

まあ、確かに弱そうには見えないよなあ。

とか思いつつ、水を1口。

「まあ、弱くはないけど、平均的な空手2段くらいの實力だよ」

実際、2段相手にも負けたことはないしね。

つつても、初段に負けてから止めたんだから、何とも言えないか。

「勿体ないな。それだけイイ体をしているのに……」

竜兵が言うつと別の意味に聞こえるなあ。

ていうか、別の意味にしか聞こえないよホント。

なんで胸から首、腕回りをマジマジと見つめながら言うんだよ。

「いいんだよ、趣味のレベルなんだから」

「趣味か……なあ、ミチヒロ」

途端に思いつめた顔になる竜兵。

「いったい何を聞くつもりか知らないけど、多分お前好みの回答はないぞ。」

「男は、好きか？」

「性的な興味はないし、普通に女の子が好きだ！」

思わず言ってしまった。

まあ、こういうことはハッキリ言っておかないと誤解されるからなあ。

竜兵が強引なタイプだったら、恐ろしいことになりかねない。

帰りに後ろから襲われようもんなら、僕にはどうしようもないし。

ここは1つ、しっかりと覚えておかないとね。

「リュウはガチホモだかな〜」

知りたくもない情報を知ったばかりなのに畳みかけないで欲しかった！

でもまあ、知っちゃったもんはしょうがないし、知らなかったら危なかった。

ガクトくんあたりには、こう言う奴がいるって教えておこう。

「あ……」

イロイロ話し込んで、ふと時間を忘れてた。
時計を見ると、2時を回ってる。

今日はトレーニングジムの日だから適当な時間に行けばいいんだけど。

逃げ帰る口実にもちようどイイかも。

天ちゃんには悪いけど、竜兵の視線にこれ以上さらされるのはなあ。

「ごめん、もう待ち合わせの時間だ」

「そ、そうか。すまなかったな、足止めして」

そう言いながら、竜兵はいそいそとアンケートを書き始める。
何でこのタイミングなんだろ……ってそういうことかい。

手早く住所と電話番号を書くと、それを僕にすっと差し出す。

「これ、家の住所と……コッチは俺のケータイの番号とアドレスだ」

『何かあったら寄ってくれよ』とか言ってる竜兵。
うん、この地区には極力近付かないようにしよう。

「あ、ちょい待ち」

と言って、天ちゃんがそのアンケート用紙を奪い取る。
その下にガリガリと素早く電話番号とアドレスが書かれて。
そのまま僕の手には、そのアンケート用紙が握らされた。

「毎日はウゼ けど、たまにはメールしろよ！」

「お、俺はよ、毎日でも全然構わないぜ！」

この反応が逆だったらなあ、とか思わないでもないけど。
まあ、悪い連中じゃなさそうだ。

とりあえず、今日帰ったらメールでも打ってみよう。
そういう小さな決心をして、僕は板垣兄妹に別れを告げたわけだ。

店を出た時の湿気が凄くて、思わず顔をしかめる。
そんな、6月のことだった。

20万Hit記念『6月の梅屋にて』（後書き）

以上、20万Hit記念の小説『6月の梅屋にて』でした。
今後、本編にもこの設定が絡んでくるかもです。

6 話目 『蚊帳の外で』

「っだゴラア葵いいい！ クラスメイト後回しにしてんじゃねえぞ
オイ！」

手足の鎖をガチャガチャやりながら抗議しても、葵にガン無視されました。

戦略的には正しいかも知れないけど、先にうなだれてるクラスメイト助けるよ。

アイツには他人に対するいたわりが足らなさすぎる。

つたく、これだから知能派イケメンって人種は。

特別面のイイ奴の中で肯定できるのは源くらいなもんだよ。

イケメンであんだけ謙虚にしているらるだなんて、ある意味奇跡だね。

なんて騒いだと、カチャリと足の辺りから音がした。

で、もう1回同じ音がして、今度は両手首で同じことが起こって。

まさかと思って手を動かすと、拘束が外れていた。

……つつても、皮の手枷と足枷は付いたままで、鎖が外れたただけなんだけどさ。

自発的に動けるから充分か。

あ、源とガクトくんが外してくれたんだよ。

直江が去り際にガクトくんに頼んでったらしい。

今さら僕を開放したところで、扱いが良くなるわけでも……。

あのさあ。

なんでさ、直江の奴が歓迎ムードなの？

忍足も茶とか出してんじゃねえよ。

僕が出てった時に心配してくれたの、不死川と井上くらいだったよね？

葵は裏切りやがったし、九鬼は支配下の人間取り返すくらいのノリだったし。

なんか、Sクラスのことが嫌いになりそうな光景だよ、コレ。

不死川が直江にそっぽ向いてくれてるからいいけど。

もし直江になびいてたら、屋上からムーンサルトで自殺してやる。

さあて、それはそれとして、どうしてくれよう。

殺すのはまずいし、動けなくなるほどのダメージを与えるのもね。今すぐやると、面倒なことになるだろうし。

即戦力の連中を潰そうにも、僕1人じゃ返り討ちに遭いかねない。

1対1ならともかく、相手が複数だったら僕は絶対に勝てないもんなあ。

BBJ……ブラジリアン柔術使いの宿命なんだよ、これ。

大体、ブラジリアン柔術自体が俗に言う『タイムマン』に特化してんだもん。

1対1なら絶対的に強いけど、相手が複数だったら途端に弱くなる。

そりゃ、空手もやってるし、コツチから奇襲して突っかけて人数減らせばいいさ。

たださ、30人以上の相手にそれやるって現実的なアイデアじゃないでしょ。

いくら全員が強くないからって、少なくとも6人は強いのがいるんだから。

ガクトくん、風間、源、川神、椎名、クリステイアーネ。

この6人のうち1人を倒したからって、いったいどう僕が有利になるんだよ。

弱くても、種目によっちゃ活躍する奴もいるだろうけどさ。

そついう連中を潰すって方向も考えたよ。

でも結局さ、残った連中に袋叩きにあうのは一緒だよな。

あゝあ、胸糞悪いなあ。

うっぴん晴らそうにも、状況が状況なんだもんなあ。

とりあえず、回復に専念しよう。

パイプイスがあるからそこに座って……熱っ!?

尻を乗せるシート部分が熱持ちちゃってるよチクシヨウ!

あゝ……まあ、座つてりゃ人肌に近づいてくから我慢するか。

熱気のせいか足元おぼつかないし、立ちっぱなしってわけにもいかないからなあ。

「ほれ、とりあえずこれでも飲んどけ」

なんて言いながら、斜め後ろから源が、ビニール袋に入ったペットボトルを提供。

中身は、スポーツドリンク1本とミネラルウォーター2本。うん、さっきと同じで冷え過ぎてない。

ガブ飲みしてもキーンと来ないような適度な温度になってる。よし、源は見逃そう。

「勘違いすんなよ。直江の分だ」

やや苦い顔をしながら舌打ちする源。

ああ、優しくしたって思われるのが嫌いなのか。

つつても、実際行動に出てるんだし、今さらだよなあ。

うん、源ってやっぱりお人好しなんだろうね。

「帰ってきて飲むもんなきや、アイツもちったあ堪えるだろ」

はいはい、いいわけはイイから。

わざわざ僕を気遣ったのこともなんだろうし。

そもそもさ、直江の分にしちゃ、飲み物が多すぎるとは思わんのかなあ。

もうペットボトル1本くらいは飲んでるって考えると、全部で直江の分が2リットル。

まだ大して動いてないのに、そんなに飲む奴がいるとは思えないね。僕のために用意してあったって言うてくれりゃイイのに。

と、金髪の外人さんが。

そんな奴は2-Fに1人しかいない。

件の……マルギツテが溺愛してるクリスティアーネ・フリードリヒ。彼女が、僕にわざわざ近寄ってくるわけだ。

タッパーなんか持って。

で、僕の前にまで来ると、少し目を伏せがちにしながらタッパー開いて。

「ほら、自分のいなりで良ければ……食べてもいいぞ」

なんて言うんだけどさあ。

すっごい口惜しそうな顔しながら、いなり差し出されても食べられません。

それに、僕、いなり寿司そんなに好きじゃないんだけど。

どうせだったら、小笠原のところのイチゴ大福か豆大福がいいなあ。あの柔らかかなモチと、すっきりとした甘さの餡がたまらないんだよね。

アレを食べながら、梅こぶ茶で一杯やるってのがいいんだよ、うん。

だから、嫌味に聞こえないように断っておこうか。

「いやいや、そこまで気を遣ってもらわなくてもいいよ」

「いや……味方の不始末を償うのも、仲間の務めだ」

ん？

なんか苛立つてる感じだなあ。
セリフと表情があんまり合っていないような気が。
1つ、カマかけてみるか。

「えっと、もしかして僕を拘束するのに反対だった？」

「当然だ！ 騎士道精神があるなら、あのようなマネはしない！」

ああ、なるほど。

この作戦そのものが、必ずしも全員賛成じゃなかったのか。
っていつても、せいぜい源とクリスティアーネ、委員長くらいかね、
反対したのは。

ガクトくんはノリノリだったみたいだし、そうなると師岡くんも助
けてくれなさろう。

川神は頭悪いから理解できないだろうし、椎名が直江の案に反対す
るとは思えない。

まあ、バカが多いから多数決になったんだろうね。
普通はあそこまでやらんわ。

「そもそも、自分は大和のああいうところがダメなのだ。

あのように策を巡らせ、源殿や犬や私に対する慈悲の心を育ませ
ようなどと……」

「あつ、バカ！」

なんかクリスがベラベラ喋って、源が止めてるけどさあ。

丸聞こえだよ、この距離だったら。

ああ、そういう作戦だったか。

僕を疲弊させて、手を貸して、特定のメンバーに手を出しにくくしよう。

最終戦には、少なくとも源、川神、クリスティアーネが出場すると。そういう算段だったのか。

他の連中が何もしてこないわけだ。

最終戦で3人の相手に手を出しにくくなれば、やりやすいもんなあ。

多分、由紀江ちゃんだろ。

僕に甘いところがあるって教えたんだろうなあ。

いや、自覚はしてるさ。

詰めが甘いときも少なくないし、何より知り合いに甘い。

手を貸して貰ったら、何とか1つは礼を返しておきたいし。

そういう性分だからか、付け込まれたりするんだろうか。

あのエロバディめ。

そろそろ痛い目見え見たるか。

具体的にはそう……由紀江ちゃんが持ち逃げしたエロ本のタイトルばらす。

よりによって僕が一番アレだと思ってた本持っていきやがって。

「おい、次の勝負だけど、水着対決だつてよ」

なんて報復の手段考えてると、ガクトくんが伝えに来てくれた。

でも、水着対決って割には嬉しそうじゃないなあ。

カワイイ女の子の水着が拝めて眼福なんだよ？

誰が出てくるか気になるところだけど、誰が出てても微妙なラインだなあ。

不死川が出ることはないだろうけど、マルギツテなら見栄えするだろうね。

やっぱり榊原が初戦に出たことが残念でならないよ、うん。

「ただし、男のだ」

……それは不愉快だね。

ボルテージが一気に最下層にまで達した気分。

なんか『ワシだって我慢しとるんじゃ！』とジジイの声が響いてくるけど無視。

悔しがるくらいなら、始めから女子の水着対決のクジだけ入れとけ。

「ま、ここは俺様の出番だろ」

ガクトくんなら妥当だろうね。

ていうか、他に男子で水着審査できそうな連中がいないし。

源か風間を出せば有利なんだろうけど、最終戦に使いたいだろうからなあ。

さっきの作戦の内容からして、源はもう最終戦に出るのが決まっている。

風間は……肉体美ってガラじゃないだろうよ。

ガクトくんが出てくれても一向に構わない。

だって、ガクトくんじゃ勝てないだろうから。

知られてないけど、実は九鬼と井上がイイ体つきしてる。

僕には敵わないにしても、引きしまつて均整がとれてる感じ。
まあ、九鬼は中国拳法やってるらしいし、井上も何気にボクサーだからね。
デカイだけでカットの甘いガクトくんじゃ、流石に苦戦するでしょ。
こう言う勝負なら、僕でも勝てただけだなあ。
葵もミスったと思ってるんじゃないかなろうか。
今となつちやどうでもいいんだけどさ。

で、結局ガクトくんが出ることになったらしい。
ていうかさ、なんでビキニパンツの予備があるんだよ、このクラスは。
やっぱ、どっかオカシインじゃなからうか。

で、ガクトくん。
グラウンドのど真ん中に立って、筋肉ミチミチいわしてる。
ダブルバイセップスからのマスキュラー……どうやら本気だね。
ガクトくんの武器である胸筋を、思う様に見せつけてやがる。

足がおろそかなのは、むしろアピールしたくないからかなあ。
上半身に偏り過ぎなんだよ、ガクトくんは。

なんで僕がガクトくんの批評ばかりしてるかって言うと、理由がある。

もう、Sクラスの負けが確定してるからだ。

誰だよ、袋谷フクロタニとか選んだバカは。

あの太いだけの自称『ハリー・ポッチャリ』出しゃがったバカは！
勝・て・る・わ・け・が・ね・え・だ・ろ！

あの意味もなく脂肪の乗った体を自慢げに晒しやがって。

あゝあ、もう僕、Fクラスに残る準備した方がイイかも。

ガクトくんを中心に適当に交友関係続けてれば、2学期までは持つ
だろ。

本気出せばトップ10は固いんだから、自力でもSクラスに戻る
わけだし。

ただ、不死川との時間が削られるのが身を削るようにキツイなあ。

「ねえねえ、ちよつといい？」

つて声をかけてくる川神。

貧乳、ブルマとイイ感じだけど、Sっ気が足りない。

まあさ、そんな批評はどうでもいいんだけど。

重要なのは、川神が申し訳なさそうな顔してるのと、左手にビニール袋持つてるの。

「いったい何の用かな？」

なんて聞き返すと、左手のビニール袋を突き出してきた。思うに、詫びってことだろうか。

さっきのクリステイアーネの言うところの作戦を実行するための。中を見ると……このタイミングで渡さなきゃいけないもんでもない。喉が渴きそうな鈴カステラが、2袋も詰まっていた。受け取ったんだから、帰ってから食うか。

「あの、ちょっと聞きたいことがあって」

「聞きたいこと？」

川神が、僕に？

僕に聞きたいことなんてないだろうに。

武術の話なんかは川神院の方がイイだろうし、個人的な興味もないはずだよな。

トレーニングメニューだって、あのルー先生に組んでもらってるんだし。

まさか、Sクラスの情報を聞き出そうってことだろうか。なんにしても、九鬼あたりに妬まれそうだなあ、コレ。

しかも、パイプイス持ってきて、僕の前に座る。

横に座らないってことは、試合は見させずに話を聞いてもらおうと。まあ、コイツ馬鹿だから、そこまで考えてるか知らないけど。

とにかく、目の前に貧乳ブルマが座ってる構図が出来上がった。

……九鬼がコツチ見てませんように。

「あのさ、君って、無道会館の港ミチヒロくんだよね？」

うわ、それ聞くか。

聞くんじゃないよ、そんなこと。

俺の事情知らないから聞けるんだろうけど、少しは気にしろよ。当時の無道会館の二枚看板の1人がさ、急に辞めたんだぞ。

それなりの理由があるだろうが、そういう時は。

別に、俺……僕が今さらグダグダ言っても仕方ないけどさあ。

今でも気にしてるんだから、やっぱ聞かれると気分悪いんだよね。

「そつだよ。無道会館の学生無差別級大会の決勝で負けた、港ミチヒロだよ」

「う〜……そんな覚え方はしてないんだけど……」

それは関係ないよね。

川神がどういう覚え方してたかは関係ないって。

僕が川神に言われた言葉で傷ついたって結果が重要な。

勝負だって、プロセスよりも結果が大切でしょ？

こういう人付き合いだってそういうことなんだよ。

「あのさ、どうして辞めちゃったの？ あんなに強かったのに」

「どつしてって」

……核心突くなあ、コイツ。

人の痛いところを平然と突いてきやがって。僕だって、辞めないで済むなら続けてたよ。まあ、イロイロ理由はあるんだけどさ。

悪い負け方したってのもある。

自分より弱い相手だと思って油断して負けるなんて、恥以外の何物でもない。

才能を努力で返せると思ってた僕が、自分の才能に足をすくわれたんだ。

これを恥と言わずして、何を恥って言うんだろうか。

怪我をしたってのもある。

そのときの試合の準決勝で、右手の親指の付け根、折っちゃったんだよ。

曲がるのが奇跡ってレベルの怪我らしくて、完治もしたんだけど。また怪我するのが怖くて、右の拳で相手を殴れなかった。

師範が負けたってのもある。

まあ、相手が相手だから仕方ないと思うけど。

例の川神院の師範代……シャカドウとか言ってたっけか。

それと勝負して、相手の左腕砕いておきながら、逆に左目やられたらしい。

視力低下で済んだってことだけど、急にいなくなっちゃったもんなあ、師範。

ブラジリアン柔術が忙しくなったっていうのもある。

そっちの師匠のガスタオンさんが、時期を同じくして死んだ。

いや、別に他流試合やってとか感動的なエピソードはないんだけど。

若いころの無理が祟ったのか、脳卒中で命を落とした。
息子のエリオさんがいたから、練習そのものには困らなかったなあ。
……そういう問題じゃ、ないんだけどね。

そんなもんは、まあ、取ってつけた理由だよ。

何より、本家の方から空手を辞めるように通達があつて。

歯ぐきから血が出るくらい歯噛みして、爪が手に食い込むくらい拳を握りこんで。

己を殺して、空手を辞めた。

でさ、本家が僕の空手を辞めさせたがつた理由つてのが笑えてね。

『分家ごときが、本家以上に出しゃばるな』だつて。

ただかたか柔道で2段、伝統派空手で2段持つてる程度の人間が貴重なんだつて。

その段だつて、本当はこつそり手え回して取らせたクセに。

その程度のクセに、僕は頭を下げて空手を辞めるしかなかった。

あ、ブラジリアン柔術は、そもそもやってるのがバレなかった。

あの馬鹿ども、柔道、剣道、空手、日本拳法くらいしか気にしてなかったみたいだし。

さすが、フヌケた貴族様は素晴らしい節穴をお持ちだった。

お陰さまで、シルヴァ柔術は鈍らずに続けられてる。

小西サブミッションスクールも、同じ理由で続けられてる。

まあ、そんなこと話しても仕方ないよなあ。

適当なこと言つてごまかしよう、うん。

「飽きたんだよ。ブラジリアン柔術の方が楽しかったし」

「本当に？ 本当に飽きちゃったの？」

しつこく聞いてくる川神。

だから、それでいいじゃんか。

別に、お前に関係のない話なんだから。

「本当だよ」

「飽きてなければ、今でも続けてた？」

鬱陶しい。

踏み込むな。

飽きたわけないだろ。

続けたかったに決まってる。

何もなければ、絶対に続けてた。

でも、もうどうにもならないんだから。

だから、僕の過去を引きずりだそうとするな。

「さあね。続けてたんじゃないかな」

「そっか……うん、ありがとね！」

何があるがたいんだろ？

もしかして『才能に限界を感じたから辞めた』とでも思ってたのか

なあ。

だとしたら、由紀江ちゃんに負けた時点で辞めてるって。まあ、その辺の事情も知らんのだろ。

由紀江ちゃん、余分なことはあんまり話さないもんなあ。

お前も僕も、負けたからって辞めるほど安い人間じゃなからうよ。いや……僕はそうだけど、川神は本当にそうなんだろうか。才能の限界を感じたら、もしかしたら辞めてしまうのかも。僕の知ったこっちゃないし、本人の好きにすればいいさ。

そんなつまらない理由で辞めたら、僕は軽蔑するよ、うん。赤の他人に軽蔑されたところで、どうってことないだろうけどね。

「勝者、Fクラス！」

あ、やっと終わったか。

出てきた瞬間に勝負決まってるんだから、とっとと終われっつーの。あと、Sクラスに戻れたら、とりあえず袋谷ボコす。

つたく、下手に時間かけるから、Fクラスの一部と仲良くなってしまった気が。

あの後、談笑だって勘違いした連中と盛り上がってしまった。

童帝様と、ガクトくんと、デカいのと、小笠原と、委員長と……ヤマンバ。

そいつらを加えて、7人と1匹で会話を楽しんだ。

いやあ、不死川と勉強のこと抜きにしたら、Fクラスの方が楽しいかも。

「やったー！ これで2勝1敗ね！」

なんて、僕に言う川神。

僕がSクラスの人間でも気にしないのかなあ。

その辺は好感持てるけど……Sっ気のない子は願い下げですつと。

「直江大和を指名します！」

つて、スツゴイでかい声で椎名が宣言。

さっきまで本読んでたのに、いつの間に……。

それはともかく、妥当だよなあ、クラスメイト取り返すのって。

司令塔だからってのもあるだろうけど、やっぱり葵が薄情に見えてくるなあ。

まあ、もともと嫌いだったんだし、これ以上評価下げなくてもいいか。

さて、僕にできることは少ない。

ココまでくれば、体力の回復くらいなもんか。

敵情視察って言っても、今やったって仕方ないし。

……あゝあ、早く不死川と話したいなあ。

6 話目 『蚊帳の外で』（後書き）

原作3戦目をそのまま流用しました。

しかも、主人公が見ていないので全然描かれていません。

4戦目も原作と似たような戦いになりますが……私の想像力不足をお許しいただきたく思います。

ご意見、ご感想、あれちょっと変じゃね？というところの指摘など、色々とお待ちしております。

7話目『最後の戦いの名は』

負けたので帰れません。

S組とF組の、仲間に対する扱いの差に涙を飲まずにいられません。……なんて戯言考えてみるけど、Fクラスが直江を奪還しても変じやない。

僕の役割は駒で、直江は軍師。

直江がいないと困るけど、僕がいなくてもどうにかなってく。だから、僕が取り返されなかつたのはおかしなことじゃない。葵に文句言える義理でもないけど……でも、葵は個人的に嫌い。コレっていう決定的な理由はないんだけど、どうしてもなあ。生理的に好きになれないとか、そういうレベルの嫌いなんだよね。

ああ、そうそう。

生理的に受け付けないと言えば。

「よーう、見たか？ 俺様の華麗な肉体美！」

なんて言いながら、勇ましく凱旋するガクトくんも受け付けない。汗が肌に浮いてて、見えて気持ちのいいもんじゃない。どうでもいいから服を着ろ。

「こりやもう、俺に惚れた女が行列作って待ってんだろ！」

な？ な？ とかいいながら、人の輪に寄ってくるガクトくん。で、もの見事に人の輪がバラけて、ガクトくんの周りに誰もいなくなつた。

行列どころか、仲間さえ距離を置いてくれる連帯感。

やっぱ、このクラスの連中はどっか変だと思う。

それはそれとして、ガクト君が哀しそうな顔してうなだれてるけどさ。

当然だよ、そんなもん。

そついう目に見えた性欲が女性を遠ざけるんだって。

あと、どうでもいいから服を着ろ。

それと、他の人と一緒に逃げた僕に迫ってくるんじゃない！

「みつ、港！ 俺様、頑張ったよな！ 頑張ったよなあ！？」

「はいはい、頑張ったから近寄らないでもらえるかな」

集団に紛れて逃げてきたのに追ってきたから、精神的にトドメを刺しました。

せつかくキレイどころと一緒に逃げたのに台無しだよ。

というか、僕じゃなくて風間ファミリーの連中に慰めてもらえ。

付き合いの長さとか、今の状況とかいろいろあるだろうよ。

しつこいけど、そろそろ限界だから服を着ろ。

さて、意味もなくガクトくんにとドメを刺したところで、僕は再び休憩をとることにした。

あまりの暑さと湿気で、体力が全く回復しないんだよね。これ以上酷くならないように努めるのが精一杯なんだけど……。正直、僕が5戦目に出るんだったら、今の状況はマズイ。体が動かないってことはないけど、100%で動くわけじゃない。多少クタクタするもんだから、間合いを間違えるかもしれないし。その、間合いを間違えるのが致命的になるんだよねあ。

「あの……港くん？」

その声に振り返ると、困った顔した師岡くんが。そっぴや、師岡くんこそガクトくんを慰めに行くべきじゃなかろうか。

聞くに、小学生時代からの付き合いらしいしさ。そんなこと言ったら、風間ファミリーのほとんどがそうなんだけど。とりわけ付き合いが古いのが、ガクトちゃんと師岡くん。

そういつことだそつな。

「なにさ師岡くん」

「その……さつきとか、ちょっとやり過ぎだよね？」

「いやいや、謝ってくれたならそれでいいよ」

謝った奴はね、とは付け加えない。

大体さ、師岡くんには恨みがないんだよね。

記憶にある限りじゃ、リンチまがいのときもいなかったし。

もともと受動的な子みたいだから、肩肘張って八つ当たりすることもないさ。

「ハッキリ言えば、風間ファミリーと敵対するつもりもないしね」

「へえ、そうだったんだ。その割には、ガクトもキャップも倒しちやっただよね」

お、雰囲気が変わった。

殺気っていうか、こりやまだ敵意か。

急に敵意なんか振り向くんだもん、ちょっとビックリ。

笑ったまま敵意を向けられるタイプなんだね。

うわあ、こういうタイプはネチツこいんだよねあ。

しかし、安いなあ師岡くん。

椎名と比べることもないほど程度が低いよ、うん。

いや、椎名も椎名で安いんだけどさ。

本当に殺そうと思うんだったら、殺気は隠さなきゃ。
殺気を隠したまま、カレーでも食いに行く感覚で襲えなきゃ。

「これでも格闘家の端くれだからね。手加減こそ失礼と思ったんだよ」

「ふーん。ま、どうでもいいんだけどね」

嘘つくなって。

気になってないのにそんな質問するかよ。

まあ、ちょうど良かった。

次の勝負がどうなるかわからないけど、僕にもできることが増えた。
軽く揺さぶってみるか。

「なんだ、ガクトくんから聞いてないのか」

「聞いてないって……何をさ？」

ほら、食い付いてきた。

こういうところがダメなんだよなあ、きつと。

もしガクトくんと同じことをしても、ガクトくんの方がマシかも知
んない。

下手に頭使わない分、こういうことに惑わされないだろうからね。

こういうときは、思い切って無視するのが一番なんだから。

「いや、聞いてないなら結構だよ。僕の口から話すようなことじゃ

ないし」

そういつて、僕は適当なところに逃げてみた。

やっぱ安いよね、師岡くん。

遠くに移動してからチラツと見たら、もうソワソワしてた。

誰でもいいんだよ、誰でも。

少しでもくさびが入れば、必ずどこかで歪みが起きる。

その歪みが致命的になるかどうかは……まあ、楽しみに待とうか。

まあ、そんな風に簡単に済まされちゃうくらいには、面白くなかったんだけどさ。

面白くはなかったんだけどさ。

いやあ、内心で思いつきり笑っちゃったよ。

まさかさ、師岡くんが4回戦に出ることになるなんて思わなかったんだから。

本当はさ、あのメガネが出るはずだったんだよ。

そのはずだったんだけど、師岡くんが出しゃばった。

『あれだったらゲーセンで何度もやってる』なんて言っちゃってさ。本当は精神的にガタガタなのに、無理しちゃってさ。

実力出し切れなかったんだろうけど、負けちゃったんだよね。

まあ、どの程度の実力があつたか知らないけど。

結果が全てなんだから、この程度が師岡くんの関の山ってことなんだよ。

それより幸いだったのは。

ようやく僕が、2・Sの陣地に帰れたことだ。

「よお、おつかれさん」

いの一番に挨拶してきたのは井上。

僕を助けてくれた功労者だ。
うん、裏切り者連中とは別格に扱っていい。

「いやいや、手をかけたね」

「本当だよ。君を助けるためにわざわざぶふお!？」

いきなりだけどもムカついたんで、源から借りてるタオルでビンタ。汗とミネラルウォーターが染み込んで重くなってるから、きつと痛いだろうね。

……いや、絶対痛いか。

今、すっごいイイ音したもんなあ。

鞭かなんかでシバいたのかって感じの。

とりあえず黙ってる、自称ハリポッチャリめ。

「な……何するんだよ!」

「役立たずのクセに調子こいてんじゃねえよカス」

と、スパーリング以外で珍しく睨んでみたり。

怖いらしいんだよね、スパーリングやる時の僕の顔って。

本田さんから「何? 俺のこと殺すの?」って引かれたもんなあ。

余裕がなかったら、みんな似たような感じになると思うんだけどね。

まあ、袋谷もビビってるみたいだし、ホントに怖いのか。

再確認できてよかったよ、うん。

「いやあ、驚きましたよ。メンチ切りも得意なんですね」

「うるせえよ、この薄情モンめ」

葵にもビンタくらい入れてやりたかったけどさ。

榊原の体操服がちょっぴり透けてたから、これくらいで勘弁してやるよ。

まあ、あんまりやり過ぎると、不死川からも印象悪いだろっしね。

「よかったな、葵」

僕は葵を軽く睨んで、もう一言だけ言ってやった。

「この鬱憤は、次の試合のためにとっておいてやるよ」

……まあ、これが精一杯の悪態だよなあ。

小物っばい僕にはピツタリだ。

「ッハハハハハハ！ 帰って来たばかりなのに猛っておるな、庶民B！」

「そいつはどうも」

「ん？ どうした？ 急に元気がなくなってきたではないか」

「熱中症気味だね」

オマエらがトロかったせいだよ、とは言わない。
というか、コイツにだけは、まだ悪態すら付けない。
下手なこと言ったら、僕の両手首の腱がメイドにカットされる。
そんなシュールな原因で柔術できなくなったら、泣くに泣けんしね。

「いかなな……ミネラル分と水分の補給が必要だ。あずみ！」

「ハイツ！ 英雄様！」

うわ、考えてる傍からメイドが来やがった。

……どこから来たんだろうか。

今、突然視界に現れたって感じたのは、僕の錯覚かなあ？
いや、気にするのは止めておこう。

何を言ったところで、何が変わるわけでもないんだし。

「どうぞ、庶民B様！ 九鬼秘伝のハチミツレモンです！」

「ああ、どうも？」

あれ？

こういうときって、ハチミツレモンであってるんだっけ？

いや、疲労は取れるしカロリーもあるんだろうけど。

これって、ミネラル分とかあったっけ？

あと、僕はレモンで喉が渴くタイプだから水が欲しいです。

「それと、こちらが海洋深層水になります!」

と、水入りのペットボトルまでもらった。

まあ、ミネラルウォーターだよな。

水道水よりはミネラル多いし……まあ、いつか。

「恵んでやんだから文句垂れんじゃねえぞタコ」

ああ、そうですか。

これしか用意がありませんでしたか。

多分、僕のいない間に九鬼に全部使っちゃったんだろうね。

そりゃ、いくら万能メイドって言っても急な要望に对应できないときはあるよね。

こうやって乗り切ってるってのは、正直、知りたくなかったけど。

ハチミツレモンをシャブシャブやりながら、ペットボトルに口を付ける。

6枚あったタッパーの中身も、ペットボトルの水もすぐになくなった。

いやあ、案外ヤバいレベルで疲労してたんだね。
ハチミツの甘さもレモンの酸っぱさも、そんなにキツく感じなかったし。

水も、あつという間に五臓六腑に染み込んだ。

これは九鬼と忍足に感謝しとかないとね、うん。

「やっと一息つけたようじゃな」

「いや、まっただよ」

いつの間にか隣のイスに座ってた不死川。

あゝ……やっと話せた。

ようやく心の底から癒された感じだよ。

ハチミツレモンいらなから、不死川連れてきて欲しかったね。

「しかし、本当にふざけたマネをしてくれたもんじゃ。

あんな拘束具に固定しておくなど、正気の沙汰とは思えん」

「まあ、次の試合でノシ付けて返してやるさ」

うん、嬉しいなあ。

不死川が、僕のために腕を組んで不機嫌な顔して怒ってくれるなんて。

こりゃ、2-Fの連中に感謝しないとな。

不死川と親しくなってる3カ月もしいのに、こんなに想ってもらえるなんて。

愛し合ってるわけじゃないけど、心配してくれるだけで今は充分だよ。

次の試合は、下手な希望を抱かないように確実に仕留めてあげよう。

なんて幸せに入り浸っていると、本日5度目のジジイの声が。不死川が隣にいるからか、それとも疲れてるからか。声は大きいのに、ちっとも耳に響いた感じがしなかった。

「第5回戦は……おお！？まさかこれが来るとは……！」

引っ張るな、ジジイ。

だから、お前のその演出は面白くない。

期待感を煽るところか、不快感しか増幅されないし。大概イイ歳なんだからさ、分相応って言葉を学べってんだよ。

「第5回戦は……川神ラビリンスじゃ！」

川神ラビリンス？

ラビリンスってことは、迷宮のことか？

どうやれば迷宮が体育祭に関係してくるんだろ。

「なあ、ジジイ。この種目、私の記憶にないんだが」

なんて川神百代が言ってるけど、忘れてるだけだろ。武力に反比例して脳ミソ軽いつて噂だし。

で、川神百代を無視して、ジジイが言葉を続ける。

「これは十分な準備が必要なため、明日に時間を設ける！
グラウンド全体を使用し、明日の10時に試合を開始する！
また、ルール説明は9時に行うので、選手は遅刻せんように！
観戦したい者は、ちゃんと準備しておくので教室で待機しておく
んじゃぞ！」

……まあ、詳しいことは明日になれば分かるか。
どういうけつたいたいなルールか知らんけど、武力が絡んでくるんだし。
4回戦で井上が使えなくなった今、僕は最終戦で必要不可欠な駒に
なった。

今使える戦力で武力に抜きん出てるのは、マルギツテ、不死川、僕
の3人。
あと、ちゃんとした師から中国拳法を学んでいるらしい、九鬼英雄。
バカのいないSクラスだからこそ、武力だけでメンバーの選抜がで
きるわけだ。

ありがたいことに、十分な体力の回復もできる。
普段から鍛えこんでるんだ。
これくらいの疲労だったら、しっかり栄養取って寝れば全快するは
ず。

あ、ストレッチしておかないとね。
トレーニングは……明日が本番だし、今日くらいは休むか。

とにかく、これでやっと僕の番が巡って来た。

最終戦に、あの直江大和が出ないなんて言うのは考えられない。
ってことは、アレを武力で捻じ伏せる機会があったりするってこと
だよな。

これで、思う存分Fクラスの連中に意趣返しができるよ。

いやあ、本当に楽しみだ。

不死川にも、これでもかかってくらいアピールできるかもしれないし
ね。

7話目『最後の戦いの名は』（後書き）

都合、4戦目は割愛させていただきました。

ゲーム対決っていうのが書き辛かったのと、この章は第5戦目になりのウエイトが乗っているからです。最初、川神大戦ではなく、この『川神ラビリス』1本で行く予定でしたので。

草案はありますが、執筆に時間がかかるかもしれません。

もったいぶって申し訳ないですが、あと1話のクッションを置いてから第5戦目の開始となります。

大変申し訳ないですが、もうしばらくお待ちいただけたら幸いです。

8話目『戦いの火蓋』

今日は寄り道せずにとっとと……いや、スポーツドリンク買ったから帰った。

極端にミネラル分が不足してるから、多めに取ろうと思ってさ。

で、アパートの前まで来ると。

やたらデカイアパートの庭の掃除をしてる管理人さんが。

草をむしるのが面倒なのか、芝刈り機でサクサク草を切り飛ばしてる。

タンクトップ、長めの金髪、筋肉モリモリ。

そこに芝刈り機と麦わら帽子が混ざって、ちょっとシユールな光景だ。

なまじ顔がイイからキマってるけど……やっぱり不思議な組み合わせだよなあ。

「おう！　しっかり日焼けしたなあ！」

などと、管理人さんが声をかけてくれた。

日焼けしたっていつても、赤くなっただけ。

僕、メラニン色素がでにくい体質だから、黒くなりにくいんだよ。

それでも、ここ数年でどうにか黄色人種っぽい色に近づいてきた。

まあ、まだまだ白いんだけどね。

それと月雄さん。

僕に近づくのは、芝刈り機を止めてからにしてください。

「ずっと太陽の下でしたからね」

キツチリ小麦色な肌をした管理人さん。

身長が僕よりちょっと大きいくらいなのに、体重が100kg超え。ジムで必要以上に鍛え上げた体は、動き辛そうなほど盛り上がっている。

穴掘りとか道路工事やってる人だし、これくらいでもいいのかなあ。

「ま、若い頃は太陽の下で動くのが一番だろ」

「炎天下じゃなきゃ大歓迎なんですよ」

なんて、いくつ言葉も交わしてから思い出したんだけど。

「月雄さん、弁当ありがとうございます」

空になった弁当箱を、その場で返しておいた。

今さらだけど、肉タツプリの弁当作ってもらったんだよね。

去年もらった『胃液が良く出る薬』だか飲んでなかったら、確実に胃もたれしてた。

それでも、好意で作ってくれたんだし、美味しかったから文句なし。

「おお、アレ全部食ったのか？ 多すぎだと思ったんだけどな」

『腹痛くねえか？』って聞いてきますけどね、月雄さん。

半分は昼に食べて、半分は帰り際にかき込んできたんですよ。
お陰さまで、今、僕の胃袋はいっぱいいっぱいです。

「いえ、美味しくいただきましたよ」

『ついさっきね』という嫌味は言わないよ。

世話になってる人に、そんなつまらんことを言うほど腐ってないさ。
実際、僕がおいしいって思う程度には味が良かったし。

1人暮らし長いせいか、飯は旨いんだよなあ、月雄さん。

……集金とか、お金を扱うことは苦手みたいだけど。

「で、どうだった？ ちゃんと勝ってきたか？」

「いえ、それなんですけどね。」

なんか明日に延長するらしくてですね。

残念なことに、まだ決着がついてないんですよ」

そんな話を聞いて、月雄さんは思案顔。

いったい何を考えてるんだろうか、ちよつと気になる。

買ったらパーティー、負けたら残念会でもやるつもりだったんだろ
うけど。

本当に申し訳ないことに、勝敗がお預けだもんなあ。

月雄さん、日持ちのしない食べ物とか買ってないといいけど。

「そうか……明日か」

なんか考え事してたから、そのまま失礼した。

まあ、月雄さんの思考ロジックってよくわかんないし。

僕のこと気遣ってくれてるにしても、まだ知らないフリしとくのがいい。

だってさ、盛り下がるかもしれないじゃんか。

だから、そつと足をとを殺して、アパートの自分の部屋に帰った。

そつからはまあ、スポーツドリンク飲んで、買いだめしてた水飲んで。

いつもより緑黄色野菜の多い晩飯作って、6時くらいには食い終わった。

管理人さんからもらった飯の分も合わせてかなり食ったけど、別に問題ない。

胃腸薬は飲んであるし、体調整える意味で多めに食ったんだし。少し無茶したくらいで参るような胃腸はしてないからね。

で、管理人さんの知り合いからもらった秘伝の軟膏塗って。珍しく10時前に寝て。

脇に、タオルでくるんだ保冷材を挟んで。

クーラーを使わずに、扇風機だけで一夜を過ごした。

色白巨乳ブルマものは、また今度ってことで。

体調はすっかり回復した。

日焼けも大分収まって、昨日とは比べ物にならないくらい赤みが減ってる。

……凄いなあ、尾張忍者って。

意識はすっかり、体力MAX。

ストレッチもしてきたから、体の動きもイイ。

ハチミツやらで栄養も過剰摂取してきたから、ガス欠もない。

ゼリー飲料なんかも用意してるから、試合前に補給もできる。

コンディションから言えば、今日の僕は完璧に近い。

あと、今日はジャージ以外に空手着と柔術着も持ってきてる。

なんか後から追加で連絡があっただけだよ。

『1番動きやすい服装で来るように』って話だったんだよね。

だから、空手着と柔術着を用意した。

場合によっちゃ、そっちの方が戦いやすいし。

それに、格闘技やったことある人はわかるかもだけど、全然違う。

いつも戦ってる時の服装ってだけで、実力が4割は増した気になる。

手足の動きや、技の掛け方。

その時の布の感覚も込みで体が覚えてるから、やっぱりその服の方が
イイ。

最近、小西サブミッションスクールでラッシュガードなんか着たり
もするけど。

でもやっぱり、空手着か柔術着が僕のユニフォームってことで。

で、いつも通り、朝一番に登校してきたら。

黒い壁が、グラウンドに広がっていましたとさ。

まあ、壁っていつても、多分これは立体だ。

え〜っと……パツと見だけど、100m四方くらい。

高さが3mくらいの、そんな感じの箱、なんだろうか。

たった一晩で作れる建造物とは思えないほどの出来だよ、うん。

……実はハリボテとかいうオチは嫌だよ。

「もう来ておったか」

「まあ、いつもこれくらいに登校してるしね」

もうっというか、僕はいつでもこれくらいに来てるんだけど。

僕に5分も遅れないで不死川が登校してくるっというのは珍しい。例の迷宮が気になったんだろうね、きつと。

まあ、昨日だつて『詳しいことは明日』ってことだったし。

1日経つと繊維にも影響しかねないもんね。

「しかし、やたらと大きいね」

それっぽい話題がないから、見たまんまのこと言ってみただけさ。本当にでかいんだよね、コレ。

数字で言えば、100m四方で高さが3mくらいの立体。

実際目の前にすると、押し潰されそうっというか、変な圧迫感が。もしココを使わなくていいなら、可能な限り拒否したい感じ。

「うむ。恐らく、この中に入って戦うのじゃろうが……」

この様子からするに、不死川も似たような感想みたい。

不気味だけど、その不気味の正体が分からないって感じの。

そっという類の不思議な感覚が、少しずつ少しずつ広がっていく。未知のモンに対する警戒心かなあ。

「ラビリンスって言うからには、迷路の要素があるんだろうね」

「そうじゃな」

……生返事だなあ、不死川。
緊張してるんだろうけど、ちよつと妙。

そりゃ、最終戦のメンバーに選ばれるのは決定してる。
全国レベルの柔道使いの不死川だったら、まず間違いない。
だから緊張してる、ってわけでもない気がするんだけど。
そもそも、不死川ほどの人間が、この程度のことでも緊張するのかなあ。

「おや？ お早いですね」

舌打ちしたくなるような声ってことは、葵か。

案の定、声の方を見ると、葵と井上と榊原の3人が。

僕と不死川の淡い時間を邪魔しやがって。

敵だったら、事故に見せかけて大怪我させられたのにね。

「おはようなのじゃ」

「やあ。3人ともおはよう」

なんて、僕も不死川も社交辞令として3人に挨拶を返す。
……そう、3人いるんだ。

葵にピンポイントで挨拶なんてしたくない。

だいたい、昨日だって僕の救出を後回しにしやがって。

戦略とかじゃなくて、義理とか責任感で動けってんだよ。

「で、なんで3人とも早いのかな？」

「いやな、そろそろ2・Fの連中も来ると思うぞ」

メンバーの申告があるからな、って言う井上。

え〜……まだ7時15分ちよつとだぞ、オイ。

こんな時間に申告させるとか、どんだけ急ピッチなんだよ。

ルール説明前にメンバー申告とか、今回の川神戦役で初めてじゃな
かるうか。

というか、井上と榊原が早い理由になつてない。

この2人は、1回戦と4回戦に出ちゃってるんだから。

今さらココにいても、正直やることないと思うんだよね。

それとも、僕が思ってる以上に、この3人って付き合いが深いのか
なあ。

まあ、今はどうでもいいんだけど。

「最終戦のメンバーですが、港くんと不死川さんも入っていますよ」
な〜んて、すました顔して言いやがる。

まあ、井上と忍足、榊原が使えないから当然でしょ。

この3人のうち2人が残ってたら、僕か不死川が出れなかっただろ
うけど。

葵とマルギツテは決定だろうから、あと枠が3つ。

その3枠を争うメンバーが、僕と不死川と忍足と榊原と井上。いきなりフルメンバーで始まってたら、出場すらできないところだったよ。

これだけ揃ってりゃ、僕も不死川も出る幕ないもんなあ。とりあえず、なにはともあれ僕は最終戦に出れるんだ。適当に、気のない返事くらいしといてやるか。

「そいつはどうも」

僕が先に答えたからか、不死川は返答しない。

ただ顎に指を当てて、少し下を見て何かを考えてる。

榊原に『ヒミコ様〜!』とかやられても、全然気付いてないし。

……やっぱ変だよなあ。

こういうとき、真っ先に頭に乗ってデカイこというタイプだったよ。うな。

ここ何ヶ月かで急激に変わるってこともないだろうし、ホント何なんだろう。

まあ、きつと何かあったんだろうけどさ。

それをいちいち聞いて、だからどうってこともない。

僕だって、まだ聞かれないほどがあるから、不死川にも聞かない。

自分は嫌だけど他人にはやるだなんて、そんな理不尽なことはしたくないからね。

「じゃあ、残りはマルギツテと九鬼か」

「はい。お察しの通りです」

やっぱ九鬼が出るのか。

いやあ、九鬼が戦う姿が想像できんなあ。

何年前前はイイ顔してキャッチボールする奴だったけどさ。

コッチの領分に踏み込んでくるなんて、微塵も想像してなかった。

そんなに期待してないけど、そこそこには頑張っただけだ。

で、マルギツテ。

コッチは得体が知れないけど、戦力的には申し分ない。

まあ、話したことないから、得体が知れないのは仕方ないとして。

軍人であり、武器術も肉弾戦もこなし、射撃もでき、まだ底がある。

どんだけハイスペックか知れないけど、欠点もある。

もし……もし、最終戦にクリスティアーネが出てきたとして。

果たして、マルギツテが加減しないって保証があるんだろうか。

実力よりも、そういう『情に流されないかどうか』ってところが心配だよ。

「では、先に教室に向かって下さい」

そろそろ彼らが来ますからね、なんてキザな雰囲気でおっしゃって下さった。

彼らつてのは、多分2・Fの連中のことなんだろうね。

悪い連中じゃないけど、そこそこはどうでもいい。

そこで問題なのは、連中が僕の敵だっということ。でもって、僕が敵を全力で潰しにかかる人間だっただけさ。

まあ、どうすべきかは分かってるんだ。

全力で戦って、全力で潰して、全力で勝ちに行く。ルールがどうだろうが、そうするだけなんだから。

で、教室で時間を潰して、今まさに9時30分。

葵と九鬼、僕と不死川とマルギツテは、運動場の朝礼台の前にいた。

葵はジャージ、九鬼は金の制服、マルギツテは軍服って格好。

僕は柔術着を選択して、不死川は桜色の着物姿だ。

2-Fの連中も似たようなもん。

直江、川神、源、風間、クリステイアーネ。

葵が予想した通りのメンバーが、僕らの右側に固まってる。

ブルマ2人とジャージが3人。

まあ、普通はこういう格好になるよなあ。

そんな僕らを満足げに見据える、朝礼台の上のジジイ。いつも通りマイクなど通さず、たった10人のために声を出し始めた。

「では、両チーム揃ったようなので、ルールの説明を行っぞ」

「お主らには、もう分かっと思っが、そこの迷宮で戦ってもらう」

そこ、ってのは僕らの後ろのことだろう。

妙な威圧感を放ってる、鈍く黒い外観をした迷宮。

ってことは、少なくとも迷路状の構造をしてるってことの言質が取れたわけだ。

ルールと構造によって、大きく戦術が分かれそう。

「まず、両チームの全員に、この携帯端末を持ってもらっ」

なんか折り畳めないケータイ電話みたいなの。

そんなのを右手に持って、全員に見えるように掲げるジジイ。

携帯端末っていつか、見るまでもなく、まんまケータイ電話なんだけど。

「この端末にはポイントが振ってあってな。10分経過することに再装填される」

「で、そのポイントを何に使うかということ、主にエリア間の移動に使ってもらう。」

扉を1枚通ることに、端末が自動的に1ポイント引いてくれる。同じ扉の場所を往復したならば、ちゃんと2ポイント引かれるようになっておるぞ」

「まあ、主にと言ったのには理由があつてじゃな。他にも、少々特殊な行動をとる際にはポイントの消費が必要となる」

なんか、細々した話が15分くらい続いたんだけど。簡単に説明すると、こういうことだ。



勝負の場所は、20×20マスの仮想迷宮。

両チームは対角線上からスタート。

1～20、A～Tまでの組み合わせでエリア番号が振られている。

そのため、2-Sが『1-A』から、2-Fが『20-T』からのスタートとなる。

各エリアに扉は2枚以上あって、その扉からエリアを移動し戦う。固まって行動する必要も、バラけて行動する必要もない。また、迷宮の各エリアには、そこがどのエリアか内部の壁に記されている。

更に、迷宮内に12の武器が置いてあるとのこと。武器は基本的にレプリカで、どのエリアに何があるかは事前に知らされない。

加えて、以下のようなコマンドが用意されている。ポイント消費することで、以下のコマンドを実行できる。また、各端末は初期値として基礎ポイントが10ポイント割り振られている。

譲渡：ポイント消費なし。

任意の端末に自端末の基礎ポイントを譲渡する。

通信：2ポイント消費。

同グループの端末の1機と通信可能。

該当する端末が他の端末と通信中の場合は、通信失敗となる。この際、ポイントは戻らない。

解錠：2ポイント消費。

同エリア内の武器ボックスを開けられる。

解錠の宣告後に、エリア名とボックスに書かれているナンバーを申告すればよい。

警戒：4ポイント消費。

敵グループの端末が3エリア以内の移動可能範囲内にいるか感知。

対象がいた場合にはアラームが鳴り、いなかった場合には反応しない。

また、対象を感知できなかった場合でもポイントは引かれる。

施錠：6ポイント消費。

現在いるエリアの扉の1つを封鎖。

効果は1ターンの間のみ。

隠密：7ポイント消費。

敵グループの端末の『警戒』を無視できる。

効果は1ターンの間のみ。また、使用中は『通信』を使用できない。

策敵：7ポイント消費。

警戒と同じ効果だが『隠密』の敵端末を発見できる。

突破：12ポイント消費。

全エリアの扉をポイント消費なしで通過できる。

効果は1ターンの間のみ。次ターンのみ、基礎ポイント半分からスタート。

半分になった場合、ポイントの小数点は四捨五入される。

放棄：ポイント消費なし。

全基礎ポイントを捨てる。

今後、ゲーム中に他のプレイヤーに対する一切の接触を行ってはならない。

これが確認された場合、ルールを破った側の敗北が決定する。



勝敗の決し方は簡単。

相手のリーダーの端末を『放棄』すればいいんだってさ。

つまり、端末を奪うために戦う必要が出てくるわけだ。

相手を倒さなくてもいいんだったら、僕にとって極めて有利なルールだ。

あ、それと、なんか端末が電話の代わりにもなってるらしい。

で、それで本部に連絡すると、要求したコマンドを実行してくれる。

この本部への連絡は『通信』に入らないらしくて……ゲームかつつーの。

これ、どう見たって遊び心が入ってんだけど。

「服装は自由じゃが、あからさまに武器になりそうなモノの持ち込みは認めん」

なんて連絡するもんだから、僕と不死川が有利になった。そんなことを急に通達しなけりゃ、もう少し2-Fが有利になったのにね。

柔道と柔術で共通の話だけど、自分の服を使った技がある。

それを充分に使うことができるし、もっと言えば、僕は帯も武器として使える。

僕の服装が注意されないってことは、帯は持ち込んでもいいってことだ。

つまり、帯を使っても文句は言われないうってこと。

持ち込みを認められたものを使用するだけなんだから、きっと文句も出ないさ。

「では、今から10分後に迷宮に入ってもらおう！」

両チーム、決して驕らず、全力を以って戦うように！」

言われるまでもない。

この10人の誰もが、今すぐ戦っても問題ないほどキレてる。

テンションは十分、気合が空回りしてもいい。

僕も、学校行事でここまでテンションが上がったのは初めてだよ。

望み通り、やってやるうじゃないか。

源でも、風間でも、クリステイアーネでも、川神でも、直江でも、誰と戦うことになっても、さっさと片付けてやるよ。

僕が……俺が、全力でな。

8話目『戦いの火蓋』（後書き）

長くなりますが、次回からようやく川神ラビリンス開始です。
ややっこしいルールですが、なんとか頭使って書かせていただきます。

要望がありましたら、次話としてルールの簡易説明を載せておきますので『ルール細げえんだよ!』という方は是非おっしゃってください。

『細げえこたあいんだよ!』という方は……次話をお待ちください。

9 話目 『狭き部屋』

試合開始前に配られた端末は、ナンバーが振られてた。

『S-L』 『S-1』 『S-2』 『S-3』 『S-4』 の4つ。

S-Lがリーダー用端末って話だけど、外見からは見分けがつかない。

まあ、端末の画面の裏つかわのボディ部分に書いてあるんだけど。

専用の腰につけるポーチ配られてるから、そこに突っ込んでおくんだろっし。

ルール上反則じゃないから、僕は柔術着の内側にポーチ付けるけどね。

で、柔術着の内側にポーチを付けて、ギョツと帯を縛ったところで。

「この勝負……5対5と考えるのは早計です」

なんて、開始の5分前に葵がぬかしやがった。

「……説明しなさい」

丁寧語なのか命令口調なのかよくわからん。

マルギツテって、こんな話し方する奴だったのか。

しかし、キツイ語調の割には顔に感情が出ないよなあ。

そういう訓練してきたのか、元からそういう風なのか。

まあ、大して興味ないけど、仲間に仏頂面されても気分は良くないね。

で、それはともかくとして。

マルギツテの言葉に『もちろんです』とか言つて、葵が説明を始めた。

「先ほどのルールからするに、仲間内でのポイントのやり取りが許されています」

まあ、『譲渡』なんて任意の相手にポイントを分けるルールがあるくらいだし。

話からするに、奪った端末から申請すれば、その端末のポイントも……。

簡単に言えば、敵の端末を奪えば基礎ポイントも奪えるって寸法だ。そっちばっかに気が向いてたから、仲間内で譲渡するってのは気がつかなかったよ。

「つまり、強力な者に高いポイントを振って縦横無尽に動いてもらう。」

そして、残った者でリーダーを固めて、安全に迷宮を進んでアイテムを確保」

『そのように進むのが効率が良いでしょう』なんて、優等生ぶった

文言垂れやがって。

ムカツクことに、おおよそ正しいってのが余計にムカツク。で、さらにムカツク事実には、僕はもう気付いている。

「つまり、僕はリーダーを守る係ってことかな？」

「そういうことになりますね」

だよなあ。

ブラジリアン柔術って、守りに向いてるもん。

1対1なら絶対的と言ってもいい強さを誇るブラジリアン柔術。

特に僕の習ってきたのは、ルール無用の場から発展したシルヴァ柔術だ。

最近TVとかでやってる『リングの上のための柔術』とは完全に別モン。

1対1なら、何時間かけてでも確実に勝利する。

それがシルヴァ柔術の、基本で奥義で真骨頂。

そこまで知らなくても、僕が柔術使いつて知ってりや当然の判断。あれほど足止めに最適な武術は存在してないと思うね、僕は。

「今のところですが、英雄とマルギツテにメインで動いてもらうつもりです」

「妥当と判断します。その案を執行しなさい」

あゝあゝ、また上の方だけで勝手に話を決めちゃって。

不死川とか僕とかの意見は無視ですか。
九鬼は反対しないだろうけど……どうなんだろう？
一応、聞くだけ聞いてみようかなあ。

金ピカのスーツの背中に向かって一声。

本当は肩を叩いて声かけたんだけど、そんなに仲いいわけじゃないし。別に僕のことなんてなんとも思ってなかったらうから、簡単に声かけるだけ。

……嫌いじゃないんだけどなあ、九鬼は。

「で、九鬼は葵の案で構わないの？」

「無論だ。私の技も、たまに使ってやらねば錆びるからな」

やる気マンマンなわけか。

いい具合にテンション上がってるね。

それはいいんだけど……錆びるほどの技持ってるのかなあ。
よし、カマかけよう。

「中国拳法だっけ？ 具体的には何やってんのさ」

「4年前までは意拳を学んでいたが、今は酔拳を教えてもらっている」
「……妙な言い回しだな。」

意拳は『学んでいた』で上から目線。

酔拳は『教えてもらっている』で下から見上げてる。

つまり、酔拳を教わってる人間の方が尊敬できるってことか。

それとも、ただ単に意拳を教わってた相手とは、今、師弟関係にな
いからか。

「無論、この我が頭を下げて教わっているのだ。ただの酔拳ではな
いぞ」

ただの酔拳じゃないと。

まさかとは思うけど……いや、やめとこ。

普通じゃない酔拳には聞き覚えがあるけどさ。

それを知ったところで、敵対するわけでもないんだし。

うん、余計なことは聞かなかったことにして、目の前のことに集中
しよう。

「葵君。つまり、此方も守備に回るということか？」

「はい。港君と一緒に私を守ってもらいます」

まあ、当然か。

柔道の寝技で抑え込んだらええば、どうにかなるもんなあ。

僕もいるんだから、最大で2人までは同時に足止めができる。

こんな作戦を立てられるのも、マルギツテって絶対的な駒があるか
ら。

マルギツテに主たる攻撃を任せ、守りを固めつつ徐々に進行。

早い段階なら、武器を持っていないマルギツテの相手も、恐らく無
手。

素手同士の戦いで、マルギツテに勝てる奴が2-Fいるとは思えな

い。

可能性があるならクリスティアーネくらいだけど、それもわずかな可能性。

本気のマルギツテが本当に勝つつもりなら、クリスティアーネにも9割は負けない。

……と、思う。

問題があるとすれば、九鬼がいること。

もしこれが九鬼じゃなくて井上だったなら、勝ち揺るがなかった。井上の奴、飄々としてるけどビツクリするくらい強いんだよね。

まあ、総合的に見て不死川レベルか若干上回る程度。

僕と本気で勝負したとして、少なくとも僕が無傷で勝てる相手じゃない。

つまり、九鬼よりはずっと強いはず。

「では、そろそろ行きましようか」

時刻は開始1分前。

各々が気合を入れ、歩を進めていく。

さあて、不謹慎なことでも祈るか。

九鬼あたりが負けて、僕に出番が回ってきますようにっつと。

現在2ターン目。
スタート地点の1 - Aからいくつか移動して、今は2 - Eにいるところ。

561

「こちらにも動いた方がいいでしょうから」

つていうのは葵の言。

まあ、確かにそうだ。

武器が手に入る機会もあるかもしれないし。

もし敵が1人のときにあつたなら、2対1の形で確実に倒せる。

…… 僕1人で倒すのが理想ではあるんだけどね。

で、逃げるときの話もまとめてある。

葵の案だったのが、またムカツクんだけどさ。そのエリアから右手法で逃げるっての。

まあ、そうすれば確かに間違えない。

迷宮って話なら常套手段な気もするね。

せつかく3人で行動してるんだから、そんな心配があるとは思わないけど。

右手法と左手法が何か……って知識くらいは僕にもある。

壁に手え付けて、その壁から手を放さないように進む。

そうすると、必ず迷宮から出れるって方法。

まあ、時間はかかるかもしれないけど、間違いはないんだよね。

だって、迷宮って言ったって、別に出口がないわけじゃないんだし。あとは迷わないようにすればいいんだから、壁伝いは間違いじゃない。

たださ、これってビックリするくらい時間かかるんだよね。

間違いがない、確実にただけの話で、最短経路ってわけじゃない。

だから、相手も使ってくる可能性は低い。

あの直江がいるんだから、そんな単純な手段を講じるとは思えないね。

まあ、コッチは変則的に使ってるし、そういう意味じゃ効果的ではありそうだけど。

「しかし、武器が欲しいところですね」

会話がなくなつたところで、葵が一言。
さつきから会話が途切れそうになると、小マメに話しかける。
ストレスの軽減にもなるし、イイとは思っただけど。

「武器持つてたとして、不死川も僕も使いこなせんと思うぞ」

悲しいかな、有益な会話が全然できていない。
会話内容も限られてるし、仕方はないんだろうけどさ。

この話にしても、本当に意味がない。
葵は運動神経ゼロに近いから、武器があっても意味がない。
拳銃とか長くて重たい刃物の類でもないと、素手の直江にも負けそ
う。

僕の棒術も、正直言うと川神一子の薙刀より大きく劣る。
ナイフもちよこつと使えるけど、刃物が提供されることはないだろ
うし。
せつかく教えてくれたガスタオン先生には申し訳ないけどね。

あと僕が少しでも使えるのは……モンチャクにトンファー。
師匠に多少は感謝すべきなんだろうかなあ。

あの人、そのときの流行とか気分で教えるもんコロコロ変えてたし。
お陰さまで、空手に関しちや打撃以外は器用貧乏になっちゃったよ。

「ねえ、不死川」

「ん？ ああ、そうじゃな」

さつきから不死川がこんな感じ。

これがどうにも、調子が狂ってくる。

もしコレがいつもの不死川だったら、なんか反応があるだろうよ。

『此方らエリートに武器など不要じゃ！』とか言いそうなもんだけど。

なんていうか、ずっとテンションが微妙なところ。

気合が空回りとかじゃなくて、気合が入ってない。

まあ、敵が来たら僕が気張るしかないか。

こういうときに、下手に事情を聞いて引っ掻きまわすこともないよね。

と、いきなり電子音が響いた。

僕でも不死川でもなくて、葵の端末が。

ってことは、連絡は九鬼からだ。

緊急の事態じゃない限り、九鬼の連絡は葵に、マルギツテのは僕に来る。

試合開始前に葵が決めたんだけど、まあ、妥当だよな。

『通信』が失敗したら、無駄に2ポイント消費する。

リーダーの葵に連絡が集中した場合に、そういつつまらないミスが起こる。

これは、それを避けるための措置なんだろうね。

「はい、英雄ですか。ええ……はい、そうですね。そのまま探索してください」

それだけ話して、切っちゃった。

まあ、まだ始まってから20分も経ってない。

有益な情報が得られないのは当然だろうね。

せいぜい『武器手に入れた』ってくらいの連絡だろ。

「英雄ですが、2・Gでオープンフィンガーグローブを見つけたそうです」

「綿が薄い奴じゃなきゃ……いや、5ターン目までに戻ってくる」

オープンフィンガーグローブか。

拳の鍛錬が足りないから、あるに越したことはない。

最悪、柔術着の中のシャツ破って拳に巻き付けるつもりだったし。

そういう手間がない分、まあ、便利と言えば便利か。

指も取られにくくなるし、思う存分殴れるのはポイント高い。

ただ、不死川に何かあると……考え過ぎか。

いくらなんでも、葵が不死川に何かするとは思えない。

不埒な行動に及ぶことも、恐らくはないだろう。

戦略上、僕が武器を探しに行くのも間違いない。

現状、葵が4ポイント、不死川が8ポイントしかない。

で、僕は誰ともポイントのやり取りしてないから、基礎ポイントは初期値の10。

まだ6ポイント残ってるから、早ければ今のターンで2・Gに着ける

「じゃあ、悪いけど緊急時以外は動かないでくれよ」

しっかり言い聞かせておかないとね。

じゃないと、あらぬエリアに移動しかねない。

葵が本当に僕を壁として必要としてるかも分かんないし。

「ええ、待っていますよ」

不死川からの言葉はない。

……気分が乗らない。

いや、それじゃダメだ。

気分を乗せろ、力を溜めろ、気を強く持ち、前を向け。
俺が今するべきことは、全力で敵を倒すことだ。

だから、今は不死川のことを頭の中から除外しろ。
僕と、不死川のために。

つと、その前に。

上下の前歯を、2人の見てる前でスツと引き抜いた。
合計8本の歯が、僕の両手に握られてる。

まあ、そのままじゃ衛生的にもよくないし、すぐにケースに突っ込んで。
いや、すっかり忘れてたんだよね、試合前に刺し歯抜いとくの。

「葵、預かっついてくんね？」

「……ええ、確かに」

ちょっと呆然としてるけど、どうでもいいよ。

それよりも、不死川が僕に反応しないことの方が気になる。

普通、ちよつと聞いたりするもんだと思つただけどなあ。

友達がいきなり前歯引っこ抜いたんだから、もっと驚いて欲しかったし。

いやいや、落ち着け僕。

ここは、勝つのが大事だ。

不死川に恋してるからって、いつまでも不死川のことを考えてるのが最良じゃない。

不死川のためにも、今は戻れ。

ただ戦うだけの、俺に戻れ。

で、3ターン目が回ってきて。

俺が今いるのが3-G。

あと1つ行けば、目的の2-Gにたどり着く。
たどり着くんだが……残り時間6分で、マルギツテから嫌な連絡が
あった。

「そちらに3人逃げました。リーダーを死守しなさい」

「テメエ、なんで相手が3人もいて1人も止められなかったんだよ
！」

「追跡できるだけのポイントが残っていなかった。諦めなさい」

「はあ？ ちょっ、そんなだけかよ！ 謝るとかあんだろ！」

「負けたわけではない。それより、逃がしたのは……」

ここで突然『またあとで連絡する！』って切られた。

誰か知らねえが、通過させてない相手と交戦してるんだろうな。

どっちにしても、俺にできることは、まず武器を確保することだ。
運がいいのか悪いのか、3-Fで武器を拾ったとわけだし。

でも……レイピア拾ってもな。

俺、使ったことねえし。

使い方こそ知っちゃいるが、目に刺さったりしたら面倒だもんなあ。
とりあえずグネグネに曲げておいたから、もう使えねえだろうけど。

で、残った4ポイントの内、1ポイントを使って。僕は、ようやく2-Gに到達したんだが……。

扉の向こうには、まだ九鬼が残ってる。

でも、いたのは九鬼だけじゃねえ。

川神と風間の2人が、九鬼と対峙してる。

いや、九鬼と風間が向き合ってる、川神が別の扉の前で待機してる。

そりゃそうか。

雑刀なんて持つてりゃ、援護も難しいわな。

このクソ狭いところじゃ、思い通りに振り回せんだろ。

ん？

じゃあ、まだ始まったばかりか。

そうじゃなきゃ、九鬼か風間のどっちかがやられてなきゃおかしい。いくら2対1っていても、九鬼の性質上、引くことは考えられん。ま、無茶して負けてなかっただけよしとしてやるか。

「おお、庶民B！ 一子殿を頼む！」

入ってくるなりそれかい。

危ないかもだけど、せめてコツチ向いて言え。

あと、ユラユラ揺れながら構えてたから何かと思っただら、時間稼ぎかよ。

言っちゃ悪いが、そんなんじや風間には勝てんだろ。

どうせだったら、九鬼が川神につきまたって動きを鈍らせた方がいいのに。

まあ、どうでもいっつか。

九鬼が下手打つても、両方とも俺がやればいいんだし。

オープンフィンガーグローブは……ダメだ、川神の近くに置いてある。

どっちにしたって、ここで2人とも始末しちまった方が楽なことか。

「いや、俺が風間やるわ」

「我が倒して見せると言ったたであらう！」

まあ、会話自体はどうでもいい。

ここで重要なのは、俺が部屋に自然に入ること。

九鬼との会話をつなぐことで、存在感を主張する。

この部屋にいてもいいという認識を、視覚と聴覚の両方に教え込む。

ほら、相手は頭使うと鈍るバカだ。

どっちか片方でも、引き返して別の進路をとりゃいいのに。

相手から目も逸らさない風間は、川神に指示を飛ばすこともできない。

普段から参謀に引っ張ってもらってる川神は、風間が指示を出す気配を振り切れない。

結局、それで両方とも硬直してりや世話ねえわな。

「いやいや、言ってねえって」

「いいや、確かに言ったぞ！」

そう言いながら、俺はもう川神の前に。

3人とも怪訝そうな顔をするけど、どうでもいい。

風間は俺がやる、なんて言ってみただけ。

正直なところ、風間に武術家やら格闘家としての期待はしてない。

むしろ、薙刀を持った川神なんてオイシイ相手を、僕が逃がすわけないだろ？

「分かったよ。じゃ、九鬼の言うとおり川神抑えとくわ」

「あ、コラ待て！」

今さら風間が動こうとするけど、もう遅い。

というより、川神の動かした薙刀のせいで近づけない。

甘いよなあ、ホント。

川神が長器持った時点で、風間の援護は難しい。

ついでに、拳の間合いまで近づけたんだったら。

俺は、川神の薙刀なんざ1mmも怖くない。

石突きで左足を払うみたいに狙われたけど、左足を挙げて足裏で軽くブロック。

倍とは言わないけど、軽く20kg以上の差があるんだ。しかも、パワーに関しちゃう川神より遙かに上。

柔術やってるから、足腰の粘りも負けやしない。

つまり、この程度の一撃で揺らぐほど、俺の足腰は甘くねえ。

と思ったら、軽い。

つまりフェイント付きの……刃で打ち下ろしの顔面！

頭を動かしながら左側に踏み込んで、すぐに上がった左足を踏み込んで。

クリーンヒットはないが、体捌きだけでどうにか半分は威力を殺したぞ。

……もう半分は、無理して受けた右肩にダメージ残ったか。

関節外れちゃいねえけど、なんかプツって聞こえたような。

ま、動くから大丈夫だろ。

川神の頭に蹴り入れようにも、近付き過ぎた。

さっき左足で受けた時のせいで、そっちの足が前に出ちゃった。

顔が触れ合うほどじゃないが、抱き寄せてキスできそうな距離だ。

つまり、どうにか俺の距離にはなってる。

なってるんだが、面倒なことにもなってる。

さっきの打ち下ろしは、倒すためのもんじゃない。

いや、わかってたはずだ。

思わず避けた俺が悪い。

あの打ち下ろしは、怪我してでも頭なり額なりで受け止めるべきだった。

「ふん、これで形勢逆転よ！」

「やっと対等になったくらいだろ？ 図に乗んな」

精神的にはコッチが優位。

何だかんだ言っつて、まだ相手は構えただけ。

俺が入ってきてつっかけた時点で、精神の先手は俺が取ってた。

いくら川神が俺に当てたつて言っつても、それだけのことだ。

俺の気は萎えてないし、川神は心の準備ができたばっか。

まだまだ、俺の有利は揺るがない。

「だいたいよ、川神。今のやりとりだが、果た」

ここで、右構えで薙刀を構えている川神の左手の手首を、右手でキヤツチ。

素早く取るんじゃないかと、むしろ、手に付いた汚れを払ってやる速度で。

鍛えた人間ほど、これに反応できない。

加えて、川神はスピード重視の鍛え方をしてるなんて公言してやがった。

それはつまり、速さを競い合う戦いにしか慣れてない。

ついでに、こういう言葉を使った汚いやり取りも。

わざわざ言葉を途中で切ったのは、人間のクセを利用しただけだ。

人間は、会話の途中で動かれると若干反応が鈍る。

もちろん、訓練次第じゃどうにでもなるけど、そんな訓練してないだろうよ。

だから、俺の攻撃をかわせない。
速いだけじゃなくて、遅い世界の勝負が得意な俺の攻撃をかわせない。

手首をとつたら、もう離さない。

3桁を超える握力で握ってんだから、切らせやしない。

というか、川神から切らせるつもりもない。

すぐに両手で川神の左手首を握って、そのままグイと下に引つ張って。

その左手を、左足首あたりに引き落とす。

川神は体勢を保とうとして、つんのめった前屈みみたいな形になってほら、川神って集中力があり過ぎるから。

それに、俺がブラジリアン柔術の使い手だって知ってるから。
だからこそ、つまらないミスをした。

握られた左手首をさ、離そうとしたんだぜ？

薙刀握ってて、

笑えるだろ、ホント。

俺の頭が下がってるんだから、どうにか上に乗っかるなりしてさ。
上のポジション取るっていうのが、こういうときの定石だろ？

これだから、寝技を徹底的に学んでこなかった奴は反応が遅くて楽しい。

左手を狙ってんじゃないくて、左足狙ってたんだよタコ。

けっこう力いっぱい握ってた両手を、早くじゃなくてスルリと離す。
上体を前傾しつつ、左足を体全体で抱えながら、胸と左腕で川神の

膝をロツク。
ギョツと膝を抱える様にして、右手はカカトからアキレス腱をキヤツチ。

やや尻を突き出し気味になりながら、バランス崩して尻もちついてそのまま、背中をぺたりと地面につけながら倒れる。

ここまでできたら、あとは楽だ。

寝技だけなら、この学校で俺より上の人間はいない。

ハッキリ言つて、柔道部の主将にだって負けやしねえよ。

だから、素早く川神の上に乗ってマウントを取る。

で、パウンド……マウントパンチはしない。

この勝負はKO制じゃなくて、相手リーダーの端末の破棄。

でもって、川神の端末は『F-2』だから、リーダーじゃない。

まあ、いきなり破棄しても勿体ない。

雑刀は無視してもOK。

あんな長い武器持ったまま寝転がってたら戦えないから、どうせ自分で離すだろ。

持ってりや持つてるで、コントロール楽だからイイんだがよ。

とりあえず端末を奪ったら、すぐに重心を調整。

上に乗っかり過ぎず、ひっくり返されないようにバランスをとって。

そうしながら、右手で端末を操作。

すぐに本部につながったから、俺は本部に『譲渡』を申請した。

「この端末のポイントを、S-4端末に全部譲渡して」

それだけ伝えて、端末を部屋の隅に滑らせた。

これでもう、この部屋から川神は動けない。
端末を手にしたところで何もできないんだけど、これは単なる追い
打ち。

敗北を精神に植え付けるための演出だ。

……あ、今さらだけど『破棄』しときゃよかったか。

ま、どっちにしたって、動けなきゃ一緒だ。

次回からこのエリアを迂回すりゃいい。

で、あとは俺が薙刀を掴んでコントロール。

グイグイと動かして、薙刀の力点を安定させない。

川神は薙刀を取り返すので精いっぱいみただし……。

まあ、九鬼が風間を倒すって言うんだ。

勝つにせよ負けるにせよ、次のターンが終わるまでは見守っという
やるか。

もう1人、敵が増えたりしなきゃな。

9 話目『狭き部屋』（後書き）

雪猫様から御指摘がありました。こちらの川神ラビリンスは週刊少年ジャンプ連載中の『嘘喰い』が元ネタになっております。まんま設定を持ってきたわけではないので……オマーギュといったところになるでしょうか。

とにかく、そちらを参考にさせていただきました。

御意見、御感想、誤字脱字の御指摘など、随時受け付けております。安物のサンドバッグよりは打たれ強いので、ドシドシ書いてやってください。

次回は、我らが九鬼英雄のターンとなります。

幕間『英雄の牙の先』（前書き）

英雄視点です。

幕間『英雄の牙の先』

私の役目は至極簡単。

2 - Fの連中を探し出し、これを殲滅すること。

一子殿には甘くなってしまうそうだが、問題ないであろう。

もし一子殿に負けるとしても……我としては本望だ。

私の短い期間の努力で覆せぬような、そんな強さを一子殿が持っているという証明になる。

1対1なら、私は簡単には負けん。

そこらの有象無象など言うに及ばず、風間や島津、源よりも強いであろう。

右腕と右肩のハンディキャップこそあるが、そんなものは今となってはどうでもいい。

私の師は、片足のアキレス腱が切れたままでも戦い抜いたと言っからな。

そんなことを考えていた我に、ピンチとチャンスが同時にやってくる。

2 - Gに到達し、武器の入った箱を開け、冬馬に連絡した後だ。

私のポイントは尽き、2ターン目は動けなくなり。

庶民Bが来るとのことで、3ターン目は待っていたのだが……。

我が入ってきたのとは別の扉から、一子殿と風間が入ってきた。

私の個人的な目的は2つあった。

1つは、一子殿と迷宮内で会うこと。

もう1つが、我自身の手による風間の撃退。

前者はともかく、後者はチーム全体の利にもなる。

だからこそ、私は積極的に風間を探す予定であった。

しかし、同時に会うとは露ほども考えていなかったのも事実だ。

あまりのことに動揺したが、助かった。

風間が前で、一子殿が後ろ。

風間が無手で、一子殿は薙刀を持っておられる。

これから察するに、一子殿と戦うことにはなりそうにない。

風間と勝負するのは間違いなさそうだが、一子殿の援護はまずない。

「おーおー！ いきなり九鬼とは幸先がいいじゃねーか！」

「え！？ く、九鬼くんなの？」

どう幸先がいいのか知らんが、思い知らせてやる必要があるそうだ。

一子殿は……フツ、大和撫子のなんたるかを心得ておられるようだ。

慌てず騒がず、我に出会っても言葉数少なく、楚々としていらっしやる。

今は敵同士の身とはいえ、やはり貴方は気高く美しい！

「来い、風間！ 我が直々に、完膚なきまでに叩きのめしてくれる

！」

「上等だ！ 景気づけにブツ飛ばしてやる！」

風間は相変わらず構えない。

が、我は風間ではない。

当然、構えをとる。

両手の指をほんの少しだけ曲げ、右手を前、左手を胸の近くに。

どちらの手も顎ほどの高さにし、両足を肩幅程度に開く。

相手に体の正面を向け、風間が蹴りを出しやすい状況を作り出す。

そして、ゆっくり、不規則なリズムで揺れる。

我が学んでいる方の構えを模したものだ。

酔拳の、揺れることによる虚を作り出す基本。

酔拳の本質は『虚』にある。

『虚』と『誘い』を混ぜ合わせ、何が罠かを悟らせない。

今感じている隙が、本当に単なる隙であるのかを考えさせる。

そして、焦れてきて隙に見せかけた罠を突かせ、後の先をとる。

酔拳とはそういうモノだが、我が学んだ酔拳は一味違う。

それを、風間の体に刻みこんでやる。

が、厄介な状況に変わりはない。

一子殿が加勢してくれは、我の不利は決定的なものとなる。

いかに我とて、風間と一子殿の2人を同時に相手にはできんからな。

そんなことを考えていると、我が通ってきた扉が開く。

伏兵かと思っただが、その通りだった。

ただ、その伏兵というのは、我々2・Sの伏兵というだけの話だ。冬馬でもマルギツテでも庶民Aでもない。

過去の決闘で風間を下した、柔術使いの庶民B。

その庶民Bが、我に近い扉から2・Gのエリアに入ってきた。

「おお、庶民B！ 一子殿を頼む！」

素晴らしいタイミングだ、庶民B！

この狭い空間で我と風間が戦えば、無理に一子殿が割り込んで彼女に被害が及びかねん。

一子殿ならどうにかしてくれそうだが、万が一ということもある。

ここは無難に、庶民Bに抑え込ませるに限る。

あずみが言うには、奴は寝技だけなら一級品らしいからな。

が、我が気を利かせて活躍の機会を与えてやったというのに。

「いや、俺が風間やるわ」

などとぬかしおった。

たかが一庶民の分際で我に意見するとは、実に腹立たしい。

庶民は、我のような優秀な人間に使われてこそ実力を発揮するといふのに。

何より、風間に痛烈な一撃を受けた者に、風間を任せるわけにはいかん。

「我が倒して見せると言ったたであらう！」

「いやいや、言ってねえって」

「いや、確かに言ったぞ！」

そんなやり取りをしながら、庶民Bがエリアに踏み込んでくる。

無造作に、戦いに行くような気配を感じさせず。

ごく普通に我と会話を続けながら、あつという間に一子殿の目の前まで来てしまった。

これが狙いだっただのか？

担当の割り振りではなく、己の間合いに一子殿を置くことが。

会話を続けることで、まだ準備のできていない我を含めた3人の動きを止め。

無駄に会話を伸ばすことで状況を変化させず、誰にも動かせない。そのようなことを狙ってやったのなら……庶民Bの技量は相当なものだ。

「分かったよ。じゃ、九鬼の言うとおり川神抑えとくわ」

「あ、コラ待て！」

風間が慌てて動こうとするが、一子殿の方が早い。

石突きで足を打たんと早くも動いている。

一子殿が薙刀を使う限り、風間は近寄ることができまい。

そして、一子殿の攻撃を避け、庶民Bが一子殿のマウントをとった。薙刀を握って一子殿をコントロールするあたり、手慣れているのだ。

ろうか。

とにかく、これで我は、風間と1対1で戦えるようになった。なつたのだが。

一撃目が出ない。

互いに、相手の手を待ってしまふ。

ふぎけた状況だ。

風間から攻めてくればいいもの……躊躇っているのか？

風間がためらう理由はないはずだ。

一子殿の救出には、我が行かせない。

少しでも隙を見せれば、その隙をついて畳み掛ける。

一撃で倒せずとも、連打で倒しきる。

無論、その隙が一子殿を助けに行く隙である必要はない。

我に向かって技を繰り出したその時。

その隙をついて、風間を倒してのける。

そういう手もあるのだが……。

「どうした風間？ 我に臆したか？」

そう挑発しても、風間は無言。

こちらへの警戒を解かないようにするだけで、一向に事態は動かない。

我が距離を詰めようとすれば引き、離れようとすれば詰めてくる。

ただ、我も風間も、相手を壁に追い込むようなことはしない。

下手に相手を追い込むと、自分が動いてしまいかねんからな。

どうやら、風間にもその程度の駆け引きならできらしい。

「なあ、風間。時間稼ぎもいいけど、あんまり粘っても意味ねえぞ。次のターンには、このエリアに不死川が来る手はずになってるからよ」

ナイスだ、庶民B。

そのような計画はないが、これで風間を揺さぶれる。

2対2が、3対2になるのだ。

しかも、柔道がそこそこできる庶民Aが来ると聞けば、なおプレッシャーになる。

我と庶民Aを同時に相手にしなければならぬ可能性。

その可能性がある限り、貴様は手を出さねばならない。

待てば不利になるだけだが、今攻めれば敵が増えようが増えまいが同じこと。

むしろ、我を倒すことが叶えば、一子殿の援護にも行けるだろう。

風間が、僅かに動いた。

フン、甘いぞ風間。

お前が右足を後ろに引いた時点で、攻撃は読めている。顔を狙ったローリングソバットであろう。

迅速に我を始末し、一子殿を救出、かつ、エリアから遠ざかる。それを実行するには、顔面に対する攻撃が効果的。

加えて、我を一撃で葬り去るだけの威力を盛った攻撃。

風間の手から考えて、跳躍をした後の攻撃で来る可能性が高いとは思っていた。

右足を引いた時点で、攻撃は完全に限定できた。

風間に、左足を地に付けたままの……普通の後ろ回し蹴りはない。

風間はその場で大きく跳躍して、背中を向ける。

揺れていた我は、それに合わせて体を倒す。

風間が蹴りたい場所に、もう我の頭はない。

開脚したまま逆立ちするような、カポエイラの様な蹴り。

体を前に倒した勢いを使い、風間の蹴りに我の蹴りを合わせる。

カウンターではない。

回避と攻撃は、同時でなければならない。

『回避しながら攻撃』ではない。

相手の攻撃を恐れず、より早く攻撃を当てる。

だからこそ、回避ではない。

だからこそ、防御でもない。

相手の攻撃と同時に出す。

同撃。

同撃酔拳。

これが、我の牙。
腕を怪我し、肩を怪我し……夢を諦めた我の牙。
諦めた夢があつたことさえ力に変えた、我の牙。

風間の足が、我の足とすれ違つ。
ギリギリのところ互いの足は当たらず、我の蹴りだけが風間に伸びる。
風間の思惑通りなら、あと一拍もしないうちに、我に蹴りが当たつていたことである。
だが、そうはならん。
あと一拍もしないうちに、我の蹴りのみが、風間の腹へと突き刺さる。

驚愕する風間の腹に当たつたのは、カカト。
偶然ではなく、始めから狙つていた。
一撃で倒せなくても構わん。

一撃で倒れなければ、何度でも攻撃を入れればよい。

「カツ……！」

無様に肺から空気を絞り出す。

着地もままならず、勢いよく背中から落ちる。

今攻撃すれば有利と考えるのは凡夫の思考よ。

今すべきは、勝利を急ぐことではない。

確実に勝利することだ。

腹を抑えながら立つ風間。

ふん、我の一撃を受けて平然と立ったことだけは褒めてやってもいい。

手加減したとはいえ、王の一撃であったのだからな。

だが風間。

随分フラついているではないか。

ただ、タイミング良く腹を蹴り抜かれた程度のことだ。

この程度の男から顔に一撃もらうなど、庶民Bも底が知れている。

まだまだ我が名前を覚えてやる必要はなさそうだな。

「つえええええ……」

む！

一子殿の辛そうな声！

この声色から察するに、酷く嫌悪しておられる！
ええい、庶民Bめが！

己の役割のなんたるかを心得ておらんかったか！

「いかなさいましたか、一子殿！」

我が直々に目を向ける。

そこには、先と変わりのない庶民Bと一子殿。

マウントこそとってはいるが、状況は膠着している。

一子殿の薙刀を庶民Bが抑え、そのまま一子殿の上に乗っている。
本来であれば、すぐにでも庶民Bを蹴り倒しているところだ。

が、今は川神ラビリンスの最中。

このような行動をとるのが最良だと、我が判断してのこと。

であるなら、王の器を以って許してやらねばなるまい。

そう思っていた、我が甘かったらしい。

「み、港くんの……なんか、固いのが当たってるよう………」

当たっている。

庶民Bの何かが当たるとして、固い、何が当たるといふのだ？

腕や手が当たるといふことはない。

その手は薙刀を掴んでいるから、一子殿に直接触れることはない。

膝ということも考えたが、一般的なマウントをとっているのだからそれはない。

肘も当然あり得んから、考えるとすれば。

まさか……その股の下か？

その汚らわしいモノを、一子殿に当てているといふのか？

我は庶民Bに向き直る。

これはもはや、川神ラビリンスがどうという話ではない。

一子殿の貞操の危機である。

風間のような小物にかけている時間はない。

覚悟しろ……港 三千尋！

「は？ ちょ、落ち着けよ九鬼！ 俺は試合前にファールカップ」

「この外道めが！ 一子殿から退かんかあ！」

我は勢いを付け、不埒者へと足を振りあげた。

幕間『英雄の牙の先』（後書き）

港くんが再び理不尽な立ち位置に。

ちなみに、港くんが試合前にファールカップを付けていた描写はありません。

ということは……なんてこともなく、描写はないですが、柔術着に着替えた時に一緒に付けてます。

ペースが早く、やや文章が乱雑になっていますが。

御意見、御感想、誤字脱字の御指摘など、お待ちしております。

10 話目 『情けない人はためにならず』 (前書き)

やたらと細かい戦闘描写があります。

ある程度の状況がつかめれば次の話も読めますので、面倒な方はサラッと読み流していただいても大丈夫です。

10 話目 『情けない人はためにならず』

アホかあああああ！

普通にファールカップが当たってるだけだと言いつくす間もなく蹴りをガード！

あの馬鹿、頭狙って本気で蹴り抜きやがった！

せっかく川神抑え込んだのに、マウント外れちまったじゃねえか！
どうにか薙刀は奪ったけど壁に肩ぶつけるし……どうすんだよ、この状況。

風間はダメージあるけど健在で、もう川神に戦術的価値はない。

でも、何を勘違いしたのか、九鬼が俺を攻撃してくる。

これは、実質3対1になったんじゃないだろうか。

「クソっ！　なんて下劣な奴だ！」

なんて風間が煽ってやがる。

俺と九鬼を戦わせて消耗させて、あわよくば漁夫の利ってか。

九鬼も九鬼で『おのれ鬼畜め！』とか言つて闘志全開だしよ。

手持ちのポイントを確認したいけど……そんな暇はない。

雑刀で両手が塞がってるし、相手は3人もいる。

川神が涙目で動けないから、2対1つて考えてもイイかも知れんがよ。

しかも、よりによって九鬼の野郎。

俺が懸念してた同撃酔拳なんて習つてやがった。

小西さんが唯一攻略できなかった技術、同撃酔拳。

そんな奇特な技術の使い手が、俺の敵に回るだなんて。

未熟かと思つたら、そこそこには使いやがるみたいだし……マジで面倒なことになつたな。

いや、どうするかなんて聞かれたら、逃げるのが一番なんだろうけどさ。

逃げたいんだけど、葵のところに戻れなくなった。

下手に逃げて風間に追跡されたら、葵達の居場所がバレる。

そうじゃなくても、かなりの確率で葵達に急接近されることになる。

今、あの場には不死川と葵しかない。

風間と戦つたことのない不死川じゃ、何かの間違いで負けるかもしれない。

負けるだけならまだしも、怪我するかもしれない。

……クソが。

やっぱ不死川にゾッコンなんじゃねえか。

思考から不死川を追い出せない。

不死川が関わると、不死川中心に考えちまう。

俺のやるべき最善手は、風間と九鬼を別エリアで戦わせること。そのため、わざと追いつける程度の速度で逃げること。

風間が追ってくるかは博打だが、九鬼は必ず追ってくる。

今の俺が何ポイントあるかは分からないが、充分に逃げ切れるはず。

次善の策が、葵と合流すること。

同じエリアに不死川がいるはずだろうし、アイツなら九鬼を止められる。

いや、止めてくれなくても、弁明するだけの時間稼ぎができればいい。

今は混乱してるみたいだが、それでもバカじゃないんだ。

冷静に考える時間さえあれば、九鬼も納得してくれるだろう。

でも、俺はそうしない。

風間が『索敵』を使ったら、葵の居場所がバレるかもしれない。

もし俺と九鬼が風間の前からいなくなった状態で『索敵』を使われたら。

風間は、俺ら以外の敵が近くにいることを考えるかもしれない。

まだ近くのエリアに俺らがいる可能性を切り捨て、敵を探しに行くかもしれない。

普通だったら慎重に行くけど、アレは行動力のあるバカだ。

川神ラビリンスが始まって、まだ3ターン目。

基礎ポイントが10で、連中のスタート地点は20-T。

でもって『各エリアの扉が2枚以上』ってルール。

そこから察するに、間違いなく1回は突破を使ってココまで来てる。九鬼と遭遇したことを考えると、1ターン目から突破を使って、2ターン目に索敵。

で、3ターン目まで待ってから進軍したってところか。

どれだけのブロックを移動してきたか知らないが、基礎ポイントは12以上。

しかも、川神だけじゃなくて風間もだ。

『索敵』で3ポイント消費しても、残りは9ポイント。

不死川と葵の基礎ポイントの少なさからして、3ターンもあれば見つかってしまう。

この時点で、風間を無視するって選択肢はなくなったも同然だ。

じゃあ、クソツタレ。

不死川のことを考えた上で、それで最善の策を探しゃいいんだろうが。

だから、俺は。

「上等だよ。テメエら相手なら2人同時だって負けねえよ」

虚勢を張り、可能な限り九鬼を傷つけず、風間を倒す。

可能なら端末を奪取、そのまま破棄して逃走。

本当はポイントの譲渡をしたいとこだが、そんなに時間はない。

九鬼の攻撃を受けてかわしてってやりながらじゃ、さすがにそこまではできません。

九鬼の攻撃力じゃ、俺を簡単に倒すことはできない。

上半身と下半身は分厚い筋肉に守られ、下腹部はファールカップでカバーしてる。
怖いのは首から上を攻撃されることだが、1発で倒れるようなことはない。
ある程度食らうことを前提に、とにかく風間を始末する。

足はスキーで滑るときの『ハの字』……空手の三戦立ち。
右足は前、左足は後ろ。

薙刀を両手で握り、右手を前にして、風間を正面に見据える。
右肩が痛むが、そんな無視だ。
少しの痛みだし、この程度で鈍るほどやわな鍛え方はしてない。

……この薙刀のレプリカ、随分と重たいな。
やっぱりジジイの奴、川神に肩入れしやがったか。
3ターンの時点でこんな武器持つてるってことは。
Fクラスのスタート地点からかなり近いところに、薙刀が置いてあったんだろ。

大丈夫。

まだ俺の方が有利だ。

九鬼は冷静じゃないし、風間はそもそも逃げ腰気味。
川神は動けないみたいだから、とりあえず数に数えない。

さあ、根性決めろよ！

「セエツ！」

わざと大きな声を出して、後ろに構えていた薙刀の石突きの方を振る。

フリは小さいが、集中力が高くなってる九鬼は反応して下がってしまふ。

そう、これは九鬼への牽制で、本命の打撃じゃない。

牽制と同時に、左足を踏み出しながら半身に構え直して。

右側に溜めた力を以って、袈裟に斬りつける動きを見せる。

ただ振っても仕方ないから、風間に1歩近づきながらだ。

まあ、後ろに飛んで避けられるが、これも本命じゃない。

九鬼は体勢が悪いから、すぐにこちらに攻撃を仕掛けられないはず。

川神は無視して、風間は後ろに飛んで……もう壁を背にしてしまつた。

別に、2撃目は必ずしも必要じゃなかった。

ただ単に、風間の逃げる方向を確認したかったのと。

それと、あの状態で横に薙刀を大きく振り回すと、川神に当たるから。

前後不覚の状態の女を殴れるほど、俺はアンチフェミじゃないもんでね。

でもって、やっと本命の3撃目。

今度は薙刀を半回転させながら、俺が左に一回転して。充分に勢いをつけた石突きで、風間の腹に突きを食らわす。はずだったが。

「ほおおおあああ！」

突きの動作が始まる瞬間、九鬼が早くもつつかけてきた。アレだけバランスを崩していたのに、もう体勢を立て直して。気合の掛け声と、顔面へのアクロバットな右の飛び蹴り回し。ただ飛び回し蹴りを出すんじゃないくて、体全体を捻じって威力を増してる。

しかも、俺が旋回して体にタメが出来上がり、それを開放する瞬間を狙った蹴り。

攻撃に集中してるから、避けることも受けることもできない。

いや、攻撃を中断すれば受けられるが……しない。

九鬼の蹴りもらったくらいじゃ威力は死なないし、今は風間を倒すのが優先だ。

その優先順位を間違えるほど、俺は愚かなつもりはない。

九鬼の蹴りをマトモに受け、俺の顔面が歪む。

俺の回転と反対方向からの蹴りは、頬肉を揺らし、脳を揺らす。

食いしばった歯に頬の内側がぶつかり、肉が破れて血が滲み始めても、俺は首に力を込め、体に力を込め、足に力を込め、腕に力を込め。

九鬼の蹴りを全身の力で跳ね返し、その勢いのままに風間の腹に石突きを……叩き込む！

「ぐあつ!?!」

腕で受けられたが、構わない。

今の一撃で、風間を完全に捕らえた。

あとは、畳みかけるだけ。

そのまま体を左に回しつつ、刃で風間の左足を打ち。

鉄棒で前回りするときの握りに変えて、左足を前に体を変えつつ右脇腹を打つ。

どちらもクリーンヒットするが、まだ倒れない。

でも、確実にレバーを打ち抜いた。

結構な力を込めたから、どうせあと5秒持たん。
持たんが、逃がさない。

ここで加減せず、確実に潰す。

と、九鬼の左の足刀（足の小指側の側面）が、俺の左脇腹を打とうとする。

いいところ狙ってくるな、コイツ。

食らってみると、腹じゃなくて肋骨狙ってたのが分かる。

俺が肉厚なの知ってるんだから、当然と言えば当然か。

骨は折れなかった……が、かなり痛い。

もしかしたら、ヒビくらい入ってるかも知れん

風間の左肩を刃の部分で打つ。

キレイに当たった。

同時に、風間の左手が垂れ下がる。

全部じゃないだろうけど、肩の腱が切れた証拠だ。

素手なら体重掛けた肘打ちでブツた切ってやるんだが、成功して良かった。

武器使って同じことする何ぞ、初めてだったからな。

なにはともあれ、これで風間を倒す手順が出来上がった。

足へのフェイントか、無事な右腕の側からフェイントを入れる。

そこから素早く返しの打ちを風間の側頭部入れて、立てなくなるだけのダメージを与える。

九鬼の右拳の突きが俺の顔に放たれるが、甘んじて受ける。

正直なところ、薙刀の柄で受けることもできた。

でも、ここで下手に受けると、九鬼が拳を傷めかねない。

まだまだコイツにも戦ってもらうんだから、そいつは困る。

川神を封じて、風間を倒して、それでもクリスティアーネと源が残る。

でもって、リーダーの直江の端末を破棄しないといけない。

マルギツテが頑張ってくれてりゃいいけど、あっちの状況が掴めない。

下手に頼るより、ハッキリしてる戦力に頑張ってもらった方が確実だ。

で、風間に最後の仕上げ。

つてところだ、

「川神流『地の剣』！」

つて叫び声と、次ターン移行のブザーと、右足への衝撃が同時に来た。

なんだ……川神の奴、動けたのか。

なんとか石突きを風間の顎に当てれたけど、いかなあ。

今の下段回しで、右膝の上あたりを蹴られちまった。

膝回りの腱とか痛めてなきゃいいんだが。

ま、アレだ。

わざわざ無視して被害減らしてやろうと思ったのに、蹴り入れてきたんだ。

俺が川神に手を出さないで置いてやる義理は、もうどこにもない。

あの、タメと威力がデカイだけの下段回しの例でもしてやらないとな。

空手やってた奴の下段の怖さを、体に教えておいてやる。

川神に向かって、薙刀をパス。

投げつけるんじゃないで、軽く、川神が受け取れるような速さで。

でも、マヌケに薙刀をキャッチはしない。

そこその重さがあるから、弾くこともしなかった。

潜るような、ダッキングに近い動きで、横向きにパスした薙刀の下をくぐる。

これだから、スピード勝負が好きな奴は。

規格外の速さを持つてるわけじゃないのに、速さに絶対の自信を置いてちゃって。

戦いってのは、速さだけでやるもんじゃないだろ？

パワー、スタミナ、スピード、技術、相性、駆け引き、経験。

執念、こだわり、才能、努力、戦術、戦略、状況、戦況。

あらゆる自分の武器を使ってこそ、やっと戦いって呼べるモンになるんだよ。

立ち上がり際。

川神が姿勢を元に戻しきつた瞬間。

その瞬間は、どんな人間も足元は無防備になる。

ま、その瞬間ってのをピンポイントで狙うのが難しいんだけど。

柔術とサブミッションやってる俺が、見逃すわけがない。

相手の奥足（構えた時に後ろになる足）は右。

ダッキング気味に出たなら、体重は前足である左足に乗ってる。体重が乗ってるってことは、足を上げてのカットができないってこと。

筋肉に力込めてブロッキングはできるだろうが、俺相手にブロッキングは無駄だ。

右手をやや上に構え、左手を少し下に構え。

右足を横側に持ち上げ、体の回転を始める。

軸足の回転、右手を振り下ろす勢い、左手を持ち上げる勢い。

体全体のバネをフルに使って、膝から蹴りの軌道に乗らせ。

膝を支点に、上から落とすように川神の左足に蹴りをくれる。さっきのお返しの意味も含めて、膝の近くの鍛え辛いところに。

「あっ!？」

そのまま、川神はガクリと前に倒れ込む。ま、体重を支えてた左足に、急に力が入らなくなったもんな。力が入らなくなったどころか、膝から下がなくなった感じになるもんな。

そのマヌケ顔を見りゃ、一目瞭然だ。

「貴様あ……よくも一子殿を！」

あ、九鬼が面倒な感じに出来上がった。

これ、全力で襲いかかってくるんじゃないかな。

九鬼とやり合うのも面白そうだけど、今は勝利最優先。

風間にどの程度のダメージが残ってるか確認したいけど、まあいいか。

風間も川神も、すぐに動けるような状態じゃないだろうし。

九鬼は……葵たちから離れつつ、適当なエリアに移動してやり過ぎるか。

いくら前後不覚になってるからって、敵と会えば戦うだろ。薙刀も惜しいけど、ま、動けない連中にくれてやっても問題ねえよな。

九鬼が左の上段回し蹴りを出してくるけど、もう当たってやることもない。
全身から力を抜くようにして重心を落として、回避しきったところで全身に力を込める。
伸びあがるような動きで、俺は風間たちが入ってきたであろう扉に駆ける。
スライド式の扉を開くや否や、そのままダッシュで通り抜けた。

……で、アッチ行ったりコッチ行ったり、7回は扉を通ったっけか。追ってくる気配はなかったから、ちょっと安心した。
安心ついでに端末を確認したら、残存ポイントが17もある。
つまり、川神が14ポイント持ってたって計算になるんだが、これはラッキーだ。
風間が同じくらいポイント持ってたって思うと、ちょっと惜しかったって思うけど。
って、風間の端末も破棄してなかったな。
怪我の割にはロクな成果が上がらなかったってことか。

俺の今の基礎ポイントは、24ポイントってことになる。これ、どんだけ贅沢なんだよ。

マルギツテよりもポイント持つてるってのもなあ。とりあえず、マルギツテに連絡して、何ポイントか譲渡すっか。

端末の通話ボタンを押して、本部につないで。

で、さつき『解錠』したときみたいに『通信』を申告した。

確か、マルギツテの端末は『S-1』だったから、S-1に繋ぐように。

そういう風に申告したんだけど。

『S-1の端末は、既に破棄されてるでおじやる』

なんて不快な声と意外な事実が聞こえてきたんで、すぐに通信を遮断。

え〜……マルギツテ、もうやられたのか。

妙だよなあ、アイツがこんなに早く脱落するなんて。

クリステイアーネか、源か、直江。

このうちの1人か2人にやられたってえのか。

いや、マルギツテの実力は詳しく知らんぞ。

それでも、アレが普通の軍人以上に強いのは分かる。

隙がないし、体つきもしなやか。

バレエの授業の時に見せた運動神経は、明らかに常人の域からハミ出てる。

由紀江ちゃんよりは弱いかも知れんが、俺の勝てる相手じゃなかったはずだ。

つまり、クリステイアーネが戦った可能性が高い。
アイツの戦力もよくわからんけど、だからこそ可能性は十分にある。
もしかしたら、マルギツテ並みに強いのもしれない。
だとすると、俺と九鬼あたりで2人がかりで行かなきゃならんかも
な。

多少なりとも怪我してくれてりゃいいんだが。

とりあえず、葵に『通信』するか。

って思ったところで、ブザー音が端末から鳴り響く。

誰からか知らないが、こっちに『通信』してきたらしい。

九鬼か葵なら儲けもんだけど、不死川だったりすると元気出るよな。
ま、戦略上、不死川なんてことはないだろうけど。

「おい、港。此方じゃ」

おおおおおおおおおおお！？

このタイミングで不死川から！？

ちよつとどうしよう心の準備できてねえんだけどマジでどうしよう！

戦略上全く意味がないのにどうして俺に連絡してきたんだ！？

声か？俺の声が聞きたかったのか？

だったら毎晩毎晩耳元で囁いてやるよとか妄想してる場合でもねえ
よ！

「九鬼から聞いたぞ」

……九鬼から、聞いた？

「川神に不埒なマネをしたそうじゃな？」

あゝ、やっぱりか。

九鬼の奴、誤解したまま葵に連絡したのか。

まだ頭が冷えてないらしいな。

不死川にメッセンジャー任せて悪いけど、葵伝いで九鬼の誤解を解いてもらうか。

「あのかな、不死川。アレは俺のファール」

「死ね」

え？

今なんて言ったの？

『して』って言ったんだっけ？

って、それはサッカーの審判だっつーの。

いや、冷静に考えろよ。

いくらなんでも聞き間違えるわけないだろ？

だからアレだ、九鬼からの誤情報を真に受けてんだよな？

まあ、まだ不死川だったら話聞いてくれるだろ。

わざわざ向こうから通信してくるくらいだし。

「……あの、不死川？ それは」

「今すぐ死んでしまえ、このクズめ！ お前を一度でも友人だと思つて馬鹿を見たわ！」

……そのまま弁明の暇なく、一方的に通信が切られました。

不死川の誤解をいち早く解きたいですが、掛け合ってくれるかわかりません。

恐らくあの感じだと、通信をしても無駄でしょう。

俺……私の声を聞いた時点で、すぐに通信を切られかねません。直接会いに行こうにも、必死で走ったので道を覚えていません。

私は、どうしたらいいんでしょうか？

10 話目 『情けない人はためにならず』（後書き）

誤字脱字のご指摘、ご意見、ご感想、気になる点、改善した方がよ
さそうなどころなど、開けっぴろげにウエルカムしております。

自宅用サンドバッグよりは頑丈な精神をしまするので、厳しい物言
いでも容赦なく書いていただけると幸いです。

11話目『泣かぬ面にも八子』

とりあえず、葵に通信しましょう。

不死川や九鬼よりは冷静な状態に違いありません。

しかし、これでは妙な口調になってしまいますよね。

私……僕が丁寧語だったら、気味悪いもんなあ。

うん、やつぱらこうやって話した方が向こうもしっくりくるでしょ。

よおし、冷静になって落ち着いたフリをしたぞ。

また気が滅入ってくる前に、とっととやることやんないかね。

「ああ、港くんですか。英雄から聞いた件ですが……」

「誤解だつて。ファールカップが当たっただけだつて」

本当にそれだけなんだよ。

まあ、川神の体は、僕の趣味にど真ん中ストライクしてるけど。

だけど、大事な戦いの最中に邪念を抱いてる暇なんかないさ。

確かに『体柔らかいなあ』とか思ったけど、これは思春期男子の平均値だからセーフ。

ノーカンだよ、ノーカン。

「そんなことだと思ってまいしたよ。とりあえず、不死川さんと英

雄には伝えておきます」

「頼んだよ。味方まで敵に回るのは勘弁なんだから」

勘弁なんて言ってみただけど、もう何発も殴られてるんだよね。

まあ、いちいちそんなこと伝える必要もない。

誤解を解いてって用件だけ伝えて、僕は通信をカットしたいところ。あんまり長話してたら、時間もつたいないしね。

「ところで港くん」

「んだよ。もう切るぞ」

「川神さんの体の感触はどうでしたか？」

「地獄に落ちろ」

心底殺意を込めてから、通信をシャットアウト。

……葵の野郎、ちゃんと不死川に弁解してくれるんだろうな。

ああ、チクシヨウ、不安になってきたじゃねえかよ！

思えばあのバイセクシャル、不死川に色目使ってなかったか？

いやいや、アイツが色目使うのは不死川だけじゃねえよなあ。

でも、不死川に色目使ってるのは変わらない事実で、今は不死川と2人きり……。

うーん……よし、こうしよう。

不死川に何もしてないようだったら、今回は見逃してやる。

不死川の手を握る以上のことをしたら……通り魔に出会ってもらおう。

具体的に言つと、助からない程度に頭蓋骨陥没させてあげよう。
さすがに葬くらいになると、交通事故で済ますのは難しいからなあ。

しっかし、気分悪い。

不死川に死ねつて言われるとか、どんだけキツツイんだよ。

そりゃ、状況だけ聞けば僕は外道のクズの非人間だろうさ。

でも、ちゃんと事実を確認しないうちから否定して欲しくなかった。
惚れた女から死ねつて言われるのって、こんなにキツかったんだな
あ。

僕、久しぶりに泣いちゃいそうだよ。

まあ、不死川も冷静さを欠いてたみたいだし、後からなら弁解でき
そうだけど。

だけど、辛いよなあ……。

さて、あのあと僕は、川神と風間以外の敵を潰すために近辺を探索。相手が固まってる可能性も考えて、ちよくちよく索敵しながらね。下手に踏み込み過ぎてても、もうそこに敵はいないだろうし。3人も突破されて、マルギツテがやられたって言うんだったら。クリステイアーネと源と直江も、もう中腹を超えてると思った方がイイかも。

現在10ターン目。

つまり、7ターン分を使って、そこら辺をブラブラと。葵と不死川にポイント配分したんで、今は12ポイントしか持っていない。

で、その12ポイントでウロチョロして、今は5-Kにいるところで移動しながら『索敵』を使ってみたけど、特に誰にも引つ掛かってない。

つてことは、もしかしたら突破されてるのかもしれない。

まあ、推測の域を出ないけど……戻るか。

途中で武器も1つ拾ったわけだし。

その武器ってのが、マルギツテが拾った方が良かったトンファー。使いこなせるわけじゃないけど、使えないわけでもない。

直江相手じゃなきゃ、安心して使えるレベルじゃないんだよね。

川神レベルの相手だったら、持ってない方がマシに戦えるってくらい。

まあ、腕とかで受けたら敵しそうな攻撃とか、トンファーで受けと

きやいいか。

組技ができなくなるから、適当なところで使い捨てときやいいんだし。

………適当にエリア移動しながらなんだけど、そりゃイロイロ考えるさ。

まず、あのジジイがF組を鼻屑していた可能性。

こういうゲームは、普通、そこそこの展開になるまで武器を持たせないのがセオリーだ。

多くの奴が武器を持ってたら戦略性に欠けるし、何より武器を配置した意味が薄れる。

だから、今の状況はおかしい。

中腹の辺りのエリアをくまなく探してるのに、武器が1つしかない。つまり、ゲーム性を無視した武器の配置をしてる。

だってさ、2ターン目の段階で、コッチの武器は格闘技用のグローブとレイピア。

向こうさんの武器が、川神一子が使いなれてる薙刀。

練度とかから考えると、ジジイのテコ入れがあつたとしか思えない。

まあ、これくらいは覚悟して然るべきことだったけどね。

そんなことより、戦略上の問題だ。

個人的に一番マズイのが、クリステイアーネと不死川が会うこと。素手同士なら分かんけど、もし相手が武器を持っているとしたら。しかも、使いなれた、レイピアに近い武器を持っているとしたら。不死川の不利は、本人が思う以上に圧倒的なものになる。

確かに不死川は、地力からして強いし、皆口さんからも技を学んでいる。

ただ、相手はフェンシングのエペの使い手。

その上、薙刀を持った川神を圧倒できるレベルの使い手。対武器に慣れてない不死川じゃ、勝機は極めて薄くなる。

チームとしてマズイのが、葵と不死川が分断されること。

マルギツテがやられたことから考えて、相手は2人以上で動いてると見るべきだ。

直江、源、クリステイアーネの3人のうち2人だとして。

一番可能性が高いのが、源とクリステイアーネの2人。

この2人が同時にかかれば、余力を残してマルギツテを倒せるかもしれない。

相手には、マルギツテの能力を知っているクリステイアーネがいるんだ。

マルギツテを倒すまで、単騎で動くのを避けていたことも考えられる。

つまり、敵と遭遇する＝複数を相手にするって構図になりやすいって話。

で、自分自身の問題で一番マズイのが、ダメージを受け過ぎたこと。右肩、右膝周辺、左頬、左脇腹。

右肩には違和感があるし、右足周辺にはチクチクとした痛みと脱力感。

無茶して受けた左頬はパンパンに腫れてて、左脇腹はズキズキと痛む。

顔の怪我はどうでもいいし、脇腹も我慢でどうにかなる。

……マズイのは、右肩と右膝周辺の2つのダメージなんだよなあ。

試しに右手を挙げてみたけど、7割くらいまでしか拳がらない。

無理矢理持ち上げようとすると、痛みと共に力が抜けそうになる。

右足も右足で、踏ん張ろうとすると8割くらい体重が掛ったところでガクツとくる。

アイツら、肉の薄いところばっか上手に狙ってきやがって。

タックルの時に右足で踏ん張るクセあるから、ちよっと厳しくなっただかなあ。

まあ、脱力使った歩法と合わせりゃ、どうとでもなるか。

さあ、どうすつか。

とっとと終わらすためには、直江を発見すること。

走れないほどじゃないし、手負いでも直江に負けるほど弱かない。

クリスティアーネと源も、サシで向かい合えば足止めくらい余裕な感じ。

まあ、そうはいかんだろうから、無茶して1人でも潰すか。

そう思って、5-Jの扉を開いたら。

見慣れちゃいないけど、見覚えのある短髪と金髪。短髪はジャージを着た男で、金髪はブルマ姿の女。記憶違いはないだろうから、この2人が誰かは分かる。扉を開く音が聞こえたせいか、2人ともコツチを振り向いて。

「あ？」

と源の声が。

「お！」

とクリスティアーネの声が。

源は手に木製の警棒を持って、クリスティアーネは木刀を持っている。

あのクソジジイ、やっぱりF組鼻屑になるようにしてやがったんじゃないのか？

これ、勝てる気がしねえんだけど。

トンファーじゃなくて、せめて薙刀があればどうにかなったかも知れんが。

バッチリ置いてきちゃったもんなあ。

……今日の僕は、運が悪いらしい。

運なんてモンがあるとしたら、の話なんだけどね。

すぐに構えた。

左手のトンファーを持ったまま、僕の右胸から拳一つ空いた所に、手の甲は天を向いて、相手にトンファーの側面が見えるような状態。右手は腰溜めになって、正拳突きが出せるようになってる。

素手じゃ難しいけど、拳じゃなくてトンファーで突くと思えば大丈夫。

両足は肩幅より2歩大きく左右に開いて、体の正面を相手に向ける。空手で言うところの『騎馬立ち』って奴だ。

僕は学んだことないが、伝統派空手じゃ防御に特化した構えって話だ。

まあ、時間引き延ばすために大仰に構えてんだがね。この2人を足止めしとけば、この勝負が有利に進む。直江さえ仕留めちまえば、決着がつくんだからさ。

「チツ……面倒な奴と会っちまったな」

「いいじゃないか。やっとマトモに戦える」

いいわけがあるかボケ。

考え得る限り最悪の2人だよ、オマエらは！

源の強さは少し知ってるし、クリステイアーネは川神より強い。

しかも、レイピアじゃないけど木刀持ってる。

突きだったら、多少滑るか？

……いや、期待しない方がイイ。

レイピア握り慣れてるなら、そんな簡単に滑らんだろ。

しかも、今の僕じゃ受けられん。

クリステイアーネの突きは見たが、今の僕が対処できるレベルじゃない。

九鬼の蹴りで、左目の下あたりまで腫れあがり始めてる。

オマケに、川神の『地の剣』だから、少しだけ右足が不自由。

一撃目を受けてカウンター返そうにも、充分な踏ん張りが利かない。受けに回り続ければ、いずれは攻撃をもらう。

クリステイアーネだけなら時間稼ぎもできたろうけど、源もいる。

ちっとは頭使わないと、乗り切れんかも知れん。

「俺が抑えとくから、先行ってる」

って、源が前に出てきた。

あゝ……これはこれで見くびられてる気がしてムカツクなあ。

ま、源1人は確実に仕留められるってわけだし、素直に喜んどくか。捕まってるときにイロイロして貰ったけど、そんなんで見逃すわけねえだろ。

「いや、ここは自分が……」

「いいから行けつつってんだろ。面倒なことになる前に行っちまえ」

そんな風に強引に促されて、クリステイアーネが反対の扉に向こうに消える。

もちろん、僕は邪魔しなかった。

ここでアレを呼びとめても不利になるだけだし、源ならまだ勝算がある。

未知の敵と戦うより、既知の敵とやり合う方がずっと楽なわけだし。

ん？

面倒なこと？

どうしてクリステイアーネが戦うと面倒なんだ？

そもそも、2対1だよな？

僕がリーダーじゃないっていうのは分かってるにしたって……。

……ちょっと待てよ。

確かにコツチのリーダーは葵で、僕はリーダーじゃない。

だから、戦略的にも僕を足止めして、クリステイアーネを切り込ませるのは正しい。

正しいんだけどさ、大事なのはそこじゃないんだよ。

司令塔だから葵がリーダーなのは当然だって思ったた。

で、コッチと同じように、直江がリーダーだって思ってたんだが。この勝負、別に試合前からリーダーが決まってたわけじゃないよなあ？

「なるほど。これも直江の作戦だったわけか」

「リーダーが軍師じゃなきゃいけない……なんてルールは無かったぜ？」

クソが！

クリステイアーネがリーダーだったか！？

いや、そもそも、最初と同じ端末を持って移動しなきゃいけないなんて誰が言った？

途中で直江と端末を交換した可能性も……いや、どうでもいい。今は、考えるよりも体を動かさなきゃならん。

構えといて正解だった。

ここで逃げながら、葵にリーダーが誰かを伝える暇はない。

そこまで源が甘い奴だなんて、僕は思っていない。

難しいけど、可及的速やかに源を撃破して、葵に通信する。それしか方法がない。

さっきの構えのまま、右脚を大きく後ろに引いて。

そんな状態で左半身を源に見せる様に立って、左腕の肘は地に向けて。

その肘を90度に曲げ、トンファーで前方をガード。

右手に持ったトンファーは、後ろの方で待機させてる。

左腕とは違って、右の肘は僅かに曲がってるくらいのモン。
右の拳はほとんど後ろに向いてて、右のトンファーで出せる攻撃は
限られてくる。

せいぜい、体ごと反時計回りに振り回して、顔にトンファー叩きつ
けるくらいだ。

いや、それどころじゃない。

この構えだと、右のトンファー以外の攻撃はワンテンポ送らせてか
らじゃないと無理。

ガツチリ足の裏を地面につけ過ぎてて、素早い動きが取れないんだ
もん。

そもそも騎馬立ちなんて、現代の試合じゃ見たこともないし、僕も
使ったことはない。

今や、型として残っているだけにしか見えない構え。
そりゃもちろん、僕だって型の1つとしか考えてないさ。

こんな、足ガバツと開いて、腰落として踏ん張るような構えは。

だからイイんだよ。

攻撃が限定されてる……と思っ込んでる。

僕じゃない。

僕の構えを見た、ほとんどの人間がだ。

テンションが上がって調子乗ってると思うけどさ。

この構えからの攻撃なら、当てるだけなら川神百代にでも当てられ
る。

先に一撃目を出せれば、きつと当てられる。

もちろん、源は待つよなあ。

僕が待ちの姿勢で構えてんだから、無理に攻撃しなくてもいい。時間稼ぎして足止めできれば、向こうの最高戦力のクリスティアーネが戦ってくれる。

だから、僕に無理してかかってくる必要は、源にはない。

お互いに部屋の隅から動いてないから、距離は5m弱。

僕が構えを解いて襲いかかってきても、対応する自信があるんだろうさ。

油断なく警棒を構えて、あっちも待ちの姿勢になっている。

だから僕は、にじり寄る。

駆けよらず、襲いかからず、少しずつ距離を詰めて。

少しずつ少しずつ、着実に源に近づいてく。

左右に逃げても、そう時間をかけずに追い込めるさ。

だって、源は待ってるんだ。

その心構えをしてしまった時点で、もう向こうから攻めることはできない。

それに気付いても、もう遅い。

残った距離は2mと半分程度。

迂闊に動けば、カウンターでお釣りが返ってくる。

それに、先手は僕が取るんだから。

「セイツ！」

ターン移行のブザーと同時のタイミング。

右足を反時計回りに踏み出し、同時に右のトンファーを振る。

1撃目の狙いは、前に出されてる源の右足。

距離的には最も近い、足首を狙った一撃。

でも、源はガチガチに構えちゃいないから、ヒョイと足を挙げてかわしてしまう。

僕の思い通りに、かわしてしまう。

僕の狙いが返しの2撃目からにあると分ならず、かわしてしまう。

トンファーを振って体を閉じた、その勢いを使う。

今度は体を開いて、バックハンドブローのようにトンファーを振り回す。

狙いは、源が警棒を持つてる右手の手首から手の甲。

武器さえ奪ってしまえば、怖い相手じゃない。

それに、今の1発で怯んでれば、トンファー当てるくらいは楽勝だ。

右手の中でトンファーを一回転させながら。

今度は上半身の動きと腰の回転、そこに腕の動きを合わせてトンファーを振る。

これだけの勢いがあれば、マトモに警棒なんか握ってられな……。

あ、ヤバ、受けられ

幕間『測り損ねた代償』（前書き）

源視点の話です。

幕間『測り損ねた代償』

足首を狙った一撃を出しておいて、顔面が右手に返しの一撃。

あのおからさまな構えから、だいたいの想像はつく。

どれほどトンファーに慣れてるか知らんが、攻撃のパターンは限られてくる。

なにせ、コイツは下準備してからじゃないと真っ直ぐ来ないタイプだからだ。

島津との決闘を思い出せ。

アイツは、わざわざフルコン空手の構えで島津に対峙して。

で、そこからフェイントのタックルを出して、寝技に引きこんで一瞬で倒した。

二重の罠を張ってから、ようやく本命の攻撃に入ったってわけだ。

風間との決闘を思い出せ。

挑発に乗りやすい風間をからかって、自分のペースに持ち込んで。

わざわざ大技を出させて、顔に蹴りをもらいながら後ろ回し蹴りを返した。

充分な威力がある技を持つてるのに、確実に当てるために策を弄した。

武蔵って1年との戦いを思い出せ。

試合前から言葉で戦意を削いで、終始戦いを有利に運んでた。自分の評判を捨ててまで、楽に勝ちを拾いに行こうとしていたように見える。

それだけ勝負に対して慎重で、有効と考えれば手段を問わない。

つまり、港は真っ直ぐ戦わないタイプ。

危険があれば、それを最小限に減らして事に挑む。

小細工を弄して弄して、少しでも勝ちに近づこうとする。

そして、フェイントがかけられれば、必ずフェイントをかけてくる。力づくで勝てる相手にも、ちゃんと頭を使って被害を少なくして勝とうとする。

だから分かった。

港が俺の右足の足首を狙った時、すぐに直感した。

本命は右の足首じゃなくて、別のところにある。

怖かったのは、途中から軌道を変化させてくること。

足首を打つための横軌道から、突然立て軌道の攻撃に変化されたら。今縦に構えてる警棒じゃ、ガードしても滑って顔面に貰う。

それだけが怖かったんだが、その心配はなかった。

しっかり振り切ってくれた。

空手やってる割には大きすぎる振りで、次の攻撃のタメが大きい。

右のトンファーで再度攻撃してくるのは目に見えてた。

しかも、軌道は横。

コイツがトンファーに慣れてないのは、最初の一撃で分かった。

だから俺は、先んじて警棒で受け止めたってわけだ。

で、そのまま警棒で、顎を狙ったんだが。

「だっしやあああ！」

額で受けられた……って、オイオイ、割れたんじゃねえか？
なんか変な手応えあったぞ？

鈍いっつーかなんっつーか、とにかく変な手応えだ。

警棒を通して、薄く粘土を伸ばした岩を殴ったみてえな。

そんな気持ちの悪い、人を殺してしまっただかのような、妙な感触だ。

だが、右手にトンファー持ってるようじゃ、次の攻撃も限られる。
左手のトンファーを振り回す、右手のトンファーを強引に力チ上げる。

いったん離れて、間合いをとって攻撃し直す。

あるいは、言葉を使ってコツチを乱してから攻撃してくる。

そのいずれか。

どっちにしても、一拍は間ができる。

いや、それ以前に前のめりに倒

何が、おきた。

じめんがちかい。

せなかと腹に、しょうげきが残ってる。

なんで、腹に？

みなとが立ってる。

おれの前に立ってる。

こきゅうはととのってて、あたまから血が出る。

おれがけいぼうでなぐったときのきずか。

たれた血が、はなから口へとすべり落ちている。

きいてなかったのか？

「いつてえ。デコ割れちゃってんよ」

そう言いながら、おれのぼーちからたんまつをうばって。

「この端末破棄してください」

おれのたんまつを、はきされた。

右手にもってたんまつを、へやのすみに投げすてる。

かるい音を立てて、たんまつが地面に落ちた。

とんふぁーを持ってたはずの右手で。

こいつ、いったいいつの間に、トンファーをはなしやがった？

いや、それ以前に、俺に何をしやがった？

「テ、メエ」

肺がやられたのか、声が出ねえ。

いや、これは肺じゃねえ。

この息の詰まり方は、鳩尾に食らったか。でも、どうやって？

港はトンファ―を持ってない右手の柔術着の袖で、額の血を拭った。少し張り付いた血の跡が、わりと白い顔を汚して。その顔にくつついてる目が、少しだけ虚ろになってる。

……ノードメージってわけじゃないのか。

俺よりは、遥かにダメージが少ねえみたいだけだな。

「寸勁だよ、寸勁」

すんけい？

ああ、寸勁……ワンインチパンチか。

そんな技使えたのかよ、港の野郎。

「ま、こんな技は滅多に使わんし、1つくらい教えたって痛くもないからね」

まだあんのか？

あんな形勢逆転が出来る技が、まだあるってか。

強いとは思ってたが、ここまで強かったのか？

クリスの奴でも、素手だったらどうなるか分からん。

先に行かせておいて正解だったかもな。

ここでクリスが負けたら、この勝負自体が終わってたわけだしよ。

港はトンファーを拾わねえ。

が、左手に持つてる分を捨てもしない。

下手に両手に持つよりはマシってことか。

「じゃあ悪いけど、このままクリスティアーネがリーダーだって…
…」

そこまで言いかけたところで、港の端末が鳴る。

これは『通信』が来たときのアラーム音だ。

「港くん、急いでください。 4 - Gでクリスティアーネさんと戦
ってます」

この声だと、葵か。

誰かとまでは言っていなかったが、九鬼か不死川のどっちか1人だろ。
マルギツテは、もうとっくにリタイアしてる。

それに、もし2対1だったなら、わざわざ連絡して来ねえもんな。

「九鬼はどうしたんだよ！ 合流してねえのか！」

「『通信』はできるのですが、向こうが出てくれないんです」

「クソが……あの2人に抑えられてんのか」

目は虚ろでも、かすかに力がこもってる。

結構な力で殴ったつもりだが、まだ動けるのか。

額が割れて、体から力が抜けるほどのダメージが頭にあったのに、
なのに、まだ戦えるのか。

「不死川は4 - Gで合ってるんだな？」

「はい。私は3 - Gにいます」

今わかってても仕方ねえが、あの辺にいたのか。

数字のデカイエリアから回ったのは失敗だったな。

ま、九鬼とマルギツテが動けないなら、状況的には5分。

直江の運動神経でも、葵なら十分に倒せるはずだ。

「お前は適当に逃げとけ。源は仕留めた。俺は……すぐ4 - Gに行く」

それだけ言って、クリスを通った扉を開いて走り抜けてった。

少し右足を引きずり気味だったってことは、どっかで怪我してたのか。

そっぴや、顔の左っ側も腫れあがってたからな。

「つか、どんだけ頑丈なんだよ。」

普通、あんだだけダメージがあったらフラフラだろ。

しかも、あんな状態で加勢に行くのか。

……敵わねえな、コイツは。

なら俺は、ゆっくり休ませてもらおうとするか。

どうせ端末破棄されちまって、動こうにも動けねえ。

ま、心配事がないとは言わんが、今の俺じゃ何もできんからな。

気をつけるよ、一子。

幕間『測り損ねた代償』（後書き）

少々雑になりますが、一応終息に向かっています。

マルギツテが誰にやられたのか、九鬼と風間・一子がどういう状況なのか。

直江大和がどこにいるのか、クリスと不死川がどうなっているのか。私の拙い筆のせいで、全てを描写すると時間がかかりすぎますので、一部の話は川神ラビリンズ終了後に種明かしさせていただきます。

ご意見、ご感想、ご指摘、改善した方がよいと思われる点、展開予想などお待ちしておりますので、どんどん書いてやってください。

安いサンドバッグよりは頑丈な精神をしているので、辛らつな意見もお待ちしております。

幕間『終わりの始まり』(前書き)

不死川心の視点です。

幕間『終わりの始まり』

今の此方は、らしくない。

港に……死ねなどと言ってしまった。

普段の此方であれば、こんなことは絶対に言わん。

同じことが起きたのであれば、平静でも罵倒はするが。

動揺しているわけではない。

不安や緊張でストレスが溜まっているわけでもない。

じゃが、どうしても港に対して妙な態度で接してしまう。

これはきつと、皆口殿のせいじゃ。



昨日のこと。

本当は、皆口殿との稽古があつたんじゃが。

申し訳なくはあつたが、川神ラビリンズに備えて断らせてもらったが、高貴な不死川家が用もなく人を呼び出したなどということはあつてはならん。

だから、此方との夕餉に付き合ってもらつことにしたのじゃ。

食事中も、皆口殿は無表情。

言葉数少なく、膳の上の食事を黙々と口に運んでおつた。

『おいしいご飯ね』とか『毎日こういう食事なの？』などと声には出すが。

口元以外は、ピクリとも動いておらん気がする。

食べ物を中心に運ぶ箸でさえ、気が付いたらそこにあるかのよう。

普段から達人級の身のこなしであるあたり、やはり皆口殿はそこが知れんかった。

いや、ここからもっと底が知れなくなるのじゃが……。

「ところで心ちゃん」

「なんでしょうか？」

そのとき、初めて皆口殿の表情が変化するのを見た。何かをためらうような、少し困った感じの表情じゃった。

つまり、此方に何か聞きづらいことがあるということなのじゃろうが……。

どうしてそこまで悩む必要があるのか、此方には分からなかった。というわけで、少々待ってみようと味噌汁に口を付けたところで。

「港くんのこと、好きなの？」

「ぶふあ！」

盛大に味噌汁を吹いたのは、これが人生で初めてじゃった。

ただ吹いたどころか、気管に入るわ鼻を通りそうになるわで、むせながら涙目になって……乙女らしからぬ風体になっておった。こんなところ港に見られたら、幻滅されるどころじゃ。

そんな此方を見ても、皆口殿は平然としておられた。

……平然と、一人で納得しておられた。

「凶星ね」

「いや、いやいやいやいや！」

そんなはずはない。

此方の趣味は、知的で痩身で爽やかで、葵君のような男子。間違っても、港のような力技っぽいタイプではない。

港はあれじゃ、割と暗いし、無口な方だし、汗臭い感じだし。

確かに頭は悪くないし、此方よりも強いであろう点は尊敬できる。皆口殿と引き合わせてくれたのは港じゃし、初めての友人でもある。初めての友人で、大切な友人でもある。

此方には友人がいなかった。

小学校も中学校も貴族や豪族の子孫ばかりの集まる学校じゃった。じゃが、そんな中でも此方は『不死川』で、自然に接してくる生徒はおらんのだ。

恐れ多いのも分からんことはないし、近寄りがたいのも理解はできる。

だからといって、此方が寂しくなかったというわけでもない。

此方だつてカワイイ女の子なのじゃから、友達くらい欲しかった。

高校に入れば変わると思ったんじゃが、現実はそう甘くない。

1年の時なぞ、葵君らが少し構ってくれるくらいで、他に人付き合いはなし。

何日かに1回は、此方を妬む声が聞こえてくるのを無視するのが日課じゃった。

もう諦めていた、そのとき、そんなタイミングで。

港が、手を貸してくれた。

港が、友人となってくれた。

港が、遊びに連れて行ってくれた。

港が、たくさんの人と此方を祝ってくれた。

だから、此方も分かん。

もしかしたら、港に惚れかけておるのかも知れん。
顔も悪くはないし、頭も此方以上によい。
体付きは少々ゴツイが、背も高く力強い。
柔術着を着て戦いに臨む姿は、カッコ悪くない。

それは、惚れているということなのか。
それが、惚れているということなのか。
何も知らない此方には、何となくじゃが理解できん。

「イイ友人ですが、此方の好みからは外れております!」

嘘ではない。

此方の好みはもっと……いや、もういいか。
もうちょっと細身で、もうちょっとパツとした顔をしておれば。
そうすれば、まあ、向こうから告白してきたら付き合ってやらんで
もないような。

しかし、もし告白されたとして、此方はどう返事を返すのじゃろう
か？

お友達のみままで、などという言葉で友人関係は続かんじやろうし。
一息に迷惑だと言って切り捨てられるほど、港は悪い奴ではない。
恋人というイメージが浮かばんだだけで、ただそれだけで……。

「ねえ、心ちゃん」

そんな此方に、箸を止めた皆口殿が語りかける。

が、箸は置かんし茶碗もそのまま。

そして、先ほどとは違い、悩むというよりは真剣な表情で、
思わず気押されてしまって、息を飲んだ。

皆口殿の、あの吸い込まれそうな奇妙な瞳に釘づけになって。

そんな皆口殿の真剣な言葉は、やはり此方の心に楔くさびを打ち込んだ。

「貴方は、その人が自分の好みのタイプだから好きになるの？」



皆口殿の言葉が、まだ頭から離れない。

此方には恋心が分らない。

だから、皆口殿が正しいかどうかも分らない。

もし、皆口殿が正しいのなら『好き』と『好み』は違うのじゃろうか？

顔が好みだから、体型が好みだから、性格が好みだから。

そういう異性が、必ずしも『好きな異性』ではないということになる。

では、いったい好きな異性とはどういう定義なのじゃろうか。

その答えを聞きそびれてしまったがために、こうして悩んでおる。

此方は、港が好きなのか？

異性として意識しているのか？

港に、恋をしているのか？

そんなことを昨日から考えていたから、多少のことで慌ててしまった。

武蔵とのがあったので、余計に勘ぐってしまった。

葵君に後から聞いたが、九鬼の勘違いだったということじゃった。

「不死川さん」

ふと、葵君に声を掛けられて、己が呆けていることに気付いた。

いかん……集中力が続かないどころの話ではない。

初めから集中力が沸き上がらんのじゃ。

今の状態で戦ったならば、川神にも瞬殺されかねん。

意識を切り替えたいところじゃが、それも難しい。

「なんじゃ」

「いえ、なんでもありません」

ぶつきらぼつに返すも、葵君は涼しい顔。

マルギツテもおらず、九鬼も連絡がつかず、港がない。

此方しかおらん状況で、なぜ涼しい顔ができるのか。

葵君が近くににいるのに安心感がない。

頼もしい策士には違いないのに、一緒にいても不安が募る。

もし、複数の相手に襲われたらどうするのか。

此方が1人を瞬殺したとして……まず、その前提が成り立たない。

2人組のうちの1人がクリスであるとしたら。

そうなるだけで、こちらは詰む。

此方の今の集中力と力量では、クリスを瞬殺するということは不可能に近い。

お互い素手ならどうにかなるかも知れんが、それとて難儀じゃ。

殺すつもりならできるじゃろうが、加減できずに殺してしまうかも知れん。

此方に人を殺す度胸はないし、クリス相手に加減する余裕もない。

では、2人組のどちらかがクリスでないなら大丈夫かというところでもない。

葵君は運動神経が皆無じゃから、相手が誰であろうと逃げ切れないし戦えない。

此方の柔道では1人しか止められんし、皆口殿の技は危険すぎて加減できん。

結局、ある程度加減して投げつつ、関節を軽く破壊する位しか手が

ない。

それだけの手間をかけて、葵君が無事であるという保証はない。

もし、リーダーが葵君でなく港であつたら。

ここまで此方が頭を悩ませることもなかったのじゃ。

港と此方であれば、この空間なら3人相手でも充分に戦える。
どっしりと構えていることができた。

……また港。

また、港じゃ。

どうして港がそこまで気になる？

そうじゃない、それも考えてはいけない。

答えが出ないだけで、ひたすら悩むだけなのじゃから。

悩むだけ無駄なのなら、今は考えない方がいいに決まっておる。

また呆けておつたが、そうもいかなくなつた。

疲労を抑えるために足を止めていたのじゃが、此方らのいるエリアの扉が開いた。

味方であればよかつたが、世の中は都合よくできていない。

扉からのぞくのは、黄金色の長い髪の毛。

その右手に木刀を握り、真っ直ぐな視線をこちらに向ける。

クリステイアーネ・フリードリヒが、その扉をくぐりぬけてきた。

「逃げるのじゃ、葵君！」

「しかし、不死川さんを1人に……」

「邪魔だからとつとと行くのじゃ！！」

言い方はキツかったが、事実には違いない。

葵君は、戦いに関しては全くの素人。

クリス相手に、葵君を守りながら戦うという戦法はない。

あの鋭い突きをかわし、投げるといふことでさえ楽ではないのに。

川神との戦いで見せた、速くて伸びる鋭い突き。

こちらが想定しているより2歩は深く踏み込んでくる。

それだけでなく、体そのものも予想以上に伸びる。

ハッキリ言ってしまうえば、武器を持ったクリスに簡単には勝てん。

お荷物を背負いながら戦っては、気も乱れて勝機も失う。

アレは、それだけの相手じゃ。

静かに構える。

急いで構えると、クリスの攻撃のきっかけになってしまう。

重心は体の中心において、肩幅に開いた両足を前後に開き。

左腕は肘を折り畳み、天に向けて指の揃えられた左手を、左頬をかばうように。

右手は正拳突きのように脇の下に引き絞り、揃えた指を曲げて、手の甲を下に。

体を正面に向けて、相手の全身を視界に収める。

そのまま皆口殿をマネた、外見だけのハリボテの構え。

じゃが、クリスの足を一瞬止めるには十分。現に、この構えを見たクリスは攻撃する気配を鈍らせる。足を止めるどころか、擦り足で1歩引いた。お陰で、葵君はクリスと反対の扉から逃げる事ができた。

これで急場は凌げたはずなのじゃが、クリスに動揺の色はない。むしろ、葵君が逃げたのを確認して覚悟を決めたように見える。此方の自信のなさを悟られたのかと思っただが……そうではないとすぐに分かった。

「なるほど。リーダーは葵冬馬か」

「……知ったところで、お前は通さん」

今さら気付いたが、誰がリーダーの端末を持っているかなど敵には知りようがない。

葵君以外の誰かをリーダーにして、指揮を葵君に任せた方が良かった。

悪手じゃが、これ以外に方法はなかった。

此方1人で葵君を完全に守りきれないのなら、逃げてもらうしかない。

増援が期待できない今は、これが精一杯。

あとは敵に遭わんことを祈るしかないが、こればかりは運じゃ。

今からは、目の前の敵に集中力を全て向けねばならない。

此方の不利は否めない。
クリスは木刀を持っており、此方は素手。
しかも、相手はフェンシングの使い手。

勝機があるとすれば、懐に入ってしまうことじゃが、そもそも投げが難しい。

体操服にブルマなんぞという格好じゃから、襟を掴んでも破れてしまふ可能性が高い。

掴むことのできる袖なんぞ無く、使える投げ技が限定されてくる。固め技も、いくつかは必然的に使えなくなる。

対して、クリスはレイピアでないとはいえ、木刀という武器を持っている。

リーチは十分にあり、武器としての頑丈さも十分。

不慣れた武器とはいっても、それなりに手慣れた武器に近い。

それに、武器に慣れるがどうのという以前に、突きが1つ入れば勝負がついてしまふ。

木刀を持った右手を前に、踏み込むための右足を前に。

それほど腰を落とさず、こちらの様子を窺うように構え。

木刀の切っ先を軽く揺らしながら、少しずつ距離を詰めてくる。隙が無い。

此方は下がる。

本当は横の動きも混ぜたりしたいが、真っ直ぐ下がるしかない。背中の扉を守るように移動しないと、葵君を追跡されてしまふ。だから、攻め込まれないギリギリの速度で下がる。

此方は、ゆっくりと擦り足で下がる。

クリスも、無理して追ってはこない。

が、そんな展開はすぐに終わりを告げる。

此方の右足の力カトが、葵君が通過した扉にぶつかった。軽い音を立てて、コツンとぶつかる。

それだけで、状況はさらに悪くなった。

クリスの気配と構えが変わる。

木刀の切っ先は止まり、此方の首辺りに狙いを定める。

頭であればいくらでも避けられるが、狙いは恐らく鎖骨か胸骨。どちらにせよ、初動を見切れなければ回避はできないじやろう。覚悟を、決めねばならん。

もし港であつたなら、どう捌くか。

恐らく、突きをかわしてカウンターでタックルを決める。

もしくは、突きと同時に横に回り込んで、足をとって寝技に持ち込む。

アレだけ寝技に長けていれば、そういう手段も考えられる。

今、何を考えていたのじゃ？

違う、此方が考えるべきは目前の相手のこと。

その切っ先が、いつ伸びてくるかということ。

落ち着け、落ち着け。

気を乱せば、その瞬間に突かれると思え。

気を張り、僅かの動きも見逃すな。

突きが来た。

無言で来た。

真っ直ぐ来た。

僅かも左右にそれず、此方の中心に真っ直ぐ来た。

ぶれない、ずれない。

右、左……迷ってしまった、もうかわせない。

来る、腹、鳩尾。

受け、間に合わない、間に合え。

違う？

伸びた！？

右の、鎖骨に、しまった、も

……モロに食らった。

痛い、涙が出そうなほどに痛いじゃ。

こうして虚勢を張って立っていられるのが奇跡みたいに。

それくらい、右の鎖骨が熱を持って、ズキズキと痛みを感じる。

クリスは距離をとって、また構えている。

きつと、さっきの一撃は加減していたに違いない。

だから、まだ此方が立っていても動揺しない。

次の一撃を出して、それで仕留めるつもりなのじゃろう。

気配も何もない。

向こうはもう、あと一突きすれば此方を倒せるのじゃ。

今度は、探るような構え方はしない。

一見普通に構えているように見えるが、引き絞られた弓のような力強さがある。

先ほどの一撃よりも、もっと速くて強力な突きが来る。

右にも左にも避けられない、真っ直ぐ過ぎる突きが来る。

「クリステイアーネ！」

クリスの後ろの扉が開いた瞬間、叫んだ。

此方ではない、葵君でもない、九鬼でもない、2-Fの誰かでもない。

少し赤黒いシミのついた、白い柔術着を着ている。

港が、叫んだ。

幕間『終わりの始まり』（後書き）

不死川心の視点でした。

やや余分な話を含みつつ、次の話に続きます。

あと5話もかからずに第2章が終了する予定です。

いつものごとく、ご意見、ご感想、ご指摘諸々お待ちしております。

12 話目 『非劇的な決着』 (前書き)

タイトルは変換ミスではありません

12話目『非劇的な決着』

トンファー持ってたのが裏目に出たんだろうか。

使いなれてないクセに、調子に乗って武器に頼ったから。

だから、源に攻撃を読まれて、額をカツチリ割られたんだろうか。いや、頭割られるくらいはいいんだよね。

肌が破れて血が出るだけなら、ほとんどダメージはないんだし。

そんなことよりも、さっきの源との勝負で怪我が悪化した。

さっきのアレ……寸勁すんけいじゃなくて尺打しゃくただったんだけど。

無理して少し踏み込んで、アゴに貰うより早く額で受けて。

で、思ったより脳ミソに響いて、上体だけ前に突っ込みそうになつて。

そのまま倒れたら先手取られちゃうから、何かしなくちゃいけないって思つて。

3年は使つてなかったのに、咄嗟しゃくたに尺打を出してたんだよ。

そのせいで、体がもうガツタガタ。

尺打しゃくたを打ったのが右だったせいで、右肩の痛みが倍増。

その時踏み込んだのが右足だったせいで、右膝の感覚が半分に。

痛みが半分になって、感覚が倍になってくれるんだったら大歓迎なんだけどなあ。

まあ、左頬なんか目の下くらいまで腫れちゃってるけど、なんとか見えるからいいか。

いや、タフネスには自信があるんだけど、鍛えられないところにピ
ンポイントだもん。

筋肉の付け根やら、肉が薄くて骨が出張ってるところやら。

ホントまあ、よくもココまで危険なところに攻撃を入れてくれたも
んだ。

不意打ちの右膝周りへの蹴りが一番響いてるってのが、また情けな
い。

クリスティアーネの追跡は簡単だった。

僕が源と対峙してから、大した時間は経っていない。

更によく言うと、決着そのものも3分もかかっていないはず。

ということは、クリスティアーネが不死川達に遭ったのは偶然の可
能性が高い。

結構マヌケみたいなんだよね、クリスティアーネって。

スライドドアをきちんと閉めずに、そのまま次の扉を開けてった
みたい。

お陰さまで、目印がたくさんあった。

慌てたのか、少し開いたスライドドアが。

突貫工事だったから、自動で扉を閉める機構が安っぽいみたい。

お陰さまで、楽しんで追跡させてもらってるけどね。

少し右足を引きずりながらだけど、なんとか4・Hまで来た。

このエリアの扉は、偶然だろうけど少し大きく開いていた。

だから、中の様子が良く見えた。

クリステイアーネの後ろ姿が見えた。

その後ろ姿がグツと小さくなって、不死川に向かって行ったのがわかった。

妙に動きがスローに見えるのは、集中力が高まっているからに違いない。

なんでかって？

そりゃ簡単な話だよ。

その木刀の先にいるのが、不死川だったから。

何したって間に合わん。

僕と不死川の間にはクリステイアーネがいて。

そのクリステイアーネは、非常識な速度で不死川に突っ込んでく。

スライドドアを開いて不死川を守るとは、僕にはできない。

どうあがいたって、絶対に間に合わない。

コッチからじゃ見えないけど、当たったんだろう。

クリステイアーネが素早く下がったから、突きが当たったに違いはない。

突いたままにしたら、不死川に掴まれるかもしれないんだ。

手慣れた武器じゃないって言ったって、武器を失うのは惜しいはず。

それに、柔道を使う不死川に掴まれれば、一投いで逆転される可能性もある。

そういう可能性を潰すために、一度突いたら下がるのは正しい判断だ。

不死川とクリスティアーネの、割と尋常な勝負だとは思う。

片方が武器を持ってなかったりするが、不死川は柔道を使う。

相手がフェンシングを使うことを考えれば、全力を出せるって意味じゃ公平だ。

ちっとばかり間は悪い気がするが、文句を垂れるほど一方的な戦いでもない。

だからどうした。

不死川が木刀で突かれて、涼しい顔して我慢してる。

その事実だけで、僕は……俺は覚悟を決められた。

「クリスティアーネ！」

不死川の名前は呼ばない。

ここで不死川の名を呼んで、不死川の気がそつちに逸^それたら。それこそ、また突きを食らってしまうような隙を作り出してしまう。俺がやるべきは、不死川じゃなくてクリステイアーネの気を逸らすこと。

それほど大きな隙を作れなくてもいい。

俺が場に踏み入れるだけの隙が作れば、それで十分だ。

名前を呼ばれて、クリステイアーネは横に跳ぶ。

その場にいれば挟み撃ちになるんだから、そりゃ当然だ。

右に跳ぼうが左に跳ぼうが2対1にはなるが、不死川は恐らく動けない。

不死川に気を向け過ぎて、俺の攻撃を食らわないように注意してりやいいんだもんな。

それなりに決闘やらを見て来たんなら、そりゃ警戒するよな。

僕から見て左側に飛んでくれたのはラッキーだ。

お陰で、僕の右手がどうなってるか向こうには見えてない。

一度素手で血を拭った右手は、クリステイアーネに見えてない。

左手にあったトンファアを、軽く投げつけた。

余裕で受け止められるスピードで、大して力も込めず。

そうすれば、クリステイアーネは受け止める。

そこで、すぐに反撃に転じてくるはずだ。

……ほら、木刀でトンファアを受けながら、もう踏み込もうとしてる。

ここが最初のチャンスだ。

「待った」

「む」

無事な左手を挙げて、クリステイアーネに手の平を向ける。

まあ、よくマンガとかで見るとか『待て！』とか言っていて相手に待ってもらうときのアレ。

ジャーマンにも通じたみたいで一安心。

もし理解できずに突き進んできたら、ちよつと危なかった。

今すぐ攻める気概がなかったから、畳みかけられて大変なことになってたかも。

とにかく、間は取れた。

これでクリステイアーネはすぐに攻めてこないし、こちらのアクシヨンを待つ。

なんとか先手をとるチャンスを手に入れた。

もちろん、これが目的じゃない。

今から、戦いをもつと有利に運ばなきゃならないからね。

「ドイツじゃ、素手の相手に木刀で襲いかかるのが正々堂々っていつのか」

「な……！ 貴様、自分を侮辱」

ここで割り込む。
相手に意見を言わせない。

「相手が素手でも木刀持って殴りかかって、勝つためには何でもやる。」

いや、騎士道ってのは全く以って、卑怯卑屈の塊のような精神論なんだな」

「お前だってトンファーを持っていただろ！」

正論だね。

正論だけど、流れはコツチ。

強引に押し通せばいいだけの話さ。

「なんだ、拳句の果てに自己正当化かよ。

今の俺はトンファーを持ってないっていうのに、何言ってるの？

あゝあ。こんなんが騎士道がどうこう言ってるなんて、世も末だよなあ」

イラついてるな。

じゃあ、もう一押し。

「まあ、俺が怖いんだっいたらどうぞ木刀をお使いになってくださいな。」

素手で勝負したんじゃ、どうせ10秒もしない内に終わっちゃうんだから」

「見くびるな！ 木刀などなくても勝って見せるぞ！」

俺の挑発に簡単に乗って、部屋の角に武器を捨てた。

これでやっと対等になった。

武器を持っていないクリスティアネと、手負いの俺……僕。

痛みは集中力を跳ね上げて消してるから、動きに支障は出ないはず。右足と右肩ばっかは、痛み消したところでどうにもならないけど。

あれは、空手の構えのつもりだろうか？

腰を落として、右の拳を引いて、左の掌を突き出す。

右の突きで行くっていう、馬鹿みたいに正直な構えだ。

……いや、右の前蹴りだったら出せるか。

どっちにしても、真っ直ぐの攻撃しか来ない。

なら、いくらでも攻略して見せるさ。

拳なら読めるさ。

間合いも、突いてくるタイミングもね。

ボクシングみたいなのだったら少しマズかったけど、これなら問題ない。

タックル合わせてもいいし、足をすくってやってもいいなあ。

なんだつたら、研究中の大技をくれてやってもイイかも知らない。

成功したら頭潰れちゃうかもしれないし、胸骨とか内臓もダメにな

っちゃんだろっけど。

あ、でも殺したら軍隊に命狙われることになるのか。
うん、殺すのは控えることにしよう。

僕の構えは、割と新しい柔術のスタイル。

腰を深く落として、車のハンドルを掴むような手つき。

左右に動けるように、それ以上に素早くタックルできるように。
体の力を抜いて、それでもって全身を縮ませておく。

全身のバネを使って、瞬発力をフルに生かしてタックルを決める。

恥ずかしい話だけども、僕の本気のタックルってジャブより速いんだよね。

それに、体が伸びるから、多少見切られたところで避けれるもんじやない。

軽く蹴りとか出して相手の攻撃を誘うこともできるし、タックルを決めるチャンスは多い。

あとは、転がすなりなんなりすれば、もう好きにしちゃってOKなわけだ。

僕より寝技が優れてる奴は、今のところ同じ学年には見当たらないし。

このクリステイアーネも、お嬢様みたいだし寝技なんてやってないでしょ。

お互い部屋の端にいたわけでもないから、円の直径は3mちょっと。少しずつ距離を詰めてなきや、すぐにでも攻撃が始まってるところだ。

距離を縮められそうになったから、僕は横に動く。
で、時計回りに動きながら、コチラからも少しずつ距離を詰める。
決して下がらない。
下がったら、そのまま押されてしまうから。

僕だけじゃなくてクリスティアーネも横に動いている。
横に移動する速度は全く一緒で、2人で円の周りを回ってるみたい。
その円は段々狭くなって行って、距離が縮まっていく。
cm単位でジワジワと距離が狭くなり、緊張の糸が張っていく。
あゝ……集中力切れそう。

でさ、僕がこうやってグルグル回ってるのには2つ理由があつてね。
もし反時計回りに回ってたなら、不死川に足を掴ませる予定だった。
不死川もそれが分かってたみたいで、いつでも動けるように待機し
てる。

運がいいことに、そんなことしてもらわないで済んだんだけど。
時計回りに回ると、僕の方が早く不死川に近付くことになる。
そうすれば、不死川に被害を与えないように事を運べる。

ジリジリ動いて、20秒くらい経ったか。
ちょうど僕の後ろに不死川が来た。
お陰さまで、やっと不死川を葵の援護に回せる。
この位置からじゃ、クリスティアーネは不死川を攻撃できないから。

「不死川！」

その一言で、通じると思ってた。

なのに、不死川は扉を開く気配がない。

ガチャガチャやってはいるけど、扉が開かない？

まさか、ココに来て『施錠』なんか使ってきたのか？

いや、葵の奴が使ったのか？

とにかく……もう不死川を葵の援護に行かせられない。

少なくとも今のターンの間は、葵を助けに行けない。

バカなことをやった。

クリステイアーネを抑えてから、それから不死川を行かせればよかったのに。

不死川に意識をやったから、クリステイアーネから気が逸れてた。その一瞬で、もう拳が僕の顔面に届こうとしてた。

鼻に当たる。

ぐちゃって音がする。

めぢって音がする。

痛みと熱が、鼻を中心に顔に広がる。

僕を確実に倒すつもりだったのか、打ち抜くような突き。

クリステイアーネの右の拳が、僕の顔面にめり込んでく。

鼻を潰しただけじゃ飽き足りないのか、まだ深く。

力強い、鉄の棒で突かれたみたいないな一撃。

引くことを考えず、二撃目もなく、一撃で終わらせるための一撃。

だから、クリスティアーネの右の手首を掴めた。

左手の握力は125kg。

右腕と違って、左半身のダメージは脇腹の痛みくらいなモン。で、痛みは集中力で消してるから、今のところは無視できる。全力で、クリスティアーネの右手首を締め上げれるってわけだ。

思いつきり、手首を握りつぶすつもりで締め付ける。

ゆっくりと僕の顔から拳を剥がしていくと、ねっとり血の糸が引いた。

「この……放せ！」

左の拳が飛んでくる。

ちよっと割れちゃってるけど、額で受ける。

そうすりゃ血で滑るし、より相手の思惑と違った結果になる。

それが動揺につながって、僕が技を極めるだけの隙になる。

うん、判断を誤るよなあ、これだけ強く手首握られてりゃ。

手を握り潰されなかっただけ、僕の慈悲に感謝して欲しいもんだね。

クリスティアーネの右手を握ったまま、コッチの右手を相手の首の後ろに。

当然反応してくるけど、無駄だよ。

なんで右手を見せてなかったかって言うと、手首から手の甲まで血が付いてたから。

その血も、さつきまで走ってたから、汗と混ざってヌルヌルして。ほら、焦って僕の右手を握ろうとしても、滑っちゃうだろ？

体操服の後ろ襟を小指と薬指に引っ掛けながら、人差し指と中指で首をフック。

低い姿勢のクリステイアーネより、僕の方が重心が低い。

だから、そのまま小さく跳んで、相手の胴体を両足でホールドできた。

真正面から、女がヤツてるときに感極まって相手の胴体に足を絡めるように。

クリステイアーネが前屈み気味になってるから、これはガードポジションだ。

両足をフックしてるから、そのままクリステイアーネにぶら下がる。相手の右手を必要以上に引っ張って、手の平を地面に押し付けてやる。

首の後ろに引っ掛けてた僕の右手で、クリステイアーネの頭部を下げる。

その気になればディープリキスだってかませるけど、外人さんは好みじゃないからパス。

どっちにしても、好みでもない女に組み敷かれるそうなのは楽しくない。

ってわけで、コッチが組み敷かせてもらうことにする。

クリステイアーネの右手首を掴んでた左手。

その左手を、少しずつ相手の右足首に近付けてやって。

ピタリくっつきそうになったところで、スパッと手首を放してや

つて。

ホールドした両足を使って、クリステイアーネを僕から見て左側に傾けながら。

踏ん張ってる右足を、僕の左手で刈り取った。

で、そのまま反時計回りに2人で転がって、今度は僕が上をとる。

僕が大好きなマウントポジションになったってことさ。

鼻血が垂れてるのもアクセントになって、ポジション的には最高だ。僕の潰れた鼻から、ボタボタと血が溢れ出てる。

下向いてるから、当然だけど血も下に垂れ落ちて。

クリステイアーネの体操服と真っ赤に汚してる。

これでちよつとは嫌がってくれりゃいいんだけど、逆に視線が強くなってるっしやる。

逆境ほど燃えるタイプとか、ご勘弁願いたいんだけどなあ。

まあ、勝負はほとんどついたも同然だ。

あとは、端末を奪って破棄を宣告すればいい。

すればいいんだけど、クリステイアーネの端末は右の腰のポーチに収まってて。

相手の右手首を握ったままの僕の左手じゃ、端末に手を伸ばすことはできない。

でも、何の問題もないさ。

このエリアにいるのは、クリステイアーネと僕と、不死川の3人なんだから。

「不死川、頼む！ コイツの端末『破棄』してくれ！ リーダーは」

『ルビカ』

.....ル?

12話目『非劇的な決着』（後書き）

F組のリーダーはクリスティアーネ。

S組のリーダーは葵。

クリスティアーネの端末は破棄されていないのに、終了が宣告されたという事は……。

13話目『弱者は笑わない』（前書き）

主人公が折れた鼻を無理やり直すシーンがあります。

少々エグイので、気になる方は2本目の『————』を目安に読み飛ばしてください。

2本目の『————』を通過すれば、そのシーンを通していきます。

13話目 『弱者は笑わない』

それまでって、どういうことだよ？

まだクリスティアーネの端末は破棄されてない。

ってことは…… 葵の持つてる端末が破棄されたってことか？

おいおい、勘弁してくれよ。

満身創痍になってまで頑張ってたのに。

『戦闘中の生徒は、速やかに戦闘を終了するように！』

なんてお言葉も賜ったから、クリスティアーネの上から退いた。

早くじゃなくて、ゆっくりと。

そうじゃないと、なんかの間違いで反撃されるかもしれないし。

両足のホールド外して、掴んでた右手首をそっと放してやる。

うわ、内出血してんじゃん。

僕の掴んだところが紫色に変色しちゃってる。

ちょっと申し訳はないけど、まあ、勝負だったんだし仕方ないよね。

「どつやら自分達が勝ったようだな！」

腰に手を当てて勝利を宣言する金髪の外人が鬱陶しい。

別にお前が勝ったわけじゃねえだろうがよ。

面倒くせえから声には出さないでやるけどさ。

さっき手首を掴んだ時に、手え握り潰しておくんだった。

あ、不死川が『ぐぬぬ』って顔してる。

文句言いたいんだらうけど、不死川はクリスティーネに負けてたもんなあ。

朝から落ち着かない感じだったから集中力も落ちてたんだらうけど、負けは負けだし、不死川もそれを分かっているから黙ってんだらうね。

そういう悔しがってる顔も可愛らしいぞ、不死川。

ムカつくけど、黙っとくのが良策。

下手なこと言ったら、結果的にコッチの株を落とすだけだし。

負けたら黙って静かにしとくのが、武術家としての務めなのさ。

で、我慢してしばらく待っていると、ルー先生が走ってきた。

片手に地図持って、なんかリュック背負ってる。
まあ、あのリュックの中身は、応急処置用の道具だったりするんだ
ろうけど。

「お、3人トモ大怪我は……シテないって訳には行かなかったネ」

僕の方を見てからルー先生が言葉を切った。

うん、そりゃ顔パンパンに腫れてるんだもん、軽傷なわけがないさ。
集中力が切れてきて、本格的に左の脇腹も痛くなってきた。

そういうこと考え出すと、右肩も、右膝周りも痛みが蘇ってきて。
涙出そうになるけど、ムリムリ、絶対に涙なんて流せない。

だってさ、よく分からんけど不死川がコツチ見てるんだもん。

不死川も集中力切れちゃったのか、ちよっと呆けた感じで。

「港くん、変な頭痛がシタリ、気持ち悪かつたりはしないカナ？」

「はい、全然問題ないですよ」

妙な頭痛がして、さつきからポーっとしてますけどね。

こんなのは慣れたもんだから、問題ないの範囲内。

頭の血は……まあ、そのうち止まるから問題ないはず。

ちよっと切っただけでビクビクするくらい出血するからね、頭部っ
て。

でもまあ、ルー先生も気になったんだろうね。

「鼻の方は大丈夫かな？ よかつたら治そうか？」

「いぶえ、びぶぶでできませんがだ」

鼻血が口の方から戻ってきて、なんか変な声になっちゃった。

『いえ、自分でできますから』が言えないとか、結構な怪我だよなあ。

まあ、そんなことはともかく、今回も自力で治す。

今回は真っ直ぐ潰れたみたいだから、右の鼻の穴から先に指を突っ込んで。

こっ……ぐりぐり、っと、痛い、けど、頑張つて、奥、まで！
目玉が裏っ返りそうなくらい痛いけど、我慢、我慢、我慢。

なんとか鼻の奥まで指突っ込んで治して、グイッと手前に引つ張る。これがまた、痛い痛い。

涙ポロポロ出てきたけど、不死川からなら見えないから無問題。

どうにか鼻の基本形を作つて、今度は左の鼻の穴に指を突っ込んで微調整。

あゝ、これ軟骨ダメになっちゃたかも。

なんか妙にグネグネしてるし、硬い感覚が鼻に残つてないもん。こりゃ、整形でもして軟骨っぽいもの突っ込まなきゃダメかも。

ルー先生はともかく、クリステイアーネが口抑えてら。

うん、つまらないけど意趣返しできたね。

リアル整形ショーとか、高校生じゃなかなかお目にかかれないうしね。むしろ、貴重な経験ができた分、金を払って欲しいくらいだよ。

「とりあえず、止血くらいはシテおきなサイ」

「……どうも」

ルー先生が、ガーゼと包帯ポンと出してくれたぜ！

なんて洋画風に考えてみたけど、止血はしてくれないんだね、ルー先生。

僕を無視して、クリステイアーネの内出血の治療に入らないでください。

せめてテープくれないと、ガーゼ固定できないんですけど。

又メツとしてる血液を利用して張り付けるってのも、なんか違う気がするし。

まあ、僕の包帯じゃないんだから、血で汚れたっていいか。

そのままガーゼ使わずに、包帯でグルグルと止血しようかなあ。

「港」

僕の名前を呼んだ方に顔を向けると、そこには不死川が。

冷静になると、今はちよつと話し辛いんだよなあ。

だつてさ、誤解が解けたかどうかも分かってないんだよ？

慌てて不死川助けに行ったのはいいけど、そこまで考えてなかったもん。

イライラした表情で、何考えてるかわからないし。

オマケに、なんか左手を出してる。

この状況で手を出してるってことは、アレだろうか。

包帯とガーゼよこせてことだろうか。

見たところ不死川に出血はないし、そんな必要もないと思うんだけ

ど。

「それを早く渡さんか！」

って可愛らしい顔で一喝。

ビックリして思わず包帯とか手渡しちゃったけど、どうするつもりだろ。

まず包帯を着物の裾に入れて、ガーゼを……僕の額に!?

固まりかけた粘っこい血のせいでピタツと張り付いてるけど、それってどうよ。

もしかしなくても、不死川って他人の怪我の処置したことないんじゃないの？

今回は偶然くつついたけど、普通は指で固定しながら包帯で上から巻いてくとかあるでしょ。

そんな、おっかなビックリでガーゼなんか張られた日にゃ。

鼻血と額の出血が、倍くらいに増えそうなくらい鼓動が高まっちゃうんですが。

クソが……初々しくて嬉しすぎるわ！

で、血が付かないように着物の裾をめくったから、不死川の白い肌が覗く。

洋服姿だったときにも見たけど、透ける様に白い肌ってのはこういうのなんだろうね。

顔が赤くなってるのか心配だけど、まあ、今なら安心だ。

おもっくそ蹴り抜かれて、顔面に突き貫ってんだから。腫れて赤くなってるって言い訳ができるわけだ。

そう考えると、顔蹴られたり殴られたりしたのもラッキーなのかも

ね。

こう、包帯巻いてくれるんだけどさ、たどたどしいんだよ。最初にちよっとピンと引っ張っておかないと、止血効果が薄くなるから。

まあ、あんまり強く締めすぎてもよくはないんだけど、正直ユルユル。

辛うじて包帯が巻いてあるだけって状態。

ちゃんと治療された感じじゃないけど、むしろ手慣れてないのが最高だ。

『不死川の手慣れてない治療』を受けることができたのは、この世で僕だけだ！

「鼻の方は大丈夫か？」

「ぞのうちどまるから大丈夫」

また口の方に鼻血が戻ってきた。

でもまあ、そのうち止まるってのは本当だからね。

鼻血出し慣れてるのか、もう中で固まってきたみたいだし。

あとは口の方に流れ出てくる分さえどうにかなれば、僕としては文句なし。

今日は病院に行ってから帰宅することにしよう。

結局この後、ルー先生の引率でラビリンスから脱出する運びになった。

その間、不死川と一言も話さなかったけど、仕方ないよね。迷宮を出てから、それからキチンと話ができればいいさ。

どうやら2・Sで最後に脱出したのは僕と不死川だったみたい。ラビリンスの外に出ると、わっ、て歓声が聞こえてきて。出口に、葵と九鬼とマルギツテが立ってた。見た目には、全員無傷で。

不死川は、どうにも右の鎖骨が痛むからって保健室に。肩が拳がってたから折れちゃいないだろうけど、ちょっと心配。もしかして、さっき包帯巻いてくれたときも、無理してくれたんじゃないだろうか。

……だとしたら申し訳ないよなあ。

僕が不死川の治療してやろうにも、女の子の鎖骨触るとか失礼だし。ちゃんと僕の口から弁解したかったけど、また明日にでも頑張ろう。

まあ、今は目先のことさ。

俺と不死川が必死こいて戦ってたのに、コイツら全員が無傷ってなんだよ。

少しくらいは怪我してるって思ってたのに、ふざけてんの？勝負が終わったばっかだけど、心の底からムカつく。変なところで怒りが湧いてきちゃったけど、仕方ないって。好きな女が怪我してんのに、ムカつく男が無傷とか許せんたる。

葵の前まで移動して、上から見下ろす。で、この黙ってるバカに言ってるわけだ。

「なんで無傷なんだよテメエ」

結構睨み聞かせるんだけど、全然動じない。

コイツのこういふところも嫌いだ。

外野からチマチマと物動かすだけで、自分は策士気取ってやがる。今も、俺が目に見える怪我してるってのに涼しい顔しやがって。

「私の端末を破棄したのは……私自身だからです」

当然みたいな顔してぬかしやがったよ、コイツ。
どこまで俺のこと舐めてんだろうね？

今の僕の語調と目つきから、僕が怒ってんのは明白なのに。
なのに、この調子くれてるみたいな態度。

ジャージの襟を掴んで絞り上げてやろうと思ったんだけど。
その手を、九鬼が掴んだ。

「待て、ミチヒロ。トーマを責めて結果が変わるわけでもあるまい」

「俺の顔に蹴りくれちゃった奴が、どんな正論言っても意味ねえっ
つーの」

真剣な顔してるけど、それは俺の顔見てから言っただけだしセリフだ
ね。

鼻はどうか戻ってるけど、お前に蹴られたとこパンパンに腫れて
るだけ。

いや、鼻はいいんだよ、鼻は。

ウォータープルーフの化粧品で普段から赤み消してたから、怪我も
目立たないし。

ただ、頬がこんな感じだと、飯が食にくい。

左目の下も腫れ上がっちゃって、少し左目が見えにくいしね。

「アレは誤解を与えるようなマネをした貴様が悪い。

我が水に流してやっても良いと言っているのだ。ありがたく水に
流せ」

話にならねえや。

つたく、昔はもっと人の話を聞く奴だったのになあ。

まあ、コイツと話しても時間の無駄だってわかったただけでも良しとしよう。

パツと手を振り切って、ついでに会話も切ってやった。

あとは……マルギツテだな。

特殊部隊の軍人様が無傷で敗北した経緯でも聞かせていただくこうか。

「で、マルギツテさんはどうやって負けられたんでしょうか？」

こういう嫌味つたらしい言い方は通用するんだろうか？

まあ、自己満足でやってるからどうでもいいんだけど。

それよか、ちよつと真剣に気になるんだよなあ。

あのマルギツテが、あのメンバー相手にどうやって負けたか。

素手とはいえ、クリステイアーネもズバ抜けて強いわけじゃなかったし。

これが負ける要素が見当たらない気がするんだけどね。

「お嬢様を人質に取られ、自発的に端末を破棄しただけのこと」

えつと、どういうことかな？

コイツの言う『お嬢様』ってのは、たぶんクリステイアーネのこと
で。

なんで、敵が人質に取られて自滅してんのさ。

軍人なんだし、公私を分けて考えるのが普通なんじゃないの？

つて、いぶかしげな視線を送ると、冷たい視線と一緒に言葉が返ってくる。

「お嬢様の貞操を守るのは、公私ともに最優先事項だと知りなさい」

……あゝ、なんて言ったらいいんだろ。

このクラスの連中って、能力に反比例してバカなんだろうか。

井上もロリコン持ちだし、榊原もアパーだし、葵もクソみたいな性格だし。

拳句の果てに、編入してきたマルギツテも、いまいち常識が足りてないし。

脅しだってわかるだろうが、そんなもん。

常識的に考えて、味方に手ひどいマネをする奴はいないっつーの。

アホくさ。

どうせ負けたんだし、相手が誰を指名するのか待つしかないもんなあ。

可能性が高いのは、やっぱり葵。

なんだかんだ言っても顔いいし、エレガント・クアットロだっけか？

そんなのにも選ばれてるくらいだし、女子がほっとかないはず。

まあ、いなくなってくれりゃ、俺としちゃスッキリするけどよ。

で、次点で井上か榊原。

戦略的な意味はないけど、最終戦だから誰を指名してもいい。

取り返される心配もないし、次の試合なんてないから細かいこと考

えなくてもいい。

じゃあ、男子に人気のある榎原か、友好的な井上じゃないかなあ、とか。

まあ、俺……僕や不死川が選ばれる可能性は皆無だからなあ。

そりゃ、試合中に俺が指名されたけど、別にクラスに欲しかったわけじゃないだろうし。

不死川にしたって、2-Fの連中には嫌われてるだろうからね。

だから、その辺は深く考えなくても大丈夫そう。

前例はあるけど、大丈夫って信じよう。

向こうにはガクト君もいるんだし、それとなく僕と不死川から意識を逸らしてくれるはず。

「あゝ、ちょっといいカナ？」

なんて、いつの間にかルー先生が。

いかなあ、集中力が落ちてる。

普通にコッチに歩いてきてただけなのに、全然気付かなかった。仕方ないよなあ、結構キレイに顔に貰っちゃったし。

「一応、川神ラビリンスは2-Sの負けッテ形で終了したんだけど」

『だけど』の続きは分かってるさ。

勝った方が負けた方のクラスから1人引き抜けるルールだもんなあ。昨日までは宣告してたけど、今日はグラウンドに巨大な迷宮がある。ちようどいいポジションがないから、事後報告みたいになってんの

かね。

それとも、ホントはもう指名が済んでて、再確認に来たとか。まあ、どっちにしても、僕は誰が指名されたか知らないからちようどいいか。

「2-Fは、マルギツテを指名シタ。それを報告しに来たんだヨ」
え〜つと、まあいつか。

マルギツテに思い入れある奴もいないだろうし。
どういう意図で選ばれたのか知らないけど、僕でも不死川でもないならイイヤ。

負けたことは気に食わないけど、結果からすればイイ方だったんじゃないかなあ。

薙刀でだけど風間殴れたし、源に意趣返しできたし。

あれ？

よく考えたら、直江以外の全員と遭ってんじゃん。
そうやって考えると大健闘だよなあ、僕。
さて、もう帰ろつと。

「どうしました、港くん？」

「怪我がキツイから病院行くんだよ」

今だけ怪我してるんだから当たり前だろうが。

まあ、診てもらうんじゃないかって治療してもらいに行くんだけど。

あと、これ以上オマエの顔見ると殴っちゃうかも知れんからね。

「でしたら是非、葵紋病院に……」

「行くわけねえだろタコ」

馬鹿馬鹿しい。

オマエの親の病院で治療受けるとか、それだけで虫唾が走るわ。妙な気を遣われて、貸し作る羽目になるのも面倒だしよ。

行きつけの病院にでも行って、しっかり手当してもらっちゃ。不死川に一声かけてからにしたいけど、また明日ってことで。

それにしても、今日は散々だった。

大した収穫はなかった、のかなあ。

でも、不死川に包帯巻いてもらったし、プラスになったって考えるべきなのかも。

それはそれとして、僕だって武術家の末席を汚す人間なんだ。女相手に、武器捨てさせないと勝負できなかったなんて。

そうまでして、決着を付けることも叶わなかったなんて。

ここまで自分の弱さを再確認させられて、悔しくないわけがないだろ。

もし、僕がもっと強かったら。

九鬼と川神と風間を相手にしても、充分に戦えるくらい強かったら。あの場で九鬼を説得して、手早く葵たちに合流できたかもしれない。誤解は解けたんだろうけど、不死川に勘違いされることもなかったかもしれない。

源を相手に、無傷で勝てたかもしれない。

無傷で勝てないにしても、右肩と右膝の怪我を悪化させずに済んだかもしれない。

もっと戦いを有利に運べたかもしれない。

いや、もっと早く勝負を終わらせて、不死川に怪我を負わせずに済んだかもしれない。

まあ、気にしたって仕方ないし。

とにかく、とつとと病院に行つて、怪我治しちまうか。

こんな顔じゃ気味悪過ぎて、不死川と遊びにも行けねえもん。

そう、怪我を治すのが先決だ。

だから、負けたことを悔しがるのは、また明日から。

今さら歯を食いしばったって、俺が弱かった事実は覆らねえんだから。

13 話目 『弱者は笑わない』 (後書き)

無駄に長かった川神ラビリンスも、ようやく終了しました。

……グダグダな展開が続きましたが、ようやく終了です。

ご意見、ご感想、ご指摘など、諸々お待ちしております。

『テメエ、川神ラビリンスとかマジでダレたわ』とか

『もっとテンポよく話を書けんのかコラ』とか

『早く次の話書け』とか

『ごめん……モーディスクんのこと、友達としか見れないの』とか

辛らつな意見もお待ちしております。

閑話『そうして次の日曜日』（前書き）

この話は、本編との関連性が薄いです。
次の章に入る前のクッションとさせていただければ幸いです。

閑話『そうして次の日曜日』

僕がいるのはバッテリーセンター。

ゲームセンターの隣に設置されてて、個人的にはゲーセンの方が気になる感じ。

でも、今日はクレイニングゲームをやりに来たんじゃなくってさ。

小西さんにトレーニングの手伝いしてもらうんだから、ワガママは言えない。

顔の腫れも体の痛みも引いてないけど、根性出して頑張るさ。

あ、それと、葵が『葵紋病院に行け』って言ってた意味がようやく分かった。

よく考えれりゃ、刺し歯を預けたまんまだったんだよね。

お陰で次の日、教室に入ると机の上に刺し歯のケースが置いてあるなんてことに。

今度からは、もうちょっと自分の行動を見つめ直して生活しないとなあ。

あ、ちょっと話が逸れたか。

えっと、どうしてこうなったってのは、簡単に説明するところじゃない。

この間、川神ラビリンスでクリスティアーネ相手に苦戦した。

わざわざ木刀を捨てさせるなんてマネもしたのに、鼻折られちゃったんだよね。

せっかく治りかけてたのに、ウォータープルーフまで使って腫れているの隠してたのに。

風間に続いて、クリステイアーネにまで鼻折られた。

もしかしたら、風間ファミリーに鼻を折られ続ける運命にあるのかも。

まあ、そういう世迷い言は置いて、今回の怪我で完全に鼻がダメになった。

なのにキツチリ潰れちゃって、鼻の軟骨がヤバい感じ。

医者からは『整形して軟骨みたいな鼻に入れなきゃなあ』なんて笑われちゃって。

僕が思うに、これは僕が弱かったから受けた怪我だ。

不死川の鎖骨の怪我も、僕が強かったら防げたのかもしれない。

なんて単純なこと考えて、小西さんに特訓を頼んでみたりして。

それで、何故か今はバツティングセンターにいる。

でもって小西さん曰く『お前にはスピードと動体視力が足りん!』とのこと。

小西さんも毎日暇じゃないから、それを個人でも鍛えられるようにってことで。

その方法を教わるべく、わざわざ隣のバツティングセンターにまで来たところ。

「いいか、港。今からお前に教えるのは、俺が高校時代に考案したトレーニングだ」

バッテリーボックスに立った小西さんが、ネット越しに語りかける。そういや、小西さんにも学生時代があっただっけか。

高校時代の話とか、機会があつたら聞いてみてもいいかも。

まあ、トレーニングを自分で考案するくらいだから、今とあんまり変わらないんだろうけど。

「ココに飛んでくるボールには数字が書いてある。

飛んでくるボールを素手でキャッチしつつ、その数字を当ててるんだ」

……それは何というか。

「あの、小西さん」

「どうした」

「僕、この特訓、仮面ライダーで見たことがあるんですけど」

「……俺が高校時代に考案したトレーニングだ」

いやいやいや、間違いないって。

仮面ライダーブレイドで見たもん。

小西さん、大口叩いたのはイイけどなんも思いつかなかったのか。いや、コッチも無理してもらってるから文句はないんだけどさ。

せめて、これの真偽だけでもハツキリさせておきたいところ。

「いや、でも見覚えが」

「俺が！ 高校時代に！ 自力で！ 考案した！ トレーニングだ！」

……すごい力強く宣言されました。

こうなったら、どうやったって曲がらないもんなあ。

まあ、とりあえず見学させてもらって、それからだね。

「まあ見てろ」

僕が黙っていると、意気揚々と100円玉を機械に突っ込んでく。

ここのバッティングセンターは、300円で30球飛んでくる仕組み。

高いのか安いのかわかんないけど、どうせココが一番近いしね。

小西さんが、右のバッターボックスに立つ。

ボールが出てくる穴を見据えて、直立不動で立っている。

集中力を高めて、その集中力を全部、飛んでくるであろうボールに。

と、ガシュって音がして、ボールが飛びだしてきた。

「3!」

一瞬のうちにボールはベースの上を通過して……いや、通過してない。

小西さんが、その右手でボールを捕らえてる。

おお、時速140kmのボールを素手でキャッチしたのか！
普通はコレだけで随分と難しいんだけど、よくできるなあ。
さすがはサブミッション・ハンター。
掴むことに関しちゃ一級品ってわけか。

でも、どうして固まってるんだろ？

次のボール飛んできちゃったのに、そのまま突っ立ってる。

もしかして、手がめっちゃくちゃ痛かったりするんだろっか？

とか考えながら、小西さんの手の中のボールの数字を覗いてみると……。

そこに書いてある数字は『8』だった。

……見間違えたのか、小西さん。

「いや、小西さん。ボール掴むだけでも十分凄いなと思」

「ふんっ!」

……あの、小西さん？

ボールに噛みつくのはマナー違反じゃないでしょうか？

こう、ガリッとかぶりついてますが、叱られないんでしょうか？

「見る。俺の言った通り『3』だ」

自信満々でボールを見せてくれたけどさ。

『8』だった所を噛みちぎって『3』にしただけですよね、小西さん。

確かにボール掴んだり、反射神経やらが必要ですよ。

その数字を読み上げるのは、動体視力が必須ですよ。

ただ、その……最後の最後に強引過ぎるんじゃないでしょうか。

そんなところに小西さんが連れてきたってことは、それなりの理由があるんだろうね。

例えば『壊してもイイ人間を壊す練習』とか、そういう血生臭いのリアルに關節壊せる人間だし、それくらいの無茶はやりかねない。ヤバくなったら、まあ、どうにかしよう。

と、少し薄暗い路地裏に誘導される僕。

何をやるんだろうって思いながらついでと、急に小西さんが振り返る。

でもって、バッティングセンターと同じように、大声で改善点を指摘された。

「お前に足りないのは、度胸と判断力だ！」

「はあ」

うん、確かに足りないかもしれないなあ。

特に判断力の方。

川神ラビリンスの時も、もうちょっと冷静に判断できてたら結果が違つたらうし。

さすが小西さん、何だかんだ言つて、ちゃんと考えてくれてたんだね。

まあ、何をやるかが気になってるところではあるけど。

ヤクザ狩りとか狂ったマネは、さすがにないとは思っただけど。

「というわけで、今からナンパをして度胸と判断力を鍛えてもらう！」

俺が高校時代に、度胸と判断力を鍛えるために考案したトレーニングだ！」

なんか似たようなセリフを聞いた気がするんだけど、スルーしよう。

あんまり引きずると、同じようなことを延々と聞く羽目になる。

こういうときは、黙ってついてくのが吉ってことだね。

なんかあったら、よっぽど小西さんがどうにかしてくれるだろうし。

「じゃあ、7時になったら梅屋に集合な。電話番号を聞き出せた女の数で勝負だ！」

勝負だったんかい。

なんて言う間もなく『先手必勝！』とか言って小西さんが路地裏からいなくなった。

……僕、本当にこの人についてきてよかったんだろうか。

まあ、付いてきちゃったんだし、最後まで面倒みてもらうか。

しかし、ナンパで度胸と判断力を鍛える。

これはなかなか理にかなってる気がしないでもない。

だってさ、ナンパって『相手を見極める』ってことも必要になるよね。

電話番号を教えてくれるのか、一緒に飯を食いに行ってくれるのか、一緒に酒を飲んでくれるのか、ホテルにまで連れ込むことができるのか。

そっついう見極めと、声をかけるときの思い切り。

それを以って度胸と判断力って言うなら、あながち間違いじゃないと思う。

ただ、これが武術に役立つかは知らんけどね。

とりあえず、愚痴なんて考えてないで時間潰すか。

ナンパするほど女の子が好きなのでもないし。

そもそも、僕には不死川って心に決めた人がいるんだから。

| | | | | | | | | | | |

コーラ飲みながら通行人を見つめるだけで、ゆったり時間が過ぎてく。

よく見りゃ、ここも色んな連中がいるんだよなあ。

ゲロ吐きながら前のめりに倒れ込むサラリーマンっぽいオッサン。

僕が見ても分かるような偽ブランドのバッグを、誇らしげにぶら下げてる女子高生。

ヤクザになれなかったチンピラの3人組が、睨みを利かせて歩いてる。

一番面白いのは警察官で、顔が腫れてるだけの僕を見ても目を逸らした。

うん、ここは総じて腐ってる。

だからこそ便利なところもあるんだけど、ココに住もうとは思わない。

必要なものを買そろえて、その帰りに飯を食ってく。

ココは、僕にとってそれ以上の価値のある場所じゃない。

しかし、ココに来ると6月半ばのことを思い出す。

梅屋で出会った、奇妙なオッサンと兄妹の3人。

パツと見た感じじゃ、家族でもおかしくなさそうな年齢だったけど。まあ、どうでもいっか。

竜兵も天ちゃんも、相変わらず自由気ままにやってるみたいだし。

メールで見た分には、竜兵はバイトで無人島にいるとか。

『男の誇りをかけた鬼ゴッコ』とか、危険な匂いがプンプンしそうなバイトだよな。

天ちゃんは天ちゃん、いつも好き勝手に過ごしてるってことだし。ゲームセンターとかであつたら、飯くらいは奢ってあげよう。

この2人の将来が心配にならんこともないけど、今が楽しきやいのかなあ。

僕には関係ない話だし、口出しする権利もない。

まあ、悪い奴らじゃないんだし、その辺はどうでもいいよ。

「おい、ミッチー」

しかし、そろそろ本当に戦い方を変えなきゃならんかもね。
ブラジリアン柔術でそこそこは戦えてるけど、強みが引き出せてない。

動体視力とか反射神経が足りてないから、どうにも後手に回る事が多すぎる。

後の先をとってるならまだしも、後手に回って強引に攻め返してるだけ。

こんなんじゃ、そのうち脳ミソ垂れ流して死ぬんじやなかるうか。

「ミッチー」

それは困る。

まだ不死川に告白さえしてないのに、そう簡単には死ねない。

せめて、不死川に思いを伝えて返事を聞くまでは、僕は死ねない。

もっと受けの練習をして、ディフェンス面を強化する必要があると思うだ。

体の頑丈さに頼っていると、今回みたいにダメージを蓄積するだけになりかねない。

「無視すんじやねえ！」

「ゴブツ！」

痛っ!?!?

人がコーラ飲みかけたタイミングで缶を突き上げるとか、どこの外道だ!

せっかく左の頬にコーラ溜まらないようにしてたのに、口ん中コーラだらけだよ!

おおおお染みる染みる染みる染みる染みる！
マジで染みる、スツゲエ染みる、死ぬほど染みる、メチャ染みる！
思わず思考ルーチン変えそうになるくらい染みたわ！

「人が飲んでる最中に缶ジュースの底を叩くとか」

「よお、ミツチー！ 久しぶりじゃねーか！」

『どついう教育受けてんだよ』まで言わなくて正解だった。
マトモな教育受けてないだろうからなあ、天ちゃん。
本人が気にしてたらアレだし、本当に言わなくてよかった。
今度から、他人を罵倒するときにはちよっと言葉を選ぶようにしよう。

「天ちゃん、人が缶ジュース飲んでるときに突き上げるのはやめようよ」

「何度も呼んでのに返事しねえミツチーが悪いんだろ」

このガキ、悪びれもしねえよ。
しかも、なんでかコツチが悪いことしてたみたいな言い草だし。
確かに返事はしなかったかも知らないけど、聞こえてなかったただけだつてのに。
腰を落ち着けて話す機会があつたら、ちゃんと教えとかないといけないかも。

「で、何してんの？」

「え〜っと、修行の一環でナンパしてんの」

はあ？ って顔されても困るよ。

僕だって無理やり自分を納得させてんだからさ。

ナンパが修行とか、今どきマンガでもやらなさそうな奇抜な組み合わせ。

そんなもんに自分が遭遇するなんて思いもしなかったんだもん。

「なんで修行でナンパなんだよ」

意味わかんねー、なんて付け足してくれちゃう。

う〜ん……イイ感じのSっ気なんだけどなあ、もつたいない。
あと8年くらい出会うのが早かったら、人生違ったかもね。

「まあ、先輩の言葉だからね。縦社会は厳しいんだよ」

「ふ〜ん。それで、何人引っ掛けたんだ？」

「コーラ飲んでるだけで女性が引っ掛かったら苦労しないよ」

正直ヤル気ないしね。

まあ、怪我の治療に時間を割かせてもらっただ。

ワガママ言っただ小西さんに時間割いてもらってるけど、怪我は酷いんだし。

「じゃあさ」

そんなことを言いながら、急に腕をからめてくる天ちゃん。えっと、健全な男子高校生なんで反応しそうなんです。なんていうか、天ちゃんはガード甘いんだよなあ。また胸が当たってるんだけど、平然としてるし。

「ウチが引つ掛かってやるよ」

「は？」

この子、意味分かってんだろうか。僕がどこまでする気が知らないのに、ナンパに引つ掛かってやるなんて。

まあ、単に話相手が欲しいだけかもしれないから、深く考えることもないか。

武蔵の件もあって、ちょっと自意識過剰になっちゃってるからなあ。うん、天ちゃんからすれば気まぐれなんだよ、きつと。

「あゝ……じゃあ、喫茶店でも行くろうか」

「おうよー！」

だからまあ、僕も気まぐれ起こしたってことで。

僕がチョコレートパフェつつついて、天ちゃんはイチゴパフェ。
ゴスロリっぽい服の天ちゃんは、美味しそうにパフェを口に運んで
る。

いやあ、絵になるよなあ。

180cm超えのゴツイ男がチョコパフェ食ってるよりはずっと。

親不孝通りから少し離れたところにある喫茶店。

パフェが美味しいんだけど、場所が場所だから客の入りが少ないん
だよな。

まあ、席が空いてることが多いし、僕としちゃ文句ないんだけどさ。
日曜日なのに、こうやって面と向かって甘いモンつつつけてるわけ
だし。

「悪いなミッチー！ 奢ってもらっちゃって！」

「ナンパしたときは男が奢るもんなんだよ」

常識だよな、この辺って。

『奢ってもらって当然!』って女は鬱陶しいけど。

まあ、天ちゃんだし、パフェの1つくらいは惜しくないさ。

そんなに裕福でもないだろうし、多少はね。

本当はバイト先紹介してあげたいけど、おせっかいが過ぎるよなあ。

「へえ〜。じゃあ、今度からパフェ食いくなったらナンパされよっかな」

恐ろしいことを言うなあ、うん。

パフェ1つで貞操の危機に陥るかもしれないってのに。

普通の街中はどうか知らないけど、親不孝通りでやることじゃないさ。

言っちゃなんだけど、マトモな連中を見つけるのが難しいところなんだから。

「大抵の奴は下心で奢ってるから、ナンパされても断ることにしておこうね」

「それじゃあ、ミッチーもウチにエロいことしようとか思ってるの?」

「え〜っと……それはコレからのお楽しみってことで」

当然、そんな予定なんかないけどね。

天ちゃんはカワイイとは思うけど、妹みたいな感じだもん。

そりゃ、僕のタイプにストライクしてるけど、手を出そうって気にはならない。

敢えて言うんだったら、妹みたいなものだし。

「胸くらいだったら揉ませてやんぜ？」

「いい歳した女の子なんだから、はしたない冗談はやめなさい」

危なかった！

今、僕の本能が『いいの？』とか口走らせようとしやがった！

『いい歳した』なんて言葉で誤魔化せたのは奇跡だよ！

そんなセクハラ発言かましたら、その場で殴られても文句言えんわ！
平然とチヨコパフェ食っていられる自分に乾杯！

と、天ちゃんが突然ゴホゴホと。

最初はすぐの収まるかと思っただけど……ヤバくないかなあ。

えっと、おったん黄疸も吐血もないから、緊急性は低そうだけど。

……あ、これって気管支ぜん息じゃねえか？

なんか工業地帯のど真ん中に住んでるって話だし。

とりあえず、ピッチャーからグラスに水を入れて。

せきが収まったら、コイツで喉をうるおしてもらおう。

で、たつぷり1分くらい使って、ようやく天ちゃんが落ち着いた。
うん、すっごい苦しそう。

「あゝ、天ちゃん。大丈夫かな？」

「いや……あんま大丈夫じゃねえ」

きつちり涙目な天ちゃん。

そりゃキツイよなあ。

自分の意思に関係なく、肺の空気絞り出すんだもん。

「最近、住んでるとこのスモッグがキツくなつてさ」

「そついや、工場が多い区域だもんね」

「引つ越せりゃいいんだけど、それはちょっと難しいしからさ」

『アタシが我慢しねーとな』とか強がっちゃって。

つたく、そついう時は他人を頼れつての。

もしかしたら、思わぬ相手から突破口が開けるかもしれないんだから。

例えば、一緒にパフェ食ってる相手が安アパートに住んでて。

その安アパートの部屋が、まだ3部屋余ってるとか分かるかもしれないだし。

まあ、2回も一緒にモノ食った縁だ。

今回は、特別にコッチから提案してあげよう。

「ねえ、天ちゃん」

「あん？」

スプーンが口に入ったまま返事するのはマナー違反だよ。

まあ、僕も箸の持ち方が下手で、人のこと言えないしさ。

今はマナーについて文句を言うときでもないしさ。

今は、知り合いの身の上を考えてやるのが先決なわけだし。
月雄さんもアパートの部屋が埋まって懐が潤うし、まあ、別にイイ
よね。

で、午後6時50分。

梅屋に入ると、既に小西さんがカウンターで牛皿食ってた。
米を食った形跡がないんだけど、いつものことだから気にしない。
ていうか、僕、小西さんが野菜食ってるの見たことないんだよね。
大腸ガンのリスクとか、その辺のこと考えてなさそうだし。
まあ、元々が刹那的に生きてる人だし、そんなこと今さらだよね。

奥の席に座ってたもんだから、ちょっと遠回りしつつ小西さんの隣
に。
どうせ僕が来るんだから、向かいで食える席を取ってくれてもよか
ったんだけど。

とりあえず、豚丼の特盛りを1つ注文してグラスの中の水に口を付

けてみたり。

「よお、どうだった？ 1人くらいナンパできたか？」

「お察しの通り、ちょうど1人でしたよ」

アレをナンパって言うならね、

天ちゃんがいなかったら、人間観察して終わりだったし。

高校2年生が、治安の悪い場所で半日使って人間観察だけしてました。

なんて日曜日があったら、さすがの僕でもへこんじゃうって。

若い時間は短いんだから、無駄使いはできないもんね。

「そうか。どこまでいった？」

「喫茶店に寄って……その子の住んでるところと電話番号も知ってますよ」

嘘は言っていないから大丈夫。

天ちゃんとは喫茶店でパフェ食ったし、電話番号は前に教えてもらったし。

住んでるところは、まあ、天ちゃんの話から大体は分かった。

親不孝通りに電車を使わずに来て、スモッグが増え始めた工業地帯。

そんなところ、川神周辺には一ヶ所しかないからね。

……まあ、保護者の方の気が変われば、来週にも住所が変わるんだけど。

「なるほど。上々だな」

そりゃ、僕みたいなのが女性に声をかけれりゃ上々かもね。
実際は声かけてもらったんだけど、結果オーライってヤツだ。

「じゃあ、次のトレーニングだな」

時間も随分と遅いんだけど、今からできるトレーニングがあるっていうのかなあ。

またバツティングセンターに戻ることはないだろうし、他のトレーニングか。

思いつくのは、電車使わずにランニングして帰るくらいだけど、それくらいは余裕。

それに、そんなヌルいトレーニングを、小西さんが考え付くはずがない。

この人だったら『日本列島をランニングで横断』とか言ったりしそ
うだもんね。

まあ、何かあるかは、お楽しみってことにしておこうか。

何だかんだ言っただけ強い人なんだし、よっぽど間違いはないでしょ。

「すいませーん！ コイツに牛皿20追加で！」

……前言撤回。

そう遠くないうちに、この人の評価を見直した方がいいかも知れない。

閑話『そうして次の日曜日』（後書き）

相も変わらず、ご意見、ご感想、ご指摘など、諸々お待ちしております。

……最近、ちょっと日常生活に影響が出てきたので、更新のペースを落とすかもです。

第3章：1話目『そういえば7月2日って……』

顔ポッコポコになりながらも、なんとか1学期終了寸前まで乗り切った。

まあ、死ぬほどの怪我じゃなかったし、休まなくても問題ナシ。不死川も鎖骨にヒビすら入ってなかったみたいで、更に問題ナシ。テストも根性で乗り切ったから問題ナシ。

何が問題かって？

そりゃアレだよ、タイミングが悪かった。

珍しく、僕も不死川も弁当持ちだったんだよ。

僕は月雄さんの手作り弁当で、不死川は小さめの重箱弁当で。

机くっつけて弁当つついてると、結構幸せな気分になれたり。

なれたりするんだけど、こっからが重要だね。

葵が1年からラブレターもらって、その返事をしに行ってて教室にいなかった。

井上の奴も、昼のラジオ放送だとかで席を開けてた。

そう、いつも3人組のはずなのに、今の教室には1人しかいない。

榊原小雪が、菓子パン食い終えてフリーダムに教室を駆けまわってるんだよ。

さつきまでは仲村を蹴り倒して弁当奪ってたけど、それにも飽きてきたみたいでさ。

不死川の弁当を物欲しそうに見ながら、髪の毛引っ張ったり袖引っ張ったり。

僕と不死川の甘い時間を邪魔してくるわけだ。

「ね〜ね〜、今月の1日、僕の誕生日だったんだ。だから何かちょくだい！」

「真昼間からモノをたかるのはやめるのじゃ！」

夏服の榊原に、グイグイと着物の袖を引っ張られる不死川。ふーん、榊原つて7月1日生まれなんだ。

月だけで見れば僕と一緒になのか……なんて考えてたんだよ。そのあと、不死川が何を言い出すかも知らずに。

「それを言ったら、此方も2日に誕生日を迎えておるんじゃないぞ！」

なんて、不死川が言うもんだから。

僕……えっと、どうしようって思ってたんだよ。

だって、今日は7月6日だし。

まさか、不死川の誕生日がこんなに早く来てると思わなかった。入念に下調べしようにも、不死川が付き合い少ないから情報も少なくて。

怪我治したり試験で忙しかったりで、すっかり気付かなかった。

これはなんというか、本当にマズい。

女の子にとって誕生日って言うのは、男のそれとは全く別の価値を持つっていうし。

ただでさえ女の子は各種イベントに聡いらしいのに、こんな大イベントを逃すなんて。

1点差で勝ち越してたのに、9回表で逆転ホームランもらって2点差付くくらいマズイ。

平静を装って本に目を落とすしちやいたが、内心ビクビク。

この不始末をどうやって挽回しようか、それで頭がいっぱいだ。

そんで、どういう訳か僕の顔を覗き込む電波子ちゃん。

ガンくれてるわけじゃないんだろっけど、特に用もないだろうに。なんて思っていると、不死川にしてたように馴れ馴れしく話しかけてきやがった。

切羽詰まってきたんだからマジで話しかけんじゃねえよタコ。

「そっいえば、ヒロミチの誕生日っていつだったけ？」

「俺は体操のお兄さんじゃねえよ」

バク転もできるしアクロバットな動きもできるけど、断じて違うぞ！
この電波子ちゃん、僕の名前を本気で間違えてるんじゃないだろう
な。

ほとんど話したことがないから、名前が分からないんだっていうな
ら仕方ない。

僕だって、コイツの名前が榊原だって思い出しながら話してるとこ
ろだし。

「それくらい知ってるよバーカ！ お前はミチヒロ、歌のお兄さん
はヒロミチだ！」

……コイツ、そのうち1回シメた方がイイかなあ。

人が大人しくしてやってりや図に乗りやがって。

何かスポーツやってんだろが、ブラジリアン柔術舐めんよ。

膝と肩の痛みは残ってるけど、小娘1人転がすくらいは余裕なんだ
からな。

まあ、不死川の手前だし、重要情報を運んでくれたから見逃してや
るけどよ。

「いいから、もったいぶらずに教えるのじゃ！」

なんで不死川に叱られたんだらうか。

まあ……教えるけどさ、誕生日くらい。

「今月の17日だよ」

まあ、中学時代もことごとく忘れられてたけどさ。
なんで夏休みの手前に誕生しちまったんだろうなあ。
お陰で、どいつもこいつも夏休みに入ってから『誕生日いつ?』な
んて聞いてきやがる。

「へー！ 同じ月に生まれたんだね〜！」

だからなんだよ、鬱陶しい。

あゝあ、とつとと葵か井上が帰ってこないもんかね。

コレほつとかれると、わりと迷惑なんだけどなあ。

……なんか電波子ちゃんがスカートポケットをゴソゴソやってて
そつからなんか出して、両手を広げて不死川と僕に突き出してきた。
その掌の上には、アメみたいに分けにパツクされたマシユマロが
1つずつ。

「そんな2人にマシユマロをあげます！」

「なんか流れが強引な気がするが、まあいいのじゃ。ありがたく貰
つてやるぞ」

……別にマシユマロ好きじゃないんですけど。

まあ、勝手に手に握らせてくるから、貰つとくけどさ。

なんかコレ相手だとペースが乱れるんだよなあ。

とか考えながら、マシユマロの封を切つて、口の中に放り込んだと
ころで。

「どっちか1個はカラシ入りです！」

ツンと来たわボケ。
うわやだ、涙出てきそう。

「やくい！ ミチヒロが引っ掛かった〜！」

このクソアマ、いつか絶対に泣かす。

でも不死川が『ならコツチは大丈夫じゃな』って旨そうにマシユマ口食ってるから許す。

両方ともカラスが入ってるって考えない安直さもカワイイなあ。

うん、完璧な女の子より、これくらいの方が絶対にカワイイ。

さて、それはともかく。

不死川は気にした様子がないけど、これはマズイことになった。

何か起死回生の策を思いつければいいけど、僕には経験が圧倒的に不足してる。

こういう場合は、経験豊富なノブさんに……ダメだ。

ノブさんが付き合ってるのは女子中学生であって、女子高生じゃないんだっただ。

女子高生……ああ、なんだ。

今の僕には女子高生の知り合いが何人かいるじゃないか。
同世代の彼女らだったら、きっと何か思いつくはずだ。

さて、舌の辛さはウーロン茶で中和するとして。

全員にメールでも送って、放課後に時間作ってもらおうか。

その日の放課後。

普通の1日を装って、学校を出て不死川と別れた。

あのあと、不死川は自分の誕生日について言及してこなかったけど、女の子なんだし、気にしないはずがないよなあ。

で、僕が今いるのは、商店街から少し離れたところにある喫茶店。

ノブさんの兄貴が5つ星の評価を付けたとかいう喫茶店。

立地条件はともかくとして、コーヒーの味とケーキの相性が抜群だった。

まあ、女の子らは紅茶でも飲むんだらうけど、対策はバッチリ。

すっきりしたモカ系のケーキなら、充分に紅茶と合うってのは調査

済みだしね。

さて、僕が何で女の子に気を使って喫茶店を選んだかっていうと。由紀江ちゃんと、大和田さんと、武蔵の3人をメールで呼びつけたからなわけで。

急用ってことで呼び出したから、3人も状況が飲み込めてない。

まあ、ケーキを食いながら聞いてもらう予定だから、詳しいことは伝えてないし。

多少は混乱するよなあ、うん。

ちなみに、僕の正面に大和田さん。

左側に由紀江ちゃんがいて、右側に武蔵が座ってる。

道路側がガラス張りになってて、外からは僕のたくましい背中が通行人の視線にさらされてる。

……僕が主催なんだけど、僕が1番場違いだろうなあ。

まあ、細かいことはどうでもいいや。

「遠慮せずに好きなだけ注文してくれ」

なんだったらテイクアウトしてくれても構わない。

その言葉を聞いても、3人は遠慮がちな様子でメニューに目を落としている。

僕に遠慮することなんかないのになあ。

言っちゃなんだけど、金だけだったら結構持つてるし。

特に由紀江ちゃんなんか、僕の懐の温かさくらいは知ってるはずなんだけど。

こういうときは先輩に甘えるっていう、僕の常識が間違ってたのかも知れない。

「あの、急にどうしたんですか？」

メニユーの上から覗き込むように武蔵が見つめてくる。

もしこれがカワイイ仕草のつもりだったら、予想以上の効果が上がってるぞ！

でも、武蔵だから我慢できてるんだよね、実際のところ。

同じことを不死川にされたなら、僕は飛び付かない自信がない。

「まあ、当然の疑問だろうね」

僕だって同じ状況に置かれたら、きっと同じことを考えるさ。

大して親しくもない先輩に呼び出されて、飯をおごってくれるなんて話になるとか。

何か下心があったり、変な思惑があって呼ばれたんじゃないかって疑うもん。

とりあえず飯は食わせてもらって、ヤバそうだったらトイレ行くフリして逃げるんだけどね。

まあ、これだけ女の子らが慎重なのは仕方がないと思う。

僕が年下趣味ってのは、学校の連中の間じゃ周知になっちゃったんだし。

警戒するよなあ、僕より年下の女の子だったら。

ここは1つ、正直に言って付き合ってもらっしかないよね。

「実は今月の2日だけど、不死川の誕生日だったらしいんだ」

まずはココから。

皆の目が不審に染まってるんだから、軽くジャブから入っておく。下手すると、大和田さんと武蔵なんかは分かるんじゃないかなあ。そもそも、この3人は僕が不死川好きなの気付いてると思うんだよね。

由紀江ちゃんは鈍いからともかく、武蔵は知ってるし、大和田さんは鋭そう。

「僕は祝ってやることもできず、遺憾の意を感じているところだね。どうにか後からでも祝ってあげたいんだけど、僕は女心には疎い。そういうわけで、同年代の女子の君らに手を貸してもらおうと思っただよ」

これだけ言って理解できなかつたら、コミュニケーション能力に難があるね。

まあ、危険は無いって分かってくれただろうし、ようやく話が進むよ。

「も〜、武蔵さん！ 『先輩が年下ハーレムやるうとしてる』って全然違うじゃん！」

『オイラも真に受けて、110番を短縮ダイヤルに設定しちまったYO！』

何言ってたんだ、大和田さんに松風よ。

僕という人間に対して、いったいどういいう評価を下してたんだ。

武蔵のつまらない発言を真に受けるってのは……いや、悪くは無いのかなあ。

この3人の間に、それなりの信頼関係があるってことになるわけだし。

由紀江ちゃんに友達が増えたってことで、素直に喜んでおいてやるか。

だからって、黙っててやる義理もないから言及してやるう。

「えっと、それはいったいどういうことかな？」

ちよっと口調をキツめに。

武蔵を少し睨むように見ながら、ハッキリとした口調で。

「港先輩、年下が好きなんですよね？」

「好みの問題だけど、年上よりは年下だろうね」

そりゃ嘘じゃないさ。

年上よりは年下の方が好きだよ。

ただし、それはアダルトな本とかDVDの設定の話なんだけどね。

ハッキリ言ってしまうえば、今の僕の女性の好みは『不死川心』で片付く。

まあ、さすがに恥ずかしいから口には出さないけど。

「だから、こつやって年下を3人も呼んだのは、ハーレムやるためかな？……って」

かな〜、じゃねえよボケ。

目を泳がせても誤魔化しにならんぞ。

自意識過剰って言葉くらいは知ってるよね？

そもそも、僕はハーレムには断じて興味はない。

たった1人の女性を愛せないような、頭の軽い男でいるつもりはない。

男として生まれたからには、ただ1人、妻にした女性のみを愛さないやいけな。

……現状だったら『妻にしたい女性を』ってことになるんだけどね。

「この場を借りて3人に伝えておくが、僕は不死川以外の女性に興味はない」

わざわざ口にするのは恥ずかしかったけど、これは大切なこと。

少なくとも2人のサポートが期待できるし、武蔵に対する牽制も兼ねてるんだよ。

コイツが本当に僕のことを好きだったら、妨害に出るかも知れんし。もし好きじゃなかったって、これは妙な意味には取られない。

『不死川と結ばれたいから手を貸してくれ』と、好意的に解釈してくれるはず。

「はははは恥ずかしくないんですか？」

『店員さん！ クーラーもつとガンガン効かせて〜！』

クソ……このエロ娘が。

僕を抑える自信があるからって騒ぎやがって。

恥ずかしいに決まってるだろうが、そんなもん。

後輩の、しかも女子に話すのが恥ずかしくないわけないだろ。

顔から火が出るんだったら、もう火ダルマになってるよ。

「えっと……それ、もう不死川先輩に伝えたんですか？」

「いや、まだだけど」

頼むから、そんな『え〜!?!』って顔しないでくれよ。

すぐに告白して勝ち目があるんだったら、もう告白済ませてるって。

まあ、そんな簡単に伝えられない事情が複数あるんだだけどさ。

細かいこと言っても分かんないだろうし、簡単なだけ教えとくか。

「僕と不死川が話すようになったのは、今年の5月からなんだよ。

まだ話し始めて半年も経ってないのに、こんな重たい告白できんでしょ」

それくらいは理解してるつもり。

だから、わざわざ友人から初めて、ゆっくり不死川との距離を縮めてるんだよ。

友人になったのも急だったけど、ココから先は急ピッチが命取りになる。

僕の方も準備ができてないんだし、とりわけ急ぐようなことでもない。

不死川の家柄からして、庶民との自由恋愛なんか認めないだろうから安心だし。

……まあ、港ごときとの恋愛を認めてくれるとも思っちゃいないが

ね。

「不死川先輩って、去年からSクラスなんですよね？」

「まあ、ずっとSクラスだったね」

なんかさっきから食い付きいいなあ、大和田さん。
もしかして、この手の話が好きなんだろうか。

「港先輩も、去年からずっとSクラスなんですよね？」

「まあ、そうだったね」

この子らが知ってるかは別として、僕、ちょこちょこ勉強してるし。
朝早く学校に来たり、得意科目の時間に他の勉強したりで。

……なんでか脳ミソの構造が悪くないんだよなあ。

まあ、僕の人生においてプラスになってるからいいんだけどさ。
頭悪かったら、格闘技やりながらSクラスに残って、恋に悩んだり
はできんからね。

それにさ、世の中はバカに優しくないんだよ？

努力して賢くなって、楽に生きられるようにならなきゃ。

「じゃあ、いつから不死川先輩のことが好きになったんですか？」

そこまで聞くか、大和田さん。

まあ、気になるのは分かるんだけどさ。

そこはほら、かなりプライベートな部分だと思っただよ。
年頃の女の子として気になるのは分かるけど……いや、虚を混ぜるか。

本当のことを言わないだけで、嘘つくわけじゃないからイイよね。

「今年いきなりってわけじゃないよ。少なくとも、去年からは好きだった」

嘘はついてない。

去年の段階では、もう好きだったんだから。

言い回しが言い回しだから、細かいところに気付きやしないだろうけどさ。

でも、これはこれで他人に簡単に言っていないことじゃないし。

8年も前から好きだったなんて話すと、どうでもイイところで話が長くなるからね。

と、いきなり大和田さんがテーブルに備え付けてあるボタンをプッシュ。

何度も押すと店員さんがイライラしながら接客してくれるアレだ。もちろん、常識的な大和田さんはワンプッシュしかしなかったけどさ。

店員さんが素早くやってきて『御注文をどうぞ』なんて、ニヤケ面で言いやがった。

別に修羅場でも何でもねえから、とっとと注文取ってケーキ持ってきて死ね。

「私は……ザッハとストロベリータルトとモンブランとモカチョコを一つずつ」

「じゃあ私は、抹茶ショートと季節のフルーツロールとブルーベリータルトを」

「カスタードパイとシフォンケーキとレアチーズケーキのラズベリーソースを一つずつで」

僕の思惑など露知らず、女の子たちがケーキを頼んでく。

……年頃の女の子って、こんなに食べられるもんなのかなあ。
甘いモンは嫌いじゃないけど、同じ量を僕は食えんぞ。

と、左側から馬のストラップが突き付けられた。

由紀江ちゃんが松風を使うときは、なんか話しにくい内容だったのは知ってるけど。

まさか、また冷やかしたみたいな物言いをされるんだろうか。
とか思ってた僕は、疑り深くなり過ぎてんだろっね。

『早く注文しねえと、話を聞く時間なんて無くなっちまうぜ！』

なんて、気を遣われたんだから。

世の中まだまだ捨てたもんじゃないね、まったく。

なんか3人ともニヤニヤしてるのが、なんとなく気に入らんけどね。

まあ、長くなる話かもしれないだ。

戯言とケークくらいは、好きなようにさせてあげなまきゃね。

第3章：1話目『そういえば7月2日って……』(後書き)

恒例となっておりますが、ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘など
お待ちしております。

『8年前ってなんだよ！ タメてねえで早く書けよ！』

『カワイイ年下3人も連れてる港死ね』

『最近、不死川心の出番が少ないと思います』

など、諸々お待ちしております。

2話目『ある晴れた日の夜話（枕）』

昨日は7月6日。

でもって、今日は7月7日。

空を見上げれば、どこまで見渡しても雲が視界に入らない。ただ青いだけの空が、今日一日はずっと続いていた。

そんな昼間を終えて、今は真つ赤な夕暮れ時を迎えようつてところ。待ち合わせの1時間前……午後5時くらい。

今日の夜に見える天の川は、さぞかしキレイなことだろうね。

まあ、普段は星空なんて見上げやしないけどさ。

今日くらいは、目に焼きつけたくなるかもしれないわけだし。

あの3人に話して正解だったかもしれない。

じゃなきゃ、今日が七夕で、祭りがあるなんて忘れてたかもしれないんだもん。

『ロマンチックなムードに女の子は弱いんですよ!』とは大和田さんの言。

あの中じゃ乙女っぽさNo.1だからね。

そんな子が力説してたんだから、きつと間違いは無い。

むしろ、3人に2万円以上食べさせたのに役に立たなかったら泣くぞ。

テイクアウトしてもいいって言ったからって、容赦なく持ち帰りやがって。

由紀江ちゃんとか、14個もケーキ買ってってどうするんだろうね。まあ、食った分の働きくらいはしてくれるだろうから、多少は期待してあげようか。

実際のところ、もう多少は働いてもらったしね。

今日、由紀江ちゃんから不死川に連絡を入れてもらった。

『お祭りがあるので、みんなと一緒に行きませんか？』って。

もちろん、僕の携帯電話にも同時送信してもらおうのも忘れない。

不死川も最初は考えてたんだけど、多分『みんなです』ってフレーズに惹かれたんだろうね。

悩んだ拳句、結局OKした。

今日の僕は完璧だ。

派手じゃなくて地味でもない、イイ具合の格好をしてきた。

白黒灰色で彩られたチエツクの7分丈のシャツに、黒いジーンズを合わせてみたり。

中には薄地の灰色のタンクトップ着てるけど、これは見えないようにしてる。

パツと見た限りじゃ、シャツとジーンズだけのスッキリした格好だ。

それで、香水をうつすらと付けてみたりもした。

スッキリと香るシトラス系の香水だ。

『甘い匂いはホストっぽい！』とは、やはり大和田さんの言。

そこには武蔵も同意してたし、これも間違いなさそう。

ああ、そうそう。

今から何をするかだけどさ。

今日って実は7月7日。

天気もバツチリ晴天で、こりゃもう祭りが開かれたりするわけだ。だって、七夕なんだから。

織姫と彦星がイチャついてんだから、僕にも楽しませろってんだ。

昨日の3人の計画の肝もココにある。

僕は日を改めて、人数集めて岩つてやればいって話をしたんだけどさ。

『今さら誕生日パーティーとか開いてもシラけるだけですから』とは武蔵の談。

確かに、タイミングを逸したパーティーなんて、ギャグの意味を説明するくらい寒いのかも。

だから、今日は気合が入ってた。

不死川と僕を、祭りの間は2人きりにしてくれるっていうんだから。

ノブさんに助言も貰ってて、その辺も完璧だ。

『織姫なんかよりオマエの方が輝いてるぜ』なんて言わねえよ。

さすがノブさん、何パターンか聞いてみたけど、見事に滑るセリフばっかだった。

みおりちゃん、アレでよく愛想尽かさないよなあ。

とりあえず、ノブさんの考えたセリフに近くなければ勝機は十分つてことになるからね。

しかも、昨日のうちに駆けずり回って、プレゼントも手に入れてある。

何を言ってプレゼントを渡すか考え付いてないことを除けば、十分に完璧さ。

場所は川神院。

変に飾り付けられた寺が、ちょっと滑稽な感じがする。

まあ、年に何回かのことだし、細かいことはパスしとこう。

待ち合わせは6時だったけど、全員5時半にはキツチリ揃ってた。

まだ夕焼けに入りかかったばかりで、茜色って表現がふさわしい空模様。

未だに雲が見えないし、もう天の川が見えちゃったりしてる。

これから雨が降ってくる気配もないし、今日は1日楽しめそうだね。

由紀江ちゃんがホットパンツとカーディガンで、大和田さんがレース地のワンピース。

武蔵は大和田さんと被った感じの服装。

で、数合わせやら諸々で呼んだ入江は……まあ、それっぽい洋服。

男の服なんざ見たところで面白くもなんともない。

で、今日の不死川も洋服だった。

俗にいうところのパーティードレスってヤツ。

ピンクを基調としたワンピースに、灰色と黒の中間の色の薄手のコサージュ。

ブランドものかは分からないけど、シンプルなデザインの赤いクラッチバッグ。

前回の白と黒をメインに据えた服装もよかったけど、コッチはコッチで素晴らしい。

何が素晴らしいって、不死川が背伸びしている感じが素晴らしい。

まだまだ子供っぽいところがあるのに、大人っぽいファッションで決めて来たのがイイ。

クセのない艶やかな黒髪は、前回みたいに後ろに撫でつけられていて。

しっとり滑らかでありながら、顔を動かすたびに柔らかく揺れ動く。

でもって、この前よりは毅然としてるけど、何となく緊張が抜け切れてない初々しい態度。

洋服が落ち着かないのか、こういう庶民的な祭りにソワソワしてるのか。

そんな不死川の態度が素敵過ぎて、僕まで落ち着かなくなりそうだよ。

今何をしてるかって言うと、祭りの会場を前に足踏みしてる。

まあ、積極性があるのが武蔵くらいで、他の5人は慎重派だし。

それに、いきなり会場に突っ込むようなバカはいない。
人混みの中に紛れちゃったら、話しあつて移動するなんて難しいね。
つてわけで、今は6にんバラバラに会話を楽しんでたところ。

楽しんでたつてのは、今からが本番だから。

大和田さんが武蔵に話題を振った時、ようやく彼女らの策が始まる。

「武蔵さん、射的とか得意なんじゃない？」

「オモチャの弓だからね、ちょっと自信ないわ。 薫さんは弓はできる人？」

「いえ、薫流には弓術がないですから」

大和田さんと武蔵のコンビネーションで、由紀江ちゃんにまで会話が回る。

うん、女の子が結託するとココまで自然なことができるのか。

武蔵だけは地元出身みだし、射的の内容を知つても不自然じゃない。

でもって、由紀江ちゃんに話題を振るのも、会話の流れとしてはおかしくない。

まあ、由紀江ちゃんが弓を使えるかどうかは大して関係ない。

本当に射的の話をしてるんじゃないかって、射的ができる奴が1人いればよかった。

極論を言えば、射的に興味を盛ったフリをしてもらうだけでもよかった。

そうすれば、女子3人で行動する理由ができるんだもん。
この3人が一緒に動けば、入江だつてついていく。
自動的に、僕と不死川が2人きりになるって作戦だ。

そついや、黛流に弓術がないつてのはホント。

大成さん自身は懐が深い人で、結構いろいろ取り入れてんだけどね。
古武道にブラジリアン柔術の要素を入れるとか、手広くやってるんだよ。

それでも飛び道具の技術がないのは、接近戦にこだわりがあるんだろつなあ。

「不死川先輩はどうですか？」

「此方も基本は柔道じゃからな。さすがに弓を引いたことは無いのじゃ」

これはちよつと意外。

弓道なら経験があると思つてたんだけど。

耳とか指の怪我を恐れて、練習させなかったのかもね。

その辺りは綾小路よりしつかりしてるなあ。

あのオシロイ野郎、ちよこつとだけど弓道もやってたみたいだし。

「入江君と港先輩は？」

武蔵つて、こついうところの変に気が利くんだよなあ。

僕らが弓を使えないの分かつてても、会話に混ぜてくれるんだもん。

「さすがに僕も弓は専門外だよ」

「俺も。ボクシングなら出来るんだけどね」

そりゃそうだ。

入江に至っては、小西さんのところに来るまでボクシング一本だったし。

僕はイロイロ手え出してるけど、飛び道具までは考えたことないもんなあ。

ヒットするときに手を離れてるような武器は信用ならないからね。

それよりも、こっそり自分のアピールを忘れないってのは入江らしい。

ボクシングつつつても、大した功績も残してないクセに。

強かったことは強かったんだろうけど、結果残してなきゃ話にならないでしょ。

「じゃあ、私たち射的のあたりに行ってくださいから」

なんて不死川に言ったのは武蔵。

ちよっと強引だけど、僕じゃなくて不死川に言うってのがポイントだ。

ココで武蔵の言う『私たち』と不死川が、意識の上で切り離される。なんか『射的のあたり』って言い回しが気になるけど、まあいいや。

「はぐれたら私の携帯電話に掛けて下さいね」

さすが由紀江ちゃん。

畳みかけるタイミングが素晴らしい。

不死川の機先を制して、絶妙な間の埋め方をした。

「あゝ……女の子ばつかにしとくと危ないツスから、俺がついてきますよ」

いいぞ入江！

理由としては申し分ない！

お前ならやってくれると思っていた！

今日くらいは3人とデート気分を味わう権利をやるっ！

……大規模な祭りだし、誰かが見てるかも知れんがね。

例えば、誰かのファンクラブのメンバーとか。

ファンクラブの掲示板に『七夕くらいは祭りに行こう！』ってスレ立てたといけど。

「あゝ……じゃあ、僕らも見て回ろうか」

「そうじゃな。こういうことにも興味があるしな」

金魚すくいとかは袖が濡れるし。

オーソドックスに、食べ物の屋台でも見て回ろうか。

あとは、輪投げと射的と……こういうのじゃ役に立たんなあ、僕。

まあ、今日は無理せず出しゃばらず、不死川に楽しんでもらえりゃ

いいぞ。
時間にだけは注意しないといけないけどね。

我ながら情けない。

僕自身、女の子を連れて歩くつてのが苦手なんだけど。

ここまで不死川が目移りするなんて思ってもみなかった。

結局、あ後は適当に屋台を冷やかしつつ、リング飴を買っただけ。途中で射的の屋台も冷やかしたけど、由紀江ちゃんたちはいなかった。

正直言うと、不死川が浮き足立ってて、上手く誘導してくってわけにはいかないんだよね。

不死川が喜んでくれるから悪くは無い。

屋台を見る度に大声で『所詮、庶民の作る食べ物じゃな』なんて言うのも興奮してるから。

不死川が糾弾される前に自然に逃げるのが大変だったけど、これもイイ思い出ってことで。

でも、不死川がこういう風に浮き足立っちゃうのも分からんでもない。

上流階級の連中が集まるパーティーとか、少しは慣れてるんだろうけど。

こういう不特定多数の人間が集まるところには、連れてってもらったことないだろうし。

まあ、そもそも人の集まる行事に滅多に参加しなかったらしいんだけどさ。

不死川の御息女がパーティーに参加すると、それだけで少し話題になったもんだしね。

そういうしがらみはどうでもいいや。

不死川が隣にいて、でもって喜んでくれる。

それだけで十分じゃないかなあ。

「庶民の食べ物にしては好ましい味なのじゃ」

リンゴ飴を平らげて、嬉しさを噛み殺したみたいな顔で言う不死川。素直に美味しいって言うてもいいと思うんだけど。

なんとなく、庶民と選民だかの境界線が取り払い切れんみたいだね。まあ、無理に気取ろうとしてる顔もカワイイからいいか。

僕の手にもリンゴ飴は握られてるけど、実はそんな好きじゃない。どっちかって言えばチョコバナナが好きなんだけどさ……ほら、汚れるじゃんか。

せっかく不死川が洋服で来てくれたんだから、そういうリスクは避けたいよ。

チョコバナナなんて、家で簡単に自作できるしね。

「なんじゃ、食べるのか？」

「ああ、人混みで少し酔っちゃってね」

今さら人混みなんかで酔わないけどさ。

不死川に見とれてたなんて言えないんだから、これが妥当でしょ。

まあ、リンゴ飴が減ってないのとは関係ないよ。

…… 厳密に言えば、ちよつと舐めたんだよね。

なんか変な甘酸っぱさがあつて、やっぱり僕の口には合わなかったけど。

しかし、さつきから妙な気配がする。

誰かに見られてるような…… 見えたぞ武蔵。

拳句の果てに、見るのは武蔵だけじゃない。

大和田さんと入江、気配ゼロの由紀江ちゃんまで視界に入った。

由紀江ちゃんも甘いなあ。

気配さえ消してなきや、たまたま見掛けたって言い訳ができたのに。これだけの人混みなんだから、そういうこともあるだろうよ。

しかも、ご丁寧に4人固まって移動してるとか、僕のこと舐めてんのかね。

「なあ、港。そのリンゴ飴じゃが……」

「ん？」

マズイな。

さすがに食ってないのは不自然だったか？

いや、でも無理に口の中に入ったのは、もっと不自然なんじゃないかろうか。

ここは適当に誤魔化して、こっそりゴミ箱にでも投げ捨てるところかなあ。

なんて思っていると。

「いらんなら貰うぞ」

僕の手からリンゴ飴をヒョイと奪い、不死川が一口かじった。感情が態度に出てるからか、嬉しそうな顔をして食べている。

僕の手からリンゴ飴をヒョイと奪い、不死川が一口かじった。感情が態度に出てるからか、嬉しそうな顔をして食べている。

僕の手からリンゴ飴をヒョイと奪い、不死川が一口かじった。感情が態度に出てるからか、嬉しそうな顔をして食べている。

僕の手から『僕が少し舐めたリンゴ飴』をヒョイと奪い、不死川が一口かじった。

……拝啓、お袋様。

今宵、息子は幸せと言うモノを理解しました。

幸せとは恐らく、好きな人と同じ時間を過ごすことなのでしょう。もしこれが幸せでないというのなら、何を幸せと形容すべきでしょうか。

ちよつと変態っぽくてストーカーみたいですが、私は今、幸せに包まれています。

今後の人生で似たような役得があることを祈ってしまうばかりです。

2人で1つのパフェをつつくとか、食べかけのソフトクリームを少し分けてあげるとか。

そういうのが『はい、あ〜ん』に並ぶ破壊力を持っているとは思ってもいませんでした。

また1つ賢くなった息子を、北陸から見守っててください。

2話目『ある晴れた日の夜話 く枕く』（後書き）

この話は次回で終わる予定ですが、少し長くなるかもしれません、
ご意見、ご感想、ご指摘諸々に加え、改善点やご希望などもお待ち
しております。

3話目『ある晴れた日の夜話 演目』

とりあえず、現状を把握しよう。

僕らがいるのは、不死川と向かう予定だったアパートの屋上だ。

そこに、予定通りに不死川と2人きりである。

プレゼントも上着のポケットに丁寧に入ってるし、あと20分少しで花火が上がる。

つまり、あと30分もしない内に、不死川にプレゼントを手渡しすることになるわけだね。

748

問題らしい問題ってのは、アレだ。

いつの間に1時間以上も経ったんだよ！

不死川とリングゴ飴を買った時には、まだ6時前だったのに！

もう7時10分とか、タイムマシンが開発されたと思えないじゃないか！

しかも、気がついたら不死川とナチュラルに談笑してるとかどういふことだよ！

最近は意識が飛ぶこともなかったからって、完全に油断してた。間接キスで意識がなくなるとか、まあ、僕も大概どうかと思うけどさ。

まさか、僕が食べかけたリンゴ飴を不死川が食べてしまうなんて。予想の斜め上を行ってたね、アレは。

そういうハプニングは『はぐれないように手をつなぐ』くらいだったんだけどなあ。

今日から日記を付けることは確定したけど、それもどうでもいいことだろうよ。

ああ、クソ、混乱してるぞ。

さっきまで何か会話してたみただけど、何話してたんだよ。

うっすらと由紀江ちゃんのこと話してた記憶があるけど、それだけじゃないはずだ。

ていうか、女と歩いているときに別の女の話をするなよ、僕。

とにかく、何か話さないとなあ。

これから20分近く沈黙で過ごすとか、そういうのは流石に無理だ。

「なあ、港。そろそろ話してくれんか」

「……えっと、どっから話したもんかなあ」

やっぱりへマしてやがったか！

何を話そうとしたんだよ！
もし『伝えたいことがあるんだ』とか言っていたら、このまま飛び降りるしかねえよ！

話しても大丈夫なことばなんだ？

柔道じゃ見られない寝技での戦い方は、別にどうでもイイ。
おいしいカルボナーラの作り方も、カレーへの情熱も問題ない。
炊飯はできるけど和食を作れないってのは、言っても言わなくてもイイ。

話したらマズいことはどうだ？

普段から手を抜いてテスト受けてるのは、黙ってた方がイイか。
僕がかなり前から不死川に恋愛感情を抱いてたつても、言わない方がイイ。
皆口さんが不死川にマンツーマンの稽古してるのは、知らないことにしてるし。
1年生3人のファンクラブを実質的に統括してるのが僕だってことは、言ったらヤバい。

あとは……

「最初から話してくれるという約束じゃろ！ その……此方と出会った時の話とやらじゃー！」

ハイ詰んだ！

説明的なセリフをありがとうございます！

過去の僕のせいで、今の僕が完全に詰んだよ！

その話、今しても引かれるだけかもしれないのに！

正直、告白に成功して付き合い始めても、すぐに話す気は無いから
いの話だったのに！

あゝ……でも、潮時なのかもね。

そろそろ、不死川に話さなきゃいけないんだろっなあ。

この話すると、他にも色んなこと話さなきゃいけないんだけど。

まあ、上手く誤魔化しながら、大事なところにまで言及されないよ
うに気をつければいいか。

「そうだね、最初から話そう」

そう、最初から話そう。

隠せるところは隠しながら、言えることは全部言って。

聞かれれば、包み隠さず話してしまおう。

僕らしくないけど、まあ、たまには流されてみようか。

「それほど長い話じゃないかもだけど」

アパートのフェンスに近寄って行って、少し距離をとる。

近くで話すには恥ずかしい話だからね。

で、フェンスに背を向けながら振り返ると、不死川が距離を詰めて
た。

僕が不死川の方を向いてたはずなのに、フェンスに背を預けて横並びになってる。
まったく、いつから青春するようになったのかなあ、僕は。
こんなコテコテのドラマみたいなマネするとか、想像もつかなかったよ。

僕と不死川で、合わせて100kg以上。

2人の人間がもたれかかっているのに、フェンスの金網は健在だ。

僕が持たれてる部分が少し大きいたわむけど、軸の部分は全く傾かない。

このアパートが、地区開発の時にできた新顔ってのもあるんだろうね。

改めて意識すると、今日は普段よりも暑くない。

屋上にいるからかもしれないけど、それなりに風が吹いて涼しい。

湿気も抜け始めて、生ぬるい空気は感じられない。

ふと空を見上げると、やっぱり天の川はキレイだった。

昔の人は、よくアレを見て天にある川だなんて名付けられたもんだ。英語圏じゃ『Milk Way』って、ミルクの道ってことになる。

同じ意味で、ドイツ語じゃ『Milchstraße』だそうなの。

中国語なんかは『美星』^{メイシン}って風に、色んな国で名前がつけられてる。そりゃ、こんだけキレイだったら目も奪われて、名前の1つも付けなくなるよね。

ああ、こうやって余計なこと考えてるのはさ。

結局、すぐに口は開かなかつたからなんだよね。

本当に、どうやって話すべきか。

最初から話すにしても、話し方ってもんがある。

僕は聞き上手だから、あんまり話をするってのは得意じゃない。

まあ、上手じゃないにしても話さなきゃいけないのは決まってるんだ。
だ。

腹括って、思い出しながら話してけばいいさ。

「まだ、ガキの頃の話なんだけどね」

そう、ガキの頃の話だ。

「8年も前になるんだけど、イロイロあってパーティーに参加することになってね」

バカの顕示欲のためだけに連れてこられた、つてのは恥ずかしいから黙っとこう。

そこそこ優秀で、当時は有能な人間が分家にいるってことで自慢して回ってたからね。

分家がこんなに優秀だから、本家はもつと優秀だつて暗に言いたかったんだろうけどさ。

結局、コネ使わないと教師にもなれなかったようなクズだつたんだから笑えるよなあ。

「つて言っても、参加したパーティーって1回だけなんだけどね」

最近はともかく、まあ、数年前は僕も煙たがられてなかったわけだ。

……あんなに卑屈になっちゃうんだから、年月つてホント残酷だよ。

「で、そういうときは古今東西、ガキはガキで集まってるもんでさ」

九鬼と不死川と、僕の3人で話したりしたもんだ。

不死川は話題が少なかったし、僕は面白い話もなくて。

結局、九鬼が野球の話ばかりしてたよなあ。

僕が聞き上手だったから良かったけど、不死川は退屈してたよなあ。

「ガキらしい無茶なんかもしてね」

……うん、懐かしい。

その後、九鬼の先導で会場の外歩きまわってさ。

すぐに歩き疲れたって言う不死川背負って、かなりの距離歩かされたよなあ。

まあ、もうクソほど鍛えてたから、死ぬほどキツイってこともなかった。

帰ってきたら帰ってきたで、どういう訳か僕だけ殴られたのはキツかったけどね。

どうせ1人だけ分家で格下だったから、殴りやすかったとかなんだろうけど。

と、そこまで話したところで、不死川がフェンスから体を離す。

離しながら、僕の方に体を向き直した。

で、間髪いれずに、僕の顔を見上げて問い正してくる。

「8年前と言えば、霧夜の催しか？」

「そうそう、あ那时的の立食パーティーだよ」

主に『古き良き血筋の皆さん』が、威嚇目的で集められたパーティー。

実際、あの場にいた連中で、九鬼以外で霧夜に頭上がる連中がいるのかどうか。

そりゃ、政治方面に力持ってたのは古い連中だけど、他はそうでもない。

経済なんてイイ例だし、公安も随分と様変わりしてきた。
黒いことに限って言えば、霧夜が古株になっちゃうレベルだもんなあ。

エリカつつたけか、あの金髪。

アレもアレで、随分とヤバそうな目えしてたなあ。

護衛でガチガチに固められてて、呼ばれた時以外は一步も動いてなかったし。

ガキらしいフリして、声くらい掛けときゃよかったかも知らないけど、どうでもいいか。

「しかし、あのときは九鬼と此方と……」

そう、九鬼と不死川と、もう一人いたよね。

本家の名前しか名乗ってないから、思い出せないのも無理ないけど。そもそも、その分家だけで相当な数があるからね。

いきなり港なんて言っても、思いあたる方が少ないんだし。

「あのとときの、綾小路の分家のせがれが」

「僕だっただよ」

そんなにビックリした顔しなくてもイイと思うんだけどなあ。

ちよっと探せば、港と綾小路の関係なんて分かることなんだしさ。

案外、九鬼のメイドとか葵あたりは知ってるかもね。

港家ってのは、まあ、それなりに歴史のある家だったり。

綾小路の分家の1つで、根城は北陸石川県。

平安の世で台頭してきた綾小路の一派が、地頭だか豪族だかになって独り歩き。

鎌倉あたりで少し活躍して、安土桃山……戦国時代に1度滅びかけた。

でもって、江戸の初期から中期にかけて貸金で再興。

明治を前に再び痛い目を見て、戦争が終わるまで細々と血を残して、戦後に警察権力の中枢に食い込んで、コツコツと力を溜めてきた。

まあ、そこそこ金持ち。

山と田畑ばっかだけど、土地も切り売りして金儲けできるくらいには持つてる。

惜しくらむは、優秀な人材が少ないことくらいかなあ。

僕の代は、そういった意味じゃ当たり年なのかもしれないね。

で、話せば更に長くなるけど、親父が綾小路の三男で、麻呂の親父の弟なんだよ。

婚約者見つかんなくて、港に押し付けられたって経緯があったりするんだけどね。

だから、分家つってもバツチリ本家の血が入ってるんだよ、僕ってまあ、港って婿とって一族繋げてるし、綾小路に養子になって話もあつただけど。

ガキの頃は世話になった麻呂に義理立てして、ずっと断ってたよね。

今となつちや、港そのものが綾小路を脅かす勢いだから、煙たがられてる状態。

今は、僕の存在そのものが綾小路家にとって……麻呂にとって邪魔らしい。

綾小路家は『分家に男などいない』ってスタンスだし、港もそれに倣ってるからね。

面倒だよねえ、港の男は女性名に1文字足して名前にしろって風習は。

爺さんなんかは『美樹彦』^{ミキヒコ}なんて名前だしなあ。

ああ、そもそも、港が嫁取っても家系図が伸びないんだよね。

病死やら火事で死んだり、強盗に刺されたりってロクでもない死に方するんだよなあ。

で、婿をとることで血を繋ぐしかなかったらしい。

って、そうじゃない。

今は不死川に、馴れ初めを説明してるところなんだ。

不死川が何も言ってこないから、ついつい余計なことを考えちゃった。

いや、不死川のせいじゃないな。

こういうのは、僕の注意力が足りないからだ。

とりあえず、ちまちま心中で反省しても仕方ないし。

そろそろ、話を切り出し直そうか。

「まあ、そういうことを少し思い出したもんだからさ」

嘘だけどね。

思い出すも何も、ずっと忘れなかったよ。

オマケに、全部ハッキリ覚えてる。

不死川は覚えてないかもしれないけど、僕は全部覚えてるぞ。

「だから、何なのじゃ？」

……今日に限って妙に突っ込んでくるなあ。

まあ、祭りだし、今日は気分が盛り上がってたりなんだからさ
ろうね。

普段の不死川だったら、そこまで深く聞いてこないだろうに。

あゝ、そうじゃない、どうでもいい。

今はとにかく、少し誤魔化さなきゃ。

「だから、手を貸してあげたくなってね」

恨めしいなあ。

すぐにも好きだつて伝えられたらいいのに。

イロイロと準備できてないから、そんな単純なことも口にできない。
今の状態じゃ、口にしたところで進展は望めないしね。

「わざわざ2年の頭にか？」

「声かける機会もなかったからね」

「決闘の代替わりが、その機会だったということか？」

「まあ、それなりには強いつもりだからね」

これも嘘だ。

1年の間はイロイロと様子見してて、すぐに動けなかっただけ。

僕が勝てそうな奴とそうじゃない奴を見極めたかったし、派閥つてモンも気にしてた。

お陰さまで、風間ファミリーなんてケツタイな連中も発見できたんだけどね。

更に言うと、葵が邪魔だった。

いかにも女子が好みそうな容姿と性格をしてる奴だったから、動き辛かった。

何かやっても葵と比べられるから、下手に動いて株を下げかねなかった。

それに、頭を使うことは僕も苦手じゃないけど、葵ほど普段から時間を使っちゃいない。

マージャンなんかはルールが分かんないから手を貸せないし、イカサマも得意じゃない。

だから、賭場で何かあった時に手を貸してやることができなかった。

「お、そろそろ花火上がるみたいだね」

パツと左手の時計を見て時間を確認しながら、フェンスの向こうに視線を向ける。

あと30秒くらいしかないから、イイ感じで話が途切れるね。少し長話になったけど、まあいいや。

嘘はついてないし、ついでに昔話も出来た。

話の流れを無理矢理に変えたのは、ちょっと良くなかったけどね。

最初の花火が上がった。

こつ、赤やら黄色やら青やら、色んな色が混ざってる。

特に趣向を凝らしたもんでもない普通の花火だけど、すごくキレイだ。

放射状に色が広がっていつて、フツと夜空に溶けていく。

星の光が明る過ぎて色がイマイチ映え切らないけど、それでもキレイ。

その最初の花火を皮きりに、次々と花火が上がってく。

大小問わず、ときには一斉に、ときには順々に。

耳に心地いい炸裂音が、光が広がるのに少し遅れて耳に届く。

まあ、天の川に見とれる感性をしてる僕からすれば、やっぱり花火にも見とれたわけで。

不死川も、声もなく夜空に上がる花火を見つめてるみたい。

もちろん、そんな状況だから会話何か進まない。

僕としちゃ都合がいいんだけど、その分緊張もするモンだよ。

話は長くなっただけど、最終目標は不死川にプレゼントを渡すことなんだから。

シメにデカイ花火が上がる。

最初に上がった花火と同じくらいの規模の花火が、矢継ぎ早に咲いていく。

で、最後に、もっと大きな花火が3つくらい上がって、大きく爆ぜて。

広がった光が闇に全部溶け切っても、余韻だけは少し残ってた。

まあ、空見上げたまんまじゃ、首も痛いし話も進まない。

緊張は解け切らないけど、そろそろ本題に入ろう。

「ああ、そつだ。渡すものがあるんだよ」

思い出したみたいに言うけど、そんなわけがない。
今日のメインはこれなんだから、忘れようがない。

シャツのポケットにしまつてあつた、小奇麗な袋を不死川に手渡す僕。

ちよつと指が当たつてドキドキしたけど、今はそれどころじゃない。不死川がちゃんと喜んでくれるのか、それだけが気がかりなところ。

「これは……」

僕の許可も取らずに、手にした袋を開け出す不死川。

まあ、プレゼントしたもんだしイイんだけどさ。

ちよつとはしたくない気が……いや、どうでもいいか。

不死川の手の中にあるのは、レース地の白いハンカチ。

昨日の夜中に街を駆けずり回つて、閉店前の店のシャッター引つ張り上げて手に入れた。

店員さんには悪いことしたけど、不死川のためだから仕方ないよね。

「ほら、風間との決闘の後に使わせてもらったハンカチ、ダメになつちやつたからさ」

僕の鼻血のあとが残つちやつて、とてもじゃないけど再利用できそうになかつたんだよ。

不死川も返せつて言つてこなかつたけど、まあ、そのままにしとくのもバツが悪いしね。

装飾品の類は知識がないし、ぬいぐるみとかは違う気がするし。

結局、無難にハンカチつてことで落ち着いた。

宝石店に売つてんのも不思議だけど、1枚で9000円つて割高だよね。

「それと、ちょっと遅れたけど」

5日の遅れってのは、どんなもんならうね？

男の目線からすりゃ、気にするほどの時間でもないんだけど。

女の子ってのは、こつこつに細かいっていうしね。

それに、ちょっとでも前置きとかしておかないと、心も落ち着かない。

「誕生日、おめでとう」

あ、やっと言えた。

予行練習しまくったかいがあった。

なんかもう、コレだけで満足しちゃいそうだよ。

不死川は……ハンカチ眺めてポーっとしてる。

嬉しそうな顔でも、驚いた顔でもない。

本当に、ただポーっとしてるだけで。

「その、嬉しいことは嬉しいのじゃが」

え？

「……いや、なんでもない」

えっと、何？

この間はなんなの？

ミスッた？ どっかミスッた？

やっぱ、いきなり多くのことを話し過ぎたとか？

それとも、さすがに僕が不死川のことを好きって気付かれた？
それで気まずい空気になってるの？

言ってくれよ、何かあるんだったら。

そこまで言いかけて何も無いってことは無いだろ。

場所が悪かった？

服装が悪かった？

雰囲気が悪かった？

タイミングが悪かった？

プレゼントが悪かった？

それとも、僕だってというのが悪かった？

「あゝ、その、な？ 上手く言えないのじゃ」

苦笑いしながら返されても、死にたくなるだけです。

よし、ここで拒絶されたら飛び降りて死のう。

高さは事実上7階で微妙だけど、頭から行けば確実に死ぬる。

今85kgあるから、それが首に一点に集中するよつに落ちれば……。

「か、勘違いするな！ 港のことが嫌いになったとか、そういうことではない！」

少し顔を赤らめながら、焦った様子で不死川がまくし立ててきた。

……言葉どおりにとらえてイイのかなあ。

まあ、不死川のことだし、含みは無いだろうから信じてもイイよね。ていうことはアレか。

うめばれるなら、僕のことを意識してくれてるってことか。

「その……とにかく、上手く言えないのじゃ！」

上手く言えない……ってのは、どういうことだろ？

僕に気を使ってるってわけじゃなさそうだし、何か裏があるわけでもなさそう。

もしかしたら、少しずつ僕を異性として意識してくれてるのかもしれない。

でもまあ、そんなことを問いただす必要は無い。

不死川が僕のことを嫌ってないなら、今日はそれでイイや。

無理して関係を進める気もなかったんだし、それでイイんだよ。

「まあ、アレだよ。とりあえず戻ろうか」

「そ……そうじゃな！ あまり遅くなると、よからぬ輩も増えるからな！」

ちよつと微妙な空気になつたけど、うん、今日はもう満足だ。
不死川も『嬉しい』って言ってくれたんだし、深く考えるのは止めよう。

そろそろ帰らないと面倒な連中が増えるつても、まあ、事実だしね。

花火の時間が早いのも、そういう連中の被害者を減らすための努力なんだろうし。

うん、不死川に何かあつても困るし、とりあえず川神院の前に集まり直そうか。

今日は疲れた。

疲れたけど、充実はしてたと思う。

祭り自体も楽しんでくれたみたいだし、不死川に誕生日のプレゼントも渡せた。

余計なことも話したし、少し喉に引つ掛かるようなこともあつただ。

まあ、いい1日だったんじゃないかなあ。

なんか携帯電話が震えてるけど、まあ、どうでもいいや。

3話目『ある晴れた日の夜話 演目』(後書き)

ちょっと詰め込みすぎましたが、3章3話目がようやく完成しました。

多大なお時間をいただき申し訳なく思いますが、おそらく、向こうしばらくは同じような状況が続くと思います。

一身上の都合で更新が遅れましたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

大変失礼いたしました。

毎度のことですが、ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘を承っておりますので、思う様に書いていただければ幸いです。

閑話『禍福はあざなえるか?』

7月14日。

今日の僕は、あまり機嫌がよろしくない。

何が不愉快かって、不死川が体調不良で欠席したってのが不愉快だ。別に、不死川を責めてるわけじゃなくて、不死川のいない状況が不快っただけ。

いつもだつたらいるのに、今日はいない。

当然だったことが当然じゃなくなるだけで、かなり気分が悪くなるらしい。

七夕から一週間、不死川との仲は良好だった。

今まで言わなかった軽口も叩くようになったし、世間話が増えた。どういふ距離かは知らないけど、不死川との距離は縮まった気がする。

しばらくは進展しなくてもイイかなあ、っていう程度には。

まあ、クラスメイトと親交を深めたりってこともしない。

九鬼は相変わらず僕のことを思い出さないし、マルギツテは……そういうや、もういないか。

葵は生理的に受け付けないし、榊原は絡んでくるけど相手にしない。井上は、今日の不機嫌な僕の様子を見て、積極的に近付こうとはし

なかった。

そういうわけで、久々に読書に勤しむ放課を楽しんでいるところ。

正直、今日は調子がよくない。

さっきの現国の授業中も、普段の僕じゃ考えられない失態をしたところだ。



2時間目の現国。

僕にとって、これほど有意義な時間はない。

教科書に重ねる様にして、好きな本を呼んでられるからね。

いやぁ、背中が広いと後ろから見えないし、教師も見周りに来ない。頭を休めたり気分転換したりって意味でも、素晴らしい時間が過ごせるってことなんだよ。

「じゃあ、次の段落を……港、お前が読め」

文系の教師全員が悪いわけじゃないけど、ウチの学校はとりわけ劣悪。

古典の川下に、日本史の麻呂、現代国語の輪島の3人。

この3人は、程度や事は違えど、生徒に対する態度が嫌い。

川下は典型的な女子ひいき、麻呂は家柄重視、輪島は高圧的。

どいつもこいつも、ロクな脳ミソしじゃない。

教科書があれば教師なんて必要な教科じゃないのに、調子に乗っちゃってさ。

まあ、そんなことを普段から考えてるからかは知らないけど。

高校生にもなって音読なんて、下らんことを押しつけられた。

そついうのは中学まででやるから、必要ないと思うんだけどね。

集団の前で声を出す機会とかは、人間学の時間にやってるんだから。

まあ、心中で愚痴ったところで、輪島が指名した生徒を変えたりはしない。

手持ちの小説読むの中断して、仕方なく街灯ページを開いて音読を始めた。

……舞姫、中学時代にもやったんだけどなあ。

「一瞥して世は驚きぬ、机の上には白き木綿、白き『レエス』などを堆く積み上げたれば。

エリスは打ち笑みつつこれを指して

『おまちどおさまでーす、マツハピザでーす!』

『うわあ! 本当に30分で持ってきてくれるなんて!!』って、
なんで俺の教科書が『びんかんサラリーマン』と合わさってんだ

よ！」

上から別の紙を貼って、教科書を改ざんされてました。しかも、よく見ないとわからないくらい精巧で、パツと見は普通の教科書と同じ。

こういうマネをするのは榊原つてのが相場なんだけど、授業中だから文句も言えない。

クラスのところどころから失笑が聞こえるも、甘んじて受け入れるしかない。

と思つてたんだけど、さすがに我慢ならない笑い声も交じつててね。

ちなみに、びんかんサラリーマンつてのは、巷で話題の小説のタイトル。

コミックが小説化されたもんなんだけど、正直なところ面白さが分からない。

いや、もちろん読破したし、コミックの方も勝ったけどね。

それはどうでもイイんだよ、どうでも。

「あつははははは！ ホントに読んじやつたあ！」

恐らく失笑の原因であろう女が、大爆笑してらっしやいましたね。普段は温厚なフリをしているつもりも僕も、さすがに限界だった。ただでさえ機嫌がよくないのに、拳句の果てに恥をかかされる。そこで我慢できるほど、僕は人間形成ができてないからね。

「テメエがやつたんだる榊原！」

「え〜？ 証拠は？」

「今日の朝、行方不明だった俺の教科書が机の中に返ってきてたんだが？」

「僕じゃないよ〜！ 信じてよ〜！」

「テメエが犯人だって信じてるよ〜！」

言いたいことは数点あるけど、まず1つ。

『証拠は？』とか言う奴は、6割くらいの確率で犯人だ。

何せ、やってないなら『やってない』って言えばいいだけの話なんだし。

言葉のアヤってこともあるけど、半笑いで言ってる場合は疑う余地もない。

2つ目に、たったアレだけの情報で信じるとか言い始めたところ。

これはつまり、その事実が榊原を追い詰めるのに十分だったってことになる。

ただ『盗まれてた教科書が返ってきた』って事実が。

普通は『それがどうした』ってレベルの情報なのに、もう瀬戸際に來てる。

ってことは、かなりの確率でコイツが教科書盗んだ犯人ってことだ。幸い、盗まれてから返ってくるまでに、現国の授業は無かったんだけど。

なんていうか、もう、そういうレベルの話じゃなかったからね。

でもって、3つ目。

「大体からして、テメエが俺より早く登校してた時点で怪し過ぎんだ！」

そう、今日に限って、榊原たちは僕より早く登校してた。午前7時10分あたりには教室にいる僕より早く。

最初は、昨日僕が下校してから返されたもんだとばかり思ってた。

これでも、井上の友達を疑いたくはなかったからね。

まあ、結果として疑っておいた方が良かったってことになったんだけどね。

「せんせー！ みなみ君が僕をイジメてきまーす！」

「港だよ、わざと間違えるんじゃないよ！」

ついでに言うが、こんな手の込んだマネはやるのはテメエくらいだよ！」

そりゃもう、教科書叩きつけて叫んだよ。

そのせいで、教室から叩き出される羽目になったんだけどさ。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

そういうわけで、今日の僕は気分がよろしくなかった。

仲良くなった不死川には会えない、榊原にからかわれる。

しかも、今日に限って既読の本を持ってきちゃった。

その本つても、よりにもよってサスペンス要素のある本。

ネタが分かっていると面白くない類の本で、でも、そんな本でも読まなきゃならない。

友達の輪が狭いことにも苛立ちを覚えながら、本に目を落として放課を過ごしてた。

はずなんだけど、

「おい港、ちょっといいか？」

なんて聞こえてきて、嫌々ながら視線を声の方向に向けた。

場所は僕の机の前で、上から聞こえてくるのは男の声。

それほど聞き慣れてもない、井上の声だった。

「ダメって言ったらどうするよ」

意地が悪いのは御愛嬌。

さっきの榊原の件で、輪をかけて気分が悪いからね。

ちよつと八つ当たりしたくなるつても、まあ、勘弁して欲しい。

僕だって人間なんだから、ストレス感じりゃ八つ当たりもするんだよ。

「ユキの件については俺が謝る。だからってわけじゃないが、話は聞いておけ」

まあ、井上が悪いわけじゃないしね。

ム力ついてても気分悪くなるだけで、イイことなんかないだろうし。いつまでも下向いても仕方ないから、話くらいは聞いてやることにした。

それを察してくれたのか、井上は僕の隣のイスに座る。

で、夏服の胸ポケットから、折り畳んである紙をスパッと僕に渡した。

「まずはコレを見る」

貰った紙を広げると、壁に貼ってある校内新聞のコピーだった。たまりに目え通してるけど、こうやって見るのは初めて。

特に自分に関わる話題もなかったし、不死川も新聞に載りにくい人間だし。

だからってわけじゃないけど、校内新聞なんかは注視したことがない。

もちろん、今月号も見えてないし、この新聞が号外だって言うのも今知った。

……でもって、その内容を見てビックリした。

まあ、別に特別な紙とかじゃなくて、普通の校内新聞のコピー。

なんでも、川神ランキング特集とかやってやがるみたい。
これまでの戦績とか、ランキングの上位者の名前とかがボチボチ載
ってる。

……武蔵が13位になってるのは、気付かなかったことにしよう。

まあ、そんな話はさておき、僕にはもつと気になる記事があった。
一番大きく記事を裂いてる『見てみたい戦いベスト5決定戦』とか
いうの。

新聞部が全クラス・全教員に聞き込んで、名前の通り見たい戦いを
募る。

んで、どんな戦いが見たがってるかってのを学園側に伝えたい……
のかなあ。

とにかく、そんなのが僕の目にも入ったわけだ。

「で？」

「学園側が、新聞部の英断に乗っかるんだってよ」

わお、モーレッツ。

なんて軽口叩けるほど軽い状況でもないよなあ。

コレ、思いつきり僕も関わってきそうな話じゃんよ。

川神ラビリンズで目立ち過ぎたから、ちよつと無関係ってわけには
ね。

インタビューくらいなら、まあ、付き合っただらんこともないこと
もないけど。

「具体的には？」

「未確認情報だが、そのベスト5の試合をやらせるらしい」

アホか。

なんかの間違いで、いきなりマルギツテと勝負ってこともあるんだろ？

いや、可能性って点からすれば、わりと高いはずだ。

そもそも、川神ランキングの上位5位は一度も戦ってない。

優秀な選手ばかりだから目立ちそうなもんだけど、ココは川神学園。男子女子問わず、普通の学生の注目を集めるのは川神百代だ。

要するに、ランキング上位者が必ずしも知名度が高いとは言えないってことだね。

むしろ、知名度だけで見たなら、川神一子が1番だろうね。

決闘の回数がダントツに多いし、そこそこ勝ってきたから実績もある。

爽やかで嫌みのない性格から人気も多くて、川神百代の妹ってことで目立ってるし。

でもって、他の連中で目立ってるのは風間くらい。

そう考えると、指名されやすい人間ってのは自然に限定されてくる。

最近目立った人間……例えば、川神戦役で目立ったような。

そういう人間が、極めて高い確率で選ばれることになる。

「いや、聞いたってよかったわ。邪険にして悪かったね」

「気にすんな。気持ちは分かんなくてもないからな」

なんて爽やかに井上は返してくれたけど、もう僕は別のことを考えてる。

考えたかないけど、僕と不死川が闘うなんて展開もあるってことか。それならまだしも……マルギツテと組まれたらどうする？

あの軍人相手にするってのは、文字通り骨が折れるだろうし。

普通だったら、19位と1位を戦わせるなんてしないだろうけど。

川神ランキングの件もあるし、仮にそうなったとして、学園側が承認するかもしれない。

ポジティブに考えれば、僕の試合を見たいって奴がいない可能性もある。

地味に戦うのが基本形だし、柔術ってのは強さが分かりにくいからね。

派手な試合を見たい奴が多かったら、僕に票は集まりにくいだろうなあ。

それに、単純に上位者同士の戦いが見たいってヤツが多いかも知れない。

例えば、2位の柴田とマルギツテが闘うってことも十分考えられるし。

いつの間にか13位になった武蔵が出張る可能性も、それなりに考えられる。

不死川は……クリスティアーネとの再戦があるかもしれない。

ガクトくんはともかく、風間なんかもランクインしそう。

まあ、事が決まるまでは、何考えても仕方ないか。

……あゝあ、どう転んでも面倒なことになりそうだなあ。

閑話『禍福はあざなえるか?』（後書き）

え〜……恥ずかしながら、夏休みの話までのネタがつまり、このよ
うな暴挙至りました。

手前勝手に非常に申し訳ありませんが、皆さまから意見をお伺いし
たく思います。

次話から少々話数を使う川神ランキングですが、今回は、皆さまか
らの希望の多かった組み合わせで実施します。

『 と 『 や 『 VS 『 など、分かるように書いていた
だければOKです。

一応、川神ランキングの話ですので、名前のあるキャラクター以外
は無効票となります。

第2章開始前に投稿しました『川神ランキング暫定順位』に名前が
乗っているキャラクターのみが有効票となります。

一応、最多の組み合わせのみを書く予定ですが、別の組み合わせに
ついても余力があれば書かせていただきます。

あるいは『 の戦いが見たい』という御意見もOKです。

今回か、もしくは次回以降の川神ランキング執筆の際の参考にさせ
ていただきます。

また、ルールに関しても御希望のある方は、一緒に書いていただけ
ると助かります。

最後に、あとがきにこのような私事を書き連ね、皆さまの御目汚し
になったであろうことを御詫び申し上げます。

4話目『三人寄れば』

7月20日、月曜日。
時刻は早朝7時過ぎ。

結局、不死川は先週の14日以降、僕と一度も会うことは無かった。風邪を引きずつてるとか何とかで、お見舞いに行こうと思ったんだけど……。

不死川の家に見舞いに行くつても気恥ずかしくて、体を気遣うメルだけで済ませてね。

大和田さん曰く『そういうところでポイント稼がなきゃダメでしょ！』とのことだけど。

女の子の部屋に1人で行くつていう勇気の大きさを、彼女にも是非知ってもらいたいよ。

風邪を引きずつてたらしい不死川もバツチリ回復してて、朝も早くから学校で会えた。

校門の前で偶然会って、そのまま一緒に昇降口に向かって。で、僕は靴を、不死川は下駄を履き替えて、そのまま教室に向かうとして。

張り出された掲示板の前で、2人してバカみたいに固まった。

「なあ、港」

「なあに、不死川」

「コレはなんじゃ?」

コレって言うのは校内新聞。

まあ、そんなことは不死川も承知の上なんだろうけどね。

問題は、それぞれのものじゃなくて、その内容。

『緊急企画！ 川神ランキング特別戦開催決定！』なんて書いてあるんだもん。

そりゃ、詳しく事情を聞いたりしてない不死川からすれば、驚くべき内容だろうね。

「先週なんだけど、新聞部の連中が川神ランキングの人気投票みたいなことしてさ。

見てみたい戦いつても投票項目にあって、人気の組み合わせで試合させるんだって」

とか口から出てくるけど、僕も焦ってる。

予想はしてたけど、見てみたい組み合わせの中に僕の名前もあったから。



川神ランキング特別試合！ 開催決定！

7月23日金曜日、みんなが見たかった戦いが実現される！

第1試合『47位：田辺拳 VS 21位：戸田幸助』
得票数：67票

第2試合『9位：不死川心 VS 11位：椎名京』
得票数：415票

第3試合『16位：風間翔一 VS 22位：島津岳人』
得票数：439票

第4試合『13位：武蔵小杉 VS 10位：川神一子』
得票数：671票

第5試合『8位：クリスティアーネ・フリードリヒ VS 19位：
港 三千尋』
得票数：833票

2位は『マルギツテ・エーベルバツハ VS 港 三千尋』でした
が、
港さんが不利になるため、これを除外し3位以下を繰り上げしま
した。

半分以上は知ってる人間でした。

「つか、コレは悪意ある投票があつたんじゃなからうか。風間ファミリーの連中が半数を占めてるとか、裏がある気がしてならん。」

いくら1人3票っていつても、もうちょつとバラけるもんだらうよ。まあ、何言つたところで結果は覆らないだらうし、ウダウダ言いたくもないけどさ。

心底危なかつた！

ホントに危なかつた！

いやあ、マルギツテと当たらなくてマジで助かつた！

あの軍人とやるってなると、眼球破裂くらいは覚悟しなきゃならなかつたもん！

相手がクリスティアーネで、本当に良かった……と思う。

まあ、ちょうどイイって言えば丁度イイんだけど。

川神ラビリンスの感じじゃ、僕の方が弱く見えたって奴も多いだらうしね。

ホント、夏休み前だし、タイミング的にはピッタリだ。

どうせ今年のうちになくなっちまうし、後腐れもない。

女だからって手加減するような相手でもないし、いいよなあ、うん。

「お、コメントもあるとは、なかなか手が込んでいるのじゃ」

「コメント？」

おっと、危ない危ない。

最近、ちよっと抑えが利かなくなってきたんだよなあ。

昨日は昨日で、勢いで麦村さんの肩抜いちゃったし。

今さらストレスってわけでもないだろうけど……とにかく良くない。間違つて殺しちゃうなんてことにならないように気を付けないと。

じゃない。

そうじゃない。

不死川がすぐそこにいるんだから、そんなこと考えてる場合じゃない。

とりあえず無難な返しはしておいたけど、ちゃんと合わせなきゃ。

とか考えて、そのコメントだかを見てみたんだけど……。

また、僕の頭は痛くなる一方。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

Q：最近はずっと連戦連勝ですね。

A：『最近』っていうのは余計です。

Q：今回の特別試合は、相手が川神一子さんと言っていますが。

A：誰が相手であろうと、全力を尽くして戦うだけです。

Q：ランキングに登録している生徒の中で、1番注目しているのはどなたでしょうか？

A：とりわけ注目しているということであれば、港先輩ですね。

Q：2年の港 三千尋さんですね？ やはり、あの件があったからですか？

A：それとは関係なく、格闘家としての底が深いという点で注目しています。

Q：ところで、最近は戦い方が変わったようですね。

A：はい、今は『スナイパー空手』と呼ばれる、伝統派の亜流に当たる空手を学んでいます。

Q：すごいネーミングセンスですね（笑）

A：私に言わないでください。

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

……何やってんだよ、武蔵！

スナイパー空手はともかく、俺の名前を出すんじゃない！

しかも、お前が高く評価したら、どうでもイイ連中にまで目え付けられるだろ！

ていうか、スナイパー空手習いに行ってたのかよ！

「武蔵の奴、此方よりも目立っておるとは……許せんじゃ！」

地団太踏んでる姿もカワイイけど、今は我が身の心配しなきゃ。

不死川からすれば、まあ、そんなくらの話だろうけどなあ。

僕としちゃ、ココまで注目されるのは困るんだよね。

何が困るって、僕の名前が川神市の外で広まる可能性が増えるのが困る。

別に、今さら綾小路の連中に頭下げる義理もないから、まあ、そこはどつでもいい。

……いやいや、気にしても仕方ないか。

前に出てきた時点で、遅かれ早かれ目立つはずなんだし。

とか考えてると、割と見慣れてきたアホ毛が。

相も変わらず、ムスツとしたみたいな顔つきで靴を履き替えてる。

夏服姿で、スポーツバッグを肩にかけて。

僕の悩みの種を育ててくれた、武蔵小杉が登校してきた。

コイツとは八チ合わないように頑張ってたんだけど……まあいいや。コッチに向かって歩いてくるけど、いちいち逃げるのも面倒だし。適当にあしらって、とっとと朝練にでも行ってもらおう。

「おはようございます、先輩方」

「ああ、おはようなのじゃ」

「おはよう武蔵。そんでもって、とつと朝練にでも行け」

不死川は普通に言うけど、僕は我慢ならないからキツめの応対。
このボケのせいで、必要以上に目立つ羽目になったんだしね。
これくらいの悪態は、まあ、認められて然るべきじゃないかなあ。

「冷たいですね。カワイイ後輩が挨拶しに来たって言うのに」

「カワイイ後輩相手だから、殴らずに我慢してやってるんだけどね」

「何か気に食わないことでもあったんですか？ 八つ当たりは止めて下さいよ」

「気に食わないことだらけだし、そもそも八つ当たりにはならないんだけどね」

話が噛み合わないなあ、コイツは！

非難してるんだから、素直に反省しろってんだよボケ！

あああああああ！

入江だったら、衰弱して動けなくなるまで落としてやるのに！

クソが……最近入江がジムに来ねえから、八つ当たりもできやしねえ！

じゃない、そうじゃない。

武蔵が気に食わないなら、無視すればいいだけだ。

落ち着け、落ち着け、壊すんじゃない、殺すんじゃない。

そう、落ち着いて、落ち着けば、心が落ち着いて静まって静かになつて大丈夫。

よし、なんとか無理矢理落ち着いたぞつと。

「ああ、そういえば、港先輩と不死川先輩も特別試合に出るんですね」

「その校内新聞見りやわかるだろうよ」

そういえばつて言うか、本当に見りや分かる話なんだけどね。

僕がクリスティアーネで、不死川が椎名、武蔵は川神。

今さらだけど、みんな風間ファミリーの連中と当たるのか。

僕と不死川はともかく、武蔵まで関わってくるなんざ思つてもみなかったけどね。

確かに僕らは武蔵と仲がイイけど、それほど親密つてほどでもない。本当に『先輩と後輩』以上の関係じゃないんだから、コッチは偶然かなあ？

あ、何が偶然かつて、風間ファミリーの連中と闘つこと。

僕とクリスティアーネは、まあ、仕方がない。

あんだだけ中途半端な終わり方したんだし、続きが見たい連中もいるだろうさ。

じゃあ、なんで不死川と椎名に票が集中したんだ？

あの2人には接点がないし、ランキング戦だけで見ても因縁めいたモンは無い。

武蔵が特別試合に出ること自体は変じゃないけど、川神が相手つても変。

どう見たって、川神相手じゃ実力差があり過ぎるだろうよ。

それがわからないほど、川神学園の連中の目が腐つてるとも思えない。

「此方らの勝ち揺るがんじゃろうが、オマエは大丈夫なのか？」

強気だなあ、不死川。

椎名の手の内も知らないってのに。

飛び道具の使用が認められるなんてことは無いだろうけど、油断は禁物。

アレは弓道家じゃなくて、弓術使いなんだから。

少しは体術の類も使えるだろうし、本当に油断できない。

まあ、僕は勝てるだろ。

クリスティアーネの戦法や性格は分かってるし、敵さんは手の内も浅い。

アイツのサバットなんざ、せいぜい靴履いたキックボクシング程度のレベルだろ。

あの突きも、冷静になりゃ攻略なんて楽勝だしね。

「負けるでしょうね、多分」

だろうなあ。

武蔵の実力は見てないけど、つい最近、不死川に不意打ちして投げられたくらい。

どれくらい時間があつたにせよ、人間は短期間で突然強くなったりしない。

肉体の基礎があつて、そこに技術がくつついたりすると急に強くなるけどさ。

見たところ、武蔵は肉体と技術を両方とも磨いてきたタイプ。

でもって、肉体は短期間で強靱にはならない。

武蔵くらいのレベルだと、今さら何か覚えたところで飛躍的には強くなれない。

なにより、スナイパー空手なんてイロモノなんか、覚えたところで大して意味もないでしょ。

「なんじゃ、弱腰では勝てるものも勝てんぞ」

「勝負は投げてませんよ。ただ、多分負けるっただけの話です」

達観するなよ、その歳で。

脳味噌腐るほど戦ってきたわけじゃないんだからさ。

特定の相手に怯むならともかく、ちつとは食い下がれよ。

そいうのは、肘の一撃で前歯全部折られてからにしろってんだ。

まあ、前歯なくなっただくらいで気落ちする奴は、武術続けるのに向いてないんだけど。

「私と川神先輩じゃ、相性が悪いんですよ」

「そうなの？ オマエのことは詳しく知らんけど」

「そうなんです」

スピード特化って言うても、パワーがないわけじゃない。

僕と比べるとカスみたいなものだけど、高校生にしちゃ上等も上等。タイヤ3つ引きずりながら走ったりしてるし、スタミナもある。

打たれ強さって意味じゃ、根性はあるけど肉は薄いから大したことはないはず。

まあ、全体的に武蔵の方が劣ってるから、そういう意味で勝てないって言うてんだらうけど。

せめて、なんか1つくらい飛び抜けたモンがあれば、勝機の1つもあつたらうに。

「そうだ、港先輩と不死川先輩。私に稽古付けて下さいよ」

「却下」

「お断りじゃ」

アレ？

不死川も断るんだ。

「悪いけどさ、後輩を手伝いながら勝てる相手じゃないんだよ」

っていうのは、僕の題目。

正直、クリスティアーネは軽い相手だ。

武蔵に手を貸しながらでも、勝てることは勝てる。

でも、ただ勝つってのは俺の目的じゃない。

クリステイアーネには、川神ラビリンスのときの借りがある。

俺の目の前で、不死川に怪我させたって借りを、まだ返してない。

まあ、夏休みの間、ゆっくりと病院で養生してもらおう予定だからね。

「此方は病み上がりじゃから、もうしばらく養生するのにな」

ああ、そういやそうだったか。

風邪かなんかだろうけど、ここで無茶してブリ返すと面倒だしね。

武蔵なんか構ってる暇なんかないよ、うん。

「どうしてもダメですか？ スナイパー空手、まだ門外の人に試してないんですけど」

「じゃあ入江に頼みなよ。アイツ、僕よりは早く動けるわけだし」

「え？ でも、入江君ってサブミッション主体ですよね？」

「いんや。アイツ、元々はボクシング上がりだし、ジムにも週3くらいでしか来ないもん」

まあ、ちゃんとジムに来ないのは、ジムのみんなでボッコボコにしたからだけ。

アイツはアイツで、まだまだボクシングを捨てられなかったりする

んだらうね。

フットワークは衰えてないし、パンチも早くてコンビネーションも上手。

どの程度までやれるかは知らないけど、川神対策には悪くないんじゃないかなあ。

身長とか体格も、僕よりはずっと川神に近いしね。

「うーん……でも、不死川先輩には付き合って欲しいんですけど」

「ほお？ 何故じゃ？」

「不死川先輩って、講道館柔道と高専柔道、両方ともやってますよね？」

「……よく分かったな。その通りじゃ」

それは僕も知ってる。

不死川は内股と飛び関節が得意らしいけど、飛び関節の後が凄い。関節を極めつつ転がすのはいいけど、そこから絶対に相手を逃がさない。

それはつまり、空中で完全に関節技を極めちゃってるってことだ。不死川の寝技……極め技には、それだけの説得力がある。

あ、講道館柔道ってのは、よくオリンピックとかで見る方の柔道。加納治五郎の直径の柔道って解釈で……まあ、いいんじゃないかなあ。

でもって高専柔道ってのは、別名が七帝柔道って、寝技に長けた柔道。

どっちかって言えば、ブラジリアン柔術に近い感じって思ってくれ

ればいいね。

不死川は、この両方を習ってるみたいで、そこそこ寝技も強いらしいんだよ。

まあ、見たことないし、やったこともないから知らないんだけどね。

「そういうわけで、高専柔道を教えて欲しいんです」

「いや、そう言われてもな？」

「不死川先輩だからこそ、教えて欲しいんです」

あ、不死川が迷ってる。

お世辞に乗せられやすい正確なのは知ってたけど、あからさま過ぎやしないだろうか？

いや、そこもカワイイところだからイイとは思っけど、今回はちょっとなあ。

不死川自身、そんなに体調がよくないって話だし、無理はさせたくない。

でも、このままだと武蔵の言葉に乗せられて、無理して手伝っちゃうと思う。

じゃあ、アレか。

結局、僕が時間割いて、不死川の負担を減らすしかないってか。

なんか武蔵に上手くしてやられて感じがしてムカつかないこともないけど、仕方ないさ。

ここは1つ、先輩らしく器の大きいところを見せる……ってことで納得しておこう。

「そういうことなら、僕も参加させてもらおうかな」

「あれ？ 港先輩も手伝ってくれるんですか？」

「寝技って言ったら僕でしょ。一応、講道館の初段も持ってるし」

黙ってたけど、初段だけは持ってるんだよね。

師範から『初段くらい持ってねえと、日本じゃカッコつかねえぞ！』
なんて言われたから。

まさか、こんなところで役に立つとは思ってもよらなかったけどね。

「なら、今日の放課後に此方の家で良いな？」

「OKです。じゃあ、放課後にメールしてください」

「うむ。任せておくのじゃ」

あれ？

僕のターン短くない？

なんか、トントン拍子に必要なフレーズが飛ばされたような……。

いや、待てよ？

そんなこと、些細なことじゃないか！

不死川と一緒に稽古できるんだぞ、僕！

しかも、寝技で！

しかも、くんずほぐれつ寝技で！

しかも、密着し放題の寝技で！

しかも、磨きに磨いた僕の寝技で！

「ほっほっほ。武蔵に先輩の偉大さを教え込んでやるのじゃ！」

「ああ……放課後が楽しみになってきたね」

まったく、本当に楽しみになってきたよ。

4話目『三人寄れば』（後書き）

散々引っ張っていますが、2話後に特別試合開催予定です。

スランプと多忙で筆の進みが遅くなっていますが、ご意見ご感想、ご指摘などなど、諸々お待ちしております。

5話目 『恋する港は思春期で、不死川を想うと本能が勝っちゃうの』（前書き）

この話の登場人物は、みづんな高校生以上だよっ

5 話目 『恋する港は思春期で、不死川を想うと本能が勝っちゃうの』

で、あつという間に放課後。

今日の昼飯は軽めにして、栄養ドリンクでエネルギー補給。つていうのも、下手に食い過ぎて消化しきれなくて、不死川の家で吐いたらと思うと……。

2度と敷居を跨げなくなることを確定だから、満腹なんてのは無理な話だっただけで。

まあ、そんな僕の事情なんかどうでもいいんだけどね。

リムジンで出迎えるのは、マンガやゲームの世界だけだと思ってた。いや、ホントにさ、不死川の通学方法知らなかったんだけどさ。

柔術着持って校門前に行ったら、老紳士とリムジンがお出迎え。でもって、荷物は見覚えのある黒服の人たちが、別の外車で不死川の家運んでって。

ガチガチに固まってる武蔵を最後に乗せて、静かすぎる運転でリムジンが発した。

不死川家ってのは、アレだ。

綾小路とは比べモンにならないくらい金があるらしい。

ベントツを使い回してたもんなあ、綾小路の執事の人たちは。

さて、不死川の住んでる家だけど、ここは別荘みたいなものだそう
な。

必要に迫られる時以外は、使用人が住み込みで管理を行っていると
使用人の皆さんもキツチリ働いてるみたいで、庭から室内から手入
れバツチリ。

敷地内にある道場も、男女別に着替えられる場所があつて、畳も超
キレイ。

使い込まれてる感じがあるのは、使用人の人たちが普段から使つて
るからかなあ？

でもって、外観も不死川家らしい感じなってる。

平安時代の屋敷を、そのまんま現代の住宅街に突っ込んだ。

そうとしか言いようがない建築物。

外から見ても中に入つても、とにかく純和風。

金と権力の両方持つてる家は便利だなあ、とか思う今日この頃。

ところで、さつき女性のお手伝いさんに睨まれたのは、僕が男だか
らだろうか。

それとも、僕が港家の人間って知ってるからなんだろうか。

いや、睨まれるっていうか、値踏みされるみたいなの目線だったよう
な……どうでもイイか。

今？

3人で準備運動してるところ。

不死川と武蔵は受け身に入ったけど、僕はコンビネーションの空打ちしてる。

まあ、ストレッチは個人個人でやって、あとは自由って感じ。体を温めるだけだし、柔道のウオームアップは僕ができないからね。後ろ受け身とか、イキナリやったら背骨強打して怪我しそうだし。

左ジャブ、踏み込んで右肘。

左ジャブ、右肘のすかし、左ボディブロー。

左からのワンツー、右ロー。

また左からのワンツーで、今度は左ミドル。

で、さらに左からのワンツーで、左のボディフック。

同じコンビネーションで、今度はボディフックのタイミングを遅らせて。

左ジャブ、右ストレート、左ミドル、右ロー、左鎖骨打ち、左膝。

右ストレート、右前蹴り。

左前蹴りのフェイントから、胴タックル。

タックルのフェイント付きの、右のロングフック。

スイッチして、ワンテンポ置いてから左後ろ回し蹴り。

左インロー、左ジャブ、右ストレート、右ロー。

左インロー、右アウトロー。

右インローのフェイントから、右の上段内回し蹴り。

懐かしい、錆び始めてたコンビネーション。

この中の半分も、残念なことに口クに使えやしない。

今回は打撃で決めるつもりもないし、錆びてんのは百も承知。

それでも技を出すのは『技は習うんじゃない盗めって』ことで。

僕は柔術着で、不死川は柔道着。

武蔵は……なんだコレ？

空手着を上に着て帯を締めて、スパッツを下に履いて。

スナイパー空手の服装なんだけど、空手着とは認めないぞ。

……まあ、スパッツとかブルマは好きだけど、それとこれとは別問題。

そんなこんなで体を温め終わってから、道場の中央に集合。

でもって、誰ともなく今日の方針を話し始めた。

基本を練習するのか、乱捕りの時間を多めに取るのか。

打撃を中心にやるのか、組技を中心にやっていくのか。

「では、まず武蔵からじゃな。具体的な川神対策はあるのか？」

「特には無いですけど、とりあえず組手の相手してもらっていいですか？」

武蔵が持ちかけたんだし、それはいいんだけど……本当に何も対策がないのかなあ？

コイツ、川神とかと違ってバカじゃないのに。

対戦相手が分かってて、打投極の全部が使えて、それで対策がないってのはね。

相手が分かったのは今朝だったにしても、ちよつと粗末な気が……。まあ、奥の手があるならあるで、結構な話だけど。

「じゃあ、相手は僕がやるうか」

スナイパー空手を見てみたいってのもあるしね。

元々は靴をはいた状態での技術だから、仮想サバットってことにもなるし。

打撃の勘を戻すためにも、ちつとは付き合っただろ。

まあ、万が一にも不死川に怪我されたら困るってのもあるんだけどさ。

「はい、よろしくお願いします」

なんて、丁寧に頭を下げられたわけだし……。まあ、軽く揉んでやるか。

いや、性的な意味じゃないよ？

「おし、じゃあ行くぞ」

「どうぞ」

スナイパー空手の手口は分かっている。

膝を狙って蹴りを出して、相手の動きを止める。

で、体勢を立て直す前に攻撃して倒すってのだ。

少なくとも、何年か前のスナイパー空手の戦法はそうだった。

じゃあ、それが分かっているならどうするか？

そりゃあ、蹴りを貰わないように戦うしかない。

とはいっても、向こうもベースは空手なんだから、普通に攻撃してくることも考えられる。

機先を制すつてのは、伝統派空手の十八番だしね。

僕の作戦は単純明快。

蹴りをすかして、片足タツクルか胴タツクル。

それが、武蔵が一番傷つかない攻撃の仕方だし、僕らしい戦い方。

川神のマネをするんだったら、蹴ってきた足に蹴りくれた方がイイんだろうけど。

多分、5、6発で武蔵の足がダメになっちゃうからなあ。

僕は、タツクル優先の構え。

体勢を低くして、やや上半身を前傾させる。

頭部をガードしながら、いつでもタツクルできるように。

それでもって、体の正面を相手に向けておくのも忘れない。

武蔵は、右拳をアゴの近くに構え、左手はダラリと下げてる。僕とは違って、左半身を見せて緩く構えてる。

全身に余計な力は入ってなくて、すぐに動けるように緊張もしてる……なんだ、割とイイ構えが出来るんじゃないか。

まあ、どんな構えしても、やることは一緒だけども。

まず、少しずつ武蔵の周りを右回りに回る。

コッチの動きに追い付けるかどうかのチェック。

少し早めに動いてるけど、川神よりは遅いと思う。

これに追いつけないようじゃ、武蔵に勝ち目は無い。

で、グルグル回っているうちに、武蔵が少し遅れる。

まあ、スピードの問題じゃないし、川神はココまで回らないだろうからね。

ダンッ、と強く床を踏む。

タツクルのフェイント。

アレだけ焦らしたら反応してきそうだったけど、武蔵は冷静。しっかりとコッチの動きを見てやがる。

だから、フェイントの直後にタツクルした。

武蔵のミスを待たずして、結局タツクルに行く。

いつものフェイントとは違う使い方だけど、それでも効果的。

『フェイントに引っかけからなかったら攻撃してこない』って心理をついた攻撃。

前に構えられていた左足が、僕の肩を狙って飛んでくる。

なるほど、一旦相手の動きを止めることに極意がある、のかな？

どっちにしても、更に右に回り込みながら回避。

で、そのまま左後ろから胴タツクル決めて、持ち上げてテイクダウン。

そのままマウントには移らないで、素早く左腕に腕ひしぎ。

武蔵の胸に足を乗せるわけにはいかないから、右足を首の上に乗せるだけ。

左足は折り畳んで、脇腹に足首を押しつけるようにして武蔵の肘をロック。

で、武蔵が速攻で床をタップ。

スパツと離してやって、そのまま距離を取る。

もしケン力だったら、腕折らずに悠長に構えるなんてマネはできないからね。

「分かったか、武蔵。これが1年と2年……高貴なる民と平民の差じゃー！」

「まあ、手口分かってたしね」

正直、初手が分かってなかったら1発くらい貰ってたかも。

そこそこ速かったし、コツチが動いたのに合わせて軌道をズラしてた。

つまり、あの蹴りはコツチの攻撃に合わせて多少は変化させられるってこと。

いくら川神でも、1回は貰うんじゃないだろうか。

武蔵は武蔵で、思った通り不満そうな様子。

まあ、2分かからなかったし、1回の接触で負けちゃったわけだしね。

そりゃ、自分の力に不満も出てくるか。

「じゃあ、次は不死川先輩と港先輩がやってくださいよ」

よし来た。

「軽くだよ、軽く。お互い本気になると、絶対怪我するから」

「じゃな。そこそこ流してく感じでいいじゃろ」

不死川の嘘つき。

殺気がビンビンじゃないですか。

そんなところもカワイイぜ、なんて軽口も叩けないぞ。

不死川は、柔道らしからぬ構え方。
右手は脇の下に引いて、左手の甲を相手に向けて指先を天に向ける。
左足は前、右足は後ろ、前後に開いた幅は肩幅くらい。
皆口さんの構えだけど、その辺は気にしない。
そんなことより、不死川が本気に見える方が不安だよ。

僕は……ブラジリアン柔術らしい構え。
腰を落として体を縮めて、両手はハンドルを握るように。
いつでもタツクルに行けて、いつまでもチャンスを待てる構え。
まあ、不死川に怪我させないようにしなきゃだからね。
下手に関節技なんか使わないで、マウントで終わらせるように頑張ろう。

距離が縮まる。
距離を縮める。
ジリジリと、僕が距離を詰めてく。
不死川は動かない。

さすが不死川。
武蔵と戦法は同じだけど、隙が全然ない。
蹴りに来る気配がないから、蹴りにタツクルを合わせられない。
でも、そのままタツクルに入ったら返し技を貰う気配はある。
攻めてこないし、攻めさせてもくれない。
もし鉄壁なんてもんがあるなら、きつとこういつのなんだろうなあ。

まあ、言っても相手は人間だ。

不死川心って、人間だ。
本当に鉄の壁じゃないんだから、いくらでも突きよつはある。
突くことさえできれば、あとは崩せばいいんだから。

あと3m弱。

僕は足を止める。

これ以上近づいたら、不死川の間合いになる。

さあて、どうしようか。

正直、不死川がココまでやるなんて思ってたなかった。
あわよくば抱きつくうとか思ってたけど、そりゃ無理な相談だ。
偶然そういうことになっても、狙って不死川に抱きつくってのは無理そう。

定石としちゃ、軽い前蹴りで相手のアクションを誘う。
で、どうにか隙を誘って、そこでタックルするか。
掴まれたら引き込んで、打撃できたらタックル。
マウント取って、動きを封じて、不死川を降参させ

不死川。

目の前？

どうして？

下がない。

……下がるな！

右の貫手、横、避ける、崩された、フェイント？
右襟、掴まれる、左袖、掴ませない。

違う、足払い、右脚、受ける。

フェイント、大内刈り、かわす、チャンス、引き込み。

不死川の膝、寝技か、やらせない、攻める。

主導権は、俺が取る。

腹を左足の裏で押す。

左足に両足を絡める。

左袖を左手で引つ張る、後ろに回り込みながら、左腕を左足で跨ぐように。

左袖を掴んでた左手を離して、左手で帯を後ろから掴んで、同時に左スネで膝カックン。

ついでに右手で右の足を払って、不死川のバランスを後ろに崩す。

そのまま仰向けになった僕が、仰向けになって転がってくる不死川を抱き止めて。

後ろから両足で胴体をロックしつつ、素早く裸締め。

もちろん、全力で締めないで、力入れれば落とせるってところでストップ。

図らずも、当初の目的通り不死川に抱きつけたわけだ。

なんて悠長に考えていられれれれれれれれれれ R r e e
e e e a a a a a A A A !

凄くイイ匂いするんですけど！

なんていうか、汗かいてるはずなのに、甘い匂いがするっていうか！
不死川の髪の毛からは、こう、淡くて甘い匂いしかない！
ちよつとコレ、ホントに髪の毛も柔らかくてイイ匂いがして感動し
た！

……しかし、女の子の体って柔らかいんだなあ。

こう、ふわつとしてるって言うか、フニヤツとしてるって言うか。
女の子にしては鍛えてるはずなのに、不死川の体は全然ゴツくない。
ロックしてる両足からも、その柔らかさが伝わってくる。

ああ……幸せだ……。

ホント、毎日こんな風に眠ることができたらなあ。

このまま2度と目が覚めなくても、僕は後悔しない自信がある。
ああ、コレが不死川の感触……もう2度と忘れまい。

「あの、先輩方……何やってるんですか？」

「うおおおつと!?!」

やべえ……どれくらい不死川に抱きついてたんだ!?

まさか、何分も抱きついてたんじゃないのか!?

いや、落ち着け、流石に5分超えてたつてことは無いはずだとかそ

ういう問題じゃないぞ俺！

武蔵が不審がるほどの間、ずっと不死川に抱きついてたんだぞ！
もうその辺からして言い訳できなくなってるじゃねえの！？

とりあえず裸締め外して……違う、裸締めじゃねえ。

寝転がって胴体ロックしてなきゃ、後ろから抱きしめてるみたいな形じゃん。

冷静に考えたら、何やってたんだよ俺。

トレーニングにかこつけて抱きつくとか、ミドルレベルの変態かよ。
いや、ハイレベルの変態がどういふのかは知らないけどさ。

え〜っと、まずは胴体にロックしてる足を解いて、不死川の上体起こして。

不死川の下から体ずらして、2歩くらい距離を取って。

何事もなかったみたいに立ちあがって……頑張って誤魔化してみた。

「よおし、それじゃあ投げ技の練習でもしようか！」

その後1時間、無言の2人に延々投げられました。

……不死川さん、武蔵さん。

お願いですから、今度は頭から落とさないてください。

散々叩きつけてスッキリしたんだろうね。

30分の休憩をはさんでからは、何もなかったことにしてくれた。ちよつと脳震盪が治りきってないけど、頑張つて2人に合わせなきゃ。

文句でも言おうもんなら、また投げ技のオンパレードになるだろうし。

んで、そのあと結局、僕がずっと寝技を教えたんだよね。

オモプラッタに、マウントの維持の仕方、アキレス腱固め、ヒールホールド。

奥の手だった、ビクトル投げからの膝十字まで教えてあげた。

まあ、武蔵よりも不死川の足しになるからイイんだけどね。

言いたかないけど、2人ともマウントが下手過ぎた。

武蔵は前傾しがちで簡単にひっくり返されるし。

不死川は相手にドッシリ乗っちゃうから、肩なりなんなり引っ張つて返せちゃう。

マウントってのは、ほんの少し相手に体重乗せるくらいの気持ちでやらなきゃ。

その辺は……まあ、ブラジリアン柔術を知らん連中からすれば未知

の領域か。

マウントパンチも教えたから、多少は手数も増えたことだろうけど。

しかし、あの歩法は何だったんだろ？

僕が気付かないってことは、縮地の類でも使ったんだろっかね。

気合で呑まれたわけでもないし、気配を消されても問題ない間合いだった。

なのに、不死川が目の前に来るまで全然気が付かなかった。

ああいう技は、是非、武蔵のいないところで教えて欲しいモンだ。

まあ、それはともかく、ストレッチが終わって今日の反省をしてるところ。

反省って言っても技の確認くらいで、今はクールダウンを兼ねてダベってるところ。

ダベってるところなんだけど……。

「ところで、港先輩は『気』って使えないんですか？」

「いや、原理は知ってるけど、ロクに使えないよ？」

「その原理と言うのは、口で説明できるものか？」

なんて会話の流れになって、僕が気について説明することになったり。

まあ、別にいいんだけどさ。

気の力って、普通に鍛えてる分には触れる機会もないからね。

そのクセ、川神百代ってバケモノがポンポン使うんだから、そりゃ気にもなるか。

この中だったら僕が一番強いわけだし、知ってるかもって思うのも無理ない……かな？

「呼吸法を使って丹田で気を練るってのは共通なんだけどさ。

そっから使い様を変えることで、それぞれの特徴が出るんだよ」

ちよつと嘘ついた。

気功にも向き不向きがあるから、使い様だけで変化が出るなんてことはない。

ガキの頃からの鍛錬に影響されるものだって多いし、精神状態で威力が変わるモンもある。

例えば、硬気功。

これは、遅くとも6歳くらいからの鍛錬が必要だって言われてる。

柔軟性を磨き、内臓を鍛え、基礎を作ってからようやく教えてもらえる。

気で内圧を高め、その圧を以って攻撃を跳ね返し、己の五体を凶器と化す。

「まあ、呼吸の継ぎ目狙えば怖くないんだけどね」

気を練るときは、絶対に深い呼吸をする。

この弱点は、どんな人間にも必ずある弱点。

あの由紀江ちゃんですえ、気を練る時は特殊な呼吸をするんだから。その瞬間を悟られないようにもすることはするんだけど、それを見

破る練習もしてきた。

だから、その隙さえ正しく突いてやることができれば、気は練られない。

気力だつて、普通は、無限じゃなければ極め付けに強力なモンでもない。

……例外つてのは、どこの世界にもいるもんだけだね。

「聞いたいてなんですけど、やたら詳しいですね」

「まあ、相手が気を使うからつて、手も足も出ないで負けるのは恥ずかしいからね」

それだけつてわけでもないんだけど、それ以上言う必要は無い。
この道に進んでりゃ、いずれ連中みたいなのと戦うことになるんだし。

「まあ、今日はコレくらいで終いだね」

「そうじゃな」

「ですね」

うんうん、と不死川も武蔵も頷く。

まあ、不死川たちに試せない技の練習もしたいし。

正直なところ、女子2人に男1人じゃ座りが悪いしね。

と、僕が立ち上がったところで不死川も立ち上がって。

僕の襟を取って、全国レベルの内股で地面に……！

受け身が間に合わなくて背中から落ちて。

意識が……飛びそうに……飛び、そう、に……。

つて、痛つてええええええ！

足、折れる！ 痛い痛い痛い痛い！

痛いから、放して、マジで痛いから！

どうやって内股から足絡みに繋がたんだよおおおあああ！

「ギブ！ 放して！ 早く放してくれないと折れちゃうよ不死川あ

ああああ！」

「ああ、ちょうどいいところに右腕が伸びてますね」

武蔵いいいいい！

テメエ、なんで俺の腕に十字固め決めてんだ！

スパッツも太モモも好きだけど、こんな嬉しくねえよ！

肘、靱帯、伸びる切れるダメダメダメダメダメ！

「もう少し技を掛ける練習をしてから終了じゃな」

「そうですね、せっかくの機会ですからね」

どうでもいいから放してくれ！

伸びちゃう！ 肘とか膝の靱帯伸びちゃうから！

……あ、膝から変な音した。

結局、不死川の家黒服さんに、家まで送ってもらうことになりました。

膝のダメージ、ちゃんと抜けるといいんだけどなあ……。

5話目 『恋する港は思春期で、不死川を想うと本能が勝っちゃうの』（後書き）

毎度恒例ですが、ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘、

『アレ？ これ、前の話と矛盾しねえ？』

『原作と全然違うと思うんだけど……』

『寝技の描写が細かいのに分らんから、もう省けや』

『モーデイスさんはスパッツやブルマが好きなんですか？』

などイロイロとお待ちしております！

いまさらですが、youkeyさんのコラボ企画に参加させていた
だくことになりました。

明らかに他の作品の主人公より劣っています。そんな彼でも使っ
ていただけることを心より感謝いたします。

コラボ企画 『川神聖杯戦争』 広告 (Ver・モーティス) (前書き)

この広告は、youkeyさん主催の企画『川神聖杯戦争』の宣伝文になります。

他にもこのような広告文を書いてらっしゃいますので、併せてそちらにも目を通していただければ幸いです。

コラボ企画 『川神聖杯戦争』 広告 (Ver・モーティス)

それは、武神が起こした小さな奇跡。

願いを叶える……ただそれだけの魔術が、全ての始まりだった。

パラレルワールドに存在していた、決して交わることのなかった7人の戦士達。

彼らの邂逅を引き金に、戦いの幕は開かれる。

「おいおい、もっと根性出せ！ そんなんじゃ満足できねえよ！」

正気の中に狂気を孕みながら、その獣は育っていく。

穏やかに続く日常ごときで、それを妨げることなど出来はしない。

日常は終わり、ようやく彼は鎖から解放される。

《渡辺 豪》
ワタナベ コウ

from 『闇に咲く花たち』

「喜べ。貴様ら屑に、王に殺される権利をくれてやる」

その技は、尋常ならざる武器を生み出すだけに留まらない。五行を操り、それを制し、更なる高みへと登り詰める。傲岸不遜、大胆不敵、自由奔放、傍若無人、王の進撃は止められない。

《霧夜 キリヤ 王貴 オウキ》

from『真剣で王に恋しなさい!』

「現実って厳しいよね。何したって勝ちなんだから」

凡人にして非凡、規格内にして規格外。

望むだけの才能に恵まれず、絶望するほど無才でもない。技術も経験も知略も執念さえも、勝利のための呼び水となれ。

《港 ミナト 三千尋 ミキヒロ》

from『真剣でアイツに恋してる!』

「誰が何と言ったところで、私がするべきことは変わらない」

代々続いてきた、曆一族の力と流儀。

曲がらぬ信念を胸に秘め、力を磨き上げてきた。

友のために振るわれる刃は、今、容赦なく敵を切り捨てる。

《サツキ 皐月 カオル 薫》

from 『真剣で私に恋しなさい！〜曆の五月〜』

「あつちで茶あ飲んでっからさ。終わったら声掛けてやって」

理想の生き方は『まつたりのほほん』

その理想のために力を蓄えんと、真逆の世界に足を踏み入れた。

一流格闘士の濃密な血は、果たして彼にどんな選択を迫るのか？

《シブカワ 渋川 コウキ 晃気》

from 『のほほんど過ぎすために』

「お行儀よく鍛えてりゃ強いってか？ ……なら、俺で試してみやがれ！」

技を否定し、術を笑い、武を叩き潰す。

彼の拳の向く先には、常に破壊が付き纏う。

武人の対極に身を置きながら、同じ高みに上り詰めた実力者。

《大神オオガミ 宗助ソウスケ》

from 『真剣で私に恋しなさい』とある孤独な天才』

「俺達の絆は、その程度じゃ撃ち碎けない！」

確かな殺意と実直な心を併せ持つ、銃闘技の使い手。

放たれる拳は銃弾、構えられた腕は砲台と等価。

その弾丸に穿たれるは、不可避な死を意味すると知れ。

《東雲シノノメ 神無カンナ》

from 『真剣で私に恋しなさい』最強美少女と銃弾の拳を持つ男』

どの世界でも最強を誇る者が、この宴を指を啜えて見ていようか？

強きに飢え、強きを欲し、強きを目指し、頂点に立った者が。いずれ武神と成り果てる、それまでの余興を見過ごすものか。集え、戦え、倒せ、殺せ。全てを尽くし、生き延びろ。僅かな驕りが死を招かん。彼女こそ、遍く世界で最強の武人。

「さあ、どいつもこいつも、存分に私を楽しませてくれ！」

《カワカミ川神 モモヨ百代》

全8人の参加者による、起こり得なかった戦い。その戦いの中で、最後まで立っていられるのは果たして……

マジこいSS作家7人による、真剣で私に恋しなさい!! コラボ企画

『川神聖杯戦争』（企画原案youkey）

近日公開

参加者募集は既に締め切っております。

コラボ企画 『川神聖杯戦争』 広告 (Ver・モーティス) (後書き)

以上、コラボレーション企画の宣伝となります。

転載などの制限は設けておりませんので、ご自由にお使いください。

余談ですが、私のところの港くんも参加させていただきました。

この企画に参加させていただきましたことを、心より感謝します。

youkeyさん、本当にありがとうございました。

6話目『そいついつ悲鳴をあげた者』

(前書き)

全選手入場ッ！

……ネタが被りました。

6話目『そういつ悲鳴をあげた者』

7月24日、金曜日、午後2時。

川神ランキング特別試合、当日。

あの日以降、3人で集まってトレーニングすることは無かった。まあ、それぞれ課題ができて、誰もがそれを解決するので手一杯。大して時間がなかったから、新しい技を覚えるってのは難しい。力を飛躍的に上げるってのも、現実的には無理な話。

下手にイロイロ詰め込むよりは、今までの技術見直す方が大切なんだよね。

あとは、体調管理もキッチリしないと、ちゃんと実力も出せないからなあ。

今日は何したかって、朝はクリームパンとハチミツと牛乳で済まして。

で、翼を授けるドリンクと、ローヤルゼリー入りの栄養ドリンク飲んで。

不死川と一緒に、柔道の足技の練習を軽くやって。

井上にジュース奢ってもらって、葵にム力ついて、榊原にからかわれて。

朝のHR始まって、グラウンドで終業式やって。

教室戻って通信簿もらって、学食で不死川と武蔵と昼飯食って。

柔道場借りて3人で軽く体動かして、そのままの格好でストレッチ

して。

報道部の指示通り、特別試合参加者の10人が昇降口に集まって。

今、ちょうどデモンストレーションって茶番をやっているところ。

「組み付きしだい極めまくってやる！ サンビスト、田辺^{たなへ} 拳ツ^{けん}！」

「真のローキックを知らしめたい！ キックボクサー、戸田^{とだ} 幸助^{こうすけ}だア！」

「柔道に更なる磨きをかけ”高貴”不死川^{ふしかわ} 心が参戦^{せいせん}だア！」

「大和への愛は既に私が完成している！ 椎名 京！」

「イケメン・クアットロのケンカ見せたる！ 風間 翔一だ！」

「特に理由はないッ！ マッチョが強いのは当たり前！ 島津 岳人！」

「川神流は実戦で使えてナンボのモン！ 超実践流派！ 川神 一子すしこの登場だ！」

「自分を試しに川神ランキングに参戦した！ スナイパー空手！ 武蔵 小杉！」

「バーリ・トワードならコイツが怖い！ ドイツのピュアファイター、クリステイアーネだ！」

「シルヴァ柔術はこの男が完成させた！ 無道会館の切り札！ 港 三千尋だ！」

……なんで俺らは、全選手入場してんだらうか。
馬鹿みたいに、名前をコールされたら順番にリングに上っちゃってさ。

昇降口からリングまでの道には、赤いカーペットが敷かれてて。
僕はその上を、白い柔術着に革靴で、大量の視線を浴びながら歩ん

でいった。

いや、なんでってことはないか。

昼飯前に急に連絡があったにしても、確かに承諾したんだし。

ただ、話を聞いた時は『名前のコールの後に入場してください』しか聞いてなかったけど。

しかも、なんで俺以外はノリノリなの？

武蔵も手なんて振っちゃって、そろそろ試合が始まるって自覚あるのかなあ。

そこそこリラックスした方がイイのも分かるけど、多少は緊張してないと。

こういう芝居のマネごとは、どうにも気が抜けるから良くない。

プロレスより、ちいっとばかり広いリングに10人。

その10人に向かって、それぞれ歓声が飛んでくる。

あゝ……まあ、これは悪かないかもなあ。

うん、何でか知らないけど、僕への歓声も結構大きい。

不死川の着物を直視できないのが残念だよ。

こう、衆人環視のところで見ると、流石によろしくないもん。

そんなに気にしちゃいけないけど、あからさま過ぎると麻呂がウルセ

エんだよね。

電話番号知られてないから、辛うじて静かに毎日過ごせてるけどさ。僕と不死川が仲むつまじいのが、どうやら気に食わないみたいだし。

なんてことを考えてると、突然風間がロープに向かってダッシュ。サービスが知らんが、ロープ使って凄い高さでバク宙。どっと歓声が増したはいいけど、コッチは興冷め。ゆっくりテンション上げてんだから、テンポ乱すんじゃないよ。テンション上がり過ぎると、思わず手が滑って殺しちゃうかもしれないだろ。

コッチはもう、リングに上がってからおかしいんだ。血が笑って、骨が鳴いて、筋が叫んで、脳が焦れてる。

腕で見て足で味わい膝は嗅ぎ分け肘も聞こえ指先が甘く耳が恨む。俺は僕の僕が僕が冷静に俺を冷静に抑えなきゃ、抑えなきゃ俺が俺が俺を。

段々と、理性が、もう、切れ始めて、早過ぎて、ダメだ。そう、冷静になるんだ、俺。

「港先輩、大丈夫ですか？」

「オールOK。いつでも死ぬから、俺はいつでも殺せる」

「大丈夫そうですね」

うん、大丈夫だ。

武蔵のお墨付きだしね。

スパッツのチラ見で眼福したし、いつでも死ぬ。だから、どんな相手もいつでも殺せるんだ。

じゃねえよ、ボケ。

何が『いつでも死ぬから、俺はいつでも殺せる』だ。

不死川がいるだろうが、不死川が。

ココで殺したら、不死川に嫌われちゃうだろ。

ココで死んだら、不死川に思いを伝えられないだろ。

よし、クールダウン成功したつもりになったぞ。

ちょっとテンション落ちたけど、まあまあイケるでしょ。

「第1試合の田辺選手と戸田選手以外は、リング袖に待機しててください」

そんなアナウンスが聞こえてきて、ようやく本当に落ち着いてきた。

僕の出番はまだまだ先で、不死川の試合も、武蔵の試合もある。

あんまり急ぐもんじゃないさ、ゆっくり行こう、ゆっくり。

1回戦は、投票結果5位の田辺と戸田先輩。

2回戦が、不死川と椎名。

3回戦で、ガクトくんと風間。

4回戦は、武蔵と川神一子。

でもって、1番最後の試合は、僕とクリスティーネの試合になる。

一応、試合は総合格闘技のルールが基本。

まあ、こんな感じ。

基本事項：

・ 3ラウンド制で、1、2ラウンドは5分、3ラウンド目のみ10分。

・ KO、TKO、ダウンからの10カウント、1ラウンド3ダウンで決着。

・ 各ラウンド毎のダウンは、次のラウンド以降に持ち越されない。

・ 攻撃可能箇所は、頭部を含む全身。ただし、金的と両目、脊椎、喉への攻撃は除く。

・ グラウンドの攻防では、膝を用いた頭部への攻撃は2回まで。

・ 反則行為4回で反則負け。悪質な場合は、1回の反則で負けとなる。

反則行為：

・ 金的への攻撃、目潰し、手で首を絞める行為。

・ 4点ポジション（両手足を地面に着いた状態）の相手への頭部に対する蹴り。

・ 膝を横から蹴る行為。

・ マウスフック、ノーズフック、耳を引っ張る、またはそれに準ずる行為。

・ ブーツ類を含む靴の着用

・ オープンフィンガーグローブの未使用

まあ、結構なことができるよね。

このルール考えた奴、頭パーなんじゃねえの？

なんでここに『着衣を使った全ての攻撃』が入ってないのやら。

僕としちゃ嬉しい展開だけど……それとも、ワザと反則に入れてないのかなあ。

それに限らず、危険な技なんて腐るほどあるんだけどさ。

どっちにしても、試合始まってからだね。

それまでは、第3者の気分で試合でも楽しませてもらおうか。

そっぴや、結局、膝の怪我は治りきらなかった。

不死川は気付いてないだろうけど、あの日、膝が捻挫手前になっち

やってさ。

小西さんの紹介で行った接骨院じゃ、一週間は安静って話だった。まあ、敵前逃亡なんて趣味は無いし、こうして必死こいて学校に来たんだよね。

痛み止めは飲んでるし、普通に動けるっちゃ動けるんだけど。

今はとりあえず、リングの近くで不死川と武蔵と……入江と待機してるとこ。

せっかくだから由紀江ちゃんのとこ行けばイイのに、このアホは。まあ、先輩気遣うなんて殊勝な心がけてないから、なんか裏があるんでしょ。

例えば、差し入れて俺に持ってきてくれたウーロン茶に下剤入ってるとか。

そう思うと、コイツが持ってきたもんは手がつけれん。

ああ、なんか、リング周りに選手用のベンチが4つ並べてあってさ。そのベンチの1つに、不死川、僕、武蔵、入江の順で座ってるところ。

……両手に花みたいな状況だけど、やっぱ入江が邪魔だよね。

ポップコーンでも食いながら見たいけど、試合まで時間ないもんなあ。

下手にイロイロ食ったら、試合中にゲロツちゃうかもだし。適当に話しながら時間潰して、気を紛らわしておこう。

「1試合目は……え〜っと、コレは誰じゃ?」

「パンフレット通りだと、デカイ方が田辺で、小さい方が戸田先輩」
リングに指差してる不死川に、優しく教えてあげる僕。
パンフレットを作った報道部の行動力の高さは、まあ、スルーと
ころ。

もう、この学校の連中が変なところで全力出すのには慣れないと。

しかし、よく出来たパンフレットなこと。

学年とクラス、身長と……ファイトスタイルまで調べたのか。

拳句の果てに得意技とか、どっかの格闘番組のマネでもしたつもり
かなあ。

まあ、見る分には面白いからいいんだけどさ。

自分の名前が入ってると思うと、正直、ちょっと萎えてくるよね。

「……スナイパー空手ってホントに書かれちゃいました」

「自業自得じゃ。高貴な此方は、その辺りも抜かりない」

あ、ホントだ。

スナイパー空手って書いてある。

しかも、得意技が『下段力カト蹴り』って、まんまじゃんよ。

他の格闘技やってる時間の方が長かったらうに、下手なこと言うか
ら……。

不死川の欄は、キツチリ柔道になってる。

得意技は内股になってるし、どういうことだろ？

不死川のところになだけ報道部でも来たのかなあ。

体育の時間の前後とかなら、僕が見てないところで聞けるわけだし。

僕は……ルタ・リブレ？

ああ、そっか。

柔術と空手やってりゃ、ルタ・リブレって分類になるのか。

ガスタオンさんに聞いたことなきや、何が何だかって感じだったわ。

ルタ・リブレってのは、ブラジル語で『自由のための闘争』って意味でさ。

要するに、何やっても最後に勝ちやいいんだよってのがスタイルなんだよね。

最近じゃプロレスラーがルタ・リブレどうこうって言うけど、本当の意味はコレ。

簡単に言っちゃえば、まあ、総合格闘技ってことになるのかなあ。とにかくまあ、ルタ・リブレってのはそういうもん。

ブラジリアン柔術とルタ・リブレが敵対してたの知ってるなら、舐められてるんだらうけど。

と、ココでゴング。

すぐには決まらないだろうし、出鼻は見なくてもイイや。

それよか、不死川の緊張をほぐしていかないと。

まあ、この試合が気にならないって言ったらウソになるけど。そうだなあ………適当に話繋いでみるか。

「この1年の田辺ってヤツ、最近グングン順位が上がってきてるね」

「あ、俺、田辺なら知ってますよ」

なんてことを、入江が言うわけだ。

別にオマエに話しかけたわけじゃねえよ。

返事くらいはしてやるけどさ。

「ああ、知り合い？」

「知り合いって言うか、ダチっス」

ふーん、そ。

入江と田辺が知り合いか。

えーっと、田辺は……サンボ？

アレ？ コイツって確か、最初は我流って登録されてなかったっけ？

得意技も、ちゃんと飛びつきアキレス腱固めってサンボの技になっ

てるじゃん。

「武蔵は知ってる？ ていうか、1年なら戦ったことあるんじゃないの？」

「ええ、ありますよ。出会い頭に4秒くらいで倒

「折ったん、ですか？」

「折ったんだろうね、あの様子だと」

目が点になって、顔の青くなつた武蔵がポツリと言。

うん、まだまだ青臭いなあ。

ルールの上で関節技が認められてるんだから、こつという事故は付きモンでしょ。

本当に事故だったのかどうかは別としてね。

いやあ、なかなか根性ある1年もいたもんだ。

僕と戦うことになったら、上には上があるって教えてあげなくちゃ。体に教え込んであげたら、キツチリ納得してくれるだろし……僕も楽しいし。

「早かったな。1分もかかっておらんのじゃ」

「だよねえ。戸田先輩も弱い人じゃないんだけど」

強い人じゃないとしても、戸田先輩は上手に戦える人だった。

前蹴りとミドルで主導権を握って、パンチとローキックで攻め立てる。

決闘は1回しかしたことないみたいだけど、その1回を見たことがある。

必要以上に相手を傷つけずに、キレイに相手の戦力を削いでく。

そんな風に、スポーツマンらしくキレイに戦う人だった。

今日で終わりだけだね。

ああいう悲鳴を上げた人間は、もう2度と戦えない。
あの声は、痛みに負けて叫んだ声じゃない。

骨が折れる、筋が切れる、その恐怖が呼んだ声だ。

そういう叫び声は耳に張り付いて、2度と耳から離れなくなる。

目を閉じる度、横になる度、何かに体をぶつける度。

何度も何度も、その恐怖が体を強張らせてしまう。

「まあ、次の試合は不死川出るんだし、気合入れていこうね」

「当然じゃ。椎名ごときに負けるはずがなかるう」

ほっほっほ、とか笑ってるけど。

正直、気を抜かない方がイイと思う。

何か知らないけど、最近は白兵戦の練習もしてるらしいし。

ロクに弓道部に顔出してないって武蔵も行ってたから、そっちに傾倒してるっばい。

そもそも、椎名は弓術家。

数ある武士の必須科目のうち、弓術に偏ったつてのが弓術家の実態。
つてすると、そもそも椎名自身に格闘の基礎はあると思った方が無難。

というわけで、一応アドバイスなんてしてみたり。

「それだけだね、椎名だけど、最近は川神院で修業したりしてるんだってさ」

コレも嘘じゃない。

武蔵の話によれば、それをダシして弓道部を休んでるだとか。理由もなくサボるわけじゃなくて、己を高めるためだから強く注意できないそう。

どっちにしても、こういう情報筒抜けにしてくれたのは有り難いんだけど。

そんな僕の言葉が、聞こえてるのかいないのか。

柔道着じゃなくて、いつも通りの桜色の着物姿のまま。

そのままの姿で、不死川は軽く肩の筋を伸ばしたりしてる。

着替えないってのは、なんか理由があるのかもしれない。

どっちにしても、好きな子に無視されるってのは嬉しくない状況だけど。

「だから、打撃も組技も出来るって思った方が」

「港」

「相手が誰であろうが、此方は勝つ」

……うん、安心だ。

これだけ気合が乗ってりゃ大丈夫でしょ。

不死川が負けることがあるとすれば、気合負けと油断くらいだからね。

キツチリ戦えば、椎名なんかには負けやしないさ。

「うえええ……」

「あ、ちよつ、武蔵さん！ やめてよ！ 俺のカバンの中に吐かないでよ！」

なんで今のタイミングで吐いてんの？ 吐くならさっきのタイミングでしょ？

え？ 丁度イイ袋がなかったからって……いや、確かに俺のカバンは空だけど！

ああ、ほら、自分で吐いたのでもらいゲロしないで！ お願いだから止めて！

もうカバンは使えないからいいじゃん、じゃなくて！ そういう問題じゃないから！」

……コイツらのバカなやり取りが、不死川に悪影響を与えませんよ
うに。

6 話目 『そいついつ悲鳴をあげた者』 (後書き)

出鼻のネタが うしおなとらさんの コラボ広告と被ってしまいました
したが、勘弁してやってください。

ご意見、ご感想、ご指摘など、諸々お待ちしております。

7話目 『研がれた刃と付け焼刃』 (前書き)

この話は、細かい戦闘描写を行っています。

話の展開は最後のあたりを読めば分かりますので、流し読みしてくださってもOKです。

7話目 『研がれた刃と付け焼刃』

「お願い、入江くん……………もう少しだけ、ね？」

「武蔵さん……………」

武蔵が、入江にもたれかかっている。

小さな頭を入江の右肩に乗せて、その体重を全部預けて。今にも眠りそうに、可愛らしく目を閉じてて。

「まったく、僕が隣にいること忘れてるんじゃないかね。」

「俺、武蔵さんのこと、嫌いじゃないよ」

「私だって、入江くんのごことは嫌いじゃないわ」

そんな風に、友達以上、恋人未満みたいな戯言を交わす。

入江は……………あゝあ、固まっちゃってんなあ。

そりゃ、カワイイ女の子に肩貸してりゃ、頬の1つも引きつるか。

「だから、入江くん」

「ダメ」

猫なで声とは言わないけど、甘い声で囁いた武蔵。
その武蔵の言葉を、少し語調を強めて断る入江。
まあ、いつまでも肩貸すわけにはいかんわなあ。
それに……

「いい加減、水道とかでうがいしてきてよ！ 口から酸っぱい匂いするんだよ！」

武蔵、さっき吐いたばっかだしね。

ココで口をゆすがせたいんだけど、衆人環視つてもあるしさ。
年頃の女の子に、地面に水吐かせるつてもね。

結局『気分がよくなるまで』って、入江の肩を使って休ませてるどころ。

僕はほら、武蔵と比べると座高が高過ぎるから、肩貸せないじゃん。
せっかく入江がいるんだから、全部やらせときゃいいんだよ。

「女の子の匂い嗅ぐなんて……入江くんのエッチ」

「そういう問題じゃない！ ちよ、僕まで気分悪くなってくるんだ
って……」

なんか楽しそうだし、コイツらは無視しとくか。

さて、もう不死川はリングに上がってる。

いつのと同じ着物姿に見えるけど……僕には分かる。

あの帯の下には、帯が外れても着物が脱げないようにするために予備が巻いてある。

万が一、椎名が『不死川の帯を外す』って作戦に出ても、コレじゃ意味がない。

まあ、そんなことよりも、全力で戦えるように準備してきたんだろうね。

着物を着替えないってのは、不死川の意地ってことで。

リングの上で審判してるのは、みんな御存じルー先生。

いざってなったときは、この人くらいじゃないと確実に止められないからね。

ジジイは……椎名のブルマを見るのに忙しそうだしなあ。

つたく、自分だけ楽しもうなんて、とんだクソジジイだよ。

まあ、童貞様に期待するか。

「2人とも、ルールは分かってるネ？」

そうやって声をかけるルー先生に、不死川も椎名も言葉を返さない。そんなに変わんない目線の高さから、ジツと静かに睨みあつ。

いや、椎名が視線を下げた。

その視線の先は……不死川の憤ましい貧乳。

ジロジロ見るってわけじゃないけど、チラッと視線を落としただけ。椎名の視線の変化に気付いた不死川が、少し怪訝そうな顔をして、わざわざ相手に気付かれるように、椎名が鼻で笑った。

「どっ、どっという意味じゃ椎名！」

「別に。ほふく前進が楽そうだなって思っただけ」

「うっうっうるさい！ 余計な御世話じゃ！」

おのれ椎名！ よくも不死川に羞恥心を与えやがって！
顔を赤らめてる不死川が可愛すぎるじゃないか！
そのうち上手いことやって、直江とデートさせてやるよ！

自分の貧乳をコンプレックスに感じて、胸を隠しながら顔を赤らめる不死川。
素晴らしい……また僕の知らない不死川の一面を見ることができた。
この瞬間がビデオ撮影されてたら、借金してでも手に入れて見せよう。

「ハイハイ、試合前からトラブル起こさないでヨ」

結局、ルー先生にたしなめられて、不死川は歯を食いしばるだけで終わった。

そりゃまあ、仕方ないよね。

ついさっきの試合で、泡吹きながら叫びまくって病院運ばれた奴がいるんだし。

怨恨の類が絡むと大怪我になるってことが分かってるから、ちょっと敏感。

それも、不死川が柔道の猛者ってわかってるからこそその処置でもある。

不死川が柔道使いつてのは周知の事実。

跳び関節も使えて、投げ技も一流レベル。

そんな不死川が、事故を装って相手の関節を破壊するのは簡単なこと。

その辺を懸念した上で、ルー先生は注意したんだろうね。

こんな注意したところで、その気になったら防ぎようがないだけだよ。

で、ルールの確認が始まった。

さっきの試合のこともあって、かなり念入りに伝えている。

まあ、今さら関節技禁止なんてのは出来ないから、折らないようにって言うくらい。

関節技なんて極まっちゃえば、掛けた奴がやりたい放題なんだけだね。

よくさ、関節技はパワーがなくても決まるっていうじゃん？

アレ、半分ホントで半分嘘なんだよ。

関節技を極めるまでのやり取りの中で、パワーは絶対に必要。

いざ極まっちゃってしまっただけからは、必要最低限の力で関節を破壊できるもし切られたんだったら、それはちゃんと極まっちゃったってだけの話。

そういう機微も、関節技の面白さってヤツさ。

つと、ルール説明が終わったみたい。
2人とも、それぞれリングのコーナーに移動してく。
椎名は余裕シヤクシヤクで、不死川はイライラしながら。
あゝ、こりゃマズいなあ……不死川の気が完全に乱れちゃってる。
ココは1つ、男らしくフォローさせていただきますか。

「おい、不死川！」

「なんじゃ港！ 今から試合が始まるのじゃぞ！」

うおう、スツゴイ剣幕。

コレ、近くにいたら僕が壊されてんじゃね？
貧乳って言われたのが、よっぽど気に食わなかったのか……。
貧乳フェチとしちゃ悲しいけど、今は不死川のことが最優先。

しかし、ワントンポ置いて正解だったね。

実は今『貧乳の方が着物とスク水が似合うんだぞ！』って言おうと
思っただよ。

ほら、着物って、胸が大きいと前がキレイなラインにならないんだ
よね。

スク水は……巨乳も貧乳も映える、常世の神器の1つに御座います。

いや、んなこと考えてる場合じゃない。

すぐに別のフォローの言葉を考えないと……。

落ち着け、僕ならできる。

こっに見えても、IQ147のオツム持ってたんだ。

空間把握と法則発見が強いただけけど、それでも頭はイイんだ。

行け、僕！

脳味噌フル回転させて、不死川の精神を安定させるんだ！

「いいか、不死川！」

「だからなんじゃ！ 早くせんか！」

「あんなやらしい体した奴に、高貴で清楚で可憐なオマエが乱されてどうする！」

え〜……今のギリツギリじゃない？

何？ 僕の脳ミソってコレが精一杯なの？

僕が椎名をいやらしい目で見てるって勘違いされるじゃないか！

確かにいやらしいけど、不死川の体の方が圧倒的に興奮するんだよ！とか言い訳してる時間もないし、頼むから気付かないでくれ！

「港！」

「なんですか！」

「礼を言っぞ！」

よし、なんかテンポ良く乗り切ったぞ！

試合前で焦っててくれたのが功を奏したか！

やれやれ……もうちょっとで不死川の信頼を失うところだった。
思わず敬語になっちゃったけど、よっぽど大丈夫だよ……大丈夫
だよ？

「始めっ！」

なんか、ココだけ上手な日本語なルー先生。
川神院とかで仕切ってるからだろうね。

椎名は、軽快な歩法でリング中央へと移動する。
右半身を不死川に見せながら、右足は前に。
その顔は右に向けられて……まあ、右半身見せてるから正面向
いてんだけど。

左手は手刀にして、掌を上に向けて水月を守り。

右手も手刀だけど、指先を右足の方に向けて、掌を下に向けて真直ぐ伸ばす。

両足は肩幅の倍くらい開いて、ドツシリ構えて。

膝を軽く曲げて……なんだ、この構え？

動きにくいし、防御にも反撃にも向いてない。

ステップワークを捨てて、カウンターに徹した構えってわけでもない。

ありゃ、不死川対策だなあ。

着物姿じゃ中段以上の蹴りは無いだろうし、打撃も考え辛い。

それに鍛えてない不死川の手じゃ、力を込めた打撃は期待できない。

不死川のメインウエポンが柔道ってことを考えれば、打撃は無いって見てもおかしくない。

組技は一手目さえ止めちゃえば、それ以降の攻撃は存在しないんだから。

不死川は、例のあの構え。

柔道でもなく柔術でもない、皆口流なんて言ったらいいのかなあ。

左の肘は深く曲げ、手の甲を相手に見せつつ軽く手刀を作って。

右は正拳みたいに引き絞るけど、やっぱ形は手刀で。

掌は天を向いて、いつでも右の突きを出せるような構え。

左足を前に、右足を後ろにして、体の正面を相手に向けて。

椎名を見据えながら、ジリジリと擦り足で距離を詰めていく。

絶対にやりにくいだろ、不死川。

椎名の構えは、どう見たって待ちの構えだ。

ちょっと意図が分からないけど、先に攻めてくることは無い。だからこそ……待った方が有利な不死川が待たれるっていうのは、絶対やりにくい。

1分は経ったと思う。

不死川が慎重に距離を詰めてたから、まだ、お互い移動しただけ。

不死川は、リング中央の手前……椎名から2mの距離をとる。あの体勢じゃ、椎名も不死川に当てられるほどの蹴りは出せない。もちろん、不死川が投げようとしてるなら先手は無い。っていうより、椎名は蹴りも突きも出せるような……あれ？

椎名の右腕、曲がってたんじゃないかって、真っ直ぐ伸びてたよなあ。椎名って、膝を曲げてただけで、後傾で構えてなかったよね。あ、コレ、声出しても間に合わねえや。

椎名はタメを作ってた。

最初は両足に重心を掛けてたのに、左足に重心を集中させてる。しかも、少し後ろに体を傾けて、伸ばしてた右腕を軽く曲げて。ほんの僅かだけど、間合いを誤魔化してやがった。

椎名の構えが、空手の前屈立ちのように変化して。右足がグッと踏み込まれて、不死川との間合いが詰まる。

当然、それを見越した不死川は下がるけど。椎名の策略によって、たった1歩の間合いを見誤った。

右の貫手が、不死川の鎖骨に伸びる。

クリステイアーネと勝負したときに痛めた、その鎖骨へ。

本来なら、せめて掌打か拳で攻撃するような場所だ。

つまりコレは、椎名の本命じゃない。

鎖骨の痛みを思い出したんだろうね。

不死川が、不自然に下がった。

必要以上に、大きく歩法を乱しながら。

椎名は、更に左足を踏み込んで不死川を追う。

さっきの右の踏み込みよりも早く、長く、鋭く。

力強く放たれるのは左の拳。

まるで矢のような勢いで、不死川の腹へと放たれる。

左腕で、その拳を受けた。

足並みが乱れるほど焦って下がったのがよかったのかもしれないね。バランスを崩しかけてた不死川は、重心が下がってた。

だから、椎名の拳が腹からずれて、不死川のガードが間に合った。

もし腹に真っ直ぐ伸びてきてたら、右も左も間に合わなかった。

不死川は僕みたいな腹の鍛え方なんてしてないだろうし、ホント危なかったよ。

そのまま不死川は大きく下がって、ロープに背を預ける。

でも、反動を使って前に出る頃には、椎名は不死川の間合いから外れる。

椎名は、またリングの中央付近に陣取った。

嫌な戦い方するなあ、椎名の奴。

初めっからポイント狙いで来てるんじゃないか？

ルールにや書いてなかったけど、ポイント制は採用してるだろうし。

「すみません……ちょっと口ゆすいで来ます」

「このタイミングで話しかけんな！ 入江、連れてけ！ カバンも捨てて来い！」

うーす、ってヤル気のない声。

っていうか、まだやってたのかよ。

試合前にとっとと済ませて来いよ、要領悪いなあ。

で、不死川と椎名は、また膠着しちゃってる。

椎名の構えは、今度はキックボクシングみたいに変わってる。

左手を伸ばして距離を取りながら、左足は前、右足は後ろ。

右手は右の側頭部をガードしながら、相手に対して向き直る。

今度は、先手が取れる構えだ。

突きも蹴りも自在に出せて、上手くやれば相手の先を取れる。

不死川は……ああ、そういうことか。

最初に構えた時より、膝が緩くなってる。

それだけじゃなくて、猫背になって体を少し縮こめてる。

オマケに、足元がよく見えない着物を着てるから、それに気付けない。

これはアレだ。

1回食らったことあるから、なんとか理解できる。

縮地だ。

不死川と椎名の距離が、ふっと縮まった。

無理な姿勢から、元の姿勢に戻りながら踏み込む。

力を入れるんじゃない、力を抜くことで完成する。

だからこそ、動きが見えても間に合わない。

人間は、踏み込む時には後ろ足に……全身に力が入る。

格闘技やってる奴は、大体が感覚的にそれを理解してる。

視界に入って来た情報だけで、反射的に踏み込んでくるって分かっちゃう。

川神みたいに、どんなに早く動いても予備動作が見えてるうちは一流だね。

近付こうとすることに気付かせないってのが、一流の技ってヤツだから、間に合わない。

不死川の貫手が、椎名の顔に向かって奔る。

いや、顔じゃなくて目を狙ってる。

当然、椎名の動体視力でかわせないはずがない。とはいっても、踏み込まれたのに気付くのが遅れたから、完璧にはかわせない。

首を傾け、ギリギリの回避をするしかない。

右の貫手を、首を右に倒して避けてみせる。

体全体で避けてくんじゃなくて、首だけを使って。

残念だけど、不死川の狙いは貫手を当てることじゃない。貫手で威嚇して、相手の襟や肩を掴むことだ。

そもそも、椎名は避けたんじゃない。

不死川に避けさせられたんだ。

不死川は左足で踏み込んで、右手が前に出てる。

少し後ろにバランスを崩した椎名に追撃を掛ける様に、右足が伸びる。

ただ、これは距離を詰めるためのモノじゃない。

だってほら、不死川の左手は、椎名の右手首を握ってる。

椎名の右腕を引っ張って、自分の体に引き付ける。

踏み込みの勢いを利用して、右脚を前に振り出す。

椎名の左の鎖骨の付け根に親指を引っ掛けて、右の掌全体で押すようにして。

振り出した右足を後ろに跳ね上げて、椎名に大外刈りを掛けた。

こう、スパンツ！ って音がしそうな投げだった。

よく、投げは掴まなきゃいけないから、2拍必要だって言われてる。

それでも、不死川の大外刈りは、打撃と同じ1拍のタイミングで放たれた。

頭を叩きつけ、鎖骨を折ったに違いない。

椎名は完全に投げられてたし、自分から跳んで勢いを殺した様子もない。

マットに叩きつけられるイイ音がしたから、受け身も取れてない。っていうか、ちょっと巻き込みながら投げてたから、受け身のタイミングが合わない。

しかも、いくら下がプロレスのマットと同じだからって、投げの威力も死にはしない。

勝負は着いた。

僕にはそう見えただけど、不死川は手を休めない。素晴らしいくらいに徹底的だよ。

倒れた椎名に、大外刈りで振り上げた右足の膝を打ち込む。

川神と戦った時みたいに、心臓を狙って……ってわけじゃない。わざと肋骨を狙って、そこを叩き折るような膝。

川神戦との違いは、技巧じゃなくて力技の膝だったってこと。

強引で不死川らしくない感じだけど、その威力は充分に過ぎる。

鈍い音がしたのは、僕の気のせいさ。

リングの真ん中あたりじゃ、骨折の音なんて聞こえない。

骨が折れた音が聞こえたなら、それは僕の幻聴だね。

バキッて音じゃなくて、メヂッって感じの音がするんだよね、アレ。構造が構造だから、キレイにポツキリって風にはいかないんだよね。

――
――
――

不死川が立ち上がり、入れ替わるように椎名に駆け寄るルー先生。
マットの上に倒れたままの椎名を、すぐに動かそうとしたりはしな
い。

口を開いて舌が巻き込んでいないことを確認し、掌を口の近くに持
ってきて呼吸を確認。

目を開いて瞳孔をチェックして、今度は左の鎖骨を触診。

椎名の右腕を掴んで……え？ 骨を戻してるってことは、脱臼させ
てたの？

おいおい、地面に叩き付けた時に、頭と鎖骨と肘を攻めたってのか。
いやあ、さすが不死川としか言いようがないね。

「不死川！ やり過ぎダ！」

なんて的外れなこと言うルー先生。

ルールにや抵触してないし、ちゃんと勝ったろうに。

それに最後の膝は、ルー先生が止めに入るだけの隙があったはずだよね。

止めるタイミング間違えたクセに、偉そうなこと言いやがって。相手を徹底的に攻めて畳み掛けるってのは、戦いの定石だろうに。

不死川はキツチリ無視。

まあ、ゴチャゴチャ言い訳する必要もないしね。

「勝者、不死川心！」

大音声で叫んだのは、ブルマ大好きジジイ。

不死川責めてるよりは、とっとと試合切り上げた方がイイって判断だろうね。

この程度の怪我なら、たまぐに決闘でもあるんだしさ。

まあ、さっさと椎名の治療しなきゃだし。

でも、なんでだろ？

悠々とリングを降りる不死川に、僕以外の拍手は僅かだった。

「や、お疲れさん」

僕のねぎらいの言葉にも、不死川は無言。

ツンと澄ました顔をして、どっから出したのか、口元を扇で隠しちやっただ。

それで、そのまま僕の隣にドカツと座る。

えーっと、コレは話しかけんなって意思表示かなあ？

でも、そしたら僕から距離とって、別のところに行ったりするよね。

「港」

「ん？ なあに？」

不死川が、僕にしか聞こえないボソツとした声で呟く。

ああ、別に話したくなかったわけじゃないのか。

ってことは、口元隠したのは話声を聞かれないため？

試合直後で、そんな秘密にしなきゃいけないようなこと伝えるのかなあ。

「……………思ったより、椎名の拳が固かったのじゃ」

は？ と思って不死川の方を見ると、ちよつと涙目。

あゝ、そっか。

不死川、僕ほど筋肉鍛えてるわけじゃないもんなあ。

そもそも、腕で受けるってのは武道って面からしたら論外だし。殴られ慣れてないから、そりゃ痛かったよね。

「なあ、港」

「なあに？」

「痛みが和らぐまでで良い。左腕をさすってはくれんか？」

「うん、任せとくれ」

誠心誠意、痛みを和らげるために撫でさせていただきます。

なんかもう、試合とかどうでもいいや。

このまま不死川の腕撫でてりゃ、試合なんてどうでもいいよ。

ああ……柔らかいしスベスベだ……。

恥ずかしい話なんですが……フフ……興奮してきました。

次、ガクトちゃんと風間だったっけ？

まあ、どうでもいっか。

7話目『研がれた刃と付け焼刃』（後書き）

どちらの刃も不死川というオチでした。

柔道の技という研がれた刃と、グラウンドの相手への打撃という付け焼刃。

さすがに、弓メインの京が勝つには至りませんでした。

多少、ヒロイン補正はかかっていますが……。

ご意見、ご感想、誤字脱字などのご指摘、辛らつなご意見も含めまして、諸々お待ちしております。

8話目『弱いはずがない』

不死川の腕をさすって6分が経過。

やっと椎名を保健室に運び終わったみたいで。

本日2度目の救急車が去ったところで、ようやく次の試合の準備が始まった。

いや、壮絶な試合だった。

反則ギリギリ、目を狙ったフェイントで相手を思い通りに動かす。

そういう不死川の計算高い攻撃は、僕の見ただ中じゃ初めて。

圧倒的な技術と力で勝ちぬけるのが、今までの不死川だったんだけどさ。

全力で勝ちに行く不死川も、それはそれで愛嬌があるよね。

でもまあ、そこはそれとして……正直やり辛くなったよ。

2試合やって、2人の重傷者が出てくるとか。

しかも、1人は関節技で、1人は投げ技。

みんなの組技に対する警戒心が、無意識のうちが上がってる。

クリステイアーネだって、僕の寝技を警戒してくるはずだ。

とはいっても、やりようなんて無数にあるんだけどね。

そう、これは試練だ。

不死川が僕に与えてくれた試練だ。

偶然とは言っても、その偶然の元が不死川ってのは変わらない。

なら、むしろ喜ばしいことじゃないか。

この試練を乗り越えたら、僕への印象がランクアップすること請け

合いさ。

それはそれとして、今何してるかって言うと。

不死川の肌の感触を掌に覚え込ませるところ。

舐め回すみたいにさすりたいのを我慢して、羽毛のように優しく。

……僕は生れてこの方、こんなに柔らかな人間の肌に触れたことがない。

この、キメ細やかな、上質のシルクのような肌を撫で続けたいんだけど。

いくらなんでも、さすがにマズイと思うんだよね。

「ねえ、不死川」

「なんじゃ？ やはり迷惑だったか？」

「いや、痛みが引くまで撫でるのはいいんだけどさ」

うん、僕としちゃ全然構わないんだ。

むしろ、このままずっと撫でててもいい。

不死川の腕を撫で続ける疲労くらい、その感触を楽しむのに比べれば安いもの。

この程度は非常にリーズナブル、良心的疲労でございます。って感じなんだけど、1つ、大きな問題点があっただね。

「この様子だと、5日は撫でっぱなしになるけどイイのかなあって」
「ふえっ!?!」

まあ、ね……ホラ。

不死川が突きもらったとこ、ポツコリ腫れちゃってんだよね。そりゃ痛いって、こんなダメージ残るような攻撃受けたら。今、左手で何か持ったりってのはできないんじゃないだろうか。普通の女の子だったら、ボロボロ泣いてもおかしくないだろうに。さすが不死川、我慢強い。

「そういうわけで、ちょっと待っててね」

こんなこともあるのかと、柔術着の内側にイロイロ仕込んであったのさ。

冷湿布と包帯、ガーゼを固定するテープに、痛みを誤魔化すコールドスプレー。

念のためとはいえ、用意しといて大正解だったね。

ん？ 自分に使うためじゃないよ？

不死川が万が一怪我した場合と、不出来な後輩のために用意してあったんだよ。

まあ、そんなことはともかく。

湿布を不死川の腕にペタッと貼って。

剥がれてこないように、テープで湿布の端を固定して。

手早く、でもキツくなりすぎないように、包帯でグルグル巻いた。

包帯の先を巻いてある部分に適当に挟んで……コレでよし。

いやあ、応急処置は指先が腐るほどやったからね。

ブラジリアン柔術はともかく、空手が酷くてさ。

師範の攻撃が直撃して骨折とかザラだったし、捻挫も週1であったみたいだし。

まあ、僕は前歯持ってかれた以外は大した怪我なかったけど、他の皆さんがね。

お陰さまで、こうやって不死川に丁寧な処置をしてあげれたからイイけど。

「……やけに上手じゃな」

「怪我人多いんだよ、ウチのジム」

小西さんが頑張るからね。

関節技がキレ過ぎてて、カーロスさんでも怪我することがあるくらい。

入江、麦村さん、桑野さんが怪我するんだよ。

あの人ら、グラップラーじゃなくてストライカーだし。

日本拳法やってる本田さんでも、その次くらいに怪我が多いし。

……ウチのジム、世間一般で言ったら最悪の練習環境だよなあ。

「とにかく、せっかく勝ったんだしさ。あとは気を楽しんでおこつよ」

「ふむ……そうさせてもらうのじゃ」

お礼が出てこないのは、まあ、仕方ないよね。

腕が痛くてそれどころじゃないだろうし、全然気にしない。

不死川の役に立てたんだから、それで充分だよ。

願わくば、お礼にキスの1つでも欲しいんだけど。
まあ、そんな簡単にキスされても、それはそれで微妙だしね。

「して港。次の試合はどう見る？」

「ガクトくんが勝つね。1RでKOかギリ貧の2択で」

ガクトくんが負けるもんか。

ジムの王なんて呼ばれてる筋肉オバケだよ？

それだけ時間をかけてきて、体にも恵まれてて。

オマケに喧嘩慣れしてるような奴が、たかが風間に負けるか。

それに、ガクトくんと風間は噛み合ってる。

頑丈でパワーのあるガクトくんと、スピードとトリッキーな動きが武器の風間。

強引に攻めていくだけで、ガクトくに十分な勝機がある。

体ってのは、それだけ重要な要素なんだよ。

嘘だっと思うなら、ヘヴィ級プロレスラーと喧嘩してみろってんだ。

「まあ、妥当じゃろうな」

そういうところは不死川も理解してる。

体格に恵まれてなかったからこそ、体格の重要性が分かっている。

うん、正しい判断力を持つてるのは、さすが不死川だよな。

その胸に対する認識を改めてくれると、僕としては一層嬉しいんだけど。

「そうですね。風間先輩じゃキツイですよね」

いつの間に帰ってきやがったんだよ、相変わらずタイミング悪いなあ。

スッキリした顔してるけど、全部キツチリ吐いてきたんだろうね。入江が見当たらないけど……どうでもいいや。

と、僕と不死川の間で体を捻じ込むようにしてくる武蔵。

わざと足を広げて間を詰めてやったら、その上に乗ってきやがった。図々しいだけじゃなくて、コイツには恥じらいがないのか。下に履いてるのは、うっすいスパッツなのに。

この感触は……！

『スパッツの下に何も履いてない感触』だ！

じゃなくて！ ええい、落ち着け、動揺するな！

武蔵はアレだ、きつとパンツじゃないから恥ずかしくないんだよ！

とりあえず、武蔵の両脇に手を差し込んで、そのまま持ち上げて僕の左に移動！

案外軽いんだなーとか、そんなことはどうでもイイ！

ふう……あと数秒遅かったら勝負は分からなかった。

実際、心のどこかで惜しいことしたって思ってる自分があるのが怖いわ。

げに恐ろしきはスパッツの魔力よ。

で、武蔵は頬を膨らませて、僕に文句を垂れてきやがる。カワイイことはカワイイけど、だからどうした。

「港先輩……今、私の胸触ろうとしましたよね？」

「オマエさ、さっき吐いたゲロの中に脳ミソ入ってたんじゃないかねえの？」

「ひっどーい！ 女の子に向かってゲロだなんて！」

他にツッコむところはいくらでもあると思うんだけど、そこは置いていて。

よく見ると武蔵の奴、焦点合っていないなあ。

やっぱりコイツ、心の大事なところが参ってるわ。さっきの田村だかの骨折りのせいで、結構きちやっただろうなあ。なんとか怖いのも誤魔化そうとして、頭ん中が変なことになってやがる。

そんなにビビんなくても、川神は打撃主体だろうに。

まあ、そういう問題でもないんだろうけど、とりあえずそういう「い」とにしておいて。

いちいち気にしてたら、胃袋擦り切れちゃうぞ。

「港、少し場所を代わってくれんか」

とは不死川の言。

「あいよ」

不死川がそういうなら、いくらでも変わるさ。

どっちにしたって、僕が不死川の隣って事実には変わりはないんだし。なんか冷たい目えしてるけど、そんなに武蔵の動揺具合が気に入らないのか。

まず僕が立って、元々僕がいた場所に不死川が座り直して。

僕は、不死川の温もりを楽しみつつベンチに座った。

……最近、こういうラッキーが続いてるけど、大丈夫なんだろうか。隕石がピンポイントで当たって死んだりしないか、ちよつと心配になってきたぞ。

879

「武蔵」

「まあ、不死川先輩まで私の胸ぶっ！」

こう、なんつーんだろ。

なんか破裂したんじゃないかってくらいデカイ音がした。

『パチン！』とかカワイイ音じゃなくて『ズバン！』って感じの。ビククリして左を見たところで、僕にもようやく合点がいったよ。

不死川が、武蔵の顔にスナップ利かせてビンタかましてた。

どっかのプロレスラーがやる闘魂注入みたい。

武蔵、なんかベンチにもたれ掛っちゃってるし。
あんまりキレイに入ったもんだから、体に力入らないんだね。

「落ち着け、武蔵」

「ちょ……ちょっと不死川先輩！　なんでいきなりビンタしてるんですか！？」

私、この後試合なんですよ！　どうして試合前にダメージ与えるんですか！？」

まあ、確かに道理だとは思うけど、文句言つなよ武蔵。

あんな舞い上がった状態で戦ったら、つまらん試合になるとこだったぞ。

特に、テクニクで戦うタイプなんだから、精神状態は重要だろ。スナイパー空手なんて、かなり特殊な技術を使おうってんだから。

「とりあえず、次の試合見とこうか。」

風間ファミリー同士の潰し合いなんて、なかなか見られないからね」

なんて、2人の間に割り込んで、武蔵に冷静になってもらおうと思っただ僕。

そういう意図とは別に、試合自体は面白いだろうしね。

潰し合いなんて大仰なもんじゃないけど、色んな意味で楽しみ。ガクトくんの話じゃ、風間とは古い付き合いらしいじゃないか。

そういう連中が傷つけあって勝敗を決めるっただけで、もうワクワクしてきちゃうよ。

「武蔵もさ、少しは落ち着こうね」

なんて言ってみたけど、返事がない。

なんとかベンチに座り直して、リングに体を向けちゃってる。

つたく、先輩が声掛けたんだから、なんか言えっつてんだよ。

まあ、落ち着いたんだったら結構な話だけだね。

ほら、もう試合が始まる。

「始めっ！」

また、同じようにルー先生の合図で試合開始。

その合図の直後。

先に仕掛けたのは、どっちだったっけか？

どっちも構えなんて取らないで、いきなりリング中央に躍り出た。

ほとんど同時のタイミングで、2人の攻撃が繰り出される。風間の跳び蹴りと、ガクトくんのナツクルアロー。直撃は完全に同時……風間が若干早かった。

上手く着地できずに尻から落ちて、歯噛みする風間。胸に蹴りをもらいながらも、揺るがずに笑みを浮かべるガクトくん。ただそれだけのことで、会場は必要以上に沸いている。つたく、ギャーギャーとウルセエんだよ、こんな程度のことです。

どっちも大したダメージは無いでしょ。ガクトくんは肉厚だし、風間に攻撃はクリーンヒットしなかった。見た目は派手だったけど、威力だとかは全くない。

ガクトくんは追い詰めないし、風間もすぐに立つちゃう。強引にでも寝技に行きや、コレでもう勝ちだったろうに。できるだけ派手に勝って、女の子にカツコつきたいってことかなあ。そういう風に考えてると、足元すくわれちゃうかもね。

「やっぱり強ええな、ガクト！」

「キャップの方は相変わらずだな！」

「って言っても、今のは手加減したんだけどな」

「そいつは奇遇だな。手加減だったら俺様もしてたぜ」

なんて口元に笑みを浮かべながら言う2人。

……なんで盛り上がってんだろ、ギャラリーの皆さんは。

こんなタルい言葉のやり取りしてるくらいなら、とつと殴りかけよ。

まあ、何か作戦があつてやつてるなら別だけどさ。

この2人、そういう搦め手とか使うタイプじゃないんだから。

言葉のやり取り1つ見ても、ショーマンシップな面白さしかないね。

お互い構え直して……風間は跳ね回る。

右へ左へ、ガクトくんを攪乱するみたいに。

それでも、距離を詰めては行かないで、絶対に相手の間合いに入らない。

下手に踏み込んで攻撃されるのを避けてるみたいな動き。

なんとなく、風間っぽくない動きのような。

で、もちろんガクトくんは動き回らない。

キツチリと腰を据えて、右の拳を振りかぶるように構えてる。

空手やボクシングに限らず、こんな風に構える格闘技は存在しない。

存在しないけど、似たような構えは空手にないこともない。

一撃で倒すために、腰を落とし力を溜めて、背中を向けるくらい拳を引き絞る。

その構えで、防御は一切考えられてない。

ただ全力で相手をつく。

それ以外に意味のない、実戦じゃ絶対に使えない突き方がある。

つまり、そういうことなんだろうね。

軽快なステップが、2ケタに入るうって所。

9回目の跳躍で、真っ直ぐガクトくんに向かってった。

跳び蹴り、じゃない。

前宙をしながら、相手の頭に向かって力カトを落とす。

浴びせ蹴りだったっけか、胴回し回転蹴りだったっけか。

本来、近い間合いから奇襲で出すような技を、意表を突いて遠間から。

その蹴りは、風を切ってガクトくんの頭に向かっていった。

「不沈艦ラリアットオオオオオ！」

ただの1発で吹っ飛ばされた。

1分4秒。

ガクトくんは、あと少しってところで、風間を秒殺し損ねた。

風間は横たわって、もう起き上がってこない。

さっきの一撃は、それだけの威力と偶然が重なってたから。

リアットは、肘から手首の間の部分を叩きつける技。

ガクトくんが放ったリアットは、ちょうど風間の股ぐらの近くに当たって。

そこに引つかかったまま、リアットを出した右腕を思いっきり振り回して。

自由落下とガクトくんのパワーが合わさって、風間はマットに叩きつけられた。

同じタイミングだったら、僕は耐えれたかなあ。

まあ僕は、あんな隙の多い技を、あんな距離で出すほどマヌケじゃないか。

「チクシヨオオオオ！ パワーボムで決めるつもりだったのに！」

ガクトくん、それ、風間死ぬから。

死ななくても大怪我するし、受け身できて背中ベロツベロになるから。

なんていうか、ああいう投げ技の危険性理解してるんだろうか……してないだろうなあ。

きっと、普段はプロレス技食らう側だろうし。

自分が耐えられるからって相手も耐えられるとは限らないんだよ、ガクトくん。

あと、風間が負けて騒いでる女の声が鬱陶しい。

どうして、あんな細身の、180cmもない奴が。

190cm近い身長で、筋骨隆々のガクトくんに勝てると思うてんのかね。

変なマンガとかアニメとか、ゲームとかドラマの見過ぎなんじゃないの？

デカくて筋肉多い方が有利に決まってるだろ、タコ。

筋肉が多きゃ馬力があるからスピードも出るし、攻撃の重さも耐久力も違う。

テクニクなんざ大して持ってない風間が、どうやってガクトくんに勝ってるんだよ。

妄想すんのは脳味噌の中だけにしとけてんだ。

『なんでキャップばっか心配されんだよおおおお！』なんて言っ

てるガクトくん。

慰めてあげたいけど、ほら、さっきの不死川の件があるしさ。

さすがに、椎名をボロクソにした奴の仲間となんか話したくないでしよ。

少なくとも、今はね。

さて、じゃあ僕は何ができるかってえと。

次に試合を控えてる、ちよっと酸っぱい匂いのする後輩の応援くらい。

僕もテンション上げてかなきゃいけないし、ここで熱くなるとかなきゃ。

「次、私ですね」

「まあ、順番だからね」

不死川のビンタもらって、なんとか気を持ち直したらしい。

つつても、まだ恐怖がぬぐい切れてるようには見えないんだよなあ。体が強張ってるところからも、緊張してるってのがよく分かる感じ。格闘技やってんだから、折られるくらいは覚悟してて欲しかったんだけど。

まあ、押し付けは良くないよね。

それこそ『自分が耐えられるから相手も耐えられると思っな』ってことでしよ。

「セコンドのマネごとくくらいはしてあげるから、気楽にね」

「川神相手なら十分勝機はある。落ち着いて戦うのじゃ」

どうせ負けるだろうけどね。

それでも、ちつとは頑張つて欲しいからさ。

だってほら、一応はカワイイ後輩なわけだし。

今日はスパツ履いてるから、少しだけ優しくしてやるよ。

「安心してくださいよ、先輩」

おもむろに立ち上がって、そんなことを言う武蔵。

それは、僕に言ったのか、不死川に言ったのか。

もしかして、僕ら両方に言ったのか。

「私、負け戦はしない主義ですから」

とにかく、僕らの後輩は。

僕が考えてるよりは、ずっと肝の据わった奴らしい。

8 話目 『弱いはずがない』 (後書き)

途中のガクトの『キャップは相変わらず』発言ですが。

別に褒めてるわけではなく『相変わらず俺様より弱いな!』の意です。

大した技術もなく体格のある相手に勝とうと思うと、9割方負けるのが現実です。

異論は受け付けます。

もちろん、毎度のごとくですが。

ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘、改善点などなど、誘い受けな発想で積極的に待っております。

9 話目 『The Premium - Girl』

たった一言で、武蔵の雰囲気が変わった。

すっ、と目が細まって、呼吸が静かで深くなってる。

いつもみたいなムスツとした顔は、遠くの敵を力強く見据えてる。少なくとも、リングの上で気を吞まれるってことはないだろうね。実力からして劣ってるのは、どうにも否めないけど。

まあ、勝つか負けるかは、やるまで分からないってことでイイや。

「それで、作戦あるの?」

「無策なわけないじゃないですか」

へえ、なるほど。

それなりに手は考えて来たのか。

どういう手かは、まあ、リング上で見せてもらえばいいよね。

とか思ってたなら、わざわざ武蔵から教えてくれちゃったり。

「とりあえず、全ラウンド使って戦うつもりです」

全ラウンド……合計20分。

ラウンド間のインターバルは、多くても2分あるかないか。

毎日馬鹿みたいにランニングしてる川神なら、問題にならない時間だろうけど。

武蔵が鍛えこんでるとは言え、20分も川神とやりあえるもんかなあ。

そりゃ、20分延々と殴り合うわけじゃないよ。
相手の攻撃が全部当たるわけじゃないし、一方的に殴られるわけでもないし。

頭を使えば、20分は戦えないってほどの時間じゃない。

でもさ、それでも武蔵は不利なんだよね。

スタミナ負けしてる相手に、スタミナ勝負を挑むって……。

いや、でも策があるって言うてたし、どうにかなるのかなあ。

武蔵の手の内が分かりゃ、もうちつとアドバイスもしてやれるんだけど。

「スタミナで負けてると思うんだけど？」

「根性とハツタリで補います」

根性は結構だけど、ハツタリね。

あの川神にハツタリが通用、するか。

なんか、最近のアイツ、元気ない感じだもんなあ。

九鬼に迫られても曖昧に返すだけだったし、調子でも悪いのかも。

どうして調子が悪いのかってのは、まあ、他人だしどうでもいいや。

「よいか、武蔵。最後まで勝負を投げてはならんぞ」

「投げませんよ。負けるために戦うんじゃないんですから」

……そこで不死川にガンくれてどうする。

気合入りすぎだろ、コレ。

試合前だし、テンション上がるのは分かるけどさ。

不死川を睨んだところで、何がどうなるわけでもないだろうに。

「まあ、せいぜい頑張ることじゃな」

「ええ、せいぜい頑張らせていただきます」

散々強気なことを言って置いて、不死川に背を向けて。

オープンフィンガーグローブを付けた拳を、ガツンと突き合わせてよし、と小さく呟いて、武蔵はリングへと向かって行く。

まあ、勝てるかどうかは別としてさ……頑張って戦って欲しいもんだよ。

少しとはいえ、色々教えてやったんだしね。

カァン、と甲高い音。

そういや、ルー先生いなくなっただんだけ。

代わりに審判やってるのは、ウチのヒゲ担任か。

どういう理由でルー先生がいなくなったか知らないけど、それはそれで好都合。

ルー先生よりは、ウチの担任の方が判定は甘いだろうからね。

まあ、その裁量をこの試合で見極めさせてもらおうか。

まあ、イイ歳したオツサンなんかより、リング上の女子高生。

2人とも、なかなか扇情的な服装をしてらっしゃる。

川神は体操服にブルマで、武蔵は空手着の上にスパッツ姿。

僕の前だけでイイから、不死川もこういう服装してくれないかなあ。ココに入学してから1年ちよつと、不死川がブルマ穿いてるの見たことないもんなあ。

……まあ、不死川のブルマ姿は置いといて、試合に集中しよう。

頭から追い出しておかないと、ぜんぜん落ち着かないし。

さて、リングに目を移すと、川神は右手を引いて構えてる。

左掌を前に突きだして相手を牽制しながら、肩幅に両足を開いて。

その両足を前後に大股1歩分開くと、アゴを引いて相手を睨む。

連打に優れてるかはともかく、先手を取るには有効そう。

で、武蔵なんだけど……なんで？

どうして、そんな構えを？

スナイパー空手でも、伝統派空手でも、柔道でもない。

僕と同じ、フルコンタクト空手の構えなんだ？

ああ、そっか。

コレが1つ目のハッターか。

確かに、川神は動揺して足を止めた。

フルコンの構えにも色々あるけど、僕と全く同じような構えなんだ。僕と仲が悪くないことも知ってるだろうし、なら、警戒するに決まってる。

港三千尋が、武蔵小杉に入れ知恵したんじゃないかって……ああ、そういうことか。

怖いよな、重かったローキックは。

嫌だよな、マウントポジション取られるのは。

見ちゃったもんな、ガクトくんが負けるのを。

防げなかったもんな、風間が目の前で倒されるのを。

それでもって、知ってるもんな。

武蔵小杉が、決して弱い相手じゃないって分かってるもんな。格下に負けるかもしれないって思ったら、警戒するよな。

しかし、この様子だとすぐには進まないよなあ。

さて、この試合、どうなることやら。

……武蔵の思惑通りに事が運んでりゃいいんだけど。

3分と、40秒くらい経った。

観客の連中から、結構な量のブーイングが飛び始めて久しい。たった1分攻防がなかったからって、早くしろだのなんだのと。そっからずっと、罵詈雑言が膨れ上がり続けている。

今のこの2人が、どれだけ緊張した空間にいるのか。それが分かってりゃ、黙って静かに見てられるのに。

さっきから、間合いを詰めては外しての繰り返しをしてる。あと半歩踏み込むだけで、どちらかの攻撃が始まってしまう。そういう間合い入るうかというところで、どちらからともなく距離を開く。

見えないガラス玉があって、そこに触れたら少し離れる。そんな遊びがあれば、これはそういう動きになるんじゃないだろうか。

僕も不死川も、口から何の言葉も出てこない。リング上の緊張と、重なる驚愕が口を開かせない。

なんで、未だに川神は攻められないのか？
なんで、未だに武蔵は攻めていかないのか？
どうしてココまで、2人の実力が離れていないように見えるのか？

……まあ、状況が変わらないからアドバイスをさせないってのもあるんだけど。

4分が経って、残りは40秒になろうかところ。

そのタイミングで、武蔵が前に出た。

早く踏み込まず、急いで前に出ようとせず。

まるで、散歩でもするかのような調子で。

ギリギリまで満たされた器から、水が優しく零れる様に。
つつ、と前に出た。

縮地、じゃない。

間合いは同じだけど、出鼻が見え過ぎてる。

いや、出鼻が見えてるからこそ、川神は反応できないのか。

川神に十分な隙なんてなくて、先手を取るのには難しい状況。そこで、自分から心の隙を作り出して、そこを突いた。

もし武蔵が素早く踏み込んできたなら、多分、カウンターが入った。

遅過ぎたとしても、手を出すまでもなく畳み掛けられたかもしれない。

そんな状態で、これ以上はない絶妙なタイミングで武蔵は踏み込んだ。

……案外上手じゃんよ、こつこつなの。

まあ、その甲斐あつて。

武蔵と川神の一撃目は、ようやく五分のタイミングで当たった。

武蔵の左ストレートと、川神の左のミドル。

当たったのは同時だけど、川神のミドルがやや遅れた……かな？

ただ、本当にそれくらいタイミングで、こんなの1つで有利不利もない。

倒すためじゃなくて、次の攻撃に繋げるための攻撃なんだから。

最初の一撃目の直後。

突きと蹴りの嵐が、2人の間に巻き起こった。

牽制やフェイントなんて1つもない。

持ってる技術をフルに使って、ただ全力で殴り、全力で蹴る。

武蔵の拳が1つ当たれば、川神の蹴りが1つ返ってくる。顔を狙った川神の回し蹴りが空を切るも、武蔵の肘打ちもカスリさえしない。

拮抗を崩すべく放たれた膝蹴りを受け、川神がすぐさま連打を浴びせる。

猛攻にも武蔵は下がらず、同じように連打を返す。

一見すれば、イイ勝負をしてるように見えるんだけど……押される。

武蔵が1つ突く間に、川神の拳が2つ当たるようになる。

それが3つ、4つと増えて、ついには武蔵の手が出なくなった。

ひたすら打たれる、それだけ。

残り10秒くらいで、武蔵はサンドバッグに早変わり。

幸いなのは、川神が全力で打ち込んでこないこと。

武蔵が奥の手を隠してると思って、思い切って打ち込めないこと。

こうまでハツタリが利くと、僕も使いたくなっちゃうなあ。

武蔵の膝が笑い始めたところで、ようやく1R終了のゴングが鳴った。

まあ、ほっといてもジリ貧だろうからさ。
不死川と一緒に、武蔵が腰かけてるコーナーまで茶化しに行った。
いやあ、僕らってイイ先輩だね。

「おい、生きてる？」

「死んでます」

パイプイスに背を預けながら、荒い呼吸を繰り返す武蔵。
肩で息してるけど、悪態つけるなら余裕があるってことだ。
嘘でも余裕を見せられる内は、まだまだ戦える証拠って言うしね。

そついや、聞いておきたいことがあったんだ。
戦略とか戦術もそうだけど、それ以前の問題の話で。

「あのさ、なんでスナイパー空手使わないの？」

うん、1回も使わなかったんだよね、コイツ。

そりゃさ、技を使うかどうかなんて個人の自由だよ？

だけど、アレだけのやり取りが合って、1度も使わないってのは不自然じゃないかなあ。

ほら、乱打戦になる前の踏み込み。

あのタイミングでなら、少なくとも1回は使えたんだし。

それをわざわざ使わずにおいた理由ってのは、僕も知っておきたい。

「まだ使うときじゃないんです」

「まだって、いつ使うつもり？」

「最後のラウンドまで温存するつもりですよ」

この状態で最終ラウンドまで戦えるのかなあ。

まあ、武蔵の作戦だから自由にやってくれていいけどさ。

僕が思うに、このラウンドは打ち合うべきじゃなかったんだけどね。せつかく向こうが悩んでくれてたんだから、無理することは無かったんだし。

どうせ次のラウンドには、直江らの茶々が入って気を持ち直してくるんだから。

それに、ただでさえ体力で負けてるのに、さつき武蔵は吐いちゃった。

吐くってのは、それだけで内臓や精神に大きな負担がある。

あとさ、胃液の匂いが鼻に抜けるのが、えらい気分悪いんだよね。

総合面からみて、スタミナは絶対に落ちてるはず。

ただ、そこについては不死川が聞いてくれた。

つていうか、不死川も武蔵のことが心配なんだね。

さすが不死川、生意気な後輩に対しても心が広い。

「持つのか？ それだけ息が上がっておるのに」

「持たせるんですよ」

うーん………どうから自信が湧いてくるんだろ？

息は整ってきたけど、体に受けたダメージが抜けたわけじゃない。顔にこそもらってないけど、最後の方は撃たれ放題だったしね。

で、あんまり話しかけても疲れるだろうから、適当に切り上げてきて。

帰り際に川神をチラッと見たんだけどさ。

川神の奴は、かなり余裕がある感じだった。

イスに座って大きく深呼吸して、僕らが武蔵から離れるときには息が整ってる。

まあ、当然だよな。

川神の方が、地力は強いんだから。

あんな風に真正面から打ち合えば、武蔵にゃ勝ち目は無い。

最後の最後だって、あと10秒あったらダウンしてたろうし。

武蔵の奴、最終ラウンドまで立ってられるのかなあ？

9 話目『The Premium-Girl』（後書き）

川神ランキング特別試合で、初めてラウンドを跨ぎました。
意外と難しいです。

ご意見、ご感想、ご指摘等々、
厳しめの意見も含めましてお待ちしております。
ております。

幕間『最強のポジション』（前書き）

武蔵視点です

幕間『最強のポジション』

大丈夫。

まだやれる。

私は、まだ戦える。

大きいダメージは、レバーと左足だけ。

死ぬほど苦しいけど、死んでない。

左足は感覚があるし、踏み込んで力も抜けない。

あと2つだけ試すんだったら、十分すぎる余力。

なんだ。

私って、やっぱり結構強かったんだ。

川神先輩の攻撃をアレだけ受けて、まだ余裕があるんだから。

こんなことなら、もう少し早く打ち合ってもよかったかも知れない。

それは違う。

アレが、私に許されたギリギリの時間だった。

もし10秒……5秒時間が長かったら、私は1つダウンを取られてた。

最悪、審判がTKOにして、試合を止めちゃうかもしれなかった。

私立ってたから、アレだけ一方的でも試合が止まらなかったんだ。

大丈夫。

このラウンドは、タップリ3分は休ませてもらう。

いや、チャンスがあったら勝ちに行こう。

負けるために戦ってるわけじゃないんだから。



インターバル終了の放送が流れる。

あ、コレって、報道部の人が言ってくれるんだ。

『インターバル終了です。選手はコーナーから立ち上がって準備を
く』って。

……ちょっとだけ、ボーっとしてたかも。

パイプイスから立ち上がって、また同じように構える。

フルコンタクト空手……港先輩をマネした構え。

両拳でアゴを守って、軽く前後に足を開いて。

足の幅は肩幅くらいで、重心は両足に均等に。そうすることで、いつでもオーソドックスにもサウスポーにも変えられる。

川神先輩。

せいぜいビビって混乱して、私を舐めてかかってください。私の構えがハツタリだって気付いて、早く攻め立ててきてください。ダウン一つと交換でイイですから。

なんて考えてるうちに、ゴングが鳴った。

私は、さっきと同じことをする。

ゆったりとした動きで間合いを詰める。

ゆっくりじゃなくて、ゆったりと。

右構えと左構えを変えながら、擦り足に近い感じで距離を詰める。

さっきと違うのは、お互いコーナーにいる状態からやったこと。

川神先輩が、コレの対処法に気付いてるってこと。

私が、失敗するためにコレを使ったってこと。

ほら、川神先輩から詰めて来た。

予想通り、私に駆け寄ってくる。

それでイイんです。

この技は、相手が止まっていなと虚を突けないんです。

それに、相手に心の隙がないと、相手を騙し切れないんです。さらに言つと、十分な威力の蹴りが出せないんです。

相手に気合が乗つてて、相手が警戒してて、踏み出してから即攻撃ができない。

そういう条件で成功するような技じゃないんです。

川神先輩が、私が3歩目を踏む寸前に蹴りを入れて来た。苦しいけど、わたしのよそう通り。

わたしの右すとれーとに合わせて、さいごのたいみんぐで。せんぱいのけりは、私のればーを強くうって。

にぶいいたみがわたしのいしきをうばうくらいいたい。

いつのまにか、じめんとくつついてた。

じめんが、ぶつかってきた。

ちがう、倒れたんだ。

どうやって？

そうだ、ればーだ。

レバーに痛みがはしったちよくごに、顔になにかぶつかった。右の頬がいたいから、左のパンチ？

川神先輩も、案外ようしゃしない人みたい。

いくら女同士だからって、女の子の顔にパンチ入れるなんて。

これで布石は十分だけどね。

カウントは、今、6。

ギリギリで立ち上がったフリをして、カウント8で構え直す。歓声が鬱陶しいけど、あんまり聞こえないからどうでもイイ。頭が痛い、視界が揺れる……脳震盪か。これくらいなら、全然戦える。

えっと、誰だっけ？

そう、この人は審判のヒゲ先生。

飄々とした様子で、私に大丈夫か聞いてくる。

「大丈夫です」

なんか肩を叩かれたけど、それは多分OKってこと。

よし、まだ戦わせてくれる。

変にダメージが体に残ったけど、大丈夫。

私が試したいことが、ようやく試せるんだ。

それまでは、もう少しだけ頑張らなきゃ。

「続行！」

煙草吸ってる不健康な大人の割に、思ったより大きい声。
どうでもいいけど。

種は蒔まいた。

あとは、刈り取るだけ。

最初の種は、私のハツタリ。

フルコンタクト空手の構え。

これで、私と港先輩が繋がってるっていうのを強調した。

川神先輩の中で、港先輩の存在が大きくなる。

ブラジリアン柔術とフルコンタクト空手が、無視できない存在になる。

ただ、それだとダメ。

それを補強するのが、さっきのラウンドと今の打ち合い。

川神先輩の中で、ある確信が生まれてしまう。

武蔵小杉は、港三千尋から寝技を習ってはいないって。

何度かタツクルできる隙はあったけど、わざと打ち続けた。

実際、川神先輩もタツクルを警戒してたし、ホントに作戦通りになった。

さらに、パンフレットにも仕込みをした。

いや、パンフレットじゃなくて、そのコメントね。

わざわざ『スナイパー空手』を強調するように頼んで正解だった。

お陰で、川神先輩の意識が、間違いなくスナイパー空手に集中する。

最後の種は、川神先輩の経験の多さ。

経験が多いから、あの人は理解できている。

格闘技に限らず、アマチュアの世界ではよくあるんだけど。

あるシチュエーションで一度成功すると、同じ状況で同じことを繰り返してしまう。

成功の体験で味をしめて、同じ行動をとってしまう。

それに漏れず、さっき川神先輩は、出会い頭に左ミドルを出してきた。

だから、川神先輩の攻撃の中で、1つだけ必ず出てこないものが生まれる。

同じ行動を取らないように、左の蹴りそのものを使わないように意識してしまう。

少しだけ距離を詰めてから、また私は同じ歩法を使った、フリをした。

真価を発揮する間合いよりも、さらに2歩遠くから。

川神先輩の攻撃は見ない。

ただ私は、攻撃の気配に合わせて、右に少しずれる。

そこから素早く重心を下げて、左半身に胴タツクルを決めて。

川神先輩の左足に、私の足を絡めて転ばせて。

川神先輩から、マウントポジションをとった。

そこから、1発、2発、3発、4発、5発。

オープンフィンガーグローブをはめた拳で、殴りつける。

当たったのは4発目だけで、クリーンヒットは1発も無い。

でも、ここからは私の独壇場だ。

ここからは、私の拳だけが当たり続ける。

「コレが私の奥の手です」

原点回帰、ちょっと調子に乗ってみた。

私の本当の奥の手の、タツクルからのマウント。どうせ勝てないから、もし勝てるならコレしかないから。だから、私はマウントをずっと狙ってた。

マウントポジションは、1対1なら最強のポジション。

港先輩は、私と不死川先輩に教えてくれた。

下からだど、肩がつかえてパンチが届かないし、届いても威力がない。

上にいけば一方的に殴れるし、相手から攻撃も受けない。

マウントを返す方法も無いことないし、下から掛けれる技もある。

ただ、相手は、川神流を長年学んできた川神先輩。

そして、武術である川神流には、長時間の寝技を想定した技巧は無い。

もしコレで勝てなかったら……本当にスナイパー空手に頼るようになる。

使ったところで、勝てないのに変わりはないけど。

あ、川神先輩の顔に血が落ちた。

鼻血、出てたんだ。

でも、鼻血くらいなら、いくらでも出して上げますよ。

その代わり、勝ちは私がもらいます。

幕間『最強のポジション』（後書き）

武蔵小杉の奥の手はマウントポジションでした。

え、1日しか練習してないと思われるかもしれませんが、港からマウントポジションとタツクルのコツを教わって以来、試合までの時間を使って練習していました。

もちろん、ザクロ兄さんと……。

自分で書いてて、なんだか小杉が妹に欲しくなってきましたね。

「あの……お兄ちゃん？ ちょっとマウントの練習させて？」

死ぬまで付き合います。

次で、ようやく武蔵Vサー子戦が終了します。

ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘などなど、辛らつなご意見もありがたく頂戴しておりますので、遠慮なく書いてやってください。

10話目『負けの定義』

爆発みたいなき声だった。

鼓膜が張り裂けそうなくらいの大音声が、俺の耳に突き刺さる。

不死川も同じみたいで、腕の痛みも忘れて耳を抑えてた。

歓声は、武蔵がマウントを取ってから徐々に膨れ上がったモンだ。

武蔵が川神にマウント決めた瞬間は、何が起こったか周りが分かってなかった。

でも、1発2発とパンチを降ろしてく度に、上っ面だけでも理解できたらしい。

川神相手に、馬乗りとはいえ何発も拳を当てられることの意味が。

上手にマウントを取ったと思う。

左ミドルから左ハイって蹴りの連続にも、まあ、よく耐えたと思う。

つか、川神が思ったよりもずっと器用だったのにビックリしたわ。充分にミドル効かせておいて、同じ足のハイで倒すとか。

……いや、なかなか器用なもんだよ。

でもまあ、何が言いたいかってさ。

武蔵はダメージ喰らい過ぎなんだよ。

全身をそこそこ打たれて、レバーとアゴに結構なのを1発ずつ。そりゃ、武蔵だって少しは相手にダメージを与えてたけどよ。

だからって、対等って言えるほど深手を負わせた訳でもない。川神にヒビが入ってるなら、武蔵はもう砕け始めてるくらい。それくらい、目に見えないダメージが溜まってる。

レバーってのは、想像以上の痛みがあるモンだ。

しかも、その痛みは、打撃なのに長時間持続する痛み。

少なくとも、1分やそこらで回復できるほど優しくはない。

まあ、喰らったことある奴は分かるかも知れんけど。

空手の有段者でも転がりまわるくらい痛いんだぜ、アレ。

アゴへの打撃は、脳震盪の原因になる。

アゴを支点にして脳ミソがクルッと回る感じ。

ピンかなんかに豆腐突っ込んでシェイクすると、その豆腐が脳味噌みたいなもん。

あゝ……つまり、グツチャグチャに揺れるんだよ。

それこそ、普通だったら立ってられないくらいには。

よくやったと思うよ。

よく立ったと思うぞ。

何手も敷いて欺いて、川神相手にマウント取ったのも褒めてやりたい。

ただ、武蔵は勝てない。

「ケツ上げる！ 重心前に掛けんな！」

俺の声が、全く聞こえてない。
不死川が、耳に指突っ込むくらいの声を、リング近くで出してんだぜ。

いくらなんでも、聞こえないってことはないはず。
やたらデカい歓声が邪魔だったのもあるが、武蔵が切羽詰まってるんだ。

だから、聞こえてても認識できない。

川神の上にしつかり乗っちゃってる。

パンチをしたくて仕方なくて、前傾姿勢になってる。

何発目かハッキリ分からんパンチを細かく打っちゃいるが、ただ打ってるだけだ。

すぐには返されんだろうけど、川神が冷静になったら間違いなく返される。

マウントパンチ……パウンドってのは、弱いパンチに強いパンチを混ぜるのが基本。

早くて弱いパンチで嫌がらせて、強いパンチで体力を奪ってく。
ただ打ってるだけじゃ、どうやったって相手は倒せない。

しかも、完全に手打ち。

いや、手打ちでもイイんだけど、そんなんで力いっぱい打っても仕方ない。

制限時間あるなら、パンチ刻んで嫌がらせて、関節取ったり首取ったりってのが基本だ。

よっぽど体力がないと、パンチだけで倒すのは難しい。

何より、相手の方が自分より強いなら、ほぼ間違いなく倒し切れない。

半分は俺のミスだな、こりゃ。
まさか、武蔵がマウント取れるなんて思ってなかったもんだから。
マウントを取った後の攻防を、アイツに一切教えてなかった。
俺の奥の手だからって教えなかったって言えばそれまでだけど、ち
っと後味は悪い。
体がボロボロでも、ワンチャンスありや勝てたんだ。

ほら、もう息切れしてる。

まだ30発も打ってないのに、馬乗りで息切れしてる。

ココからマウントパンチ以外の手がないようじゃ、もう勝ち目は無
い。

そりゃ『勝ち目がないから諦める』ってのは問題外だけだよ。

諦めなかったから勝てるなんて、そんな甘いこと言える相手でもな
いんだ。

今だって、何発か顔にもらいながらもチャンスを待ってる。

腕と肘でパンチを逸らして……あ、鼻血出た。

チロツつとしたカワイイ程度の鼻血だけど、これで武蔵とアイコ。

汚名返上とまでは言わんにしても、一矢報いたくらいにはなったん
じゃないか？

ほら、空手着の襟取られた。

でもって、いっぺん引きつけてから、左側に引っ張って、ブリッジ
で転がして。

武蔵が川神の胴体を足でロックしちやいるけど、もうダメだ。川神が上を取って、武蔵は下になっちまった。

ガードポジションが取れてても、川神に上を取られた時点で終わりだ。

武蔵には三角締めは使えないし、下からの腕ひしぎも知らない。どうやったって、ココから逆転する術は無い。

今度は、川神の拳だけが当たり続ける。

1発、2発、3発、4発。

全部がまともに当たって、武蔵の足のロックが緩んだ。つてことは、頭にかんりのダメージがあるってことだ。

川神は手を休めずに、5、6、7、8、9、10、11。

リズムカルに拳を叩きつけ、武蔵の戦意と体力を奪っていく

あんだだけテンポが同じだったら対処できそうなもんだが、今の武蔵じゃ無理だ。

もう、首にまで力が入ってない。

そこまでの状態になって、ようやくヒゲがリング上で両手を交差させた。

その間にも3発のパンチが入れられて、無防備に武蔵が打たれてく。

で、ゴングの音が鳴り響いて、試合が中断され……なかった。音が聞こえてないのか、川神が武蔵を殴り続けてやがる。

ガードできんぐらいに武蔵が朦朧としてんに、全然お構いナシ。ヒゲが川神を引きはがそうとしてるけど、振り切られそうになる。

あつと、あのタイトスカートの、小島先生だっけ？

その人がリングに上がって川神張り飛ばして、やっと試合が終わった。

……とにかく、武蔵と川神の勝負は終わった。

頭からタオルを掛けて、うなだれるみたいに下を向いて。
氷嚢ひょうのうで顔を冷やししながら、不死川の隣に座ってる。

まあ、さっきまで眼球運動チェックされてた割には元気だよな。自力でリング降りてきて、コッチのベンチにまで来たんだし。あんだけ殴られたら、普通は担架で運ばれて保健室で安静とかなんだけど。

「うーか、俺としちゃ、大事をとってそうして欲しいもんだ。本人が残りたいがってんだから、まあ、勝手にすりゃイイとは思うけどな。」

俺は俺で用事も済ませてきたから、あとは戦うだけだし。気楽に構えて、ゆっくり刻んで倒せばいいさ。

しかし、川神の奴……何焦ってたんだ？

あの体勢になっちまえば、あとは冷静にパンチ落として終わりだろうよ。

自分より体のデカイ奴に、力技掛けようってのが難しいってのも確かだけどさ。

もう動けなくなってる相手に、あそこまで殴りかかるような奴だったか？

考えても仕方ねえか。

次は俺の試合なんだし、集中しねえと。

今の試合がイイ刺激になったってのは、まあ、間違いないんだしな。

「すみません。しつかり負けました」

下向いたままなのは、腫れた顔見せたくないからだってさ。

だから、俺もずっと前を向いて、わざわざ視線も向けないようにしてた。

「まったく、話しにくいっいたらありやしねえ。」

んなもん、別に気にすることじゃねえってのに。

顔面アリで殴り合ってるや、目尻カットして縫ったりもするんだし。マウントパンチもらって腫れたくらいなら、名誉の負傷で済むレベルだろ。

幸い鼻も折れてなかったらしいし、腫れも早く消えるんじゃないか？

……でもまあ、不死川が武蔵の顔見て、俺に『見てやるな』つつつたんだよな。

「つてことは、軽い怪我って言えるような具合でもないってことか。」

男だからか分からんが、まあ、見られたくないんだろうな。

俺に見られたくないのか、男に見られたくないのかは知らんけど。

「川神相手なら善戦じゃ。次は倒してのけるんじゃないぞ」

「まあ、仕方ないだろ。そこそこ惜しかったんじゃないか？」

俺も不死川も、割と本心で言ってるつもりだ。

武蔵と川神を比べたら、まるっと1回りくらい実力が違う。

それでアレだけ戦えて、マウントまで取ったんだからさ。

そりゃまあ、惜しかったし善戦したって話にはなる。

……勝てなかったんだけどな。

「ホント、すいませんでした」

ボソツと言うな、ボソツと。

今さら反省したって、どうにもならねんだから。

慰めて欲しかったら、せめて俺の試合の後にしろってんだ。

……ちっと注意してやらなきゃならんな、コレは。

「で、どうよ？ いいようにやられて悔しかったか？」

「おい港！」

不死川が俺の言葉を遮ろうとするけど、コレだけは聞いておきたい。聞いておきたいっつーか、ココでハッキリさせなきゃならん。

「悔しいですよ」

声の調子は変わらんけど、多分、頭が回ってないだけだろ。

俺の言ってる内容は、ちゃんと聞こえてるはず。

だったら、今はそれでイイ。

後で思い返して、よく考えてくれればイイからな。

ただ、俺は今、武蔵に言っただけじゃならない。

「いいか、武蔵。戦いっただけのは、意識がなくなるまで殴られたら負けか？」

「それは……」

普通はそうだろうよ。

そんな状態になりや審判が止めて、相手の勝ちになっちまうさ。ルールの上で勝った奴が勝ちってのは、まあ、普通だ。

それが当然だし、コイツもそういうつもりで戦ってるのかも知れん。でも、俺は違う。

「じゃあ、腕が折られたら負けか？ 目が抉られたら負けか？ 内臓破裂したら負けか？」

それは、俺の中じゃ負けじゃない。

単に腕が折られるだけだし、単に目が抉られるだけで、内臓が破裂しただけだ。

そういう結果が単純に存在するだけで、それは負けじゃない。本当に負けたって言えるのは、そういうときじゃない。

「人間が本当に負けるってのはな、自分が負けを認めた時だけなんだよ」

俺が自分で手に入れた答えじゃないんだけどな。

それでも、これはもう俺の中の真理になってんだ。

それを誰かに教えてやったからって、師範も文句垂れんだろ。

師範もガスタオンさんも、そういう人たちだった。

腕折られようが、目玉の表面ほじくられようが。

逆に『じゃあコッチも同じことしてやるよ』くらいの顔して、笑ってやがった。

だからまあ、俺の中じゃ、心が折れるまでは負けじゃない。
……由紀江ちゃんの方は負けでいいけどな。

武蔵も不死川も、何も言っていない。

ドン引きされたかも知れんけど、まあ、誤魔化しようもあるからいいや。

『試合前で気持ちが昂ぶってて、よくわからんこと言った』って言えばいいんだ。

「あの、港先輩」

「なんだよ」

「元気付けようとしてくれるのは分かるんですけど、古臭いです」

秀囲気ぶち壊しだよ、オイ。

せっかく！

せっかく俺が、わざわざ気い遣ってやったのに！

ああ、クソ、恥かいた！

こんなことなら、黙ってストレッチでもしときゃよかった！

「テメエは……！ 気付いてんなら素直に頷いとけ！」

「いやいや、確かに今のは古臭かったのじゃ」

不死川まで！

……いや、この流れに乗っとくか。

今の不死川の声の調子は、おどけたような感じだったし。なら、コツチもそれに乗つかればいいだけの話じゃねえか。よくよく考えれば、後輩1人に振り回されるのも癪だしな。

「まあ、面白い考えを聞かせてもらったぞ。日記に書いておいてやるわ」

「それはちよっと傷つくぞ、不死川」

「おお、すまんすまん。つい面白くなって、からかってしまったのじゃ」

「アレですね。私も泣きマネくらいして、港先輩困らせればよかったです」

「っじゃあ！ どうにかなった！」

でも、ちよっと和んじやったわ。

こういう冗談のやり取りを試合前については、どうもな。もうちよっとテンション上げて、狂ったみたいになりたかったんだが。

まあ、こういうのが試合前の空気でも、悪くは無い気がせんでもない。

虚勢かどうか知らんけど、武蔵も多少は気分も落ち着いてきたみたいだし。

よし、もうちよっとふざけてみるか。

「責任取ってくれよ、不死川。お前のせいで後輩にまで舐められちゃったじゃん」

「仕方ない。そこまで傷ついたなら……そうじゃなあ……」

はっはっは。

不死川もノリノリだ。

「もし試合に勝てたら、1つくらい願いを聞き入れてやるぞ。それでチャラじゃな」

「クリスティアーネ、ブツ殺してくる」

最初っから全開で、速攻でブツ殺す。

10 話目『負けの定義』（後書き）

え、武蔵小杉は勝てませんでした。

しかも、今は顔がボコボコの状態です。

……最近、武蔵の扱いを悪くしてしまいがちな気がします。

やや盛り下がった感もあって、ちょっと反省です。

次回ようやく、港VSクリスティーアーネ戦が開始予定になります。

いつものことながら、ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘など、キツツイ1発も含めてお待ちしております。

幕間『勝たなきや』（前書き）

試合後、一子視点です。

幕間『勝たなきや』

勝たなきや。

もし勝てなかったら、全部ウソだ。

今までの私は、何もかもがウソになる。

でも、負けたら本当にダメになったのかを、私は知らない。だって、こうやって勝つことができたから。

マウントポジションを取られて、ちよつと危なかったけど。それでも、勝つことができたから。

「おい……大丈夫か？」

下を向いたままベンチに座ってる私に、クリが優しく声をかけてくれる。

普段じゃ考えられないけど、私は何も返せない。

武蔵さんって言う、入学したときから頑張ってた1年生の子。その子に負けるって思って、私は必死になった。

なんとかマウントを返して上を取って、何回か殴って。

そこから、よく覚えてない。

気がついたら、小島先生に肩を掴まれてた。

妙にヒリヒリする頬は、ビンタされたから。

なんか、武蔵さんが動かなくなっても殴ってたんだって。

ちよつとおかしいよね、私。

でも、勝った。

私は勝って、夢をつなぐことができた。

川神ラビリンスが終わって、その日の夜。

私は、珍しくおじいちゃんに呼び出された。

私はバカだけど、察しはついてた。

今日負けて、おじいちゃんに呼び出される。

何の話をするかくらいは、私だって分かる。

何を言われるかは分からないけど、武術の話なのは間違いない。

私が呼び出されたのは、居間じゃなくて応接間。

おじいちゃんが大事な話をするときは、いつもココ。

昔、お姉さまにお説教したときに、暴れてボロボロになっちゃったことがあって。

もう直したんだけど、何度も壊されたら堪らないからって、応接間でお説教するようになった。

もちろん、お説教だけじゃない。

悩みを聞いてくれるときも、決まってココだった。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

おじいちゃんは、正座をして座布団に座ってて。

私は、左足が曲げれないから、両足を伸ばして座ってる。

お行儀が悪いけど、座布団を2つに折って、そこに座って負担を減らした。

とてもじゃないけど、そうしないと痛くて座れなかったから。

「のお、一子。怪我の方は大丈夫か？」

怪我。

怪我ってほどでもない怪我。

骨も折れてないし、ちよつと筋を痛めただけ。

3日もすれば、充分に感知する怪我。

鋭くて重たいローキックだった。

蹴りをもらったところから、足がなくなった。

一瞬、本当にそう思った。

今だって、応接間までは足を引きずりながら移動してきた。

それくらい、笑っちゃうくらい強いローキックだった。

私の『地の剣』なんて、比べ物にならないくらい。

「うん」

「そうか、なら良かった」

おじいちゃんはそう言って、黙る。

こういうのもなんだけど、おじいちゃんはお喋りだ。

朝礼の時も話は長いし、ご飯のときもよく話す。

静かなのは、修行と戦う時くらい。

だから、今おじいちゃんが黙るのは変。

何か、私に大切な話が合ったんじゃないの？

今日のこと、何か大切な話か。

そう思うと、私は黙ってられなかった。

「あの、おじいちゃん？」

「……おお、急に呼び出して済まんかったな。話はそれだけじゃ」

おじいちゃんは、嘘をついてる。

どうやって分かつとかじゃなくて……勘だけど。
私の勘は、こんなときにも当たっちゃった。

「ウソでしょ？」

聞かなきゃよかった。

おじいちゃんが、私のためを思って誤魔化そうとしてくれたのに。
私は、気付かなくて良いことに気付いた。

「私に言いにくいことだから……だから黙ってるんじゃないの!？」

私が怒鳴りながら口になると、おじいちゃんが目を閉じた。

『どうしたものか』なんて口にしそうなの、そんな顔で。

――
――
――
――
――
――
――

しばらくして。

渋い顔で、おじいちゃんは私に呟いた。

まだ、そのことを私に言うのを躊躇ってるみたいだ。

おじいちゃんにしては、本当に小さな声で。

「一子、僕は悩んでおる。

お前に武術を続けさせるべきか、それとも……別の道を選ばせるべきか」

やっぱり、そういうことだった。

そういう話をするために、おじいちゃんは私を呼んだ。

でも、私が傷つくと思っただから、考え直して誤魔化そうとした。それが、とても悔しかった。

「私に、才能がないから？」

思わず、聞いちゃった。

自分に才能があるかどうかなんて、分かりきってるのに。

武術の才能なんて、私にあるはずないじゃない。

もし才能があったら、もっともつと強くなってなきゃオカシイもの。

お姉さまと同じように鍛錬して、それでも弱いのは仕方ない。

2年だけって言っても、私の方が年下だし。

それに、修行を始めたのは、お姉さまの方がずっと早かった。

だから何？

私だって、必死に努力してきた。

才能があるとかないとか、そんなことは忘れたくて。

体の限界を超える鍛錬だって、何度も何度も乗り越えてきた。

それでも私は、この程度なんだ。

クリに負けて、不死川さんに負けて、港くんに負けて。

きつとマルにも勝てないし、まゆっちにだって敵わない。

「不死川じゃが、決して勝てぬ相手ではなかった」

2 - S の、不死川さん。

F組のみんなを、よく馬鹿にしてた人。

いつからか、F組の相手さえしなくなった人。

いつの間にか、見違えるほど強くなった人。

私が勝てない相手じゃないっていうのは、嘘。

アレだけ遊ばれてて、勝てるなんて思えない。

『本気で来い』なんて言われたけど……私のことを過大評価してくれてた。

あの時の私は、最初から加減なんてしてなかったのに。

「港は……少なくとも、今のままでは敵う相手ではない」

無道会館の、港三千尋くん。

まゆっちに何回も負けてるけど、1度だって逃げない人。

毎日努力を積み重ねて、少しずつでも着実に強くなってる人。才能の差を見せつけられても、それでも努力できる人。

港くんには勝ち目がないっていうのは、本当。

スピードは勝ってるけど、他に私が勝てそうなところがない。

パワー、リーチ、打たれ強さ、技術、戦いの運び方、したたかさ。

我慢強さには自信があるけど、それも負けてると思う。

私は舐めてた。

F組のみんなを見下す2・Sの人だから、私たちを舐めてる。

私より強くても、心の部分じゃ絶対に負けない。

そうやって、2人を侮ってた。

だから負けた。

そういう訳でもない。

もし、私が最初から真剣だったとして、不死川さんに勝てなかった。

充分に戦える条件が整ってても、港くんには勝てなかった。

どうい言う言い訳もできないくらい、2人とも強かった。

それが、悔しくない。

心のどこかで、私は負けても仕方なかったって諦めてる。

負けちゃいけないのに、次は勝てるように頑張らなきゃいけないのに。

なのに、頑張っても無駄だって、頭のどこかから声が聞こえてくる。

その声が、怖い。

私に、本当のことを突きつけてくるから。

お前は、才能がない。

お前は、始めるのが遅かった。

お前は、川神百代には追いつけない。

お前は、もうこれ以上は強くなれない。

お前は、絶対に川神院の師範代にはなれない。

私が目を逸らして、聞かないようにしてきた言葉。

そう言う言葉を、容赦なく私にぶつけてくるから。

みんなが黙っていてくれた言葉を、私に伝えてくるから。

私は聞きたくなかった。

でも、聞いちゃった。

私に才能がないって事実を、確認しちゃった。

おじいちゃんの口から聞かなきゃ、もうちょっとだけ夢を見れたのに。

「一子。お前に才能がないとは言わん。

ただ、川神院の師範代を目指すには足りんのじゃ」

分かったた。

言われなくなつて、ずっと分かつた。

だから、誰よりも努力してきた。

ダメなのは分かってる。

無駄かもしれないのも気付いてる。

それでも私は……私はもう、止まらない。

才能がなくなつて、そんなのは関係ない。

努力して努力して努力して、才能の差なんて超えて見せる。

そう決心したんだから、私は止まらない。

おじいちゃんは、溜め息を1つ。

私が諦めないのを分かって、それで1つの提案をしてくれた。才能のない私が、夢を追い続けられる最後のチャンスくれた。

「これから3年になるまで、ただの1度も負けてはならん。

もしこれを果たさせたのならば、お前のやりたいようにしなさい」

その約束を呑んだ。

私はまだ、諦められないから。

勝ったから、まだ夢を見ていられる。

でも、それは本当に正しいの？

私が武術を続けるのは、本当に正しいの？

京が病院に運ばれて、大和も凄く動揺してたのに。

それでも自分のことしか考えられない私が、本当に続けていいの？

私は今、それが分からない。

強いだけが武術じゃないのに、強さにすがろうとしてる。

そんな私が武術を続けるのは、本当に正しいのか分からない。

私が落ち込んで動けなくても、周りは動き続けてる。

その証拠に、私の耳に放送部のアナウンスが届いた。

最初は無視しよう思ったけど、そうはいかない。

耳に入った『最終戦』って言葉は、無視しようと思っても無理だった。

「え、最終戦ですが、港選手からルール変更の打診がありました。港選手がクリスティアーネ選手と8位以上の差があるため、これを受理します！」

ルールの変更。

港くんが有利になるルール。

あの港くんが、いったいどういう風に試合を運びたかったのか。

それが知りたくて、下を向いたまま、耳だけに意識を集中させた。

「脊椎と金的と喉への攻撃の許可。

グラウンド状態での膝を用いた攻撃の制限の解禁。

オープンフィンガーグローブの着用義務の撤廃、ブーツ類の着用の許可。

4点ポジションからの頭部への蹴りの許可、膝に対する攻撃の一切の許可」

これはもう、武術でも試合でもない。

ほとんど殺し合いと変わらないルール。

そんなルールで試合が成立するはずがない。

川神院でだって、こんなに危険な戦いは滅多にさせないのに。

それでもアナウンスがあるってことは、このルールが認められたんだ。

単純にそう考えていた私は、本当に甘かった。

クリが危ないくらいにしか思ってた私は、甘かった。

「金的攻撃や目潰しを受けるのは、港選手です！
さきほどのルール変更は、港選手への一連の攻撃が認められると
いう変更です！
クリスティアアーネ選手だけが、金的や目潰しをしても許されると
いう変更です！」

港くんは、どこにいるんだろう？

私が見ている先と、港くんが進んでいる道。

私も港くんも武術を学んでるのに、同じ道を歩いてない気がする。
選んだ道も、たどり着く場所も。

私と港くんじゃ、全然違う気がする。

「いつでも死ねるから、いつでも殺せる」

港くんはそう言ってたけど、私は違う。

勝ちたいけど、殺されたくも殺したくもない。

誰かが死んじやったりするのは嫌だし、一方的に傷つけるのも好き
じゃない。

いつでも死ねる覚悟もないし、いつでも殺せる覚悟もない。

でも、勝てるなら。

それで勝てるとしたら、私はどうするんだろう？

きつと、武蔵さんを殴り続けた時みたいに、私は……。

そういうことを考えてると、また、あの声が聞こえた。
いつもみたいな責める調子じゃなくて、嬉しそうな声が聞こえた。
『それでいいのよ』って、たった一言だけ聞こえた。

勝たなきゃ。

もし勝てなかったら、全部ウソだ。

今までの私は、何もかもがウソになる。

だから、勝てばいいんだ。

私は、勝ち続けなきゃいけないから。

何をしても、勝ち残ってみせる。

幕間『勝たなきや』（後書き）

ダーク 一子などと呼んでやらないでください。

全ての人間が、壁にぶつかって乗り越えられるわけではないのです。努力をしたから、諦めなかったから。

いざ負けて大切なものを失った時、そんなことは慰めになりません。例え汚い手でも、勝って栄光を手に入れられるなら。

そう思うのは、仕方がないことだと思っただけでください。

それと、書き方が悪く良い表現も思い浮かばなかったのでコチラでフォローさせていただきます。

ルール変更は、全てクリス有利になるようなものです。

相手の金的を蹴ってイイのも、倒れた相手に蹴りを入れていいのも、目潰しをしていいのも、クリスがやってイイという話です。

決して『クリスに対してそういう危険な攻撃をしていい』という話ではありません。

しみつたれた話になりましたが。

ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘や改善点、厳しい御意見も随時承っております。

891 / 183 Hit 記念作品 『僕にとっての榊原』（前書き）

この話は、敢えて言うならR-17くらいです。

港くんの健全なる高校生の視点から、体育の時間に小雪を見てるだけの話です。

ただ、必要以上に表現技法に力を入れているため、本編の彼とは全く違う形に出来上がってしまいました。

また、ストーリーに一切関係なく、ストーリー性もありません。

冗談抜きで、ほとんど小雪を眺めるだけで終わっています。

もし気に障ったら、勘弁してください。

ムシャクシャしてやった。

ちよっとしか後悔してない。

榊原小雪。

まあ、最近名前を覚えたクラスメイトだ。
今年の5月……ガクトくんと決闘があるまでは、ちょっとあやふやだった。

というのも、僕の興味が榊原小雪って個人には無かったからで。
彼女個人よりも、彼女の構成要素であるところの瑣末なことに気が向いたからだ。

当然、僕の恋心が揺るいだわけじゃない。
単なる好奇心と興味から来る感情は、恋心とは完全に別物と断言できる。

これは、恋のような甘酸っぱい感覚の類じゃない。
もっとドロドロとした……そう、性的欲求に起因する感情に相違ない。

それで、榊原の何が気になるかって言うと。

まず、スク水や体操服の地を押し上げる、実にけしからん2つの膨らみ。

貧乳派の僕の心をも驚掴みにした、Sクラスにとって唯一無二の最終兵器。

重力に容易に屈することなく、且つ、その膨らみは絶妙な柔らかかさ

をキープしている。
それを確認した僕は、巨乳派の皆さんと和解してきたくらいには感動を覚えた。

そして、ブルマから覗く瑞々しい太もも。

太ももに關しても人並み以上のこだわりがある僕に言わせれば、あれは理想郷だ。

しなやかで機能的なだけでなく、十分な弾力と健康美を兼ね備えている。

キメ細やかな肌も相まって、頬ずりしたい誘惑に駆られたことも数知れない。

童帝様から入手した『お得意様カタログ』が大いに役に立ったのも記憶に新しい。

あのカタログの中から、榊原のキワドイ写真を片っ端から注文したのもイイ思い出だ。

正直言ってしまうえば、アレくらいスタイルの奴は他にもいる。

川神百代なんかはイイ例だし、2-Fの椎名もイイ線行ってる。

ただ、この2人には隙がなくて、使えそうな写真が一向に手に入らない。

加えて、榊原のシミ1つないキレイな肌と、幻想的で幼げな雰囲気。こういったところが、けしからん風に発育した体とミスマッチしてて妙にそそる。

そして、葵たちが知っているかどうかは知らないけど。

榊原の奴は、ブラジャーをしないで体育の授業に参加していることが多い。

汗を掻いて蒸れるのを嫌がってるのか、単に動き辛いからか。

まあ、その胸の動きと自己主張する突起から、ブラジャーをしていないのは間違いない。
どうして女子が注意してやらないのか知らないけど、僕は得してるからそのままでもいいと思う。

体操服が汗で透ける写真が手に入るのも、時間の問題だろう。
というか、既に2枚持ってんだけど……これは僕と童帝様の秘密。
童帝様に一番出資してる僕だからこそ、こういう写真を分けてくれる。

相互依存の関係は、相互刺激の代表格である友人と同じくらい重要だと実感できるというものだ。

童帝様については、まあ、今後詳しく説明する機会もあるだろう。
今は彼より、同盟を組んでいるメンバーに触れておこう。
じゃないと、うち1人は2度と名前が拳がらないかもしれないし。

2年F組、島津ガクトくん。

2年B組、ブンカート・チョーワイクン。

この2人に童帝様を合わせて、4人で同盟を組んでいる。

まあ、別に大きな意味ってほどの意味は無い。

基本的に童帝様に依存してるし、榊原を遠目に眺めるとき以外は互いに用もない。

ただ、体育の時間は榊原の出番でもあり、必然、この4人のうち3人が集まる。

童帝様は、僕らから距離を取ってくれてる。

榊原の写真だけとるわけにもいかなかったらうし、気も遣ってくれてんだらうね。

まあ、最近は、童帝様以外に4人の撮影者がいるらしい。

カタログには映像もあるから、ビデオ撮影してる奴がどっかにいるんだらうけど。

下手に口出しして、お宝を捨てる気にもなれないから、追及はしてない。

ちなみに、B組のブンカートは、授業をサボって榊原のブルマを見に来てる。

まあ、その気持ちは大いに理解してるつもりだ。

『コイツ、留学生なのに大丈夫かよ』と思わないでもないけど。

この体育の時間は、都合あって2時間連続。

しかも、陸上競技の華、ハードル走と棒高跳び。

太ももが躍動し、胸が縦横無尽に跳ね回るハードル走。

天高く突き上げられた胸と、ブルマがまぶしい棒高跳び。

ブンカートならずとも、授業をサボるに違いない。

2・Sと2・Fは、教師も含めて授業ボイコットしてるから問題ナシ。

僕も、ゆっくりと榊原のブルマを堪能できるってわけだ。

いや、勘違いしないで欲しい。

不死川よりも榊原が好きじゃなない。

ただ、不死川がブルマをはいてくれないから、榊原でブルマ分を補給してるだけだ。

体育の時間、とくにグラウンド競技だと、不死川は授業をサボって図書館で勉強してる。

まあ、着物じゃ走りにくいのは分かるけど、僕は不死川のブルマ姿も見たい。

もし不死川がブルマをはいてくれたなら、僕は不死川しか見ない自信がある。

あとで童帝様に、榊原の写真を貰うのは確定だけど。

こう言う授業だと、川神や椎名も捨てがたい。

川神の貧乳ブルマに、体格の割には実ってらっしゃる椎名の胸。

その辺も、こういう授業の楽しみの一環だ。

クリスティアーネに関しては、金髪さんは好きじゃないからパス。

ただ、こういう日は榊原を見ていることが多い。

というわけで、どういう目で見ているかを知ってもらおうと思う。

別に、僕が誰かに秘密を握られるのが好きな変態だからじゃない。

秘密を共有することで、ちょっとした仲間意識を持って欲しいだけだ。

ハードル走。

最初に紹介すべきはコレに尽きる。

「では、位置について！」

榊原が、クラウチングスタートの構えをとる。

勢いよく体を下げるから、重力と弾力で胸が弾む。

その決定的瞬間を脳に刻み込むのも、もちろん忘れない。

あの揺れ具合から、イロイロと想像が膨らもುತ್ತてもんだ。

そして、普段は抵抗している重力に、この時ばかりは従う2つの事実。

残念なことに胸元は見えないけど、それを上回る収穫があるので問題ない。

ピッタリした体操服が、今度は胸で押し下げられることになる。

その胸の美しいラインが、体操服に沿って顕現される。

横から見てよし、正面から見てよし、下から覗ければ殊更よし。

胸元が見えないくらいのは、最早ここにおいては些事に過ぎない

「よーい……」

パン、と火薬が弾けると同時に、榊原の胸も弾け出した。ただ走るだけでも、その胸は上を下へと忙しく動く。効果音なんて想定してる暇はない。

この光景を、目と脳に焼き付けるので精いっぱい。柔らかかさや感触は、後で補完すればいいだけの話だ。

そして、スタートから13m地点。
ついに第一波がやってくる。

榊原が、ハードルを越えた瞬間。
この瞬間にこそ、この授業の存在価値が凝縮されてる。

力強く跳んだ瞬間に、僅かに覗く内もも。
溢れんばかりの色香が見え隠れし、僕の心を引っ掻き回す。
もちろん、太ももだけに注目するわけじゃない。
ブルマの食い込みが否応なしに強調されて、僕の未熟なりビドーを
刺激する。

そして、跳躍に一拍遅れて、たわわな胸が天へと昇る。
常なる位置よりも高く、いつも以上の自己主張を成し遂げる。
その動きからは、榊原の胸の弾力が存分に伝わってくるようだ。

上、下、そして上。

一連の動きを軽快に終えた胸は、いつもの位置へと収まろうとする。

無論、そうは問屋が卸さない。

なにも、胸を揺り動かすのは跳躍の時だけじゃない。
着地の瞬間にも、地面を踏みしめた衝撃が胸へと伝わるのだ。

こっちは、さっきみたいにダイナミックな動きは見せない。

実際、ジャンプしたときの6割も揺れてないだろう。

その代わりに、小刻みに揺れるのだ。

まるで振動しているかのように、細かく何度も揺れる。

跳躍の時とは、また一味違う風情がそこにある。

この幸福は、8・5m間隔で、あと8回やってくる。

合計9回分の跳躍と着地が、榊原が1回走ることに楽しめる計算になる。

1人当たりたった2回しか走らないっていうのは、本当に惜しいことだ。

いっそ、榊原だけでも5回は走らせて欲しい。

そうすれば汗もかいて体操服も透けるし、一石二鳥。

いや……榊原がブルマを直す機会も増えて、疲労から警戒心も落ちてチャンスが増える。

つまり、一石四鳥のビッグボーナスになるはずだ。

キツチリ18回分の跳躍と激震。

そして、スタートダッシュによる2回の爆発。

ココまで僕は、今晚のための十分な道具を確保した。

棒高跳び。
体育の授業を語るなら、これを無視することはできない。

「次、榊原！」

「はい！」

その言葉を聞き逃す僕ではない。
ガクトくんも、そしてブンカートも。
言わずもがな童帝様も、恐らくは聞き逃さなかったことだろう。

棒へと向かう榊原のブツは、やはり激しく揺れていた。
このとき既に汗をかいており、体操服がよりピッタリと貼りついて
いる。

榊原が棒を飛び越える瞬間が、この競技の見どころに他ならない。重力から解き放たれて、天を突かんと上に向けられる豊満な胸。それは、背中を反ることで十分に強調され、バベルの塔のごとくそびえ立つ。

無論、ブルマと太ももも見逃せない。

先にも伝えたが、体が反られているのだ。

それはつまり、ブルマの前面が不自然に強調され、太ももが陽光を受け止め輝くも同じ。

見てはいけないなどとは思わず、むしろ僕は食い入るように見ている。

ブンカートと2人なら、ボーっとしてるように見えるから問題ない。ガクトくんが童帝様と行動を共にしているおかげで、こちらは完全にフリーとなっていた。

醍醐味は、何も飛び越える瞬間だけではない。

飛び越えてから、マットの上へと落ちていくまでも重要だ。

背面跳びをするから、当然背中から落ちる。

背中から落ちるということは、仰向けになって丸まるような形になるということ。

つまり、胸とブルマと太ももが急接近し、それら全てを同時に視界に収めることができるということ。

通常、胸とブルマ、胸と太ももは同時に見ることができない。

強引に視界全体に収めることもできるが、それでは1つ1つの喜び

が半減される。

しかし、棒高跳びの着地の瞬間だけは違う。

この瞬間だけは、無理して視界を広げなくても、胸・ブルマ・太ももの3つを楽しめる。

今、至高と言っ言葉の意味を問われれば、僕は『この瞬間』と答えるに違いない。

着地した後も重要だ。

飛び越える瞬間と着地の瞬間には敵わない。

だが、それは着地後がないがしろにしてイイと言っ理由にはならぬのも事実。

うつ伏せになつてから立つ癖がある榊原だからこそ、絶対の価値がある。

起き上がる際、マットに胸が押し付けられて、大きなそれが潰される。

決して完全に潰れることは無く、むしろ幾ばくかはマットを押し返さんと努めている。

そして、上体を起こした時に重圧から解放され、その膨らみに自由が取り戻される。

元に戻つたという安心、やはりサイズが大きいと再確認できたときの達成感。

それがあるからこそ、一瞬たりとも目を離すことができない。

勘違いしてもらつては困るのだが、ブルマと太もものコンビネーションも重要だ。

這うようにしてマットを降りていく榊原を、後ろから眺めるのを想像して欲しい。

想像力の翼を広げれば、こちらにヒップを突き出しているように見

えるだろう。

否、これは想像などではなく、実際に榊原がそうしてくれているのだ。

でなければ、ブルマに包まれたヒップラインと、白く柔らかな太ももは堪能できまい。

それが、1度の授業で4回も行われる。

通常は2回か3回が関の山だが、今回は2時間連続の授業だ。

先の時間に十分な準備体操ができているとし、その時間が全て棒高跳びに使われる。

全くもって、今日の午後はパラダイスのような時間だった。

榊原小雪。

まあ、最近名前を覚えたクラスメイトだ。

今年の5月……ガクトくんと決闘があるまでは、ちょっとあやふやだったけど。

イタズラされることも少なくなっていくけど、以前より関わりを持つようになった。

それでもって、未だに僕の性的好奇心を刺激して止まない。
ちよつと頭がおかしいけど、心の底から憎めない何かを持っている。

それが、僕にとっての榊原小雪だ。

ところで、君。

僕にはかり語らせないで、少しは君も教えておくれよ。

君にとって、彼女はどついう女の子なのかな？

え〜……榊原を見たいとの御要望がありましたので、1つ書かせていただきました。

ココを逃すとかかなりの間をあけてしまうことになるので、旬を逃すなどということでは投稿した次第です。

おそらく『榊原を出してくれ』というのは、こういう意味ではなかったと思います。

でも、もう書いてしまったので……ほとんど別世界の話と思って読んでやってください。

御意見、御感想、御要望、御指摘などなど、結構真剣にお待ちしています。

『モーデイスさん、筋金入りの変態なん？』とは聞かないでください。

仮に変態だしたら、それは変態という名の紳士です。

11話目『満つるとも欠かず』

ルール変更が伝えられてから30分。

俺は、柔術着の上を脱いでリングに上がった。

今の俺は、柔術着のズボンと、黒い無地のシャツだけの格好になる。

今日の俺は本気だ。

本気も本気、手加減なしで全力全開だ。

不死川が叶えてくれる、たった1つの願い。

その権利を手に入れるために、俺は全力で戦う。

現役空手家時代みたいに、ワックスとスプレーしっかり使って。

こつ、短い髪の毛逆立てて、バリツバリに固めてる。

広めの額が強調されて、デコっばちに見えるかも知れん。

でも、俺が一番気合の入る髪形はコレだ。

いつでもこの髪形にできるように、2週間に1度は床屋に行ってるくらいだよ。

もちろん、前歯も抜いてある。

川神ラビリンスの時みたいに、刺歯を抜き忘れるなんてへまはしない。

上下8本の歯がなくなると見栄えが悪いけど、安全には変えられん。変なことになって試合が中断されるなんてことになったら、話がなかったことになっちまうし。

今までの俺の人生で、一番強いのは今だ。

体力、タフネス、スピード、パワー、精神力、集中力。成長過程つつつても、この歳にしちゃ文句が言えねえくらいに優れてる。

小西さんところで関節技もたくさん覚えたし、筋肉で体重も増えた。過去のいつを遡っても、今より強い俺はいない。

ただし、クリステイアーネより強いかは分からん。

勝つ自信はあるが、それは必ず勝てるって意味じゃない。

だから、全力を尽くす。

そう、俺は本気で、全てを尽くして戦うんだ。

柔術着の上を脱いだのにも、ちゃんと意味がある。

相手は、体操服にブルマって服装で、俺としちゃ非常にやり辛い。

袖が短すぎて掴めないし、襟が柔らかすぎて引き込めない。

投げ技は度外視するにしても、寝技に持ち込むのも簡単じゃない。

俺は、打撃をメインに戦うつもりだ。

寝技に入ることにはあっても、寝技を狙って行くことは無い。

もし寝技に入れたなら、遊ばない。

腕でも足でも首でも、どこでもイイからブチ折ったり絞めたりして終わらせる。

それもできなきゃ、審判が止めるまでマウントでボコボコにするだけだ。

もちろん、手はそれだけじゃない。

柔術でもなく、空手でもなく、サブミッションでもなく。
そういう次元とは別物の、俺の奥の手。
ノブさんの兄貴から教わった、あの奥の手。

由紀江ちゃん対策で使いたかったんだが、もうどうでもいい。
ここまで来て、俺に温存って選択肢は存在しない。
全力を出さなきゃならない相手に、渋って手を抜く道理はない。

唯一の不安と言えば、右膝が壊れ気味なことくらい。
まあ、痛み止め飲んでるからどうにかなる。
構造的には壊れてないし、根性出せば余裕で戦える。

そうそう、試合の前に1つ仕込みをしてあるんだ。

今日の最後の試合だからってことで、マイクパフォーマンスをやる
ことになった。

……いや、『ことになった』って言い方は間違いだわな。
放送部に許可をもらって、マイクパフォーマンスの時間を取った。
全力でやるってのは、なんでもやるってことと一緒だ。
少なくとも、俺の中じゃな。

向かいのコーナーに立つクリスティアーネ。

そのクリスティアーネを、無表情で見据える俺。

どっちの手にもマイクが握られてて、どっちも相手を睨んで仁王立ち。

うわ、客観的に見ると、軽くマヌケじゃね？

まあ、コイツに勝てりゃ、ちょっとくらいマヌケでも構やしねえよ。

手え抜いて勝てる相手じゃないのは、もう分かってる。

しかも、今回は状況がよくない。

オープンフィンガーグローブのせいで、突きの威力が半減してて。

しかも、既に比べて掴みにくいし、コッチが掴まされると抜け出しにくい。

まあ、手はいくらでもあるんだが……いや、言い訳になるな。

クリスティアーネをブツ壊してでも、俺は勝たなきゃならないんだ。どんな手でも、どんな技でも、勝てるんだ。たら使い尽くして勝つ。

とりあえず、まずは搦め手からか。

手に握ってるマイクのスイッチは、放送部の手の中。

まあ、それも俺が頼んだことなんだが。

ちゃんとパフォーマンズらしくなるように、順番に発言しろってさ。望むところだよ、そんなもん。

約束通り、先手は俺だし文句はねえさ。

マイクを口元に近付けて、少しばかり空気を吸って。

最高の言葉を、クリステイアーネの耳にブチ込んでやった。

「で、ハンディキャップはアレくらいでよかったか？」

怒号、万雷、炸裂、爆発。

なんとも言ってくれりゃいいが、観客が沸いた。

ふざけんな、やってやれ、よく言った、くたばれ、潰せ。

そんな歓声が、リングのロープを奮わせるほどの量で降りかかる。

たった一言。

観客なんざどうでもイイが、この一言がキツカケだ。

この一言で、クリステイアーネは乱される。

クリステイアーネは、真っ直ぐすぎるタイプだ。

冗談の1つもマトモに受け取るほど、融通が利かない人間だ。

挑発されれば、それを受け流すことのできない人間だ。

「あんなもの、ただの侮辱だ！ 今すぐルールを元に戻せ！」

予想通りの反応してくれちゃって、俺は嬉しいよ。

こんな風に、マイク使って大声で叫ぶんだから。

観客やってる連中、面白がって倍は騒いでやがる。

ったく、もうちつと遠くに席作らせろってんだよ。

リングの上においても、耳に響いてうるさくて仕方ねえ。

だから俺は、一言返してやった。

「いいんだよ。テメエのこと下に見てんだから」

そう、馬鹿にしてんだ。

ハハッ、顔真っ赤にしてやんの。

腹立ってんのかも知れねえけど、知ったこっちゃねえ。

「……最後だぞ。ルールを戻せ」

なーんて、語気を強めても無駄無駄。

獲物持っていないオマエなんて、怖くもなんともないんだよ。

レイピア持ってるじゃ、ビックリするくらい警戒してやるけどな。

武器持ったオマエと戦えるほど、俺は強くは無い。

全く戦えないってわけじゃないが、勝ち目は薄い。

その代わりに、素手のオマエなら全然怖くない。

俺が素手で戦うのに掛けてきた時間は、オマエよりずっと長い。

技を使って、意識して人間の体を壊したこともある。

きつとオマエより負けてきたし、オマエより屈辱を食ってきたはずだ。

劣等感に苛まれた数も、苦痛の量も、それを乗り越えて来た経験も。そういうものだけは、絶対にオマエよりも俺が上だ。

這い上がるうとしてる人間にしか、こういう負の感情は無い。それでもって、こういう感情も、最後の最後で力になる。

それと、ハツタリだ。

仮にハツタリだとしても、それで人間は強くなれる。

そんな言葉を、俺はどっかで聞いたことがある気がする。

だから、俺もハツタリをかます。

相手を騙すためじゃなくて、自分を騙すために。

「どうせ俺が勝つんだから、どんなルールだって変わんねえよ」

と、ここで試合開始の準備をしろってアナウンス。

うん、さすが川神の放送部、イイ仕事してくれるね。

クリスティアーネが反応する前にマイクの電源も落として、効果はバツチリだ。



布石は敷いた。

これで、クリステイアーネを全力で潰せる。

俺に圧倒的に不利なルールだから、思う存分攻撃できる。

これだけ不利なルールなら、多少のことで非難はされない。

このルールなら、どこにだって打開策はあるんだ。

寝技に入られたら、隙を見て目を抉ればいい。

打ち負けそうになったら、金的を蹴り潰してもいい。

確実にトドメを刺したかったら、脊椎を壊せばいい。

倒れた俺に安全に追撃したかったら、頭を蹴ればいい。

コレだけの条件がそろってれば、もしもはない。

『こつだったら勝てた』なんて、クリステイアーネには言わせない。

そして、何より嬉しいことに、クリステイアーネの動きが鈍る。

っていうのも、アレだけ挑発されたら、アイツは偶然でも反則に該当する行為ができない。

他人からの評価がどうかじゃなくて、純粹に自分のプライドに傷がつくから。

だから、金的や目潰しが決まらないように、倒れた相手の頭部を蹴らないように。

そういう余分な意識が、クリステイアーネの動きを鈍らせる。

そりゃ、弱い相手じゃない。

突きのスピードは俺の比じゃないし、パワーも充分にある。

打たれ強さは知らんけど、根性も人並みにはあるんだろ。

だから、俺は加減しないで全力で戦うんだ。

コレに勝ったら、不死川に望みを叶えてもらう。

だから、クリステイアーネ。

お前を殺してでも、俺は負けないからな。

11話目『満つるとも欠かず』（後書き）

ちよつと短い上に、なんかグダグダ言ってるだけで申し訳ありません。

港VSクリスですが、一人称視点では描写が難しかったため、別のキャラクターの視点から描かせていただく予定です。

あと、まじこいの小説買ってきました。

その2巻を読んだんですが……。

直江大和を、改めて全力で潰しに掛かりたいと思いました。

よくも……よくも不死川を！

私だって、不死川にあんな風に言われたいんだよ！

……ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘など、諸々お待ちしております。
ます。

幕間『なにもさせてはくれない』（前書き）

不死川視点で、後半の港VSクリス戦がメインです。

尚、過剰な暴力描写を行っております。

骨折や出血の描写はありませんが、ご注意ください。

幕間』なにもさせてはくれない』

「よかったですか？ 港先輩、本気にしてますよ」

「そうは言っても……………もう遅いのじゃ」

まさか、本気にするとは思わなんだ。

冗談でイロイロ言い合っていたから、此方の言葉も冗談のつもりじやった。

じゃが、港は此方に訂正する際も与えず、そのまま準備をしにどこかへ行ってしまった。

そして、リングに上がった港は、此方が見たことのない港じやった。今までに見たことないほどの闘気を纏い、力強い視線を携え。

整髪料で固めたのか、髪はキレイに逆立てられて。

相手を睨んだまま固まったみたいな表情で、口だけが動いておる。

此方が初めて目にする、恐ろしい港じやった。

「いつでも死ぬるから、いつでも殺せる」

「人間が本当に負けるといふのは、自分が負けを認めた時だけだ」

強烈な言葉じゃった。

此方の考えとは違う、肝が潰れるような言葉じゃった。

港が、そんな心構えで戦っているなどとは。

そんな様子は、露ほども見せてこなかったのに。

此方の目指そうとしていた場所は、そういう場所だったのか。

皆口殿も、小西殿も、そう考えていたというのか。

そう思うと、少しだけ恐ろしくなってしまった。

ほんの少し、此方の心を動かすには及ばぬ程度にじやが。

しかし、それとは別に気になって仕方がない。

港が本気になるほどの願いとは、いったい如何なるものなのか。

どこかに遊びに行くくらいなら、快く頷いてやれる。

ブルマをはいてくれ、などという変態っぽい願いはないじやろ。

体を開けというのなら、これは付き合いそのものを考えねばならん。付き合ってくれと言われたら……これは保留じや。

……港が、此方に特別な感情を抱いているというのは、何となくわかる。

でなければ、ココまで世話を焼いてくれるなどと言うことは無いじやろ。

むしろ、そうでなかったのなら、港が単なるお人好しと言うことになっってしまう。

なんというか、それはなんだか寂しい感じてしまう。

じゃが、どう応えたらいいかは分かっておらん。
此方が本当に港のことを好いておるのか、それが此方自身にも分かんないのじゃ。
それに、生半可な気持ちで港の気持ちに答えを出すのは、失礼というものじゃろう。

此方も、港のことが好きであると思う。
まゆつちや伊予ちゃん、武蔵や入江。
女はともかく、男である入江と比べても、何か違う感情を持っている。
同級生と後輩の差なのかも知れんが、そうではないとも分かっている。

港に腕を撫でてもらったとき、妙に安心した。
母様に撫でられたときのように、安らかな気持ちになった。
優しく触れてくれる港の手が、心地よかった。

武蔵が港の上に座った時、心臓が掴まれるようであった。
胸の奥底がギョツとなって、心のどこかがソワソワした。
それで思わず、武蔵の頬を力いっぱい引っぱたいてしまった。

普段の此方であれば、そのようなマネは絶対にしない。
試合を目前にした後輩をシバくなど、正気の沙汰ではない。
ということとは、此方の正気を奪うほどの強い感情が、そこにあったということ。

これは、恋心なのかも知れん。
いつからか知らんが、港に恋していたのかも知れん。
しかし、それを自覚したのは、まさに今この瞬間じゃ。
もしかしたら、この思いは何かの間違いなのかも知れん。

それを確かめるだけの時間は、あと30分もない。

クリステイアーネは、素足でリングに立ち、オープンフィンガーク
ローブをはめていた。
港の提案により、素手でもよいし、靴をはいてもよかったというの
に。
それがどういう意味なのか、観客も含めて全員が分かっている。

「で、ハンディキャップはアレくらいでよかったか？」

マイクを通した港の声は、いつもの声色だった。

ただ、顔は少しも笑っていない。

真剣そのものの顔で、クリスに告げるだけ。

ハンディキャップと言うのは、あのルール改訂のこと。

目を潰してもいい、金的を蹴ってもいい、脊椎を攻めてもよい。

寝技の際に、相手の頭に好きなだけ膝を打ち込んでもよい。

素手でもよいし、ブーツをはいて戦ってもよい。

倒れた相手の頭を蹴りつけても構わんし、膝を壊すような蹴りも認める。

全て、クリスがそういう攻撃をしてもよいということじゃ。

港に対して、そういう危険な攻撃をしてもよいということじゃ。

クリスが学んでおるのは、サバットという格闘技らしい。

港が言うには『靴をはいたキックボクシング』とのことじゃが。

不死川の家来にサバットの使い手がおったから聞いてみたところ、
そうではないらしい。

靴をはいたことを前提にした、爪先での蹴りなどが発達している。

セオリーは、下段蹴りや横蹴りで距離を測り、一気に踏み込み突き
で倒す。

そういうキックボクサーもいようが、サバットの使い手はスネで相
手を蹴らない。

港の知識の中に、果たしてそれはあるのじゃろうか。

ただ、そういう知識があるのが無かるうが、港が勝つ気がする。
あの港なら、マルギツテにも勝てるのではないかと思ってしまう。

「あんなもの、ただの侮辱だ！ 今すぐルールを元に戻せ！」

激昂したクリスは、己の感情を隠さずに騒ぎ立てた。

クリスのような相手には、ああ言った行為は侮辱に感じるのじゃろう。

もし此方が同じことをされれば、やはり不愉快に思うに違いない。

不愉快に思い、そして、心を乱されるに違いない。

恐らく、それが港の狙いなのじゃろう。

「いいんだよ。テメエのこと下に見てんだから」

それは真意ではないじゃろう。

もし格下に見ておるなら、港は策を巡らせない。

確実に勝ちたいから、クリスを挑発して勝率を上げようとしている。

……そこまで勝ちたいのか。

「……最後だぞ。ルールを戻せ」

強い口調で言うが、港は動じない。

表情を少しも変えず、少しだけ息を吸う音がマイクに入って。

「どうせ俺が勝つんだから、どんなルールだって変わんねえよ」

どこまでもクリスを馬鹿にしたような言葉を、平然と吐いた。

クリスが何か言おうとしておっただが、マイクの電源はもう切られておった。

試合に入るまでが長過ぎると、興奮めになるからという理由もあるのじゃろう。

ただ、これが港の策の1つでないと言い切れん。

クリスが食い下がるのに対して、港は悠然とコーナーに構えていた。今さらじゃが、柔術着の上を脱いで、黒いシャツ1枚だけを纏っている。

下が柔術着のスボンのままなのは、着替えの時間がなかったからか。どちらにせよ、それは寝技で戦わないというアピールじゃろう。

そういうアピールをして寝技を使うのか、さらに裏をかいて打撃を使うのか。

少しでも相手の動揺を誘って、その隙を突こうという魂胆が見え隠れする。

それに気付いたところで、相手は気にするしかないのじゃが。

クリスが苛立ちながら構え、港は落ち着いて構える。
その姿を此方が視界に収めたところで、ゴングが鳴った。

速かった。

此方には、全部は見えんかった。

開始直後、港が走って間合いを詰め。

その勢いを右の前蹴りに乗せたところまでは見えた。

そこからは、ほとんど何が起こったか分からなかった。

連打であったのは覚えておる。

最初の蹴りでクリスをコーナーに叩きつけ、そのまま連打で角に縫い止めた。

無論、クリスとて打たれ続けておったわけではない。

ときには捌き、ときには打ち返し、かわすことはできんでも抵抗はしておった。

だが、港の攻撃は止まらない。

クリスがいくら防ごうとしても、その上から拳や蹴りを叩きつける。クリスがいくら避けようとしても、次から次へと攻撃の手を休めない。

クリスがいくら打ち返しても、意に介さずに打ち続ける。

少しずつ少しずつ、クリスが削られていくのが目に見えて分かった。

そういう風に、1分は打っておったか。

もしかしたらもっと長かったかも知れんが、それくらいは打っておったはず。

港の動きは遅くなるどころか、エンジンが掛かったかのように加速し続けていた。

不意に、港の動きが遅くなった。

ゆるりとクリスの眼前に、目隠しをするように右掌を突き出す。

いや、突き出すなどと言う速度ではない。

本当にゆっくりと、目を包むような動きで手を出した。

それに合わせてクリスの動きも止まり。

瞬く間に、クリスの頭部が地面に叩きつけられた。

左の上段後ろ回し蹴り。

風間と戦った時に見せた、鋭過ぎる刃物のような蹴り。

その蹴りが、クリスの額を掠める様に逸れて。

続く右の上段回し蹴りが、その首を刈り取るように直撃した。

頭でなく、首に当たった右足。

ちよつと、右足首で首を捕らえ、足先を後頭部に引っ掛ける形。

ふらついたクリスを右足でコントロールし、蹴りの軌道に合わせて振り回す。

いや、振り回してなどおらん。

港は左の膝を折り畳み、それに合わせてクリスの頭部も下がっていく。

足は止められることもなく、クリスの頭部も止まることない。

クリスの頭は、港を中心に反時計回りに引っ張られ。

同時に、下へと勢いよく足が動き、頭は地面に叩きつけられ。

振り下ろす蹴りは、首を切り落とすようにして打ち込まれていた。

奇妙な技じゃった。

蹴りでありながら、それは投げ。

足で地面に頭を叩きつける、異質の投げ。

しかも、ただの投げではなく、蹴り足を用いて首をも攻める。

クリスが死んでいても、不思議のないような蹴りであった。

大きく2つ痙攣してから、クリスが面を上げた。

全身に上手く力が入らないのか、震えながら立ち上がる。

カウン트가7に至ったところで、気丈にも構えをとるが……。

此方の目から見ても、戦えそうな雰囲気ではない。

立ち上がるクリスを、港は冷ややかな目で見ていた。

いや、冷ややかでも何でもない。

クリスが立ち上がったということを、ただの結果として考えておる目。

感情も何もなく、立ったということを受け入れておる。

その視線の意味に気付いたのか。

クリスが、少ない体力を振り絞って叫んだ。

「見、くびるな！」

息が詰まり、ちゃんとした叫びにならない。

じゃが、此方にも聞こえるのであれば、もっと近い港にも聞こえておるはず。

……港は、咳くだけじゃった。

声を小さくすることもなく、大にして叫ぶこともなく。ただ、咳いた。

「もう、怪我なしで負けられなくなったぞ」

ぞっとするほど、何も感じられない声じゃった。

1度、両者がコーナーに戻されて。
そこからようやく、試合が再開された。

今度は、クリスから距離を詰めていく。
クリスの突きと同じように、信じられないようなスピードで直進する。
何歩踏み込んだかは知らないが、あっという間に港との距離はなくなり。

それに合わせて、なんの小細工もない拳が放たれた。

クリスの突きは、傍目に見ても速かった。

頭を地面にぶつけられ、首にもダメージを受けておるのに。

同じ突きを出されてとして、此方は避けられん。

此方が打撃に疎いというのもあるが、それに関係なくクリスの突きは鋭い。

速く、鋭く、重く、硬い。

打撃としては、これ以上ない威力を秘めておる。

が、港はそれを避ける。

まるで、そういう攻撃が来ると分かっていたかのように。

突きが放たれるよりも明らかに早く、その軌道を呼んでいたかのよう。

しかも、低いタツクルを突きに合わせ、そのままマウントを取ってしまった。

そこから、左と右の掌打がクリスに降り注ぐ。

最初の5発は速く細かく、6発目の右が強く打ち込まれ。

そして、揺らいだクリスに、今度は左の掌打が強めに当たる。

しかも、無理に頭を上げようとして、頭部をマットに叩きつけられておった。

が、それも長くは続かん。

20発くらい掌打を落としたところで、クリスが反撃に転じる。

クリスは、港の右掌打を、首を振って避けてみせた。

そのまま右の手首を掴み、引っ張ってマットに押し付ける。

左の掌打は顔に貰ったが、強引に手首を掴み、同じように押し付け

た。

それが、港の罨だとも知らずに、手首を取ってしまった。

両手が塞がれているのは、何も港だけではない。

港の両手首を、それぞれの手で掴んでいるクリス。

奴も、両手が使えない。

それは港が仕組んだからだ、気付かない。

クリスの顔に、躊躇わずに頭突きを落とした。

1発目でクリスがひるみ、2発目で思わず手を離しそうになる。

が、強情に港の手首を掴んでいたクリスは、3発目の頭突きを貰う。

4発目が顔に入って、クリスはうつ伏せになってしまった。

肘を立てて、膝が伸びたまま、柔道でいうところの亀になろうとしているかのよう。

当然、港は裸締めを狙いに行くが、こんな状況でもクリスは防御しておる。

うつ伏せになりながらも、アゴをキチンと引いて防御の構えをとっておった。

後で知ったが、これはバックマウントと言う状態らしい。

ブラジリアン柔術からすれば、通常のマウント以上の好ポジション。

一方的に殴ることができ、相手からの反撃は100%存在しない。

そういうポジションという話じゃった。

港は、相も変わらず冷静。

というより、アレも港の罨じゃった。

わざとクリスの体に体重を掛けるのを止め、うつ伏せにさせた。それだけのことじゃった。

背中に密着するように、クリスの上に覆い被さって。

左手でクリスの頭を固定し、右掌でクリスの右耳を打つ。

軽く打つのではなく、手打ちとはいえ、それなりの勢いと威力で。

耳の穴に空気が入るように、鼓膜を攻めていく。

決して派手ではないが、着実にダメージを蓄積する。

鼓膜への責め苦が2桁に達したところで。

港の攻撃耐えかねたクリスが、少しアゴを浮かせてしまった。

そして、その少しは、港にとって十分な隙間だった。

蛇のように、港の右腕が首に絡む。

クリスの首をV字に締め上げ、絞り上げる。

クリスは何か抵抗をしようとしたが、港の腕を少し引っ掻いただけ。

港の肌が破れて血が出るけど、首を絞める力は緩まない。

いったい、どれほどの力を込めたのか。

締め始めてから10秒も経っていないのに、クリスは力なく腕を垂らした。

1Rの半分もかからずに、港がクリスを下してしまった。

……此方の気持ちかハッキリしない内に、戦いが終わってしまった。

幕間『なにもさせてはくれない』（後書き）

え、圧倒的でした。

もうちょっと長く書きたかったんですが、力不足で……。

なんか、港くんがクリスをいたぶるだけの回になってしまいました。

実際、打撃も出来る組技使いを倒すのって難しいんですね。

打撃は、実はああ見えて繊細な技なんです。

ベストの距離で、正しい場所に攻撃を当てる。

これができないと、相手に全然効きません。

対して組技は、掴んでしまえばそこからは好き放題です。

組技を知っていれば大変ではありませんが、今回はレベルが違いすぎます。

いいように転がされ、殴られ続け、最後には絞められる。

相手が寝技使いだっただけというのは、やはり大きいです。

いつものごとくですが。

ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘に改善点の要望など、イロイロとお待ちしております。

キヤップの閉め忘れにご注意の上、釣銭レシートをお持ちになって、精算機で精算してください。

12話目『願いを叶えてやるよ(すぐには言わない)』

まあ、勝った。

クリステイアーネには悪いことしたけど、そりゃ審判とアイツが悪い。

あの蹴りで負けときゃよかったのに、無駄に頑張るから。

だから、鼻も折れたし顔もボコボコだし、右耳の鼓膜も破れちゃうんだよ。

左右のミドルも何発かキツチリ入ってたから、アバラも何本か痛めてるだろ。

しかし『確定予測』つつたっつけか。

小西さんのジム以外で初めて使ったけど、打撃も全部見えた。

構えと現状、今までの流れを合わせて、相手の動きを予想する。

で、右脳をフル回転させて、最も高い確率で出される攻撃を脳に映し出す技。

正直、アレもギリギリだったわ。

使ったのは全部で3回だけど、それでも頭がズシンと来てる。

1回目が長過ぎたのかも知れんけど、それにしても気分が悪い。

1 回目が、開始直後につつかけたときから、流れが完全にコツチに移るまで。

そもそもからして、最初の前蹴りも避けられるところだったんだよ。右の蹴りって見切ってたのか、俺の左側に避けようとしてやがって仕方ないから無茶して、左側からもぐりこませるみたいなの右の前蹴りだしたんだが。

……お陰さまで、また膝を悪くした感じだ。

しかも、クリステイアーネの奴が、予想以上に早くて速い。

コツチだって、パワー捨てて当てることに専念してたのにさ。

それでも、右ミドルを入れてやるまでは、ちよつとビビるくらい凄かった。

アレだけの回転力で、アレだけの鋭さで、アレだけの重さで。

馬鹿みたいに体鍛えてなきや、打ち負けてたかも知れんくらいには凄かった。

2 回目も、後ろ回し蹴りからのコンビネーションのとき。

引きずり込んで潰す蹴りは『地虫』って言うんだけど、それはどうでもいい。

本当は、後ろ回し蹴りで決めるはずだったのに、キツチリ避けやがったんだよな。

わざわざ緩急つけてやったのに、それでもバツチリかわしやがってさ。

『地虫』も充分に効かなかったし、ちらつと焦ったよ。

3 回目も、仕切り直してからタツクル決めたとき。

あのときも、念のために使ってみたんだが……使わなかったら負けてた。

顔に一撃もらって、俺がダウンしてる姿が脳に映って、とにかくビビった。

とにかく逃げなきゃと思って、なんとかタツクルしたのは運が良かったが。

下がろうとしたら、今度はコッチがコーナーに縫いつけられる映像が見えてき。

正直、下手なホラームービーよりも怖いわ。

ただ、ちょっとイロイロと出し過ぎた。

確定予測なんかは見ても分からんからイイとして、寝技がな。

わざとマウントパンチを加減して打って、両手首を掴ませて。

そこから顔に頭突きして、自分からうつ伏せになるように仕向けて。うつ伏せの相手にまたがって、鼓膜にガンガン空気を送り込んで。

アゴが上がったところに腕を差し込んで、締め上げて、落とす。

これ、俺の奥の手だったんだけどな。

この過程のどこかで、腕なり首なりを捕るってのが定石なんだが。

最後の段階まで耐えられたせいで、全部見せることになっちまった。

……いや、それでいいんだよ。

クリステイアーネに勝ったんだから、もう気にすることは何も無い。

こういう戦いで俺の奥の手が知れても、もうどうだっていい。

試合終了のゴングが鳴っても、歓声は半分くらい。

あんだけ女の顔ボコボコに殴れば、そりゃ引く奴もいるよな。

男の足が折れて泡吹いてるよりも、女の顔が腫れて気絶してる方がキツイのか。

つたく、どう見たって戸田先輩の方が怪我が大きいだろうに。

凄惨と言えば凄惨だろうけど、こんなのはイイ方だろ。

小西さんなんか、人間の両手足へし折って『芋虫みたい』とか言うんだぜ？

浦木さんも、ストリートファイトやってるときは関節壊してたっというし。

そついうのに比べりゃ、良心的ってもんだね。

鼻が折れたっつっても、俺みたいに何度も折ってるわけじゃない。

しかも、ペシャンコに潰れたんじゃなくて横に折れてるから、キレイに治るだろ。

鼓膜だって、2週間もしたら再生してくるんだから、水さえ入らなきゃいいし。

顔は腫れても切れてないし、歯だって1本も折れてない。

その程度で済んだっつてのを、感謝して欲しいよ。

さて。

俺と不死川は、グラウンドからは身を引いてたり。

まあ、両方とも相手大怪我させたつてので、大分目立ってたから。たまたま師岡くんと目え合ったけど、殺してきそうな感じだったし。場所はともかく、逃げてきて正解だった。

つか、2人つきりで保健室。

保険の先生がクリスティアーネと救急車の中だもん。

……保健室のカギが空けっ放しなのは、ちよつと問題だと思う。

そっぴや、右腕のムズムズだけど、けっこうエグイことになってた。クリスティアーネに腕引っ搔かれてたみたいで、血がダラダラ出て。

なんか違和感があるかと思ったら、肘から手首まで皮膚が抉れてやがってビツクリ。

痛くなかったけど、傷が消えないとチラツと面倒だよな。

とりあえず、腕の治療は半分以上自分でやった。

いや、不死川がやってくれようとしたんだよ。

でもさ、消毒のキャップ取って、ドバツと直で消毒掛けられるのはね。

床が消毒で汚れるし、驚くぐらい傷口が染みたよ。

まあ、不死川の愛が痛いってことで、痛みを快感に変換できるからOK。

……もともとMな要素はあったと思うけど、俺自身、ココまでのレベルとは思わなかった。

で、治療が終わってから、ずっと沈黙が続いてる。

俺がパイプイスに座って、不死川がベッドに座って。

向かい合って、もう何分無言で見つめあってるやら。

いや、不死川の真剣な顔見ると、ドキドキしてくるからいいんだけど。

まあ、いつまでも見てるわけにはいかねえわな。

「それで不死川。約束の件なんだけど……」

「うむ。とりあえず言ってみるのじゃ」

話を切り出した俺に、真剣な表情のまま応える不死川。

そう、不死川も真剣でいてくれてるんだ。

ココで俺が手を抜くつてのは、男として最低だろ。

いや、今思えば、恥ずかしくて仕方ないけどさ。

誤魔化すなんて選択肢は、俺の中にはない。

「今のテンションじゃなきゃ言えないから、とっとと言っぞ」

試合が終わってそんなに経ってないから、俺のテンションは高いまんまだ。

今だったら、どうにか想いを伝えられる。

どこかに遊びに行くなんていうのは、もういい。

ブルマをはいてくれつていうのは、もつと後の話だ。

抱かせてくれつてのは、人間として問題があるだろつよ。

そんなことより、まず、伝えなきゃいけないことが残つてるだろ。

気を張れ、覚悟を決めろ、勇気を振り絞れ！

『好きだ。付き合つてくれ』つて、不死川に伝えてやれ！

「好きだ。結婚を前提に付き合ってくれ」

……あれ？

俺、今なんて言ったんだ？

落ち着け、ちよっと落ち着けよ？

なんか、余分な言葉が混じってなかったか？

「けっ……こん？」

勇気出しすぎだろポケエエエエエ！

ミチヒロ、それ、ドロップやない！ おはじきや！

じゃない！ そうじゃない！

現実逃避しようとしてんじゃないねえ！

「よく聞こえなかったんじゃないが……今、なんと言ったのじゃ？」

不死川が、神妙な面持ちで聞き返してくる。

いや、もう取り返しは付かないだろ、コレ。

下手に言い訳なんかしたところで、余計に状況が悪くなるだけだ。

もう、行くところまで行くしかないだろ。

息を1つ吸って、肺に空気を送り込んで。

声がデカくなり過ぎないように気をつけながら、もう1回。

「好きだ。結婚を前提に付き合ってくれ」

不死川の返事は無い。
ただ、顔つきは神妙から驚愕に変わった。
そりゃ驚くよな、俺だって驚いてんだから。
いきなりクラスメイトに『結婚を前提に付き合ってくれ』はないだ
ろ。

まあ、何言ったところで、俺の口から出ちゃったんだけど。

「も、もう1度じゃ!」

「好きだ。結婚を前提に付き合ってくれ」

「もう1回! もう1回言ってはくれんか!」

「好きだ。結婚を前提に付き合ってくれ」

「ハッキリと、もう少しゆっくりじゃ!」

「好! き! だ! 結! 婚! を! 前! 提! に! 付!
き! 合! つ! て! く! れ!」

……超恥ずかしいんですけど!

恥ずかしくて死にそうなんですけど!

あああああ! 絶対にタイミング間違った!

2年の終わりくらいに、ムードたっぷりなところで告白するつもり
だったのに!

ああ……不死川、俯いちゃったじゃん。
膝の上で、両手の拳をギュッと握って。
いや、カワイイ仕草なんだけど、そういう問題じゃない。
困るよな、突然そんなこと言われても。

でも、でもだ。

逆に考えれば、脈があるんじゃないか？

俺の告白に恥ずかしがってくれてくれるってことは、俺を意識してくれてんだよな？

いや、俯いてるのが恥ずかしさからかなのかは断言できないけど。

と、不死川が、真っ赤になった顔を上げて。

俺に向かって、上目遣いで。

「……すまん」

よし、人生詰んだ。
死のう。

「こ、これ港！ なぜヨードチンキの蓋を開けて、腰に手を当てておるのじゃー！」

これ、ヨードチンキじゃなくてマーキュロ……赤チンなんだけどね。ピンを握った僕の左腕を不死川が抑えてくれてるけど、もういい！ 50mlも飲めば致死量らしいから、確実に死ぬためだよ！ さすがにピン1本分なら、50mlなんか余裕だからな！

不死川の前で死ぬのは不本意だけど、一刻も早く、そして確実に消え去りたい！

「落ち着け！ 落ち着くのじゃー！」

「嫌だああああ！ 死なせろ！ 死なせてくれえええええ！」

クソ！ 不死川の力が案外強い！

40kgのダンベルで鍛えてる俺の腕を、全体重掛けてコントロールしてくる！

スパツと投げるだけが得意かと思ったら、引き手が超強ええよ！

しかも、どうして俺の小指を折ろうとしてるんだよ！

そっちは止め方として間違ってるんだろ！

あと、足払い決めようとするんじゃないやねえ！

倒れる！ 今倒れると、不死川にもマーキュロがかかって着物が汚れるから！

だからとつと手を離して俺を死なせてくれ……って痛ってえええええ！？

小指の付け根が超痛えよ！

つて、あああああ！？

手首返されて、中身が全部床にこぼれるかと思いきや俺のズボンに染み込んでる！

この柔術着高かったのに！ いや、そんなことはどうでもいい！
今すぐ絞ってビンに集め直せば、今からでも致死量は確保できる！

「いいから落ち着くのじゃ！ 何も断ったわけではない！」

グキリッ、って感じの鈍い音が響きながら、今度は俺の薬指の付け根も痛い！

どうして俺の説得をしながら、指を脱臼させてくんだよ！
説得か破壊のどっちかに……説得？

えっと、説得されてて、断ったわけじゃないって言ったんだよな？
断ったわけじゃないってのは、どういうこと？

……アレか、女の子特有の気遣いか。

本当は生理的に無理なのに『貴方が がダメなの』って断るアレか。

そういう本能的なレベルで俺のことがダメなのか。

とか思っていると、不死川の口から次の言葉が。

「此方の気持ちは整理できるまで、返事を待ってくれ！」

「それは脈アリって考えていいんだな!？」

「断言はできんが、チャンスがないというわけではないのじゃ!」

おおおおおおお!?

これは……こ、れ、は!

来たのか? 春が来たのか?

夏が来てるのに、春まで来ちゃったのか?

なんかメチャ曖昧な言い草だったけど、大丈夫なんだな?

「み、港……痛いから、その、肩から手を離してはくれんか?」

「ああ、ゴメンゴメン。つい興奮しすぎて、理性が飛びかけてた」

イケナイいけない。

ちよつと冷静にならなきゃな。

とりあえず、左手の薬指と小指の脱臼を直して……。

……よし、両方とも位置だけは戻ったか。

ちよつと筋が切れた感じがあるけど、全然OK。

残りの3本が動けば、生活する分には問題ないしね。

なんか紫っぽくなってるけど、大丈夫大丈夫。

コホン、と不死川が1つ咳払い。

うん、コレで仕切り直しってことだな。

さりげなく、僕の指脱臼させたこともスルーしてるのも素敵だぜ。

「とにかく、そういうことじゃ。真剣に考えておるからこそ、
適当に返事はできん」

まあ、それはよくわかった。

不死川も、俺のことを適当に考えないでいてくれた。

すぐに返事はもらえなくても、それはそれで嬉しい。

ただ、嬉しいのとは別に、返事を欲しいってのも事実だ。

催促するみたいで嫌だけど、1つ聞いておかなきゃならない。

「それで、返事はいつまでしてくれるの？」

「う……あゝ、その、それはじゃな」

えっと、どうしてそこで渋るのかな？

それ、返事に困るもんなんだろうか。

なんて思っていると、不死川が口を開いてくれて。

「実は、今年の夏休みに海外を回る予定でな。

明日から8月の末まで、日本には帰ってこんのじゃ」

へへ、海外か。

あるとしても、国内で名所巡りとかだと思ってたけど。

いいなあ、海外旅行か。

もし修学旅行がハワイだったりしたら、不死川と南の海か。

不死川に塗るのはサンオイルじゃない。

あの白い肌を保つために、日焼け止めを塗る。

不死川が、僕に向かって恥ずかしそうに催促するんだよ。そんなもって、僕は普通に日焼け止めを塗ってやってさ。何のトラブルもなかったことを不満に思った不死川が、なんか言い掛けて止めるんだ。で、ちよつと変な空気になって青春しちゃったり。

「夏休み明けには、きつと答えを出す」

え？

えっと、夏休みって明日からだよね？

それってつまり、最悪、1カ月以上は返事がないってことだよな？

「じゃから……それまでは待っていてくれ！」

え？ え？

どうして不死川、ダッシュで保健室から出てっちゃうの？

あの、せめてもう少し説明してから……。

……アレ？

これ、願い叶えてもらうのと違うね？

まあ、死のうにも、消毒用アルコールじゃ死にきれないし。

絶対に返事はくれるっていうんだから……待つしかないよな？

生殺しだよ、チクシヨウ。

12話目『願いを叶えてやるよ(すぐには言わない)』(後書き)

サブタイトルの元ネタが分かった方。

やれば返していただけなんですか？

はい、ちよつと睡眠不足で頭変になっています。

一応、コレで3章の話はおおよそ終了です。

何話か間を挟みつつ、4章：夏休み編に移っていきます。

テンプレートと化していますが。

ご意見、ご感想、ご要望、ご指摘など、諸々お待ちしております。

第3章までの風間ファミリー、2・Sの状況（前書き）

ゲンさんが入っていますが、そこはそれということ……。。

第3章までの風間ファミリー、2・Sの状況

川神 百代：

- ・川神ランキングに何か裏を感じているが、強者を選別できるので放置。
- ・焦っているように見える一子が心配だが、現状を把握していないため様子見している。
- ・港という人間に対して、若干の興味。
- ・上手くストレスがコントロールできているため、大和へのスキンシップが激減。

川神 一子：

- ・敗北が重なり、鉄心から川神院師範代の道を考え直すように言われている。
- ・トレーニングに身が入らず、能率が大幅に低下。
- ・負けることへの恐怖から、手加減や容赦をしない道に目を向けている。
- ・1人の人間としての港に強い興味。

椎名 京：

- ・大和に対して上手くアプローチができているため、少しずつ距離が縮まってる。
- ・まゆっちに対して、ファミリーへの想いが小さ過ぎるといふ邪推から、多少の嫌悪。
- ・不死川の強さに対し、素直な関心。

・大和がワガママを聞いてくれるため、今回の怪我を半ばラッキーだと思っている。

黛 由紀江：

・風間ファミリーの協力と関係ないところで友人ができたので、依存度が低い。

・港と風間ファミリーが対立しているように見えしており、肩身の狭い思いをしている。

・港、不死川、大和田、武蔵、入江に対し、風間ファミリー並みの依存。

・モロに対し、多少の恐怖と嫌悪。

クリスティアーネ・フリードリヒ：

・港に対して、精神性の低さを強く感じている。

・不死川の強さに関しては、高い評価を与えている。

・マルギツテが2-Fに来てから、マルギツテにファミリー以上の依存。

・モロ・ガクトとは交流が少ないが、女性陣とは一様に仲が良い。

直江 大和：

・日々のアプローチにより、少しずつ京に心動きつつある状態。

・港の血筋を把握し、場合によっては協力関係になってもよいと考える。

・川神ランキングに関して、何か裏があるのではないかと調査中。

・モロや一子の異変に気付くも、京との関係を優先。

風間 翔一：

・連続して格闘に負けたことは負けたが、大して気にしていない

・ファミリー全体の空気が妙なのに気付くも、気のせいだと思っ直

す。

・怪我人は出たものの、川神ランキングそのものを『息の長い祭り』だと思っっている。

・暴力が減った百代に、少しずつだが不思議な感情を抱く。

師岡 卓也：

・まゆっちや港に対して、強い嫌悪を感じている。

・京が大怪我させられたため、不死川に強い怒りと嫌悪。

・自分自身が役に立たない人間であると、劣等感を増幅させている。

・風間ファミリーの全員に対して、強いもどかしさ。

島津 岳人：

・まゆっちや港、不死川に対する罵詈雑言が増えていることで、モ口に多少の嫌悪。

・港に対して、F組の男友達程度の友好を感じている。

・風間ファミリーの外に、それなりの友人が増え続けている。

・武道家としての強さと生き様に、多少の興味。

源 忠勝：

・一子の元気がないことについて、強い心配感。

・向精神剤：ユートピアが広まりつつあり、その異変を察知。

・港の人間性を把握し、深く付き合うべきではないと判断。

・市外からアパートやホテルに長期滞在する人間が増えており、そのことに軽い疑問。

葵 冬馬：

・港に対する評価を、大幅に上方修正。

・手駒としては優れた人間であると、港に対する再評価。

- ・不死川に対する港の想いを把握し、2人の関係を消極的に肯定。
- ・連絡がつかなくなった板垣一家に対し、若干の焦り。

井上 準：

- ・冬馬のサポートに徹するが、ユートピアの拡散については内心否定的。

- ・港のブラジリアン柔術を見て、組技の対策をトレーナーに打診中。
- ・不死川と港が仲良くなり、マルギツテがいなくなったことで負担激減。

- ・川神ランキングの出資者について、深い不信感。

榊原 小雪：

- ・相変わらず、冬馬と準への強烈過ぎる依存。
- ・港に対して、不死川に対するそれと同程度の感情。
- ・川神ランキングに参加する意欲が増幅。
- ・ブラジリアン柔術に対して強い興味を抱く。

九鬼 英雄：

- ・川神一子の不調について、強い不安。
- ・港と過去に出会ったことは記憶にあるが、本人と特定できていない。
- ・港の血筋について確認し、港家を多少の脅威にはなると把握。
- ・ユートピアが広まっているのを知っているが、そちらに手が回らない。

忍足 あずみ：

- ・川神一子の不調について、かなり正確に推測。
- ・港に対する評価を上方修正し、精神性では自分に近い人間だと認識。

- ・ユートピアについて、個人的に探偵を雇って調査中。

・川神ランキングの提唱者と出資者に強い興味。

第3章までの風間ファミリー、2・Sの状況（後書き）

風間ファミリーの皆の現状などが一切出てこないため、小説進行用の簡易まとめから中身を引っ張ってきました。

ココに書いてあることはすべてではないですが、大体こんな感じですよ。

閑話『家に着くまでが買い物です』(前書き)

エアマスターのキャラが多く出てきます。
いつもと逆の比率です。

閑話『家に着くまでが買い物です』

保健室に居座つても仕方ないから、とりあえず着替えて帰った。
まあ、柔術着のまま帰るつてのは非常識だし。

武蔵は病院に行ったとかで、大和田さんと由紀江ちゃんは付き添い。
入江は……柔術着を洗いに行ったら、水飲み場でダウンしてた。
ガクトくに声かけるつてのは、マナー違反でしょ。

だからまあ、1人で帰った。

……案外虚しいんだなあ、1人で校門出るのつて。

月雄荘に帰ると、なんかテントが立ってた。

いや、アレってテントトって言うんだっけ？

なんかほら、背の高いポール立てて、家の屋根みたいな布が上に張ってあってさ。

運動会の来賓席とか、その辺で日除けで立ってたりするじゃん。

ああいうのが、なんでか知らないけど月雄荘の庭っぽいところに立ってた。

……目立つよなあ、コレ。

しかも、珍しく随分な人数が揃ってる。

管理人の月雄さんに、お隣の駒田さん、下に住んでるノブさん。

小西さんもいるし、プロレスラーのサンパギータ……カイさんもいる。

哲学者のカシオさんと、スナイパー空手の戸叶さん、ファミレスで働いてるトミコさん。

浦木さんはこういうことに参加しないし、三島さんは県外にいつちやっつたし。

作務衣……陶芸やってる人が着てるような、裾の短い服着てる男の人は誰だろうか。

まあ、ココにいるんだから、月雄さんの知り合いか、他の誰かの知り合いなんだろうけど。

「おう！ おかえり！」

「ども、ただいまっす」

片手を上げながら挨拶されたから、コッチも同じように返してみた

り。

相変わらずタンクトップが似合う人だなあ、月雄さん。
僕より2回りくらいゴツイ腕してるもん、そりゃ似合うよな。

「なんだ、勝ったか！」

「まあ、どうにか」

ほぼ無傷で勝ったけど、そんなこと自慢してもね。

小西さんとか駒田さんだったら、一撃で倒してたかもだし。

「それじゃあ、今日はダブルの意味でパーティーか」

いや、めでたいめでたい。

そんなことを言いながら、月雄さんが準備に戻ってた。

ていうか、何の準備だろうね。

パーティーって言うっちゃいるけど、なんのパーティーやら。

僕が試合で勝ったのがどうこうってわけじゃないだろうし。

さっき、ついでみたいに言ってたもんなあ。

さて、誰に聞こうか。

駒田さんはバーベキューの串を引っ繰り返してるし。

小西さんは、両手に2本ずつバーベキューの串とか持ってるし。

カイさんとトミコさん、カシオさんに戸叶さんは、飲み物の缶とか持ってるし。

見知らぬ人はともかく……まあ、こういうときはノブさんか。
なんだかんだいって、凄く面倒見がイイ人だもんなあ、ノブさん。

なんて考えながら、視線をめぐらすと。

肉と野菜を串に刺してるノブさんを、人の輪から外れた場所で発見。
なんか『どうして俺が……』とか言ってるけど、正直似合ってます。

「あの、ノブさん。ちょっとイイですか？」

「ん？ どうした？」

串を打つ手を止めずに、僕に顔を向けながら聞いてくるノブさん
この人、変なところで器用なんだよなあ。

大道芸にしてもそうだけど、日曜大工も手品もできるし。
僕ほどじゃないにしても、料理も相当上手だったからね。

……多分、こういう人のことを器用貧乏って言うんだろう。

「これ、なんの集まりですか？」

「なんか新しい入居者が来るとかで、歓迎会だったよ」

新しい入居者っていうと、もしかして天ちゃんとか竜兵かなあ。

一応紹介はしてたけど、手続きとかに時間はかかるだろうし。

荷物畳んでアルバイト変えたりして、まあ、1カ月は短い方か。

もし知り合いじゃなきゃ、僕から話しかける義理もないんだけど。

件の新しい入居者は見当たらないけど、なんで既に食ってたんだろ。

とかいう疑問は、ココに入ってから3カ月以内に払拭しないと疲れ

るだけ。
基本的に自分勝手な人だから、少数派の気の利く人間が世話焼かないと。

……僕も世話焼く側つてのが、非常に残念な話だけどね。

まあ、何するにしたって、ボーっと立ってるのは論外。

薬臭くなった柔術着もゴミ袋に入れときたいし、とつと自分の部屋に向かおうとして。

その途中で、月雄さんに呼び止められた。

「おい港。手え空いてるんだったら、おつかい頼めるか？」

「あ、荷物置いてきてからなら大丈夫ですよ。全然オツケエです」

高校生相手におつかいはないだろ、とか思うことなかれ。

月雄さんは中卒で、末っ子だったからおつかいを頼まれることが多かったそう。

でもって、おつかいという言葉以外で、買い物に行かされたことがないらしい。

月雄さんの頭の中じゃ、目下買い物に行かすのは、パシリじゃなくって『おつかい』だ。

「そのこの忍者と信彦と一緒に、ちょっと肉と野菜買ってきてくれ」

この期に及んで、まだノブさんに働かすかって思ったけど……忍者？月雄さんが首を傾けた方を見ると、僕が唯一知らない、作務衣着てる人が。

男にしちや長めの髪を、手入れもせずは無造作へアーにしてある。

まさか、この人が。

今まで聞いてた尾張忍者の……。

「尾形さんですか？」

「そうだ」

すつつつごい無愛想な顔して、コクリと頷く尾形さん。

え〜……この人と一緒に買い物に行くのか。

まあ、月雄さんの頼みだし、これくらいなら断る理由もないけどさ。勘だけど、この人って面倒臭そうなんだよなあ……。

両手に荷物もって、男3人で帰り道。

日が落ちてきて、もう少して夜になりそう。

歩くと15分くらいはかかるスーパーだから、車使つて欲しかったんだけど。

驚くことに、免許持ってるのが浦木さん1人だけなんだよなあ。

で、その浦木さんは勉強で忙しいから、徒歩で買い物に出なきゃいけないかった。

不思議なもんだよなあ。

学生と大道芸人と忍者が、3人揃つてスーパーにお買い物とか。いや、学生はともかく、大道芸人と忍者が同じ場所につてのがね。

ビックリするくらいスッキリしてる道で、誰も言葉を発さない。気まずさを感じてるのは僕だけなのか、ノブさんは鼻歌やってるし。尾形さん、何歳か知りませんが、年長者として気を遣ってください。

と、それとはまた別に、おつかいの中身つてのが微妙。

牛のブロックと、塩コショウと、ニンジン、たまねぎ、ピーマン、トウモロコシ。

串に刺して、バーベキューの足しにしようつてことなんだろうね。つていうか、アレだけの人数がいるんだから、材料は余分に買い込んでたんじゃないかなあ。

ああ、そついや小西さんがいるんだつたか。

あの人がいるだけで、肉の量が激減するからなあ。

いや、それが分かつた上で買い込んでたんじゃないのか？

月雄さんみたいな気の回る人が、そんなミスするか？

……なんか、1つ疑問に思うと、どうでもいいことまで疑わしい。

今歩いてる道って、こんなに人通らなかつたっけか？

平日の昼間に通っても、駅から月雄荘までの間に1人くらい擦れ違
うよな？

そもそも、この道って車もそこそこには通るっていうのに。

夕方の6時そこそこなんで時間に、僕ら以外に誰もいないなんてこ
とあるか？

でも、そういうことも考えられる。

いつもいつも誰かと擦れ違ってたら、それはそれで気色悪いし。

可能性ってことを言い出せば、充分考えられる。

考えられるんだけど……なんか、妙な胸騒ぎがする。

とか、イロイロ余分なこと考えてると。

僕らの進行方向に、軍服着た外人のオッサンが立ってた。

ポイントは、歩いてきたんじゃないやなくて立ってたっていうところ。

コツチを見据えて、手を後ろ手に組んで、そこに立ってる。

そんな怪しげなオッサンが、口元に頬笑みを浮かべながら声掛けて
来た。

「やあ」

なんだ、この軍人のコスプレしたオッサンは？
こんな街から離れたところで、何やってんだろ？
この辺、スーパーとコンビニくらいしかないんだけどなあ。
どっちにせよ、僕にこんな風変わりな知り合いは……いるけど、知らない人だ。

もしかしたらノブさんの知り合いかも。

なんて思って聞いてみたけど。

「外人の知り合いはいないぞ」

なんて答えが返ってきただけ。

ついでに尾形さんに視線をやるけど、尾形さんも僕の方見てた。
ってことは、この外人は尾形さんの知り合いでもない。

じゃあ、コイツ誰だ？

「君に用事があるんだよ。港ミチヒロくん」

「え？ 僕にですか？ というか、どちらさまで？」

日本語上手だなあ……じゃなくて。

僕の名前知ってるとか、本当にどちらさまだよ。

それにコイツ、アメリカ系って言うか西欧系だよなあ。

西欧つつたら、フランス、イタリア、スペイン、ドイツ。そもそも、海外に行ったことない僕に、外人の知り合いなんかできないでしょ。

駅前で話しかけられたことあるのは、イスラム系の人だけだし。

あん？ ドイツつつたら、クリスティアーネもドイツ人だったような。

でもって、確か親父が軍人さんで……いやいや、考えすぎだろ。

なんて思ってたのに。

「今日は娘が世話になったね、ミチヒロくん」

目の前の軍人さんは、僕の希望を打ち砕いた。

つてことは、これがクリスティアーネの親父さん。

噂じゃ、相当アレな人だつてことだったけど、信じとくんだった。

娘のために一個中隊派遣するとか、特殊部隊持つてるとか。

男が娘に寄りついたら、殺して始末してるだとか。

ドイツに帰ったんじゃないかねえのかよ。

いや、そんなことはどうでもいい。

何言ったところで、目の前にいるんだ。

子煩悩のバカ親軍人野郎が。

「とりあえず、君の両手足の腱を切るのは決めたんだが、他に悩んでいてね。」

娘の鼻を折ってくれた意趣返しとして、鼻を削がせてもらうつもりではいるんだが」

いきなり報復かよ。

子どものケンカに手え出すとか、親としてどうなのかなあ。

手っていつか、少なくとも刃物は使ってみただけどさ。

僕の手足の腱を切って、鼻削ぐつもりらしいし。

「ああ、私が何者かということはどうでもいい。

どうせ聞いたところで、すぐに君は殺されるんだからね」

聞かなくても、少しは知ってるよ。

顔は知らなかったけど、素性は知ってるさ。

フランク・フリードリヒ中将だよ。

ドイツの軍隊の中枢を担う一族の長の、フランク・フリードリヒ。

パイロットとしても優秀だったとかで、武勲は数知れない。

そんでもって、この様子だと子飼いの部隊を持ってて。

男子高校生の家を洗い出して、わざわざ付け回す程度には優秀らしい。

まったく、さすがだよ。

思わず口に出しちゃうくらい。

「さすがフランク・フリードリヒ中将」

「さすが私かね？」

「さすがフランク・フリードリヒ中将」

「私が……さすがか？」

「貴方がさすがです」

「さすが私だな」

「そうです」

「君はバカだろう？」

「貴方に合わせたんですよ」

まったく、本当にまったく。

心の底からバカだ、この人は。

わざわざ、娘がケンカに負けた相手を殺しにかかるとか。

このようすだと、何人か日本で娘を監視させてたんだろうね。

まったく、私用で軍隊動かすってたんだよ。

……ほら、バカのレベルに合わせてあげたのは僕だ。

「なあ、港。コイツは何モンだ？」

クソッ！ ノブさん、そういう質問はもっと早くしてください！
完全に2度手間です！

あと、そいつは何持ってるか分からないんで、指差すのは止めて下さい！

「留学生の父親です。現役軍人だそうで」

「なんでココにいんの？」

「今日、その娘さんと僕が戦ったんです。」

それで、その娘さんボコボコにしたんで僕を殺すそうです」

ふーん、とか興味なさそうなノブさん。

まあ、僕のことだし、別に関係は無いよね。

話からするに、ノブさんらは見逃してくれるかもだし。

何やってくるかわからない奴相手にするよりは、僕を見殺しにした方が楽だしね。

絶対に、そういうことする人じゃないんだけど。

「ちょっと持ってる」

とか言いながら、僕に荷物を渡してくるノブさん。

あ、この荷物軽っ！

こんなにピーマンをギッシリ買ってどうすんだよ！

たまねぎもニンジンも、ちょこっとしか入ってないじゃん！

なんて思ってるうちに、ノブさんはサングラスを掛けて。僕とフランク中將の間に、スルリと割り込んで。

「アンタ、コイツに用があるんだって？」

「その通りだ。まさか、邪魔をするつもりじゃないだろうね？」

前に両手を伸ばして、パン、と手を打って。

フランク中將を迎え入れるみたいに、両腕を大きく広げて。

大道芸の時にしてるみたいなの、不敵な笑いをした。

「そのまさかだ。鼻血の海に沈んでろ」

言い終えた瞬間、ノブさんとフランク中將が光に包まれる。

いつも大道芸でやってる、あの花火芸の1つ。

黒色火薬だかを細かく撒き散らして、手元の小さい火打石で着火して。

あっという間に周囲を光で包む、ノブさん独特の技。

ノブさんは、こういう手を使って戦う人だったらしい。

でも、それは弱いからじゃなくて、より確実に勝つため。

深道ランキングだとかじゃ、7位に入ってたとかなんとか。

小西さんが3位で、駒田さんが6位だったっていうから、かなり強いとは思う。

駒田さんでさえ、コンクリの壁を素手でブチ抜くレベルらしいからなあ。

1つ下のノブさんも、きつとそんなに差は無いはず。

僕なんかよりも、ずっと強いはず。

光が、段々と薄れていく。

つていうより、むしろ光の中に誰かが現れたみたいな感じ。

2人の男が光の中にいて、光が収まる頃に立っているのは1人。

鼻血出して仰向けに倒れているのは、さっきまで毅然とした態度で立っていた男。

ノブさんだった。

「大丈夫ですか、中将」

「大丈夫だ。もし君が来なかったら、この無礼者を撃ち殺していたがね」

なんか知らないけど、いつの間にかマルギツテがいた。

いや、いつの間にかって、ノブさんが火薬に火い付けたときに割り込んだらうけど。

余裕の笑みのままで動けなくなってるノブさんを見ると、何とも言えない気分になる。

フランク中将の言葉通りなら命拾いしたんだし、よかった……のかなあ？

僕のせいで痛い目見たみたいだし、ちょっと申し訳なかつたり。

「お言葉ですが、すぐに撤退すべきです」

「何故だ？」

「この男が住んでいる借家に、念のため偵察部隊を向かわせたのですが……」

コイツ、月雄荘に軍隊向かわせたのか！

なんつーことしてくれたんだよ！

あの人らには世話になってんのに……クソが！

「全滅させられて、金属ゴミの袋に詰め込まれています」

……一番余ってたのが、金属ゴミの袋だったんだろうね。
買ってもそんなに使わないもんなあ、アレ。

じゃなくて、返り討ちにしたんかい！

どうやってたら訓練された軍人を返り討ちにできるんだよ！

とか思っただけど、なんか出来そうな気がしてきた。

相手さんが銃さえ持ってなきゃ、むしろ皆さんが負ける姿が想像できない。

駒田さんは素面だったし、小西さんの持ってた缶もコーラっぽかったような。

まだ全員酒が入ってなかったとすると……あるかもなあ、返り討ち。カシオさんとかトミコさんとか、戸叶さんあたりは負けそうだけど。

「既に通報もされて、警察が動き始めています。急いでください」

「そうか。確かに君の言うとおり、撤退した方がよさそうだ」

とか言いながら、フランク中将が一步下がって。

「ただ、この男を今すぐ殺さなければ、私の気が済まん」

……いつの間にか銃構えてた。

やっべ、いつ銃を抜いたか見えなかった。

確定予測で……ダメだ。

今、ちらつと頭ブチ抜かれる映像見えた。

こりゃ、八方塞か？

いや、せめて首を振れば、なんかの間違いで弾丸が頭蓋骨滑ってく
れるかも。

この際、耳くらは諦めてもイヤ。

えっと、笛？
すごく高い、笛の音、か？
こんな開けたばしょで、いきなりふえの音？

あれ？

世界がまわる。

じめんが、近い？

みみがいたい。

たてない。

なんで。

ずっと、音がきえない。

どこからおとがきこえてるのか。

うしろじゃない。

ぼくのとなりから、前におんげんがいどうする。

おがたさんから、音がきこえてくる。

おがたさん、1、2、3、4、5……8にん？

どうしておがたさんが8にんもいるんだ？

ふらんくちゅうじょうもひざをついて、まるまわってもばらんすくず
してふらふらしてる。

なにがおこってんのか、ぜんぜんわからない。

ひぎだちのふらんくちゅうじょうに、3にんめのおがたさんがちか
よって。

てににぎられていたけんじゅうを、ひょいとつばいとって。

「子どもに銃を向けるな」

なんて、かっこつけたことって。

フランクちゅうじょうのみに、口をちかづけて。

その口から出てるおとが、ほくの耳にまで強くひびいて。

その音が止むころには、フランクちゅうじょうが地面に倒れてた。

マルギツテも辛うじて立ってるけど、もうフラフラ。

いや、僕もフラフラっていうか、足元おぼつかなくて立てないけど。

っていうか、僕も耳が痛いんだけど、なんだこれ？

まさかとは思うけど、忍術とか？

まあ、銃を向けられるよりはマシだから、なんだってイイよ。

「見逃してやる。すぐに拙者達の前から失せる」

尾形さんの言葉が理解できたのか、マルギツテはフランク中將を抱えて。

本当に、あつという間って言葉が似合う感じで、すぐに路地からいなくなった。

でもって、ようやく僕は、本当に命の危険から脱することができた。

ついでに、何回瞬きしても、尾形さんは1人しかいなかった。



「荷物を貸せ」

「いや、大丈夫です。持ってけますから」

なんて尾形さんが言うけど、自分でできることは自分でしなきゃ。まだフラフラだけど、歩けないこともないくらいには回復してきているし。

しっかり集中すれば……ほら、ちゃんと立てた。

でも、さすがにビニール袋4つはキツイかなあ、とか思っていると。尾形さんが、僕の両手から素早く荷物を奪い取っていった。見た目からは想像できないけど、案外優しい人なのかも。

「俺が荷物を持っていくから、そのアホを運んでくれ」

前言撤回。

特に優しい人じゃなかったらしい。

どう考えたって、ノブさんの方が重くて運びにくいじゃん。

僕がノブさん運んでるかどうかも確認しないで、とつとと先行っちゃうし。

まあ、命を助けられた手前、文句なんて言えやしないけど。

とりあえず、頑張つてノブさん担いで帰りますか。

天ちゃんたちが来てるなら、まあ、早めに会つときたいし。

竜兵は……諦めるか。

閑話『家に着くまでが買い物です』（後書き）

次回、板垣一家勢揃いの予定です。

月雄荘の面々＋も、ちよこちよこ出していきます。

もはや定型文となっておりますが、

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、イロイロ諸々とお待ちしております。

閑話『いたがきけ!』(前書き)

辰子さん分は希薄です。

閑話『いたがきけ!』

あれから20分くらい。

ノブさんを抱えて、どうにか徒歩10分の道を踏破した。

いや、ノブさんは70kgもないからいいんだけど、平衡感覚がね。途中まで壁にぶつかりながらだったから、もう大変で大変で。

で、とりあえずノブさんを部屋に転がしてから、中庭に戻ってきたところ。

……まだ目が覚めないのが気になるけど、頑丈な人だからきつと大丈夫。

それと、さっきノブさん運んだ時にチラツと見たけど。

月雄荘に残ってた皆さんも、しつかり無事で安心した。

小西さんとは駒田さんは、見るからに無傷っぽい。

戸叶さん、カイさんも怪我はなさそうだし、トミコさんは鼻血だけ。月雄さんも月雄さんで、ちょっと顔腫れてるけど大丈夫そう。

倒れてるカシオさんが気になるけど、放置されてるなら死んじやいないだろうし。

こう言っちゃなんだけど、みんな大した怪我じゃなくてよかった。

っていうか、ほとんどの人が酒入ってるのはどうしてなんだろう。誰の近く通っても、すごい酒臭いのは勘弁して欲しいんだけど。この調子じゃ、後片付けは僕の仕事になるんだろうね。

そう、後片付けと言えば。

月雄荘のどこかにあるはずの、金属ゴミの袋が見当たらない。

「あゝ、金属ゴミはどうしたんですか？」

月雄さんに遠まわしに聞くのは、ハッキリ聞くのが怖かったから。ノブさん引きずってきて時間かかったとはいえ、20分は経ってないだろうに。

それはつまり、マルギッテが退却してから今に至るまで、だいたい20分くらい。

そんな短い時間しか経ってないのに、なんで金属ゴミの袋がないのか。

カモフラージュして収集車に運ばせたなんて言われたら、僕はもう日本にいられない。

「業者さんが引き取ってくれたぞ。パトカーで」

業者ちゃうわ、とか言えない自分が憎い。

引き取ってった警察も警察だけど、アツサリ渡す月雄さんもどうかしてるって。

まあ、僕自身はともかくとして、身内で得する人もいるんだよ。外国の軍隊が入ってきてても無視されてるってだけで、与党のイメーシ落とせるし。

最近は与党叩きのネタも少ないから、梅おじさんも喜びそう。

僕自身の身を案じるなら、早めに手え打つとかないとなあ。

さすがに綾小路も動くだろうし、夏休み中はなんとかなるかも知れないけどさ。

身の安全が保障されてるわけじゃないんだし、キツチリ諦めてもらわないとね。

さしあたって、クリスティアーネの顔が見れるくらいになったら、1回見舞いに行くか。

「つーか、アレは港の知り合いか？」

「知り合いって言うより、一方的に因縁つけられた感じです」

潰された人らとは知り合いじゃないし、司令塔とは知り合いになっただけだし。

知り合いって言い切るにも、ちょっと微妙な関係だよな。

「そっか。いや、知り合いだったらどうしようかと思ってたんだよ」

なあ、って月雄さんの声に誰も反応しない。

なんというか、この辺の協調性のなさが月雄荘らしい。

小西さんに駒田さん、ちょっと気まずそうに目を逸らしたのが気に

なるんですが。

「おい、小西とシゲオ！ 面倒事になったらテメエらのせいだぞ！」

言葉は聞こえてるんだろうけど、聞こえてないフリしてる。

あんなに分かりやすい目の逸らし方する人ら、初めて見たよ。小西さん、いちいち口笛吹くと余計に怪しくて仕方ないです。

っていうか、そんな後ろめたいことしたんだ。

小西さんが後ろめたいとか、相手さんは生きてるのかなあ。

「……たく。ホント、港の知り合いじゃなくてよかったぜ」

僕の知り合いじゃない分、余計な手間が増えたと思いますよ、月雄さん。

知り合いだったら、まあ、頭下げるなり賠償なりでどうにか済ませどさ。

そういうのと別次元の感情論で襲って来たんだもん、簡単なようで難しい。

シンプルだけど、そのせいで解決し辛いつて言った方が正確かなあ。

まあ、しみつたれたこと考えても仕方ないし。

ちよっと話題をそらしてみよう。

「そついえば、尾形さんは？」

「ああ、アパートの裏で拳銃分解してんじゃねえか？」

へへ、最近の忍者は何でもできるんだね。

日焼けのアフターケアの塗り薬も秘薬だとかいうし、思ったよりマルチな感じ。

将来儲けることがあったら、九鬼みたいに忍者雇ってみようかなあ。

……拳銃について何も言わない月雄さんには、絶対つっこまないぞ。

「ま、細かいこと気にすんな！ 肉が冷めちまうぞ！」

僕の背中を、バシバシ叩いてくる月雄さん。

あっはっはっは、軍人とか拳銃くらいは細かい事ですか。

素手でコンクリの壁ブチ抜いたりするような世界で戦ったことある人だもん。

拳銃が出てきたところで、今さら驚くこともないってか。

まあ、多分だけど、僕に気を遣っておどけてくれてただけだね。

……うん、こついうノリが嬉しくて、この安アパートから出られないんだよなあ。

ポチポチ肉食つてると、人混みの中に見知った顔が。
でもって、ちょうど目があったからか、コツチに駆け寄ってくる。

いやいや、みんな見知った顔なんだけど、お目当てってことかなあ？
派手な髪の毛をツインテールにまとめて、黒を基調とした気合入った服を着てて。

僕好みのスタイルで、ニッコリ笑うとカワイイ八重歯が見える。
そんな板垣天ちゃんが、コツチに駆け寄ってきた。

「へへっ！ 久しぶり！」

「うん、久しぶりだね」

紙カップに入ったジュースと、肉ばっか刺さってる串を手に笑う天ちゃん。

うん、楽しそうで良かった。

やっぱり、この子は笑ってるのが1番だ。

この辺だったら空気もキレイだから、体にもイイだろうし。
家賃は上がったから、働く時間が増えるのは大変かもしれないけど
ね。

今日から命の危険があるっていうのは、大事になるまでは黙っとこ
う。

「ほら、コッチコッチ！」

天ちゃん、僕の左腕に胸押し付けてくれるのは嬉しいんだけどさ。右手の紙コップの中身が、思いつきりシャツに染み込んで。左手に持つてる串が、さっきから左胸にチクチク刺さってる。胸の感触が惜しいから、我慢してあげるけどね！

で、天ちゃんに引つ張られた先には、竜兵と女性が2人。お姉さんがいるって話だし、多分、この2人がそうなのかな。……パツと笑顔になった竜兵なんて、僕の視界にはおさまっていない。

「コッチが亜巳姉で、コッチが辰姉な！」

アミさんにタツさんか。

つつても、愛称かなんかだろうね。

竜兵のこともリユウって呼んでたからなあ。

そんなことはともかく、とりあえずは自己紹介しとかないとね。

「どうも、港 三千尋です」

軽く会釈しながら、名前だけ伝えとく。

まあ、この人らは初対面だし、あんまり細かく言うのもね。

「板垣 亜巳だ。その天と、辰子と竜兵の姉さ」

ちよっとケバい化粧した……声の感じからだけど、20代前半くらいか。

声より少し老けて見えるのは、まあ、イロイロ大変だからだろうね。妖艶とかいう言葉が似合いそうだって思うのは、僕だけじゃないはず。

ガクトくんがいたら『大人の魅力』とか言っただろうけど、僕からしたらボール高め。

化粧、薄くすればいいのに。

「板垣 辰子です。竜兵の双子のお姉ちゃんだよ」

ミチヒロくんとも同い年、ってそりやそうだよな。

こっちはまあ、なんとというか胸と一緒に大らかそうな人。

っていうか、僕より少し低いくらいつて、女性にしちゃかなり背え高いなあ。

巨乳と大らかってキーワードのせいか、なんとなく榊原を連想しちゃう感じ。

……いかん、ちよっとムラッときた。

「そして俺が、板」

「ところで皆さん、どの部屋に住まれるんですか？」

竜兵を華麗にスルーしたところで、大事なことを確認。全員別の部屋に住むなら、計4部屋が必要になる。月雄荘の余り部屋は5つで、1つが僕の部屋の隣。板垣家の誰かが隣になる可能性は、充分に存在してる。

で、なんでそんなに気にしてるかって言うと。

隣の部屋に竜兵が住むんだったら、扉を強化しなきゃならないからね。

もし竜兵が不法侵入したら、とりあえず手首壊す。

「2部屋借りてるね。105号室と205号室の2つを」

「なあ、ミチヒロ。オマエはどここの部屋なんだ？」

オマエの興味津々な目が怖えよ。

というより、僕の部屋を知ってどうするつもりだ。

いや、どうするかは予想がつくけど、思い通りにはさせないからな。

「……………につ、204号室に部屋借りてるんだよ……………」

ちよつと探るみたいに、ボソツと言った僕。

それでもって、僕の言葉を聞いて黙りこむ竜兵。

で、一拍の間をおいて。

「うおっしやああああ！」

と、天ちゃん。

紙コップと串を握りしめて、天に向かってガッツポーズ。

……叫ぶほど嬉しいことだったんだ。

紙コップの中身が雑草の栄養になったのには、目をつむっておこう。

「チクシヨウがああああ！」

と、竜兵。

膝から崩れ落ちて、地面に向かって連続パンチ。

……泣くほど悔しいことだったのかよ。

どれだけ涙を流したところで、僕はオマエを友人より上には見ないぞ。

「なんだ、辰と天がアンタの隣部屋なのかい？」

「そうですね、僕が204号室なんで」

ん？ ああ、そういうことか。

亜巴さんと竜兵は、105号室に住むんだ。

まあ、竜兵が隣じゃないんだったら、他はなんだったっていいけど。

天ちゃんが隣なのは嬉しいけど、そこはそれ。

カワイイ子が隣に住んでるってだけで、なんか潤う感じとかしない？隣の部屋が騒がしくっても、美人ってだけで無条件に許せるじゃん？ベランダを覗けば下着も見れるし、嬉しいハプニングもあるかもしれない。

いや、不死川一筋なのは変わらないけどさ。

「悪いけどさ、コイツらが困ってたら手を貸してやってくれないか？」

「ええ、構いませんよ。任せて下さい」

割と真剣そうな亜巳さん。

この人が親代わりやってきたんだろうし、心配にもなるよね。

竜兵は僕と同じ年らしいし、天ちゃんも1つ下。

ああ、そうすると、辰子さんも同じ年になるのか。

どっちにしても、アレだ。

まだまだ高校生って年齢で、そこらの家庭なら子ども扱いだろうし。

僕が引つ越させたみたいなの節もあるから、これくらいなら喜んで。

事と次第によっては、月雄さんにも手伝ってもらおうけどね。

「うおら、ミッチー！」

「なんぐぶう！」

振り返れば奴がいた。

というか、天ちゃんが僕の腹に膝蹴りをくれた。

何も食ってないから良かったけど、胃に食べ物が入ってたらと思うと……。

この子は、もうちょっと加減とか手心とか、そういうのを覚えるべきだと思うね。

「肉もらったから一緒に食おーぜ！」

肉より先に膝蹴りくれるとか、どういう思考回路なんだろう。

まあ、本格的に響いたわけじゃないから、別にいいんだけどさ。しっかし、軽い割にはイイ膝蹴り持ってんじゃない、天ちゃん。

「それはいいけど、お礼は言った？」

「おう！ あの人でいいんだろ？」

天ちゃんの指の先にいたのは……ノブさん。

鼻にティッシュ詰めながら、延々と串を打ってる。

しかも、今度は炭の近くで、串を引つ繰り返しながら。

死んだ魚の目で『なんで俺が……』とか言いながら、手は動き続けている。

どうしてこう、ノブさんだけ貧乏クジ引いちゃうんだろ。

いや、手伝わないけどね、面倒だから。

おっと、竜兵が視界の隅に。

「ミチヒロから離れるおおお！」

随分と気持ち悪い言葉を吐きながら、竜兵が拳を振り上げてる。しかしまあ、隙だらけっていつかなんというか。

……ああ、天ちゃん狙ってんのか。

右ストレートから、大きく踏み込んで打ち降ろし気味の左フック。両方とも天ちゃんは避けるけど、ダッキングしたせいで、次の右ミドルが当たる。

KOされるほどのダメージじゃないだろうけど、吐くよね、コレ。

まあ、本当にそうなっちゃう前に、竜兵潰しとくか。

竜兵の右ストレートが伸びきった瞬間に合わせて、その足に蟹挟み。地面に右手ついて、左スネで膝裏蹴って、右ふくらはぎで足首刈って。

膝カックンみたいになって、竜兵がつんのめって地面に膝叩きつけて。痛みで動きが止まった瞬間を狙って、地面に着いてた右手で体を移動させて。

膝立ちの竜兵の後ろ取って、左腕絡めてチョークスリーパー！。

「むぐううおおあああがはあっ！」

必死に抵抗してるけど、無駄無駄。

僕の腕力でやるチヨークスリーパーは外れない。

抵抗しようとしても、僕が竜兵のふくらはぎに膝乗せてる。

それだけじゃなくて、地面に押し付けるみたいに体重掛けてるから立ち上がれない。

両手がフリーなはずだけど、なんでか使ってこないのが不思議。

「ぐぶあっ！」

最後に盛大に空気を吐き出して、竜兵は静かに意識を失った。

で、首を絞めてた腕を剥がして、素早く立ち退いたんだけど。

竜平……オマエはどうして、自分の股間を触ってるんだ。

仕掛けて来たのが僕って分かったからって、何しようとしてたんだよ、コイツ。

起こすのも怖いから、そのままにしよう。

「ったく、いきなり妹殴るとかどういう」

「へっ！ ざまあ見るボケ！」

……天ちゃん、せっかくイイこと言おうと思ったのに、何してんの。いくらなんでも、倒れた兄貴の頭蹴りつけるのは感心しないぞ。でも、竜兵だしギリギリセーフかなあ。

「イェーイ！」

「いえーい……」

とりあえず、天ちゃんに合わせてハイタッチ。

ホント、笑顔の似合う子だ。

こういうこととして清々しく笑うのは、ちょっとどうかと思っけど。でもまあ、泣いてたり怒ってたりするよりはイイよね。

これからは、家帰ってからも賑やかになりそうだ。

さて、宴もたけなわ。

辛うじて動ける月雄さんとカイさんを、それぞれの部屋に押し込んで。

とつくにダウンしてた小西さん、駒田さん、トミコさんをテントの下に。

戸叶さんは自分で歩けたから、自発的に部屋に帰ってもらって。失神したままの竜兵は、その場に放置。

辰子さんはとつくに部屋に帰っちゃたし、さつき天ちゃんも寝かせて来た。

さつきからカシオさんが動いてないのは、きつと気のせい。

今起きてるのは、ノブさんと尾形さんと、僕と亜巳さんだけ。

パーティーに参加してなかった浦木さんも起きてるけど、今は部屋の中。

僕がバーベキューの串と飲み物だけ渡してきて、それっきり。

ああ、そうそう。

尾形さんだけど、なんか3カ月だけ月雄荘に住むんだってさ。

ノブさんの兄貴に呼ばれたとか何とかで、はるばる尾張から呼び出されたんだって。

……分解した拳銃をどうしたのか聞きたかったけど、まあいつか。

「ああ、そうだ」

ほろ酔いになってきた亜美さんが、僕に紙を渡してきた。紙って言っても、なんかツルっとした感じの、折り込みチラシみたいなヤツ。

なんか4つ折になってて、折り目のところがちょっと膨らんでる。

「コレ、よかつたら付き合ってやってくれないかい？」

「え〜っと……温泉旅行ですか？」

それを開くと、料金とコース内容の他に……あとはチケットが1枚。

場所は静岡、見覚えのある旅館の名前。

何年前か忘れたけど、綾小路で貸し切ったところか。

ココ、宿泊に2食付きで、8万くらい取らなかつたっけ？

1番安い部屋に泊まるだけでも、2、3万したと思うんだけど。

このチケット4人組用なんだから、家族4人で行けばいいのに。

「3日前に、Mコースの豚が『私の妻と娘と是非！』とか言ってるんですけどね。」

職場のシフトの関係で私だけ都合がつかなくて、ちょうど困ってたところなんだよ」

Mコースとか豚ってことは、S嬢でございましたか。

豚って言葉は御法度って聞いたことあるけど、そうでもないんだね。

……いやいや、僕がそういうところに造詣が深いんじゃないかね。

ほら、サブミッシヨンスクールの麦村さん。

あの人がSMクラブの常連で、なんかM嬢に豚って言って殴られたって聞いてさ。

以来、その世界では豚は禁句だって、僕が勝手に思ってるだけだから。

「急で悪いけど、無駄になるよりはいいと思ってさ」

「そういうことなら、ありがたく受け取らせてもらいます」

助かるよ、とか言いながら微笑む亜巳さん。

化粧濃いけど顔はイイみたいだし、やっぱり笑うとキレイだね。

天ちゃんも笑ってた方がカワイイし、辰子さんも朗らかな笑顔が似合ってる。

竜兵は……男がモジモジしながら男に微笑むのは、ちょっと気持ち悪いってことで。

「あの子ら、ちょっと常識ないからね。旅先でトラブル起こさないか心配で……」

ああ、なるほど。

そういう意図もあったりするのさ。

……右膝の調子も良くないし、ちょっと騒がしい湯治ってことでいいや。

「ま、アンタくらいしっかりしてる奴が一緒なら、アタシも安心だ

よ

「僕も大概又けてますけどね」

なんて会話をした後、なんか2つ3つ適当に話して。

結構イイ時間だからってことで、亜巳さんも部屋に帰ってもらった。新しい入居者に、初日から宴会の片付けさせるわけにはいかないからね。

まあ、ノブさんに骨を折ってもらわなきゃいけないのは、少し申し訳ないと思うけど。

しかし、温泉旅行ねえ。

もっと遅けりゃ、不死川に温泉まんじゅうでも買ってくるんだけど。

まあ、膝の調子が悪いのも間違いは無いんだし、今はゆっくりしておきますか。

閑話『いたがきけ!』（後書き）

少々やつつけない感もありますが、この閑話を以って3章終了です。クリスパパを綾小路がどうやって止めるかは知りませんが、きつと外交的なところを圧迫してくれるはず!

本文中の『梅おじさん』は、野党幹事長です。

彼の本名は『蘇我 梅雪』、綾小路の分家だったりします。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘、矛盾点などありましたら、是非とも一筆書いてやってください。

どうにも書き辛いことでしたらメッセージでもOKだったりします。メッセージをいただいた場合にも、感想と同様、丁寧に返事を書かせていただきます。

1話目 『私たちを温泉旅館に連れてって!』

イロイロあって、温泉旅館に赴く当日。
本当にイロイロあったんだよ、今日に至るまでに。

まず初日は、タンスやらの大型家具の配置を手伝わされて。
辰子さん……辰子ちゃんが寝入っちゃったから、僕が3食作らされて。

ピーマン尽くしの料理でも美味しく食べれるようにするのが、これまた大変で……。

朝が野菜炒め、昼が野菜たっぷりのミートスパ、夜がピーマンの肉詰め。

夕ダで野菜もらえたって言っても、さすがにコレはきつかったわ。
辰子ちゃんは少し料理できるみたいだけど、他に誰もできないってなあ。

亜巳さんに残しておいたサラダとパスタまで、全部食っちゃまいやがっつたし。

夜遅くにパスタソース作るのは、ちょっと切なかった。

つか、初日から竜兵のウザいこと。

僕が使った箸を持ちかえろうとするし、パンツ盗もうとするし。トイレで長時間何をしてきたのか、手も洗わずに執拗に握手を求めてくるし。

夜に風呂から上がってきたら、なんでか僕の布団の中に入ってるし。……僕の靴下が1足見つからないのは、どっかに紛れてるからだと思いたい。

でもって2日目は、朝から洗濯をやらされた。

っていうか、洗濯機がないとかで僕の部屋のベランダに大集合。

辰子ちゃんと僕で、男女に分けて洗濯物を干したのは記憶に新しい。

まあ、辰子ちゃんも気を遣ってくれたんだろうけど、もうちょっと考えて欲しかった。

僕が男モノを干して、辰子ちゃんが女モノってのはイイんだけどさ。上着も下着も僕のベランダに干すんだもん、丸1日目のやり場に困って困って。

あと、狭いベランダでデカイ2人が作業するから、胸が何度も当たってさ。

いっそ何か言ってくれればいいのに、何も言わないから逆に気まずかった。

それで、午後からは生活必需品買いに行つてさ。

食器はあるから、トイレトペーパーとかサランラップとか。

あと、物干し竿とハンガー、スポンジに食器用洗剤も。

洗濯機は高くて手が出なかつたから、また次の機会って話になった。まあ、僕の部屋の洗濯機使えばいいし、慌てる必要もないんだけどね。

そんな怒涛の2日間がようやく終わって、温泉旅行当日。

今さらだけど、高校生くらいのガキ4人で旅行でイイのかなあって案の定、旅館に電話したら『未成年者様のみ宿泊は……』なんていうから。

結局、綾小路の名前使って手え回して、特別に泊れるように計らってもらった。

落ちぶれ始めって言っても、まだまだ綾小路の威光は強いらしいね。

それで、バス 新幹線 バスってローテーションで旅館に到着。

途中、天ちゃんガバスの中でダウンしたってトラブルもあったけど、荷物を失くすこともなく、事故も怪我も特になく。

どうにかこうにか、目的の旅館に着いたってのが今。

バスから荷物降ろして、手元のチケット確認して。

で、他の3人に任せるのもなんだから、僕がチェックインの手続きに行った。

電話したときに僕の名前使ってたんだし、僕が行くのが妥当ってもんでしょ。

ああ、旅館なんて言ってるけど、老舗ってほどでもなくってね。

部屋の内装こそ純和風なんだけど、エントランスは和洋折衷で。

仲居さんの隣にホテルマンが立ってるのが、ちよつと滑稽な感じ。

昔行ったときは、和風の内装しか目に入ってこなかったけど……。

まあ、歳とったお陰で、周りがよく見えるようになったらどうだね。ガキの頃は、本当に周りが見えてなかったからなあ。

4人で旅館に入って……お迎えがない。

これだけ金取る旅館だったら、一部従業員だけでも頭下げに来るはずなんだけど。

いや、堅っ苦しくないから結構なことだけども。

経験上、こういう旅館から潰れてくんだよなあ。

老舗だなんだつつつても、所詮はサービス業なんだから。

「予約してた港ですけど……」

なんて僕が言った瞬間、仲居さんの態度が変わった。

悪い方にじゃなくて……いや、悪いのかどうかも分かんない。

媚を売るみたいなの、人に取り入ろうとするみたいなの笑顔になった。

「はい、港様ですね！ 心よりお待ちしております！」

ささ、お連れ様も荷物を。

そんなことを言われながら、荷物を預かってもらったり。

なんと言っか、この旅館もギリギリなんだろうなあ。

でも、サービス業つつつても、品格無くなったら終わりだよ。

老舗なんて銘打ってりゃ、尚のことね。

……まあ、僕には関係のない話だけども。

ここに泊ってる間、3人が気楽に過ごせりゃいいんだから。

ホテルマンが荷物を持ってつてくれたおかげで、そこは楽しかった。案内された部屋も、昔泊まった部屋より豪華でビックリした。

露天風呂が部屋の外に備え付けてあって、気楽に風呂に入れそうだと思った。

それとは別に、部屋に不穏な空気が流れてる。

誰1人として行動を起こすこともなく、そわそわと動き回ってた。

ひたすら茶を淹れ続ける僕に、それを飲み続ける竜兵。

お菓子を食べ尽くした天ちゃんも茶で口を湿らせて、辰子ちゃんが暇を持て余してる。

テレビの電源を入れても、オバハンが推理して殺人犯捕まえるドラマが映るだけ。

ニュース見て面白いのって、この中じゃ僕しかいないってのも分かりきってるし。

「さて、来たのはいいが……」

そこまで言って、竜兵は口を閉じる。

いや、何が言いたかったかは何となくわかる。

僕だけじゃなくて、天ちゃんと辰子ちゃんも分かってるはず。

まったく血のつながってない僕まで、今だけはこの姉妹と共感できた。

要するに、アレだ。

旅館に来たのはいいけど、することがない。

辰子ちゃんは寝るのが趣味みたいに話してたし、竜兵も普段はケンカばっかだとか。

天ちゃんは携帯ゲームをやらない主義だし、僕も本読むくらいしかすることがない。

トランプかUNOでも持つてくりゃ良かったんだけど、どっちも持ってなかったし。

さつきチラツと売店覗いたけど、遊べそうなもんは一切無かった。

いや、マグネット将棋盤とオセロがあったけど、みんな遊べないんだもん。

将棋に関しちゃ、みんながルールそのものを知ってるかもわからない。

さすがに、準備不足って言わざるを得ないだろうね。

「それじゃあ、風呂でも浴びてこようか」

「……まだ早くね？」

「いや、ココの風呂広いし種類多いからさ」

だから何だよって顔しないでよ、天ちゃん。

こういうときは『ホントに？ 今から楽しみだね！』とか言ってさ。一旦風呂に入っておこうって流れに持ち込むのが、大人の対応なんだぜ。

確かに晩飯までには時間があるけど、することがないのは同じ。ここって山の中だから、どっかに遊びに出掛けるのも難しいんだし。さすが老舗気どりって言うべきか、ゲームの筐体さえ置いてなかったし。

それに、せっかくの温泉旅館なんだから、その『温泉』の部分も楽しんでやらないと。

まあ、今だって『旅館』の部分を堪能できちゃいないんだけどね。

「あゝ、そうだよ。お風呂入ろうよ〜」

「そうだな、ひと汗流してくるか」

さすが辰子ちゃんと竜兵。

……まあ、晩飯まで本当にすることないだけなんだろうけど。

このままポーっとならば推理ドラマ見るよりはマシだ。

夜になれば、もう少し面白い番組もやっってるはずだし、懐石も出てくるし。

飯食って寝るだけになりそうだけど、やることないよりはずっとマシか。

で、とりあえず全員風呂に行くことになって。

それぞれ着替えを準備して、貴重品を持って、僕が施設して。やたら脱げるスリッパをはいて、旅館自慢の温泉に向かった。

とっろで竜兵。

さっきのは『ひとつ風呂浴びてくるか』の間違いつて信じてるぞ。

そういうわけで、早くも男女に分かれて温泉へ。

よくあるとは思っただけど、この温泉は日替わりだとか。

1日おきに豪華な温泉と普通の温泉が、男女間で入れ替わってるそうなの。

運がイイのか悪いのか、今日は男の方が気合の入った風呂に入れるらしい。

……金のある旅館に見せかけて、やっぱり微妙な経営状態みたいだ。

それはそれとして。

深緑のジャケットを脱いだ辺りから、竜兵の視線が痛い。

腕に始まり、肩、胸、首と、舐める様に視線が動く。

でもって、今、完全に僕と視線が合った。

本気で気色悪いから、はにかんだように笑うな。

「なあ、竜兵。なんで僕の着替えを凝視してるのかな？」

「気にするな」

「気になるから見んなって遠まわしに言ってるんだが」

「気にするな」

結局、僕から視線が外れなかったから、別のロッカーを挟んで着替えをした。

竜兵の視線には気を付けつつ、拳動不審に視線を巡らせながら。あんまり考えたくないけど、人様から見たらかなり滑稽なんじゃないだろうか。

それどころか、竜兵よりも僕が変態に見えたかも知れない。

……まあ、今着替えてるのは僕と竜兵だけみたいだし、気にするこ
とでもないけどね。

いくつか鍵の抜けたロッカーがあったから、他に利用者もいるみたいだけど。

夏休み始まったばかりで温泉旅行って、なかなか暇人だよなあ。

いや、こういうのって、お盆前後にやるようなことだと思ってたもんだからさ。

で、温泉に入ろうと思ってロッカールームを移動すると。腰じゃなくて、タオルを肩に掛けた竜兵が待ち構えてた。

……見せつけるな、隠せ。

「なかなかのサイズじゃないか」

竜兵は僕の腰回りを見て、口の端を上げる様に笑う。

タオルを腰に巻いてから回り込んできたんだけど、僕が甘かったら

しい。

疲れが溜まっていたり、右腕の引っかけ傷が気になったりっていうのもあった。

それでも、目の前の問題に対して集中力を欠いてたのは間違いない。何より気にしなきゃいけない竜兵をないがしろにしてたのは、完全に僕の失策だ。

「亜巳さんになんて言い訳すればいいのかなあ。竜兵の行方不明について」

「冗談だ。さすがに覗けなかったからな」

軽く笑いながら言われても、にわかには信用できん。ホモ相手だからって気張ってるせいか、この反応の真意が掴めない。つか、テメエは覗こうとしてたんだな。

「で、俺はMAXで22cmなんだが……」

「そういう情報は求めてないんだよ。ていうか黙れ」

僅かに勝ったか。

まあ、別にどうでもいいんだけど。

コレに勝ったところで、別に嬉しいことは何も無い。

ガクトくんの申告が本当なら、ガクトくんには負けてんだし。

あんまりサイズがあっても、それはそれで困ったり困らなかったり。

「しかし、男同士だろ？ 気にしないでタオルなんて外しちゃえ」

「男同士だから危険な奴がいるのに、タオル取るなんてできるか」
なんていう風に竜兵を牽制しながら、温泉につながる扉を開いた。

| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

いや、なんて言ったらいいのか。

この温泉旅館が頑張ってるのは分かる。

分かるんだけど……安っぽい。

ラベンダーみたいな色になっている湯船に、よくあるジャグジー。

サウナも普通についてるし、体を冷やす水場が併設されてるのも普通。

極めつけは、なんかマーライオンっぽいのが湯を吐いてるアレ。

露天風呂に気合入れてるのかもしれないけど、ガラスが曇って全然見えない。

変なことしないで、露天風呂と中風呂だけ作るときゃイイのに。

「おお、なかなかだな！」

「まあ……うん、そうだね」

とりあえず、ちゃっちゃと体洗って、片っ端から入ってみよう。そう思つて、体洗ってから風呂に浸かろうとしたんだけど。

誰だ、あの濃い外国人は。

なんでかイイ笑顔のまま、立ったまま体洗ってる。しかも、隣の外人を見つめて笑みが増したのが怖い。

つか、温泉なんだからシャワー浴びて悦に浸ってんじゃねーよ。湯船に浸かれ、湯船に。

と、その外人さんと目が合った。

……コツチを見てから微笑み直すな。

「ごめん竜兵。部屋の露天風呂に入ってるわ」

「そうか？ 俺は一回りしてから戻るぞ」

意気揚々として風呂に入っていく竜兵。

きつとアレだ。

同じ趣味の奴らが見つかったからか、例の外人さんに気付かなかつたからか。

だから、あんな風にタオルを肩にかけて、平然と風呂場に足を運べたに違いない。

そんな竜兵を止めることもせず。

何も見なかったことにして、僕は風呂へと続く扉を閉めた。

で、今さら気付いても遅いんだけど。

デカイ鏡がロッカールームに備え付けてあつて。

さっきの竜兵の位置からだど、僕の着替えは丸見えだったらしい。

いや、もういいよ。

どうでもいいよ、うん。

1話目『私たちを温泉旅館に連れてって!』（後書き）

え、ようやく4章に入りました。

4章に関しては、他の章に比べて長くなる予定です
詰め込んだものを少しずつ消化していきます。

サブタイトルにけっこう悩んでしまいましたが、最後はあっさり決まりました。

話の趣旨がずれてしまったため『ホモといっしょ!』とか『ホモと巨乳と貧乳さん』は、サブタイトルにしないで正解だったと信じて疑いません。

冷静になるとというのは、非常に重要だと思い知らされる今日この頃です。

いつものごとくですが。

ご意見、ご感想、ご指摘、ご指南などなど、モロモロお待ちしております。

また、夏休み編ということで少し融通が利く状態ですので、ご要望についても同様にウエルカムです。

SEIIMAさん作：マジこいSSプチコラボ【炭火焼肉神無月】に、港くんが出させていただきました。他の作品ともコラボしていくようですので、是非、見てみてください。

モーデイスは、個人的にSEIIMAさんを応援しています。

2 話目 『いい湯かな?』 (前書き)

この話では、R - 15 向けの表現が行われています。

過剰な性描写ではありませんが、その点をご了承ください。

また、宗教名などを作中に出してはいますが、この話は宗教そのものとは一切関係ありません。

以上の点をご確認の上で、閲覧していただきたく思います。

2話目『いい湯かな?』

さて、竜兵を置いて部屋に戻ってきて。

個室に備え付けてある露天風呂に浸かっているのが、まさに今。やっぱ、こういう時間は1人の方が気楽でいいや。

板垣さん家の面々に限ったことじゃないけど、他人と一緒に疲れるからね。

1人で山を見ながら、肩までドツプリとお湯に浸かって。

こう、全身の疲れが溶け出していくみたいな感覚が襲ってくる。

ここが風呂の中じゃなきゃ、そのまま寝ちゃってもイイんだけど。

「ふう……」

別に、賢者になったわけじゃなくて。

温泉が心地よくて、思わず溜め息が出ちゃっただけ。

あの風呂よりも、備え付けの露天風呂の方が僕好みだ。

4人くらいなら余裕で入れそうな広さだし、山ばっかだけど景色がイイ。

緑の山々と青い空が、これまたキレイに色が分かれてる。

絵具をそのまま空と山に塗ると、こんな色になるかも知れない。なーんて詩的なこと考えるくらいには、今は心が緩んでる。

しかし、久々にゆっくりした気がするね。

ここ最近っていうより、川神に住むようになってから忙しかったもん。

トレーニング量は増えだし、勉強も難しくなったし。

悪くは無んだけど、月雄荘の皆さんも含めて人付き合いが大変だし。

5月辺りから、不死川と話すようになって。

それから、川神ランキングやら、川神戦役やら、川神ラビリンスやら。

川神ランキングの特別試合やら……全部学校絡みの行事だけ。

ときどき不死川と街に遊びに行ったり、由紀江ちゃんに会ったり。

大和田さんと知り合って、武蔵に目え付けられて、天ちゃんと竜兵に出会って。

頭人中ゴチャゴチャしてるけど、本当にイロイロ大変だった。

川神に戻ったら、やることたくさんあるんだよなあ。

実家に帰らないといけないし、大成さんにも挨拶しないと。

綾小路の方にも顔出した方がイイかもだし、墓参りも行きたい。

2学期の予習もやりたければ、怪我の治療にも専念したい。

うん、我ながら多忙な夏休みになりそうだ。

……不死川、どうしてるのかなあ？

いや、どうしてるかって、海外旅行してるに決まっただけだよ。

そういう問題じゃなくて、もっとこう、センチな感情なんだよ。

恋した相手のことって、どうでもいいことまで気になるじゃん？

朝飯何食ったのかなあ、とか。
帰ったら何するのかなあ、とか。
授業中に何考えてんのかなあ、とか。
どんなパンツ穿いてんのかなあ、とか。

とにかく、イロイロ気になってくるよね。

そういうとりとめもないようなことなんだよ、うん。

何故かムラムラしてきたのは、この際どうでもイイってことにしようよ……ね？

ここ何日か忙しくて、全然処理が間に合っていないんだから。

まあ、どうでもいいさ。

あんまり長く使っていると、肌がふやけてきちゃうし。

そろそろ着替えておかないと、竜兵あたり部屋に戻ってくるかも。

そう思って、無造作に立ちあが

「うおおああ!？」

立ち上がりざま温泉に潜水!

危ないっていうか、完全に見られたけど礼儀として潜つとかない!

なんで天ちゃんがいるんだよ!?

今の今まで、気配なんて1つも……いや、気張ってなかったっけか。
それでも音くらいは聞き取れそうなものだけど、そんなに疲れてん

のか？

それにしたって、ちょっと無警戒に過ぎたかも知れないなあ。

タオル巻いた天ちゃんがいたのに、全然気付かないとか。

少なくとも、扉を開ける音が聞こえてたはずなのに。

聞こえてたのに気付かないって、よっぽどだよなあ。

どんだけ疲れてんだよ、僕。

まあ、とりあえず……とりあえず、天ちゃんには注意しておかないとね。

マナーだからさ、こういうのは。

大事なところを隠して天ちゃんの方に向き直ると、タオル巻いて出入口に立ってた。

まあ、そうしてくれてて助かったよ。

天ちゃんがタオル外してたら、僕が悪いみたいになってただろうし。世間って、女に甘くて男に厳しいからなあ。

「天ちゃん、声くらいかけてくれるかな？」

「いや、その……わりい」

僕はさ、神妙な態度で聞いたただしたつもりだったよ。

だから天ちゃん、お願いだから、もっと申し訳なさそうな顔してくれ。

なんで『ラッキー』みたいな顔してんのか、聞いちゃってもいい

のかな？

言葉と表情が全然合っていないと思うのは、きっと僕だけじゃないぞ。しかも、あのニヤ〜とした顔見ると、なんでか下腹部が寒くなるんだけど。

「気にすんなよ！ 思ったよりデカくてビビったけど！」

笑顔で言うな、笑顔で。

…… もう泣いていいかなあ、僕。

よりによって、ギンギンの状態見られるとかどうよ。

初めてブツを見られた女性が、好きな女の子じゃないとか。いくら性欲溜まってるからって、タイミング悪すぎだろ。

運が良かったのは、不死川がいなかったことくらいだ。

もし不死川がいたらと思うと……うん、終わった。

このまま湯船で溺死して、2日くらい全国区のニュースを流すところだった。

っていつかこの兄妹、どうしてこんなに性的欲求に忠実なんだよ！ 兄も妹も人の下腹部に注視してくるとか、いったいどういう感性してんだよ！

「そつだ！ コツチ見るよミッチー！」

「今度はいつたい何いいいいい！？」

思わず声が裏返りながらも、天ちゃんから目を逸らした僕に乾杯！
ちよつと見えちゃったけど……そう、不可抗力だ！

『見た』んじゃなくて『見えてしまった』んだから、ギリギリセーフ！

天ちゃんも『コレでおあいこだぜ〜！』とか言うんじゃありません！

……しかし、家族以外の女性の裸を初めて見た。

ガキの時分とは言っても、全然違うもんなんだね。

いや、単に昔はガキだったから、邪念とか価値観が違うからかもだけど。

胸が小さいのは言うに及ばず。

毛がうつつすらとしか生えてなかった。

いや、そこを映像以外で見たことは無いんだけど。

天ちゃんが僕の1つ下なら、もっと濃いもんだとばかり思った。

つてすると、もしかして不死川も薄かったりするんだろっかとか情欲を捨てろ！

落ちて着け落ちて着け落ちて着け落ちて着け！

今のは温泉に鼻の下まで浸かるため、タツクルの予備動作じゃない！

てっ、天ちゃんを押し倒そうとしたわけじゃないんだからね！

「お……おおお女の子がはしたないマネしないっ！」

「でもミッチー、洗濯の時にタツ姉の胸が当たっても何も言わなかったって」

「男の方からは言いだしにくいんだよ！」

あんの娘は……！

妹に言うくらいならコッチに注意しろよ！

どんだけ気まずい思いで洗濯物干してたと思うんだよ！

そのせいで、ずっと辰子ちゃんと目え合わせられなかったのに！

なんて考えてると、湯船に波ができる感触が。

……まさかだよな。

まさか天ちゃん、今の流れで引き返さずに、風呂に入ったんじゃないよね？

とか思つてチラッと見ると、タオルで頭グルグル巻きにした天ちゃんが。

もちろん、体にタオル巻いてないのが分かった時点で目え逸らしたけどさ。

もしかして天ちゃん、人の話を聞かないタイプだったりするんだろ
うか？

いくら顔見知りって言っても、無警戒にもほどがあるよ、うん。

それに、辰子ちゃんはどうしたんだろ？

一緒に風呂に向かつて、1人だけ戻ってくるつてのもなあ。

いや、別に不自然じゃないとは思うけど……まあいつか。

なんか話をしつつ、適当なタイミングで出ちゃわないと。

下手に時間が経つてくと、僕の理性が持たなくなるからね。

「えっと、どうしてココに入ったのかな？」

「どうしても何も、女風呂に露天風呂がなかったんだよ」

マジム力つくよな、なんて言うけどね、天ちゃん。

僕は、旅館の方々の経営方法に初めて感謝したところだよ。

カワイイ女の子と混浴とか、東大目指しちゃうマンガくらいでしか見たことない。

そんな夢のようなシチュエーションに遭遇できるなんて、思ってもみなかった。

いやいや、浮気心とかそんなんじゃないって。

……男女問わず、人間だったら下心くらいあるじゃん。

僕だって人間なんだから、少しは大目に見て欲しいね。

「天ちゃん、どうしてタオルを取ったままなのかな？」

「あん？ お湯が汚れるからに決まってるじゃん」

常識たる常識、なんて言うけどね、天ちゃん。

異性がいるときは、タオル巻いて入るのが常識なんだよ。

そう言っただけでいいけど、性欲に負けて何も言えない自分がもどかしい……。

「うあゝ、あつたけ」

露天風呂の岩に張り付いて、ぼへっとする天ちゃん。
そりゃ温かいだろうさ、温泉なんだもん。
あと、必死に目え逸らしてんだから、絶対にコツチ向いてくれるなよ。

今コツチ向かれたら、理性が崩壊するかも知れん。
信頼してもらってるのにそれは、人間としてマズいからね。

しかし天ちゃん、キレイな背中してるなあ。
昼に出歩かないからだと思っけど、肌も白いし。
ちよっと性格キツめだし、僕よりも身長低いし。
貧乳って意味じゃ、ギリギリ合格ラインだけど。

……だから、性的な目で見ちゃいかんだろ。
天ちゃんは妹みたいなもんだ、って割り切っておかないと。

で、とりあえず天ちゃんから視線を逸らし直して。

何気なしに露天風呂の入り口を見たら、僕の視界に巨乳が飛びこんできた。

もちろん、すぐに視線を元に戻した。

こう、なんつーんだろ。

3000円しか当たってないと思って宝くじ換金したら、3000万だったみたいな。

どうせ外れると思って福引したら、1等のハワイ旅行が当たったみたいな。

完全に意表を突かれて、とびつきり衝撃的な出来事が起きたみたい。な感覚なんだよ。

でもまあ、それはそれ。

1人の男性として、僕は聞いておかなきゃならない。天ちゃんと同じ質問だとしても、辰子ちゃんにもしておかなきゃ。

「辰子ちゃん、どうしてココに入ってくるのかな？」

「露天風呂に入りたかったんだけど、女風呂になかったんだもん」

「……どうしてタオルを取ってるのかな？」

「ん〜？ お湯が汚れちゃうとよくないからだよ？」

常識だよ〜、っていう辰子ちゃん。

この姉妹に、僕の常識は通用しないらしい。

今の感想を率直に言うなら『嬉しいけど嬉しくない』ってことになる。

こんな矛盾した感情、生まれて初めてだよ。

視界の端に辰子ちゃんを収めてる自分が憎らしい！

見ちゃいけないって分かっているのに、バッチリ見てる自分が恨めしい！

僕の真横から少し離れた所に座っているのに、それでも見えるポリューム感！

巨乳が湯船に浮くつてのは、どうやら本当だったようだね！

お父さん、お母さん、僕をこの世に産み落としてくれてありがとう！

というか、アレか。

神は、俺に獣になれとおっしゃるか。

この姉妹が無防備だって言っても、ちょっと限度があるだろ？

どう考えてもこれは、神が俺にもっと輝けとささやいて……じゃなくで。

神が俺に、大人の階段すつ飛ばして、エレベーターで上に行けとささやいてる。

アナタが差し出した姉妹丼、謹んで馳走になります。

そういえば、昔、練習中に小西さんが言ってた気がする。

ある境地に立たされると、人間辞めて獣になれるって。

つまりは、こういうことだったわけか。

目を閉じて、次に目を開けた瞬間。

俺は、この姉妹を性的にいただくこと以外すべてを忘れる。

何か間違ってる気がするけど、間違ってもイイや。

「なんだ、全員ココにいたか」

タイミング最悪だろ、竜兵よ。

爆発寸前に来るくらいなら、もっと早く来いやボケ。

神様、アナタは私を生殺しにするのが好きなようで。

本当に神様は浄土真宗の信徒には冷たいんだね、クソツタレ。

別にカトリックじゃなかったって、慈悲の手を差し伸べてくれてもいいじゃないですか。

そうしたら、もっとカトリックに入信してくれる人が増えると思います。

でも、カトリックって自己処理も姦淫に含まれるんだっけ。

じゃあイヤや、浄土真宗のまま。

……いや、爺さんが入ってるから、その流れで信徒やってるだけなんだけど。

しかし、竜兵は何しに来たんだろうか。

風呂上りなんだろうけど、旅館の用意した着物なんか着ちゃって。

また風呂に入り直すにしたらって、服脱いでなきゃならんのに。

誰もいないから心配になった、なんてタマじゃないだろうし。

拳句、なんでか遠く見てんだけど……何があつたんだろうか。

「なあ、ミチヒロ」

そんな竜兵が、僕が口を開く前に声を掛けてくる。
天ちゃんや辰子ちゃんと違って、少しはマトモなこと言っただろうか。

そういう僕の期待の、斜め上に行くようなセリフが返ってきた。

「人は、どうして戦争なんかするんだろうな……」

賢者タイムに突入してんじゃねえよ。

天ちゃんは『入ってくんじゃねーよ!』とか叫んでて。

辰子ちゃんは、少しずつ湯船に沈んでいこうとしてる。

竜兵は竜兵で、何かを悟ったように優しい笑みを浮かべてるし。

あゝあ、笑っちゃうよね。

僕、一応は慰安目的で温泉旅行に来たはずなんだけど。

膝の怪我がどうかじゃなくて……余計に疲れてる……。

2話目『いい湯かな?』（後書き）

温泉回らしく、強引に混浴させてみました。

巨乳が水に浮くのは、どっかの実験をネットで見て確認済みです。

……いえ、我が身では確認しようがないのですが。

賢者タイムの意味が分からない人は、お父さんお母さんには聞かないでおこう！絶対に分からないから。

できればググるのも止めておいてください。下手すると、私が石投げられちゃいます。

いつものごとく、お約束みたいになっていますが。

ご意見、ご感想、ご要望、ご指摘、ご忠告など、もろもろ承っております。

3話目『お熱いのはお好き?』

……長湯ができなかった。

久々に足の伸ばせる風呂だったのに、長湯ができなかった。

いやいや、無理でしょ。

冷静に考えて、あのままいたら襲っちゃってたかもしれないし。さすがにそれは、人間としてマズいんじゃないの？

アニメやゲームじゃないんだからさ、無理矢理するのは犯罪なんだもん。

そりゃ、イロイロ拝めたのは有り難かった。

僕だって健全な男なんだから、ああいうのはラッキーだって思うさ。でも今回は、ゆっくり風呂に浸かってたかったんだよ。

パツと見て分からないけど、けっこう体中ポロポロなんだもん。せめてゆっくり風呂に入って、疲れだけでも癒しておきたかったんだけどなあ。

で、もうとっくに飯も終わってる。

ステーキっぽい肉やら刺身やら、統一性のないオカズの羅列だね。天ちゃんも童平も辰子ちゃんも喜んでたから、別にいいんだけどさ。でも、温泉旅館やってんだから、もうちょっと飯にはこだわって欲しかったなあ。

風呂もダメ、飯もダメとか、どこの3流旅館だったの。

……まあ、誰が悪いって話でもないし、愚痴はココまででイイか。

今は、もう布団の中に入ってる。

つつても、寝てるってわけじゃなくて、行儀悪く布団の中でテレビ見てる。

それというのも、辰子ちゃんが食後に寝始めちゃってね。

泊った部屋が居間と寝室兼ねてたもんだから、手早く布団敷いちゃったんだよ。

ああ、敷いちゃったっていつでも、仲居さん呼んでやってもらったんだけど。

でもって、布団の中でテレビを見てる。

全然やることないから、特番の『暴走族24時間』を見てるとこ。

竜兵が『もうひとつ風呂浴びてくる』って出てったから、今は3人だし。

辰子ちゃんは、もう布団に入って寝ちゃってるんだけどね。

もうなんていうか、すびゅー、って音立てながら気持ちよさそうに寝ててさ。

僕と天ちゃんは、枕抱えて隣り合わせてテレビ見てる。

……どうして天ちゃんが、僕と同じ布団に入ってるかは知らないけど。

なんていうか、やたら天ちゃんに懐かれると思う。

いや、他の人と天ちゃんが接してるの見たことないから、断言はで

きないけどさ。

もしかしたら、天ちゃん自身がスキンシップ過剰な気があるかも知れないし。

まだ10回も顔合わせてないんだから、ハッキリ『こういう性格だ！』とは言えんけどね。

「そついやさ」

テレビから僕に視線を移しながら、少し真面目な顔で尋ねる天ちゃん。

こついう顔するのは、喫茶店で咳き込んだとき以来だ。

普段は幼そうなのに、こついう顔すると歳相応に見える。

そんな天ちゃんの口から、いったいどんな言葉が出てくるのか。

そつやって身構えた割には、予想から大きく外れた言葉が出て来た。

「ミツチーって、もしかして妹とかいるんじゃない？」

予想から大きく外れて、少しビツクリする言葉だった。

まあ、いるんだけど……唐突だよなあ。

今までは、僕に兄弟がいるかどうかなんて聞いてこなかったのに。

どついう心境の移り変わりか知らないけど、案外鋭いなだね、天ちゃんって。

いやいや、姉妹がいないとマズイじゃん。

港って、昔から婿を取って血を繋ぐ習慣があるんだし。

港に女が生まれないってのは、よその家で男が生まれなくらい大変なんだもん。

「うん、天ちゃんの1つ下になるんだけどね。何か、気になることがあった？」

「いや、そういう訳じゃねーんだけど……」

ちょっと目を逸らしがちに、頬を赤らめ始める天ちゃん。で、チラッとコツチ見てから、また目を逸らして。でもって、視線を逸らしたまま、モゴモゴと言葉を漏らす。

「ミツチーってお兄ちゃんっばいっていうか……って何言わすんだよ！」

とか言いながら、天ちゃんはいきなり顔面を枕で殴ってきた。さすがに拳で殴られたら避けるけど、枕くらいなら全然OK。ポフツとした感触が顔に響くのは、むしろ少し心地良いくらいだし。

っていうか、最近気付いたんだけどさ。

女の子って、みんな甘い匂いを持つてるんじゃないかなろうか。

不死川の時もそうだったけど、天ちゃんが抱えてた枕も凄くイイ匂い。

甘い匂いっていうか、女の子独特の匂いっていうか。

ふんわりした感じの匂いが、枕にしっかり染みついてる。

いや、そりゃ冷静に考えれば分かる。

それが石鹸とかシャンプーの匂いってことくらいは。

でもさ、そういうことじゃないんだって。
女の子からする匂いってだけで、無条件にドキッとしちゃうもんだ
よ。

それが例え汗の匂いだったとしても、僕は興奮する自信がある。

……じゃなくて、ちょっと変な気が。

だってさ、僕がお兄ちゃんっぽいなんて言っけど。

「竜兵がいるじゃん」

そう、竜兵がいるじゃんか。

竜兵が僕と同じ年なら、竜兵だってお兄ちゃんになるはずだ。

「いや、アレは『お兄ちゃん』って生きモンじゃねえ」

凄いわれようだなあ、竜兵。

まあ、確かに兄貴ってガラでもないだろうけどね。

辰子ちゃんと竜兵が双子っていうよりも、天ちゃんと竜兵が双子み
たいだもん。

何って言ったらいいのか……そう、竜兵には落ち着きがないんだ。

アイツ自身に兄貴って自覚がないからだろうけど、自分勝手が過ぎ
る。

今だって、姉妹2人を置いて風呂に行っちゃった。

いや、僕がいるんだけど、たかだか半年以下の付き合いじゃん。

そんな男と姉妹を一緒にしておける、そういう感性が理解できない。

でも、これでやっと分かったよ。
天ちゃんが、僕にやたらと懐く理由が。

家庭環境もあると思うけど、寂しかったんだろっね。

未っ子なのに、自分がしつかりしなきゃって思ってたんだろっね。
親に甘えようにも親がいないし、兄弟に甘えようにも切羽詰まった生活してるし。

とにかく、僕みたいなのが身近にいるってのは、天ちゃんにとって良かったんだよ。

ちよつど僕も、妹と離れて1年経って、手持無沙汰な感はあるし。
妹らしく扱ってあげるっていうのも、まあ、悪くは無いかもね。

前言撤回。

この状況から天ちゃんを妹として扱えたら、そいつは多分ガチホモ

かEDだ。

そのどちらでもないって言うなら、多分、そいつは女に違いない。

飯を食い終わってから3時間、さっきのやり取りから2時間経って、まだ夜の10時なんだけど、僕以外の全員がグースカ寝てる。

ずっと起きない辰子ちゃんはともかく、天ちゃんもグッスリ。

布団の中で丸くなって、気持ちよさそうにムニヤムニヤやっちゃって。

ホント、起きてるときからは想像できない、天使みたいな寝顔でね。

竜兵も竜兵で、賢者のテンションのまま床に就いた。

なんていうか、僕としても状況がよくわからないんだけど。

風呂から戻ってきたら、何も言わずに布団の中に入って、そのまま寝ちゃった。

それで、起きてくる気配もないから、そのまま放置して寝ようと思ってるんだけど。

いや、そんなことはどうでもいいんだ。

僕が入り口側の布団に入って、竜兵が露天風呂のある……入口の反対側。

竜兵の隣が辰子ちゃん、天ちゃんの布団も辰子ちゃんの隣。

それでもって、僕と天ちゃんは、どうしてか同じ布団で寝てる。

……もう1度確認しよう。

僕と天ちゃんは、同じ布団で寝てる。

どうして僕がこうなってるのか、説明が必要だろうね。誰にだって、未だに混乱してる僕自身に対してだよ。

そもそも、ついさっきまで僕は眠くて仕方なかった。

最近の疲れがドツと出て、溶けるみたいに睡魔に襲われて。

そのまま夢の世界に行こうってところで、なんか布団の中に入ってきた。

いや、なんかって天ちゃんなんだけど、もうなんて言っていないやら。

スルツと布団に潜りこんできて、モゾモゾ這い上がってきて。

天ちゃんの顔が、上を向いた僕の左頬に急接近してる。

ずっと目を閉じてる上に呼吸が一定だから、寝てはいると思うんだけど。

この位置関係は、どうにも始末が悪い。

天ちゃんが、僕の体を抱き枕みたいに扱ってる。

こう、手と足を回されて、ギュツとしがみつかれてる感じ。

胸やら、太ももやら、匂いやら、息づかいやら。

何から何まで、天ちゃんもシツカリ女の子してる。

まあ、いくら夏っていつても、山の上だから相当寒いしさ。

天ちゃんが抱き付いてくれてるおかげで、すごく温かい。

2人分の体温が布団の中にあるのもあって、ホカホカしてる。

この分だったら、寝冷えしたりってことはなさそうだ。

……いや、僕は本当に冷静に考えられる人間らしい。

風呂で裸見たり見られたりした時は、あんなに心乱れたのに。

天ちゃんが僕のことを兄貴みたいに思ってるって考えると、もう何ともない。

だってさ、妹に欲情するなんて、普通だったら考えられないでしょ？

じゃあ、どうして僕が寝れないのかって。

ハッキリ言っちゃえば、天ちゃんが本当に僕の妹じゃないからだ。

兄としての役割を求められてるからって、本当の兄になれるわけじゃない。

天ちゃんは、僕にとって妹みたいな存在だけど、本当の妹とは別物。カワイイ女の子に抱き付かれてドキドキするなのは、土台無理な話だね。

でもさ、天ちゃんにとって僕は『お兄ちゃん』なんだから。

お兄ちゃんらしくしてあげないと、天ちゃんが可哀想じゃなか。

別に、痛くもかゆくもないんだからさ。

こういうときは、されるがままにしておくのが一番なんだよ。

「……………んっ……………」

色っぽい声で喘ぐんじゃない！

あと、せっかく理性を働かせてるんだから、耳元で呼吸しないで！

僕の耳に向かって、優しく息を吹きかけないで！

初めての経験だけと思った以上に気持ちよくて頼むからやめて！

「ん〜」

あああああああああああああ！

お願いだから、僕の首元に額を擦りつけないで！

肌がスベスベで気持ちいいけど、そういう問題じゃなくて！

すっごくイイ匂いがしてくるけど、今はそうじゃなくて！

髪の毛がフワフワしてて気持ちいいけど、そういうことじゃなくて！

「あつ……………ん……………う……………」

天ちゃん、アレか。

実は寝てるフリしてて、僕を誘ってるのかか。

そうじゃなきゃ、僕の股を挟むように自分の両足絡めてきたりはしないはずだ。

寝相が悪いくらいで、ここまでハッキリわかるほど胸を押しつけてくるはずがない。

あと、さっきから天ちゃんが、僕の浴衣の内側まさぐってるんだけど。

何コレ？ 本当は起きてんじゃないの？

……………いや、ちゃんと寝てる。

呼吸が深くて規則的だし、鼓動の乱れも特にない。

熟睡したまま、特に深い意味もなく僕に抱き付いてるんだ。

俺、寝れるのか？

腕に、天ちゃんの胸を押しつけられたままで。
足に、天ちゃんの太ももが触れたままで。
胸に、天ちゃんの手の平を感じたままで。
首筋に、天ちゃんの吐息を浴びたままで。

全身で触れてくる、天ちゃんの体を意識したままで。

そうして僕は気持のいい朝を迎えた。

山間独特の涼しさと、さわやかな日差し。

顔いっぱいそれを受け止めて、僕の1日は始まった。

は？

寝れたわけねえじゃん。

文字通り、一睡もできなかったよ。

……だつて仕方ないだろ!?

好きな子じゃないにしても、カワイイ女の子が抱きついてくるんだぞ!?

しかも、布団の中でバッチリ密着されてんだから、ドキドキして仕方なかったよ!

ああ、そうだよ! 不死川以外の女の子に興奮してたよ! 別にイイだろうが!

健全な男子高校生だったら、カワイイ子に布団の中で抱き付かれれば興奮するんだよ!

カワイイ女の子の吐息が耳の中に入ってきたら、それだけで辛抱できねえんだよ!

もう、理性抑えるのに必死で、それだけで精一杯だったんだよ!

……まあ、心中で愚痴っても仕方ないけどさ。

とにかく一睡もできなかつたし、朝から忙しかったんだよ。

朝起きて飯食って、送迎バスに間に合うように荷物まとめて。

旅館の土産コーナーで、亜巳さんと月雄荘の皆さんに土産買って。

そんでもって、転がり込むみたいなタイミングでバスに乗って、今は新幹線の中。

さっき買った駅弁を食いながら、ようやく一息ついた気分。

……まあ、3人とも楽しそうだから良かったけどさ。

僕はどうかって?

……あのさ、楽しかったと思う?

風呂にゆっくり入れない、疲れがたまる、オマケに睡眠不足。

飯はそこそこ美味しかったけど、湯治なんてのからは程遠かった。

そう、楽しかったんだよ。

疲れたんだけど、久々に気張らないで楽しめた。

竜兵が鬱陶しいのも、天ちゃんがじゃれてくるのも、辰子ちゃんに手がかかるのも。

どれもこれもひっくるめて、疲れたけど楽しかったんだよ。

まあ、今は黙々と駅弁食ってる。

なんつったっけか…… 『特性茶めし弁当』 だっけ？

それと『ひれかつ膳』と『そばろ親子』 だかを食い終わって、3つ目の駅弁だ。

ビックリしただろうなあ、駅で弁当売ってる業者さんも。

4人で12人分の弁当買ってくなんて、なかなかないだろうし。

新幹線の中で全部食ったなんて聞いたら、また驚いてもらわなきゃいけないよ。

……僕としては、ちっこい天ちゃんも3人分の弁当を普通に食ってることが驚きなんだけど。

で、ようやく3人の箸が止まった。

辰子ちゃんはスローペースだから、ようやく3つ目の弁当に取り掛かったところ。

そんなタイミングで、昨日の夕方から静かだった竜兵が口を開いた。

「そついえば、娯楽室に卓球台があったな」

……今のタイミングで言うっていうのは、まさかわざとか？

アレだけ暇だったんだから、ちよつと遊んでもよかつたじゃんか。そりゃ疲れてるし怪我もしてるけど、卓球で遊ぶくらいなら余裕だったのに。

つーか、娯楽室見つけたんだつたら早く教えろつてんだよ。

「あのさ、そついうことは旅館にいるうちに言わない？」

「どうせ誰もやらねえだろ。それに、俺もルールが分からん」

いやいや、卓球くらいは分かれよ。

この歳になるまでに、どつかで1回くらいはやってそつなもんだろ。中学の授業とかで聞いたりするもんじゃ……つて、それじゃ無理か。竜兵が律義に授業受けてる姿とか、全然想像がつかん。

絶対に温情措置とかで中学卒業したタイプだもんな、コイツ。

「はあ？ 温泉に卓球台があったら、卓球やるに決まってるじゃねえか！」

「風呂に入り直すのが面倒だろ！ なあ、タツ姉！」

「ん？ 私はどつちでもよかつたかな。やるならやるで楽しかつたろつし」

まあ、文字通りに三者三様っていうか。

ここまで統一性のない兄弟っていうのも、僕の中じゃ初めてだよ。
辰子ちゃんが妥協してるけど、これだって『どうでもいい』って一
つの意見だし。
いくら兄弟っていつても、ちゃんと管理してやってる亜巳さんを尊
敬するね。

とりあえず、アレだ。

腹は満ちて、眠気が酷い。

帰って土産を配り終わったら、とつとと爆睡しよう。

3 話目 『お熱いのはお好き?』 (後書き)

え、ようやく完成しました。

ほぼ1カ月ぶりの更新となります。

長い時間かけた割に、作中時間のスピードも速くグダグダしてしまいました。

諸々のことに対しまして、大変申し訳なく思っている次第です。

これで、温泉旅行の話は終わりになります。

1つ2つクッションを挟んでから、また、ちょっとした長話になると……。

終わりまではまだまだ長いですが、もうしばらくお付き合い頂けると幸いです。

さて、例によって例のごとくですが。

ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘、ご要望など。

古今東西、老若男女問わずに、広く意見を承っております。

気になる点などございましたら、遠慮なく書き込んでやってくださいー！

……あまり話の核心に触れることだと、さすがにボカしますけれども。

4話目『The Garnet man』

温泉旅行から帰ってきて、今日で4日目。

板垣さん家のことも含めて、だいたいやることは終わらせといた。

たつぷり寝て疲れを癒して、部屋の掃除をパツパと済ませて。

病院で膝の調子を診てもらって、ジムで上半身鍛えて。

一応、ガクト君にクリステイアーネの症状聞いたりして。

この先にやることの準備もしながら、ボチボチ平和に過ごしてた。

ああ、そういうえば。

夏休みの間、僕の手間が増えるってことが決まった。

こういうと語弊がありそうだから……そう、自発的に手間を増やした。

自分から手間のかかる道を選んだってのが、一番適切な表現だろうね。

板垣一家の朝飯は、しばらく僕が作ることになった。

まあ、そもそも料理を作れるのが辰子ちゃんだけってのが問題でね。いくら天ちゃんや竜兵が早起きしても、朝飯が作られることは無い。でもって、亜美さんも腹をすかせることになるし、2人もそうだ。

そういう状況が続くと、さすがに良くは無いだらう。

ってことで、夏休みの間限定になるんだけど。

辰子ちゃんが起きれなかった日は、僕が朝飯を作るようになった。

で、僕が板垣一家の朝食と夕食を担当し始めて、今日で4日目。

いつの間にか夕食まで僕の担当になってたけど、もう気にしないぞ。何食つても『うまい』と『おかわり』しか言わないのにも、もう慣れたしね。

自分の食ったもんを美味しく食べてもらえるのが、思ったより嬉しかったしき。

それにさ、メリットもあるにはあるんだ。

カレーとかシチューとか、ああいう料理を気兼ねなく作れるってこととか。

ああいう汁物とかは、一気に大量に作った方が美味しく作れるんだよ。

でも、それだけの量を1人で作っても食い切れないから、なかなか手が出なくてさ。

少なくとも夏休みいっぱいには、そういう料理もガンガン作れるってのは嬉しい。

早速だけど、昨日もカレーだったしね。

それと、こっちは別件なんだけど。

また明日から、ちょっと忙しくなるんだよ。

っていうのも、昨日、珍しく実家から電話が来たからでね。

その内容が『明後日に帰って来い』ってのさ。

用件だけ手早く伝えて、さっさと切っちまいやがった。

相変わらず自分勝手なジジイだよ、まったく。

新幹線の指定席のチケットまで送ってこられたら、行くしかないじ

やんよ。

とりあえず、荷物の準備は終わってる。

4日分の着替えとパジャマを詰め込んで、あとは海パンも入れて。旅先で読む小説を適当に突っ込んで、プロテインは置いてつてもいいか。

トレーニング器具は向こうにあるから、持ってくるのは服と本と金だけだね。

あとは、新幹線とタクシー使って、実家に帰るだけでOKだ。

まあ、今日はゆっくりしてる。

怪我のせいで小西さんのジムに行けないし、やることも大体やった。天ちゃんは喫茶店のバイトで、竜兵は月雄さん紹介の土木建築系のバイト。

亜巳さんは夜勤だから寝てて、辰子ちゃんも仕事がないからって寝っぱなし。

アパートの皆さんも都合があるし、怪我していると本当にやることがない。

浦木さんと勉強つてのもアリだけど、その浦木さんも今日は出掛けてるんだよね。

でも、さすがに手持無沙汰なんだよなあ。

晩飯の仕込みも終わっちゃって、ホントにやることが残ってない。まだ昼飯前だけど、昼飯作るのも面倒くさいし。

天ちゃんのようにすを見に行こうにも、結構遠いんだよなあ、喫茶店。

……それじゃあ、適当に食いに行くか。

歩けないほど足が悪いわけでもないんだから、少しくらいはね。

そうと決まれば、さて、どこに食いに行こうかな？

なんというか、自分の浅はかさには少し呆れるね。

せっかく時間があるんだから、ちよつと遠出してもイイのに。

電車賃がもつたないからって理由で、結局は近所の梅屋にした。

まあ、自分で自分に呆れてるんだけど、でも食べたいんだから。

月雄荘から近いってのもあるけど、なんか無性に食べたくなっただよ。

ほら、カップラーメンとか、意味もなく食べたくなることってない？
それと同じとは言わないけど、かなり近い感覚なんじゃないかなあ。

ココまで来たからには、テイクアウトって選択肢は無い。
何食うにしても、できたてを食うのが一番おいしいんだから。
……いや、どっかの熱いテニスプレイヤーみたいなことはしないけどね。

で、カウンター席に着いたら店員さんが来たから、とつと注文を伝えた。

「豚丼豚汁特盛りセット1つと、特盛り豚丼を1つ」

「はい、かしこまりました！」

以上でよろしいでしょうか、とか聞かないのか。

まだまだピーク前なんだから、接客くらいしつかりしろってんだ。客なんて、僕を入れても3組しかいないんだから。

で、ポーっとしてるのも億劫だったから、自分でコップに入れた水に口を付けた。

付けたんだけど……その水が口の中に入る前に、背中の方から声を掛けられた。

「あれ？ 港先輩？」

「ん？」

女の子の声で、そういう言葉が聞こえてきた。

さらに掘り下げると『港先輩』ってフレーズには聞き覚えがある。僕のことを先輩と呼ぶってことは、つまりは後輩だ。

でもって、僕に後輩は4人しかいなくて、そのうち女の子は3人。

予想は付いてるけど、体ごと後ろを向いて確認をする。

やっぱり、予想通りの相手だった。

黒い長袖のシャツなんて、暑苦しそうなカッコして。

膝くらいで裾が終わってるジーンズに、シンプルなミュールなんか履いちゃって。

ラフな格好をした武蔵小杉が、僕の後ろのテーブル席に座ってた。

……いや、その表現だと語弊があるなあ。

テーブル席に座ってるのは、なにも武蔵だけじゃないんだから。

武蔵の向かい側に、もう1人男が座ってる。

年齢は、僕よりちょっと上くらい……大学生くらいに見える。

座ってるからハッキリ分らないけど、身長も180cmはありそう。

体の線は特別太くないにしても、鍛えてることは鍛えてるって感じ。テーブルの上でキザに組んでる手を見ると、バッチリ拳ダコも出来てるし。

まあ、なんとなく武蔵との関係は分かるけど、別にどうでもいいや。

「どうも、お久しぶりです」

「久しぶりつつつても、一週間も経ってないんだけどね」

武蔵の顔をよく見ると、腫れが相当引いてる……のかな？

元の怪我の様子が分からんから、何とも言えないところだけど。

でも、不死川が『見てやるな』なんていうくらいだから、酷かったのは間違いない。

なのに、今じゃガーゼが2枚貼ってあるだけだ。

少し脛の周りの腫れが残ってるけど、注意してみなきゃ分からんくらい。

こんな短い期間で、よくここまで回復したもんだよ。

「けっこう腫れが引いた……のかな？」

「はい、そりゃもう。怪しい人からもらった薬が効いてるんですよ」

え〜と……どこかで似たような経験をしたことがあるぞ。

月雄荘の知り合いが作ってる塗り薬で、日焼けが相当楽になったって感じの。

そういう類の、化学的な物質の合成以外で作られた薬を僕は知っている。

知ってるから、どうしても聞かすにはいらなかった。

「怪しい人って、どんな感じの？」

「作務衣を着た人で、背は港先輩くらいでした。

それと、なんか尾張忍者がどうか言っていましたね」

……何をしている尾張忍者！
見ず知らずの少女に塗り薬を手渡していて、事が成せるのか！
じゃなくて、本当に尾形さんが何をしたいのか全然理解できない！
なんで尾張忍者の秘薬っぽいものを、そう簡単に他人に渡してんだ
よ！

まあ、それ以前に武蔵も武蔵だ。
僕だったら、そんな薬は確実に使わない。

日焼けケア用の秘薬だって、月雄さんのお墨付きじゃなきゃ使わな
かったんだし。

武蔵が普段からそういう風だとは思わないけど、先輩として注意し
とくか。

「よくもまあ、そんな見ず知らずの人間からもらった薬を使えるも
んだね」

「大丈夫ですよ。お兄ちゃんて先に試しましたから」

右手の人差し指で、テーブルの向かいに座っている男を指す武蔵。
やっぱりって言ったらアレだけど、予想通り兄貴だったわけか。

だって、ところどころだけ顔付きが似てるんだもん。
よく見りゃ血縁じゃないかってのは分かるさ。

特に、ツリ目がちで大きな目なんかソツクリだし。

あとは……耳の形とか、ピリツとした雰囲気も似通ってる。

ああ、そうそう。

今みたいにムスツとした顔つきなんか、本当によく似てるよ。

そついう無愛想な顔して、僕のことを見るところとかもね。

「そうか。お前が港か」

「ちょっと兄さん！」

ん？

武蔵にお兄さん、僕のこと知ってるのか。

いや、知ってるつつても、聞いたことあるって程度だろうけど。

武蔵のヤツが、家で僕の話してるってことなんだろうなあ。

別に困りやしないけど……さすがに少し気恥ずかしいね。

初対面の相手にイロイロ知られてるってのは、なんかこそばゆい。

「ごつも始めまして。港 三千尋です」

「武蔵 石榴だ」

そんなことを言いながら、席を立つザクロさん。

で、わざわざコツチにまで寄ってきて、握手を求められたり。

なんというか、なかなか紳士的なお兄さんだ。

もちろん、僕が握手を断る理由もない。

ザクロさんが出てきたのと同じように、僕も右手を差し出した。でもって、ガツチリ握りあって……ガツチリ………あん？

「小杉が世話になっっているそうだな」

なんか、力いっぱい握ってるみたいだね。

ヒヨロイと思ったら、握力はそこそこあるんじゃない。

これくらいだと、まあ、70kgが80kgくらいかな？
格闘技やってるってんなら、充分過ぎる握力だ。

……涼しい顔して、なかなか好戦的な人じゃないか。
さすが兄弟ってところかな？

まあ、そこまで歓迎してもらってるなら、それに応えないとね。

「いえいえ、そんな大それたようなことはしちやいけません」

だから、お返しに力を込めて握り返す。

僕の右手に握られた、ザクロさんの右手。

その手を潰さない程度に、少しずつ力を入れて締めつけて。

骨が軋んでも、ザクロさんが苦い顔を始めても、まだまだ締め続けて。

ザクロさんの口元が本格的に歪んだところで、パツと手を放してやる。

そんなザクロさんに、下手糞な作り笑いをしながら言葉を返してあげた。

「手のかからない後輩で、僕の方こそ助かっていますよ」

まったく、武蔵から聞いてなかったみたい。

空手やってて、ブラジリアン柔術やってて、武蔵よりずっと強くてそれで、握力は文字通り桁違いに強いって話は、聞いてなかったんだらうね。

そうじゃなきゃ、自信満々に僕の手を握り潰そうとはしないもんなあ。

「もお………すいません、こんな兄で」

「いやいや、個人的には嫌いなタイプじゃないよ？」

そんな、何度も頭下げちゃって。

この程度のことなら、武蔵が謝ることもないのに。

これくらい分かりやすい人って、そうはいないから面白いしね。

勘違いしてるにせよ、妹にちよっかい掛ける奴に牽制かますとか。うん、僕も多分同じことするだらうから、気持ちをよく分かるよ。なんだかんだ言って、武蔵も結構カワイイから。

……もちろん、不死川の方がずっと可愛いんだけどさ。

「……やはり、お前だったか」

「は？ 何がですか？」

えっと、なにが『やはり』なんだろ？

ザクロさんとは初対面だし、そんな言葉掛けられる要素は無いんだけどなあ。

とか思っていると、耳を貫くような怒声が響き渡った。

「ふざけるな！ お前が小杉をたぶらかしているんだろう！」

物凄い声量で叫びながら、僕の胸倉掴んでくるザクロさん。
なんというか、イロイロと誤解が生じてるらしい。

親のカタキを見るみたいなの、ちょっとビビる目線で僕を睨んでくる。
……武蔵のヤツ、僕のことをなんて説明したんだろうか。

そりゃ、カワイイ後輩だけども。

不死川のが好きって、武蔵の前でハッキリ言っただじゃん。

それなのに、僕に気があるみたいなのを家族の前で言ったりした
んだろうか。

好かれるのは嫌いじゃないけど、勘弁して欲しいなあ。

余計な問題を背負い込むほど、余裕もなければ物好きでもないんだ
から。

僕の胸倉を掴んだ手を、やんわりと、力強く引き剥がす。

親指を手首に突き刺すようにして、同時に握り潰すように力を入れて。

力技で引っこ抜いた後で、使ってなかった左手でザクロさんをポンと押した。

で、そのままヒックリ返ったザクロさんを、座ったままの僕が見下ろす形になる。

やっと豚丼が来たけど、もう、そんなのはどうでもいい。

「ザクロさん、どうやら勘違いしているようですけど……」

ここは1つ、武蔵と距離を置くためにザクロさんに頑張ってもらおう。

なに、難しいことをしてもらおうってわけじゃないし、頑張るのは実は僕だ。

いくら武蔵でも、目の前で兄貴を叩きのめされたら、僕に愛想尽かすだろ？

こう言う言い方はよくないかもだけど、前々から武蔵は迷惑だったんだ。

イイ機会だし、僕のことをキツチリ嫌ってもらおうとしよう。

それに、ストレス溜まってるわけじゃないけど、体は動かしたいし。右膝もかなり治ってきたから、どれくらい動けるか確認しておきたい。

指の脱臼は、まあ、チクチクするけど大丈夫だろうさ。

だから。

「とりあえず、表出るやボケ」

少し痛い目見てもらうか、ザクロさん。

4話目『The Garnet man』（後書き）

え、究極のサブキャラ・武蔵ザクロの登場です。

ゲーム本編でも、2、3言だけセリフのあるレアキャラクターです。やったね、小杉ちゃん！ 家族が出てきたよ！

………すいません、こんなノリで。

思いつき盛り上がり欠いている気がしますが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、諸々承っております。

どのようなご意見でも真摯に受け止めますので、ガシガシ書いてやってください。

ドリーさんからご意見をいただきました。微修正しました。

5 話目 『遠慮なく本気でどっぞ』（前書き）

ちよつと地の文が多めです。

会話文だけ読んでもどうなつたか分かるので、

「っだゴラアアアアア！ 読みにくいんだよポケエ！」と思われる方は、

そのように会話文をピックアップしていただけると幸いです。

ただし、ザクロ兄さんの戦闘シーンは全部カットされます

5 話目 『遠慮なく本気でどっぞ』

さて、そういうわけで店の外に出た。

そんなに遠くに移動するわけにもいかないけど、幸いにもココは街はずれ。

一見すれば人目に付きそうでも、ほとんど人が来ない場所なんてのはいくらでもある。

まあ、ココもそういう場所の一つだ。

牛井屋の裏手にある、1台しか車が停まってない月極の駐車場。

アスファルトで舗装もされてないせいで、剥き出しの土がよく見える。

拳句の果てに、あちこちに雑草が生えてて見苦しい。

そういう場所だからこそ、人が来なくて助かってるんだが。

今の状況は、説明が要らないくらい極めて単純。

俺とザクロが向かい合って、少しだけ離れた場所に小杉がいる。

俺もザクロも、まだまだ構えは見せない。

距離は大体2mで、一步踏み込めば蹴りも拳も当たる間合い。

俺に限ってだが、タックルすれば一瞬で詰められる間合いでもある。

ザクロが何を使うか細かくは知らんが、どっちにしても俺に当てれるとは思えん。

この間合いでの余裕と、さっき梅屋で見た拳ダコ。それから察するに、伝統派空手でもやってるんだろ。伝統派空手の間合いだったら、この距離は確かにザクロの距離だ。そう考えれば、間合いをとったり詰めたりしないのも理解できる。

だからこそ、そういう間合いにいるからこそ。

武蔵ザクロは、俺との勝負を避けるって選択が弱くなっていく。

自分が有利だから、戦いやすいから、先手を取れそうだから。

そんな単純な理由で、得体の知れない相手と戦おうとしてしまう。

実際、それなりには強いんだろうよ。

俺に手を握り潰されそうになったのに、それでも戦意を失わないんだ。

パワー以外の要素で俺に勝てると思ってなきや、そんな自身は湧いてこない。

「喧嘩売ってんのはソツチだし、謝る気はないよな？」

一応、確認はしておかないと。

もしザクロが、引くに引けなくなって俺と勝負しようとしてるならハッキリ言っつて、それは俺にとってマイナスにしかない。

金だけ払って豚丼も食わずに出て来たのに、何1つ目的を達成できない。

そんなことになったら、完全に時間の無駄になっちまう。

だから、もしザクロの気持ちが悪えてるんだったら、ここで挑発し

とかなきゃならん。

そこで、このセリフな訳だ。

この状況で俺のセリフを聞いて、友好的に終わらせようって奴はいない。

何より響くのが、遠回しに謝れって言われてることに違いない。

平和に終わらせたいと見せかけて、上から目線でキツチリ喧嘩売ってんだ。

これで気分悪くならない奴がいたとしたら、是非お目に掛かりたいくらいだね。

「謝るのは貴様の方だろうが！ 小杉を惑わせるなど言語道断！

貴様のせいで、小杉が最近『ザクロ兄様』と呼んでくれなくなっただぞぞ！」

……事情はともかくとして、謝る気は全く無いらしい。

飯屋の中で人様を怒鳴りつけて、胸倉掴んで喧嘩売ってきて。

事情を詳しく確認もしてないクセに、俺のせいだって決めつけて。

そこまでやっておいて、武蔵の兄離れの責任を俺に押し付けてくる。本当に思い通りに動いてくれて、心の底から笑いそうになっちまう。

「おい武蔵、止めなくて良いのか？ お前の兄貴、今から痛い目見るぞ」

優しく最終警告してやったのに、武蔵は平然としている。

あのムスツとした顔のまま両腕を組んで、俺とザクロを見据えるだけ。

かなり失礼なこと言ったつもりだったのに、いつも通りにしてやがった。

しかも、俺の言葉に対する返事ってのが。

「こつなつた兄さんは、私じゃ止められませんから。

面倒かもしれないですけど、手加減して倒してもらえるところいいです」

……なんて、俺よりの意見なもんだから。

ザクロの奴の視線が、ますます鋭くなった。

ココまでくれば、もう戦わないってのはない。

「本気を出すと殺してしまうからな。手加減してやるから、安心してかかって来い」

口元だけで笑いながら、ザクロが虚勢を張る。

このクソ暑い中で長袖シャツなんか着てるくせに、無理に涼しい顔しやがって。

手加減するつもりなんて、どうせ最初っからなかっただろうに。

妹の前でカツコつきたいのか、つまらない言葉を吐きやがる。

気持ちは分らんでもないんだが、なんてみっともない。

ここは1つ、最後の最後に念押ししておくか。

「負けた後に言い訳されると鬱陶しいんでね。遠慮なく本気でどうぞ」

下手糞な作り笑いをして、思ったことをそのまま口に出してやった。そういつ俺の態度と言葉を受けて、ザクロの口元が引き締まる。あの男に、もうどれほどの余裕も残ってないって証拠だ。いやあ、ムキになってる奴を煽るのって、どうしてこうも楽しいんだらうね？

一拍の間を置いて、空気が張り詰めた。

お互いの気がピツタリ合って、戦いの気配が広がる。

ここからは言葉がなくても、あとは肉体1つで充分だ。

そして俺らは、どちらともなく構えを取った。

構えた時に、俺もザクロも半歩下がった。
そのおかげで、相手をよく観察するくらいには余裕ができる。

ザクロの構えを見たが、悪くない。

左足を前、右足を後ろ、左手を顔の高さで前に突き出し、右手は腰溜めに。

重心は右足にほとんど乗せて、左足を上げ下げしてリズムをとってる。

左右のフットワークを考えてないのは、真っ直ぐで俺に当てる自信があるからか。

まあ、どっちにしても、思った以上に懐が広い。

下手に入れば左足で押し返されるし、左足を避けようとするれば右の突きが飛んでくる。

アッチから攻めるのが難しいんだけど、コッチから攻め崩すのも難しい。

激昂してるかと思ったけど、冷静に対処してくるのはポイントが高い。

怒っても意識の乱れないタイプってことも考えられるけど、そんなのはどっちでもいい。

俺の構えは、例のフルコンタクト空手のアレ。

今回も左半身を敵に晒して、オーソドックススタイルで構えた。

どうせ先手は向こうに取られるんだから、最初の一撃は出させてやる。

出させてはやるけど、勝たせてはやらない。

この構えだって、ザクロが攻撃しやすいようにって考えた構えなん

だから。

空手には、大きく分けてフルコンタクト空手と伝統派空手がある。細かく言えばイロイロ違いがあるんだが、俺が考える一番の違いは間合いだ。

より多くのポイントを得ることが勝利につながる、伝統派空手。

より多くのダメージを相手に与えることで勝ちを得られる、フルコンタクト空手。

そのルールの違いのせいで、適切な間合いや有効な技つてのが全然違う。

そついう諸々の違いは、間違いなくザクロも知っている。

同じ空手を名乗っていながら、相反する思想の元に育つた武術。

その片方を学んでいるなら、必ず1度は意識したことがあるはずだ。自分の学んでいない空手の技術、構え、戦い方。

どうすればその空手に勝てるかってことまで、必ず考えたことがあるはずだ。

伝統派空手の方が先に攻撃を当てられるって、そついうことまで考えたはずだ。

俺もザクロも様子見してるが、ザクロの方が攻めの気が強い。

そもそも俺に攻める気がないってのもあるが、なかなかイイ殺気をしてる。

ザクロの目と右手を見れば分かるんだが、俺の目か喉を狙ってるらしい。

普通は拳を握るところなのに、ゆるく掌を開いてる。

貫手（4本指を揃えて、指先で相手を突く技）が目潰しを使おうとしてる証拠だ。

あの程度の握力じゃ、指が弱過ぎて、俺の胴体や腕を突いたりすることはできない。

だから、トレーニングで鍛えることができない、目や喉を狙ってくるはず。

蹴りを考えないのは、ザクロがジーンズをはいてるから。

拳よりもずっと威力はあるけど、それ以上に複雑な動作が要求される。

ジーンズをはいてるときに出す蹴りは、勢いも威力も半分以下。

そんな技を、あんなに様になった構えをするヤツが出してくると思えない。

1分くらい経ったか。

わざと隙を作るために、少し深めに呼吸しようと思った。

ほら、やっぱり。

右の貫手が、俺の喉に向かって飛んでくる。

そういう映像が、俺の頭の中に流れ込んできた。

後ろ足に重心が掛った『後屈立ち』と呼ばれる構えから、かなりの速度で踏み込む。

後ろだった右足を前に鋭く踏み出して、その勢いをも指先に乗せる。踏み込みの潔さ、攻撃を仕掛けるタイミング、重心移動の上手さ、喉を狙う度胸。

達人とまではいかないまでも、一流と呼ばれて差し支えないほど強烈だ。

ザクロにとって残念だったのは、全部俺に読まれてること。確定予測で、こんなにもハッキリ見えてしまったんだから。あとは、誘ってやるだけで……

ほら、やっぱり。

呼吸を始めようと気を抜いた瞬間、ザクロが動いた。

俺の脳ミソに映った通りの光景が、俺の目の前で再現される。

鋭く右足で踏み込んで、右の貫手を喉に伸ばして決ろうとする。

狙う場所もタイミングも分かっていたら、俺が避けられないはずがない。

ザクロの右側に回り込むように、軽いステップで横にずれる。

空手で言うところの『転身』、ボクシングなら『サークリング』つーのか。

ともかく、ザクロの貫手は空振りして、無防備に右脇腹を晒してくれた。

タイミングは完璧。

ザクロは体が伸びきって、横からの俺の動きに対応できない。

そして俺は、上半身を左に捻って、左の拳を後ろに溜める。

左足に全体重を集中し、一気に全身を右に回転させた。

回転の勢いは爪先から膝を通り、胴体から腕に伝わって、左の拳に乗せられる。

それと同時に、体中のバネを総動員して突きの威力を高める。

久々に全力で出した左ボディフックは、イメージ通りにクリーンヒット。

あんまりキレイに当たるもんだから、脇腹に拳が吸い込まれるような感覚があった。

抵抗が感じられなかったことは、その一撃が内臓にまで響いたってこと。

そんで、俺の全力のボディフックをマトモに受けておいて、立てる道理は微塵も無い。

で、ザクロが思わず腹を抑えようとしたところで、少し思い出した。

『小杉をたぶらかした』なんて、勘違いされそうな言葉を吐きやがったんだよな、コイツ。

もしコレが不死川の耳に入ったりしたら、一気に心象が悪くなったかも知れない。

今は告白したばかりで、ただでさえ不安定な関係だって言うのに。そう思うと、1発で終わらせるのは惜しくなった。

左ボディフックから、左ボディフックの連打。

最初の一撃と同じ場所を、寸分違わず決り込む。

現役時代にも使ってたコンビネーションで、これで何度も人を倒してきた。

あの頃よりキレは落ちてても、重さだけは今の方がずっと上だ。

ハッキリ言っちゃえば、最初の一撃でカタはついてた。

そんな状態で、俺の2発目を避けられるはずもない。

ずっと深く、左の拳が沈んでいく。

このまま突き出せば、ザクロの体を貫けそうだ。

でも、本当に拳で人間の体が貫けるはずはない。

拳そのものじゃなくて、拳が生んだ衝撃とプレッシャーが、ザクロの内臓を貫いていく。

ザクロの足が、ほんの少しだけ地面から離れた。

打ち上げ気味の軌道で打ったからって、人を浮かせたのは初めてだ。くの字に体を折り曲げるようにして、拳から逃れるようにザクロは倒れ伏す。

まるで体重を感じてないなかったに、拳に充実感が満ちていた。

その充実感が、拳から腕に、腕から全身に広がっていく。

爽快感に似た何かか背骨を駆け抜けて、思わず身震いしそうになっちまった。

とにかく、ザクロはみっともなく地面に崩れ落ちて。

誰が見ても明確に分かる形で、俺はザクロに勝利した。

で、そこから5分が経った。
ザクロがぶっ倒れてから、5分が経った。

俺と武蔵は、松屋の日陰に入って缶ジュースを飲んでる。
どういうわけか、武蔵が俺に飲みモノを買ってきてた。
冷たいウーロン茶を買ってくるあたり、俺の好みをよく分かっているらしい。

本当はコンビニで弁当でも買って、とっとと家に帰りたかったんだけど。

飲み物なんて奢られたら、そのまま帰るってのは俺の良心に反する。

武蔵を遠ざけるためには無視して帰った方がいいんだけど……正直、心配だ。

いや、武蔵が心配なんじゃなくて、俺が殴りつけたザクロのことが心配で。

レバーをピンポイントで狙ったにしても、5分も動かないってのは

マズイ気がする。

あんまり酷かったら病院にでも連れてかなきゃなんかも知れん。もし、内臓が破裂してたりして死なれたら、やっぱり気分は悪いからな。

そういうわけで、涼しいところで冷たいモン飲んでたんだが。ふと、武蔵が俺に……顔を向けずに、僕に声をかけて来た。

「加減して下さいって言ったじゃないですか」

「いや、割と加減したつもりなんだけど」

まあ、嘘だけどね。

相手がガキだったりすればまだしも、イイ歳した男なんだし。そういう相手にケンカ売られたら、僕が手加減する必要なんてない。腕の1つも折らなかつたのが、手加減と言えば手加減かもしれないけど。

「でも、兄さん浮いてましたよ？」

「自分から横に飛んで、僕の突きの威力を殺そうとしたんだよ」

「自爆でやられたZ戦士みたいなカッコで、ずっと小刻みに震えてるんですけど？」

「僕の突きの威力を殺したことで、勝利を確信して震えてるんじゃないの？」

そんな風に、無駄話してザクロの回復を待ったんだけど。

口から酸っぱいもの出しながらピクピクしてるだけで、一向に立ち上がらない。

なんていうか、ボディを鍛え足りないんじゃないだろうか。

現役時代は、コレ食らって倒れても吐く奴まではいなかったんだけどなあ。

いくら僕のパワーが昔より増してるからって、ちょっとないわ。

武蔵も武蔵で、ザクロが立ち上がって来ないって分かってんだろくな。

結構手酷い感じなのに、焦りもしなきゃ介抱もしにいかない。

もしかして、始める前から俺が勝つって分かってたんじゃねえか？

それで止めなかったとすりゃ、コイツは相当の食わせモンだ。

前々から頭が回るとは思ってたけど、どういう意図があってココまでやませたのやら。

正直、止めるチャンスは何回があった。

1度目は、俺とザクロが梅屋の中で小競り合いしたとき。

2度目は、梅屋の裏手の駐車場に車での間。

3度目は、この喧嘩が始まる前の無駄話をしている最中。

武蔵がその気だったら、シスコンのザクロを止められたはずだ。

いずれにしても、僕の印象は良くはならんだろうからね。

目的が達成できてりゃ、武蔵の意思なんてのはどうでもいいよ。

なんて思ってた、僕が甘かった。

武蔵の奴が、コツチに向き直りながら微笑む。

……ちよつとカワイイけど、だからどうって話だよ。

そんなことよりも、どうして微笑みかけられたのが気になるんだよね。

実の兄貴を目の前でKOされておいて、どうして笑顔になれるのか。

「でも、手加減とかはともかく……ありがとうございます」

しかも、なんでコイツは僕に礼を言ってるんだろっか？

そう思ったのも束の間、もっと恐ろしいことを武蔵は口走りやがった。

「港先輩がコレだけ強ければ安心ですよ、ザクロ兄さん？」

え？ちよつと待った。

武蔵のヤツ、何を言っちゃってんの？

僕が強いからって、どうしてザクロさんが安心するんだよ。

とか考えてると、ザクロさんがプルプルと立ち上がる。

生まれたての小鹿みたいな感じで、膝をガクガク笑わせながら。

見てるこっちが不憫になりそうな感じで、どうにかこうにか中腰になつて。

震えながら顔をあげて、なんでか僕に語りかけてきた。

「港……いや、あえてミチヒロくんと呼ばせてもらっぞ」

「港って呼んでください。貴方とは赤の他人ですから」

この展開は、嫌な予感しかしない。

殴り倒されたのに、急に親しげになるザクロさん。

ダメージが回復しきってなくて、すごい苦しそうにしているのに。なのに、不気味なくらい爽やかな笑みを浮かべてる。

そんでもって、さっきの武蔵の意味深な発言。

これらを複合すると、つまり……

「小杉のこと、確かに頼ぐぶっ！」

黙らせたけれど距離があるから、飲みかけのウーロン茶の缶をスロ
ーイング！

顔面にクリーンヒットして再び倒れたけど、それがどうした！

ふざけやがって、全部言わせてたまるかってんだ！

いったい、どこをどうしたら僕が武蔵と付き合おうとしているよう
に見えたんだよ！

しかも、いつから武蔵を賭けた戦いになったのか一切理解できない！

「も〜、先輩も落ち着いてくださいよ」

「落ち着けるか！ 自分の兄貴に何を吹き込んでんだよ！」

「大まかに言えば『イイ先輩がいる』ってことを話しましたね」

このアホは……なんてことしてくれてんだよ！

いつの間にか後輩の家族に紹介されてるとか、生まれて初めての経験だよ！

ああああああああああ！ 心の底から面倒くさい！

もう俺のこと好きでも何でもイイから、そつとしておいてくれよ！俺は不死川に恋してて、お前の気持ちに応えてる暇は無いんだよ！

「食事中のことなので、兄さんに限らず家族みんなに……あれ？ 帰っちゃんですか？」

「帰るよ、そんなもん！ 止めても無駄だからな！」

話しておきたいことがあったんですけど、なんて聞こえてきたけど。そこまで付き合ってやる義理もないから、とつと駐車場から退散した。

なんていうか、どうでもいいところで面倒重ねさせやがって。

相手に迷惑かどうか、そういうのをキツチリ考えてから行動してもらいたいね。

いちいち対応しなきゃいけない方の身にもなってみろってんだよ。

……さて、こういうのは早めに忘れるに限る。

明日から実家に帰るんだし、いつまでも気落ちしてらんないからね。板垣さんちの食事が気になるけど、まあ、月雄さんもノブさんもあるから大丈夫。

月雄荘にいる限りは、誰かがどうにかしてくれるはずだろうよ。

でも、今日はまだまだ時間があるんだ。

せっかくだから、スーパーに寄って食材を買って。

いつもより少し豪勢で、ちょっとだけ手間の掛かる晩飯でも作りますか。

5話目『遠慮なく本気でどうぞ』（後書き）

はい、ザクロ兄さん敗北しました。

正直、原作でも注目すらされずに負けているので、こんなもんかなあと。

勝手に伝統派空手の使い手にしちゃったりして、今後、ザクロ兄さんの設定が出てきたときに痛い目見そうです。

毎度毎度のことです、お手数おかけしていますが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘などなど。厳しいご意見もあわせて、随時お待ちしております。

6 話目 『かの地の洗礼』 (前書き)

夏休み北陸編・スタートです！

6 話目 『かの地の洗礼』

川神から七浜に出て、七浜駅から新幹線で名古屋へ。

名古屋についていたら、金沢行きの新幹線に乗り換えて、後はタクシーで直行。

それだけの過程を経れば、夕方までには実家に到着する。

実家につけば、まあ、朝から飯作ったりしなくていいような1日が待ってるはずだ。

そんな風にゆっくり過ごしたいって考えるのも、昨日が忙し過ぎたからだね。

ザクロさん叩きのめした後、スーパーに直行したまではよかったんだけどさ。

……いや、武蔵たちと遭遇したことが、もうケチの付き始めだったのかも知れん。

まず、スーパーで童帝様と遭遇した。

なんでも、食用でないコンニャクやらを購入しに来たとか。

その一言でコンニャクサラダを作る気が失せたのに、さらに豚肉も買ってとか。

晩飯の予定だったコンニャクサラダと豚キムチが、僕の心の中から遠のいていつて。

童帝様と別れた後、歯噛みしながら食材を戻しに行った。

で、予定していた晩飯を変更して、久々に中華を作ることに。予定してたものよりも遥かに面倒だけど、他に代案もなかったんだよなあ。

それに晩飯っていうと、次の日の亜巳さんの朝食になるのも考えなきゃならない。

あんまりコツテリしたもん作ると、さすがに体調崩しちゃうだろうから。

キュウリの漬物、ポン酢ダレのバンバンジー、肉団子の甘酢あんかけ。

エビと青菜の炒め物と、衣の薄い唐揚げに、チンジャオロース。チャーハンは、温め直しても美味しいか分からないから、亜巳さんの分は作らなかった。

こっそり浦木さんの分も作っておくのは、日ごろの感謝の意味を込めてっつてことで。

あの人、誰かが飯持ってかないと、トマトかじったりしてるだけだもんなあ。

さらに、飯のときもバツチリ苦労した。

天ちゃんも竜平も、これでもかかってくらい食いまくって。

炊飯器を2つ使って炊いたのに、晩飯だけで米が無くなって。

結局、浦木さんと亜美さんの分を炊き直すので、また手間と時間がかかって。

後片付けは辰子ちゃんが手伝ってくれたけど、本当に大変だった。

そっぴや、亜巳さんと辰子ちゃんと合鍵預けたけど……大丈夫だよ
ね？

ほら、今さらだけど、イロイロと不安なところが多いんだよ。

冷蔵庫の中身が尽きたりだとか、物干し竿が折れたりだとか。

まさかとは思うけど、新しく買った洗濯機を壊すかもしれないからさ。

月雄荘の皆さんの手を借りずに済むなら、そっちの方がいいだろうしね。

あとは、僕のパンツが無くなってないことを祈るばかりだ。

まあ、とにかく。

イロイロ確認したのもあって、床に就いたのが午前の2時。

朝5時に起きたことを考えたら、十分な睡眠時間は確保できなかったわけで。

眠たい頭を抱えたまま、板垣一家の飯を作って家を出た……つてのが、今日の午前6時。

で、今は午前の9時。

新幹線の中で、デカイ荷物を抱えるようにして座ってる。隣に人が来たりしなきゃいいんだが、夏休みだしそうもいかないでしょ。

家族連れだったりすれば、網棚の上に荷物を詰めておきたいだろうし。

だから、こうして荷物を抱えて、周りの迷惑にならないようにしなきゃいけない。

寝ておきたいって言うのは……正直、ムラムラが収まらないから。

誰もいないときについて思ったけど、なかなかそうもいかなくてね。朝は基礎トレーニングしてるし、昼間は部屋の掃除とか飯作ったり。夜は夜で、次の朝に備えて早めに寝なきゃいけなかった。

だから、まあ、その、イロイロと処理してる暇なんてのは無かったわけだ。

とりあえず、新幹線の中で処理だなんてアクロバティックな選択肢は無い。

それに、やっぱり睡眠不足が解消されたわけじゃないから、寝たいことは寝たい。

こういう昂ぶりを抑えるためにも、やっぱり寝ちゃうのが一番。

そういうわけで、今からどうという姿勢で寝ようか考えてたんだけど。

「あ、コッチみたいですよ」

なんて、由紀江ちゃんの声が聞こえてきたから、寝れなくなった。

今のタイミングで聞こえたら、無意識で由紀江ちゃんのことを思い出しちゃう。

厳密には、由紀江ちゃんのふくよかな胸や、安産型の腰元とか限定なんだけど。

どっちにせよ、僕のムラムラに拍車をかけたのには違いない。

温泉旅行での刺激的な経験以来、どうにも性欲が抑え切れてない。

今までは理性で抑えつけられたんだけど、最近はおからさまに本能が勝ってる。

辰子ちゃんの胸に自然と目が行ったり、天ちゃんのスカートの中が気になったり。

2人の裸身が頭から離れないし、胸の感触もフラッシュバックすることが多いんだよ。

元々こんなに酷くなかったんだけど、段々と収まりが付かなくなってきたのがなあ。

不死川に会いりゃいいんだが……いや、会ったところで収まりがつかなくてもないか。

……現実逃避はココまででいいよね？

目下一番の問題は、いまいち抑え切れてない性欲じゃない。

僕と同じくらいの大きさのスポーツバッグを背負って。

まるで、僕が座ってるのが当然みたいな顔して立ってた。

どうしてか分からないけど、由紀江ちゃんが目の前にいることだ。

もちろん、現状を平然と受け入れているのは由紀江ちゃんだけ。

僕としては、今みたいな状況は受け入れがたいのにも程がある。

由紀江ちゃんとは実家が一緒だし、帰りが同じになる可能性もないわけじゃない。

さらに言えば、新幹線で隣の席になることも充分に考えられるだろう。

ただ、釈然としない。

由紀江ちゃんが隣に座ることになる確率なんて、本当に微々たる程度。

これは仕組まれたことだと思った方が、常識的に考えても遙かに自然だ。

まあ、どっちにしたって、由紀江ちゃんに食ってかかるのは間違いだ。

カマかけてみたりしながら、それとなく聞いてみるのが自然だろうよ。

「奇遇だね、近くの席になるなんて」

「あれ？ 美樹彦さんから聞いていませんでしたか？」

はい、偶然じゃないの決定。

しかも、犯人までキツチリ分かった。

それなら、あとは確認しておくだけだ。

「僕は『帰って来い』としか聞いてないんだけど。由紀江ちゃんは
どうだったの？」

「えっと、私はミチヒロさんと帰省して来るように言付かっている
んですけど……」

あんの爺、やつぱり舐めたマネしてやがったか！

昔っから、何かにつけて由紀江ちゃんと一緒にしようとしやがって！
相手さんにも迷惑なんだから、ケロツとこういうことすんじゃねえ
よ！

そりゃ、由紀江ちゃんはイイ子だし、カワイイとも思ってるけど！
こういう茶々を入れて、いちいち僕をからかおうとするのは止める
よ！

由紀江ちゃんに責任がない分、ストレスをぶつけることもできやし
ない！

クソが……去年の忘年会の時に、毒でも見舞って始末しとくんだった！

……まあ、今は忘れておいてやろう。

手の届かない爺より、目の前の由紀江ちゃんだ。

由紀江ちゃん以外にも、大和田さんと武蔵がいる理由も知りたいし
ね。

さっきから由紀江ちゃんの後ろにいるんだし、さすがに無視はでき
ないよ。

なんで2人が一緒にいるかってのも、文字通りに、腰を落ち着けて
聞きゃいいさ。

とりあえず、荷物を網棚に投げ入れておく。

この子たち相手なら、それほど遠慮しなくてもいいからね。
僕の荷物が隣に置いてあったくらいで、そうそう文句は垂れてこないだろうし。

窓際の席を譲らないのは、もちろん紳士の嗜みだ。

そこそこ時間のかかる新幹線の移動中に、女性陣が水分を取り過ぎないとも限らない。

この子らが化粧直しをしたくなったとき、僕に断りを入れるのは気が引けるはず。

……うん、こつという細かな気遣いこそが、先輩として要求されることなんだろつさ。

「とりあえず座りなよ。いつまでも突っ立ってるのも疲れるでしょ」

「はあ……何か申し訳ないですね」

なんて言いながら、ちゃっかり僕の対面に座る武蔵。

コイツの兄貴もそうだけど、武蔵一族は総じて図々しいのかも知れない。

好かれて悪い気はしないんだが、イロイロとムズ痒い感じがするんだよ。

ハッキリ言うのも気が引けるけど、不死川とのこと考えると邪魔なんだもん。

酷いことになる前に縁を切っておきたいんだけど……優柔不断だよなあ、僕って。

「じゃあ、隣に失礼しますね」

「すみません、お世話になります」

なんて言いながら、僕の隣に由紀江ちゃんが、武蔵の隣に大和田さんが座る。

まあ、大和田さんとは付き合いが全然ないから、僕の対角線上ってのは適切か。

さて、しばらくは野暮な話はナシだ。

もうちつと俺の心が落ち着いてから、話はそれからだったことので。

……… ったく、色んな事が急に起き過ぎちまって、頭が追いつきゃしねえっての。

さて、その後。

名古屋で乗り換えて、その途中で駅弁買って。

駅弁を食い終わってから『最近は何も食ってないなあ』とか思
いながら。
道中、大和田さんが持ってきたトランプで、簡単なゲームをして遊
んだ。

今までに8回のババ抜きと10回の大富豪が消化された。
全員そこそこ勝ったり負けたり……いや、俺が少し多めに負けたか
本気出せばもっと勝てたろうけど、後輩の気分悪くするのを楽しむ
趣味はない。

負けてやったって思えば、負けるのも悔しいもんじゃないからね。

……まあ、タイミング的に丁度イイか。

「ところで、2人は北陸になんか用事があるの？」

そう、これは聞いておかなきゃならない。

由紀江ちゃんが実家に帰るなら、むしろ2人は邪魔になるはずなん
だし。

ってことは、なんか理由があるんだろうけど、僕にはそれが見当つ
かない。

旅行するにしたって、そんなに見るところがあるような場所じゃな
いんだもん。

わざわざ北陸行くなら、奮発して沖縄に行った方が楽しめるだろ
うさ。

「まゆっちが誘ってくれたんです。海水浴に行こうって」

なんて、朗らかに笑う大和田さん。
なるほど、そういうことなら納得できるよ。

川神の海よりはキレイだもんね、ウチの近くの海って。

太平洋を初めて見たとき、とてもじゃないけど泳げる気がしなかったくらいには。

何が違うのかは分からんけど、太平洋ってやたらと濁って見えるんだよなあ。

「海水浴ねえ。保護者とかどうすんの？」

海がキレイかどうかは別として、正直な話、このシーズンは無謀だと思う。

人が多いってのもそうだし、それだけ頭の悪い連中が集まってくる。こういう時期独特のトラブル……盗撮とか痴漢とかナンパとかされるかも知れん。

キレイどころの女の子ばかりだと、そういう危険に出会う確率が上がるのも必然だ。

で、僕が心配してるのは、大成さんが忙しくて海水浴に行けないだろうってこと。

他の流派との技術交流とかがあって、この時期は忙しいんだよね、大成さん。

お袋さんが同行したところで、頭の悪い奴らを追い払えるとも思えない。

こういうのは男の仕事なんだけど……手の空いてる親戚もいないだろうしなあ。

いちいち実力行使するっていうのも、あんまり現実的な手段じゃないし。

本当にどうするつもりなんだろうねえ、この3人は。

なんて考えてると、武蔵が笑顔で物凄いことを言いやがった。

「またまた！ 港先輩も冗談が上手いんですから！」

「は？ ちょっと話が見えないんだけど？」

いや、えっと、本当にどういうこと？

いったい、僕の発言の何が冗談に聞こえたんだ？

ちよっと思ひ返したけど、質問しただけじゃんか。

「え？ ミチヒロさんが保護者で来てくれるという話では？」

「……いつ、そういう話になったのかな？」

「いつというか、そのように父上から連絡を頂いています」

由紀江ちゃんが言いにくくしてるけど、もう分かったぞ。

あのクソ爺が、手紙なりなんなりで大成さんに吹き込んだんだろうよ。

でもって、その大成さんが『友人がいるなら連れて来なさい』とか言っただ。

大成さんも大成さんだけど、やっぱり一番悪いのは爺だ。

ったく、人様の夏休みを、いったい何だと思つてらっしゃるのかね。僕が落ち着ける場所なんて限られてるってのに、その1つの実家で

も働かすってか。

まだまだ僕だつてガキなんだから、少しは自分の時間を大切にさせろってんだよ。

つーか、僕だつて未成年なんだから、保護者としては不適切なはずなんだけど。

この子は、その辺のことが分かつてて物を言ってるんだろうかね。

「それと、ミチヒロさんの御実家に泊めて頂く予定になっています」

拳句、なんつーことを言い出すんだ、この小娘は。

いや、別に由紀江ちゃんが悪いんじゃない、爺たちが悪いんだ。何が悲しくて、由紀江ちゃんらの面倒を見なきゃならんのか。

「由紀江ちゃんの家は？ 充分広いじゃん」

「……沙也佳さやかの友達ともだちが泊まりに来ていそうなので」

ああ、沙也佳ちゃんか。

オープンな子だもんなあ、由紀江ちゃんと違って。

だんまりしてた僕にも、臆面なく声かけてくる子だったもんなあ。最初に合った時は、本当に姉妹かどうか疑ったくらいだし。

そりゃ、あの子の友達が来てたら、由紀江ちゃんも居辛いだろうよ。

とにかく、由紀江ちゃんの表情は、僕が同情するくらい哀れだった。今までの友人がいなかった人生を振り返るような、疲れ切った表情。そんな表情を見せられたら、さすがにダメだなんて言えないって。まあ、こういう甘さが僕の良くないところなんだろうけど。

知り合いの女の子を大した理由もなく見捨てられるほど、僕は薄情でもない。

後輩3人を路頭に迷わせずに済んだと思えば、無理矢理だけど納得もできるしね。

「まあ、確かに部屋は余ってるだろうから、好きに泊ってくれりゃ……は？」

別に、何か意味があったわけじゃない。
なんとなく、ふと、窓の外に視線を移しただけだった。

視界に入ったのは、ヨーロッパの城をイメージした建造物。
でも、やたらテカテカした色合いをして、本物とは似ても似つかない。

まあ、周りに住宅がないあたりからも分かるけど、ぶっちゃけラブホテルだね。

若干気不味くなるところだけど、その気不味さはラブホテルを見たからじゃない。

ラブホテルに掛かってる、デカデカとした横断幕のせいだ。

『おかえり三千尋！ 港家一同、大歓迎！』

もう、何も考えたくない。

なんでラブホテルと港が繋がってるのか、とか。

わざわざ僕の名前をラブホテルに飾ったのはどうしてか、とか。

何か温かいものが目から溢れてるけど、それがいったい何なのか、とか。

そついう色んな疑問が、どうでもよかった。

「ねえ、由紀江ちゃん」

「はい」

「泣いてイイ？」

その言葉を聞いて、由紀江ちゃんは少しだけ押し黙って。

犯罪者に優しく自首させよつとするかのような声色で、僕に告げた。

「ミチヒロさん……もう、涙が溢れています」

うん、そっか。

どうでもいいよ、どうでも……。。

6 話目 『かの地の洗礼』（後書き）

そついうわけで、港くんが実家に帰る話でした。
お茶目な港家一族による、手痛い洗礼を受ける羽目に……！

向こうしばらくは、北陸での色々な話になる予定です。

第十一段こと『まゆみづせい 黛大成』も……出せるといいなあ。

ちなみに、みきひし 美樹彦は港の祖父。

さやが 沙也佳は、まゆっちの妹の公式ネームです。

youkeyさん、調査にご協力いただきありがとうございます。

いつものごとくですが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、諸々承っております。

これ、ちょっとキツツイかなあ……というご意見もお待ちしております。
ので、遠慮なく書いてやってください。

7話目『我はかつて此処に住み居たり』

人前で涙を流すのなんて、本当に何年振りだろう？

しかも、声を出さなかったとはいえ、後輩の前で泣きが入るとか。我ながら情けなくって恥ずかしいよ、ホント。

すぐに涙は止まったけど、恥ずかしさは消えやしない。

後輩に涙を見せただけじゃなくて、ラブホテルに名前が飾られたってことも。

恐らくだけど、僕の反応を予想してバカ笑いしてるであろう親族のことも。

恥ずかしくて恥ずかしくて……このまま新幹線で月雄荘に帰りたい。

まあ、高い金を払って一人暮らしさせてもらってる身なんだから。保護者の意向を無視して帰るなんて選択は、始めっからないんだけどね。

……しかし、30分くらいのことだったのに物凄く長く感じた。

時間が長く感じたのも、まあ、仕方のないことだったんだよ。

生気の抜け切った僕に合わせて、みんな静かにしてくれただから。

まさか、タクシーの運ちゃんまで黙っててくれるとは思わなかったけど。

まあ、別にタクシーの中でだけ無言だったわけじゃない。

あの横断幕を見たあと、ずっつと黙っててくれたんだよなあ、3人とモ。

下手に話題変えられたりするよりはずっと良かったけど、気を持ち直したわけでもない。

つーか、こんな短時間で立ち直れるかってんだよ。

せめても、風呂に入って飯食って、しっかり寝てからじゃないとね。……いやいや、やってらんねえんだって、本当に。

とにかく、やっと家の前に着いて。

今は、それなりにデカイ門の前で、4人して荷物背負って突っ立ってた。

そこそこには金を稼いでる家だけあって、外面だけは気合入ってる。それとなく古い家っぽくした外観……っていうか、塀で中が見えないんだけどね。

でも、その白い塀も適度に汚れたりしてて、何となく時代を感じさせないでもない。

川神院ほどじゃないけど、木で作られた門にも威厳らしいものはある。

どうせ家の中まで入れりゃ、リフォーム終わってキレイな内装がお待ちかねしてるのに。

ココだけの話、仏間以外は全部フローリングになってんだよね、こ

の家の中って。

「あの……落ち着きましたか？」

「いやあ、見苦しいところ見せて申し訳なかったね」

落ち着いたって言わないのは、僕なりのマナーってヤツだね。

冷静になれたかどうかって、まだ自分でも判断が付かないんだもん。責任者を殴れるもんだったら、血を吐くまで殴ってやりたいと思う。

でも、そうしたらマズイって思ってる自分がいるから、ちゃんと我慢できてるんだよ。

発想そのものは冷静じゃないけど、考えて行動できる理性は残ってる。

そういう状態が冷静って言うのかどうか、正直言って僕には分からない。

まあ、だから、落ち着いたなんて言い切るってのが出来ないわけだ。

「はい、気を取り直していこうか」

パンパンと手の平を打って、無理にでも流れを変える。

不自然極まりないけど、この話題を続けたい奴もいないはず。

それに、なんだかんだ言っただけで空気の読める後輩たちだ。

僕の希望通りに、全員が気持ち切り替えてくれた……と言っこと

にしておいじ。

「まあ、まだ家にも入ってないけど……客間で寝泊まりしてもらおうよ?。」

「客間ですか?。」

「うん、客間だよ。」

マヌケな感じで聞き返してくる大和田さんに、スパツと答える僕。そういう風に聞かれたら、こういう風にしか返せないもんなあ。

客間っていつても、ほとんど旅館の部屋と一緒に

フロアリングの上にカーペット敷いてあって、エアコンまで備えてあって。

床暖房もあれば掘りごたつもあって、中身の入った冷蔵庫まである。風呂とトイレもついてるんだから、もうホントに旅館みたいなもんだ。

「大丈夫ですよ。冷暖房完備で、とても過ごしやすかったです。」

なんて、微妙なフォローを淹れてくれる由紀江ちゃん。

そっぴや、由紀江ちゃんは何回か泊ったことあるんだっけな。正月とかは家族と過ごしたかったろうに、爺のわがままで呼び出しちゃって。

でもって、酒の席の勢いで、僕が頭から地面に落されて……。

まあ、とにかく、由紀江ちゃんは客間に泊ったことがあるんだよ。勝手くらいは分かるだろうし、悪いけど由紀江ちゃんに任せちゃう。

「まあ、渡り廊下で繋がってるから、不自由は無いと思うよ?」

「えっと、凄いですね」

大和田さんの顔をよく見ると、口が開きっぱなしだった。

デカイことにはデカイけど、そんなに豪華でもないだろうに。

外側だけでこの様子じゃ、中に入ったら腰抜かすんじゃないだろうか。

貴族様の家とは違ってると、広さだけは十分に確保できてるからね。

それに比べて、武蔵の奴は落ち着いたもんだ。

さっきまで塀がどこまで続いているのか覗いてたけど、それもとつくに終わってる。

見慣れてんのか肝が太いのか、ケータイを開いたり閉じたりしながら時間を確認中。

……かわいらしい腕時計してるのに、なんでケータイで確認するのやら。

と、武蔵が僕に一声かけてくる。

暇と言えば暇なんだけど、だったら大和田さんとかに声かけりゃいいの。

「そういえば、先輩はどここの部屋で寝るんですか？」

「どこって……僕の部屋で寝るんだよ」

武蔵が妙なことに聞いてきたけど、そりゃそうだ。

他所に住んでる時期もあったけど、基本的には実家はココなんだもん。

こんだけ広い家なんだから、僕の部屋があったっておかしくないでしょ。

まあ、勝手にリフォームとか模様替えされてるってことはあるだろうけど。

「ふーん、そうなんですか」

武蔵は、どうにもムスツとして見える顔をした。

こういふ表情が僕に向けられるのは、本当に久しぶりだ。

記憶を掘り返しても、半年も付き合いがないってのが信じられない。しつこく顔突き合わせられても、そこそこに記憶に残るらしい。

「まあ、すぐに誰か出てくると思うから、少し待ってね」

来るのが分かってるなら準備くらいしとけよ、とは声にも出さず。木製の門構えに埋め込まれたチャイムを押して、来客を知らせてやった。

さて、それはいいんだけど。

外観と不釣り合いな安っぽいチャームを押ししてから、もう10分近くになる。

女の子たちがソワソワしてきて、さっきとは違った感じに居心地が悪い。

この中の誰かが、トイレに行きたいのを我慢してるのかもと思うと……。

いや、ちょっと興奮してくるけど、それより先に罪悪感が芽生えてくる。

「……ちょっと遅いですよね」

なんて言葉を、ボソツと武蔵が口に出すくらいだ。

よっぽどトイレに行きたい……じゃなくて、待ちくたびれてるんだ。

「申し訳ないね。中に誰かいるはずなんだけど」

さすがに、ちつとばかり不自然な気はする。
僕をアレだけからかっておいて、その反応を楽しみたがらない奴が
いるはずがない。

爺、お袋……響は、多分帰ってきてないだろうなあ。

それに、家にいるのは僕の家族ばかりじゃないんだ。

「誰かって、お家の方以外に誰かいるんですか？」

なんて聞いてくる大和田さん。

ああ、そっぴや説明してなかったっけな。

「少しだけど、お手伝いさんがいるんだよ」

ただっ広い家だから、やっぱりお手伝いさんは必要だね。

盆休みとかでも、そういう人が常に2人以上はいる。

まあ、やることつつつたら、料理と掃除くらいなもんだけど。

なんてことを、ちょっと説明しようと思ったら。

「はいはい！ ちょっと待っててくださいねーっ！」

とか、若い女が勝手口から出てきた。

……誰だコイツ？

やたらと背が高く……由紀江ちゃんよりも少し高いか？

こういう目で見えるのもなんだけど、プロポーシオンもそこそこイイ。なんとなく見たことあるような顔してるけど、やっぱり総じて見覚えがない。

ショートカットっつーか、ボブカット？

肩の辺りで髪の毛切り揃えてあって、えらくスッキリしてる。

全体的に明るそうな雰囲気だし、やっぱりコイツには見覚えがない。

「あらら、もう来ちゃったんだ」

呆れてるっつーか、驚いてる顔。

嫌味な感じとかは一切なくて、純粹に驚いてるだけの顔。

でも『もう来ちゃった』なんて言うつてことは、家の関係者だよね？

……本当に見覚えのない顔なんだけどなあ。

「えつと、どちらさん？」

割と怪訝そうに聞いてみる僕。

それに対してこの女……

「やだ、兄さんったら！ 妹の顔忘れないでよー！」

とか返してきやがった。

え〜っど……変わり過ぎじゃね？

僕が最後に合ったのは2年前だけど、もう全然外見が違う。

メガネかけてツインテールにしたのに、ショートカットに……コ
ンタクトか。

身長なんか10cm以上伸びちゃってるし、昔の面影も全然ない。

なんというか、清楚とか貞淑って感じから、快活とかハツラツって
感じに変わった。

でも、言われればところどころ『らしい』ところはある。

アイドル並みにパツチリした目とか、やたらサラサラしてる髪の毛
とか。

すっを通った鼻筋とか、広告に使えるそうなくらい整った唇とか。

顔のパーツ1つ1つに注目すれば、確かにヒビキだってわからない
こともない。

「まあ、アレだ。大きくなったね」

「もお！ 兄さんったら、どこ見て言ってるのよー！」

「お前の胸なんか見たところで、なんの足しにもならないよ」

冗談めかして胸を隠すヒビキに対して、そこそこにツッコむ僕。

僕の後ろにいる3人を見たら、そんなこと言えんだろーに。

どう見ても80cm前後の慎ましい胸しやがって、けしからん。

身長がグツと伸びて、大きくなったって言ったのはソツチのこと
で。
妹の胸を見て欲情する趣味のない僕は、ヒビキの言ったことなんて
考えもつかなかった。

「あ、勝手に盛り上がってごめんなさいね？」

僕の肩越しに3人を覗いたヒビキが言って、ようやく思い出した。
今さらだけど、この後輩連中を家に泊める約束だったんだっけ。

さて、とりあえず家に案内しようかってところで、ヒビキが動いた。
軽いステップっていうか、文字通り踊るような足つきで移動して。
僕が振りかえるよりも早く、スルスルと3人の前に到達。
背筋をしゃんと伸ばして、両手の指を腰の後ろで絡めて。
斜め後ろから見ても分かるほどの笑みで、良く通る声で挨拶をした。

「初めまして！そちらの三千尋の妹の、港みなと響びびきです！」

うーん……やっぱり面食らうか。

妹がいるなんて言ってなかったもんなあ。

いや、由紀江ちゃんは知ってたろうけど、余計なこと言っ子じゃな
いし。

そりゃ驚くだろうけど、固まるほどビックリしなくてもいいのに。

「お初にお目にかかります、黛由紀江です」

なんて、刀を持ったまま頭を下げる由紀江ちゃん。

そっぴゃ、由紀江ちゃんも初めて会うんだっけ

由紀江ちゃんが呼ばれる時って、決まってヒビキがいなかったもんなあ。

「あー！ いいですよ、そんな形式ばった挨拶なんて！」

そんなこと言いながら、由紀江ちゃんの両手をキュッと包むヒビキ。向かい合ってお祈りするみたいなお手つきっていえば、イメージしやすいかも。

そういう手つきを崩さずに、ヒビキは由紀江ちゃんに告げた。

「よろしくね、由紀江姉さん！」

……このウストラボケは、本当に僕の妹なんだろうか？

僕が不死川のことを好きって知った上で、なんでこういう冗談を言うんだよ。

今のセリフだと、まるで僕が由紀江ちゃんと付き合ってるみたいに聞こえるじゃん。

まあ、それを全部分かった上で、僕のことからかって遊んでるんだろっけどさ。

「ねっ、姉さん!？」

とか由紀江ちゃんも動揺しちゃってるし。

いや、この状況なら誤解も何もないだろうけど、疲れるんだもん。僕だけじゃなくて、テンションについてけない後輩一同も。おかしいなあ……前はこんな風じゃなかったんだけどね

「あら？ 由紀江姉さんって、私より年上だよな？」

「はい、その……はい！ 年上ですっ！」

「じゃあ、やっぱり由紀江姉さん！」

何故か緊張した様子で返す由紀江ちゃんに、ヒビキは朗らかに言い放った。

そっぴい、昔っから人付き合いが好きな奴だったもんなあ。

まあ、僕の知り合いだからリップサービスしてるのかもだけど。

どっちにしても、やっぱり不自然な感じはする。

僕の記憶の中のヒビキは、もう少し内向的だったはず。

今みたいに明るく振舞えるのはイイことだけど、急に変わり過ぎじやなかるうか。

そんな風に考えてる僕を尻目に、ヒビキの視線は残りの2人に移る。ジロツと相手を眺めるみたいに見るところとか、細かいクセは変わってない。

イロイロ変わったり変わらなかったり……思春期ってそういうもんなのかな？

自分と比べても参考にならないから、よく分かんないや。

「えっと、コチラは……」

「武蔵小杉です」

「えっと、大和田伊代です」

武蔵は毅然と、大和田さんは慌てて。

2人とも少し硬かったけど、しつかり自己紹介はしてくれた。

だから……まあ、責めるんだったら由紀江ちゃんも一緒だけど。

僕とヒビキをチラチラと見比べてたことについては、不問にしておこう。

いいじゃんかよ、似てない兄妹がいたって。

「うん……小杉姉さんと、伊予姉さんだね！ 2人もよろしく！」

ヒビキは、口の中で何度か名前を転がしてから、納得したように頷いて。

由紀江ちゃんの時とは違うけど、左右それぞれの手で握手を求めた。

律義な2人は、ちゃんとヒビキに握手を返してくれてる。

やっぱりぎこちないけど、それはもう仕方がないって。

出会ってから10分も経ってない相手に、そこまでフレンドリーにはできないさ。

まあ、せつかく来てくれたんだし、ヒビキに任せるか。

「じゃあヒビキ。悪いけど、3人を客間に案内してもらえるかな？」

「うん！ 任せて任せて！」

なんて、思ったよりもヒビキが張り切ってるから。

とりあえず、さっさと僕は自分の部屋に向かうことにした。



さて、ようやく自分の部屋に帰ってきた。

あっという間だったけど、僕の部屋って勝手口から近いもんなあ。

部屋って言うか、母屋から離れたところに屋根つきの離れがあって、その離れが丸々1つ、そのまま僕の部屋として使われてる。

庵を開けたら玄関で、すぐ右がトイレになってる。

まっすぐ進んでいくと、突き当たって右にクローゼット兼倉庫が。

突き当たって左側の扉が、僕のプライベートルームにつながってて。

応接間は、玄関に入って左の扉を開けた先にある。

内装が変わってないか確認したかったから、今日は応接間から自室に行ってみたり。

それでもまあ確認してみたんだけど、最後に来た時と全然変わってなかった。

いやいや、こういう気遣いってのは有り難いね。

まだプライベートルームを見てないから、手放しでは喜べないけど。

応接用のイスに腰かけて、その隣にスポーツバッグを放置。

そのままジャケット脱いで、向かいにあるイスに投げつけた。

これがベッドだったら、そのまま眠りたいくらいには疲れてんだよ。少しくらいマナーが悪いのに関しちゃ、見て見ぬフリをしてくれると嬉しいね。

しかし、コッチ来てまで疲労を貯める羽目になるとは思わなかった。イロイロと気が休まらない川神に比べて、この家にいれば安全だし。何よりも、炊事や洗濯をやらなくても済むって言うのが、本当に助かる。

毎日のことだし慣れてはきたけど、疲れることには疲れるからんだもん。

あと、ラブホに垂れ幕掛けるの考えた奴は、思いっきり殴り倒す。

っと、そうじゃないそうじゃない。

とりあえず、コッチにいる間の予定を考えとかないと。

朝に走り込むのは日課だからやるとして、あとは基礎トレくらいか。

武蔵とか由紀江ちゃんに、わざわざ組手の相手してもらつ訳にはいかないし。

それに、夏の間には体重増やしちやいたいから、コッチにいる間は基礎トレだけでイイヤ。

筋トレ中心にして、膝の調子を確かめながら軽くランニングして…。

我ながら、体を休めるつもりが全然ないみたいだね。

まあ、それでも無理に休んでおかなきゃならない。

僕…俺も人間なんだから、四六時中フル回転って訳にはいかん。そろそろダラけないと、変なところにガタが来そうだ。

ただでさえ怪我が多いもんだから、これ以上の無茶は避けたい。

…こんなんじゃない、ガスタオンさんに笑われるかもな。

ふう、と思わずため息が1つ出た。

少しだけにしても、昔を振り返るってのは、そんなにイイことばっかじゃねえやな。

嫌なことばっか思い出すのは、もしかして今が幸せだったことか？
だったらイイんだが『単に今までが不幸だったから』ってことは考えたくない。

なんてセンチな気分になつてたのに、俺のスライドドアを開く音が聞こえた。

つたく、せつかく帰ってきたつてのに、いきなり用事でもあるのかよ。

まあ、お袋も爺もないみたいだし、ヒビキの奴だろうな。

そんな風に思ってるうちに、部屋の扉がノックされて。
『どうぞー』って俺の言葉を確認してから、ヒビキが入って

「あの、先輩？ 晩御飯ですけど、何か食べたいものってあります？」

訂正。

武蔵が入ってきた。

……教えたんだな、俺の部屋。

せめて黙っててくれれば、今日1日は静かに過ごせたんだが。つっても、客間からすれば目と鼻の先にあるんだし、時間の問題だったか。

相も変わらず、港一族は男の扱いつてのがよろしくない。

そもそも、なんで武蔵が小間使いみたいなことしてんだ？ いや、そんなことは考えるまでもねえか。

俺の部屋の位置確認してきたかつたとか、そういう理由だろ。どっちかつつと、晩飯のメニューの方がオマケだろうな。

で、武蔵は扉を開けたまま、応接間に入ってこなかった。

内容が内容だし、腰を落ち着けるほどの話でもないからなんだが……。

扉を半開きにしたままで話しかけられると、思ったよりも落ち着かん。

まあ、とつと話を付けて、さっさと帰ってもらおうとしよう。

「つーか、ソツチこそ食べたいモンねえの？ 参考に言っとくと、海の幸は旨いぞ」

まあ、海近いしな。

冬の方が脂がのっていいんだが、夏に食う魚も上手い。

やっぱり、魚も波も日本海に限るってこつた。

太平洋とは潮が違うんだよ、潮が。

「オススメとかあるんですか？」

「生魚が大丈夫だったら、やっぱり刺身に限るだろ」

「じゃあ、お刺身でいいですね」

なんて簡単な会話をしたら、扉を閉めていなくなった。

……なんだ、本当に晩飯のメニューを聞きに来ただけか。ゆっくりしたかったし、別にいいんだけどよ。

まあ、あの子たちの相手はヒビキがやってくれるだろ。

武蔵がコツチに来たのは事情があったからだろうし、もう大丈夫なはず。

……ちつと目を閉じるか。
今から寝るには時間が足りないけど、
これでも少しは休めるだろう
な。

7 話目 『我はかつて此処に住み居たり』（後書き）

更新が大変滞っており、申し訳ありません。

にもかかわらず、新作をもう1本始めてしまったことについても、お詫び申し上げます。

夏休みらしい話は、次の次あたりを予定しております。

夕食のシーンとかすつとばして、いきなり行くかもですが……。

ともかくにも、ご期待に添えるように努力させていただく心積もりです。

ご意見、ご感想、ご指摘、ご要望など、辛らつな意見も含めまして諸々お待ちしております。

8 話目 『港家の食卓』

あつという間に、午後6時12分。

結局寝ちゃいないんだが、目を閉じて横になっただけで少しは楽になった。

1人用のソファで寝転がってたせいか、少し肩は凝ったままだし。ちらっと頭がフワフワするが、寝起きみたいな状態だから仕方ねえや。

アレだけ忙しいことがあったのに、ここしばらくロクに休んでないんだから。

とにかくだ。

いつも通りの調子だったら、晩飯は7時から。

……ずっと昔っから、ウチはそういう風なんだよ。

で、飯の時間が来ちゃったからには、俺も飯を食いに行かなきゃならん。

体力的には眠ったときたかったけど、腹が減ったら夜に目が覚めちゃう。

部屋の冷蔵庫には何も入ってなかったから、そうなったら食うモンは無い。

だから、俺はどうにか意識を覚醒させて、目に少し力を込めながら起き上がる。

さっき脱ぎ捨てたジャケットを着直して。

軽く香水を吹きかけてから、手櫛で髪を簡単に整えて。

トイレと一緒になってる洗面所で、顔を洗って眠気をごまかして。

コッチ来るときに履いてた靴で、そのまま母屋に……ああ、そうだよ。

一休みして、すっかり忘れるところだった。

ラブホテルの横断幕の件、誰が発案したのか聞いとかねえと。

とりあえず、ジジイを2、30発殴って吐かせることにするか。

さて、港ってのは普通とはちょっと違う家だ。

もともとは綾小路の一派だったけど、豪族に……成り下がった、でいいか。
勝手に豪族に成り下がって、その血筋の格を落としたのが港ってわけだ。

もちろん、そう考えれば元々は貴族だったってこと。

そういう家なわけだから、客人を招くときにはイロイロと慣習がある。

例えば『客人と食卓を共にしない』ってのも、その慣習の一つだった。

なんでも『同じ食卓に座るのは、客人と同等の扱いになる』からNGなんだと。

綾小路の連中を招くときは、同じ食卓の上座に座らせることになっ
てんだがな。

まあ、何が言いたいかって言うと。

港の人間は、客人と一緒に飯を食わないのが普通ってこった。

親戚の人らとは一緒に食うけど、血の繋がってない連中でそれは無かった。

実際、大成さんらが家に来たときだって、飯はわざわざ別々に食ってたくらいだ。

だから、由紀江ちゃんらと飯を食うなんて思ってもみなかった。

リビングって言うか、居間って感じの部屋。

畳はフローリングに変わったから、なんかフカフカした絨毯が敷いてある。

そこの真ん中あたりにテーブル……掘りこたつあって、プラズマテ

レビは部屋の角に。
壁が古臭いから全体的に変な感じがするけど、まあ、悪い部屋じゃないと思う。

長方形のテーブルの向こうとコツチで、俺と3人が分かれてる。

武蔵、由紀江ちゃん、大和田さんって感じで、俺から見て左から順に並んで。

俺の隣に座ってるのは、右にいるラフな格好のヒビキだけ。

上座の方には、現頭首であらせられる美樹彦ミキヒコのジジイがふんぞりかえってた。

お袋は……まあ、大事な用事みたいだし、帰省中は家に帰ってこないだろ。

顔くらいは見ときたかったけど、時間が取れないなら仕方ねえよ。

しかし、由紀江ちゃんと武蔵はラフな服装してんな。

座敷に座ってるからボトムスは見えないけど、上はTシャツ一枚だけだ。

由紀江ちゃんは白地になんか英語が書いてあるTシャツで。

武蔵は、左胸の辺りに縦長のハートマークが刺しゅうされたTシャツを着てる。

共通項は、薄い布地を押し上げてる膨らみが魅力的なことくらいか。

2人とは対照的に、深緑と黒のチュニックの上に長袖を羽織ってる大和田さん。

羽織ってるのは、グレーっぽい……フリース？ カーディガン？

とにかく、俺の目からすれば外に着てくような組み合わせじゃねえ。

まあ、由紀江ちゃんらほど付き合いないから、ラフな格好はできないのだろうな。

なんつーか、こう、心の距離とかそついう問題で。

まあ、そんなこともどうでもいいさ。

そんなことよりも、今日の晩飯はスケールが凄い。

テーブルの上には、でかい舟盛りがドカンと乗ってる。

マグロが丸々一匹さばかれて、まだ軽く口をパクパクしてる。

もちろんマグロだけじゃなくて、鯛やらエビやらイカやらも盛りられて。

ウニもゴロゴロしてて、なんでかサザエの壺焼きまで船上に鎮座してる始末。

ツマも丁寧に手作りされてるあたり、かなり高い店にジジイが注文したらしい。

他にも、味噌汁とか茶碗蒸しとかサラダとかあるけど、やっぱり舟盛りが目立ってる。

こういう飯が出てくるのは、年に数えるくらいだったのに……気合が入ってらっしゃることです。

一応言つとくと、準備をしたのはジジイだ。

つつても、注文と配膳だけしかしてねえんだが。

そんな簡単なことでも、港じゃ男の仕事って決まってる。

どうせ他の家に婿入りするもんだからって、ガキの頃から仕込まれるんだよ。

俺がジジイを手伝わないのは、まあ……他の仕事を済ませたからってことだ。

そもそも、俺が言いたいのはそんなことじゃないしな。

何が言いたいかつて、さつきから箸の進みがイマイチなんだよ。いや、別に俺が腹壊したとか魚嫌いとか、そういうことじゃねえんだけど。

問題は、箸の進んでない由紀江ちゃんたちの方。

ダイエツトしてるのかもだけど、それにしたって手が止まり過ぎだ。少し刺身を摘まんだだけで、他には全然口にした様子がない。年頃の女の子だから、気持ちは分らないこともないんだが……。成長期なんだし、もうちょっと自分の体のことを考えて欲しい。

「あのさ、遠慮しなくてもいいんだぞ？」

「いえ、遠慮しているのではなく……」

チラツと由紀江ちゃんが視線をやった先には、ウチのジジイがいた。そんな由紀江ちゃんを見て、俺はようやく合点がいった。

「おいジジイ。とつとと箸付けないと、みんな食べ辛いだろうが」

そう、ジジイが箸を付けてなかったんだ。

茶碗と箸を持ったまま、ずーっと止まってやがる。

こういうときは、客人に気を遣わせないように早めに手を付けるもんだろ。

まったく、上流家庭に生まれたんだから、それくらいは分かっただろうに。

「ぎにじなぎで、どんだべたざぎ」

ちよつと顔が腫れたくらいで、簡単に泣き言かましやがって。

口の中切れないように殴ってやったんだから、痛いフリすんなってんだ。

まぶたが腫れて両目が塞がり気味で、ところどころ盛り上がってて元の顔が分からなくなる程度には殴ったけど……別にそれだけだろ。若い子に優しくして欲しいからって、オーバーリアクションしやがって。

「まあ、ジジイもイイって言ってるし、ガンガン食ってくれ」

「でも」

「大丈夫大丈夫。余ったら俺が後で始末しとくから」

由紀江ちゃんを制して、そのまま食事を再開。

うん、やっぱり日本海の魚はイイ味してるな。

冬の方が脂はのってるけど、夏に食う魚も悪くは無い。

あ、そろそろ醤油にワサビ入れとくか。

つてところで、ヒビキが俺の肩をつついて、皿を突き出してきた。

皿の上に乗ってるのは、そこそのサイズがあるサザエだ。

折れた爪ようじが突き刺さってるってことは、どうにか決ろうとは

したらしい。

まあ、刺さりっぱなしって事は、決るのに失敗したんだろうけど。

「ねえねえ兄さん。サザエが上手くとれないんだけど……」

なんて言われたら、兄貴として手伝ってやらなきゃならん。

というわけで、兄貴らしく無言で皿を受け取って、サザエを食べれるようにしてやった。

サザエの外殻を両手で握って、それぞれ逆方向にグリッと捻る。

割るっていうか、回してズラす……とにかく、外殻を真っ二つにした。

で、汁とサザエの身が皿の中に落ちて、やっと食べられる状態になる。

その中身を皿ごと突き出してやると、ヒビキはニッコリと笑って、

「ありがとう！ お礼にチューしてあげる！」

なんて言いやがった。

妹にキスされたって嬉しくなんてないんだよ、俺は。

客観的に見ても可愛いツラしてるとは思うが、妹だからな。

イメージできない奴がいたら、お袋に同じこと言われるのを想像してみる。

……身内である限り、どっちだって変わりやしねえよ。

「本当にやったら、あとでジジイと同じ目にあわすからな」

「えー……兄さんのケチー」

そういう冗談はやめろってんだよ、ヒビキのヤツも。

武蔵は落ち着いてるけど、由紀江ちゃんと大和田さんが変な目で見てるだろ。

つたく、こういう冗談を言うような子じゃなかったんだがなあ。

しばらく会わなかった間に、いったい何があったのやら。

まあ、今は後輩連中の意識を逸らすのが先だ。

放っておくと、俺ら兄妹に対して間違った評価を与えかねんからな。特に武蔵あたりは、不死川に何言うか分かったもんじゃない。

「3人とも大丈夫か？　なんだったら、ついでに割っちまうぞ」

「あ、お願いします」

「それじゃあ私も」

……由紀江ちゃんはキレイにくり抜いてる。

武蔵も大和田さんも、俺が思ってるよりは器用じゃないらしい。

こんなんは、爪楊枝で適当につついてりゃ取れるもんだと思うんだが。

とりあえず、近くにあるサザエを手取る俺。

で、ヒビキの時と同じようにして、1つずつ解体した。

まあ、爪楊枝でくり抜いてやってもいいんだが、コツチの方が正直早い。

手は少し汚れるけど、手は拭けばいいだけの話だしよ。

で、机の向こうから拍手が飛んでくる。
……宴会芸じゃないんだが、まあいいさ。

「よく割れますよね」

「握力3桁ありゃ、これくらいは楽勝だろ」

人に褒められるってのは、それなりに嬉しいモンだ。
それが武蔵でも、女の子に感心してもらえると悪い気分はせん。

「港先輩、握力いくつあるんですか？」

「右が135kgで、左が125kgだったな」

なんて、澄ました顔で大和田さんに返すけど。
ハッキリ言って、内心じゃ胸を張ってるところだ。
なかなか見せる機会もないし、できることが地味だから自慢しにくくってさ。

指だけで逆立ちとか、缶ジュース絞り出すとか、耳をつまんで千切るとか。

できたところで『だから何？』って話になっちまうからな。

さて、後輩の世話もしてやったことだし。

そこそこ気を配りながら、ぼちぼち腹でも膨らめますか。

後輩2人のサザエの殻を割って、それから何分くらい経ったか。時計見てないからよく分からんが、30分は経ってるはず。うら若き乙女と刺身をつつくつてのはロマンがないが、それはどうでもいい。

なんというか、黙々と食事が続いてた。刺身やら米やらに箸を付けて、熱い茶を口に運んで。茶碗蒸しをスプーンですくっては、サラダを取り分けて。若い女の子が4人もいる空間だとは思えないほど、場が静かになつてやがる。

食事中にTVの音がよく聞こえるだなんて、俺の人生で初めてだ。

そりゃ、他人の家で飯食うのは気が引けるかも知れんが、遠慮しないで良いのに。

こんなところで遠慮するくらいなら、ウチに止まるって話を断って欲しかったよ。

まあ、そういう願望はともかくとして、俺もバツが悪い。
無言で飯を食うのは慣れてるが、それは1人の時の話だ。
こういう風に頭数がそろってるのに無言するのは、まだまだ慣れそ
うもない。

そついうわけで、ちょうど聞いておきたいこともあったから、少し
話題を出してみた。

「で、海水浴は明日行くんだっけか？」

僕が向かいの3人に声を掛けると、互いに顔を見合わせる。

チラチラと視線のやり取りをした後で、武蔵が代表して口を開いた。

「いえ、どうするか話し合ってたところですよ」

そつは言うけど、この時期は台風が増え始めるから悠長にはしてら
れない。

8月も半ばを超えるとクラゲが大量に出てくるから、早めに泳ぎに
行くべきだ。

何日いるつもりか知らんが、どっちにしたって遅くに海に行くのは
得策じゃない。

そつ思って、適当なことを言って早めに海に行かせることにした。

「そろそろ盆休みだから、早めに行かないと海水浴場が混むぞ？」

嘘はついてない。

盆休みを利用して旅行に来るやつらが多いんだよ、割と。都会から遊びに来るやつらも、帰省ついでに泳いでく奴らも。この時期でも人が少ないってわけじゃないが、そこに重なるよりはマシだ。

……何がマシかって、俺が面倒みるのが楽だって意味だけだな。

「えっと……それはちょっとマズイですね」

「ちょっと日を置いてから海に行こうかって話してたもんね」

大和田さんの言葉にヒビキが続く。

……話してたつてのは、その場にいたつてことだよな。つてこと、ヒビキも海水浴に行くつもりだつてことか。

「お前も来るの？」

「うん、私も行くの」

まあ、全然構いやしないんだがよ。

今さら1人増えたくらいで、俺の手間は変わらんさ。

由紀江ちゃんたちも皆しつかりしてるだろうから、そもそも大したことでもないし。

デメリットつて言ったら、時間取られるつてことくらいなものだしな。

「それでも構わんけど、面倒事だけは増やしてくれるなよ？」

「大丈夫！ 私も15歳なんだから！」

もうじゃないだろ、もうじゃ。

いくら人生経験が豊富でも、まだまだ世間を知らない15歳だ。

お兄ちゃんとしては、海水浴場に野放しにするのはイロイロ心配なんだよ。

変な虫が付いたりしたら……まあ、そんなことはよつぽどないだろうけど。

もしゴミクズみたいな男が執拗に迫ってたら、がけから飛び降りてもらわないと。

「じゃあ、明日の8時30分くらいに門前に集合ね。」

もし予定が変わるようなことがあったら、すぐに連絡するから

「時間はいいけど、足はどうすんだよ？」

「さつき山口さんに連絡取ったけど、いつでも車出せるって言うってたから大丈夫！」

なんとまあ、根回しのよろしいことで。

俺が寝てる間に、そういうことも片付いてたのか。

まあ、手間がないのは結構だから、何も構いやしないけどさ。

山口さんなら気心も知れてるし、運転技術も確かだから安心だ。

「ところで兄さん、お風呂はどうする？」

ああ、そっか。

母屋と客間にしか風呂がないから、順番決めなきゃダメだよな。

俺のところにも風呂があればいいんだけど、シャワーもありゃねえ。

どうせ先に入るのはヒビキなわけだし、俺の入浴が遅くなるのは決定事項だ。

でも今日は、風呂の時間まで待つてられるほど体力が残ってない。よろしくはないが、清潔感よりも睡眠時間が優先だ。

「朝一で入るつもりだけど、それがどうしたよ」

「え〜……女の子がいるのに、それはちょっと不潔じゃない？」

「すぐに部屋に戻って寝たいんだよ。汚ねえとは思うが、今回は勘弁してくれ」

そりゃ、俺だつて不潔って思うさ。

でも、もう取り繕うのが面倒なくらいクタクタなんだよ。

明日も朝は早いみたいだし、少しでも長く寝ておきたい。

そうじゃないと、脳味噌の疲れも取れなくて、冷静にモノも考えられん。

つてわけで、箸と茶碗を置いて、手元の緑茶を一気飲みして。

そのまま立ち上がったって、自分の部屋に……ああ、そうだ。

全然しゃべらないから、ジジイのことすっかり忘れてた。

「おい、ジジイ」

「あんぶあ？」

「もう少し話があるから、俺が帰るまでには時間取っとけよ」

そのまま返事も聞かずに、俺は引き戸を開けて。

いちいちジジイの返事を聞くのも面倒だから、居間からとつと退散した。

なんかジジイ以外の奴に声掛けられた気もするけど、それに応えるのも面倒だ。

部屋に戻って、とつとジャージに着替えて寝たいしな。

そんなことより……明日、トラブルがないように気をつけんと。

つつても、あの子ら海に連れてくんだから、それは無理だよなあ。

まあ、だから俺が保護者として付いてくって話になったんだろっけだよ。

もういいや、面倒くせえ。

明日になってから考えりゃいいよな、そんなもん。

さあ、とつとと部屋に戻って、ゆっくり寝るとしよう。

……ジジイ殴ってスッキリしたし、いい夢見れるといいなあ。

8 話目 『港家の食卓』 (後書き)

お待たせしました！

個人的な事情とスランプが重なったとはいえ、約2カ月ほども更新が滞り、大変申し訳ありませんでした！

しかも、お待たせした挙句、食事をするだけの話などと…… 本当に頭上がりません。

今後は、なんとかもう少し短いスパンで更新できるように努めさせていただきます。

いつもながら、ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘などなど、幅広く承っております。

また、感想欄に書きづらいけどどうしても言っておきたいことなどがございましたら、メッセージで伝えていただければ幸いです。

9 話目 『みなT O L o v e r』

まあ、昨日はグツスリ眠れた。

起きたのが朝の5時だったから、7時間くらいは寝たか。

できれば昼まで爆睡したい感じだったが、体が勝手に起きちまった。ランニングこそしなかったが、結局、風呂に入ってストレッチはした。

なんつーか、体を動かすのがクセになってんだろっな。

その後、水着とタオルと財布と……海水浴に必要なモン準備して。ジーパン履いて、紺色のTシャツ着て、薄手のカーディガン羽織つて。

由紀江ちゃんたちは飯を食い終わったらしいから、ジジイと一緒に飯食って。

……そういや、ジジイに道場の掃除やっておくように伝えたっけか？
まあ、ジジイに言い忘れてたなら、自分で掃除すればいいだけの話だ。

じゃなくて、飯食ったあとに荷物持つて。

俺の家から、お手伝いの山口さんの運転で海水浴場に。

家の車庫に置いてあった黒いワゴン車に、山口さん以外に5人が乗った。

俺、由紀江ちゃん、武蔵、大和田さん、ヒビキの5人。

それで、帰りも山口さんが迎えに来てくれるらしいんだが。

そこまでしてくれるんだったら、いっそ保護者を請け負って欲しかった。

俺の仕事と言えば俺の仕事なんだが、高校2年生のやるようなことじゃないんだし。
大成さんも大成さんで、いったい何考えて俺にお守させようと思っただのやら。

まあ、愚痴はココまででイイか。

今は、午前11時くらいのはず。

家を出発してから、だいたい2時間と少しは経ったか。
腕時計は置いてきたから、細かい時間は分からない。

携帯電話は持ってきたけど、スポーツバッグの中に入れっぱなし。
海に来たときまで、メールやら電話を気にしたくないんだよ。

海水浴場の込み具合は、この時期にしちゃ随分と空いてる感じ。
レジャーシーズンだから、普通に砂浜が見えるなんてのは珍しい。
そろそろクラゲが出始めるからかも知れんけど、それに当たって人が少ない。
……と思ったら、なんか砂浜の隅っこでローカル局がイベントをやってるそうなの。
ミスコンだかなんだか愚にもつかんようなイベントだし、コッチには関係ないけど。

で、俺は今、パラソルの下で日本海を見据えてる。

4色ストライプのビニールシートは、半分以上が日陰の中。

その日陰に、全員分の荷物を置いてある。

色気のない黒いスポーツバッグは俺ので、他は女の子の荷物だ。

……あのミニサイズのビニールバッグに、どうやってイロイロ詰め
てんだか。

あと、由紀江ちゃんの刀はウチの実家に置いてこさせた。

ここは川神じゃないから、そういうの持つただけで視線を浴びる
ことになる。

それに、いくら黛十一段の娘といっても、その知名度が一般に流
布してるかは疑問だ。

一応、港の息のかかった海水浴場を選んだが、それはあんまり関係
ない。

赤の他人様は、きつと由紀江ちゃんを見ながらヒソヒソ話でもする
んだろう。

まあ、そうならないために、わざわざ日本刀を置いてこさせたんだ
けど。

いやいや、湿っぽい話は充分だ。

どうにも気分がマイナス方向になるが、ポジティブに行かなきゃ。

つつても、そもそも保護者代わりで来てるわけで、そうそう自由に
は動けん。

昼飯に何を食うか考えるのってのが、今の俺には関の山だ。

まあ、しつこい虫が寄ってきたら、そんなときや因縁ふっかけて体が
動かせる。

その時が来るまでは、波打ち際でも見つめながら我慢するぞ。

俺が海に来てやったのは、全身のストレッチと着替えだけ。
ストレッチは、まあ、なんかあった時に動けないと困るから。
元々そういう目的でついて来たんだから、何もできないじゃ困るし。

まあ、座ってたってやれることはあるさ。

もちろん、波打ち際を見つめるばっかじゃない。

例えば、女の子を眺めるってのもアリだろうさ。

妹が混じってるのにこういうのはなんだが、この子らみんな美人だし。

無意味に座り続けた2時間の分は、キツチリと元を取らせてもらおうじゃないか。

まずは、肩慣らしにヒビキから。

そこそこの布面積の真っ赤なビキニで、相手のボールを待ち構えてた。

なんかスポーツでもしてたのか、引き締まった体が健康美をアピールしてた。

全体的にシャープなラインをした体は、明らかに歳不相応な成熟具合。

胸も大きくないにしても、レシーブで屈むときに決して小さくないと主張する。

レシーブの動作が寄せて上げる感じだったのもあるが、谷間は決して浅くない。

総じて、俺としばらく会わない間に、見違えるくらいキレイになったと思う。

つつても、その隣にいる比較対象のせいで、そんなに際立つじゃない。

次は、ヒビキの隣にいる武蔵。

コイツはコイツで、ヒビキに負けず劣らずの素晴らしい体つきをした。

このスタイルと顔だったら、モデルになっても遜色がないくらいだ。出るところは出て、引き締まって欲しいところは引き締まっている。

それに、ちゃんと自分に似合う水着を選んではあたり、センスも悪くは無いらしい。

ビーチバレーの選手が着けてるようなトップスは、鍛えられた体に似合ってた。

無防備に水着を直す仕事なんか、俺としては非常に好ましい限り。不死川のいないところなら、こういうのは大歓迎だ。

でもって、コッチのコートの2人は更に上を行ってた。

由紀江ちゃんは、もしかしたら僕を挑発してるんだろうか？

豊満な体を惜し気もなく見せつけて、コートの中ではしゃいでて。

目算で86cm以上のバストは、由紀江ちゃんの動きについていけずに揺れてた。

その胸も、サイズの割には突き出でて『ロケットおっぱい』なんて単語が頭に浮かぶ。

しかも、あの太ももから尻にかけての肉付きが、扇情的でたまらない。

まだまだ高校1年生で発展途上なのに、もう既に豊満ってレベルに達してる。

白ビキニを選んで着て来たあたりも、俺へのサービス精神が旺盛だ

からかもしれない。
そのビキニのサイズが少し小さい気がするのも、俺の心をくすぐる一因なんだろう。

俺としては、一番意外だったのは大和田さんだ。

けしからんスタイルは制服を着てても分かったけど、水着でそれが倍増された。

今まで見たことのない大和田さんの肌色が、俺の目の中に飛び込んでくる。

そのおかげで、背中から腰にかけてのラインが艶めかしくてたまらない。

胸が大きいとか、腰回りが引き締まってるだとか、そういう話じゃなくて。

全体的なバランスからして、こう、なんつーか……エロい。

他の3人に比べて引き締まった感じは無いけど、だからこそエロい。上手く表現はできんが、女性的なんて言い方をすると一番しっくりくるかも知れん。

そこで、全員に共通してるのは、泳いだ後だから水着が張り付いてるってこと。

ピッタリと貼りついた水着は、それだけで体のラインを浮き彫りにしてる感じがする。

全員が布面積の小さい水着を身につけてるって言っても、その事実は一切変わりはない。

むしろ『肌の露出が多い』『水着が張り付いてエロい』のコンビが強烈と知っただけだ。

由紀江ちゃんの白ビキニが微塵も透けないのは残念だが、かえってそれがイイ。

俺の想像力は未だかつてないほどに掻きたてられて、水着の下の世界を右脳に映し出す。
こういうところで確定予測が役に立たないのが、本当に心残りの方がない。

ちなみに、俺はパーカーにハーフパンツタイプの水着って格好をしてる。
足太いからあんまり見せたくないのと、日焼けすると肌ヒリヒリするからな。

このシーズンほど、自分の肌の色が普通より白いのを恨むときは無い。

まあ、とにかくだ。

目の保養をするには充分過ぎる環境なわけだ。

保護者代わりに来てるつつつても、かなり得した気分になった。

なんかもう、これだけで海に来てよかった気がするから恐ろしい。

もちろん、普通のビーチバレーとして見ても面白い。

今ちょうど、由紀江ちゃんがトスを上げて、大和田さんがスパイクをかました。

ヒビキが大和田さんのスパイクをレシーブして、浮いたボールを武蔵が捻じ込む。

ラインぎりぎりのそれを由紀江ちゃんが滑り込むようにして拾い、大和田さんがトス。

で、今度は由紀江ちゃんの右手が弾丸のようなスパイクを見舞う。

……と見せかけて、空中でフェイントをかけて、左手でネット際に叩き落した。

で、今度は武蔵のサーブが、大和田さんに飛んでくる。つっても、ビーチボールだから大したスピードは出ない。

いや、ビーチバレーのプロならどうか知らんが、少なくとも武蔵のそれは速くない。

だから、大和田さんも充分に間に合って……そんなことはなかった。なんか回転かけてたみたいで、大和田さんの手前で急にボールが落ちた。

レシーブする気だった大和田さんは、無理な体勢でどうにかボールを拾う。

でも、前につんのめりながらだったせいで、ボールはネットに引っ掛かった。

そこで、今度は大和田さんのサーブがヒビキに放たれる。

由紀江ちゃんのスパイクには敵わんが、それでも結構な速度だった。特に何の回転もかかってないけど、そのせいで少しボールがホップしたように見える。

そのボールを下から打ち上げるために、倒れ込みながらトスを決めるヒビキ。

キツチリとトスできてたのか、ボールはちゃんと上に飛ぶ。

それを武蔵がスパイクしたんだが、それを読んでた由紀江ちゃんがブロック。

ブロックされたボールは、明後日の方向に飛んでくことなくコート内に落ちた。

女子学生のビーチバレーにしては、そこそこ面白い試合をしてる。もっとも、ちょっと離れたところで他に催しをしてるみたいで、人は寄りついてないけど。

まあ、俺の手間が増えないのはいいことなんだから、素直に座ってますか。

それから、いくつか点数のやりとりがあったように思う。

試合がひと段落したのか由紀江ちゃんだけが、小走りでコッチに寄ってきた。

せっかく皆と遊んでるのに、何の用があるのかとか考えちゃう。

でも、そんな考えも一瞬で吹っ飛ばす、たわわに実った2つの果実は凄いい。

走ると揺れるそれがある限り、世界平和は決して夢じゃないと実感させてくれるから。

そういう僕の邪な視線に気づくこともなく、由紀江ちゃんは微笑んでいた。

友達と海で遊ぶってのは、由紀江ちゃんにとって相当楽しいことなんだろうね。

是非とも、今日はもう少しだけ友達と楽しく遊んで欲しい。

「ミチヒロさんもうですか？ ビーチバレー、楽しいですよ？」

「どつって……俺、一応は保護者って立場で来てんだけど」

『まゆっちがコートに入ると、ワンサイドゲームになっちまうんだぜー』

俺の言葉に、由紀江ちゃんの左手の中の松風がカウンターをかます。言ってる内容が内容だから、それほど驚きやしなかったけど。

由紀江ちゃんは、そのうち瞬間移動とか舞空術とか使い出すんじゃないかって子だ。

そんな由紀江ちゃんが普通にビーチバレーしたら、差が出過ぎるのは当然のこと。

武蔵とヒビキが敵コートにいるとはいえ、歯が立つはずがない。

大和田さんが穴なんだろうけど、だからって集中狙いするような人じゃないし。

だからって、俺が代わりに入ったところで何の改善にもならん。

由紀江ちゃんが友達と遊ぶことに意味があるんだから。

それに、なんとなく話のつじつまが合っていないような気がするんだが……。

「それ、俺が代わっても意味ないだろ」

『そういつてやるなYO！ ムサコッスが手加減するなっつるさいんだYO！』

正論言っただけ、また松風に返される。

誰だよムサコッスって……とか思ったけど、多分武蔵だよな。

また妙なニツクネームつけられたもんだよ、アイツも。

まあ、武蔵らしいと言えば武蔵らしいか。
もうちよつと状況も考えて欲しいけどな。

ヒビキはともかく、大和田さんは運動神経がイイってわけじゃない
だろうし。

本格的に競技としてやるわけじゃないんだから、楽しきやいいと思
うんだが。

統率力はあるみたいだし人は集まるだろうが、そんなんじや武蔵も
友達失くすぞ。

……俺には関係ないことだけだよ。

つと、そうだ。

さっきの試合、そこそこ拮抗してたよな？

もしケンカか何かがあったなら、ちよつと間に入らなきゃならん。
つてわけで、外堀から埋める感じで、由紀江ちゃんを軽く揺さぶっ
てみた。

「つーかさ、そこまで一方的でもなかったんじゃね？」

「え……つと」

言葉に詰まった由紀江ちゃん。

やっぱ、なんかあったんじやなかるうか

そう思って、さらに踏み込んだ質問をしようと思ったんだけど、

『へーい、ミッチー。追及はココまでにしといたほうが身のためだ
ぜ？』

とか松風に機先を制されて、結局黙る羽目になった。

「つか由紀江ちゃん、天ちゃんと付き合いでもあるんだろか。

俺のことをミッチーなんて呼ぶのは、あの子くらいのモンなのに。

なんてイロイロ考えてるうちに、由紀江ちゃんはカバンから自分の財布を取り出して。

エコバッグみたいなものを小脇に抱えて、

「そういうわけで、ちょっと飲み物とか買ってきますね」

とか、睨みの利いた笑顔でおっしゃる。

そうか、とりあえず俺には教えないってか。

事情も教えないのに、俺に任せておこうってか。

「あゝ、そういうモンだったら俺が買ってくるから」

「いえいえいえいえい！ 私に任せておいてくださいっ！」

とか言いながら、由紀江ちゃんはダッシュで浜茶屋に。

……行っちゃったモンはしょうがないから、とりあえず後で金渡さなきゃな。

由紀江ちゃんは俺に任せたつもりかもしれないけど、約束なんてしてねえし。

少しは悪いと思うけど、やりたいことやらせてもらっただ。

そういうわけで、本能に従って武蔵達の方を見て目の保養を再開した。

どうやら、武蔵と他の2人でバレーしてるらしい。

しかも、2対1でやってるのに、1人の方の武蔵が押ししてる。

そこそこ動けるのは知ってたけど、あんなに運動神経よかったのか。アレとヒビキが相手にならないとか、由紀江ちゃんは本当にバケモンだ。

まあ、そんなことは分かったことだし、気にすることでもないんだけど。

つーか、やっぱりヒビキが一番身長高いんだな。

中学3年生で170cm超えてるってのは、イイのか悪いのか。

古臭い考え方だけど、女の子だし大きくなり過ぎないとイイとは思う。

どうにも止まらないようだったら、親戚でもアテにしてどうにかすればいいさ。

そんな風に、由紀江ちゃんが抜けても普通にバレーしてるのを見て思ったんだが。

もしかしたら、由紀江ちゃんはトイレに行きたかったのかも知れない。

確認するわけにはいかねえけど、もしそうなら無神経なことしちまっつたな。

今さら気にしたところで仕方ねえし、まあ、気付かないフリに徹しとくか。

なんか又ルくて、ちらっと退屈だけどさ。

このままのノリで、なんも起きねえといいなあ。

9 話目 『みなTOLover』（後書き）

割と短いスパンでもう1話投稿できましたが……。まず、サブタイトルで期待なさった方がいらっしやいましたら、申し訳ありませんでした。もっとTOLoverな話も考えてはいたのですが、上手くいかずに断念してしまいました。精進して近いうちにリベンジしますので、どうかご容赦を……。

毎度毎度、テンプレートではありませんが。ご意見、ご感想、ご要望、ご指摘などなど、諸々承っております。辛らつなご意見に關しても真摯に受け止める心構えをしておりますので、ドシドシ書いてやってください！

10話目『当たり前が砕けず』

由紀江ちゃんがトイレ……飲み物を買って行って10分くらい経った。

太陽はそろそろ最高点に達して、その時間もなく正午を迎えようとしている。

そんな時間だから、気を遣って焼きそばとか買って来てくれねえかなあ、とか思う。

まあ、細かいところにイロイロと気付く子だから、それくらいは期待してもいいだろ。

しかし、困った。

すぐに由紀江ちゃんが戻ってくるもんだと思ってたから、何もしてないんだよ。

ほら、由紀江ちゃんがトイレ……じゃなくて飲みモノ買いに行く時にさ。

由紀江ちゃんに『代わりにバレーに参加してくれ』って頼まれたじやんか。

いや、なんで困ってるかって、別にバレーが下手とかじゃなくてよ。ここで参加すると、なんかよくないトラブルが起きる気がしてならんのだ。

例えば、相手の位置を確認せずにボールを追って、砂浜でくんずほぐれつとか。

武蔵以外の3人はビキニだから、プレー中にトップスの結び目が解けたりとか。

そういう、今後の人間関係に支障の出るトラブルが起こる気がするんだよ。

3人でマジメにビーチバレーさせてるのも心苦しいが、こればかりは仕方ない。

その手のトラブルが起きてても許してくれるんだったら、喜んで参加するけど。

そう……戦力差を調整するとか言って、まずは大和田さんとも組んでみたいところだ。

と、まあ、邪な想像はココまでだ。

トラブルの半分くらいは、俺の努力で避けられるもんだ。

俺が後衛で頑張ってる分には、誰と組んでもぶつかりやしないだろ。相手がわざと俺にぶつかって来ようとするなら、話はちよっと違ってくるが。

ってなわけで、由紀江ちゃんが来るまで相手してやろう。

そう思いながら、そこそこの距離まで近づいた時だ。

待ちに待った、期待通りの奴が寄ってきた。

見るからに軽薄そうな顔つきに、脂肪を落としただけの薄すぎる体いかに『日焼けサロンで焼きました』って感じの、気味の悪い茶色の肌。

バカみたいに染めすぎたせいか、金色の髪も艶がなくてパツサパサ。要するに、俺の大好きなタイプの人間ってことだ。

どれくらい好きかって言うと、具体的にはゴキブリくらい。

もしかしたら、もっと俺好みの人間かもしれない。

それを判断するために、少しだけ様子見をすることにした。

見るからにシヨボそうだから、何か起きてても武蔵がどうにかするだろうし。

あの子らが自分らで処理できるうちは、俺の出番じゃないってことにしよう。



ってわけで、少し離れたところから観察することにした。

距離は、目測で10mとちょっと。

普通だったらコツチに気付く距離だけど、ココは夏の海だ。

不特定多数の人間が歩きまわってるんだから、俺だけに目が行くことはない。

砂浜で突っ立ってるのは不自然だけど、足を止めてまでコツチ見ねえだろ。

相手はコッチが見えないけど、コッチは相手が丸見え。それにコレだけ近ければ、耳を澄ませば会話も聞こえる。あの子らには少しだけ申し訳ないが、ちょうどイイ距離ってわけだ。

っと、いけないいけない。

あのアホがどうナンパしてるのか、よく見とかないと。

「ねねね〜、ビーチバレーって楽しい？」

……その声かけの仕方はどんなもんだろ。

キツカケさえ作ればいいからって、そんなに考えてもいないのかも。

もちろん、不審な奴に声を掛けられたせいで、ヒビキと大和田さんが一歩下がった。

アグレッツシブにナンパする気なら、もっと遊び慣れてそんな奴にしろってんだ。

そんな風に軽薄そうな男も、武蔵に睨まれて歩を止めた。

まあ、キツツイ目してるから、慣れない奴だと怯むよな。

ヒビキと大和田さんは、怪訝な目をしながら武蔵の後ろに隠れた。こういう場面で誰が一番役に立つのか、よく理解できてるみたいだよるしい。

「すみません、そういうのは間に合ってますから」

3人を代表して、少し語気を強めて返す武蔵。

男をチラッと見ただけで、すぐに目を逸らすあたりもナイスだ。こういう対応されたら、普通は脈があるとは思わんからな。

ただ、それは相手が普通の感性じゃないという意味がない。

夏の海でナンパかましてくるような奴は、そう簡単には諦めんらしい。

さらに一歩近づきながら、まだ声をかけ続ける。

「こつちの事情も考えてよ」

なんて的外れなこと言いながら、まだ武蔵達との距離を詰めようとする。

つつても、武蔵が冷たい目で見てるから、手の届く距離までは近付かない。

もし無理矢理に触ろうもんなら、膝を踏み抜くくらいはされるかも。川神にいと派手な怪我をよく見るから、ついつい加減を忘れるかも知れんし。

「そつちの事情は、私達には関係ありませんから」

「すぐ終わるから」

「嫌です」

……何がすぐ終わるんだろうな？

不埒なことするにしても、それなりに時間かかるだろうに。

でも、こういう非論理的なこと言われて、それで引っ掛かる子もいるんだよな。

本当にすぐ終わることがあるとすれば、それはこのまま引き下がる場合だけなのに。

もちろん、あの子らがそういう頭してる風には見えんけど。

実際、ヒビキと大和田さんは、キツチリ対応できる武蔵に任せてる。下手に気の弱い子らが話して押し切られるよりは、ずっとイイだろ。

「話だけでも……」

「嫌です」

さすが武蔵、これでもかかってくらいキツパリ断る。

これくらいハッキリ断れば、脈がないことは察しがつくはず。

もしかしたら、武蔵は断り慣れてるのかも。

そう思わせるくらい、問答無用で相手を否定する。

相手の言葉を受け入れない姿勢を、ハッキリと見せつける。

ナンパしてくる奴には、どれもこれも効果てきめんに違いない。

たった、数回言葉を交わしただけで、もう相手は呆気に取られてた。そりゃ『取り付く島もない』なんて言葉がピツタリな状況だ。

つと、少し変な空気になってきたな。

さっきまで下手に出てたのに、目が据わってきてる。

ナンパするんじゃないかって、ケンカ売りたいな目つきだ。

その視線は武蔵に固定されてて、武蔵もそれをキツチリ睨み返す。

で、その妙な空気に耐えられなかったんだろうか。顔に焦りが浮かび始めた男が、叫び声をあげながら武蔵に手を伸ばした。

「テメエ、あんま調子こいてんじゃねえぞ！」

なんて、最近の不良でも言いそうにないセリフと一緒に。突然…… つつても、俺や武蔵には見え見えのタイミングで。

しかも、伸ばされた手は、殴るんじゃなくて掴むような動きだった。本当だったら、そんなことするくらいなら殴りつけた方がマシだ。相手は水着姿だから、着てるモノを掴むってというのは現実的じゃない。

もちろん、肩を掴んだりすりゃいいんだが、それもあんま効率的とは言えん。

そんなことは、格闘技や武術の経験に関係なく何となくわかることだ。それでも男がそうしたのは、武蔵を傷つけるほどの意思は持ち併せてなかったから。

それに加えて、まずは武蔵をビビらせたって思いが強かったから。

まあ、普通の女子高生なら対応できんだろ。

そもそも、ナンパされてガン飛ばしたりもしないと思うが。

大事なのはそこじゃなくて、武蔵小杉が普通の女子高生じゃないってところ。

そんな程度の牽制にビビったりするはずがないってことだ。

相手が左手を伸ばすのに合わせて、武蔵も右足で半歩踏み込む。

もともと遠ざかるうとしてたこともあって、その動きは相手の意表を突く。

肩を掴みに来る手が少し鈍って、そこに武蔵が付け入る隙が生まれた。

男が伸ばしてきたのは左手。

武蔵は、相手の左腕の内側を通らせるようにして、右の拳を突き出す。

もし武蔵が本気だったなら、たった1発それを当てるだけで相手を倒せる拳。

それだけの威力を秘めた拳は、寸止めどころかミリ単位で男の顔面に突き付けられた。

「ウィヒ！」

ワントンポ遅れてから情けない悲鳴をあげて、男は尻餅をつく。

そりゃ、まつ毛に触ってるんじゃないかってレベルの寸止めだ。

しかも、アレだけのスピードと正確さを見せつけられたら、尻餅をついてもおかしくない。

案の定、今ので相手は完全に足が止まった。

武蔵達をナンパするような目でも、怒りを向ける様な目でもない。

それどころか、未だ睨みつける武蔵から視線を逸らし、砂浜を見つめるばかり。

気概が削がれたってのが、この距離からでもハッキリと分かった。

まあ、あの武蔵を相手にしようってのが間違い。

イロイロとルールが有利に働いたとはいえ、川神相手に善戦したヤツなんだから。

そんじよそこらの焦げモヤシが、策もなくつつかかってイイ相手じゃないんだよ。

ココで終われば話も簡単で、俺も骨を折らなくてもイイ。もちろん、こんな簡単に終わるような話じゃないのは分かってるぞ。3人組に1人で声かけてきた時点で、ちょっとオカシイだろ？ 複数人いるグループに声かけてきたってことは……

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

「うえーい、ちんたらやってんじゃねーぞ」

ほら、やっぱり他にも仲間がいた。

さっきの奴と似た感じの2人が、武蔵達に向かって歩いてくる。

なんつーか……見るからにテンプレートな連中だよな、ホント。

髪の毛を金に染めて、肌を黒く焼いて、体は脂肪を落としただけでヒョロヒョロ。

言葉使いつーか、言葉のチョイスも独特な感じがするのは、まあ、どうでもいいか。

いずれにしたって、殴り合いになるんだったらオイシイ相手なんだ

から。

戦意はあるけど実力が足りてないなんて、滅多に捕まえられる相手じゃない。

武蔵達に小走りで駆け寄る俺を見て「チッ」とか舌打ちしてたし、今から楽しみだ。

「おい、ヒビキ。この黒モヤシが何かしたか？」

武蔵や大和田さんに声をかけないのは、迷惑をかけないため。

相手がしつこかったりしたら、この子らの名前が知れるのは面倒だ。ヒビキなら……まあ、名前と素性が知れたところで、どうせどうにもならん。

地元にいる限り、港の娘に悪さを働けるはずがないんだから。

だから、俺は何か仕掛けられても一番リスクの低い、ヒビキの名前を呼んだ。

と、やたら滑らかな動きで、ヒビキが俺の左腕にしがみついた。

パーカーをギュッと握るって仕草の割には、ナンパに来た連中を強く睨んでる。

1つ役得だったのは、ヒビキと大和田さんが俺の後ろに隠れたこと。ヒビキは俺の腕を掴んでるから、必然、ヒビキの胸が腕に押し付けられる。

大和田さんは俺の背中にくっついてくるから、大和田さんの胸が背中に当たった。

何気に既知の体験だが、だとしても相手が違うだけで斬新さと背徳感が倍増する。

俺のテンションが一瞬MAXになりかけたのは、心の奥底にし

まっっておじつ。

あー、でも、武蔵は俺の隣に移動しただけだった。

この中じゃ一番気丈だったのもあるんだろうが、面白みには欠ける。せつかなんだから、こういうときに俺にサービスしてポイント稼げばいいのに。

「兄さん、ちょっと聞いてよ！ この人たちしつこいんだよ！」

「あゝ、ハイハイ。追っ払えばいいんだろ？」

まあ、口じゃこう言ってるけど、状況は筒抜け。

俺の耳がそこそこイイのもあるし、それ以上にバカの声がデカかった。

武蔵達の気を引こうとしたからなんだろうが、俺の気を引いてただけってわけだ。

こういう頭の悪そうな連中なら、思いつきり殴りつけても良心が痛まない。

何より、ここは港の息のかかった海水浴場だから、多少の無茶も許される。

少し腕を折ったりしたくらいじゃ、大した騒ぎにも事件にもなりやしない。

それに、胸2人分の働きはしないと、さすがにお天道様に顔向けできんしな。

てなわけで、少し深めの呼吸を静かに2つ。

体のテンションを、脳味噌のテンションに追いつかせる。

気分はとつくに臨戦態勢、体は今まさに戦えるようにエンジンがかかる。

2回分の呼吸で体中に酸素が行き渡って、細胞の1つ1つが熱く火照ってきた。

「あゝ、2人とも。先に荷物のあるところに戻ってな」

「えっと、でも……」

「大丈夫だから。ヒビキと一緒に、買い出しに行ってる奴待っててそれだけ言えば、大和田さんなら分かってくれる。

まあ、俺の言葉にどれだけの意図があるかまでは分からんとしてもだ。

だとしても、コレがこの場を離れるきっかけになることくらいは分かるはず。

ヒビキと一緒に行かせるのは、万が一の時の保険みたいなもん。それに、この状況だとヒビキに任せなきゃならんこともある。

「ヒビキ。俺に何かあったら、山口さんに連絡入れて来てもらえよ」

「はい！」

妙に明るいのが気になるが、そういうことだ。

もし大き過ぎるトラブルに発展したら、俺じゃ対処しきれん。

アホ相手に殴り合う分にはイイが、そういう類じゃない面倒事は対処しきれん。

てなわけで、山口さんにすぐに車出せるようにしといてもらったり

する必要がある。

大和田さんは山口さんのケータイの番号知らんから、ヒビキに任せ
るしかないってわけだ。

それを確認したヒビキは、大和田さんの手を引っ張って荷物のとこ
ろへ。

まあ、そろそろ由紀江ちゃんも戻ってくるだろうから、あっちも安
全だろ。

「あの、先輩。私はどうしたらいいですか？」

「パーカーに砂が付くと面倒だから、話が片付くまで持っていてくれ」

武蔵は、近くに置いといた方がいい。

いざつてときには戦力になるし、俺の戦いを見せときゃ参考になる。
それなりに情が移った後輩だから、イロイロと教えておきたいんだ
よ。

……別に、コイツのことが好きだとか、そういうわけじゃねーから。

で、日除けで着てたパーカーを脱いで、武蔵にパスした。

それだけで、ジムで鍛えこまれた俺の体が白日の下に晒される。

肘から手首までが人並み以上に太くて、肩と背中中の盛り上がりが普
通じゃない。

素人目に見ても鍛えこんでることが分かるような、そんな体を見せ
つけた。

「いやいや、待たせたな」

「お前、体……だけは偉そうじゃねえか」

俺の体を見て、一步引きながら呟くアホの1人。

さすがに常識があったのか、今ので明らかに戦意は削がれたらしい。まあ、俺が出てきてナンパって空気じゃなくなっただのもあるんだが。向こうさんも向こうさんで、好き好んでトラブルを起こしたくないんだろうな。

あーあ……パーカー脱ぐんじゃなかった。

せっかく食ってかかってくると思っただのに、萎えちゃったんだもん。それなりに常識のある連中を手間かけて殴るのは、俺の趣味じゃないし。

まあ、俺は全力で潰したいんだけど。

ってわけで、ちょっと挑発してバカが殴りかかって

「あー、ごめんごめん！ 家族連れとは思わなくてさ！」

……殴りかかってくるように仕向けたかったんだが。

そんなことを言いながら、リーダーっぽい奴が一步踏み出してきた。

凄いタイミングだ。

俺が挑発しようとした寸前に、ピッタリ割り込んできやがった。

しかも、この状況で朗らかな笑顔なんて浮かべてやがる。

殴りかかられたりすりゃ反応できたが、笑顔で距離を詰めてくると

は思わなんだ。

いやいや、達人の類とかじゃないのは分かる。

筋肉の付き方や足運び、気迫とか雰囲気。

そういった色んな要素を見ると、明らかに素人なんだわ。

でも、なんつったらいいか……争いが起きる空気そのものを持ってかれた。

そういう『間』の取り合いみたいなモンで、俺が後れを取るとは思わなかったが。

「俺？ 下北沢ってーの。普段は関東がホームグラウンドなんだけどさ。」

「こつ、ひと夏のアバンチュールのなモンが恋しくなって、日本海まで来ちゃった」

関東って、そりやまた随分と広いことで。

そういうことは、もしかしたら街でスレ違ったりってこともあるのか。

そうになると、あんまり下手なこととして恨み買うのも面倒だ。

どうせやるなら徹底的にやりたいが、さすがに公衆の面前でそこまですでん。

もし、この下北沢とかいうチャラそうな男が言うことが真実なら、ただどな。

「なるほど。だから、仲間使って女子中学生に声かけさせたってことか」

こついう口数が多い奴に嘘はつかん方がいい。

直江大和や葵みたいな奴と同じで、きつと口が上手いから。下三寸でアホらしいことに巻き込まれでもしたら、俺が保護者で来た意味がない。

でも、決して完璧な真実も話しちゃいかん。

独自の情報網を持つてる可能性があるから、なおのことだ。

武蔵も、由紀江ちゃんも、大和田さんも、見た目で考えれば目立つから。

容姿を覚えられたりして探されでもしたら、やっぱり面倒事になるかも知れん。

「いや、ホント悪かったって！ コイツも、中学生って分かってなかったみたいでさ」

「そんなことよりコイツ、女に手え出そうとしてたんだが。」

そこについては、いったいどういう風に弁明してくれるんだ？」

俺は、さっきのアホに指差しながら言ってみる。

一発でも殴っておきたいから、挑発も忘れんぞ。

なんか武蔵が『見てたなら早く来て下さいよ』とか呟いてたけど。

……いや、まあ、少しだけ申し訳ないから、家でちよつとサービスしてやるつ。

「あー、そうだったの！ なんだ、完璧にオマエが悪いじゃん！」

とか言いながら、下北沢がアホの頭をしばく。

で、そのまま髪の毛掴みながら頭抑えて『早く謝れよ！』なんてほざいてる。

なるほど、わりと後輩の始末とかはキツチリ付けるタイプなのか。俺が見た目から受けた印象よりは、かなりマトモな人間なのかも知れん。

って思わせるために、こういうことをしてるんだろうよ。

この手のタイプの人間の言動は、片っ端から疑ってかからなきゃ。

言葉1つ、行動1つが、最終目的のための布石だと疑ってかからないと。

そうじゃないと、最後の最後にバカを見るのはコツチだ。

まあ、俺の思惑はどうあれ、さっきのアホは不満顔で頭を下げた。

なんかちょっと俺の方睨んでみたいけど、俺と目が合うと視線を逸らす。

そりゃ、ちつとも鍛えてない奴からすれば、超人みたいな体だろうしな。

そんな体した奴と敵対してて、しかも目が合ってしまったら。

自分が弱いつて分かってる奴なら、視線くらいは逸らしたくなるか。

「そういうわけで、これで勘弁してもらえるかな？」

「一応はな。あとは、この子らに近寄りさえしなけりゃ文句はねえ

よ

「えー？ ちょっとくらい話したいんだけど、ダメ？」

「ダメだな。どうしても言うなら、最低でも両耳くらいは置いてけや」

ほら、やっぱり食い下がってきた。

実はマトモなんじゃないかとか、そんな風に思わなくて正解だ。あのアホをキツカケにして話を進めようとしてたんだから。やっぱり、調子のいい奴は信用しないに限るわ。

「はー、物騒だねえ。そんなんじゃないよ？」

「それで結構だよ。どうでもいいから、とつと俺らの前から消えてくれ」

「そうするよ。俺の耳が無くなると、俺の女が困っちゃうから」

そんな風に、飄々としたことを口にして。

下北沢は背中を見せながら俺に手を振って、そのまま立ち去った。言わずもがな、下北沢の仲間であろう連中も一緒だ。

…… 1人くらい置いてって、俺に殴らせろってんだよ。

結局、だーれも殴れなかったな

ちつとはストレス解消になると思っただが、逆にストレスが溜まった。

いや、ストレスっつーか、こう、モンモンとした感じっつーか。心の中にわだかまりができて、体中がモヤっとしてるっつーか。簡単には言い表せないような、変な気分だ。

何となく理不尽にイライラする。
精神的なストレスが原因なんだろうが、思った以上に抑えが効かない。

……いや、そうじゃないよな。

はじめっから分かってることなんだ。
普段は考えないようにしてるだけで、ずっと分かってる。
その辺の反動のせいで、心の抑えが利かなくなってるんだ。

「先輩、これ」

そんな俺に、武蔵がパーカーを渡してきた。
身長差があるから、下から見上げる形で。
つまり、俺は武蔵を上から見降ろす形になる。

見えるわけだよ、谷間が。

武蔵の胸の谷間が、バッチリ見えるわけだよ。

武蔵ってスポーツマンだから、もっと肌は荒れてると思ってた。
でも実際は、普段見えないようなところまでキッチリケアしてるらしい。

ここ3週間くらい、ずっとご無沙汰してたから、だから邪念が生まれるんだ！

それにほら、温泉旅館に行ったときさ。

辰子ちゃんと天ちゃんがイロイロやらかしてくれたおかげで、悪化したんだ。

まさか、大人の階段をのぼり切って、大人への扉の前で寸止めされるなんて。

そんな素敵体験のせいで、未だかつてないほどに溜まりに溜まっているんだ。

「ま、ありがとな」

「いえいえ、これでも後輩ですからね」

ムスツとしたような……これが普通の表情みたいなんだが。

まあ、いつも通りの顔をした武蔵から、さっきのパーカーを受け取って腕を通す。

武蔵を見ていてなんだかカワイイとか思っちまうが、そんなのは気のせい。

俺……僕は不死川のが好きなんだから、武蔵を好きになるってことはありえない。

僕の気持ちはずっと前から決まっていて、だから僕……俺は今でも同じ気持ち。

俺は、俺がやるべきことを正しく理解しているから、ココまでやってこれたんだ。

さて、心中で少し愚痴って、俺の心は少しだけ軽くなったことにして。

そのまま武蔵と並んで、俺たちの荷物を置いてあるパラソルの下に戻って。

由紀江ちゃんが買ってきた焼きそばと飲みモンで昼食を済ませて。そのあと、あの子らが変な奴に声かけられることもなかったから、ただ座ってて。

帰り際には、海の家でシャワー借りて適当に汗を流して。色々やってるうちにイイ時間になってきたから、山口さんに俺の家まで送ってもらって。

結局、俺が望んでるようなことも一切起こらないで。

俺の海水浴は、面白いことが一つもないうちに終わった。

10 話目 『当たらず砕けず』 (後書き)

えー、また時間がかかってしまいました。

なかなか執筆のペースが一定にならず、苦勞しております。

とはいっても、この手の苦勞は全ての作家様が患っているものだと思います。

これで愚痴愚痴言ってしまう私は、まだまだ若輩だと実感する次第です。

……本当は戦闘シーンがあったのですが、あまりにも不自然なので書き直してしまいました。

海水浴場でナンパしてくる相手と殴り合いになるというのは、滅多にないことです。

特に、ナンパに失敗したのであれば、他の女性にも声をかけたいところ。

そんな状況なのにトラブルを起こすというのは非合理であると考えた結果です。

前回の流れから戦闘シーンに期待してくださった方がいらっしやるのであれば、大変申し訳ありませんでした。

さて、少々長くなりましたが。

いつものごとく、ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など承っております。

さて、少々遅れましたが。

『真剣で王に恋しなさい!!』を執筆なさっている兵隊さんのコラ

ポレーション作品である『真剣で私に恋しなさい』
港三千尋が出させていただく運びとなりました。 男『』に、

この場を借りまして、宣伝と感謝の言葉を述べさせていただきます。
コラポレーションに参加させていただきまして、本当にありがとうございます。
ございました！

11話目『ちよつと みなTOLover』（前書き）

『みなTOLover』よりも、ある意味ではTOLoverして
るかもしれません。

11話目『ちよつと みなTOLoveる』

家に帰ってからは、昨日と似たようなもんだった。

女の子たちはヒビキに任せて、俺は自分の部屋に荷物を持ってつて、ちよつとしてから全員で居間に集まって飯食つて、俺より先にヒビキが風呂に入つて。

でもって、今日はちゃんと俺も風呂に入ってスッキリして、今は自室にいるところ。

自室つっても、例の応接間の方だ。

寝室でゴロゴロするのも悪くは無いんだが、あんま行儀がよくないだろ？

それに、応接間の冷蔵庫にアイスと飲み物を淹れたから、昨日より過ごしやすいんだよ。

アイスが食いたくなつたからって、いちいち部屋を移動する必要がないからな。

あ、今はもう、午後9時の少し前。

いくら夏は日が高いつつても、もの見事に空は真っ暗だ。

いや、真っ暗つてのは語弊があるな。

ド田舎つてほどじゃないが、周りに目立った建物もない。

そのおかげで、コレでもかっくらいに星がよく見える。

月雄荘から見る空もキレイだけど、やっぱコツチには敵わねえや。

それに、例年は割と涼しいんだが、今年はなんだか蒸し暑い。

あんまり頼りたくねえが、クーラーを付けて涼んできるところだ。

体温調節機能が働きにくくなるらしいから、本当にできれば頼りたくないんだが。
汗だくでベッドに入らなきゃならんことを考えると、そうも言っていられない。
地球温暖化防止も大事だが、ベタベタのまま寝ない努力も同じくらい大切だろ？

しかし、1人だと本当にやるのがねえや。

課題の類は全部置いてきちまったし、今からトレーニングって時間でもない。

寝室にゲーム機は置いてあるけど、特にやりたいモンがあるわけでもない。

このまま特番のクイズ番組を最後まで見てから、朝遅くに起きればいいか。

……でも、1人きりの時間ってのは、本当に久しぶりな気がする。
毎日毎日忙しいもんだから、こういうフリーな時間は滅多にない。
夜遅くに睡眠時間を削ったりもできるけど、そういう絞り出した時間じゃない。

明日の予定も立てずに漠然と過ごせる時間は、本当に久しぶりだ。

さて、せっかくの、誰にも邪魔されない1人きりの時間だ。
久しぶりに、寝室に隠してある秘蔵本でも使用してみますか。

寝室の扉を開けると、ベッドと勉強机とタンスが最初に目に入る。でっかい本棚も置いてはあるが、勉強机に隠れてるからすぐには見えない。

高校生の部屋にしちゃ広いのもそうだが、壁に六尺棒が掛けてあるのも普通とは違う。

それと、タンスの上から2番目の引き戸に、サバイバルナイフを突っ込んであるのも。

キックミットが2つ置いてあるのは、まあ、ストレス解消で殴ったりするためだ。

いや、案外いるもんなんだよ、ナイフとか。

この通り家がデカいもんだから、強盗に入られたことがあってさ。

まあ、そのときは山口さんが強盗を半殺しにしたから被害は無かったんだけど。

もし俺の部屋でハチ合ったりした、この上なく面倒なことになる。

ってわけで、なけなしの準備として、ナイフと棒を置いてあるわけだ。

もちろん、今はそんなことはどうでもいい。

俺が取るべき行動というか、探してるモノは別のモノ。

『スク水格闘街』
フアイトタウン

『オール・ハイル・ブルマニア』

『チアとブルマとレオタード』
『君がブルマで、胴衣が俺で』
『真・スク水無双 く白スク伝』

どれもこれも、幾多の苦難を共に乗り越えて来た、俺の秘蔵の逸品たち。

そしてコイツらは、俺が一級品と認めたエリート中のエリートでもある。

万が一見つかった時のために、コイツらは別々の場所に隠してある。本棚の板を削って空洞を作り、半分に分けた本をしまい込んだり。本棚と一緒に並べて、誰も読まなさそうな格闘技の専門書のカバーをかぶせたり。

こういう貴重品を補完するときのリスクの分散は、常識中の常識だ。当然、月雄荘の方に隠してあるDVDの類にも、十分な措置は施してある。

さて、1本目はもう決まってる。

さっきの海水浴で一度も拝めなかったスク水。

ノーマルなスクール水着を題材とした作品『スク水格闘街』フライトタウン。

夏って言う季節も相まって、まさに1本目としてふさわしい1冊だ。

隠し場所は、壁にかかっている六尺棒の真上の天井。

ここを六尺棒で強めに突くと、そこだけが回転するように仕込んである。

元々、正方形の板を何枚も並べて作った天井だからこそできる芸当だ。

まあ、仕込みそのものは、山口さんに頼んで手伝ってもらったんだ。

が。

慣れた手つきで六尺棒を握って、肘から先の動きだけで天井を突く。手の中で棒が滑っていくかのように……まあ、棒の扱いは手慣れているし。

板が我れない程度の威力って考えると、あんまり本格的には突けないからな。

で、目論見通り、突いた部分がクルツと半回転したんだが……何も落ちてこない。

この瞬間、俺の背骨を軸にして、尾てい骨から頭頂まで冷たいものが通り抜けた。

俺は、ブツの隠し場所は基本的に変えない主義だ。

実際、『スク水格闘街』ファイトタウンの隠し場所を変えた記憶は無い。

使ったびに同じ場所に戻してるから、隠し場所を間違えることもない。

そもそも、戻す場所を間違えてるんだったら、別の本が落ちてこないとおかしい。

それなのに何も落ちてこなかったってことは、誰かにブツを回収されたってことだ。

よし、冷静に考えるよ、俺。

この部屋自体は、俺じゃなくても自由に出入りできるようになってる。

掃除しに来た人が発見したんだつたら、本は元の場所に戻してくれるはずだ。

つまり、山口さんや斉藤さんが回収・破棄したって線は、絶対にあり得ない。

じゃあ、ジジイはどうか？

俺の部屋の掃除もやったりはするが、アレも男だ。

ラブホの垂れ幕とか舐めたことはしてくれただが、やっぱりジジイの線は薄くなる。

もしジジイが俺の本に手を付けたなら、俺の俺の前に並べるくらいはしてるだろ。

それがなかったってことは、たぶんジジイはやってないってことだ。

あとは……お袋とヒビキ。

お袋は年中忙しいし、そもそも掃除のイロハも分からん世間知らず。家事全般は全くできんわけでもないが、洗濯機でさえロクに回せなかったレベルだ。

料理だって、カレーとかの煮込み料理以外はマトモに作れなかったりする。

そんなお袋が、わざわざ俺の部屋に入って掃除をするなんて考えられない。

なるほど、消去法で犯人はヒビキだ。

昔のアイツの性格じゃ考え辛いが……いや、だからこそヒビキが犯人だって言える。

アイツは元々、内向的で引っ込み思案なところがあって、人付き合いは苦手だった。

由紀江ちゃん達に対しては明るく振舞ってるし、事実、性格も変わ

ってきたんだろう。

ただ、いくら思春期を迎えても、人間の根本がそうそう簡単に変わるはずもない。

性に興味を持って『そういう本』を手に入れようにも、恥ずかしくてできないはずだ。

ネット使えば簡単なんだが、アイツも閲覧履歴が残るってことくらいは知ってる。

身内に見られるのも避けるためにネットを使わなかった……って考えるのが自然。

つまり、自分で買いに行くこともなく、誰かに頼んで買ってもらったこともなく。

インターネットを使って履歴を残すこともなく、そういうモノを手に入れる方法。

それが、兄の部屋を漁るって行為に繋がったに違いない。

ま、いいさ。

何も『スク水格闘街』フナイトタウンだけが頼りなわけじゃない。

ちよつと口惜しいが、ここは『チアとブルマとレオタード』あたり
にしておくか。

あの後、俺は怒りに震えるばかりだった。

見つからなかったのは『スク水格闘街』フアイトタウンだけじゃない。

嚴重に保管していた全ての本が、俺の部屋からなくなっていた。

あの妹は、どうやらちよつとオシオキしてやらなきゃならんらしい。

とはいっても、今の俺にそんな元気は無い。

それよりも、リビドーを能率的に解消するのが先決。

そういうわけで、今からコンビニで新たな物入手してくるつもりだったりする。

17歳の高校生に売ってくれるかは分からんが、俺の身長と顔つきなら大丈夫だろ。

コンビニの店員だって、そこまで相手の年齢を気にしちやいないだろうし。

ヒビキを叱るのは明日でもできるわけだから、コンビニに行くのを優先した。

ジーパン履いて、黒いTシャツ着て、深緑のジャケット羽織って。

尻のポケットに長財布を入れたところで、ふと思いついた。

由紀江ちゃんたちは、コッチに来てから一度も買い物に行っていない。つてことは、もしかしたら菓子の類を切らせてるかもしれないってことだ。

年頃の女の子なんだから、甘い物が強烈に欲しくなることもあるだろう。

どうせコンビニに行くんだから、ついでに何かかって行ってやろう。

そう思つて、何か欲しいものがないか確認するために。

今ちようど、由紀江ちゃんたちがいるであろう客間の中にまで来たところだ。

……まあ、客間つつつても独立した平屋だったりするんだが。

でもつて、客間として使つてる平屋には、チャイムが付いてない。元々ウチは、客人に対しての呼びつけは使用人を使うのが普通だったりする。

だから、平屋の中まで入つていって、部屋の扉の前までは歩いていかなきゃならん。

これは必然求められた行為であつて、年頃の女の子のパジャマは気にならないぞ。

しかし、女子高生の泊つてる部屋の前つただけでドキドキするな。まあ、俺も俺で思春期なんだから、ドキドキしたりするのは当たり前か。

何度も噛みしめてる気もするが、川神学園の1年女子のカワイイのが揃つてんだ。

これでドキドキしないんだつたら、むしろ、俺の神経が異常じゃないかって考えるわ。

さて、客間の床はフローリングになつたが、扉はふすまのままだ。そういうわけでノックするわけにもいかないから、控えめの声で呼んでみた。

「おーい、ちょっといいかー？」

でも、声が小さ過ぎたのか返事が返ってこない。

3人……ヒビキが遊びに来てたら4人いることになるな。

4人もいるのに、誰も声に気付かないなんてあるんだろうか？

いや、話に夢中になってるんだったら、案外気付かないのかもしれない。

「……おーい！」

ちよつと声のトーンをあげて、もう1回。

今度は大き過ぎたと思うんだけど、やっぱり反応は無い。

なんというか、間が悪かったのかもしれない。

風呂に入ってるとか、そういうタイミングなのかも。

客間の風呂って、6人くらいなら普通には入れるもんな。

女の子って言うのは、出先で一緒に風呂に入ったりするのかもしれない。

だとしたら、無駄足を踏んだことになるのか。

まあ、念のためってことで、少しだけ部屋を覗くことにした。

いやいや、下心とかじゃなくて、純粹に確認のためなんだからな？

「おい、ちょっといいかー？」

つて言いながら、ふすまを開ける俺。

と同時に、ふすまの向こうから、明らかに外気よりも冷たい空気が漏れて来た。

俺の視界に収まったのは、ヒビキを合わせた4人全員。

長方形のテーブルの四方に、思い思いに座ってた。

それで、もうみんな風呂に入ったみたいで、全員パジャマ姿だった。

由紀江ちゃんは、薄緑みたいな色をした、パステルカラーでスツキリしたパジャマ。

大和田さんは、ほんのり水色の、少しモコモコした感じの上下。

武蔵は由紀江ちゃんみたいにスツキリしたデザインだけど、布地は紺色で。

ネグリジエみたいなのを着てるヒビキだけが、なんだか少し浮いてるように見える。

でも、そんなことはどうでもいい。

テーブルの上に置いてある何かに、慌てて覆いかぶさる由紀江ちゃ

ん。

手に持っていた本を、コツチから目をそらさずにテーブルの下に隠す武蔵。

大和田さんは一瞬固まってから、思い出したかのように本を閉じて脇に抱える。

そこで、大和田さんよりワントンポ遅れて、ヒビキが手元の本を服の中に隠す。

そういう不自然な動きの方が、俺にとっては大問題だ。

「やだ、兄さんのエッチ！ ノックくらいしてよ！」

「ふすまにノックしたら穴開くだろうが」

「でも先輩、女の子の部屋に声も掛けずに入るのって、マナー違反じゃないですか？」

「声だったら何回かかけたぞ」

ヒビキと武蔵の文句に手早く返して、状況を再確認する。

全員が全員、何かを隠して……いや、何かなんて言い方はしなくていいな。

少なくともヒビキと大和田さんは、俺の部屋にあった本を隠そうとした。

あの装丁は『チアとブルマとレオタード』と『君がブルマで、胴衣が俺で』だ。

悪いが、あのタイミングでそれが確認できないほど、俺は甘いつもりはない。

俺の表情から、俺が何に気付いて、何を考えているか分かったらしい。
全員がコツチを見据えたまま、さっきのポーズから1mmも動こうとしない。
誰もが誰も隠し通そうとするあたり、みんな結構イイ根性してると思う。

だからって、俺が追及をやめてやる理由にはならないんだがよ。

「なあ、由紀江ちゃん。その体勢、不自然で疲れるんじゃないか？」
「いえいえいえいえ！ これは、ほら、アレです！ 腰と背筋を伸ばす健康法です！」

怖い笑顔で俺に告げるが、それで誤魔化し切れてると思うのが凄いや。
チラツと腰を見たらパンツが少し見えてたけど、それでも俺は許さないぞ。

……いや、その光景を脳に焼き付けるかどうかは、完全に別腹だけどな。

「ちょっと聞きたいんだがな、武蔵。お前、テーブルの下に何を隠した？」

「やだなあ、先輩。そういうの女の子に聞くのって、デリカシーないですよ？」

コイツもコイツで、かなり動揺してるらしい。

一番上手くごまかせそうなクセに、バレバレの言い訳しやがって。

まあ、上手い言い訳なんていうモンも、急じゃ流石に思い付かんか。

「大和田さん、その脇に挟んだ本のタイトル聞いてもいい？」

「えっと、これは……ジャソプです！ ヤングジャソプ！」

あっはっはっはっは、大和田さんはやっぱりごまかすのが下手だな。こういうことに慣れてないんだろうけど、聞かれても答えちゃダメじゃん。

タイトルがバレても問題ないような本なら、いちいち隠す必要ないんだから。

「おいヒビキ。その服の中に隠した本、俺に見えるように出してみろ」

「えー……兄さんが怒らないって約束してくれるなら、出してもイイよ？」

ダメだなあ、ヒビキ。

そういう聞き方するってことは、俺が知ったら怒る本なんだろう？

元々俺は、読んでも本の趣味くらいで文句を垂れる人間じゃないんだから。

その点に関しては、ヒビキだって重々承知してるはずだ。

だから、わざわざ怒らないように念を押すってことは、俺の所有物だってことだ。

俺は、自然と笑顔になっていた。

もちろん、この状況が嬉しいなんてことは無い。

そもそも笑顔ってのは、非常に攻撃的な表情。

獣が牙を剥き出しにするっていうのが、笑顔の原点と言ってもいい。

つまるところ、俺は立派に攻撃的な感情を抱いているわけだ。

「誰も殴らないでやるから、今すぐ隠したモン出せ」

さすがに俺の剣幕に気圧されたのか、みんな渋々と本を出してくれた。

由紀江ちゃんがテーブルの上から退くと『スク水格闘街』ファイトタウンが。

それに重なるようにして、『真・スク水無双』白スク伝』が見えた。

武蔵はテーブルの下から『オール・ハイル・ブルマニア』を。

大和田さんとヒビキが『君がブルマで、胴衣が俺で』『チアとブルマとレオタード』を。

全員が俺から目を逸らしながら、テーブルの上に本を置いた。

コイツら、人が気を遣ってなんか買いに行つてやろうとしたら！

人様が嚴重に隠し持っていたエロ本で、プチ観賞会開いてやがったのか！

しかも、俺が2回も声かけて気付かないほど集中してるとか、どういうことだよ！

「あのあの、私、ちょっとお手洗いに行ってきますね！」

と、由紀江ちゃん。

その逃げ方は、女の子としてどうかと思う。

「それじゃあ、私は散歩に行つてきます」

つて、武蔵が。

それじゃあつてなんだよ、それじゃあつて。

「えっと、お風呂借りますね！」

とは大和田さん。

パジャマに着替えてるのに、また風呂に入ろつてか。

「さーて、私もそろそろ部屋に戻ろつかかな？」

なんてぬかすヒビキ。

……主犯格のお前を逃がすわけないだろうが。

笑顔のまま、俺は入り口から動かない。

客間の出入り口は、玄関につながつてる廊下沿いにあるココと。

あとは、風通しがメインの目的で作られた庭へのガラス戸だけ。

少なくとも、由紀江ちゃんと大和田さんは、俺のいる場所を通らにやならん。

だからつてだけでもないが、冷や汗をかいたまま女の子たちは誰も動かない。

「全員、その場で正座」

特に声を荒げたりもせず、ポツリと告げる俺。

その言葉に、大和田さんはすぐに従ってくれた。

他の3人ときたら、この期に及んで往生際の悪い。

「あの、でも私、お手洗いに……」

「その場で正座しろつったんだけど、聞こえなかった？」

「……はい」

由紀江ちゃんが逃げようとしたけど、もちろん逃がさない。

膝立ちになった由紀江ちゃんを睨みつけて、すぐに座らせた。

その様子を見て、武蔵とヒビキも諦めたらしい。

まあ、一番強い由紀江ちゃんですえ強行突破を諦めたんだ。

逃げ切れるかどうかは別として、感覚的に無理だって悟ったんだろ。

仮に由紀江ちゃんが逃げたら、大成さんに全部バラしてやるつもりだったんだけどな。

「4人ともさ、俺に言うことあるよな？」

全員が正座したのを確認して、俺は努めて平然と

こうやって、自発的に懺悔してもらうのが一番だ。

まあ、なんだかんだ言っても、ヒビキが原因なんだろうし。

わざわざ兄貴の工口本を知り合いに見せびらかすとか、どういう神経してんだか。

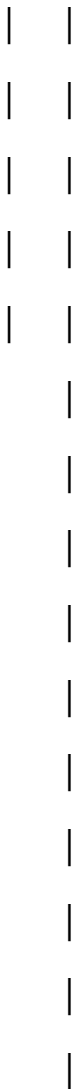
どっちにしても、一緒になって観賞会やってた後輩一同も、注意な
しって訳にはいかん。

だから、わざわざ自分から謝るチャンスをくれてやったんだが、

「先輩の集めてる本ですけど、なかなかプレミアムなジャンルですよ
ね」

なんて面白おかしいことを武蔵が言ってくれたから。

後輩たちの情操教育の意味も含めて、延々説教してやろうと心に誓
った。



で、その後、キツチリ正座した4人を見降ろして。

たっぷり1時間は説教した後、本を回収して部屋に戻った。

隠してたモノがモノだから、ちょっと空気は気マズくなったが。
まあ、そもそも自分のモノを取り返したただけで、気にすることじゃない。

……さて、ブツも回収できたわけだし、部屋に戻って頑張りますか！

11話目『ちよつと みなT o L o v e r』（後書き）

え、段々と空気が怪しくなっております。

しかし、年頃の女の子にそういう本を見られると、同じ敷地内で生きるのがつらくなってしまいそうですね。

私だったら、そのまま夜行バスで逃げてしまいそうです。

そういうわけで（？）、次の話は小杉視点を予定しております。

あと、港くんのアレな本のタイトルの元ネタが全てわかった方。きっとアナタとは、いい友達になれると思います。

テンプレートになってしまっていますが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、お待ちしております。

また、辛らつなご意見についても受け止める所存ですので、秘めたことがあるようでしたら、お伝えいただけるとありがたいです。

幕間『静けき夜 港は眠る』（前書き）

この話は、武蔵小杉の視点で書かれています。

また、私一人の判断ではR・17に相当する性的な描写が含まれていません。

そのような描写が苦手な方は、この話を読むのを控えられるか、そのような表現があると覚悟した上で読んでいただけると幸いです。

加えて、痴漢行為に対する意見が文章中に含まれていますが、本品に痴漢行為を始めとする犯罪行為を助長する意図はありません。その点も重々ご理解いただければと思います。

幕間『静けき夜 港は眠る』

時刻は多分、午前4時前後。

場所は、港先輩の部屋の前。

ドキドキしながら、私はドアノブに手を掛けた。

このドアは、廊下と寝室を繋げるドア。

なんでコッチを選んだのかって言うと、理由は簡単。

応接間から入った場合に、開かなきゃならない扉の数が増えるから。それと、応接間のドアを開けると、ギシギシ音がするようにしてあるから。

リスクはできるだけ減らしておかないと、また痛い目を見ることになる。

私の後ろでは、黛さん、大和田さん、ヒビキちゃんが声を殺してる。今の状況を理解してれば、唾を飲み込む音でさえも出すことは許されない。

万が一にも先輩が目を覚ましたら、この計画は水の泡になっちゃう。だから、荒くなりそうな息も頑張って小さくして、そっとドアノブを回した。

ひんやりとした空気が漏れてきて、汗をかいた体が急に冷える。

思わず少し身震いしたけど、当然、ドアノブを掴んだ右手は震わせない。

扉の向こうに覗くのは、初めて見る先輩の寝室。

1人部屋にしてはかなり広くて、手の込んでそうな家具が並んでる。大きめの勉強机に、それより少し低いけど幅の広い本棚。

ベッドは部屋の角にピッタリとくっついてて、頭の横にタンスがある。

今の今まで暗闇の中を歩いてきたから、電気を付けなくてもよく見えた。

今の私は、とても不思議な気分になってる。

悪いことをしているはずなのに、それでも止めることができない。

頭ではいけないって分かっているのに、本能がそれを上回っている感じ。

でも、悪いことかどうかなんてどうでもいい。

今さら引き返すなんて選択は、私にはないんだから。

話は、港先輩の説教から解放された直後にまでさかのぼる。

足が痺れながらも反論もできず、延々と続いたお説教。

バレないと思つて観賞会をしていた私たちの方に非があるのは、明白だった。

恥ずかしい本だからとかじゃなくて、人の物を勝手に借りるなんていうのは問題だもん。

私だって、自分の私物を勝手に持ってかれたりしたら、それは凄く怒ると思う。

だから、黙つて先輩のお説教を聞いて、情熱に流されてしまったことを反省してた。

反省してたんだけど。

「ねえ、小杉姉さん。私と一緒に、兄さんにお仕置きしない？」

つて言う、ヒビキちゃんの一言で、私の心境が一変した。

私は最初、仕返しだなんてとんでもないと思つてた。

だって、あの本のおかげで、港先輩の趣味が知れたわけだし。

ちよつと下世話だけど、港先輩にアプローチを掛けてく方法が分かつたも同然。

ああいうフェチっぽい服装で迫っていけば、いつかは必ず心が揺らぐはず。

どっちにしても、悪いことをしたのは私たち。

だったら、仕返しどころか謝らなきゃいけない。

そう思っではいるんだけど、その『仕返し』って響きが妙に魅力的だった。

私の心の奥底の反逆心っていうか、下克上の精神みたいなものが妙に刺激される。

港先輩に任されてから久しく忘れていた、あの向上心にも似た感覚が。

それでも、私たちに非があったのは変わらない。

港先輩に仕返しとか意趣返しをするのは、もっと別の機会にするべきだと思った。

そういうわけで、ヒビキちゃんを諭してみようと思ったんだけど。

「仕返しっていつでも、今怒られたばっかじゃない」

「大丈夫大丈夫！ ああ見えても兄さんってマヌケだから！」

なんて言う風に、先輩に仕返しをしないって選択肢は見せなかった。長時間正座させられたのは、ヒビキちゃんにとって相当腹立たしいことだったみたい。

いやらしい笑みを……港先輩が私と戦った時のような笑顔を浮かべながら。

『兄さんの部屋って、窓以外に鍵をかけられる場所がないんだ』なんて言い出した。

その情報を私たちに漏らして、いったい何をさせようとしているのが気になるけど。

「由紀江姉さんだって、ちょっとムカついたでしょ？」

「いえ、そんな……私たちにも原因はありましたから」

話題を振られた黛さんは、さっきからずっと顔が赤い。

もともと肌が白いからかもしれないけど、もう本当に真っ赤。

黛さんのことだから、さっきの港先輩の本の内容でも思い出してるんですよ。

私は……自分で触った限りではそんなに熱くもないから、たぶん大丈夫。

「伊予姉さんも、かなり足が痺れたんじゃない？」

「うん、それは、足は痺れたけど……」

「でしょ？ 女の子をそんな目に合わせるなんて、信じられないよね！」

……ヒビキちゃん、港先輩以上の食わせ者みたいね。

問題のすり替えなんて、いったいどこで覚えたのかしら。

大和田さんは、ヒビキちゃんが振った『足が痺れたかどうか』の話に返事をしたのに。

いつの間にか、港先輩に対する心象について聞いてたかのような話になってる。

確かに、私もすごく足が痺れたのは間違いない。

でも、同じ姿勢でいるのには慣れてたから、私はまだよかった。

それに比べて大和田さんは、隣に座ってた私でも分かるくらい辛そうだった。

港先輩が部屋から出てくと、そのまま横倒しになって動けなくなるくらいには。

そついう出来事があったことを考えると、大和田さんを煽るには充分過ぎる言葉だ。

「だから、ちょっと兄さんを懲らしめてやりたいの！」

思えば、その言葉に警戒心を削がれたんだと思う。

ヒビキちゃんは年下で、私たちによく懐いてて。

明るくて、朗らかで、とつても普通の女の子っぽくて。

そついう風に振舞ってたから、額面通りに言葉を受け取っちゃった。

「そついうことなら、私はヒビキちゃんに協力してあげてもいいかな」

そう、額面通りに、ちょっと懲らしめるだけだと思ってた。

せいぜい『朝ごはんのときに一言も口を利かない』とか。

部屋がどうこう言ってたから、ゴキブリのおもちゃを大量に放り込むとか。

それくらいのことなら手伝ってもいいって、勝手に私は思い込んでた。

「ね？ 小杉姉さんもそついうってるんだし、由紀江姉さんと伊予姉さんも手伝って！」

『お願い！』って言いながら頭を下げるヒビキちゃん。

この姿を見て、黛さんも大和田さんも騙されたんだと思う。

私たちは、すっかり忘れてた。

朗らかに笑うヒビキちゃんを見て、人懐っこいヒビキちゃんを見て、港先輩よりは人付き合いが上手そうで、ハキハキ喋るヒビキちゃんを見て。

なんだかんだ言っても港先輩の妹だってことを、すっかり忘れてた。

「じゃあ、3時……15時じゃなくて、3時30分に兄さんの部屋の前に集合ね！」

この言葉を聞いた時点で、考え直すべきだったのかもしれない。

というわけで、こうして港先輩の部屋に4人で侵入することになった。
まさか、黛さんと大和田さんまで乗ってくるとは思ってなかったんだけど。

……結果的に全員ココにいるんだから、何言っても仕方ないわよね。とにかく今は、先輩を起こさないようにしなきゃ。

部屋に足を踏み入れるときも、足音には十分気を付ける。

床にカーペットが敷いてあるから足音はしなないと思うけど、注意はしなきゃダメ。

ヒビキちゃんが言うには『ウグイス張りとかしてないから大丈夫』
ってことだけど。

それでも、目標を達成して引き返すまでは、絶対に油断はしちゃいけない。

ちなみに、先陣を切ってるのは私だ。

黛さんは恐れ多いとかで、大和田さんは自信がないから。

ヒビキちゃんは筆記用具とビデオカメラを持つてるから、先頭って訳にはいかない。

ってことで、自然と私が一番前になって、先輩の部屋に突撃することになった。

ヒビキちゃんが先輩をビデオ撮影する理由については、深く考えないことにした。

先輩のベッドは、扉から離れた場所にあった。

扉をシツカリと開いてから、私が先陣を切ってベッドに歩み寄る。

私の後ろにいた黛さんが扉を抑えて、他の2人を部屋に入れてしま
う。

全員が入ったのを確認したところで、律義に扉を閉めていた。

脱出するときに困るかもしれないけど、黛さんの判断は正しい。

生ぬるい空気で港先輩が目覚める可能性は、これで排除された。

ベッドの上の先輩は、それはもう無防備に寝ている。いびきはしてないけど、大きめのベッドに大の字になっていた。タオルケットが体に掛けてあるみたいだけど、それ以上は分からない。

……もつと近づいて、是非とも確かめないとね。

一歩、また一歩と、擦り足で先輩に近づく。

足元に気をつけながら、ゆっくり、ゆっくり。

よっぽど大丈夫だろうけど、何か落ちてないとも限らない。

ガビョウウくらいなら我慢できると思うけど、血の跡が残ると厄介になる。

とにかく、私は最善の注意を払った上で、こうして先輩との距離を縮める。

と、ほんのりと鼻を突く匂いが。

矛盾してるかもしれないけど、そうとしか言いようのない匂い。

なんというかこれは、生臭いって言うのかしら？

つい2日前まで使ってた部屋なのに、コレはいったい何のニオイだろう？

嗅ぎ慣れない匂いだから、ちょっと警戒して……警戒の必要はなくなった。

匂いのしてきた方向に目を向けると、闇の中にもシルエットが浮かんでくる。

どの家庭も1つは置いてあるもので、港先輩の部屋に遭ってもおかしくないもの。

そこそこの大きさはあるけれども、アレは間違いなくゴミ箱だ。

よし、落ち着こうか、私。

前後の状況を論理的に整理して、何の匂いかを考えなさい。

港先輩は、恥ずかしい本を後輩に見られてとても怒っていた。

でも、その本はキツチリと回収して、恐らく部屋まで持って帰った。

港先輩は疲れ果てた様子で、大の字になってグッスリ寝ている。

そして、ゴミ箱のある方向から匂ってくる、この生臭い香り。

……それはつまり、先輩が

突然、腕を掴まれた。

それと同時に、私の口がふさがれる。

背中に当たる胸の位置から考えて、黛さんだ。

……なんか腕の骨がギシギシいつてるから、ちょっと手加減して欲しい。

「武蔵さん、落ち着いてください。そっちはゴミ箱です」

小さな、それでも私の耳にハッキリ聞こえる大きさで。

私をたしなめるようにして、黛さんが耳元で呟いていた。

その言葉で我に返ると、確かに私はゴミ箱に向かっていた。落ち着いて右に視線を向けると、港先輩のベッドが見える。

匂いの正体が何か勘付いてから、それを手に入れるためにそっちに向かってた。

……乙女としてマズイことをしてみたいけど、過去のこととは忘れましょうか。

でも、落ち込んでばかりはいられない。

これは、港先輩の寝顔を直視する千載一遇のチャンス。

コレを逃したら、同じようなチャンスにめぐり合うことはきつとな
いから。

――
――
――

というわけで、呼吸を落ち着けてから、再び港先輩のベッドへと進軍。

ジリジリと距離を詰めて……元々そんなに距離は無かったから、す
ぐに着いた。

ベッドの傍に4人が並んで、港先輩を覗き込む。

頭の方から、私、黛さん、ヒビキちゃん、大和田さんの順に並んで

る。

私がお先頭だったんだから、私がおいしいところにするのは間違っていない。

もうとつづくに暗がりには慣れてる目は、港先輩の服装を正確に認識できた。

タオルケットのせいでアンダーは分からないけど、トップスはTシャツだけ。

もう少しよく見ようと思って乗り出すと、先輩の汗の匂いがした。お説教してた時は石鹸の匂いがしてたのに、もう汗をかいたみたいでも、少しだけ汗の匂いがするんだけど、不思議と嫌な気はしない。

これは、思春期の男性特有の現象。

汗をかいた時にフェロモンも一緒に出てて、それで異性を惹きつける。

汗臭いのには不快感を感じないのは、そういうのが原因らしい。

それでも、私にとってはそんな単純な話じゃない。

ロマンチックに言えば『好きな人の匂いだから』だ。

だから気分が悪くなるどころか、少し落ち着いてくる。

論理的は違うけど、そういうことにしておこう。

と、黛さんが私のTシャツの袖を引っ張ってくる。

何かあったのかと思って視線を移すと、何かを指差してた。

……今この時ほど、私は兄さんがいてよかったと思っただけではない。兄さんがいたおかげで、こんな状況でも私の動揺は最低限に抑えられた。

港先輩は下腹部近辺で、テントを組み立てていらっしやる。

私とヒビキちゃんは、まだイイ方だった。
何が起きてるのか、咄嗟に判断できないわけじゃないから。
そもそも何をしに来たのか考えれば、今の状況はむしろ好都合なん
だし。

とにかく、黛さんと大和田さんは、明らかに動揺してる。
大和田さんはテントの頂点を見つめたまま、黛さんはひたすら口を
パクパクさせてる。
2人とも大声を出さないように気を付けてるから、そのままできて
くれると助かるわ。

そう、私たちは驚いてはられない。

私たちの最終目的は、これの実態を確認することにある。
ヒビキちゃんは、港先輩へのささやかな復讐という名目で。
ムツリスケベの黛さんは、恐らくだけど知的……性的好奇心で。
大和田さんは、性的好奇心が半分、場に流されたのが半分。
そして私は、黛さんと違って、純粋な先輩への想いがあったココまで来た。

私たちは、視線だけで意思を疎通する。

この距離だと、小声でも港先輩を起こしかねない。

ヒビキちゃんの目線が、私と黛さんに配られる。

大和田さんは、私だけを見つめて小さく頷く。

黛さんはヒビキちゃんの視線を受け流して、私を見ていた。

3人の視線と意思を受け取って、自分のすべきことを理解した。

大の字になってる港先輩にかかっている、大きめのタオルケット。
そのタオルケットの、腰に近い端の部分を丁寧につまみ上げて。
そしてそのまま、ゆっくりと上に持ち上げて、上半身の方へとずらしていく。

……テントの下にあるのは、またテントだった。

ただ、タオルケットよりも布地は薄くて、生地もピンと張っている。
こんなに間近でコレを見たのは、私の人生で初めてのことだ。
ちよっとどこるか、これでもかかってくらいにドキドキしてる。

でも、生唾を飲み込んだのは私じゃなくて、隣の黛さんだからね？

港先輩、ボクサーパンツ履いてるんだ。

トランクスってイメージがあったけど、コレはコレでありかな。もちろん、目に入るのは先輩のボクサーパンツだけじゃない。

流行の俳優みたいな細マッチョとかじゃなくて。

戦うことを前提に鍛えられた、文句のつけようのない力強い身体。全体的にバランスよく太い足と、それなりの筋肉を纏ったお腹まわり。

海で上半身も見てるけど、どこを見ても鍛えられていないところなんてない。

その身体を見るだけで、いかに港先輩が自分を追い込んでいるかが分かる。

私を倒した人が、私よりも強くて、私よりも努力してる人で本当によかった。

とか、別のことに意識を移そうと思ったけど、無理。

さっきから私の視線は、港先輩のテントに釘付けなんだもん。

しなやかで強靱な腹筋も、均等に鍛え抜かれた足もどうでもいい。

そんなものは、見ようと思えばいくらでも見れるんだから。

ヒビキちゃんを見ると、ビデオカメラの側面を押ししたりしてた。

たぶんだけど、港先輩のテントをズームしてるんだと思う。

赤外線がどうこういつてた気がするけど、その辺は私は気にしない。もしそうだったら楽しみが増えるだけだから、全然問題は無いんだけどね。

ただ、私としてはね。

ここまで来たからには、キッチリと実物を拝みたいの。

だって、仕方ないじゃない。

その、先輩の……袋らしきプレミアムな部分が、さっきから見えてるんだもん。

ここまで見えてるっていうのが想像力を掻きたてるけど、想像だけじゃ我慢できない。

女子高生のパンチラにムラムラきて、思わず痴漢する人の気持ちがよく分かった。

手を伸ばせば届くところに欲しいものがあるんだから、挑戦するのは自然なことなんだ。

港先輩に掛かったタオルケットを、もつと上にまで持ち上げる。

おへそが見えたあたりで手を止めて、今度は、パンツのゴムに指を掛けて。

そのままだと引っかかっちゃうから、ゆっくり上に持ち上

「う……………武蔵、腕絡み……………袖車絞め……………」

いやあああああ！

いきなり私の名前言うから、パンツのゴム放しちゃった！

もおおお！ あんな色気のかけらもない言葉が続いてるって言うのに！

いったいいつのアドバイスしてるのよ、この人は！

「んん？ ん……………」

や、やだ！

港先輩、起こしちゃった！？

でも、でも、まだ完全に起きてないし、急いで逃げれば

あ、ダメだ。

港先輩、私と目が合って

幕間『静けき夜 港は眠る』（後書き）

えー、なにかまたやってしまった感があります。

アグレッシブすぎる女子高生たちに、私もちよつとゾワゾワします。もし本当にこんな目に遭ったら、嬉し……嬉し……いえ、嬉し……非常に屈辱的な思いに押し潰されてしまふと思います。

良い子も悪い子も、彼女たちは立派な犯罪行為に手を染めていると、こののを認識したうえで、絶対にマネしないでください。裁判起こされたら確実に負けるレベルの犯罪行為です。

では、毎度毎度お目汚しですが。

ご意見、ご感想、誤字脱字のご指摘、ご要望などなど、諸々の意見をお待ちしております。

また、加減の分からない部分もありますので、やり過ぎであるというご意見などもあれば、遠慮なく伝えてやってください。真摯に受け止めさせていただく所存です。

12話目 『変態妹原理主義!』 (前書き)

この話は、後半に寝技について細かく言及されています。

作者の体験談、知人の体験談、自論、専門書の内容を基に書いてお
りますので、

プロの方をはじめとした他の方とは違う形になっている可能性があ
ります。

細かくなっておりませんが、物語の展開上無視しても差し支えないの
で、

寝技の部分は飛ばしていただいても大丈夫です。

12話目 『変態妹原理主義!』

今日は珍しく、武蔵の夢を見た。

川神ランキングの特別試合の時の夢だ。

川神にマウントを取った後の、あの展開。

俺がマウントの後を教えてたらどうなったか、そういう夢。

結局、あの時点でダメージが溜まり過ぎてて負けるっていう内容だった。

片手を抑えてのパウンドから腕絡みにいっても、スピードが落ちてて決まらない。

それを捨てて技にして袖車絞めっつーのも、袖の短い空手着じゃやりようもない。

振り返ったところで、過去のこととは全部『今さら』だ。

何を言っても、何をしても、起こってしまったことは塗り替えようがない。

だから、俺はやれるだけのことを、後悔しないように全力でやらなきゃならん。

……いつものクセで、朝早くに目が覚めちまっただけのことなんだけどな。

なんか武蔵が部屋にいたように見えたけど、まだちょっと寝ぼけてたんだろ。

俺の部屋に鍵が付いてないからって、条件反射で侵入してくるバカじゃないだろ。

ま、身体の疲れはキツチリ取れてるみたいだから、寝ぼけるくらい

は別にいいか。

しかし、Tシャツとパンツだけで寝ると体が冷えた。エアコンの温度もそれほど低くした覚えは無いんだが、やっぱりタオルケットだな。

起きてビツクリ、腹の辺りまでめくれ上がってやがって、俺の寝相の悪さを疑った。

どっちにしても、明日からはハーフパンツくらいは履いた方がいいかも知れん。

それにしても、久々にエースが活躍したせいで大変だった。

今まで溜まりに溜まったのもあるんだが、昨日はフィーバーしてな。自分でもゴミ箱の中を覗きたくないくらい頑張っちゃまったんだわ。

こう言っちゃなんだが、精根尽き果てなかったのが不思議なくらいだ。

2桁ってのは人生で初めてのことだったが、思ったより平気だったしな。

ま、英気を養ったんだから、今日からはいつも通りだ。

いつまでも怠けると、あつという間に身体が腐るしよ。

俺は……僕は、由紀江ちゃんみたいなバケモノじゃないからね。

毎日毎日積み重ねて、牛歩でもイイから距離を詰めていかないよ。

寝室から廊下に移動して、そのままの足でトイレに行つて。

小さい方の用を済ませてから、トイレの隣の洗面所で、顔を洗って歯を磨いて。

応接間の冷蔵庫からゼリー飲料を取り出して、ズルズルと一息にすすって。

また寝室に戻って、タンスの中から上下黒のジャージと、適当に下着を出す。

そんで、行儀はよかないが、Tシャツとボクサーパンツを脱ぎ捨てる。

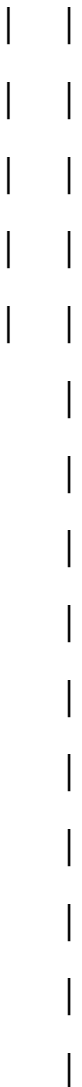
まあ、洗濯機の中に放り込んでおくのは、ジャージと一緒にまとめた方が楽だし。

わざわざ洗濯機のある平屋まで行っっていうのも、思ったより面倒なんだもん。

僕の部屋だから誰も見てないだろうし、脱ぎ捨ても生着替えも僕の勝手ですよ。

で、パツパと着替えて、ランニングシューズを履いて、スポーツウオッチして。

正門の隣の勝手口から外に出て、2年ぶりの生まれ故郷を走ることにした。



たっぷり1時間かけたランニングは、爽やかなもんだった。

家と田んぼと畑ばつかだけど、懐かしくて気持ちがよかった。

勝手な思い込みかもしれないけど、川神と違って空気がキレイな気がするなあ。

ひんやりと透き通るような、肺の中がスッキリするような、そんな感じがした。

まあ、田舎は田舎なわけだし、空気くらいはキレイじゃないと話にならないよね。

そんで、シャワー浴びて着替え直して、軽くストレッチして。

シャツとパンツは部屋に無かったから、誰かが片付けてくれたってことにして。

ニュース見てから居間に集まって、ジジイを抜いた5人で朝飯をつついてんだけどさ。

まあ、食ってる飯に文句があるわけじゃない。

味噌汁に焼き魚に大根おろし、チンゲン菜のあえ物、トマトサラダ、納豆。

栄養バランスも悪くないし、味付けも濃すぎず薄すぎずちょうどイイ感じ。

腹いっぱいには食わなかったけど、バランスの面からも満足過ぎるメニューだ。

今まさに飲んでる食後の茶だって、安いモンじゃない。

玉露の甘みが口の中に溶けてくような、茶葉からして違うモンだ。まあ、自分で入れた茶だっるのが気に食わないけど、いつものことだし気にしない。

じゃあ、朝っぱらから何に不安があるかって言うと。

「ねえ、由紀江ちゃん。僕の顔に何かついてたりするのかな？」

「そ……そんなことはない、ですよ？」

後輩3人の視線やら態度が、どうにもよそよそしく見えるんだよ。僕と目が合いそうになると不自然な方向に視線を逸らしたり、僕の顔をじつと見たり。

昨日のことが原因でそういう態度になるってことはないはずなんだ。もし昨日の夜に原因があるんだったら、もっと落ち込んでなきゃならないんだもん。

それがないってことは、多分だけど、昨日のこととは関係ない……と思う。

特に、そういう態度を大和田さんが取るってのが気にかかる。

ああいう反応の仕方は、僕の記憶が正しければ気マズさと好奇心の折半だ。

大和田さんのに限っては、僕に好奇心を抱くなんて言うのは考え辛いんだよ。

本人に確かめるのはちょっと嫌だけど、大和田さんって僕のこと苦手だろうからさ。

試合とはいえ女の子の顔グチャグチャにしたら、大和田さんじゃなくとも引くよね。

そういう意味で考えると、由紀江ちゃんと武蔵の方が異常なんだろうなあ。

まあ、とにかく、ちょっとよそよそしいわけだ。

あの子らが何日いるつもりか知らないけど、それまでは顔を合わすんだし。

このまんまソワソワした状態で過ごすっていうのは、ちょっと忍びない。

外堀からいいから、少しは溝を埋めておきたいもんだ。

それについては、もう案があるんだけどね。

珍しく見た武蔵の夢が、朝からずっと気になってさ。

僕の後輩が何度も負ける姿を見るのは、あんまり気持ちのイイもんじゃない。

だから、もうちょっとだけ攻め方ってのを教えてやるうって思うんだよ。

「ねえ、武蔵。今日、どっかに出掛ける予定はあるの？」

「出掛ける予定は無いですけど、みんなで宿題するつもりですよ」

うーん……予定が空いてると話はスムーズだったんだけど。

いや、家から出ないんだったら、まだ少しは脈があるかな？

時間は取るかもしれないけど、武蔵にとっても悪い話じゃないし。

1人様子が変われば、なし崩し的に雰囲気もよくなってくるでしょ。

「もし時間が取れるんだったら、あとで道場に顔出してもらえる？」

「道場って……あの、敷地内にあるんですか？」

「あるよ？ まあ、客間からは少し離れてるけど」

道場っていうか、物置だったところに畳みとマット突っ込んだだけ
なんだけどね。

サンドバッグもぶら下げられるようにはしてるから、道場ってことに
してある。

ほら、物置でトレーニングするっていうより、道場でって言った方
が気合入るじゃん。

まあ、武蔵だけ呼んだのは、大和田さんに気を使ってるからだね。

由紀江ちゃんも呼べることは呼べるけど、大和田さんだけ置いてけ
ぼりになっちゃう。

だからって、大和田さんは格闘技とか武術には興味がないだろうし、
誘ってもね。

そいうわけで、武蔵だけに声をかけておこっつて魂胆なんだよ。

「寝技での攻め方を教えておきたいから、動ける服装で来てね」

なんか、後輩3人の表情が硬くなったのは、なんでなんだろうね。

多少気マズいのは分かるけど、コッチが気にしないようにしてやっ
てんだから。

寝技って言葉に、いやらしい意味を感じるようなタイプでもないし
なあ。

……まあ、その辺のことを聞くのもデリカシーないし、黙っとけば
いいか。

で、茶を飲み終わって席を立って、自分の部屋で着替え済ませて。早くもギンギンな日光に目を細めながら、柔術着で道場に来た。道場の中はホコリっぽくないから、ジジイは掃除を忘れてなかったらしい。ジジイじゃなくて、山口さんか斉藤さんが昨日の内にやったのかもしないけど。

さて、準備運動はキツチリやっておかなきゃならない。思わぬところでゴツツイ怪我をすることなんて、日常茶飯事だ。その怪我の確率を少しでも減らすためには、入念な準備運動が不可欠。

ウォームアップもストレッチも、やりすぎってことは無いからね。もちろん、僕だって準備運動はしっかりやる。

いくら怪我の少ないって言われてる柔術だけど、怪我がないってわけじゃない。だから、肘も、膝も、手首も、足首も、腰も、首も、アキレス腱も。まだまだ事故で死ぬつもりがないから、たっぷり時間をかけて入念にやる。

僕の場合、ウォームアップはその後にやるようにしてる。

まあ、ストレッチが半分ウォームアップみたいなもんなんだけど。エビ、逆エビ、スイッチ、スweep、もぐり、腰切り、膝割りの回復。スクワット、腕立て伏せ、すり上げ腕立てをやったあとに、倒立で道場を往復。

練習前には、これだけのメニューを最低限でやるようにしてる。

打撃もやる場合は、もちろんこれだけで終わらせない。

左右のジャブ、ストレート、フック、ボディアッパーを20本ずつ。左右の前蹴り、回し蹴り、膝蹴りを、上段・中段・下段で10本ずつ。

得意だった肘打ちは、打ちおろし・横軌道の打ちを30本ずつ。

あとは、時間に余裕がある時は、関節蹴りと横蹴りもやっておく。

まあ、今日は武蔵に寝技教えるだけだから、そこまではしないけどね。

それで、最後の倒立歩行の最中に、道場の引き戸が開いて。

「おじゃましまーす」

なんて、少しだけ場違いな言葉が聞こえてきた。

逆立ちのまま声の方に体を向けると、ヒビキも合わせて4人いる。結構距離が離れてるけど、いくらなんでも見間違えないさ。

4人みんな道場に来たのも、別にそれほど問題じゃない。

気にはなるけど、気にしたところで追い返すわけにもいかないし。それより、由紀江ちゃんが袴を履いてるのは、僕の心も満たされて

凄くいい。

何かが気になるって、どうして他の3人が柔術着を着てるのかが気になるんだよ。

……どっちにしても、まずはウォームアップを終わらせなきゃ。

「もうちょっと待っててね。向こうの壁まで行ったら終わるから」

って言いながら、右手一本で倒立しつつ、目指してた壁を左手で指さす。

で、そこから左手をついて、さっきまでと同じように壁に向かって倒立歩行。

ちよつとスピードを上げたから、30秒もせずに壁に到達する。

そのまま腹の方に足を降ろしたところで、ようやく僕は声をかけることができた。

道場の扉は閉められてて、4人が横並びでコッチを見てる。

その4人との距離を3mくらいまで詰めてから、僕は声をかけて……。

うーん、こうやって並んでも、やっぱり大和田さんは色っぽいなあ。まあ、それは別にどうでもイイか。

「全員で来てくれたのはイイんだけどさ。今から何するか分かってるよね？」

僕は、武蔵にだけ声をかけたはず。

それなのに、フタを開ければ4人もいるときたもんだ。

しかも、みんなそれなりに動けるような服装をしてきてるし。

悪いとまでは言わないけど、理由くらいは確認しておきたい。

「何って……稽古をつけてくれるんですよね？」

「いや、そうなんだけどね？」

的を射たことを言ってくれる由紀江ちゃん。

まあ、それで合ってるんだけど、武蔵以外が来てもなあ。

大和田さんもヒビキも、格闘技には縁がないはずだし

薫流なんて古武術を修めてる由紀江ちゃんは、寝技しないだろうし。武蔵に教えたいレベルの技術は、この子らには全然関係のない話のはずだ。

まあ、みんなが寝技習いに来たのはイイとしておこう。

それよりも、なんで3人が柔術を着てるのかも分からない。

古いのは捨てるから、僕が昔使ってたのってことはないだろうし。あの子らが着てるのが僕の予備だしたら、サイズが全然合わないはずだしなあ。

ヒビキの帯の色が青だったことは、もしかしてヒビキは柔術やってるのかも。

……細かいこと気にしても仕方ないし、小西さんここで教えてるみたいにやろう。

「それじゃあ、いきなりだけど始めていこうか」

「あの、準備運動はしなくても大丈夫なんですか？」

大和田さんに聞かれるまで忘れてたよ。

準備運動が終わってるのは僕だけじゃなか。

由紀江ちゃんはいイとして、他の子は辛いよね。

『常在戦場は武術の基本です』なんて言う子だからなあ、由紀江ちゃん。

「それじゃあ、かるーく体動かそうか。そっちの壁に並んで、僕と同じ動きしてね」

じゃあ改めて、まずは準備運動ってことで。

さっき僕は済ませちゃったけど、何度やっても悪いってわけじゃない。

それに、本当に軽く……僕のやったものの半分くらいしかやらないし。今日は僕のためのトレーニングじゃないから、ちょっとだけ付き合っただけよう。

大和田さんがバテながら、なんとか準備運動も終わった。

まあ、普段から運動する子じゃないみたいだし、その辺は仕方ないよね。
ヒビキはヒビキで余裕そうな顔してるし、これなら問題なく始めれそう。

今は、大和田さん以外の4人で立ったまま円を作ってる。

僕の向かいがヒビキ、左隣が武蔵、右隣が由紀江ちゃん。

大和田さんは……壁に寄りかかりながら、窓から入ってくる風を浴びてる。

最初から『ついて来れないかな』とは思ってたから、驚いちゃいないけど。

「ごめん、なさい……もう、だ、だめです」

なんて息切れしてる姿が艶っぽいと思うのは、きっと僕だけじゃないと思う。

それに、汗で髪が額に張り付いてるのが、とても性的な魅力がある。

不思議だよなあ、なんで大和田さんだけ飛び抜けて色っぽく見えるんだろ？

他の子が汗をかく姿にもドキッとしてはいるのに、ホント、不思議なもんだよ。

まあ、今は置いとこう。

そんなことより、寝技を教えなきゃ。

「それじゃあヒビキ。ちょっとコッチ来て、仰向けに寝転がってく

れ

「はいはい！」

元気よく返事をしてから、俺の前で仰向けになるヒビキ。手は力を抜いて横に伸ばされてて、軽く膝を立ててある。寝技掛ける側としては、ちょうどイイ感じの体制だね。サイドポジションにも入りやすいし、足関節も掛けやすい。まあ、今日はそれがメインじゃないんだけどさ。

「んじゃ、ちょっと乗るぞ」

「やだ、兄さんのエッチ！」

……コイツがこういう風に成長したってのは、もう納得した。だから、ヒビキのこういう言動には、兄として極力付き合わないことにしたんだよ。ヒビキのことだから、相手してやると喜んで、今以上に鬱陶しくなるはずだから。

「まあ、これが僕のよくやるマウントポジションって奴だ。教えようと思ってたのは、このマウントの状態からの攻め方でね」

マウントを取るまでが難しいんだけど、武蔵は出来るみたいだから割愛。

付け焼刃とはいっても、川神相手にマウント取れば及第点をやってもイイ。

まあ、またタツクルを決めれるかって言ったら、今のままじゃ無理だろうけど。

由紀江ちゃんがいなけりゃタツクルも教えただけどね……間が悪かったってことで。

「基本、背筋を伸ばして重心を前後に傾けないようにすること。

それと、相手に体重を預けないで、且つ、相手の胴体を両足で挟み込んでね

相手がブリッジで返そうとしてきたら、それに合わせてバランスを取るように」

マウント維持の基本だけど、コレだって本当は教えたくない。

由紀江ちゃんにコレを知られると、次に戦う時に僕が不利になるから。

お互い結構いい年齢だから、あと2、3回くらいしかチャンスはないだろうし。

それも、僕から挑むんじゃなくて、恒例の行事の一環としての勝負のことだ。

僕が誰かに勝負を吹っ掛けるときは、大抵は勝つことが最終目標なわけ。

『充分に準備してから挑む』なんてこと考えたら、いつまでも勝負できないんだよ。

それに、由紀江ちゃんには確定予測を知られてないし、まだ見せてない技もある。

ヒールホールドも、アングルホールドも、膝十字も、コムロックも、三角絞めも。

まだまだ関節技のレパートリーにも余裕があるし、打撃だって少し

はできる。

仮に1mmでも勝機があれば、意地でも捻じ込んでブツ倒してやりたいからね。

まあ、不死川の件は結果待ちだし、そこまで固執しなくていいか。むしろ、今教えてることが見せ技になると思えばいいんだよ。

そんなことより、とにかく、武蔵に色々教えてやるのが先決だ。

由紀江ちゃんの話は、そのときになってから考えればいいんだから。

「マウントパンチは、倒すパンチじゃなくて刻むパンチって意識するように。」

大振りになると重心が崩れて、ブリッジとか襟の引き込みで返されちゃうから。

総合格闘技とかじゃ振り回す人もいるみたいだけど、僕は好きじゃなくってね。

まあ、何十発も入れればKOできるもんだから、無理せずコツコツ当てていこう」

ヒビキの顔に、軽くパンチを入れるフリをする僕。

自分で説明したように、肩も入れないし、体重もかけない。

重力に任せて手を落とすくらいのつもりで、軽く打つ。

今は実演だから寸止めしてるけど、本当に使うなら打つ瞬間に少しだけ力を込める。

それくらいはしておかないと、パンチでも何でも変な動きになるだけだから。

でも、実際、思い切ってパウンドする人は結構いたりするらしい。そこら辺に違和感あるのは、シルヴァ柔術がスポーツを想定してないからだろうね。

スポーツ格闘技が悪いとは言わないし、実戦武術とかと比べて弱いとも思わない。

それとは関係なく、シルヴァ柔術は生き残るための技術で、リスクは避けるのが大前提。

要するに『負けなかったための技術』なわけだから、スポーツとは差が出てくるって話だね。

「あの、パウンドした腕を取られたらどうしたらいいんですか？」

「ルールがないなら、鼻に頭突きでも入れてやりやいさ。」

もしルールがあるんだったら……まあ、それは今から説明するよ」

武蔵の質問にサクッと返しながら、ヒビキを使って実演を続ける。

両手をわざと地面について、ヒビキの顔に頭突きを入れる動作をする。

一応『両手を掴まれた場合』を再現してみたつもりだったり。

実際は、腕関節を取られないように肘曲げたりとかしなきゃいけないんだけど。

試合じゃ使えない裏技みたいなもんだから、そこまで熱心には教えないよ。

まあ、相手を殺してもいいんだったら、もっと別の方法がある。

顔をロックしてやって、右でも左でもいいから捻じり折ってやるとか。

わざとサイドポジション取って、横四方固めして金玉握りつぶしてやるとか。

そんな大仰なことしなくても、僕の握力なら喉を潰してやることもできる。

そりゃ、実際に使うかどうか、使うだけの覚悟があるかってのは別の話だけどね。

「で、マウントとってから技だけど……ヒビキ、痛かったら言うてよ?」

そう言いながら、またマウントの体勢に戻る。

まあ、妹に関節技掛けるのは気が引けるけど、少し我慢してもらおう。

痛かったら痛かったで、秘蔵の本を持ってかれたお仕置きにもなるしね。

「コツチの襟を掴んで来ようとする手を掴み取って『腕ひしぎ』

自分の肩口と首で、相手の肘関節を極める『腕ひしぎ腕固め』

相手の腕と自分の腕で、相手の首を締め上げる『肩固め』

肩固めを嫌がって押し返してきたら、自分の袖と手首で首を絞める『袖車絞め』」

説明しながら技を掛けていっても、ヒビキは大丈夫そうだった。

それどころか、僕の動きに合わせて完全には極まらないようにしている。

柔術着姿で青帯締めてるのは、どうやら伊達つてことじゃないらしい。

……すると、武蔵と大和田さんの柔術着はヒビキの予備か。

あの2人よりヒビキの方が身長あるから、それなら納得できるね。

それはそれとして、マウントからの技はもつとたくさんある。他のポジションを取り直すことを考えたら、それこそ無数に存在する。

ただ、それを武蔵に教えたところで、使いこなせるはずがない。

10年以上やってる僕だって、未だに未熟なところがあると思ってるんだから。

そういうわけで、適当なのを手早く見繕って、武蔵に覚えてもらうことにしたんだよ。

特に、肩固めなんかは本当にオススメだよ？

仮に失敗したとしても、不利なポジションに持ち込まれにくいし。

極まったら極まったで、上手く体を使えば、少ない力で相手を絞め落とせる。

あんまり頻繁に使われる技じゃないけど、だからこそ意表を突けるかもしれないし。

ルールのある戦いで寝技をする限りは、地味だけど強力な絞め技なんだよね。

「袖車はともかく、他の技は相手がシャツでも掛かるから……」

そういつてヒビキの上から移動したんだけど。

なんか、ヒビキの息が荒くなってて、顔も真っ赤だ。

いや、そんな思いつきり絞め上げたわけじゃないし、すぐに放したんだけど。

ちよつと慣れた感じの動きをするから、思わず力が入ってたのかも
しれない。

「おいヒビキ、大丈夫……」

ヤバそうだったら、少し休んでもらおう。

そう思っつて、覗き込むみたいにして声をかけたところで。

「ああ、兄さんに馬乗りになられてる！ そろそろ本気で殴つてくれないかな！

でもでも、兄さんのことだから、半端な力で顔が少し晴れるくらいで殴るのかな？

それもいいけど、あの太い腕で思いっきり絞められちゃったらどうしよう！

わざと後ろを取らせたりしたら、頸動脈じゃなくて気道を絞めてくるかも！

やだ……まだマウント取られてるだけなのに、すごい興奮してきちゃった！」

妹の押し殺した咳きを聞いて、声を失った。

「あの、ヒビキ？」

そうやって僕が声を出すまで、時間は止まっていた。

僕も、武蔵も、由紀江ちゃんも、大和田さんも。

世迷い事を吐き始めたヒビキに面食らって、ピクリとも動けなかった。

それから、2秒くらい経って。

止まった時間に気付いたヒビキが、妄想の世界から返ってきた。さっきまでの恍惚とした表情はどこへやら、今度はヒビキが固まってみせる。

やってはならないミスをしてしまって、あまりのこの大きさに身動きが取れない。

そういう表現がピッタリな顔をしてから、咳払いを1つして

「さあ、兄さん！ 妹だからって手加減は無用だよ！」

とか、意気揚々と誤魔化そうとする妹に、僕は背を向けて無視をした。

2年も会ってなかったからって、こんなことになってるだなんて。最後にあった時は、おしとやかで、はにかむみたいに笑う子で……。僕、このまま新幹線に乗って、1秒でも早く川神に帰りたくなっちゃったよ。

「そんじゃ、武蔵と由紀江ちゃん、肩固めから順番にやってこうか」

「やだ、待ってよ兄さん！ お願いだから気付かないフリしないでよ！」

「じゃあ、それじゃあ……私と！ まずは私と寝技の練習しようよ！ ね？」

「お願いだから兄さん、私のこと無視して姉さんたちの指導に入らないで！」

絶対に変なこと考えないから！　お願いだから！　ね？　ね？
ね？　ね？

もうワガママ言わないし、オクラも残さないで全部食べるから、
だから！」

あっはっはっはっは、聞こえない聞こえない。

僕はただ、由紀江ちゃんと武蔵に寝技の指導をしてるだけだ。

妹がマゾだったなんて気付いてないし、その妹に裾を引っ張られて
もない。

当たり前だけど、その妹から暴力を振るうように頼まれてるなんて
こともない。

……誰か、無いつて言ってください。

12話目『変態妹原理主義!』（後書き）

えー、大変長々と失礼しました。

ほとんど寝技の講習みたいなことになってしまいました、申し訳ありません。

まだまだ格闘技に身をやつすものとしても若輩ですので、技術面に關してお力添えしていただける方がいましたら、メッセージを送っていただけると助かります。

……ヒビキちゃんが突然DMで、本当にごめんなさい。

では、いつものごとくですが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、諸々承っております。

また、作品に関する厳しい感想も受け止める所存ですので、ご意見のある方は是非とも書いてやってください。

幕間『変わった牛乳をいただきました』（前書き）

黛由紀江視点の話です

幕間『変わった牛乳をいただきました』

ミチヒロさんの御実家には、何度もお世話になっていているそうです。憶測なのは、父上から聞いた話であるからというだけですので、他意はありません。そして、家としての付き合いはともかく、私もミチヒロさんにはお世話になっていきます。もしかしたら、因果のような何かが港と黨の間にあるのかもしれない。

例えば、そうですね……。

ご存知の方は少ないでしょうが、北陸名物の剣聖団子。あれも、実は美樹彦さんの御助力で出来上がったものです。黨流が世間で有名になる前の話ですから、私の生前のことなんですよ。

ともあれ、売れ行きのいくらかが、我が家の家系の足しになっているのは確かです。

元々、黨流と港家の繋がりは深いんです。戦国の世が終わり、江戸も崩れ落ち、明治に至ったころ。士農工商の身分制度は失われ、同時に、武士も仕事を失いました。それは黨にとっても例外ではなく、新たな職を見つけるのに苦労したとのことですよ。

そのときから、港と黨の交流は始まりました。当時の港を率いていた方が、当時の黨の当主と幼馴染だったらしく。

その……私の先祖を好いていて、資金援助を申し出てくれたそうです。自分の好意に気付いて欲しかったから、とかイロイロと言われているが。その辺りの事情はともかくとして、それくらい昔からお世話になっています。

とはいっても、一方的に与えられているばかりではありません。急激に勢力を伸ばしていた港を守る盾として、黨は機能していました。

盾という言い過ぎかもしれませんが、抑止力くらいが適切でしょうか？

本当かどうかは別として、過去にトラブルがあったという話は聞きませんでした。

少なくとも、私の祖父の時代から今にかけての間だけに関してなんですけどね。

あとは、美樹彦さんが私の父と張り合っていた、なんて言う話もあります。

美樹彦さんは、なんでも古流武術を修めているそうでした。

つい20年くらい前まではイケイケだったらしく、道場破りもしたとか。

そんなアグレッシブなことをしているうちに、ついに黨流にも挑んだのですが。

……私の口からは申し上げにくいですが、美樹彦さんの惨敗だったそうです。

私とミチヒロさんを戦わせているのは、そのこと関係しているのかもしれないせん。

でも、ミチヒロさんが私に勝てるようになることはありません。
ミチヒロさんが、この先どんな努力をして、どんなに自分を追い込んでも。
年々開いてゆく私たちの差は、ココから縮まるなんていうことはありません。

思えば、一番最初に立ち会った時が、一番実力の差がなかった時でした。

私と同年代の男性と立ち会って緊張したのは、あの時が初めてです。双方とも素手であったとはいえ、いつものように倒せる感じがしませんでした。

掴めない気配と、粘りつくような殺気と、見たこともない構えと、感情のない表情。

それらの全てが私にとっても未知でしたし、同時に怖くもありません。勝ったのは私でしたが、アレほど印象に残った立ち会いはありません。

そういえば、川神学園にミチヒロさんがいたのも驚きました。

私とミチヒロさんは疎遠でしたので、詳しいことは知りませんでしたけど。

だとしても、同じ高校に通うことになるなんて思っていませんでしたよ。

それに、イロイロとお世話になって、こうして武蔵さんとも仲良くなれました。

色々なところを含めて、ミチヒロさんは嫌いな人ではありません。

むしろ、どちらかと言えば好きな部類に入ると思います。

それでも、異性として好きというよりは、その、父上のような感じ
でして。

いえ、父上というよりは、兄みたいといった方が正確かも知れませ
ん。

私には兄はいませんが、いるとすればミチヒロさんのような方であ
ればいいと。

そういう『好き』であって、決して異性として好きなわけではあり
ません。

昨日は怒られましたけど、それは私たちが悪かったです。

ミチヒロさんの……その、大切な本を勝手に見ていましたから。
ヒビキちゃんが持ってきてくれたとはいえ、自重すべきでした。

モノがモノでしたから、アレだけ怒ったのも仕方ないと思います。

その後、ミチヒロさんの部屋に忍び込んだりもしましたけど。

広い部屋を貰っているようで羨ましかったです、それはともかく、
身体が非常に大きな方でしたが、その、あの、下もご立派でした。

キッチンと測ったわけではないですが、平均よりはかなり大きいと思
います。

あそこで目覚めなければ、武蔵さんがソコを露わにしてくれたんで
すけどね。

ベッドの下に逃げて見つからずに済みましたから、ワガママは言え
ません。

どうせ私の頭の中のことなので、1つ呟かせて頂きますと。

ミチヒロさんのパンツとシャツを回収したのは、武蔵さんです。

一番最後に部屋を出たので、バレないと思っていたのかもしれませ
ん。

いつ武蔵さんがミチヒロさんのシャツで深呼吸するのか、楽しみに

しています。

さて、なんで私はこんなことを考えているかといえますと。

「はい、飲んで飲んで飲んで！　飲んで飲んで飲んで！」

さつきから、顔を真っ赤にして騒いでるヒビキちゃん。

手拍子をしながら煽っている様子は、本当に楽しそうです。

顔が赤いのは、下着姿でいるのとは関係ありません。

その原因と言うのは、ヒビキちゃんの紙コップの中身でしょう。

曰く『ライスを発酵させたものの汁』だそうですが、そういうことです。

「このグレープジュース飲んできると、身体がポカポカするわね」

まさかとは思いますが、武蔵さんは本当に気付いていないのでしょうか？

……武蔵さんのことですから、自分にジュースと言いついて聞かせているんでしょ。

あまり大量に飲んではいませんし、私が話しかけても意味のある答えが返ってきます。

確かにグレープジュースと言えないこともないですが、成分が違い過ぎるか。

ブドウを発酵させて作った飲み物は、一般的にはグレープジュースとは言いません。

「まゆっち〜！ ほら、まゆっちも飲んでよ〜！」

伊予ちゃんは、さっき『麦汁』を飲んでから様子が変わります。

いえ、どうおかしいのか見当はついていないんですけど。

今の伊予ちゃんには、へべレケ以外の言葉が見つかりません。

酔っ払……この状態になった伊予ちゃんは、いつもより少し大胆です。

視線すら合っていない私の頬に、グイグイと紙コップを押しつけてきます。

はい、そうでした。

私は何でこんなことを考えているかというところ。

ちよつと皆が正気じゃなくなってきた、私も混乱してきて。

少しでも落ち着こうと、イロイロと思い返していたからでした。

では、もう少し時間を掛けることにしましょう。

ついさっきのことでも思い返せば、もう少し落ち着けるかもしれませんが。

ヒビキちゃんの爆弾発言のあと、少しだけ鍛錬をして解散しました。解散したとはいっても、ミチヒロさんだけは自主練習をしたようですが。

とてもではありませんが、あの空気で道場に残れるほど私は鈍感ではありません。

そして、解散した後は客間に戻って、交代でお風呂に入りました。本館のお風呂も同じらしいんですけど、温泉を引いているんです。ですから、昼でも夜でも、入りたいと思ったら好きな時に入浴できます。

普通のホテルに泊まるよりも、ちょっと贅沢させてもらっています。

とにかく、みんなお風呂に入り終わって、晩御飯をごちそうになつて。

昨日みたいに……Hな本はありませんが、昨日みたいに4人で話をしていました。

少し体重が気になりますが、みんなでお菓子をもち寄って話に花を咲かせる。

私は、数ヶ月前からは考えられないほどの幸せに包まれていました。

話の内容も、中高生らしくとりとめのないものです。流行りのドラマや、他愛もない日常のできごと。

その中でも、とりわけ盛り上がったのは兄弟の話でした。武蔵さんなんて4人兄弟だそうで、伊予ちゃんが羨ましがってました。

私は妹がいれば充分ですけど、一人っ子だと感じ方が違うんでしょうね。

とにかく、そういう話題になればミチヒロさんの話にもなります。そのときのヒビキちゃんは、普段よりも口数が多かったりしました。ミチヒロさんの話を聞くのも、話をするのも、本当に楽しそうでした。

私たちが彼女から聞く話も、自慢話ばかりだったくらいですから。ミチヒロさんの集めてるHな本のジャンルについては、聞かなかつたことにしました。

そして、ミチヒロさんの話になれば、当然先ほどの話にもなります。というよりも、ヒビキちゃんが、先ほどのミチヒロさんの対応に不満があったようで。

「あーあ、兄さんに絞め落として欲しかったなあ」

などと、本当にうらやましそうに言うので、少し引きました。何の前触れもなく突然呟くので、インパクトは絶大です。先の稽古で分かったとはいえ、やはりすぐには慣れません。

しかし、ヒビキちゃんの行動には矛盾を感じます。

ミチヒロさんを怒らせるようなことはしたのですから、わざと怒らなければいい。

いくらミチヒロさんでも、盗撮されていたと知れば悪鬼の如く怒るでしょう。

自分の妹とは言っても、怒りに任せて張り倒すくらいはするかもしれません。

……その場合、私たちも一緒に張り倒されることになると思いますけど。

「わざと先輩を怒らせてみればいいんじゃない?」

という武蔵さんの案には、私も賛成です。

理由は先の通り、怒って欲しいならそう仕向けなければいいということ。伊予ちゃんもそう思っているようで、他に何か言うでもなく反応を待っていました。

「あのね、小杉姉さん。それは『兄さんに叱ってもらっ』ってことだよ?」

「……まあ、そういうことになるわね」

少々歯切れは悪いですが、それで間違いありません。

それに1つ溜め息をついたヒビキちゃん。

いったい彼女が次に何を言うのかと構えていると。

「それじゃあダメなのよ!」

と、みんなが驚くほどの力で机を叩いて叫びました。
私よりも体が大きいので、すさまじい迫力があります。

「私が望んでるのは、お遊びみたいな痛みじゃないの！」

それだと、私から望んで殴ってもらってるってことなのよ!?

そんな予定調和みたいな暴力なんて、気持ちよくもなんともないの！

いい!?! 気持ちのいい暴力っていうのは、相手のことを考えない暴力！

肉親のことを考えての暴力や、してもらってる暴力なんて論外なんだから！

私が求めているのは、私が望んでもいないのに振るわれる暴力なの！
兄さんから暴力を振るわれないように努力して、必然性を高める必要があるのよ！」

1311

……マゾの人には、マゾの人なりの境地があるようです。

『やられたいからこそ、やられたくない』などと言っていますが、理解はできません。

ともすれば、これはもう哲学の域に入っているのではないのでしょうか？

マゾヒストの方の哲学も、いずれは世界的に有名になるかもしれないね。

「あー、思い出したらイライラしてきた！」

あのセリフを聞いたら、ミチヒロさんはもっとイライラすると思

ます。

それはともかく、やや理不尽とはいえ、ヒビキちゃんは随分とご立腹でした。

机の上にアゴを乗せて、可愛らしく唸り声をあげていました。1つしか変わらないとはいっても、やっぱりまだまだ中学生なんですよ。ね。

「もぉ！　こつなったら、姉さんたちにも付き合ってもらおうからね
！」

一応確認を取ったところ、ヤケ食いたいとのことでしたので。

その言葉に武蔵さんが賛同して、伊予ちゃんも苦笑いしながら同意して。

そついう流れもあって、私もヒビキちゃんに付き合っであげようと思っただけです。

やはり私は、ヒビキちゃんを甘く見ていたようです。

— — — — —
— — — — —
— — — — —

「キヤー！ 武蔵姉さん、イイ飲みっぷり！」

「あー、ありがとう。ほら、大和田さんも飲んで飲んで」

「つとつとつと、ありがとう武蔵さん」

こうなってしまうたら、際限なく飲み続けるかもしれません。

ヒビキちゃんが追加する飲み物は、気が付いたら増えている始末ですから。

このままだと、誰か倒れて大変なことになってしまおうでしょうし。

美樹彦さんは外泊されるそうですので、あとは山口さんでしょうか？

ですが、私は山口さんの場所を知らないのです、呼びに行くこともできません。

斉藤さんについても、ヒビキちゃんしか連絡先を知らないようですので……。

他に責任者となりそうな方は、ミチヒロさんしかいないわけですし。まだ理性が残っている私は、ミチヒロさんと呼ぶために席を立ちました。

今年の夏は、例年より北陸地方も暑かったりするんですけど。

部屋から出てもし少し涼しく感じるのは、私も火照っているからですね。

その、恥ずかしながら、カルアミルクという変わった牛乳をいただ

きましたから。

えっと、ミチヒロさんの部屋は、確かコチラでしたね。
大変なことになる前に、すぐに呼びに行きませんと。

こうなってしまったら、際限なく飲み続けるかもしれない。

ヒビキちゃんが追加する飲み物は、気が付いたら増えている始末ですの。

そうだ、ミチヒロさんの部屋はコチラでした。

大変なことになる前に、すぐに呼びに行きませんか。

幕間『変わった牛乳をいただきました』（後書き）

えっちい話を想像されました方がいらっしやいましたら、申し訳ありません。

我ながら紛らわしいタイトルと思いましたが、他に思い浮かばず…。

しかも、こんな調子の話ばかり書いてるような。

…話にメリハリがなくなってきたており、ちよつとスランプです。大きなイベントのない日常を書くのは、私にはなかなか難しいようです。

さて、愚痴も少々混じりましたが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、諸々お待ちしております。

また最近、私自身がスランプであるとも強く感じていますので、厳しい御意見についても承っております。もし感想として書きにくいようでしたら、メッセージとして送っていただけますと助かります。

蛇足ですが、本話は飲酒の描写がありますが、飲酒を始めとする犯罪を助長する意図を以って書いたものではありません。

ここからは、私事ですが。

ご存じとは思われますが、今、日本で過去に類を見ないほどの地震が発生しています。現在は東日本全域が被災地ともいえますが、明

日は我が身と心得ねばならないような状況です。もし地震を始めとした自然災害に巻き込まれるようなことがあれば、くれぐれも命を落とさぬよう慎重に行動してください。

また、実際に被害に遭われた方々は、物資の補給が不足気味のとことです。

コンビニの募金でもなんでもかまいません、なんらかの形で手を差し伸べて、協力をしてあげてください。

13話目『ムラムラするんですか?』

ソファに座りながらTV見て、パジャマ姿でアイスを食べる。

自室とはいっても、そこが応接間ならやるべきじゃないだろうね。でもさ、今は気持的にキツイから、だらしねえのも見逃してよ。

……シヨックだったよ。

まさか、ヒビキがあんな風に成長してたなんてね。

趣味嗜好は人それぞれだろうけど、なにもマゾにならなかつたって…

…。

次期当主としてイロイロと責務を負わされたストレスが原因なんだろうけどさ。

僕が悩んだところで、どうにもならないんだよね、そういうのは。

これ以上ヒビキが壊れないことを祈るくらいしかできないからなあ、ホント。

でも、4人を帰した後の個人練習ははかどつた。

自重だけど筋トレもしたし、あとは、手刀と貫手の練習もできた。

久々にサンドバッグ突いたけど、やっぱり定期的に突かなきゃダメだね。

指の力は上がってるのに、指でモノを突く感覚つてのを身体が忘れちゃってる。

手刀もスピードが落ちてるし……やっぱり、打撃に頼んない方がいいのかも。

ただ、ある程度はできないと、僕の強みがなくなっちゃうんだよなあ。

打撃が来るか組技が来るか分からないから、打撃も組技も生きてくるのに。

フエイントするにしても、相手がビビってくれないと意味ないし。川神に帰ってからでも、ちょっと打撃を練習し直さないと。

まあ、そんなことはどうでもよくて。

晩飯のあとは、こうやって応接間でダラダラしてる。

……別にいいじゃんよ、昼飯の後には勉強してたんだから。

クソつまらない世界史と日本史と、あとは好きな物理と数学。

天才じゃないんだから、チマチマ勉強しないとS落ちしちゃうからね。

いやあ、クーラーが効いた中で食べるバニラアイスも悪くない。

やるべきことが残ってないと、ホント心安らぐよ。

たるいクイズ番組だって、今は半笑いで眺めてられる。

パジャマも着ちゃってるし、あとは寝るだけだからね。

ん？

なんか、引き戸が開く音がしたような気が。

TVの音が大きすぎるからかも知れないけど、ハッキリ分かんないや。

まあ、強盗の類じゃなけりや、別に誰だつてかまいやしなないんだけどね。

……いや、そんなことはないか。

もしヒビキが来たんだつたら、それは困る。

また殴ってくれとか言われたら、どうしたらいいか見当もつかないいや、殴らないことは殴らないんだけど、その後がなあ。

そもそも、ヒビキとは飯の時にちよつと顔合わせただけで。

その飯時でさえ、アイツと言葉を1つも交わしてないんだよ。

気マズいっいたらありやしなくて……そんな空気の中で、どうしたらいいやら。

大して腹も膨れないうちに席立つちゃったから、アイスで腹膨らます羽目になるし。

……しかし、客人はバランスが悪いようだね。

壁に何度もぶつかりながら、コッチに向かって歩いてくる気配がある。

気配っていうか、ガンガン音が鳴ってるから丸分かり。

そんな状態で僕の部屋に用事があるとか、本当に何の用やら。

「ミチヒロさん！ ちょっと来て下さい！」

勢いよく応接間の扉を開けたのは、由紀江ちゃん……由紀江ちゃん！？
待った、ちょっと待った！ お願いだから、少しだけ落ち着かせて！

由紀江ちゃん、どうして上着を脱いでるんだよ！

薄緑のブラは似合ってると思うけど、僕に見せつける意味が分からない！

どうして僕の部屋に半裸で入ってくるんだ！

あと、靴を履いて部屋に入ってくるなら、パジャマの上も身につけて来い！

クソ、何がどうなってるのか全然分からないぞ！

やっと冷静に慣ってきた僕を混乱させるための罠か！？

いやいや、それこそ有り得んだろ。

僕を混乱させて得する奴がいない。

ってことは、これは由紀江ちゃんが素でやって酒臭っ！？

「あの、ヒビキちゃんがへべレケで、伊予ちゃんの紙コップがですね。

カルアミルクで火照って、とつても武蔵さんがグレープジュースを飲んでます」

支離滅裂な事を言いやがって……確実に酔ってるな！

つか、酔ってなかったら谷間なんか強調してこないだろ！

もし素面だったら逆に引くわ！

そんなもんより、由紀江ちゃんの吐く息の酒臭さの方が大問題だ。未成年が飲酒とか、ウチでやってもらっても困るんだよ。どうせヒビキが酒を持ち出したんだろうけど、それでもだ。悪いことなんだからさ、キツチリ注意して報告してくれないと。客人ではあるけど、ヒビキにとつちや年上

「ほら、ミチヒロさん、お願いですから急いでください！」

ええい、僕の思考に割り込むみたいにして胸を押しつけるな！
つーか、まさかとは思うけど、服着てないのに気付いてないのか！？
ああもう、本当に面倒臭いな由紀江ちゃんは！

とりあえず、しがみつかれてる腕を引きはが……引きはがして。
引きはがし……なんでこんな細腕なのに引きはがせねえんだよ！
もう酒臭いのは突っ込まないけど、僕の右腕がギシギシいつてるんだよ！

手首と肘を極めながら骨を軋ませるとか、器用なことしやがって！
胸の感触が柔らかいのか、本気でどうでもよくなるくらい痛いわ！

「由紀つ、由紀江ちゃん！ 肘と手首が極まってるから！」

「あ、そうなんですか？ 私、どうすればいいでしょうか？」

「腕を放して、僕から離れて、なんでもいいから服を着て！」

キョトンとした由紀江ちゃんは、少しだけ動きを止めた。
で、僕に指示されたことを、1つ1つ忠実にこなしていく。

ギリギリと極めてた肘と手首を放して、僕から一步距離を取って、でも、最後の『服を着て』っていうのだけは、服がないから出来ないらしい。

どうしたらいいかって、キョロキョロして着れる服を探し始めた。

まあ、そのまま帰られても困る。

途中で服を脱ぎ捨ててきたなら、変な勘違いされるかもしれない。適当に何か着てもらうのが無難だから……仕方ないか。着てないよりマシだね、きつと。

できれば、ジャケット取りに寝室に戻りたいんだけどさ。

半分目え据わった由紀江ちゃんに背中向けるとか、怖すぎて無理。

「ほら、とりあえずコレ着てよ」

応急処置だけど、パジャマの上を急いで脱いで、投げて渡す。

僕は胸板が厚い方だから、着れないことはないはず。

いくら由紀江ちゃんが、その、かなりの巨乳であったとしてもだ。

「あ、どうもありがとうございます」

渡してやると、案外あっさりと受け取ってくれる。

ただ、まだ酔っぱらってるみたいで、じーっと服を見つめて。小さく頷いてから、ようやく袖を通してくれた。

……酔ってるクセに、上手にボタン閉めるもんだ。

「じゃあ、そろそろ客間」

「この格好、裸＼シャツみたいですよ」

笑顔でなんてことを言うんだよ、この子は！

頭の中を透かされたんじゃないかってヒヤツとしたわ！

いや、よくよく考えりゃ、そんなことはないんだ。

レポートみたいなことするけど、さすがにそこまではできないよね。

なんていうか、それは武術家じゃなくて霊能力者とかの領分だし。

そりゃ、確かに裸＼シャツみたいだよ。

ブラさえしてなければ、まさにそういう状態なわけだしさ。

ただ、そんなセリフを彼氏でもない男に言うんじゃない！

「あの、ちょっといいですか？」

「……何？」

イライラしてきたから、とっとと本題に入って欲しいんだけどね。

酔っぱらってるとはいえ、由紀江ちゃん相手に無理強いはできないよ。

酔ってるせいで加減が効かなくて、逆に手酷い目に合うかも知れん。コレが武蔵だったら、適当に聞き流して話を進められるのに。

で、由紀江ちゃんが上目遣いに僕を見て、なかなかモノを言わない。沈黙してもらっても意味がないから、そろそろ言葉を促そうと

「私のこの格好見て、ムラムラします?」

……促そうと思ったけど、この子は何を言いやがるんだよ！
恋人でもない女の子に聞かれたって、答え辛いだけじゃなか！

「どうなんですか？ ムラムラするんですか?」

そりゃ……ねえ?

ムラムラするかどうかって言われれば、ムラムラするぞ。

高校1年生とは思えない体つきだし、性格は楚々としてるし。
出る所は出てて、引き締まる所は引き締まってて。

客観的に考えたとしても、とっても魅力的だよ。

僕が後先考えない人間なら、そのまま押し倒したいくらいには。

この子はホント、人付き合いが苦手なところ以外に悪いところないんじゃないか?

ムツリスケベなところはあるけど、見目もいいし器量もいい。

由紀江ちゃんが彼女だったとして、文句を言うヤツはいないだろうね。

「ねえミチヒロさん、ムラムラしますか?」

「あーはいはい、ムラムラするよ。ムラムラするから早く案内して

投げやりに答えてやったけど、由紀江ちゃんは嬉しそう。

にっこり微笑んで、僕の手を千切るくらいの勢いで引っ張って。

「はい！　じゃあ、すぐ行きましょう！」

なんて、デートにでも行くみたいに告げた。

あー……最近、こんな風に流されること増えたよなあ。

この子らだから流されてるのか、流されることに慣れて来たのか。もし後者だったとしたら、ノブさんに似てきちゃったのかもしれないね。

いや、ホントに不死川がいなくてよかった。

こんなところ見られたら、間違いなく殺されちゃうよ。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

「みなさーん！　ミチヒロさんが来ましたよー！」

由紀江ちゃんが客間の扉を開けると、もう酒臭かった。

なんか、正月に綾小路の連中が来た時くらい酒臭いん。

まあ、小便の臭いとかしないから、その辺は安心だけど。

この酒臭さだと、誰か1人くらい死んでるの覚悟しないといけないかも。

しかも、床に踏み場がほとんどない。

見たことあるようなビールの缶から、よく分からない空瓶まで。頭抱えたくなるくらい、部屋の中がグツチャグチャになっちゃってる。

「あー、港先輩だ！ つつ立ってないで、早くコツチに来なさいよー！」

コツチを指差しながら笑ってる大和田さんは、どう見ても素面じゃない。

顔をほんのり赤く染めて、トロンとした危ない目つきで。

パジャマのボタンを全部外して、真っ白なブラが丸見えの状態でケラケラと笑いながらコツプに口を付けて。

一気に中身を煽って『うえーふ！』と気分よさそうに息をついた。僕はもう、大和田さんを女性として意識できないかもしれない。

「兄さん兄さん！ ちょっと飲みすぎちゃったから、そのホテルで休もう？」

部屋に一步踏み込んだ僕の足に、もたれかかるみたいにタツクルしてくるヒビキ。

酔っぱらってるせいか、勢いも緩くてへ口へ口。

タツクルっていうか、僕の太ももに頬を擦り寄せてきて気持ち悪い。妹にしがみつかれるのって、こんなに気持ち悪いことだったのか。

というか、女の子がホテルで休もうなんてはしたくないことを……。

「港先輩、デリカシーに欠けます。ノックくらいしてください」

僕にそう告げて、グラスの中の紫色の……ロゼか赤のワインなんだろうなあ。

それを武蔵が一気に飲み干して、おつまみのナッツを口の中に放り込んだ。

一番マシって感じはあるけど、正直どうなんだろう？

僕と由紀江ちゃんが部屋に入ってくるなり、コッチにも視線は移してたし。

これくらいマトモそうなら、後回しにしても大丈夫かなあ。

あと、デリカシーとか言うなら、生理用品くらい片付けとけ。

さて、3人くらい明らかにヤバそうなんだが。

まずは、誰から寝かしつけようか？

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

よし、一番ヤバそうな大和田さんから寝かしつけよう。
大和田さん、俺のいない場所に指差して『港先輩だ！』とか言っ
ちやってるし。

このまま飲ませておくと、明日の朝には冷たくなってるだろ、コレ。
そうだったら、さすがに隠しようがないからなあ。

「えつとね、大和田さん。とりあえずコツチ来なさい」

「いやー！ 放してよー！ まだ飲むんだから！」

大和田さんが手足を振り回すけど、すぐに手首をキヤツチできた。
スピードも遅いし、軌道も単調、力も普通の女の子並み。

さらに酔っぱらってるとなれば、手首くらい掴むのは訳ないさ。
で、手首を掴んでから後ろに回り込んで、脇の下に腕を差し込んで
引きずった。

ありがたいことに、1番危ない大和田さんが1番運びやすい。
気持的にはヒビキが一番楽だけど、僕の足にしがみついているし。
下手に引きはがしてから寝かせるよりも、布団のある部屋まで引き
ずった方が楽。

みんなには悪いけど、3人分の布団で4人で寝てもらうことにしよ
う。

まあ、掛け布団くらいは追加してあげるから、我慢して欲しい。

にしても、ヒビキが以外と重たい。

いや、170cm近くあるから、軽いはずもないんだけど。

足絡めて引きずり倒そうとしてくるから、余計に重たく感じる。

「いやー！ 港先輩が胸掴んだー！」

「脇の下に手え突っ込んでるだけだよ！」

酔っぱらうと面倒臭いなあ、大和田さんも。普段は大人しくて奥ゆかしい子なのに……。

「やだやだやだ！ まだ遊びたいもん！」

なんて言いながら暴れようとする大和田さんを、そのまま寝室の布団に寝かせた。

とはいっても、布団の上に寝かせて、掛け布団を掛けて上げただけ。その掛け布団も、たった今、駄々っ子みたいに暴れて蹴り飛ばされた。

酔っぱらいの相手をするのは初めてじゃないけど、ここまで酷いのは初めてだよ。

まあ、服脱いだりしないから、ヒビキと由紀江ちゃんよりはマシかなあ？

……いや、シツカリ寝ついてくれる分、ヒビキの方がマシか。

で、次は由紀江ちゃんの処理に取り掛かりたいんだけど。

その由紀江ちゃんは、いつからかは分かんないけど、僕の隣でニコニコしてる。

他に何をするわけでもなく、突っ立ってニコニコしてるだけ。

さっきよりも明らかに様子がおかしいけど、今の僕には何もできない。

今でこそ、手元に刀がないから少しはマシだけどさ。
この状態で襲われても、僕にはどうしようもない。
むしろ、酔っぱらって加減が効かないから、殺されるかもしれない。
クソ！静まれ、由紀江ちゃんに付けられた頭の古傷の痛み！
今さらビビったところで、引き返せねえんだからな！

冷静に、冷静になるんだ、僕。

由紀江ちゃんが隣にいと、とにかく落ち着かない。
それに、なんかの拍子で攻撃される可能性も充分にある。
どうにかして由紀江ちゃんの動きを封じなきゃ。
力づくって訳にはいかないから……そうだ！

「えーっと、由紀江ちゃん。悪いけど、大」

「はい、任せてください！」

「……大和田さん、寝かしつけといて」

「はい、任せてください！」

やたら返事がイイのが不安だけど、信じるしかないか。
つーか、これでダメだったら僕にはどうしようもないだけどさ。
残り時間の見えない時限爆弾と一緒に、絶ツツツ対無理だから。

で、由紀江ちゃんは。

えーっと、大和田さんの隣に寝転がって？

大和田さんに抱きついて、何度か頭撫でてみて。

何度も頭を撫でくり回して、大和田さんがボーっとしてきて、いびきをかいて……凄いな、もう寝ついちゃったのか。……由紀江ちゃん、本当に妖術とか使えないんだよね？

そこはともかくとして、状況は一気に良くなった。他人の頭を撫でてるうちに、由紀江ちゃんも眠くなってきたらしい。

大和田さんと順番に寝息を立てて、そのまま動かなくなった。まあ、そのまま起きないでいてくれると助かるよ。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

さて、残る武蔵はどうしようか。

まだまだ理性はあるみたいだし、ちゃんと説明して寝かせようかなあ。

さっきからコッチ見て、なーんも言わないのが少し引っ掛かるんだよ。

それでも、一番マシなのは明白なんだけど。

いざとなっても、武蔵なら簡単に抑え込めるしね。

「おい武蔵。そろそろ寝ないと肌荒れるぞ」

「まだ若いですから、ちゃんとケアすれば大丈夫です」

僕をチラッと見てから、何かが入ってるグラスに口を付ける。僕が飲酒を止めに来たのを分かかって、まだ飲もうってのか。

そう、僕はコイツらの酒宴を止めに来てたんだ。

ってわけで、武蔵の手からグラスを奪い取ってやる。

で、武蔵はっていうと、いつもみたいにちょっとムツとした顔。

そういう顔にピツタリの目で僕を見据えて、かなりハッキリした声で言った。

「酔いを覚ましたいので、少し付き合ってもらえますか？」

「外の空気でも吸うの？ それくらいなら付き合っけど？」

なんとなしに言ってみただけなんだけど、武蔵の目に力が入った。何を思ったのか、由紀江ちゃんたちが寝てるのを横目で確認して。視線を天井に移して少し考えてから、僕を真っ直ぐ見つめる。僕の目の中を覗き込むような、本当に真っ直ぐな視線で。

「そうですね、外で話でもしましょう」

本当に酔っぱらってるのか疑わしくなるくらい、ハッキリした声で。

13話目 『ムラムラするんですか?』 (後書き)

えー、久々の更新となりました。

楽しみにしてくださった方々、本当にごめんなさいです。

言い訳がましいですが、どうにも執筆速度が上がらず……。

執筆を始めても、数行しか進まないような日々が続いています。

と、愚痴はここまでとしまして。

サブタイトルで期待された方がいらっしやいましたら、すいませんでした。

なんか、最近、こんなんで謝ってばかりの様な気がします……。

うーん……もうちょっとサブタイトルをひねるか、色気のある話を書けるように頑張ります！

では、いつものごとくですが、

ご意見、ご感想、ご要望など、イロイロお待ちしております。

また、若干スランプ気味なので、ズバズバ言っていたけると嬉しいです。

14話目『あの人を好きな、アナタが好き』

やっぱり、川神よりもコツチの方が空が近い。

やたらよく見える星のせいか、そんな錯覚する。

空の高さなんて、どこもそんなに変わりはないのに。

星がよく見えるのも、照明が少ないからってだけで。

それだけのことで、いちいち感動するのもバカらしい。

今は、武蔵とベランダにいる。

僕は柵に背中を預けて、ボーっと空を眺めてる。

ベランダの柵は高なくて、背中合わすとピツタリ肘が乗るくらい。

頑丈にできてるから、思いつきり体重掛けても安心だ。

ちよっと背骨が痛いけど、短い時間のことだから我慢してあげるよ。

武蔵の方は、柵に正面からもたれかかっている。

で、なんか正面向いてるけど、そっちには南天の木しかない。

赤くない南天の実なんて見ても、少しも面白くないと思うんだけど。

僕も武蔵も、さっきから一言も口を利かない。

思えば、武蔵との共通の話題なんてモンはないんだよ。

世間話くらいはできるだろうけど、それだって長引くもんじゃない。

お互いに趣味も何も知らなきゃ、そんなもんでしょ。僕も積極的に話そうとは思わないし、ちょうどいいさ。

……こういうシチュエーションなら、不死川と一緒にの方がよかった。この後輩は、3人の中で一番手が掛かる。

やたらと俺のこと待ち構えてるし、冷たくしても付き纏ってくるし。拳句の果てに、家族に僕のことを妙な形で紹介するし。

僕より頭が回るのか、イロイロと先回りされることが多いし。まあ、人間的には嫌いじゃないんだけど、不死川のことがあるからね。

正直なところ、そこまでベタベタされても困るんだよ。

「私、先輩に聞きたいことがあるんですけど……聞いてもイイですか？」

「聞くだけは聞くよ。答えるかどうかは、内容聞いてからね」

いきなり何を言うかと思ったら、ちょっと拍子抜けした。

聞きたいことがあるって、そんなもん、いつ聞いたっていいのに。まあ、口に出した通り、答えたくないことは答えてやらないけど。

コイツに限らず、他人に聞かれても答えたくないことは腐るほどある。

綾小路家と港家の因縁、俺が川神に来た目的、空手を辞めた理由。親父のことは気にならんけど、親父とお袋の馴れ初めは話したくない。

ノブさんや小西さんにだって、同じことを聞かれても答えたくない。

もし不死川に聞かれても、今の不死川には絶対に言いたくない。

でも、そんな心配は必要なかった。
やっぱ、俺って考え過ぎなんだろうな。

「先輩、ときどき口調が変わりますよね？」

「ああ、それが」

なんつーか、可愛らしい質問だった。

こんなことくらいなら、聞かれても答えてやれる。

それほど大きな理由もないし、聞かれてマズいことでもない。

あんまりたくさん質問されるのは困るから、話を引き伸ばさせてもらうけどね。

「それくらいは誰でもあるでしょ」

「一人称と立ち振る舞いまで変わるって人は、なかなかいないと思います」

「あー……まあ、よくある自己暗示みたいなもんだよ。
人前に出ることもあって、そういうときにトチらないようにしてんの」

要するにそれだけのことだ。

誰だって、人前じゃ猫かぶったりするだろ。

それと一緒に、俺だってするんだよ。

ほら、知られたところで問題もないし、知ったところで面白くもない。

世の中、そんな特別なことなんてゴロゴロしてないってわけだ。

「それでわざわざ『僕』なんて一人称使ってるんですね」

あー……コイツ、本当に頭回るんだね。

『僕』じゃなくて『俺』の方が素だっけって見抜かれてたのか。

そんなに長い時間一緒にいたわけでもねえのにな。

そんだけ良く見てくれてた、って思うべきか。

そもそも俺は、本心を隠したりすんのが苦手だね。

考えてモノ言うタイプじゃねえし、チマチマ考えんのも嫌い。

他人の機嫌取ってへーコラすんのが、俺の性に合ってない。

それでも、綾小路の連中にはいい顔しなきゃいけなかったから、まず、そういうのは俺じゃなくて『私』がやることにした。媚びへつらったり、機嫌とったり、愛想笑いしたり。

俺じゃない別人がやってるって思い込んで、我慢してやった。

そうでもないしないと、あんなゴミに頭なんて下げらんねえよ。

普段『僕』とか言ってるのも、まあ、似たような事情だ。

「あと、これは伝えておきたいことなんですけど」

っと、考え過ぎて口が動いてなかったか。

返事をした覚えはないんだけど……まあ、別にいいよな。

大きく息を吸って、大きく息を吐いて。

えらく真剣な顔つきで、ジッと俺を見てくるんだけどさ。

そんな風にしてたら、緊張してるのが丸分かりで。

こんな状況で緊張するほどの話なんて、それこそ限られてくる。

「私、港先輩のこと好きですから。不死川先輩よりも、ずっと好きです」

ほら、やっぱりコレだった。

武蔵が俺にしておきたい話なんぞ、コレくらいなもんだ。

……なんとなく分かってたが、直で言われるのは初めてだったっけか。

できれば、こんなこと言われる前に突き放したかったんだけどな。

どこで俺を好きになったかは知らんし、俺のどこがイイかもわからん。

俺よりマシな男なんてのは、川神学園にだけ見ても何人もいる。

葵はともかくとして……3年の京極先輩とか、ガクトくんとか。

ちよっと小者っぽいけど、入江だって女受けしそうな奴だ。

「料理だってできますし、勉強も運動も人よりずっとできます。スタイルもまだまだ良くなるでしょうし、顔だって悪くないはずです。」

家柄は不死川先輩ほどじゃないですけど、私の方が港先輩に尽くせます」

はー、そいつはよかった。

それだけ揃ってりゃ、男なんて選び放題じゃん。
自分で言うのはどうかと思うけど、顔だっけかなりイイんだし。
もうちっと柔らかくなりゃ、もっともって好かれる人間になるだろ
うよ。

俺じゃなくて、もっと他の連中を選べばいい。

不死川を好きな俺じゃなくて、手の空いてる連中を好きになればいい。

だから、わざわざ俺を選ぶ必要はない。

「で？ そんなこと言っても、俺の心は動かんぞ」

「分かってますけど……もし今を逃したら、本当に可能性がなくな
っちゃいますから」

「……はあ？」

今しかないって、どういう意味だよ。

そんなもん、いつ言ったって同じことなのに。

まるで『今はチャンス』みたいな言い方じゃんか、それ。

「不死川先輩からメールが来たんですよ。

港先輩に告白されたけど、返事もせずに逃げてしまったって内容
で」

……俺のメールは無視してるのに、武蔵にはメールしてたのか。

まあ、そういうシャイなところもカワイイけど、ちよっと辛いわ。

そういうことは、誰にも相談せずに解決して欲しかった。
つーか、よりによって武蔵に相談するってのが理解できん。
気が動転してたにしても、せめて大和田さんとかに相談してくれよ。

「不死川先輩は、告白の返事をすぐにしませんでした。
そんな人よりは、私の方がアナタをずっと好きだってアピールで
す」

ああ、そういう意味でチャンスって思ったのか。
不死川の返事を俺が待てないって、そう思われてたのか。

だとしたら、武蔵の神経疑うわ。

だって、好きな女の返事を待てないような奴が好きだってことだろ？
俺が武蔵の告白を受けるってことは、そういうことだ。

たかだか1カ月ごときの時間も待てずに、他の女になびいたってこ
とだ。

そんな奴、1mmだって信用できねえだろ。

ただ、残念なことに、武蔵の言ってることも論理的には分かる。
不死川が俺の返事を先延ばしにしたってことは、迷いがあるんだろ。
家の事情があるからってのも考えられるが、1カ月も掛かるもんか。
盆にも入ってないのに、不死川家が忙しいわけないんだから。

そんな不死川より、不利と知っても告白してきた武蔵の方が想い
が強い。

そういう主張は、分からないでもない。
でも、これは相手の想いの問題じゃなくて、俺の気持ちの問題だ。

とか考えてると、胸と腹に衝撃があつて。

どうしてか分からんが、気付いたら抱きつかれてた。

ボーっとしてたし、柵にもたれかかって素早く動けんかったんだが。

実戦だつたらと思うと、背筋が凍りそうになるくらいアツサリと抱きつかれた。

武蔵の顔が近い。

視線を下に移すと、すぐに目が合う。

そんな距離で、武蔵は何も言わずに俺を見つめてる。

「あー……つまり、どういう状況だ？」

俺の口からも、こんな言葉しか出てこない。

武蔵が何を考えてんのか、全然分からん。

いや、俺を口説き落とそうとして、ここまでしてるんだらうか？

どっちにしても、正面から抱きつかれて、こんな真剣な目で見られたら。

理由も確かめずに引きはがすなんてマネは、俺にはできない。

「いつかアナタを振り向かせてみせる。そついう宣戦布告です」

不覚にも。

本当に不覚にも、俺の心が動きそうになる。

だってコイツ、ちつとも酒臭くねえんだよ。
ってことは、初めから酔ってなかったか、もう酔いが醒めたか。
どっちにしても、今は素面ってことだ。

素面なのに、ここまで想いを真っ直ぐぶつけてくれる。

俺が別の奴を好きだと知ってても、それでも好きでいてくれる。
それが、嬉しくないわけがない。

コイツのことが、思わず好きになりそうになる。

「とりあえず、離れないと殴るぞ」

だから、俺は突き放さなきゃいけない。

俺が好きになってイイのは1人だけで、その1人は不死川心だ。
武蔵小杉を受け入れることは、俺にはできないから。

俺の心が揺らがないように、突き放さなきゃいけない。

コイツは嫌いじゃないから、早く諦めさせなきゃいけない。

そう思ってるのに、コイツは俺から離れてくれない。

俺が突き放したいと思えば思うほど、強く抱きしめてくる。

「無理ですね。先輩、優しいですから」

舐めやがって。

俺、左右の握力が100kg超えてんだぞ。

スチール缶だって握り潰せるし、人間の耳もつまんで千切れる。
特に鍛えてない奴なら、腹の肉を引き裂けるだろうし。

武蔵くらいの女の首だったら、3秒あれば余裕でへし折れる。

……いや、それはやり過ぎだ。

力を入れて突き放してやるだけで、それだけで充分だろ。

そう思つて、両手に肩を置こうとしたところで。

俺の両手から逃れるように、ふっ、と武蔵が離れる。

……なんか、手持無沙汰な感じになっちまった。

まあ、俺……僕の目的は達成されたから、それでもいいんだけど。

武蔵を目で追うと、両手を後ろに組んで。

イタズラっぽい顔だけど、どことなく優しいような。

不思議な顔で、僕に微笑んでた。

「意地悪はココまでにしておいてあげます」

俺の心を見透かすみたいに立ち回って。

どこまで本気なのか、あんなに情熱的に迫ってきて。

自分で言ってるいや世話ないが、本当に意地が悪い。

いきなり過ぎて言葉も出ねえよ。

「でも、もしですよ？ もし、不死川先輩にフられたりしたら」

「そのときは、まずは私を見てくださいね？」

それだけ言って、武蔵は足早に部屋に戻っていったんだが。そんなもん、俺にどうしろってんだよ。言いたいことだけ言って、コッチの話も聞かねえで。

ホント、どうしろってんだよ。

14話目『あの人を好きな、アナタが好き』（後書き）

えー、少々やつつけですが、こんな話でした。

好きな人が自分以外の誰かを好きでも、遠慮することないんですよ。

迷惑さえかけていなければ、好きなだけなら自由なんですから。

まあ、言うにしても、タイミングとかもっ……。

武蔵小杉が、ちょっとズルい女の子に見えてしまっかもです。

同じような文章を何度も書いていますが……。

ご意見、ご感想など、幅広くお待ちしています。

15話目 『逃げ帰った、その先で』

時刻は午後1時ちょうどくらい。

最高気温は、34度とか二ユースで言ってたっけ。

とにかく、クソ暑くて仕方ない。

涼しさで言ったら、川神よりも金沢の方がマシだった。

ん？ いつ帰ってきたのかって？

今日の朝に、新幹線乗り次いで帰って来たんだよ。

朝飯も食わないで、とつと荷物まとめてね。

あの酒飲み達がいつまでいるか知らないけど、もう付き合い切れないよ。

それに……武蔵と顔合わせ辛いし。

せめて時間が経ってくれないと、コッチが恥ずかしくて無理だ。

アイツの行動をもうちよつと噛み砕いて、その上で接さないよ。

いや、付き合う気はないんだけど、だからこそバツが悪いというか。

……とにかく、とつと逃げ帰ってきたんだよ。

で、月雄荘の前に来たんだけど、やっぱり月雄さんがいた。
麦わら帽子に、タンクトップに……そのカッコが好きなのかなあ。
芝刈り機は持ってないけど、代わりに桶と柄杓を持って。
通行人に迷惑にならないのか、澄ました顔して道路に打ち水してた。

でも月雄さん。

そこに打ち水しても、月雄荘は涼しくなりません。

「おお、港！ 久しぶりだな！」

「どうも、お久しぶりです」

敷地の前でつつ立っていると、月雄さんの方から声を掛けてくれた。
久しぶりっていつても、最後に顔合わせてから一週間も経ってない
けどね。

まあ、最近はよく顔見てたから、懐かしい感じはするかも。

「なんだなんだ、また背え伸びたか！」

「いや、さすがに伸びてないですよ」

まあ、月雄さんのお約束みたいなもんだ。

なんでか知らないけど、何日か会ってないと必ず言うんだよなあ。

いくら成長期つつつても、そんなポンポン身長なんて伸びないのに、それとも、そんなに身長が伸びたように見えるんだらうか。

全体的なサイズから見ても、月雄さんの方が圧倒的に大きいんだけど。

「ああ、そうそう！ お前に宅配来てたから、下駄箱の上に置いていたぞ」

「あ、すいませんでした」

おお、やっと来たか。

夏休みに入ったくらいに届くようになっていったのに。

モノがモノだから、手に入りにくかったのかもしれないけど。

「いや、それはいいんだけどな。やたら軽かったが、中身って何だ？」

「あー、それはちょっと言えないですね」

うん、ちょっと月雄さんには言えないなあ。

高校生がステロイド使うとか、さすがに許してくれなさそうだし。

アウトローみたいな外見してるのに、そういうところ厳しんだよね、月雄さん。

この間も『ユートピアとかいう薬が出回ってるから気をつける』とか言ってたし。

まあ、アウトローなのも見た目だけだし……イイ人なんだよね、きつと。

「なんだ？ 言えないモンでも通販で買ったか？」

「まあ、そんなところですね」

肩を抱きながら聞いてくる月雄さんに、苦笑いで返す僕。

まあ、嘘はついてないよね。

月雄さんには言えないモノを、買ったわけじゃないけど入手したわけだから。

本当のことを隠してるってだけで、嘘をついたわけじゃない。っていうか、月雄さんが汗臭くて早く離れて欲しい。

「あー、それとな。^{エンジェル}天使ちゃんがお前の部屋使ってるけど、イイのか？」

「は？ あの……誰ですって？」

えつと、エンジェルさん？

僕が聞き間違えたとか、そんなんじゃないよね？

カイさん以外に外人が住んでるって話も聞かないんだけど。

それに、そもそも僕の知り合いに『エンジェル』なんて人はいない。

名前からするに、少なくとも日本人じゃない。
あと、月雄さんが『ちゃん』っていったってことは、かなり若いはず。

僕くらいには若くて、外国人のエンジェルちゃん？
ますます思いあたらないんだけど……。

「だから天使ちゃんだよ。ほら、こないだ新しく入居してきた」
エンジェル

えっと、最近入居してきて、僕も知ってる人？

最近って言ったら、板垣一家くらいなもんだけどさ。

亜巳さん、辰子ちゃん、竜兵、天ちゃん。

誰もエンジェルなんて奇抜な……あ。

ちょっと待てよ。

僕、天ちゃんのフルネームは聞いたことないよね？

天っていうのが名前だと思ってたけど、身分証明書で確認したわけでもない。

ってことは、天ちゃん、エンジェルって名前だったのか。

あー……そりゃ、本名も隠したくもなるよね。

親御さんもさ、エンジェルはないでしょ、エンジェルは。

そりゃ、天ちゃんだって親が嫌いになるわ。

まあ、忘れても問題ない話だし、聞かなかったことにしておこう。

「いや、天ちゃんはイイですよ。合鍵渡してますから」

「そっか。お前がイイならイイんだけどよ」

うん、天ちゃんだったら問題はない。
天ちゃんなら、せいぜい冷蔵庫の中身が無くなるくらいだろうし。
竜兵だったら、冷蔵庫じゃなくてタンスの中身が無くなってるかも
だからね。

「んじゃ、水撒いたら買い物行っちゃうから。用があったら早くな」

「はい、ありがとうございます」

まあ、長話してても仕方ないから。

適当に話を切って、そのまま自分の部屋を目指した。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

「あん？　なんだ、ミッチーか」

なんていうか、もう慣れたよ。

こういう光景は、ここ最近で一生分は見た気がするから。

でもね、やっぱりはしたないと思うんだよ。

女の子はもっと、ちゃんとした格好で過ごすべきだと思うんだ。

男の僕でさえ、家の中でも服装には気を付けてるんだからさ。

女の子の天ちゃんは、もっと気を付けるべきだ。

とりあえず、靴を脱いで、部屋に入って。

ゲームやってる天ちゃんを避けて、部屋の隅にスポーツバッグ置いて。

天ちゃんの方を見ないようにしながら、頑張つて伝えてみた。

「天ちゃん、帰ってきていきなり言うのもなんだけどさ」

「んだよ、暑いんだからクーラー使ったっていいじゃん」

「クーラー使ってもいいから、服を着なさい」

天ちゃんは、パンツ一枚とシャツ一枚しか着てない。

しかも、シャツが白地で少し透けてるときたまんだ。

女の子が、彼氏でもない男の部屋でする服装じゃないでしょ。

僕の部屋にゲーム機を持ち込んだことについては、もう気にしない。

「えー………服着るのメンドイ」

アレだ、天ちゃんを説得しようつてのが無理な話だったんだ。

こないだだって、作り置きの亜巳さんの晩飯まで食っちゃってたし。

そんなツツコミは心の中に封じ込めて。

ガスコンロの横を確認すると、ホントにあった。

ちよっと大きめの紙袋っていうか、書類袋かなあ。

その中に入ってるモノを……なんで開封したあとがあるんだろ。

月雄さんが開けてないってことは、まさか、天ちゃん!?

「天ちゃん……コレの中身、飲んでないよね?」

「別に袋開けてねーし、中身も飲んでねーよ」

よし、天ちゃんが袋を開けたのは間違いない。

だから、僕は食器棚から大皿を出して、急いで袋の中身をブチまけた。

いや、いくら天ちゃんでも、薬っぽいものを勝手に飲むとは思わな
いけどさ。

もし飲んでるとしたら、身体に悪過ぎる。

アナポリックステロイドとか、成長期の女の子が飲むもんじゃない。

で、袋が空になったところで、大皿の上を確認したんだけど。

未開封の薬品ビンが4つと、同じ塗り薬が2つ。

ビンは2種類あって、片方の薬は3つまとめてビニールがかぶさ
ってた。

まあ、ビニールが破られてないから、薬の中身までには手を付けな
かったみたいだ。

……いやあ、久々に焦ったわ。

同梱されてた紙を見ると、薬の名称と作用・副作用が書いてある。

えーっと、ちよっと肌荒れるから、荒れた場所に薬塗るのか。

飲むモノは、ビンの数の多い方が食後に2錠、少ない方が1錠。

ビンの多い方の副作用は、軽い発熱と肌荒れ、血圧の上昇、情緒不安定。
ビンの少ない方は……なるほど、副作用を軽減する薬じゃねーの。
薬の種類も数もあってるから、まあ、中身を抜いたってこともない
でしょ。

「なあ、ミツチー」

「ん？ どうしたの？」

内容を確認して、今日から早速飲もうとか思ってたんだけど。
いきなり天ちゃんに話しかけられて、ドキツとした。
コレじゃまるで、僕が悪いことしようとしてるみたいだ。
いや、健康のこと考えたら、間違いなく悪いんだけどね。

「いや、別に大したことじゃねーんだけどさ」

『大したことない』と『正直に言ったら許してあげる』ってフレイズ。

女子が口にした場合、これ以上信用ならないものはない。
こういう場合は、なんか意図があったりするもんだ。
大抵は大したことだし、正直に言っても許してくれない。

「最近、ユートピアって危ないクスリが広まってんだってさ」

「危ないクスリ……覚せい剤とか、そういうの？」

「よく分かんねーけど、たぶんそういうの」

なんか、最近やたらと聞くんだよ、そのユートピアっての。ネーミングがネーミングだし、トリップ系のクスリかなあ。

しかし、ユートピアねえ。

どういうクスリかわからないけど、またヒネた名前つけたモンだ。現代社会に対する反抗心とか、現実逃避の願望が強いのかなあ。

でも、販売者がトマス・モアって名乗ってたら、笑ってあげてもイイかもね。

……まさか天ちゃん、勘違いしたんだろうか？

僕宛ての封筒の中身見て、妙な薬とも思ったのかなあ。

まあ、薬の概要読んでなきゃ、そう思っても変じゃないか。

「そついうの使ってラリってるバカが増えてるから、気をつけるよ」

……とか思ってたけど、そういうわけじゃなかったみたい。

なるほど、二次被害の方を気にしてくれてたのか。

ああいうクスリ使ったバカって、痛みじゃ倒れないもんなあ。

それに、刃物とかも普通に使ってくるだろうし、気が違ってるし。

いきなり襲ってくることもあるだろうから、確かに気を付けないとね。

仲良くなったのは最近だけど、どうも板垣一家はそういうのに詳し

いらしい。

よくよく思い返すと、親不孝通りで竜兵の名前を聞いた記憶がある。この年齢で、不良やチンピラ相手でも顔が利くとは思えないけど。それでも、そういうのと裏事情に詳しいのは、無関係じゃないと思う。

だからって、僕の態度が変わるわけじゃない。

天ちゃんを筆頭に、板垣家のみんなが僕に何かしたわけじゃない。そりゃ、竜兵のアプローチを無視するのが面倒だったりするけど。僕に敵意を向けてくるわけじゃないんだから、嫌いになる必要もない。

それに、そんな細かいこと気にしてたら、もうとっくに胃袋潰れちゃってるよ。

――

まあ、そのあと色々話したんだけど。

辰子ちゃんは警備員の仕事で、亜巳さんは珍しく昼の仕事。

竜兵はシフトが昼からだったみたいで、僕とスレ違ったらしい。

晩飯は鳥ミソ鍋にでもしようと思っただけ……別にいいか。
竜兵の分だけ分けておいて、温めたら食べるようにしよう。

そういうわけで、今は野菜を切ってる。

白菜と長ネギ、色どりのにんじんと、エノキと豆腐。

メインはもちろん、冷凍庫に眠ってた4kgの鳥肉たち。

切り分けて冷凍してあったから、食事前には自然解凍できる算段だ。
あとは、この肉と野菜を、実家からくすねてきた鳥野菜ミソで煮込むだけ。

ちなみに、やっと天ちゃんが服を着てくれた。

つつても、ベランダに干してあったジャージを着ただけだけ。

僕のベランダにジャージ干してるってことは、僕の部屋で生活して
たんだらうか？

……よく考えると、キレイにしてあったベッドがグチャグチャだし。
合鍵は渡したけどさ、そこまではちょっと勘弁して欲しかったかも。
まあ、僕が前もって言うておかなかったのが悪いんだけどね

「あのさ、ミッチー」

「なあに？」

長ネギが終わって、ニンジン切ろうとしてたところで。

天ちゃんが、コッチも見ずに声をかけてきた。

コッチは、わざわざ包丁止めて振り返ったのに……まあいいや。

「前から気になってただけどさ、その、そこにある猫のぬいぐるみ……」

天ちゃんが指差すのは、テレビ台の上に乗ってる猫のぬいぐるみ。

『まるにゃんこ』っていうマスコットのプライズだ。

こう、まんまるとしたフォルムがたまらない三毛猫だね。

気持ちが沈んだ時とかに、なんとなく撫でたりして和んでる。

ちなみに、高さが40cm近くある大きいぬいぐるみ。

『寂しい夜は抱っこするにゃ!』とかいうタグが付いてたけど

ゴツイ高校生男子としては、アレを抱きしめる勇氣はなかった。

で、飾ってあったんだけど……正直、ちょっと持て余してたんだよね。

かわいいんだけどなあ、まるにゃんこ。

「欲しいんだったらあげるよ?」

「え!?! マジで!?!」

僕があげるって言ったたら、初めて天ちゃんが振り返った。

本当に嬉しそうな顔で、文字通りに目を輝かせてる。

そんなに欲しかったなら、もっと早く言ってくればよかったのに。

「まあ、男が部屋に飾ついても仕方ないからね」

とか言ってみたけど、天ちゃんは聞いてない。

ぬいぐるみを抱きしめて、なんか奇声をあげながら転がり回ってる。

さすがに下の階に響くんじやないかなあ、とか思ったけど。
下の部屋に住んでるのはノブさんだから、気にしないことにした。

「へへっ！ 実はさ、ゲーセンで狙ってたんだけど全然取れなかつたんだよ！」

気持ちよさそうに頬ずりしてから、また転がり始める天ちゃん。

これだけ気に入ってくれたなら、あげた方としても気分がイイよね。こうやってみると、やっぱり天ちゃんも可愛らしい。

たまに口が悪くなるけど、年頃の女の子なんだよなあ。

ヒビキにも、こんな時期があっただよね。

誕生日になんかプレゼントすると、控えめにだけど嬉しそうにしてさ。

……やだ、思い出したら、目から塩味の液体が出てきそうになっちゃった。

「そつだ！ なんか手伝ってやろうか？」

なんて言うってくれるけど、手伝ってもらうこともない。

野菜を切るくらいは僕だけで充分だし、鶏肉も解凍待ちだし。

洗い物が溜まつてるわけでもないし、本当に仕事はない。

でも、せっかくの天ちゃんの好意を無駄にしたいくないから。

「そつだなあ……じゃあ、あとで食器並べるの手伝ってもらおうかな」

「おじよー！」

簡単な仕事だけど、この辺のことを手伝ってもらうことにした。

さあ、嫌なこと思い出して、いちいち沈んでる場合じゃないぞ。

ニンジン切って、エノキの土の付いたところ切り落として。

土鍋を洗ったり、米を炊いたり、やることたくさんあるんだから。

15話目『逃げ帰った、その先で』（後書き）

えー、ちよつとペースを上げて、早々に川神に帰ってもらいました。やや強引でしたが、これ以上実家に残っててもらっても仕方ないの
で……。

そして何より、実家の話を切り上げると決めた途端にペースアップ
した自分が情けなかつたり。
もうちよつと計画的にモノを書けるとイイのですが……。

今回は、川神に帰ってきただけという話でした。

ついに天ちゃんの本名が知れてしまいました。敢えて何も言わな
い主人公です。

また、高校生にしてステロイドを使うという暴挙にも出ました。

……もしお若い方がいらつしやいましたら、絶対にステロイドを使
わないでください。

正直、それで得られる効果より副作用の方が大きいと思います。

作品に関する、ご意見、ご感想、ご要望など、諸々お待ちしており
ます。

しかし、以下のようなご要望については受け付けませんので、ご容
赦ください。

『今後の物語を、すべて綾小路麻呂の視点で描写』

『メインヒロイン：板垣竜兵』

『尾形小路ルート解禁』

『なんだか知らんがとにかくよし！』

『俺たちの戦いはこれからだ!』

16話目『ロッカールームのまにまに』（前書き）

なんとなーくタイトルの分かった方……。

おまたせ！ アイステーしかなかったけどいいかな？

16話目『ロッカールームのまじまじ』

さて、ステロイドを使い始めて1週間が経った。
効果の方はっていうと、コレはもう上々。

脂肪も付いてるけど、目に見えるくらい筋肉も増える。

一週間で4kgの増量……正常じゃないよなあ、さすがに。

まあ、せっかくステロイド使っても、筋トレしなきゃ意味がない。
そういうわけで、ここ最近は毎日ジムに来てる。

大波スポーツ川神っていう、けっこう手広くやってるジムだ。

なかなかイイとこだと思うよ。

タオルとかロッカーの貸し出しは基本だけど、何より広いのがイイ。
器具の数や種類も豊富だし、スタジオでやってるエクササイズも面
白い。

それに、契約プランもイロイロあるから、使い勝手も抜群だ。

僕は……実は、駒田さんとカイさんの推薦があつてね。

普通の人たちじゃなれない、ゴールド会員つてことになってる。

20時過ぎると、会員専用の部屋が使わせてもらえるから便利なん
だよ。

まあ、使える道具は一緒だけど、うるさいビジターがいないのがイ
イ。

細っこいだけで口ばっかのカスとか、正直なところ邪魔なんだよな
あ。

まあ、夏も後半に入ったから、そういう連中も減ってくる。そう解釈して、今日もジムで体を追い込むことにした。

で、シャツとハーフパンツに着替えて。

ウォームアップから始めて、やっとスクワットが終わったところ。

80kgで軽く慣らしてから、セット毎に20kgずつ重量を上げて。

140kgからは回数を減らして……今日は240kgに挑戦。降ろす時に少し補助してもらったけど、なんとか達成できた。

うーん……僕も普通じゃないレベルだと思っただけだなあ。

つと、そうそう。

走り込みもそうだけど、足を鍛えるのには理由がある。

まあ、格闘技の基本が下半身にあるからってのもそうだけど。

ガードポジションに入った時に、試合を上手にコントロールしたいから。

もしくは、思いっきり両足で締め付けて、肋骨を全部へし折ること

もできる。

それに、タックルのスピードとか、スタンドレスリングの粘りが違ってくる。

そういうわけで、脚力強化は必須なんだよね。

それに、今日は1人で来てるわけじゃないし。

いつもよりキツめのトレーニングができるってわけだ。ただ、一緒にジムに来たってというのが。

「ほら、スポーツドリンク」

「氣い遣ってもらってなんだけど、自前のヤツがあるから」

今日は、竜兵と一緒に来てるんだよ。

さすがにジーンズとタンクトップじゃなくて、上下黒のジャージを着てる。

なんでも、竜兵のヤツもココの会員らしくて。

それで、たまたま暇な時間が被ったから、一緒に来ることになった。まあ、さすがに妙なことはしてこないと思いたい。

竜兵が渡してくれたスポーツドリンクは、ボトルタイプの水筒だ。

もちろん、そのボトルは普段から竜兵が使ってるヤツ。

つまり、竜兵がいくらでも細工をできるってこと。

回し飲みで間接キス狙いならまだしも、ヤバい物質が入ってる可能性も否定できない。

そう、怖いのは、ヤバい物質が入ってる場合だ。
僕の貞操とか純血が危ないっていうのもそうだけど、死ぬかもしれないから。

だって、一週間で筋肉がメキメキ増えるステロイド使ってたよ？
そんな危ないモノ使っついて、内分泌系に影響する薬を併用する。
冗談抜きで、心臓止まったりして死ぬかもしれないんだよね。

「しかし、やけにモヤシが多いな」

「夏の後半に多いってのは珍しいよね」

今は、休憩用のベンチに座りながら、ジム全体を見回してる。

竜兵の言う通り、ゴボウみたいな手足した連中がたくさんいた。

軽い重量のままガツタガタのフォームでトレーニングしてるヤツとか。

あとは、鏡の前でシャドーのマネごとしてるヤツ。

他には……なんかガン垂れてるだけで、何もしてないヤツ。

トレーニングジムなのに、何しに来てるか分からないヤツが多過ぎる。

「まあ、僕らは僕らでトレーニングしてりゃいいじゃん」

「そりゃまあ、その通りなんだが……貧弱な奴を見るとどうもな」

竜兵の気持ちはよく分かる。

分かるけど、いちいち気にする問題でもない。

そういう奴らは虚勢が精一杯だから、ほっとけばいいんだよ。勘違いして絡んできたら、人間サンドバッグにしてやるさ。

「そう言や、ランキングは見たか？」

「見たよ。相変わらずトップ5が狂ってるよね」

大波スポーツジム川神には、そういうシステムがある。

モチベーションアップのために、各種目の重量トップ10が記録されてる。

その中でも異彩を放ってるのが、トップ5の記録でね。

明らかに世界記録に近いが、軽く超えてるのはつかでさ。

こういうのがゴロゴロしてると思うと、頭痛くなってくるよ。

世の中って、ホント、バケモンばっかだ。

「なんでもよ、ベンチでトップのヤツが『ジムの王』とかほざいてるらしいんだ」

「いや、いいんじゃない？ 僕の倍近くの重量持ち上げるんだし」

330kgとか、僕の知ってる世界記録以上なんだけど。

しかも、コレ出したのがクトくんなんだよなあ……。

ちゃんとランキングのところに『シマツガクト』って書いてあるもん。

乗用車を1人で持ち上げられるとか、けっこうマジな話なのかもね。

「でもよ、納得いかねんだよ。あんなデカイだけのヤツがジムの王だなんてよ」

「……えーっと、顔知ってるの？」

だとしたら、ちょっと面倒くさい。

僕とガクトくんには、そこそこの親交があるんだ。

もし竜兵がケンカ売ったりして、僕と竜兵が知り合いだって知れたら。

それこそ、ガクトくんは僕と距離を置くかもしれない。

とか思ってたら。

「デメエら、もういっぺん言ってみろ！」

叫び声が、ジムの中に響き渡った。

まあ、野次馬根性もあつた。

他人のケンカつてのは、見てて面白いからね。

それでも、今回はそういうつもりで来たんじゃない。

面白いとかそういうのじゃなくて、声の主に覚えがあつたから。

「何が使えねえ筋肉だ！ さっきからコツチ見てニヤニヤしやがって！」

案の定、ハーフパンツとタンクトップのガクトくんがいた。

鬼のような形相で、ニヤケた面したモヤシの襟首を掴んでる。

普通のヤツだったら、怖くて足が震えるようなシチュエーション。

それなのに、モヤシ……モヤシたちはニヤニヤしてるだけ。

常識知らずというか、怖いもの知らずというか。

ガクトくんに勝てるつもりなのが、もう信じられない。

「だって、使えないじゃん。喧嘩したら俺らの方が強いよなあ？」

襟首を掴まれてるモヤシは、他のモヤシにニヤつきながら聞いた。

で、他のモヤシ連中は、ガクトくんをバカにするみたいに小さく笑つた。

ああ、細い方が強いって妄想の信仰者か。

そりゃ、コイツらからすれば、ガクトくんは弱そうに見えるだろうね。

ただ、スチール缶握りつぶすようなヤツに、どうして勝てるって思えるんだろ？

見たところ、格闘技の経験も全然なさそうだし。
……やっぱ、現実と妄想の区別が付いてないんだろうなあ。

「なんだ、ミチヒロ。加勢するのか？」

「騒ぎが起こらないようにすんの」

そう言いながら、僕はガクトくん近づいてった。

竜兵が僕を呼び止めるけど、今回は無視。

このままほっとくと、ガクトくんが可哀想なことになるからね。

「おおい、ガクトくん！ なにやってんの？」

声をかけてやると、ガクトくんはすぐに気付いた。

僕に声を掛けられて、少し冷静になったんだろうね。

襟首を掴む手を離しはしないけど、鬼気迫るような雰囲気はなくな
った。

「いや、コイツらがよ、俺様の筋肉が使えないなんて……」

「あー、はいはい。そういうことね」

まあ、丸聞こえだったから、全部知ってるんだけどね。

ガクトくん冷静になってもらったために、コレは必要だったんだよ。

ガクトくと僕が知り合いで、僕の体も大きくて。そのおかげか、モヤシ連中が僕を見てニヤついた。きつと、僕の体を見て勝てるって思ったんだろうけど。

こういうシチュエーションは、僕の方が笑いたいくらいだよ。

僕は、ガクトくとモヤシ……ジャージモヤシの間に割って入る。モヤシに触ると殴り合いになりそうだったから、ガクト君を押しつけて。

まあ、他の奴らがタンクトップで、正面からだ絞めにくいからね。殴ったり蹴ったりすれば簡単だろうけど、それじゃ意味がない。穏便に、問題にならないように終わらせるために来たんだから。

「何？ お前が相手して」

全部言わせない。

左手で相手の左襟を掴んで、右手で奥襟を取る。

で、アゴを下げられるより早く、反時計回りに右腕に頭を跨がせる。最後は、左手首と右手首で十字をつくって、相手の頸動脈を圧迫して。

正面から『十字絞め』を極めて、1秒で落とした。

そのまま両手を離すと、ジャージモヤシは膝から崩れ落ちた。いつもなら、こっから頭踏みつけてトドメ刺すんだけど。

まあ、穏便に終わらせるのが目的だから、そこまではしない。

「あれ？ 急に寝ちゃったみたいだけど、どうしたのかな？」

残ったタンクトップモヤシたちは、何が起こったのか理解できてないらしい。

僕が何かしたのは分かっているだろうけど、それ以上のことは分かかってない。

でなきゃ、絞め落とされた奴をボーっと見てるはずがない。

2歩も踏み込めば、僕の手が届く距離にいるんだから。

「ねえ、君らは分からない？ どうしてこの人が寝ちゃったのか」

今度は、僕がニヤニヤと笑う番だった。

筋肉も何も関係なく、一瞬で力の差を見せつけて。

まだまだ余力があるってアピールするために、これ見よがしにニヤついていた。

「いやあ、喧嘩強いらしいから、ちょっとは期待してたんだけどなあ」

僕の目論見通りなら、ココらで逃げるか何かしてくれるはずだったんだけど。

委縮したのか、現実が受け入れられないのか、誰も動かなかった。

……本末転倒だよなあ、これじゃあ。

まあ、ガクトくんが暴力振るわずに済んだから、結果的オーライでイイか。

「まあいいや。邪魔だから、早めに片付けといてね。」

……ほら、ガクトくんもさ、ちょうどいい機会だから休憩しようか」

そう言つて、ガクトくんを休憩スペースに誘導して。

モヤシたちには悪いけど、とつと引かせてもらつことにした。

まあ、今回の件で『相手が逃げた』とか言ってるようだったら、そのときは……まあ、膝でも貰つとけばいいか。

「いやあ、助かったぜ！ 俺様としたことが、熱くなり過ぎちゃまった」

「気にしないでよ。ガクトくんには世話になつてんだから」

「おいおい！ 俺様、お前に世話した覚えがないぞ？」

「それじゃあ、1つ貸しにしとくよ」

休憩スペースのベンチに腰を下ろすと、すぐにそつという話になった。まあ、ガクトくんの性格ならそつだろうね。

何か借りができたとして、それを無視せずにはいられない。基本的にイイ人っていうか、人のイイ奴だからなあ。気は乗らないけど、今回はそこを利用させてもらおう。

「しっかし港、お前、いつの間にかデカくなったな」

「まあね。夏は筋トレに力入れてるし、カロリーも多めに取ってるから」

「……いや、気付いてるね。」

いくら1カ月以上あったとしても、ここまで身体は変わらない。経験的にも、論理的にも、ガクトくんには分かっているはずだ。

僕の口から確証を取りたかつたんだろうけど、そこは黙っておきたい。

ズルしてるようなもんだし、それに、心配するかもしれないから。

まあ、そんなことはいいんだよ。

それより僕は、約束を1つ取り付けなきゃならない。

「あ、そうだ。ガクトくんに1つ頼みごとがあるんだけど……」

「おお、いいぜ。俺様に出来る範囲のことだったらな」

うん、やっぱり大丈夫そうだ。

僕の意図に気付いた様子はない。

それに、僕だってガクトくんが無茶をいう訳じゃないんだ。

あー……でも、ちょっと嫌がられることかもね。

「いやね、クリステイアーネの見舞いに行きたいんだけどさ。

風間ファミリーの人たちに話を通さずについてわけにはいかないでしょ？

だからさ、僕が見舞いに行こうとしてるってこと、伝えてもらえるかな？」

ガクトくんが口を挟めないように、一気に言葉を並べる。

僕のことを想像される前に、全て話してしまう。

まあ、意思っていうか、意図に近いんだけど。

悪い方向に考えられる前に、僕の言葉を事実として認識させる。

それを聞いたガクトくんは、少しだけ眉をひそめた。

それで、ジムの中にある時計を見るフリをして、僕の言葉を考える。

何故そんなことを言ったのか、それが本気なのか、どういう思いがあつてのことか。

もし言葉通りだとして、それを風間ファミリーの仲間に伝えるべきか。

でも、すぐにガクトくんは気付く。

僕は見舞いに行くつもりだってことが、僕の言葉から分かったはずだ。

さつき僕は、見舞いに行く許可を取ったわけじゃない。

『見舞いに行くから、そう伝えておいてくれ』と、そう言っただけ。ただそれだけのことを、ガクトくんが断るはずがない。

「……まあ、それくらいならいいけどよ」

ほら、やっぱり。

少し困った顔はしてたけど、それでも引き受けてくれた。

人の良さに漬け込んだみたいで申し訳ないけど。

後でややっこしいことになるくらいなら、先に言っという方がいいからね。

お互いのためってことで、納得しておいて欲しいなあ。

「おい、ミチヒロ！ コイツぁ誰だ？」

1つ片が付いたところで、険しい顔をした竜兵がコツチに寄ってきた。

あー、いけない、すっかり忘れてたわ。

うわ……怖っ！ 竜兵があんな顔してんの、初めて見たんだけど。

気迫っていうか、プレッシャーっていうか。

そういうのが身体の端々からジワジワと染み出してる。

いや、悪かったけどさ、ほったらかしにしたのは。

そこまで腹立てられると、とてもじゃないけど声も出せない。

思わず身構えそうになるくらい、今の竜兵は殺気立ってる。

「誰って、高校の」

「俺よりもソイツの方がいいっていうのか!？」

「竜兵……ちょっと頭冷やそうか？」

前言撤回。

苛立ちの理由が分かったら、全然怖くなくなった。

つか、人のたくさんいるところで妙なこと言いやがって！

ジムの中に知り合いがいて、変な噂流されたらどうするんだよ！

ガクトくんなら話せば分かるだろうけど、他はどうにもならねえよ！

ああ、もう！ 僕はノーマルなんだから、巻き込むんじゃない！

「な、なあ、港。俺様、席を外した方がイイのか？」

まあ、仕方ないか。

ここは1つ、ガクトくんにも巻き込まれてもらおう。

どうやら竜兵は顔を知ってるみたいだし、煽れば突っかかってくれるはず。

トラブル解決しといて、またトラブル呼んだみたいで申し訳ないけどさ。

ホモって噂流されるよりは、遥かにマシだからね。

「あのさあ、ガクトくん。勘違いしたまま逃げ」

「逃げてんじゃねえぞ！ デカイだけのゴリラ野郎が！」

僕がガクトくんを呼び止めようとしてるときに、急に叫び出す竜兵。
……よっぽどガクトくんのが気に入らなかつたみたいだね。

「ああ！？」

ガクトくんもガクトくんで、竜兵にメンチ切りながら立ち上がった。なんていうか、もうちょっと穏便にって訳にはいかないんだろうか？ いや、高校生なわけだし、血の気が多くなるのも分かるんだよ。分かるんだけど、程度とか限度ってあるよね。」

「デカイだけでカットの悪い身体しやがって！

そんな身体でジムの王を語るんなぞ、100年早えんだよ！」

「文句があんなら、パワーで俺様に勝ってから言いやがれ！」

「上等だコラ！ どっちが上かハッキリさせてやる！」

僕が止める間もなく、あっという間に2人はロッカールームに。

しかも、普通会员用じゃなくて、ゴールド会員用の。

……ガクトくん、ゴールド会員だったのか。

まあ、どっちかが出てくるまでは、ジムにしようと思ったんだけど。トレーニングが全部終わっても、どっちも帰ってこなかったから。時間ももつたいないってことで、とつとと失礼した。

後日、ガクトくんから『竜兵とかち合わないようになしてくれ』って電話が来たけど。

それはまた、別の話ってことで。

16話目『ロッカールームのまにまに』（後書き）

はい、誰も得をしない男ばかりの話でした！

『なんでこんなん書いてるんだろ？』と、少々自己嫌悪。

どうせなら、女の子がいっぱい書きたいのに！

さて、夏休み編ですが、意味のあるストーリーは次で終了です。

リアルな夏休みに入る前に、なんとかコッチの夏休みも終わりそう
で……。

未消化なイベントや、やりたかったことができなかつたりもしまし
たが。

夏休みでなくともどうにでもなる話も多かったので、余力とチャン
スがあれば頑張って書かせていただきます。

この作品の、ご意見、ご感想、誤字脱（ry

……約1カ月もお待たせして、申し訳ありませんでした。

17話目『それは誰のせい?』

川神に帰って来てから、今日でやっと2週間。

この2週間は、勉強もせずにトレーニングばっかしてた。

朝は走り込んで、飯食って、そのまま小西さんのジム行って。

2時まで身体動かしたら、少し休憩してからトレーニングジムに。みっちり筋トレして、帰ったら飯食って、いつもより早く寝て。

生活の中心をトレーニングにして、とにかく鍛えまくった。

これだけ短い間隔で筋トレしたのは、無知だったガキの頃以来だよ。

まあ、僕が目論見通り、身体は大きくなった。

ここ2週間で体重が7kg増えて、そのほとんどが筋肉なんだよ。

いや、普通はさ、2週間で7kgとか脂肪くらいでしか増えないじゃない。

それなのに、体重が増える前よりも筋肉質な体になってる。

脂肪も付いたけど、まあ、夏休み中には落とせるレベル。

……こんなに上手く行ってるのが、逆に不安だ。

なにより、今さらだけどさ、ステロイドの出所が不安でね。

普通に入手できないからって、頭下げて頼んだのは僕だけどさ。

何を専攻してるかも分からないんだよなあ、あの人。

いや、何年か前は機械工学専攻してたはずなんだよ。

でも『ブラックホールの優雅な日常』って論文、機械工学と関係ないよなあ。

……ますます僕の命が危うくなってきた気がするけど、さすがに大丈夫でしょ。

僕が死んだら、真弓姉さんだって困るだろうしね。

さて、それはそれとして、今日は気合が入ってる。

っていうか、気合を入れなきゃならない。

もしかしたら、不死川と初めて遊びに行った時くらい気合入ってるかも。

紺色のジーンズに、滅多に着ない白色でプリント入りのTシャツ。

室内で羽織るためのクリーム色のジャケットは、腕に引っかけ、僕に似合ってるとかじゃなくて、清潔感に気を配ってみた。

それに、僕が今回行く場所っていうのは、派手な格好で行く場所じゃないから。

地味が目立たないように、可能な限り明るい系統の色でまとめた。

いや、だってさ。

病院行くんだから、普通はそういう格好するでしょ？

葵紋病院の、西棟3階の一番奥の部屋。

僕が目指してるのは、まさにそこになる。

本当だったら、僕には縁のない場所なただけだね。

じゃあ、なんで来たのかって？

僕の病院の用事なんて、1つしかないじゃん。

……見舞いに行くんだよ、クリスティアーネの。

ほら、夏休み前にさ、クリスティアーネを血まみれにしたじゃん。

血まみれにしたっていつても、試合でやったことなただけ。

それでも、先方の父親は腹に据えかねたらしくてね。

月雄荘に諜報部隊をけしかけた上に、銃まで撃とうとしてきた。

簡単に言っちゃえば、命の危険が迫ってるわけだよ。

まあ、綾小路の圧力で、フランク中將には一旦ドイツに帰ってもらったけど。

それだって一時的なモンだし、安全が保障されたわけでもない。

中將が帰ってくれば同じことだし、まだマルギツテが日本に残ってる。

このまま放っておくと、いずれ僕は酷い目にあわされるに違いない。少なくとも、指をハンマーで叩き潰すくらいはやられるだろうね。

だから、クリステイアーネに助けてもらおうわけだ。

あ、助けてもらうっていつても、頼むわけじゃないよ？

あれだけ殴った相手に頼むとか、なんか気が引けるじゃん。

一応、どうするかって算段は付いてるつもり。

何も無理に頭下げなくたって、誘導してやりやいいんだよ。

なんたって、クリステイアーネはプライドが高いから。

自分が負けて親父が出張ったって分かれれば、親父の好意を嫌がるだろうさ。

それできっと、僕に手を出さないようにって親父に伝えるはず。

そうなれば、よっぽど僕は危険な思いをしないで済む。

まあ、そうなれば……だけどね。

当然、上手くいかないことも考えなきゃいけない。

そのときは……まあ、僕の口から言わなきゃね。

フランク中将に僕を狙うのをやめさせて欲しいって。

そりゃ、あんまり僕の口からは言いたくないけど。

背に腹は代えられないってことで、命を最優先だ。

とにかく、そういう腹積もりがあって見舞いに来てる。

……見舞いに来てるどころなんだけど。

「どうして椎名が僕についてくるのかな？」

僕の視線の先には、ホットパンツに肩が出るようなシャツを着た椎名がいた。

……いや、トップスは白いシャツっていうか、とにかく袖が短い服を着てる。

上から下までボタンが付いてるんだけど……正式な名前は分かんねーや。

とにかく、付かず離れずの距離で、椎名が僕を尾行してる。いや、どれくらい前からってのは正直分かんない。

病院のロビーあたりに来たら、もう僕の後ろにいたんだし。

自販機で飲みモノ買ってなきゃ、そのまま気付かないところだった。あのとき、なんとなく後ろ見たから良かったものの……。

まあ、気付かなかったからって、別にどうってことなかったんだろうけどね。

「たまたま私しか手が空いてなかったからだよ」

僕の言葉に、そっけなく返す椎名。

まあ、椎名が僕に馴れ馴れしかったら、逆に気色悪いか。

それはともかく、僕はそんなに信用ならんか。

ガクトくん伝いだけど、クリスティアーネの見舞いに行くって教えてたのに。

コッソリ動いて怪しまれるならまだしも、真正面から動いてコレっていうのはなあ。

あの連中の個人個人には、そんなに嫌われるもんでもないのに。ん？ いや、最近の感じだと、嫌われてても仕方ないか。

ガクトくんと由紀江ちゃん以外とは、そんなに親しくないし。

それより始末が悪かったのはさ。

僕が椎名に気付いてることに、椎名が気付いてたってこと。

……尾行に気付かれたのに、そのまま付いてくるっていうのはちょっとね。

まあ、僕が勝手に気マズく感じてただけなんだけど。

なんとなく間が持たなかったから、声かけちゃったんだよ。

それに、ほら、椎名だって怪我はしてたじゃん。

鎖骨折られて、どっちの肘か忘れたけど脱臼して、心臓止められて。しかも、それをやったのが、僕と仲のイイ不死川だった。

なんか僕に含むところがあっても、まあ、不思議ってほどでもない。もし突っ掛けてくるようなことがあったら、ぶちのめす予定だったけど。

そんな様子は全然ないみたいだし、僕が考え過ぎなんだろうね。

「それに、午後は大和とデートする予定だから。

待ち合わせ場所が駅前だから、コッチにいた方が有利」

なんて惚気ながら、赤くなった頬を両手で抑える。

それがココに来た理由かよ！ …… っつてのは口に出さなぞ。

ん？ っつていうか、デート？

……なんだ、やっと付き合い始めたんだね。

直江のヤツも嫌がつてる素振り見せときながら、結局そこに落ち着いたか。

部外者の僕からすれば、かなり妥当な形になったんじゃないかなあ。直江が椎名以外の女とくつつく姿とか、僕は想像できなかったし。

まあ、仲イイわけでもないけど、とりあえずオメデトウだ。

「それにしても、見違えるくらい大きくなったね。一瞬、誰か分からなかった」

「つか、よく僕だって分かったなあ。

普段から会ってるわけでもない上に、顔つきも変わってるのに。

どこで判断してんだろ……耳とか目元の形は、そんなに変わってないか。

そこに気付くってのは、凄い観察力だと思うけど。

「僕だって努力してるんだよ」

「努力して結果が出るのは、才能に恵まれてる証拠だよ」

椎名の言い方が、ちょっと心に引っかけた。

どっちかと言えば、椎名だって才能に恵まれてる方だ。

まあ、それが望んだ方向の才能かは知らないけどさ。

少なくとも、武術のセンスそのものは僕よりあるかもしれない。

それにさ、椎名も僕と一緒に、武術が必要って人間じゃないでしょ。

その部分で僕のことを羨ましがるとは、絶対はない。

「まあ、無いよりはあった方がいいよね」

僕のその言葉に、椎名は何も返さない。

さっきまでは饒舌だったのに、ピタッと口を閉じた。

ってことは、聞かれたくない内容だったことか。
だったら、僕の気を引くような言い方しなけりゃよかったと思うん
だけど。

まあ、ほっとけばいいか。

どうせ俺には関係ないことだろうし。

椎名が付いてきたのは、病室の前までだった。

まあ、中にまで入られると面倒だったんだけどね。

頭回るからなあ、椎名は。

まあ、いちいち気にしてても仕方がない。

とりあえず、案ずるより産むが易し。

そっとうわけで、とっとと病室に入ることにした。

3回ノックしてから病室の扉を開けると、やけに甘い匂いがした。

花とか果物の匂いじゃなくて、焼き菓子とかの匂い。

バターに砂糖を混ぜて焦がした感じの、そういう甘さが漂ってる。嫌いじゃないんだけど、病室には場違いな匂いだと思う。

……帰ったら、久々にクッキー焼いてみるか。

チョコとプレーンの2種類作って、プレーンにはナッツ混ぜてさ。

っと、それはそれとして。

匂いの発生源が、ベッドの上で甘いモノ食ってる。

チャンネルを『大和丸夢日記』に合わせて、ペットボトルの紅茶を片手に。

いくら個室でも、病院だつてこと自覚して欲しいモンだ。

もし不死川だつたら、入院中だつて優雅にやってるだろうに。

まあ、クリステイアーネがベッドに座ってるんだよ。

壁に背中付けて、腰から下には掛け布団を被せたまま。

可愛いクマがたっぷり描いてあるパジャマなんか着て。

……つたく、ノックしたんだから、さすがに気付けよ。

このまま病室の入り口で立ってたら、僕がバカみたいじゃん。

「おい、クリステイアーネ」

……まだ気付かない。

控えめつつつても、そこそこの音量だったのに。

なんつーか、本当に手間のかかる奴だな。

「おい、見舞いに来たぞー」

開きっぱなしの扉をガンガンノックしても、まだ気づかない。もしかして、僕のこと無視してるんじゃないだろうか。いや、もし無視するにしても、もうちょっと反応あるか。意図的にコツチ見ないようにしてるわけでもないから、本当に気付いてないのか。どっちにしても気づかないのは同じだから、キツめに声をかけてやった。

「おい！ クリステイアーネ！」

大声で呼んでやったら、ようやく気がついた。

「うわ！ ああ、なんだ港……え、あの、あれ？ 港……か？」

反応からするに、僕がくることは分かっていたらしい。分かってたらしいけど……思いつきり目が点になってる。まあ、僕、一回りは大きくなったから無理もないか。すぐに気付けたっていうのも酷だよな、うん。

「ちつとばかり見た目は変わったけど、港だよ」

紅茶をテレビの横に置いたクリステイアーネは、まだ怪訝な顔をしてる。

うん、これだよ、これが普通の人の反応だよ。

「まあ、怪我也治って、元気そうで何よりだよ」

社交辞令だけど、まずは相手の怪我を心配しとかないと。いきなり本題に入るのは、ちょっと問題でしょ。

相手の警戒心を解くときは、遠回しに少しずつ話を縮めてかなきゃね。

「そういうお前は……なんだが、その、大きくなったな」

「ほら、成長期だから」

成長期ってのは理由になってないけど、コイツ相手だからそれでいいや。

ステロイド使ってるなんてのは、いちいち言うことじゃないし。言ったら言っただ、また七面倒なこと言われるんだろっし。

まあ、そういうことは黙つときゃイイんだよ。

「それはそうと、あときは悪かったね。申し訳ない」

「悪かった？ 何がだ？」

……頭の中身が出るまで殴り倒すぞ、この金髪クソ娘。

見舞いに来た理由とか考えれば、簡単に分かるだろうが。

それをわざわざ口に出させるとか、俺のこと舐めてんのか？

つと、そうじゃないんだ。

いくらイラつくからって、キレちゃダメなんだよ。

今日は、コイツの機嫌をよくしに来たんだ。
病み上がりのコイツを殴り殺すのは簡単だけど、それは目的じゃない。

「やり過ぎたつてことだよ」

「ああ……それは気にしなくていい」

おお？ これはちょっと意外。

女の子の顔、グツチャグチャにしたのに。

ご本人から気にしなくてもイイって言われるなんて、想定外だ。

「あの時、自分は全力だった。そして、お前も全力だった。

互いに全力をぶつけあった結果に、自分は文句を言ったりしない」

あー、そういう考えか。

うーんと、まあ、全力は全力だったよなあ。

クリステイアーネと僕の『全力』は、ちょっと意味合いが違うと思うけど。

それでも、お互い全力だったのは間違いのない事実だ。

まあ、ただそれだけなんだけど。

お互い全力だったからって、それがなんだってんだ。

僕が勝つて、クリステイアーネが負けて。

それが結果なんだから、全力も何も関係ない。

全力出したからって、勝ちも負けも関係ない。

それに、今回の問題はそこじゃないわけだしね。
勝った負けたじゃなくて、クリスティアーネに怪我をさせた。
しかも、顔が酷くなるような怪我をさせた。
僕が解決しなきゃならないのは、要するにそれだ。

「その割には、君の親父さんが、僕の家まで押し掛けてきたりしたけどね」

「ん？ そうなのか？ なぜ父様が……」

ホントに気付いてないんだろうか？

やっぱり張り倒していいかなあ、コイツ。

どうして自分が入院してるのかとか、どうして僕が見舞いに来たのかとか。

なんとなく分かるだろ、その辺の情報を整理すれば。
それでも分からないってことは、アホなんだろうね。
まあ、親父さんも親バカだし、そんなに不思議ではないよなあ。

「ほら、君、手酷い怪我したでしょ？」

「む……それはまあ、そうだな」

僕だつてさ、具体的には言いたくないよ。

敵だったつっても、女をボコボコにしたんだから。
クリスティアーネだって、思い出したくないはずだ。
だから、どっちも具体的には言わない。

「それで、銃向けてきたんだよ」

「……銃？」

「そうだよ。危うく撃たれるところでね」

はあく、と長い溜息を1つ。

幸せが逃げるっていうから、溜め息は好きじゃないんだけど。

まあ、精神的に疲れてるって演出をする分には、そこそこ効果的だからね。

うなだれながらやれば、もっと効果があるだろうさ。

「それは……良くないな」

良くない？

んー………どういづつもりで言ったんだろ？

とか思ってたなら、すぐにクリスティアーネが言葉を続ける。

「お前を倒すのは自分でなくてはならない。

父様がお前を倒してしまっは意味がないんだ」

そうじゃないでしょ。

父親が、娘の試合の結果に腹立てて、対戦相手を銃殺しようとした。なんかもう、ツッコミどころがいっぱいあるじゃん。

倒す倒さない以前に、問題が山積みだっというのに……。

それに、僕に勝ちたきゃ、レイピアを使えばいい。

それだけで、クリスティアーネは僕に勝てる。

それくらいの差が、僕とクリスティアーネにはあるんだから。

僕が今回勝てたのは、素手同士ってルールがあつたからで。

もし武器の使用が認められてたら、30秒も持たないよ。

つと、そんなことはイイんだよ。

それより、もう少し詰めておかなきゃね。

「そう思うなら、僕の体がダメになる前にやめさせてね？」

……ん、なんかシツクリこないなあ。

結局、お願いしてる形になつたつていうか。

目的達成できれば、まあ、それでイイんだけどさ。

どうも、コイツに頭下げらるつていうのがなあ。

「ああ、必ずそうさせてもらおう。必ずだ」

この感じだったら、とりあえずは大丈夫かなあ。

いくらなんでも、娘の言葉を無視する親父じゃないでしょ。

あれだけの親バカなんだし……うん、きっと大丈夫。

コレでダメだったら、まあ、本格的に親戚に泣きつこう。

最悪、真弓姉さんあたりに頼んで、全部死体にしてもらえばいいか。

「さて、そろそろ失礼するよ。少し立て込んでるからね」

そう言ってから、僕は素早くパイプ椅子を畳んだ。

いや、ホントに病院って好きじゃないんだよ。

注射が怖いとか、匂いが嫌いとか、そういう理由じゃなくてさ。病院は好きじゃないんだよ、うん。

「あ、ちょっと待て！」

「ん？」

背中を向けて扉に手を掛けたところで、クリスティアーネが呼び止める。

僕からコイツに用はあったけど、コイツから僕に用があるってのは意外だ。

たぶん、柔術教えるとか、そういう話じゃないよなあ。

『さっきのナシ』とかいうような輩でもないはずだし。

……考えたところで、全く想像が付かない。

ってわけで、振り返ってみると、これまた意外な言葉を掛けられた。

「最近……一子の様子がおかしいんだが。何か知らないか？」

一子……ああ、川神のことか。

椎名もそうだけど、なんで僕に聞くんだらうね。

風間ファミリーだとか言っつて、せっかく徒党組んでるんだからさ。こっとうときこそ、団結力発揮してみんなで解決すればいいのに。

それとも、仲間内じゃ触れられないようなデリケートな問題？

でも、そうだとして、僕に聞く必要なんてあるか？

プライベートじゃ、川神に合ったことなんて1回だつてないのに。

僕と付き合いのあるのは、ガクトくと由紀江ちゃんだけだ。

そう考えたら、明らかに聞く相手を間違ってるじゃん。

僕が、川神のことを、コイツら以上に知ってるはずがないんだから。

「川神とは付き合いがないから、僕に聞かれても困るんだけど」

だから、思ったそのままを告げるだけ。

知らないことを知ってるっていう趣味はない。

コイツらの手伝いをする義理もない。

そういうニュアンスを含めたトーンで、ハッキリした声で伝えた。

「そうか……いや、そうだな。呼び止めて済まなかった」

そう言ったクリステイアーネの表情は、複雑な感じだった。

少し下を見ながら、齒切れの悪そうな声色をしている。

まあ、川神と仲イイみたいだし、心配なんだらうね。

僕には全然関係のないことだけど。

さて、あとは、家に帰って晩飯の支度して。

体を休めて、明日に備えますか。

なーんかダルいから、しっかり寝ておかないとね。

17話目『それは誰のせい?』（後書き）

えー、これにて夏休み編は終了です。

チクシヨウ……水着が書きたかった！

私の執筆ペースがもつと早かったら、水着をいっぱい書きたかった！

さて、私の願望はさておき。

フランク中将の話は、一応の形で決着が尽きました。

これで全て終わったと言い難いですが……それはまた後々に。

何気なく大和は京ルート、一子の様子がどうやらおかしい。

そういう変化も、風間ファミリーのうちに生じています。

モモ先輩? ……接点がないので、なかなか書き辛く……。

モロも何気に出ていません。

ううむ、風間ファミリーがないがしろになり過ぎなような。

とにもかくにも、しつこいですが、夏休み編は終了です。

余計な話とかを1話挟みますが、どうかお許しを……。

さて、1日2話投稿に成功したところで。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、イロイロお待ちしております。

無論、辛らつなご意見もウエルカムです。

……どうしても伝えづらいことでしたら、メッセージで送ってください。さっつても結構ですよ？

ビバ、西方十勇士！

閑話』そして夢の終わりに』(前書き)

何のこともない話で、ワンクッション置かせていただきます

閑話』そして夢の終わり』

気が付くと、俺は実家の道場の中を覗いていた。

窓から覗き込むとか、扉から中を見るとか。

そうじゃなくて、どことも知れない上の方から覗き込んでいた。

体育館ほどじゃないけど、その半分の半分くらいの広さはある。

ガキと大人1人が体動かすには、十分すぎるスペース。

そういう場所が、昔はあったんだよ。

風通しが良かったから、今は物置みたいになっちまったけど。

初めて使ったのは、確か4つの頃。

その何日か前の予定では、柔道やるはずだった気がする。

でも、本家の連中が渋って、目立たない格闘技ってことになって。

たまたま近所で道場始めたガスタオンさんを、ジジイが呼んだんだ。

ほら、当時はブラジリアン柔術が流行り始めてたじゃん。

それで、柔道に近い格闘技ってことでブラジリアン柔術だったらいい。

まあ、そこそこ強くなるにはピッタリの格闘技だったし、文句はねえよ。

とにかくだ。

そんな懐かしい道場に、俺が正座してた。

ガキの頃の俺が、ガツチガチになって正座してた。

俺がガキの俺を見てるってことは、これはつまり俺の夢だ。

その証拠に、俺の前にガスタオンさんがいる。

ずっと前に死んだ、ガスタオン・ダ・シルヴァが。

そうだよ、こういう風にいつつも笑ってる人だった。

懐かしい、本当に懐かしい笑顔だ。

こんな風に朗らかに笑われても、俺はガツチガチ。

昔は人見知りひどかったから、仕方ないって言えば仕方ないか。それにしたって、緊張し過ぎに見えるけど。

「あ、あの！ 本日よりお世話になります、港 三千尋です！」

あーあー、ガキの頃から土下座は上手だなあ、俺。

もっと上見て生きないと、これから辛いこといっぱい待ってるんだぜ？

頭下げるより、相手をまっすぐ見る練習しとくんだけぞ。

そんな俺を見ても、ガスタオンさんは笑ってくれてる。

優しい顔で、まるで自分の子供を見るみたいな顔で。

「ミチー、口？ こちら、こそ、よろしく、お願いします」

ははっ、そうだったな。

ガスタオンさん、まだ日本語下手だったんだよな。

日系だったもんだから、ちょっとビックリしたんだっけ。

まあ、俺だってまだポルトガル語話せなかったから、おあいこだよな。

今でこそネイティブ並みに話せるけど、あのときゃ4つのガキだもんなあ。

それにしたって、かわいげのないガキだ。

もうちつと、社交辞令でいいから笑えつつーの。

相手が話しかけてくる前に、自分から話しかける。

そんなんだから、中学入るまで友達できねーんだよ。

で、ガスタオンさん、俺の緊張をほぐそうとしてくれたんだよな。言葉のチョイスは完全に間違ってたけど。

「大丈夫。私、殺す、しません」

ニコニコしたまま、よく分からんことを言い始めた。

そんなこと言われて、気が楽になるガキはいねーよ。

まあ『何言ってるんだコイツ』って、少し呆れて気楽になったけどね。

……あの時はありがとございました、ガスタオンさん。

でも、いきなり練習で腕ひしぎかけた恨みは忘れませんか？

場面が変わった。

もうちょっとガスタオンさん見ときたかったんだけどな。死んだ人のことをネチネチ思っても、先には進めんか。それよりも、生きてる人のことを考えないといかん。

でも、正直なところ、この人を優先的に思い出すこともないと思う。

俺の実家の道場モドキより、2回りは広い本格的な道場。壁際にサンドバッグを2つ吊るして、少し離れたところにウェイト器具がある。

そこから離れた入り口近くのスペースに、その人がいた。

「ケツ！ 空手舐めてんじゃねえぞ、クソガキが！」

空手着を着てる、軽く100kg超えてそうな筋肉質のオッサン。手も足もゴツゴツしてて、人間っぽくない硬そうな皮膚。首も頭くらい太くて、プロレスラーと間違えそうな風体してる。空手の師範の、立瀬たつせ 無道むどうが立ちはだかっていた。

その前で膝付いて顔抑えてるのが、11歳の俺。
手で口を押さえてるけど、そこから血がみなみと溢れてる。
あの手を口から離すと、前歯が8本も出てくるんだぜ。
そりゃ、鍛え上げた大人の正拳を顔面に突っ込まれたら、そうなる
だろ。

つか、小学生がイイ歳した大人に勝てるわけもなかったんだけど
な。

でも、俺だつて引けなかったんだ。

ここの道場のガキが、ガスタオンさん馬鹿にしたから。
道場に乗りに込んでそのガキ殴った俺もアレだけどさ。
それでも、許せなかったんだから仕方ない。

思えば、アレが初めてのケンカだったかもしれない
ブラジリアン柔術の技で、初めて人を痛めつけた。
マウント取って、顔ボコボコになるまで殴って。
最後に腕をとって、手首と肘を一気にぶっ壊した。
それが平然とできるくらい、冷静にムカついてた。

で、それを見てた師範が、面白がつて俺に突っかかって来て。
コッチが構えをとるよりも早く、顔面に拳を叩き込まれた。
前歯が口の中で弾けて、一撃でやられた。
それが、僕と師範のファーストコンタクト。

「どりげせ」

「あん？ ボソボソ言っても聞こえねーぞ、クソガキ」

「ガスタオンさんは、弱くない」

『取り消せ』も『弱くない』も。

前歯がないと、まともにも言えなかったよな。でも、頑張っけて口の中の歯と血を吐きだして。クラクラしてたけど頑張っけて立ち上がった。

「ガスタオンさんは、弱くない」

はっきりに言っけてやった。

これでもかっけてくらい、ハッキリ言っけてやった。

あー……でも、これが良くなかったんだよな。

いや、良かったのか？

なんとも言えねえけど、じゃあ、良かったでいいか。

「じゃあよ、そのガスタオンと立ち会わせろや」

そうそう、師範が俺の襟首つかんで、マジな目えしやがっけて。

次の次の日くらいに、ガスタオンさんと師範がやりあうことになったんだ。

まあ、結局、ガスタオンさんがノされたんだけど……。そっからだな、俺が無道会館に入って空手始めたのは。

あー、夢だから思考がまとまんねえや。
どうせ起きたら忘れてるし、どうでもいっか。

そっか、中学の卒業式か。

校門の前で、くっちゃべってたっけ。

俺と、村上と、アーノルドと、柳生と。

バカなことやったけど、あの頃も楽しかった。

アーノルドってのは、友達の白人ハーフでさ。

身体はでっかいんだけど、昔からイジメれてたらしい。

でも、ガスタオンさんと慣れてた俺と話すようになって。

それで、だんだんと友達が増えて、賑やかになった。

同じ道場の村上に、ちよつと言動が痛々しい柳生。

そこに俺とアーノルドで、4人でつるんだ。

それが、あの日に終わった。

「隣の県ならまだしも、関東だもんね」

村上が、悲しそうな顔をして呟いた。

今生の別れってわけでもないのに、しみったれた顔しやがって。

まあ、俺も似たような顔してたのかもしれないけど。

鏡なんて置いてなかったから、確かめようもねえし。

表情なんてどうでもいいよな、別に。

「おお。そっちの方が都合がイイからよ」

嘘は一つもついてなかった。

このままあの場所で暮らしても、俺にメリットはない。

あの土地にいても、俺はこれ以上成長できないから。

もっと強い奴と、もっとイイ師と出会わなきゃいけないから。

こんな中途半端なところに、ずっとはいられない。

「港くん……」

アーノルドの奴、体がでかくせに泣き虫だったなあ。

こんなときにもボロボロ泣きやがって、恥ずかしいったらありやしなかった。

もうちょっと男らしくしないと、どこいっても舐められるつったのに。

でも、最初に話した時よりは大分マシになったから。

だから、きつと今も元気でやってくれてるはずだ。

「次こそおまえを倒してやるからな！ 覚悟しておけよ！」

一番弱つちいのに、柳生はいつも自信過剰だったな。

我流我流ってうるさいクセに、突きの1つもロクにできなかった。俺にケンカ売ってきたときも、5秒で片付いたくらい弱かったし。まあ、あんなガムシヤラにやるだけじゃ、絶対強くはならんだろ。せめて空手とか柔道くらい身につけてくれりゃ違ったんだろうけど。

「ま、次に会った時にゃ、もうちつと普通の遊びでもしような」

そんなこと言って、そのままそれっきりだ。

もう、1年以上顔合わせてないんだよな。

ちつとは会いたいって思うけど……連絡先、聞きそびれたんだよ。

まあ、生きてりゃそのうち会えるはずだし、深く考えるもんでもねえよな。

……人生、どこで何が起こるか分かんねえんだけど

ガスタオンさんみたいにいきなり死んだりするかも知れねえし。

とにかく、そういう中学時代だった。

バカやって、友達できて、空手やめて、ガスタオンさんが死んで思ったよりいろいろなことがあった、そういう3年間だった。

女っ気は無かったけど割と楽しかったんだぜ？

桜吹雪の中にいる、そんな不死川を見てる俺。
ってことは、これは去年の入学式のときか。

驚いたよ。

あのときは、心底驚いた。

不死川が同じ学校にいたのと、一目で不死川だって分かった自分に。

まだガキだった頃に、パーティー会場で出会った不死川。

あの頃から可愛かったけど、今も可愛く成長してた。

ちよつと正確悪くなってる感じだったけど、それも許容範囲内。

自信満々に笑う姿は、やっぱり不死川心だった。

すぐに話しかけなかったのは、俺が臆病だったから。

もし不死川に恋人がいたら、もし俺のことを覚えてなかったら。

不死川のタイプが俺みたいない人間じゃなかったら、嫌われたら。

他にも、不死川に嫌がらせする奴がどれくらいいるのか……とか。

打算的な思いもあって、結局1年が過ぎることになった。

でも、隠れて色々やったよなあ。

不死川に届くラブレターを逐一処分したり。

不死川に嫌がらせしようとした奴、少しずつ追いこんだり。

不死川を盗撮してる童帝様を捕獲したり。

薄い文庫本が1冊書けそうなくらいには、色々やった気がする。

それで、不死川と恋人になるための計画を立て始めた。

邪魔になりそうで、かつ、排除できる奴は排除していつて。

Sクラスに残れるように、それなりに勉強して。

決闘を挑まれても無様に負けないように、もつと鍛錬して。

不死川との時間を作るように、友人を作るのを控えた。

他にも、イロイロ調べたんだぜ？

葵のこととか、九鬼のこととか、風間ファミリーのこととか。

格闘系の部活の連中に、川神百代に、川神院のことも。

慎重に綿密に、着々と下準備を進めていった。

その結果がどうなってるのか……夢だからか、思い出せない。

まあ、いちいち思い出そうとしなくてもいいだろ。

目が醒めれば、そこに結果が転がってるはずなんだし。

ここは……商店街？ 銀行？

なんか、フルフェイス被って包丁持った奴がいる。

あー、なんか覚えがあるようなないような。

だんだん意識がハッキリしなくなってきたぞ。

……武蔵がコスプレしてる。

なんだ、あのトチ狂ったフリフリの服は。

あんな短いスカート穿きやがって、何考えてんだ。

年頃の女が、人前であんなに足を出すんじゃない。

っていうか、俺も普通の格好じゃないな。

いや、っーか、なんで俺がネズミの被りモノしてんだ？

『ハハツ！』とか笑ったら、著作権法違反で捕まるぞ！

あとは、ジーンズ上半身裸で……え？ 俺もヤバい人！？

何やってんの俺？ どうしてそんなカツコしてんの！？

武蔵と俺が隣り合わせで、強盗との距離は10mくらい。

包丁振り回しながら突っ込んできても、どうにか捌ける距離だ。

俺は上半身裸だから、さすがに無傷ってわけにはいかんだろうっけぞ。

そもそもこれって、本当にあったことだっけ？
あまりにも突飛なせいで、リアリティがないんだけど……。
まあ、夢だからリアリティがないのは当然か。

「魔法拳士ムサコツス！ 突きに代わって膝蹴りよ！」

包丁持った銀行強盗相手に、武蔵がなんか喚いてる。

お前はどこのセーラー戦士だ。

つか、魔法拳士ってなんだよ、魔法拳士って。

頼むから、そのキメポーズはやめてくれ。

「はい、落ち着いて落ち着いて。ね、とりあえず、包丁の先を下
に向けよう。」

そのまま俺に包丁向けてると、軽い切り傷でも殺人未遂がくつつ
いてくるぞ？」

相手をなだめながら、隙を窺ってる俺。

えーっと、取り押さえないのか？

ちよつとずつ距離を詰めて……。あ、包丁持ってる手を蹴り飛ばした。

そこで、蹴った足で1歩踏み込んで、そのまま距離を詰めて。

喉に軽くジャブ入れて、少しだけ相手の動きを止めて。

包丁が落ちる頃には後ろに回り込んで、フルネルソン。

あー……。羽交い締めって言う方が伝わるか。

とにかく、包丁持ってた奴の動きを止めた。

「ミッチーマウスくん！ そのまま羽交い締めにしててください！
ガードができなくなったところで、私が必殺技を叩き込みます！」

そうか、俺はミッチーマウスか。

じゃなくて、必殺技！？

ますますもって、現実味が薄れてきたぞ。

ガードできない状態だったら、ほとんどの技が必殺技になるわ。
武蔵に限って、そんな間の抜けたことを言うとは思えない。

「待て！ 必殺技とか聞いてないぞ！？」

あ、やっぱり俺は知らなかったんだ。

ネズミのマスクの下で、焦った顔してるのが目に浮かぶ。
それでもフルネルソン解かないとか、やっぱり律儀だな。
こんなときにまで気を遣わなくなっただっていいのに。

「大丈夫です！ ちゃんとアンスコはいてますから！」

武蔵が返した言葉は、何ともの外れ。

いやいや、スカートの中とか気にしてねーから。

大丈夫とか大丈夫じゃないとか、そういう問題じゃない。

ちょっと下がってから、武蔵が助走をつける。

これでもかっけくらい加速して、それで。

高くジャンプし過ぎた武蔵の膝が、俺の顔面に

「うおおおおお！？」

声をあげて目覚めると、ベッドの上だった。いや、夢だつて分かつちやいるけど、マジでビビったわ。まだ心臓がバクバクいつてやがる。つーか、最後の最後で落としてきやがって……。ロクでもねえ夢ばっかハツキリ見ちまうのも考えもんだ。

「やっべ……なんかスゲエ夢を見た気が……」

思い出したいことから、そうじゃないことまで。なんつーか、ぐっちやぐちやに混ざった夢だった気がする。まあ、忘れてるってことは、そんなに重要なことじゃないんだろうが。

……夏休み中だからって、ちょっとボケてんのかな？

さて、ボーっとしてる場合じゃねえな。

とっととキッチンに行って、朝飯作らなきゃ。

閑話『そして夢の終わり』（後書き）

思いつきり夢オチです、申し訳ありませんでした orz
連続3話投稿……息が、息が切れそう……………

溜めておけばいいのに、それができない。

モーデイスは戯れのできぬ男よ！

えー、イロイロと過去の話を掘り出してみました。

最後の方がおかしかった？

H A H A H A！ やだなあ、私だっておかしいと思ってますよ！

でも、だって、魔法拳士ムサコツスなんて出てたから！

私……私、我慢できなくて！

……はい、本当に申し訳ありませんでした。

では、例によって例のごとく。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、諸々お待ちしております
おります。

夏休みが、ようやく幕を閉じる……………！

第4章までの、原作に出てこない登場キャラクター（前書き）

メモみたいなもんです。

『あれ？コイツ誰？』というキャラがいたら、ここを見てやってください。

全部ではありませんが、大体は書いてあるかと……

第4章までの、原作に出てこない登場キャラクター

みなと ひびき
港 響

地元の中学校に通っている三千尋の妹。

港家の次期当主として、普段から忙しくしている。

基本的に垢ぬけていて、友人の数もそこそこ多い。

また、見た目もイイため、在学中に何度も告白されている。
が、昔は引っ込み思案で、人と話すのが苦手だった。

現在はバレーボール部に在籍し、身長を武器に活躍中。

このままいけば、全国大会に出られるらしい。

実は、次期党首としての重度のプレッシャーから、かなり情緒が不安定。

週に2度はカウンセリングを受けているが、改善する様子はない。
自己防衛の結果か、趣味嗜好がコロコロ変わり、現在はマゾヒズムに凝っている。

港 みなと
美樹彦 みきひこ

『港造船』の代表取締役にして、三千尋の祖父。
諸々の事情から、男性にもかかわらず、例外的に港の当主を務めて
いる。

老人にしては身長が高く、179cmとかなりの長身。
日々の鍛錬を欠かさないために、体つきも人並み以上。
また、若い時分から古武術を学んでおり、それなりに強い。
昔は、黛大成の父に何度も挑み、ボロ雑巾のようにされるのが日課
だった。

家柄や人物にとらわれない、柔軟な思考のできる人物。
その分、実力が不足している者に対しては厳しい態度を取りがち。
茶目つけを覗かせることもあるが、公私の線引きがハッキリしてい
るシツカリ者。

山口 やまぐち
剛 たけし

港家のお手伝いさん。

元自衛隊員で、イロイロな方面で知恵が回る人。

山岳での訓練で足を負傷し、本人の希望もあつて除隊される。

その後、港の親戚に目をつけられ、港家のお手伝いに推薦あれよあれよという間に、港家で20年働くことになった。

また、三千尋が家から出て生活するときに、一緒に家を出ている。

意外と融通が利く人で、内容次第では内緒でイロイロと手伝ってくれる。

特に、性的な方面に限れば、少しばかり注意が緩すぎる。

三千尋の趣味が偏ってるのは、実はこの人のせい。

斉藤 穂波
さいとう ほなみ

港家のお手伝いさん。

コックを目指してたのに、何故か港家に勤めることになった。

調理師学校を出て色々な料理を学んでいたが、和食がどうしても板

につかなかった。

しかし、どうしても和食が作りたくて、イロイロと料理店を転々と
する。

そのうちに職が見つからなくなり、料理人を募集していた港家に転
がり込む。

そして、主に和食以外の料理で舌をうならせ、なんとか職を得てい
るところ。

三千尋が上手に和食を作れないのは、半分この人のせい。

住み込みで働いているわけではなく、近くのアパートに居を構えて
いる。

適齢期なお見合いの相手もおらず、最近はけっこう必死。

浅井^{あさい} 真弓^{まゆみ}

三千尋の従姉で、国内売上No.1の薬剤メーカー『浅井製薬』の研
究員。

大学時代は機械工学を専攻していたが、神経学などの知識も極めて
豊富。

自分で天才と認識できるレベルの天才らしく、IQが測れないほど高い。

自他共に認めるマッドサイエンティストで、人体実験も笑って行える人物。

高校時代は、同じ部活の人間を実験に使おうとしていたほど。

このような行動から冷徹と思う者もいるが、実際はユーモアのある女性。

年下の親戚にはめっぽう甘く、大抵のわがままは聞いてしまう。

『ブラックホールの優雅な日常』という論文を発表し、そのまま学会を去る。

大学院卒業以降は、肉体的な人間の進化に注目し、様々な実験を繰り返す。

研究成果に『加速神経』『合成筋肉』『軽量高硬度骨格』などがある。

ガスタオン・ダ・シルヴァ

ブラジリアン柔術の一派『シルヴァ柔術』の開祖。

3年前に故人となったが、その名前と影響力は世界に通用する。

実戦を意識したブラジリアン柔術を使う、日系ブラジル人。日本に来たのは、柔術の原型である柔道を学ぶためだった。しかし、美樹彦に頭を下げられ、三千尋の専属コーチになる。三千尋が実家から離れる際に、一緒について行った人間の1人でもある。

妻はおらず、孤児たちを引き取り、自分の子供として育てていた。

三千尋の人格形成に一番影響を与えた人物。

勝てばいいという考えは、ガスタオンの思想そのままだったりする。

立瀬 無道

フルコンタクト空手の一派『無道会館』の創始者。中国拳法家だったが、学びたいことは学んだと認識して空手家に転身する。

強くあることを望んで己を鍛え、実際にその強さを手にしてきた。空手家を名乗り始めたのは、殴り合うのが好きだったからという理

由だけ。

そもそも、中国拳法も、気の扱いを知るためだけに始めていた。飛ばすことこそできないが、密度の高い気を操れるようになる。特に、彼の『硬気功』は、タイミング次第で銃弾さえも受け止めるほど。

釈迦堂に敗北して以来、国内から姿を消す。

現在行方不明で、彼がいなくなったと同時に無道会館も解散している。

尾形おがた 小路こうじ

月雄荘に住む、尾張忍者。

最近入居してきたが、目的は不明。

特殊な忍術や体術を使い、独特な戦い方をする。

特に、足首から下の動きのみでの移動や、三半器官を攻撃する技は脅威。

それらを組み合わせることで、分身の術も再現できる。

そういった奇抜な技のみでなく、普通の格闘術も相当のレベル。

そこそこ貯金があるようで、今は働いていない。
アルバイトはしているようだが、業務内容は明かされていない。

駒田 こまた
シゲオ

月雄荘に住む、最新式八極拳の使い手。

人気3D格闘『バーチャル・ファイティング』の王者でもある。

自称、ゲームキャラ：アキオを具現化したストリートファイター。
過酷な筋トレと技のトレスのみで、他の格闘家を圧倒する。
コンクリートを易々と砕くほどのパワーの持ち主でもある。
また、耐久力も常人離れしていて、浸透勁の直撃を耐え抜くほど。

現在は、バーチャル・ファイティングの制作会社に勤務。
宣伝と称して、アキオの格好でプロレスに参加させられている。

サンパギータ・カイ

月雄荘に住む、スカイスターの異名を持つ女子プロレスラー。

月雄荘には珍しい、家賃をちゃんと払う人。

女子プロの世界王者で、実力も女子プロレス界トップクラス。

空中殺法を得意としており、得意技も空中技が多い。

ただ身軽なだけではなく、打たれ強さを活かした強引な戦いもできる。

まだ若いこともあって、まだまだ現役で戦うつもりらしい。

極度のアイドルオタクで、グッズやチケットを買い過ぎて万年金欠気味。

それでも収入の方が多いため、わりと安定した生活ができている。

とかのう
戸叶

月雄荘に住む、スナイパー空手の使い手。

県内に道場を構えており、門下生も1000人を超える。

元は伝統派空手の使い手だったが、独自の理論を実践するために退

団。
相手のバランスを崩してから攻撃を放つ、スナイパー空手を考案した。
が、体重が極端に重い相手には通用せず、煮え湯を飲まされた過去がある。
現在はカウンターにも力を入れた『真スナイパー空手』を開発中。
あらゆるフェチを網羅していると自称する、かなりの変態さん。
投稿系の雑誌で名を馳せているが、それを知る者は少ない。

カシオ

月雄荘に住む、自称哲学者。
一応、大学の哲学部までは卒業しているらしい。
ストリートファイターとしては、ハッキリ言って弱い方。
そこらのケンカ自慢よりは強いが、せいぜいそのくらい。
だが、集中力で痛みを強制的に消すという、希有な特技も持つ。
集中力が切れると、突然ぶり返してきた痛みに耐えれず嘔吐することも。

何をしているかは分からないが、食生活には困っていない模様。
ただし、月1万5000円の家賃を滞納しまくってるため、裕福ではない様子。

武^{たけ}
月雄^{つきお}

月雄荘の管理人。

全員が家賃をちゃんと払ってくれるわけではなく、工事現場でも働いている。

驚異的な頑丈さと、コンクリートを砕くパワーの持ち主。

工事現場の機械からヒントを得た連続パンチ『百一烈拳』を使う。

総合力は大したことないが、持ち前の根性で勝利をもぎ取ることも。関節技や寝技の経験が一切ないため、転がされると弱い。

面倒見のいい管理人さんで、板垣一家も快く受け入れる度量がある。同年代の連中はともかく、年下の知り合いは弟か妹のように思っている。

三島 麗一 みしま れいいち

月雄荘に住む、自転車競技のプロ。
元はストリートファイターだったが、足を洗って競技に励む。

昔は『MTB使いの麗一』と呼ばれたほどの実力者だった。
自転車を使った奇抜な戦いは、そこのザコでは全く歯が立たない。
しかし、それに依存し過ぎているので、自転車が壊れると勝ち目が
無くなる。

精神的にも強くはなく、嫌なことから逃げ出す悪癖も持つ。

県外に出掛けていることが多く、三千尋との面識は少ない。
女性と遊んでいることが多いので、アドバイスをもらったりしてい
る。

芹口 トミノ せりぐち

月雄荘に住む、現役の女子プロレスラー。
カイとコンビを組んでいるが、そんなに強くない。

プロレスだけでは食っていけず、ファミレスでも働いている。
ファミレス店員の衣装で戦うレスラーとして、華々しくデビューする予定だった。

だが、スカウトした人物にあっさりのされて、デビュー戦は失敗に終わる。

今でこそ世界王者のベルトを巻いているが、全部カイのおかげ。

天使の働いているファミレスの先輩で、イロイロと手を焼いてくれている。

月雄と同じく基本的に面倒見がいいので、トラブルに巻き込まれがち。

第4章までの、原作に出てこない登場キャラクター（後書き）

簡単なキャラまとめでした。

一部キャラクターには触れていませんが、今後、また機会があれば

……

1話目『夏は終わって』

さあ、夏休みも終わって、今日から学校だ。
文字通り、心の底から待ち遠しかったよ。

にしても、最後の2週間くらいは早かった。

普通に生活しながら、脂肪落とすだけだったからかなあ。

まあ、ステロイドで増えた分の脂肪も半分は落ちて、見た目も少し落ち着いた。

少なくとも、クリスティーアーネの見舞いに行った時よりはマシだ。

身長が183cmで、体重が91kg。

体脂肪率は12%、適度な脂肪と筋肉で覆われた身体。

うん、我ながら上手に調整できたもんだよ。

ステロイドで付けた筋肉維持するのが、少し大変だけど。

体脂肪は……コレ以上落とすと、免疫が低下するらしい。

まあ、多少は脂肪もないと、打撃の衝撃を分散できないからね。

減量しなきゃならない外見でもないから、これでちょうどいいんだよ。

とにかく、明らかに夏休み前の僕じゃない。

顔はスッキリしたからイイけど、やっぱり全身のサイズがね。全体的に一回り太くなってる、予備の制服を着る羽目になっちゃった。

新しいの注文しとかなないと、古い制服はもう着れないや。

あ、顔って言ったたら、鼻もどうにかなっただよ。

鼻の形を固定しておくような……バンソウ膏でいいのかなあ。それを鼻の上から貼って、とりあえず潰れる前の形をキープできた。そんなに低くはなかったけど、ちよつと見苦しかったからね。

今日の僕は、コレ以上がないってくらいに身なりを整えた。

髪も昨日切ってきたし、顔のテカりを抑える薬も顔に塗ったし。ボディローションとかいうのも、生まれて初めて使ってみた。

眉毛もキレイに揃えて、制服の中のシャツも新品で。

そうそう、髪の毛だけど、試合もないのに軽くワックスをつけた。

まあ、今日は僕……俺、僕だって本気モードってことだ。

この約1カ月が、僕にとってどれだけ長かったか。

……分かるか？ 誰だか知らないけど、マジでお前らに分かるか！？ 色んなこととして誤魔化してたけど、毎日毎日苦しかったわ！

気にしないようにって頑張れば頑張るほど、頭の中に浮かんでくる！ クソほど体動かさないと、気になって気になって寝れもしなかったよ！

はあ？ 何が気になったって？

そんなもん……不死川からの返事に決まってるでしょ。

いやあ、ちょっとハシヤギ過ぎちゃったね。

学校着いたのが6時30分とか、運動部かってんだよ。

そもそも、起きたのが3時だったからなあ。

仕方ないから、今はカバンに突っ込んであった小説を読んでは。

タイトルが格闘小説っぽかったから買ってみたけど、ハズレだった本。

まあ、格闘っていうか、ストリートファイトっぽいなんだけど。

金的蹴りと目潰しが、そんなポンポン決まるわけねえだろ……とか。自分と比べちゃうから、どうにも斜に構えて読んじゃうんだよなあ。

フィクションだから、ツッコんだら負けなのかもしれないけど。

格闘技してる奴は喧嘩じゃ弱いみたいに見えるけど、少し気分も悪い。

真剣にやってる奴ほど、そついうトラブルからは遠ざかるだろうけど。

だからって、そいつらが喧嘩で弱いつてわけじゃないでしょ。

それに、危険な技っていうのは、何も素人の特権じゃない。格闘家だって、そういうときには禁手くらい使わず。目潰し・金的蹴りなんかじゃなくて、もっとえげつない技とかね。

それにしても、時間が長い。

5分は経ったと思ったら、まだ1分しか経ってなかったり。ずっとソワソワしてるから、時間の感覚が伸びてる気がする。

そりゃ、仕方ないじゃん。

待ちに待った告白の返事が、やっともらえるんだから。

ほら、大事なテストの結果が分かる前とか、ソワソワするでしょ？それと同じで、僕だってソワソワするもんなんだよ。

もし好ましい返事だったら、僕は叫ぶ。

嬉し過ぎて、肺の中の空気をフルに使って叫ぶぞ。

ひとしきり叫んだら、そのまま不死川を抱きかかえて街に繰り出そう。

どうせ今日は新学期初日なんだから、サボったってイイだろ。丸っと一日、恋人として遊び尽くして一生の記念にしてやる。

じゃあ、もしも……もしもダメだったら。

僕は、いったいどうしたらイイんだろうか？

いや、どうしたらイイかって言い方はないよね。

悲願が叶わないって分かれば、あとは絶望するしかない。

それで、僕は、絶望したまま生きれるほど強くない。

まあ、どっちにしても、不死川を待つしかないんだ。
だったら、待てばいいんだよ。

1ヵ月……いや、何年も待ったんだ。

たかだか数時間待つことくらい、耐えてみせるさ。



時刻は午前の7時ジャスト。

ソワソワしながら、ついに30分が経った。

感覚的には、3時間近い時間が流れた気がするけど。

柄にもなく……ってわけじゃないけど、緊張してる。

手に汗もかいてるし、コメカミが突っ張ってる感じがする。

空手の試合の決勝戦でさえ、ここまで緊張しなかった。

むしろ、今の方が心をコントロールできるてるのに。

……そつと、教室の扉が開かれた。

視線をよこさなくても、音だけで分かる。

覗き込むみたいに少しだけ開けて、仲の様子をうかがってる。

特別な用事がない限り、こんなことをするはずがない。

誰がそうしているのかも、僕には分かる。

だいたい、こんな時間に登校する2 - Sの生徒は2人だけ。

僕と不死川の2人しか、来るはずがないんだから。

不死川だって、それが分かかって来たんだろうし。

僕が本を置いて目を向けると……ほら、やっぱり不死川がいた。真剣で、少しだけ困った感じの顔つきをして。

教室の中の様子を窺うようにしていると、僕と目が合った。

「やあ、おはよう」

「おお……おはよう」

軽く挨拶を交わすと、不死川がカバンを置いて席に着いた。もちろん、このまま逃がす僕じゃない。

本を置いて、不死川のところまで歩いていく。

それで、不死川の前の席のイスに座って、会話させてもらうことにした。

「どうだった？ 海外旅行、楽しかった？」

「そうじゃな、オランジュリー美術館に行って来たぞ」

オランジュリーねえ。

ルールでもいい気がするんだけど、まあ、そこは好みだし。

でも、フランス旅行で言った場所がそこっていうのはなあ。凱旋門とか、シャンゼリゼ通りとか、セーヌ川とかさ。観光に来たなら、他にも見るところはあると思う。

「お、羨ましいなあ。モネの作品とか置いてあるんでしょ？」

「うむ、やはり歴史ある美術品は素晴らしかったのじゃ」

まあ、コレ以上聞くと不死川がかわいそう。

あんまり質問すると、たぶんボロが出る。

それは、僕も不死川も望むところじゃない。

いいんだよ、ちよつとした嘘をつくくらいは。

僕だって、不死川についてる嘘はあるんだから。

「それにしても……随分と鍛え直したな」

「まあ、もう少し上にも挑戦したくなつたからね」

これは嘘。

僕がステロイドを使ったのは、どうしても勝ちたい奴がいるから。上を目指すんじゃないくて、ソイツに勝ちたいだけ。

そのために筋肉を増やして、打たれ強くなる努力をした。

っていうか、この夏の間は、総じて防御の練習に力入れてた。

打撃を捌く練習をし直して、寝技でも不利なポジションからスタートして。

関節技の逃げ方もやりまくったし、そこから反撃する練習も重ねた。

戦い方そのものが変わったわけじゃないけど、手数が増えた夏だった。

「それに……少し太ったか？」

「あー、まあ、脂肪も少し増えたね」

「だらしないぞ。自覚があるなら、節制を心がけるがよい」

顔つきは……まあ、許容範囲だったみたいでよかった。

太ったっていうか、たぶん、首が太くなったから太って見えただと思う。

ステロイド服用前の写真と比べてみたけど、そんなに変わってないし。

まあ、このままの体で生きてくわけじゃないから、どうにでもなる。やることやったら、ぼちぼちダイエットでもしてくさ。

「ところで、港は夏をどう過ごしたのじゃ？」

「特に変わったことはなかったよ。実家に帰ったくらいかな？」

……いや、変わったことはたくさんあったか。

後輩を実家に泊めたり、ラブホテルに名前入りの垂れ幕を飾られたり。

妹がマゾヒストになってたり、武威に告白されたり。

不死川には言えないようなことが、たくさんあった夏だった。

「実家というと、北陸のか？」

「まあ、綾小路に行こうにも、ちょっと複雑な事情があるからね」

本当は行った方がいいんだけど、ジジイがうるさいもんなあ。

親父の仏壇はアッチにあるんだから、線香くらいあげに行きたかったのに。

大事な娘を盗られたら、そりゃ恨みも募るだろうけどさ。

それを、僕やヒビキの代にまで押し付けられても困る。

「今年の冬にでも遊びに来る？ 寒いけど、雪がキレイだよ？」

「そうじゃな……機会があれば、それもいいのじゃ」

適当に言ってみた言葉だけど、随分と曖昧な返事だ。

来るとも来ないと断言せずに、僕の言葉を受け流した。

まあ、そんなこともどうでもいい。

流れも雰囲気もクソもないけど、もう我慢はできない。

精神的にはギリギリなんだから、勘弁してくれ。

約束の期限は、もう過ぎたんだから。

「……で、分かっているとと思うけどさ」

何がってことは、わざわざ言わない。

ここで話さなきゃならない話は、不死川もよく分かっているはずだ。

「安心しろ。それについては答えが出たのじゃ」

不死川が、真剣な顔で言った。

長かったけど、やっと答えがもらえるってことだ。

1カ月以上も待たされた、僕のマヌケな告白の答えを。

少しだけ安心してから、その何倍も不安になってきた。

返事がもらえるのはイイとして、その内容を聞くのが怖い。

断られたらって考えると、体の芯から震えそうになる。

せめて、もう少しだけ心の準備をしておくべきだったろうか。

……いや、その時間は十分にあって、ちゃんと準備もしたつもりだった。

それなのに、こんなにも心臓が締め付けられる。

思わず逃げ出したくなるくらい、緊張の糸が張り詰める。

それでも、これは僕が望んだ展開で。

不死川から答えを貰うことを、ずっと待っていたんだ。

たった1カ月とはいっても、長い長い1カ月。

その長い時間を耐え忍んで、ようやく答えが貰えるところまで来た。

だから、逃げない。

不死川が口を開くまでの、ほんの僅かな時間。

僕は逃げずに、全てを聞いて答えを手に入れなきゃならない。

……そう決心しているうちに、たっぷり10秒が経って。
不死川は、ようやく答えをくれた。

1 話目『夏は終わって』（後書き）

えー、久々に引つ張ってみました。

夏休みが終わったということは、告白の返事が来る！

さんざん引つ張ってまだ引つ張るか、という感じです。

ええ、ほとんど書けているのですが、細かい部分を修正中ですので……。

……。早ければ明日にも次の話を投稿できますので、どうかご勘弁を……。

話が進展せず、難しい部分もありますが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘などお待ちしております。

……ちゃんと、答え出させます。

2話目 『これが答えだ!』

不死川は、真剣な顔をして。
僕の瞳を真っ直ぐ見据えて、答えをくれた。
固い声で告げられた結果は、そういうことだった。

「不死川家の娘として、今のままではお前の気持ちに答えられん」

……そういう、ことだった。

世界が、ゆっくりと僕の体から離れていく。
目も見えて、耳も聞こえて、不死川の匂いさえ分かるのに。
僕の全身が、僕の脳が、僕の魂が、僕の存在が。
すぐにでも消えてしまいたくて、感じた全てをなかつたことにしようとする。

そして何より、僕の心が、それでいいと認めてしまった。

これからの人生は、あとは死ぬだけ。
何も残さないで、何も成し遂げないで。
誰も愛することもなく、ただ死んで、それで終わり。
文句は出るだろうけど、もうどうだっていい。
生きていけないなら、死ぬだけだ。

「ま、待て！ まだ話は終わっておらん！ この世が終わったみたいな顔をするな！」

話に続きがあつたとして、それがどうした。

僕は、慰めの言葉を聞き入れて立ち直るほど馬鹿じゃない。受け入れられなかったっていう、その事実だけは覆らない。なのに、立ち直ることなんてできない。

「その、な？ 今のは、不死川家の娘としての答えであってじゃない……」

それはつまり、やっぱり僕じゃダメだったってことだ。

家のことも含めて、全部ひっくり返して不死川心なんだから。どんな理由があつたとしても、僕には関係ない。

理由とか過程とかに関係なく、結果が全てなんだから。

港三千尋は、不死川心に受け入れられなかった。

それが全てで、他は何もない。

僕は終わった。

僕の全ては無駄だった。

僕が重ねた努力は無意味で。

僕を受け入れてくれることは、もうない。

僕に彼女の愛が注がれることは、もうない。

消えてしまいたい。

死んでしまいたい。

終わってしまいたい。

なくなってしまうたい。

そついうこと以外、考えられない。

「……………ええい、まどろっこしい！ 顔を上げるのじゃ！」

そう言われて、頭を掴まれて。

両手で、無理やり顔を上げさせられて。

……………え……………つと？

ギョツと目をつむった不死川の顔が、僕の前であつて。

不死川の顔は、本当に目と鼻の先で。

何か、口の辺りに……………唇に柔らかいものが当たつてる。

いや、当たつてるんじゃないかと、不死川に押し付けられてる？

不死川が、顔を離した。

いや、あの、状況がね、その、全く掴めない。

告白を断られて、沈んでて、それで不死川の唇？

なんとか状況を整理しても、前後がつかない。

「こ……これが、その……此方の、此方個人の気持ちじゃ」

「えっと……これは？」

言葉が、出なかった。

まだ分からない。

不死川が、僕に何をしたのか。

僕は、不死川に何をされたのか。

脳がもう一度動き出したけど、理解できない。

………そういうことなの？

不死川家の娘としての判断と、不死川心の答えが違う？

そういうことが、あっていいの？

僕は……俺は、そうじゃなかったのに？

でも、それは、つまり。

不死川家の娘は、僕を受け入れられないけど。

不死川心って女の子は、僕を好きでいてくれるってこと？

ってことは……俺は、僕……俺は！

「その、このくらいであれば、してもいいと、思えるくらい、には、好きじゃ」

そんなに顔を赤らめながら、斜め下を向きつつ言わないでくれ！

指をモジモジさせながら、コツチをチラチラ見ないでくれ！
不死川の仕草が可愛い過ぎて、僕の思考がまとまらないんだ！
クソツ！ 落ち着け、落ち着け、落ち着け、落ち着け！
今不死川の様子を脳に焼き付け……あああああああ！
そういうのはイイから、今の状況を整理するんだよ！

……いいか、僕、落ち着けよ？

不死川家の娘としては無理で。

不死川一人人としてはOK。

つまり不死川は、家に反対されてるのか？

そうなると、不死川自身は、僕を恋人にしてもイイってこと？

家のことさえなければ、俺と付き合いたかったってこと？

そういうことだよな？ そういうことでイイんだよな！？

「じゃから、もう少しだけ待ってくれ。父上と母上は、なんとか説
得……って！

ちよっ、ちよっと待つのがじゃ港！ 抱きしめてくれるのはイイが、
場所を考えろ！」

「これでも我慢してんだよ！ 今回だけは勘弁してくれ！」

なんだよチクシヨオオオオオオオオオ！

思わせぶりなこと言って、ビビらせやがって！

タップリ可愛がってやるからな！

泣いたり笑ったりできないくらいに、思いっきり可愛がってやる！

いっぺん落としてから持ち上げるとか、憎いことしちゃって！
このまま押し倒して、既成事実作ってやるうか！？
ああ、クソ！ 時間が全然足りないか！

「いや、ほら、マズイじゃろ！？ 誰か来たらどうするのじゃ！」

「見せつければいいじゃんか！ むしろ見せつける！」

そうさ、見せつけてやる！

俺たちが相思相愛だって、教えてやるんだ！

お望みだったら、既成事実だって見せつけてやるさ！

退学？ 綾小路の権力で、目撃者を黙らせてやるよ！

イロイロ言ってるのに、不死川だって顔真つ赤じゃん！

嬉し恥ずかしな感じだからって、照れなくてもイイのに！

ああ、もう、ホンツツトに可愛いなあ、不死川は！

そうやってジタバタして、男心をくすぐるのもポイント高いぞ！

「ならん！ 家の方には、答えを保留にすると伝えたのじゃ！」

「……………え？」

……………えーつと……………保留？

あの、それは、家の方に嘘ついてるってこと？

それって、不死川自身は問題ないの？

家に嘘ついてくるのって、ヤバいんじゃない？

「あのさ、それ、不死川は大丈夫なの？」

「マズい。だから、おおっぴらに、その……イロイロするわけには
いかなのじゃ」

それを聞いたからには、抱きしめてられない。

僕が不死川を抱きしめてたりしたら、確実に噂になる。

噂になれば、どこかで不死川関係の人間が小耳に挟むかもしれない。
そうなったら、確実にバレる。

だから僕は、口惜しいけど、不死川を腕の中から逃がした。

……今さらだけど、僕、立ってたんだね。

とにかく、大体の状況は掴めた。
頭もスッキリしてきたし、なんとかまとめられる。

要するに、不死川家全体としては、僕を不死川の彼氏にしたくなか
つたらしい。

それでもって、それが分かった不死川は、両親に嘘をついた。

まあ、結婚とかいうところまで来たら、さすがに黙ってるわけには
いかない。

だから『答えを保留にする』って言って、とりあえず急場を凌いだ。
不死川としても、コレで終わるつもりもないみたい。
両親を説得して、どうにか無理を通す自信があるらしい。
まあ、何が悪いのかによるけど、家柄だったらどうにかなる。
ってことで、その辺については、僕に焦りはない。

「すぐに恋人となる訳にはいかん。

でも、此方の気持ちは覚えておいて欲しいのじゃ」

なんて言われても、全然問題ない。

僕としては、それでも充分満足だ。

不死川の気持ちは僕に向いてるなら、それでいい。

誰が何と言おうと、どうにでもしてみせる。

「あ、あとな、港。半端な返事をしておいてすまんが。

その、あの……こ、此方から一つ、お願いがあるんじゃないが……」

「ん？ いいよ？」

あ、安請け合いしちゃった。

ほら、指をモジモジしながら、可愛くいうもんだから、つい。

……まあ、不死川の頼みだったら、何だって聞いてやるよ。

そう、何だって聞いてやる。

蓬莱の玉の枝だろうが、龍の頸の五色の玉だろうが。

望むんだったら、何だって用意してやるし、何でもこなしてやる。俺に出来るかどうかなんて、そんなことは関係ない。

不死川が俺に頼んでくれるなら、出来ないことは何も無い。

僕……俺は、真剣な目で不死川を見つめる。

一字一句聞き洩らさないために、ジッと見つめる。

そんな俺の視線を受けて、不死川は少しだけためらって。

「此方のことをな、その、名前で、呼んではくれぬか？」

そんな、可愛らしい願い事をしてくれた。

いや、ホントに可愛いんだよ。

上目遣いにそんなこと言われたら、俺じゃなくても惚れるだろ。

ここに僕と不死川しかいなくて、本当に良かった！

さて、ようやく名前を呼ばせてもらってステップに入った。

いずれはこうなるはずだったんだけど、その、照れくさい。

いや、呼ぶんだけどさ、改めてだと照れるじゃん。

……まあ、気合を入れて、ありがたく名前で呼ばせてもらおうじゃないか。

「分かった。これからは名前で呼ばせてもらおうよ……」心

照れくさい。

コレでもかっつけてくらい、照れくさい。

相手を名前で呼ぶことが、こんなに気恥ずかしいとは思わなかった。たぶん、俺……僕の顔は、真っ赤になってるんだろう。わざわざ顔を触らなくても分かるくらい、顔が熱くなってるし。何より、不死川の顔も真っ赤だから。言われた側が赤いのに、言った側が赤くないはずがない。

「や、やっぱり、少し恥ずかしいな」

そうやって口にしてくれる様子が、また可愛い。こうまで可愛いと、ちよつと意地悪したくなるよな？ は？ そんなことないって？ なるんだよ、日本男児だったら！

なに、大した意地悪じゃない。さっきは、僕が不死川……心のことを名前で呼んだ。今度は、その逆をしてもらおうってだけの話だ。

「あのさ。せつかくだから、僕のこと名前で呼んでもらっていいかな？」

僕の言葉を聞いて、心は一層赤くなった。元々肌が白いから、ビツクリするくらい赤くなってる。いやあ、何度も何度もしつこいけど、可愛いよなあ！

「いや、それは」

「いいじゃん。お互い名前で呼ぶくらいはさ」

それくらいなら、恋人同士じゃなくても問題ない。

名前で呼び合ってる連中なんか、いくらでもいるんだから。

でも、僕らにとっては大きな意味がある。

僕も心も、異性のことは名字で呼ぶのが基本だからね。

名前で呼び合ってるというのは、特別な異性ってことだ。

これくらいなら、まあ、バレても問題ないでしょ。

僕がジーツと見つめると、不死川……じゃなくて心の顔が更に赤くなっていく。

それが堪らないくらい可愛くて、僕までドキドキしてくる。

だって、今度は心が俯いちゃったんだけどさ。

耳まで真っ赤なのが見えて、照れてるのが手に取るように分かる。

僕の名前を呼ぶって、ただそれだけのことに、ここまで照れてくれる。

なんか……嬉しいのか、恥ずかしいのか。

単純な言葉で割り切れないような、そういう感覚。

僕にもよく分からない想いが、心の奥底から湧き出てくる。

今までの人生で、こういうことは数えるくらいしかなかった。

恋に落ちるってというのは、きつとこつという感覚なんだろう。

心の芯を掴まれて、そのままギュッと握り潰されてしまうような。

嬉しくて、恥ずかしくて、息苦しくて、それでも幸せ。

あー、そっか。

俺、今、幸せなんだ。

そんなことを考えてるうちに、また心が上目遣いに僕を見て。

「ミ……ミチト」

「うえーい！ 一番乗りー ……って、あれ？ 心と港だ」

教室の扉を開いたのは、ざんねーんとか言ってる榊原。

口にはしねえけどよ、榊原。

今この空間で、俺以上に残念に思ってる奴はいねえよ。

うん、死ね。

今死ね、すぐ死ね、早く死ね。

いや、むしろ俺が殺すから、ちゃんと死ね。

頭から地面に落してやるから、脳ミソ垂れ流して死ね。

千載一遇のチャンスだったのに、あと一歩ってところで横槍入れやがって！

もうちよつとで……もうちよつとで名前を呼んでもらえたのに！

狙ってやってるんじゃないやねだろうな、このクソアマは！

返せよ！ 俺の淡い気持ちを返せよ！

甘酸っぱい青春を返せよ、このクサレ女！

あああああああああああ！

葵と仲が良くなきゃ、七浜の海に沈めてやるのに！

金属に溶かしこんで、死体すら見つからなくしてやるのに！

「……榊原さあ、こんな早くから何の用？」

「今日はボクが日直だから、日誌取りに来たんだよ？」

自分の席に荷物を置きながら、榊原が教えてくれた。

まあ、日直にしたって早過ぎなんだけどな！

運動部の朝連でもないのに、こんな時間にくるんじゃないやねえよ！

「……じゃあ、さっさと職員室行って来いよ」

「うん 行ってくるねー」

榊原は、うえーい、とか言いながら、すごいスピードで教室からいなくなった。

そのままこの世から消えてしまえ。

「……………なんていうか、タイミング悪かったなあ」

はあ、と大きく溜め息を1つ。

なんか、榊原のせいで空気が冷めちゃった。

せつかく盛り上がったのに、最悪のタイミングだ。

榊原が来たせいで、台無しになっちゃったよ。

まあ、結果は悪くなかったし、妥協しなきゃいけない。

コレ以上は、また別の機会にしろってことなんでしょ。

……………あーあ、名前で呼んで欲しかったなあ。

次のチャンスが来るまで、いつたいどれだけ待てばいいやら。

とか思っていると、また頭を掴まれた。
さっきと一緒で、唇に唇を重ねられる。
違うのは、今度は押し付けられるみたいなき感じじゃないってこと。
それと、僕がコレをキスって認識できてることだ。

心が、ゆっくりと唇を離していった。
口惜しいけど、いつまでも続けちゃいられないもんな。
いや、心が口惜しいかは分からないけど、俺は口惜しいぞ。
ココが教室じゃなくて俺の部屋だったら、押し倒したいくらいには。

「今日は特別じゃからな……ミチヒロ」

顔が赤いまま、イタズラっぽく微笑む心。
その笑顔を見て、僕は1つの覚悟をした。

もし、心が両親を説得できなかつたら。
そのときに、僕が全力を尽くす覚悟をした。

俺に出来ることなんて、ホントにたかが知れてる。
でも、現状を打破できる可能性は充分にある。
俺も俺で、今すぐにどこまでできるってわけじゃないけど。
是が非でもどうにかしてやるって、そういう覚悟ができた。

まあ、七面倒なこともあるかもしれないけど、
今が幸せだから、それでもイイってことで。

ああ、そうそう。

この後、HRの時間に榊原がさ。

『心と港が、教室の中で顔を真っ赤にしてましたー！』とか抜かし
やがって。

ちよっとした騒ぎになったりしたんだけど……。

まあ、とにかく。

今日は、本当に幸せな1日だった。

本当に、幸せな1日だった。

2話目『これが答えだ!』（後書き）

これが答えですとも!

ええ、必死に考えた答えがコレです!

1話に詰め込み過ぎたけど、私の精一杯です!

さて、一応、一つ区切りがつかしました。

ちよつと間が空きすぎて、肩透かして申し訳ありません。

そして、まだまだ長く話は続きます。

もう少し……かなりお付き合ひ頂けると、私も嬉しいです。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘などなど!

できれば書いていただけると、今回は特にありがたいです。

3 話目 『木見て森を見ざれば』 (前書き)

なんというこたない1日の話です。

3話目『木見て森を見ざれば』

今日は久々に、半日オフの日曜日。
街をブラブラして、イロイロと七浜を見て回ったところだ。

落ち着いた雰囲気の喫茶店に、清潔感のあるレストラン。
あんまり人が入らない映画館も見つけたし、ブティックにも顔を出した。

水族館の定休日を確認して、館内ショーの予定も把握した。
コンサートホールでやる公演の内容も、バッチリメモを取った。

……まあ、つまるところ、デートスポットを見て回ったわけだ。

だってさ、仕方ないじゃん！

心と一緒に遊びに行きたかったけど、タイミングが悪いんだもん！

心と僕が相思相愛だって、そこまではいい。

ただ、心は両親に『告白されたけど、答えは保留にした』って伝える。

曖昧な返事を返した相手と、休みの日に遊びに行く。

少し考えれば、コレがいかにも不自然な事かっていうのが分かると思う。

だから、それが分かってるから、いきなり遊びには行けなかった。

手がなかったわけじゃないけど、無理はいけない。

タイミングが悪いなら、出来る限りのことをすればいいだけだ。

ってことで、たまには自分の足でデートスポットを探してみようってことになった。

まあ、商店街の本屋で買った、デートマニュアル見ながらだけどね。

それにしたって、新発見が多かった。

こうやって街に出るのが初めてっていうのもあるけど、人の流れが面白い。

1人のヤツも、友達連れも、カップルも、親子も。

同じようなカテゴリーの連中は、みんな同じような場所に行く。

定番って呼ばれる場所が合って、大抵はそこを目指すわけだ。

つまり僕は、そこから外れたデートスポットを探せばいいってこと。

まあ、ある程度は調べが付いた。

高校生2人が人目を忍んで遊ぶには、それほど場所は多くない。

コンサートホールとか映画館は使い回しが利くだろうけど、そこくらいかなあ。

水族館なんて、何度も同じところ行っただって楽しくないでしょ。

とにかく、もう今日は自分的に精一杯ってことで。

ダイエツトコーラ片手に、壁を背もたれにして一服して。

大和田さんに遭ったのは、そういうタイミングだった。

「み、港先輩!？」

ラフな格好してるってことは、彼氏と遊びに来てるわけじゃなさそう。

誰か一緒にいるとしても、せいぜい由紀江ちゃんとかくらいかなあ。

……っていうか、そもそも彼氏がいるんだっけか？

まあ、ただの後輩だし、根掘り葉掘り聞いたわけじゃないんだけど。

っていうか、そんなに驚くこともないのに。

僕が1人で街にいるっていうのが、そんなに变だったかなあ。

確かにイメージつかないかもしれないけど、少し酷かないだろうか。

「おお、珍しいね。大和田さんも、なんか見に来たの？」

とりあえず、声を掛けられたからには社交辞令。

僕だって、これくらいの気遣いはできるんだよ。

でも、そんな僕の気遣いを受けて、大和田さんは眉をひそめて。

「……はい、ちょっと」

なんて、曖昧極まりない返事をくれた。

ハッキリ言つて、ちょっと様子が変だ。

大和田さんが僕を苦手って思ってるのはイイとして、あの目つきは妙だ。

僕の言葉の真意を探るみたいなの、警戒に近い視線だった。

「えっと、今つて1人？」

だから、僕は大和田さんを試すために、わざわざ怪しい質問をする。いや、怪しいってというのは、真意が読み取り辛い質問ってこと。なんだかんだ言つて、僕と大和田さんは先輩と後輩。街で遭つたなら、こういう質問をしてもおかしい間柄じゃない。

「あー……はい、1人です」

予想通り、大和田さんの反応は引つ掛かるもんだつた。

この子、僕が心のことを好きだつて知つてたよなあ？

それに、武蔵が僕にモーションかけたことも知ってるはず。そんな相手に、ここまで警戒心を剥き出しにするもんか？

「急用なのかもしれないけど、1人歩きはよくないよ？」

なんなら、近くの駅くらいまでだったら送って行こうか？」

「いえ、結構です！　ありがとうございます！」

そんな風に言いながら、大和田さんはダッシュでいなくなった。

……　ちよつと親切にした結果がコレだよ。

まあ、大和田さんがイイって言ったなら、別にイイんだけど。

追っかければ追いつくにしても、それじゃ不審者みたいだし。

手助けするにしても、向こうから頼まれるまではほつときゃイイさ。

ん？　薄情だとか、バカ言っちゃいけないよ。

なんで頼まれてもないのに、骨折ってやらなきゃいけないのさ？

僕のことを避けたヤツに能動的に力貸すとか、ありえないから。

……　まあ、向こうから頼んでくるんだったら、考えてはみるけどね。

ちびちびとコーラを飲んでたら、10分ちよつとも掛かった。

まあ、深い意味はないんだけど、イロイロと考えることとしてたから
ね。

心のことは、まあ、どうにでもなる。

心の想いが僕に向いているうちは、どうにかして見せる。

僕が気をつけなきゃいけないのは、愛想を尽かされることだけ。

それにさえ気をつければ、よっぽどのがない限り大丈夫なはず。

で、そのよっぽどのが起きる可能性の1つが問題だね。

武蔵のヤツが、これからどう動くかってところなんだよ。

僕と心が仲良くなってる様子を見て、告白が失敗したとは思わんでしょ。

素直に諦めてくれりゃいいんだけど……アイツのことだから、何かするかもしれない。

まあ、その何かも検討が付かないから、手の打ちようもないんだけど。

あとは……ああ、そうそう。

最近テンション高いせいか、天ちゃんに病院に連れてかれそうだったんだよ。

『ヤバいくスリじゃないって言ったじゃねえかよ!』とか言いながら。

やっぱり、鼻歌交じりにケーキ作ってたのがマズかったんだよ。

とにかく、あのときから、ちょっと人前では自重するようにしてる。

……天ちゃんが言うくらいだから、よっぽど酷かったんだろうしね。

そついう風にイロイロ考えてると。

とてもよく知ってるヤツが、僕の視界の中に入った。

ソイツも僕に気付いたみたいで……やだなあ、面倒くさい。

「おお、三千尋ではないか」

「どうも、お久しぶりです」

綾小路麻呂……麻呂兄さんが、僕に声をかけてきた。麻呂兄さんがどこにしよう、本人の勝手だけど。なんていうか、休日に来て見たい顔じゃないよなあ。

まあ、顔も何も、おしろいで真っ白だ。

服装は……いつも学校で見るのと、そんなに変わんない。チヨッキと綿パンと白いYシャツで、手には高価な扇子。違うのは、ネクタイをしてないところくらい。

川神学園に通ってるヤツなら、誰でも分かるだろうね。

「毎日学校で顔を合わせておるのじゃ。久しいということはあるまい」

「こうして個人として会うのが久しぶりってことですよ、麻呂兄さん」

個人として顔を合わせたのは、僕が高校1年の時の夏以来だ。僕が綾小路の方に顔出すってことが、そもそも滅多にないし。麻呂兄さんが港に足を運ぶってのも、ちよつと無理があるし。今となつちゃ、同じ学校にいる教師と生徒だ。

イトコ同士だけど、まあ、こういう風に個人で話す機会が全然なかった。

基本的には、そんなに悪い人じゃないんだけどなあ。

ちよっと増長しやすくて、人間としての器が小さめなだけで。

昔は、もう少しくらいマトモだった気がする。

今は…… 鼻屑目に見ても、権力におぼれた頭のかわいそうな人だ。

「何事か、用でもあったのかえ？」

「ええ。物理の参考書が欲しくて、コチラまで足を延ばしてしまいました」

もちろん、そういう思いは顔に出さない。

もう何年もこういうことしてきたんだから、今さらボロは出ないさ。咄嗟に素敵な嘘をつけるのも、もうクセみたいになってるから。

「勤勉なのはよい。学生のうちは、存分に勉強するでおじゃる」

まあ、この人にだったら言ってもイイのかもしれない。

綾小路の方から、不死川に話を通してくれるかもしれないし。

そうすりゃ、僕と心はアツサリ結ばれて、ハッピーエンドだ。

ただ…… 不死川まで港に味方するんじゃないかとか、港が綾小路から離れるとか。

そついう下らないこと考えて、邪魔をしてくる可能性も否定できない。

……うん、黙ってて正解だった。

「して、その参考書はいくらした？」

「あー……いいですよ、仕送りは足りてますから」

「遠慮するでない。これくらいは従兄として当然のこと」

ホント、基本的には悪い人じゃないんだよ。

まあ、家柄のあるヤツとか、身内相手だけではあるんだけどさ。どこで間違えたんだろうなあ、麻呂兄さん。

図に乗りやすく気が利かないけど、悪い人じゃなかったのに。

ともかくにも、麻呂兄さんがしつこかったから。

『お言葉に甘えて』っていうと、いきなり諭吉を押しつけられた。釣りはいらなとか何とか言ってるけど、それは当然だよな。

綾小路の金のほとんどは、港の稼いだ金なんだから。教員として稼いだ金から出してるんだったら、まあ、ありがたいけどね。

「ときに三千尋。格闘技は、楽しいかえ？」

「ええ、楽しいですよ。身を引き締めると、心まで引き締まります」

「そうか。楽しいのであれば、それは良い。うむ、それは良いぞ」

噛みしめるように言いながら、麻呂兄さんは勝手に頷く。

うん、そりゃ楽しいに決まってるじゃん。

体を動かすのは好きだし、相手に勝つのは面白い。

やめさせられたら、悔しくて爪が手に食い込んでうくらい好きだ

よ？

「ところで、麻呂兄さんはコチラに何か御用ですか？」

「おお、そうじゃそうじゃ！ 麻呂としたことが忘れておった！」

少しムカつく話だから、話題をシフトする。

だってさ、僕が空手辞めたのって、綾小路の命令じゃん。

その綾小路の人間から、そんな話をされて気分がイイはずもない。

「まあ、パトロールといったところじゃ。

最近は、夜遊びをする生徒が目立つものでな。学園に苦情が多数来ておる」

そうじゃから、麻呂が見回っているのでおじゃる。

なーんて、愚にも付かないことを言い出した。

そういう生徒を見つけたとして、どうやって家に帰すんだか。

麻呂兄さんは体力もないし、威厳だって人並み程度。

相手を丸め込む話術もなければ、機転も利く方じゃない。

こんな人が見回りしたって、せいぜい自己満足にしかならないですよ。

まあ、実際、自己満足でやってるんだらうなあ。

「そうですね……お体に触らないように、気をつけてくださいね？」

そんな角が立つこと、いちいち言わねえけど。

「三千尋も、怪我や病気などせんようにな。

学生時代は、1日1日がかげがえのないものと心得るでおじゃる」

僕の言葉を真に受けた麻呂兄さんは、嬉しそうにそう言っつて。

挨拶もそこそこに、そのまま人混みの中に消えて行った。

うーん……きつと、麻呂兄さんは本気で心配してくれてんだよなあ。年下相手に、表面上だけの気遣いとかできるタイプじゃないし。もうちょっと、どっちなかに偏ってくんないかなあ。

じゃないと、見捨てようかどうか、真剣に悩まなきゃいけないじゃん。

まあ、特に用事があったわけでもなし。

とりあえずスーパーの特売に顔出して、足りないモンを買ってった。

今は、帰路についてる。

ちよつと大きめのスーパーの袋を右手に、ゆっくり歩く。

日は落ち始めてるけど、こんだけゴツイ男なら身の心配もないしね。

……しかし、大和田さん大丈夫かなあ。

僕と会ったときには、かなり変な感じだったけど。

でも、アレがどういう意味なのかは、僕にも分からない。

なんで僕を見て、あんな風に驚いたんだろうか？

そもももって、そのあとの警戒するみたいな視線。

僕がいることに驚いて、さらに警戒する。

しかも、かなり焦った感じだったけど……本当に何があつたんだろう？

まあ、心が関わらない限りは、どうでもイイんだけど。

……それでも、ちよつぴり気になってはいる。

あーあ、こういう甘いところがあるから、肝心な時にミスするんだよなあ。

「んっ」

ふと、後ろを振り返った。

少し気を引き締めたら、僕以外の足音が聞こえたから。

でも、振り返ると誰もいない。

フランク中将の差し金だったら、見つかったら襲ってくるはずだ。

それがないってことは……誰だか知らないけど、勝手にすればイイさ。

僕に気付かれるような奴なんか、怖くもなるともない。

それに、今さら追っても意味がない。
だってさ、隠れるところっていったら、道の角くらいだもん。
僕に気付かれたっていうのに気付いてるなら、面倒になるかも知んないし。

そう思って歩き始めたけど、僕以外の足音は聞こえなかった。
うーん……まあ、向こうさんも急用じゃないみたいだし、ほっとけばいいか。

不死川に手え出したら、じっくり殺すけど。

3話目『木見て森を見ざれば』（後書き）

えー、不死川不参加です。

ワンクツション置かせていただきました。

次回は不死川を書けそうですが……頑張りたいところです。

……また、ちよつとした長話に入りますので、それだけ先にお伝えさせていただきます。

性懲りもなく、同じことを書かせていただきますが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、諸々お待ちしております。

ダメだったら『ダメ！』とハッキリ言っていただけると、ちよつとMな私が喜ぶので、是非そつしてやってください。

4話目『ゆるやかな始まり』(前書き)

また、なんてことない日常の……
次が、その次あたりには戦闘シーンを書きたいところです。

4話目『ゆるやかな始まり』

9月7日、月曜日。

順風満帆で、人生はバラ色。

今だって、こうして幸せを噛みしめてる。

心と一緒に昼食だからか、いつもより飯が上手い。

おろしカツ定食を僕が食ってて、心は月見うどん。

それと、学食で一番高いデザート：贅沢プリンを1つずつ。

そんなメニューで、正方形の4人掛けの席の対面に座って飯をつついでる。

それだけだといつも通りだから、少し変わったことしようと思つて、カツを一切れ取って『はい、あーん』ってやったら、おぼんで殴られた。

顔を真っ赤にした心が可愛くて、思わずもう1回やって、もう1回殴られてみたり。

こういうのをきくと『愛が痛い』とか言うに違いない。

今だったら、ちょっとだけヒビキの気持ち分かる気がする。

まあ、いつまでも続けてるわけにはいかない。
夫婦漫才なんてしてる暇があったら、話すべきことが他にある。
……なんかいい響きだなあ、夫婦漫才。

つと、そうじゃないそうじゃない。

話さなきゃいけないことが、他にあるんだよ。

「それで、ミチヒロはどうするのじゃ？」

「出るよ？ せつかくの機会だからね」

まあ、川神ランキング特別試合の話だね。

なんていうかさ……バカだよー、ホントに。

学校に来て校内新聞見たら、そのことがポンと書いてあってビックリしたよ。

あれだけの怪我人出しといて、まだ続けようってんだから。

しかも、前回よりも試合そのものが厳しくなってる。

参加人数が8人で、その8人によるトーナメントって形なんだけどさ。

1日で終わらせるとしたら、最多で3試合しなきゃならない。

これって、普通にキックボクシングとかのトーナメントと変わんないんだよ。

その代わり、今回は志願制ってことになったみたい。

希望者が8人以下だったら中止して、8人超えたら学園側が選抜す

るらしい。

ここで『希望者のうち上位8人』って言わないのがいやらしいよね。コレはつまり、学園側が好きな生徒を選んで戦わせられるってことだ。

まあ、何が問題かって、そこが問題だったんだよ。

「貸しにしておくぞ」

「ありがたく借りておくよ」

そう言うってから、僕はカッを口に運んで。

口の中でモコモコやりながらだけど、本当に安心した。

今の貸しとか借りってというのは、試合に出るかでないかって話。

今回は実態が分からないから、心には出場を我慢してもらった。

だってねえ……トーナメントってことは、僕と心が当たるかもしれないんだもん。

いくら試合って言っても、好きな女の子とは戦いたくないからね。

それにさ、ちょっと危ないのが出るみたいなんだよ。

誰かっていうと、コレがマルギツテじゃないんだわ。

川神ランキングどころか、決闘すらしたことない奴だから。

まあ、強いのもそうだけど、それ以外にもヤバい部分があつてさ。

とにかく、心が出なければ万事問題ないから、どうでもいいんだけど。

「しかし、意外じゃったな」

「ん？ 意外って、何がですか？」

「上の連中が抜けたのと、新しく人が増えたことじゃ」

「あー……まあ、確かに意外だったね」

アマレスの柴田先輩、キックボクシングの向井先輩、ボクシングの野村先輩。

この3人が、この間の特別試合を見たせいか、川神ランキングから抜けた。

ハッキリ言って、誰もがプロの世界で通用するようなメンバーだ。学校行事で将来を奪われるとか、この人からしたら冗談じゃないよね。

プロで食ってけるって言われてた戸田先輩が、もうダメになっちゃったらしいし。

まあ、上の連中が抜けてくれたのは助かる。

こう言ったらなんだけど、僕も心も無傷で勝てる相手じゃなかったからね。

そういう奴と勝負せずに順位が上がったっていうのは、ありがたいことだよ。

お陰さまで、5位以上に配られる上食券でリッチな昼飯が食えてるし。

ん？ いやいや、ちゃんと計算は合ってるよ？

この前の試合でクリスティアーネに勝って、順位が8位になったじゃん。

それで、上が3人抜けたから、7、6、5つて順位が上がるでしょ。まあ、あの試合もランキングの入れ替えに関係あったってのは嬉しい誤算。

自然な感じで、心に贅沢プリンを奢ってあげることでもできたしね。

まあ、いなくなる連中のことはイイんだよ。

それよりも、新しく入ってくるメンバーが意外だった。

「正直、入江と榊原が出るなんて思わなかったよ」

「私もです。校内新聞見てビックリしちゃいましたよ」

何の因果か……ジムの後輩の入江と、同じクラスの榊原。

補強メンバー5人のうちの2人が、僕たちの知り合いだったことだ。校内新聞に『電撃参戦!』とか書いてあったけど、電撃過ぎて声が出なかったわ。

どこまで上がってくるか知らないけど、少し面倒なことになりそう。

入江なんかは脅せばどうにでもなるから、放置でOK。

他の連中も、基本的には大したことなさそうなんだけど……榊原がね。

運動神経が普通じゃないし、何より、アイツも何か格闘技をやっているらしい。

足が太めだから、キックボクシングか何かだと思っけど。

葵のツレだっというのもあってし、ちょっと殴りにくいかも。

関節取ってギブアップさせて、それで終われる相手だったらイイん

だけどなあ。

「まあ、どちらにしても此方の敵ではないのじゃ」

「うーん……油断はしない方がイイと思うんだけどね」

「そうですね。油断してたら、不死川先輩でも簡単に負けちゃいますからね？」

……そろそろイイだろうか？

イイよね？ プリン以外は全部食ったんだし。

っていうか、そろそろツッコませてくれ。

無視しようと思ったけど、もうダメだ。

さっき心が相手にしてた時点で、もうダメだったとは思っけど。

「油断大敵っていうじゃないですか。ですよ、港先輩？」

さっきからずっと、僕の左サイドに武蔵が座ってるんだよ。



いやね、僕だつて何度もツツコもうと思つたよ？

でも、ほら、声かけたら向こうもなんか返してくるよね？

そうやってズルズルと会話を繋がれると、あっという間に昼休みが
終わっちゃう。

……とか考えて我慢してたんだけど、もう限界だった。

とりあえず、武蔵。

僕の前に出てくるときは、最低でもブルマを履いてこい。

「ねえ、武蔵。何か違和感とか感じないのかな？」

「違和感ですか？ ……そういえば、ちょっと汗がヌルいですね」

「うむ、言われてみれば、なんとなく温度が低い気がするのじゃ」

うどんの汁をすすりながら、2人して文句を垂れる。

汗がヌルいのは、単純に時間が経ってるからだと思っただけ。

じゃなくて、そこじゃない！

クソ！ なんて心が流されてるんだ！

最初は僕と一緒に無視を決め込んでたのに！

本当に気の利かない後輩だよなあ、チクシヨウが！

「……由紀江ちゃんたちと食ってこいよ」

「そ、そうじゃ武蔵！ 友人をないがしろにするでない！」

えーっと、心は今気付いたのか。

いやあ、ちよつと又けるところも可愛いなあ。

恋人同士だったら、放課後の教室でイケナイことしちゃいたいくらい。

欲求不満なわけじゃないけど、やっぱり相思相愛なわけだし。

こう、キスも終わってるし、ほら、一線を越えたくもなるじゃんか。

「イイじゃないですか、先輩たちと一緒にお昼ご飯食べたって」

「昼飯の時くらい、先輩達に気を遣ってくれ」

まあ、今はとにかく武蔵を排除だ。

僕のささやかな幸福は、こんなことで途切れさせやしない。

まだ、贅沢プリンで心に『はい、あーん』ってやってないし。

「気を遣うって……付き合ってるわけじゃないんですから」

呆れた顔して武蔵は言うけど、コツチだって事情があるんだ。

それに、お互い好きなんだからイイじゃんよ。

コイツだって、その辺のことは分かっているだろうに。

……あーそっか、コイツ、分かかってて邪魔しに来たのか。

いや、僕のこと好きなのは結構だよ。

誰かに好かれるっていうのは、悪い気分じゃないからね。

でも、僕の不利益になるようなことはしないで欲しい。

「なあ、武蔵。確かに此方らは付き合ってるわけではないが」

「付き合ってるわけじゃないけど、なんなんですか？」

「此方らは、その、お互いを好き合っているというか……」

よし、ナイスだ心！

何がナイスって、恥ずかしそうにしてる姿がナイスだ！

しかも、直接じゃないけど、僕のことを好きって言うてくれた！

ああもう、なんでこんなに可愛いんだよ！

抱きしめて転がりまわりたい気持ちを抑えるので精いっぱいだよ！

「告白の返事を先延ばしにしたのに、よくそんなことが言えますね
」？」

でも、この言葉を聞いて、心が固まった。

……まあ、うん、そこはちょっと言い返せないところだよな？

今さら混ぜ返すつもりはないけど、息苦しい思いはしてたもん。

「なっ……そ、それは事情があつてのことで、返事に困つたわけ
は………」

「へー、そうですか。返事に困つてたわけじゃないんですか」

なるほど、返事に困ってたわけか。

まあ、結婚を前提につき合ってくれって言われたら、そりゃ困るよなあ。

これは心じゃなくて、マヌケな告白をした僕の責任だ。

そういう意味じゃ、僕のせいで迷惑かけたみたいで少し心苦しい。

あたふたしてる心が見れて良かったっていうのは、絶対に口には出さないぞ。

「あんまりボーっとしてると、港先輩のこと、盗っちゃいますよ？」

危ねえええええええ！？

あと1秒早かったら、コップの中の水を口に含んで、一気に吹き出すところだった！

コイツは……コイツはいきなりなんてこと言いやがるんだよ！

おま、ホントにコイツは、ココが学食だって分かってやってるんだな！

クソが！　なんかコッチ睨んでくる奴が増えたじゃねえか！

心と一緒にいるうちは、無視決めるところと思っただのに！

「無駄だと思うが、できるものならやってみるのじゃな」

「そこまで言うんだったら、そうさせてもらいますね」

そんな言葉を聞いた心は、不敵に笑ってそう告げた。

いや、僕のことを信じてくれるのはイイんだけど、嘘でも嫌がってよ。

自信満々な表情も素敵だけどさ、ちょっと悲しいなあ。

……そういうところが問題じゃないんだけどね、コレ。だってさ、心が『ミチヒロにアプローチしていいよ!』って言ったようなもんだし。

コレを口実にして、武蔵がイロイロやってきたりするんだろっなあ。まあ、振り切る自信はあるけど、面倒なことになりそうだ。

「で、武蔵。お前は何の用でココにいるんだ？」

だから、早めに話題を逸らす。

今のやり取りを忘れてくれりゃ、僕は助かるからね。

武蔵のことだから、しつこく覚えてそうだけど。

「何の用って言われても、別にコレといった用はないですよ？
今朝は会えなかったので、今の内に先輩の顔を見ておきたかっただけです」

「なら用は済んだな。コレをくれてやるから、とっとと帰るのじゃ」

……心は、コレで武蔵が帰ると思ったんだろうか。

まあ、僕も追い返すような手が思いつかないだけどさ。

上食券1枚で2つの、コストパフォーマンス最悪な贅沢プリンを差し出すなんて。

いっぺん食ったことあるけど、甘くてトロツとして美味しかった。

僕の分をあげればいい話だけど、あんなにアツサリ手放すとは思わなかった。

「……なかなか魅力的な提案ですね。」

プレミアムだけど値段と釣り合わないって聞いてたので、手が出なかつたんですよ」

僕はプリン以下か。

そりゃ、そんなに自信があるわけじゃないけど……警沢プリンか。上食券半分の価値しかないモノと比べられてるのか、僕の顔は。武蔵の奴、僕のことが好きって言うの、実は冗談なんじゃない？

「分かりました。それじゃあ、コレ、貰ってきますね」

しかも、プリン選びやがったよ。

僕のが好きなら、プリンの1つくらい諦めろよ。

いや、引きさがってくれるのは嬉しいんだけど、でもなあ。あんなウキウキした表情で言われると、ちょっと傷つくぞ。

あのあと、武蔵は贅沢プリンを持ってさっさと帰ってった。
なんというか、引き際はちゃんと心得てるらしい。
そこまで分かってるなら、初めから来ないで欲しかったけどね。

もちろん、贅沢プリンは僕の分しか残ってなかったから。

まあ、気前よく、心に全部あげちゃった。

『はい、あーん』をして殴られたけど、愛だから問題ナシ。

結局、その方法でも一口は食べてくれたし、僕としては満足だ。
目をつむって『あーん』をしてる心は、それはそれは可愛かったよ。

で、今は放課後。

いつもみたいに、2人で肩を並べて廊下を歩いてた。

って言うっても、例の特別試合の申請に行く途中なんだけどね。

何か口実を作っては、2人でいる時間を作る。

正式に付き合っていないとはいえ、恋人っぽくてなんだか嬉しい。

これからも、どんどんと理由をつけて2人っきりの時間をつくることにしよう。

「なあ、ミチヒロ」

「ん？ どうしたのかな？」

ふと、人の気配が切れたところで。

心が急に立ち止まって、僕の顔を見上げてきた。

いつもと同じ表情だけど、真っ直ぐと僕を見つめてる。
こっぴどい顔をされると、心の中を覗かれてるみたいでドキドキして
くるよね。

「正直に答えるんじゃないぞ?」

「そりゃもう、正直に答えるよ?」

それは、僕が正直に答えないかもしれないってことか。
えーっと、つまり、そういう質問をするってこと?

もう答えるって約束しちゃったから、どうしようもないけどさ。

そっぴどい風に、何の気なしに嘘をつかないと誓った僕に。
心は、さっきまでと変わらない声で言い放った。

「夏休みの間に、武蔵と何かあったじゃろ?」

怖っ! 今、背骨から震えるくらい怖かった!

表情も声も大して変わってないのに、なんか凄い圧力があるんだけ
ど!?

いや、これは心のせいばかりじゃない。

僕の心中にやましいところがあるから、だから鋭く感じるんだ。
まあ、武蔵に抱きつかれて告白されたってこと、黙ってたしね。
コレがやましいことなのかどうかは微妙だけど、背筋が凍る思いに
なる。

「えーっと……その、怒るようなことじゃないと思うけど、怒らない？」

「まずは言ってみる。話はそれからじゃ」

終わった。

女性の使う怒らないって言葉は、私が気分を害さなければってのが足りてない。

っていうか、心は怒らないって約束すらしてくれてないよね。

まあ、結局、包み隠さず話したよ？

重要どころだけピックアップして、聞かれないところはボカしてね。

それでも心に何度も怒られたけど……まあ、最後には分かってくれたからイイか。

ただ、少しだけわがママを言わせてもらうんだったら。

武蔵に告白されたって話を聞いた途端に、大内刈り決めて壁にぶつけないで欲しかった。

4話目『ゆるやかな始まり』（後書き）

えー、ちょっととした前フリをしつつ、日常のシーンを書かせていた
できました。

川神ランキングの特別試合をもう1度やりますが……はい、あんま
り注目されてません。

一人称視点なので、地の分が主人公の興味の強さに左右されている
と考えていただけると幸いです。

不死川心とイイ関係になった今、そういう試合程度のものは、彼の
中では小さなことに過ぎません。

べっ、別に、心と武蔵の話と、川神ランキングの話をもとめて書く
のが大変で、途中で挫折したわけじゃないんだから！

ほっ、本当なんだからね！

……はい、ツンデレっぽい言い訳は置いておきまして。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、諸々お待ちしております
おります。

キツめのご指摘にも耐えられるタフさを追求しておりますので、バ
シバシお願いします。

それと、ちょっと私生活が忙しくなってます。

次回更新まで間が空きますが、ご容赦いただきたく思います。

幕間『一子のススメ』（前書き）

一子視点です

幕間『一子のススメ』

私は勝たなきゃいけない。

だから、勝つために最大限の努力をする。

たったそれだけのことが、私を変えた。

修行する時間は同じだけど、新しい技を積極的に覚えるようになった。

新しい技っていうのも、今まで使ってたような技とは完全に違う。指を折ったり、耳の穴を削ったり、目の表面をこすったりする技。ルー師範が嫌いな、相手の人生まで壊す技を教わるようになった。

今の私は、昔の私とはなんか違うんだって。

風間ファミリーみんながそう言うんだから、私は変わったんだと思う。

それに、私自身も『自分が変わった』っていう実感があるから。だからきつと、私は昔とは違うんだよね。

でも、私だけじゃない。

風間ファミリーみんなが、少しずつ変わってきてる。

京は、大和と付き合いだしてから、大和から離れなくなった。

クリは、金曜集会以外で滅多に基地に来なくなった。

お姉さまは、溜息をつく回数が日に日に増えてきて。

まゆっちは、初めて集まったときよりも肩身が狭そうにしている。

キヤップは、今までよりもアルバイトに時間を使うようになって。

大和は、京と付き合いだしてから、京から離れなくなった。
ガクトは、なんだか前より少し落ち着いてきて。
モロは、まゆつちやクリと全然話さなくなった。

みんな代わったんなら、それでいいじゃない。

私だけ変わらないなんて方が、それこそ変なんだもん。

私が変わったのも、きっと自然なことだから。

だから、みんなから心配されるようなことじゃない。

いいじゃない、勝ちたかったんだもん。

相手の膝を壊したくらいで、大騒ぎしないでほしかったな。

今が9月の初めの方だから、ちょうど1か月くらい前だったかしら。

夏休みって言うこともあって、いつもよりたくさんの人が川神院に来てた。

いろんな人って言うっても、大学性とか高校生が多かったかな？とにかく、たくさんの人が川神院に来てた。

もちろん、ただ見学に来るって人は少なかった。

ほとんどの人は、修行や腕試しが目的だった。

大抵は、修行僧の人とか、ルー師範にやられちゃうんだけどね

ただ、夏休みだったから、大学生や高校生が多かった。

私と同じくらいの年齢の人が、たくさんいた。

だから、じーちゃんはわざわざ、そういう人たちの相手を私にさせた。

そりゃ、私の方が強かったよ？

川神一子になってから、必死に鍛えてきたから。

そこら辺の高校生とかがカジッたのとは、わけが違う。

武術は私の生活の一部で、人生の根っこになってる。

趣味や遊びでやってる人たちに、負けるはずがない。

……そういつ見通しがあったのが、少し良くなかった。



その人は、大学生だった。

背も高くないし、使ってくる技もありきたり。

服装通り、空手の技しか使ってこないような人だったから。

私の勝てないような相手じゃない、と思ってた。

でも実際は、堅い筋肉と、重たい打撃を持ってた。

そして、遅くても攻撃を当てられるような工夫もしていた。

素手で戦う限りは、明らかに私よりも格上の相手だった。

「くっ！」

無言で出してくる右ストレートは、速くないのに避けられない。

重くて、固くて、ガードした腕に鉄球をぶつけられたみたい痛みが走る。

そのあとに出した左のローキックも、足を切り落とされたと思うくらい威力だった。

右構えだった私の右足……奥足を蹴られて、思わずバランスを崩すくらい。

もちろん、私はすぐに反撃した。

左のローキックを返して、その足を踏み込んで、打ちおろし気味の左フック。

フックはわざと外して、死角と体のタメを同時に作り出した。顔に近いところにパンチが飛んできて、ガードが上がってる。つまり、腹部のガードが甘くなってる。

そして私は、さっき作ったタメで、右の『蠍打ち』を鳩尾に決めた。

川神流・蠍打ち。

鳩尾に対して打ち抜くような突きを放つことで、体内にダメージを与える技。

要はボディブローみたいな技なんだけど、いちいちタメを作らなきゃいけない。

それに、相手の肉が厚かったりしたら、十分に衝撃が伝わらないこともある。

それでも私は、工夫して蠍打ちを決めて、相手を倒した……つもりになっていた。

十分に打ち抜けなかった。

少しだけ重心を落として、半歩踏み込んで。

蠍打ちが当たるタイミングをずらされて、威力を殺されてた。

フェイントまでつけて、最小限の隙で、全力で出した蠍打ちが。

右の手首を痛めたけど、相手は止まってくれない。

前に出たままになってる私の足の内ももに、鋭いローキックを当てた。

打ち抜くような蹴りじゃなくて、弾くような、表面を傷める蹴り。

川神流には存在しないけど、今の格闘技では普通に使われてる蹴り。

そして、左足の痛みを意識を奪われているうちに。

私を殺すんじゃないかってくらい鋭い左フックが、顔に向かって放たれた。

間一髪、紙一重。

そういうタイミングで、なんとかフックを避けた。

スウエーできなかつたから、逆に一步踏み込んでフックの内側に入つて。

左足が痛んだけど、それでもなんとか踏ん張って耐えた。

耐えて、相手の左襟と右袖を掴んで、なんとか組みついた。

相手は、フルコンタクト空手をやってるって話だった。

だから私は、いざとなったら投げ技でどうにかするつもりだった。

古流武術なんだから、ちゃんと川神流にも投げ技はある。

打撃しかやったことのない人だったら、簡単に投げて終わらせられる。

そついう風に勝手に勘違いして、私は首投げで投げられた。

なんとか受け身を取つたけど、下は石畳。

ダメージを完全に殺すことなんてできなかつた。

おまけに、そのまま袈裟固めに入られて、体の自由も奪われた。

思えば、私は焦り過ぎだった。

相手の言葉を鵜呑みにして、相手の力量を見誤つて。

なかつたはずのチャンスに飛びついて、抑え込まれる。

それは全部、私の弱さと甘さのせいだ。

私は負けられない。

こんな、なんてことない戦いで負けられない。

負けちゃったら、私はもう目指すことさえ許されないから。

私が夢を見続けて、叶えるためには、ここで勝たなきゃいけなかった。

私は、弱くて甘い。

勝つためには、強くなるか、甘さを捨てるしかない。

でも、今すぐに強くなるなんてできないから。

だから、甘さを捨てることにした。

「がっ!?!」

奇妙な悲鳴をあげて、その人は私の目を見た。

それで、険しい顔をして、袈裟固めを解いて私から飛び退いた。

私は袈裟固めから解放されて、立ち上がった。

本格的に肺を圧迫される前だったから、投げられた分のダメージしかない。

でも、その投げのダメージは、私の左腕を十分に使えなくしていた。もし受け身を取ってなかったら、反撃もできなかったかもね。

その人は、十分な距離を取って、構えを取りながら右耳を片手で抑えてる。

抑えていた手を離すと、耳の穴からゆっくりと血が流れてきた。私が見たとき、人差し指で耳の中を抉ったから、そういうことになっていた。

普通だったら、こんな技は使えないし、使わない。

抑え込みから逃げるためには有効な技だけど、試合で認められていないから。

でも、これは試合でも練習でもなくて、特にルールを決めてない立ち会い。

有効な技があれば、それを使うは当然だよな。

不意打ちをしたわけじゃないんだから、油断してた方が悪いはず。

ただ、やっぱり私は相手を甘く見てた。

私の反則みたいな攻撃を受けても、すぐに気迫を取り戻してさっきまでと変わらず、両の拳をあげて構えを取っていた。

初めて、その人が先手を取った。

私が蹴りの間合いに入った瞬間に、鋭くて速い前蹴りを出してきた。さっきまでの攻撃とは、何から何まで違う、本気の蹴り。

相手が女だからとか、年下だからとか、そういう甘さを捨てた蹴りだった。

とても左右に避けられるような一撃じゃなかったから。

だから私は、一歩下がって間合いを外して、その蹴りを空振りさせた。

この人の方が重くて堅いけど、私の方がずっと早かった。

前蹴りを出した足を引くよりも早く、その人との距離を詰める。距離を詰めながら、右の親指をノドに突き刺した。ノド仏の少し下にある、指で押すと息苦しくなるところ。そこを、踏み込みの勢いを乗せて、思いっきり突いた。

普通だったら、やっぱりそこで終わるんだけど。

その人は耐えて、私の腕を掴んできた。

下がりながら私の右腕を伸ばして、左腕で抱え込んで、しっかりと口ツクして。

そのまま時計回りに体を捻りながら、私の右手を、自分の右手で強く握り込んだ。

立ち関節。

気づいた瞬間、背筋を冷たいものが通り抜けた。

私だって相手の耳の穴を抉ったんだから、相応のことをしてくれるのが当然なのに。

腕を折られるかもしれないってわかった瞬間、怖くなった。

でも、怖くなって視線が下がって。

相手が体を回転させてる最中で、ちょうど膝の側面が見えたから。

腕を折られないために、とっさに相手の膝を蹴り抜いた。

いいじゃん、私は勝ちたかったんだから。

相手だって、私の腕を折ろうとしてきたんだから。

何も卑怯なことはしてないんだから、私は悪くない。

一番悪いのは、勝てる手があるのにそれを使わないこと。

負けるために戦ってるわけじゃないのに、勝手な理屈で負けること。ルールで認められてる手なら、どんなに汚く見える手でも使えばいい。

あとから負けた言い訳をするくらいなら、そういう手を使って勝てばいい。

汚いとか卑怯って言葉は、負けた方が使えば遠吠えにしかならない。

正々堂々、正面から力をぶつけあって、強さを確かめるのも悪くないけど。

でも、今の私は強さを確かめたいんじゃないじゃなくて、とにかく勝ちたい。相手の方が強かったとしても、それでも私は勝ちたい。

だって、負けたら武術をやめなきゃいけないんだもん。

私には武術しかないのに、それを諦めるだなんて、そんなことはできない。

諦められないなら、私は勝ち続けるしかなくて。

勝ち続けるためには、どんな手でも使うしかない。

もう、私にあの声は聞こえない。

私を否定する、私に真実を告げる声は、もう聞こえない。

それはきつと、私が正しい道を選ぶことができたから。

この道を歩んでいる限り、私は勝ち続けることができるから。

夢をつなぐために、全力で戦う。

私はただ、そうしてるだけだから。

私は、何も間違っただけじゃない。

幕間『一子のススメ』（後書き）

はい、今回は一子視点の話となりました。

今に始まったこつちやないですが、話の流れがいまいちつかめておりません。

ううむ、どうにかここらで体勢を整えたいところです。

ダーク ワンコ降臨！

……思ったよりもダークでないかもですね。

エグいとダークを混同してしまったかもしれない。

しかし『汚い手をも辞さないワン子』を書くことはできたように思います。

これもある意味、勇往邁進なのかもしれません。

どんな目標に向かって、何を恐れずに進むのやら……。

風間ファミリーの内部の様子も、さらっと書かせて頂きました。

無論、全員が極端に変わったわけではありません。

小さな違いが、みんなに少しずつ起きているとだけ思っていたら幸いです。

やや強引に挿入した、第2回川神ランキング特別試合。

今回は希望を募ったりはしませんが、その分、ストーリーが見えるように書けるよう頑張らせて頂きます。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、いろいろな意見をお待ちしております。

まずウチさあ、屋上あるんだけど……焼いてかない？

5 話目 『今日の日真、ゲッピー死んでるぞ』 (前書き)

タイトルの意味が分かった方は、私と同じくらいの年齢のはず！

5話目『今日の日真、ゲッピー死んでるぞ』

9月16日、水曜日。

僕の日常生活は、大した変化もなく続いている。

勉強して、飯作って、ジム行って、走り込んで。

気が向いたらゲーセン行って、ちよつと豪華な飯作って。

アパートの皆さんにスパリングしてもらったり、買い物頼まれたり。

心との関係以外は、特に変わったってことはない。

港三千尋のいつも通りに日常が、いつも通りに過ぎていった。

どうでもいいような瑣末な変化はあったけど、せいぜいそれくらい。日常の範囲内で済まされるような、ちよつとした変化はあった。

心と僕の関係が悪くならなければ、そんなものはどうだってイイんだだけ。

……まあ、関係がプラスに変化するなら、ちよつとは気になるけどさ。

とにかく僕は、いつも通りに過ごしてる。

満喫するほどの毎日じゃないけど、それなりに楽しいよ？

刺激が欲しくなったら、そこから辺に首を突っ込んでみればイイし。

ホント、快適に過ごさせてもらってるよ。

ただ、今回は首を突っ込むところを間違っただけらしい。
関わってるメンバーを見るに、少しだけ面倒なことになりそうだね。
それもまた楽しからずや……ってことにしよう。

まあ、何があつたかっさ。

例の特別試合のメンバーが校内新聞で発表されたんだよ。
投票じゃなくて自薦だけだったから、けっこう早くに準備できたら
しい。

自薦だろうがなんだろうが、今さら関係ないけどさ。
もうトーナメント表ができてるっていうのは、仕事が早くて結構な
事だ。

見知ったところだと、ガクトちゃんと川神、渡辺先輩も出るみたい。
あとは……ブンカートと……この大滝ってのは知らない。
反対のブロックだけど、前の特別試合にも出てた田辺もいた。
まあ、なんていうか、全体的に地味なトーナメントになりそうだよ。

ああ、そうそう、もちろんだけど僕も出ることになった。
最近の派手にやってたし、川神が出てれば僕も出ることになるのは
当然。

まっとうに1対1で戦ったことはないけど、それでも1回は僕が勝つてる。

早い話が、川神院の門下生が、どっかの名無しに負け越してるってことだ。

天下の川神院が、そこらの有象無象に負けっぱなしで終わらせるわけないじゃん。

僕に勝つ算段があるかどうかは別として、もう1回は戦わせたいはずだからね。

……しかし、川神ねえ。

川神先輩ならともかく、2-Fの川神一子だもんなあ。

たった2ヶ月くらいの時間じゃ、素手で僕に勝つてのは無理だ。

武器を持たれたら、言うまでもなく僕の負けだよ？

川神ラビリンスのときは運が良かったけど、同じように行くとは思えない。

あの薙刀と正面切って戦うのは、今の僕には無理だね。

充分な時間をかけて練り上げられた技を、一朝一夕で崩せる気がしない。

薙刀相手に戦う技術を、僕はそこまで極めちゃいない。

逆に、川神が僕に素手で勝つのも、同じ理屈で難しい。

薙刀に時間を掛けてきたってことは、素手に時間を掛けれなかったってこと。

素手で戦う技に時間を掛けまくった僕が、簡単に負けるはずがない。残念なことに、僕と川神に才能ってもんはないわけだしね。

そう、僕と川神には才能がない。

由紀江ちゃんや川神先輩どころか、心や武蔵と比べたって才能じゃ劣る。

才能が劣るからって負けるつもりはないけど、そこは認めなきゃならない。

だって、才能のある人間が、血の小便が出るまで努力したらさ。

いくらなんでも、由紀江ちゃんに追いつけそうなもんじゃん。

それなのに、年々差は開いて行く一方で、勝てる気配が全くない。

それはつまり、僕には才能がないってことだ。

こう言っちゃ身も蓋もないけど、川神も似たようなもんだ。

子どものころからずっと、あの九鬼が認めるほどの努力を重ねて。

それなのに、手の皮の薄いクリスティーアーネに武器同士で負けた。

ってことは、やっぱり川神も才能がないってことだ。

……まあ、比べる相手が悪いだけなんだろうけどね。

僕も川神も、普通の人間からすれば破格に強いんだから。

おっと、どうでもイイこと振り返ってる場合じゃない。

貴重な心との放課後を、こんなつまらないことで消費しちゃダメじゃん。

せっかく、宇佐美先生が腹痛で病院に運ばれて、帰りのHRが無くなって。

ちよつと余分に時間がとれたもんだから、教室でダベってるところなのに。

僕たち以外にも何人か残ってるのが癪だけど、そこは仕方ないよね。

……あーあ、心を家に呼べればいいのになあ。

まあ、愚痴っても仕方ないから、今の時間を最大限に噛みしめよう。

僕は、心の机の前に座って、向かい合って話をしてる。

他愛のない世間話に、微笑ましく花を咲かせてるってわけだ。

いやいや、ホントに他愛のない話だよ？

ドラマの話とか、最近のニュースとか。

昼飯のカレーが少し水っぽかったとか、ストーリーカー騒ぎがあったとか。

さっきまでは、そういうどうでもいい話をしてた。

ほら、相思相愛なんだから、こういう日常会話も必要でしょ？

でも、こんなダラけた会話も長くは続かない。

まあ、心が僕の試合気にしてくれるっていうのはいいんだけどさ。

もう少し普通の話がしたいんだよ、僕だって。

「あのトーナメント表ときたら……目立たん連中ばかりじゃな」

こんな風に、心が半ば無理やりに話題を変えちゃうんだよ。

心配してくれるのは嬉しいんだけど、そればかりだと楽しくない。

まあ、邪険にするのも失礼だし、ちゃんと試合に話につき合うんだ

けど。

「参加者の半分は無名みたいなもんだからね」

心の言う通り、メンバー自体は有名どころが少ない。

大滝とか聞いたことないし、渡辺先輩もそれほど有名じゃないもんな。

目立ったな大会で結果残してる奴がほとんどいないし、面白みはないかも。

見所は、川神がどこまで残れるかってことくらいかなあ。

「ま、これでミチヒロの優勝は決まったも同然じゃ」

「うーん……1回戦は大丈夫だけど、あとは運次第だなあ」

虚勢を張りたいたいところだけど、さすがに嘘はつきたくない。

1回戦の相手だけは、本当にどうにかなりそうだからイイんだよ。

ほら、朱雀会空手の渡辺先輩が僕の相手なんだって。

まあ、フルコンタクト空手相手なら負ける気はしない。

無道会館にいたところに、コレでもかっつけてくらい対策を考えたからね。

あの師範よりも強いっていうなら、諦めるしかないけどさ。

僕の知る限り、空手を使う人間でアレより強いヤツはいない。

いないんだけど……僕が自信を持って対応できる打撃は、空手だけ。ボクシングとかムエタイとかになると、やっぱり勝手が違ってくる。

「ん？ それほど強いのもおらんじゃろ？」

心はそう言うけど、目立ってないだけで強いヤツは確かにいる。今年に入るまでだけど、ほとんどの生徒には僕の実力を知られてなかった。

それと同じで、実力を隠して生活してるヤツは確かにいるんだよ。そういうヤツが誰なのかっていうのも、去年の内に調べが付いてる。

その中の1人が、留学生の……2-Bの、ブンカート・チョーワイクン。

陰で『第六ブル魔王』なんて呼ばれてる変態だけど、強いことは強いらしい。

そりゃ、ムエタイで家計支えてたヤツなんだから、弱いはずはないんだけどさ。

とにかく、そういうダークホースみたいなヤツは、まだまだいるんだよ。

手の内が分かってる相手以外は、気を抜いて戦えないってわけだ。

「まあ、心の分まで頑張らせてもらっよ」

「煮え切らんが……まあ、楽しみにしておるぞ」

ブンカートみたいなのが出ると危ないと思って、出るの辞めてもらったんだけどね。

そういう自信過剰なところも、心のチャームポイントだと思うんだよ。

せめてクラスの連中がいなきゃ、抱きしめて頭撫でまわすのに。

タイミング悪いつて言うか、コイツらも空気読めつてんだ。

……そういや、心と恋人らしいことを全然してない気がする。
まあ、名前で呼び合ったりとか、その……キス、したりとか？
それはイイんだけど、普段の生活が恋人らしくないっていうか。

僕らは正式な恋人じゃないけどさ、好き合ってるわけじゃん。
大手を振ってイチャつくわけにはいかないけど、やっぱり物足りない。
もっと手えつないだり、帰りに寄り道とかしたい。
もっとたくさん時間を、心と一緒に過ごしたい。
そう思うのって、普通のことだよな？

心に不満はないんだけど、今の関係は早く打破したくなってきた。
もっと時間をかけなきゃいけないのに、今すぐにもどうにかしたい。

僕の理性と本能が、全然違う答えを求めている。

今までは、こんなことはなかったんだけどなあ。

理性的に考えたときも、感情的に直感で決めるときも。

結局のところ答えは同じで、違うのは答えに行きつくための方法論
だけ。

そうだったのに、今は、全然違う答えを出しちゃった。

まあ、それならそれでイイんだけど……変わったよなあ、僕。

イロイロ考えてポーっとしてる僕を見て、不思議そうな顔してる心
もカワイイ。

この表情だと、僕の悩みに勘付いたりなんかはしてないんだろうね。
鈍感な女の子の方が可愛いって聞いたことあるけど、やっと納得で
きたよ。

「どうした？ 此方の顔に何かついておるのか？」

「ん？ いつも通り可愛い顔してるなーって思ってただけ」

心の照れ隠しのビンタを、手首を使って柔らかく受け止める僕。
心がスナップ利かせてたり、掌底を使おうとしたのは気のせいだ。
アゴを狙ってきたっていうのも、僕の思い過ごしだから問題ない。
うん、頬を染めながら上目遣いに睨んでくる心も堪らない。
続けざまに出してきた貫手を、首を傾けて避けながらそう思った。

「避けるな！」

「目は狙わないですよ！」

結構ギリギリなタイミングだったと思う。

っていうか、今の避けてなかったら、目が抉れてたんじゃないだらうか。

軽い目潰しとか、そういう生易しいスピードじゃなかった気がする。

……まあ、僕を信頼してくれてる証拠だよな。

そう思うと、目潰しくらいはカワイイもんだよ。
まさに、目に入れられても痛くないってわけだ。

そうやって、楽しく心とコミュニケーションしてたのに。

「おい港、ちよつといいか？」

なんて、無粋にも声をかけてきた奴がいた。

まあ、僕に声を掛けるのは自由だよ？

自由なんだけど、タイミングってもんを考えて欲しい。

僕と心が楽しく過ごしてるのに、そこに割って入るとかさ。

「はあ？ 何の用？」

心と2人きりの時間を楽しんでた僕に、声をかけてくるクラスメイト。

横目で顔を確認してみるけど……名前が分からない。

ただ、去年の文化祭で天体観測同好会の使ってる教室にいた気がする。

つーか、髪の毛染め直してたり、ピアスの穴開いてたり。

どう見たって、僕のイメージの中にある天体観測してそうなタイプとは違う感じ。

あー……実家の近くの海で会った、下北沢とかいうのに似てるかも。でも、心に色目も使ってないし、人を食ったような笑みしてるわ

けでもない。

……葵に比べたらマシってことで、話くらいは聞いてやることとした。

「お前さ、土曜日の試合出るんだろ？」

「そうだけど？　それがどうかしたの？」

そんなことは、校内新聞に載ってるから誰でも知ってる。それをわざわざ、僕に確認する意味が分からない。

「いや、川神……2年の川神の変なウワサ聞いたから、伝えようと思って」

なんだ、そういうことか。

……でも、川神のウワサなんて腐るほどあるじゃん。このタイミングで伝えてくるってことは、僕に有益な情報なんだろうけど。

そういうわけで、僕は黙って続きを話すように促してみた。

まあ、相手もそれくらいは理解できたみたいで、

「川神院で鍛錬してるときに、相手の関節をバラバラにしたって内容なんだけど」

なんて、嘘八百もイイとこの情報を教えてくれた。

「眉唾じゃろ」

「まあ、尾ヒレが付いたんだろっね」

苦笑いしながら、僕と心は結論付けた。

だってさ、あの川神院だよ？

あれだけ規律の厳しい場所で、そんなことができるわけないじゃん。関節をバラバラにする前に、監督してるヤツが止めちゃうでしょ。

まあ、一瞬で相手の関節をバラバラにする技があれば、話も違ってくる。

そんな技があつたところで、あの川神に使えとは思えない。

バケモノの小西さんにできないことが、人間の川神にできるはずがない。

……小西さんなら、10秒以内に肘と膝を全部壊せそうだけど。

「俺もそう思うけど、そういうウワサが出るようなことがあつたんだろ？」

「まあ、川神と当たるとしても決勝だし、気楽に行くよ」

相手がどうだからって、やることは変わらないんだから。いちいちウワサに畏縮してたらキリがないよ。

まあ、少しは警戒させてもらっけど、それくらいで充分。

実力は知れてるんだし、それほど気張っておく必要もない。

「で、用件はそれだけ？」

「それだけだけど……じゃあ、俺、もう帰るわ」

僕の視線を受けたからか、そそくさと荷物をまとめて帰っていった。それくらいの用事だったら、明日とかにしてくれたっていいのに。よりによって心と話してるときに来るとか、ホントに気が利かないよね。

もっとタイミングが良けりゃ、もう少しだけ話してやっても良かったんだけど。

でもって、けっこういい時間。

武蔵が弓道場にいるのを遠目に確認してから、僕らは帰路についた。つっても、住んでるところが逆方向だから、学校出るまでなんだよなあ。

あー、そうそう、最近の武蔵はしつこいんだよ。

昨日なんか、僕が学校にいる時間にグラウンドでランニングしてたりしてさ。

しかも、体操服にブルマなんていう、僕の趣味をよく理解した格好

で。

実家で見られた工口本の内容を参考にしてるに違いない。

そついうわけで、知的好奇心を満たすために、朝の武蔵は放置して
る。

まあ、武蔵もそれなりに常識的みたいだね。

2・Sの教室まで乗り込んで来るなんてことは、今のところはない。
部活にもちゃんと出てるから、時間さえ調整すれば帰りも一緒にな
らないで済む。

武蔵には気の毒だけど、心に癩癩起こされるのもいやだからね。

「なあ、ミチヒロ。よもや、やる気が出んのか？」

「うーんと……そついう訳じゃないんだけどね」

「そつは見えんのじゃが。いまいち集中できておらんのではないか
？」

少しボーっとしてたのが、そついう風に見えたらしい。

……6割くらいは当たりかなあ。

やる気はないけど、それなりに集中はできてるから。

コンディションはいいけど、モチベーションが良くないのかな？

「まあ、気合の入り方は微妙かも。

勝ったって順位上がらないし、ほとんど格下ばっかだし」

なんていうか、この試合に出た意味が弱いんだよね。

僕が出たかったんじゃないかって、心を出したくなかったんだから。心が出なければ、僕が試合に出るか出ないかはどうでもよかったんだもん。

出るなら出るで頑張るだけなんだけど……そこなんだよね。

絶対に勝ってやるって意気込みも、勝たなきゃならない動機も僕にはない。

「そんなことでは足元をすくわれるぞ？」

「これでも柔術家だよ？ 自分の土俵でやられるなんてマネはしないよ」

心の忠告に、冗談めかした返しをする僕。

コレで、僕に余裕があるようには見えたんじゃないかなあ。

実際のところは、余裕がどうとか全然関係ないんだけどね。

心が怪我する危険性を排除できたから、もう目的は完遂してるし。

まあ、いいチャンスってことにしよう。

試合中に起きる怪我は、どんなもんでも事故でカタが付く。

腕が折れようが、膝が捻じれようが、靭帯が伸びようが。

どれもこれも『仕方がない』で済むなんて、とっても素敵だよな。

あ、そうだ！

心にイイとこ見せるチャンスじゃん！

つか、心だけじゃなくて、不死川家の連中にも！

なんだかんだ言っても、川神一子も川神家の一員だ。

しかも、川神院でキツチリ修行してるし、ネームバリューとしても悪くない。

心が1回倒しちゃってるけど、それでも川神の名前を持つてる奴を倒すのはオイシイ。

血筋だなんだってうるさい連中には、絶好のアピールになる。

いや、川神には1回かってるけど、川神ラビリンスのときだった。

ちよつと不意打ちっぽかったし、あんまりシツカリと倒せなかった。

1対1の戦いで、圧倒的な力を見せつけて、それで勝ったなら。

実際の実力はともかくとして、それなりに名前は上がるだろ。

さあ、そうと分かれば、帰ったらトレーニングだ。

できるだけ派手な勝ち方して、アピールしなきゃいけないからね。

とりあえず、本田さんにスパイでもしてもらおうか。

そんなことを考えながら、心と校門の前で別れて。

緩みっ放しだった気を引き締めて、ジムに向かって行った。

5 話目 『今日の日真、グッピー死んでるぞ』（後書き）

えー、全く話が進展しませんでした。

次回から、ようやく特別試合です。

もっとも、作中で示した通り、メンバーは微妙に過ぎます。

……トーナメント表、載せた方がいいでしょうか？

とにもかくにも、今回はこんな感じですよ。

ペースが落ちてきているので、次話に早く着手できるように頑張らせていただきます！

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字の御指摘など、モロモロお待ちしております。

小雪やハゲ、あずみの出番が少ないのは、ご容赦ください。

……じっとしてないとその、お前の自慢の顔が傷ついちゃうわぜ。

6 話目 『正念場』

9月19日、土曜日。

例の……川神ランキング特別試合の当日。

急ごしらえだけど、それなりの準備をして今日を迎えることができた。

ハッキリ言っちゃえば、決勝まで勝ち上がれる自信はある。

初戦がフルコンタクト空手の渡辺先輩で、2戦目がガクトくんかブンカート。

今の僕からすれば、倒せないほど強い相手でもない。

まあ、単純にトーナメントの組み合わせが悪くなかったっていうのもあるけど。

いや、本当に運が良かったよ。

ガクトくんとブンカートが、僕と戦う前に潰し合ってくれるんだからね。

どっちが勝ち上がって来ても、確実にダメージを受けて、疲れを貯め込むことになる。

ベストの状態だったらまだしも、そんなんで僕の寝技から逃げられるはずがない。

この2人と1回戦から当たらなかったのは、本当に運が良かったとしか言いようがない。

……ただ、この茶番はどうにかならないんだろうか。

「川神流に敗北なし！ 薙刀なくとも気迫は十分！ 川神 一子！」

「極めたら即折る実戦派！ 対戦相手はバキバキだ！ 田辺 拳！」

「時代は総合格闘技！ 寝ても立っても勝つのは俺だ！ 星野 文
明！」

「中国拳法の神技が、リングの上で炸裂する！ 大滝 悟！」

「筋肉の鎧は伊達じゃない！ パワーだったら誰にも負けない！
島津 岳人！」

「不敵な笑みのナックモエ！ ブンカート・チョーワイクン！」

「空手の強さは幻想じゃない！ 一撃必殺、ここにあり！ 渡辺 雄飛！」

「天才柔術家ガスタオンの亡霊が、今ここに蘇る！ 港 三千尋！」

まあ、またリングに上がらされてね。

トーナメントやる順番で紹介されてるってわけだ。

どうにも気合が入らないんだよなあ、こういうことされると。

心は楽しんでるみたいだから、別にイイんだけど。

今回は、それなりの正念場。

必要ってわけじゃないけど、ボーナステージみたいなもんだ。

上手くいけば、不死川家に僕の存在をアピールできるチャンス。

家柄のある川神を倒せば、いくらなんでも少しは僕の能力を認めてくれるはず。

下手なことしなくても済むんだったら、それに越したことないからね。

ガスタオンの亡霊なんて、面白い紹介もしてもらったしさ。

その辺も利用して、楽しく戦わせてもらいますか。

つつても、すぐに試合はない。

僕の試合は第4試合だから、かなり後の方なんだよ。

そついうわけで、観戦用に用意されたパイプイスの最前列に座ってる。

右側は人が通るためのスペースになってて、左側に心がいて。

どついう風に座つたかまでは知らないけど、後ろに後輩たちが控えてる感じ。

大した人数じゃないけど、そこそこ目立つのが固まつてるんだよね。お陰さまで、僕の周りにちよつとした空間ができてて、少し肩身が狭い。

やっぱさ、集まつてる連中が目立ち過ぎるんだよ。

最近活躍気味の僕に、由緒正しい家柄を惜し気もなくプツシュする心。

絶賛帯刀中の由紀江ちゃん、1学期は頭角を現してた武蔵。

隠れファンが異様に多い大和田さんに、それなりにイケメンな入江。これだけ濃い連中が集まつてたら、そりゃ近寄り辛いよなあ。

「あの……ウオームアップしないでいいんですか？」

「今からやると体が冷えちゃうからね。この試合が終わってからでイイよ」

後ろにいる武蔵がそんなこと聞いてくるけど、ウオームアップより試合を見ときたい。

向こうのブロックで勝ち上がるのは、どう見たって川神なんだし。

なら、ちょっと先を見過ぎだけど、川神の戦い方を見とくのは大事でしょ。

例の噂も少しばかり気になってるし、油断しないに越したことはないからね。

それにさ、あんまりガンガン動くわけにはいかない理由があるんだよ。

「それに、あんまり右手は動かしたくないからね」

「……結局治らなかつたか」

心の視線を受けて、僕は自分の右手首の様子を確認する。

僕の右手首は、分かりやすくテーピングされてって状態。

右手首を固定するために、下手に動かないようにガッチリと。

つていうのも、ちょっとイロイロな事情があつてさ。

恥ずかしながら、こうしておかなきゃならないんだよ。

まあ、テーピング隠したければ柔術着で戦えばいいんだけどさ。

2日前からこうしてるもんだから、隠したところで意味がない。

だったら、袖の短い空手着で、よく見えるようにしといてあげようってわけだ。

「えっと、いつ捻ったんすか？ 昨日じゃないっすよね？」

「水曜日にカークロスさんとスパーして、手首極められちゃったんだよ」

コイツ、相変わらずジム休んでたからね。
川神ランキングに参加して、何やってんだか。
いつも通り、週に3日以上の上のペースでジムに来ないんだよなあ。
もうちょっとやる気出せば、僕もイロイロ教えてやるのに。

「そつえば、最近はずっと左手でカバン持っていましたもんね」

「まあ、普段は右手で持ってるけどさ……」

武蔵のヤツ、いつも僕が右手でカバン持ってるって知ってたのか。
いくら僕に気があるからって、そういうのを調べる必要はないだろ。
努力の方向性を間違ってるけど、今のところ害はないからスルーで
イイか。
あんまりしつこかったら、コッチも黙ってるわけにはいかないけど
ね。

「小西殿以外にも手練がおったとは……物凄いジムじゃな」

「いやいや、僕がミスっただけだよ」

心の言葉に、苦笑いしながら返す僕。

ホントに僕がミスしただけで、カーロスさんが強いわけじゃない。
無理やりにパスガードしようとしたせいで、リストロック極まっち
やっただよ。

カーロスさんが弱いとは言わないけどさ、そこまで強くもないんだ
よね。

ああ、でも嬉しいなあ。

心が僕のことを心配してくれるっただけで、こんなにも嬉しいなんてね。
なんかもう、これだけで満足しちゃいそうだけど、そうもいかない。ココで頑張っつて、今以上にイイ関係になるのが目標なんだから。

「まあ、どうにでもなるさ」

軽く笑いながら、心を安心させるために強気な事を言った。
腕が無くなったわけじゃないんだから、試合には出るよ？
そうするしかないし、それ以外の選択も僕にはない。
今さら危険なんてしたら盛り下がるし、心に対しても申し訳ないからね。

それだけ心に伝えて、リングに視線を移すと。
ピツタリそのタイミングで、プロレス用のゴングが鳴らされた。

川神の相手は、最近やたらと頑張ってる田辺。

まあ、実力的には、今回のメンバーの中じゃ一番下だろうけどね。

入江の話じゃ、もともと喧嘩自慢で弱くはなかったらしい。

そこそこ打たれ強くて、ピンポイントで急所に貰わない限りは大丈夫だとか。

まあ、武蔵にピンポイントでアゴに一撃もらってKOされたんだけど。

それでサンボ始めて、打倒武蔵を目標に頑張ってるって話だ。

ちっとはマシになったんだろうけど、せいぜいその程度でしょ。

川神の動きは相変わらず早い。

袖を掴もうとして伸ばした手の、手首当たりを打ち据えてキレイに捌いて。

で、絶妙な距離で膝の近くにローキック入れて、また距離をとって川神つぽくない戦い方だけど、上手に田辺の戦力を削ぎ落としてる。

まあ、当然の展開って言えばそこまでか。

トーナメントなんだから、ダメージ残らない勝ち方を狙うのは当たり前前。

相手が組技ともなれば、打って離れるスタイルは理にかなってる。

ただ、田辺相手にそこまでする必要があるのかは疑問だね。

いくら関節技使っつて言っても、まだまだ素人の域を出ないレベルなんだから。

習い始めて半年くらいって考えると凄いいけどさ、それ以上ってわけじゃない。

攻撃を捌くのがヘタクソだし、関節技に入る過程も強引過ぎる。
こんな戦法取らなくても、川神なら充分に倒せると思うんだけど。

田辺の動きが、だんだんと遅くなってきてる。

あー……こりや痛いだろうなあ。

ズボンで見えないけど、アザができるか腫れるかしてるっぽい。
下がるのも前にも出るのも、なんかワントempo遅れてる感じだ。

特に前に出るときなんか、踏み込むのを躊躇するみたいになっちゃ
ってる。

こんなんじゃ、逆にローキックをキレイにもらうだけなんだけどね。

ほら、またローキックが入った。

左の速いローを、右脚の内側に的確に打ち込んで。
で、下手に足を止めると、重たい右ローを叩き込む。

ローを気にし過ぎたら、ストレートとかリーチのあるパンチを顔に
当てる。

田辺の戦い方を理解した上で、確実ににダメージを貯め込んでる。

しかし……やっぱり川神は早い。

田辺の動きが遅いのを差し引いても、充分過ぎるスピードだ。

しかも、技の1つ1つが丁寧で、コンビネーションもキレイ。

相手の意識を上下に振って、ガードがしにくいように考えてる。

……川神流って、こんなにコンビネーションが豊富な流派だったっ
けか？

まあ、気にしたところで意味ないし、現実を受け止めるようにしと
こう。

「いやあ……強いツスね、川神先輩」

「弱いわけがないじゃん。つか、アレだけ鍛えて弱かったら悲惨でしょ」

放課になったらハンドグリップ使って、放課後も時間をかけてトレーニング。

朝から走り込んで、夕方にも走り込んで、それで武術の鍛錬もする。そんな生活を、ほとんど毎日やってるってウワサだ。

しかも、手足に合計12kgの重りをつけたまま、鍛錬に時間を費やしてる。

いくらなんでも、弱いままのはずがない。

「此方には劣るが、そこそこ強いというのは此方も認めるのじゃ」

「少なくとも私よりは強いですからね、川神先輩」

ただ、必ず強くなれるわけでもないっていうのが、現実の厳しいところだね。

心と武蔵の言う通り、川神の強さは大体それくらいなんだよ。

まあ、薙刀持って心と勝負したら、もしかしたら勝てるかもしれないけど。

10回勝負したら、半分勝てるかどうかくらいだ。

それに、今はまだ武蔵の方が弱いけど、あと1年したらどうなるかわからない。

才能の面で言えば、武蔵の方がずっと恵まれてるんだから。

もし武蔵が川神並みのトレーニングを始めたら、1年も必要ないか

もしれないけど。

そこまで考えて、ふと、意地の悪いことを思いついた。今の考えは、あんまり川神と付き合いのない僕の考えだ。僕よりも川神と接した時間が長くて、僕よりも強くて。格闘技やら武術に詳しい子に、聞いてみたくなった。

川神が、どの程度の人間なのかってことを。

「そういやさ、由紀江ちゃんから見て川神ってどうなの？」

「……日々の鍛錬を欠かさない、努力家の鏡といった方ですね」

後ろを振り返って聞いてみると、無難な答えが返ってくる。

まあ、そこについては僕も同意見。

無茶してるかどうかは別として、アレだけ努力してるヤツはなかなかいない。

僕だって努力の量じゃ負けてないけど、それでも、川神のその点は尊敬できる。

でもさ、僕が聞きたいのは、そんなどうでもいいところじゃないんだよ。

「そうじゃなくってさ……由紀江ちゃんから見て、まだ強くなれそうなの？」

「それは……」

由紀江ちゃんが、あからさまに言い淀んだ。

それはつまり、川神はもう天井が見えてるってことなんだろうね。ハッキリ言うのは気が引けるから、こういう風に言葉に詰まってるんでしょ。

川神には残念な話だけど、仕方のないことだよ。

誰だって才能と限界ってモンがあって、そればかりは変えられない。

例えばそれが自分の求めているモノ以下だったとしても、事實は塗り替えられないし。

努力したって、才能は補えないし、限界を超えるなんてことはできない。

まあ、勝ち負けってのは別の話だけど、強くなるってのはそういうことだ。

いつか必ず自分の限界がやって来て、身の程を知る日が来るんだよ。

……なんて、根暗っぽいことを考えてたところで。

わっ、と歓声が上がった。

リングを見ると、田辺が横倒しになってた。
なんというか、教科書に出てきそうなキレイな横倒しだ。
まあ、川神が勝つてのは予想の範囲内だし、驚くほどのことでもないけどさ。

どついう手で倒したか見逃したってのは、僕にしては迂闊だった。

「えーっと、どうやって倒したか見てた人いる？」

「ローからハイの変則蹴りです」

武蔵だけは見てたみたいで、すぐに答えてくれた。

けっこう身長差あったと思うんだけど、よくハイが当たったもんだ。
田辺って、もう180cm超えてるって話だったけど。

……まあ、ロー掴もうとして頭下がったところで、頭に蹴りもらっ
たんだろうね。

打撃だけで勝つなら悪い戦略じゃないけど、簡単なことじゃない。
下手なローを打てば強引に突っ込まれるし、蹴り足を掴まれる危険
もある。

決めるに行くタイミングを誤ったら、ハイを防がれて寝技に持ち込ま
れる。

いや、田辺はサンボやってるから、立ったままアキレス腱を極めて

くるかもしれない。

それだけのリスクと向き合って、初めてそういう選択を取ることができる。

よっぽどの自信がないと、とてもじゃないけど取れない手段だ。

どっちにしても、川神の受けたダメージはゼロ。

多少は体力使っただろうけど、次の試合には回復してるでしょ。

つまり、次の試合も万全に近い状態で戦えるってわけだ。

「……川神先輩に有利ですよ、このトーナメントって」

「川神学園のトーナメントじゃからな。こんなもんじゃろ」

言っても仕方ないことを言う武蔵に、正論を返す心。

まあ、そりゃ当然、主催者の都合のイイような組み合わせにするさ。どこの団体だってやってることだし、僕だってそれくらいは分かっている。

分かかって参加したんだから、今さら文句を垂れるつもりはない。

決勝で川神をブツ倒せば、トーナメントの組み合わせなんて何でも一緒だよ。

「じゃ、入江。悪いけど、ちょっとウォームアップ付き合ってもらえる？」

「あ、OKッスよ」

ジャージを着た入江が、スポーツバッグ片手に立ち上がる。

まあ、僕がコキ使える後輩って言ったら、コイツくらいなもんだからね。
由紀江ちゃんたちと仲良くさせてやってるんだから、文句は言わせない。
もし文句があるんだったら、ファンクラブ全員にコイツの住所を教えるだけだ。

とりあえず、簡単にコンビネーションの練習して、それでウォームアップすればいい。

ストレッチだけは済ませてあるから、筋肉はそこそこ動くようになってるし。

柔術は骨身に染みてるから、今からいちいち確認し直す必要もない。あとは、ガクトさんとブンカートの試合が始まる前に戻ってくればいい。

「なあ、ミチヒロ。その右手じゃが……」

「大丈夫だよ。ホント、大したことないから」

心が心配してくれるのが、嬉しくて心苦しい。

大したことないってのは事実なんだけど、虚勢張ってるように見えるのかなあ。

まあ、勝てばいいんだよね、勝てば。

そうすれば、心だって少しは不安じゃなくなるだろうし。

とりあえず、入江を連れてリングの前から離れて。

1回戦から怪我しないように、体を温めておくことにした。

どうせ次の試合は泥仕合みたいになるだろうから、時間はたっぷりあるしね。

6 話目『正念場』（後書き）

アツサリした感じでワン子の勝利が決まりました。

ハイ、アツサリし過ぎて味気なかったですとも。

モブにかけてる時間はないので、サクサク進めていきます。

……主人公の後輩候補だった田辺も、今や脇役ですとも。

詳細設定まで作ってこんな扱いにしてしまった自分を責めたい気持ちです。

一応トーナメントという体裁をとっておりますので、組合せだけでもあとがきで書かせていただきます。

本編に挿入したかったですが、地の文だとあまりにも不自然で……。もうちょっと早く出しておけばよかったです。

第1試合

川神 一子（川神流） VS 田辺 拳^{サンボ}

第2試合

星野 文明（総合格闘技） VS 大滝 悟（散打）

第3試合

島津 岳人（我流） VS ブンカート・チョーワイクン（ムエタイ）

第4試合

渡辺 雄飛（朱雀会空手） VS 港 三千尋^{ルタ・リブレ}

となっております。

あとは、第1と第2、第3と第4の勝者がそれぞれ勝負し、それに勝った2人で決勝です。

オーソドックスなトーナメントとなります。

……なんか、月の上旬の更新が多くなっておりますが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字の御指摘などお待ちしております。
す。

マジコイの漫画2巻を購入。

心の活躍具合に、もうそれだけで満足したモーディスでした。

7話目『名譽や栄光のためでなく』(前書き)

ガクト戦です

7話目『名譽や栄光のためでなく』

ウォームアップから戻ってくると、まだ試合をやってた。えーっと……よく覚えてないけど、大滝と星野だったっけか。両方とも慎重にやってるからか、決定打が全然なかったらしい。

寝技入ったら硬直して、立ち技でもチマチマ打ち合ってた。見る側としても面白くないし、やってる方も微妙な気分だろうね。コレっていう武器が1つもないと、パツとしない攻め方になるもんなあ。

なんでもイイから、コレなら負けないって技の1つくらい持っておかないと。

まあ、そんな試合も、ついさっき終わったところ。

20分をフルに使って、結局、大滝とか言うヤツの判定勝ち。

拍手もまばらで、最初っからつまらない試合だったのがよくわかった。

ウォームアップに時間掛けといて正解だったよ。

次の試合は、つまらないとか楽しいとか関係なく見ないといけない。なんせ、この試合で勝った方が、2回戦で僕と当たるんだからね。ガクトくんが上がってくるか、ブンカートが競り勝つのか。どっちが勝ち残るにせよ、手の内は知っておきたい。

「次も泥仕合になりそうじゃな」

「どうだろうね？ ブンカートがどれくらい強いかだけど」

「ムエタイじゃからな……期待して良いのかどうか」

「僕は期待してるよ？」

正直、日本人とかじゃ勝てないのも仕方ないってくらいの差があるんだよ。

身体能力とか鍛え方とか、そういうレベルの話じゃなくてさ。

日本人が格闘技をやるのって、大抵は趣味じゃん。

好きだからとか、強くなりたいからだとか、理由はいろいろあるだろうけど。

家の事情とかにしたって、まあ、あんなのは趣味の延長だし。

やらなくたって死ぬことはないし、やらなくたって生きていく道はたくさんある。

でも、タイ人がムエタイをやるってのは、そういうことじゃない。

生きていくための金を稼ぐために、ただそのためにムエタイをする。金持ちとかは別として、タイの中流以下の家の男の子は、どこもそんなもん。

トップランカーになりゃ、1試合で親の月収以上の金を稼ぐらしいし。

ゴミ拾ったり屋台の小間使いしてるよりは、ずっと割がいい。

そういう生々しい現実の中で、生きるためだけに強くなるってわけだ。

だから日本人は、タイ人と勝負すると勝てないんだよ。少なくとも、同階級って条件が付いてる限りはまず勝てない。

ガキの頃から生きるためだけに鍛えてきたヤツと、趣味でやってきたヤツ。

よっぽどの才能がない限り、差ができるのは当然でしょ。

「しかし、ムエタイと聞くと何故かかませ犬っぽい気がするのじゃ」

「あのマンガだと負けっぱなしだもんね」

まあ、実際に見てないとそういうこともあるか。

金的を指ではじかれてKOとか、上から押し潰されたりだとか。

引き立て役だから仕方ないにしても、ムエタイの扱いが悪過ぎだ。

実際に見てみればいいんだけど……そういうチャンスも滅多にないからなあ。

心とタイに行くことがあったら、1回くらいは一緒に見てもいいかも。

「そのブンカートって人、決闘したことないんですか？」

なんて武蔵が聞きたくなる気持ちも分かる。

武力が知力と等価値くらいの、ちよつとエキセントリックな川神学園。

それなりに強いヤツがいたとして、自分の強さを誇示したくならな

いはずがない。

……なんて風に、武蔵は考えてるんだろうね。
そうじゃないヤツが目の前にいるってのに、ちょっと浅はか。

「少なくとも、此方は知らん」

「僕も聞いたことないなあ。ジムには通ってるらしいけど」

ブンカートは、今まで学園内で一度だって戦ってない。

決闘にしても、個人間の小競り合いにしても、ちょっとした喧嘩にしても。

ブンカートが戦ったって話は、ここ一年で1度だって聞いたことはない。

まあ、戦う必要がなかったってことなんだろうけど、それにしたって不思議な話だ。

面白がって挑んでくるヤツも、少しくらいはいただろうに。

「でもさ、あの体つきだったら弱くはないでしょ」

「むう……そうじゃな。鍛え込んでおるようじゃが……」

リングの上で踊ってるブンカート。

ワイクルー……だったっけか？

ムエタイ特有の、祈りとウォームアップを合わせたようなアレ。

それを舞ってるブンカートの筋肉は、変幻自在に動いてる。

ゴムみたいに伸びることもあれば、鉄みたいに固くなることもあって。

グツと力を込めたところは、筋肉がコブが浮き上がってくる。首から背中の中のラインなんか、ワイヤーを肌の下に隠してるみたいな感じだ。完成されたムエタイ用の体を、ひたすらに磨き抜いてきたってことなんだろうね。日本にいて、よくもまあ鈍らなかつたもんだよ。

「由紀江ちゃんから見えてどう？ ガクトくん、勝てそうかな？」

「あの……風間ファミリーの皆さんには内緒にしておいてくださいね？」

「ん？ それくらいなら、別に全然構わないけど？」

うーん……由紀江ちゃん、どうも上手くいってないのかなあ。風間ファミリーの連中の話題になると、どうも口が重くなってる。まあ、川神に関する質問は、僕の意地悪のせいもあったと思うんだけどさ。ガクトくんのことまで慎重になるってことは、何かあったんだろうね。

相談されるまでは、僕の関知するところじゃないけど。

「相手の方の手加減がない限り、2ラウンド目は無いと思います」

由紀江ちゃんの衝撃発言から、大体2分くらい。
プロレスのゴングの乾いた音で、僕の対戦相手になるヤツの試合が
始まった。

ゴングが鳴ってからのブンカートは、絵に描いたようなムエタイス
タイル。

構えは、両手首を耳の横くらいにまで持ち上げるアップライト。
肘打ちと首相撲を警戒した、ムエタイ独特の構え方。

重心は前じゃなくて、やや後足に偏ってる。
パンチよりも蹴りを意識した、そういう重心の取り方だ。

ガクトくんはっていうと、相変わらず何かの格闘技っぽい構えじゃ
ない。

両腕で側頭部をカバーしながら、少し腰を落としてる。
右拳だけ握り込んで、左手は軽く開いたままになってて。
パンチで来るのか掴んでくるのか、タックルしてくるのか。
どれにしたって中途半端だけど、イロイロできそうな構えをした。

コーナーからリング中央に向かうところで、もう勝負は始まっている。お互い冷静に、相手と自分の間合いを見極めようとしてた。

ガクトくんがこういう戦い方するってのは、僕としては意外。

だってさ、ガクトくん、間合い取るの下手じゃん。

そこらのチンピラモドキよりはマシだろうけど、それくらいでしょ。喧嘩に慣れてる奴が格闘技っぽいことすると、ロクなことがないんだけどね。

いきずりの喧嘩みたいなことするヤツらは、大抵は大したことがない。

技術やノウハウもそうだけど、何より防御や戦略ってもんがない。

勢いに任せて、力に任せて、そういう戦い方しかできないヤツばかりだ。

キツチリ格闘技やってるのもいるだろうけど、かなり珍しいだろうし。

そんなヤツらを何人倒したところで、駆け引きや間合いの取り方は向上しないんだよ

やっぱり、先手を取ったのはブンカートだった。

蹴りを出さないガクトくんの間合いの外から、早い左ミドルキック。しかも、1発じゃなくて、ジャブみたいな速度のまま2連続で。

倒す蹴りじゃなくて、挨拶代わりみたいな軽い蹴り。

それを、ガクトくんが構えてる腕の上を狙って出した。

今のブンカートの蹴りじゃ、ガクトくんにはどういうダメージもな

かった。

そんなことは、ブンカートにもガクトくんにも分かっている。

「オラアアアアア！」

ガクトくんが返したのは、大振りの右フック。

予備動作が大き過ぎて、思いつきりテレフォンパンチになっていた。

それでも、この一撃がモロに当たったら、それだけで勝負がついやう。

それだけのパワーを、間違いなくガクトくんは持つてる。

オープンフィンガーグローブくらいじゃ、軽減できないようなパワーを。

そのフックを、ブンカートは正面から受け止めた。

左腕でブロックこそしてるけど、避けずに受け切った。

「……………はあ？」

ガクトくんが驚いた顔をしてるけど、僕だって驚いてるよ。

いや、僕だけじゃなくて、ガクトくんのパワーを知ってるヤツならみんな驚くだろ。

自動車持ち上げれるパワーで殴られたのに、ブンカートは平然と立ってるんだから。

ちよっと揺らいただけで、ダメージらしいダメージを受けた様子もな

い。

格闘技の技術でも、出来ることと出来ないことがある。

例えば、飛んでくるパンチを避けたりするのは、練習すればできると思っけど。

でも、時速80kmで突っ込んでくるトラックを止める技は、武術には存在しない。

圧倒的すぎる威力を受け切るなんて技法は、まだ確立されてない。まともに食らわれない技があったとしても、受け切る技は絶対がない。

ガクトくんのパワーで殴られるのは、でっかいハンマーで殴られるのと一緒に。

まともに当たったら骨が砕けるかもしれないし、受け止めても無傷じゃ済まない。

これだけ筋肉を増やした僕の体だって、無事で済む保証がないっていうのに。

僕よりも20kg近くは軽そうな体で、あっさりとブンカートが受け切った。

……と、思っただけ。

フックをもらって、軽くステップを踏んでから。

少しずつ右側に崩れ落ちるみたいに、ブンカートが膝をついた。

KOされなかったただけでも凄いけど、さすがにノーダメージってことはなかったか。

「1! 2!」

カウント2で立ち上がった、そのままロープにもたれかかる。両足にグツと力を込めて、勢いをつけて立ち上がったように見えた。つてことは、軽い脳震盪でも起こしてるんでしょ。

ロープに背を預けたのも、パンチが効いてるのをごまかすためだろうね。

で、カウント8でファイティングポーズ。

時間ギリギリまで待つのは、基本中の基本。

これだって、立派な戦略の1つだ。

ルールの範囲内で試合を有利に運ぶつても、勝つためには必須。タイで試合をしたブンカートなら、これくらいは当然だよ。

僕だって、同じケースだったらギリギリまで待つと思う。

「続行！」

試合の続行を伝えるルー先生の声を聞いて、ブンカートは構え直す。さつきと同じ構えをして、さつきと同じ表情をした。

試合になっても、ガクトくんのフックをもらっても。

普段と同じように、ニヤニヤした笑みから少しも変化しない。

そんな笑みのまま、また左ミドルを2発。

今度は、さつきよりも力を入れて蹴ったらしい。

重たい鞭を叩きつけたみたいなのが、リング際の僕の耳にまで聞こえてきた。

スピードと威力を兼ね備えた、いい左ミドルだ。

しかも、2発とも、同じところに正確に蹴り込んでる。

もちろん、ガクトくんも蹴られてばかりじゃない。

ブンカートの蹴りが終わってからだけど、力任せに拳を振りまわして応戦する。

テクニクも何もない、パワーだけを頼りにしたパンチ。

ガードが空いてるところを狙ってるみたいだけど、ブンカートの方が圧倒的に早い。

つか、ガクトくんの攻撃が見え見えのせいで、ガードが間に合っちゃうんだろっね。

ただ、さっきの一撃を受けたせいか、今度は受けるなんてマネはしない。

スウエーで右フックを避けて、返しの左フックはステップで間合いの外まで逃げて。

ガクトくんがブンカートを追おうとしたところで、また右腕に左ミドルを入れる。

さっきよりも鈍くて重たい音が、3度も連続で聞こえてきた。

ってことは、ブンカートのヤツ、ガクトくんの腕を壊して勝とうとしてるのかもね。

もしかすると、まだ手加減してるのかもしれないけど。

だって、ガクトくん、全然痛そうにしてないんだもん。

いや、我慢してるのもあるだろうけどさ、耐えれてるってことじゃない。

ちよっと腕が赤くなってきてるけど、まだまだ余裕があるんでしょ。

「オラ、どうした！　こんなんじゃ痛くもかゆくもねえぞ！」

ブンカートを挑発するためか、自分を鼓舞するためか。

ガクトくんは、蹴られたところを自分の拳で打って、そう叫んだ。普通に考えれば、痛くて仕方ないのを気合でごまかそうとしてるんだろうけど。本当にダメージがないんだったら、無視して戦ったときゃいいんだから。他の人ならブラフってことも考えられるけど……まあ、ガクトくんだからね。

「そう、ですか？」

大声で威嚇されても、ブンカートはニヤついたまま。

少し唇がっり上がったかもしれないけど、リング下からじゃハッキリしない。

ただ、ブンカートを見ると、妙に緊張して変な汗が出てくる。僕の知ってる、あのブルマ好きの変態留学生は、リングの上にはいなかった。

「じゃあ、痛い、します」

そう言ったブンカートは、いきなり加速した。

何が加速したかって聞かれたら、ブンカートが……ってしか言いよ

うがない。

倍とは言わないけど、さっきまでとは比べ物にならないスピードで距離を詰めた。

間合いを詰めながら、重たい左ミドルで切り込んで。

ガクトくんがひるんだところで、今度は膝のちよつと上に右ロー。肉の薄いところを蹴ってバランスを崩して、ガクトくんの首を両腕でロックして。

そのまま引つ張り込んで頭の位置を下げながら、コメカミに左膝を突き刺して。

最後に、膝蹴りを出したときの反動を使ってリングに叩きつけた。

左ミドルが当たってから、5秒くらいだったと思う。

それだけの時間で、ブンカートはガクトくんからダウンを奪った。今までののは全部手加減で、その気になれば簡単にガクトくんを倒せたってことだ。

下手すると、ガクトくんのフックをもらったのもわざとなんだろう。

……強すぎだろ、コイツ。

なんつーか、いや、とにかく強い。

ガクトくんは打撃でダメージ与えただけじゃなくて、あっさりダウン奪うとか。

いくらピンポイントで肉の薄いところ狙ってるからって、簡単に倒しやがった。

真正面から打撃だけで倒そうと思ったら、かなりキツイ相手のはずなんだけど。

とにかく、ブンカートのヤツは、打撃に関しちや桁違いってことだ。

「1！ 2！ 3！ 4！」

カウントが始まった。

明確にダウンしたけど、ガクトくんはすぐに立ち上がるつもり。あんな膝を、首相撲で引つ張られながら頭にもらったのに。片足ずつ、地面を確かめるようにして、のっそりと立ち上がる。

カウント6で、なんとか真っ直ぐ立って。

ちよっとフラつきながらだけど、すぐにファイティングポーズをとった。

「大丈夫かネ？」

「おう！ これくらい、モモ先輩の蹴りに比べたらどうってことねえよー！」

瞳を覗き込みながら聞いてきたルー先生に、ガクトくんは大声で返した。

まあ、ルー先生が止めなかったってことは、まだやれるって判断されたのか。

やっぱタフだよなあ、ガクトくん。

コレだけ打たれ強いってのは、正直うらやましい。

「続行！」

まあ、もう結果は見えてんだけどね。

本人らが納得するようにやればイイか。

試合が始まって、やっと4分が経って。

その4分で、ガクトくんの脳と体にダメージが刻み込まれた。

ガクトくんがダウンしてからは、ブンカートの独壇場だった。

距離が詰められそうになったら、即座にミドルで動きを止めて。

何とか間合いに入っても、首相撲と膝で、腹や脇腹を打たれる。

無理に組み付こうとしてローキックを喰らい過ぎたからか、足は口
クに動いてない。

よく見れば、ガクトくんの右腕は紫色に染まっている。

何度もブンカートの左ミドルを食らったせいで、内出血したんだね。
なんとか腕を上げようとしてるけど、靭帯を痛めたのかガクガク震
えてる。

こんな状態じゃ、右から飛んでくる蹴りは防ぎようがない。

それどころか、キツイミドルをもらったら腕が折れちゃうかもしれ
ない。

対するブンカートは、ほぼ無傷。

ガクトくんの攻撃を回避し続けて、最初の1発以外はカスつてもいい。

そのうち、パンチが来ても下がらずに、横に回り込んで避けるようになった。

避けたついでに、ガクトくんの脇腹にミドルを入れながら。

つてことは、ガクトくんのリズムが完全に読まれてるってことだ。

一言で言うんだったら、差があり過ぎる。

体重差40kg以上、身長差が10cmと少し。

コレだけの不利があるのに、それでもブンカートが押ししてる。

いくらガクトくんに蹴りが無いからって、リーチの差は大したこと無いのに。

頑丈な体をおとりにして、強引に拳を打ち込むことさえ許さない。

ブンカートは、明らかにガクトくんとは桁が違う。

テクニクとか駆け引きとか、試合の上手さが全然違う。

ルールのないケンカだったとしても、きっとガクトくんは勝てない。1対1って形じゃ、まず無理だ。

「おおおおおおお！」

ガクトくんが勝負に出た。

大きく踏み込みながら、振りかぶり過ぎの強引な左フック。

右足にローキックをもらいながらも、痛みを押し殺して繰り出した。

やっぱりブンカートは、そのフックに間に合った。

ローキックを打ちながら、素早くガクトくんの右側にステップする。これで、左のフックは絶対に届かない。スピードもそうだけど、タイミングも絶妙だ。左フックを避けるんだったら、って意味では。

ガクトくんの左フックは、ブンカートに届いてない。いや、ブンカートが立ち止まってても、届くはずがなかった。左フックをすぐに引き戻して、大きく左足を踏み込んで。カウンター気味に、右腕でリアットを放ってた。

相手の動きを観察してたのは、ガクトくんも同じだった。単調な攻撃を繰り返して、相手の行動パターンを読んでたらしい。攻撃が大振りになると、ステップしながら胴体が前足に蹴りを入れてくる。

それを読んで、わざと深めに踏み込んでローキックを誘った。

狙い澄ましたリアットが、今まさに振り切られようとした瞬間。ガクトくんのアゴに、下から突き上げるような肘が見舞われた。ローキックを打たされて、ガクトくんの髭にかかったのに。ブンカートが懐に入って肘打ちを出す方が、ずっと早かった。

ガクトくんの頑丈さを知ってるブンカートは、それで終わらせない。上を向いたガクトくんのアゴに、コンパクトな軌道のフックを叩き込む。

そのまま倒れようとしてるところで首相撲を仕掛けて、また頭に膝蹴り。

左膝を2発入れて、頭を引き下げて右膝を大きく振りかぶったとこ
ろで。

「ストップ！ もう勝負は着いたヨ！」

つて、ちょっと遅すぎるタイミングでルー先生がブンカートを止め
た。

ホントだったら、さっきの時点で止めなきゃいけなかったのに。
ガクトくんを尊重して戦わせたから、こんな結果になった。
まあ、ガクトくんが満足してるなら、それでいいと思うけどさ。
審判としては問題あるんじゃないかな、ルー先生って。

ブンカートが首を離すと、ゆっくりとガクトくんが倒れ込む。
完全に意識なんて残ってない、そう思わせるような倒れ方だった。
結構な勢いでマットに顔をぶつけても、ピクリともしない。
それだけのことで、ブンカートの強さが示された。

ブンカートの顔には、まだあの笑みが張り付いていた。

観客は、みんな静かにしてる。

まあ、声が出ないのは僕も同じだし、だからどうとは言わないけど。

島津ガクトが負けた。

しかも、たったの1ラウンドで。

まったくの無名だった、ガクトくんより遥かに小柄な生徒が。

あの硬い肉体を、打撃だけで沈めてのけた。

その事実を受け止めるだけの余裕が、心の中に残ってないんだろうね。

川神学園の2年以上の生徒は、ガクトくんの強さを知ってる。

1年の時から何度か決闘をして、相手のほとんどを力でねじ伏せてきた。

プロボクサー志望の上級生のパンチにも耐え抜くほど、頑丈な体をしてる。

僕みたいに関節技で倒すなら『そういう手があったのか』ってくらいで済むけど。

突き蹴りだけでガクトくんが倒されたのは、衝撃的だったに違いない。

「…………先輩が勝ったら、あの人と戦うんですよね」

「そうだね、プロテインだね」

ビックリしすぎて、なんか武蔵に訳の分からない返しをしちゃった。いや、だってさ、あんなに強いと思ってなかったんだもん。

イイ勝負してくれると思っただのに、文句無しで圧倒的じゃん。なんつーか、決勝までの道のりが怪しくなっけきやがった。

少なくとも、ブンカートに打撃だけで勝つのが無理っつてのは理解できた。

あのレベルの相手は、錆ついてる空手だけじゃどうしようもない。下手にタックルに行っても、あんだだけ反応が早かったら切られるかもしれないし。

どうにかして足なり腕なりキャッチできりゃイイけど、簡単じゃないよなあ。

そんなネガティブな思考を振り払ってくれようとしたのは、心だった。

さっきまでの勝負を一部始終見てたのに、それを鼻で笑ってみせて。

「はっ！ あの山猿が負けたからどうした？ ミチヒロなら一捻りじゃー！」

自分が戦うわけじゃないのに、自信満々に断言してくれた。

……そうだね、プロテインだね……じゃなくて、頑張らなきゃ心が期待してくれてるんだったら、僕にはそれに応えなきゃならぬい。

そつだ、ブンカートは勝てないほどの相手じゃない。
打撃じゃ完全に負けてるけど、寝技だったらどうだ？
ガキの頃からずっと続けてきたブラジリアン柔術が、通用しないはずがない。
人間レベルの範囲内なら、寝技が俺より強いヤツなんて川神学園にはいるはずがない。
いや、全国どこの高校を探したつて、俺以上に寝技ができる人間なんているもんか。

「まあ、そつだね。負けるために戦うわけじゃないし」

自分の頬を軽く叩いて、気合を入れ直して。

大きく深呼吸をして、全身の細胞を活性化させて。

気持ちを入れ替えて、僕は……俺は、試合に臨むことにした。

「景気づけに、派手にブツ倒してくるわ」

勝ち残るつて決めただから、そうするしかねえもんな。

心のため、俺のため、絶対に勝ち残るつて決めただ。

だったらもう、俺は負けない。

ただ、それだけだ。

7話目『名譽や栄光のためでなく』（後書き）

月の始めに連続投稿……定期的に更新したいところですが、胴にも偏ります。

ううむ、生活習慣が悪いのか……筋トレの量を減らそうかなあ。

ムエタイナックモエ戦士、ブンカートの勝利です。

ガクトみたいなヤツが負けるのは、私の中では限りなくありえないことですが……。

正直、ムエタイだったら仕方ないかなーという感じもします。

ムエタイは……ムエタイは強いんです！（迫真）

ちなみにブンカートですが、身長178cm、体重71kgです。

身長が高過ぎる上に強過ぎたために、ムエタイの試合をさせてもらえなくなったほどの強者です。

あんまり勝ち過ぎると、賭けにならないですからね。

いつもの如くアレですが。

ご意見、ご感想、ご要望……っと、今回は別件です。

なんだかんだと連載続けているうちに、明日で一周年と判明しました。

何か企画を考えようと1カ月くらい前には考えていたのに、今日気付くというありさまです。

どうせ無計画なら……ということ、読者の皆さんの希望を伺いたいと思います。無理があるとか無茶だとか、そういうことは一切考

えて頂かなくて結構です。読者の皆様のご感想が励みになっておりますので、全力でお応えします。ご意見をいただいた方全員の希望を反映できるかどうかは分かりませんが、全部で3本の番外編を書く予定になっておりますので、どんどん書いてやってください。

1年間お付き合いいただき、本当にありがとうございます！

まだ1年くらいかかるかもしれませんが、もう少しお付き合い頂けると幸いです！

8話目『空手に宿る伝説』

リングに上がって、オープンフィンガーグローブの具合を確認する。ナックルパートが少し薄いのが、ちょうどいい感じのグローブだ。手首の部分が絞れるタイプじゃないってのが、俺としては好都合。上手く引っかけてやれば、関節取るときにも有利かもしれない。できるだけ関節技を使わずに、派手に勝ちたいところだけだな。

体もイイ感じに温まってる。

キックミット越しに入江をKOできるくらいには。

……ちょっと悪いことしたかも知れんが、まあ、必要経費だろ。わざわざ由紀江ちゃんの隣に座れるようにしてやったんだから。

とにかく、イイ感じで今日の試合を迎えることができた。同じだけの時間を使ったとして、これ以上の調整はできないってくらい絶好調。

心にイイとこ見せつつ、派手に勝って強さをアピールしときたいもんだ。

まあ、1試合目くらいは気楽に行きたいけどよ。

なんせ、この間の特別試合と違って、今回はトーナメント。

決勝に行くまでは、できるだけ怪我と疲労を控え目にして勝たなきゃならない。

じゃないと、決勝戦で体がボロボロのまま試合開始……なんてことになりかねん。

今回の俺の目標は、川神一子を倒すこと。

その川神と決勝でしか当たらないなら、決勝まで体力を使わないようにするだけだ。

……まあ、ブンカートもいるし、そんなに甘い話じゃねえだろうけど。

リングの上で、渡辺先輩とにらみ合う。

まあ、実際に見てみると、思ったよりも小さい人だ。

170後半はあると思ったんだけど、170前半くらいの身長しかない。

でも、遠目に見るには大きく見えるもんなんだよ。

だってさ、やたらと体中の筋肉が張ってんだぜ？

空着手の上からでも分かるくらい、胸も肩も盛り上がってやがる。

これだけの筋肉があったら、近くで見ないと身長を見誤る。

近くで見ても、実寸よりは一回り大きく見えるんだけどな。

「この日が待ち遠しかったぜ、港よお」

渡辺先輩は、妙に殺気立ってる。

殺気っていうにはナマツちよろいかもしれないけど、とにかく敵意みたいなもん。

それを視線に込めながら、下から俺を睨みつけた。

渡辺先輩の口ぶりからするに、俺と会ったことあるっぽいんだが。

今までの人生を振り返ってみても、この人と会ったなんて記憶はない。

「……あの、初対面じゃないですか？」

そう答えるしかないだろ。

知らないものは知らないんだから。

いくらノツペリした顔つきだからって、それなりに仲良かったら覚えてる。

こうやってツラ突き合わせて分からないってことは、よっぽど初対面だ。

「おお、初対面だけ。コッチが会いたかったっつーだけだから気に入んな」

ギョツと帯を堅く結び直して、先輩が不敵に笑う。

俺に会いたかったっていうのは気味が悪いけど、相当気合が入ってるらしい。

いやいや、気味が悪いって、こっつ、竜兵的な意味でね？

会いたかったって言われても、俺と会うメリットが分からねえんだわ。だから、まあ、竜兵みたいな感じなのかなー……って考えたんだけど。

「戦ってみたかったんだよ。無道会館だった野郎とな」

なんて不敵に笑いながら言われて、やっと納得がいった。

まあ、空手やってるヤツだったら、戦いたってヤツいるよな。

ごく短い時期とは言っても、フルコン空手界で最強の一角だった流派なんて。

もう潰れたつつーのに、未だに雑誌とかで無道会館の話が出るくらいだよ。

今は空手やってなくても、その門下生だったって分ければ、倒したくもなるか。

「はあ、そうですか」

って返すしかねえんだけどな、俺としては。

多少未練はあるにしても、無道会館のブランドには執着ねえんだもん。

そういうの期待してんだったら、俺以外のヤツとやればイイだろうに。

少なくとも、アーノルドが朱雀会にいるんだから。

まあ、アーノルドとやるのが怖いんだろ。

今じゃ190cm超えてて、昔よりも筋肉付いたみたいだし。

あんだだけパワーとリーチのある化物とは、やりたくないんだろうな。アレとマトモにやり合うくらいなら、俺とやった方がマシって思ったのかも。

そんな風に相手選んでる時点で、コイツの底も知れるってもんだ。

なんて考えてると、僕の心の声が伝わったのか。

渡辺先輩の気迫が増して、もっと目つきが鋭くなって。

「ブツ殺してやるからよ、覚悟しとけや」

なんて、楽しすぎる宣言までしてくれた。

……今さらだけど、なんか半笑いしてたみたいだ。

いやいや、渡辺先輩が面白過ぎること言うからだって。

あんなチキン丸出しなこと言われたら、俺じゃなくても絶対に笑っちゃうだろ。

まあ、どうだっていい。

俺のことを見くびってるなら、それは相手の油断になる。

油断してるヤツが相手だったら、これほど楽なことはない。

さあ、俺は気合を入れてくぞ。

相手が油断してる……なんて考えて、油断しないように。

ゴングが鳴って、コーナーから歩を進めて。

お互いの間合いを探りながら、30秒近くの時間が経った。

僕も渡辺先輩も、フルコン空手らしい構えだ。

両拳をアゴの近くに据えて、両足は肩幅くらいに開いて。

2人ともオーソドックスだから、左足が少し前に出てる。

あー……でも、僕の方が少しスタンスが広いか？

つつても、違うところもそこくらいなんだけど。

スタンスの違いは、要は戦い方の違いだ。

俺は突きを重視してるし、場合によってはタツクルも使う。

あんまり足の間隔が狭いと、突きの威力も出にくいし、タツクルも出しにくい。

だから踏ん張りが利くように、フルコンの構えよりも少しだけ広くスタンスをとる。

ただ、渡辺先輩のスタンスも、他のフルコンの連中よりは広い。

蹴りが主体のヤツだったら、もつと両足の間隔は狭いはず。あんまり広すぎると、蹴りの連打ってのは難しいからだ。つまり渡辺先輩は、パンチ重視の組手をしてくる。

渡辺先輩が、すり足で距離を詰めてきた。

一見すると重たい足取りなのに、そんな見た目以上のスピードで迫ってくる。

つつても、俺も似たような歩法使うから、そんなに驚きやしねえけど。

まあ、飛んだり跳ねたりしないってのは、基礎がきちんできてる証拠だ。

最初の一撃は、右前蹴り。

距離を取るための蹴りじゃなくて、それで倒すための蹴り。

俺の腹に鋭く伸びてくるそれを、マトモに受けるつもりはない。

転身。

攻撃を捌きながら、相手のサイドに移動する技術。

相手を死に体にしながら、より有利なポジションに立つ技。

そついう技を使って、渡辺先輩の左側に回り込んだ。

今度は俺の番。

右肘、左ボディフック、右ミドル、左の打ち下ろしストレート。最初の2発はスピード重視で、右ミドルを思い切り打ち込んで動きを止めて。

打ち下ろし気味のストレートは、右アゴの付け根を目掛けて繰り出した。

まあ、渡辺先輩も甘くはないらしい。

最初の3つはガードするしかなかったみたいだが、本命を避けられた。

つか、ギリギリ避けれたつつた方が正確か。

ミドルでバランス崩してたから、なんとか首の動きだけでかわしたみたいだし。

そのまま畳み掛けたりはしない。

相手は、フルコンタクト空手の有段者。

それなりに頑丈な体を持ってて、殴られ慣れてるヤツってことだ。

しかも、他の打撃系のヤツよりも、我慢してラッシュ掛けることが得意な相手。

そんなのと打ち合いしたら、例え競り勝ってもダメージを引きずることになる。

だから、一旦距離を取るってのは、トーナメントなら間違いじゃない。

渡辺先輩が距離を詰めようとするけど、それもさせない。

早い横蹴りで牽制して、踏み込もうとした足を止める。

膝の近くを狙われる機会ってのは、なかなか無いもんな。

渡辺先輩が過剰に反応したとしても、それは普通の反応だ。

ただ……やたらと重心が前に偏ってる気がする。

攻め気が強いのか知らんが、まだ距離を詰める気らしい。横蹴りに反応して足を止めた割には、ちよいと不自然な気もするがまあ、俺に打たれっぱなしだったから、少しでも打ち返したいんだろ。

空手から離れてたヤツにイイように打たれたら、さすがに腹も立つだろうよ。

にしても、歓声がうるさい。

人数の割には、ギヤーギヤーと耳障りなくらいの声が聞こえる。そんな盛り上がるようなことじゃないんだけどな。

つたく、入江まで一緒になって、何騒いでんだよ。

ん？ いや、なんかコツチに伝えようとしてんのか？ 読唇術なんて使えんから、聞こえるようなボリユームで言えっただ。

こんなにうるさくちゃ、入江の声なんてちつとも聞こえやしねえ。

ほら、余計なこと考えてるから先手を取られた。

軽いステップで距離を潰しながら、左ジャブで先手を取られた。

でも、タイミング的には充分に間に合った。

コレを捌いて、カウンター気味に左膝を出す。
あー、ちっと打点がずれたけど、それでもシツカリ腹に当たった。
鳩尾狙ったつもりなんだが、まあ、避けられたわけじゃねえし。

そう思いながら出した2発目の左膝を、スカされた。

回り込まれた。

もの見事に、俺の左側に。

この動きは、轉身じゃない。

捌きを使わずに、体の動きだけで避けやがった。

左側から、嵐みたいな連打が襲いかかって来る。

つか、本当に横から嵐に襲いかかられたとしか思えない。

1つ1つの攻撃は特別重くなくても、隙間なく連打を打ち込んでくる。

蹴りよりも突きの量が圧倒的に多い、空手以外の打撃も混じった連打。

そう、空手以外のパンチが明らかに混じってる連打だ。

空手じゃない。

圧倒的にパンチが多い。

その場に立ち止まらずに、細かくサイドステップしながら打ってくる。

それでもって、首の動きだけで突きを避けた、さっきの動き。

つまり、渡辺先輩はボクシング経験者ってことだ。

……入江、気付いたんだな。

渡辺先輩が、俺のストレートを首を振って避けたのを見て。

俺は偶然だと思ってたんだが、見通しが甘かったらしい。

お陰さまで、ロープ際まで追い詰められて、反撃もままならない。

いや、何か返せるとは思ってたが、迂闊には動けない。

俺よりもパンチが早いみたいだし、何より、今は向こうが勢いに乗ってる。

こんなときに下手な攻撃を出そうもんなら、あっという間に叩き伏せられる。

幸いなことに、渡辺先輩の攻撃は耐えられないほどキツイもんじゃない。

このまま捌き続けて、打ち疲

右頬が痛い。

なのに、左頬には壁が押しつけられてる。

いや、左頬だけじゃなくて、俺の左半身が押し付けられてる。

そうじゃない。

俺に押し付けられてるのは、壁じゃなくてリングのマット。

そのマットの上に倒れ込んで、力が入らなくて起き上がれない。

だから、押し付けられてるように感じてるだけ。

ってことは、俺は今、ダウンしてるってことだ。

ハッキリと音が聞こえない。

鼓膜が破れたわけじゃないんだろ？が、集中できてないらしい。

思ったより意識がハッキリしちゃいるが、体がフワフワしてる。

なんつーか、自分の体と意識が分離されちゃったみたい感じがする。

ピンポイントでアゴにもらって、脳震盪でも起こしたか？

まあ、いずれにしたって、それどころじゃねえ。

ダウンしてるなら、早く立たなきゃいけない。

ゆっくり手足に力を込める。

そう、急がなくていい、ゆっくりだ。

あんまり急ぐと、バランス崩して倒れちゃうかも知れん。

なあに、慌てなくなたって、まだカウントは4つだろ？

俺が立ち上がってファイティングポーズをとる余裕は、十分にある。

……ほら、立てた。
平衡感覚が微妙だけど、立った。
カウントは、やっと6になったばかり。
俺が思ってるより、時間がゆっくり流れてるみたいだ。

俺の目の前にいるのは、ルー先生。
危うく殴りかかりそうだったが、まだまだ俺は冷静だ。
渡辺先輩とルー先生を間違えるとか、そこまで追い詰められてない。

「大丈夫？まだやれそうかネ？」

「はあ？　まだまだ余裕ですよ？」

右の頬がズキズキするのは、ココに攻撃をもらったから。
完全に見えてなかったが、多分、左フックだろ。
あの位置じゃ近すぎて、普通だったらハイキックは当てられない。
それに、いくら連打で押されてたとは言え、足の動きには警戒して
た。

あれだけの前傾姿勢で、ハイキックが出るとは考え辛い。

いや、パンチも警戒してたさ。

警戒してたんだが、それでも俺の死角を突いて拳が飛んできた。
ボディアッパーとフックの連打だったから、アゴ狙いだと思ってた
んだ。

ガードが腹と側頭部に集中したところで、アッパーカットを打つてくる。
わざと下のガードを開けてたんだが……油断してたな。
防御し過ぎも命取りってのは、もう随分と前に学習したつもりだったのに。

余計な事を考えるな。

渡辺先輩の攻撃が何だったかとか、今はどうでもイイ。
あんなもん、どうせ録画されてるんだから、明日にでも確認すりゃイイ。

今は、どうやってこの場面を乗り切るかだ。

もう、出し惜しみしてる場合じゃない。
ブンカートとやる前に、これ以上ダメージは受けられない。
つか、今のうちに一撃かましとかないと、このまま押し切られる。
倒せなくてもイイから、とにかく、大きなダメージを与えなきゃならん。

サウスポースタイルに構え直して、ファイティングポーズ。
右半身を見せるんじゃないくて、体の正面を相手に向ける感じ。
こういう構えをしてる相手には、前蹴りやストレートが有効になる。
単純に、狙うことのできる面積が広がるわけだからな。
そんなことは、打撃やってるヤツなら無意識で理解できる話だ。

今の渡辺先輩は、早く俺を倒したくて仕方ないはずだ。
1度はダウンして、足元はフラフラ。

サウスポーに構えちゃいるが、両拳の位置が胸の辺りにまで下がっ

てる。

パンチが好きなヤツなら、蹴りじゃなくて拳で決めに来るはず。フィニッシュブローはともかくとして、最初の数発は真っ直ぐのパンチだ。

ジャブ、もしくはストレートで斬り込んでくる。

一瞬で充分だ。

だから、一瞬でイイから正常に戻れ。

一瞬でイイから、フルに動けるようになれ。

「続行！」

よく確認しろ。

足の動き、肩の動き、目線、首の傾き、スタンス、手の位置、踏み込みの長さ。

マットの固さ、リングの広さ、ポールの位置、俺と相手の距離を。

ほら、見えてくるだろ？

蹴りを意識してない足運び、僅かに力の入った首の筋肉。

もう両手は拳の形で、予想通り、目くらましの左ジャブ。

ただの目くらましじゃなくて、右ストレートを打つときのタメも同時に作ってる。

俺がひるんだ隙を突いて、さらに大きく踏み込んでからストレートを出すつもりだ。

渡辺先輩との距離は、あと2mちょっと。

俺が確定予測で見たとおり、踏み込みながら左ジャブを出してきた。軽く鼻を叩かれたけど、これは当たってやってもイイ。

このジャブの後にワンテンポ遅れて飛んでくる、右のストレート。

ほら、このタイミングで。

右拳を引きながら、左の拳を。

一閃。

左の逆突きが、渡辺先輩の顔を打った。

全身の筋肉を連動して。

これ以上ないタイミングで。

しかも、カウンター気味に。

俺の渾身の一撃は、渡辺先輩に届いた。

渡辺先輩は、のけ反りながら何歩か後ろに下がって、そこから倒れた。

リングのマットを通して、俺の足の裏にも衝撃が伝わってくる。

人間がマットに叩きつけられるときの、小気味のイイ振動を感じる。さすがに、もたれかかっているロープにまでは、衝撃は伝わらなかったけどな。

まあ、別に特別な技を使ったわけじゃない。

なんてことない、基本技の1つ。

空手やってるヤツなら誰でも知ってる、普通の逆突きだ。

右足が前に出てる構えなら、突きを使う手は左手。

で、拳を横に捻るんじゃないで、そのまま真っ直ぐに縦拳を突き出す。

他にも、腰の捻りとか引き拳とか、いろんな要素はあるが。

そんなに難しい技じゃないし、無道会館独特の技ってわけでもない。

多少アレンジはされてるかも知れんが、まあ、俺はコレしか知らんからな。

ただ、ボクシングの動きに慣れ過ぎたヤツじゃ、警戒してないと避けれるもんじゃない。

肩の動きとリズムでパンチを避けるってのが、ボクシングのディフェンスの真髄だ。

ボクサーのパンチに対するディフェンスの上手さは、そこに起因してる。

だから、空手の突きを避けられない。

リズムもなく、全身の動きが見えにくく、最短距離を真っ直ぐ進んでくる。

しかも、リードブローも何もなく、いきなり本気の一撃が飛んでくる。

様子見なんてない、まさに一撃必殺の名に恥じないだけの威力で。

空手には、1つの伝説が宿ってる。

今じゃ影も形もないが、昔から語られてる理想。

『一撃必殺』って、近代格闘技じゃ考え辛い伝説が存在してる。

……あんま思い出したかないが、俺は伝説を目の前で見たことがある。

ド素人相手にじゃなくて、俺が最強だと思ってた人を相手にして。

今の俺とは少し違うが、俺が使ったのと同じ技で、ガスタオンが倒れた。

師範の逆突きは、1度はガスタオンをノックアウトした。

まあ、2度目以降の立ち会いじゃ、ガスタオンさんが勝ち続けてた

が。
アレだけの柔術使いが一撃で倒れたって事實は、もう覆らない。
その伝説を空手家が味わうことになるなんてのは、笑えん話だけ
な。

ルー先生がカウントを始めるけど……ははっ、無理無理。

まあ、突きが軽いなら話は別だが、体重90kg台のヘヴィ級の突
きだ。

打撃の素人じゃない、キチンと経験を積んだ俺の一撃だ。

今のタイミングで顔面に入ったなら、立てる人間はまずいねえよ。

っーか、立つな。

頼むから、そのまま寝てろ。

せめて、ドクターチェック入って時間が潰れる。

ほら、見るよ先輩。

アンタの左フックは、ちつとも効いてねえぞ。

立ち上がって試合を続けたって、痛い思いするだけだ。

やっても無駄なんだから、もうちよつと寝てろって。

もうカウントは6だ。

立ったところで、ファイティングポーズは取れねえだろ？

せっかく膝立ちにまでなったんだろが、そこでやめとけ。

……正直、ホツとした。

あの一発を出してから、もう10秒は経ってるのに。
俺の足元は、まだフワフワしてやがるんだからよ。

「静かにしてなさい！ 喋っちゃダメだよ！」

うわ……渡辺先輩、鼻の下、内側にへこんじゃってるじゃん。
前歯もキツチリ折れちゃって、口の中から血が溢れてきてる。
いや、やったの俺なんだけど、俺の突きってあんなに威力あったっ
け？

鼻潰すくらいならやったことあるけど、あんな風に人中がへこむと
は思わなかった。

つーか、ちゃんとした突きで人を殴るのが久しぶりだから、比べて
も仕方ないんだが。

それにしたって、脳震盪気味であの威力って……コレで人殺せるん
じゃね？

「やらせろよ！ まだやれるつってんだろ！」

「分かったから、1度リングを降りてからにしなさい！」

イイ歳こいて、ダダこねてやがる。

まあ、もう俺の勝ちが決まってるんだ。

騒ぎたきや、好きなだけ騒げばイイさ。

そう思って、背中を向けてリングを降りたんだが。

俺が思ってる以上に、渡辺先輩のパンチが効いてた。

リング脇の階段に足を掛けたときも、ほとんど地面を踏んでる感覚がない。

ポールを掴みながらじゃなきゃ、そのまま転ぶところだった。

次は、ガクトくんを倒したブンカートが相手だ。

きつと、こんなに楽に勝たせてくれる相手じゃないんだろうな。

……まあ、派手に勝とうなんて欲目は捨てるか。

8話目『空手に宿る伝説』（後書き）

更新がだんだんと遅くなっております orz
イロイロ忙しくなってきたとはいえ、申し訳ない限りです。
アレヤコレヤと手を出したのもよくなかったかも知れませんが、
自分の器を見切れる男になりたいモノです。

えー、今回はタイトル通りの話でした。

空手に宿る伝説、一撃必殺。

昨今の格闘技じゃ、まず考えられない現象ですね。
初期のバリートウッドでも、空手家の一撃で人が死なないと分かっ
てしまいましたし。

……ぶっちゃけ、空手やつてる私も信じてません。

話はグダグダして、執筆ペースも遅くなっていますが、
ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字の御指摘などお待ちしております。
す。

というか、毎度毎度お待たせして本当にすいません。

9 話目 『Kay Fabianは彼なのか?』 (前書き)

タイトルの意味が分からなかった方は、検索せずに読んでください。
意味が分かった方は……やはり、そのまま読んでください。

9 話目 『Kay Fabianは彼なのか?』

リングから降りると、集中力が切れてくる。

コレがイイのか悪いのかは知らんが、メリハリは必要だろ。

まあ、俺……僕だって、無限に集中できるわけじゃないんだから。
ところどころ気を抜かないと、さすがに疲れちゃうよ。

……怪我らしい怪我は、今のところはなさそう。

顔に1発デカイのを貰っただけで、他は大したことない。

次の試合までには、充分回復できるくらいダメージだ。

アレくらいの威力の攻撃なら、今までだって何度も喰らってきたからね。

昔は耐えられたんだから、今だって耐えられるに決まってる。

リングから降りて、そのまま皆が座ってるパイプイスの辺りに行っただけだ。

心たちの顔を見ると、焦っていたり慌てたりで忙しそう。

困るなあ……大した怪我もないのに、そんなリアクションされると。

心なんて、何も持たずに僕に駆け寄って来てくれちゃったし。

汗さえかいてなきゃ、そのまま抱きしめて撫でくり回すのに。

「ミチヒロ！ 大丈夫か！？」

「あー、大丈夫大丈夫。ラッキーパンチもらっただけだから」

いやあ、ダメだね。

1 試合目から心に心配かけちゃうなんて。

鼻血こそ出てないけど、鼻も赤くなってるだろうし………みっともない。

相手が格上だったならまだしも、大して強いでもなかったし。

自分の未熟が招いた怪我だって思うと、とてもじゃないけど気恥ずかしい。

合わせる顔がないってのは、こういう心境のときに言うんだろっなあ。

「とりあえず、コレで冷やしてください」

「いやいや、ホントにまた当たっただけだって」

武蔵なんか、氷嚢持ってくるなんて大袈裟なマネをしてくれた。

そういう風に心配されると、今さらパンチが効いてくる。

ぼんやりした感覚しかなかった左頬が、急に痛くなってきた。

こう、ズキズキするっていうか、鈍い痛みの中に鋭い痛みが混ざっていうか。

とにかく、涙が出そうな痛みが生まれくる。

そういうわけで、痛みを誤魔化すために氷嚢は受け取っておいた。

……なんか、口の中に違和感があるんだけど。

僕はいつたい、いつの間に小石を含んだんだろうか？

そんなもの入れたって、なんのプラスにもならないのに。

そもそも、いつたい僕はどこで小石を口に入れたのか、それも思い出せない。

とりあえず、舌で、こっ、転がして……どうにか口から出した。

そこには真っ白な……どう見ても歯にしか見えない小石が転がり出てきた。

っーか、ぶっちゃげ歯だ。

「……歯、抜けちゃったみたいですね」

「別にいいよ。どうせ前歯は全部抜けてんだし、大差ないって」

武蔵の声が遠く感じるけど……まあ、これくらいは当然か。

よく考えたら、歯の1本くらいは抜けるよね。

あの薄いグローブで、僕がダウンするくらいの力で殴られたんだし。下手に歯が欠けること考えたら、ポロつと抜けてくれてよかったかも。

とりあえず、イロイロ詰めといたスポーツバッグの中からタオルを取り出して。

そのタオルに、心からは見えないようにして、口中の血を吐き出した。

ツバと混じってサラサラした血液が、少しずつタオルに広がってく。紺色の地だから目立たないだろうけど、それでも結構な量の血が溜

まっていた。

口の中切ってたんだから、これくらいの出血は当然だけど。
っていうか、ずっと血を飲んで誤魔化し続けるのもキツイんだよ。
まあ、この調子だと、向こうしばらくは口内炎に悩まされるんだろ
うなあ。

油断してたのが原因だから、自業自得なんだけどね。
その自業自得って部分が、殴られた頬よりも痛むところだ。

まあ、シヨゲてても話は進まないから。
とつと気持ち切り替えて、体を休めることにした。
それと、次の次に試合する相手の戦いっぷりを見ておかないと。

「次、川神の試合だね」

パイプイスに座って、リングの上を見つめる。

軽く掃除してるみたいだけど、そんなに待たなくても試合は始まる
はず。

ちよつと血を拭きとるくらいのこと、そんなに時間は食わないで
しよ。

勝った選手の休憩時間を合わせても、せいぜい10分と少しくらい
かなあ。

そんな風に、どっしりと構えたつもりになってたのに。

由紀江ちゃんが、僕の心を萎えさせるようなことを進言してきた。

「ミチヒロさん、棄権してください」

川神の試合を心待ちにしていた僕に、こんな戯言を抜かす。

せっかくテンションを維持してるのに、氣勢を削ぐようなことを言う。

どついう意図があるのか知らないけど、僕が戦い続けるのを拒みたいらしい。

……まあ、単に心配してくれてるって線もあるけど。

見くびられてるみたいで、ちょっと癪だと思わない？

僕のそんな思いなんて、ちっとも気にしてないんだろうね。

由紀江ちゃんは、僕の表情を気にも留めずに言葉を続けた。

「その怪我で、次の試合を戦い抜けるとは思えません」

「コレくらいの怪我で……いやいや、大袈裟だって」

僕は、そういう正論が好きじゃない。

ちよつと脳震盪起こして、歯が1本抜けて、口から血が出るだけ。それくらいの怪我なら、試合してれば普通にあることなんだから。いちいち気にしてたら、スリ傷1つにまで気を遣わなきゃいけないじゃん。

怪我したまま戦うのが怖いなら、格闘技なんてやらなきゃいいんだよ。

「此方もまゆっちと同意見じゃ」

……心にまで、そういう風に言われるとは思わなかった。

いや、僕のこと心配してくれてたなら、こういう言葉は当然か。

心からしたら、歯が抜けるレベルの怪我って酷い怪我なんだろうし。僕と同じ感覚を押しつけるっていうのは、やっぱり失礼だよなあ。

「悪いことは言わん。棄権したからといって、誰もお前を責めたりはせん」

「大丈夫だよ。首が捻じれたわけじゃないんだから」

心は優しく言ってくれるけど、僕は下がるつもりはない。

こんなにも優しい心を手に入れたかったら、ココで気張るのが一番なんだから。

負けても怪我以上のリスクはないし、勝てばアピールになる。

だったら、僕がココで引きさがる理由なんてもんは、何一つとしてない。

心が引けって言っても、ココは引けない。

「まあ、試合に出た記念ってことで、もう1試合くらいしてくよ」

だから、向こうも追求しにくいようなセリフで話を切っておいた。次の試合で勝ったら『最後までやらせてくれ』って言うつもりだけだ。

それに、歯あ1本持ってかれてんだから、今さら棄権したら損じゃ

ん？

もう少しくらい元を取っておかないと、気分悪いしね。

着替えもせずにパイプイスに座って、試合終了から20分。
頬を冷やししながら、生理食塩水で3回も口をゆすいだ。
出血は治まったみたいだけど、口の中が痛いのは変わらない。
ついでに、ウォームアップの最中にダウンさせた入江は、未だに帰
ってこない。

ああ、そうそう。

川神と大滝先輩の試合だけど、もう始まってる。

川神が抑え気味なのか、さっきから決定打が1発も出てない。

1ラウンド目はチマチマ牽制し合って、もう2ラウンド目の半ばだつていうのに。

まあ、この試合の主導権を握ってるのは間違いなく川神なんだけど、その川神が勝負に出ないから、ちっとも試合の展開が進まない。

最初っから、軽いローとかジャブしか出さないんだよなあ、川神が対する大滝先輩は、1ラウンド目の終わりから焦れてきてる。

川神の攻撃を避けて技を返そうとして、そこで打たれるってパターンが多い。

危なそうな攻撃は上手にガードしてるけど、それが反撃につながらない。

倒れるような攻撃じゃないとはいえ、好きなように打たれればなしなわけだ。

ただ、大滝先輩はスタンドレスリングが上手い。

首相撲とは違うけど、立ったままの組み合いで器用に相手をコントロールしてる。

攻撃につながるから、その場しのぎの技なんだろうけど。

それにしたって、組み合ったときは川神に手を出させてないのは凄いいよね。

そう、1回だけだけど、川神が組んだんだよ。

わざと大振りの右ストレート出して、拳を引くところで襟掴んで。

そこから首相撲っぽい形になろうとしたんだけど、先に左腕を掴まれてさ。

結局、そのままロクなポジションに入れずに、川神が自分から離れちゃったんだよ。

なんていうか、随分と手慣れた動きだったのが印象的だった。

また、川神のジャブが当たった。

そこから一步下がって、大滝先輩の周りを回る。

スタンダードの大滝先輩に対して、反時計回りに回る。

この動きだけで、大滝先輩の右の蹴りは封じられたも同然だ。

自分の左側に動く相手に、右の蹴りを当てるのは難しい。

後ろ蹴りならまだしも、前蹴りや回し蹴りなら不可能と言ってもイ
イくらいには。

仮に当たっても、蹴りと同じ方向に逃げられてちゃ、充分なダメー
ジは期待できない。

それが分かっているから、大滝先輩も右の蹴りは出してない。

……しかし、1回戦からだけど、川神の戦い方が妙なんだよね。

もともと川神って、相手の格にかかわらず長期戦ができるタイプじ
やなかった。

良くも悪くも勝負が早く決まるような、そういうタイプだったはず。
なのに、この試合も、1回戦も、攻撃を受けないように慎重に戦っ
てる。

トーナメントを意識した、キレイな戦いができてる。

いや、川神のことをずっと見てたわけじゃないから、ホントはどう
か知らないよ？

でもさ、少なくとも今までの決闘じゃ、早期決着ばっかだったんだ
よね。

クリステイアーネと戦ったときだって、まあ、悪い意味で早く決着
が付いてたし。

勝負を焦るような性格だと思ったんだけど、勘違いだったんだろうなあ。

と、川神が素早く間合いを詰める。

牽制の掌打で顔の近くを打って、意識を顔面に集中させて。それで、またローキックを出して足にダメージを与えて。さっきまでと同じように、すぐに距離を取り直す。

大滝先輩は大滝先輩で、少しだけ追う気配を見せて踏み止まった。まあ、アレでイイと思うんだけど、やっぱり要領悪いよなあ。

川神が細かく打ってくるのは分かっているんだから、合わせるタイミングはあるでしょ。

少なくとも、踏み込んできた瞬間だったら、コッチの攻撃も当たるんだから。

……大滝先輩って、身長割にリーチが短いみたい。

ジャブを出してくるのはイイんだけど、腕が伸びきってないんだよ。いや、伸び切るのもよくないんだけどさ、引きが早過ぎる。

まるで、始めから当てるつもりがないとしか思えない。散打を使うらしいけど、アレって打撃もキツチリ技術に入ってたよなあ。

その割には、武蔵よりも打撃ができてないように見えるから不思議なモンだ。

そもそも、何を狙ってタルい攻撃を出してるのやら。

川神の攻撃を何度も受けておいて、焦れてるのに攻めてかない。

っていうよりも、打撃で川神を倒す気がないってことか？
それとも、一撃で倒すのを狙って、わざと力のない攻撃を出してるのかな？

そんなことを僕が考えてるうちに、また川神のジャブが当たった。
間合いに出入りするスピードが早過ぎるせいで、大滝先輩の攻撃は当たらない。

ココまでは、さっきまでと全く同じ展開だったけど。
でも、ココからは同じようには行かなかった。

そもそも、川神は気付いてない。

大滝先輩に少しずつ追い込まれてたことに。
振り返ったら、すぐ傍にリングのポールがあることに。

一度は開いた間合いが、一瞬で詰められた。

川神が下がるのに合わせて、大滝先輩が突っ込んだ。

確かに、あんな軽い攻撃を出したくらいじゃ、自分のバランスは崩れない。

いくら川神のバックステップが早くても、十分に追いつける可能性はある。

でも、コレができるってことは、攻撃のタイミングが掴めてたってことで。

好き放題に打たれてたのは、一気に勝負を決めるためのフェイクだったらしい。

大滝先輩の動きは、さっきまでとは比べ物にならないくらい速かった。

わざと襟首に手を伸ばして、それを弾こうとした川神の右手の手首を握り締める。

そのまま右手で体操服の襟を絞るように掴んで、組技に持ち込んだ。このタイミングで組んだってことは、勝負を決めにきたんだろうね。自分の得意な形に持ち込んだんだから、そこから何もできないはずがない。

掴んだ右手首を、川神の体に向かって押し込むようにして。

バランスを崩しながら、足払いみたいな技を掛けた。

倒れる先はリングのマットの上だけど、コレは間違いなく危険な落とし方。

このまま肩からモロに叩きつけられたら、肘か肩のどっちかがイカれる。

このまま叩きつけられたら、だけど。

川神の足が、大滝先輩の右足に絡んでた。

足払いを掛けてきた足を、逆に川神が刈り返す。

……そうじゃなくて、川神は、シツカリと足を絡めた。

大滝先輩と川神が、一緒にリングに倒れ込んでく。

2人して仲良く背中から、それでも、大滝先輩が少しだけ早く。

川神が腕を抱え込んでるから、受け身を取ることなんてできない体勢で。

豪快な音を立てて、リングに叩きつけられた。

『河津掛け』っていつて、柔道じゃ危険すぎて禁止されてる技なんだけど。

受け身も取らせずに、かつ、重傷を負わせやすい技。

川神は、躊躇った様子なんて少しも見せずに。

掛けられた足払いの勢いまで利用して、大滝先輩と一緒にリングに倒れ込んだ。

同時に響いてくる、人骨がリングを打った時の鈍い音。

それと、思わぬ痛みを感じて漏らす、聞こえるかどうかの小さな悲鳴。

決着を感じさせる悲鳴が、気のせいかもしれないけど、確かに僕の耳に聞こえた。

2人がリングの上に倒れて、5秒くらい経って。

立ち上がってきたのは、川神だけだった。

ルー先生から勝利の宣告を受けて、川神は悠々とリングを降りる。アレだけのことをしたのに、全然動揺した様子がない。僕が言うのも変だけど、ココまでしておいて落ち着いてるのは不気味だ。

で、腕を折られた大滝先輩は、担架の上でもがいている。

なんとか呼吸をしようとしてるみたいだけど、イロイロあって叶わない。

リングに背中を強打して横隔膜が痙攣してるのと、折られた腕の痛み。

悲鳴こそあげちゃいけないけど、立つ余力さえ残ってない感じ。

どこを見るわけでもなく目を見開いたまま、「はっ、はっ」って短い呼吸を繰り返してた。

どうやら僕は、アホみたいなのウワサを信じなきゃいけないらしい。

いや、全部は信じないけど、少しは信じなきゃならない。

川神が、川神院の立ち会いで相手の関節を壊した。

そういうウワサの基になる事実があったことを、信じなきゃならない。

「いやいや、えげつない投げ方するもんだね」

投げの造詣が浅い俺から見ても、アレはわざとだ。

河津掛けの形になったのは、まあ、偶然かもしれない。

でも、わざわざ腕を抱え込みながら投げたのは、相手の腕を折るためだと思う。

関節がキツチリ極まったまま衝撃が加わったら、簡単に折れちゃうもん。

投げ技つてのは、そういうところが怖いんだよ。

ちよつと工夫するだけで、容易に関節を破壊できる。

ただ受け身を取らせないっただけで、簡単に重傷を負わせられる。当然、そうするにはそれなりの技量がいるんだけどさ。

逆にいえば、ある程度の技量があれば誰にでもできちゃうんだよ。

正直、武蔵くらいの技があったら、今すぐにも同じことができるだろうね。

「まあ、でも、まだ甘いかなあ」

余裕を見せるために、そう言ってみた。

僕が少しだけでも動揺したことを、誰にも悟られちゃいけない。

そのためにも、矢継ぎ早に心に話題を振った。

「心だつたらどうする？」

「そうじゃな……袖釣り込み腰でポールにぶつけるとか……」

そこで袖釣り込み腰をチョイスするのは、心くらいだよ。

こういうときは、払い腰とか大腰使うのが普通でしょ。

そういう言葉は呑み込んだけど、まあ、そういう手がある。

せっかく背後にボールがあっただから、そこを目がけて投げればいい。

地面じゃないんだから、受け身の取りようもないしね。

……ぶつちやけ、下手すると死ぬんだけど。

「ミチヒロさんなら、どうやって切り抜けますか？」

「ん？ 襟掴んでる手を握り潰すか、指一本折れば終わるでしょ」

なんつったって、僕の握力は両方3桁だからね。

特に、指先で掴まむ力と、全力を維持する能力には長けてる。

そこらの高校生の手を握り潰したりとか、そりゃ余裕だよ。

まあ、本当は、そんな力技を使うつもりなんて毛頭ないんだけど。

足払いしてきたら、軸足を刈って倒せばいいんだから。

そんなもって、そこからグラウンドで遊んでやりゃいい。

グラウンドで僕より強いヤツなんて、まず高校生じゃないんだから。

由紀江ちゃんがどうするかは、まあ、聞かなくてもいい。

僕と由紀江ちゃんが勝負するときには、そんなシチュエーションにはならないから。

3年前に最速のタックル捌かれた時点で、この子相手に組もうとは思わなくなった。

まあ、組んだところで、関節技には入れなきゃ意味ないしね。

……強力な投げ技があればいいんだけど、簡単にはいかないもんな

あ。

「いずれにしても、侮れんぞ」

心が言うことはよく分かる。

今までと違って、川神は相手を平然と壊してくる。

強くなったかは知らないけど、容赦がなくなった。

容赦がなくなったってことは、何でもしてくるってことだもんね。少なくとも、ルールから逸脱したマネはしてこないだろうけど。

ただね、1つ言わせてほしい。

川神に容赦がなくなったからって、僕が負けるってわけじゃない。容赦する気がないのは、コッチも同じだ。

「まあ、気を抜かないように頑張るよ。とにかく、次の試合で……」

次の試合で勝たなきゃ、そんな話も意味ないからね。

そう言いかけて、僕は言葉を切った。

「ハイ、ミナト」

にこやかな笑顔のまま、ブンカートが歩み寄ってきたからだ。

片手を上げて、軽い足取りで、普通にあいさつしに来たみたいだ。

次の試合で僕と当たることなんて、全く気にしてないように見える。でも、外見だけじゃ心情も分からないし、目的も全然分からない。非合理極まる行動に、僕達は驚くしかなかった。

「少し、時間、ください、です」

「試合がすぐに始まるけど、すぐに話は終わるのかな？」

こういう言い方をしてやらないと伝わらない。

ここ最近は日本語にも慣れてきたみたいだけど、普通に話すと意味が伝わらない。

まあ、ブンカート本人が勉強熱心じゃないってのが大きいんだろうけど。

それでも、ココは僕が譲歩してあげないと、意思疎通ができやしない。

……せめてブンカートが英語を話せば、ココまで苦労しなくて良いのになあ。

それに、こんなギリギリのタイミングで時間が欲しい理由が気になる。

心理戦を仕掛けてくるようなタイプじゃないけど……だからこそ気になる。

僕に有利な話だったら、乗ってやるって手もあるしね。

「すぐ、終わります。とても、とても、話、大事です」

「分かった、少しだけ時間をあげよう」

そう伝えると、ブンカートは笑みを深めた。

こう、常に笑顔でいられると、毒気が抜かれそうで気分悪いなあ。心の笑顔だったらともかく、野郎の笑顔だと一層不愉快になるね。

あー……なるほど、だから僕は葵のことが好きじゃないのか。いっつも口元笑ってやがるモンな、アイツ。

「それじゃあ、少し話してくるから。」

20分経つても戻って来なかったら、運営に連絡入れといて」

「……すぐに戻って来い。そんなには待てんからな」

不満そうな顔をしてる心を残してくるのは、結構気が引けたけど。

今回ばかりは、少しだけ我慢してもらおうことにした。

この埋め合わせは、そう遠くない内に必ずしないとね。

にしても、まさかブンカートから来るとは思わなかった。

っていうより、ブンカートが来るなんて想像してなかった。

だってさ、考えてもみてよ？

今から試合しようって相手が、わざわざ時間取って話しかけてくる。

そういうときって、どんなことを話すのか予想が付くもんじゃない？

まあ、それが、僕にとって都合のいい方の話かは、今から分かることだけだね。

9 話目 『Kay Fabianは彼なのか?』 (後書き)

えー、こんな感じの話でした。

ここまで読んで下さった皆さん、『Kay Fabian』を検索して下さってもOKです。

どうせ次の話でタネ明しがありますが、今知って頂いた方が面白いかもです。

それを踏まえた上で話を読み返していただくと……。

今回は、ちょっと戦闘シーンが冗長でした。

それくらいワン子が同じ戦法を取っていたかと思っただけだと幸いです。

正直、書いてる私も刺激に欠いているような状態でした。

……あつという間に残り2試合ですが、盛り上がる試合を書けるように努めさせていただきます。

どうにも筆力が落ちてる気がしますが、ご容赦いただきたく思います。

いつもの如く、もう見飽きた方も多いでしょうが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘などお待ちしております。

また、気になった点についても書いていただけると嬉しいかもです。

10 話目 『ブルマだったら何が悪い』 (前書き)

ブルマっ子は出てきません

10 話目『ブルマだったら何が悪い』

ブンカートについて行って、もう5分くらい経ったっけ？

アッチコッチ移動して、やっと落ち着いて話ができる場所まで来た。

僕が連れてこられたのは、コケが生えはじめてる水飲み場。

教室棟の裏手にある水飲み場で、去年、ラグビー部が集団で中毒を起こした場所。

そついう衛生面の問題とかで利用者が減って、来年の3月に取り壊しになるらしい。

清潔もムードも無縁なこの場所に、誰かが来るって確率は低いと思う。

一応、僕らを付け回してた連中も巻いてきたし、まあ、大丈夫ですよ。

とにかく、これでブンカートの意図が分かった。

こんな人気のない場所で、次に戦う僕としたい話。

こういつときの話つてのは、十中八九相場が決まってるよね。

ブンカートは、僕から5mと少しの距離を取ってる。

まあ、どっちかが距離を取ったんじゃないかって、お互い自然に取った間合いがコレ。

一足一刀よりもまだ広い、攻防のやり取りすら存在しない間。

そんな、5mと少し先にあるブンカートの口が、静かに開かれた。

「ミナト。僕、ムエタイ、とても強い」

「知ってるよ」

「総合ルール、ミナトより、きっと、強い」

「そうかもね」

それは、さっきのガクトくんと戦いを見て分かった。

打撃じゃ到底勝てないレベルだし、組技に持ち込んでも首相撲がある。

寝技まで引きずり込めればいいけど、それもできるとは思えない。

怪我を承知で首相撲をさせて、無理やり転がすくらいしか手がないんだよね。

客観的に見て、ブンカートは僕よりも強い。

近付いても離れても強力な武器があつて、それなりに打たれ強い。

ディフェンスや駆け引きも上手だし、拳句の果てにスピードもある。パワーとリーチは僕の勝ちだろうけど、他は負けてるか拮抗してるか。

いずれにしても、平均的に全てが優れてる、一番やり辛いタイプだ。

そんな風に僕が悩んでるのを、知ってるのか知らないのか。

まあ、そこまで考えてないだけなんだろうけど。

あのニヤついた顔で、僕の予想してた提案をぶちまけてくれた。

「負ける、ください」

僕が予想してた、望んでない方の提案を。

自分も、イロイロと訳があつて川神一子と戦いたい。

川神は無傷に近いから、できれば僕との試合で怪我をしたくない。でも、僕と戦つて無傷で勝てる自信がないから、怪我を理由に棄権してほしい。

もし棄権できないなら、わざと負けてほしい。

ブンカートの話の内容は、要するにそういうことだった。

まあ、全然話にならないよね。

確かに、期待してたとおり八百長フェイクの持ちかけだったんだけど。

僕に勝ちを譲ってくれるって話じゃなきゃ、乗るわけないじゃん。だから僕は、偽りなくブンカートに答えてやった。

「僕も川神と戦いたいんだよ。だから、断る」

その言葉を聞いて、ブンカートは初めて笑みを消した。急に真剣な表情になったとか、そういう話じゃない。誰が見ても困ってるって判断できるような、そういう顔をする。ブンカートのそういう表情を見たのは、僕も初めてだ。

「それ、困ります。僕、ブルマ、欲しいです」

……まあ、頭の中身は、いつものブンカートみたいだけど。

ブンカート・チョーワイケン。

生粋のタイ人で、タイ語しかマトモに話せない。

川神学園の留学生で、今は2・Bの生徒をやってる。

1年の時から日本にいたんだけど、日本語が怪しくて友達ができなかったヤツだ。

とは言っても、最近は人付き合いも増えてきたみたいで、その辺は心配ない。

それ以上に大事なものは、コイツの趣味嗜好。

『第六ブル魔王』なんて呼ばれるほど、ブルマ好きが極まってるんだよ。

魍魎の宴じゃ、矢場先輩だかのブルマを20万で落札したこともある。

しかも、矢場先輩に限らず、色々な生徒のブルマを落札してきた筋金入りでき。

ブルマが絡むと、僕の想像を軽く凌駕するような行動力を見せてくれた。

今回の試合に参加したのがブルマのためってことなら、妙に納得できる。

「…………あのさ、いつからブルマの話になったのかな？」

ただ、今の話の流れとは全然関係ない。

ブルマが絡んでるのは分かったけど、なんでブルマが欲しいって話につながるのか。

ブルマを欲しがってるのなんて、今に始まったことじゃないのに。それが腑に落ちなかったっていうのと、話の流れがよく分からなくなってる。

結局、ブンカートに聞き直すことになった。

「カワカミさん、僕、約束しました」

「約束って、どんな？」

「ナイシヨ、シークレットです」

…………ロクな答えが返ってこなかった。

内緒だったなら、初めから僕に八百長を持ちかけるなってんだ。

まあ、どういふ約束を川神としたか知らないけど…………いや、ちょっと待て。

落ち着けよ…………落ち着いて情報を整理しろよ？

ブンカートは、ブルマが欲しい。

僕が負けることで、ブンカートはブルマを手に入れられる可能性がある。

しかも、それは川神との約束があるからこそ。

状況を客観的に判断するに、川神がブルマを餌にブンカートに八百長を頼もつと……。

いや、やっぱり妙だ。

そんな話があったとして、川神が飛び付くとは思えない。

そもそも、川神とブンカートのどっちが提案したかも分からない。

……っか、どっちが提案したにしても気色悪すぎる話だよなあ。

うん、バカらしいから、ここら辺で考えるの止めとこう。

「僕、負ける、イヤです」

「僕だって嫌だよ、そんなもん」

東南系独特の顔した男に困った顔で頼まれても、1mmも心が揺れない。

『お願い!』とかいって両手を合わせて頭下げてきたけど、嫌なもんは嫌だ。

榊原の使用済みブルマを……矢場先輩のブルマを出されても絶対に曲げない。

ブンカートには気の毒だけど、そういう次元の話じゃないんだから。まあ、榊原の使用済みブルマと交換だったら、考えてやらないこともないけどね。

「それ、分かる、しました。なら、条件あります」

拝み倒しても無駄だと知るや否や、これまた妙なことを言い出した。頼む側だったブンカートが、僕に対して条件を付けるって変でしょ？

……とか思っただのも束の間。

間髪入れずに、この変態は変態的な発言をかましてくれた。

「コスギさん、ブルマ、欲しいです。くれる、したら、負けます」

まあ、たどたどしい日本語だけど、言いたいことは伝わった。

さっきまでは、僕がブンカートに負けるかどうかの話し合いだった。

でも今は、ブンカートが僕に負けてくれるための話に変わってる。

それでもって、その条件が『武蔵のブルマ』らしい。

……うん、それ無理。

「いろんな意味で無理があるんだけど？」

「ミナト、頼む、コスギさん、くれます。絶対です」

コイツ、どこで僕と武蔵のこと見てやがったんだよ。

っていうか、仮にもらえたとしても、マイナスの方が大きいじゃん。確認するまでもなく、心が僕に2度と話しかけてくれなくなるに決まってる。

今日のトーナメントで優勝しても、心と付き合っどころの話じゃなくなるでしょ。

まあ、それを説明するのも面倒だから、もっと簡単な理由で断ることにした。

「武蔵とは微妙な関係だね。そういうこと頼める状態じゃないんだけど?」

「ユキエさん、イヨさん、ココロさん。誰のブルマ、OKですか?」

「どこまで俺の交友関係に詳しいんだよ!」

「他、知りません。ブルマ、似合う人、それ以外、分かりません」

ああ、もう、頭痛くなってきた。

こんなことだったら、ココに来るんじゃないかった。
完璧に時間の無駄じゃねえかよ。

このバカに付き合うんじゃないかと、素直に体を休めときゃよかった。

「とにかく! 魍魎の宴以外で、お前にくれてやるブルマはねえんだよ!」

控えめの声量だけど、キツク言っておいた。

これくらいハッキリ断っておかないと、まだ食い下がるかもしれない。

まあ、そのおかげか、ブンカートもこれ以上頼み込んでほなかった。

聞えよがしな舌打ちをして、嫌悪を顔いっぱいに滲ませて。

不気味な笑顔を張り付け直してから、さっきよりも固い声で告げた。

「後悔、してください」

途切れ途切れの言葉のクセに、やけにシツカリしたアクセントだった。

そのせいで、本当にブンカートがそう言ったのかも怪しい気持ちになる。

でも、確認しようと思ったときには、もうブンカートの背中しか見えなかった。

なんつーか、それだけ凄いギャップだったんだろうなあ。

「そりゃコツチのセリフだ、ボケ」

仕方ないから、視界から消えたブンカートに小さく捨て台詞を吐いておいた。

こづいづのは僕の性分じゃないけど、たまにはイイよね？

「あの、港先輩」

捨て台詞を吐いた直後。

ブンカートと別の道で戻ろうとしたところで、上から声が降ってきた。

存分に聞き覚えのある声で、つい10何分か前まで聞いてた声。要するに、武蔵の声なんだけど。

「盗み聞きは感心しないなあ」

声の方向に目をやると、武蔵が小窓からコッチを覗いてた。確認したことなかったけど、どうやらココは女子トイレの真下らしい。

……こんなところに水飲み場があるってのが、えらく不自然な気がする。

そんな疑念が芽生えたところで、武蔵が飛び降りてきた。

こう、器用に小窓から上半身を出して、窓の上のサッシを掴んで外に背中を向けながら下半身を引きずり出して、下のサッシに片足をひっかけて。

スカートを軽く押さえながら、僕から少し離れた所に着地した。

こういうところで身軽さを披露しなくてもイイと思う。

あと、薄桃色の下着は似合ってるから、ぜひ今後も着用すべきだとも思う。

「予備のブルマだったらあげれますけど、どうします?」

「……あのさあ、武蔵」

なんていうか、武蔵まで僕の頭を痛めつけるようなことを言った。さっきのジャンプで下着が見えてなかったら、穏やかに対応できなかったかも。

「大丈夫です。まだ未開封ですけど、汗を拭いたタオルと一緒にしてレンジで……」

「そういう生々しいカモフラージュはイイから、ちよつと黙れ」

ブルマが新品と悟られないための方法なんて聞きたくない。

武蔵も武蔵で、いったいどこでそんな奇抜な技を習ったのやら。

こういうセリフ聞いちゃうと、先輩としても頭が痛くなってくるよ。まあ、盗み聞きしてた分は、パンツ見えたからチャラにしてあげるけどさ。

「ったく……どうして盗み聞きなんてしてたの?」

「何かあったら大変じゃないですか」

いや、何かあったら大変だけどさ。

うーん……まあ、わりとみんな心配してくれてるんだなあ。

やっぱ、コッチから八百長を申し込まなくて正解だった。

成立するかどうかは別に、なんか裏切ったみたいになっちゃ
うもんね。

「で、どっから聞いてたの？」

「『ミナト。僕、ムエタイ、とても強い』の辺りからです」

最初からかよ、とかツッコむ気力もない。

つてことは、僕たちのことを尾行してたのは武蔵だったか。

巻いたつもりになってたけど、まさか距離を置いて監視してたとは
ね。

まあ、こういう技能が将来的に役立つのかとか、その辺は無視しと
ころ。

「とところでさ、ブルマの話が出たってことは、僕が負けるって思っ
てるの？」

「……正直に言うと、ちょっと危ないかなーって思ってます」

こういう場合、正直なのはいいことだよな。

僕自身が力量を実感してるんだから、下手に慰めてほしくない。

むしろ、自分の方が弱いつて分かってくれば、それなりに頭も使う。

下手に開き直って突っ込むよりは、ずっと勝つ確率は上がるっても
んだ。

でも、これでも僕は先輩だからね。

内面をペラペラしゃべって、後輩を不安にさせるわけにはいかない。

そればかりでもないんだけど、そういうわけで虚勢を張ることにした。

「大丈夫だよ。僕は、武蔵が思ってるより少しは強いからね」

「ふーん……そうですか」

まあ、武蔵には見抜かれてるのかもしれない。

コイツがこういう態度を取るときは、何か考えてることが多いんだよね。

だから今も、僕の言葉から、僕的心情を読み取るうとしてるのかもしれない。

どうせすぐに『読み取ったところで仕方ない』って気付くだろうけど。

それに、虚勢だって全くのウソじゃない。

まだ心にも見せたことがない技を、結構イロイロと隠し持ってる。

由紀江ちゃん対策の技は使わないにしても、それでもまだ手はある。だから、武蔵が思ってるより僕が強いつてのは間違いない。

右の頬の痛みを考えると、ちょっと自信が無くなってくるけど。

「とにかく、無茶しないで下さいよ？」

声のトーンをそのままに、武蔵はそう言った。

そういう言葉は、夏休み前のコイツに返してやりたい。

僕と心に大見得切って、川神相手に大立ち回りして。

僕に見せたくないくらいに顔を腫らした、あのときのコイツに。

まあ、そんなもん無理に決まってるから。
だから今度は、思ったままのことを伝えてやった。

「そんなもん、無茶するに決まってるでしょ」

武蔵だって無茶したんだから、僕だって無茶をする。

僕よりも背負うモノの軽かった武蔵が、無茶してたんだから。
体育会系みたいな発想でアレだけどさ。

少なくとも痩せ我慢ってところじゃ、後輩に負けてらんないんだよ。

「じゃあ、思いっきり無茶してきて下さい」

そんな言葉が聞こえた気がするけど、ホントに聞こえてたかどうか。
僕の……俺の気持ちは、もうリングの上に向かって。
武蔵の言葉が、ちゃんと耳に入ってたんだから。

10 話目『ブルマだったら何が悪い』（後書き）

はい、我ながら変なペースで投稿中です。
やはり、月始めの前後にペースアップする体質のようです。

……定期更新体質に目覚めたい……………。

えー、まず最初に謝らせていただきます。

『Kay Fabian』ですが、ケーフェイ…………フェイクの隠語の語源です。

はい、超ややっこしいですね。

要するに前の話は、八百長「フェイクが絡んでくる」という話でした。何がどうフェイクと関係するのかは、この章で必ず書かせていただきます。

変な投稿ペースのクセに、毎度毎度厚かましいですが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字の御指摘など、モロモロお待ちしております。

ブルマという単語を、普通の話でココまで使ったのは初めての経験でした。

……この話を書いてて、得も言われぬ解放感に満たされました。

幕間『私の頭の中の鉛筆』(前書き)

まゆうち視点です

幕間『私の頭の中の鉛筆』

ミチヒロさんが立ち去って、既に5分が経ちました。

約束した時間の20分までは、まだまだ余裕があります。

伊予ちゃんも入江くんもいないので、この場には私と不死川さんしかいません。

武蔵さんは、ミチヒロさんが心配なので尾行してくると告げて、行ったきりです。

何か有益な話しを盗み聞きできたのか、それとも、巻かれてしまったのか。

私のあずかり知らぬところではありますが、上手くいっているといイとは思いません。

お話の内容を把握できたなら、私もご相伴にあずかりたいですからね。

ところで、私の前に座っている不死川さんはどうと。

どうも先ほどからムツとしているようで、話しかけ辛いです。

恐らく、ミチヒロさんが対戦相手にホイホイと付いて行ったからなんでしょうけども。

私としては、その、肝が冷えると言いますか。

ミチヒロさんと不死川さんの間に何かあったのは、私にも分かりません。

というより、2学期の初めにはウワサが立っていたことなので、知って当然です。

その『何か』の詳細は知れませんが、きっと浅からぬことなのでしょう。

だからこそ、ミチヒロさんのことが心配で仕方ないんだと思います。もし深い仲になられてるようでしたら喜ばしいことですが……それは置いておきましょう。

「……ミチヒロさん、大丈夫でしょうか？」

「分からん」

さっきから、本当にこんな様子なんです。

もう、私、どうやって不死川さんと接すればいいのか。

一時的なこととはいえ、心苦しく感じます。

不死川さんはどうか分かりませんが、私は心配していません。

試合前に対戦相手を痛めつけるメリットが存在しないからです。

こっそりと誘拐するならまだしも、私たちの目の前で正々堂々と連れて行った。

その事実からも、件のブンカートさんが害意を持っていたわけではないとわかります。

何やら私たちに邪気が向けられていましたが、ミチヒロさんには無関係でしょう。

それよりも私は、ミチヒロさんが本当に戦うつつもりなのかが気になります。

右頬に強烈な左フックを受けて、歯まで折れていました。

本人にも自覚はあるはずですが、あの威力なら脳震盪も起こしていると思います。

あの状況から逆転したのには驚きましたが、これ以上はミチヒロさんが危険です。

確かに、ミチヒロさんは普通の方よりも遥かに強いです。

百代さんや私ならともかく、素手である限りはクリスさんにも勝ち目はないと思います。

寝技のテクニクに限定すれば、私なんて足元にも及ばないことでしょう。

尋常でない日々の鍛錬と、決して平凡では済まされない才能。

それが合わさることで、並々ならぬ強さを手に入れてらっしゃいます。

ですが、ミチヒロさんは最強ではありません。

それが例えば素手同士の戦いだったとしても、相手が私のようなタイプでなくても。

ミチヒロさんより強い方は、世界中に数え切れないほどいるはずですよ。

そして、運の悪いことに、ブンカートさんはミチヒロさんより強い人です。

少なくとも、身につけてる技の練度は、ミチヒロさんの上を行っています。

ミチヒロさんも、それを理解していると思っ

それでも戦おうと言うのなら、私に止める権利はありません。

後輩として、知人としての進言できるのはココまでです。
ココから先は、ご家族や恋人の役目です。

「やはり此方が出るべきじゃったか……」

……不死川さんは、少し自惚れ過ぎです。

強いということには私も異議はありませんが、ミチヒロさんほど強くはありません。

投げ技ならば圧倒的に不死川さんが有利ですが、実際に組んだらどうなるでしょうか。

一撃でミチヒロさんを戦闘不能にしなければ、不死川さんに勝ち目はありません。

もっとも、一撃でミチヒロさんを倒すということが、普通の人には不可能に近いですけど。

土の上とはいえ、私が地面に叩きつけても自力で起き上がれる人ですから。

でも、こういうことをハッキリ言うと角が立ちます。

ですから私は、余裕を持って言葉をオブラートに包みました。

「ミチヒロさんも男の子ですからね。」

不死川さんにイイところを見せたかったのではないのでしょうか？」

不死川さんの強さには触れず、話を微妙にシフトさせてみました。

事実、ミチヒロさんは何か意図があって不死川さんを参加させなかったようですし。

今の私の言葉は、あながち確信からは外れていないと思います。

「それは分かるが……こんな事で怪我して欲しくないのじゃ」

辛い声色でそう言って、辛い表情をされました。

好きな人が傷つく姿と言うのは、誰だって見たくないでしょう。

しかし、その原因の一端が自分にあると分かったら、どう思うでしょうか？

今回の試合ですが、ミチヒロさんが出るメリットがありません。

不死川さんと仲良くなるのが目標であるなら、それは既に達成されています。

しかし、ミチヒロさんは、不死川さんと生涯共に歩むことを望まれています。

たかだか一豪族の子孫であるミチヒロさんが、由緒正しき公家の不死川さんと。

もし本当に実現させようと思うなら、並大抵のことでは叶わないでしょう。

家柄が違うと言うのは、上流階級にとっては強い意味合いを持っていますから。

もしかしたら、ですけど。

ミチヒロさんは、一子さんを倒したいんじゃないでしょうか？

1対1で、対等のルールで、川神の名を持つ者を倒してのける。

それによって己の力をアピールして、箔をつけようとしているなら、こつやって無茶してでも戦おうとすることも、割と納得できます。

公家の方々がメンツにこだわるのであれば、充分に考えられる話です。

しかし、それでも私には疑問が残ります。

港と言えば、地元では相当の権力と知名度のある家です。

最近聞いた話ですが、あの綾小路先生の親戚筋とも聞きます。

さらに、綾小路の血が半分入っているとのことです。

少なくとも、ミチヒロさんご本人に問題があるとは思えません。

なのに何故、不死川さんのご両親は交際を認めなかったのでしょうか？

我が事ではありませんが、やはり不思議に思うところでもあります。

「そうですね……無茶されないといいんですけど」

そう述べて、私は本心をさらさずに話を進めました。

先ほども思ったことですが、ココからは私の領分ではありません。

ただの後輩が踏み込むにしては、重くて深い話になりそうですから。

無論、私とミチヒロさんは、ただの先輩後輩というわけではありませんが。

恋人でもない限りは、家の話に口を出してはいけないと思いませんか？

あれから20分近くの時間が経ったころ。
ミチヒロさんが、武蔵さんを引き連れてようやく帰ってきました。
無事で何よりですが、どうやら武蔵さんは見つかってしまったようです。

はい、本当に帰ってきてくださってよかったです。
不死川さんは先ほどから、しきりに時計を確認されていて。
私から何か話しかけることもできず、不死川さんも声をかけてくださらず。

席を立つこともできなかった私は、ただ身を固くして座っていただけですから。

こういうコミュニケーション能力の低さが、私に友人のいない原因なのかもしれません。

「あー、ゴメンゴメン。遅くなったね」

「全くじゃ！ いつまで待たせるのじゃ！」

……ミチヒロさんは、目だけ笑っていない、不思議な表情をされていました。

ブンカートさんと何があったかは知りませんが、友好的な結末ではなかったようです。

『ヘイヘイ、なんか目え据わってるけど心身ともに健康かい？』

手の平の上の松風が、ファンキーな語調で話しかけましたが。その、何と言ったらいいか……悪気はないと思うんですけど。ミチヒロさんは、松風に視線すらくれませんでした。

はい、私が悪いんです！

松風を御し切れていなかったから！

試合前のミチヒロさんがピリピリしてないわけがないのに！

ああ、でも今謝るとそれはそれでテンションを下げてしまう気がして声をかけれない！

でも、涙が出ちゃいます……だって、武士娘ですもの！

「どつという話し合いだったのじゃ？」

「まあ、手加減しないで潰し合おうってことだったよ」

……私が後悔している間にも話が進んでいます。

ええ、いいんです、悪いのは私ですから。

空気を読めてない私が悪かったんです。

泣いてなんかいません……これは心の汗なんです。

でも、『そんな話し合いだったかしら？』って言ってる武蔵さん。貴方くらいは、せめて慰めてください。

「じゃあ、もう時間だし、行ってくるね」

「……話は試合後に聞かせてもらおうぞ」

ミチヒロさんは、こんな風に短く会話を済ませてリングに向かいま
した。

時間も押していますし、仕方ないとは思っていますけど。

こう、もう少し説明や陳謝があってもよかったですと思います。

結果はどうであれ、不死川さんや私たちは心配していたんですから。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

ミチヒロさんがリングに上がって、グローブの具合を確認し始めた
ころ。

1人涙を流す私に、武蔵さんはようやく声をかけてくれました。

ちなみに不死川さんは、さっきからミチヒロさんに釘付けです。

よほどミチヒロさんのことが気になってらっしゃるんでしょうね。

「薫さん薫さん。大和田さん、まだ帰ってきてないの？」

……「こういうときには、優しい言葉をかけて欲しかったです。いえ、空気を読めない発言をした私が悪いですよ？ そうなんですけど、まるで私の涙を意に介していないというのは辛い気持ちになります。」

伊予ちゃんが気になるのも分かりますが、もう少しだけ私もいたわつてください。

「はい。入江君を探しに行ってから、それつきりです」

泣いてばかりもいられない私は、すぐに涙を拭って答えました。それと同時に気分も一新、ネガティブな気分も払拭です。

「うーん……ちょっと気になるわね」

伊予ちゃんと入江くんの、何が気になるのでしょうか？

……恋仲ということであれば、ただの勘繰り過ぎだと思えます。あの2人が恋人というのは、ちょっと私には想像できません。でも、私がそう思ったということは、きっと武蔵さんも同じ考えのはず。

頭の回る武蔵さんが、そんな短絡的な考え方をするのでしょうか？

そういえば、伊予ちゃんは最近元気がありませんでした。

いえ、現在進行形で元気がなかったりします。

七浜ベイの不調が原因だと思っていました。そうではないようですね。

例えば試合で勝利を収めた日でも、伊予ちゃんのテンションは低いままなんです。

私も心配していましたが……伊予ちゃんが話してくれなくては何もできません。

ミチヒロさんのこととは違いますが、プライベートな問題かもしれないですから。

でも、もし伊予ちゃんが大きな悩みを抱えているなら。

私は、伊予ちゃんの力になってあげたいと思っています。

それは私だけでなく、武蔵さんも同じように思っていることでしょう。

もしも、この状態が続くのであれば、私たちから聞いてみてもいいかもしれません。

しかし、それはそれとして。

せっかく武蔵さんが戻ってきたのなら、聞いておかねばなりません。

「そういえば、先ほどのお話ですけど、どういう内容だったんですか？」

先の反応を見るに、武蔵さんは具体的な内容をご存知のようでした。ですが、私が聞いてみると、何故か難しい顔をなさってしまいました。悩んでいるというよりは、言葉を選んでらっしゃるのでしょうか？ そんなに言葉を選ばねばならないような……

「事情は詳しく分からなかったけど、ブルマが賭かった戦いらしい

わ

失礼しました。

言葉を選ばねばならない内容でしたね。

でも、言葉を選んだ結果、ストレートに内容を伝えて下さる武蔵さんはさすがです。

私だったら、そんな会話は聞かなかったことにして胸のうちにしまっておきます。

要点だけかいつまんで、ブルマの部分は忘れるようにします。

もっとも、ブルマが話の中心であったのなら、致し方ありませんが。

それにしても、どうしてブルマの話をなさっていたのでしょうか？
ミチヒロさんがブルマにご執心なのは知っていますが、今は試合前です。

決して、このタイミングで話すような話題でないと思いますが……。
今はマズいでしょうが、もっと時間が経ってから聞いてみるのもいいかも知れません。

忘れないように、家に帰ったら日記に書き残しておきましょう。

そんなことを私が考えているうちに、ミチヒロさんがコーナーに立つて。

あの、プロレスに使われるような乾いた音のするゴングが、高々と鳴らされました。

……できるだけ、大きな怪我をしないうちに決着がついて欲しいものです。

幕間『私の頭の中の鉛筆』（後書き）

今回、ワンクッション置かせて頂きました。

大した描写はありませんが、まゆっちの頭の中がメインです。

ちよつと説明臭くて、尺が短めでしたけど orz

まゆっちは、今回の戦いをあまり重要視していません。

彼女自身には、直接的な関係はないですからね。

主人公の試合に対する描写が少ないのは、その辺りの心情が影響しているのとらえてもらえると思います。

そろそろ見飽きてくるとは思いますが。

ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘など、イロイロお待ちしております。

不死川心の誕生日は、7月2日でした。

うっかりスルーして、お祝いすらできなかった私を許して下さい

orz

11 話目 『脳が震れて盪けるがゆえに』

リングの中央付近。

まるで、今の今まで何もなかったかのように、俺たちは視線を合わせる。

今、まさにこの瞬間。

リングの上には、空手着の俺と、ボクサーパンツ姿のブンカートしかいない。

審判としてルー先生もいるが、そんなのはオマケだ。

俺たちの間に割って入ることができなきゃ、それは存在しないのと同じだ。

俺は、コレ以上ないくらいにブンカートのことを想ってる。

どうすれば突きが当たるのか、どうすれば蹴りを当てられるのか。

どうやって寝技に持ち込むか、どの関節をブチ壊してやろうか。

そして、どうすればブンカートに勝つことができるのか。

俺の頭の中的一切合切が、ブンカートのためだけに働いてる。

ブンカートも、きっと俺と同じように想ってる。
どうすればパンチが当たるのか、どうすればキックが当たるのか。
どうやって首相撲に持ち込むか、どうやって膝や肘で攻めてやろうか。

そして、どうすれば俺に勝つことができるのか。
アイツの脳細胞も、ことごとくが俺のためだけに働いてる。

ココまで誰かを強く想うことは、そうあることじゃない。
心ならいざ知らず、ほとんど縁のないヤツだったら尚のこと。
その感情の種類がどうであれ、それをぶつける機会なんて更に少ない。

目の前のコイツに、全力で俺の技を刻み込んでやりたい。
そういう邪な思いが、払拭した傍から沸き上がってくる。

じゃあ、もう、それでいい。

邪念だろうが雑念だろうが、力に変えてやる。

……よく考えたら、そんなことは俺がいつもやってることだ。

辛い稽古を、敗北の悔恨を、無才であることの苦痛を、劣等感を。

何もかもを力に変えるなんて、随分と前からやってきたことじゃないか。

ちよっと、浮き足立ってたんだらうな。

川神ばつかに目が行って、目の前の試合を『勝てる試合』だって勘違いしてた。

表面的な意識は別として、内心、きっとそう思ってたんだらう。
だから俺の右頬は未だに痛いし、歯も一本抜けちゃった。

ありがとな、ブンカート。
お前のおかげで、俺は俺らしく全力で戦える。
変な欲目なんて捨てて、オマエを倒すことだけに全力を尽くしてや
れる。

そろそろだ。

いくつも数えないうちに、楽しい時間が始まるぞ。

俺とオマエが、対角線のコーナーから見つめ合って。

プロレスに使う、安っぽいゴングの音が鳴った。

心待ちにして試合が、ようやく幕開けた。

もう、俺たちは俺たちしか見えない。

世界の全てはリングの上で。

人間は俺たち2人だけ。

さあ、覚悟しろ。

楽しみだろ？

覚悟しろ。

倒すぜ。

全力。

心。

やるっぜ。

ブンカート・チヨーワイケン。

俺もブンカートも、いきなり飛びかかったりはしない。

そんなことをしたら、この時間があつという間に終わっちゃう。

だから俺は、はやる気持ちを抑え込んで、慎重にブンカートを見据える。

ブンカートは、アップライトに構えてる。

頭部への攻撃を警戒して、足元へのタツクルは無警戒な構え。

ムエタイしか知らないオマエは、そうでなくちゃならない。

それしか知らないなら、無理して慣れない構えをする必要はない。

例え、俺がタツクルや寝技が得意だって分かっててもだ。

俺は俺で、いきなり柔術で攻めるつもりはない。

柔術でやれば負けない自信はあるが、とにかく時間が掛かる。

他のは知らんが、シルヴァ柔術は『待ち』の柔術。

相手のミスを誘う……悪くいえば、嫌らしい戦法こそが要だ。
いきなり本命の攻撃を仕掛けず、虚実を混ぜた牽制で相手の攻撃を誘って。
上手に相手を罠にはめて、上のポジションを取って、好きなように弄ぶ。
それをブンカート相手にやってたら、時間切れで俺の負けになりかねない。
だから最初は、空手で攻める。

俺は動かない。

ブンカートも動かない。

相手がどう動くのか、臆病になって見定めてるってわけだ。

……コレじゃ何も始まらない。

時間を浪費するだけの、つまらない時間になる。

この退屈な時間を楽しくするためには、動かなきゃならない。

ちょっとしたサービスだ。

俺の方から先に動いてやるよ。

リングの中央を基点にして、ゆっくりと時計回りに歩を進めた。
急がず、すり足で、隙を見せないように。
まだ間合いの外だが、もう勝負は始まっている。

ブンカートは、俺と同じように時計回りにリングを回る。

完全に俺と同じ速度で、常に俺が正面に来るように。
状況が変化しないように気をつけながら、コッチの隙を窺ってる。
コレだけの距離があるのに油断がないってのは、用心深い証拠だ。
でもって、用心深いってことは、精神的には後手に回ってるってことだ。

お互いがロープを背にした瞬間。

左ストリートを、ブンカートの顔面に奔らせる。

4 m 近かった距離を一気に詰めた一撃は、やっぱり避けられた。
つつても、キレイに回避したわけじゃなくて、咄嗟に飛び退いただけ。
け。

そんでそのまま、素早くステップして俺との距離を取り直した。

避けられはしたが、いいぞ、驚いてる。

口元はニヤついたままなのに、目はグツと見開かれてる。

そりゃ、そこそこには驚いてもらわなきゃな。

4 m 近い距離を一気に詰めたんだから。

地面を蹴るだけじゃなくて、上半身を前傾させながら重心移動をする。

隙は大きいが意表をつけるし、当たれば痛い長距離砲だ。

『長槍』って名前なんだが、まあ、そこはどうでもイイ。

重要なのは、オマエが俺を警戒してくれるかどうかってことだけだ。
こんな見え見えの突きが当たるだなんて、俺も思ってたねえから安心しろ。

ブンカートは攻めてこない。

今の俺には隙があったのに、それでも攻めてこない。

この隙がチャンスだったのか、俺が用意した罠なのか分からないんだろ？

俺がイロイロ考えて戦うタイプだって、いくらオマエでも知ってるもんな。

まあ、それが俺の狙いなんだけどな。

オマエの中にある俺のイメージをフルに活用して、試合を有利に運ぶ。

どれが罠でどれが隙なのか、いざってときに悟らせないように。

そのために、わざわざ動作の大きい攻撃を出してやった。

用心深いオマエは、コレで、本当に俺に隙があっても攻めきれなくなった。

まだ距離があるうちに、サウスポーにスイッチ。

このとき、大きく息を吸って『息吹』っていう空手の呼吸法を使う。序盤にやっても普通は意味はないが、今はある。

ちよつと大袈裟だが、ブンカートに空手を意識させる効果がある。さっきの試合で俺は、サウスポースタイルから相手の顔面壊した。その事実が、さらにブンカートの踏み込みを鈍らせる……と思う。

ブンカートは、遠いところから俺を見据えている。

俺が正面に来るように構えてるだけで、一向に動こうとしない。

ほら、来いよブンカート。

俺の方がリーチがあるけど、近付いてこいよ。

無闇に踏み込んできたなら、その膝に横蹴りくれてやる。

そんなところでジツと見てないで、オマエから責めて来い。

それとも、本当に俺の突きが怖かったりするのか？

人の顔を潰すだけの威力がある、俺の左の突きが。

もしそうなら、そんなこと心配すんな。

あのレベルの突きが簡単に打てるなんて、俺自身が思っていない。

だから、ビビってないで踏み込んで来いよ。

……なんだ、攻めてこないのか。

ってことは、オマエは俺が怖いんだな？

島津のときは攻めまくってたのに、俺相手には様子見をする。

それはつまり、オマエは俺に勝ちたくて慎重になってるってことだ。

自分で強いとか言ってた割には、随分と臆病じゃねえか。

そんなに攻めにくいなら、ほら、構えを変えてやるよ。

充分な距離を取ってるから、この瞬間にできた隙は突けないだらけどな。

腰は高く、軽く開いた手は腹の辺りに。

左半身を見せて、お前の左ミドルを誘ってるぞ。

ガスタオンがバーリトワード用に編み出した、そういう構えで。

だから、早く無茶な攻め方をして、俺の寝技に付き合ってくれよ。

こんなんじゃ焦れちまって、俺の方からカマしたくなってくるだろ？



分かった。

よく分かったよ、ブンカート。

じゃあ、俺から攻めて隙を見せてやる。

またフルコン空手の構えを取り直して、軽くステップを踏む。

寝技も組技もない、打撃で行きますって宣言だ。

軽快に、でも不規則に、リングの固さを確かめながら。

あと4つステップを踏んだら、ジグザグに動きながら距離を詰めてやる。

1つ、2つ、3つ、4つ。

5つ目のステップで、俺は踏み込もうとしたけど左に倒れ込んで危ねえ！？

いや、なんつーか、危なかった！

踏み込もうとした瞬間に、ブンカートが飛び膝かましてきやがった！
さっき俺が『長槍』を出したのと、ほとんど間合いが変わらねえじやん！

この野郎……攻撃できなかったんじゃないかって、しなかつただけかよ！
とっさに受け身とって倒れ込まなかったら、モロ顔面にもらうところだった！

とにかく、すぐに立ち上がる。

バランスが悪くてもイイから、まず立ち上がる。

いくらブンカートでも、空中で方向転換はできねえだろ。

現にブンカートは、ロープの最上段に突っ込む感じで、どうにかリング内にいた。

……あのままりングから落ちて、怪我すりゃよかったのに。

まあ、コレでブンカート相手に小賢しいマネができなくなった。

どういう理屈か知らんが、俺が踏み込むタイミングが見抜かれてる。

ああいう粗いステップの時だけで、すり足は見切られてないのかも知れんが。

それを自分の身体で試せるほどの余裕は、俺にはない。

俺たちは、また睨み合う羽目になった。

距離を測りながら、相手の飛び込み技に気をつけて。

今度は回り込むだけじゃなくて、少しずつ間合いを縮めていく。

少しずつ、少しずつ。

攻撃が届かない間合いから、一足一刀の間合いに。

一足一刀の間合いから、蹴りの間合いに入った。

その瞬間に、蹴りが飛んできた。

右ローキック。

素早く左足で踏み込みながら、右ローを出してきた。

いや、そうじゃなくて、俺が出した右ローに右ローを合わせてきた。

しかも、俺が反撃しようと思ったときには、もう間合いの外にいた。

……いつステップバックしたのか、俺には分からない。

当たったのは同時だが、精神的なダメージは俺の方が上。

俺の動きが読まれてるのか、常識離れた速度で反応して動いてるのか。

俺の方が先に出したのに、攻撃が当たったのは完全に同時。

普通に打撃を使うだけじゃ、先に攻撃しても後手に回らざるを得ない。

俺の打撃は、ブンカートの打撃より先に届かないってことだ。

やるしかない。

ブンカート自身の情報が少な過ぎるが、やってみるしかない。

確定予測。

見切りとは別物の、未来予知とも思える先読み。

十分な情報と状況把握が必要な、状況を選ぶ技。

ノブさんの兄貴が、コツだけ俺に教えてくれた技。

少しだけ改良した、俺だけの技。

俺の確定予測は、相手が人間なら誰に対しても少しは使える。

小西さんから教わった『格闘定石』で、絶対的な情報が最初から用意されてるからだ。

人体工学上の人間の限界、行動心理、ある体勢から出せる可能性のある全ての攻撃。

そういう要素を突き詰めてくと、自然と相手の攻撃は絞られてくる。そして、限定された攻撃をより限定するために、他の細かい情報を使って処理する。

コレが、俺の確定予測の正体ってわけだ。

ただ、ブンカートに使うには1つ問題がある。

それは、俺も小西さんも、本場のムエタイ相手に戦った経験がないってこと。

攻撃方法はキックボクサーとほとんど同じなんだろうが、行動原理が違う。

格闘定石と違う動きをされて、十分な予測ができない可能性が高い。

でも、ココでやらなきゃ痛手を受ける。

川神と戦う前に、余計な怪我を背負うことになる。

そうなって負けたら、どっちにしたって意味がない。

ココで負けるのも決勝で負けるのも、俺からすれば同じことなんだから。

脳をフル回転しろ。

俺の動きに対する、ブンカートの動きを予測しろ。

俺が、また右ローを出した場合。

結果は……2つ。

サイドステップしながら右ローを出してくるって流れ。
さっきと同じように真っ直ぐ踏み込んでくるって流れ。

俺が、膝を狙った左前蹴りを出した場合。

結果は1つ。

ステップバックで避けて、俺の左足が地に着いた瞬間に右ローを当ててくる。

俺が、右でも左でもストレートを出した場合。

結果は2つ。

カウンター気味に肘打ちを合わせて顔を打ってくるのが1つ。
懐に入られて、首相撲から膝を何はつも出してくるってのが1つ。

俺が、見え見えのタックルに行った場合。

……結果は1つ。

反応のいいブンカートは、器用なことに膝蹴りを合わせてくる。

そうやって構えを変えてから、ジリジリと距離を詰める。動かないブンカート相手に、少しずつ、少しずつ。

皮膚から肉に浸透して、骨までベタつかせるようにプレッシャーをかける。

ステップなんてしないで、すり足で、1cmの距離を惜しむように。

そんで、ブンカートの蹴りの間合いギリギリのところ立って。ブンカートに心の準備をさせるために、ワントempoおいてから。反応できるかどうか微妙な速度で、俺は両足タツクルに行った。

予想通り、両足タツクルに行った俺の顔面に、ブンカートの左膝が飛んでくる。

タツクルに膝を合わせる練習なんてしたことないはずなのに、最高のタイミング。

もし確定予測を使っていなきゃ、キレイにアゴが顔面を潰されてるところだった。

正直、大抵のタツクルじゃ、このタイミングの膝はモロにもらう。両足タツクル、片足タツクル、胴タツクルのいずれでも、タイミング次第でこうなる。

普通は、そのタイミングを掴むのが難しすぎて、膝なんて合わせられないんだが。

まあ、ブンカートが特別だったってことだろう。

その特別に感謝しながら、膝蹴りの下を潜って。

俺は、ブンカートの右スネにしがみついた。

奥の手の1つ、超低空タツクルだ。

相手の太ももや胴体じゃなくて、足首やスネを狙う限界ギリギリの低空。

しかも俺は、常に地面スレスレの状態でこのタツクルを決められる。そんな高さでタツクルしたからこそ、最低でも腹より上を狙う膝蹴りは当たらない。

もともと足関節狙うために覚えたんだが、こういう使い方もあるんだよ。

さあて、こっからは俺の独壇場だ。

引きずり倒してヒールホールド掛けて、膝あぶち壊してやるうか？エレベーター（エレベータースイープ）で転がして、アキレス腱切つてやるうか？

サイドから腕を十字に極めるのもイイし、マウントでボコボコにするのも魅力的だ。

ところで、なんでブンカートの左足が見えるんだ？

左膝にタツクル合わせたなら、左足は見えないはずなのに。

しかも、なんだか上から首の後ろを圧迫されているような感覚がある。両脇から腕を回されてるような気もするんだが、これはつまり……

11話目 『脳が震れて盪けるがゆえに』 (後書き)

今回は決着がつきませんでした。
引っ張ってしまって申し訳ありません。

今回初登場の『長槍』ですが……ただの長距離パンチです。
どこかで見たことある方もいらっしゃるかもですが、たぶん、それ
でイメージは合っていると思います。

……書き切ってから似たような技があるのに気付いたので、訂正は
しない方向で行く予定です。
ヒントは『カオルちゃんシリーズ』です。

いつもながら、毎度毎度しつこいですが。
ご意見、ご感想、ご要望、誤字脱字のご指摘などありましたら、ド
シドシ書いてやってください。

最近、迷走甚だしいので、ガツンとやってくださっても無問題です。

12話目『その技、禁手につき』

タツクルを切られた。
それに気付いた瞬間、俺の頭に膝が飛んできた。

すぐに右足を放して、頭に腕をくつつけて、その腕をクロスして受けたんだが……。

やっぱり、ムエタイやり込んできた奴の膝を受けるって発想自体に無茶があつたか。

受けた部分の感覚が無くなって、それから、熱を伴う痛みが生まれる。

肉も骨も関係なしに、その先にあるモノを全部破壊するような膝蹴り。

しかも、膝蹴りの衝撃が殺し切れなかったのか。

脳が痺れる感覚と、頭蓋骨が軋む音が頭の中に響き渡った。

俺は、損をしたのか。

もし腕でブロックしなければ、腕を痛めることはなかった。

だから、頭にダメージが行っちまうなら、腕まで痛めた分は損だ。

そんなことを考えてるうちに、ほら、また1発蹴られた。

つまり、こつやって余計なことを考えるのが損だっただ。

意味のないことを考えて、必要以上のダメージを受けるのは損だ。だからこうやって、考えても意味のないことを考えて、また蹴られたのも損だ。

俺が考えてる間にも、ブンカートは容赦なく膝を打ち込んでくる。相手がボーっとしてんだから、そりゃそうか。

チャンスがあったら潰しにかかるのは、当然の判断だろ。もし俺がブンカートだったとしても、容赦なんてしない。

でも、俺はブンカートじゃなくて、港三千尋だ。

だから、膝を入れてくるブンカートを倒さなきゃならない。

俺の腕に6発目の膝が当たって、ようやく俺は反撃に移った。

右腕でブンカートの右膝をガードしながら、その膝に左腕を絡める。絡めたら、腕を引きはがされる前に、勢いよく左にローリング。腕を絡めた方の足を、俺の方に引き寄せながらだ。

ブンカートと一緒に横に半回転しながら、脇に差し込まれた左腕を解く。

そのままブンカートを地面に押し付けて仰向けにして、さらに俺だけ半回転。

上四方固めから、速攻でスweepしてサイドポジションに移って。

ブンカートの右から体を被せて、無傷の左腕で攻められるように陣取った。

マウントポジションは取らない。

とれないんじゃないかって、わざと取らなかった。

1ラウンド5分だから、今のラウンドは3分も残ってないだろう。たったの3分……いや、たぶん、あと2分ちよつとしかない。そんな短い時間で、マウントからブンカートを倒せるとは思えないからだ。

マウントパンチで倒そうにも、無理な話。

俺の右腕は痺れてマトモに動かない。

そんな右で殴ったら、こっちの怪我の状態をブンカートに知られる。そうだったら、強引に返そうとしてくるかもしれない。

メチャクチャに手足を振り回されるのは、ちよつと勘弁だ。

だから、サイドポジションを取った。

腕を取りやすくして、攻撃も受けにくいサイドポジションを。

ロクに寝技のできないブンカート相手なら、関節を取られる心配もない。

寝た状態から膝を使うにしても、このポジションは都合がイイ。

そこまで考えた上で、こういう体勢になったんだ。

打撃なり何なりを布石にして。

腕なり首なり極めて、このラウンドで勝つ。

1度でも立たせたら、俺にチャンスはないと思え。

絶対に、このラウンドで勝負を決めてやる。

俺の右腕は、ブンカートの股の下。

俺の左腕は、ブンカートの首の後ろ。

左膝は、ブンカートの右脇の下を圧迫して。

右膝は、サイドポジションを維持するために体から離してある。

寝技をするときは、上にいる奴から動いてかなきゃならない。

だから、横四方を掛けながら、ブンカートの脇腹に膝蹴りを入れた。固めながらだから十分な威力はないが、ノーダメージってわけでもない。

だから、1発2発ならともかく、数を重ねりゃキツくなってくる。

チャンスは、ブンカートが膝を嫌がって体を動かさそうとした瞬間。

寝技に不慣れなヤツが脇腹を意識しているときは、腕の防御がおろそかになる。

そうやって腕が無防備になったところで、一気に極める。

作戦らしい作戦じゃないが、

これが今の精一杯。

右脇腹に、痛みが走った。

ブンカートのじゃない、俺のだ。

なるほど、ブンカートのヤツ、俺に膝を入れてるのか。

俺が密着してるせいで、太もみに近い肉厚な部分が当たってる。しかも、仰向けになってるせいで、充分に力を入れられてない。やっぱり、グラウンドじゃ遥かに俺が有利らしい。

でも、この膝だって、何発ももらうわけにはいかない。

さすがにダメージが蓄積するし、肋骨に当たれば無事じゃ済まない。ブンカートのことだから、もしかしたら、上手い膝を出してくるかもしれない。

グラウンドだからって、油断していい相手じゃないんだ。チマチマやってないで、勝負に出るぞ。

まず俺は、左腕を解いてやった。

もちろん、ブンカートを自由にするためじゃない。

俺の右腕を掴んでくる、ブンカートの左腕。

その腕はもちろん、力を込めるために鉤状に曲げられてる。

しかも、俺が左手首を『掴ませてる』ことに、まだ気が付いてない。

そんなブンカートの左手首を、フリーの右手で握って。

中途半端だが、腕絡みに入ろうとした。

右腕に痛みが走るが、それでも極められないほどじゃない。テコの原理で体を動かせば、最小限の力で負担を減らせる。

痺れが抜けない腕でも、十分に極められる……はずだった。

腕が、切られた。

完全に極まる前に、腕が振り切られた。

……まあ、問題は、腕が振り切られたことじゃない。

腕を切られた瞬間に、俺がマウントを取ったことだ。

ブリッジしようとしたブンカートを抑えなきゃいけない、そう思った。

立たせたら勝てない、次のラウンドまで戦い抜けると思えない。そう思ったから、反射的にマウントポジションを取った。

マウントなら、俺には絶対の自信がある。

下から腕を取られることはあっても、返されたことはない。

俺がマウントを取るっていうのは、つまり、そういうことだ。

それだけの自信があるからこそ、俺は思わずマウントを取っちゃった。

マウントポジションで、ブンカートを倒す手がないのに。

もう、そんなに時間はない。

つまり、残り少ない時間で、ブンカートを倒さなきゃならないんだろ？

やってやるよ、そんなもん。

悪いな、ブンカート。
もしかしたら、勢い余ってオマエのことを殺すかもしれない。
まあ、死んでも事故みたいなものだから、俺を恨んでくれるなよ。

マウントの状態から、ブンカートに体を密着させて。

強引に両足で胴体を挟み込んで、そのまま一緒に半回転した。
俺が下、ブンカートが上、そういう状態で胴体を足で挟む。

一見するとガードポジションだが、そうじゃない。

俺の狙いは、ここから相手の腕を取ったりする技じゃない。

そのまま肋骨を締め上げて、相手を窒息させる。

柔道じゃ禁止になってる、胴締めって技だ。

「カッ！」

肺を締め付けられたブンカートが、その中の空気を吐き出した。ほら、息を吸いたくても、肺が膨らまないだろ？俺のパワーで胸締めされたら、マトモに呼吸できないだろ？

お前に使っちゃまったけどな、奥の手だったんだよ。

黛由紀江と戦う時に、組みついてからトドメ刺すための手だったんだよ。

今だって、お前の肋骨がミシミシ言ってる、死ぬほど苦しいだろ？殴ったり蹴ったりに慣れ切ったオマエには、未知の苦しさだろ？

こんな技だから、柔道じゃ禁止されちゃったんだ。

呼吸をできなくする上に、肋骨を攻めて押し潰す。

簡単に掛けることができて、しかも、相手を殺すことができる。

禁手に加えられるには、十分過ぎる効果があるんだよ。

今だって、こうして効果的にオマエを苦しめてるしな。

ガードポジションだと、上からでも殴りにくいだろ。

俺の拳も届かねえが、オマエのパンチも届かない。

胸元に何発か当たっちゃいるが、当たってるだけ。

俺の体の内側には、ちっとも響いてきやしない。

まあ、そういう風に改良したポジションなんだから、当然だ。

背中をピンと伸ばして、首をシツカリと固めて、相手との距離を一杯とる。

だから、他の連中のガードポジションより、圧倒的に顔を殴られない。

仮に顔に当たったとしても、上半身を随分と前傾させないといけない。

そんなバランスの崩れた状態でのパンチは、普通だったら効くはず

もない。

もちろん、それだけじゃないぞ。

オマエが殴りかかってくるタイミングで、微妙にバランス崩してるんだ。

肩が動いた瞬間を狙って、オマエの体を引っ張ったり、押ししたりしてる。

俺じゃなくて、オマエを動かすことでヒッティングポイントをズラしてる。

ほんの少しだから気付いてないかもしれんが、そういうテクニクもあるんだよ。

「があああっ！」

気合の入った、ブンカートのパンチが飛んでくる。

右、左、右、左、右、左。

半分は届かなくて、半分はマトモに当たらない。

俺を倒せるような拳は、ブンカートからは出てこない。

それに、すぐ分かるだろうが。

こうやってへタに拳を出すほど、強く締め付けられる。

『自分の首を絞める』なんて言葉がピッタリだ。

まあ、締められてるのは、首じゃなくて胴体だけだな。

ブンカートの呼吸が、少しずつ短くなっていった。

大きく、たくさんの息を吸おうとしてるのに、それができない。

そんな様子が、手に取るように分かる。

そうだったら、今度は、ロックしてる俺の両足を打ってきた。拳で2発、そこからは肘で何度も何度も。

勝つためじゃない、もっと本能に近いシンプルな意思。生き延びるためだけに、息を吸うために。

リングの上で何人も倒してきた肘で、思いっきり足を打つ。

ただ、無駄だ。

本人は全力のつもりでも、もう、大した力が入ってない。

なんとか肘を当ててるだけで、俺の足にダメージは与えられてない。

酸欠起こし始めてる状態じゃ、これが限界だよな。

俺だって楽な体勢じゃないが、オマエほどじゃないぞ。

それに、俺の両足の間で、オマエがだんだん弱っていくのが分かるんだ。

そんな最高のチャンスを、俺が逃がすはずがないだろ？

俺が先に気絶したって、オマエも道連れにしてやるよ。

一層力を込めて、ブンカートを締め上げる。

肋骨がミシミシ鳴ってるが、関係ない。

だって、俺の肋骨じゃなくて、ブンカートの肋骨なんだもんよ。ルー先生も止めないし、ギブアップもしない。

だったら、そのまま締め上げて最後までやってやるよ。

そうやって、何秒……何十秒締め上げたか。
1分ってことはないが、そこそこの時間は掛けてやった成果か。

「……………ッッ」

ブンカートは、最後の空気を吐き出して。
口の端から泡を流しながら、背中を反らして2度痙攣して。
半ば天を仰ぐように、壮絶な姿で気を失った。

ゆっくりと足を引き剥がして。
大きく一息ついてから、片足ずつ力を込めて。
足の裏の感覚を確かめるように、ゆっくりと俺は立ち上がる。

4分38秒。

1ラウンドが終了するギリギリのところ、なんとか勝ちを拾った。

さすがに、気絶したブンカートの顔には、あの笑みは浮かんでなかった。

リングから降りて、パイプ椅子に腰を下ろした俺は、緊張感と一緒に、はあああ、と大きく息を吐き出した。

大きく呼吸すると、右腕に鈍い痛みが走る。さっきブンカートの膝を受けた場所から、熱と痛みが広がった。視線を移すと……あー、まあ、ドス黒く腫れあがってる。拳を握るだけで痛みが増すってことは、かなりのダメージってことだ。

折れてるかどうかは、まだ分からない。打撃を受け慣れてる俺が内出血してる時点で、軽い怪我じゃないのは明白だが。

時間が経って少しでも痛みが和らげば、川神に十分勝てる。短時間で痛みが和らぐことは、折れてないってことだからだ。痛みが和らがないなら、根性出して痛みを抑えつけるだけ。ここで川神に勝つって言うのは、それだけの価値があるんだから。

「……もう止めんぞ」

隣に座ってる心が、ボソツと呟いた。

口に出したことは正反対にしか思えないような、むくれた顔で。少し上目に僕を見て、顔を横にそむけちゃう。

思わず腕の痛みも感じなくなるような、可愛らしい仕草だった。汗かいてなきや、頭の1つでも撫でてあげるところなんだけどなあ。

「ありがとね」

僕は、それだけの言葉を返す。

余力が少ないって言うのもあるけど、これ以上の言葉が必要ないから。

僕がどうして『ありがと』なんて言ったのか、心に伝わらないはずがない。

恋人同士なんだから、これくらい意思疎通は余裕なんだよ。

まあ、だからって、ココで話題を切るのも良くない。

何か別の話題で話を進めたい方が無難だ。

ってことで、未だに帰ってこないアイツのことを聞いてみた。

「そっいや、まだ入江って帰ってこないの？」

「はい、さっき伊予ちゃんが探しに行っただんですけど……」

まだ帰ってきてない、そういうことなんだろうね。

まあ、入江が帰って来なくても、僕には関係ない。

大事なのは川神との試合のことで、入江のことじゃないんだから。

当面の問題は、次の試合まで大した時間がないってことだ。

休憩時間が20分あるけど、その20分でダメージが回復するはずもない。

武蔵が持ってきた氷嚢で冷やしちやいるけど、その効果がどの程度のもんか。

「それよりミチヒロさん。腕は大丈夫なんですか？」

「ん？ まあ、次の試合を戦い抜けるくらいには余裕だよ」

まあ、心も武蔵も気になってるだろうね。

見るからに腫れてて、ドス黒くなってる僕の右腕。

そんなのを見たら、さすがに誰だって心配するはずだよ。

由紀江ちゃんも武蔵も、ましてや心なんて、こんな怪我したことないだろうし。

……実際、めちゃくちゃ痛いのを我慢してるだけだからなあ。

「最悪、腕1本でも戦えるからね」

でも、僕は先輩として強がりを書いておく。
嘘はついてないんだけど、まあ、戦えるってのは強がりになる。

相手はあの、川神一子。

勝てない相手じゃないけど、油断できない相手。

そんなのを相手に、腕1本使えない状態で挑むんだ。

勝てるように戦おうと思ったら、これはかなりの不利だ。

俺よりも結構スピードがあって、そこそこ根性もある。

打撃が軽いわけでもないし、まあまあディフェンスもできる。

パワーとリーチが勝ってるが、右腕が使えない分で帳消し。

寝技に持ち込めば絶対に負けないけど、今の状態だとスタンドの勝負は5分。

……いや、正直に言えば、いくら俺の方が不利だろう。

俺がどうするべきかは、もう決まってる。

なんとか転がして、寝技に持ち込んで、締めるか極める。

腕だろうが足だろうが、キャッチしたら即壊す。

あんまり距離を取ってくるなら、リーチを生かして蹴りで勝負する。

それが、一番間違いない戦い方だ。

理想的なのは、パンチや肘で圧力掛けて強引に潰すって作戦なんだが。

右腕がロクに使えない状態じゃ、そんな強硬手段はとれない。

問題は、川神に手の内が知れてるってことだ。

俺の右腕が使えないのも、まあ、なんとなく分かってるだろう。

それなら、俺が寝技に持ち込もうとしてくるのも分かってるはず。

タツクルにせよ、引き込みにせよ、それなりの対策を講じてくるに
違いない。

寝かせれば俺に勝機があるが、寝かせるのに苦労しそうだ。

ただ、勘違いするなよ、川神一子。

俺は、柔術が一番得意で。

寝技にも、絶対って言っただけいいほど自信があるんだが。

こんな状況でさえ、俺に立ち技がないわけじゃないんだからな。

さあ、あと10分と少しだ。

どうやって川神をブチのめしてやるか考えながら、ゆっくり休ませ
てもらおうか。

12話目『その技、禁手につき』（後書き）

はい、1カ月ぶりの更新となりました。

お待たせしまくっておいて、こんな話で申し訳ありません。

胴締めですが、機会があればくらってみてください。

話の演出上ジワジワと効かせてますが、脚力の強い人間がガツチリ決めるとすぐに肋骨がダメになるような強烈な技です。

今回は右腕にダメージを負った状況ですので、こういう技で勝負を決してもらいました。

ちなみに、柔道ではマジで禁手ですので、柔道を始めたばかりの方は決して使用しないでください。

道場の先輩方にメチャクチャ叱られます。

13話目『Grappmefiyoucan』(前書き)

ワン子戦です。

ちょっと話の流れが早いかもしれません。

休憩時間が終わって、俺は3度目のリングに上がった。まだ少し頭はボーっとするし、腕の痛みは治まらない。空手着を自力で脱げないくらいには、まだまだ腕は痛い。それでも俺は逃げるわけにはいかない。

まあ、3連戦なんてのは経験済みだ。

無道会館でも、ブラジリアン柔術でも。

多い日には、1日で5戦もしたことがあるくらいだ。

怪我をしながら戦うことには、抵抗も問題もない。

例え、万全の状態の川神と戦わなきゃならなくても、俺は気後れしてない。

できるだけ短く、焦らずに終わらせる。

無傷の川神相手に、長期戦を挑むのは危険だからな。

いや、俺の右腕が無傷だったら、長期戦でもよかった。

もっと集中力が戻ってれば、確定予測も使えだし、長期戦でよかった。

でも、泣きごとを言っても、俺の腕は治らない。

急に脳のダメージが抜けて、集中力が戻ったりはしない。右腕が不自由なまま、確定予測もないまま、川神と戦わなきゃならない。

だから、最善を尽くして、可能な限りの手を尽くす。

もう、派手に勝つとかは考えなくてもいい。

川神に勝った、その事実だけでもココで手に入れる。

しかし………どういう意図があるのか。

川神は、上は袖の短い胴着、下はスパッツって格好してる。

まあ、胴着の下には黒いシャツを着ちゃいるが、そういう格好だ。

それはつまり、俺を寝技に誘ってるのか。

あえて寝技に誘っておいて、そこで俺を倒す秘策がある。

だから、掛けられる技のバリエーションが増えるようなマネをしたのか。

違う、落ち着け、そうじゃないだろ。

ここで色々考えることが、もうマイナスだろ。

悩めば判断力が鈍って、ほんの少しだけ行動が遅れる。

コンマ何秒にも満たないが、それは、打撃の機微に大きく関わる。

打撃主体で攻めてくる川神を相手にするには、致命的な遅れになる。

ああ、そうそう。

川神が打撃で来るってのは、根拠に基づいた話だ。

俺と川神の体重差は、まあ、随分と小さく見積もっても35kgぐ

らい。

常識で考えたら、戦うことなんて考えられないほどの差。それだけの差が、俺と川神の間にはある。

しかも俺は、寝技に長けた人間。

どんな状況でも寝技に入ったなら、もう川神に勝ち目はない。

川神よりも打撃に優れてるはずのブンカートでさえ、グラウンドで俺に負けた。

だから、俺と組み合っつてことは、川神の選択肢の中にはないはずだ。

よし、やめた。

考えるだけ無駄だ。

もう決勝だぞ、決勝。

いくらラウンド制だからって、チマチマ考えるのはダメだろ。相手が軽いか重いか、打撃で来るとか組技で来るとか。そういうのは関係なしに、全力でやるだけだ。

作戦は、全力。

戦術は、川神をブチのめすこと。

戦略は、勝つために容赦しないこと。

それで充分だろ。

| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

コーナーに戻って、拳を開き。

その手を左右に垂らして、コーナーに背を預けて。

1つだけ、深呼吸をして。

合図が、ほら。

「始メツ！」

さあ、行くぞ。

| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

構えを取った川神に、俺は無造作に歩み寄っていく。防御も何も無い、本当にただ歩いて近寄っていくだけ。間合いも何も考えず、普通に歩く。

それを見た川神は、恐れずに距離を詰めてきた。俺の動きに、少しばかり見覚えがあったからだろう。

武蔵が川神に見せた、心の隙を突くような歩法。その動きを思い出したからこそ、その時と同じように間合いを潰しに来た。

川神が間合いに入った瞬間。

俺の右ミドルが、川神を捉えた。

早く、重く、鋭く、固く。

川神の体の芯を打ち抜いた手応えが、俺の右足に伝わる。

俺の得意技……ってわけじゃない。

空手の大会で俺を倒した、村上の得意技。

無拳動とか、ノーモーションって呼ばれる蹴り。

それを少しだけ使いやすくした、劣化版ノーモーション。

歩みの中に、回し蹴りの予備動作を隠し。

なおかつ、上半身の動きを極力抑えることで、蹴りの初動を悟らせ

ない。

空手よりも、キックボクシングやらムエタイに近い蹴り。

当然、こんな蹴りはコンビネーションには組み込めない。

蹴りを出した後に、他の攻撃を繋げられないんだよ。

厳密に言えば、コンビネーションのシメには使えないことはないが……。

コレを最後に使うくらいなら、もっと別の技を選んだ方が利口だ。

とにかく今の蹴りは、そういう蹴り。

受けさせない、避けさせない、リズムを掴むための蹴り。

その蹴りを、川神が受けた。

ちよつと予想外だったが、受けられた。

左腕を体に固定して、なんとか防いだ感じだ。

受けられたが、ダメージは十分。

川神の足はフラついている。

チャンス。

畳み掛ける。

左ジャブを2発。

受けられる、当たる。

右足を踏み出して、左ストレート。
受けられる。

左ミドル。
当たる。

右ロー。
当たる。

左ハイ。
受けられる。

右ミドル。
避ける、バックステップ。

左後ろ回し蹴り。
遠い。

右ジャブ、ステップイン。
避ける、サイドステップ。

ワンツー、右ロー、左膝、首相撲、切られた。
ローをカット、ボディ2発、ノーガード、もらった。
前蹴り、突き放す、ステップイン、すぐに。

横蹴り、避けられる、ジャブ、ジャブ、タックルのフェイント。

頭が下がった、左膝、突き上げ、十字受け、受けられる。今度は右膝、素早く引かない、掴ませる、掴んでこない。下がる、大きい、追う、追う、当てる、右ミドル。

早い、避けた、轉身、俺の左に、舌打ち。

またボディ、肋骨、肉の薄い部分、やるじゃないか。

向く、左、遠い、追う、逃げられる、追う、逃げられる。

左ストレート、フェイント、左膝、入った。

もう1発、入らない、十字受け、受けられた。

離れる、1歩、右横蹴り、避けた。

逃げられる、逃げられる、攻めてこない。

追う？

追わない？

どうする？

行くか？

待て、アレは誘いだ。

俺の方が体重もあつて、リーチもある。

だからって、川神は逃げ過ぎじゃないか。

いや、誘いでも関係ない。

避け続けていようと、そのうち隙ができる。

逃げてばかりも命取りだと、それを教えてやれ。



本格的に構えて、距離を縮める。

すり足で、左右にスイッチを繰り返しながら、少しずつ。
さあ、何か狙っているぞ。

それは、最初の一撃目のことだぞ。

そういう風に見えるように、初撃を打ち込む隙を窺う。

川神が、俺の合わせて距離を取る。

なるほど、カウンターは狙ってこないか。

いいぞ、それでいい。

今は、そっちの方が、俺に都合がいい。

行くぞ。

行くぞ。

オマエの後ろ足……右足に、右のインロー。

膝の内側を素早く打ちつける、威嚇するためのインロー。
ダメージじゃなくて、純粹な痛みを狙ったインロー。

ほら、当たる。

中足……足の指の付け根で、膝の内側、1番肉の薄いところを。肉に痛みが走って、骨に痛みが走って。

オマエの全神経が、一瞬だけ蹴られた部分に集まってる。

だから、次の蹴りが避けられない。

蹴り足を引いた勢いを利用した、変則蹴り。

上から足先が落ちてくる、右のブラジリアンキックが避けられない。少なくとも、このコンビネーションを食らったことがないヤツには避けられない。

インローの痛みで、判断を鈍らせる。

ブラジリアンキックで横のガードを誘い、縦に爪先を振り下ろす。

横から来ると思っていた足先は、ガードの上を通り抜けて、首か顔を打つ。

この蹴りで倒れなくても、次の一撃を決めるだけの十分な隙ができる。

どう転んだって、俺の勝ちが決まったも同然だ。

振り下ろした足に、交差してくるモノが見えた。

拳じゃない、手刀じゃない、掌じゃない、肘じゃない。

カカトでもなければ、スネでもなければ、膝でもない。

まして、額が飛んでくるわけでもなかった。

地面が、傾き始めた。

俺の左側に、地面が傾く。

踏ん張ろうとするんだが、俺の足はどこに行った？

力を込めてるのに、それでもまだ、左側に吸い込まれていく。

この感覚には覚えがある。

いや、マジで地面が傾いてるわけじゃない。

もちろん、いきなり地面が傾いた経験なんてない。

尾形小路さんと一緒にいた時に起きた、あのフラつきと同じ感覚。

ガスタオンさんに鼓膜を打たれたときと、同じ感覚。

三半規管にダメージを受けた……そういうことだ。

その前に、目に何をされたのかまで頭が回らんが、そっちはどうでもイイ。

視力と平衡感覚が回復するまで、凌ぎ切れ。

クソ。

脇腹が痛い。

ボディブロー？ 膝蹴り？

どうでもイイが、何を食らった？

大丈夫、痛いだけだ。

痛みだったら、短い時間だけど、なんとか集中力で消せる。顔やアゴにもらって脳を揺らされる方が、よっぽどマズい。

首から下は、好きだけ打たせてやれ。
今から受ける痛みは、どこであるつと覚悟しておけ。

ローキック。

ミドルキック。

ボディアッパー、ボディフック。

ミドルキック。

胸元に頭突き？

肘、肘、肘、ハイキック、ボディ、ボディ。

攻撃のほとんどが、首から下に集中してる。

徹底的に肉の薄いところを狙って、打つ手を休めない。

しかも、俺が掴んできても避けられるように、加減しながら連打してる。

止まらないし、止める気もないらしい。

倒すためじゃなくて、ダメージを与えるための連打。

それでも、チャンスがあればKOを狙ってくる連打。

ひたすらひたすら、ガードの上からだろうと構わず打ってくる。

しかも、上手い。

俺がさっきの試合で痛めた右腕、その手首と肘の部分。

蹴りか拳か、まあ、蹴りだと思うが、そこを上手に打ってくる。

でも残念。

そんな痛みじゃ、俺のガードは崩れない。

痛みじゃ、俺は怯まない。

――
――
――
――
――
――
――
――
――
――

どれくらいの間、川神の攻撃を受け続けてきたのか。
右の脇腹がチクチクすると、首から下を打たれ続けているのは分かる。

俺が守勢に回ってるのは、誰の目にも明らかだろう。

だが、ようやくチャンスが巡ってきた。

まだ涙がにじむが、視覚が戻りつつある。
気のせいだと思うが、痛みで平衡感覚も戻ってきた。

地面が足元を感じられて、どこから攻撃が出てきたかくらいは見えるようになった。

それに、何発に1発かだが、肋骨やレバーを狙って重いのが飛んでくる。

その次の攻撃が少しだけ遅れてくるってことは、重い攻撃は引きが遅いってこと。

つまり、重たい攻撃が来たら、引き戻しを捕まえられるかもしれない。

いつてことだ。

攻撃の出鼻が見えていて、手か足のどっちで攻撃してきたか分かれれば、攻撃してきた手なり足なり、捕まえるのは難しくない。

タツクルに行くのはマズい。

俺の方が川神よりも、ずっと身長が高いんだ。

胴タツクルにせよ、足にタツクルするにせよ、距離が近過ぎる。

攻撃を受けながら重心を下げる手もあるが、そうすると頭の位置も下がる。

そんなことになったら、川神に畳み掛けられるに決まってる。

いちいち重心を下げてる余裕は、さすがにない。

だから、掴む。

手でも足でも……できれば足を取るのが理想的だが。

それを掴んで引っ張り回して、とにかく転がす。

転がしたら、あとは立たせないようにすればいい。

そのためだから、1発くらいは頭にもらってやるよ。

ほら、右のガードが下がったぞ。

チャンスだぜ、チャンス。

首から下が固過ぎて、途方もないくらい打撃を与えなきゃ倒せない。

そんな人間を一撃で倒せる場所が、ガラ空きになったぞ。

そんな風にガードを下げた、まさにそのタイミング。

俺の側頭部、ガードを開けた部分に蹴りが入った。

川神のヤツ、舐めやがって。

よりもよって、右の後ろ回し蹴りか。

左右逆とはいえ、俺の得意技で決めに来やがった。

俺のことを、自分の得意技を食らうアホとでも思ったか？

まあ、どう思ってくれてようが、どうでもイイ。

その蹴り足の足首を、全力で握れる左手で掴めたんだから。

「掴まえた」

川神にしか聞こえない、小さな声で呟いて。

俺は、掴んだ左足首を、思いつ切り引っ張った。

13話目『Grapple if you can』（後書き）

ちよつと勝負がグダついでるかもです。

簡単に書いてしまうと。

攻めていつていたのに、いつの間にか手痛い一撃を受け。

その後の攻撃を凌いで、上手く足を掴んだ……という感じです。

そんな話を、ネチネチと書いてみました。

次の話はワン子視点です。

ワン子がどんな技を使ったのか、それについても種明かししていきます。

とはいっても、想像がついた方もいらっしやるかもしれませんが……。

幕間『勝者の条件』（前書き）

ワシ子視点です

幕間『勝者の条件』

港くんは、やっぱり強かった。
右の足首を掴まれながら、そう思った。

最初の1手から、私は吞まれてた。
決勝戦っていう舞台で、緊張が高まってるはずなのに。
あんなに自然に歩み寄ってこられたせいかな、私は判断を誤った。

不気味なくらい自然な歩み。
偶然街で出会った知り合いに、軽く声をかけるために近寄る。
特別に急ぐわけじゃなくて、そこらの道を歩くのと同じ速度。
何気ない、敵意が感じられないようなスピードだった。

似たような技を知ってたのが良くなかった。

武蔵さんの、微妙な間合いから緩やかに踏み込んでくる技を知ってたから。

だから、全然違う歩法だったのに、同じ対処をしちゃった。

距離を潰せば大丈夫だって思い込んで、港くんの間合いに踏み込んだ。

運が良かったのは、港くんが蹴りを狙ってたこと。

パンチだったらモロに当たってたかもしれないけど、蹴りだから受けられた。

それでも、動体視力には自信があるんだもん。

早いで、出所が分かり切ってる蹴りなんて、簡単に防げる。

焦って距離を詰めなきゃ、避けれたと思うけどね。

受けた蹴りは、重くて、鋭くて、早くて、固かった。

衝撃が体を突き抜ける……そういう打撃じゃなかった。

攻撃が当たった場所から、体中に衝撃が広がっていく。

足を断ち切るようなローキックとは、全然モノが違う蹴りだった。

でも、大したことない。

ブロックが間に合ったのもあるけど、耐えられないほどじゃなかった。

内臓が体の右側に押し込まれるみたいな感覚と、異常な息苦しさ。

港くんが私に与えた最初のダメージは、たったのそれだけだった。

私を倒せないで、足元をフラつかせるので精いっぱいな程度のダメージだった。

でも、事実として、私の足元はフラついた。
そんな絶好のチャンスを、港くんが見逃すはずもなく、
右腕がドス黒くなってるのに、そんな腕まで使って猛攻を加えてき
た。

距離の確認と牽制を兼ねた、左ジャブ2発。

ガードの上からでも効かせてくるような、左ストレート。

私の動きを止めるために打ってきた、左ミドル。

次のハイキックにつながるための、軽い右ローキック。

私の頭なんて碎けちゃいそう、鋭い左ハイキック。

そこから色々飛んできたけど、全然覚えてない。

とにかく、マトモに動けるようになるまで逃げ続けるので精いっぱいだったから。

もちろん、逃げてばかりじゃなかったよ？

だって、逃げるだけじゃ、いつかは捕まるんだもん。

少しは打ち返して、コッチの攻撃を警戒させておかないと。

多少は攻撃を返さないと、好き放題に打たれちゃう。

そうならないためにも、無理をしても打ち返さなきゃいけなかった。

でも、私にとって。

こういう風に滅多打ちにされるのは、予想の範囲内のことだった。
予想してたからこそ、私は、ちゃんと打開策を見つけて出していた。

川神院の書棚にあった、古流武術の秘伝書の1つ。
修行僧なら、誰でも閲覧できる棚にあった秘伝書。

その、流派の名前さえ載ってない1冊が、私の大きな武器になった。

耳の穴を指で突いて、固め技から逃れる方法。

急所を攻めておいて動きを鈍らせ、頭から地面に落とす方法。

極めた腕を捻じり上げて、そのまま肘と手首を折る方法。

わざと壁際に追い込まれて、追ってきた相手を壁にぶつける方法。

そして、水を含んだ髪の毛を振り乱して、その水滴で顔を打つ方法。

その中の、髪の毛に含んだ水を使う方法を応用したものが、私の奥の手だった。

髪の毛に水を含ませて、その水滴を使う。

何も、そこまで凝ったことをする必要はない。

技の目的が『相手の視覚を奪うこと』なら、もっと簡単にできる。

私みたいに髪の毛が長ければ、髪の毛で顔を打てばいい。

目潰しは、確かに試合で反則になってるけどさ。

その目潰しってというのは、たぶん、目に指を刺し込んだりすること
なんだよね。

指で突いたり、爪先で突いたり、指の表面で目をこすったり、肘で
打ったり。

そういう感じの、とっても分かりやすいタイプの目潰ししか、普通
はイメージできない。

だいたい、私は髪の毛が長いんだから。

相手の攻撃を大きく避けた拍子に、髪の毛が相手の顔に当たること

もらった。

港くんの得意な打撃は調べてある。

普通の蹴りよりも、変わった蹴りを好んで使う。

回し蹴りで右足を振りきったら、ほぼ間違いなく後ろ回し蹴り。

右肩を引いたなら、かなりの確率で中段飛び後ろ蹴り。

そして、ジグザグの動きで距離を詰めてきたら、フェイント付きの縦蹴り。

その前に出してくる攻撃で、次に何をしてくるかが決まっている。

しかも港くんは、急に形勢が不利になると、後ろ回し蹴りに頼りやすい。

飛び後ろ蹴りは、拮抗した状況を打破するために使うことが多い。

フェイント付きの縦蹴りは、余裕があるときに、遠い間合いから使ってくる。

しかも、後ろ回し蹴りは必ず左、飛び後ろ蹴り・縦蹴りは必ず右で出してくる。

本人が意識してるのか、それともしてないのか。

とにかく、そういう規則性がある。

膝の周りの、肉の薄い部分。

その部分に、予想していたモノより大きな激痛が走った。

分かってたはずなのに、耐えがたくなるような激痛だった。

激痛を合図に、ダッキングしながら頭を振りかぶった。

私に蹴りが当たったか確認するために、目を見開いてる港くん。
その港くんの目に髪の毛が入るように、ポニーテールを叩きつけて。
私の目論見通り、毛先の方に水分を多く含んだ髪の毛が、眼球を打った。

そのまま落ちてくる、港くんの爪先。

目潰しを受けて怯んでるはずなのに、少しも勢いは落ちない。

そんな風に強烈な蹴りを避けて、すぐに右ハイを当てた。

左耳の穴を狙って、三半規管が揺れるように。

あわよくば、鼓膜が破れてしまうように。

そして、私の狙い通りになった。

鼓膜は破れてないけど、港くんの動きが止まった。

三半規管がマヒしてるせいかは分からないけど、チャンスが巡ってきた。

そこから、左脇腹……肋骨を拳で打った。

肉の薄い部分を打ったはずなのに、まるで、金属を打ったみたいだった。

オープンフィンガーグローブ越しなのに、私の拳が痛むくらい固かった。

それでも、肋骨くらいしか攻撃する場所が残ってない。

私くらいの体重じゃ、顔以外の部分で十分なダメージを与えられないから。

拳が痛んでも、肋骨を打つしかなかった。

動きを止めるために、すぐに右ローを出す。

コレも、できるだけ肉の薄い、膝の周りをスネで蹴る。かなりの力を込めたはずなのに、私の足は跳ね返された。

内臓にダメージを蓄積するために、左ミドル。

脇腹なら、正面から拳を打つよりはマシ。

そう思っただけなのに、返ってきた感触は最悪。

固くて弾力のある、生ゴムの塊を蹴ったみたいな感触が返ってきた。

仕方なく、何発かボディの下の方に攻撃を入れて。

意識が下っ腹に集中したところで、胸骨を狙って頭突き。

……胸骨を狙ったはずなのに、頭突きは胸板に止められていた。

私の打撃は、あまりにも無力だった。

打ち抜けない、通らない、響かない。

肉も骨も、私の打撃を受け付けない。

素手での実力に差があるのは分かってたけど、悔しかった。

体重が軽いから、身長が低いから、パワーで劣ってるから。

それでも勝てるからこそその武術なのに。

私の身に付けた技が通用しないことが、悔しくて仕方なかった。

思わず、がむしゃらになって打ちまくった。

なんでもいい、なんとか港くんにダメージを与えたい。

あの鍛え上げられた体を、私の攻撃で突き崩したい。

投げじゃなくて、関節技でもなくて、打撃で。

始めはそう考えてたのに、いつの間にか意地になった。

何も、港くんだって無敵の防御力を持つてるわけじゃない。

1回戦で、顔にパンチをもらってダウンしたように。

それなりの威力で、的確な部分を攻撃すれば、ちゃんと倒せる。

簡単にはできないだろうけど、それでも、不可能ってわけじゃない。

やるしかないなら、やればいい。

打てる手があるなら、どんな手でも使えばいい。

私の知ってる全て、私の持つてる全て、私の隠してる全て。

それを尽くさなきゃならないなら、そうすればいい。

そう思ったとき、港くんのガードが下がった。

さっきから何度か狙ってた、痛めた右腕のガード。

まるで、私の思いを見透かしたかのようなタイミングだった。

……すぐに気付いた。

港くんは、私を誘ってる。

わざとガードを下げて、私に蹴りを打たせるつもりだ。

私の蹴りだったら耐えられる、そう思われてるってことだ。

どう思われたっていい。

相手がどう思ってるかなんて、後から考えたらいい。

私に1番必要なのは、少なくとも、この戦いに勝ち抜くこと。

そのためだったら、なんだって利用してみせる。

目の前にぶら下げられた、見せかけの隙でも。

私が選んだ技は、後ろ回し蹴り。

港くんが得意にしてる蹴りの1つで、隙の大きい技。

身長差が開き過ぎてる相手には、有効とは言えない技。

それを分かかって、私は後ろ回し蹴りを選んだ。

カカトに、頬を打ち抜く感触が伝わった。

骨に衝撃が伝わる、甘い感触。

今の技で相手を倒した、そう確信させるだけの感触。

その感触は、私の背骨を駆け抜けた。

掴まれてた。

打ち抜けてなかった。

右の足首を掴む、異常な力。

足首が潰れるのをイメージしちゃうくらいの、強烈な力。

あまりにも強い力は、力任せに振り切るっていう手を許さない。

「掴まえた」

私にだけ聞こえる声で、小さく呟いた港くんは。

思いつ切り私の右足首を引っ張って、バランスを崩そうとしてくる。もちろん、ただ引っ張るだけじゃなくて。

地面に着いたままの私の左足に、自分の右足を絡めようとしてきた。

私は笑いそうだった。

あまりにも、予想通り過ぎて。

港くんが絶対に見切れる、後ろ回し蹴り。

すぐに蹴り足を引かないで、足を掴むだけのチャンスを残した蹴り。

港くんが期待していた、大振りで、見え見えの蹴り。

その蹴りを掴んだ港くんは、やっぱり私の予想通り、私を倒しに来た。

ガラ空きの側頭部。

港くんのガードが、完全に空いた。

与えられた、見せかけの隙じゃない。

本物の隙が、港くんに芽生えた。

港くんは、やっぱり強かった。

右の足首を掴まれながら、そう思った。

強いけど、試合の流れの中で詰め甘い部分があつて。
今もこうして、無防備に右側のガードを下げていてくれる。

強いけど、勝つのは私だ。

そう思いながら、少しは自由の利く左足で地面を蹴って。
港くんの顔に、左の飛び膝蹴りを繰り出した。

幕間『勝者の条件』（後書き）

えー、前回の話より、ほんの少しだけ進みました。

基本的には、前回の話をワン子視点で書いたものです。

今回は、ワン子の方が一枚上手であったという形でした。

この先の展開については、現在執筆中です。

もう2、3話ほど、お時間をいただくとお思います。

14話目 『明日、もし俺が壊れても』

蹴り足を掴んで、カづくで引っ張った。
川神を転がして、寝技で勝負するために。

だから、川神の飛び膝回し蹴りを避けたのは、半分は偶然だった。

いや、完全には避けてない。
コメカミに違和感を感じた瞬間に、首を思いっきり左に傾けた瞬間。
右のモミアゲあたりを、凄い衝撃を通り抜けてった。
かするとか、擦れるとか、チップするとか。
間一髪っていうくらいの表現がピッタリの回避だった。

掴んでる川神の足を離したから、今の蹴りを避けられた。
しかし、咄嗟に足を離しちまったせいで、川神に流れを掴まれた。
川神のブルマが目の前にあるけど、それどころじゃない。

足を払いながら地面に転がそうとしたせいで、俺は今、死に体にな
ってる。
大技を出した川神も同じようなもんだが……隙だらけの川神を攻撃
する手段がない。

俺の頭を、膝で横から蹴り抜こうなんて無茶したから、着地までに

時間が掛る。

でも、まだ宙に浮いてる川神を攻撃する手段は、今の俺にはない。

俺に背中を見せながら、地に落ちていく川神。

その川神に1つも攻撃ができないのが、もどかしい。

右腕が動けば、背中から拳を叩きつけることもできた。

右足を足払いに使ってなきゃ、落ちてくる川神に蹴りを入れられた。手段は思いつくのに、それを実行に移せるような状態じゃない。

川神が地面に着地して、即座に体勢を整える。

膝立ちになって、両腕で顔を挟み込んで、背中を丸める。

可能な限り急所を守って、コツチの攻撃に備えてた。

まあ、俺は俺で、川神を引っ張ってた勢いを利用して後ろに下がってる。

さすがに下から関節取られることはないだろうが、念のためってヤツだ。

右腕がロクに使えないし、平衡感覚だって十分に戻り切ってない。そんな状態で、強引に攻めるわけにはいかないんだよ。

俺は、すぐにフルコン空手の構えを取った。

間を置かずに川神が攻めてこないようにするために。

今のやり取りで、お互いに面食らってるはずだ。

反撃があるかもしれない、攻めてくるかもしれない。

そう思わせておくだけで、攻撃を躊躇させて時間を稼げる。

俺の構えを見た川神は、ゆっくりと、座ったまま後ろに下がる。

どう攻めるのか、それとも引いたらいいのか、その判断もついてないらしい。

そんな時間が30秒も経たないうちに、ブーイングが飛んできた。港から攻める、デカイクセにビビってんじゃねーよ、とつと沈め。川神から動けよ、全然効いてねーじゃねーか、早く倒しちまえ。俺たちの攻防の意味が分かってない連中が、程度の低い歓声をくれる。

そこそこ経験のある連中には、俺たちの緊張感が伝わってるはずだ。俺たちはヘタに動かない。

動いちゃいるんだが、試合が進むような動きはしない。相手にダメージを与えることもないし、相手の不意を突くこともない。

ただただ、このラウンドが終わるまでの時間稼ぎをしてる。川神は知らないが、少なくとも俺は時間稼ぎに尽力するしかない。つか、ぶつちゃけさつきから吐きそうで、気持ちが悪い。

現状維持するのは、俺からすれば悪い展開じゃない。打たれ続けちゃいるが、この試合でのダメージは俺の方が小さい。……前の試合までの分を考えると、俺の方がずっと厳しいんだが。脳は、まあ、最初の試合とブンカートからもらった分が残ってるかな。

しかし、リーチは俺の方がずっと長い。

もちろん、前蹴りや横蹴りでリーチを稼ぐって手もあるが。今みたいに脳が揺れてる状態じゃ、空振りした後が怖い。

だから、攻撃を当てるんじゃなくて、攻撃をさせないためにローで

牽制する。

もし踏み込んできたなら、相手の攻撃に先んじてローを当てて、出鼻をくじく。

あんまり好きな戦法じゃないが、そうやって逃げ切るのが最善なんだよ。

……そう考えると、相手が川神だったのは運が良かったのかもしれない。

身長差がコレだけあって、しかも、桁違いってほどスピードに差はない。

それに、俺を倒せるだけの打撃は川神にはないし、組めば俺の方が有利になる。

俺に対する決定打が川神にないっていうのは、大きなアドバンテージだ。

ブンカートとやったときに同じ展開になってたら、もう終わってるもんな、俺。

もしブンカートだったら、ヒット・アンド・アウェイって手があった。

俺とリーチに大した差がなくて、打撃の威力も高く、最低でも川神並みに早い。

近付いても離れても俺を倒せる武器があって、組技にも多少は対応できる。

それだけの条件が揃ってるブンカートだったら、そうやって戦うことができた。

それどころか、このラウンドで俺を倒すことができたかもしれない。

ああ、そうそう。

俺が相手である限り、川神にはヒット・アンド・アウェイなんてマネはできない。

アレは普通、リーチに勝ってる人間が使う戦法だ。

長いリーチを利用して、相手に先に攻撃を当てる。

当てたら即座に距離を取って、相手の間合いの外に逃げてしまう。

大事なのはスピードじゃなくて、タイミングと十分なリーチだった。

自分よりリーチの長い相手の懐に入って、相手の間合いから素早く脱出する。

そんな奇妙なマネが川神にできるんだったら、話は別だけどな。

もしそれをしようと思ったら、俺の倍以上の反射神経とスピードが必要になる。

俺と川神の間には、スピードはともかく、反射神経には大きな差がない。

まあ、そのスピードだって、さすがに倍も差があるってことはない。それを理解してるからこそ、川神も無理して距離を詰めてこないんだよ。

結局、1ラウンドの残りは。

お互いに牽制しながら、1発も攻撃が当たらずに終わった。

コーナーに背中を預けて、俺は大きく息をついた。

腰を落ち着けるイスこそないが、それだけで体は楽になった気がする。

そうやって落ち着いたことで分かったんだが、思った以上に無理をしたらしい。

本当に少しずつなんだが、いつもより体が重たくなってる。

それに、心なしが、ブンカートとやった時よりも集中できてない。

程度はどうあれ、脳震盪やってるからだと思うんだが……無茶にも限度があったか。

たぶん、さつき川神に蹴りもらったときに、また脳が揺れたんだろ
うな。

あっはっはっはっは、俺って、どんだけ防御が下手なんだよ。

……さて、ハッキリ言って、かなりヤバイ。

こうやって体を休めることができ、必要以上に実感できた。
平衡感覚は、まあ、我慢して戦える程度には回復したんだが。

うつすらモザイク掛けたみたいに、視界がボヤけてやがる。

それにさ、全部が全部、鈍いんだよ。

顔にもらったパンチの痛みが、鈍くなってる。

1つ1つの体の動きが、鈍くなってる。

脳ミソの回転が、明らかに鈍くなってる。

もう試合から逃げ出して、早く休みたいって気持ちが始めてる。

次にコーナーから動くときには、かなり気合を入れなきゃならんだろうな。

要するにさ、総合的に見ても戦える状態じゃないんだわ。

どこにダメージが溜まってるのかも、正直、分かり切ってない。

いつもだったら、どこがどういう風にマズいのか、すぐに判断できるのに。

どうして腕が青黒いのか、そんなことさえも考えないと思いだせない。

ブンカートに蹴られて腕が使えなくなったことさえ、思い出すのに時間がかかる。

あー、そっか。

つまり、頭が1番参ってるってことか。

とりあえず、こういうときは、どうしたらよかつたんだっけか？

息が切れかけてるんだから、そう、呼吸を整えればイイ。

肺いっぱいまで空気を溜めて、全部吐き出す。

えーっと、空手の呼吸法だったんだけど、なんて名前だったっけ。

まあ、なんて名前でもイイか。
コレをやると、息が整うってことが重要なんだ。

「カアアア……………ツツツ」

それを、3回繰り返す。

なんで3回かっていうと、最初の2回は肺を膨らませるためだから科学的に見ても、4回目以上は大した効果がないっていう話だった。誰から聞いた話だったかも、知ってるはずなのに、思い出せない。

脳に酸素が回ってきた。

鼓動が落ち着いて、感覚が少しだけ戻ってくる。

本当に少しだけ、変わったかどうか分からないくらい。

まあ、気持ちだけでも楽になったなら、それでイイや。

俺はまだ戦える、それだけで十分だ。

「ミチヒロ！ 距離を取れ！ 近付かせてはならんのじゃ！」

「気を付けてください！ 大振りは危険ですよ！」

最初の声は、ミチヒロって呼び方だから、心だろ。

次の声は……………まあ、由紀江ちゃんか、武蔵のどっちかだ。

どっちのアドバイスも、川神を近寄せちゃならないってこと。

そのために、細かく打っていかなきゃならないってこと。

もう、俺が思い付いてるような内容だった。

それじゃダメだ。

川神を倒そうと思ったら、それじゃダメだ。

時間を稼ぐことは、できるかもしれない。

次と、その次のラウンドをフルに消化する。

せめてもKOされないように、逃げに徹する。

負けないように戦うなら、それも悪くない。

でもさ、それじゃ困るんだよ。

川神に勝つってというのが、俺にとって大事なんだ。

負けなきゃいい、生き延びられればいい。

命のやり取りを前提にした、そういう戦いじゃない。

……制限時間がなけりゃ、何時間使っても倒して見せるんだが。

残念なことに、この試合は制限時間が決められてる。

「いいかミチヒロ！ 間違っても自分から距離を詰めるな！

へたな間合いに立ったりしないで、組んで一気に引き倒せ！」

それも分かってる。

分かっているが、俺から組みに行くことは、もうできない。

目が霞んでる状態じゃ、ただでさえ打撃も当て辛くなる。

それに、ただ見えにくいだけならいいんだが、距離感がない。

そんな状態でタツクルに行けるほど、俺は頭が弱くない。

いや、タツクルつつても、引き倒すためのタツクルは無理だ。

アメフトとか、そういうタツクルならできないこともない。

川神の攻撃に合わせて、体ごとぶつかるくらいはできる。

そんな安直な手が通用するかは、まったく別の話なんだが。

ああ、クソ。

心たちに言葉を返す余裕もない。

ちよっとくらい気の利いた言葉を返したいのに。

片手を挙げて余裕をアピールしてやるだけでイイのに。

そんな簡単なことでさえ、今の俺にはできない。

どうやって倒す？

冷静になったのはイイとして、手はあるのか？

いや、手はあるんだ。

変則のヒールホールド、マウントからの腕関節。

バックマウントを取って首を狙う、内臓にダメージを溜めこむ。

もっと乱暴に……指をヘシ折ったりとか、肋骨を握り折ったりとか。足首に膝を乗せて潰したりとか、腕やふとももに穴あけたりとか。肋骨を上から圧迫して折ったりとか、マットに指をこすりつけて爪を剥がすとか。

まあ、偶然を装ってやらなきゃならんのもあるが、手はあるんだ。

ああ、クソ、そうじゃないだろ。

俺は今回、まっとうな手段で勝たなきゃならないんだ。

まっとうな手で川神を倒して……アレ？ どうすんだっけか。

そこまでする必要が、どこにあったんだっけか。

クソ、もうゴングが鳴った。

まだ頭がボーンツとしてるのに、もう戦わなきゃならない。

……まあ、でも、戦うってのはそういうことだ。

自分の都合のいいように戦えるなんて、そう何度もない。

さあ、勝ちに行くぞ。
何が何でも、ブッ倒してやるよ。

14話目『明日、もし俺が壊れても』（後書き）

まだまだ引つ張ります、港VSワンコ戦です。

先が見えてしまった気もしますが……そのあたりはご了承願いたく
思います。

ところで、全然関係ないヒット・アンド・アウェイの話ですが。
アレ、リーチが不足していると本当にできません。

マンガとかでよく『小さい方がスピードがあるから懐に入って云々』
とか書いてありますが、そもそも、大前提の『小さい方がスピード
がある』が間違いなので、現実で小さい人間がやるうとすると成功
するような策ではありませんでした。

えらく手前勝手な話ですが、もしも『いや、違うんじゃない？』と思
う方がいらつしゃいましたら、自分より大きな人を相手に格闘技で
ヒット・アンド・アウェイを試されることをオススメします。

少なくとも、技量に笑ってしまうくらいの差がない限りは、ほぼ間
違いなく成功しないはずです。

……は、さておき。

次回、かなり締まらない感じで戦いが終了します。
なんというか、申し訳ありませんです。

幕間『Rule is no-rule』（前書き）

武蔵小杉視点です。

対戦者視点での描写が困難だったため、試合を見ている人間に視点をシフトしました。

ほとんど3人称視点のような感じですが、ご容赦いただければと思います。

あと、少々グロテスクな描写があるので、苦手な方は我慢して読まれるか、この話は飛ばしてしまうことをオススメします。

幕間『Rule is no-rule』

私が見た試合は、もう、試合なんかじゃなかった。

ルー先生が止めなかったのが不思議なくらい、酷い戦いだっただ。

もし、この試合に、他の格闘技みたいなルールがあったら。

とてもじゃないけど、続いてるような試合じゃなかった。

もしも、あんな戦いが許されるルールがあったら。

それはもう、格闘技なんかじゃない。

必要以上に相手を傷つけないため、相手の命を保证するため。

そのためにルールが存在するんだとすれば、この戦いを許すルールはない。

何度思い返しても、間違いはない。

アレはもう、試合じゃなかった。

アレは、ただの潰し合いでしかなかった。

先に手を出したのは、港先輩。

川神先輩のローキックを避けて、そのままタツクルに行った。

結果だけ見たら、そういうことになるんだけど。

そんな言葉で説明できないような細かい攻防が、そこにあった。

港先輩は、川神先輩のローキックを誘ってた。

スナイパー空手みたいに、膝を狙うような左前蹴りを出して、わざと空振りして。

その空振りした左足に、川神先輩が右ローを入れようとしたんだけど。

港先輩の足は、着地と同時に折りたたまれて、川神先輩のローキックをスカして。

そのときにはもう、信じられないようなスピードで胴タツクルを決めようとしてた。

蹴りの当たらない距離から、目の前の空間を泳ぐようにタツクルを出していた。

川神先輩にチャンスがなかったわけじゃない。

胴タツクルっていうのは、基本的には、顔をあげながら出す技。

いくらスピードがあるっていつても、拳か肘なら合わせられないこともない。

私と同じことを考えてたのか、川神先輩は、港先輩の顔に右ストリートを繰り出した。

でも、完全に直撃するコースだったのに、港先輩はその拳を避けた。水面に潜るような動きで頭を沈めて、タツクルの勢いを殺さずに。川神先輩の右拳は、港先輩の後頭部をこするようには通り過ぎていて。

すぐに左の肘を打ち下ろそうとしたところで、胴タツクルが完全に決まった。

港先輩は、捕えた川神先輩を持ち上げて、力任せに地面に叩きつけて。

そのまま素早くマウントポジションをとって、川神先輩の動きを封じてしまった。

しかも、ただのマウントじゃなかった。

空手の帯で、川神先輩の左手を締め上げて。

その帯の先を、右の膝裏に挟んで、動かないようにしてしまった。ルールでは禁じられてない、ギリギリの技だったけど。

ルー先生が止めないってことは、これは反則でも何でもなし。

港先輩が、右と左と、ランダムに拳を打ちおろした。

1発、2発、3発、4発。

右腕に力が入らないからなのか、体ごとぶつけるみたいに殴ってたけど。

そんな大振りでも、川神先輩は避けることができなかった。

両肩が地面に密着してて、しかも、それをやってるのが柔術の黒帯。常識的に考えたら、川神先輩が脱出できる可能性なんてなかった。

だから、港先輩からマウントを解いたのが、私には不思議に見えた。

今までの展開から考えて、港先輩がマウントを解く理由がない。

完全拘束って言うても過言じゃないような、完璧な体勢だった。

川神先輩が使えるのは右手くらいで、両肩も地面に付いてるから動きも制限される。

そういう状態だったのに、港先輩が飛び退くほどの攻撃ができるとは思えなかった。

答えはとても単純で、だから、私は怖くなった。

少しだけ驚いた顔で、自分の左耳を抑えてる港先輩。

耳を抑えた左手からは、赤黒い、血管から出たばかりの血が垂れてた。

耳を抑えてて、そこから血が流れ出ている。

つまり、川神先輩が、港先輩の耳を千切ろうとしたってことだった。

港先輩は、川神先輩から視線を外さない。

川神先輩は川神先輩で、無表情で港先輩を睨み付けてる。

今のやり取りが反則だとか、そういうことは一言も口にしない。

それが隙になるからか、それとも、言っても意味がないと思ってるのか。

ただ相手をジツと睨みつけて、構えも警戒も解かずにいる。

その2人の間に、ルー先生が割って入った。

今の今まで動きを見せなかつたけど、ついに動いた。

遠目にしか見えないけど、その目は怒りに染まってる。

何に怒ってるかは、傍目に見ても明白だった。

港先輩の耳をちぎろうとした、川神先輩に怒ってるはず。

現に、ルー先生は川神先輩に向かって歩いてるし。

その前後の行動を考えても、港先輩に注意をするとは思えない。

「一子！ 今のはどういことダ！」

その目は、言い訳を許そうとしないまっすぐな視線だった。

今までにあったギリギリの反則とは違って、あからさまに危険な技。

普通の格闘技じゃ使われないような、危険すぎる技。

たぶんだけど、そういう技を使ったことに、ルー先生は怒りを見せた。

「自分が何をしようとしたのか分かっているの力！」

その言葉にも、川神先輩は動じない。

まだ港先輩と距離があるのに、港先輩から目を離さない。

こうしている間にも、港先輩が襲いかかっているんじゃないか。

まるでそう思ってるみたいな顔で、港先輩を睨んでた。

「止めなくていいんで、続けさせてもらえますか」

こんなことを言い出した意味が理解できなかった。

ココでゴネれば、格好はつかないけど、港先輩の勝ちになったはずなのに。

それどころか、まだ勝負を続けるように要求をする。

「しかし君八……」

「油断してた俺が悪いんで、このまま続けさせてください」

港先輩は、便宜を図ってくれようとしたルー先生を押し退けた。

総合格闘技じゃ使えるはずのない、危険な技を受けたはず。

なのに、それを港先輩は『油断』って言い切った。

確かに、油断って言えないこともない。

ルールがあるからって、相手がルール通りに戦ってくれる保証はない。

そう考えれば、港先輩が反撃に注意してれば、耳を攻撃されること

はなかった。

それでも、コレはルールのある試合で、果たし合いでも殺し合いでもない。

そこまでの覚悟で臨むような戦いでも、もちろんない。

「それで、構わないんだネ？」

「ええ。あとから反則勝ちだなんて言われたかないですから」

顔をしかめながら聞いたルー先生に、無表情で答える港先輩。その様子を見て、まだ戦えるって判断を下したのか。

今の場所から2人を一步も動かさずに、試合が再開された。

今さら、こんなことを考えても仕方ないんだけど。

きつとルー先生も、ココで止めておけばよかったんだと思う。

耳から血を流しながら、港先輩が掌を構える。

腰を落として、体をたわめて、いつでもタックルに行けるようにしてて。

ブラジリアン柔術で行くつもりかは分からないけど、そういう構えだった。

でも、よく見れば、明らかに柔術の構えじゃない。

前に出した左足の爪先で、トントンと地面を踏んでリズムを取ってる。

伝統派空手みたいに、相手との間合いを取りながら動く気配を見せる。

いつでも動ける、いつでも打てる、それが分かるような構えだった。

川神先輩は、両掌を下に向けて、腰のあたりで留めてる。

右足を前に出して、左足は後ろに据えて、体重は右足に大きく乗せられてる。

体は正面に向けて、背はピンと伸ばして、アゴを引いて港先輩を睨みつける。

アレが川神流れの構えかは分からないけど、そういう構えをしていた。

先に動いた方が不利っていうのは、お互い理解してるみたいだった。少しずつ距離を詰めたり、サイドに回り混もつとする動きは見せるけど。

そのたびに相手も動きを合わせるから、なかなか試合が進まない。

今度もまた、港先輩が先に動いた。

さつきと同じようなタイミングで、ふわっ、と宙を泳ぐ。

空気抵抗を感じさせない、水の中を早足で行くような動き。

早くもなく遅くもない、微妙過ぎる速度でタツクルに行った。

今度は、川神先輩はいきなりパンチに行かない。

タツクルしようとしてきた港先輩を見て、タツクルを受けようとした。

がぶって倒すんじゃないかと、受け止めきってから膝を出すつもりだったのかも知れない。

港先輩相手に組み合うとは思えなかったけど……そういう可能性もある。

港先輩の指先が、川神先輩の足に触れようとした。

その瞬間、川神先輩が、仰向けになって港先輩の下にもぐりこんだ。スライディングするような動きで、でも、右足を港先輩のお腹に当てながら。

左手で襟首を掴んで、鋭く滑り込んで、不自然なほどスムーズに。

そのまま港先輩は、川神先輩に蹴り上げられて。

ロープの間をすり抜けて、そのままリング下に落とされた。

まるで、港先輩からリングの外に突っ込んでいった。

そう見えないこともないような、そういう動きだった。

ただ、リング下に落ちたのは港先輩だけじゃなかった。

道着の襟を掴まれた川神先輩も、港先輩に巻き込まれるように落ちて行った。

港先輩たちが落ちたのは、たまたま誰もいない場所だった。

私たちの座ってる位置からすると、左斜め前つてくらないのかしら。そのあたりに、港先輩と川神先輩がもつれるようにして落ちた。

せっかく最前列に陣取ったのに、決勝戦までの試合に退屈した。たぶん、そういう事情で席が空いてたんだと思う。

せっかく景色のいいところを取っておきながら、難で帰ったのかは気になるけど。

とにかく、誰もいない場所に2人が落ちたのは、運が良かった。

港先輩は、最前列のパイプイスに顔から突っ込んでいって。

川神先輩は、港先輩に1拍遅れて、地面に頭を叩きつけられていた。

一見するだけじゃ、被害の大きさは分からない。

パイプイスにぶつかった分、港先輩の方が怪我は軽いかもしれない。でも、港先輩の方が、川神先輩よりは30kg近く重くない。

どっちが深い怪我を負ってるかなんて、まだ、私にはわからなかった。

先に起き上がったのは、港先輩。

力のない表情をしてるけど、体はちゃんと動いてて。

なんとか動く左手で川神先輩の襟を掴んで、無理やりに引き起こした。

港先輩は、そのまま川神先輩をリングのポールに押し付けて。顔に何の表情も浮かべず、それでも、一撃一撃に力を込めて。1発は腹に、2発は肋骨を狙って、容赦なく膝蹴りを入れていった。一撃目で動きを止めて、次の一撃で肋骨を負ってトドメを刺す。容赦も手加減もしないで、港先輩は淡々と蹴っただけだった。

その膝がもう1発肋骨に入れられて、そこで、川神先輩がようやく動いた。

4発目の左膝を十字受けで止めて、左手で港先輩の襟を取って。港先輩の右サイドに回り込みながら、素早く体を入れ替える。

ポール挟まれた状態で膝蹴りを受け続ける、最悪の状態を回避するため。

そういう逃げの発想からの行動だと思ってたけど、そうじゃなかった。

体を入れ替えながら、もう、その右手で港先輩の左袖を掴んで。港先輩を背負うようにして、グツと重心を下げる。投げられそうになった港先輩は踏ん張るけど、手遅れだった。

上半身は、相手を文字通り背負って投げる『背負い投げ』で。下半身は、相手をつんのめらせるようにして投げる『体落とし』の形。

経験者以外はあまり聞かない『背負い落とし』って呼ばれる技で、港先輩を投げた。

もちろん投げる先は、リングを支えてるポール。下に投げるんじゃないくて、ポールに向かって投げる。

さつき港先輩が、川神先輩をポールに押し付けて膝蹴りを入れてたけど。
今、川神先輩がやるうとしてることの危なさは、その比じゃない。
歩いてる人間の頭の上に、コンクリートの電柱を横倒しにして落とす。

そういうレベルで、川神先輩がやるうとしてる技は危険だった。

ゴリツ、て鈍い音が聞こえた。

硬いモノに硬いモノをぶつけるときに聞こえる、あの音が。
かなり距離があるはずなのに、私の耳にもはつきり届いた。

私だけじゃなくて、不死川先輩も。

何か叫ぼうとしたけど、何も声にならなかった。

唯一、黛さんだけが辛うじて

「ミチヒロさん！」

って声を挙げただけだった。



港先輩は動かない。

ポールに血の跡を残したまま、地面に伏せてる。

川神先輩は……距離を取って、港先輩と距離を取った。

いつ港先輩が立ちあがってきても、すぐに攻撃を加えられる場所に立っていた。

この状況を止めなきゃいけないルー先生は、目を見開いてるだけだった。

川神先輩が何をしたのか、港先輩がどうなっているのか。

それは理解できてるはずなのに、受け入れることができていない。そんな表情で、この惨状をジッと見つめている。

誰も止められなかった。

止めるだけの實力があるとかないとか、そういうことじゃなくて。審判が止めないからっていうのと、もう一つ。

この光景から目を離すことができなくて、誰も動けなかった。

港先輩が、ゆっくりと立ち上がった。

顔のガードなんてしないで、膝立ちになって、すっ、と立ち上がった。

当然、川神先輩が見逃すはずもなく。

そんな港先輩の首に、的確に爪先を突き込んだ。

喉を狙うと反則になるから、首を横から挟むようにして蹴ったのか。それとも、何か横から狙うことに意味があつてそうしたのか。私にはわからないけど、そういう蹴りを出した。

港先輩は、受けもしないし避けもしない。

さつきと同じ、力のない表情で、ただ蹴られるがままにされてた。ただ、川神先輩の蹴りを受けても、首が揺らがなかったし。

港先輩が立ち上がるうとするスピードも、少しも変化しなかった。

結局、川神先輩は、すぐに飛び退いて距離を取り直した。

今の一撃を効かせられなかったら、深追いするのは危険。そう判断して、距離を取ったんだと思う。

川神先輩はもつたいたいことをした。

どうせ容赦をしないんだったら、ココで攻めておいた方が良かった。そうすれば、港先輩を倒すことができたかもしれないから。

港先輩の左手の爪が、親指以外、全部剥がれてた。

無理に襟を掴んでたせいで、爪が持つてかれたんだと思う。

でも、本当に全部の爪がキツチリ剥がれてたかは分からない。

だって、港先輩、自分で爪を噛んで剥がしちゃったから。

なんていうか、あんまり思い出したくないんだけど。

1回立ち上がった港先輩は、ちょっと構えてから自分の左手を見てあの力のない表情のまま、爪が剥がれかけてるのを確認した……したんだと思う。

自然な動作で左手の指を啜えると、そのまま一気に引き抜いて。その指に爪が残ってなかった事くらいしか、私にはハッキリ分から

なかった。

試合が終わったのは、そのすぐ後だった。

…… 本当なら、もっと早く止めなきゃいけなかったんだと思う。

港先輩が、自分で爪を剥がして構えた所で。

ようやくルー先生が、2人の間に割って入った。

そのルー先生を、港先輩が殴りつけようとした。

もう、ちゃんと目が見えてなかったのかもしれない。

川神先輩の方を向いてたルー先生を、爪を剥がしたばかりの左手で殴ろうとした。

そこで何が起こったのか、私には見えなかった。

ルー先生が振り返って、ただそれだけで、ゆっくりと港先輩が前のめりに倒れた。

あとで黛さんに聞いたら、物凄い速度で港先輩のアゴを打っただけ。
いけど。

そんな単純な動きでさえ、達人レベルじゃモノが違うって思い知ら

された。

試合はそこで打ち切られた。

結果は……引き分けでもなくて、ノーゲーム。

そりゃそうよね。

港先輩も川神先輩も、汚い技を何度も使ってコレだから。

そもそも、コレは試合ですらなかったのかもしれない。

あんな危ない技の応酬は、もう、ルールがないのと同じなんだから。

凄いのは、港先輩も川神先輩もルールを極力守ってたこと。

相手の耳をちぎってはいけない。

リングの外に相手を落としてはいけない。

ポールに相手を叩きつけてはいけない。

自分の爪を、自分で剥がしてはいけない。

そういうことは、事前に説明されたルールでは禁止されてなかった。

でも、ルールで禁止されていないからって、普通はそこまですない。

もっと前の段階で、気持ちが悪えて試合ができなくなってるはず。

だからつまり、港先輩も川神先輩も、普通じゃないってことで。

自分の覚悟が足りてなかったことを、私は思い知らされた。

とにかく、このトーナメントの決勝は。

戦っている本人たちも、見ていた私たちも。

誰一人として納得できないような、そんな結果に終わった。

幕間『Rule is no-rule』（後書き）

芳しくない予告通り、締まらない感じで幕を閉じました。ちよつと急展開なものも含め、詰め込み過ぎでした。猛省です。

ようやく、ダーク ワンコのダークらしい部分を書けたのでしょうか？

私としても、その辺が少々自信なかつたりします。

ダークではなく、単にえぐいだけではないのかとか。

汚い手を使うのと、心構えがダークなのは、別に同じことじゃないですもんね。

正義の味方だって、5VS1の集団リンチを行うのが常の世の中です。

ううむ……ダークダークと振っておいて、この体たらく。

申し訳なく感じるばかりです。

閑話『ブラックホールの優雅な日常』（前書き）

タイトルの意味がわかった方は、絶対に20代以上です。

閑話『ブラックホールの優雅な日常』

リング下に投げられた。

巴投げの変形、初めからコツチを落とすつもり投げ。まさか、こんな技を使ってくるとは思わなかった。

だが、こっからだ。

幸いなことに、力の入る左手で川神の帯を握ってた。

このままリング下に落ちるのが避けられないなら、巻き添えにしてやる。

それだけの覚悟を決めてから、衝撃に備えて首に力を込めて。

気が付いたら、白い天井を見つめていた。

ちっと混乱してるし、記憶も足りてないが。
俺……僕は、なんとなく今の状況が理解できた。
ただ、本当になんとなくでしかなくて、せいぜい怪我した場所しか
わからない。

右腕の痛みには覚えがある。

これは、ブンカートの膝蹴りを受け止めたときの分。
なんか添え木されてるのが気になるけど、折れてはないよね？
折れてるんだつたら、とてもじゃないけど指だつて動かせない。
グー、チョキ、パーができるってことは、よっぽど大丈夫でしょ。

右頬がパンパンに腫れてるのは、1回戦のときの怪我。

名前は忘れたけど、朱雀会空手やってる先輩にパンチもらったんだ
よなあ。

えーっと、奥歯が折れたんだっけか、折れてないんだっけか。
いやいや、折れたんじゃないかって抜けたんだつたよね、記憶の通りな
ら。

まあ、どっちにしても、見苦しいくらいに腫れてるんだろうね。
右頬の内側が、なんかグチャグチャしてるから。

まあ、その辺はまだ、記憶があるからイイんだけどさ。
ちよっと、他の部分の怪我については、全然覚えがないんだよね。

まず、左耳の付け根のズキズキした痛み。

どう考えても千切られかけた気がするんだけど、記憶にない。
耳を千切られるようなシチュエーションになつたんだらうけど。
そもそも、そんなことできる握力が、川神にあるとは思えない。

それと、左手の爪。

さつき軽く握ったら、親指以外の全部の指に激痛が走った。

いったいどこで爪が剥がれたのか、それもやっぱり記憶にない。

ちゃんと爪切ってきたのに、どうしてそんな風に爪がなくなってるのか。

ガツツリ指も鍛えてるんだから、そう簡単に剥がれることはないと思うんだけど。

まあ、何を言ったところで爪がないのは事実だから、原因は後で考えよう。

あとは……頭のとっぺんの、ツンとした痛み。

こんな場所を怪我することなんてなかったはず。

あるとすれば、グラウンドでブンカートから膝もらったとき。

でも、そのときは、右腕を犠牲にして耐え抜いたんだよね。

少なくとも、頭を直接蹴られることだけは避けたんだ。

だから、ブンカートの蹴りで、頭のとっぺんが切れたってことはない。

それなら川神がやったってことになるんだけど、どどういう状況でそうなったやら。

そんなことを考えてるうちに、全身の感覚がハッキリ戻ってくる。

さつきまで痛みだけに支配されてたのに、ちゃんと熱や触感も戻ってきて。

それでようやく、痛覚じゃなくて、視覚で現状を確認できるようになった。

右腕には添え木と包帯、左手は包帯でグルグル巻き。

右の頬がポンポンに腫れてて、体のところどころに痛みがある。寝転がったまま下に視線を移すと、入院患者が着るような清潔な服を着てる。

それと、この白い天井と窓のカーテンからして、どうやら病院らしい。

しかも、ベッドの周りをカーテンで区切られてない、贅沢な個室みたいだ。

要するに、試合はもう終わってて、僕は病院に運ばれたってことだ。試合の勝敗は分からないけど、まあ、勝ったってことはないだろうね。

……ホンツツツ、情けないなあ。

記憶が飛ぶようなやられ方して、病院に担ぎ込まれるとか。

いくら相手が弱くないって言っても、アレだけ体格差のある相手だったのに。

もしも、あの試合がトーナメントじゃなくて、ワンマッチだったら、いや、トーナメントでも、せめてブンカートの前に川神と当たってたなら。

右腕が十分に動いて、戦略の幅が広がって、勝つことができたんじゃないだろうか。

絞めるなり極めるなり、殴るなり蹴るなり、好きなようにして。

いや、そんな意味のないことを今さら考えても仕方ない。

もしものことを考えたって、結果が変わったりはしない。

僕はそれを、今までの人生で嫌ってほど実感してきた。

だから僕は、素直に結果を受け入れるしかないんだよ。

どれだけ悔しくても、どれだけ納得いかなくても。過去に起きたことだけは、絶対に変えられないんだから。

つと、いけないいけない。

今はとりあえず、現状を把握するんだった。

目を覚ましたのはいいけど、どれくらい寝てたかもわからないんだよなあ。

何年も意識不明ってことはないだろうけど、正確な日数は分からない。

まあ、爪の痛みがあるってことは、大した時間は経ってないだろうけどね。

にしても、この病院はどここの病院なんだろう？

この辺だったら、葵紋病院か、不死川に連れてってもらったところかなあ。

それなりに重傷みたいだし、そこらの診療所ってことはないでしょ。それと、コレだけのスペースが確保されてるんだから、保健室ってこともない。

……いや、ちよつと待てよ。

僕って、添え木をしなきゃいけないほど右腕痛めてるんだよね？

しかも、奥が場一本無くなっちゃうくらいの打撃を顔に受けてたはずだよな？

そういつときつてさ、普通、点滴しとくもんじゃないの？

ココに運ばれた時には、頭をガンガン打ってたって連絡もあつたらうし。

少なくとも、脳の腫れを防ぐための薬を投薬してなきゃおかしい。こんな個室をパツと開けられる病院が、そんな初步の処置を忘れるはずがない。

むしろ、そういう処置を意図してやらなかったって考える方が自然だ。

まあ、結果として、そういう点滴打たれてないのはイイんだよ。

ステロイドに詳しくはないんだけどさ、薬にも飲み合わせってあるじゃん。

それと同じで、ステロイド服用中には使っちゃいけない薬があるんだよ。

今でこそ服用はしてないけど、ついこの間までドーピングしてたからさ。

こう、ヘタな薬打たれると、変な作用を起こしてコロツと死ぬかもしれないからね。

何が言いたいかって、今の状況が変だってことなんだよ。

まるで、僕がドーピングしてるのを知ってるみたいな処置の仕方。

いくら体格が急激に変化したからって、ステロイドのことは誰にも話してないのに。

それなのに、事情を知らない人が、こんな処置の仕方をするはずがない。

っていうことは。

僕の処置をしたのは、僕がドーピングしてるのを知ってる人で。

なおかつ、医師免許を持ってて、ココまでの処置ができる人ってことになる。

その条件に該当する人を、僕は1人しか知らない。

そこまで考えたところで。

「さあて、そろそろ目を覚ました頃かなーっと」

なんて、その唯一の人間の声を耳にして。

僕は、この場から1歩も動けそうにない自分を呪った。

その体には似合っていない、見るからに科学者って感じの、裾の長い白衣を羽織ってた。

「おはよう、ミチヒロくん。心地よく目覚められたかしら？」

不敵な笑みを浮かべながら、足を組んでパイプイスに座った女性は、従姉の真弓姉さん……浅井製薬研究員、浅井あさい真弓まゆみだった。

……じゃなくて、なんでココにいるんだよチクショオオオオ！

こないだの手紙で、しばらくアメリカから帰ってこないってたじやん！

最新の人工骨の開発で忙しいってたじやん！

嘘つき！ 真弓姉さんの嘘つき！

「おはようございます、真弓姉さん」

とりあえず、冷静を装って挨拶を返すけど……やべえよ、やべえよ。なんで俺が動けないときに来やがったんだよ、このマッドサイエンティスト。

あんなに嬉しそうな顔しながら、コッチ見てくるんじゃないやねえよ。

「何よ？ そんなに警戒しなくなっただっていいじゃない」

「鏡見てみるとイイですよ。同じこと言えなくなりますから」

そんな顔されながら距離詰められたら、誰だって警戒するわ。

相手が浅井真弓とくれば、笑顔じゃなくなつて警戒するけどね。

いやいや、親戚なんだけどさ、油断できないんだって。

昔の話だけどさ、この人、同級生実験台にしてたんだよ？

同じ学校の人間を捕まえて、自前の研究室の中に引きずり込んでそんな相手が目の前にいて、警戒しないはずがないでしょ。

まあ、そんなクレイジーな人が目の前にいるんだけど。

焦って状況を悪くするより、1つずつ問題を解決していかないと。

じゃないと、今みたいに頭がガンガンするような状態じゃ、考えがまとまらない。

まずは……目下、1番簡単に解決できる問題に当たろうか。

「ところで、真弓姉さん。どうして川神にいるんですか？」

「んー？ ちょっとデカイクライアントから呼び出されてねー。

面白そうな計画だったから、人工骨の研究放り出して、日本に戻ってきちゃった」

そついう業務上の話をするのはどうかと思うけど……面白そうな計画ねえ。

この人の言うところの面白いってのは、つまりマッドってことだ。普通の人間が普通に生きてたら、絶対に関わることがないってことだ。

しかも、最終的に人類のためになるとしても、必ず批判されるような、そついうの。

なにはともあれ、僕の体をイジくりに来たんじゃなくて良かった。

昔っから、事あるごとに『無敵の肉体が欲しくない?』とか聞く人だったもんなあ。

コレで少しは、安心して話を進められるってもんだ。

そんな僕の心境なんてガン無視して。

真弓姉さんは、楽しそうに話を続けてる。

……業務内容に関わる話は、そう簡単にするもんじゃないんだけどなあ。

「面白いわよ〜！ 人間の潜在能力を引き出すプロジェクトなんだから！」

かなり昔に作った加速神経を改良したものが、ようやく試せるってもんよ！」

なんとまあ、予想通りにロクでもない計画だね。

潜在能力つつても、どこまでやるつもりやら。

また、神経細胞入れ替えたり、筋肉を張り付け直したりするのかなあ。

それかもう、脳の方までイジちゃって、リミッター壊しちゃうとか。どう転んでも、まともな実験にはならないだろうけど。

オマケに、自分の研究成果を試す気満々だ。

この辺は昔っからなんだけど、それを大きなプロジェクトで試すのはちょっとね。

その『加速神経』だって、脳の処理が追いつかないからって理由で投げ出したのに。

そういう致命的な欠陥のある研究を、いったいどこで生かすつもりなのか。

まあ、それはそれ、真弓姉さんと研究チームの勝手か。

「それに、昔の偉人の遺伝子を使った……何よ？ 文句あるの？」

「いえ、コレっぽっちもないです」

表情がどうだったにしても、僕に文句はない。

誰だって、自分の能力を最大限に生かせる機会があれば、そりゃ嬉しいだろうし。

いち人間の真弓姉さんにも、同じように喜ぶなっことは言えない。

……賢すぎるんだよ、真弓姉さん。

自分で天才ってよく言ってるけど、それを誰も否定できないくらいだから、並大抵の仕事じゃ、真弓姉さんの頭を生かし切れない。

他の人が必死に考えてることを、数分で解決しちゃう。

それだけ賢いと、頭を使う分野ですることがなくなるらしい。

それでも、知的好奇心だけは育っていつて。

何か新しい問題を、もっと知識欲を刺激されるものを。

そうやって求めていくうちに、結局、ほとんどの問題が自分以下だつて分かって。

仕方がないから、自分で難しい問題を生み出して、それを解決してるんだよ。

その問題っていうのは、人類の進化とか、既存理論の崩壊とかイロイロだけだ。

そういうことをしてる真弓姉さんは、本当に楽しそうにしてるから。それを止める権利は、僕にはない。

まあ、長ったらしくなったけど。
要するに、僕に無関係なら何でもイイってことだ。

――
――

そのあと、真弓姉さんのプロジェクトの話が延々と続いた。
やれ『バイオロジカル・ブースター』だの、『チャンネル・クローザ』
だの。

よく分からない単語を、ひたすら矢継ぎ早に聞かされた。

まあ『武士道プラン』とか言うのが、少し気になったけど。

少し聞こうとしただけで無限に話しそうだったから、ずっと口を閉
じてた。

……時計がないから分からないけど、延々と、1時間以上は。

まあ、真弓姉さんも、話したいただけ話して満足したのか。

やっと、僕のことについての話に、内容をシフトしてくれた。

さんざん自分勝手に話しておいて、やっとのやっとで。

「ところでミチヒロくん、不気味なくらいボロボロになったわね」

「自分で見たわけじゃないんで、あんまり実感わかりませんがね」

「鏡見たら、嫌でも実感するわよ？ どう？ 持ってくる？」

「はっはっは……結構マジに、遠慮しときます」

しかも、よりによって怪我の話題とかね。

もうちょっと、僕のことを気遣った発言をして欲しかった。

だいたいさ、鏡なんて見なくても、本当は十分に実感してるから。体中がコレでもかかってくらい痛いんだから、見るまでもないよ。

これ以上決定的なものを突き付けられるのは、ちよっと勘弁。

まあ、それはともかく。

今の会話で分かったけど、そう長い間寝たわけじゃないらしい。

どんなに長くても、1日行ってるかどうかって感じ。

怪我の具合から逆算しても、せいぜいが半日くらい。

……窓側のカーテンが開いてれば、外の様子で時間が分かるんだけどなあ。

「相手の子も、結構な怪我らしいわよ？」

骨折と打ち身、捻挫やってて、合わせて全治2ヶ月ですって」

記憶はないけど、それだけ怪我を負わせられたのか。

打ち身は、まあ、最初にラッシュかけた時の分かなあ。

捻挫っていうのは、川神が勝手に足首でも捻じったんだと思う。

骨折は……コレは記憶にないけど、関節技じゃないでしょ。

打撃当ててるうちに、どっかでヒビでも入れてたのか。

まあ、川神の怪我の具合なんてどうでもイイ。

それよりも、今は、自分の怪我を知っておくほうが有益だ。

「で、僕は全治どれくらいなんですか？」

「骨折がないから、せいぜい1ヶ月くらいじゃないかしら。

まあ、私に任せてくれれば、2週間でバッチリ治してあげるわよ」？

「真弓姉さんに頼むかは、ちょっと考えさせてもらいますよ」

うん、腕が折れてないのはよかった。

利き腕が右だから、動かないと生活にすごく困るからね。

今日明日に右腕が治るってことはないだろうけど、折れてないならイイや。

1ヶ月かかるっていうのも、たぶん、爪が生えるまでの分だろうし。普段から鍛えておいたおかげで、軽傷で済んだってことにしようか。

「とりあえず、今は体を治すのに専念しておきなさい。

思ったより内臓にきてると思うから、しっかり休んでおくのよ」

「はい、そうさせてもらいます」

真弓姉さんの言う通りだ。

致命的な怪我でもないんだらうけど、生活には支障がある。

こうやって入院してる間にも、シッカリ体もたるんでくからなあ

いずれにしたって、まずは怪我を治さないと始まらない。
多少だったら変な薬使われてもイイから、急いで治さなきゃ。
じゃないと、心を抱きしめることもできやしない。

そんな僕の、煩惱が入り始めた心中を察したのか。
真弓姉さんは、意地の悪い笑顔を浮かべた。
何かを隠していて、サプライズでもかますような。
ガキの頃に何度か見た、そういう笑顔を浮かべた。

ああ、そうそう。

僕が入院してる間、誰も見舞いに来なかった。

……っていうのも『臭うし不潔だから』って理由で、面会謝絶って
扱いになってて。
けっこういろんな人が、連日、病院にまでは来てくれてたらしいけど。

僕の部屋までたどり着けずに、サクッと追い返されてたからだった
みたい。

そんな、真弓姉さんの余計な気遣いを僕が知ったのは。

歩いて病院から出られるようになった、1週間後のことだった。
……ないがしろにされてたわけじゃなくて、本当によかったよ。

閑話『ブラックホールの優雅な日常』（後書き）

霞ヶ浦、ファイツ！ オオー！

……はい、分らないですね。

それはさておき、前回強制終了したワンコ戦。

当の主人公は、こんなことになっておりました。

怪我こそ少ないですが、それなりにダメージを受けています。

今回は、今後につなぐための話になりました。

いずれ出すキャラクターの紹介も兼ねております。

うーむ……浅井真弓………分かる方、いらっしやるのでしょうか？

一応、オリジナルキャラとは違いますが、エアマスターのキャラでもありません。

なお、この作品に関係したキャラクターが他に出てくることはないということ、ココに明言しておきます。

200万hit記念『天使たちの日曜日（前編）』（前書き）

皆さまに御愛顧いただき、ついに200万アクセスを超えることができました。

この場を借りまして、心よりお詫び申し上げます。

つきましては、私自身の気分転換も兼ね、特別編を数話書かせていただこうと思います。

連載している話と繋がってはいますので、その点にはご留意いただきたく思います。

また、本特別編は3人称視点で書いていきます。

少々文章が拙くなってしまうかもしれませんが、ご容赦ください。

川神市は、決して狭い市ではない。

人口もさることながら、土地面積もそれなりである。

しかし、正常に発展しているのは、中心部やビル街の周りが主であり。

そこから少し外れると、工業地帯や、中途半端な住宅街にたどり着く。

そんな中途半端な住宅地の一角に、月雄荘は居を構えていた。

安アパート、月雄荘。

家賃は月1万5000円の、そこそこの広さのワンルーム。

敷金礼金は、管理人の気分や懷事情によって大きく増減。

冷暖房完備ではないものの、管理人に許可を取ればエアコンも設置可能。

火事で全焼してから建て直しているの、建物自体は非常に新しい。住みにくい土地でなければ、倍以上は家賃が取れる物件である。

ちなみに月雄荘が、どのくらい住みにくい場所にあるかという点。

最寄りのスーパーまで歩いて10分と少し、コンビニなら30分。

もっとも近い公共交通機関は電車で、そこまで徒歩で15分ほどかかる。

新聞と牛乳こそ配達してくれるが、ピザの配達はできないエリア。

ハッキリ言って、そこらへんの田舎並みの暮らしにくさを体現して

いるのだ。
売れ残った建て売り住宅が目立つのも、そういった事情があるから
に違いない。

「ココが、ミチヒロさんが住んでらっしゃる……」

「ええ、間違いないわ」

時刻は昼前、だいたい10時前後。

件の安アパートの前に、純白の制服をまとった2人の少女が立ち尽くしていた。

1人は、ビニール袋を肘にかけ、抱きかかえるようにして日本刀を携え。

もう1人は、両手を体の前で組み、そうやって大きなエコバッグを持っている。

「ココの204号室に住んでるそうよ」

布袋を持った少女・武蔵小杉が、刀を持った少女・黛由紀江に呟いた。

本来であれば、こんな安アパートには1ミリも用がない2人である。加えて、黛に至っては、月雄荘の場所さえ知らなかつたくらいだ。だが、今回、彼女たちには確固とした目的があり。

こうして十分な道具まで用意してきて、ココまでやってきた。

つい昨日のことなのだが。

川神ランキングという名の、校内格闘ランキングの試合が行われた。しかも、通常のワンマッチではなく、トーナメントという変則ルール。

高校生には厳しい、最大で1日3試合の異種格闘技戦が、校内で堂々と行われていた。

その試合で、彼女らの先輩に当たる『港三千尋』という男が怪我を負った。

頭を8針縫って、左手の指2本を亜脱臼、右腕に重度の打撲、軽度の脳震盪。

自分で噛みちぎったせいで、左手の親指以外の爪が足りていない。骨にヒビこそ入っていなかったものの、右腕にも手酷い打撲を受けている。

彼の怪我を大雑把に示すと、それだけのものとなり。

意識が戻ったばかりということもあって、今はまだ入院している。

まあ、前までの試合で相手に負わせた怪我を考えたら、軽いモノである。

顔を陥没させて、肺を絞め上げて気絶させて、相手の肋骨を4本へし折ってる。

いくら格闘技とは言え、高校生の戦いとは思えない規模の怪我を負わせている。

因果応報という言葉を持ち出すのなら、彼の怪我はむしろ安いからいだろう。

「204……ということは、2階ですね」

「まあ、1階ってことはないと思うけど」

とにかく、港三千尋は家に帰れる状況でなかった。

というよりも、昨日の夜に意識を取り戻したばかりなのだ。

怪我の大きさも考えたら、とてもではないが帰宅できる状態ではない。

そこで、武蔵小杉は考えた。

もしかしたら、コレはアピールのチャンスなのではないかと。

彼女が調べた限りでは、港は人並みには清潔を気にする男である。

あぶらとり紙、フェイシャルシート、制汗スプレー、香水。

そのあたりの道具を常に持ち歩き、清潔感を保つことに苦心している。

ということとは、常日頃から部屋の清掃などにも気を遣っているはずである。

きつと、朝のうちに洗濯物を干して、炊飯器のスイッチも押ししてしまっている。

つまり、何日も家を空けると、最悪な状況が待っているのだ。

ジャーの中の米はカチカチ、洗濯物は汚れ放題。

洗濯機で汚れものが洗われていようものなら、カビが生えててもおかしくない。

そういったものを片付ける手間も、病み上がりには響くことだろう。

だからこそ、今のうちに彼女が処理してしまおうということだ。そうすれば、港が家に帰って来たとき、余計な労力を使わずに済む。本来あるべき仕事が付いていたら、それをした人間に彼も感謝することだろう。

そう、武蔵小杉に感謝して、多少は評価を改めてくれるはず。好きとまでは言わずとも『気の利いた奴』と評価を改めるに違いない。

そういつた含みがあつて、武蔵小杉は月雄荘に足を運んだというわけだ。

「それにしても小杉さん、よく場所が分かりましたね」

「あー……スナイパー空手の師範もココに住んでるのよ。部屋番号とかは、さすがに調べなきゃ分からなかったけど」

やや犯罪めいたセリフがあつたりもするが、熱意だけは、十分に評価すべき点かもしれない。

「じゃあ、そろそろ行くわよ」

「も、もうですか！？ もう少し呼吸を整えてから……」

「さつきから何回深呼吸してるのよ。もう十分でしょ？」

ちなみに、どうして黛を連れて来たのかという点。

いくら先輩が住んでいる住居とはいえ、見も知らぬ場所である。

どんな人がどれくらいいて、どれほどの治安が維持されているのか。そのような細かい情報が分からないまま、1人で行くのが不安だったのだ。

だから、黨を同行させたというわけだ。

複数で会いに行くことの安心感と、彼女の腕っ節を頼りにして。

例えば、月雄荘が危険な場所だとしても、彼女が1人いれば事足りる。

日本刀を超高速で操る人間より危ない者というのも、そうはいないだろう。

とにかく、そのような理由から、彼女は黨由紀江を連れて来たのである。

「ほら、さっさと行くわよ！」

「うう……」

眉根を寄せながら、武蔵に急かされてアパートに入っていく黨。

その姿は、見る者からしたら微笑ましい光景だったことだろう。

少なくとも、望遠レンズで彼女らを覗いていた、スナイパー空手の創始者などには。

しかし、そんな微笑ましさとは無関係に。

彼女たちが様々な体験をするまで、もう、大した時間は残されていない。

月雄荘、204号室前。

深緑のペンキで染められた扉の、ちょうど前。

美少女と呼んで差支えない2人は、立派な不審者に成り変っていた。

「だ、大丈夫なんですか、小杉さん？」

「もうちょっとだから……うん、もうちょっとだから」

「難しいようでしたら、私が錠を斬りますけど……」

「集中できないから、ちょっと黙ってて」

扉の前でしゃがみ込む、武蔵小杉。

その武蔵小杉を隠すようにして立つ、黛由紀江。
カチャカチャと響いてくる金属音は、扉に何かしていることを臭わせている。

……端的に言ってしまうえば、ピッキング中なのである。

当たり前だが、彼女たちは港の部屋の鍵を持っていない。だから、管理人室で鍵を借りに行く予定だったのだが。運が悪かったのか、ちょうど管理人室には誰もいなかった。

それでもって、今日の武蔵小杉は用意周到だった。

管理人が鍵を貸してくれなかった場合を想定し、ピッキングの道具を持ってきていた。

どうしてそんな道具を用意できたのか、そもそもピッキングができるのか？

その辺の事情を置いてきぼりにして、彼女は準備が良かった。

ともかく、武蔵小杉がピッキングを開始して2分30秒。

この倍くらいの時間があれば、とうに扉が開いている。

そういうタイミングで、彼女たちの上から声が降ってきた。

「おい、オマエら。何やってんだ？」

彼女たちに声をかけたのは、肉の壁だった。

人間ではなく、肉で作られた話す壁。

距離が近いのもあったが、そうにしが見えなかった。

港並みか、それ以上に高い身長。

パツと見ただけで分かるほどの、重厚で硬い腕。

太く重たそうな胴体に、丸太を思わせるような力強い足。

さらに、その体に見合った、堂々とした態度が顔に滲み出ている。

そして何より、刀を持った人間を見ても、一ミリも動揺しない精神力。

いずれの要素を以ってしても、常人とは言い難い。

彼、駒田こまだ シゲオとは、そんな男であった。

「いえ、その、あのですね、私たち、ミチヒロさんの後輩でして……」

「その後輩が、白昼堂々ピッキングか？」

より彼に近かった黛が応対しようとしていたが、無駄に終わる。

もとよりコミュニケーションが不得手な彼女だ。

初対面の相手を上手くあしらうなどという、そんな高等技術は望めない。

それどころか、中途半端な説明のせいで、駒田の眉間に皺が寄せられた。

「あのあの、そうじゃなくて鍵が……」

「鍵が開いてなかったから、ピッキングか？」

黛が何を言おうと、駒田の追及は緩まない。もし不審者であったなら、このままブチのめす。そんな意思を瞳に秘めながら、惘然とした態度で彼女たちを見据える。

まっすぐ過ぎる視線を受けてしまった黛は、ただただ慌てるしかない。

仮に、駒田が攻撃を仕掛けてきたとして。

黛由紀江なら、恐らく捌くことができるだろう。

しかし、外見からも分かるほどの圧倒的なパワーで攻められたら。単にパワーだけでなく、ある程度の技量を持ち合わせた相手だったら。

最終的な結果はともかくとして、どちらも無事では済まないだろう。

そのことについて、どちらも分かっている。

分かっているが……そこからの考え方が、互い違いになっている。

駒田は、それを知りながら戦おうとしている。

黛は、それを知っているからこそ戦いを避けようとしている。

そのような食い違いがあるからこそ、辛うじて戦いが始まっていないのだが。

急激に張りつめた空気が、それも時間の問題だと告げていた。

「はい、そうなんです」

そんな一触即発の雰囲気の中。

武蔵がピッキングをやめて、言葉を返す。

いきなり何を言い出すのかと、顔をしかめたのは黛のみ。駒田はというと、黛から武蔵へと視線を移しただけである。視線に秘められた強い敵意は、まったく変化していない。しかし、黛とは違い、武蔵は笑顔を崩さずに返してみせた。

「着替えを持ってくるように頼まれたのですが、鍵を受け取り忘れてしまして……」

しれっと嘘をついたが、表情には動揺の1つもない。ガクト並みの質量を持つ相手の視線を受けても、少しも揺らがない。

そんな武蔵を見て、駒田は何を思ったのか。

2拍程度の間を置いてから、ジーンズのポケットに手を突っ込み。表面の削り具合が粗めの、安っぽい金属でできた合鍵を取り出した。

「なら、コレで開けて入れ。鍵は……101の荷物受けに入れておいてくれ」

「あ、どうもありがとうございます」

ピッキングの道具を手早く鞆にしまいこみ、武蔵は鍵を受け取る。あうあう言ってるだけの黛とは、えらい違いだ。この辺りのアドリブの巧拙が、コミュニケーション能力の差になって表れているのだろう。

せっかく休日を潰してついでにきた黛由紀江は、コレといって役に立

っていなかった。

そうやって、自分の無能を黛が噛みしめているところで。

誰もいないはずの204号室の扉が、勢いよく内側から開かれた。

『ゴフツ！』つと、乙女らしからぬ悲鳴を上げる武蔵。

『わっ！』つと、悲鳴を上げながらも、見事に扉を避ける黛。

扉の可動範囲外にいた駒田だけが、平然とそこに立っていた。

「おい駒田！ テメエ、ちよつとは加減しろよ！

ウチ相手に30連勝もしてんだから、1回くらい負けるって！」

扉の中から出てきた少女は、怒鳴り声と一緒に不満をぶちまけた。

太ももが大きく露出した短パンに、肩が丸見えのタンクトップ。

靴下をはいていないため、服らしい服はその2つだけである。

ツインテールの根元に髪留めをしているが、身につけてるものは全部でそれだけ。

歳こそ幼くはあるが、少しばかり煽情的に過ぎる服装だ。

板垣いたがき 天使は、えんじえる 今日も他人の部屋でゲームしてたようだ。

「俺の操るアキオは最強のファイターだ。

わざとであったとしても、負けることは許されん」

「あー、もう！ オマエの事情なんか聞いてねえんだって！
連勝の表示がカンストしてバグっぽくなってんだから、もう充分
だろ！？」

鼻を抑えて下を向いている、武蔵小杉は別として。

肉体的に無事だった黛由紀江は、精神にダメージを受けていた。

204号室は、今さっき、彼女たちが扉を開こうとしていた部屋。
誰もいないと思い込んでいた、港三千尋が住んでいるアパートの部
屋。

その中から、かなり可愛らしい、きわどい格好をした少女が出てき
たのだ。

しかも、自分の部屋から出てくるような勢いで。

黛由紀江の頭の中に、閃光のように様々な想像が飛び交う。

二股、愛人、通い妻、ハーレム、妹キャラ、爛れた関係。

そんな犯罪めいた単語の羅列に加えて、淫らな妄想が混じってくる。
具体的には表記できないが、R-18タグがなくなっくらの妄想で
ある。

彼女の顔は、あっという間に茹でダコのような色に変わっていた。

「あのあの、その……」

「あん？ 誰だテメエ？ 死ぬか？ 頭だけ350ヤード向こうに
ブツ飛ばすか？」

とにかく声をかけようとした黛を、下から睨みあげる板垣天使。

いかなる理由か、不機嫌も重なって、殺気が丸出しになっていた。もちろん、それを受け流すだけの余裕は黛にはなく。ジリジリと距離を詰められては、ジワジワと交代するという構図が出来上がっている。

「待て待て！ ソイツらは港の後輩だ！」

そんな2人の間に、ずいっと駒田が割って入った。彼ほどの肉が間に入ってくると、さすがに天使もやり辛いらしい。ちよつとばかり後ずさり、軽く舌打ちをかまして。大きな溜め息をついてから、腰に手をあてて、ダルそうに口を開いた。

「んだよ、つまんねーな。空き巣とかだったらブツ殺してやろうと思ったのに」

可愛い顔して、言うことはエゲつない。ブツ殺すという言葉も、どうやらかなり言い慣れてるらしい。元の言葉遣いの汚さも含めて、あまり育ちが良いようには思えない。もっとも、彼女の育ちは、善し悪し以前の問題であるが。

「ちよつと買い物に行ってくるが……揉め事を起こすんじゃないぞ」
「はいはい、分かった分かった」

不安そうに天使を見ていた駒田は、結局、覚悟を決めて買い物に行

くことにした。

本来であれば、年長者の彼がキッチリと3人を引き離さねばならなかったのだが。

武蔵と薫が港の後輩であり、天使とそんなに年齢が離れてるように見えなかったから。

だから、そんなに大きなトラブルにはならないだろうと断定し、私用を優先した。

……唇食のオカズくらい、後で買いに行けばいいと思わなかったらしい。

もともと月雄荘には、そういうことに無頓着な連中が多いのかもしれない。

――
――
――

駒田が階段を踏む音が、まだ鳴り止まないが。

それでも無情に時間は過ぎてゆき、彼女らの状況も進展する。

そんな状況の中で、先に口を開いたのは天使だった。

もともと社交的であり、気負うところがなかったからだろうか。

なれなれしい言葉であったが、それでも、無言よりはよかつただろう。

「ふーん、ミッチーの後輩かあ」

「えーっと、はい、ミチヒロさんの後輩です」

なかなか鼻のダメージが抜けない武蔵に代わり、黛が答えた。顔は真っ赤で目も回っているが、それなりの返事は出来るらしい。もともと、聞かれれば答えを返すだけであり、そこに思慮や警戒はない。

今の彼女だったら、何を聞かれても正直に話してしまうことだろう。気が動転している彼女に、マトモな判断など望むべくもない。

「……ま、いいや。せっかく来たんだし、ちょっと上がってけよ」

「はい、それじゃあ、お邪魔しますね」

特に表情を見せず、黛を家へと促す天使。

どうして天使が部屋の中にいたのか、自分が何をしに来たのか。そういったこと的一切合財を忘れて、黛は、吸い込まれるように部屋に入ってしまった。

武蔵小杉が豪快に扉をノックしたのは、40秒後のことである。

200万hit記念『天使たちの日曜日（前編）』（後書き）

とりあえず、出だしはこんな感じになりました。

話としては、段々尻すぼみになってしまっ、我ながら申し訳ないです。

エアマスターとマジ恋キャラの絡みを、少しずつ出していく予定です。

上手く書ける自信はありませんが……頑張って行きますよー！

200万hit記念『天使たちの日曜日（中編）』（前書き）

まだまだ続きます。

今回も3人称視点です。

とても高校生男子の部屋には見えない。

それが、武蔵小杉と、黛由紀江の率直な感想だった。

緑色オンスリーのシンプルなカーテンに、フカフカした感触が心地よいカーペット。

1人暮らしには大きすぎる薄型TVに、大して高くもないDVDデッキ。

FAX機能が付いている電話と、折り畳めるタイプの小さなテーブル。

港が寝てもまだ余裕がありそうな、かなり大きめのシングルベッド。それと、家庭用ゲーム機が数点転がっている。

そこまでは、まあ、妙というほどでもなかったが。

問題は、それ以外の部分に残っていた。

まず、タンスの上やベッドの隣に鎮座している、複数のぬいぐるみ。『まるにゃんこ』という名前の、女子中高生に大人気のマスコットである。

当然だが、180cm台前半の男子高校生の部屋に置いてあることは稀だ。

そんなぬいぐるみが、部屋中にゴロゴロしてる。

さらに、まるでやんこの隣に柔術着が干してあったり。

玄関の扉の内側に、鞘に収まったサバイバルナイフが張り付けてあったり。

部屋の隅に、精米前の米袋が4つも重ねてあったり。

折り畳み式の腹筋台には、帯でくくった道着が引っ掛けてあったり。どういふ人間が住んでる部屋かも分からないような、そんな部屋だった。

余談だが、目に見える場所に、いかがわしいグッズは一切ない。

「いやあ、飯まで作ってもらっちゃって悪いな！」

「いえいえ、気にしないでください」

そんな不可思議な部屋のテーブルを囲んで。

3人の少女たちが、賑やかに食事をしていた。

食卓に並んでいるメニューも、なかなか豪華である。

豚しょうが焼き、唐揚げ、キュウリの浅漬け、大根サラダ、豆腐の味噌汁。

女子高生が食べるにはオッサン臭いメニューだったが、手もかかるものばかりだ。

下味をつけるのが面倒なモノもあり、普通だったらすぐに準備できるものではない。

だが、それを準備してのけたのが、黛由紀江だった。

出来合いの調味料や料理酒などをフル活用して、ココまで成し遂げたのである。

豚しょうが焼きは、一緒に炒めたしょうがを添えることで味を誤魔化して。

キュウリの浅漬けは、冷蔵庫の中にあつた浅漬けのもとで急いで揉んだ。

唐揚げだけは、すでに味付けまで済んだものが冷蔵庫に眠っていたのだが。

とりあえず、それらの全てを調理したのは、彼女の功績と言えるだろう。

その間、武蔵小杉は部屋の掃除に努めていた。

男子高校生らしく適度に汚れた部屋なので、掃除するところはたくさんあつた。

薄型TVの裏や、机やベッドの下、まるでゃんこの置いてあるスペース。

大きな汚れこそないものの、ホコリが被っているような場所もあつた。

そういつた場所を、ホコリが飛ばないように注意しながら掃除していたのだ。

家主のように振舞っていた天使が、一番仕事をしていなかったが。彼女の性格を早々に理解した2人は、決してツッコミはしなかった。

「なあなあ、明日からも作りに来ねえ？ ミッチーが退院するまででイイからさ」

最後の唐揚げを飲み込んでから、天使が楽しそうに口にした。

1日漬り込んであつた唐揚げの味は、なかなかのものだったらしい。

どう見ても3人以上の量があったのだが、彼女だけで半分平らげてしまった。

黛が作ったものではないのだが、天使からすれば同じことのようにだ。

「えーっと、毎日は難しいですけど、お夕飯だけでしたら」

褒められた黛としては、どちらであっても嫌な気はしない。

彼女が作った豚しょうが焼きも、天使はベタ褒めしてくれていたのだ。

『うまい』『いける』しか言ってなかったが、それでも気持ちは伝わった。

そんな言葉よりも、彼女の笑顔の方が雄弁だったことは言うまでもない。

「うーん……プレミアムな食材じゃないのに、美味しく作るじゃない」

意外というべきか、武蔵小杉も舌鼓を打っていた。

彼女の言っているように、使われている食材は特別なものではない。豚しょうが焼きも肩肉であったし、唐揚げも鳥胸肉と安い食材ばかりだった。

それでもココまで美味しく料理を作れる黛に、素直に驚いたらしい。

「あ、天ちゃん、お茶のお代わりいかがですか？」

「ん、冷えたの飲みたいから、麦茶でイイヤ」

「薫さん、お茶、私にもらえる？」

もう食後の茶にまで差し掛かっていたが。

旨いメシのおかげか、すでに3人は打ち解けていた。

ちょっとした世間話や、互いのことを簡単に話す程度には。

そういう話の中で、薫と武蔵にも、天使の素性が掴めてきた。

性は板垣で……名前に天が入っているらしい。

港三千尋の隣の部屋に入っている、月雄荘の住人の1人。

学校には通っておらず、現在はファミレスでアルバイト勤務。

土日にはゲームセンターにいたることが多く、日々、本能に従って生活している。

板垣天使というのは、彼女自身の話を総合すると、そういう少女ということになる。

港三千尋との関係は、親しくはあるものの、結局お隣さん。

薫が勘繰るものとは大きく離れていて、本当にただのお隣さんらしい。

少なくとも、天使の言ったことのみが全てなら、誰もがそう判断するだろう。

もっとも、天使が本当に全てを話したら、同じ印象を抱けないとは思うが。

「でも、ミッチーも結構やるよな。後輩2人も捕まえるとか、どんだけだよ」

「いえいえ。小杉さんはともかく、私は違いますよ？」

「私は……まあ、否定しないわ」

とにかく、彼女たちも年頃の女性。

小杉がココに来た理由も含めて考えれば、こういう話題になるのは必然だ。

TVにはワイドショーが流れているが、そんなものよりも面白い会話をしている。

なにせ、こんなにも身近にいる人間同士の、かなり浮ついた話なのだ。

少なくとも、黛と天使にはとっては面白い話である。

そんな浮いた話の中。

ふと、天使が飛んでもないことを言っただけだ。

「でもさ、ミッチーってスゲエ変態なのに、よく女だけで家に来れたよな」

「……は？」

「えーっと、確かに趣味が偏ってらっしゃいますが……」

スゲエ変態。

それが、どれくらいレベルの変態を指しているのか。

そう考えた時、黛と武蔵の頭の中に、港家での夏が思い出された。

ブルマやレオタード、スクール水着に傾倒したフェチズム。

後輩が家に来ているのに、自室とはいえ欲を処理する豪胆さ。

そして、中学時代から保存してあったブツを、何度も使用できる精神力。

そのあたりの要素を変態と斬って捨てるなら、確かに彼は変態だ。

しかし、そのくらいでは、スゲエ変態といわれるほどのものでもない。

ハイレベルな変態というのは、もっと度し難い行為に性的興奮を覚える者である。

例えば……好きな女の子の下着を食べる、もしくは、自ら着用する。盗んだ上履きをコピーして、その形を見て楽しむ。

さすがに、ココまで来るとスゲエ変態でも済まないのだが。

要するに、港の総合力くらいでは、大したことがないということだ。

「ま、知らねえんだッたら……面白いモン見せてやるよ」

悪魔のような笑顔を浮かべた天使は。

おもむろにクローゼットを開け、その中にある本棚へと手を伸ばす。もちろんというべきか、本棚の中身は本ではなく、余すことなくDVD。

そして、クローゼットの中に隠すようなDVDは、普通のそれとはまた違う。

成人指定のついた、ぶっちゃけアダルトDVDだった。

DVD観賞会が始まって、ようやく2時間が経って。

彼女たちの好奇心も満たされたのか、すでにDVDデッキは止まっていた。

6枚のDVDを飲み込んだデッキは、触ったならホカホカになっていることだろう。

「……なんていうか、ちょっとね」

「あー、分かる分かる。コレ見つけたとき、ウチも引いちゃったからよ」

「ミチヒロさん、よっぽどブルマやスクール水着がお好きなんですね」

しかし、部屋の中に充滿した、妙な空気だけは抜けていなかった。まあ、年頃の少女たちが、集団でそういうDVDを見ていたのだ。そういう雰囲気になってしまうのも、きつとやむを得ない。

天使だけはケロッとしているが、黛などは顔が真っ赤になっている。武蔵も顔は赤いが、ジャンルを覚えるためか、DVDに視線が釘付

けだった。

「しかもコレ、相手が年下の設定のヤツばっかだぜ？
ウチは大丈夫だけど、コスギとまゆっちは身の危険とか感じねえ
の？」

彼女の言うとおり、港の家にあったDVDの大半が、後輩をイメー
ジしたものだ。

当然のことかもしれないが、シチュエーションは高校生というもの
ばかり。

ともすれば、黛と武蔵の2人は、もう少し警戒心を増してもいいと
ころだ。

もし2人が、普通的女子高生だったら、そうなっていたのだろうが。
生憎とこの2人は、普通からは極めて縁遠い女子高生だった。

「もし突然に襲われたら、斬ってもよいと言われていますので」

「既成事実のチャンスだから」

2人とも、よどみなくスラスラと言つてのけた。

正直、どっちもどっちといった発言である。

程度はともあれ、常識では考えられない返答だ。

黛は、確かに斬つてよいという許可をもらっている。

1人は、彼女の父、黛十一段こと「まゆすみ黛たいせい大成」で。
もう1人は、港の祖父「みなと港みきひし美樹彦」である。

この2人の許可があれば、法はともかく倫理的には許されるかもし

れない。

ただしこの2人、厳密には、斬りたければ斬れと言っていたりする。つまり、彼女の気持ちに許せば、そのまま流れに任せてもよいということだ。

もとより古くから付き合いがあり、関係自体も良好だ。ともすれば、2人が結ばれても問題がないという考えなのだろう。

ちなみに武蔵小杉は完全に彼女の事情なので、割愛しておく。

そんなタイミングで鍵の掛っていない扉を開けたのは。合コンで『そこそこ』という評価を受けるくらいの美男子だった。

「天ちゃんゴメン！ ちょっとかくまってくれ！」

大きな瞳に、キリツとした目元に、形の整ったアゴ。顔だけ見れば、間違いなくハンサムの部類に入るに違いない。

しかし、もちろん顔だけでなく、スタイルも上々だ。

それなりに身長も高く、服の上からでも体が引き締まっているのが分かる。

ちよっとパツとしない雰囲気を持っているが、それでも見てくれは良い。

初対面であれば、かなりモテるタイプといったところか。
深道 ふかみち 信彦 のぶひこ を評価するなら、そんなところだろう。

「なんだよノブヒコ、また喧嘩か？」

「頼む！ 10分……いや、5分でイイんだ！」

冷汗をビッシリ掻きながら、返事も聞かずに部屋に踏み込んできた。よほど焦っているのか、彼の視界に天使以外の2人は入っていないかったらしい。

いや、気付いていてもなお、踏み込まざるを得ない状況なのかもしれない。

彼、ノブヒコは、部屋の一番奥まで入り込み、座らずに玄関を睨む構えこそ取っていないが、必死の形相と合わせて臨戦態勢だと分かる。

ということは、彼の焦りの原因が、ココに来る可能性があるということだ。

しかも、かなりの確率で、今すぐにでも。

「あの、コチラは？」

「あー、ノブヒコって……ミッチーの知り合い？」

「なんか『大道芸人』とかいう仕事やってるんだってさ」

武蔵の質問に、できるだけ詳しく答える天使。

そもそも、天使と信彦は口々に話もしたことがない。

いくら近所に住んでいるとは言っても、そのくらいの関係だ。

信彦に興味のない彼女からすれば、コレが精いっぱいの説明だろう。

当の信彦は、自己紹介をする余裕もない。

必死の形相で扉を睨み、敵の姿が見える前から油断を見せない。いまいちパツとしない雰囲気から、彼女たちには分からないかもしれないが。

仮にも、ストリートファイトのランキングで上位をキープしていた男である。

並みの人間相手だったら、小細工を使わずに瞬殺できる人間である。そんな彼が、逃げまどい、ココまで警戒するということは。相手も、相当の手練と考えて間違いない。

「おいコラ開ける！ ノブヒコがいるのは分かってんだぞ！」

『ヒッ！』という信彦に次いで、『お、開いてるー！』という女子の声が響く。

その声の後に、なんの遠慮もなく扉が開かれて。

そこから部屋に入ってきたのは、やはり、相当の手練だった。

「ノブヒコ！ もう逃げられ……」

見たところの年齢は、彼女たちよりもやや低いくらい。

まだまだ幼い顔つきからは、可愛らしさが溢れている。

だが、そんな顔についてる目は、生来の気の強さをアピールしていた。

ショートカットに加えて、ハーフパンツ、Ｔシャツというラフな格好。

このような格好からするに、かなり活発的な少女らしい。

自分で『天才美少女格闘家』と名乗るだけはある。
とにかく、佐伯みおりは、総じて目立つ人物だった。

しかし、そんな彼女の顔は、驚きのまま固まっている。
何を見てそうなったのか……彼女の視線をたどれば、すぐに分かる
ことだ。

きわどい格好であぐらをかいている、板垣天使。

視線がキツめだが相応に美人な、武蔵小杉。

物腰柔らかで全体的に女性的な、黛由紀江。

この4人がいたのも、原因の1つといえは1つである。

しかし、彼女たちの存在だけが、みおりの動きを止めているのでは
ない。

部屋に散乱している、20を超えるアダルトDVD。

その上、ジャンルがどうにも危険な感じである。

セーラー服、ブレザー、ブルマ、スクール水着、レオタード。

それに加えて『年下』とか『後輩』と銘打たれたモノもある。

制服を着た学生と思しき少女たちと、年下モノのアダルトDVD。

佐伯みおりの頭の中で、勘違いしたまま全てがつながった。

「うっ、浮気しておいて……女の子まで呼んで何考えてんのさ！
し、しかも……そんないかがわしいDVD並べて………サイッ
テー！」

「違うんだって！ みおりちゃん、まずは俺の話を聞いてから」

「うるさいうるさいうるさい！ 言い訳なんて聞きたくない！」

彼女たちの関係が、コレで分かったと思うが。

要するに、恋人同士なのである。

成人した男と、女子中学生。

色々と問題がありそうだが、そういうことらしい。

と、みおりを確認した天使は、素早く姿勢を低くした。

座ったまま前かがみになり、折り畳みテーブルよりも頭を低くする。かなり体が柔らかいが、それはともかく、なぜそうする必要があるのか？

なんとなくマネをしてみた薫と武蔵は、すぐにその理由を知ることになった。

みおりが、飛んだ。

跳んだのではなく、飛んだ。

狭い部屋の中なのに、重力を感じさせない跳躍で。

まるで、飛んでいるのが当然であるかのように、飛んだ。

彼女の飛んだ距離は、1 mや2 mではない。

月雄荘の部屋が広くないとはいえ、奥行きはそれなりにあるのだ。

なのに、玄関からベランダの前まで、ひとつ飛びで移動してしまっ
た。

もっとも薫には、途中で2度壁を蹴るというネタが見えていたが。そうであったとしても、明らかに常人離れをした動きだったことに
違いはない。

宙を舞ったみおりの両足が、左右から信彦の頭部に絡みついたように見えた。

蹴るのではなく、包み込むような柔らかな動きであったからだろう。しかも、ただ単に足を絡ませたわけではない。

信彦の頭部に足が触れた瞬間、みおりの体が反時計回りに回る。

頭部から順に、胸、胴、腰、脚と、順々に加速して。

最後の最後、全ての部位が生み出した速度が、足先へと伝わり。

一瞬で、信彦の頭部が弾けた……そう錯覚するほどの衝撃が生み出された。

エア・カット・ターミネーター。

『エアマスター』の名を持つ、彼女の姉の必殺技の1つ。

両足で挟んだ部位を強烈な勢いで振り解き、その部位を激しく揺さぶる技。

元は頭部のみを狙った技であったが、改良の末、腕や足にも有効なものとなった。

頭部に当たれば意識が奪われ、腕・足なら衝撃で神経が働かなくなる。

文字通りの『刈り取る者』^{ターミネーター}というわけだ。

そんな技をモロに受けた信彦は、やはり意識を刈り取られ。

力なく地面に両膝をついて、そのまま動かなくなった。

「バーカ！ ノブヒコなんて、そのまま死んじゃえ！」

見事、何も無い机の上に着地したみおりは。

すでに死んでいそうな信彦に吐き捨てて、外へと駆け出して行った。

もちろん、信彦の始末など1つとしてやらずに。
最初から最後まで、土足のままで。

信彦はというと、両膝を床についたまま天井を仰いでいる。
虚ろな目をしているのは、すっ飛んで行った精神が返って来ないか
ら。

ほんのり口の端からよだれが垂れているのも、口に力が入っていないからに違いない。

恐らく、軽く小突いた程度では、信彦の意識は戻らないだろう。
先ほどの技は、それほどまでに強力なものなのだ。

武蔵も黛も、あまりの事態に声すら出なかった。

そこそこカツコイイ男が、いきなり部屋に入ってきて。

それを追うようにして、彼女たちより幼そうな女の子が扉を開いて
女の子が、あつという間に男の意識を刈り飛ばして。

そしてそのまま、こんな状況を投げっぱなしにされてしまった。

現実とは、かくも容赦ないモノである。

強かろうが、初めてだろつが、女子高生だろつが。

どんな状況であろうと、分け隔てなく襲いかかってくる。

隠して、未だ、己の置かれた立場も理解できぬまま。

彼女たちの午後は、少しずつ短くなってゆく。

200万hit記念『天使たちの日曜日（中編）』（後書き）

…… エアマスターのキャラ紹介を兼ねているはずなのに、全然紹介できてない！

今のところ、前話と本話だけで3人……！

シゲオと、信彦と、みおりちゃんのみ……！

しかも、信彦は本編に出てるじゃないですか……！

次の話を使っても、そんなに沢山は出せなさそうです orz

大いに反省します orz

200万hit記念『天使たちの日曜日（後編）』（前書き）

ようやく最終話です。

あと2時間もすれば、夕方に差し掛かってしまう。

太陽はとつくに傾き始め、沈んでいくのを待つばかり。

夕日に向かって走るといふ青春は、まだまだ味わえそうにない。

であるのに、佐伯みおりは、涙を流しつつどこかへ駆けていった。

しかし、彼女の残して行つた結果は置いてかれたまま。

口を半開きにして、虚ろな目で天井を見上げている。

刀の鞘で強めについても目覚めないのだから、簡単に意識を取り戻したりはしないはず。

活を入れることも考えなくてはなかつたのだろうか、そこまでの義理も付き合いもない。

よって、彼、深道信彦は、ベランダに横倒しなつて放置されることとなつた。

「ま、そういうわけで、ミッチーの見舞いに行つても無駄だぜ」

「うーん……不死川先輩が言つてた通りみたいね」

「こちらにお邪魔して正解でしたね」

今、彼女たちは、共通の知り合いの話をしていた。より厳密に言うなら、共通の知り合いが置かれた状況の話を。

昨日、港三千尋が入院した当日。

板垣天使は、バイトを終えてから病院に直行した。

やたらとフリフリした衣装を着替えもせず、自転車で。

イロイロ見えたり見えなかつたりしたりするが、そんなことは二の次である。

部屋を貸したり食事を準備してくれる隣人が心配で、慌てに慌てたのだから。

しかし、病院についた彼女は、愕然とすることとなる。

まず、港三千尋が入院している病室を教えてくれなかったことに愕然とし。

次に、ようやく見つけた病室に『面会謝絶』という札が下がっていたことに愕然とした。

それでも、なんとか話くらいはしようと、健気に1時間以上待っていた彼女だったが。

途中、白衣にメガネという姿の女性に

「コスプレ自慢だったら、他でやってもらえるかしら？」

と言われ、場違いに過ぎる己の服装に愕然とした。

結局、人目を避けるために11時ごろまで駐輪場に身をひそめ。護身用にと消火器をパチって、目に涙を溜めながら月雄荘に帰還した。

というわけで、彼女の話は、妙に長くて要点を捕えていなかったが。要するに、今は、港に会いに行っても意味がないということだ。彼女の不用意さも強調される話だったが、それはそれ。優しい武蔵と黛は、そのあたりには気付かなかったことにした。

「そっぴやさ、そのフシカワって誰なんだよ？」

「ああ、ごめんなさい。不死川さんは、私たちの先輩で……」

そこまで言った黛が、ちらりと武蔵に視線を移す。

それはつまり、今から出す言葉が、武蔵の気に掛るかもしれないということだ。

その内容については、口に出すまでもなく武蔵にも伝わっている。だから、黛が何か言うよりも早く、彼女が続きを声に出した。

「港先輩が大好きな人の名前よ」

彼女の表情は、少しばかり固い。

自分だって港のことが好きなのに。

いや、ともすれば、不死川よりも彼女の方が、港のことを好んでいるかもしれないのに。

なのに、港の想いは、不死川心にも向けられている。

それが理不尽に思えるからこそ、彼女の表情も強張るのだ。

ところで、天使はどうなのか？

港と家族のように接していて、かつ、関係も良好。

歳も近いし、恋愛感情が芽生えていてもおかしくはない。

おかしくはないのだが……。

「ふーん。で、どんなカッコしてんだよ？ 写真とかねえの？」

彼女は、無関心もイイところだった。

恋だの愛だの、そんな感情を抱くほどでもないのか。

それとも、まだ彼女自身にそれほどの余裕がないのか。

いずれにしても、港が好きな相手というのに、興味しかないらしい。顔いっぱい好奇心を張り付けて、体全体でウキウキとした姿を見せた。

その姿に2人は少々戸惑うが、それも僅かなこと。

すぐに頭の中身を切り替えて、話題の表面をさらうことにした。

「私はちよつと……黛さん、ケータイとかに入ってない？」

とはいっても、知り合いとはいえ写真などそうそう持つてるはずもない。

いちいち記録を残すことに意義を感じない武蔵は、特にそうである。だから、彼女よりもケータイのカメラを使っている、黛に話題を振った。

「ありますよ。友達記念で1枚撮らせていただきました」

友達記念なるものに興味が湧かないでもないが、彼女たちはツッコ

まない。

とにかく、彼女のケータイには、不死川の写真が入っているらしい。カバンの中からゴソゴソとケータイを取り出すと、手慣れた様子でフォルダを開く。

写真を撮った日時のファイルを開き、天使に見えるように画面を向けた。

一言も口を利かない松風が、少し寂しそうに見えたのは気のせいだろう。

「お！ けっこう美人じゃね？」

ちよっと目えキツいし、なんで着物なのかワケ分かんねーけど。

目元について人のことを言えないはずの彼女は、ニヤケ顔のまま意見を伝えた。

なるほど、不死川心は間違いなく美人の部類に入る少女だ。

少なくとも、写真の中の彼女を見てブサイクという人間はいないはずだ。

大和撫子を地で行っている黛を隣にしても、その美しさに遜色はないのだから。

「はい、うぶやましいですよね」

「そういうこと黛さんが言つと、嫌みに聞こえるわよ」

「だよなー。胸もデケーし、正直うぶやましいぜ」

「いえいえ、私なんてまだまだ……」

「バスト、88cmだったかしら？ それでもまだ足りないの？」

「うっわー……デケエとは思ってたけど、タツ姉クラスかよ」

不死川の話だったのに、いつの間にか黛の胸の話になっている。

武蔵はともかく、胸に乏しい天使からすれば羨ましい話だろう。

彼女に比肩しうるバストサイズを誇る姉がいても、やはり羨ましいようだ。

なにせ、同じ遺伝子を持つてるはずの辰子は、彼女と同じ年の頃には豊満だったのだ。

自分の悲観的な将来像を思うと、やはり気に掛るらしい。

武蔵はというと、そのあたりのことは気にしていない。

スレンダーでもグラマーでもないが、均整のとれたイイ体つきをしている。

大和田を見てから少しばかり自信は揺らいたが、それでも自慢のスタイルである。

いくら黛が齒ぎしりするほど羨ましい体でも、表立って悔しがったりはしない。

と、扉が3回ノックされた。

部屋の中の扉でなく、玄関の金属製の扉が。

すでに港がないことは、月雄荘の誰もが知っているのに。

つまり、ノックの主が、彼女たちに用があつて来たということだ。

それに対して、天使が立ちあがつて扉を開けに行こうとしたが。

鍵が掛つていないことに気付いたのか、勝手に扉が開いた。

「おい、騒がしいぞ」

そう行つて扉を開けたのは、長身痩躯という言葉が似合う男だった。黒のチノパンに深緑のタンクトップ、そして、白髪だらけの頭をしている。

背丈は港並みに高いが、体の厚さは比べるべくもない。

ただひたすらに細く、細マッチョなどというものと比べても、なお細い。

最低限の筋肉さええないのではないかと、そういう心配をしてしまう体つきだ。

その中であつて、ギョロリと大きな目が際立っているが。

総じて不気味なオーラをまとっている彼……浦木には、ピッタリともいえるだろう。

そんな彼が、玄関にも入らず部屋の中を覗いている。

天使がいるのを視界に収め、続いて、黛、武蔵を認識する。

それと、ベランダには、よく見慣れた信彦がKOされたまま放つてある。

彼女らの外見と、港から聞いたことのある後輩の話。そのあたりを上手い具合に解釈して、彼女たちが何者かを把握しようだ。

「なるほど女子高生が3人もいれば、そりゃ姦しいか」

浦木は奇妙な言い回しで、彼女たちが騒がしかったことを指摘した。ボソボソとしゃべるようなトーンだったが、その声は耳に粘りついた。

確かに、彼女たちはうるさかったかもしれない。

そこそこ打ち解けて来たせいか、声を抑えることを忘れていたのだろう。

不死川の話にまで至ったあたりで、すでにかんりの音量だったようだ。

2つ隣の部屋にいる浦木にまで、声が聞こえていたというのは妙ではあるが。

もしかしたら、浦木は天使のことを心配して顔を出しに来ただけなのかもしれない。

「なあ、浦木。コイツ邪魔だから、外に持ってってくんね？」

挨拶もそこそこにして、天使は浦木に、信彦を始末するように要求する。

さつきから視界の端に信彦が映り、なんとなく落ち着かないらしい。なら最初の段階で、玄関の外に出しておけばよかったのだが。

「断る。そんなことにイチイチ俺が骨を折る必要はないからな」

「んだよ……じゃあ、何しに来たんだ？」

「騒がしいから注意しに来たんだ。」

楽しいお喋りも結構だが、俺の勉強の妨げにならない程度に抑えておけ」

それだけを伝えて、浦木は扉を閉めた。

来たからといって何をするわけでもない。

ただうるさかったということを伝え、帰ってしまった。

一言も口をきけなかった黛と武蔵は、そのまま静まり返っている。あまりに突然であったことと、浦木がすぐに帰ってしまったこと。そのせいで、口を開く間を失ってしまい、そのままになってしまった。

「あの、今の方は？」

「ミッチーの知り合いで、浦木ってヤツなんだけど……嫌いなんだよなー、アイツ」

感情を隠すようなくせのない天使ではあるが。

この時は、ここぞとばかりに嫌悪を滲ませていた。

「何かあつたら、すぐに『勉強』とか『偏差値』とか抜かしやがるよ。

オマケに『オマエらみたいなのがバカは嫌いだ』なんて言いやがったんだぜ？」

その言葉を聞いて、2人は納得がいった。

浦木と呼ばれる男が、学力で人を見るような人間なら。

天使は、浦木が好きなタイプとは正反対。

彼女自身が、浦木のような人間が嫌いといっているので大きな問題はないかもしれないが。

天使が勉強でも始めない限り、浦木と彼女が相成れることはないだろう。

余談だが、浦木と港はそこそ仲が良かったりする。

港は勉強ができるし、浦木は関節技ができる。

需要供給という点において、ピッタリ歯車が噛み合ったのかもしれない。

「まったく。勉強できなくたってそんなに困んねえのになー」

実際に対して困ってはいない彼女が言うと、少し説得力が出てくる。

が、武蔵と黛は苦笑いを返すばかり。

彼女たちは『勉強はできた方がイイ』という人種。

浦木ほど極端な意見ではないが、そっちよりの人間だ。

今の天使の言葉には、あまり同意できないのも仕方ない。

しかし、彼女だって人の顔色くらいは読める。

2人の苦笑いを見て、さすがにちよつとマズいと思っただらしい。

より具体的に言うなら、舐められてしまつのではないかと。交友関係で気にするべき部分ではないが、それでも彼女は自分のフオーに回つた。

「いやいや、勉強しないつっても、常識的な部分は大丈夫だぜ？」

「常識的……例えば？」

「確定申告なら1人で出来るぜ！ ……ああ、あと、オギノ式」

「ストップ天ちゃん！ それ以上は言っちゃダメ！」

結局、その後は彼女の性知識を披露され、逆に武蔵が委縮する羽目になって。

変に対抗意識を燃やした黛が、それを上回る知識で見事に場を収めた。

とりあえず、天使は己の無知を晒さずには済んだのだ。

少なくとも、今、この時点では。

3週間後、予定より少しだけ早く港が退院して。

天使が、彼女たちと何を話したかを、包み隠さず彼に告げて。

その港から怪訝な視線で見られることになるのを、黛はまだ知らない。

「それじゃあ、私たち、そろそろ失礼しますね」

「おう！ いつでも遊びに来いよ！」

武蔵が口をはさめないレベルでのエロトークを超えて、2人の中は深まったらしい。

笑顔で手を振り返す黛の表情は、いつになく清々しかった。

对象的に武蔵はゲツソリとしているが、それでも満足そうではある。彼女のカバンの中に入っている、港のシャツとボクサーパンツのおかげだろう。

このタイミングなら盗んでもバレないと思ってるあたり、彼女もなかなかである。

今日の目的を達成して、さて、家に帰ろうと階段を下り。

2人が一階のコンクリートを踏んだ瞬間、突然、武蔵だけが前に吹っ飛ばされた。

黛はというと、武蔵とは全く関係なく、その場に残っていた。

黛が彼女を突き飛ばしたのだから、当然と言えば当然だろう。

短いスカートであることも気にせず、武蔵は前回り受け身。直後に、鯉口が切られる音と、固い何かが割れる音。

彼女が立ちあがって後ろを振り返ると、全く想像のつかないものが目に映った。

1つは、日本刀を抜き放った黛。

左手で鞘を持ち、右手に刀を握っている。

武蔵は見る事ができなかったが、抜き打ちを繰り出したのだ。彼女が確実に放つことのできる、最速の斬撃を。

常人どころか、達人でさえ目視することの叶わない神速を。

そしてもう1つは……何かよく分からない格好をした人間だった。

顔全体が隠れる、ガスマスクに良く似た面を付けていて。

スネや肘、腕の部分にプロテクターをまとっている。

しかも、その下に来ている服ときたら、時代錯誤の忍者服。

その人物の左腕のプロテクターが、腕を斬り落とすような形で割れていた。

2人の距離は、武蔵の目算で10m超。

刀であったとしても、攻撃が届くような距離ではない。

黛は、刀を持ったまま少しずつ左に移動する。

決して足を交差させたりせず、ジリジリと足を滑らせて。

近くに階段があったため、刀を振るのに不自由そうだったからなのか。

階段から10歩分の距離を取ると、ピタリと動かなくなった。

忍者風の人物は、ピクリとも動かない。

足はガニ股のまま、両腕をだらりと下げて止まっている。

まるで、その姿勢でいるのが自然だとも言わんばかりに。

「…………どちらさまですか？」

鞘を捨て、武蔵の方に蹴り、両手で刀を握り直しながら問うた。
そんなに多くの動作を行っても、彼女の警戒心は揺るがない。

忍者風の人物を睨みつけ、いつでも斬れると言わんばかりの殺気を発している。

今の黛であれば、刀でなく、肌に触れただけでも切れてしまいそう
なだ。

「貴様らこそ何者だ？」

相対する忍者は、プロテクターを切られているのに冷静そのもの。
本当に冷静なのか、冷静なフリをしているのかは分からないが。
先の構えのまま、平然と黛に問い返した。

そして、続く言葉を聞いて、彼が不審者でないと彼女たちは理解さ
せられた。

「港の部屋から出て来たようだが…………知り合いか？」

港の部屋。

忍者は、確かにそう言った。

月雄荘には表札など一枚もないのに、部屋に住んでいる人物を知っ

ていた。

それはつまり、この男が、月雄荘の住人の一員であり、彼女たちの素性を怪しんで、背後を付けて来たということだ。

「し、失礼しました！ あの、私たち、その、ミチ……港さんの後輩です！」

そうやって、刀を鞘に収めながら申し訳なさそうに謝るが。

それでも、彼女は視線を外さず、襲いかかられば切り捨てる準備をしている。

口では謝っているが、警戒心は一切解いていない。

彼の父、黛大成の教えが、骨身にまで沁みてるからこそその姿勢といえるだろう。

「そうか。ならいい」

何良かったのか、そのまま尾形は歩を進め。

何事もなかったかのように、1階にある自分の部屋へと帰って行った。

現れた時こそ神出鬼没な風であったが、帰りは普通そのもの。

いくら忍者といっても、忍者っぽいことを四六時中してるわけではないらしい。

過去に、腫れが引く秘伝の薬を渡している、武蔵にも気付くことなく。

尾形 おがた 小路は玄関の扉を閉め、彼女らの視界から消えた。

「……なんだったんでしょうね？」

「さあ？ 私に聞かれても困るわよ」

アパートの中へと消えた、尾形小路を目で追いながら。

彼女たちは、なんとも言えない気分で、その場に立ち尽くしていた。2分後、不審な目でコチラを見てくる住人に気付き、慌てて敷地を離れたが。

微妙な気分を払拭することはできず、そのまま帰路につくことになった。

港が自宅に帰ってくるのは、実に3週間後であり。

そうなるまでの日曜日は、彼女たちが彼の部屋に必ず足を運んだのだが。

それはまた、今回の小さな騒動とは全く別の話で。

天使たちの日曜日は、ココで終わりを告げた。

200万hit記念『天使たちの日曜日（後編）』（後書き）

いつも通り戻すほみですが、ここで特別編は完結です。
お付き合いいただきありがとうございます。

私用が忙しく更新が遅れておりますが、何とぞ御容赦ください。

あと、コチラも個人的な話になりますが。

……私の書くえっちな描写に、需要はあるのでしょうか？
ちよっご意見お待ちしてます。

15話目 『従姉妹にウツにされまして』（前書き）

15話となっていますが、立ち位置としては閑話です。
……三人称の練習したせいで、調子が戻りません。

15話目 『従姉妹にウツにされまして』

あの怪我をやってから、2週間。

勝ちでも負けでもない勝負をしてから、2週間。

怪しい薬を点滴されながら、1週間と6日。

僕の体は、驚異的なスピードで回復していった。

なくなつてた爪が伸びて、打ち身の腫れが引いて。

頭痛やら疲労やらも解消できて、怪我は完治した。

すぐに戦うわけにはいかないだろうけど、3日も調整すりゃ余裕だ。全治1ヶ月の怪我だったことを考えれば、上出来も上出来。

コレだけ回復してれば、文句はどこにもない。

まあ、文句ないって言うのは、怪我の治ったことに関してでね。

なんで怪我が治ったのかとか考えると、ちょっと怖い。

そんなもんは本当にちよつとで、気にするほどでもないんだけどさ。

真弓姉さんの開発した『新陳代謝ZZ』は、僕にとってプラスが大きかった。

名前の通り、体の新陳代謝を高めて、傷の回復を促すって薬でね。

まあ、姉さんが『人生の前借り』って言ってたから、寿命縮むんだろうけど。

僕にとって大事なのは、人生の最期じゃなくて今なんだから。

ちよつとくらい先払いしたところで、痛くもカユくもないんだよ。

あー、でも、今は背中がムズムズするかなあ。

昨日まで、垢がボロボロ出てたから、その余韻なんだろうけど。いや、ホントに垢が溜まっててかカユいってわけじゃないんだよ？ さつき風呂に入ったばっかなんだから、今の僕は至って清潔だ。新陳代謝ZZも2日前から止めてもらってるし、汚くなる道理もない。

おっと、そうだそうだ。

僕の状況ばっかじゃ、何が何だかって感じたよね。

ところは浅草……じゃなくて、入院してた病院。

健康そのものの僕は、ベッドの上に腰を落ちつけてる。

体を戻すトレーニングしなきゃって思うと、少し気は滅入るけど。

そんなもんは、まあ、考えたところで仕方ないからスルーってことで。

時間は、どんなもんだろ？

とっくに夕日が沈んでて、窓の外は薄暗い。

つつても、薄暗いのは外の電灯のおかげで、実際はバッチリ夜中だと思う。

時計がありやいいんだけど……この部屋、時計もテレビもないんだもんなあ。

いや、参考書とか読んでたから、暇じゃあなかったよ？

「さ、今日でもう退院ね」

わざわざ自分の腕時計を見ながら、真弓姉さんが呟いた。姉さんの言う通り、ようやく僕は退院できるってわけだ。不満そうな面をしてるように見えるのは、気のせいじゃないと思う。

真弓姉さんには悪いけど、ホントに不慣れた入院生活だったよ。毎日毎日、起きた時と寝る前に検尿取られてさ。

摂取カロリーも制限されて、薬もたくさん打たれたから体中むくんで。

十分に体を疲労させられないから、睡眠の周期も崩れちゃって。お世辞にも、健康的な生活を送れてるなんて言えなかった。

まあ、だからってそれを口に出すほど、僕は脳が腐ってない。

「ええ、大変お世話になりました」

「お礼はいいから、最後に血液抜かせてよ。

成長期にステロイド使った被験者のサンプル欲しいから」

「……少しだけですからね」

無礼なことはいわないけどさ。

ちよつと油断するとコレだから、心を許すわけにもいかない。

口の中の粘膜に始まって、血液・爪・髪の毛。

どういう理由か、やたらと僕の体組織を欲しがるんだよ。

ステロイド使ったヤツのデータなんか、腐るほど持ってるだろうに。

ってすると、もっと別の可能性も考えられる。

例えば、今回の僕の入院を好機とみて、薬物実験してたとか。投薬を始めた初日と4日目で、点滴の中身の色が違ったし。効果を説明をしてくれなかった薬品もあったからなあ。まあ、本当に今さらだし、気にしたところで意味ないんだけどね。

そんな僕の疑心暗鬼が伝わったのか、伝わってないのか。

真弓姉さんが、僕の方を見て微笑んだ。

意地の悪い笑い方じゃない、自然な笑み。

こういう笑い方を真弓姉さんは、かなり久々に見た気がする。アレくらい賢いと、逆に悩みも多いんだろなあ。

「ねえ、ミチヒロくん？ よかったら送ってあげようか？」

ほら、もう結構イイ時間じゃない？

そうやって続ける真弓姉さんに釣られて、窓の外に視線を移す。

話の流れが急だけど、確かに、もう空は真っ暗だ。

今から帰ろうってなると、ちょっと足踏みしそうになるくらいには深夜って時間でもないけど、歩いて帰るには距離があるし。

どうせタクシー拾うなら、送ってもらった方が安上がりかも知れない。

っていうか、そもそも、ココがどこだかもよく分かってなかったんだっけか。

川神市の隣にある病院って話だったけど、細かい位置までは聞いて

ない。

少なくとも、自分の足で帰るって選択肢は残ってないわけだ……まあ、真弓姉さんに、その選択肢を奪われた気もするけど。

「えーっと……そうですね、お願いします」

まあ、さすがに縁者なんだし、へたなことはしてこないだろう。そんなことを思って送迎を頼んだ、浅はかな僕が間違いだった。

気が付いたら、そこは怪しい部屋だった。

拳句、僕の狭い視界に入るのは、安っぽいスチールの本棚。

なんか本がゴチャゴチャしてて、実験室ってより研究室って感じ。

そんな部屋に置いてある……たぶん、金属製のカプセル。
縦に設置されたソレの中に、どうやら僕は閉じ込められているらしい。
背中がベツタリだから寝転んでると思ってたけど、それは間違い。
僕の体が、十字架に磔にされるみたいに固定されてるだけだ。
柔術で鍛えたバランス感覚が、こんなところで役立つなんてね。
人生、なにがどこでプラスになるのか分からないもんだよ。

「はい、それじゃあ動かないでね……って、動けないだろうけどね」

喜々とした様子で、僕には分からない機械をいじってる真弓姉さん。
この病院で初めて顔を合わせた時とは、冗談抜きで比べ物にならない。
唇の端を持ち上げて、気味の悪い笑い方をしてる。

拳句、鼻歌なんてやつちゃって、今にも小躍りを始めそう。

……28歳が小躍りしてる姿なんて、1mmも見たくない。

っていうか、この機械は本当になんなんだろうか。

少なくとも、僕の左右は金属で固められてる。

そこに、窓の代わりかなのかどうか、ガラスかなんかがハメ込んであつて。

その上下から延びるコードが、真弓姉さんがイジってる機械に接続されてる。

やたらとブツといコードなんだけど、大丈夫なのかなあ。

……いや、大丈夫じゃないよね。

大丈夫だったら、僕に拘束衣を着せて、猿ぐつわを噛ませたりしない。

真弓姉さんにSM趣味はなかったはずだから、余興ってことはない。僕が暴れる可能性を考慮して、わざわざこんな格好させたんだろ。ってことは、僕が暴れるようなことが起きるかもしれないんだ。

「改良型の『がんばれワープくん2号』を使って、家に送ってあげるわよ〜！」

えーっと、うん、ワープ装置？

なんでそんなオーバーテクノロジーなモンが、病院にあるんだろうね。

そんな便利な道具が完成したら、世の中もつと便利に……。

いや待て！ 完成してないに決まってるじゃん！

もし完成したら、いくらなんでも僕の耳に入ってくるはず。姉さんの研究成果が、港家に伝わって来ないはずがない。

まあ、ジジイが意地悪して黙ってたって可能性もあるけど。そんな可能性なんて、指先1つ分もありゃしない。

「ああ、そうそう。ミチヒロくんも不安だろうから、教えといてあげる。

バージョンアップ前から、無機物と植物と、鳥類とかの動物は転送に成功してるから」

あー、それは知ってる。

10年くらい前に、嬉しそうに話してたもん。

コスト掛り過ぎて実用化進んでないし、ワープ距離に限界があるって話だったはず。

それでもまあ、霧夜が研究費出してくれてるってのも聞いたんだけど……。

そこから何か進展があったって話は、一度も聞いてない。

でも、わざわざ話すくらいだから、人間の転送にも成功したんじゃないだろうか。

「バージョンアップ後も、霞ヶ浦二ホンザルと人間は成功してないけどね」

「むうううう！？　むおおおお！」

バカじゃねえの！？　バツツツカじゃねえの！？

なんで人間に近い生き物と、人間で失敗してるんだよ！

あー、チクシヨウ！　初めっから俺で試すつもりだったんだな！

だからわざわざ、怪我の治療からスタートしたっていうのか！

俺を逃がさずに確保して、ていのイイ実験台にするために！

一瞬でも信用した僕がバカだったよチクシヨウ！

っていうか、なんで僕は拘束衣なんて着てるんだ！？

落ちつけ落ちつけ、何があったか思い出せ！

クソ、記憶がやたら曖昧だけど、必死に頑張れよ！

そう……よく思い出せよ。

確か、真弓姉さんが家まで送ってくれるって言って。

それで、健康状態チェックのために採血をやつて。
ちよつと数値がマズいから、腎臓を調整する薬を打ってくれるって
話になって。

……それから、記憶が残ってない。

「はい、チクツとしますよーっと」

ああ、もう、ヤメろヤメろヤメろ！

何が『ミチヒロくんも不安だろうから』だ！

分かっているんだったら、余計に不安を煽ってんじゃねえよ！

いや、もう声出せないけど、ホントマジやめてください！

ああああああ！ そんなに嬉しい顔しながらスイッチを押

全身に、軽微な火傷が11ヶ所。

退院当日に、僕はコレだけの怪我を負って、またベッドの上で寝転がっていた。

いやぁ素敵だね、ワープ装置って。

全身に電流が走って、目の裏側がチカチカして。

何度も何度も痙攣をかました後に、病院のベッドの上までワープできると。

なんていうか、意識を失ってる間に入院し直させてるんじゃないよ。

……明日には、不死川に会えるはずだったのに。

僕の入院は1週間伸びて、枕を涙で濡らす羽目になった。

15話目 『従姉妹にウツにされまして』（後書き）

はい、調子を言い訳にして、こういう話となりました。

見どころゼロの話ですが、いきなり『退院して〜』もどろつかと思い、この話を挿入しました。

グダグダが抜けやらぬうちに次の話も投稿することになりますが、ご勘弁願いたく思います。

本日中に次の話も投稿するので、よければ見てやってください。

16話目 『もじちよっとだけ、じのまま』 (前書き)

またもやグダグダしてます orz

16話目『もつちよっとだけ、このまま』

ワープ装置から受けた怪我も治って、日曜日に家に帰って。家の用事をパツパと済ませて、次の月曜日。

僕、港 三千尋は、若干の疲労を抱えながら学校に向かった。

川神にやられたときから数えて、3週間くらいになるんだっけか。そんだけ長い時間を経て、久々に学校に通えるようになったってわけだ。

いやあ、なんていうか、華の高校生が3週間も休むとか、大いなる損失だよな。

こっから頑張って、どうにか損失を取り返したいもんだよ。

にしても、病院のベッドでしっかり休んだはずなのに。

今日の僕は、一段と疲労を溜め込んだまま歩を進めてる。

いや……2日前の深夜に退院したばっかなんだけどさ。

部屋に戻ってくると、僕のベッドの上で天ちゃんが爆睡しててね。もう夜遅くだったから、天ちゃんに声もかけれずに床で寝たんだよ。拳句、寝ぼけた天ちゃんに思いつ切り踏まれて、すぐに目が冴えちゃってさ。

ホント、昨日の夜は踏んだり蹴ったりだった。

だいたいさ、天ちゃんも寝起きが悪いんだよなあ。

僕のこと踏んどいて、それに気づかないでトイレに行つて。戻つて来た時には、僕に蹴りを入れながらベッドに入った。

それで、僕が先に起きて朝飯作つてたら、ご飯の匂いで目を覚まして。

「いつ帰ってくるかくらい連絡しろよバカ！」

つていう言葉を、ボディブローと一緒に見舞いしてくれた。

まあ、天ちゃんも心配してくれてたんだろうけどさ。

だからつて、あんな腰の入った一撃を、僕の脇腹に叩き込まないで欲しかった。

結局、手の込んだ弁当作つて、どうにか許してもらつただけど。

……胃に響いて、朝飯があんまり喉を通らなかつたんだよなあ。

で、まるっと1日かけて、掃除やら洗濯やら済ませて。

気が付いたら、あつという間に夜の10時になつて。

まあ、亜巳さんが気を遣ってくれたから、なんとか11時にはベッドに入れたんだけど。

天ちゃんのボディブローが効き過ぎて、ロクに寝れなかつた。

そういう風にダメージを溜めてても、僕は学校に行かないわけにはいかない。

コレでも、出席日数と成績って点じゃ、かなり優等生なんだ。

麻呂兄さんに迷惑かけないために、不死川家にアピールするために、体力的に無茶でも、足取り軽く学校に行くのが僕の仕事。

金もらって1人暮ししてるんだから、それをサボるのはダメだよ。

いやね、学校に行くだけなら問題はないんだよ。

入院中にたっぷり自習したから、大幅に授業に遅れてるってことはないだろうし。

この間の試合の件もあって、少しは周りが騒がしくなるかもしれないけど。

そのあたりのことは、想定済みだし気にもしてない。

まあ、学校側にどういいう話が通ってるかは気になる。

本当なら先週に復帰してたはずだから、何か余計な連絡が行ってるはず。

素直に『ワープ装置の実験で失敗しました』とでも伝えたのかなあ。

……考えても仕方ないし、どうでもイイか。

どうしたって、今から引き返すわけにはいかない。

もう下駄箱を通過して、教室の前まで来ちゃったんだもん。

ココまで来ておいて、帰って何するっていうんだよ。

イロイロ考えながら歩いてたら、もう教室の前だしさ。

とにかく教室に入って、心が来るまでゆっくり考えるだけだ。

正面に引つ張られたと思つたら、そのまま腰が浮かされて。そのまま上に放り投げられるかと思つたら、今度は地面に引き寄せられて。いつも通り受け身が間に合わずに、思いつ切り腰から落ちた。あの投げられた時の浮遊感は、絶対に柔道の熟練者じゃなきゃ出せない。

「おおおおお……！」

声にならない悲鳴を絞り出しながら、僕は身悶えする。キレイな投げだから頭は打たなかったけど、背中も打った。横隔膜まで衝撃が伝わったせいも、十分に呼吸もできない。オマケに、体中が痛すぎて、指1つ動かす気さえ起きない。

そうやって激痛を味わっていると、僕を投げた相手が覗き込んできた。投げのキレから予想できてたけど、その相手ってというのはやっぱり心。

着慣れた桜色の着物を纏って、いつもと同じで、髪の毛はお団子でまとめてて。

僕の頭のとっぺんの方から、少し怒った顔をして覗きこんでる。いやあ、やっぱり無愛想にしてる顔もカワイイなあ。

息もできないくらい見とれちゃったよ。

「受け身の練習が足らん」

「れ、ん、しゅう、してる、暇、なかつ、ただだけ、どね？」

ムツとした表情の心に、途切れ途切れに返す僕。

出会い頭に投げられたら、さすがに受け身がどうってレベルじゃないと思う。

心の言うことも正しいんだけどさ、僕は柔道家じゃなくて柔術家なんだし。

その辺は、大目に見て欲しいと思ったり。

呼吸が整わない中、僕は何とか立ち上がる。

仰向けからうつ伏せになって、手を付いて、膝を立てて。

その体勢で何度か深呼吸をして、右足から立ち上がった。

よろよろになってバランス崩しながらだから、カツコ悪かっただろうなあ。

「……まあ、無事で何よりじゃ」

「心配、してくれてる、のは、嬉しいよ?」

投げないでくれたら、もっとありがたかった。

「しかし、今のは致命的じゃな」

腕を組んで仁王立ちした心が、鼻を鳴らして呟いた。

確かに、出会い頭に投げかますのは、人として致命的かもしれない。

いやいや、当然、そういう意味じゃないだろうけどさ。

心が言ってるのは、ポンポン投げられるのは致命的だってことだ。

教室の入り口で掛けられたからよかつたけど、コレが窓際だったらと思うと。

背骨がジンジンしてるけど、それでも、背筋が凍る気分になる。投げられないテクニクってのは、今の僕には必要なのかもね。

もし、投げで倒されることがなければ。

強引にでも投げを回避して、グラウンドの勝負に持ち込めれば。単純なディフェンスだけじゃなくて、総合力を大きく伸ばせる。そろそろ、本格的に受け身の練習もした方がイイんだろうなあ。

「そうだね。もうちょっと気を付けるようにするよ」

そんなことを言いながら、カバンを拾って、軽く肩を回して調子を確認。

骨が折れたような痛みはないし、脱臼したような感触もない。

受け身ミスったのに怪我がないってのは、心が加減してくれたって証拠。

うん、やっぱり僕って、心に愛されてるんだなあ。

「せっかく道着を着る格闘技をしておるんじゃないから、柔道をやらんか、柔道を」

「いやあ、投げの威力も魅力的なんだけどね？」

タックルからのテイクダウン狙う方が慣れてるからさ」

まあ、心の言うことにも一理あると思うんだけど。

今から本格的に投げを覚えるよりは、タツクル磨いた方がずっといい。
なんか新しいこと始めようっていうには、ちょっと遅いんだよね。
柔道をやらない理由は、そればかりじゃないんだけど。
ともかくにも、今から柔道を学ぶって選択はない。

投げ技がね、体に合わないんだよ。
全部が全部ってわけじゃないけど、背負い投げとかダメダメでさ。
それっぽくできたのが、体落としと払い腰と……あと、巴投げくらい。
威力のことも考えて、大外刈りとか覚えたかったんだけどね、ホントは。

「町道場で始めにくいのなら、此方が教えてやらんでもないぞ？」
うーん……心が手ずから教えてくれるなら、ちょっと考えちゃう。
身になる分は少ないかもしれないけど、心が相手してくれるんだもん。
相思相愛なのにイロイロ我慢してる身としては、断る理由も特にな
い。

っていうか、むしろ大歓迎だよ！
合法的かつ自然に心に触れるとか、ただのご褒美じゃん！
ああ、もう、考えただけで頭がフット しそうだよお！

なんて思っていると、心が一步引いた。

さっきまで、手を伸ばせば届く距離にいたのに。

明らかに僕の間合いから外れて……自分の肩を抱きかかえてた。

「……なぜか今、邪念を感じたのじゃが？」

「いやいや、邪念なんて抱いてないって」

純粋な性的好奇心は、邪念に入らないと思います。

とは口にせずに、首をぐるっと回してから無難に答えておいた。

いやあ、やっぱり最近、感情隠すの苦手になってきたなあ。

心みたいな割と鈍い子にも悟られるなんて、ちよつと良くないよね。

まあ、愛の力みたいなモンで僕の内心を悟ってくれたなら、最高に嬉しいけど。

「どうだかな。相当いやらしい目をしておったぞ」

改めて心を見ると、僕が入院する前と同じようにカワイイ。

凜とした目に、黒くて艶やかな髪の毛、透き通るくらい白い肌。

小さな唇はムツとした形になってるけど、それはそれで愛嬌があつて。

今にも膨らみそうな頬は、とっても柔らかかそうで指で触れてみたくなる。

コレは邪念じゃなくて、純粋な気持ちだから問題ない。

純粋にいやらしいことをしたいだけだから、嘘じゃないぞ。

「まあ、それは構わんのじゃ」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

「いやらしい目で見てもよいというわけではないっ！」

せつかく、胸と腰回りを舐めるように見てたのに。

今のはやっぱり。それは置いといて』って意味だったか。

まあ、やらしい視線がどうか、そういう場合じゃないよね。

僕がすべきことは、やらしい視線を向けることじゃなくて、謝罪だ。アレだけ大見栄見せといて、川神に引きわけてしまったこと。入院してる間、コッチから一切連絡しなかったこと。

少なくとも、この2つについては、キツチリ謝る必要がある。

だから、スパッと謝ってしまおう。

そう思って口を開きかけたところで、心の言葉が先に響いた。

「なあ、ミチヒロ……その、本当に、大丈夫なのか？」

難しい表情のまま、まだ心は僕のことを心配してくれていた。連絡がつかなかったことか、病室に入れなかったことか。どうしてそんなことが起きたかは聞かずに、僕の心配をしてくれてる。

そう思うなら投げないで欲しかったけど、アレも愛情の裏返しと思えば気持ちいい。

まあ、それはそれとしておいて。

改めて聞かれると、本当に大丈夫なのか分からない。

一応、表面上は完治してるけど、体の中に残ってるダメージはどうか？

ちゃんと飯を食べるから、内臓のダメージは大丈夫だろうけど。

まだ頭がボーっとしてるし、脳ミソのダメージは抜けきってない。

脳のダメージなんて心には分からないだろうから、大丈夫ってことでイイや。

「うん、もうバッチリだよ。どこも痛くないし、怪我也残ってないから」

「本当か？ 本当に大丈夫なんじゃない？」

ぐっと心が近寄ってきて、僕の顔を下からのぞきこんできた。

「大丈夫…… あー、いや、心が抱きしめてくれたら完治する、かな？」

あー、ダメだ。

今日は本当にダメだ。

何言ってるんだよ、僕は。

性欲が溜まってるのもあるけど、もっと心に近付きたい。

ココしばらく会ってなかった反動で、とにかく心に触れていたい。

抱きしめて体温を感じて、臭いをかいで、吐息を浴びたい。

できるなら、そのままキスして押し倒してしまいたい。

こんなに我慢してるのに、理性が千切れそうになる。

だからって、コレはないでしょ。

抱きしめてくれたら治るとか、どここのスケコマシだって話だ。

葵とかが言った方が似合うんだろうけど、そういう問題じゃないよなあ。

まあ、今のは冗談ってことにして、何とか誤魔化すか。

「……………今回だけじゃからな」

まず感じたのは、僕の胸元への軽い衝撃。

次は、柔らかい何かが、胴体をギュツと絞めつけてくる感覚。

最後は、鼻の奥に甘い匂いが入り込んできた。

心から抱き締めてくれたって気付くのに、それだけの時間が掛った。

思わず、抱きしめ返した。

僕を抱きしめてくれた心を、その上から。

左腕で、強めに腰の上を抱いて。

右手で、心の頭を柔らかく包むようにして。

そこで僕は、改めて心の体が柔らかいことを思い知らされた。

それなりには鍛えているはずなのに、それでも柔らかい。

何も、心のささやかな胸ばっかりが柔らかいんじゃない。

左腕で抱いた腰も、右腕に触れている肩も。

ほどよい弾力で押し返してくるけど、どこまでも腕が沈んでいきそうになる。

さっき感じた甘い匂いが、より一層強くなった。

コレは……………桃の匂いだけど、香水じゃなくて香を焚いたのかなあ。

化学的な薬品を使った香水の、鼻の奥に感じるツンとした感覚がない。

決して強過ぎず、心を引き立てるように、ほのかに薰ってきて腕の中にある心の存在感が、より一層深まった。

それだけじゃない。

僕の胸元に、熱い吐息が押しつけられてる。

呼吸の間隔が短いってことは、心もドキドキしているんだろうか。勝手な思い込みなのかもしれないけど、心の体温が上がってる気がする。

それに、心が僕の体を抱きしめる力が、少しだけ強くなった。要するに、僕のことを、心が受け入れてくれたってことだ。

— — — — —

しばらくして、心が、僕の腕の中で身をよじった。

今の僕にとっては、体を感じるその動きも艶めかしい。

脳ミソが掻き出されるような強い快感が、背骨を駆け抜けていく。血液が沸騰して、そのまま頭がおかしくなりそうだ。

「なあ、ミチヒロ」

「ん？ どうしたの？」

恥ずかしそうな声で、心が控えめに口にする。

そんな小さな言葉なのに、興奮してくる。

だってさ、自分が抱きしめてる、好きな女の子がだよ？

このシチュエーションで恥ずかしがってくれるなんて、男冥利に尽きるじゃん。

ココが学校じゃなくて僕の部屋だったら、もうとっくに押し倒して舌を入れてる。

「……その、な？ 少しだけ、抑えてはくれんか？」

「抑えるって、何を？」

「さっきから、当たっているのじゃが……」

言われて気付いたけど、僕の、その、ね？

極めて自信があって、男らしい部分。

なんというかまあ、非常に男らしいことになってた。

もうね、恥ずかしい限りだよ。

心配してくれて、わがまままで聞いてくれて。

なれの果てで、性欲が全部下半身に出ちゃうとか。

あんまり恥ずかしいから、もうちょっと大胆になることにした。

「あのさ」

「なんじゃ？」

「もうちょっとだけ、このままあああああ！？」

本日二度目、またもや世界が回って。

僕は、今度こそ頭から地面に叩きつけられて。

痛みを本格的に感じる間もなく、意識を手放した。

16話目『もつちよっとだけ、このまま』（後書き）

えー、作者都合もあり、テンポが速くなりますが。

次、あるいは1話をはさんで、次章に移っていきます。

……うーん、最近、心と体のペースが一致しない……………。

幕間『メイドは見た!?! 川神市に迫る影!』(前書き)

あずみ視点です

幕間『メイドは見た！？ 川神市に迫る影！』

英雄様について、川神学園に入学してから1年と少し。あたいが思うに、この学校は一層騒がしくなった。前々から沸いた奴が多かったが、最近じゃ、沸かせる奴が増えてきた。

特に最近じゃ、同じ2・Sの港。

今年度になって、バカみたいに前に出てきやがった。手首から肘の部分が妙に太いから、多少はやるって思ったけどよ。まさか、あんなにやるとは思っちゃいなかった。

強いつつても、あたいより強いこたあねえ。

真正面から素手で殴り合ったら五分いさかも知れねえけど、それ以上じゃない。

武器を使っているなら、アイツは川神一子の足元にも及ばない。

アイツが強者でいられるのは、相手が素手の時だけの話。

そんで、偶然、素手で戦うイベントが多かったから、たまたま目立っただけだ。

それよりも、不死川と仲良くなってるのが意外だった。

どっちがどっちを好きだったのか知らねえけど、不死川が静かになったのは助かる。

あのアマ、家柄家柄ってウルセエから、見るだけでちょっとイラッとしてたんだ。

そういうのが少なくなったって点だけは、港にチラツと感謝してやってもイイかもな。

ま、そんなこたあ、どうだっというんだ。

港のヤツが何したって、英雄様に害があるわけじゃなかったから。だから、現状を『悪くない』と思っただんだが……そうもいかなかったってきた。

学校は、正直、そんなに気を張る必要もない。

もちろん、英雄様の身を四六時中案じるのは当然として。

あの川神学園っただけで、ほとんどの刺客が二の足を踏むからだ。後先考えずに踏み込んだバカは、体育のルーが始末してるし。

あたいとしちゃ、楽させてもらってるんだ。

つとと、そうじゃねえ。

その辺はどうでもいいんだが……最近、そうもいかなくなってきたんだ。

学校は、今まで通り、少し騒がしいくらいなんだけど。

街が、妙な空気になってきた。

格闘家とか武術家とか、腕に覚えのある連中が増えてやがる。あたいの調べただけでも、随分な数の腕自慢が街に入ってきてる。当然だっと思うかもしれないが、そうじゃない。

あたいだって、何も、格闘家が増えてるのが異常だとは言わねえよ。普通、川神市に来る格闘家ってのは、川神院か川神百代を目指して来る。

長くても滞在期間は1ヶ月で、それ以上長く居座ってるヤツは定住しちまう。

だから、月契約の宿泊施設が軒並み埋まりっぱなしなんていうのは、異常だ。

そこらのビジネスホテルや、マンスリーのアパート。そういうところに、腕の立つ連中がゴロゴロしてる。

川神院に足を運ぶでもなく、川神百代に挑むでもなく。

適当に日雇いの仕事したりして、ただ、何かが始まるのを待ってる。それについての情報を集めちゃいるんだが、大したことは分からなかった。

ただ、大したことは分からなかったんだが。

それと関係なく……いや、関係があるかも知んねえけど。

きなくさいことをしてやがったヤツの名前が、あたいの耳に入ってきた。

何年前か、ストリートファイター集めてランキング戦やってやがった。

深道って名前の、けったいで食えない野郎の名前が。

それであたいは、ちょっと個人で動いてみることにした。

情報が不確定過ぎて、九鬼の従者として動くわけにいかなかったから。

それに、なんだかんだいって、こういうのはあたいの得意分野だからな。

……で、本腰入れて探りを入れたら、面白いことが分かった。

例の深道と、川神鉄心。

その2人が、どうもつながってるかもってことだ。

何も、直接そういう話を聞いたわけじゃないんだけどよ。

あたいが耳にしたウワサを統合してみると、そういうことが見えてきた。

それで今日、タイミング良く、妙な車が敷地内に入って来たって報告を受けた。
スモークガラスをサイドにはめ込んである、そんなに高くもない乗用車。

少なくとも、川神学院の教員で、そんなけつたいな車に乗ってるヤツはいない。

ま、交通手段が整ってるから、もともと車で来るヤツも少なえんだよ。

つまり、見覚えのない妙な車ってのは、それだけで警戒に値する。

李が見たところ、運転手がバンダナとサングラスってカッコだったらしい。

2-Sのヒゲが招き入れてたから、知り合いなのかもしれないって話だったが。

深道の存在を懸念してたあたりは、念押しってことで尾行してみた。

――
――
――

まさか、例のバンダナ男が、まっすぐ学園長室に向かうとは思わなかった。

あたいたいなのが警戒してるのを、まるで気にしてないような感じだ。

一応、生徒達の目に触れないように注意しちやいたが、それだけ。あんまり堂々し過ぎてて、逆に、あたいの目には不自然だった。

学園長室の外壁。

そこに、あたいはピタリと張り付いてる。

息を殺し、足音を殺し、鼓動まで殺す。

あたいができる限界ギリギリまで、キツチリ気配を殺す。

さすがに武神には気付かれちゃいるだろうが、そこは問題ない。

あたいが邪魔だったら、とっくに注意なりなんなり済ませるからな。それが無いってこたあ、これはあたいに聞かれても我慢できる話ってことだ。

もしかしたら、これは、あのジジイがあたいに聞かせたい話なのかもしれない。

外部に情報を洩らしたいが、どうどうと人を入れた話をするわけにいかない。

だから、あたいに気付いてても無視して、対面に座ってる相手にも忠告せずに。

あたいたいな『誰か』が、情報を盗んでくれるのを期待してる。案外、蓋を開けてみりゃ、そういうことなのかもしれない。

部屋の中を見ることはできないが、何も、全部知ろうとは思ってない。

今日のところは、バンダナ男の正体と、どんな話をしてるのがか掴めればいい。

だから、リスクを最小限に抑えて、会話を聞くことだけに集中してる。

さすがにもう1人にも気付かれたら、人払いされちまうかも知れね

え。

「いや、それにしても、やはり気が気でないですね。」

川神鉄心先生を相手にお話するというのは、それだけで気を揉みますよ」

ボイスチェンジャーも何も無い、素の声が室内に響いた。

普段から大きな声を出すクセがあるのか、やたら大きな声だ。

対面にいる相手に話しかけるだけなら、こんな声で話す必要はない。

この声は……聞くヤツが聞けばすぐに分かっちゃう。

誰にでも愛想振りまいて、誰からも好かれようとする甘ったるい声。そのくせ、1語1語ハッキリ発音して、何を言ったのか確実に伝えてくる。

アイドルって人種が使う、独特の語気だった。

「思ってもおらんことを口にしておって……」

武神が、出来の悪い生徒に頭を悩ませるみたいな口調で言った。

朝礼の時に騒がしいと、まず、あんなトーンで話すんだよね。

でも、今回は、感情を押し殺すために、そんなトーンで話してんだ。あたいは、武神が小物臭いセリフを吐くのを聞いたことがない。

少なくとも、茶目つけを演出しようとしているとき以外には。

「まあ、そんな瑣末なことは気にしないでおきましょう。」

難癖をつけてもらうに、時間を作っていただけだわじゃないで

すからね」

「ふん」

会話の相手は、のらりくらりと追及をかわす。

あたいの知ってる深道らしい、主体性のないセリフ。

何をしに来たかさえばやかすような、どうでもいい言葉だった。

しかも、そんな言葉を吐くときも、声の調子は一切変わらない。

「しかし、思ったよりも順調に進んでいるようですね」

「たわけ。あれを以って順調などといえるものか。」

そもそも、あの形式の試合を高校生にやらせることに問題がある」

「そうですか？ 素晴らしい収穫じゃないですか。」

あのマルギツテが戦わずして、これだけのメンツが飛び抜けたじゃないですか」

素晴らしい収穫、って言葉が気にはなつた。

最近始まった、川神ランキングって新しいイベント。

それと、今、武神と話してる相手の正体。

その辺を考えたとしても、いまいち理解できない。

理解できなかつたんだが、理解する必要もなかつた。

知ってみれば単純で、なんとなく納得もいくような話で。

バカバカし過ぎる事実、あたいは呆れた。

「川神百代に挑める人間は、立派に見つかりましたよ？」

そう、そういうことだった。

今年度になって突然始まった、川神ランキング。

いくら武に着目した学園だからって、あまりにも危険なイベント。それがスタートした理由が、そんな単純なことだった。

川神百代は、年々強くなってる。

いや、年々どころか、日に日に強くなってる。

現役の間格闘家が挑戦しちゃいるが、川神百代のメガネに適うヤツは少ない。

例え満足のいく相手だったとしても、すぐに勝負にならなくなってしまう。

ならいっそ、強くなる素質がある人間を能動的に探そう。

それも、若いうちから頭角を現しているような、より可能性の高い者を。

それが、川神ランキングの意義ってことか。

「クリステイアーネ・フリードリヒ、不死川心、渡辺雄飛、島津岳人。

あとは……オマケして、ブンカート・チョーワイクンくらいなものでしょうか」

知ってるヤツや、知らないヤツの名前が挙がる。

必ずしも、ランキング上位だからってわけじゃないらしい。

クリスと不死川はともかく、港にのされた渡辺と、島津の名前まで

拳がってる。

ブンカートも、この間の結果を見れば、わりと妥当なラインか。今まで試合をしてきた連中にだけ注目すれば、この辺が残るのが当然か。

「100名に近い生徒を競わせて、たったの5人とな」

「100人のうち5人もいることが、私には奇跡に思えますよ」

確かにそうだ。

将来的に、川神百代に一矢報いる可能性がある人間。

そんなのは普通、100人引つ張ってきたって1人も見つからない。100人の連中を戦わせて、5人も見つかったならラッキーだろ。ランキング戦に参加してるヤツだけでそれなら、学園内にはもっといるだろうしな。

「……一子では、難しいのか？」

「それは、あなたが一番よく分かっているでしょう？」

ついでに、聞きたくないことも聞いちゃった。

あたいにゃ分かってたが、他人の口が話してるのを聞くと違ってくる。

嫌な現実味つてのが湧くもんなんだよ、他のヤツから聞くってのは。

英雄様が入れ込んでる、川神一子。

ギリギリのギリギリまで努力してる、努力しかしないようなヤツ。

才能がないのに薄々気付きながら、それでも健気に努力する。そんな姿に英雄様が惹かれてるんだが、それでも現実は厳しい。才能のない人間は、絶対にどこかで行き詰るようにできてるんだからな。

「では、世間話はこちらまでにしましょう。」

書類も揃えておきましたし……そうですね、そろそろお暇しますよ」

「好きにせえ。こちらが貴様を呼びとめる用事などない。」

もとより、わざわざ手渡しする書類でもないのじゃからな」

「困ったなあ。これでもパトロンなんですから、優しくしてくださいよ」

「こうして顔を突き合わせるのが、最大限の譲歩と知れ、深道」

余裕のある声と、苛立ちを抑え込んだ武神の声。

その2つを皮切りに、ソファの軋む音が聞こえてきた。

相談事はもうここまでで、そういうことらしい。

でも、そこで終わりってわけじゃなかった。

スニーカーが床を踏む音が何度か響いて、ふと止まる。

「ああ、そうだ」

思い出したかのように、深道は呟いた。

「渺茫が、あなたに会いたがっていましたよ」

意外な名前が、深道の口から出てきた。

いや、意外なのは、この場面で渺茫の名前が出てきたことだ。

渺茫。

異形の武人。

『最強の部類に入る』じゃなくて、ある種の最強。

川神院のトップを継いできた者と並ぶ、確かな最強の存在。

そもそも、厳密に言うなら、渺茫はマトモな人間じゃない。

才能があるとかないとかじゃなくて、そういう次元の向こうにいる存在。

選ばれた者が、その技と魂を文字通りに受け継いできた、継ぎ足しの武人。

今や15人目になった渺茫は、つまり、15人分の知識と経験を持ち合わせてる。

川神百代はギリギリ人間だけど、アレは、明確なバケモノだ。

ただ、最強を名乗る割に、川神院で学ぶどころか、戦った記録すらない。

1000年以上前に日本に来た記録はあるが、残っているのはそれだけ。

もともとアジア大陸を根城にしてたつつつても、異常にしか思えない。

いや、だからこそ、渺茫も川神院も最強でいられた。渺茫は、バケモノとしての性質を強く持った最強で。川神院は、個人だけじゃなくて、集団としての最強でもある。戦って優劣さえつけなけりゃ、どっちが最強を名乗っても文句は出ない。

その渺茫が、川神鉄心に会いたがってる。
現役の川神百代じゃなくて、現役を退いた川神鉄心に。

もし最強を確たるものにしたのなら、川神百代を狙えばいい。確実に勝てる自信がなければ、今までみたいに渺茫を重ねればいい。そのどっちでもなくて、川神鉄心に会おうとしてる。つてことは、もしかして、渺茫と武神は会ったことがあるってことか。

「……………そうか、渺茫が……………」

あたいの背筋を、冷たくて震えるものが通り抜けた。久しく感じてなかった、桁違いの殺気・恐怖。仮に戦ったなら、無事でいられるはずもないって予感。逃げる手も、凌ぐ手も、誤魔化す手も考えさせない。

ただ死を直感させる、圧倒的すぎる殺気。
それが、ケツから頭のとっぺんまで突き抜けて。
ほんの一瞬だけ、あたいの思考は完全に止まっていた。
老い腐っても、武神って呼ばれるだけのことはある。

「のお、深道。渺茫に言付けを頼まれてはくれんか？」

そんなことを持つてるうちに、殺気は消えて無くなった。

のんびりした口調でジジイが話すもんだから、さっきのが夢じゃないかと思っちまう。

ただ、汗で張り付いたメイド服が、あたいの現実逃避を許さない。あたいに向けられたもんじゃないが、あのジジイは確かに殺気を放った。

「ええ、構いませんよ」

そんな殺気を間近で受けても、深道は動揺してなかった。

さっきまでと同じ調子で、声が一切震えてない。

それとも、殺気の1つも感じれないほど甘ちゃんってことなのか。

「次が、貴様の終わりだと。そう伝えておけ」

あたいは、壁に張り付いてる。

しかも、壁に背中をくっつけてる。

中の様子を視覚的にとらえるなんてマネは、あたいにはできない。

でも、確かに見えた。

川神鉄心が、ゆっくりと口の両端を釣りあげて。

抑えきれない意思を、必死に隠している姿が。

武神の殺気を存分に浴びてから、あたいはすぐに引いた。そもそも、今回はあたいの独断専行だ。さすがにヘタ打つと、上の連中に文句を言われかねない。

とりあえず、深道の動きが大した影響でないって分かったのは収穫だ。

どという理由かはともかく、アイツが動いてるのは川神ランキングのため。

英雄様がランキング戦に参加するなんて言わない限りは、放っておいていい。

今のところはって条件付きだけど、無視しておいて差支えないレベルの脅威。

ま、厄介事を抱え込まなくて済んだのは、ラッキーってことでいいよな。

「遅いぞ、あずみ！ 我が呼んだなら即座に現れんか！」

「申し訳ありませんでした、英雄さまああああ！」

英雄様の呼びかけに応えて、人力車を引つ張つてダッシュしてきたんだが……。

生憎、少し筋肉が委縮してたせいで、いつもより動きが遅れた。

時間からすれば数秒単位のことだとしても、九鬼家のメイドとしては大きな失態。

ことによつちや、ヒュームに粛清されかねない。

「まあよい……今の我は上機嫌であるからな！ 不問に処す！」

「ありがたきお言葉！ まことに感謝いたします！」

ま、英雄様は狭量なお方じゃないから、よっぽど許してくれるけどな。

よっぽど無能なヤツがミスを繰り返さない限り、英雄様は許してくれる。

小十郎みたいな例外もいるにはいるが、アレは揚羽様のお気に入り。処遇に関して、あたいがどうこう言うべきじゃない。

思うところはあるんだが……ま、雇われの身だからな。

あたいの引いてきた人力車に、英雄様が乗り込もうとする。

そのままいつも通り、取っ手に重量感を感じたところで……急に軽くなった。

これは、英雄様が人力車を降りられた時の感覚。

それに驚いて振り返ると、英雄様は腕を組んで物知り顔をしてらっしゃった。

「あずみ！　へりを手配しろ！」

「は？　あの、英雄様」

「これほどの快晴だ！　空を楽しませぬ手はあるまい！」

……あー、ミスった。

あたいのメイド服、汗で濡れたままだった。

英雄様のことだから、あたいに気い遣ったりしたんだろうな。

たかだかメイド1人ごときに、ここまで気を回してくれるだなんて、やっぱ、英雄様に仕えてて良かった。

最近、街は騒がしくなってきた。

ヤバイ連中が紛れ込んで、英雄様を脅かすかもしれない。

そのヤバイ連中は、あたいの手に余る相手かもしれない。

もしそうだとしても、命に代えてでも英雄様を守って見せる。

また1つ、そういう覚悟を固めることができた。

「了解しました！　英雄様！」

ただ、英雄様は、あたいが気負うのをよしとしない。

きつとこの人は、そんな決意をすることさえ許さない。

だから、今度は悟られないようにする。

いつものように、練習に練習を重ねた作り笑いで。

幕間『メイドは見た！？ 川神市に迫る影！』（後書き）

ちよいとキレが悪いですが、本章はコレがラストです。

なんか全体的にグダグダした章で、申し訳ないばかりです。

書き始めたのはいいけど、続き書くのに手間どったといういつものパターン。

こういうのを治したいんですが、なかなかどうして……。

ようやく、深道を出すことができました。

とはいっても、姿の描写は一切なく、どう関係しているかの明示もなく……。

もうちょっと上手くクロスさせられるようにしたいものです。

次回から、少しガツンと話が進みます。

へタなことせずに、サククリ書いておくんでした orz

1話目『強き者は、かく語る』

怪我が治って、ようやく2週間が経った。

もう10月が終わって、本格的に肌寒くなってくる時期。

僕と心は、いつも通り仲睦まじく弁当をつついてる。

今日は、2・Sの教室で食ってるんだよ。

心が準備してくれた、不死川家のシェフの弁当をね。

純和風を想像してたけど、創作料理みたいなのがメインで。

何を食っても変わった味がして、まあ、美味しかった。

伝統を重んじるって言っても、不死川家はイロイロ手を伸ばしてるらしい。

だから綾小路と差が出て、向こうはまだまだ勢い残ってるんだろうなあ。

そりゃ、どっちの家も古典を大事にして、やたら外に強調してるよ？でも、本質的な部分が、不死川と綾小路じゃ全然違う。

綾小路は、過去の栄光にすぎた結果として、過去を大切にしてる。

不死川は、権威の1つとして過去の勢いを使ってるんであって、それに頼りきりじゃない。

だから、コレからも不死川は生き残るだろうし、綾小路は潰れていくんだろうね。

まあ実際、綾小路はもう限界だ。

もともと嫡男にこだわり過ぎる風習があるから、ゴミでもトップに立てる。

大麻呂さんとはもかく、その前の当主なんかはクスモイイとこでさ。当時の港には手を出さなかつたけど、綾小路の財産を食い潰す勢いだったそうだ。

金の類に限らず、人脈やらも根こそぎダメにしたって話をジジイから聞いた。

今も綾小路が続いてるのは、港と蘇我があるから。

金銭面は港が支えて、人脈は蘇我がカバーしてる。

まあ、より厳密に言うなら、ほとんど港が下地になってんだけどね。

優秀な男をドンドン婿に出して、いくつも横のつながりを作って。

色んな業界にコネを持って、政界・財界にも権力をねじ込んでいった。

デカイことは言いたかないけど、今の綾小路は港あってこそ。

ジジイが義理立てしてなきゃ、とつくに無くなってる家なんだよ。

ジジイもジジイで、古い連中とのコネを作るために、綾小路を残してんだらうけど。

その辺の話も、そろそろ決着つくんじゃないかなあ。

まあ、そこはどうでもイイか。

家のこと考えるより、目の前のこと考えないとね。

今日、こうやって教室にいるのには理由がある。

心が弁当持ってきてくれたこととは、実は全然関係ない。

いや、教室にいなきゃいけないからって、弁当用意してくれたんだけど。

その『教室に残る理由』ってのは、九鬼から伝えられたんだよ。

なんか、えらく重大なニュースがあるとかないとか。それが『笑っていいかも』で放送されるから、教室に腰を落ち着けておけって。

どういう内容のニュースだとか、その辺は一切教えられてないけどさ。

まあ、僕も心もメイドの日本刀が怖いから、素直に従ってる。

「何があるんだろうね？」

「さあな。此方らを拘束するくらいじゃから、些事ではないじゃろう」

此方らっていうか、クラス全員が教室に残ってるんだけどね。

あー、でも、病欠してるヤツが2人いたから、そいつらはいない。

それと、残ってるつつた九鬼本人と、そのメイドの忍足。

後輩に告白されたとかで、それを断りに行った葵もいないんだっけ。今のSクラスが全部で29人だったから……ココにいるのは24人か。

マルギツテが抜けてから、2・Sに上がってきたヤツいないもんなあ。

それにしても、九鬼の発言力を改めて思い知らされたよ。

それなりにクセのある連中が揃ってるのに、それが全員残ってる。無理のない指示だったからって、誰からも文句が出なかった。

本人もメイドもいないんだからフケたってイイのに、誰もそんなことほしくない。

まあ、後から何言われるか分かんないからってのもあるんだろうけ

ど。

「ねえ、井上は、なんか九鬼から聞いてないの？」

「いんや。俺も若も、ぜーんぜん聞いてない」

「たまたま後ろに座ってた井上に聞いてみたけど……まあ、そういうもんなのかな？」

「クラスの中じゃ、他の奴と比べて九鬼と仲のイイ方だけど。こういうときにも特別扱ってほどの関係じゃないのかもね。」

「ちつ……使えんハゲじゃな」

「おまつ！ さすがにその言い方はねーだろ！」

「そつだよー！ ハゲなんて言ってるな！」

「なんで使えないの方を否定してくれないのかなあ、もう！」

心と榊原に、井上が思いつきり遊ばれてる。

なんていうか、ちょっとだけ井上が羨ましい。

美人の女子2人にからかわれるとか、なかなか味わえないよ？

まあ、ハゲだなんて言われて嬉しいかどうかは別としてね。

あ、でも、さつき榊原に僕もイジられてるか。

弁当食おうと思って席に着いたら、顔面にミドルキック食らったんだよ。

『うーい！』とか言いながらだったし、避けれないタイミングじゃなかったんだけど。

足上げた榊原のパンツを覗くことに全力出し過ぎて、デコにクリーンヒットした。

……うん、まあ、それはそれで置いておくとしようか。

とにかく、キレイどころに遊ばれてる井上が癩だったことで、それとなく、心の意識だけでも反らしてみた。

「お、そろそろ始まるみたいだよ？」

「む……そうじゃな。そろそろ箸を休めるか」

僕が促すと、心は言葉通りに箸を置いた。

それに合わせて、料理持ってきた黒服の人たちが、お膳を回収していく。

手早い上に手際がイイ、よく教育された人たちだった。

まだ僕は食ってたのに、僕の飯までかつさらってく徹底ぶりには驚いたけど。

僕のこと嫌いなのかなあ、この黒服の人たちは。

「ねえハゲ！ これ磨いたらテレビ映るー？」

「映りませんって！ 映らないから頭を雑巾で磨かないで！」

まあ、コッチもコッチで楽しそうなことで。

……そういや、コイツら3人がどういう関係かって聞いたことなか

つたなあ。

今は葵がないけど、まあ、とにかくいつもの3人の話だよ？

井上と葵の話は、なんとなく耳にしたことがある。

葵紋病院の副院長だが、井上の親父だとか何とか。

あんまりハッキリしないけど、親同士が付き合いあるらしくてね。

その関係で、葵と井上も、ガキの頃から仲がイイそうだ。

九鬼と葵も幼馴染っていうから……世間って意外と狭いなあ。

そこはともかくとして、榊原がよく分からないんだよ。

この3人が話題に挙がるときは、葵と井上の話しか持ちあがって来ない。

榊原と葵がいつ出会ったのか、榊原と井上がいつ出会ったのか。

そういう話を、とんと聞いたことがない。

まあ、そんなに興味があるわけじゃないんだけどね。

最近になって交流が増えたから、やっぱ、少しは気になるさ。

そんな風に、どうでもいいことを考えてるうちに。

テレビの画面が切り替わって、九鬼が見せたがってる番組がスタートした。

撮影場所は、どっかの湾岸地帯なのか。

バックに倉庫がズラツと並んでる様子は、港そのもの。

人通りなんてあるはずもなく、そこにいるのは野次馬くらい。

野次馬じゃなきゃ、番組関係者くらいなもんだらう。

右側に海を据えて、左側は味気ない色の倉庫がズラリと並ぶ。

MCの座る場所の後ろには、気休めの白い衝立が立っている。

昼の番組ならこんなもんだらう、って感じのロケーションだ。

まあ、ロケーションはともかくとして。

テレビ画面に映ったのは、ちょっと予想外な人物だった。

いやほら、九鬼の関係者が出ると思ってたんだけどさ。

とてもじゃないけど、関係あるとは思えないようなヤツが出てくるんだよ。

ほら、あのMCの隣に座ってる、東南系の外国人。

「あれ？ ミスマじゃん」

天体部だかの……あ、系川っていうらしいんだけどね、コイツ。

系川が、画面に映った外人の名前を口にした。

みんな知ってる、かなりメジャーな格闘家。

ベースはレスリングだけど、ボクシングでもタイトル持ってるヤツ。

ついでに、キックボクシングじゃ、7戦7勝7KO。

MMAにまで進出して、まだ1回しか負けてない強者。興行格闘技界って粋で見たら、今、一番勢いがあるかもね。

もちろん、コイツが目立つのはそれだけじゃなくて。

こっ……豪放磊落っていうか、派手な生活してるっていうか。石油王らしくってさ、金だけは腐るほど持つてみたいでね。良くも悪くも、周囲から注目されるタイプの人間ってことだ。まあ、ミスマに限っちゃ、悪いウワサの方が多いか。

「では、本日のゲストのミスマさんです！」

おざなりな拍手をするギャラリーに向かって、ミスマは手も振らない。

人を小馬鹿にするような笑みで、満足そうに見渡してる。僕でも嫌になる感じの、クソみたいな素晴らしい笑顔だ。

ミスマは、そんな笑顔のまま黙ってる。

それに合わせて拍手もまばらになって、人の声も止んでいく。どうやらミスマは、そうなるのを待つてたらしい。

少し大きめに息を吸い込んでから、よく通る声で観客に告げた。

「オマエら、生きてて楽しいか？」

……何言ってんだ、コイツ？

日本語に不自由し過ぎてて、頭がおかしくなったのか？

そう思ってるのは、何も僕だけじゃないと思う。

ミスマが声を発する前よりも、現場は静かになってるから。

「金もない、力もない、名声もない。そんな人生なら、死んだ方がマシだろ？」

一般庶民に対して、心底イラツとする言葉をブチまけてる。

まあ、2・Sの連中なら気にするほどじゃないけど。

あの場にいる観客とか、他のクラスの連中とかは気分悪いだろうなあ。

「まあ、ゴミにはピッタリの人生だろうけどな。

金持ちからも手に入らずに、クソみたいな死に方するのがお似合いだ」

そんな空気を察したミスマは、満足そうに笑顔を深めた。

こういう反応が来るって分かってて、ああいう戯言を言ったんだろう。

きつとコイツは、腹すかせたガキの前で、豪華な飯を旨そうに食べるタイプだ。

なんかもう、僕の人生で最低レベルのクズだよ、このミスマは。

いや、でも妙だよなあ。

フリがあつたならともかく、いきなり観客に罵声飛ばすとか。

性格が悪いとかじゃなくて、気が違ってるって類の行動じゃん。

ちよっと変な感じがするよね、いくらなんでも。

もしかしたら、なんか裏があるのかも。

「世の中、武力でも経済力でも勝ってる人間こそが絶対だ！
オマエら凡人は、俺のような絶対的な人間に平伏してればいいんだよ！」

偉そうに笑いながら、ミスマが喚いてる。

まあ、言ってることは大層だけど、お前が言うなってんだよ。

こういう信念で生きてきて無事だなんて、うらやましいくらい運の
イイ男だ。

コイツより強い連中なんて、掃いて捨てるくらいいるんだから。

ハッキリ言って、ミスマは強い方じゃない。

弱いつて言うのは無理があるけど、なんつったらいんだろ？

ルールがあればそこそこ強いだろうけど、それ以上のことはできそ
うにない。

例えば、僕の知りうる限り最強の柔術家、ガスタオン・ダ・シルヴ
ア。

例えば、規格外の破壊力を持つ八極拳使い、ジョンス・リー。

例えば、超高速のサブミッションを扱う、小西良徳。

例えば、若くして達人の域に到達した、皆口由紀。

例えば、格闘とは一線を画した技術を有する、尾形小路。

こういうレベルの人たちに勝てるようなタイプじゃない。

陳腐な物言いだけど、ルールのない殺し合いじゃ、絶対に勝てない。

そして例えば。

1代でフルコンタクト空手の流派を起こして。

勝つためだったら、ガキ相手にも容赦はしなくて。

最強の柔術家を倒して、川神院の猛者に喧嘩を売って。

自分を負かした相手に復讐するために、自流派を潰して旅に出た。

今ちょうど、ミスマの後ろでピースサインしてる、岩みたいな顔をした。

立瀬たっせ 無道むどうにだったら、なおさら勝てない。



立瀬無道は、岩のような顔をした男だ。

何度も割れた額には、刃物で縦に斬ったような傷跡が残ってる。

顔の肌はボロボロだし、鼻はバツチリ潰れてるし、耳も潰れて張り付いてる。

岩を無理やり人間にすると、こんな顔になるかもしれない。

首が埋まってしまっくんじゃなかったほど、固く盛り上がった肩。その首だって、頭と同じくらいの幅があって、どこから首が始まっているのか分からない。

Tシャツの上から分かるほど腕が膨れ上がってて、自ずと下半身の強さを連想させて。

期待しながら脚に目を向けると、思った以上に固く張った太ももが見える。

覗いている拳も、尋常じゃない。

グチャグチャに肉が潰れて、皮膚らしい皮膚が見当たらない。

何度も岩肌に叩きつけてるせいで、肌が元に戻らなくなっただけ。それで、シャツで隠れてるけど、あの肘も似たような状態になっているんだよ。

っていうか、打突できる部分のほとんどは、マトモな肌が残ってない。

人の形をした、骨と筋肉でできたバケモノ。

それが立瀬無道の正体だと、僕は本気で思ってる。

……観客が、完全に静まってる。

ミスマの暴言に続いて、見覚えのない謎の男の来場。

次から次に起こるサプライズに、観客が対応できてない。

僕も、現状を把握するので精いっぱいだ。

観客とは別の意味でなんだけど、やっぱり十分な対応ができない。僕が中学の時に行方をくましました、最強だっと思ってた男の1人。

それが、いきなりテレビの中に現れたんだから。

「おお、そい……も……同感だ」

Tシャツにジーンズっていうラフな格好の師範は。

座ったままのミスマに、後ろから声をかけた。

そんなに声が大きくないってことは、集音器がないんだろうか。

それとも、師範のいるところまで声を拾うことを想定してないのか。何か話してるのは分かったけど、ボソボソとしか聞こえてこなかった。

ミスマは、座ったまま振り返る。

突然現れた不審者に、なんの警戒心もなく。

わざわざ相手が、一声かけてから襲ってきてくれるとも思ってるのか。

普通の人間の感性だったら、それでもイイのかもしれないけどさ。

コイツは普通じゃない世界に身を置いてるんだから、それは許されない。

「ほお。この国は、サルに服を着せる文化があるらしいな」

不審者に向かって、ミスマはそう呟いた。

腰を下ろしたままなところを見ると、まだ余裕があるらしい。

頭が悪いから無防備なのか、無防備に見えて臨戦態勢なのか。

どっちにしても、僕からすれば自信を持ち過ぎてるように見える。

「サ………とか……ンスし……なあ」

「言葉まで使えるのか。どうだ、1つ芸でもしてみろ。恵んでやるぞ」

何か言葉を返した無道師範に、侮辱を返すミスマ。

戦えるような心構えには見えないけど、ようやく立ち上がった。

立ち上がって、慣れ慣れしく師範に顔を近づける。

ミスマの方が身長高いのに、下から覗き込むみたいにして。

自分の方が強いと信じて疑わない、そういう態度だ。

そうやって、ミスマが顔を近づけたおかげか。

無道師範の言葉が、鮮明に聞こえてきた。

本当に、立瀬無道らしい言葉が、ハッキリ聞こえてきた。

「いやあ、アンタにやシビれたぜ。強いヤツが正しいって意見は、俺も大賛成だ。

それを人前で、あんなにハッキリと口に出せるヤツあ、なかなかいやしねえよ」

「サルのクセに話が分かるな。その通り、世の中は強いヤツが正しいんだ」

……まあ、あんまり世間的にはイイ内容じゃなかった。こっとう人だもんなあ、昔っから。

法に触れることはしてないと思うけど、向き合った相手には容赦しない。

武術家か同士が正しさを論じるなら、強い方が正しいのは自明の理。そんなんを、ガキに教え込むヤツだったもんなあ。

まあ、気が合ったんだろうね。

ミスマと師範は、左手でギュッと握手を交わしてた。放送事故でCM入れてもイイところなのに、まだまだ放送は続いている。

明らかに誰かの意図が……ああ、そっか、九鬼の息が掛ってんだっ

た。これを垂れ流しにしといて、九鬼にどいう利益があるんだか。

とにかく、そういうこと。

世の中は強い方が正しくて、弱い方が間違ってる。

少なくとも、それを身上としてる人間にとっては絶対の真理。そんな当たり前のことを、2人は確認しあっただけだった。

つまり、今から起きることは。

全部、弱いミスマが悪いってことだ。

「だからテメエは、ちっと死んでろ」

画面の中のミスマは、下顎を削り飛ばされた。

斧でもハンマーでもなければ、銃でも爆薬でもない。

気が狂うほど鍛え上げられた人間の拳が、それを成し遂げた。ロマンもファンタジーもない、リアルな結果をもたらした。

真正面から、正々堂々の不意打ち。

躊躇するとか、引け目を感じるとか、そういう気負いが一切ない。清々しさを感じるほどの、迷いすら存在しない一撃。

不意打ちしたいから不意打ちする、そういう攻撃だった。

もし、今のが試合だったら、ミスマは避けれたかもしれない。

ゴングが試合を告げてくれて、ちゃんと身構える暇があったら。

きっとミスマは、アレくらいのスピードの拳なら避けられたはずだ。避けられはしなくても、防ぐことくらいはできたと思う。

でも、そんな考えは、ミスマにとってなんのプラスにもならない。

理屈こねて『もしも』を論じても、今、ミスマの身に起きた結果は覆らない。

相手が強者だったとはいえ、不意打ちを許してアゴを潰し飛ばされた。

シンプルで揺らがない事実は、消えたりはしてくれない。

……まあ、ミスマが泣きごと言ったときには、慰めにくいなるかもね。

教室の時間は、ミスマが罵詈雑言を吐いてから止まってる。
ミスマのアゴが削られてからも、まだまだ止まったままだった。
でも、さすがに、放っておいても勝手に進んでくもんで。
誰かが金属製の弁当箱を落とした音を皮切りに、急激に時間が動き出した。

「ごめ……もう私、ダメ……………」

「頑張つて麻倉！ ビニール！ ビニール袋出すから！

今日はね、パンたくさん買ったから、コンビニで大きいビニール袋もらって……………」

「サエちゃん、私たち、ずっと、友達……………」

「いやあああああ！ 麻倉あああああ！」

「おいコラ！ テメ、袋谷！ もどすんだったらヨソでやれ！」

「無理だよお、糸川くん……腰抜けて動けなうぼろろろろええ」

「吐いてんじゃねえよバカ！ ああもう、制服に掛りやがった！」

「ご、ごめええええええええええ」

「オマエもう、口開くんじゃねえよ！ 雑巾持ってくっから、口抑えてろ！」

「相模！　ちよつと武藤が気絶したから、運ぶの手伝ってくれ！」

「え！？　運ぶつて、武藤くんが何kgあるか知ってるの！？」

「知らねえよ！　知らねえから手伝つてくれつつつてんだろ！」

「知らねえつて……んだよ、その言い草は！　それが人にもの頼む態度かコラア！」

「ガリ勉が強気になってんじゃねえよ！　ああもう、とにかく手伝え！」

時間の動きだした教室は、阿鼻叫喚だった。

もうね、気絶とゲロのオンパレードでさ。

あっちこっちで、吐いてるヤツと吐きかけてるヤツ、気絶したヤツが続出してゐる。

食べ物の匂いと酸っぱい匂いが入り混じつて、それがまた吐き気を誘う。

これが屋外だったらよかつたんだけど、室内だからなあ。被害者が、あつという間にクラスの半数を超えた。

ふと横に視線を向けると、苦い顔をした井上がいた。

見慣れてるわけじゃないだろうけど、さすがに速攻で吐きはしなかつたらしい。

ただ、教室の惨状を見て、自分が掃除する可能性を考えて嫌気がさしたんだらう。

とはいつても、まだ吐いたヤツは4人くらいで、予備軍も5人くらい。

まあ、あんまり被害者増えたら、僕も手伝ってあげることによろ。

榊原も榊原で、鼻つまんでるけど吐く様子はない。

匂いがキツイからか、とつとと教室から出てっちゃったけど。

教室から出ていくのはイイとして、どこに行くつもりなのやら。

屋上とか行ったところで、今は似たような状況になってそうだし。

どこにでも行ってくれりゃいいけど、迷惑だけは掛けないで欲しいね。

そんな風にイロイロ目を配っていると、僕の右肩が叩かれる。

通りすがりに知り合いの肩をシバくんじゃなくて、指先でトントンとやる感じ。

で、肩を触られた右側に視線を向けると、扇で口を隠した心がいた。

口元は隠れてるんだけど、眉根が寄ってる。

顔全体に力が入ってるのが、目元のリキの入具合から分かる。

あとは、扇を持ってる右手がプルプルしてるのは、限界が近い証拠。高貴で優雅な心とは言っても、この空気は耐えがたいみたい。

「すまんミチヒロ。此方は少々、化粧直しをしてくるぞ」

「うん、ゆっくりでいいからね」

「うむ」

そう言うなり、心は黒服の人たちにイスごと担がれてった。

自分の力で歩くこともままならない、そういうことなんだろう。

うーん……ここまでになるってことは、よっぽどキツかったんだろ

うなあ。

僕の前で吐かないように頑張ってくれたのは、ちょっと嬉しかったけどね。

僕？ ああ、僕は大丈夫だよ。

胃袋がグイッと来てるけど、まだ我慢できる。

師範がテレビに映ったあたりから、なんとなく想像できてたからね。2年前でさえ鉄骨曲げるレベルだったんだから、そりゃこうなるって。

格闘家、ミスマの強襲。

無道会館、立瀬無道の再来。

そしてコレが、九鬼が絡んでるって事実。

このときの僕は、何がどうなってるか分からなかった。

ただ、これから、嫌というほど思い知らされることになる。

ミスマにどんな目的があったのか、どうして無道師範が帰って来たのか。

どついつ意図があつて、九鬼が動いていたのか。

これから、何が始まるのか。

僕が、何をしなきゃならないのか。

1話目『強き者は、かく語る』(後書き)

はい、本作も100話をさらっと超え、ようやくこの辺りに入ってきました。

いつの間にやら第6章、長ったらしいばかりの話ですが、お付き合いいただきありがとうございます。

諸々直したい部分もありますが、今しばらくは、作品の校正よりも更新をメインにしていきたいところです。

とはいえ、時間が取り辛い身分ですので、しばしば更新が滞ることに関しては、何とぞ御容赦いただければと思います。

はい、メインキャラが全然出てこないですね。

ミスマと、主人公の空手の師範がメインのお話でした。

揚羽さんに瞬殺されるなら、恐らくはコレくらいの実力かなーとか妄想しつつ書いていました。

パワーバランスだけは狂ったことにならないように、気を付けていきたいです。

えっちい話も書いたりしてるんですが、筆の進みが悪く…… orz
ご期待してくださってる方がいらっしやいましたら、大変申し訳ありません。

2話目 『King of Soldiers』 (前書き)

スランプ中です orz

2話目『King of Soldiers』

あのあと、地獄絵図みたいな教室には6人しか残らなかった。保健室に運んだり、保健室に運ばれたり、自主避難してみたり。そういうわけで、教室に残ったモノ好きは極一部。顔の分かるヤツなんて、井上と糸川の2人だけだった。

それにしあって、クラス一丸になってやった作業がゲロ掃除とか。期待しちやいなかったけど、色気のないイベントだったよ。

女子の……えーっと、米田だけが、途中で貰いゲロして仕事増やしてくれたりとか。

「ごめんね」って泣きながらゲロ吐く女の子を、僕は人生で初めて見た。

もちろん、米田のことも考えて、すぐに忘れてあげることにしたけどね。

まあ、そんなことはどうでもイイんだよ。

よくある日常の1ページってことで、片付けられる。

あの番組の続きに比べたら、この程度のことは、なんてことはない。TVの中で起こった出来事の記憶は、ゲロくらいじゃ霞みもしなかった。

まあ、当たり前と言えば、そりや当たり前なんだけど。

『笑っていいかも』の収録現場は、大変なことになってた。とつくに観客なんかいなくなってるだろうけど、そんなもんじゃない。

殺害現場の生中継なんて、スキャンダル以外のなんでもない。

ミスマが……あーっと、もう死体になってるかも知れないけど。

ピクリとも動かないミスマが、無表情の執事とメイドに運ばれてった。

初めから怪我人が出る予定だったのか、担架から救急からバッチリ揃ってて。

化学薬品みたいなのブチまけて、デッキブラシで地面を磨いたりもしてる。

……天下の九鬼ともなると、死体処理のノウハウもバッチリなんだろうなあ。

「あ、わりいな、汚しちゃって」

とか言っつて、殺害現場から一歩引いた無道師範がシールドだ。

どう考えたって、もっと他に謝ることあるだろ。

人間を1人殺したかもしれないってのに、この反応はないって。どうせ謝るなら、今のうちに国民の皆さんに向かって謝ってください。

そうやって場所を開けた無道師範の代わりに。

画面中央に、何度か見たことある女性が向かっていった。

銀髪だか白髪の、顔が整った美人さん。

このクソ寒い時期なのに、肩まで出るような上着を着てて。下は綿パンで暖かそうだけど、上下白つてのが寒気を誘う。そんな寒そうなカツコはともかくとして、スタイルも抜群。

完璧な女性がいるとすれば、たぶん、そのうちの1人は彼女だろう。

だからこそ、額についたバツテン傷が際立つ。

その傷を隠す気がないのか、額を大きく出してるけど。

せめて女の子くらいは、デコに傷つける風習はやめた方がイイと思う。

まあ、結局、その傷があったから誰か分かったんだけど。

アレは、九鬼の姉貴の、アゲ八さんだった。

「貴様、何者だ？ あの男は、我が倒す手筈だったのだが？」

アゲ八さんが、整った顔を嬉しそうに歪めて口にした。

全国に向けて放送してる番組で、こんな風に暴れたのに。むしろ、こうなることを望んでたみたいなツラで、不敵に笑ってる。

アレだけの惨劇を起こしたヤツ相手に、ミスマみたいに余裕な態度だ。

「んなもん、代わりに俺を倒しや済む話だろ？」

無道師範は、揚羽さんと対照的な汚い顔で笑う。

鉄ヤスリが喉に流行ったみたいで汚い声で、ゲラゲラ笑う。

額に走った縦の傷が、師範の笑顔に合わせてジグザグに歪む。

同じタイプの表情なのに、コレほどかと思えるほど不気味な笑顔だ。

「そもいかん。無名の人間を倒したところで意味はないのだ」

「なら問題ねーな。俺を倒せば全部解決するぜ？」

困った様子なんて微塵も見せない揚羽さんの言葉に。

ふふん、と鼻で笑いながら、無道師範が返した。

また、その内容が、驚くほど挑発的。

目の前の相手が、武道四天王って呼ばれてるのを知らないのか。

知ってて言ってるさうだけど……どっちにしても無謀だよなあ。

九鬼揚羽の武力ってのは、金持ち連中の間じゃ有名だ。

上に立つ者として身に余る武力、戦闘を好む豪気な性格。

川神百代と斬り結べるほどの、規格外の強さの持ち主。

殺し屋を撃退した話なんて、耳が貫通するほど聞き飽きた。

まあ、ハッキリ言ってる、師範が勝てるとは思ってないってことだ。

僕みたいに、無道会館に所属したことがない連中はね。

「まあ、そのあたりの問題は後で片付けるとしてだ。貴様、先は不意打ちでミスマを倒したが、それで満足しているのか？」

「はあ？ 満足って……ははっ！ 笑わせんなよ、お嬢ちゃん！」

九鬼揚羽を前にして、豪放磊落に笑う。

一見無防備に見えるほど高々と、それでも、隙は見せずに。いつ攻撃されてもいいように、いつでも攻撃できるように。万全の準備をしたうえで、ひとしきり笑い尽くした。

そして、長い爆笑がようやくやんで。

それに合わせて、師範の笑みもピタリと真顔に戻る。

さっきまでの楽しそうな表情は、もうどこにも見えない。不気味なくらいの無表情が、面に張り付いてるだけ。

それで今度は、表情にピッタリの無機質な声で。

真面目腐った調子をして、ハッキリと答えた。

「お遊びじゃねえんだよ。不意打ちもクソもあるか」

僕が、コイツに教わったことの1つ。

正拳突きでも回し蹴りでもない、戦うときの心構え。

空手っていうのは、スポーツじゃなくて武術。

武術にはルールなんかないから、卑怯も反則もない。

もしも卑怯があるとすれば、数に任せて襲いかかること。

そもそも、頭数揃えることだって、立派な戦術の1つなんだから。

極論言ったら、それだって卑怯な手なんかじゃない。

卑怯だ反則だって言いたきゃ、まずは勝つこと。

負けた人間が何言ったって、言い訳と、恥の上塗りにしかならないんだから。

どんな題目も、勝った人間の言葉だから、ありがたがって聞いてもらえるんだよ。

まあ、そういうセリフを吐くのは、決まって負けた人間なんだけどね。

勝ったヤツは、そんなつまらないことは言わないもんだ。

「それはつまり、貴様が不意打ちされても文句はない……そういうことだな？」

もちろん、その覚悟が無道師範にはある。

自分がやったことを相手にやられたら、急にわめき散らす。

立瀬無道は、間違ってもそういう人間じゃない。

自分が何でもやる代わりに、相手にも好きにさせてやる。

そういう、現代には数少ないタイプの、本当の意味での武術家だ。

テレビの向こうの、僕の期待に気付いてくれたのか。

唇をめくるように笑って、リップサービスをかましてくれた。

「おう、今すぐ襲ってくれてもいいんだぜ？」

しかないんだけど。

たぶん、あのメイドが師範の後頭部に、あのデカイ針みたいなのを刺そうとして。

で、恐らくだけど、それに気付いた師範が、針を持っている手を捌いて。

そのままメイドの手首を掴んで、カメラの前に引きずり出した。

TVに映ってるのも構わず、2人は、踊るようなステップで動く。

右へ左へとせわしなく、相手の動きを気にかけてながら。

そんな状態なのに、器用にも、九鬼のメイドだけは攻撃を繰り返していた。

目を狙って、膝を狙って、金的を狙って、首を狙って。

蹴りや突きだけじゃなくて、刃物を使った攻撃まで見せる。

さすが九鬼のメイド、あの立瀬無道を相手に一切引かない。

ただ、左の手首を握られてるせいで、体を師範にコントロールされていて。

致命傷どころか、ロクなダメージを与えていない。

辛うじて胸を打った拳も、あの分厚い体には効くはずもなかった。

メイド服のフリルがはためて、師範のズボンの裾もはためく。

画面に移ってる4本の足が、どっちの足だか分からないくらい激しく動く。

内側に入り込んだら、今度は外側に大きく回り込んで。

距離を詰めて来たと思ったら、いつの間にか距離を取って。

そういう高度なやり取りを、1歩・半歩の世界で繰り返してる。

ある一定以上のレベルの人間にしかできない、常人離れしたやり取りだった。

と、師範がついに、メイドの右手首まで掴み取る。手首っていうか、半分は手首を、半分は手を掴む感じ。自分の手の小指側で、メイドの細い手首を締め上げて。人差し指と親指で、メイドの手にある点穴を押して、動きを封じてる。

中国拳法の経験者だけあって、こういう小技も心得てるらしい。

グイとメイドを引っ張って、顔を近づける。

カウンターで頭突きが飛んできたけど、顔を横に振って避けて。そのままメイドと胸を合わせて、耳に口を寄せた。

「イイねえ、いまどき峨嵋刺^{がひし}か。こついう古いセンス、嫌いじゃねえぜ」

でもよ、と続ける。

「死角から襲うなら、暗器の意味ねえだろ」

立瀬無道は、にいつ、と笑って。

嬉しそうに口の端を釣り上げて、左の膝をヒョイと突き出した。大して早くないし、力を込めてるようにも見えない。

なのに、そんなただの1発で、師範に襲いかかったメイドが吹っ飛んだ。

常識じゃ、絶対にありえない。

腰も入っていない上に、バランスも悪い一撃。

あのメイドがそんな重たくないつつつても、ゴムまりみたいに飛ぶはずがない。

普通の人間は、いくら蹴られたからって何mも宙を舞ったりはしない。

少なくとも、大人がガキを蹴り上げたわけじゃないんだから。

いや、そもそも、師範本来の打撃だったら吹っ飛ばない。

あの人の打撃っていうのは、壊すための打撃。

もし当たったなら、当たった場所がその場で壊される。

ガードしても意味がない、それが、立瀬無道の恐ろしさなんだから。

より効率的に相手を破壊するために、吹っ飛ばしてダメージを軽減させたりしない。

そんなことするくらいなら、襟を掴んで引き寄せて、そのまま顔を蹴り潰す。

つまり、今のは手加減したってことだ。

口笛を1つ吹いて、師範は首を鳴らした。

体を動かせて、ちょっと満足したのかもしれない。
師範の目的がそこにあるとは思えないけど、そこそこ楽しめたんだ
ろう。

ガスタオンさんを倒したときみたいだな、充実した面をしてた。

「な？ 不意打ちされたって、捌けるヤツぁ捌けるんだよ」

さっきの揚羽さんの言葉に対する返事のもりか。

ニヤニヤしながら、拳を軽く振って見せる。

すると、ピンマイクの中に、風を切る音が2回聞こえてきた。

……僕には、1回しか突いたように見えなかったけど。

「どうだい、次は姉ちゃんがやるか？」

その言葉を受けて、揚羽さんは足を止めた。

師範に迫ろうとしてた揚羽さんは、間合いに入る前に足を止めた。

もし今、師範に言葉を掛けられてなかったら。

揚羽さんは、師範に仕掛けるつもりだったのかもしれない。

とするなら、今の挑発的な言葉は、むしろ、揚羽さんの戦意を削ぐ
ものだった。

狙ってやったのか、たまたまそうなったのかは分からないけど。

「……それはそうと、どのような用件があったのだ？」

「ミスマごときを倒すために、姿を現したのではあるまい」

自分で雇ったんだらうに、ミスマごときと来たか。
ミスマは確かに微妙だけど、そんなに弱くもないでしょ。
名もない格闘家が倒す分には、上等過ぎる相手じゃん。

オマエの倒した相手は、大したことはない。

倒したところで、どれほどの価値があるわけでもない。
そんなことを言われても、無道師範は機嫌を損ねずに
満足げな笑みをそのままにして、揚羽さんに返事をした。

「おお、そうだそうだ！ ちょっと人探ししててよ！

探偵雇うような金なんてねえからよ、経費削減ってヤツだ」

そう言うと、ちょうど撮影に使ってるカメラに詰め寄って。
片手でカメラを掴むと、傷だらけの顔を画面に近付けた。

「おうい！ 見てつかあ、釈迦堂！ オマエをブチ殺しに帰ってき
たぜ！

さつき潰したザコみたいに、ぐっちゃぐちゃのミンチにしてやる
からな！」

シャカドウって、なんか聞き覚えがあるなあ。

確かアレだ、師範と果たし合いやって、腕砕かれたヤツだ。

川神院の師範代だったっていうから、師範の勝てるレベルじゃない。

川神院の師範代ってさ、要するにバケモノなんだよ。天才の中の天才が競い合って、その中で優劣を付けるわけだ。本来だったら、1つの道場に規格外が1人いれば十分なのに。そんな規格外をぜいたくに集めて、その環境の中で切磋琢磨させる。競うだけの価値と実力のある相手がいて、それと十分に技を磨ける。これ以上ない環境で、強かったヤツがさらに強くなるシステムが出来上がってる。

常識で考えたら、勝てるはずがない。

単に修行僧のレベルならまだしも、師範代だよ、師範代。

昔ちよつとイイとこまで行ったからって、勝てるもんじゃないんだよ。

まあ、師範ならやるかもとか、ちよつとは思っちゃうけどね。

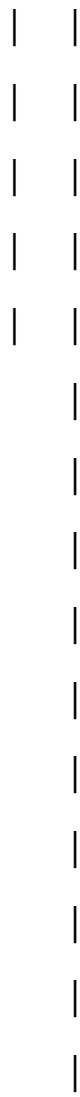
「……ま、俺の用事はこんなところだ。邪魔しちまって悪かったな」
師範は、言いたいことだけ言って。

Tシャツに付けたピンマイクを、指でつまんでから。

「おー、そうだ。悪いついでに、もう1つ頼みたいんだけどよ。

この辺にデカイゴミ捨てちまったから、それもカタしといてくれや」

なんて、意味ありげな言葉を残して、マイクを指ですり潰して。そのまま、画面の外に消えていった。



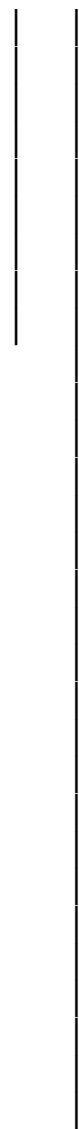
ちなみに、あとで警察のオジサンから聞いた話だけど。

無道師範が言ってた、デカイゴミっていうのは。

そこそこ有名な『タオシー』って暗殺者の死体だったらしい。

しかも、タオシーだけじゃなくて、死体の数は全部で6つ。

どれもこれも、重機でも使ったみたいにグチャグチャだったそう。



観客も、九鬼のメイドもなくなった空間。

殺風景な港に、アゲハさんだけが立ち尽くしている。

腰に手を当てて仁王立ちして、凜々しい顔でTVを睨んでいた。

「皆の者、見たか！ 格闘王ミスマを、ここまで見事に屠る者がいる！」

今まで諸君らが目にしてきた武の世界は、まだまだ浅い部分ではない！」

アゲハさんの言うことは、正しい。

TVで見れる程度の試合には限度がある。

壊すことを前提とした攻撃、殺すことをいとわない戦い。

科学的トレーニングじゃ解明できない、オカルトチックなトンデモ技能。

どれもこれも、普通に生きてたら何度も見れるもんじゃない。

「今、世界中で、本来の姿を持った武が失われつつある。

脈々と残るホンモノも、その意義を問われ消えてゆく運命だろう」

それも正論だ。

いくら実戦主義だのなんだのっていても、普及してる格闘技は結局スポーツ。

相手を必要以上に傷つけないルールがあつて、そのルール内で戦わなきゃならない。

武道つてのは本来、ルールのない世界で生き延びるための技術なんだから。

このままなら、本物の武道は消えてなくなるか、錆びついて形だけになるか。

そのどつちかしか、道は残されてない。

「我は、そんな現状を見過ごせるほど腑抜けた覚えはない！」

「この現状を変えるべく、今ここで、全世界に重要なメッセージを発信する！」

そんな、本物の武術家たちが喜びそうな前置きをして。アゲハさんは、両手を大きく広げて、声高々に叫んだ。

「格闘世界大会『KOS2009』の開催を、ここに宣言する！」

2話目『King of Soldiers』（後書き）

完全にスランプです。

まじでごめんなさい。

変なところとかダメなところがあると思ったら、ガンガン指摘して
やってください orz

3話目『我らが綾小路のために』

盛大なゲロ掃除を終えた翌日。

僕にしては珍しく、登校ついでにコンビニで新聞を買ってった。

いやあ、TVのニュースで大騒ぎしてるのを見ていうのも面白いけどさ。

新聞でどう扱われてるかを知るのも、騒ぎの大きさを測る基準になるからね。

まあ、騒ぎの規模がどうこうって話をしたら。

午後の授業が行えない程度には、学校も騒ぎになってただけど。

もうさ、ミスマのゲロ動画中継で、不調を訴える生徒が出るわ出るわ。

保健室だけじゃなくて、保健室前の廊下にまでダウンした人間が横たえられて。

結局、九鬼の連中が葵紋病院まで運んだらしいけど……まあ、そこは九鬼の責任だ。

僕の知ったこつちゃないし、九鬼ならきつと、時間かけても上手く解決するよね。

で、まあ、今日。

都合3つの新聞を買って、学校について。

心が来るまで軽く目を通してただけど……まあ、そういうことだった。

予想通り、世間でも、簡単には揉み消せない騒ぎになってたんだよ。アゲ八さんとしちゃ、揉み消すつもりもなかったかもしれないけどね。

KOS2009。

世界中から格闘家を日本に誘致して、戦い競わせる武の祭典。

優勝者には500億も賞金が出る、大盤振る舞いなビッグイベント。

ルールは簡単。

4人1組でチームを組んで、最後の1組になるまで戦い抜く。

チーム全員が潰れるまで戦うことができ……まあ、こっからがポイントでさ。

参加者以外に手を出さない、それさえ守れば何をしてもイイんだって。

文字通り、相手を倒すためだったら何をしてもイイらしい。

殴ってもイイ、蹴ってもイイ、締めても極めてもイイ。

折ってもよければ、千切ってもよくて、潰しても問題ない。

目も決るのも、金的潰すのも、頭力手割るのも。

当然、全部認められてるけど……さらに、その上に行く。

いっさいの武器の使用が『KOS2009』では、認められてる。

だから、例えば。

勝手に勝負が終わったつもりになって、油断した相手の目をいきなり抉っても。

他の相手と戦ってる最中のヤツを、後ろからナイフで刺し殺しても、ファミレスで飯を食ってるときに、遠くからライフルで頭をブチ抜いても。

トラップを張って、罠にはめて痛い目に合わせても。

手足へし折ったヤツを人質にして、そいつの仲間をなぶり殺しにしても。

全部、許されるってことだ。

さすが、アゲハさんが武の祭典なんていうだけはある。

このルールだったら、どんな技を学んできた人間でも全力で戦える。剣術も槍術も関係なし、ライフルを使おうが、拳銃を使おうが、一切自由。

たちまちのうちに相手を殺してしまうような技でも、誰も責めはない。

不意打ちも、騙し討ちも、泣き落としも、袋叩きも問題なし。

相手を倒すためなら何をしても許される、真の意味でのなんでもアリ。

できれば、参加したくなかった。

たかだか500億で命捨てるなんて、僕にはできないから。

だってさ、考えてもみてよ。

僕よりも遥かに強い人たちが、腐るほど出てくるんだよ？

10人とか20人どころじゃなくて、もっとたくさん。

僕が勝ちあがれるどころか、最後まで無事でいられる保証もない。

そう、できれば参加しなくなかったんだよ。
僕の意味で、参加しないなんて選択ができるんなら。

あーっと、昨日の夜のことだ。

珍しく、板垣一家が全員出払って、時間を持って余してたときだった。

亜巳さんは、いつも通り夜のシフト。

辰子ちゃんは、珍しく警備室の居残り業務だかなんだか。

竜兵は夜勤やってて、天ちゃんはバイト先の飲み会に参加。

こんな風に誰もいない食卓っていうのは、本当に久しぶりだ。

っと、そこはまあ、一旦置いておこうか。

それよりも、もっと大事なことがあったんだよ。

風呂からあがって、ストレッチしてたところで。学校と親戚以外には番号を覚えてない、固定電話が鳴り出した。さすがに、この時間に学校ってことはないだろうから。つまり、これは、親戚筋からの電話ってことだ。

この電話が鳴るときは、ロクなことがない。やれ実家に帰ってこいだの、やれ見合い話がどうだの。僕にプラスになる話題は、滅多なことじゃ舞い込んでこない。でもって、その日の電話の用件も、やっぱりロクなことじゃなかった。

「はい、もしもし」

「やあ、ミチヒロくん。夜分遅くにすまないね」

受話器を取って耳に当てると、懐かしい声が聞こえた。

この声をテレビ以外で耳にするのは、3年ぶりくらいになる。綾小路の分家の1つだけど、港よりも本家筋から血が離れてる。それでも、政界に権力ねじ込んで、高い発言力を持っている家。

蘇我家の嫡男、現野党幹事長。

蘇我 梅雪……梅おじさんからの電話だった。

「まだ寝る時間でもないですから、気にしないでください」

「ふむ……ところで、少々時間が掛るが、大丈夫かな？」

「はい、大丈夫ですよ」

こういう電話が来たら、大丈夫じゃないって言葉はない。寝てたとしても、飛び起きて対応しなきゃならない。それが、港の男子が取るべき正しい行動なんだから。

と、まあ、そういうネガティブな感情はおいといて。

聞き洩らしがあっても大丈夫なように、録音ボタンを押してから。梅おじさんの話の続きを、しっかりと聞く心構えをしておいた。

「ミチヒロくんは、今日の『笑っていいかも』は見たかな？」

「えっと、用件って、KOSがらみのことでしょうか？」

「そう、そのKOSのことなんだが……」

そのとき、少しだけ梅おじさんが黙った。

あんまり話したことだないしても、不思議な感じがする。

この人は、よくモノを考えてから話すタイプで。

相手に何かを伝えるときには、どこまで話すか決めてるんだから。それを、途中で渋ったり、やめたりするって人じゃない。

とはいっても、僕が無理やり会話促すこともできないから。梅おじさんがどうするかを、無言で待つ。

すると、10秒もしないうちに、すぐに言葉が繋がれた。

「実はね、総理が参加するという情報を極秘に入手したんだよ」

……そりゃ、渋るか。

「つか、まだ開催宣言があつてから1日も経つてないのに。

総理が決断するのも、その情報を手に入れるのも早過ぎやしないか？

まあ、梅おじさんが言つんだから、真実なんだろうけどさ。

だとしても、僕は、聞き返さずには居られなかった。

「は？ えつと……総理つて、現内閣総理大臣ですよね？」

「その通り。いずれ、私のものとなるべきポストに座っている、あの男だ」

その辺は、まあ、大人の事情だからノータッチ。

総理大臣のポストを奪えるかどうかは、梅おじさんの問題。

冷たいかもだけど、僕には全く関係ない。

まあ、親戚に総理大臣がいれば、港も動きやすくなるから。

それなりに、適度に頑張つて欲しいとは思つ。

それはそれとして、梅おじさんの用件が掴めた。

総理大臣がKOSに参加して、僕に連絡があつた。

KOSは、参加制限が特に設けられてないから、僕でも出れる。

僕に用事があつて、それがKOS絡みで、総理に関わってくる。

無茶ぶりかどうかは別として、そこまで来れば話は分かるでしょ。

梅おじさんが、僕と世間話をしたかつたなら、話も変わってくるけどね。

「それで、君への連絡なんだが……」

「KOSに参加して、総理のチームに対する妨害をしろってことですか？」

「そう、その通りだ」

ミチヒロくんは察しが良くて助かるよ。

なーんて、梅おじさんが、電話の向こうで笑ってる。

それくらい予想がつかなきゃ、世渡りなんてできないよ。

まあ、頼られて悪い気はしないんだけどね。

実際、綾小路は軽んじてるけど、僕の柔術のレベルは相当高い。

世界大会には出てないにしても、体重別の国内大会で優勝経験もある。

素手の格闘だったら、ヘタなプロ格闘家じゃ相手にならない。

それを梅おじさんは知ってるからこそ、僕を指名してきたわけだ。

まだ高校生で、状況いかんでは、総理の隙を作り出せる僕を。

「実はね、総理のチームと言ったら、あの黨十一段。

彼が、今回のKOSで、総理のチームに加わるかもしれないんだ

よ」

「……えーっと、僕じゃ勝負になりませんよ？」

「いくら私でも、あれと勝負しろとは言わないさ。」

「今は……そう、できれば忘れておいてくれると嬉しいな」

口が滑ったようなものだし、不確定情報だからね。
梅おじさんが、そんな風に付け加える。

この人の口が滑るとは思えないし、不確定なことを口にする人でもない。

つまり、これはわざわざ僕に聞かせる必要があったんだ。
港から黨に圧力掛けて、そうならないようにしろって、遠回しに伝えるために。

でも、それを僕に頼むのは間違ってる。

黨家に進言できるとしたら、それは僕じゃなくてジジイだ。
まあ、僕からジジイに伝えて欲しいのかもしれないけどさ。

そこまで蘇我に肩入れする必要もないから、ジジイには黙るときや
イイヤ。

「ところで話は変わるが、不死川のお嬢さんとはどうなったんだい
？」

僕の意味が伝わって来たんだろうか。

梅おじさんが、急に話題を変えてきた。

懐柔したいんだったら、もっと別の言葉があるだろうよ。

例えば『いい加減、綾小路を潰そうか』とかね。

「あーっと、ご想像にお任せする……っていうのじゃダメでしょう

か？」

「まあ、君も年頃だからね。ここは追及しないでおくとしよう」

「助かります」

梅おじさんなら、どうせコッチの情報掴んでるだろうし。

わざわざそれを口にして、伝え直す必要なんてない。

つたく、こつという腹の探り合いを、ガキに教えるなってんだ。

ガキの頃から腹芸覚えても、脳ミソ腐っただけなんだからさ。

さて、梅おじさんの話は一旦置いておくとして。
問題は、誰を巻き込むかってこと。

KOSは、公開されたルールの通り、4人1チームでしか参加できない。

僕以外に3人しか、僕のチームに組み込めないってことだ。
他のチームを抱き込もうにも、賞金が500億ともなるとね。
相応の金を詰まない限り、人員を増やすってのは難しいだろう。

まあ、月雄荘の皆さんは、勝手にチーム作るはず。

そこで余った人で、戦力になりそうな人に声をかければイイ。
それで足りなかったら……どうしよっか？

適当に、入江あたりにも声掛けて、数合わせしようか。

心には、もちろん声を掛けない。

あんなバケモノ連中が集まるところに、心を参加させられない。

そりゃ、戦力としては申し分ないし、頭も回る。

僕が声をかけたなら、喜び勇んで参加してくれると思う。

しかも、声をかけてきた理由について、しつこく言及したりせずに。
今回、僕の集めるチームに必要な条件を、ほぼ満たしてるって言う
てもイイ。

じゃあ、好きな女の子を危険な目に合わせられるか。

そんなもん、当然、まともな神経してたら無理に決まってる。
あんな危険な大会に心を参加させるなんて、僕にはできない！

「おお、おはよう」

「ん、おはよ」

なんて、新聞読みながら考え事していると、心が教室に入ってきた。いつもと同じ桜色の着物で、優雅に歩み寄ってくる。そんな心を見て、ちよつと和んだりもするけれど。正直、今は、あんまりテンションが上がらない。なんせ、悩みの種つてのが、目の前の心のことなんだから。

「どう？ 体の方は、もう大丈夫？」

「うむ。ちよつと夢に出たが、おおむね大丈夫じゃ」

そりゃ、夢に見るよね。

いきなり人間の断面図見せられたら、さすがにキツイよね。

昨日なんか、あのまま教室には戻って来なかったし。

心が人並みの感性を持った女の子って分かって、安心したよ。

あ、でも、隣のクラスの子が失禁したって話だし。

夢に見るくらいで済むのは、普通じゃないのかもしれない。

まあ、心だったら、どっちだっていいけどね。

……失禁するとかしないじゃなくて、マトモかどうかの話だよ？

「なんじゃ？　こんなに新聞を買い揃えて……」

座ってる僕の背中側から覗き込むようにして、心が新聞に目をやる。心の顔が、僕の真横に来てるっていえば、どんな形か伝わるかなあ。心が焚いてる香の匂いが鼻に届いて、それだけで最高の気分になる。さっきまで気分沈んでたのに、ホント、僕って簡単にできてるよね。ただ、もうちょっと近付いてくれると、胸が当たって最高に嬉しい。

「ほら、KOSについて調べておこうと思ってさ」

「なるほど、確かに、どこの新聞も取り上げる大事じゃからな」

「うん。さすがに、何も知らないってのはマズいからね」

グレーゾーンだけど、嘘はついてない。

ルールとか、KOS発足の経緯も書かれてるし。

KOSに対する、川神院とか、渋川烈火みたいな人の見解もあったしね。

そういうの探るのを『調べる』っていうなら、嘘にはならない。

あーそうそう、それで思いました。

無道師範に殴られたミスマは、一命を取り留めたそうだ。

傷口がキレイに潰れてて、怪我の割に出血は少なかったらしい。

アゴは元に戻らないって話だけど、別にイイよね。

弱い世界王者なんて、生きてる価値ないんだから。

アゴが無くなるくらいは、弱かったミスマの責任だ。

「そういえば、ミチヒロも参加するの？」

「まあ、一応……ちょっと待って。今、ミチヒロも『って言った
「？」

「むう……もうちょっと後に言いつもりだったが、口が滑ったのじ
や」

心に対面する形になりながら、思わず聞き直した。

こういうときには、あんまり滑る口は塞いじゃうよー、とか言ってみ
たい。

……いや、僕のキャラじゃないから、そういうマネはしないけどさ。
よし、気色悪いこと言ってる自分を想像して、ちょっと落ち着いた。

いや……ね？

僕が慌てたって仕方ないんだけど、無理じゃん。

せっかく、心を『どうやってKOSに出さないようにするか』考え
てたのにさ。

その心本人が、KOSに参加するつもりでいるみたいなんだから。

まあ、言葉のあやって可能性もあるにはあるけど……

「無論、此方も参加するぞ！」

なんてハッキリ言ってくれたから、ヘタに考える必要がなくなった。
しかも、続いたのが、僕にとって冗談抜きで最悪なセリフだった。

「まゆつちと一緒にな！」

本当に、最悪なセリフだった。

まゆつち……由紀江ちゃん。

総理のチームに参加するかもしれない、黨大成の娘。

その腕は、大成さん曰く『自分より上』ってことだけど。

今回の問題は、由紀江ちゃんの腕がイイのとは関係ない。

由紀江ちゃんがKOSに参加するってことは、つまり。

かなりの確率で、由紀江ちゃんのチームは総理の援護をすることになる。

野党幹事長の座にいる、蘇我梅雪が敵視してるヤツの援護をすることになる。

それは、僕にはできない仕事だ。

もちろんさ、僕は、心のことが好きだよ？

心のためになるんだったら、まあ、人を殺すくらいはできる。

当然、心のために命を掛けることに抵抗はない。

それで死ぬのは勘弁だけど、心の代わりに死ぬとかなら大丈夫。

……それが、今の僕の正直な心情なんだけどね。

「どつじゃ？ ミチヒロも、此方らと組まんか？」

そう言われても、僕は、心と一緒にには出れない。

心が、由紀江ちゃんと同じチームで出るつもりなら。

僕は、今回の件では、徹底的に梅おじさんの援護をするつもりだ。梅おじさんの望み通り、総理に優勝させないように立ちまわって。

綾小路に対する僕自身の発言力を、少しでも大きくしておく。

その発言力を使って、不死川家にアプローチを図ってもらって。

ようやく、晴れて心と恋人になるつもりだった。

そのためにも僕は、由紀江ちゃんと同じチームには入れない。

なら心を僕のチームに引き込めよとか、そう思うかもしれないけどね。

僕が集めた即席チームより、由紀江ちゃんと一緒の方が心も安全でしよ。

心の身の安全を考えるんだったら、由紀江ちゃんと組んでもらう方がイイ。

説得して参加をやめさせられるなら、いくらでも説得するけどさ。

こんなに嬉しそうにしてる心は、きっと、説得じゃどつにもならない。

「えーっと、それなんだけどね？」

「ん？ 不都合があるのか？」

厳密に言うなら、あると言えばあるってレベル。

もしも、万が一だけど、大成さんが総理チームで参加しなかったら。僕と由紀江ちゃんが同じチームになっても、不都合はなくなる。つまり、心と一緒にでも問題なんか出ようがない。

ただ、大成さんがどうするのがハッキリ分かってないから。だから、心と組むって断言するなんてできないわけだ。

「いや、ちょっと家の方の事情だね。

勝手にチーム組まれるかもしれないから、今、返事はできないかな」

「それは、此方よりも大事な事情か？」

……この上なく答え辛いなあ、もう！

そんな、心より大事な事情があるわけないじゃん！

ジジイの葬式とかがあっても、心との日常を優先するぞ！

デート中に家族が死にかけたとしても、心とのデートを優先するさ！だからそんな、残念なのか怒ってるのか分からない微妙な顔しないで！

死ぬ！ かわいすぎて今すぐ死ぬから！

「あのね、そりゃもちろん、心より大切な用事なんてないけどさ。今回の件で、もうちょっと僕と心の関係を進められそうだから……」

そうやって言い訳してみると、心がだんだん顔を赤くしていった。こう、僕に告白された時みたいに、首から頬から真っ赤でね。つまり、今の僕の言葉で、心が照れるか恥ずかしがってるってことだ。

自分で言うのもなんだけど、見苦しい言い訳してるはずなのに。どうして心が顔を赤くしてるのか、僕には分からなかった。……分からなかったんだけどね。

「先の言葉は、ちょっとした冗談なのじゃが……」

なんて伝えられて、初めて自分がマヌケだって気付いた。へー、そっか、冗談だったのか。

冗談で助かったけど、今、かなり恥ずかしいこと言ったぞ。心よりも大事なものはないって、本人に真顔で言ったんだから。

「えーっと……うむ、家の事情では仕方ないのじゃ」

「うん、まあ、そういうわけだから」

こんな感じで、微妙な空気になって。

他にもイロイロ話したけど、なんも頭に入らなかった。

心と話してるだけで幸せだから、十分と言えば十分だけど。

せめても、どこかに遊びに行く約束でもしとくんだったよ。

3 話目 『我らが綾小路のために』（後書き）

さて、イロイロ分かり辛かったかもしれませんが、
ちよいと、人間関係について解説を……

原作キャラ、野党幹事長こと蘇我梅雪。
彼は、綾小路分家の蘇我一族出身です。

この辺は公式設定ですが、マテリアルブックがないと分からないかもです。

で、本作主人公港の家も、綾小路の分家という設定です。

港本人はともかく、港家全体となると、綾小路一族の間では評判がよくなかったりします。

過去のことがあるとはいえ、当然、身内の格付けはランク低めです。よって、こちら辺の関係から、蘇我 < 港 の力関係となり。

蘇我が港に対して『お願い』をしやすい状態になっています。

もちろん、当人同士が顔見知りというのも大きいですが、やはり、ココに尽きるかと。

……なんか、こうやってネタを説明するのって、ちよっと恥ずかしい orz

ちゃんと作中で説明できるようにしたいものです orz

幕間『剣聖、黨十一段』（前書き）

3人称視点な上に、女の子一切出てきません。
でてくるのは、中年のオッサンだけです。

しかも、長つたらしい戦闘シーンがメインなので、ご了承ください。
い。

幕間『剣聖、黨十一段』

日付が変わる時刻とはいえ、静かな夜だった。

風が吹けば草葉の擦れる音が聞こえ、鈴虫のなく声がそこに混ざる。夏にはきつと、蝉が鳴くさまを楽しむことができるのだろう。

周囲に家がない片田舎であるからこそ、このような夜を迎えられるのだ。

月の位置は、かなり高い。

天頂に達してから、いくばくも経っていないのだろう。

大部分を黒く欠いており、ときおり雲が通りかかるもの。かすかな光が地上を照らすさまも、また、儂げで風情と言えた。

もう11月だというのに、その部屋の扉は開け放たれていた。

左右に押し開ける、やたらと古風な作りの、分厚い木製の引き戸。

その2枚の引き戸が全開にされ、部屋の中に風が吹き込むのである。気温が低くなりがちな北陸地方であるなら、その風が帯びる寒さも並ではない。

部屋の中が板張りであり、やたらと天井が高いことが、また寒さを誘う。

拳句、その部屋の広さと言ったら、20畳や30畳ではきかない。

ただ板が張られただけの部屋にしては、いささか広すぎる。

そこに染みた血や汗に気付かねば、空の物置としか思われないかもしれない。

そんな冷え込んだ部屋の中に、1人の男が座していた。ただ座しているそれだけで、異様なまでの存在感を放っている。その存在感で、部屋に満ちた冷気が熱されてしまいそうなほどであった。

髪の毛は短く刈り込まれており、ヒゲを1つも残さず剃り落とし。纏った袴は糊が効き、爪はキレイに削り揃えられていた。

肌の具合だけを見たなら、その男は40代半ばほどの年齢だが。清潔感と、内に秘められた氣勢が、10は年齢を見誤らせる。

そのように、精悍な雰囲気を持つ男、黛大成は。

シャンと背を伸ばし、己の左側に刀を横たえ。

目を閉じ、耳を澄ませ、心を落ち着けて。

足を正座に組んだまま、開いた手を太ももの上に乗せて。

その体勢から、じつと動かずにいた。

この後、胡坐あぐらに似た結跏趺坐けっかふざと呼ばれる形に、足を組み直し。

座禅の折によく見られる手の形……法界定印ほっかしよういんを形作る。

古くから伝わる方法ではなく、流派の意義とは別に勝手にやっていることだが。

稽古の終わりに、このように精神統一することが、彼の日常となっていた。

無論、これは単なる精神統一ではない。

精神を落ちつかせながら、体の具合を確認する意味も含まれている。年齢も年齢であるが、そこに至るまでに何度も実戦を重ねてきたのだ。

大小問わず、その体には様々な種類の怪我が宿されていた。

11のときに木刀で突かれ、歪な方向に曲がった左手中指。この右肋の痛みは、今は亡き父に蹴られた際に折れた部位で。膝に生じた違和感は、年齢を無視したハードトレーニングのツケ。いずれも怪我には違いないが、戦いに差し支えない怪我である。新たな怪我は1つもなく、つまり、黛大成はの体は万全の状態にあった。

ふと、鈴虫の音がブレた。

一定のリズムを保っていた虫の音が、僅かばかり崩れる。それ以外にこれといった変化はなかったが、彼には分かる。

この道場に至るまでの道に、何者かが足を踏み入れたということだ。

家の者……彼の妻や、彼の娘であるということはない。

妻であれば砂利を鳴らしてくるはずで、そもそも下の娘は友人の家に泊まっている。

上の娘は、心の修行になればと1人暮しさせており、この道場に来るはずもない。

ついでに言うなら、こんな時間にアポイントメントをとる客人もない。

気配を隠しているのか、コチラを試しているのか。

いずれにしても、黛大成からすれば、立派な不審者であった。

「用向きがあるなら、堂々と入ったらどうかね」

座した足を崩さず、開いたままの扉に正対する、黛大成。
彼の視線の先にいたのは、影だった。

「いや、寒いねえ。鳥肌立つちまいそうですわ」

黒い足に、黒い胴に、黒い肩口。

肘のあたりから先は肌色だが、薄い月明かりでは十分に映えない。
であるなら、男の表情が正しく見えることもない。

黛大成に見えていたのは、男が口元に浮かべた笑みだけだった。

「一応聞いておこうか。君は何者だ？」

だとしても、彼は落ち着きを失わない。

このように自称・道場破りが来たことは、初めてではないのだ。
そのときは昼過ぎであったが、黛大成にとって大差はない。

彼が声をかけても、影は何もしなかった。

口元の笑みが、少しばかり深くなったようにも見えたが。

問いかけに答えることもなく、攻めの気配を見せることもなく。

ただ、声をかけられる前と同じように、そこに立っているだけだ。

普通であれば、不気味に思うところである。

目的は一切不明、何か仕掛けてくる様子もない。

したことといえ、笑い混じりに『寒い』と告げたことくらい。

そのような奇特な不審者など、滅多にいないのだから。

無論、黛大成が揺らがないのは、彼に肝力があるからなのだが。

それ以上に、彼が、不審者が何者であるか見当がついていたのが大きいだろう。

「藤原ふじわら 頼母たのもの腕を潰したのは、君か？」

藤原頼母といえ、日本武道会の重鎮である。

『槍堀部やりほりへ 柔藤原やわひ 杖志村つえしむら 刀黛 弓は椎名ぞ』

そんな唄を詠まれるように、柔術では日本で一番名が知れている。

しかし藤原は、他の4人に比べて実力不足ということでも有名だった。

未だ武勇伝を積み立てる堀部、風来坊ながらも荒事の噂に事欠かない志村。

剣聖の異名を持つ黛は言うまでもなく、椎名も未だ名手と呼ばれている。

『武道会の恥部』 渋川烈火と引き分けた藤原では、確かに実力は一枚劣る。

が、世間に流布している話と事實は、まったく同じではない。藤原の悪評のみが際立って広まっているが、現状はそれより酷い。志村は4年前に、立瀬無道を名乗る空手家に再起不能にされており、椎名など既に病に伏せ、存分に弓を引けない体となっている。マトモに戦える分、その2人よりは藤原の方がマシであった。

このたび開催される、KOS2009。

現総理大臣が正式に参加を表明してから、2日が経った。

まだ正式なメンバーは発表されていなかったが、選ばれるのは3人だとすれば、その3人は、堀部・黛・藤原であろうと言われていた。もちろん、そう言われていただけであり、記者や野次馬が勝手にした推測だが。

彼ら3人の誰もが、選ばれるのは自分たちであろうと考えていた。

だから、藤原頼母は、腕を潰されるといふ憂き目を見た。

彼の高弟3人がいる前で、正々堂々の道場破りに遭い、利き腕を潰された。

折られたのではなく、圧迫されることで骨が潰れた。

彼の年齢を考えたなら、戦うどころか、日常生活に戻るかも怪しい怪我だ。

無論、この話は極秘裏に伝わって来たものである。

高弟のうちの1人の判断で、黛・堀部・椎名・志村へと連絡が入っていた。

これこれこういう男に藤原がやられたので、気を付けてくれと。

もちろん、この暗闇では、外見的特徴など確認しようもなかったが、この状況からして、道場の入り口に立つ影が、藤原を襲ったと考え、間違いない。

黛大成の冷たい視線にも、影はたじろがない。
が、ふう、と楽しそうに一息つく。
ようやく人間の姿を手に入れたかのように、影………釈迦堂行部は。
今までくぐって来た修羅場の数を感じさせる、しゃがれた声を吐き出した。

「へへっ……答えなきゃ、相手してもらえないんですかい？」

「いいや。倒した後に、ゆっくり聞くとするさ」

言い終える前に、黛大成は刀を抜く。
いつでも使えるように手入れをしてある、彼の愛刀である。
人よりも少し大きな体躯に合わせた、若干大振りの日本刀。
波遊ぎ兼光の写しではあったが、刃は、本物さながらに月光を跳ね返した。

鞘は、道場の隅へと滑らせた。

これは、単に『邪魔にならないように』という意からだけでなく。
『今さら鞘に納めるつもりはない』といった表明の意味も兼ねている。

この期に及んで冗談をやる程度には、余裕を持っているようだ

「……ん？」

それを見た釈迦堂の眉が、ピクリと動く。

波遊ぎ兼光といえ、二代長船兼光の打った名刀である。

刃紋にも特徴が大きく表れているのだが、彼が気にかけたのはそこではない。

無論、さして刀に興味を持っていない彼では、それが写しであることも分からないだろう。

彼にとって重要なのは、並よりも刀身が長いということ。

抜き打ちを得意とする黨流の特徴を、完全に殺してしまう獲物だ。

そんな獲物を、どうして相手が抜いているのか。

釈迦堂が思わず眉を動かしたのには、そういう理由がある。

「どうかしたかね？ 腹でも下ったか？」

至ってまじめな様子で言われても、釈迦堂に返す言葉はない。

正直なところ、いちいち返事をするほどの余裕もなくなっていた。

『寒い』と軽口を叩いていたときと今では、相手の気構えが違ってくる。

何より、先に、黨大成が大振りの太刀を使うことに疑問を抱いたが、それを言ってしまうと、鞘を捨てた動きまでもが不審に思えてきたのだ。

相手を視認した状態からの果たし合いでも、抜き打ちの理が失われるわけではない。

月明かりがあるとはいえ、照明らしい照明のない夜半。

黒塗りの鞘から放たれる刃は、釈迦堂にとって厄介になる。

そうやって考えるのが、自然な考え方である。

それが理解できているからこそ、釈迦堂行部は動きを止めていた。抜き打ち以上の策があるから、鞘を捨てたのではないかと。もし本当に策があるのなら、釈迦堂にとって不利な展開だった。

「こいつぁ、思った以上に厄介だな」

抜き打ちで来れば、それを避けて、腕なり足なりを折る。そういつつもりで、釈迦堂は黨の家に足を運んでいた。

いくら黨流の太刀捌きが早かろうが、抜き打ちなら軌道が限定される。

相手の左側、つまり、鞘を握った手の方へ回り込めばいいのだ。

当然、少し体を左に回されれば、刀の餌食になることは必須だが。それでもなお、釈迦堂には抜き打ちを外させる自信があった。

釈迦堂は、黨家の道場に暗色系の服を着てきた。

いや、暗色系ではなく、上下黒で揃えてきた。

黒の綿パンに、黒のカッターシャツ。

十分な光がなければ、わずかなりとも間合いを見誤るに違いない。

これによって、抜き打ちの『間合いを見せない』という利を潰す。そこまでの策があったからこそ、釈迦堂はむしろ、抜き打ちをさせなかった。

「厄介と言つのは、つまり『手間はかかるが、黨大成なら勝てる』ということかな？」

「いやいや、そう言ってるんじゃないですよ」

「言っているよ」

成功するはずだった策が、無に帰した。

本来なら、そこで互いの手が分からなくなり、優劣は五分となるどころだが。

黛大成は、釈迦堂の策を看破し、先んじて潰してしまった。

準備もなく仕掛けられた、黛大成が。

現状の優劣はともかく。

勝負の流れを掴んでいるのがどちらかというのは、もはや明確であった。

「私も実は、厄介だと思っているんだ」

片膝をついたまま、刀の切っ先を釈迦堂に向け、黛大成が告げる。

眼光には、戦いの興奮も、実戦の緊張もない。

ただ冷静な、普段の黛大成と同じ表情があるだけだ。

そのまま彼は、ゆっくりと身をたわめ。

未だ口々に構えを取らない釈迦堂の前に、静かに臨戦態勢へと移行する。

己の道場という地の利と、日本刀という武器を持っていながら。

黛大成は、なお、一切の油断を見せず。

「人を斬り殺すと手続きが大変だね。君を斬った後の始末は、少し

厄介になりそうだ」

そう言い放って、一気に釈迦堂との間を詰めた。

間合いを詰めながらの、真正面からの突き。

シンプルだが速く、迷いも躊躇いもない一撃であった。

「おっと！」

渾身の一撃を、釈迦堂は、右に踏み出して避けた。

先の黛大成の姿勢から、突きが来ることは予想できていたのだ。

何が来るかさえ分かっていたれば、いかに速かろうと避けるのは容易い。

川神院の師範代にまで上り詰めた彼にとって、難しいことではない。

さて、どう避けるかだが、白刃取りなどという見世物は除外するとして。

相手が勢いづいてしまうことを防ぐためにも、後ろに下がってかわすのは愚策。

攻めることも考えて、右か左に回り込むしかなかった。

となれば、釈迦堂の右側…… 黛大成の左に陣取るのは自明の理。

片手で刀を持つ場合、右手を用いるのが普通である。

当然だが、全ての剣術が右利きを前提に造られている。

つまり、左側に立たねれば、持ち手の問題で若干距離ができてしまうのだ。

無理に追撃しようとして来れば、その隙を突いて勝負を決めることができる。

そう思って、釈迦堂は黛大成の左側を取ったのだ。

取ったのだが。

「ふんっ！」

それでもなお、黛大成の二撃目は早かった。

釈迦堂が完全に回り込むよりも先に、刃を返して斬りかかる。横薙ぎに、釈迦堂の首を狙うようにして。

その一閃を、釈迦堂は大きく引くことで避けたのだが。

そこから、黛大成の猛攻が始まった。

右から左へ薙いだのちに、いつの間にか唐竹割りに刃が奔り。それを下がって避けたなら、下段から切っ先が跳ね上がる。

どこを狙っているわけでもなく、ただ、斬れそうな場所を斬ろうとする。

少しでも足を止めたなら、首なり腕なり足なりを、斬り飛ばされてしまうことだろう。

寸止めができそうな速度ではなく、そもそも、黛大成も刃を止めはしないはずだ。

現に、彼の振るう刃は、釈迦堂の体を4度も捕えていた。

だが、刃が触れていたにも関わらず、切れていなかった。

切断されなかったのではなく、出血さえしていないのだ。

もし釈迦堂を捕えたのが刃の切っ先であり、皮一枚で避けたのなら、出血しない程度に皮膚が切れた、ということも考えられないことはない。

しかし、そうではない。

黛大成の刀は、釈迦堂の腕を斬り飛ばす勢いで振るわれ、直撃していた。

本来であるなら、そのまま手首を失うなり、胴体ごと切り分けられるところである。

それほどに鋭利な斬撃が、何の防護もない腕によって防がれていたのだ。

何故切れないかなどと問抜けなことを、黛大成は聞かなかつた。

この手の技能を持つ人間がいるのを、彼はすでに知っている。

中国拳法でいうところの硬気功に属する、身体強化法の1つ。

釈迦堂は、これによって気で肉体を覆い、迫る凶刃をはねのけてみせた。

黛大成は、この技に対する技術を会得している。
己も気を練り、それを一時的に刃に纏わせる。

そして、腕を覆っている敵の気を相殺し、肉に刃を潜らせる。
そのような技法が、黛流の中に存在している。

黛流が400余年を生き延びる中で、必要な技法だったに違いない。

問題は、この技を使う場合。

十分に気を高めるといふ前準備が、必要不可欠であるということだ。
黛大成には、それほどの気を即座に練ることはできない。

つまり、彼は、攻めているが窮地に立たされたことになる。

もし黛大成が、釈迦堂を斬ろうとしたなら。

それには、釈迦堂の両腕の気を無に帰す必要がある。

それに必要な気を練るためには、一度、手を止めねばならない。

しかし、手を止めたなら、釈迦堂の反撃が来ることは必須。

勝つためには、手を止めねばならない。

負けないためには、手を止めてはならない。

図らずも、そのような展開に持ち込まれてしまった。

対する釈迦堂には、打開策があった。

いくら高速の斬撃といつても、所詮は人間の繰り出すもの。

今の体勢、関節の稼働域、目線、握り、刃の角度。

それらの情報から、2手先までの技なら見切ることができるのだ。
それができる程度の鍛錬を、釈迦堂行部は積んでいる。

釈迦堂の狙いは、黛大成の手首。

アレだけ縦横無尽に刀を振るっていけば、常に手首が緊張しているということはない。

少なくとも斬り返しを始める寸前は、手首が弛緩していると見て間違いないだろう。

手首を返す瞬間だけは、黛大成本人も、彼の手首も無防備になる。

釈迦堂は、その瞬間を狙っていた。

その機会が、なかなか訪れなかった。

上段から刀が振り下ろされれば、いつの間にか胴が狙われ。

逆袈裟のフェイントから、喉に向かっの突きが伸び。

小手を狙うように見せ、膝を斬り飛ばさんとする。

もし、誰かがこの様子を見ていたなら、すぐに戦いとは気付かなかったはずだ。

黛大成が作り出す銀閃に合わせて、釈迦堂行部がステップを踏む。

そういう踊りや演技であるか、あるいは、型であると思うに違いない。

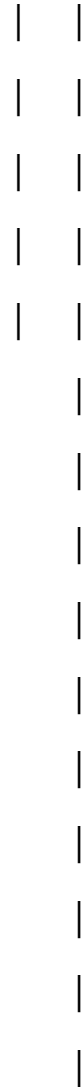
それほどまでに、2人の動きは緻密で、神がかった光景であった。

しかし、ついに。

そんな美しい光景も、終わりを告げる。

切り返しによって首を切り飛ばそうとした、黛大成の手を。

釈迦堂の革靴の爪先が、したたかに打ちつけた。



結論からいえば、黛大成の手は無事だった。

ギリギリで柄から手を離し、釈迦堂の蹴りから逃れたのだ。だから、両手が跳ねあげられる形になっているのは、流れのようなもので。

一番の問題は、彼の手から刀が失せ、釈迦堂が目の前に迫っていることだった。

黛大成が刀を失うことで、状況は一変した。

先のお返しと言わんばかりに、釈迦堂の打が黛大成を襲う。どれも必殺の威力を持っており、しかも、一筋縄ではない。急所を狙うものもあれば、捌きを誤らせるものも混ぜ込まれ。どれも実で、どれも虚であるかも定められない。

また、拳や蹴りが打たれるばかりでもない。

隙あらば関節を取ろうと、ときに、蛇のような動きを見せる。獰猛な獣が、したたかな毒蛇になりかわるのだ。

そして、毒蛇が噛みつき損ねれば、また猛獣が顔をのぞかせる。立った状態での素手の戦いであるなら、釈迦堂の優位は明らかだ。なんとか捌いてはいるが、いずれは釈迦堂の拳が直撃する。そのような実感が、2人の間に生まれつつあった。

そう。

このまま立った状態であったなら。

釈迦堂行部の優位は、動かなかつたろう。

釈迦堂が、相手の足に1つ蹴りを入れた瞬間。

黛大成の手が、蹴られた己の左足へと伸びた。

ということとはつまり、顔の防御がおろそかになっているということであり。

蹴り足を下ろしつつ、一切の容赦なく、その顔へと肘を打ち込んだ。威力は十分だが、仮に外れても次に続く肘であった。

その肘が、半ば予想通りに空を切り。

釈迦堂行部は、仰向けに寝かされていた。

「何を驚いている？」

啞然としている釈迦堂の上から、声が落ちてきた
ついでに、様子見の軽い掌打が顔を打つ。

その一撃が彼の意識を覚醒させ、慌てて顔を庇わせた。
しかし、間に合わせの防御をとったのはいいが。

あまりに異常な事態に、釈迦堂は未だ冷静ではいられない。

馬乗り。

マウントポジション。

ブラジリアン柔術の必勝形の1つ。

ガキの喧嘩でも使われるような、ともすれば低俗な技術。

それを、目の前の剣術家が……剣聖黨が使って見せたのだ。

当然だが、黨流にも寝技は存在する。

しかしそれは、あくまで合戦を想定した寝技。

寝た状態から相手を制し、最終的には首を落とす。

そついうための寝技であれば、黨大成が使ってもおかしくない。

しかし、今の状況は明らかにそれとは違う。

黨大成が使ってきたのは、寝技のための寝技。

寝技の攻防になったときに、相手に勝つための技。

合戦を想定した剣術に組み込まれる技術とは、毛色が違い過ぎる。

合戦とはつまり、戦のことであり。

敵が複数いるというのは、至極当然の場である。

馬乗りになって敵を殴っていれば、たちまちのうちに、他の敵に殺される。

そんな技術が生まれる土壌は、黛流発足の時代の『実戦』にはなかったはず。

であるなら、今の黛大成にも、そんなマネはできないはずであった。

「まさか、こんなに下品な寝技使ってくるたあ思いませんでしたわ」

「使うさ。時代に取り残された武術ほど、意味のないものはないからね」

やつのことで絞り出した言葉は、簡単に受け流された。

しかし、今の言葉から理解できたこともある。

なるほど、黛流は実戦流派。

当然、いつの世でも『実戦』で使えねば話にならない。

火縄術や砲術を覚えたところで、現代では役に立たないのは分かり切っている。

そんなことを覚えるくらいなら、今の時代に合わせた技術を吸収する。

黛大成の選択は、あまりにも当たり前だった。

釈迦堂は、見よう見まねのブリッジで逃げようとする。

これでも地力はあり、川神院で多少は寝技の稽古をしてきた。剣術家のマウントくらいは、それなりに返す自信もあった。

が、黛大成は動かない。

暴れ馬でも乗りこなすかのように、コロコロと重心を変える。

釈迦堂がいかに暴れても、その上にヒルのように張り付いて離れない。

一朝一夕では成り立たない技術を、黛大成は確かに身に付けていた。それだけ長い時間、ブラジリアン柔術を習っていたということである。

どこの誰から習ったのかということが、釈迦堂の興味を僅かにくすぐったが。

その興味を満たすには、まず、現状をどうにかせねばならなかった。

「先ほどの質問だが、藤原をやったのは君ということでもいいのかな？」

「ええ、まあ」

「そうか」

上から語りかけてきた相手に、釈迦堂が素直に答えると。

今度は、キツチリと固められた掌が、重く叩きつけられた。寸前で顔をそむけたため、鼻が折れることはなかったが。

頑丈な釈迦堂の上アゴが、みしり、と悲鳴を上げた。

「手ごわい相手だから、つい殺してしまった……そういうことにしておこうか」

黛大成の手は止まらない。

緩急強弱の加減を変えながら、次々と釈迦堂に掌打を繰り返す。一撃で倒すのではなく、じりじりと削るようないやらしい掌打。ますます古武道の理念から遠ざかるような、異質の打撃だ。

ところで、釈迦堂には『リング』と呼ばれる気を飛ばす技がある。

どのような体勢からでも出せる技であり、無論、グラウンドでも例外はない。

それを使って、この状況を打破しようとするのだが、それを黛大成が許さない。

リングを使おうと意識を集中すると、ガードがどうしてもおろそかになる。

その隙間を縫ってくるように、掌打や、ときには拳が落とされた。

どちらが強いのか。

そういうことを論じるなら、釈迦堂の方が強いという結果になる。持って生まれた才能の差、鍛えてきた環境の差、今ある実力の差。いずれを見ても、釈迦堂の方が優位である。

川神院の元師範代というキャリアも、それを物語っている。

しかし、この状況からどちらが勝つのか。

それを論じるならば、黛大成に大きく分があった。

いくら手練であるとはいえ、マウントポジションを取られ、気も口々に使えない。

絶対的な差があるならまだしも、覆せないほどの差が2人の間にあるわけでもない。

「むうっ!?!」

そのような状況で、黛大成が、突然立ち上がった。首を振りつつ、己の左目を抑えて。

「いやあ、もうちつとだつただけだなあ」

そんな黛大成を見て、釈迦堂は笑いながら立ちあがった。

20発を超える打撃を浴びた顔は、もう腫れあがり始めている。

特に、上アゴに受けた痛烈な一撃が、じわじわと痛みを訴えていた。骨が折れているということはないだろうが、明日は物を噛むのに苦労するだろう。

黛大成が、左目のあたりから手を離すと。

彼が予想した通り、抑えていた手に血が付着していた。

だが、何も目が抉られたというわけではない。

下からの釈迦堂の目潰しを避けた結果として、コメカミが裂けた。そこから出血したがために、手が血で濡れていたのだった。

だからといって、黛大成は物怖じしない。

それどころか、楽しいな思いを瞳に秘めて、口の端を不気味に釣り上げた。

あれほどの窮地に立たされて、それでもなお、あきらめずに戦って
くる敵に。

目を抉るといふ手を躊躇しない敵に、暗い喜びを感じていた。

今の状況は、初めての五分であつた。

どちらが有利・不利ということはない。

黛大成は、少し下がれば、蹴り飛ばされた己の刀を拾える位置にいて。

釈迦堂行部は、今の体勢からなら十分に気を練ることができる。
どちらも手を尽くせるという、まったくの五分であつた。

道場の中に、殺気が張り詰める。

探るような気配は一つもない。

相手が何をしてこようと、全力でねじ伏せる。

そのような思いが殺気となり、彼らのいる空間を満たしていた。

「さて……これからかな？」

「ああ、これからだぜ……っと、言いたいとこだが。

こっちは保険に入っていないんでね。ここらで終いにさせてもらいますわ」

ふと、釈迦堂の殺気が消えて。

それと同時に、張り詰めていた空気もほどけてしまった。

釈迦堂は、その間に黛大成から距離をとっている。

おおよそだが、6 m少々と言ったところか。

仮に襲いかわられたとしても、十分に逃げられるだけの距離である。今から戦おうとする、そういう間合いではなかった。

逃げようとするものが、その機をうかがうための間合いであった。

「ほお、逃げるか」

背後にある刀を拾いもせず、黛大成が嘲った。

言外に『恐れをなして逃げるのか』という意味を含ませて。

その言葉を聞いて、釈迦堂の殺気が再び膨れ上がったが。

チツ、と小さく舌打ちすると、またすぐに殺気はしぼんでいく。

自分としては戦いたいだが、そういうわけにもいかない。

そのような意思が、不可思議な殺気の移ろいに現れたようだった。

「KOSだ。そこで決着つけてやるよ」

最後に、1度だけ強烈な殺気を叩きつけ。

それだけを言い残して、釈迦堂は闇夜に姿を消した。

己の名を名乗ることもなく、しかし、大舞台での再会を期待しながら。

1人になった黛大成は、悠々と刀と鞘を拾い集めた。

己が道場の隅へと滑らせた鞘に、蹴り上げられて弾かれた刀。

それらを元の形に戻すと、彼の体から、どっと汗があふれ出した。

彼は、すでに現役から退いた武術家である。

もちろん、このような命懸けの戦いなど、ずいぶんとご無沙汰であった。

だから、僅かな時間で、これほどまでに消耗したのかといえは、それだけでもない。

魂を削り合う戦いは、彼にとって心地よいものだった。敵が強ければ強いほど、それを下す瞬間がたまらなく気持ちいい。強敵と切り結ぶ瞬間を想像するだけで、震えが止まらなくなる。まるで、その瞬間のために生まれてきたのではないかと思えるほど。黛大成にとって、戦いとは、本来そういうものであった。

妻を貰い、2人の娘をもうけ、家族を守り。

そういつた戦いを、自分から望まぬようになっていた。

もう1度はじめてしまえば、この魅力から逃れられなくなるから。だから、家庭を理由に、そのようなやり取りからは遠ざかっていた。戦うのは挑まれるときだけ、そういう誓いを自身にも立てたほどだ。

だが、思い出してしまった。

最上級の、名もなき獲物を見つけてしまった。

しかも、そこで仕留められれば良かったのだが。

勝つことも負けることもなく、勝負を持ちこしてしまった。

黛大成は、もう止まらない。

名前さえ知らない男に、もう1度会って切り結びたい。

そして、自分の手で相手を下し、充足感に満たされたい。

彼の心臓が1つ鳴るたびに、邪な欲望は高まっていった。

「ああ、KOSだ」

もう一度相まみえるであらう、極上の獲物に告げるように。
窓から差し込む月明かりの下で、黛大成は小さく呟いた。

幕間『剣聖、黨十一段』（後書き）

というわけで、まゆっちパパ生存です。

どうしてもこの人にKOSに出てほしくて、こんな話がありました。外見・年齢・口調については、完全に憶測です。もし『S』でセリフや外見が判明したら、適宜修正します。

さて、黨大成黨大成ってしつこかったですね、はい。

黨と書くと、まゆっち書いてるみたいだったので、こんな風になりました。

ねちつとしててごめんなさい orz

話中の堀部・志村はオリジナルキャラクターですが、藤原は原作キヤラです。

柔術家とは分かっていますが、情報が乏しかったので、本名含めて勝手にこちらで決めてしまいました。

こちらは、原作通り釈迦堂さんにDIEされました。

あとは……オリキャラ2名の説明を軽く。

十文字槍の使い手『足狩り十文字』堀部ほりべ十一郎じゅういちろう。

杖術・拳術の使い手『兜割り』志村しむら三宝さんぼ。

いずれも老齡でありながら、その道のトップクラスです。

武術の普及にも影響があったということで、作中の唄でも名前が挙がっていました。

実力的には

黨 < 椎名 < 堀部 < 志村 < < 藤原

と考えていただけると幸いです。

この設定、絶対あとに生きてこないですけど orz

なお、クレームなどございましたら、適宜承っております。

私が心底へこまないように、ソフトに書いていただけると幸いです。

4話目『彼の弟がこんなに情けないわけがない』(前書き)

しばらくぶりの更新です。

そして、しばらく更新できません orz

4話目『彼の弟がこんなに情けないわけがない』

今日は楽しい日曜日。

時刻は午前の10時過ぎ。

凝った昼飯を作るには、ちょうどいい時間で。

その『凝った昼飯』を作ってるから、こんな話になったりする。

辛いときの現実逃避には、凝った飯を作って自分を忙しくするのが一番だ。

ただ、もうかなり寒い時期だっていうのに。

火を使っていると、じんわりと汗が滲んでくる。

11月のわりに気温が高いつてもあるけど、やっぱり場所と状況かな。

クソ狭いキッチンで、けっこうなガタイの2人が料理してりゃ暑いよね。

まあ、汗でベッタベタになるわけじゃないんだから、別にいいんだけどさ。

今ちょうど、バンバンジーのソース作り終わった。

できるだけ少ない油で、なかなか美味しく作れたと思う。

微量のオリーブオイルでゴマだれっばさを再現できたのは、大きな収穫。

でも、オリーブの味が利き過ぎてて、ちょっとクセが出ちゃってるかも。

……うん、細かい作業に集中するっていうのは、気がまぎれてイイよね。

さーて、ソースも作り終わったし、付け合わせのスープの味見なきや。

塩味ベースで薄めの味付けにして、口直しができるような感じで。五目チャーハンは、天ちゃんが返ってきてから作り始めればイイよね。

冷めるとマズくなるし、火を通しなすとパッサパサになるし。電子レンジ使つと、米から水分出てきてベツチャベチャになるしさ。

それじゃあ、まず……スープに入れる万能ネギでも刻んでおこう。たくさん切つておいて、晩飯のあげだし豆腐に添える分も準備しなきゃ。

大根おろしは飯食ってから作つて、そのときに米も新しく炊いてうん、やるうと思つたら、やることつてたくさんあるモンなんだ。いやあ、忙しいって素晴らしいね、他のこと考えなくて済むから。

さて、なんで現実逃避したのかつていうと。

つい先日、KOSに総理が参加するって発表があつて。

その2日後に、剣聖・黛大成が、総理のチームに加わるって宣言したからで。

まあ、要するに、心と同じチームで参加できなくなつたってことだ。

正直、気分は良くない。

綾小路に対する点数稼ぎのためだつてのは、理性じゃ分かつてるんだけど。

やっぱり、心と敵対するかも知れないってなると、どうしても気が引けてくる。

……なーんて事を考えるのが辛くて、料理して逃げてるんだよ。

お断りしたいんだけどね、こんな役目なんて。

ってか、梅おじさんも、もっと順当なルートで人集めときゃイイのに。

ぱっと声掛けとけば、この短期間でも結構な人間が呼べると思うんだけど。

いくら蘇我が政治方面にしかツテがなくても、綾小路のツテが使えないはず。

最初っから、KOSに僕を参加させるのが目的としか思えない。

高校生に何させたいのか知らんけど、ホント、いい迷惑だよ。

「ねえ、ミチヒロくん。キンピラごぼう炒めていい?」

「あー、はいはい。コンロ開けるから、ちょっと待ってね?」

さあ、そろそろ真剣に現実を見ようか。

心のことも大切だし、KOSも重要な案件ではあるけど。

僕の左腕に当たってる胸の方が、今はもっと重要なんだって。

……いやいや、不可抗力なんだ、不可抗力。

安アパートなおかげで、キッチンが狭いんだよね。

で、僕も辰子ちゃんも体がデカいから、少し動くと体が当たるんだよ。

女の子の割に肩幅広いんだよなあ、辰子ちゃん。

洗い物を極力減らすためにも、同じキッチンで調理した方がイイし。別で料理作って持ち寄るなんて手間なマネは、初めから考えてない。

いや、そもそもこうなった原因は、辰子ちゃんにあるんだよ。

原因って言っても、僕が押しつけがましいだけなんだけどね。

それでも、現状の理由を求めるなら、やっぱりそれは辰子ちゃんだ。

……辰子ちゃんだけだね、手がキレイじゃないんだ。

家事担当だったせいとか、洗い物とか洗濯を結構こなしてて。

板垣さんちは慢性金欠病だったから、洗剤も安物が多かったみたいで。

本人は気にしてないけど、僕からすれば手が荒れてるように見えるんだよな。

だから最近、洗い物は僕がまとめてやってるんだよ。

空手やったせいで手がボロボロな僕なら、これ以上手が荒れても同じだからね。

辰子ちゃんには『時代はエコだから』ってよくわからないこと言ってるんだけど。

女の子の手が汚いっていうのは、やっぱりよくないでしょ。

……せめて、僕があげたハンドクリーム使ってくれてればなあ。

まあ、とにかく、そういうわけで仕方ないんだよ。

同じキッチンで料理するってのも、辰子ちゃんの手荒れを防ぐため。ちょっと体が当たったくらいは、それに比べたら大したことない。

それにほら、辰子ちゃんはスタイルが良くて、胸が大きいから。動くといロイロ当たっちゃうのは、全部仕方がないことなんだ。何度も言うけど、辰子ちゃんは胸が大きいから。思いつ切り実感してるけど、辰子ちゃん、胸大きいから。

大体、そういうこと言い出したら、洗濯も困るんだよ。板垣さんちのベランダだけじゃ、全員分の洗濯物が干せないから。だから、僕の部屋のベランダを貸したりしてるんだけど。そのとき一緒に洗濯物干すから、偶然、体が当たっちゃうんだって。ホントに偶然だぞ！ 意図して揉んだり撫でたりしたことはないからな！

……僕だって注意しようと思ったんだよ。

いくらなんでも、この状況はよろしくないでしょ。

お隣さんで付き合い深くて、節度ってモンがあるじゃん。

これは、明らかにその『節度』を超えた状況でしかない。

でもね……男の子なら分かるよね？

この、やっちゃいけないことをしてるって背徳感が！

『相手から注意されたらどうしよう』ってドキドキが！

適度に身近な相手とこういうことになってる、非日常的なスペクタクルが！

何がイイかって、辰子ちゃんが中途半端な知り合いなのがいイ！天ちゃんくらい仲良かったり、椎名くらい縁遠いとダメなんだって！そこそこ話すけど、こういう仲になりそうもない相手だからこそ！だからこそ、妙に興奮しちゃって注意もできないんだよ！

巨乳というものには鮮度があります。

歳をとればとるほどに、胸とは垂れていくものなのです。真の意味での巨乳とは、性的な状態ではなく変化の動態。胸の形が変化する、その瞬間のことを言う。

如何でしたか？ 瑞々しく新鮮な巨乳の感触は。

御客人にも、板垣辰子の身体をとつくり堪能してもらおうではないか。

キッチン1つ貸し切つての、完璧なシチュエーションだ。

バスト90cm、ウエスト60cm、ヒップは現在91cm。

その上ブラジャーの内側は、異界化している空間もある。

お互い存分に秘術を尽しての触り合いができようものだ。

うん、なんか精神的にも限界だし。

もうスープが沸騰しそうだから、入れ替わり際に注意しよう。

……弱火にしたのは、スープの味が悪くならないようにするためだぞ。

「ねえ、辰子ちゃん。キンピラだけど、味付けて濃い目？」

「うーん、濃いのかなあ？ いつも通りにするつもりだよ？」

「他のオカズも塩気が多いから、薄味にしてもらっていいかな？」

辰子ちゃんの普通のキンピラは、正直言つて塩辛い。

そりゃまあ、板垣さんちじゃ普通なんだろうけど。少なくとも僕にとつては、ちょーっと塩気がキツいんだよ。つていうか、僕の知ってるキンピラごぼろは甘辛い。塩っ辛いつてのは、ちょーっと違う気がするんだよなあ。

「んー……じゃあ、そうするね」

そう言つと、辰子ちゃんは一旦僕から離れた。

なんか悪い気もするなあ、こうやって待たせるのは。スープなんか後で温めてもイイんだから、どければ良かったかも。つーか、辰子ちゃんの胸の感触が無くなったのが、地味に辛い。

いや、むしろチャンス！ 全てはチャンス！

また辰子ちゃんに胸を押しつけられる……じゃなくて！
少しでも邪念が取り払えた今こそが、正直者になるチャンス！
今日こそ、辰子ちゃんの胸が当たって気まずいつて伝えるんだ！

「あのだあ、辰子ちゃん」

「ねえミチヒロくん。こま油つてどこだっけ？」

「……その、コンロ下の棚に入ってるよ」

ああ、もう！ タイミング悪いなあ！

辰子ちゃんも、もうちょつと早く聞いてくれよ！

わざわざ辰子ちゃんを屈ませて、胸が揺れるの凝視しちゃったじゃん！

これは僕が悪いんじゃない、辰子ちゃんの巨乳が悪いんだ！

おのれ、たわわに実って揺れやがって！

なんか榊原と雰囲気似てるせいか、僕の中で相乗効果が！

ええい、キツチン+お姉さん〓エプロンプレイとか考えちゃダメだ！

だから辰子ちゃん、僕の理性を削るように、体全体で鍋を振らないで！

それで使い方は合ってるけど、胸が揺れて視線を反らせないから！

クソ、沈まれ……！

沈まれっ、俺の息子っ……！

なーんて、性欲に耐えながら、なんとか昼飯を作り切って。僕は食器洗って、辰子ちゃんにはテーブル拭いてもらって。それとなく雑務をこなして、天ちゃんが帰ってくるまでの時間を潰した。

いやぁ『笑っていいかも』の総集編って、ホント、クソみたいにつまらないよね。
ミスマ殺害未遂のシーン放送してくれたりゃ、ちょっとは面白いんだけどなあ。

仕方ないから、TV見るフリして、テーブルに乗ってる辰子ちゃんの胸を見てた。

そのまま辰子ちゃんが寝ちゃったから、胸がイイ感じに……まあ、なんていうか。

目算90cm台のバストを堪能させていただきました、ありがとうございます。

……で、僕が2回目のトイレに行ってからすぐに、天ちゃんが帰ってきて。

スープとか温め直したりして、あっという間に食事が終わって。

今は、3人で温かい茶を飲みながら、リビングでゆっくりしてるどころ。

久々に緑茶じゃなくて、番茶を淹れてみた。

ちょっと香ばしいあの香りが、体を心から温めてくれる。

でもって、甘すぎない茶の味が、小笠原のところを買った草餅の甘みを引き立てて。

昼食後のおやつにしては、上出来すぎる感じになったと思う。

手間も、それに掛かってる金もね。

いやぁ、それにしても、今日はあったかい。

冬のわりには日差しが強くて、気温も高いし。

湿気はないから過ごしやすいしで……辰子ちゃん、また昼寝しないかなあ。

「そついやミッチー、KOSってのに出るんだっけ？」

「うん、ちょっと事情があつてね」

内心ビクツとしながら、天ちゃんの言葉を冷静に返した。
いやあ、邪念を悟られたかと思つて焦つたよ。

頭の中を見透かされてたら、もう、月雄荘に住めなくなるところだった。

辰子ちゃんの胸を取られてたつてバレたら、僕は月雄荘を出てくぞ。

……まあ、話を戻そうか。

そんなこと聞かれたわけだけど、僕は出たいわけじゃない。
大人の事情に巻き込まれなかったら、絶対に出ねえよこんなもん。
賞金が500億出るからつて、まだ若いんだし命は賭けれないつて
こんなバカみたいなイベントで、僕はまだ死ねない。

「いいよなー、優勝したら500億だぜ？」

「そんなにお金あつたら、ずーつと寝てられるね」

のんきだよなー、この子らも。

たぶんだけど、銃弾飛んで来たり、爆弾かまされたりするんだよ？
しかも、そんな時間が3日間も休みなしに続くとなつたらね。
とてもじゃないけど、肉体的にも精神的にも持ちそうにない。

腕に覚えがあつたつて、そんなん聞いたら尻込みするよね。

実際、僕が小西さんくらい強かったとしても、きっと参加しないと思う。

これは格闘技の大会じゃなくて、殺し合いが上手なヤツが勝ち上がる大会なんだから。」

「天ちゃんは出ないの？」

「ちょうどバイトが3連勤でさー」

「辰子ちゃんは？」

「私も出ないよ？ そのKOSの警備とかで呼ばれちゃって」

良かった、出るなんて言い出さなくて。

言っちゃなんだけど、この子らが勝ち残れるはずもないんだし。変に怪我するくらいなら、期間中、地道に仕事に励んでほしい。

「あ、でも、ウチらの師匠は出るらしいぜ」

師匠。

なんか、いろいろと懐かしい感じがする単語だ。

そんな単語が天ちゃんの口から出てきたのは、予想外だったけど。あと、草餅食べながら話したせいで、ちょっと口の中のモンも出てきた。

また夕飯の時にでも、口の中に物入れたまま話さないように叱って

おじつ。

「師匠……って言うと、梅屋で一緒だった人？」

「そうそう」

あー、なるほど、あのヤバそうな人か。

筋肉の付き方っていうか、質からして人間離れしてたもんなあ。

僕が見たくらいじゃ、どれくらい強いか想像がつかない。

つまり、僕と比べてケタが違う感じで強い人ってわけだ。

あの人だったら、KOSに参加したって遜色ないかもしれない。

ああいう風に性根の腐ったタイプは、絶対に油断しないからね。

寝首掛かれるとか、不意を打たれるとか、そんなことにはならないはずだ。

無道師範だってそうなんだから、あの人もきつとそうに違いない。

「そついえば最近、師匠に会ってないねー」

「本格的に働き始めたら、全然時間合わなくなったもんな」

なんて言ってから、草餅をかじる2人。

その師弟関係はどうなんだろうか。

……まあいいや、話を広げておこつ。

「師匠ってことは、その人から何か教わってるんだよね？」

「まあな。最近はそうでもねーけど」

何かって言うのは、もちろん、格闘技とか武術の類。

「うーか、それ以外の何かを、あの人が教えられるとは思えない。あのツラと体つきで生け花とか教えてたら、腹抱えて笑うぞ。」

そもそも、天ちゃんの膝蹴りとかボディブローが、丁寧過ぎなんだよ。

達人レベルとまではいかないけど、素人にしちゃ当て勘が良すぎるしな。

突き蹴りの形もキレイだし、何もやってないってのは考え辛い。

まあ、今の発言で、その辺の疑問がスッキリしたからイイんだけど。マトモな人かはともかくとして、ちゃんと習ってみたいだから。

「ゴルフクラブ護身術って……おい、なに微妙な顔してんだよ」

「ごめんごめん。初めて聞く名前だったもんだから、ちょっと驚いちゃって」

前言撤回、ちゃんとは習ってないのかもしれない。

思わず笑いそうになったけど……なんだそのイロモノ護身術は。

そもそも護身術ってのは、危険から逃げるための技術でしょ。

だから、ゴルフクラブを使うなんて発想が、普通は出てこないはずなんだよ。

それを学ぶのは天ちゃんの勝手だし、そこにケチ付ける気はないんだけど。

なんていうか、もっとマシな技術が他にあったんじゃないかと思う。
……日本じゃ習えないとは思えないけど、旧式のシルヴァ柔術とか
ね。

「んだよ、なんだつたらやるか？ そつちも武器持たせてやるから
よ」

「今日はゆつくりしたいから、また今度ね」

不満そうな顔で言われても、僕の考えは変わらない。

ゴルフクラブを使う護身術なんて、誰がどう見てもイロモノだ。

まあ、まともに当たれば死ぬだろうけど、どんな武器だってそれは
一緒。

ことさら、ゴルフクラブに執着することはない。

杖術とか棒術の方が、ずっと応用が利いていいと思うんだけどね。

「辰子ちゃんも、その、ゴルフクラブ護身術を教わってるの？」

「私はレスリングやってたから、投げ技とか教えてもらってるんだ
よー」

「へえ、そうなんだ」

辰子ちゃんがレスリングやってたとは、かなり意外だなあ。

いや、普段からパワーがある子だと思ってたけど、まさかだよな。
他の3人もそうだけど、まともなスポーツしてるように見えないん
だよ。

レスリングなんてセリフが出てくるとは、思ってもみなかった。

レスリングかぁ……うん、レスリングだよな。

辰子ちゃんが、あのピッチリしたコスチュームを着るのか。レオタードに勝るとも劣らない破壊力を持つ、アレを。

……機会があったら、ぜひともポジションニングの真髄を教えてあげたい。

上からでも下からでも、ブラジリアン柔術ならなんでもござれだ。

「辰子ちゃん、強かったの？」

「ん……どうかなー？ 大会とかには出れなかったから」

出れなかったってのは、どういうことだろ？

今の口ぶりだと、実力が足らなかったわけじゃなさそうだけど。

弱かったせいで大会に出れなかったなら、あんな言い方にはならない。

もっと強い人がいたのか、それとも、他の理由があったのか。

まあ、言わないってことは、ほじくられて面白い話じゃないんだろ
うなあ。

そんな風に、どうでもいい話をしながら。

この2人と過ごす昼が、少しずつ終わっていく。

いやぁ、平和な日常っていうのは、こういうもんなんだろうなあ。

そう遠くない未来には、心とこういう時間を過ごしたいもんだ。

今よりは、もうちょっと温かい時期の方が理想的だね。

そのためにも、KOSで綾小路にイトコ見せておかないと。

そんな風に、まったりダラダラしてたら。

「おい、ミチヒロいるか？」

なんて、聞き慣れた声が、ノックと一緒に聞こえてきた。
せつかく、かわいい女の子2人と楽しい時間を過ごしてたのに。
さっきまでの楽しかった気分が、一気にブチ壊しだよ。

コレが、戸叶さんとかカシオさんだったら断れたんだけど。
よりもよって、1番世話になってる人の声だったから。
常識的な観点からして、無視するってことはできなかった。
……いや、はじめから聞こえないフリをしとくんだったよ、ホント。

「はい、ちょっと待ってください……ね」

扉を開けた僕は、冗談抜きで絶句した。

この世の終わりみたいな顔をしたノブさんがいて。

瞳孔の奥で、僕のことを睨みつけてたんだから。

いや、ノブさんだつてのは声でわかつたんだけどさ。

こんなに切羽詰った知り合いの顔なんて、見たくなかった。

「ちょっとイイか？」

「あー、はい。そんなに時間が掛からなければ？」

明らかに『ちょっと』を超えた話をしようとしてるノブさん。

できれば、そんな深刻な話は聞きたくもない。

いやね、愚痴は結構聞かされてるんだよ。

酒の入ったノブさんに、月2回くらいのペースで。

まあ、愚痴の内容なんて、みおりちゃんのことくらいなんだけど。

なんとなくだけど、今回は、そういう愚痴の類とは問題が違う気がする。

「実はな、お前に頼みがあつて……」

「内容を聞いてから返事させてもらいますね」

やっぱり、いつものノブさんとは違った。

いつもはこう、なんか大切なところでトチリそうな雰囲気なのに。

なんでか今日は、真剣味があるってというか、ノブさんに隙がない。いつもみたいな『頑張ればやれそう』って空気が払拭されてるんだよ。

「よし、単刀直入に言わせてもらおうぞ」

ぐっ、とノブさんの体から気配が膨れ上がった。

思わず一歩下がりがりそうになるくらいの、強烈な気配だ。

もし、これが試合前とかの顔見せだったら、少しビビるところだよ。歳が歳っていうのもあるけど、川神ランキングの連中とは比べ物にならない。

正直、こういう風に覚悟を決めた人間は怖い。

相手に容赦することがないし、自分が壊れることも覚悟してる。

普通だったら考えられないような、捨て身の策も平気で使ってくる。それくらいの気迫が、ノブさんから伝わってきた。

伝わってきたんだけど……

「KOSで、俺とチームを組んでくれ！」

気迫満点のノブさんが、僕に見せてくれたのは。

今までの生涯で、未だかつて僕が見たことのない。

恥も外聞も捨てた、本当に崖っぷちな人間の土下座だった。

4話目『彼の弟がこんなに情けないわけがない』（後書き）

なんとなく締まらない話となりました orz

一応、KOS開催に向けて少しずつ話を進めているつもりではありますが……

前書きでも申し上げましたように、しばらく更新できません。

人生の大事な時期ですので、私生活を優先させていただきます。

読んでくださってる皆さんには大変申し訳なく思うところですが、半年ほど執筆を控えさせていただく所存です。

ちよくちよく手直しはするかもしれませんが……本当に申し訳ありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8730/>

真剣でアイツに恋してる！

2012年1月14日23時54分発行